



贈從三位本居宣長著

增補

本居宣長全集

第七

正三位本居豊穎校訂

例言

一　本輯には、「萬葉集玉の小琴」「新古今集美濃の家づと同折添」「古今集遠鏡」「源氏物語年紀考」「源氏物語玉の小櫛」の五部二十五卷を收む。

二　句讀點濁點等、すべて原本のまゝなり。

三　括弧【　】を附したるは、原本細註なるを一行にせる印なり。

四　引用歌文等の右肩に、原本⌉の印を附したるを、「に改め、且つ上部に附せり。

五　「萬葉集玉の小琴」原本は木製活版本にして、平假字を悉く片假字に改めたるを、本に復せり。

また原本は、傍訓返點等をこと〴〵く削除せり。これまた木製活版本としては止むを得ざるべけれど、これがため例へば、稿本に「春榮（ハルハエ）を約めたる」とあるを、「春榮はるはえを約めたる」とやうに記せるが如き類往々あり。また稿本の字句文章等を改竄せるところ尠からず。但し其の意義の同じきは勿論なり。

今稿本に對照して、確かに誤と認むべきものは、これを訂正し、且つ最終の二項を稿本によりて加へたり。又原本追考の項には、追考の二字を、其の末に割註にして記せるを、印刷の都合上（追考）と改めたり。

六「新古今集美濃の家づと」原本五卷の終に、尾張國秦鼎の撰せる漢文の跋あり。其の文字草體にして、所々讀みがたければ、之を省きつ。

七「古今集遠鏡」原本に、例へば[二][表]など記せる□は、印刷の都合上これを「」に改めたり。

八「源氏物語年紀考」「紫文要領」と同じころの撰にして、原本には年紀圖說の一篇あり。されどそは、「源氏物語玉の小櫛」卷の三に載れると重複するを以て、これを省きつ。又原本所々に書入おほし。今印刷の都合上、あるものは割註となし、あるものは「」を附して、適宜の所に之を挿入せり。

目次

我鈴屋の翁の聲しりて、聞む人もかごのたまひし、玉の緒琴の妙なる爪音を、よけくあしけく誰かは言加へ定むべき、たゞ絲筋の正しきによそりて、しらべの法と打たのむ人のみぞあるべき、さるを我徒堀直孫子は、萬の言の葉の巻々にのみかゝつらひて、殘るくまなくみあきらめて、其の筋の書ごしいへば、あらぬくまよりごり出し、遠きさかひより引よせて、こゝらつごへつれご、あだし書ごもは、夏の日の褻、冬の夜の扇のごご、思ひうごみて、ひたぶるなるまめ心に、玉の緒琴の由良のごの門中の、いくりにふれたつ聲を、なつの木のさやかに聞しりて、あまたあげつらひ書ごも見合せつゝ、言のあやまりもじのたがひなご考へ、追考をさへ書そへて字毎にゑりたる、すり巻ごなしつるは、こよなきいさをにぞありける、其よし巻のはじめに物せよごこはるゝに、何をかは云べき、たゞ其いたつきをほむるより外のこごぞなき、天保九年の彌生、七十一翁藤原彥麻呂

凡例

○此書己がもたる書に、寫誤り少なからざれば、異書もて校合せり、皆歌毎の題をしるし、丁數を分注にして、又歌の初句を揭て云々といひ、夫より注すべき、本文を揭て說せり、そを改むべきにあらねども、活字のわづらはしく、紙數の多からむことを厭ひて、題は略き初句の分注に、丁數を載つ、

○本書一卷ありて、追考又一卷あり、そをこたび一の卷は一の卷の、其所々に割入たり、追考と云ことは分注にせり、四の卷は追考のみなれば、初の分注にあげて下は略けり、

○本書傍に假字を付て、かく訓べしと有るは、本文をあげ、其下に傍の假字をしるす、ゆめ本書を改たるに非ず、活字の僻なればせむすべなし、

○本書凡て一例の書ざまならず、今改むべきにあらざれば、本の儘に從ひつ、されども今片假名に改しは活字の僻なり、

藤原直孫子誌

萬葉集玉の小琴

本居宣長

萬えふ集は、師の常にいはれける如く、草の文字してかきつたへてければ、後見る人の見まがへつゝ、はやくよりあらぬ文字に寫しひがめつることのみ多かる本の、後の世には殘りにたるを、ひがよみは更にもいはず、さるひが文字の儘にしも、強て訓きつるが故に、いかなる心とも、さらに明らめしられぬ歌なも多かりける、かれこゝをもて、聊も疑はしと所念る歌は、必僻寫しの文字あらむことをし思ひて、それ思ひめぐらすぞ、萬葉學びの旨なること師はいはれにき、誠にしかにはあれども、それ將いと難き業にして、たは安く思ひうべくも有さりけるを、今の世の人どもは、其かみの心言葉のふりをも、うまらには悟り知らずて、未しき程より、唯僻文字僻文字となも、いひ罵りつゝ、猥に改めなほすめるは、中々なる物そこなひも多かれど、しかいひて又さる本にのみ、かゝつらひつゝ、猶文字の儘に訓み得てむとするには、かにかくに思ひめぐらせ

ども、遂に古の心言葉は、得難くて、中々に横さまに、強たることにもなりゆくめれば、猶此僻文字書る教はしも、捨がたく動くましかりければ今はた其教に順ひて、これ彼思ひ得つることどもを、猶ねもごろに、かたへの歌なる、同じ詞の屬ひをも、尋ね合せ、同じ心の友がきにも、語らひはかりて、我も人も惡からじと、定めたる限りをなも、試みかてら、文字も訓みも、改め直しなど、あらゆる人皆の、得がてにすなる、歌の心を思ひ得たるなど、かきあつめたる此ふみぞ、猶よからむや、あしからむや、これよりうへのさだめは、たゞ後見む人の心になも、

かきならすたまのをことをこゑしりて
よけくあしけくきかむひともか

安永八年己亥十一月五日

○籠毛與、云々菜摘須兒、なつむすこと訓るは誤也、なつますこと訓べし、つますは、十七巻廿丁に、をとめらが、春菜都麻須等、とあるに同くて、つむを延たる詞なり、十巻廿丁に、山田守酢兒、是もゝるすと訓るは誤にて、もらすこと也、總てすことゝ云稱はなきこと也、十巻廿丁に、小田刈爲子、九巻十九丁に、伊渡爲兒者、などあるも同じ例也、思ひ合せて知べし、

吾許會居、師吉名部手、本に居師と師の字を上の句へつけて、をらしと訓るは誤也、こゝはをらしといひては、語とゝのはず、をれと訓べし、又吉の字を告に誤りて、つげなへて、のりなへてなどよむも、いかゞ、のりなへてと云ことも心得ず、こは必吉の字にてしき也、しきは太敷座、又敷坐國などいへるしき也、

我許者、わをこそと訓べし、われこそといひては、こゝは宜しからず、又者の字は曾を誤れるなるべし、

○山常庭、云々怜𪫧國、考に𪫧怜と下上に、改られたるは宜し、𪫧の字は諸の字書に見えず、漢にはなき字也、書紀には皆可怜とかけり、是正しかるべし、えを可愛とかゝれたると同じ例也、然るに此集にあるは皆、𪫧とかけり、こは此方にて扁を加へたるものなるべし、(追考)

○八隅知之、云々朝庭、云々夕庭、本のまゝにあしたにはと訓べし、ゆふべにはも同じ、

奈利彌、利を加に誤れり、考にも留の誤とせられたれど違し、利と加とよく似たり、(追考)

朝獵爾、云々暮獵爾、朝と暮と二つながら今たゞすらしといへること、誰も疑ふめり、こは朝かりとは、朝饌の料をとるをいひ、夕かりとは、夕饌の料をとるを云名にて、其獵する時を云に非ず、されば時に拘らず、朝獵をも、夕獵をもすると也、(追考)

○霞立、云々 丁八 今京肝之良受、多布和に誤れり、多と和とよく似たり、(追考)

卜數居者、本のまゝに訓べし、十七卷 丁廿 にぬえとりの、字良奈氣之都追、懸乃宜久、よろしきといはずして、久と云るに心を付べし、こは六句を隔てゝ、下の朝夕爾還比奴禮婆、といふ所へかゝる詞にて一首の眼也、そはいかなる意ぞといふに、旅にては早く本國へ歸むことを、願ふ物なる故に、かへるといふことを悦ぶ也、然るに今、行幸能山越の風の吾袖に、朝夕かへるかへる吹くるを、かけのよろしくとはよめる也、かの業平朝臣の、うらやましくも、かへる浪かな、と云歌をも思ひ合すべし、此詞を遠神云々へかけて見るはひがこと也、(追考)

○玉野乃、美草刈葺、丁九 美草はをばなと訓べし、貞觀儀式大嘗祭の條に、黑酒十缶、云々以美草餝之、又次に倉十代輿、云々餝以美草、と見えて延喜式にも同く見ゆ、然れば必一種の草の名也、古薄を美草と、書傚へるなるべし、もし眞草の意ならむには、式などに眞草と、美字を假字に書べき筋なし、

○熟田津爾、云々今者許藝乞菜、丁廿 乞の字は弖の誤ならむと、田中道麻呂いへり、さもあるべし、こそなといへる例もなく、句の調べもわろし、こきてなはこきてむと云に同じ、道麻呂は美濃の國人にて尾張の名古屋に住り、おのがもとへ常に文かよはして物とふ人也、

○香山波、云々 丁十二 如此爾有良之、云々然爾有許曾、如此爾はかくにと訓べし、かくにしかにと、上下詞をかへて重ねいふぞ、古歌の常なる、

相挌良之吉、相挌はあらそふと訓べし、二卷 丁四十 に、相競あらそふ、十卷 丁十 に、相爭あらそふなど、相字を加へて二字に書ける例也、又挌の字をあらそふに用るは、十六卷 丁六 に、有二壯士、共挑此娘而、捐生挌競、などもあり、嬬をあひうつといひては、理り聞えがたし、

○冬木成、云々 丁十二 山乎茂、入而毛不見、此不見を本に不取とかけるは誤也、入てもとらず、取ても見ずとてはいかゞならむ、次の句を考に、たをりても見ずと訓れたるもわろし、そは本の儘に訓べし、さて不取は、三井高蔭が、不見の誤な

るべしこいへる考宜し、取こ見こ草の手似たり、かくて入ても見ず、こりても見ず、こ對しいへるは、古歌の例によく叶へり、(追考)

曾許之恰之、秋山吾者、恨の字は恰の誤也、そこしおもしろしこ訓べし、うらめしにては聞えず、こじめの句は、あき山われはこ訓べし、これがおもしろければ、吾は秋山也こ云意也、秋山そこ、そを加へては中々におこれり、

○味酒、云々 十三 情無、雲之隱障倍之也、こゝろなく句也、雲の又句也、此雲之を、上句へ附るも下の句へ附るもわろし、三言の句例多し、九言十言の句は例なし、此たぐひ皆二句に訓べし、

○茜草指云々、紫野ゆき、しめのゆき、君が袖振を、野守は見ずやこ云意也、此外よそへたる意なし、

○紫草能、云々 十四 人嬬故爾、集中に人つまゆゑにこいへることいこ多し、皆人の妻なるものをこ云意也、俗語に人の妻じやのにこ云が如し、此歌の意は妹こはすべて、女をさしていふ稱にて、こゝは額田王をの玉ふ也、にくゝあらば、何か戀む、人の妻なるものをこ云意也、此歌考の說は痛くしひここ也、人の妻故にこいへるここ、集中他の歌の例にも叶はず、言の意にもそむけり、さて此太子の額田王を、人妻この玉ふここを疑ふ人あるべけれご、此額田王のここは猶論あり、別に云べし、

○打麻乎、云々 十五 白水郎有哉、有哉は本の儘に、なれやこ訓べし、なればにやこ云意のここにて、例いこ多し、なるやこ訓ては聞え安きやうなれご、古のふりに非ず、集中に例なし、

○淑人乃、云々 十六 良人四来三、四来三或人のよくみこ訓るを用ふべし、みこのみいひても、見よこ云意になる古言の例也、よき人よきみこいへる訓は心得ず、

○玉手次、云々阿禮座師、神之盡、盡を本に書こあるは寫誤也、盡こは神武天皇より始めて、御代御代の天皇、悉く大倭國に、宮敷いましゝよし也、(追考)

倭乎置而、靑丹吉、平山越而、本に平山乎越こあるよりは、一本に平山越而こある方宜し、倭乎置而の而文字は、猶必有

べき也、此而文字なくては、いとわろし、而の重なるは古歌古文の常なり、
春草之、茂生有、霞立、春日之霧流、はる草し、茂く生たりと訓べし、之はやすめ詞也、さて此二句は、宮の痛く荒たることを歎きて云也、次に霞立云々は只見たるけしきのみにて、荒たる意を云には非ず、春日のきれる、百礒城之、云々と續けて心得べし、春日之云々と、霞立云々とを同意に竝べて、見るはわろし、一本の趣とは異なり、こは一本の方は春日と夏草と時節の違へるもわろく、二つの疑ひの香も心得難し、

○樂浪之、云々 廿七 雖幸有、本の儘にさきくあれどゝ訓べし、
大宮人之、云々 下句は志賀の辛崎の大宮人の船を待得ぬ也、作者の待得ぬとよめるには非ず、(追考)

○左散難彌乃、云々 考に昔の人にあはむと思はめや、船待兼しは、はかなかりきと今知たる也とあるはわろし、待兼は、兼は俗にいふ、待かぬる意には非ず、集中不得と書る意にて待得ざる也、
昔人二、云々 下の句は、是も志賀の大わたの昔人に、又もあはじと云也、もし作者のえあはじと云意にしては、三の句よどめどもといはざれば叶はず、 志賀の大わたよ、いつまで淀むとも、昔の人には、又もえあはじと云意也、よどめどもといはずして、よどむとも云るに心を付べし、(追考)

○八隅知之、云々 廿八 夕河渡、ゆふかはわたると訓切べし、わたりと訓て下へ續けてはわろし、

○安見知之、云々 廿九 青垣山、山神乃、青垣山のと、の文字を添るはわろし、あをかきやまと訓べし、青垣山は花挿頭持と續く意也、
春部、此へは方の意と、誰もふと思ふめれど、春にのみいひて、夏へ秋へ冬へと云ことなければ、方には非ず、春榮はるはえを約めたる言也、故此言は春の物毎に榮ることによれる時にのみ云り、
鵜川乎立、立は本の儘にたてと訓べし、是は御獵立、又は射目立、などのたてと同くて、鵜に魚とらする業を、即鵜川といひて其鵜川をする人共を立するを云也、

山川毋、依氏奉流　本の儘につかふると訓べし、つかへるは今の世の鄙俗の言也、凡て下をくる、する、つる、ぬる、ふる、むる、ゆる、るゝ、うると云言を、ける、せる、てる、へる、ねる、める、える、れる、ゑると云は皆鄙俗の言にて古にはなき事也、稀に、時雨の雨の、そめる也けり、常まではへるなどあるは、染有延有の意にて、そむるはふると云とは異也、

○鳴呼見乃浦爾、云々 丁卅 珠裳、本の儘にたまもと訓べし、廿卷 丁卅 に多麻毛須蘇婢久とあり、珠をあかとは訓難し、二卷 丁卅 に越り大野の、朝露に、玉藻はひつちともあり、

○吾勢枯波、云々已津物、隱乃山乎、起を已と書るは、古偏を省て書ける例也、健を建と書、書紀又式などに石村を石寸と書、古事記に蜈蚣を呉公と書る、此類猶多し、さて隱の山は、伊賀國名張郡の山也、大和の京の頃伊勢へ下るには伊賀を經ること常也、此卷 丁廿五 に、よひに逢て朝おもなみ、隱にか、八卷 丁卅五 に隱野、などあるは皆同所也、さて名張を隱とかくことは、天武紀に則隱郡とあり、又大和の地名に、吉隱とあり、是等をもて爰の隱の山も、なばりの山なることを、思ひ定むべし、さてなばりとは即かくるゝことを云、古言と見えて、已津藻と云も、又朝面無と云も、かくる、意の續け也、十六卷 丁十 に忍照、難波の小江にいほ作り、難麻理居居、葦蟹、云々是かくれて居ることを、なまりておると云り、是をかたまりてと訓るは、忌敷僻こと也、

○八隅知之、云々 丁廿一 荒山道乎、此乎は初瀬の山は、荒き山路なる物をと云、意のを也、

○阿騎乃野爾、云々宿良目八方、ねらめやもと訓べし、ねらめと訓は鄙俗の語の格也、

○嬬女乃、袖吹反、云々 丁廿二 反は本の儘に、かへすと訓べし、こは今飛鳥の川の邊を女の行に、風の袖を吹返すを見てよめる也、昔京にて有しときならば、京人の見てめづべき物ぞ、今は故鄕と成て、見る人もなければ、美人の袖を吹かへすも、いたづらこと也と也、又はたわやめの袖をも、吹かへす飛鳥風なれども、今は京遠く成ぬれば、さる女も行通はねば、いたづらに吹と云るにても有べし、何れにても反は、かへすと也、考の說はわろかし、（追考）

○八隅知之、云々春山跡、春山は青山の誤なるべし、此歌の凡ての詞どもを思ふに、分て春と云むことといかゞ、其上畝火

乃、此美豆山者、彌豆山跡、と云るに對へても、青香具山者、青山跡と有べきもの也、畝火乃、此美豆山者、日緯能、大御門爾、畝火山は正しくは、西の御門に當るべけれど、日の經は既に云れば、爰は必日の緯といはでは、宜からぬ所なる故に、少し强てかく云るも、西面ながら、南の方へよれる山なれば也、

○藤原之、云々 丁卌 安禮衝哉、云々之吉召賀聞、召の字は必、呂の誤にて何しきろかも也、之吉の上に言落たる也、其言は未思ひ定めず、其言に從ひて、上の哉字も、武の誤にても有べし、

道麻呂云、結句の之の字は、乏の誤、召は呂の誤也と云り、此考宜し、さては三の句の哉は、愈、武の誤にて、あれつかむ也、(追考)

○朝毛吉、云々 丁卌 此歌の意は、眞土山のけしきの面白きを見捨て、過行ことの惜きにつきて、此紀の國人の常に往來に見るらむが、浦山敷と云る也、乏は浦山し也、其意によめる例は、五巻 丁廿二 に、まつら川、玉嶋の浦に、わかゆつる、妹らを見らむ、人の乏さ、六巻 丁十八 に、嶋かくり、吾榜くれば、乏かも、倭邊のほる、眞熊野の船、七巻 丁十九 に、妹に戀、わが越くれば、せの山の、妹にこひすて、有が乏さ、又吾妹子に、吾戀ゆけば、乏くも、ならひをる鴨、妹と勢の山、十七巻 丁四十 に、人にもつけむ、音のみも、名のみも聞て、ともしふるかね、是等と合せて思ふべし、又眞土山のけしきを面白きことによめるは、四巻 丁廿三 に、眞土山、越らむ君は、黄葉の、散飛見乍、したしくも、吾をば思はず、草枕、旅を宜と、思ひ乍、君はあらむと、云々とあり、

○在根良、丁廿六 在は布の誤にて布根也、良は稻掛の大平が考に、竟の誤なるべしと云り、されば此枕詞は、舟泊ると云ことゝ也、泊を竟と書ること他卷に例あり、(追考)

○藪打、云々　此歌は七卷 丁九 に、佐保川の、清き河原に、鳴千鳥、河津と二つ、忘れ金つも、とよめる河津は蛙には非ず、佐保川の川津にて、千鳥と此川の氣色の、面白きと、二つながら忘れ難しとよめると同意にて、此弟日娘と、あらゝ松原と、二つ見れど飽ぬ鴨也、かの七卷の歌と、考合せて知べし (追考)

○大伴乃、云々枕宿杼、家之所偲由、杼はねの誤にて、まきてぬるよはと訓べし、松が根を枕にしてぬる夜は、物悲くて

家を思ふと也、考にまきてしぬれどゝ訓て、かく面白き濱の松がねを、枕とまきてぬれとゝいはれつれど、此說いかゞ、面白き濱なればとて、松が根をまきてねむには、何の面白き心あらむ、

○吾妹子乎、早見濱風 廿八丁 見濱は御濱にて、只濱のことなるべし、御津御浦などいへば、御濱とも云べき也、夫を妹を早見むといひ懸たる也、

○吾大王、物莫御念、廿九丁 二の句ものなおもほしと訓べし、下のそを畧きて、かく云こと集中に例多し、おぼしそと訓はわろし、おもほしをおほしと云こと、集中に例なし、後のこと也、

○一書云、太上天皇御製、是は飛鳥云々の歌を一書には、持統天皇の御時に、飛鳥より藤原へ遷り玉へる時の、御製とするなるべし、然るを太上天皇と云るは、文武天皇の御代の人の書る言葉也、又和銅云々の詞につきて云はゞ、和銅の頃は持統天皇既に崩玉へども、文武の御時に申ならへる儘に、太上天皇と書る也、此歌のさまを思ふに、誠に飛鳥より藤原へ遷り玉ふときの御歌なるべし、然るを和銅三年云々と云るは、傳への誤なるべし、

○山邊乃、御井、三十丁 伊勢國鈴鹿郡にあり、其よしは、十三卷 五丁 に五十師原の所に委く云べし、

浦佐夫流、情佐麻爾之、さまねしのさは發語にて、まねしは物の多きこと、繁きこと也、爰は浦淋き心の繁き也、二卷 三十七丁 眞根久往は、人知ぬべみ、四卷 五十九丁 に君が使の、まねく通へば、是等しげき意也、十七卷 三十八丁 に玉梓乃、道爾出たち、別なば、見ぬ日さまねみ、戀しけむかも、又 四十六丁 に屋形尾の、鷹を手にすゑ、みしま野に、からぬ日まねく、月そへにける、十八卷 三十丁 に月かさね、みぬ日さまねみ、戀るそら、やすくしあらねば、十九卷 十六丁 に朝よひにきかぬ日まねく、天さかる、夷にし居ば、又 三十丁 につれもなく、かれにしものと、人はいへど、あはぬひまねみ、念ひぞ吾する、是等日數の多きを云り、二卷 廿八丁 の數多成塗も、まねくなりぬるにて、此外數多と書るに、まねくと訓て宜き所多し、今本の訓は誤れり、さてまねくの言を、間無の意とするは、右の十七卷十八卷十九卷の歌どもに叶はず、續紀三十六卷 三十丁 に氏門乎毛滅、人等麻爾久在、

○秋去者、云々 詳 鹿將鳴山谷、凡て集中に、鹿の字は皆かと訓べし、しかと訓ては何れも、文字餘りてわろし、しかには必、牡鹿と、牡の字を添て書けり、心をつくべし、鹿の一字を、しかと訓て宜き所は、集中に纔一つ二つ也、和名鈔にも鹿、和名加とあり、

萬葉集二之卷

○如此許、戀乍不有者、丁八 戀乍不有者のこと、詞瓊綸の古風の部に委く云り、考の説は聞えぬこと也、

○玉匣、將見圓山乃、丁廿一 圓の字は、まろの、まを畧て、ろの一音に取れるには非ず、凡て畧て取例は、多けれどもここによる也、まろと云ことを、まを畧くやうの例はなし、こは上に將見と云、むとまと、通音なる故に、自らみまろと云やうにも、ひゞくからに圓字を書る也、

○東人之、云々妹情爾、乘爾家留香聞、妹は心にと訓はわろし、は文字穏ならず、本の儘に妹がと訓べし、我心に妹が乘る也、必がと云べき語の例也、

○三吉野乃、玉松之枝者、丁十四 玉松と云こと、此外に例なし、玉の字は山の誤也、十六卷 丁七 にも足曳之、山縵とある山の字を、玉に誤れり、是明らかなる例證也、

○秋田之、穗向乃、穗向はほむきと訓べし、十七卷 丁十七 に秋田乃、穗牟伎とあり、むけと訓は叶はず、凡てむけと云時は、物を向は令るを云言也、是は穗の自むくを云るなれば、むきと訓べき理り也、

君僞因奈名、因奈名はよりなむ也、凡て古言に、んをなと云ること多し、ゆかんをゆかな、やらんをやらな、など云るが如し、さててんを、てなといひ、なむをなゝと云る也、猶詞瓊綸に委し、

○芳野河、云々 丁十九 不通事無、不通はよどむと訓べし、集中此類の不通の字皆然訓べき也、

○暮去者、云々 丁十八 玉藻刈手名、刈てなは刈てむ也、此なのことも前に云るが如し、考の説いと心得ず、

○遊士跡、云々於曾能風流士、遊士風流士を、考にみやびとゝ訓れたるにつきて、猶思ふにさては宮人と聞えてまぎらはし、然ばみやびをと訓べし、此稱は男に限れり、八卷 丁十六 にをとめ等が、頭插の多米に、遊士の、蘰のため等、云々是をとめに對へて云れば、必男と云べき也、

〇吉之、娘倍篤十八 嬬を等におよなと訓れたるは誤事也、およなと云稱あることなし、をみなにむかへて、嫗をおむなと云ことは、和名鈔のみならず古書に是彼見えたるものをや、

〇石見乃海、云々浦者無友、云々潟者無鞆、無友無鞆は共に、なけども訓べし、なけれどものれを畧て、然云は古言の例にて集中に多し、

和多豆乃、石見國那賀郡に、渡津村とて海邊に今もあり、是也、此句四言に訓べし、多豆の二字を香に書たれば、和も字音に書ることしるし、然るににぎたづとしも訓るは、伊豫の熟田津のことを思ひて、ふと誤れるものなるを、今迄其誤を辨へたる人なし、

益高爾、此類の益の字をますとも、ましとも訓るは皆誤也、いやと訓べし、益をいやと訓證例は、此巻四十 に去年見而之、云々相見し妹は、益年さかる、七卷 廿三 に佐保川爾、云々益河のぼる、十二卷 三十 近有ば、云々こよひゆ戀の、益まさりなむ、是等也、

〇角障經、云々 廿九 幾毛不有、十七卷 廿二 に年月毛、伊久良母阿良奴に、是に依て訓べし、

嬬隱有、是をつまこもると訓ことは、假字書の例あれば動かず、然るに隱有と有の字を添てかけるはいかゞ、有の字あれば必こもれると訓例也、されば有は留の字などの誤にや、

屋上乃山乃、自雲間、渡相月乃、雖惜隱比來者、屋上の山のと切て、隱ろひくればと云へ續く也、惜けども屋上の山の隱れて見えぬ由也、さて雲間より渡らふ月のと云二句は、只雖惜の序のみ也、纔なる雲間をゆく、間の月は惜きよしの序也、若此月を此時の實の景物としては、入日さしぬれと云に叶はず、此わたり紛はし、よく弁ふべし、

〇天原、云々 廿三 御壽者長久、天足有、四五の句、みいのちはながく、あまたらしたりと訓べし、

〇人者縱、云々玉蘰影爾、玉蘰の玉の字は山の誤也、上の玉松と考合すべし、さて十四卷 三十 に、あし引の、山かづらかげ、ましばにも、えがたきかげを、おきやからさむ、とよめるかげは蘿ひかげ也、蘿を山かつらと云故に、山かづらかげ

こも、續けよめる也、今の御歌の山かつらは、影の枕詞にて其續けの意は、是も山かつら蘿と云意也、さて影に見えつゝの歌の意は面影に見えつゝ也、

〇谷蟬師、云々脱時毛、無吾戀、君乎、無吾戀は、なくわがこひむと訓べし、一つ所に居て思ふをも、戀ると云例多ければ、衣ならばぬぐ時もなく、身を放たずて思ひ奉らむ君と云意也、此無の字をなみと訓るもわろし、又わが戀る君と訓るもわろし、上にも吾戀る君とあれば也、同じことを再び返して云は、古歌の常なれども、此歌のさまにては吾戀る君と二度云てはわろし、又無字考にはなけむと訓れたれど、さては愈下の詞遣ひに叶難し、

〇鯨魚取、云々 丁廿 嬬之念鳥立、此とぢめの句本の儘にても聞えはすめれど、猶思ふに嬬之命之と有けむを、之の重れるから、命之の二字を脱せるにや、

〇八隅知之、云々恐也、御陵奉仕流、恐也をかしこみや、かしこしやなどゝ訓るはわろし、かしこきやと訓べし、やは添たる辭にて、恐き御陵と云こと也、廿卷 丁五十 に可之故伎也、安米乃美加度乎、この例也、又八卷 丁三十 に宇禮多伎也、志許霍公鳥、是等の例をも思ふべし、奉仕流はつかふると訓べし、つかへると訓るは誤り也、晝、二つの晝共にことごと訓べし、古事記神代の歌に、妹はわすれじ、世のことごとに、と有と同じ、是も世の限りと云なれば也、夜も夜の限り晝の限り也、十七卷 丁五十 にこしのなか、國内ことごと、山はしも、是も國内の限りにと云ことにて同意也、(追考)

〇神山之、云々、丁廿五 如此耳故爾、かくのみゆゑには、かくのみなる物をと云意也、一卷 丁廿 に人づまゆゑにとある所に云るが如し、故にと云詞まぎらはし敷也、

〇山振之、立儀足、儀は誤字にて必しなひと云べき所也、字は靡か撓か猶考ふべし、廿卷 丁五十 に多州之奈布とあり、(追考)

〇八隅知之、云々名賜良之云々聞賜良志、二つながらたまふらしと訓べし、十八卷 丁廿三 にみよしぬの、此大宮に、ありかよひ、賣之多麻布良之、ものゝふの、云々是と同じ格也、常のらしとは意かはりて、何とかや心得にくき云ざま也、廿卷

辞に大きみの、つぎてめす良之、たかまとの、野邊見るごとに、ねのみしなかゆ、此めすらしも常の格にあらず、過し方を云ること今と同じ、是等の例に依て今も、たまふらしと訓べきこと明けし、本にたまへらしと訓るは誤也、考に良は利に通ひて、たまへりし也と有もいかゞ、

○向南山、云々星離去、月矣離而、青雲之と云は青雲にある星と云意也、青雲と星との離るには非ず、一首の意は星の漸くに移り行て、夜をふる儀に近かりしも、遠き方にとかり行ものなれば、そを見玉ひて、天皇の崩り座しほどの、遠ざき行ことを悲み賜へる也、月も離しも星と同くうつり行を云、考の説は後の世めきて聞ゆ、さて向南は誤字には有ざるか、こは山の名なるべき也、(追考)

○欲見吾爲、廿六 吾爲はわがすると訓べし、

馬疲爾、馬疲は本の儘に訓ても有べけれど、猶うまつかるゝにこそ訓まゝし、さては愈古るかめり、(追考)

○天地之、初時之、廿七 時之は本の儘に訓べし、ときのと訓はわろし、

神集集、座而、本にかみあつめと訓るは僻こと也、考にかむつまりと訓れたるも誤也、かむつまりとは別こと也、此神集の集は古事記に、都度比と訓注あれば動かぬ言也、

天照日女命、此天照大御神の御事を、爰にかく申せるは不要なるが如く聞ゆれども、下に要あり、そこに云べし、天をば所知食とは、天をば既に此大御神の、しろしめすによりてと云むが如し、(追考)

天乎波、所知食登、しろしめすとゝ訓べし、考にしろしめしぬとゝ訓れたるもわろし、

依相之極、所知行、神之命等、所知行はしろしめせと訓も宜しかるべし、命等の等は、八百萬神の議りてかくの如く定めましたる由也、上の所知食登と云る、登とは意異也、(追考)

神下、座奉之、十五卷辞に此等久備々、伎美乎伊麻勢氏、とあれはいませまつりしと訓べし、いませは令座の意也、

高照、日之皇子波、凡て高照日の御子と申すは、御代御代の天皇皇太子皇子を申す稱也、かくて爰は、大方は右の如くに

て當代の天皇をも、こめて申ながら、日並皇子の命を主として申せる也、さて神下、云々より引續けて申せるは、凡て皇孫はいく萬代を經坐しても、神代に天降ましたる御孫の命と、一體にまし座が故也、さて日之皇子波と云るにて句を切べし、こは下の天原石門乎、云々へ續きたり、飛鳥へ續けては見べからず、(追考)

飛鳥之、とぶとりのと訓べし、其由は國號考に云り、(追考)

天皇之、敷座國等、飛鳥之より是迄は、當代の天皇の御事にて敷座國は、この葦原の水穗之國を云也と、大平が考たるぞ、誠に宜かりける、然云意は、天地の、依相のきはみ、しろしめせと、神代より定めたる、此葦原の中つ國は、今の天皇の敷座國として、日並皇子尊は天の原へ登り玉ふと云也、斯の如く見ざれば、始よりの詞の續き明かならず、能々味ふべし、考に敷座國を天を敷ます國として、登りますと云へりと、註せられたるは誤也、さては上に飛鳥の、淨之宮に、云々と云こといたづら也、其上天原を天皇の敷座國と云ては、上に天をば天照大御神のしろしめし、蘆原中國をば、日皇子のしろしめすと、分て申せるに叶はず、(追考)

石門乎開、神上、上座奴、開は閉の誤にて、たてと訓べし、三巻[異本]に豐國乃、鏡山之、石戸立、隱にけらしと、ある類也、開と云べき所に非ず、石門を閉て上ると云ては、前後違へるやうに思ふ人有べけれど、神上りは隱れ給ふと云に同じ、天なる故に上りとは申す也、

天原、石門乎開、日之皇子波、天原の石門を閉て上り給ふと續く意也、(追考)

神上、上座奴、上に神下、座奉之、と云ると相照して見べし、神代に此葦原の中國を、しろしめせと天より下し奉りし日の御子にませども、其盧原の中國は、今の天皇の所知食國として、御自は又天に登り玉ふと云也、かく云なせること、人麻呂の歌の妙なる巧にして、古今に及ぶ人なき所也、能々味ふべし、さて上にまづ天をば、日女の命のしろしめすと云置たるは爰の要也、皇子の命は、葦原の中國をこそ、所知食すべけれ、天原は日女命の所知食せば、登り玉ふべき所には非ざるを、其盧原の中國は、今の天皇の遠く長く、所知食す御國なればとして、天原には上り賜ふと也、さて斯の如く云るに、

當代の天皇の御代の、遠長かるべきことを、ほぎまつる意も自こもれるは、是又妙なる巧也、（追考）

貴在等、　たふとからむと、と訓べし、たふときと云ことは、古はめでたきことにも多く云り、貴の字に拘りて、只此字の意のみと思べからず、此事古事記の傳に委く云り、考に貴とは花に云言葉に非ずとて、賞の字に改められしは、中々にわろし、

由縁母無、眞弓乃岡爾、　三巻五十に、何方に、念ひけめ鴨、都禮毛奈吉、佐保乃山へに、十三巻廿九に、何方に、おもほしめせか、津禮毛無、城上宮爾、是等によるに、爰の由縁母無、又下三十なる所由無、佐太乃岡邊爾、などをもつれもなきと訓べきこと也、

數多成塗、　まねくなりぬると訓べし、まねくのこと一巻に云るが如し、爰をあまたになりぬと訓るはわろし、塗の字ぬと訓べき由なし、

○外爾見之、云々廿九侍宿爲鴨、　侍宿の假字を、考にとのいと定められたるはわろし、殿居の意にてゐの假字也、若宿の字によりていの假名也とせば、とのねとこそ云べけれ、ねといとは、聊意異也、ねは形につきていひ、いは睡眠の方に云也、侍宿は形につきて、殿にてぬるとは云べけれど、殿にて睡眠するとは云べきことに非ず、集中にも宿字は、ぬ又ねには書れどもいにはかゝず、とのゐのゐは、居にて夜殿に居と云こと也、晝をとのゐといはざるは、晝は務ること有て只には居ぬ物也、夜は務ることなくて、只居る故に夜をとのゐとは云也、さて務ることなき故に、寐もすることなれども寢るは、主とすることには非ず、侍宿は殿に居るを主とすることなる故に、とのゐとは云也、眠るを主としてとのいと云べき由なし、

○夢爾谷、云々作日之間同乎、　作日は一本に佐田とあるを用べし、

○八多籠良我、三十やたこらと訓て奴等、とするもさることなれども、奴ならば、やつこと云べきをや、たこと云るもいかがなる上に、籠の字をしも書むこと、いかゞなれば旁心ゆかず、故思ふに、良は馬の誤にて、はたごうまなるべし、旅籠

馬と云こと蜻蛉日記にも見えたり、
○飛鳥、云々 流觸經、 此字をながれふれふると訓るは僻事也、考にふらへりと訓れたるも心得ず、經の字は、へとかふるとかは訓べし、へりへるなど訓べき由なし、是はふらばへと訓べき也、古事記雄畧の段の歌に、ほつえのえのうらばは、中つえに、おちふらばへ、とあり、
○敷妙乃、云々 三十二丁 將相八方、 あはめやもと訓べし、考にあはむやもと訓れたるはわろし、
○飛鳥、云々打橋渡、打橋を打渡す橋と心得るはいかゞ、打渡さぬ橋やはあるべき、故思ふに打は借字にてうつしの約りたる也、爰へもかしこへも、遷しもてゆきて、時に臨て假とめに渡す橋也、
生乎爲禮留、 此言を考にたわみ靡く意として、とを〳〵を畧きてをゝりと云とあるはいとむつかし、今按此言は五卷 三十丁 に、みるのごと、和々氣さがれる、八卷 五十丁 に秋萩の、うれ和々良葉に、などよめる此わゝけ、わゝらば、は俗語に髪がわゝ〳〵としてあるとも、髪がをわるとも云、をわるはわゝるの通音にて、わゝけ、わわらば、是等と同意也、又木の枝の繁りてをぐらきを、うちをわると云も、わゝると通音也、然ばをゝりは、わゝりにてわゝ〳〵と繁く生てあるを云也、花咲をゝりも、わゝ〳〵と繁く、花の咲けるを云也、
益目頰染、 益はいやと訓べきこと上に云る如し、
爲便知之也、 此一句は誤字有べし、せむすべをなみ、又せむすべしらになど有べき所也、
吾耳母、名耳母、 二つの耳はせめて、名のみなりとも絶ずと云意也、
御名爾懸世流、 かゝせると訓べし、
形見何此爲、 爰をと云を、考にこゝをばの意とあるはわろし、をばにては上の詞に叶はず、此をは輕くして、よと云むが如し、集中さる例多し、
○挂文、云々 三十丁 天下、治賜、云々不奉仕、國乎治跡、此二つの治を、考には一本を取て、上を知賜而とし、下を知部跡

とせられて、治をわろきが如く、いはれたれども、二つ共に治にてもわろからず、又下なるは、をさめと、訓て、をさめよと云意になる古言の格也、
齊流、皷之音者、　とゝのふるは、三卷丁十二に、網子調流、海人之呼聲、とも有て軍士を呼起し調ふるを云り、考に皷吹調練のことを引れたるは、爰をも調練の意とせられたるにや、そはいかゞ、とゝのへると訓れたるも、調練したると云意にて訓れしかいかゞ、とゝのふることを、とゝのへると云は、鄙俗の語の格也、
大雪乃、亂而來禮、　きたればと云べき所を、ばを略きてきたれと云は、長歌の中に殊に一つの格也、凡て上と下と事の轉ずる所の境には、如此云こと古の長歌の常也、其例は委く詞瓊綸古風の部に云り、考に者を補てくればと訓れたるは中々にわろし、
佐母良比不得者、　者の字は草書似たれば、天を誤れるなるべし、必かねてといはでは語調はず、
佐麻欲比奴禮者、　さまよひぬるにと云意也、次のおもひも、いまだつきねばも、盡ぬにと云意なると同じ、古言の格也、常のぬればの意としては、下へかゝる所なし、
常宮等、高之奉而、　定を高之の二字に誤れる也、上の長歌にも、常宮跡、定賜とあり、考に高知座と改められつるは字形違し、
安定座奴、　しづまりと訓べし、考にしつもりと訓れたるは、古言めきては聞ゆれど、證例なきこと也、
○久堅之、云々丁三十六君故爾、　君なるものをと云意也、此こと上に委く云れど、こは人の心得誤ることなる故に又云へり、
○哭澤之、云々雖禱祈、　こひのめど〻訓べし、此言は五卷丁四十に、天神、阿布藝許比乃美、とあるを始て、十一卷丁十七十三卷丁廿十七卷丁四十四・四十六廿卷丁六十などにも見えて、疑ひなし、又こひなむともあり同言也、（追考）
○王者、云々丁三十七五百重之下爾、　考に下を上と改められたるは僻事也、下は裏にて、うちと云に同じ、うへは表なれば違へり、表に隱るゝと云ことやはあるべき、上下の字にのみなづみて、表裏の意をわすれられし也、

○神樂浪之、云々常丹跡、云々所念有計類、常はつねと訓べし、結句はおもほせりけると訓べし、考におぼしたりけると訓れたれど、おぼしと云ことは集中に例なし、

○天飛也、輕路者、云々不止行者、かるのみちはと六言に訓べし、をはと訓はわろし、不止は本の儘に、やまずと訓べし、下なるも同じ、十七卷 四十丁 廿卷 十二丁 に、やまずかよはむとあり、

眞根久、上に云り、無間の意には非ず、繁くの意也、

玉梓之使、考に玉はほむる詞、つは助辭、さは章の字の音にやとあるは、いと心得ぬ說也、今按上代には梓の木に玉を着たるを、使の印に持てあるきしなるべし、そは思ひかけたる人の門に、錦木を多くたてしと、心ばへの似たることにて、凡て使を遣る音信の志を顯す印に、玉付たる梓を持て行くなるべし、さて後に文字渡り來て、書を通はす世になりて、消息文は使のもて來るものなる故に、かの玉梓に準へてそれをも、同く玉づさと云るなるべし、

遣悶流、情毛有八等、遣悶流はなぐさもると訓み、有八はあれやと訓べし、あるやと訓はわろし、

玉手次、云々音母不所聞、音は妹が音也、玉手次、云々の三句は序也、(追考)

○打蟬等、云々 二十八丁 天領巾隱、あまひれかくり、といひては理り聞え難ければ、只にあまぐもと訓かたまさりぬべし、前にはあまぐもと訓つれども、雲を領巾とせむこといかゞ也、故思ふに葬送の時の旗を、領巾と云るにて、字の儘にひれと訓べきか、領巾と旗と、其さま似たればかくも云べし、其上此言朝立いましてと云詞の上にあれば、葬送のさまとおぼしき也、さて下に又隱にしかばと有を思ふべし、(追考)

取與物、之無者、考に物は人也とあれどいかゞ、兒を取與とは云べからず、物は玩物にて泣をなぐさめむ料の物也、

浦不樂晚之、考にうらぶれと訓はわろしと有れど、卷々に浦觸裏觸と云ることいと多し、又五卷 廿五丁 十七卷 三十丁 などに假字にも、宇良夫禮とかければわろからず、

石根左久見手、さくみを考に、裂のきを延て、くみと云とあるはいかゞ、きを延てくみと云むもいかゞなる上に、石根を

踏裂と云こと、有べくも非ず、今按に古事記傳の石拆神根拆神の下に云り、

○養路乎、云々 廿丁 生跡毛無、いけるとゝ訓べし、此跡は、てにをはに非ず、燒太刀のと心、又心利もなし、など云る利にて、生るともなしは、心のはたらきもなく、ほれて生る如くにもなきを云也、此言集中に多し、皆同じこと也、十九巻 廿六 に、伊家流等毛奈之、とある流の字は前に、若くは理の誤かと云るは僻事也けり、てにをはのとなれば、必上を伊家理と云ざれば叶はず、去ど能思へば、てにをはには非ざる也、（追考）

○吉備津釆女、廿丁 吉備津を、考に此釆女の姓のよしあれど、凡て釆女は出たる地を以てよぶ例にて、姓氏を云例なし、其上反歌に、志我津子とも凡津子とも、よめるを思ふに、近江の志我の津より出たる釆女にて、爰に吉備と書るは、志我の誤にて、志我津の釆女なるべし、

○秋山、云々朝露乃如也、夕霧乃如也、如也は、ごとゝ訓べし、也の字は焉の字などの如く、只添て書るのみ也、ごとやと訓ては、や文字調はず、さて此終りの四句は、子等が朝露のごと、夕霧のごと、時ならず過ぬると次第する意、如此見ざれば語調はざる也、さて朝露夕霧は、上に云置たる、露と霧とを結べる物也、

○樂浪之、云々 廿丁 罷道之、道は通の誤なるべし、爰はまかりぢにてはわろし、

○玉藻吉、云々國柄加、雖見不飽、本の儘に、あかぬと訓べし、考にあかずと訓れたるは、上の加に叶はず、

○鴨山之、云々 廿丁 不知等、しらにとゝ訓べし、

○直相者、廿丁 たゞのあひはと訓べし、直にあふをかく云は、逢を體言に云る物也、其例は四巻 廿丁 に、夢之相者、苦かりけり、と有是も夢に逢ことをいめのあひと云り、（追考）

相不勝、本の儘に、あひもかねてと訓かた、穩にて能當れり、不勝をかねと訓例も多き也、考にあひかてましをと訓れたるは、ましをの辭爰に叶はず、

○梓弓、云々 廿丁 何鴨、本名言、聞者、云々語者、言はいへるに、聞者はきけばと三言の句、語者はかたれば、と訓べし、

さて本名と云は何れも、皆今世の俗言に、めつたにと云と同じ、めつたには、猥にと云と同意にて、みだり、めつた、もこな、皆通音にて元同言也、さて集中にもこなと云は、實にみだりなるには非ざれども、其ことを厭ふ心より、猥なるやうに思ひて云こと也、爰の歌にていはゞ、聞ばねのみなかれ心痛き物を、何ぞ猥に云ると云也、

○高聞之、云々將散、本の儘に、ちるらむと訓かたまされり、

右一二の卷の中に、考の說の宜しからぬことは、猶是彼あれども、おのれが未だ思得ぬことは皆漏しつ、今より後又考得たらむまに〳〵、書つぎてむ、

萬葉集三の卷

一二の卷は、師の考有て、世に廣まれゝば、いと明か也、此三の卷より下つかたは、其書未だ出ねば、世の人師の說をしらず、おのれはた、千里を隔て在しかば、每々には得きゝ明らめずて、やみにき、去ど文もて、廿卷みながら、二かへりまで疑はしきことゞも、問聞つれば、わろきはわろしとことわり、又聞漏しつることゞもは、おのが考を出しぬ、其が中にも早く師の云れつることも、必有なめど、知らぬをばいかゞはせむ、

直孫子云、二かへりまで疑はしきことゞも、問聞つればとかゝれたれば、其書こそ探り見まほしけれど、思ひつるを、難波にて、萬葉集問目纔に七卷を得たり、懸居翁の答あり、再問あり、再答あり、全からぬはあかぬことながら、こも校合して、活字の梓につきて彫りてむかし、

〇不聽跡雖云、云々丁十二志斐能我、此能は聊むつかしけれど例あり、十八卷丁十四に、しなさかる、こしの吉美能等、かくしこそ、此能と同じ、又十四卷丁十二に、勢奈能我そでも、是も同じ、同卷丁三十に、勢奈那登ふたり、此那も通音也、强語、しひがたりと訓べし、次の歌の强話登言を、しひがたりと云も同じ、

〇不聽雖謂、云々詔許曾、のらせこそと訓べし、のらせばこそと云べきを、ばを畧くは古言の格也、志斐伊波奏、師は伊を那の誤と云はれつれどわろし、又やの意とするもわろし、只伊は助辭也、凡て言の上に伊と云ことは常にて人皆知れゝ、夫のみならず、下にも置例多し、詞瓊綸に出せり、さて爰に志斐伊と云は、我姓を云て、下に伊の助辭を置る也、歌の心は、いなかたらじと申せども、かたれ〳〵とせめ玉へばこそ、此志斐の嫗は物語を申せ、然るをしひがたりとの玉ふは、いかにぞと云也、

〇八隅知之、云々丁十三立流、たゝせる、拜目、をろがめ、

恐等、かしこみと、
春岬、はるくさ、
益、いやと訓べし、
○久堅乃、云々綱爾刺、綱は綱の誤也、
○三津崎、云々 丁十五 舟八毛何時、寄奴島爾、ふねはもいつか、よせむぬじまに、と有けむを、八毛を公の一字に誤り、何時を脱し、寄を宜に誤れる也、はものもよふ、助辭にてつねのこと也、
○一本云、處女乎過而、處女と云地名有べくも非ず、是はみぬめを傳へ誤れる僻事也、葦屋の處女塚のある所を云など云る說は取に足らず、十五巻 丁八 に、乎等女と書るも誤を傳へたる也、
○粟路之、即淡路國也、
妹之結、いもがむすべると訓べし、
○留火乃、明大門爾、入日哉、榜將別、家當不見、丁十六 明石の門に入らぬ前には、大和の方も見えしが此門に入ては、見えぬやうに成なむと云也、こぎわかるゝとは、今迄みえたる方の見えず、なるを別ると云也、家のあたり見ずは、四の句の上へ移して見べし、
○天離、云々倭島、凡て大和の方をかく云也、別に此島有と云說は取らず、さて大和の方をさして、倭島と云は、船にまれ、浦にまれ、海を隔てあなたにあるときに云稱也、此巻 二十四丁 三十五丁 十五巻 丁十七 の歌などによめる、皆然也、廿巻 五十六丁 に、天地のかためし國ぞ、やまとしまねは、とよめるは、大八洲を凡ていへれば別事也、
○一本云家門、門は乃の誤か、
○一本云、武庫乃海、船爾波有之、ふなにはならしと訓べし、舟庭とは舟を海上へ榜出すに、よき日和をいへり、
○八隅知之、云々 丁十七 茂座、敷座の借字也、

及常世、　及萬世、よろづよまでにの誤と、或人の云る然るべし、

○馬莫疾、云々 氣並而、　師の説の如く、日數を重ねて也、

見氏毛和我歸、　氏を耳の誤と、或人の云るはわろし、歸はゆくと訓べし、一首の意は、此志賀浦は、いと面白く見るに俺ねども、日數を重ねて見て行ことは叶はねば、暫しだに馬を止て、見まほしきに馬を、とく打早めてな急ぎそと也、

○吾背子我、古家乃、丁十八 ふるいへのと訓べし、

島待不得而、　島は君の誤也と師説なり、

○阿部女郎屋部坂歌、丁十九　屋部坂は、三代實錄卅八卷に高市郡夜部村とある所の坂なるべし、

○客爲而、云々山下赤乃、　やましたと訓べし、こは赤の枕詞也、さる故は古事記に、春山乃、霞をとこ、秋山の、したひ壯子と見え、十卷丁五十に、秋山の、舌日が下とも有て、冠辭考に、したひは紅葉の由いはれしが如し、然ば山下ひ赤と續く意也、猶又十五卷丁卅七に、あし引の、山下ひかる、もみぢばの、とよめるも同じ、又十八卷丁十一に、たちばなの、したてる庭に、六卷丁四十四に、巖には、山下ひかり、錦成、花咲をゝり、是等も下は借字にて赤きこと也、此二首を見れば、只紅葉のみには限らず、赤く照ること也、爰の歌も字の如く、山のもとゝしては、此言船に由なし、奥に榜とさへあれば、山の下にては愈由なし、十九卷丁四十一に、あし引の、山した日影、是は、蘿ひかげなれば、赤きことに依らずげに聞えたり、

○然之海人者、云々丁廿 髮梳乃少櫛、　髮梳は道麻呂が、ゆするとと訓るぞ能當れる、つげのをぐし、くしげのをぐし、などよめるは更に叶はず、ゆするは髮梳と書つべきもの也、（追考）

○椋橋乃、云々丁廿一 此歌九の卷丁廿四にも出てあれば、只月の歌にて未だ出ぬをよめれば論なし、爰には初月の歌とあれば心得難し、實は初月の歌には有ざるか、然ども暫初月にして強ていはゞ、四の句の來の字を、こしと訓て、晝より早く出し月の、夜に入れば早く隱て光の乏き也、かく見るときは、椋橋山を西方にして、此山の高き故に、早く隱るゝかの意也、さて夜隱とは、夜の末の長く殘りて多き也、後の物語文に、年若き人を世ともれると云も、末の長くこもりて多き意なれ

ば、夫と同意也、末夜の末長く殘て多きに、早く山へ入て、纔の程ならでは見えぬ由也、
○眞木葉乃、云々 此歌の意は、勢の山をめで偲びて、暫くは立も止るべきに、さもあらで只に越行けば、めでられぬここを、眞木の葉も知ぬらむ夫を、うきことに思ひて、しなぶれてあるよとよめる也、
○亦打山、云々 丁廿三 此歌のこと師の云、此角太河は定かならねど、紀の國にあるべし、駿河とするは誤也、上の田口の益人が上野國へ、下りし時とは別也、上の歌共によりて、思ひ惑ふ可らずと云れき、今思ふに誠に然也、此角太川說々あれども皆誤也、亦打山云々とあれば、廬前も角太河も紀の國也、さて此角太河を古より、すみだ川と心得たるも僻事也、角を古すみと訓る例なし、すみには、隅の字をのみ用ひたり、然ば爰は、つぬだか、つぬぼかなるべし、
○皮爲酢寸、云々 丁廿五 此歌は下 三十丁 生石村主眞人の歌に大汝、少彥名乃、將座、志都乃石室者、幾代將經、と云歌と、上の句の人り違ひたるにて、紀の國の三穗の石室に座せしは、大汝少彥名神、播磨國の志都の石室に座せしは、久米の若子也、其故は書紀に、弘計天皇、更名來目稚子と見え、又此御兄弟播磨國に、隱れ座しゝことも見えたれば也、又かの歌の作者の、姓の生石は、播磨の地名と聞えたり、かの志都の石室を今生石子と稱すと也、さて億計天皇の更名大石尊、又大爲大脚、などあるも、生石と一つにて、播磨國に坐し時、其國の地名を取れる御名と聞えたり、
○常磐成、ときはなすと訓べし、成は如也、五卷 丁十 に等伎波奈周とあり、
○東、云々久美宇倍、 茱萸、くみと、郁子、うへと、二つ也、和名鈔蓏類に、郁子和名牟閉是也、蓏類に入たれども、木菓也、さて不相は、いまだ實のなる時にあはざる也、戀にけりは實のなるを待戀る也、又うへは諸にてもあるべし、
○奈䴏余美乃、云々 二十七丁 國之三中從、出之有、 くにのみなかゆ、いでたてる、出立有の立を、之に誤れり、出でし、とのみ云ては山に叶はず、出は輕く、立を主と云る言也、
石花海、三代實錄八卷 丁廿七 又十一卷 丁十七 に、剗海とあり、是をせのうみと訓べし、又日本記畧に、承平七年十一月某日甲斐國言、駿河國富士山神火埋水海、とあれば此時に絕たるなるべし、

水乃當烏、當を師はたきちと訓れたり、然らば知の字脱たるか、當麻などの例にたきとは訓べし、たきちとは訓難からむ、日本之、山跡國乃、此日本は必、ひのもとゝ訓べし、日本と云國號を立られたるも、日のもとつ國と云意なれば、爰も其意にて云るか、されど爰にては、國號には非ず、山跡をほめて云る也、古書にひのもとゝ云るは、是のみ也、餘は日本と書ても、やまとゝ唱ること也、夫に付て又思ふに、爰は飛鳥とぶとりの、飛鳥あすか、春日はるひの、春日かすが、と云例にも似たれば、やまとを、日本と、書故に其字の正訓を、やがて枕詞にしたるが如くも、聞ゆれど、はるひの、かすがと云も、上代の歌にも有れば、春日の字によれる枕詞にはあらず、然ば、爰も唯日の本つ國の倭と云意の外なし、

○皇神祖之、云々 廿八丁 極此疑、こゝしかもと訓べし、十七巻 卅丁 に、立山の歌に、許其志可毛、

歌思、辭思爲師、是を古く、うたふ思ひ、いふ思ひせし、と訓るは僻事也、契沖が、うた思ひ、こと思ひせし、と改つるは宜し、但此訓も、猶いさゝかわろし、うた思ひ、こと思はしゝと訓べし、おもひせしと訓ては、二つ共に思ひと云詞、體になる、體言にてはわろし、其上せしといひては、皇太子の御ことを申すにはいかゞ也、思はしゝと訓ときは、歌を思ひ、辭を思ひ賜ひしと云意にて、二つの思ひ、共に用言になり、又おもはしゝと云は、古言にて、思ひ玉ひしと、たふとみて云意になる也、(追考)

臣木、師云、樅の木也、古へ樅栂などを凡て、おみの木と云しを、やゝ後に樅をば眞おみと云、まお、を約むればも也、栂は刺りあれば尖りたる意にて、つがとも、とがとも、云しなるべし、神武紀に、草香の戰に此木に隱れて、命たすかりし人の有し故に、母木おものき、と其處を名付し由あり、是に依て後に、栂の字を作りし也、

○三諸乃、云々 廿九丁 河登保志呂之、とほしろしは、あざやかなることなり、凡てあざやかなることを、しろしと云、いちじろきも是也、又御火しろくたけと云も、あざやかに也、續世繼に、其大納言の御車の、もむこそ、きらゝかにとほしろく侍りけれと有、中頃までもいひし言にて、古の意と同じ、歌に遠白妙と云も、物あざやかなるを云り、

○海若之、云々 三十丁 **宇禮牟曾、**いかむぞ、なむぞ、など云詞か、**外にみえずと、契沖云り、師も同意也、**今考るに、十一

卷丁十二に、なら山の、子松の末の、有廉叙波、わがもふ妹に、あはずやみなむ、此第三の句うれむぞはと訓べし、子松がうれのうれと、重たる歌なり、

将死還生、 或人是をよみがへらましと、訓るは宜し、但しよみがへりなむ、と訓方まさるべし、

○吾盛、復将變八方、 またをちめやも、と訓べし、其由は五卷丁十八に、わがさかり、云々の歌の所に委くいふべし、

○萱草、云々不忘之爲、此結句は忘れぬやうにと、云が如く聞ゆる故に、さる意もて解る説あれど僻事也、忘れぬ故にと云はむが如し、然ば忘れぬ故にいかにもして、忘むとて萱草を紐に付る也、

○吾行者、云々二十一丁 夢乃和太、 行をたびと訓るもさることなれど、廿卷丁四十に、和我由伎乃ともあれば、本の儘に訓て即旅のこと也、夢のわだは吉野にあること、七卷丁十の歌にてしるく、又懐風藻に、吉田連宜従駕吉野宮の詩にも、夢淵と作れり、世の中は夢のわたりの、浮橋か、打渡しつゝ、物をこそ思へ、とよめる歌も、爰に渡せる橋をよめる也、

○世間之、云々二十一丁 冷者、 冷は怜の誤にて、たぬしきはと訓べし、さぶしを不怜とも、不樂とも、通はして書れば、たぬしきにも、怜の字をも書べき也、世の中の遊びの道の中にて、第一の樂きことはと云意也、師は冷をさぶしくはと訓れしかど、さては道爾と云爾と、爲爾と云爾とに叶はず、能味ふべし、

○生者、云々有名、 あらなと訓べし、あらむの意也、んをなと云は古言の一の格也、

○縄浦従、云々二十二丁 釣爲良下、 つりせすらしもと訓べし、つりをすらしもと訓ては、を文字拙し、

○阿倍乃島、云々石爾、いそにと訓べし、

○秋風乃、云々四十二丁 此歌は旅宿の遊女などのよみて、赤人に贈れるを、自の歌の中に同く書入、おかれしなるべし、(追考)

○雨不零、云々五十二丁 潤濕跡、零は霽の誤にて雨はれず也、集中とのぐもると云には、必雨ふるよしを皆よめり、十二卷丁十九 十三卷丁十三 十七卷五十四丁 十八卷二十二丁 の歌どもを考ふべし、 第三の句はぬれひづとと訓べし、 或人此句を誤字として、つきまつとゝせれども、其字も遠く、初句にも叶はざれば取難し、香光と云る言には、月待と云が能叶へるに似たれども、月待

こ戀乍をるこは、何を戀つゝをるにか、戀乍は必待人を戀乍なれば、かてりのことは猶慥ならす、かてりの言は居きこ云へ、あたりて見るべし、をるは寐ずして、起てゐる也、ぬれひぢてわびしく、ねられぬ故に、君を戀乍起て居る也、さて然起て居るは、若や君が來もせむかこ、且は待がてら也、

○昔者之、云々 歌 年深、　者は省の誤にて、むかし見し也こ、道麻呂云り然なり、三の句は六帖に、こしふかみさあるぞ宜き、

○雞之鳴、云々 歌 明神之、　明は朋の誤にて、ふたがみの也こ、或人の云へる誠に然るべし、大和國なる、二上山も二神の意也、

儕立乃、　なみたちこ訓べし、九卷 歌 に二竝、ふたならび、つくばの山、こよめる意也、

○筑波根矣、云々來有鴨、　來有の二字を、けるこ訓べし、此けるは辭のけるには非ず、即來有きたるこ云意にて、書紀などに參れるここを、まうけりこ訓る是も、まゐり來たりこ云ここにて同じ、

吾來前二、　前は並の誤也、

○吾屋戸爾、云々雖干、かれぬれごゝ訓べし、かれぬこもこ訓ては、不憖而こ云に叶はず、さて集中に屋戸屋外屋前なごこ、書るやごゝ、宿こ書るやごゝは、本より別の名にて、屋戸などゝ書るやごは、後に所謂前栽庭のここにて、屋外こ書る字の如く、家の外也、屋前こ書るも此意也、故に屋戸屋外屋前こ書るやごは、何れも草木などのここをよめり、さて宿はやごゝ共いひて、旅などにてこまりて夜を明す所を云、右の屋外こは別也、されば草木などのここに云るやごには、宿字を書る例一つもなし、然るを後には此二つを一つに混じて、住宅を宿こ云ここになれるから、後世の人は本より一つに心得て、古は別なりしここを辨へ知らぬ也、集中の歌共に、心をつけて古のやうを辨ふべし、

○薇寄、云々 歌 草取可奈和、　和をやこ訓は僻事也、わこ訓べし、誤字こするもわろし、可奈和こ云言心得難きが如くなれご、本此歌は古事記に、速總別王の御歌に、はしたての、くらはし山を、さかしみこ、岩かきかねて我手こらすも、

と云歌の轉じたる物也、然ば草とりかなわとは、彼歌の岩かきかねてと同意なるが、詞の轉じたる也、岩かきかねてとは、山路の嶮きに巖へ搔付きて、登らむとすれども、登り兼て我手へ取付て登ると云意也、然ば愛も草に取付ても登り兼て、妹が手に取付くと云意也、但し妹が手を取ると云は、意をかへて戀の心にも有べし、されど四の句の意は、古事記の歌と同くて、可奈は不得の意也哉には非ず、さて和は下に付たる辭にて、書紀に、いざわ〳〵と有も、いざ〳〵とさそふ意なるに同じ、十三巻三十四丁にも率和いざわとある也、右の古事記の歌の四の句を、妹は來かねての誤也と、師は云れつれど僻事也、さて此あられふりの歌を、柘枝の歌とするは、柘枝がよめりとにはあらで、柘枝にあたへたる歌と云ことか、然らざればゞ、妹が手をとると云こと叶はず、とにかくに、此一首は柘枝のここにてはあらじを、傳への誤れるなるべし、

○此暮、このゆふべとも訓べし、

不取香聞、魚をとらすかも也、

○海若者、云々鹽乎令干、しほをひしむと訓切て、上のあやしき物かと云るを結ぶ也、さてほさしむと訓ずして、ひしむと訓故は、本ほすと云は、令干也、ほとひと通音にて同言の活ける也、さてほさしむと云ときは、さはほすのすの活けるなれば、令の意也、然るを又しむと云ては令令干と、令の言重なる也、

待從爾、從を契沖は、からと訓れどわろし、是は候の字の誤にてまちまつにと訓べし、又二字をさもらふとも訓べし、

寐乃不勝宿者、いのねかてねば、

開去歲、あけぬとしと訓べし、

○不所見十方、四十一丁此十方は雖の意には非ず、とにもの助辭を添たるとも也、上二句の意は、凡て月は出るを待兼ぬる物にて、未だ出ぬ程は誰かは戀ざらむ、未だ見えぬ事かなと、誰も皆待かぬると云意也、さて出たらむをよそながらも、早く見ま欲きと也、

○印結而、我定義之、義之はてしと訓べし、此外四巻四十一丁に、言義之鬼尾、七巻三十一丁に、結義之、十巻三十丁に、織義之、又

逢義之、十一巻廿丁に、觸義之鬼尾、十二巻廿丁に、結義之、是等皆同じ、てしと訓べきこと明らけし、さて是をてしと訓は、義字をての假字に用たるには非ず、故に義之と續けるのみにて、義とのみ云るは、一つもなし、義は皆羲の字の誤にて、漢國の王羲之と云人のこと也、此人書に名高きこと、古今に並びなし、御國にても古より、此人の手跡をば、殊にたふとみ賞する故に、手師の意にて書る也、書のことを手と云は、いと古きことにて、書紀廿一巻十九丁にも、書博士を、てのはかせとも、てかきとも訓たり、さて又七巻三十丁十一巻卅二丁に、結大王、十巻三十丁に、定大王、十一巻四十七丁に、言大王物乎、是等の大王もてしと訓て義理明か也、古くはかく訓べきことを知らずして、痛く誤り訓り、是も彼王羲之がことにて、同く手師の意也、其故は羲之が子の、王獻之と云るも、手かきにて有ければ、父子を大王小王と云て、大王は羲之がことなれば也、かゝればかの羲之と、此大王とを、相照し證して共にてしと訓べきことをも、又王羲之なることをも、思ひ定むべし、師の說には、義之をてしと訓は、義は篆の誤也といはれしかど、篆を假字に用ひたる例なく、又義之と續けるのみにて、義と放して一字書る所もなければ、義之と二字續きたる意なること疑なし、又大王は天子の意也と、いはれしかど、天子の字音をとりて、訓に用べきにも非ず、又其意ならば、直に天子と書る所もあるべし、天皇などゝも書る所もあるべきに、いづこも只大王とのみ書るは、決て其意には非ずと知べし、

○陸奥之、云々雖遠、　みちのくの、まのゝかや原は、只遠きことにのみ云る也、面影と云にかゝることには非ず、

○春日野爾、云々四十二丁社師留鳥、　鳥は戸母二字の誤にて、やしろしるとも也、娘子の歌に、神の社し、なかりせば、とよめる故に其社は知とも、繼て行む也、

○吾祭、四十丁　此初句をわがまつる、と訓るは僻事也、さては一首の意心得難し、わはまつると訓べし、吾はそなたの祭るべき、神には非ずの意也、さて三の句より下は、そなたに本よりつきたる神を、よく祭り玉ふべきこと也と云なり、

○橘乎、屋前爾殖生、　うゑおふせと訓べし、早くそなたの屋前に、うゑおふし玉への心也、

○吾妹兒之、云々四十四丁甚近殖而師故二、　いとちかくと訓べし、うゑてし故には、うゑてし物をの心也、

○伊奈太吉衞、云々此方彼方毛、かにもかくにもと訓べし、

○足日木能、云々引者、ひかばと訓べし、

結鳥、鳥は焉の誤にてゆふ也、

○石戸破、云々卅四手弱寸、たよわき、

女有者、めにしあればと訓べし、古事記の歌に、阿波母與賣邇斯阿禮婆とあり、

○名湯竹乃、云々神左備衞、衞は而か氐かの誤也、

無間貫垂、しゞにと訓べし、まなくもわろからねど、他の例によりて訓べき也、

七相菅、師のなゝますげと訓れたるは心得ず、なゝふは七節なゝふし也、陸奥の、とふの菅こも、七ふには、君をねさせて、三ふにわがねむ、とあり、

天河原衞、出立而、此國ならぬ、天上の河原迄、出立てと云は、もろこしのよしのゝ山に、こもるとも、とよめる心ばへに同くて、悲みの餘りに事をつよくいはむとて、設て叶ふまじきこと迄を云也、

伊座都流香物、座はませと訓べし、令座の意也、ましと訓ては、自ら往玉ひし意になるを、是は自ら往玉ひし意にてはわろし、いはほの上へ、令座奉りし意也、

○逆言之、枉言等可聞、卅二逆言を、さかことゝ訓れども、およづれと訓べき也、爰の長歌にも、於余頭禮枉言といひ、十三卷卅一にも、於餘頭禮能、多婆許登等加毛とよみ、光仁紀の宣命にも、於與豆禮加母、多波許止加母、とあり、然ば集中枉言と並べて云る逆言、何れもおよづれと訓べき也、天武紀に妖言を、およづれと訓めり、さて右の十七卷の歌、又光仁紀宣命に倣ひて、枉言も枉は狂の誤として、たはごとゝ訓べき也、

○角障經、云々朝不離、あさゝらずと云例也、

將歸、ゆきけむと契沖が訓める宜し、

・折插頭跡、　をりかざゝむとゝ訓べし、上の蘰に將爲登、といへる同じ例なれば也、

〇草枕、云々 四十丁 家待莫國、　師說に莫は眞の誤として、家またまくに也といはれき、十一巻 丁卅 に、今だにも、目な乏しめそ、云々久家莫國、この莫も一本に、眞とあれば、師說は論なく宜きが如くなれども、十四巻 丁十 に、なつくばの、しげきこのまよ、立鳥の、めゆかなを見む、　さね射良奈久爾、是もさねざるにの意也、　十五巻 三十丁 に、思はずも、まことありえむや、さぬるよの、夢にも妹か、見えず射良奈久爾、是も見えざるに也、十七巻 丁廿二 に、庭にふる、雪はちへしく、しかのみに、思ひて君を、あが麻多奈久爾、是も我待に也、此外もあれど右なるは、殊に論なき例也、又かてぬと云も、同じ意に落るをも思ふべし、いねがてと云も、いねがてぬと云も、同きが如し、然ばまたなくにと云て、待むにと云ことになるべき也、中昔の物語などにも、此格あり、おぼろげならぬと云べき所を、おぼろけとのみ云るが如し、後世の語にも例あり、怪、けしかると云べきを、けしからぬといひ、はしたと云べきを、はしたなと云るが如し、

〇古昔、云々 四十丁 手兒名、　手兒は、妙兒たへこか、　貴兒あてこか、の意なるべし、ほめたる稱也、名もほめて云也、又いとけなき兒を、人の手に抱かれてある意にて、手兒と云は是と別也、

〇大皇之、命恐、大荒城乃、五十丁　大荒城は殯也とある師說明か也、

〇天雲之、云々 五十丁 和細布奉乎、　師說に乎は平の誤にて、にぎたへまつり、たひらけく也とあり、

〇昨日社、云々不思爾、　おもはぬにと訓べし、五巻 三十丁 於毛波奴爾とあれば也、

濱松之上於雲、棚引、　上於雲は、うへのくもにと訓べしと、道麻呂が云るさることゝ也、上にといはむには、於の字を下には書べからねば也、

〇君爾戀、云々 三十丁 哭耳所泣、　ねのみしなかゆと訓べし、

〇見禮杼不飽、伊座之、　いましゝ、

伊去者、　いぬればと訓べし、

○栲角乃、云々五十四丁所聞而、　きかして、（追考）
晩闇跡、隱益去禮、　くらやみこ、かくりましぬれ、こは地下に葬る意をもて云也、（追考）
徘徊、　たもこほりこ訓べし、（追考）
○秋去者、五十六丁見乍思跡、　しぬべこ、訓べし、（追考）
○盧蟬之、云々秋風寒、　さむみこ訓べし、
○吾屋前爾、云々惜有身在者、惜を借に改て、かれるみなれば、又かりなるみなれば、こも訓べしこ、契沖云り、廿巻五十二丁
に、みづほなす、可禮流身ぞこは、こあれば論なし、
霜霑乃、　露霜の誤也、こけしもこ云ここなしこ師說也、
曾許念爾、　そこおもふにこ訓べし、
○時者有、云々伊去吾妹可、　いにしわぎもか、可は哉の意也、すみて訓べし、
若子乎置而、　わくごをおきてこ訓べし、
○妹之見師、屋前爾花咲、五十四丁　やごにはなさきこ訓べし、花咲まで時を經ぬる也、花咲時には非ず、花咲時はへぬこ訓ては、
花の時過ぬる意になれば長歌に、花ぞ咲たる、こあるに叶はず、時はへぬは、死てより月日の經たるを云也、
○如是耳、　かくのみこ訓べし、（追考）
○離家、云々停不得、　こゞみかねこ訓べし、五巻九丁に、等々尾迦禰こあり、（追考）
情神毛奈思、　道麻呂が、こゝろこもなしこ訓るぞ宜き、假字書の例にてしらる、（追考）
○世間之、云々不忍都毛、　しぬびかねつもこ訓べし、契沖が云る如く、不の下に得の字落たる也、（追考）
○昔許曾、云々與槨、　おくつきこ訓べし、（追考）
○掛卷毛、云々逆言之、枉言登加聞、　およづれの、たはごこゝかも、こ訓べし、枉の字は狂の誤也、（追考）

御輿立之而、　みこしたゝして、
天所知奴禮、　あめしらしぬれ、と訓べし、しられと訓るは僻事也、契沖が天にしられぬればの意也と云るは心違へり、
○吾王、云々 卅 天所知弁登、　あめしらさむとゝ訓べし、
○足檜木乃、云々光、　ひかり、
散去、　ちりぬると訓べし、
○掛卷毛、云々大御馬之、　おほみまのと訓べし、五巻廿五丁に美麻とあり、
口抑駐、道麻呂か、くちおしとゞめと訓るぞよき、（追考）
見爲明米之、活道山、　みしあきらめし、いくぢやまと訓べし、いくめぢやま、と訓るは心得ず、是は活目と云地名もある故に、思ひまがへたるなるべし、只いくぢと訓べし、八雲御抄にもいくぢ山山城とあれば、古本には、いくぢと訓りけんを、仙覺がさかしらに、いくめぢとは改つるにや、尾張國知多郡にも、生道いくぢ村と云ありて、式外伊久智神社あり、尾張本國帳に載たり、凡て地名は、諸國に同きが多き物なれば、いくぢと云例とすべし、反歌の第四の句、見之活道乃も、みしゝいくぢのと訓て宜し、見しをみしゝと云は古言也、長歌に、見しあきらめし、とあるみしも只見あきらめ也、
悲召可聞、　かなしきろかもにて、召の字は呂の誤なり、（追考）
○大伴乃、名負靫帶而、卅 景行紀に、日本武尊居甲斐國酒折宮、以靫部賜大伴連之遠祖武日、と見え、姓氏錄には、天靫負を大伴室屋大連に賜へることゝ見ゆ、大伴の名に負ふ靫とは是也、
何所可將寄、　いづくかよせむと訓べし、
○白細之、云々不絶射妹跡、　射をやと訓はわろし、やの音もあれども、さる異なる音を用ふべきに非ず、只いと訓べし、
此いの助辭のことは、上に既にいへり、
髣髴爲乍、　おほになりつゝと訓べし、是は相樂山へ葬り行を、見送りたるさまにて、漸くに遠く成て、おほゝしくかすか

に成行を云也、四巻三十丁に、朝霧の、鬱相見之、此鬱をも、おほにと訓べし、ほのかにと訓るは誤也、
入居嘆舍、舍は合の誤にて、なげかひ、ならむと稲掛茂穂いへり、
兒乃泣母、母は毎の誤なり、二巻三十丁に、若兒乃乞泣毎とあり、
○打背見乃、世之事爾在者、六十丁 是を後世人ならば、世のさがなればとよむべきを、事なればとよめるは、いかゞなるやうに聞ゆれども、古風也、今世の言に浮世のことなればと云に、能當れり、凡て某のことなればと云こと多し、(追考)
○朝鳥之、啼耳鳴六、ねのみしなかゆと訓べし、鳴六は之鳴を誤れるなるべし、なかむといひてはわろき歌なり、

萬葉集四の卷

○一日社、云々 丁十二 如此所待者、有不得勝、 所は耳の誤にて、かくのみまてばなるべし、所と耳とも似たり、又可の誤にて、まつべくはなるか、可と司とも似たり、結句は師は、ありかてなくもと訓れたり、道麻呂は勝は鴨の誤にて、ありかてぬかもかと云り、(追考下皆同)

○神代從、云々 去來者行跡、 かよひはゆけど、訓べし、鳥にかよふと云こと、朝鳥往來爲君などあり、寐宿難爾〇〇〇〇〇登阿可思、 此所六言脱たるべし、試にいはゞ、いねかてにして、きみまつと、阿可思つらくも、など有べき也、

○淡海路乃、云々 上三句はたゞ氣の序也、川の氣と云が川霧を云也、氣のころ〳〵とは、師說氣は日々の事也、ころころは日ごろ〳〵と云が如し、

○眞野之浦乃、云々 丁十三 思哉、 おもへやと訓べし、此歌は繼橋の、つぎて思へばにや、心から妹が夢に見ゆると云意也、思哉はおもへばにやの意也、女ごちにても妹と云こと常也、

○河上乃、云々時自異目八方、 凡て時じくとは、非時と書る意にて、其時ならざることを云也、されば時じけめやもとは、來るべき時に非ずと云ことなく、いつも〳〵來ませと云也、

○衣手爾、云々吾乎置而、如何將爲、 きみをおきて、いかにせむ、吾は君の誤と云はれたる考の說よろし、是は四首共に櫟子が歌にて、君とは妹を云る也、

○朝日影、云々 丁十四 照月乃、 上二句は其時の景也、照月のは不厭の序のみにて、歌の意には預らず、此續け十二卷 丁四十 にもあり、考合せて知べし、

不厭、 あかざると訓べし、

○百重二物、來及毳常、　二の句きたりしけかもと訓べし、しけかもは及かしとねがふ意に聞ゆ、常は次の句の頭へつくべし、都てとゝ云詞次の句へ續く例多し、

○衣手乃、別今夜從、丁十五　わかるこよひゆ、

甚戀名、　いたくこひむなと訓べし、かく云例は此卷丁廿四に、吾者將戀名とあり、

○臣女乃、丁十六　臣女は少女の誤成べし、をとめと訓べし、少と臣と草書似たり、

匣爾乘有、くしげにのれる、

哭耳之所哭、　ねのみしなかゆ、

有哉跡、　あれやと、

白雲隱、しらくもかくりと訓べし、爰迄は三津の濱邊に居る間のこと也、

夷乃國邊爾、直向、　直向と云は、船をこぎ出て、海路に出るを云也、たゞむかひと訓べし、たゞむかふ淡路と云ことには非ず、

鳥自物、魚津左比去者、　凡てなづさふと云詞、中古の物語文などには、したしく馴そふやうの意にも云る故に、此集なるをも、人皆其意とのみ思ふめれども、此集なるは其意には非ず、集中に此詞多くあるは、何れも海川などによみて、水に浮び、又は水の上を渡ること也、其中に海とも川とも云ざるもあれども、それも海川を渡ること也、三卷丁五十一に、引綱の、なづさひこむと、是も舟にて來ることを云る也、九卷丁廿一に、暇有者、なづさひ渡り、是も渡りとあれば川をかなたへ渡りて也、十二卷丁十二に、備保鳥之、なづさひこしを、是も準へて知べし、此外に十所ばかりあるも、皆海或は川に云り、心を付て考べし、

莫告我、　我は茂の誤なるべし、もは辭には非ず、なのりそ藻と云也、書紀允恭卷に見ゆ、

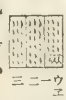
不告、　のらずと訓べし、

○白妙乃、袖解更而、　袖は紐の誤ならむと或人は云り、又思ふに、男女別れて旅に行時に、袖を解放ちて、互に更てかたみとすることの、有しにも有べし、

月日乎數而、　つきひをよみてと訓べし、

○吾背子者、何處、丁十七　此歌既に一卷丁廿に出て、其所に云べきことは云り、さて何處は、いづくと訓べき也、古事記應神段大御歌に、此蟹や、伊豆久の蟹、云々よこさらふ、伊豆久爾いたる、とあり、是を證として、何れも皆いづくと云ぞ古言なる、いづこと云ることは、萬葉以上に見えず、又いづちと云は何路の意也、

○秋田之、穗田乃刈婆加、　刈婆加とは道麻呂云、尾張美濃などにて、今田を植るにも刈にも、幾はかと云ことあり、たとへば三人して三はかに植、五はかに植、或は五人して三はかに植、などゝ云也、其圖左の如し



此圖は三人して三はかにうゝる圖也、餘も是に準へて知べし、刈時も是に同じ、是は關東の國々にても云こと也こそ、さて其一はかは、三人にもあれ、五人にもあれ、男女打交りて一つ所に寄合て、植も刈もする物なる故に、かよりあふの序とせる也、

○吾背子之、蓋世流、　けせると訓べし、古事記倭建命の段に、汝之祁勢流、おすひのすそに、又我祁勢流、などあり、著てあると云意の言也、

○雨障丁十八　大平云次の歌によりて、是をあまづゝみと訓べし、雨づゝみと云こと猶集中に例あり、又つゝみなくと云も、障なくと云に通へり、

○狹穗河乃、云々丁十九　黑馬之、こまを黑馬と書るは、たゞ字音をとれる假字のみ也、うめを烏梅と書る類也、黑の字に意なし、道麻呂が云、ぬば玉のは、來夜の夜にかゝれる枕詞也、

年爾、　年の字は常の誤なるべし、

○千鳥鳴、云々吾戀爾、　わがこふらくはと訓べし、とぢめの爾の字一本に者とある宜し、

○赤駒之、越馬柵乃、丁廿　馬柵はうませと訓べし、十四卷丁三十に、宇麻勢胡之、麥はむ駒の、是によりて知べし、又十二

卷丁廿八に、柜梠越爾、麥咋駒乃、此柜梠も、うませと訓べし、後世にませ垣と云も、馬柵の如く結たる垣也、

○梓弓、云々君之御幸乎、師云幸字は事の誤也、御言の意也、

聞之好毛、きかくしよしもと訓べし、

○遠嬬、云々丁廿二安莫國、やすけくなくに、

雲爾毛欲成、くもにもがもと訓べし、かもを欲成と書るは、爰の意を以て書る也、

高飛、たかとぶは天飛と云と同じ、高は天を指て云也、高く飛と云ことには非ず、

爲吾、わかためと訓べし、

○數細乃、云々間置而、あひだおきて、

不相念者、あはぬおもへばと訓べし、

○他辭乎、云々丁廿二莫思吾背、なおもひわがせと訓べし、下にそと云ことなき例多し、

○現世爾波、人事繁、しげしと訓べし、

○常不止、つねやまずと訓べし、此言例有、とことはにと訓ては叶はぬ所也、

○天皇之、すめらぎの、

行幸乃隨意、いでましのまにま、

親、したしくも、

吾者不念、わをばおもはず、

不知跡、しらにとゝ訓べし、

○吾背子之、云々丁廿三木乃關守伊、將留鴨、きのせきもりい句とゞめてむかも、又とゞめなむかも、伊は關守の下につける助辭也、下に伊とつけて云例古言に多し、

〇三香之原、云々自妻跡、　おのづまとゝ訓べし、十四卷三十五丁に、於能豆麻乎とあるに依てなり、

百夜乃長、有與宿鴨、　もゝよのながく、ありこせぬかも、長はながくと訓べし、百夜の如くと云意也、ながきと云は古言の格に非ず、宿は不の意の借字のみ也、

〇天雲之、云々廿四丁心毛身副、　心も依り身さへ依ると云こと也、

〇五年戊辰、云々廬城驛家、　廬城は三笠郡にて、宰府の南に今も有村也、昔宰府より京へ登る道の驛にて、此所より米山と云を越て行し也と彼國人の說也、

〇大船之、云々去者、　いなばと訓べし、

〇山跡道之、云々嶋迴備緣、浪間無牟、　うらまによるなみの、あひだもなけむ、と訓べし、

〇吾君者、和氣乎波、　和氣のこと古來よく說得たる人なし、此稱の出たる歌何れも、紛らは敷故に、說誤て我を云と思ふは僻事也、和氣とは人を賤しめてよぶ稱也、集中に見えたるを、皆爰に委くいはむ、先爰なるは、君と指て云る人の方より、我を指て云る詞にて、汝と云むが如し、汝は死ねと君は思ふにやと云也、さて其汝はよみ人の我なれども、君が然思ふ方より云詞なる故に、汝と云に當る也、又此卷五十八丁に、黑樹取云々いそしき和氣と、ほめむともあらず、是もよみ人の我なれども、君がいそしき汝と、ほむべきに非ずと云意にて、爰と同じ、又八卷三十一丁に、戲奴、反云和氣、又吾のみ見むや、和氣さへに見よ、とある吾の字を君と誤れり、君にては聞えぬ歌也、さて此二首の和氣も汝也、歌の意を考て知べし、此二首は紀女郎が、家持におくる歌なれば、賤しめて、汝などゝは云べきに非ざるを、かく云るは、戲れて殊更に云る也、故に戲奴と書て奴の如く人を賤しめて、戲れ云る意を顯はせる也、次に家持の答歌に、吾君に、戲奴はこふらし、是は自稱に似たれども、さには非ず、紀女郎が歌に、たはぶれて和氣と云おこせたる、詞をうけて、其和氣との玉ふ我はと云意也、彼方より云る戲言をうけて、此方よりも其儘に云こと、今の世にもかゝる類あることゝ也、戲奴と書る由も、右の如く見て明けし、

○天雲乃、遠隔乃極、丁廿五 そきへのきはみと訓べし、さて此二首は大伴の卿よりよみおこせし歌有て、其答歌と聞えたり、又二首ともに戯れたる歌也、戀る物かもといへるは戯れ也、

○古、人乃令食有、をさせると訓べし、酒を呑をもをすと云は古言也、例あり、

痛者爲便無、痛者は酒に醉て、痛みなやむを云、やめばすべなしとも訓べし、

貫簀賜牟、たばらむと訓べし、たまはらむと云に同じ、貫簀はたらひなどの上に置て、吐を受て側はらへ、こばしらざらしめむ料に賜はらむと乞也、賜牟を或人の贈むの誤と云るは僻事也、さて此歌はまさに大伴卿の方より、酒をおくられたりしこと有て、其答と聞えたり、此贈賜へる酒を飲て、醉痛み吐などせば、すべなかるべきものを、其料に貫簀をも、賜らまほしと戯れたる也、

○爲君、云々安野衛、安野は宰府より南の方に、東小田、四三島、隈場、三村の間に方一里の野あり是也、今は七杉原と云と國人の說なり、

○筑紫船、未毛不來者、二の句いまだもこねばと訓べし、こねばはこぬにと云意の古語也、歌の意は三依筑紫船のくるを待て、筑紫に下らむとする程のことなるべし、然るに其筑紫船も、未だ來ざる先に早よそになりて、吾方へはうと〳〵敷なれるが悲と也、

荒振、よそになりて依つかぬこと也、

○事毛無、生來之、生は此字の儘ならば、あれこしと訓べし、又ありこしならば、在の字の誤なるべし、此二つの内ありこしの方まされり、

○不念乎、云々丁廿六大野有、三笠杜之、大野は三笠の森の邊より、東南の方日王子山の麓迄を、凡て大野と云ふ、大野山は、其東の方にあり、三笠の杜は三笠郡にて、博多より宰府へ行道に、雜餉隈さつしやうくまと云所あり、そこより二町東北にあり、今は昔の森の楠二株殘れりと、筑前の國人の說也、

神思知三、　かみししらさむと訓べし、

○無暇、　いとまなくと訓べし、なきと訓は僻事なり、

○黑髮二、白髮交、至者、　しろかみまじり、おゆるまでと訓べし、

○山菅乃、云々吾爾所依、　われによせと訓べし、

○野干玉之黑髮變白髮手裳、（廿八丁）　二三の句、くろかみしろく、かはりてもと訓べし、變白髮と書るは意を以て書る也、

○從今者、城山道者、（廿九丁）　城山は三笠郡也、宰府の坤方に山口村と云あり、其南なる高山也、宰府より筑後に行道也と、國人の說なり、

不樂牟、　さぶしけむと訓べし、

○吾衣、　わがころもと訓べし、此歌の意は、必君が著玉へ、人には著せ玉ふなと云意なるを、高安王を攝津大夫なる故に、難波をここと云て、さて言葉の上は都て、難波をここごもの手には、觸ること有とも著せ玉ふことは、し玉ふなと云也、

○生而有者、　道麻呂云、初句いきてあらばと訓べし、生ながらへてだにあらば、又逢見むことの有べきもしらぬを、何とて遂に逢難かるべき物のやうに思ひて、死むとは、夢に見え玉ふぞと也、

不知、　しらにと訓べし、

○衣手乎、打迴乃里爾、（三十丁）　折迴里にて、をりたむ里なるべし、訓をうちわと誤れるから、後に又誤りて、乃の字は書添たるにや、さて折迴里とは、爰よりゆくに肱折まがれば、やがて至る近き里の意也、十一卷（四十三丁）に、神名火、打迴前乃、石淵とあるも、折迴前をりたむくまにて、神無備川の瀨の、折まはりたる所の隈にある淵也、隱りの序也、是と相照して考べし、

○吾念乎、人爾令知哉、云々夢西所見、（三十丁）　わがおもふを、ひとにしらせや、云々いめにしみえきと訓べし、しらせやは、しらせばにやの意也、

○君備戀、云々　此歌は奈良山の道を行時に、君が戀しさのすべなくて、小松が下に立留りて、歎息をせしと也、
○八百日往、濱之沙毛、　八百日往は、加萬日往の誤ならむか、一卷にも加萬目と書り、かまめゐる濱とは、鴎のすむ磯、みさごゐるありそなど云類也、さてかく云故は、戀の繁きを甚しく云むには、只濱の砂子にて足ぬべきこと也、其上を猶甚く云なさむは、後世のことなるべし、縱令又猶甚くいへばとて、八百日往とは、いかでか云べき、百日しも行かぬ、松浦路などよめるは、行路の程を云るなれば事異なり、
豈不益歟、　あにまさらじかと訓べし、
○戀爾毛智、云々水瀨川、下從吾瘦、　みなせ川とは、水無瀨川の意にて、何れにまれ、上べは水なくて、水は砂子の下を潜りて、流ゆく川を云なり、名所には非ず、此歌は下從の序也、したゆわがやすと訓べし、
○朝暮之、鬱相見之、　おほにと訓べし、
○伊勢海之、云々　詳　恐人爾、　かしこくと訓べし、此時家持さのみ、貴人に有ざれば、かしこき人と訓べきに非ず、
○從情毛、吾者不念寸、　こゝろゆも、わはもはざりき、と訓べし、此ひらの裏なるも同じ、
○暮去者、云々言問爲形、　こととふすがたと訓べし、
○念西、　おもふにしと訓べし、
○天地之、神理無者社、　かみしことはり、なくばこそ、と訓べし、
○吾毛念、云々多奈和丹、　三の句あさにけにの誤ならむか、旦爾氣丹か、おほなわと云言、例もなくいかゞに聞ゆ、おほさわと云ことは有ども、爰はおほさわにても聞えぬ也、朝にけにといへば、此時無と云に能叶へり、
無有、　無備なしにの誤ならむか、
○近有者、云々彌遠、君之伊座者、有不勝自、　いやとほく、きみがいまさば、ありかてましも、にて自は目の誤也、
○今更、云々　詳　鬱悒將有、　おほゝしからむと訓べし、

○中々者、云々不遂等、者の字も等の字も、一本に爾とある宜し、さてとげざらなくにと云て、とげぬにと云意になる、古言の一格也、此例多し別に委く云り、

○物念跡、人爾不見跡、　みえじと〻訓べし、

○不相念、云々泣嚢、　なかもと訓て、なかむと云ことなり、

○從慮邊、云々念歟、　おもへかと訓べし、おもへばにやの意也、

○押照、云々〔吾〕君之聞四乎、　乎は手の誤にて、君がきこして也、きこすはのたまふと云意に、用ひたる詞也、下に云者とあるに、重なるやうなれども、かく重て云か古語の常也、さてのたまふと云ことを、きこすと云こと例多し、

其日之極、　こは其日の盡るまでと云意にて、其日の每日每日過行て、極まり盡るまでにて、いつ迄もと云意になる也、十七卷〔丁廿〕に、來し日のきはみとも、又〔吾〕に、其日のきはみとも有、其日よりして、今日迄と云ことに用ひたり、

神哉將離、　かみやさけ〻む、

人賊禁良武、　ひとかさふらむ、

通爲、　かよはし〻と訓べし、又かよひたるとも訓べし、

○無間戀爾可有牟、〔吾〕　あひだなく、こふれにかあらむ、と訓べし、こふれにかは、戀ればにやと意也、

○松之葉爾、云々過哉君之、不相夜多鳥、　哉は去の誤也、結句はあはぬよおほみと訓べし、鳥は身の誤か、又爲の字にてもよし、歌の意は、みまかりぬる友などを思ひ出て、其人にあはで多くの夜を經ぬるゆゑに、月の影のさす所も、移り變りぬるよと思ふ意也、松の葉にと云は、其月影のさす所の變りて、松の葉へさすを見てよめる也、其人と共に見し時は、葉の所へさしたるが、今は松の葉へとのみ、委く言ざるは古風也、

○道相而、咲之柄爾、　ゑまし〻からにと訓べし、

戀云吾妹、　云は念の誤也、念と云と草書似たり、こひおもふ也、

○吾手本、云々 卅丁 此歌は丈夫者と云を、始へ移して心得べし、ますらをはわが袂を、まかむと思ふならむ、我は涙に沈みて、白髮生たりと云也、
○奈何鹿、 なにすとか、
來流、 きたる、
左右、 かにもかくにもと訓べし、
○初花之、云々止息、 よどむと訓べし、
○字波弊無、 此言は中昔の物語どもに、あへなきと云ると同意也、あへなきは即此うはべなきの、約りたる言也、今俗言にあはひないといひ、あいそもないと云に似たり、あはひないも、うはべないの轉言なるべし、此言の意さだかには云取難し、遠路を經てわざ〳〵來つるに逢ずして、徒に歸る時の心持を思ひて、自さとるべき也、此巻 卅丁 にも此言あり、無表邊うはべなき、無上うへなきなど云說更に叶はず、
○目二破見而、云々不所取、 とられずとか、とらえずとか、訓べし、又とられぬと訓もあしくは非ず、
○淺許、 卅丁 いかばかりと訓べし、五巻 廿五丁 に、伊加婆加利とあり、
枕片去、 まくらかたさると訓べし、十八巻 廿三丁 に、夜床加多古里、とある古は左の誤にて、是もかたさり也、夫の他所に有ほどは、夜床を片避てぬる也、さて愛の歌もそれと同じことにて、夜床を片避て、枕を一方へ寄てぬる也、さて其かたさりてぬる夜の夢にと云ことなるゆゑに、かたさるいめと訓べき也、五巻 廿一丁 に、しきたへの、枕さらずて、夢に見えけむ、とあるは夢に見え來る人の、枕をさらぬにて別事也、思ひまがふべからず、
○家二四手、云々客毛妻與、有之乏左、 大平云、與は乃の誤也、乃与似たり、妻の旅にあるがともしと云也、妻は夫を云る也、
○草枕、客者嬬者、雖率有、匣内之、 たびにはつまは、ゐたらめど、くしげのうちの、三の句大平云ゐたらめどゝ訓べ

し、率て來て有べけれども云也、然れども匣の内なる玉の如く、奥深く隱りてある嬬なれば、率て來がたしと也、

○絶常云者、云々　辞　幸也吾君、初句たゆといはゞと訓べし、幸也は、道麻呂云辛也也、へつかふは、絶もせずはなれもせず也、

○吾妹兒爾、戀而亂在、云々緣與、在は者の誤り、緣與は、よせんとゝ訓べし、

美濃の家つとの序

世中の人のあらまほしきは實心になむありけるそは萬の道を學ふにこれかれの人のおなし師につきていそしむ年月おなしほとなるにうまく其道を得るとえざるとのけぢめこよなきは大かた心のまめなるとさしもあらぬとによりて也けりさるは師も其人のまめ心を見得てなむ心得かてなるふしをもねもころにときさとすものには有けるこゝに我友美濃國大垣の大矢重門はおなしわか　鈴屋大人の御許にとし比まゐり通ひて哥の道まなふに此まめ心の人よりはまさりてなむ有ける一とせかのみもとにさもらひて月久にいそしみまなひけるひとつ心のまめなるを此　大人深くめて給ひて新古今集の中に此比の人々のこゝろ深き哥ともをえり出てあるは一もしふたもしの心しらひのいとこまやかなるくまくまてときあらはしてこたみの家つとにもせよかし

とさつけ給へりしをおのれひとりつゝみもたらむよりはおなし道しぬふ世中の人ともにもあまねく見せむとてこの比木にゐらせたるはいよゝまめ心のいたれるになむありけるかれ磯足等も此めてたきつとものを得つるよろこひにえたへさるまゝにいささか其まめ心をたゝへてかくなむ

尾張人　藤原磯足

美濃家裹序

おきにたつしら波を見てだに。花にもがなと。家づとには。願ひし人もありける海の。清きなぎさに。我しもかゝるたからをひろひ得て。かひありなどは。世の常の事をこそいはめ。うらやましくもと。旅衣かへる袂を。見ぬ人もなかりける。此悦ひを。つたなきおのれ獨やはとて。故鄕人にもしめしけるに。故鄕人も。かゝるめでたきおきつしら玉。光つゝみて。此里にのみやはとて。世の中にひろめむ事をなむ。せちにそゝのかしあへりけるまゝに。梓の木にうつしゑりて。終に又その板をさへ長きたからと。重門が家のくらのおくに。とりをさめつ。

美濃國大垣人　大矢重門

新古今集美濃の家つと一の巻

大矢ノ重門が物まなびに、美濃ノ國より來居て、何くれとこひける事どもの中に、此集の哥どもの心ばへをなん、ことにこまやかにとひたづねたるに、さとしあげつらひたる趣を、おなじくは國にかへらむ家づとに、書しるしてえさせよとこへるまゝに、かきてあたふ、

本居宣長

春歌上

春たつ心をよみ侍ける　攝政太政大臣

みよし野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春は來にけり

めでたし、詞めでたし、初句はもじ、いひしらずめでたし、のどもやともあらむは、よのつねなるべし、

春のはじめの御哥　太上天皇御製

ほの〴〵と春こそ空に來にけらし天のかぐ山かすみたな引

初ノ御句、かすみたな引へかゝれり、二の御句へつゞけては心得べからず、空とあるを重く見て、山の名の天といふこと、相照してみべし、此集の比の歌は、すべてかゝるところに、こゝろをこめたる物なり、

百首ノ哥奉りし時春の歌　式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ〴〵かゝる雪のたま水

めでたし、詞めでたし、下句はさら也、春ともしらぬ松とつゞきたるも、趣の外のあまりのにほひなり、

五十首ノ歌奉りし時　宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそ見えね春は來にけり

四の句、雪のなほふる故に、來つる跡はなけれどもなり、春はといへるに、人は來ぬこゝろあらはれたり、

入道前關白右大臣に侍ける時百首歌よませ侍けるに立春のこゝろを　皇太后宮大夫俊成

けふといへばもろこしまでもゆく春をみやこにのみとおもひける哉

二三の句、かの大貳三位が哥とはやうかはりて、くちをし、立春の哥に、ゆく春とはいかゞ、三月盡の哥にもなりぬべし、これらもよさまにたすけていはゞいふべけれど、今ノ人のかくよみたらんには、たれかゆるさん、などたつ春とはよまれざりけむ、

題しらず　西行法師

岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらむ

初句もじあまりいと聞ぐるし、此法師の哥、此病つねにおほし、道もとむらん、よせなし、されどかゝる所此法師の口つきにて、と人はえいはぬとなり、

述懐百首に若菜　　俊成卿

澤におふるわかなゝらねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

日吉社によみて奉りける子日の哥

さゝ波やしがのはま松ふりにけりたが世にひける子日なるらむ

子日の歌とは聞えず、下句、たが世の子日に引るならんといふべきな、さはいひがたき故にかくいへる、つねにあるとなり、されど子日は引べきにあらざればいかゞ、

百首ノ哥奉りし時　　藤原家隆朝臣

谷川のうち出る波も聲たてゝうぐひすさそへ春の山かぜ

めでたし、下句詞めでたし、本歌「谷風にうち出る浪や云々、「風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる、波もこゑたてつるほどに、鶯をもさそひて、聲たてさせよと、山かぜにいへるこころなり、

家の百首ノ歌合に餘寒　　攝政

空は猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

初句のなほさいふ詞は、三四の句へかゝれり、もし霞みもやらずといふへかけていふときは、まだといふなり、これにてなほとまだとのけぢめを心得べし、霞にくもるべき春の月の、雪げにくもるとなり、四の句にて、然聞ゆ、月はたらかず、

和歌所にて春山月　　越前

山深み猶かげさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

春のこゝろはたらかず、猶をすむ、春をよはなどゝかふれば、冬月のさまなり、

詩をつくらせて歌にあはせ侍りしに水郷春望　　左衛門督通光

みしまえや霜もまだひぬ芦の葉につのぐむほどの春風ぞふく

二の句は、霜のまだ消ぬをいへるか、然らば芦の角ぐむばかりの春風の吹むに、霜のきえぬといかゞ、又ひぬとは、既にとけたる跡のかわかぬをいへるか、さては俄に春めきたるさまは、さることなれども、とけていまだひぬを、たゞ霜もまだひぬといひては、言たらず、四の句、ばかりのといふべきを、ほどのといへるけ、いやしき詞にちかし、

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわか葉をこゆるしら波

下句詞めでたし、夕月夜は、鹽みちくらしに、時よせあり、又眺

望にもかゝれり、若葉にてまだみじかき故に、波のこゆるなり、

春のうた　　西　行

ふりつみし高根のみ雪とけにけり清瀧川の水のしらなみ

めでたし、詞めでたし、雪にきゆるといふと、とくるといふとのけぢめ、此歌にてわきまふべし、此けりは、おしはかりて定めたる意なり、水の白波、此集のころ、人の好みてよむ詞なり、よき詞なり、此歌にては、水のまさりて、波の高きさまによめるなり、水の濁れるとにいへる説はひがこと、

百首ノ歌奉りし時　　惟　明　親　王

うぐひすのなみだのつらゝうちとけてふるすながらや春をしるらむ

前大僧正慈圓

天の原ふじのけぶりの春の色の霞になびく明ぼのゝそら

下句詞めでたし、上句のもじ五ッ重なりたる中に、けぶりのは、俗言にけぶりがといふ意にて、餘のとは異なり、四の句は、天の原はおしなべて春の色にかすめる故に、煙もその霞へ立のぼるをいひて、家隆ノ朝臣の、波にはなるゝよこ雲と同じさまなり、なびくとは、たゞ立のぼりてたなびくさまをいへるのみにて、なびくに意はなし、明ぼのよせなし、曙ならずとも同じことなるべければなり、但し此集の比は、春の哥には、かくいつにても有べき事を明ぼのとよめる、例のことなり、今は心すべきわざぞ、空も、上に天ノ原とあれば、よくもあらず

晩霞　　後徳大寺左大臣

なごのうみの霞のまよりながむれば入日をあらふおきつしら波

初句のもじ、やとあるべき歌なり、此ながめは、かすみの間ならでも同じことなれば、題の意はたらかず、

をのこども詩をつくりて歌に合せ侍りしに水郷春望　　太上天皇御製

見わたせば山本かすむみなせ川ゆふべは秋となにおもひけむ

此集秋清輔朝臣の「うす霧のまがきの花の朝じめり秋は夕と誰かいひけむとある歌よりは、上ノ御句もまさり、又秋は夕とゝいふは、常のことなるに、夕は秋とあるは、ことなくめづらか也、

攝政家百首歌合に春曙　　家　隆　朝　臣

霞たつ末のまつ山ほのぼのと波にはなるゝ横雲のそら

詞めでたし、二三の句はさらなり、霞たつ末といひかけたり、末の松山を、浪のこゆる物にして、かくよめるなり、かやうの趣は、此集のころのたくみの過たるなり、霞たつとほのぼのとかけ合へり、一首の意、横雲は、なべては峯に於てはなるゝ物なるに、是は浪の上に於てはなるゝにて、上の慈圓大僧正の、霞になびく烟

と同じさまなり、哥さまはいとめでたけれど、涙にはなるゝは心ゆかず、或抄に、末ノ松山は、山ごしに海の見ゆる所なりといひてときたるは、四の句を心得かねてのしひごとなり、

守覺法親王家五十首歌に　藤原定家朝臣

春の夜の夢のうきはしとだえして峯にわかるゝよこ雲の空

詞めでたし、とだえをいはむために、夢を夢のうき橋とよみ玉へり、さて夢のとだえと、横雲のわかるゝとをたゝかはせたり、三の句の下に、見ればといふ言をそへ、峯にの下に、ももじをそへて心得べし、又は、橋は峯に縁あれば、四の句までを浮橋へつけて、横雲のわかるゝをも、すなはち夢のさむるにしたるにもあらむか、哥さまのめでたきにあはせては、春の夜の詮なし、夢のとだえに、夜のみじかきことを思はせたるべけれど、春のよのみじかきには、中〳〵に夢はのこるべき物をや、

大空は梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜のつき

二三の句は、霞める空に、梅香のみちたるを、かくいひなせるなり、四の句は、たゞ古哥の趣をとりて、春の月のさま也、梅のにほひ、かけ合たる詞なき故に、はたらかず、此句をのぞきて、たゞかすみつゝにても聞ゆればなり、或人の云、「大そらはくもりもはてぬ花の香に梅さく山の月ぞかすめる、などあらまほし、

百首ノ哥奉りし時　家隆朝臣

梅がゝにむかしをとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる

いとめでたし、伊勢物語業平朝臣の、「月やあらぬ云々の歌の段をもて、かの朝臣の心にてよめる哥なり、影ぞのぞもじ力あり、すべてかやうのぞには心をつけて見べき也、月影の袖にうつるといふに、いよ〳〵昔を戀て、なく涙のかゝる意をこめたり、月のこたへぬといひて、梅がゝのこたへぬことも聞えたるは、及びがたきいひざまなり、一首の意は、戀しき昔の事を、かはらぬ梅がかにとへば、梅が香はこたへずして、月ぞこたへがほなるを、それもこたへはせずして、其影の袖にうつるよと也、

千五百番ノ歌合に　右衛門督通具

梅花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはゞや

めでたし、詞めでたし、二の句、古き哥の詞也、此集のころ、かのなりひらの朝臣の歌をとりて、春やむかしのといふことをよめる哥おほし、そはすべての本歌とれるやうとはかはりて、此一句に、かの哥の一首の意をこめ、或は彼段の意をもこめてとれり、こゝの歌にては、此四の句に、かの上ノ句の意をこめて、月はむかしの春のまゝの月なれば、昔の事をもよくしりたるべければ、昔たが袖をふれし名殘のにほひぞと問むと也、

皇太后宮大夫俊成女

梅花あかぬ色香もむかしにておなじかたみの春の夜の月

めでたし、上ノ句詞めでたし、梅花あかぬいろかとつゞきたるは、折てなりけりの歌の詞なり、本哥といふには非ず、すべて昔にてといふに二ッ有、むかしになりて、今は跡もなき意と、又昔のまゝにてかはらぬ意となり、こゝなるは、後の意なり、此哥もかの伊勢物語の意なり、あかぬとは、梅のうへにいへれども、昔へもひゞかせたる物にて、あかぬむかしの意なり、一首の意は、此見る春の月は、あかぬむかしのかたみなるを、月のみならず、梅の花の色香も、むかしのまゝにて、おなじかた見なるぞとなり、

だいしらず　　西行

とめこかし梅さかりなるわがやどをうときも人はをりにこそよれ

上句、二三一と句を次第して聞べし、四の句、人はといふ詞は、とめこかしの上につけて心得べし、下句此ほうしのふりなり、一首の意、うとき間なりとてとはぬも、をりからにこそよるとなれ、此梅花の盛なる我やどをば、うとき人なりとも、香をとめてとひこよかしと也、白楽天が詩の句引べし、

百首歌奉りしに春の哥　　式子内親王

ながめつるけふはむかしになりぬとも軒ばの梅はわれをわするな

我なくなりて、昔の人になりぬとも、今日かくながめつるとをわするなとなり、梅はといへるはもじ心をつくべし、思ひ出る人はあるまじきを、せめて梅はと聞えて、あはれ也、眞木柱ノ卷に、「今はとてやどかれぬともなれきつる槇の柱はわれをわするな、とある哥より出たるべし、

土御門ノ内大臣ノ家にて梅香留袖　　藤原有家朝臣

散ぬればにほひばかりをうめの花ありとや袖に春風のふく

めでたし、詞めでたし、二の句のをもじ、なる物をといふ意なり、散ぬればとは、手折て持たる梅花の散しをいふ、さやうに見ざれば、袖にといふとよせなし、心をつくべし、手折持たるとは、詞に見えねども、本歌に「をりつれば袖こそとあるにて、おのづからさやうに聞ゆ、かゝる所、此集のころの歌のたくみなり、本哥のとりざまおもしろし、

百首哥奉りし時　　源具親

難波がたかすまぬ波もかすみけりうつるもくもるおぼろ月夜に

いとめでたし、詞めでたし、二三の句と四の句とのかけ合、いとめでたし、とぢめのには、うつるもくもる朧月夜なる故に、かすまぬ波も、おぼろ月よにかすみけり、といふ意なり、

攝政ノ家ノ百首ノ歌合に　寂蓮法師

今はとてたのむのかりもうちわびぬおぼろ月よのあけぼのゝそら

めでたし、詞めでたし、上句、二一三と次第してきくべし、田面を、伊勢物語の歌によりて、鴈の哥には、多くたのむとよみならへり、鴈ものもじは、心づよくかへる鴈もの意なり、一首の意、曙は旅だつ時なる故に、今はかぎりとおもへば、田面の朧月よの曙のけしきを、見すてゝ別るゝことを、わびしく思ひて、うちなくとなり、わぶとは鳴につきていへり、

刑部卿頼輔が歌合し侍けるに、よみてつかはしける　俊成卿

きゝ人ぞなみだはおつるかへるかりなきてゆくなる明ぼのゝそら

めでたし、下句詞めでたし、初二句、よのつねならば、きく人も涙ぞおつるとよむべきを、かくよめる、ぞもじはもじのはたらきに心をつくべし、四の句は、うちひらめなる詞なれ共、此歌にてはめでたく聞ゆ、すべて同じとも、いひなしと上下のつゞきからによりて、よくもあしくもなるわざぞかし、古哥に、「鳴わたる鴈のたみだやおちつらんとあるを、心にもちて、今は鳴て別れゆく鴈なる故に、聞人ぞかなしくて、其涙はおつるとなり、或抄に、鴈は故郷へゆく故に、悦びて、涙はおとさずして、聞人は涙を落す也といへるは、鳴てゆくといへるにかなはず、

歸鴈　攝政

わするなよたのむの澤をたつかりもいなばの風の秋の夕ぐれ

めでたし、詞めでたし、澤と稲ばとは、春と秋との田のさまにて、よくかなへり、三の句もは、今はたちてゆくともの意なり、風は、古哥に「秋風に初鴈がねぞ聞ゆなる「秋風にさそはれわたるなど有て、よせあり、はてにをもじをそへて心得べし、或抄に、たのむを、秋をわすれず來むことを頼むといふ義也といへれど、其意はなし、

百首ノ歌奉りし時

歸るかりいまはのこゝろありあけに月と花との名こそをしけれ

詞めでたし、此月花に、鴈の心をとゞめず、見すてゝゆかむは、鴈にめでられぬなれば、あたら月花の名をれぞと、月花のために、名をゝしみたるなり、今はといへるも、心といへるも、下句に正しくあたらず、心有明といへるも、しひたるいひかけなり、又三の句のにもじも、たゞよはしくきこゆ、又月には、有明といへるあへしらひあれども、花のあへしらひの詞のなきも、たらはぬここちす、ふるき抄に、月と花とを見すてゝゆく惡名をばいかゞせんと、鴈に教訓したる也といへるは、いみしきひがとなり、

守覺法親王ノ家ノ五十首ノ哥に　定家朝臣

霜まよふ空にしをれしかりがねの歸るつばさに春さめぞふる

めでたし、霜につばさしをれて來りし鴈の、今又春雨にしをれて歸るとなり、しをれしを、春雨の方へもひゞかせ、つばさを、上へもひゞかせ、又歸るといへるにて、上は、去年の秋來たりしこなること、おのづから聞えたり、かやうの所をよく心得ざれば、昔の歌の趣も見えがたく、みづからの歌も、よきはよみえがたきわざぞかし、

百首ノ歌奉りし時　攝政

さきはなる山のいはねにむす苔のそめぬみどりに春雨ぞふる

むす苔のと切て、そめぬ綠とつゞけて心得べし、むす苔のそめぬとつゞきては、そまぬといはではかなはず、そめぬは、春雨のそめぬなり、ときはも岩根も、そめぬ意をたすけたり、

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹　權中納言公經

高瀬さすむつだのよどの柳原みどりもふかくかすむ春かな

詞めでたし、淀の水の深きにむかへて、綠もふかく霞むとなり、下句、詞はめでたけれど、こゝろまぎらはしく聞ゆ、其故は、深く霞みて、柳の綠の色をへだつる意なるべきに、みどりも深くといへるは、霞む故に綠の深きと云やうに聞ゆればなり、或抄に、柳のみどりもふかく、霞も深きなりといへるは、さらに詞にかなはず、其うへ霞の深くは、いかでか綠の深きは見えん、

千五百番哥合に　藤原雅經

白雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞふく

めでたし、上句詞めでたし、青柳は、葛城の枕詞なるを、やがて其山に生立る柳に用ひたり、さて柳は、風のふくによりてなびくなるを、たしかにさはいはで、なびく青柳のとまづいひて、春風ぞ吹とゝぢめたるは、柳のなびくによりて、春風の吹が見ゆるさまにて、ゆるやかなる物也、或人、柳は山の上にある物にあらずと難じたれど、かの家隆朝臣の、末の松山波にはなるゝ横雲などをこそ、さもいはめ、山の上に柳をよめるばかりのとは、此集の比にとりては、なでふ事かあらん、

有家朝臣

青柳の糸に玉ぬくしら露のしらずいくよの春かへぬらん

詞めでたし、へぬらんは、糸の縁也、拾遺元輔「青柳の綠の糸をくりかへしいくらばかりの春をへぬらむ、と云哥にとなる所も見えず、玉も用なく聞ゆ、

宮内卿

うすくこき野べのみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむら消

四の句めづらかなり、よくとゝのへる歌也、跡とは、雪の消果たる後をいへるにて、雪の縁の詞にてもある也、雪は殘らず消果ての後迄、始めの村消の跡の見ゆるよしなり、

西　行

よし野山さくらが枝に雪ちりて花おそげなる春にもある哉

ちりてさいへる詞、花のかたへひゞけり、下句、此集のころにては、此法師のふりなり、

攝政家百首歌合に野遊　家隆朝臣

思ふどちそこともしらず行くれぬ花の宿かせ野べのうぐひす

下句めでたし、本哥「春の山べにうちむれて云々、「くれなばなげの花の陰かは、六百番歌合判に、素性が哥をとり過たるやうにいへれど、さはあらず、

百首歌奉りし時　式子内親王

今さくらさきぬと見えてうすぐもり春に霞めるよのけしき哉

初句いうならず、今といへるは、心をいれてよみ玉へる詞とは聞ゆれど、さしもあらず、此ことばなくても有べきさまなればなり、或抄に、今といふにて、いつか〳〵と待たる心ありといへれど、其意はえらなき歌なり、二の句は、世のけしきのさやうに見ゆるたり、四の句は、春のけしきにかすめるをいふ、されど此にもじ、

少しいやしく聞ゆ、又近き世に、秋に見しなど、多くよむにもじは、殊にいやしき詞なり、心すべし、こは事のついでにいふなり、

花のうた　西　行

芳野山こぞのしをりの道かへてまだみぬかたの花をたづねむ

よくとゝのへり

和哥所にて春のうた　寂　蓮

かづらきや高間のさくら咲にけり立田のおくにかゝるしら雲

かの西行が「高ねのみ雪とけにけりと同じさま也、高間のさくら立田のおく、二ッの内に一ッは、山といふ事あらまほし、

百首歌奉りし時　定家朝臣

しら雲の春はかさねて立田山をぐらのみねに花にほふらし

めでたし、詞めでたし、本哥、万葉長哥に、「白雲の立田の山の瀧のうへのをぐらの峯に咲をゝる櫻の花は云々とあるを、春はかさねてとゝりなし玉へるめでたし、結句、咲ぬらしとあるべきを、にほふらしとあるは、詞はいさゝかまさりたれど、此哥にては、にほふは似つかはしからず、次なる家衡朝臣のうたもおなじ、

和歌所哥合に羈旅花　雅　經

岩根ふみかさなる山を分すてゝ花もいくへの跡のしら雲

いとめでたし、詞めでたし、下句、いひしらずおもしろし、伊勢

物語に「岩ねふみかさなる山にあらねども云々、

五十首歌たてまつりしとき

尋ね來て花にくらせる木の間よりまつとしもなき山のはの月

二の句、花を見てくらせるにはあらず、尋ねきて、いまだ見ずして、暮ぬるよしなり、花にといへるは、花をたづねての意也、まつとしもなきといへるにて、花は、まて共いまだえみぬ心をあらはせり、もし既に見たるにしては、尋ね來てといへるも詮なく、四の句のかけ合も力なし、新拾遺集俊成卿の哥にも、「山櫻咲やらぬまはくれどにまたでぞ見ける春のよの月、木の間、花のかたへもひゞけり　下句、おもひかけざりし月を見て、それもおもしろき意にても有べけれど、四の句のさま、さは聞えず、花をこそ見むと思ふに、まちもせぬ月の出たるよと思ひて、月をばめでぬかたに聞えていかゞ、右の俊成卿の哥は、四の句のさま、月をもめづるかたに聞えたり、よく味ふべし、

故郷花　慈圓大僧正

ちりちらず人も尋ねぬふるさとの露けき花に春風ぞふく

めでたし、下句詞めでたし、露けき花と云に、見るあるじのさびしく、あはれなる心をもたせたり、一首の意は、春風の吹て、庭の花のちるを、たゞひとりながめて、よめるにて、あはれ故郷ならぬ所の花ならば、ちるやちらずやと、人もたづね來て、かやうにちるを見ば、をしむ人もあまたあるべきものを、とおもへるさまなり、

千五百番哥合に　通具卿

いそのかみふるのゝさくらたれうゑて春は忘れぬかたみなるらん

「植けん時をしる人ぞなきとあるを、誰うゑてとゝれり、春はと切て、心得べし、忘れぬは、植けむ古へを忘れぬなり、これらは、古今集の中の、よき哥のたぐひ也、

有家朝臣

朝日かげにほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞ見る

めでたし、上句詞めでたし、櫻花の、朝日にあたれる色は、こよなくまさりて、まことに雪のごと見ゆる物也、朝日影匂へる山と云は、万葉の詞にて、それは朝日影の匂へる山なるを、此哥にては、朝日影に山の櫻の匂へるなり、つれなくと云詞、時にかなひていたづらならざるうへに、朝日影にもよせ有、

春歌下

釋阿和哥所にて、九十賀し侍りしをりの屏風に、山に櫻さきたる所を、　太上天皇御製

櫻さく遠山どりのしだりをのながながし日もあかぬ色哉

さくらの咲たる遠山を、やがて山鳥の尾への玉ひかけて、長々しの序とし玉へり、下御句、俊成卿の命長きなおぼしめしたるなりといへり、さもあるべし、

千五百番哥合に　　俊成卿

いくさせの春に心をつくし來ぬあはれさおもへみよしのゝ花

二の句、春には、春の花になり、きぬは、來ぬるぞのこゝろなり、結句、いうならず、

百首歌に　　式子内親王

はかなくて過にしかたをかぞふれば花に物思ふ年（春イ）ぞへにける

すべて、はかなく過といふは、何の間もなく過るとなり、此哥にては、なすともなくて、いたづらに過し意をかね玉へりと見ゆ、一首の意は、なせるともなくて、はかなく過來つる、其間の事どもを、かぞへて見れば、たゞ花に物思へる年を多くへたるばかりぞとなり、又は春毎に、たゞ花にのみ物思ひて、いたづらに早く過來し、年の數をかぞへてみれば、花に物思ふとも、多くの年をへたるよといへるにも有べし、

千五百番歌合に　　俊成卿女

風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕のはるのよの夢

詞いさめでたし、袖のゝのは、俗言にがといふ意にて、餘の五ッののもじさ異なり、一首の意は、風の吹通ふまくらの、春の夜の夢のねざめの袖が、花の香にかをるよといふ意なるを、詞を下上に、いりまじへたるにて、詞のいひしらずめでたき哥なり、三の句を、梅がゝにさして、すべてのさま梅の趣なり、櫻にはうさし、

守覺法親王家五十首哥に　　家隆朝臣

此ほごはしるもしらぬも玉ぼこの行かふ袖は花の香ぞする

初句、此ごろはにてもあらましな、一三四二五と、句を次第して見べし、三四の句、玉ぼこの道ゆきかふ人の袖はといふべきを、あまりにつゞまり過て、言たらはず、のもじは、殊に心ゆかずなむ、

攝政家五首歌に　　俊成卿

又やみんかたのゝみのゝさくらがり花の雪ちる春のあけぼの

めでたし、詞めでたし、狩は、雪のちる比する物なるを、その狩をさくらがりにいひなし、其雪な花の雪にいひなせる、いさおもしろし、

百首哥めしける時春の哥　　具親

時しもあれたのむのかりの別さへ花ちる比のみよしのゝ里

めでたし、詞めでたし、武藏のみよしのと、大和のみよし野と、一ッになれるは、とさらにかくよみなせるなり、あやまりてまがひたるにはあらず、これも此集のころの一ッのおもむきなり、

題しらず　西行

ながむとて花にもいたくなれぬれば散わかれ社かなしかりけれ

ながむとは、心ゆかず、古歌に「なるゝを人はいとふべらなりとあるによりて、花にもといへるなり、

越前

山ざとの庭よりほかの道も哉花ちりぬやと人もこそとへ

初句のもじいとわろし、にとあるべき所也、もしはにを寫し誤れるにはあらざるか、散しきたる花を、ふまむとのをしきよし、詞にはあらはさずして、さだかにしか聞えたるは、めでたし、上句を或抄に、山ざとにはあまたの道のなきよしなりといへるは、無用の註なり、

五十首哥奉りし中に湖上花　宮内卿

花さそふひらの山風ふきにけりこぎゆく舟の跡見ゆるまで

めでたし、詞めでたし、跡見ゆるまで吹にけりといふにはあらず、此けりは、おしはかりて定めたるけりにて、下句は、船の跡の見ゆるまでに、花の散うきたるはといふ意を、いひのこしたるなり、古歌に、「こぎゆく船の跡なきがごとゝありて、船の跡は見えぬ物なるに、みゆる迄といへるは、ちりうきたる花の多きほどを、甚しくいへるなり、契沖が、詞いかめしくして、女の身におはずや、すべて此人の哥は、をのこにかへまほしきが多き也といへるは、心得ず、女の哥ならんからに、つよきをきらふべきにあらず、小町が哥を、つよからぬは、女の哥なればなるべしといへるも、つよからぬをゆるしたるに社あれ、女の哥は、つよからぬをよしといへるにはあらざるをや、

關路花

あふ坂や梢の花をふくからにあらしぞ霞む關の杉村

下句詞めでたし、逢坂の關の杉村ならで、こ所のこ木にても、同じことなれば、題の關の詮なし、梢のといへるは、四の句のために、高き所をいはんとてなれど、杉むらとゝぢめたれば、杉の梢の花と聞えていかゞ、

最勝四天王院ノ障子によしの山かきたる所　太上天皇御製

みよしのゝ高ねのさくら散にけりあらしもしろき春の曙

おしはかりてさだめたるなりけり、

千五百番ノ哥合に　定家朝臣

さくら色の庭の春風あともなしとはゞぞ人の雪とだに見む

めでたし、詞めでたし、初二句は、嵐もしろし、嵐ぞかすむ、などのたぐひにて、又一きはめづらかなり、梢より花をさそふ春風

は、櫻色に見ゆるをいへり、さて上句は、花は残りなく、庭にちりはてたるさまなり、跡は雪の縁の詞、四の句ぞもじ、力を入られたり、ばぞのてにをは、めでたし、下句本歌、「明日は雪とぞふりなまし云々、

一年大内の花見にまかりて侍しに、散たる花を、硯のふたにいれて、攝政の許につかはし侍し　太上天皇御製

けふだにも庭をさかりとうつる花消ずはありとも雪かとも見よ

初ノ御句は、結ノ御句の見よへかゝれり、うつるはちれる也、四の御句、本哥と詞は全く同じけれど、意は異なり、もゝじは、たゞ輕く添たるにて、よのつねのともの意にはあらず、たゞとゝいふに同じ、下ノ御句の意は、花はちりて、雪となりたれども、消ずにはありと思ひて、せめて今日、雪かとなりとも見よなり、或抄に、四の御句を心得かねて、消る社雪ならめ、花なれば、よし消ずともと注したるは、さらに聞えぬと也、

御かへし　攝政

さそはれぬ人のためとや残りけんあすよりさきの花の白雪

四の句は、本哥には、「明日は雪とぞふりなましとあるを、これは今日既に雪とふりたれば、明日は又此雪もきえぬべきに、明日きえぬさきのけふのといふ意か、又は雪とはふりたれ共、本哥に、明日は雪とある、その明日よりさきなれば、今日は猶雪とは見ず、花と見るといふ意か、いづれにしても、おもしろくとりなし玉へる詞なり、

五十首歌奉りし時　家隆朝臣

さくら花夢かうつゝかしら雲のたえてつれなき峯の春風

めでたし、本哥「云々しら雲のたえてつれなき君が心か、たえては、上よりは、白雲の絶たる意につゞけきて、たえてつれなきは、俗言に言語道斷のつれなき風ぞ、といふ意にて、つれなく花をちらしたることを、深く恨みたる也、二の句、一夜のほどなどに、俄に散たるさまなり、さて又、しらずをしら雲へいひかけ、又峯の花は、白雲と見ゆる物なれば、白雲の絶ろは、散たるよし也、されば白雲の絶てといへるは、本歌の詞なるを、本哥になき趣を、かくさま〴〵こめられたるほど、いとたくみなり、下句を或抄に、風のつれなく残りたると注したるは、たえてといふ言にかなはず、

題しらず　俊成卿女

うらみずやうきよを花のいとひつゝさそふ風あらばと思ひけるをば

めでたし、本哥、「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水

あらばいなんとぞおもふ、初句やとよとのおとりまさりは、よの方は、今少したしかに聞ゆれ共、うきよのよと重(カサ)なりて、しらべおとれり、やは疑ひのやに、いさゝかまぎるゝかたはあれ共、疑ひのやにはあらざるとは、一首の趣にてよく聞えたり、此やは、即よの意にて、此歌にては、よといはんよりは、しらべまされり、すべて此集の比の哥は、句のしらべ詞のしらべに、くはしく心をつけて、めでたくいひなしたる物なれば、其心して、一もじといへ共、なほざりには見べからず、二三の句は、本歌のごとく、世をうき物に思ふ我心を以て、花の心をも思ひやりて、早く散行をも、うき世をいとひての故と、おもひなだめて、恨みざる、一首の趣をあらはしたり、四の句、本歌の水を風にかへたる、おもしろし、さて此句、九(コヽノ)もじによむはわろし、とは下なる句へつけり、此例多し、結句、をばといへる意は、花の早くちることは、大かたはうけれ共、うき世をいとふ所は、ことわりなれば、それをば恨みずといへるなり、大かた此哥、ほかにはたぐひなき、一ッのさまにて、女の哥には、殊にあはれにおもしろきふりなり、四の句結句ともに、もじの餘りたるも、にほひとなれり、初句を或抄に、恨みずやはあらん、恨むべしとの意也といへるは、むげに哥見しらぬいひど也、

千五百番歌合に　　左近中将良平

ちる花の忘れがたみの峯の雲そをだにのこせ春の山風

本哥、「そをだに後の忘れがたみに、歌ざまはよろしけれど本歌のとりさまは、詮なきがごとし、

落花　　雅経

花さそふなごりを雲に吹とめてしばしはにほへ春の山風

なごりは香をいふ、下ににほへとあるにて知べし、雲は花にまがひて見ゆる物なる故に、雲にとはいへるなり、

残春　　摂政

よし野山花のふる郷あとたえてむなしき枝に春風ぞ吹

花の故郷とは、花の散たる跡をいひて、吉野の故郷をかねたり、跡絶ては、花の跡もなくなれるにて、それを花の散たる故に、見にこし人の跡も絶たることに、かね用ひたるなり、春風ぞふくとは、とひくる人は絶て、たゞはるかぜばかり、吹よる意なり、

百首歌の中に　　式子内親王

花はちりその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる

「くれがたき夏の日くらしながむればそのことゝなく物ぞかなしき、こゝの二三の句は、此三四の句により玉へる也、初句、花ちりてといはずして、花はとあるはもじに、あはれなる所あり、

二の句は、花の有しほどは、花の色をながめしに、今は何の色をながむとはなしになり、四の句、空は、ながむといふによせ有、結句、さびしきさまにて、花を思ふ情深し、

千五百番歌合に　寂蓮

おもひたつ鳥はふるすもたのむらんなれぬる花の跡のゆふぐれ

二の句もゝじは、鳥は古巣にかへる頼みもあらんをといふ意也、三の句の下に、をもじを添て心得べし、下句は、なれたる花の散にし跡の、夕暮のさびしさは、何をたのみにして、なぐさめんかたもなしといふ意を、いひのこしたるなり、

散にけりあはれうらみのたれなれば花の跡とふはるの山風

初句、けりといへる詞かなはず、ちりにしもなどあらば、事もなからんを、しひていきほひあらせんとてや、かくはいへりけん、一首の意、花をかくちらしたるものは、誰なるぞ、おのれみづからちらしたるにはあらずや、然れば恨みは、おのれにある物を、花の散たるを恨みがほに、跡の梢をとふはいかにと、風をとがめたる也、二の句より下はめでたし、

百首哥奉りし時　攝政

はつせ山うつろふ花に春くれてまがひし雲ぞ峯にのこれる　家隆朝臣

よし野川岸の山吹さきにけりみねのさくらはちりはてぬらん　俊成卿

駒とめて猶水かはん山ぶきの花の露そふ井手の玉川

めでたし、下句詞いとめでたし、猶といへる心をつくべし、

五十首哥奉りし時　寂蓮

暮てゆく春のみなとはしらねども霞におつる宇治のしば船

春のみなとゝは、春のゆきとまる所をいふ、「みなとや秋のとまりなるらむより出たり、船に縁あることなり、下句は、川瀬も何も見えず、立こめたる霞の中へ、くだりゆく柴舟の、ゆくへもみえぬを、くれてゆく春によそへて、ながめやりたる意なるべし、しらねどもといへるは、しらねども、まづこれをそれによそへて見るといふ意なるべし、或抄に、春の湊はしらねども、柴舟はしりたるやらん、霞におちゆくよと也といへるは、いかゞ也、もし其意ならば、三の句しられぬを、などいはではかなはず、

題しらず　俊成卿女

いそのかみふるのわさ田をうちかへし恨みかねたるはるのくれ哉

うちかへしは、かへすがへすの意なり、初二句は序にて、さて田をうちかへすは、春のくれによせ有、恨みかねたるとは、恨みてもかひなきをいふ、後撰戀一、「うちかへし君ぞ戀しき石上ふるの

わさだのおもひいでつゝ、

山家暮春　　宮内卿

柴の戸をさすや日影のなごりなく春くれかゝる山のはのくも

初句、にといはでをといへるは、夕暮なれば、戸をさすといふをもかねたるべし、くれかゝるなどいふかゝるは、すこしいやしきに近き詞なれども、これは雲の縁にいひかけたれば、さもきこえず、山ノ端に雲あれば、入日のなごりは、いよ〳〵ある物なるを、名残なくといへるは、雲にうつりたりしなごりも、なくなるまで、くれかゝりたるをいへる也、雲にへだてゝ、名残もなしといふにはあらず、

百首哥奉りし時　　攝政

あすよりはしがのはなぞの稀にだにたれかはとはんはるのふるさと

花園といふに、花の有しほどは、まれにも人のとひしこゝろをふくめたり、春のふるさとゝは、春の過いにし跡をいひて、滋賀のふるさとをかねたり、吉野に花の故郷といふに同じ、

夏歌

更衣　　慈圓大僧正

散はてゝ花のかげなき木ノ本にたつともやすきなつ衣かな

めでたし、本歌「けふのみと春を思はぬときだにもたつことやすき花の陰かは、三の句、木ノ本はといふべきを、にといへるは、夏衣をたつ方をむねとせればなり、はといひては、衣のかたにうとし、四の句は、本歌の意とむかへて、今はたつこともやすきなり、さて又月日のはやくうつりて、夏になれる意をも、かねたるべし、本歌にては、たゞ花の陰の、立さりがたき意のみなるを、かくとりなして、三ッの意をかねたるは、此集のころのたくみのふかきなり、

夏のはじめのうた　　俊成卿女

をりふしもうつればかへつ世の中の人のこゝろのはなぞめのそで

めでたし、本歌「うつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける、「世中の人の心は花染の云々、初二句は、人の心のかはりやすきとは、男女の中のみならず、をりふしのうつるにも、うつりかはるよといへるにて、花染衣をすてゝ、夏衣になれるをいへる也、

齋院に侍ける時神だちにて　　式子内親王

忘れめやあふひを草に引むすびかりねの野べの露のあけぼの

草には、草枕に也、三の句、引むすぶと有けんを、ふをひにうつし誤れるか、又はむすぶといひては、宵のほどの事と聞えて、曙にはいかゞとおぼして、本よりむすびとよみ玉へるか、ひにて

は、詞のとゝのはぬ哥也、もしむすびといはゞ、むすびしと、しもじあるか、或はかりねせし野べのといはでは、とゝのはず、

最勝四天王院ノ障子にあさかの沼かきたる所　　雅　經

野べはいまだ淺かの沼にかるくさのかつ見るまゝにしげるころかな

野べの草はまだ淺きに、此沼のかつみは、見るがうちにしげるとよめるなり、此趣いかゞ、其故は、野の草のまだ淺きに、かつみのみしげらんと、よしなければなり、もしかつみは殊にはやくしげるよしあらばこそ、さもいはめ、又野べの草は、まだ淺きが、見るがうちにしげると、野の草のしげるをよめるにて、二三の句は、たゞ淺といひ、かつみるといはん料のみともいはんか、さては淺かの沼の題にかなはず、

入道前關白右大臣に侍ける時百首哥に郭公　　俊　成　卿

むかしおもふ草の庵のよるの雨になみだなそへそ山ほとゝぎす

めでたし、上句詞めでたし、初句は、世に在し昔をおもふ也、二三の句は、白樂天が詩の句によれり、よるの雨に涙なそへそ、面白し、此歌、ふるき注共、皆ひがことなり、

雨そゝく花たちばなに風すぎて山ほとゝぎす雲になくなり

結句、雲は雨によせはあれども、なくてあらまほし、すべてこの哥、雨風雲おの／＼はなれて、くだ／＼し、

百首哥奉りし時夏歌の中に　　民部卿範光

時鳥なほ一こゑはおもひいでよおいそのもりの夜はのむかしを

後拾遺に、大江公資、「東路の思ひでにせん時鳥おいその杜のよはの一聲、とあるによれり、よはに一聲聞つとよめる、其昔を思ひ出て、猶今も一聲なけと也、三の句も、かの哥の詞によれり、平家物語に、此哥のこと見えたり、

千五百番哥合に　　攝　政

有明のつれなく見えし月はいでぬ山ほとゝぎすまつ夜ながらに

初ノ二句は、古哥の詞によりて、見えしは、此哥にては、月の見えたるには非ず、出やらぬ氣色の、つれなく見えし也、有明の月に、つれなしと云は、常は、よの明ても、つれなく殘れるをよむを、是は出やらぬ方にいひなして、時鳥のまてど鳴ぬ方へひゞかせたり、結句、ながらには、時鳥はいまだなかで、まつよのままなるに、といふ意なり、

後德大寺左大臣家十首の哥に　　俊　成　卿

我こゝろいかにせよとてほとゝぎす雲間の月のかげになくらん

哥のさま、西行めきたり、初二句の意のせちなるに合せては、下

はさしもあらず、上下よくかけあへりとも聞えず、又月にとあらまほしきを、月の影にもわろし、「よはの雲間の月に、などあらばや、初二句を古き抄に、面白き方に注せるは、ひがごと也、あはれにたへざる意に註あれ、

杜間郭公　　藤原保季朝臣

過にけりしのだの杜のほとゝぎすたえぬ雫を袖にのこして

下句詞めでたし、絶ぬ雫、しのだの杜に似つかはし、

題しらず　　家隆朝臣

いかにせんこぬよあまたのほとゝぎすまたじと思へば村雨のそら

いとめでたし、詞めでたし、本哥「たのめつゝこぬよあまたになりぬればまたじとおもふぞまつにまされる、ほとゝぎすには、來ぬ夜は、すこしいかゞなるやうなれども、これは本哥の詞によりたれば、妨なし、此集のころ、いかにせんとおけるうた、いと多き、下にかなはざるが多きを、此哥などは、此詞いとよくかなひて聞ゆ、建仁二年水無瀬殿哥合に、寄風戀雅經「今はたゞこぬ夜あまたのさよふけてまたじと思ふに松風の聲、とあるは、よく似て、いたくおとれり、

百首歌奉りし時　　式子内親王

聲はして雲路にむせぶほとゝぎすなみだやそゝぐよひの村雨

本歌「こゑはしてなみだはみえぬほとゝぎす云々、このうたにては、初句のはもじは、こゝろなし、たゞ本哥の詞によれるなり、雲路、むら雨によせあり、むせぶは、なみだのむせぶにて、むせぶほとゝぎすのなみだといふつゞきなり、一首の意は、本哥には、なみだは見えぬとあれ共、此むら雨は、其涙のそゝぐにやあらんと也、

千五百番哥合に　　權中納言公經

ほとゝぎす猶うとまれぬ心哉ながなくさとのよその夕暮

本哥「ほとゝぎすながなく里のあまたあれば云々、本歌の猶うとまれぬのぬは、いはゆる畢ぬなるを、此哥にては、不の意に用ひかへたり、下句は、ながなくさとのあまた有て、よそになけどもの意なり、

題しらず　　西行

きかずともこゝをせにせんほとゝぎす山田のはらの杉のむら立

二の句せは、戀しきせうれしきせなどのせにて、こゝを聞べき所にせんといふ意也、詮也といふは誤なり、俗言にこゝをせんどゝいふも、詮にはあらず、せにとゝいふを、音便にせんどゝいふ也、

郭公ふかき峯より出にけり外山のすそに聲のおちくる

けりは、おしはかりたるけり也、深き峯よりといへる、何の用ぞや、峯よりこは、猶いひもすべきを、深きとさへいへる、淺き峯より出たる時鳥は、聲のおちこぬものにや、俊成卿のいたくほめられたるは心得ず、

山家曉郭公　後德大寺左大臣

なざゝふくしづのまろやのかりの戸を明がたになくほとゝぎす哉

詞めでたし、させるふしもなきうたなり、

五首ノ歌人々によませ侍ける時夏のうた　攝政

うちしめりあやめぞかをる時鳥なくやさ月のあめの夕暮

すべて物のにほひは、しめればまさるものなり、

述懷百首に　俊成卿

今日はまたあやめのねさへかけそへてみだれぞまさる袖の白玉

二の句ねは、根に涙をかねたり、涙をねさいふ也、白玉は涙にて、藥玉をかねたり、けふは父といひ、そへてといひ、まさるといへるにて、常に涙のかゝることしられたり、よくとゝのひたる歌也、

釋阿に九十ノ賀たまはせける時の屏風に五月雨

小山田に引しめなはのうちはへてくちやしぬらん五月雨の比

うちはへては、ひたすらになどいはむが如し、それをしめなは引はへたるよりいひかけたるなり、

百首ノ哥よませ侍けるに　入道前關白太政大臣

五月雨はおうの河原のまこも草からでやなみの下にくちなん

おうの河原とは、万葉三に、飫宇ノ海の河原の千鳥云々、とある所をよみ玉へるなるべし、出雲ノ國なり、

五月雨　定家朝臣

玉ぼこの道ゆき人のとつてもたえてほどふるさみだれの空

上句古歌をとられたれど、何の詮も見えず、さみだれに似つかはしからず聞ゆ、

五十首ノ哥奉りし時

五月雨の月はつれなきみ山よりひとりもいづるほとゝぎす哉

大神宮に奉り給ひし夏ノ哥の中に　太上天皇御製

ほとゝぎす雲井のよそに過ぬなりはれぬ思ひの五月雨の比

本哥「秋ぎりのともに立出てわかれなばはれぬおもひに戀やわたらむ、四の御句は、五月雨のはれぬをかねて、本哥のこひやわたらんの意をもたせて、よそに過ゆきし時鳥を、こひやわたらむとなり、

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　俊　成　卿

たれかまた花たちばなに思ひ出む我も昔の人となりなば

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　通　具　卿

行末をたれしのべとて夕かぜに契りかおかんやどのたちばな

行末は、わがなき跡なり、にといふべき所なれども、三の句のはてのにと重なる故に、をといへり、をのときは、ちぎりおかんへかゝるなり、四の句かもじは、二の句のとての下にある意なり、然れ共そこには置がたき故に、下へおけるにて、こゝろよからねども、ふるくも此例あることなり、一首の意は、我なくなりたらん後、たれ花たち花のにほひに、我を忍べとてかは、今夕風に契りおかむ、しのぶべき人もあるまじき我身なれば、夕かぜに契りおくべきよしもなしとなり、又は、上句を三二一と次第して、夕風のにほはん時、たれにしのべとてか、橘に契りおかむといへるやうにも聞ゆれど、さにはあらじ、

百首ノ歌奉りし時夏歌　　　　　　　　式子内親王

かへりこぬ昔を今とおもひねの夢のまくらににほふたち花

めでたし、下句詞めでたし、二の句は、古哥の詞二句を一句につづめてとれるにて、上句、昔を今になすよしもがなと思ひてねたるよしなり、ともじにてさやうに聞ゆるなり、古哥をかやうにとり用るは、此集のころのはたらきなり、

五十首ノ歌奉りし時　　　　　　　　　慈圓大僧正

五月やみみじかき夜はのうたゝねに花立ばなの袖に涼しき

たち花のにほひをさそひきて、袖にすゞしく吹風の、心よきまゝに、夜のみじかきを、あかず思へるよしなり、

だいしらず　　　　　　　　　　　　　俊成卿女

たち花の匂ふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香ぞする

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　家　隆　朝　臣

ことしより花さきそむる立花のいかで昔の香にゝほふらん

守覺法親王ノ家ノ五十首ノ歌に　　　　定　家　朝　臣

夕ぐれはいづれの雲のなごりとて花たちばなに風のふくらむ

二三の句は後撰に、「故郷に君はいづらとまちとはゞいづれの空の霞といはまし、又源氏物語夕貝卷に、「見し人の煙を雲とながむれば、夕の空もむつましきかな、又葵卷に、かくれ玉ひし葵上の事を、雨となり雲とやなりにけんといひ、其時の哥にも、「雨となりしぐるゝ空のうき雲をいづれのかたとわきてながめむなどあるどく、なくなりし人のなれる煙の、立のぼりて雲となれるとに、朝雲暮雨の意をもかねていへるなり、されぱいづれの雲とは、昔のいづれの人のなれる雲といふ意なり、さて風は雲に縁ある物

なる故に、その雲の名殘とはいへる也、下句は、詞を下上にして、風の花たちばなに吹らむといふ意也、一首の意は、此夕ぐれの風は、昔のいづれの人のなれる雲の名殘にてか、花たち花には吹らむとなり、たちばなには、むかしのよをよむならひなればぞ、

攝政ノ家ノ百首ノ歌合に鵜河　寂蓮

うかひぶね高瀬さしこすほどなれやむすぼゝれゆくかゞり火の影

高瀬さしこすほどは、船のゆらるゝ故に、かゞりの影もしづかならず、むすぼゝれてみゆる也、四の句ゆくは、むすぼゝれて川をくだり行也、やうやくにむすぼゝるゝをいふにはあらず、

千五百番ノ歌合に　俊成卿

大井川かゞりさしゆくうかひ舟いくせに夏の夜をあかすらむ

郭公の鳴一聲に明といふばかりみじかき夏のよを、鵜かひ船は、おほくの瀬々を經てあかすよしなり、

定家朝臣

久かたの中なる川のうかひぶねいかにちぎりてやみをまつらん

一二の句は、「久かたの中におひたる里なれば云々の意にて、桂川なり、此川は、月の中なる川にて、その光をのみ賴むと、本歌によめるに、うかひぶねは、いかなる契にて、闇を待てかふぞと也、四の句は、俗にいかなる因緣にてといふ意なり、

百首哥奉りし時　攝政

いさり火のむかしの光ほの見えてあしやの里にとぶほたる哉

初二句は「はるゝ夜の星か河べの螢かも云々、とよみたりし昔のひかりなり、一首の意は、あしやの里にとぶ螢の影の、かのむかしのひかりに思ひよそへらるゝよしなり、

式子內親王

まぢちかき竹の葉すさぶ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢

朗詠に、風生スルニ竹夜窓間ニ臥ス、初句うたゝねによし有、二の句すさぶといふ詞おもしろし、ひたすら吹にもあらず、をり〳〵そよめくさまにて、夏のよによくかなへり、よのつねならば、そよぐとよむべきを、かくあるにて、殊にけしきあり、一言といへども、なほざりにはよむべからず、心を用ふべきわざなり、四の句はさらでだに夏の夜にてみじかき夢なるにいとゞなり、

五十首ノ歌奉りし時　慈圓大僧正

結ぶ手に影みだれゆく山の井のあかでも月のかたぶきにけり

本哥「むすぶ手の雫にゝごる山の井の云々、山の井を結ぶに夏の意あり、手してむすべば、水の動きて、うつれる月の影のみだるる故に、夏の夜のみじかきうへに、いとゞしづかに見る程もなく、

あかでかたぶくとなり、

最勝四天王院ノ障子に淸見潟かきたる所　通光卿

淸見がた月はつれなき天の戸をまたでもしらむ波のうへ哉

二の句は、つれなく殘りて、いまだ入らぬをいふ、三の句、天は結句の浪のうへにむかへていへり、戸は、所からおのづから關の戸にも緣あり、をは、なる物をの意とも聞え、又をまたでとつゞきても聞ゆ、下句は、月の入るをまたで、浪ははやしらみて、夜の明るをいひて、夏の夜のあけやすきさま也、さて四の句、戸の緣に明るといふべきを、さはいはで、しらむといへるは、かへりて巧也、そは二の句も、月は入らぬといふ意なるを、さはいはず、こゝも明るといふ意なるを、ことさらにさはいはずして、共に戸の緣語の、入らぬ明るをば、詞に顯さずして、意にもたせたるものなり、そのうへ波のうへは、あくるといはんよりは、しらむといへるぞ、けしきもまされる、

家の百首ノ哥合に　攝政

かさねてもすゞしかりけり夏衣うすきたもとに宿る月かげ

初句は、衣に月影をかさぬる也、つねに衣を重ぬれば、暑きものなるに、これは月影なれば、すゞしとなり、

攝政の家にて、詩哥を合せけるに水邊自秋涼といふことを　有家朝臣

すゞしさは秋やかへりてはつせ川ふるかはのべの杉のしたかげ

めでたし、詞めでたし、題、自レ秋涼は、漢文にては、涼二于秋一と書くことなれども、歌の題にさやうにかゝむは、中々にいうならねば、かく書ならへり、三の句は、恥といひかけたり、二の句のやもじは、はつの下にある意にて、此ふる川のべの杉の下陰のすずしさには、秋も却てはぢやせんといふ意なり、題をめづらかによくよみかなへられたり、或抄に、秋やかへりてはてたるといひかけたり、あまりすゞしさに、秋もかへりて、冬になりたるかといへる也といへるは、いみしきひがとなり、秋やかへりてはてたるとは、いかなることぞや、又或説に、秋やかへりてふるさるゝと、四の句へいひかけたりといへるも、ひがとなり、さてはかへりてといふ詞聞えず、

題しらず　西行

道のべにし水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立とまりつれ

しばしとおもひてこそ立とまりたるを、あまりすゞしさに、えたちさらで、思はず時をうつしたるよと也、こそといひ、つれといへるにて、その意見えたり、

よられつる野もせの草のかげろひて涼しくくもる夕立の空
下句詞めでたし、初句は、夏の暑き日影に、草葉のよれしぼみたるをいふ、かげろひてといへるにて、はじめ日影の甚しかりしこしられ、すゞしく曇るといへるにて、おのづから、草葉のもとのごとくのびて、こゝちよげなるほど見えたり、

夏　月　　源三位頼政

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月哉
空さりげなく、おもしろし、夕立のしたる名殘も見えず、淸くすめるなり、

百首哥中に　　式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日ぐらしのこゑ
夕立の雲も、殘りなく晴て、とまらず、日もとまらずかたぶく、といふ趣意にやあらん、下句いやしきふり也、玉葉集風雅集に、此格おほし、此内親王の御哥に「霧のあなたに初雁の聲共有、又かの二ッの集の内に、「野べは霞に鶯の聲、「尾花が風に庭の月影、などいへるは、殊にいやし、これらのにもじは「かたぶく山に、「霧のあなたに、などあるにとは異にして、これもありかれもありと、物をたらべあぐる間におけるなれば、いと／＼いやしきなり、

百首歌奉りし時　　攝政

秋ちかきけしきの杜になくせみの涙の露や下葉そむらん
秋ちかきと、下葉そむと、かけ合たり、此涙を、紅涙也といへる說はわろし、よのつねの露も、木葉を染るはつねのこと也、

五十首哥奉りし時

ほたるとぶ野澤にしげるあしの根のよな／＼下にかよふ秋風
四の句、よは芦の緣、下にかよふは、根のかけ合なり、

百首哥の中に　　式子内親王

たそかれの軒端の荻にともすればほにいでぬ秋ぞ下にことゝふ

夏のうた　　慈圓大僧正

雲まよふゆふべに秋をこめながら風もほにいでぬ荻の上かな
こめながら、いうならぬ詞也、風もの上か下かに、まだといふ言あらまほし、

大神宮に奉り玉ひし夏の御哥の中に　　太上天皇御製

山ざとの峯のあま雲とだえしてゆふべすゞしき槇の下露

千五百番哥合に　　宮内卿

かたえさすをふのうらなし初秋になりもならずも風ぞ身にしむ
本哥「をふの浦にかたえさしおほひなる梨の云々、かた枝さしおほひたる陰なる故に、秋になりならざるの論なく、夏の程よりし

て、風のいとすゞしきよし也、さてかた枝さすとのみにては、すずしかるべきよしなけれども、本哥のさしおほひといふ詞を、つづめたるなれば、そのおほひといふに、すゞしきよしは有なり、

百首哥奉りし時　　慈圓大僧正

夏衣かたへすゞしくなりぬなり夜やふけぬらん行合の空

本歌、夏と秋と行かふそらの通路は云々、本哥とれる詮なし、ただ夏衣といへるのみ、かはれる、その夏衣も、縁の詞だになければ、いたづらごとなり、又なりぬなりといふは、他のうへを見聞ていふ詞にこそあれ、みづからのうへにはいかゞ、これはなりにけりとこそあるべけれ、すべて今の世の人は、かやうのけぢめをえわきまへざれば、たゞ同じことゝぞ思ふらん、此集の比はしも、猶かゝることむげに分れざるにはあらざりしかども、あながちに詞なだらかによまむと、つとめられたりしから、かゝるたがひめは、をり〳〵あるなり、

新古今集美濃の家つと二の巻

秋歌上

百首哥の中に　家隆朝臣

きのふだにとはんと思ひし津の國の生田の杜に秋は來にけり

本歌「君すまばとはましものを云々、何故にきのふだにとはんとおもひしにか、こゝろ得ず、

最勝四天王院の障子に高砂かきたる所　秀能

吹風の色こそ見えね高砂のをのへの松に秋は來にけり

上二句、「秋きぬとめにはさやかに見えねども意にて、風は色のみえぬ意と、松なる故に、秋の色の見えぬ意とをかねたり、

百首哥奉りし時　俊成卿

ふしみ山松のかげより見わたせばあくる田面に秋風ぞふく

守覺法親王家五十首歌に　家隆朝臣

明ぬるか衣手寒しすがはらやふしみの里の秋のはつ風

下句詞めでたし、伏見といふに、寝てある意をもたせたり、さて此哥、委くいはゞ、明ぬるかといへるかもじの疑ひは、夜の明て、秋の初風のふくかと、秋の初風へもかゝらでは、たしかならず、されどかやうの趣は、ほのかなるも哥也、

千五百番哥合に　攝政

深草の露のよすがを契にて里をばかれず秋は來にけり

めでたし、上句詞いとめでたし、初句、里の名に、深き草の意をかねたり、二の句よすがは、より所にて、露を秋のより所とする意なり、それを露のよすがといふは、たとへば、人の花をながむるを、花のながめといふたぐひ也、ちぎりは緣也、さて此二三の句は、露をよすがにてとか、ちぎりにてとかいひて、とたれるを、よすがとちぎりとをいへるは、詞の七五にたらざるが故也、四の句は「今ぞしるくるしき物と云々の哥の詞也

通具卿

哀れ又いかに忍ばん袖の露野原の風に秋は來にけり

又といへるに、もとより袖の露けき意をこめたり、忍ぶはたへ忍ぶなり、野原といふは、えんならざる詞なり、

具親

しき妙の枕のうへに過ぬなり露をたつぬる秋のはつ風

めでたし、下句詞いとめでたし、涙にぬれたる枕のあたりに、秋

の初風の吹來るを、露をたゝぬるといひなせる也、露は秋のよすがなれば、尋ね來るよし也、過ぬなりとは、たゞ吹來る意なり、すぎ去意にはあらざる故に、をといはずして、にといへり、されど此にもじ、過といふには、いさゝか似つかはしからず聞ゆ、此哥、ふるき抄に、いろ〳〵説あれど、みなひがことなり、

顯　　　　昭

水ぐきの岡のくず葉も色づきてけさうらがなし秋の初風

めでたし、詞もすべてめでたし、上句、万葉十に、「水ぐきの岡のくず葉も色付にけり、四の句は、後拾遺秋上、「まくず原玉まく葛のうら風のうらがなしかる秋はきにけり、うらは葛の縁の詞なり

越　　　　前

秋はたゞ心よりおく夕露を袖のほかこもおもひけるかな

四の句に袖といへるにて、二三の句の、心よりおく露は、涙なることをしらせ、三の句に露といへるにて、四の句の袖の外は、草葉の露なることをしらせたり、かやうの所はたらき也、心得おくべし、一首の意は、秋のほど、露のしげきは、たゞ物おもふ心よりおく、袖の涙なる物を、草葉のうへとのみ思ひけることよとなり、後撰雑に「我ならぬ草葉もものはおもひけり袖より外におけるしら露、

五十首哥奉りし時秋の哥　　　　雅　　　　經

きのふまでよそに忍びし下荻の末葉の露に秋風ぞふく

めでたし、下句詞めでたし、二三の句、よそへは聞えぬやうに、しのびて、下にのみ吹し荻の風なり、下句、末葉といひ露といへる、皆あらはれて吹く意にて、上句に、よそに忍びし下荻といへるに、よくかけ合たり、或説に、二の句を、荻のよそに吹しといへるは、下荻の云々にとある、詞のつゞきにかなはず、

だいしらず　　　　西　　　　行

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原

詞めでたし、秋風の立ぬるにつきて、宮城野を思ひやれるなり、結句を、初句の上へまはして、みやぎのゝはらは、あはれいかに云々、と心得べし、

崇德院に百首哥奉ける時　　　　俊　　成　　卿

みしぶつきうゑし山田にひたはへて又袖ぬらす秋はきにけり

本哥万葉八に、「衣手にみしぶつくまで植し田を引板我はへ守れるくるし、夏みしぶつきて、袖ぬれて植し田をもるとて、秋も又露に袖ぬらすよしなり、三の句は、たゞ庵にゐてもるさまをいへるのみ也、それにとりて、ひたはへは、袖ぬらすにはうとき詞なれども、本哥の詞なり、

荻の葉も契りありてや秋風の音づれそむるつまこなるらむ

詞めでたし、初句、もゝじは、はといふべきを、もといへるは、秋風の、荻の葉にまづおとづれそむるも、契有てのことにや、といふ意なればなり、ちぎりは、俗にいはゆる因緣也、つまとは、夫婦たがひにいふつまと、もと同じ意にて、あてどころとなりて、むかふ物をいふ、

だいしらず　七條院ノ權ノ大夫

秋來ぬと松吹風もしらせけりかならず荻の上葉ならねど

めでたし、下句詞めでたし、かならずは、俗にあながちといふ意なり、こは哥にはなさ〳〵よまぬ詞なるを、此哥にては、一首のまなことなりて、めでたし、

百首哥に　式子内親王

うたゝねの朝けの袖にかはるなりならす扇の秋のはつかぜ

七夕のうた　俊成卿

たなばたのとわたる船のかぢのはにいく秋かきつ露の玉づさ

初二句は、題の事を、すなはち序にしたる也、露の玉、梶の葉に緣あり、後拾遺に「天川とわたる船のかぢのはに云々、

守覺法親王家五十首哥に　顯昭

萩が花眞袖にかけて高圓の尾上の宮にひれふるやたれ

詞はよし、萩が花を袖にかけて、ひれふるといふこと、いと〳〵心得ず、万葉めきてよみたれど、すぢなきこと也、

千五百番歌合に　左近中將良平

夕されば玉ちるのべのをみなへし枕さだめぬ秋かぜぞふく

下句めでたし、露を玉ちるといへること、よせなく聞ゆ、

百首哥に　式子内親王

花すゝきまだ露ふかしほに出てながめじと思ふ秋のさかりを

めでたし、本哥拾遺戀「しのぶればくるしかりけりしのすゝき秋のさかりになりやしなまし、秋のさかりになりやしなましとは、穗にや出ましといふ意也、こゝの哥の意は、此すゝきを見れば、まだ露ふかく、物思はしげなるは、いかなることぞ、今は薄も、しのびて物思ふとはあらじ、皆穗に出たるべしと思はるゝ、秋のさかりなる物をと也、露ふかしといひ、ながむといへる、ともに忍びて物思ふ意也、本哥の初二句にて、然聞えたり、さて秋のさかりをといへる詞にて、その本歌をとれることをしらせたり、よく〳〵味ふべし、ふるき抄の說、みなひがことなり、

題しらず　慈圓大僧正

身にとまる思ひを荻の上葉にて此ごろかなし夕暮のそら

詞めでたし、まづ秋の夕暮は、荻の風の音を、かなしき物によみならへるを、此哥にては、その荻の風にはあらで、我身にとまれ

る秋の思ひが、荻の風の如くにて、夕暮にはかなしきと也、さて風ともいはず、秋ともいはざるは、ことさらにはぶきて、詞の外に思はせたるたくみ也、此人の哥、かやうなる趣多し、結句秋の夕暮とある本は、中々わろし、

百首哥に　　　攝政

荻の葉にふけばあらしの秋なるをまちけるよはのさをしかの聲

詞めでたし、秋なるをとは、秋の聲にてかなしき物を、といふこゝろなり、一首の意は、嵐は荻の葉にふけば、かなしき物を、又そのあらしのつてに、鹿の音を待けることよ、何しに待けむ、鹿の音も、きけば又いよ〳〵かなしさをそふるものをと也、秋なるをといひ、まちけるといふ、詞のいきほひをもて知るべし、古き抄の説ども、みなひがことなり、

おしなべて思ひしをのかず〳〵に猶色まさる秋のゆふぐれ

めでたし、おしなべては、一ッにおしくるめて也、かず〳〵には、數多くある物を一ッどに也、色はかろく見るべし、一首の意は、つねにはたゞ、かなしき事も、一ッにおしくるめておもふのみなりしに、秋の夕暮には、猶又その數々の思ひの、一ッどにかなしさのまさるとなり、

くれかゝるむなしき空の秋を見ておぼえずたまる袖の露哉

一二の句のつゞき、聞よからず、四の句もいうならず、すべてよくもあらぬうたなり、

家の百首の哥合に

物おもはでかゝる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮

上句、物思はぬ人の袖に、かやうに露のおく物かはといふ意也、ながむるも、物思ふと同じことにて、四の句は、物思ひけりなといふ意なり、すべて同じことを、二所にいはではかなはぬ時、一ッは詞をかへて、相照して、それと聞ゆるやうによむこと、一ッのならひ也、此類多し、心得おくべし、

をのこども、詩を作りて、哥に合せ侍りしに、山路秋行といふことを　　　慈圓大僧正

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空

いつよりの下に、かくといふ言を加へて心得べし、題の路ノ字行ノ字の意も、はたらかず、すべて趣のおかしからぬ哥也、

題しらず　　　寂蓮

さびしさはその色としもなかりけり槇たつ山の秋の夕暮

めでたし、

だいしらず　　　西行

こゝろなき身にもあはれはしられけり鴫たつ澤の秋の夕暮
めでたし、

西行法師すゝめける百首哥に　定家朝臣
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮
二三の句、明石ノ巻の詞によられたるなるべけれど、けりといへる事いかゞ、其故は、けりといひては、上句、さぞ花もみぢなど有て、おもしろかるべき所と思ひたるに、來て見れば、花紅葉もなく、何の見るべき物もなき所にて有けるよ、といふ意になればなり、そも／＼浦の苫屋の秋の夕へは、花も紅葉もなかるべきは、もとよりの事なれば、今さら、なかりけりと、歎ずべきにはあらざるをや、我ならば「見わたせば花ももみぢもなにはがたあしのまろやの秋の夕暮などぞよまゝしとぞ、ある人はいへる、

五十首哥奉りし時　雅經
たへてやは思ひありともいかゞせんむぐらの宿の秋の夕暮
初句詞たらで、とゝのはぬこゝちす、いかゞせんも、よくかなへりとも聞えず、意は、本哥にあたりて、たとひ思ひありとも、堪てやはすまるべきとなり、

秋の哥とて　宮内卿
思ふことさしてそれとはなき物を秋のゆふべを心にぞとふ
上下の句の間へ、かくかなしきは、いかなるとぞといふことを加へて聞べし、詞たらで、とゝのはぬ哥也、ともじを一ッ加ふれば、大かた聞ゆるなり、

鴨長明
秋風のいたりいたらぬ袖はあらじたゞ我からの露の夕暮
下句詞めでたし、古歌に「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ云云、いたりいたらぬといふ詞、袖には似つかはしからず、下句、我からの露とつゞけて心得べし、

式子内親王
それながら昔にもあらぬ秋風にいとゞながめをしづのをだまき
めでたし、我身も昔のわが身、秋風も昔の秋風のまゝながら、我身のうへの、昔のやうにもあらぬにつけて、秋風のかなしさも、昔にはまさりて、いとゞながめをすると也、結句は、「昔を今になすよしも哉の意をふくめたる詞なり、

千五百番哥合に　通具卿
深草のさとの月影さびしさもすみこしまゝの野べの秋風
めでたし、詞もめでたし、深草の里の月を、今きて見れば、昔住て見し時のまゝなるが、野べの秋風のさびしさも、又其時のまゝなるよと也、さびしさもといへる、もゝじにて、月の昔のまゝなるといふ意を聞せたる也、月影のさびしといふにはあらず、三

の句は下へつけて心得べし、

五十首歌奉りし時杜間月　　俊成卿女

大あらきの森の木間をもりかねて人たのめなる秋の夜の月

大あらきといふ名を、木ノ間のあらき意にとりてなり、

守覺法親王家五十首哥に　　家隆朝臣

有明の月まつ宿の袖のうへに人たのめなるよひのいなづま

攝政家百首哥合に　　有家朝臣

風わたる淺茅が末の露にだにやどりもはてぬよひのいなづま

やどりはつるは、露の消るまでやどるなり、

水無瀬にて十首哥奉りし時　　通光卿

むさし野やゆけどもくも秋のはてぞなきいかなる風の末に吹らん

ゆけどもくは、ゆけどもくく也、秋のはてなきとは、秋の旅のかなしさの、つきせぬ意にて、むさしのゝはてなきことをかねたり、下句は、猶行末も、いかにかなしからんといふ意なり、古き抄に、むさし野のおもしろきを賞したる意に注したるは、いみしきひがことなり、

百首哥奉りし時月　　慈圓大僧正

いつまでか涙くもらで月は見し秋まちえても秋ぞ戀しき

めでたし、結句、涙にくもらで見し、昔の秋ぞ戀しき也、又秋をまちえても、涙にくもりて、秋の月のやうにも見えぬ故に、秋のさやかなる影の戀しき、といへるやうにも聞ゆ、

式子内親王

ながめわびぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらん

めでたし、下句詞めでたし、本哥「いづくにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ、初句は、月をながめわびたる也、二三の句は、月を見れば、秋のかなしさのますにつきて、かやうに秋の月のすまぬ宿もがなと、ねがふ也、下句、しかれども、いづくにのがれても、秋ならぬ所はなく、いづこにもくく月はすみて、ながめわぶるにてやあらむと也、野にも山にもといふは、本哥のごとく、世中はいづこもくくといふ意、月すむといふは、秋のかなしくて、ながめわぶる意なるを、たがひに詞を相照して、初句へ、月すむといふことをひゞかせ、結句へ、ながめわぶといふとを、ひゞかせたる物なり、これ上手のしわざにて、一ツのたくみなり、其心を得て見ざれば、いたづきのかひなし、古き注ども、此意を得ざる故に、みなあやまれり、

題しらす　　從三位頼政

こよひたれすゞふく風を身にしめてよしのゝたけの月を見るらん

めでたし二三の句殊によろし、月をみてあはれなるまゝに、思ひ

やれるなり、四の句、與といふべきを、たけといへる、おもしろし、たけの月を見るは、おくなる事、おのづから聞ゆ、

和哥所の哥合に湖邊月　　家隆朝臣

にほの海や月の光のうつろへば波の花にも秋は見えけり

大歌「草も木も色かはれどもわたつみの波の花にぞ秋なかりける、

百首哥奉りし時秋のうた　　慈圓大僧正

ふけゆかばけぶりもあらじ塩がまのうらみなはてそ秋のよの月

だいしらず　　俊成卿女

ことわりの秋にはあへぬなみだ哉月のかつらもかはるひかりに

めでたし、下句詞もめでたし、本哥「ちはやぶる神のいがきに云云、「久かたの月のかつらも云々、ことわりの秋は、此二首の本歌のごとくなることわりの秋なり、あへぬは、えたへぬなり、下句は、秋の影の、つねとはかはりて、殊にさやかなる月を見るによりて、といふ意を表とせり、

家隆朝臣

ながめつゝ思ふもさびし久かたの月のみやこの明方のそら

月の都は、いはゆる月宮殿のことにて、それをやがて、月見る此都のことにかねてよめり、二の句、思ふは、此都にて、月宮殿をおもひやる也、結句も、此都の明がたのさびしきにつきて、かの月宮殿の明方のさびしさをも、思ひやる也、

五十首哥奉りし時月前草花　　攝政

故郷のもとあらの小萩咲しよりよな／＼庭の月ぞうつろふ

もとあらの小萩は、古今に、露をおもみとある故に、露といはで、露しげきことを思はせて、月ぞうつろふとはよめるなり、此哥、何のふしもなけれど、ふるき姿にて、殊勝なり、此殿の御哥、此たぐひ多し、今もふるきふりをよまむとならば、これらの哥にならふべきなり、

建仁元年三月哥合に山家秋月

時しもあれふるさと人は音もせでみ山の月に秋風ぞふく

めでたし、下句詞めでたし、時しもあれとは、時社(コソ)あらめ、月を見て、故郷人を戀しく思ふをりしも、といふこゝろなり、一首の意、山ざとにて月を見て、故郷人をおもふをりしも、故郷人は音づれもせで、秋風の音して、いよ／＼さびしさをそふとなり、ふるさと人を戀しく思ふといふことは、詞の外にそなはれり、其意を以て見ざれば、時しもあれといふこと、はたらかず、

八月十五夜和哥所哥合に深山月

深からぬ外山のいほの寐覺だにさぞな木ノ間の月はさびしき

だには、すらの意なり、さそなは、かくの如くぞといふ意也、一首は、外山の庵のねざめに、木ノ間の月を見て、さびしきにつきて、深山の月のさびしさを、おしはかりたるなり、されど深山月といふ題に、かくよみてはいかゞ、さぞなを、おしはかりたる詞として、下を深山の事ともすべけれども、さては上句よりのつゞきにかなはず、

月前松風　　寂蓮

月は猶もらぬ木間もすみよしの松をつくして秋風ぞ吹

めでたし、月の影はもらぬ松の木ノ間迄も、と〴〵く殘さず、秋風は吹渡ると也、松をつくして、おもしろし、

長明

ながむればちゞに物思ふ月にまたわが身ひとつの峯の松風

めでたし、本哥「ながむればちゞに物社かなしけれ云々、初二句、本哥の意にて、月は我身ひとつの月にあらず、世ノ中おしなべててる月なるを、ちゞに物がなしきに、そのうへ又なり、下句は、山のおくにすむものは、我一人なれば、此峯の松風は、我身ひとつの秋のかなしさぞとなり、

山月　　秀能

あし引の山路の苔の露のうへにね覺よふかき月を見る哉

旅寐の哥也、ねざめ夜深きといへるに、とけてねられぬ意をあらはせり、

八月十五夜和哥所哥合に海邊秋月　　宮内卿

心あるをしまのあまの袂哉月やどれとはぬれぬものから

めでたし、下句詞いとめでたし、月宿れとてぬれたる袂にはあらざれども、月のやどりたれば、おのづから心あるさまに見ゆとなり、

宜秋門院丹後

忘れじな難波の秋のよはの空こと浦にすむ月は見るとも

めでたし、三の句、夜はの月といふ意なるを、月は下句にある故に、詞をかへて、空といひて、下なる月を、こゝへもひゞかせたる也、上下の句の間へ、今より後、と云ことを加へて心得べし、

長明

松嶋やしほくむあまの秋の袖月は物思ふならひのみかは

めでたし、月の袖にやどるは、物思ふ人のならひのみかと思へば、それのみならず、塩くむあまの袖にも、宿れりとなり、袖とのみいひて、ぬるゝことをいはず、月とのみいひて、やどるといふ事をもいはざるは、ことさらにはぶきて、然聞えさせたるたくみ

なり、

和哥所歌合に海邊月　　家隆朝臣

秋のよの月やをしまのあまのはら明方ちかき沖のつり舟

明方ちかき程に、沖につり舟の見ゆるは、をしまのあまの、月ををしむとて、こぎ出たるにやと也、二三の句、いひかけの重なりたるは、少しうるさし、

だいしらず　　通光卿

立田山よはにあらしのまづふけば雲にはうときみねの月影

めでたし、三の句、まづは先也、松とかける本はひがとぞ、此哥、立田山似つかはしからざるやうなれども、然らず、此峯の月は、入かたの月なるを、立田山は、西の方なれば、よせあり、そのうへ万葉九長哥に、「白雲のたつたの山の瀧のうへのをぐらの峯に云々、とあるによりて、白雲の立田山とあれども、雲にはうときといへるなり、一首の意は、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如しと、古今ノ序にもいへるごとく、いり方の月には、よく雲のかかるものなれども、いまだかたぶかざるさきに、夜はに先あらしの吹はらへる故に、雲にはうとしと也、

式子内親王

宵の間にさてもねぬべき月ならば山のはちかき物はおもはじ

めでたし、二三の句は、其むきにして、見すてゝねらるゝほどの月ならば、といふ意なり、下句は、山端近くかたぶきて、惜き物思ひはせじと也、さるはあまりさやかなる月にて、宵の間に、え見すてゝはねざりし故に、今かく山端ちかくなりて、惜き物思ひをばするぞよと、ふくめたり、

ふくるまでながむればこそかなしけれ思ひもいれじ秋のよの月

思ひ入といふ事を、はじめへもひゞかせて心得べし、思ひいれて、ふくるまでながむればこそかなしけれといふ意也、

五十首哥奉りし時　　攝政

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見る哉

三四の句めでたし、さはるべき雲をばのこさずして、さやけさをそふる風を、のこしおきて見る也、

家の月五十首に　　定家朝臣

月だにもなぐさめがたき秋の夜の心もしらぬ松のかぜかな

月だにもなぐさめがたきとは、秋の夜は、月を見るによりて、かなしさをもよほして、なぐさめがたき、それだにあるうへに、猶又の意なり、月見てもなぐさめがたしといふにはあらず、

さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

二三の句、詞めでたし、本哥「さむしろに衣かたしき云々、こゝの哥も、思ひやりたるさまなれば、らむなどいふ詞なくてはいかが、又月のあへしらひの詞も、あらまほし、又さむしろやとうち出たるも、いせのうみや、難波江やなどいへるとは、やうかはりて、よろしくも聞えず、或人の云、「さむしろにまつ夜の月をかたしきて更行影やうぢの橋姫、などぞあらまし、

五十首哥奉けるに野徑月　　攝政

行末は空もひとつのむさし野に草のはらより出る月かげ

上句、行末に山なき故に、空と野とつゞきて見ゆるなり、さて京にては、月は山より出て、山にいるをのみ見なれたれば、草の原より出るは、いとめづらしきなり、

雨後月　　宮内卿

月を猶まつらん物かむらさめのはれゆく雲の末のさと人

二の句、まちやすらんの意なり、さて村雨のはれゆくといふ所に、こゝにては、はや月を見る心そなはれり、

題しらす　　通具卿

秋の夜はやどかる月も露ながら袖に吹こす荻のうは風

めでたし、三四の句は、月を見るに、荻に風のふけば、いよ／＼あはれをそへて、たちまち袖になみだのこぼるゝ、其涙にも、同じく月のやどるを、荻のうへより、露とゝもに吹こしたるやうにいひなせるなり、實に荻の露を、袖にふきこしたるにはあらず、

源家長

秋の月しのに宿かる影たけてをざゝが原に露ふけにけり

しのには、しげくにて、さゝのしのをかねたり、影たけてと、露ふけにけりと、かさなりてくだ／＼し、

和哥所哥合に田家月　　慈圓大僧正

鴈のくるふし見の小田に夢さめてねぬよの庵に月を見る哉

二の句四の句にもじ重りていかゞ、小田に夢さめてもいかゞ、

俊成卿女

稲葉ふく風にまかせてすむ庵は月ぞまことにもりあかしける

稲葉は、風の絶間なく吹渡る故に、それにまかせおきて、守る人は、夜もねぶりなどして、おこたりがちなれば、守るといふ名のみなるを、まことにおこたりなく、もりあかす物は、月にこそあれといへる也、月のすき間をもるを、守るとにかねていふは常也、さきには、風にまかせてとは、風の吹あらすにまかせおきて、つくろひもせぬ意にて、さやうの庵は、月影の、まともにもり明すといへるにて、まことにとは、田の庵に月のもるといふは、つねのとぐさなるが、これはまことにといふ意ならん、と思ひしかど、

さては稲葉ふくといふに、かなひがたし、

題しらず

あくがれてねぬよのちりのつもるまで月にはらはぬ床のさむしろ

めでたし、月には、月故になり、

百首哥奉りし秋のうた　式子内親王

秋の色はまがきにうとくなりゆけど手枕なるゝねやの月影

めでたし、上句詞めでたし、上句は、籬なる千種の花の過行をいふ、下句は、次第に月のさやかなる比になりて、手枕になるゝなり、さて千種の花も月も、秋の物なるが、其秋の色は、籬にうとくなれども、手枕にはなるゝといふ趣也、うとくなると、なるゝとをたゝかはせたり、古き抄に、まがきの草などかれ行て、月にさはる物なくて、枕になるゝなりといへるは、いみしきひがことなり、まがきの草は、いかでか月にさはるべき、

秋の御哥の中に　太上天皇御製

秋の露やたもとにいたく結ぶらん長き夜あかず宿る月かな

長き夜あかずは、よもすがらたゆまず明るまでなり、

千五百番哥合に　通光卿

さらにまたくれをたのめと明にけり月はつれなき秋のよの空

今夜はあけぬとも、さらに又くるゝをたのみて、月をばみよとて、夜のあくるとなり、月はいまだ入らずのこれるに、夜のあくるがをしき時に、おもへるさま也、趣めづらし、

經房卿家の哥合に曉月　二條院讃岐

大かたの秋のねざめの露けくは又たが袖に有明の月

めでたし、下句詞よろし、大かたのは、なべての世の人のといふ意也、露けくはゝ、我如く袖の露けくは也、又といへるにて、我袖に月のやどれることをしらせたり、すべてかくさまに、こゝをいひて、かしこをしらせ、かしこをいひて、こゝをしらするぞ、哥のはたらきなる、

五十首哥奉りし時　雅經

はらひかねさこそは露のしげからめやどるか月の袖のせばきに

めでたし、詞めでたし、二三の句のてにをは、普通にては心得にくきやうなれども、例多し、言葉の玉の緒にあげたり、此哥にては、いかに露のしげゝればとてといふ意也、四の句、月の宿るかといふことを、詞を下上にせるにて、こよなく勢ひ有て、めでたし、結句は、せばき袖なるにといふ意にて、にもじ重し、一首の意は、はらひかねて、いかに露のしげゝればとても、あまりなることよ、さても〳〵やどりける哉月影の、此袖のかくせばきにとなり、

秋哥　下

和哥所にてをのこども哥よみ侍しに夕鹿　　家隆朝臣

下紅葉かつちる山のゆふしぐれぬれてやひとり鹿の鳴らん

めでたし、詞もめでたし、ひとりとは、妻をこひて鳴意にていへるか、いさゝか心ゆかず、されど此詞にて、殊に哀に聞ゆ、

百首哥奉りし時　　寂蓮

野分せし小野の草ぶしあれはてゝみ山に深きさを鹿の聲

百首哥奉りし時秋の哥　　惟明親王

み山べの松の梢をわたるなりあらしに宿すさをしかの聲

嵐の、松の梢を渡る故に、その嵐にたぐひたる鹿の聲も、松の梢をわたるなり、

百首哥よみ侍りけるに　　攝政

たぐへくる松の嵐やたゆむらんをのへに歸るさをしかの聲

千五百番哥合に　　慈圓大僧正

鳴しかの聲にめさめてしのぶ哉見はてぬ夢の秋のおもひを

二の句いうならず、秋の思ひをしのぶといふと、いかにいへるにか、こゝろえず、

題しらず　　西行

小山田の庵ちかくなく鹿のねにおごろかされておごろかす哉

おどろかされては、目のさむるをいふ、おどろかすは、引板などならして、鹿をおどろかすなり、

百首哥奉りし時　　寂蓮

物思ふ袖より露やならひけん秋風ふけばたへぬものとは

秋風のふけば、え堪ずこぼるゝ物とは、物思ふ人の袖の涙より、露もならひやしけむと也、ふるき抄に、たへぬを、絶ずおくとと注したるは、たがへり、

秋の御哥の中に　　太上天皇御製

野原より露のゆかりをたづねきて我衣手に秋風ぞふく

露のゆかりは、なみだなり、

たいしらす　　西行

きりぎりす夜寒に秋のなるまゝによわるか聲の遠ざかりゆく

下句詞めでたし、物の聲は、高きは近きやうに聞え、よわきは遠きやうに聞ゆるものなる故に、よるよる次第に聲のとほくなるは、よわるかとなり、

守覺法親王家五十首哥に　　家隆朝臣

虫の音もながき夜あかぬ故郷に猶思ひそふ松風ぞふく

長き夜あかぬ、上に出たり、桐壺巻に「すゞ虫の云々、

百首の哥の中に　式子内親王

跡もなき庭の淺茅にむすぼゝれ露のそこなる松虫の聲

三の句、むすぼゝれてと、てもじなくて、たゞよはしき心地す、されど然いひては、いよ／＼あし、松虫を、人まつ意にとりて、跡もなきといふは、人のこぬよし、むすぼゝれも、思ひむすぼゝるゝよし、露の庭なるも、涙の心あるべし、

題しらず　慈圓大僧正

衣うつ音は枕にすがはらやふしみの夢をいく夜殘しつ

音はのはもじ、枕にといふへあてゝ心得べし、夢をのこすは、見はてぬをいふ、

千五百番哥合に　公經卿

衣うつみ山の庵のしば／＼もしらぬ夢路に結ぶ手枕

しらぬ夢路とは、はじめの夢は中にさめて、又むすぶには、其はじめの夢の末は見ず、異事を見て、夢のかはるをいふ、古き抄に、しらぬ所をも、ゆきみることゝいへるは、此哥にさらによしなし、又或抄に、しらぬ夢路は、ねぬことなるべし、といひ、又旅のこゝろ也といへるなど、皆ひがこと也、さて此哥、庵は、よそにて衣うつ音をきく庵なるに、衣うつみ山の庵とつゞきたれば、此庵にて衣うつやうに聞えて、いかゞ、其うへきぬたの音の聞えんは、里こそ似つかはしけれ、み山の庵はよしなきを、柴といひかけん料に、しひてみ山の庵といへるもいかゞ、

和哥所哥合に月下擣衣　攝政

里はあれて月やあらぬと恨みても誰淺ぢふに衣うつらん

いとめでたし、詞もいとめでたし、二の句は、かの「春や昔の春ならぬ云々の哥の意にて、昔を忍ぶよし也、三の句でもは、常のてもとは意異にして、もは輕くそへたる詞にて、只恨みてといふこと也、此格のもゝじ、例有となり、然るを恨みながらもといふ意に注したるは、いみしきひがことなり、一首の意は、里はあれて、淺茅生になりたる宿に、月夜にきぬたの音のするを聞て、誰ならん、さぞ月やあらぬ云々、と恨みてぞうつらんと、あはれに思へるなり、

宮内卿

まどろまでながめよとてのすさみ哉麻のさ衣月にうつこゑ

めでたし、すさみとは、何わざにまれ、たしかにうるはしく物するにはあらで、たゞわざとなく、はかなくするしわざにて、俗になぐさみなどにするといふ意なり、一首の意は、月夜に衣うつ音をきゝて、ねられぬまゝによめる意にて、かやうにさやかなる月夜に、衣うつとは、たゞ聞人にまどろまで月をながめよとての、す

さみわざにこそあれといひなせる也、

千五百番哥合に　　定家朝臣

秋こだに忘れんこ思ふ月影をさもあやにくにうつ衣かな

めでたし、初句、だには、俗になりともといふ意、三の句の゜をは、なる物をの意、四の句、さもは、俗にさてもといふ意、あやにくには、いぢわろくといふ意也、一首の意は、月のさやかなるまゝに、秋のかなしさのたへがたきにつきて、思へる意にて、せめて秋ぞといふ事を、わすれなりともせばやと思ふほどかなしき月影なる物を、さてもいぢわろく、衣うつ音の聞えて、秋といふ事のわすられもせぬよとなり、古き注、上句のときざま、いたくあやまれり、

擣衣　　雅經

みよし野の山の秋風さ夜更て故郷さむく衣うつなり

いとめでたし、上句詞めでたし、古きすがたにて、古今の、山の白雪つもるらしよりはまされり、

式子内親王

ちたびうつきぬたの音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる

うつといふから、くだくるといへり、ちたびうつとは、かの千聲万聲無二止時一といへる、からうたによりて玉へるなるべし、

百首哥奉りし時

ふけにけり山のはちかく月さえてこほちの里に衣うつ聲

定家朝臣

ひこりぬる山鳥の尾のしだりをに霜おきまよふ床の月影

下句詞よろし、此哥、二三の句は、長き夜にといふことろなるを、本哥によりて、たゞ山鳥の尾の云々といひて、然聞せたるはあまり巧過て、ことわり聞えがたし、しだり尾にといひては、山鳥の尾に霜のおきたるをよめるになりて、床も、山鳥の床とこそ聞ゆれ、又床をしひて我床とする時は、我床のあたりに、山鳥のひとりねたるを置たるが、其尾に霜のおけるやうに聞えて、いよ〳〵いかゞ、霜おきまよふとは、床に月影のうつれるが、霜のおきたるやうに、見えまがひて、さえたるをいふ、

攝政大將に侍けるこき月哥五十首よませ侍けるに　　寂蓮

人目みし野べのけしきはうら枯て露のよすがに宿る月哉

花のさかりには、人めをも見し野べの、今はうら枯て、たゞ其ころのまゝなる露のよすがに、月のみぞ今は宿れると也、

五十首哥奉りし時

むら雨の露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

めでたし、むら雨は、晴たるが、その露もいまだひぬ間に、又霧の立のぼりて、はれ〲しからぬ山中のさま也、

秋の御哥とて　　太上天皇御製

さびしさはみ山の秋の朝ぐもりきりにしをるゝ槇の下露

此御初句は、云々槇の下露のさびしさと、終りにおくと同じ心にて、一ッの格なり、此格を心得ぬ人は、うたがふと也、

河霧　　通光卿

明ぼのや川せの波のたかせ船くだすか人のそでの秋霧

めでたし、下句詞めでたし、二三の句は、船をくだせば、船にあたる波の音の高きをいふ、人の袖の秋霧とは、經信卿母の哥に、「明ぬるか川せの霧のたえ〲に遠方人の袖の見ゆるは、とあるをとりて、花やかによみなせる也、されば此句は、袖のたえ〲に見ゆる意なるを、其詞をば、本哥にゆづりて、人の袖のといふ詞にて、本哥を思はせたる物なり、然るを或抄に、袖は霧にかくれてあるといふとなりと注せるは、いとをさなし、一首の意は、波の音高く聞え、又霧に人の袖のたえ〲見ゆるにつきて、高瀬舟をくだすにやと思へるさまなり、

題しらず　　俊成卿女

吹まよふ雲ゐをわたる初かりのつばさにならすよもの秋風

吹まよふと、よものと、相てらしたり、

詩に合せし哥の中に山路秋行　　家隆朝臣

秋風の袖に吹まく峯の雲をつばさにかけて鴈もなく也

上句、山中をゆく時のさま也、三の句、もじあまり、きゝぐるし、下句は、鴈もつばさにかけて鳴也と心得べし、さて鴈も鳴といへるにて、我ヵわびしきほどをあらはせり、

五十首哥奉りし時菊籬月　　宮内卿

霜をまつまがきの菊のよひの間におきまよふ色は山端の月

菊は、一さかり過て、霜のおけば、又一さかり、うつろひざかりとてある故に、霜をまつとはいふなり、よひの間といふも、霜をまつによしあり、山のはといふも、よひの間によし有、すべて哥は、かくのごとく、何れの詞も、たがひによしあるやうによみとゝのへたるがよき也、おきまよふ色とは、霜のおきたる色にまがふをいふ、此哥まもじ五ッ有、

千五百番哥合に　　慈圓大僧正

秋をへてあはれも露もふか草の里とふ物はうづらなりけり

下句、うづらならでは、おとづるゝ人もなき意なり、

通光卿

入日さすふもとの尾花うちなびきたが秋風にうづら鳴らん

下句詞よろし、下句の心は、鶉のなくは、たが心の秋風を、うき物に思ひて鳴らんと也、然るに上句は、たゞけしきばかりをいひて、下句にかけ合たる意なし、いかゞ、古き抄に、下句を、秋はたゞ秋ぞ、汝が時分にてはなきかと、とがめたるなりといへるは、ひがことなり、

題しらす　　　俊成卿女

あだにちる露の枕にふしわびてうづらなくなり床の山風

床の山は、枕のよせなり、

千五百番哥合に

こふ人もあらし吹そふ秋はきて木葉にうづむやごの道芝

めでたし、とふ人はあるまじき秋の來て、嵐のふきそひぬれば、やどの道も、木葉にうづみて、とふ人なしとなり、又は秋の來て、嵐も吹そひて、道は木葉にうづもれたれば、今はとひくる人もあるまじ共聞ゆ、秋は來てといへるはもじ、人はこじといふ意なり、さて嵐は、あるまじといふ意にいひかけたる也、此いひかけ、古への哥は皆しかなり、あらずといひかけたるにはあらず、然るを近き世の人、此わきまへなくして、嵐を、あらずといふ意にいひかくるは、ひがことなり、帚木巻に「云々嵐吹そふ秋はきにけり、

色かはる露をば袖におきまよひうらがれて行野べの秋哉

千種のさかりに、其色にうつりし、野べの花の露をば、今はわが袖に殘し置て、花はみながらかれゆくことよと也、色かはる露とは、花の色のうつれる露なるを、袖におきまよひといふは、例の紅の涙にて、秋のかなしさの涙也、さることにも、紅の涙をよむは、此集の此のつねぞかし、おきまよひとは、花の露の色にまがふ故にいふ、さて上に露をばといへるをば、に合せては、おきまがへといふべきを、まよひといへるは、少しいかゞ、

秋の御哥の中に　　　太上天皇御製

秋ふけぬなけや霜夜のきり〳〵すやゝ影寒し蓬生の月

「なけやなけ蓬がそまのきり〳〵す過行秋はげにぞかなしき、といふ哥よりおぼしめしよれるなるべし、

百首哥奉りし時、　　　摂政

きり〳〵すなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん

めでたし、上句詞めでたし、霜夜の寒きといひかけたり、此哥、万葉に入ても、古今集に入ても、すぐれたる哥也、

和哥所にて六首哥つかうまつりし時秋のうた　　　慈圓大僧正

秋ふかきあはぢの嶋の有明にかたぶく月をおくるうら風

めでたし、淡路嶋を見やりての哥也、上三句のかしら、みなあ

もじなり、

暮秋

長月もいく有明になりぬらん淺ぢの月のいとゞさびゆく

いとゞてふ詞、いさゝかかなはず、

攝政大將に侍けるとき百首哥よませ侍けるに　寂蓮

かさゝぎの雲のかけはし秋くれてよはには霜やさえ渡るらん

鵲の雲のかけはしとはいかゞ、雲井のといふとなるべきを、さはいひがたき故の、しひごとなるべし、又古哥に「おく霜の白きを見ればとあれば、其うへをめづらしくいはむこそほいならめ、たゞ霜やさえ渡るらんとのみにては、いとよわく、何の詮もなし、渡るといふ橋の縁のみ也、

最勝四天王院の障子に鈴鹿川かきたる所　太上天皇御製

すゞか川ふかき木葉に日數へて山田の原の時雨をぞきく

入道前關白太政大臣家に百首哥よみ侍けるに紅葉　俊成卿

心こやもみぢはすらん立田山松はしぐれにぬれぬものかは

百首哥奉りし時　宮内卿

立田川あらしや峯によわるらんわたらぬ水も錦たえけり

めでたし、二三句詞よろし、

右大將に侍し時家の百首哥合に杜　攝政

はゝそはら雫も色やかはるらん杜のした草秋ふけにけり　定家朝臣

時わかぬ波さへ色にいづみ川はゝその杜にあらし吹らし

めでたし、上句詞めでたし、古哥に「波の花にぞ秋なかりけるとある波さへ、秋の色に出る也、波の色に出るは、紅葉のながるゝなれば、川上なる柞の杜に、あらしの吹らんとを、思ひやれる也、哥合判に、嵐や、上句にことに相應せず侍らんとあるは、いかゞ、

百首哥奉りし時秋のうた　式子内親王

桐の葉もふみ分がたくなりにけりかならず人をまつとなけれど

めでたし、「我やどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに、必しも此本哥のやうに、つれなき人をまつ宿にはあらねどもと也、初秋に一葉おちそめたる桐の葉の、ふみわけがたきまで、ちりつもるは、秋のいたくふけたるよしなり、

千五百番哥合に　家隆朝臣

露しぐれもる山陰の下紅葉ぬるともをらん秋のかたみに

めでたし、詞めでたし、本哥「しら露もしぐれもいたくもる山は云々、四の句「ぬれつゝぞしひて折ける云々の意あるべし、さてその春を、秋にかへ用ひて、秋のかたみにとはとぢめたるべし、

題しらす　西行

松にはふまさ木のかづら散にけり外山の秋は風すさふらん

風すさふは吹あるゝをいふ、古き抄に、すさぶは、物のすがりたるをいふといへるは、此哥にはかなはず、又まさきのかづらの長くつたはりといへど、嵐のはげしきに、散ぬらん、なに事も、はてはある物ぞといふ意を、風すさぶらんとよめる也といへるも、いみしきひがことなり、さる意あるとなし、

家の百首の哥合に　摂政

立田姫いまはのころの秋風にしぐれをいそぐ人の袖哉

めでたし、立田姫は、四の句へかゝれり、今はのころの秋とは、暮秋をいふ、風はしぐれのよせなり、しぐれをいそぐとは、世の人の、秋の別をゝしみてなくなみだのおつるを、立田姫の、しぐれをふらせて、木葉を渡るごくに、人の袖にも時雨をふらせて、そめむとするよしにいひなせるなり、いそぐとは、事をいとなむをいひて、立田姫の、時雨をいそぐといふは、しぐれをふらせて染るとを、いとなむよし也、此うた、いとたくみにして、よくとゝのへり、

五十首哥よませ侍けるに　守覚法親王

身にかへていざゝば秋を惜み見むさらでももろき露の命を

二の句、さばゝ、さらばなり、下句、秋にかへずとても、もろき命なる物をといへるなり、

冬哥

千五百番哥合に初冬　俊成卿

おきあかす秋のわかれの袖の露霜こそむすべ冬やきぬらん

めでたし、九月盡の夜、秋をゝしみて、おきあかす袖の涙の、霜になりぬるは、はや冬の來つるにやと也、

春日社哥合に落葉といふことをよみて奉りし　慈圓大僧正

木葉ちる宿にかたしく袖の色をありともしらで行嵐哉

詞めでたし、袖の色とは、例の紅の涙にそまりたるをいふ、それも紅葉と同じ色なるに、嵐の、これをば有ともしらで、通行よとなり、

通具卿

木葉ちる時雨やまがふ我袖にもろき涙の色と見るまで

一首の意、我袖にもろく落る紅の涙の色と見ゆるまでに、時雨のまがひてふるは、木葉のまじりてふる時雨にてや、かやうに色のまがひて見ゆらんとなり、

雅　經

うつり行雲に嵐の聲すなりちるかまさきのかづらきの山

いとめでたし、詞めでたし、葛城山を見渡せば、嵐にふかれて、うつりゆく雲に、その嵐の聲のするは、まさきのかづらのちるかと也、下句勢ひあり、此卿の得られたる所なり、

七條院大納言

初しぐれしのぶの山のもみぢ葉を嵐ふけとは染ずや有けん

初時雨の初も、しのぶも、下にかけ合なし、もしは初時雨は、はじめよりといふ意、しのぶは、嵐にしられじと忍びし意にいへるにやあらん、三の句のをもじも、いさゝか心ゆかず、結句、あるらんとある本はわろし古今「たらちねは云々、

祝部ノ成茂

冬の來て山もあらはに木葉ふり殘る松さへ峯にさびしき

あらはになれる梢のさびしきのみならず、殘れる松の葉はさびしかるまじきことわりなるに、それさへさびしと也、さて此哥、上句少しくだ〳〵しく、三の句は殊によろしからず、すべてといはでは落居ぬ句を、さはいひがたくて、てをはぶきたるは、聞ぐるしき物なり、此三の句も、必木葉ふりてといふべきを、さはいひがたければ、せんかたなし、下句も、ぞ又はやなどいふてにをはなくして、しきととまりたるは、とゝのはず、後の哥に此格多し、いと聞ぐるしき物也、

五十首奉りし時に　　宮内卿

からにしき秋のかたみや立田山ちりあへぬ枝に嵐ふくなり

本哥「からにしき枝に一むら殘れるは秋のかたみをたゝぬなりけり、から錦は、たつの縁也、ちりあへぬとは、此哥にては、いまだ散までにもいたらぬをいふ、一首の意は、いまだちる迄にもいたらぬ紅葉の枝に、嵐のふくは、秋のかたみを殘さじとて、とさらにたつにやと也、たつは、たえしむるなり、

題しらず　　西行

月をまつ高根の雲ははれにけり心あるべき初しぐれかな

四の句、心有けるといふべきを、上のけりと重なる故に、あるべきといへるなるべし、あるべきといふときは、心ありげなるなどいふ意なり、さて此哥、初しぐれとあれば、初冬にて、十月上旬なり、上句に月をまつといへると、たがへり、もしは九月の末の哥なるを、時雨とあるによりて、冬ノ部に入られたるにや、

時雨を　　慈圓大僧正

やよしぐれ物こふ袖のなかりせば木葉の後に何をそめまし

此哥は、かの時雨をいそぐ人の袖哉といへるとは違ひて、いかゞ、

冬の御歌の中に　　太上天皇御製

ふかみどりあらそひかねていかならん間なくしぐれのふるの神杉

本哥万葉十に「時雨のあめ間なくしふれば槇の葉もあらそひかねて色付にけり、槇の葉も色付といへれば、此神杉もいかならむとなり、

百首哥奉りしに　　二條院讃岐

をりこそあれながめにかゝるうき雲の袖もひとつにうち時雨つゝ

めでたし、下句詞めでたし、をりこそあれは、をりもあらんに、ながめをするをりからといふ意なり、ながめにかゝるとは、ながめをする雲にかゝるをいふ、三の句ののは、がといふこゝろなり、

たいしらす　　西行

秋しのや外山のさとやしぐるらんいこまのたけに雲のかゝれる

めでたし、上句詞めでたし、二の句のやは疑ひ也、

千五百番哥合に　　具親

今はまたちらでもまがふ時雨かなひとりふりゆく庭の松風

ちらでもは、松の葉のこなり、今は又とは、今までは、木葉のちりしにむかへていへり、まがふ時雨かなは、時雨にまがふ哉なり、ふりゆくといへる、たゞ時雨の縁の詞のみにて、哥の意によせなし、松の木の年ふりたる意にしても、ゆくといふ詞いかゞ、

二條院讃岐

世にふるはくるしき物を槇の屋にやすくも過るはつしぐれかな

めでたし、くるしきと、やすく過るとをたゝかはせたり、ふるき抄に、槇の屋は、結構なる屋也、世のうきならひは、此結構なる家に居ても、のがれざりけりと也と注せるは、物をといひ、やすくも過るといへるを、いかに見たるにか、いとをかし、たゞしぐれにてあるべきをも、初時雨とよむは、此集の比の常なり、此哥などは、むらしぐれとあらまほしくこそおぼゆれ、

たいしらす　　宜秋門院丹後

吹はらふ嵐の後の高根より木葉くもらで月やいづらむ

詞めでたし、月ぞ出けるといふべき哥なるを、詞をえむにあらせんとて、月や出らんといへるいかゞ、今の人の哥にも、此難つねにあることなり、春は来にけりといふべきをも、春や来ぬらんといふたぐひなり、

春日社哥合に曉月　　通光卿

霜こほる袖にも影はのこりけり露よりなれし有明の月

めでたし、下句詞めでたし、のこりけりは、秋の影の殘れると、明方にのこれるとをかねたり、

和哥所にて六首うた奉りしに冬月　家隆朝臣

ながめつゝいく度袖にくもるらむ時雨にふくる有明の月

千五百番哥合に　具親

今よりは木葉がくれもなけれどもしぐれに殘るむら雲の月

今よりはといふ詞は、木葉がくれのなきへかゝれるのみ也、下句までへかけては見べからず、下句は、時雨故に、むら雲の殘れる月といふ意にて、木葉は殘らねども、村雲の殘りて夫にさはる月也、

題しらす

はれくもる影をみやこにさきだてゝしぐるとつぐる山のはの月

しぐるとつぐるは、すなはち上句のさまをいふ、みやこと山端と相對へり、

五十首哥奉りし時　寂蓮

たえ〲に里わく月のひかりかなしぐれをおくるよはの村雲

めでたし、上句詞めでたし、

題しらす　慈圓大僧正

もみぢ葉は（をイ）おのが染たる色ぞかしよそげにおけるけさの霜かな

三の句、色なるをいふべきを、色ぞかしといへるは、其ことわりを、霜にいひきかせたるさま也、四の句、詞も少しいうならざるうへに、よそといふとも、少しかなはぬやうなり、俗によそ〲しげにといふ意なり、

西行

小ぐら山ふもとの里に木葉ちれば梢にはるゝ月を見る哉

三の句、もじあまりいと聞ぐるし、例の此ほうしの、わろきくせなり、此哥は、小倉山、木葉ちれば、梢にはるゝ月を、ふもとの里に見る哉といふ意なり、かやうに心得ざれば、見る哉といふこと、より所なし、其故は、本のつゞきのまゝにしては、たゞ見るといへるのみ、こなたのうへにて、其外はみな、かなたのうへのみにて、こなたにつきたる詞なき故に、とゝのひわろき也、近き世の哥には、さることいと多し、人の心つかぬこと也、

五十首哥奉りしに　雅經

秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木がらしの風

二の句、俗言にいへば、はらひはてたかしてといふ意なり、然れ共、疑はずして、はらひはてゝと、治定したるさまにあらまほしき哥也、下句いやしきすがた也、此事春ノ部にいへり、

風寒み木葉はれゆく夜な／＼に殘るくまなき庭の月影

初句、寒みいかゞ、三の句、に゜もじいうならず、

千五百番哥合に　俊成卿女

さえわびてさむる枕に影みれば霜ふかき夜の有明の月

さえわびては、さゆるにわびてなり、

通具卿

霜むすぶ袖のかたしき打とけてねぬよの月の影の寒けさ

二の句にてきりて心得べし、袖のかたしき、よくもあらぬ詞也、

五十首哥奉りし時　雅經

影とめし露のやどりを思ひ出て霜に跡とふあさぢふの月

めでたし、下句詞めでたし、

冬の御哥の中に　太上天皇御製

冬の夜のながきをおくる袖ぬれぬ曉がたのよものあらしに

須磨ノ卷に、枕をそばだてゝ、四方のあらしを聞玉ふに云々、涙おつともおぼえぬに、枕もうくばかりに成にけり、「冬の夜のながきをおくる程にしも曉がたのつるのこゑ、此哥、契沖ひきおけり、何に出たるか、ふとはおぼえず、

百首哥奉りし時　攝政

さゝの葉はみ山もさやに打そよぎこほれる霜を吹あらし哉

萬葉二に「さゝの葉はみ山もさやにみだれども云々、

題しらず　俊成卿女

霜がれはそことも見えぬ草の原誰にとはましあきのなごりを

めでたし、下句詞めでたし、花宴卷に、「うき身世にやがて消なば尋ねても草の原をばとはじやと思ふ、狹衣に、「尋ぬべき草の原さへ霜枯て誰にとはまし道芝の露、

百首哥の中に　慈圓大僧正

霜さゆる山田のくろのむらすゝきかる人なしに殘る比かな

此僧正の歌、かゝるたぐひ多し、西行がふりをまねばれたるもの也、

題しらす　西行

津の國のなにはの春は夢なれやあしの枯葉に風わたるなり

めでたし、「心あらん人にみせばや云々、とよめる春は、夢なれやとなり、ふるき抄に、二の句を、よの中の事は、何のうへも、夢ぞとなりといへるは、かなはず、もし其意ならば、春もといふべきをや、

さびしさにたへたる人の又もあれな庵をならべん冬の山里

或抄に、一二の句を、富貴榮花に心をうごかさぬ人あれかしといへるなりといへるは、からごゝろなり、

俊成卿

かつこほりかつはくだくる山川の岩間にむせぶあかつきのこゑ

山川の曉の聲とつゞく意也、山川の岩間とつゞくにはあらず、

攝政

消かへり岩間にまよふ水のあわのしばし宿かる薄ごほり哉

すべて消かへりわきかへりしにかへりなどいふかへりは、其事をつよくいへる詞なるを、此哥にては、消て又結ぶことによみ玉へるいかゞ、又やどかるといふ詞も、何のよせもなき也、又水のこほりたらんに、沫のこほらざるといかゞ、但し薄氷とあれば、こほらぬ所もある故に、沫もたつにや、又山川とも何ともなくて、たゞ岩間とのみいへるも、ことたらはぬこゝちす、

枕にも袖にもなみだつらゝゐてむすばぬ夢をとふ嵐かな

下句めでたし、詞もめでたし、霞塵氷水草みさびなどは、平らかにおほふ物なればこそ、ゐるとはいへ、つらゝにゐてはいかゞ、池の氷などを、つらゝとよめるも、皆わろし、

五十首歌奉りし時

水上やたえ〴〵こほる岩間よりきよ瀧川にのこるしら波

初句やもじわろし、此やはのといふ意と聞えたり、もし疑ひのやならば、二の句にて切るゝ也、岩間より殘るといへる、詞とゝのはず、よりの下に、流れきてなどいふことなくては、たらざる也、又のこるといへるとも、心得ず、其故は、水上とあれば、たえ〴〵こほれるは、水上のみのことにこそあれ、川下は、すべて氷ることなきなれば、白波はつねのごとく、なべて立べければ、岩間よりのこるなどはいふべきにあらざれば也、もし又結句までを、すべて水上のことゝして見れば、淸瀧川にとある、にもじおだやかならざるをや、

百首哥奉りし時

かたしきの袖のこほりもむすぼゝれとけてねぬよの夢ぞみじかき

二の句、もゝじは、とけてねぬといふにあたれり、夢ぞみじかきといふに、夜は長き意あり、朝貌ノ卷に、「とけてねぬねざめさびしき冬のよにむすぼゝれたる夢のみじかさ、

最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所

太上天皇御製

はし姫のかたしき衣さむしろにまつ夜むなしき宇治の明ぼの

慈圓大僧正

あじろぎにいさよふ波の音ふけてひとりやねぬるうちの橋姫

冬の意見えず

百首哥の中に

式子內親王

見るまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江のみぎはうすごほりつゝ

攝政家哥合に湖上冬月　　家隆朝臣

しがの浦や遠ざかりゆく波間よりこほりて出る有明の月

「さよふくるまゝにみぎはやこほるらん云々、氷りて遠ざかり行波間より、月もこほりていづる也、

守覺法親王家五十首哥に　　俊成卿

ひとり見る池のこほりにすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

袖にうつるとは、影のさすとゝ、池より袖へうつるとをかねていへり、ひとり見る故に、あはれをもよほして、涙のかゝるよしなり、さて此哥、氷といへるのみにて、氷のあへしらひもなく、すべて冬のさま見えず、たゞ秋の月なるはいかゞ、

五十首哥奉りし時　　攝政

月ぞすむたれかはこゝにきの國や吹上のちどりひとりなくなり

初句ぞもじ、かなへりとも聞えず、三の句、來て見むといはでは、月の詮なければ、たゞきの國やとのみにては、とたらず、千鳥は、數多くむれゐる物なれば、ひとりといふと、似つかはしからず、

最勝四天王院障子に鳴海浦かきたる所　　秀能

風ふけばよそになるみのかた思ひおもはぬ波になく千鳥かな

二の句、風にふかれて、よそになり行と、戀のうへの契の、よそにうつれるとをかねたり、三の句、鳴といひかけたるなり、四の句も、風にふかれて、思はぬ波のうへに鳴ゝ意と、かた思ひにて、人の我を思はぬとをかねたり、

おなじこころ　　通光卿

浦人の日もゆふぐれになるみがたかへる袖より千鳥なくなり

一二のつゞきいかゞ、初句は、四の句の上にある意也、下句もおかしからず、

文治六年女御入内屛風に　　季經卿

風さゆるとしまが磯のむらちどりたちゐは波の心なりけり

土左日記に云々、下句おかしからず、

五十首哥奉りし時　　雅經

はかなしやさてもいく夜か行水に數かきわぶるをしのひとりね

めでたし、三四の句、本哥「行水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふ也けり、此下句の意にて、をしのひとりねに、思はぬ人を思ふを、はかなしといへる也、二の句は、本哥のごとく、思はぬ人を思ふは、はかなき事なるを、さありても猶いくよか、數かきわぶらんといふ意なり、

百首哥に　　式子内親王

さむしろの夜はの衣手さえ〳〵て初雪白し岡のべの松

下句詞めでたし、初句猶あるべし、下句は、あくる朝に、見わたし出たるさまなり、

入道前關白、右大臣に侍ける時家の哥合に雪　　寂蓮

ふりそむるけさだに人のまたれつるみ山のさとの雪のゆふ暮

初句、ふりそめしといはんかたまさるべし、またれつるは、さびしさに、人のまたれたる也、まして降つもりたる夕暮なれば、いよ〳〵さびしさに、またるゝ意あらは也、古き抄に、ふりそむるを、初雪とし、結句をば、後の事として、ふりそめたる日の夕暮にあらずといへるは、いみしきひがことなり、けさとは、今日の朝をこそいへ、

雪のあした後徳大寺左大臣の許につかはしける　　俊成卿

けふはもし君もやとふとながむればまだ跡もなき庭の白雪

かへし　　後徳大寺左大臣

今ぞきくこゝろは跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれども

我は、そなたの庭の雪を、せちに思ひやれば、さだめてそのわが

心の跡のつきたらんと思ふに、まだ跡もなしとは、今こそうけ給はりつれ、さては心の跡は、つかぬ物にて侍りけるよとなり、

百首哥奉りし時　　定家朝臣

駒とめて袖打はらふ陰もなしさのゝわたりの雪の夕暮

いとめでたし、万葉三に、「くるしくもふりくる雨かみわが崎さのゝわたりに家もあらなくに、といふをとりて、そのくるしくもふりくるといへると、家もあらなくにといへるとを、袖うちはらふかげもなしとよみなされたる、一きはつよく、意もせち也、其うへ夕暮とあれば、まして宿かるべき家のなき意、詞の外にあり、近き比、万葉風をのみ、ひたすらたふとむ輩の、後の哥をば、しひていひおとさむとて、此哥のとかく論じたるとあれど、かたおちのしひごとなり、袖うちはらふ陰もなしといへるに、くるしき心も、家のなき心も、あくまでそなはりて、いと〳〵哀なる物をや

攝政、大納言に侍ける時よませ侍ける山家雪

まつ人のふもとの道は絶ぬらん軒端の杉に雪おもるなり

めでたし、軒端なる杉に雪のふりつもりて、次第におもりゆくをみて待人の來べき、ふもとの道は、絶ぬらむと、おもひやれるなり、

同家にて所の名を哥よま
侍けるに伏見里の雪　家朝臣

夢かよふ道さへたえぬくれ竹のふし見のさとの雪の下折

めでたし、ふし見といふ、夢の縁也、下をれは、下をれの聲に也、よくとゝのへる哥なり、

守覺法親王五十首に　俊成卿

雪ふれば峯のまさかきうづもれて月にみがける天のかぐやま

月にみがけるとは、雪にうづもれたるうへに、月影のさすをいへるか、もし然らば、雪の詮なし、榊葉を月影にみがく事は、雪にうづまずとも、然いふべければ也、もし又月にみがくべき榊葉は、雪にうづもれて、天の香山の、すべてをみがけるといへる意にや、さるにては、詞たらで、たしかならず、

雪のあした大原にて　寂然

尋ね來て道わけわぶる人もあらじいくへもつもれ庭の白雪

千五百番哥合に　通具卿

草も木もふりまがへたる雪もよに春まつ梅の花の香ぞする

春まつといふと、用なく聞ゆ、

百首哥奉りし時　式子内親王

日數ふる雪げにまさる炭がまの煙もさびし大はらの里

初二句は、雪の日數へてふれば、寒きまゝに、いよ／＼炭を多くやく故にいふ、一首は、烟のしげきは、つねにはにぎはしき事にするを、これは、まさるもいよ／＼さびしといふ趣也、

年の暮に人につかはしける　西行

おのづからいはぬをしたふ人やあるとやすらふ程に年のくれぬる

おのづからは、したふといふへかゝれり、いはぬは、とひ來よともいはぬ也、やすらふは、俗に見あはせてゐるといふ意也、一首の意は、自然とあなたよりしたひて、とひくる人やあると、やすらひて、こなたよりは、とへとも何ともいはずてあるほどに、はや年もくれぬるを、つひにとふ人もなしとなり、

としのくれに　俊成卿女

へだてゆくよゝの面影かきくらし雪とふりぬる年のくれ哉

初句は、年の重なれば、過しかたは、次第にへだゝりゆくものなれば、年の暮によし有、

題しらず　西行

昔おもふ庭にうき木をつみおきて見しよにもにぬ年のくれ哉

こは年の暮に、年木とて、薪をつむとあるをよめるなり、それを、うき木とよめるは、浮木の名をかりて、うきとにいへるなり、昔おもふといひ、見し世にも似ぬといへる、うき意なり、ふ

るき抄に、昔をこひたるにはあらず、思ひ出たるばかり也といへるは、かなはず、さてはうき木といへる、何のよしぞや、すべてよめる哥を、みな其人の境界にかなへてとかんとするから、かゝるしひごとはいふ也、西行ならんからに、岩木にあらざれば、をりにふれては、などか昔をこふることもあらざらん、歌はおもふ心を、いつはらず、たゞありによみ出ればこそ、めでたき物にはあれ、うはべをつくろひかざりて、いさぎよく見するは、うるさきから國ごゝろ也かし、

攝　政

いそのかみふる野のをざゝ霜をへて一よばかりに残る年哉

夜々をへたることを、篠の縁に、霜をへてといへる也、一よもささの縁也、さていそのかみふる野とは、霜の縁のふるのためにいへるのみか、又年のふるくなれる意もあるか、よみ人の心しられず、四の句のにもじ、一よばかりになるとこそいふべけれ、残るとてはいかゞ、

慈　圓　大　僧　正

年のあけてうき世の夢のさむべくはくるともけふはいとはざらまし

夢は、夜の明れば、さむる物なる故に、年の明てといへり、されど年に明(アク)といふは、俗にちかし、又いとふといへるも、かなはず、すべていとふとは、物にても事にても、あるをにくみて、なかれと思ふをこそいへ、年のくれゆくを、いとふとはいひがたし、年ならば、来るをいとふとはいふべし、これよく人のあやまる事なり、心得おくべし、此結句は、なげかざらましとあるべきを、後撰集に「花しあらば何かは春のをしからむくるともけふはなげかざらまし、といふ哥ある故に、すこしかへられたるにや、もし然らば、をしまざらましと社あるべけれ、

百首哥奉りし時　入　道　左　大　臣

いそがれぬ年の暮こそあはれなれむかしはよそに聞し春かは

すべて歳暮の哥に、いそぐとよむは、来む年の始のまうけをいとなむこと也、春をはやく来よかしと、まつとゝ心得るは、誤なり、此哥は、入道の御身なる故に、春の始のまうけを、いとなむべきわざもなきよしなり、

土御門内大臣家にて海邊歳暮　有　家　朝　臣

行年ををしまのあまのぬれ衣かさねて袖に波やかくらん

これは、海人の歳暮のさまを、思ひやりたる意也、かさねては、衣の縁にて、常に波にぬれたるうへに、年をゝしむとて、又涙をやかけそふらんと也、或抄に、作者の身のうへの意に注せるは、や。といひ、らんといへるにたがへり、

寂蓮

老の波こえける身こそあはれなれとしも今は末のまつ山

二三の句、今年も今はといふにかけ合ず、「又こえん身ぞあはれなる、などぞいはまほしき、或は「又かさねてやこえぬべき、などにても有なむ、

千五百番哥合に　俊成卿

けふごにけふやかぎりごおもへごも又もとしに逢にける哉

けふやかぎりは、歳の暮にあふも、今年や限ならんの意、四の句ことしは、歳の暮の今日の意也、二の句のけふと、四の句のとしとを、たがひに入かへて心得べし、三の句は、おもひ來つれどもの意なり、いたく考たる人の心、まとに此哥の如くなるべく、思ひやられて哀なり、

新古今集美濃の家つと三の巻

賀歌

文治六年女御入内屏風に　俊成卿

山人のをる袖にほふ菊の露うちはらふにも千世は經ぬべし

いとめでたし、詞もめでたし、本哥のぬれてほす間は、なほしばしの程もあるべきを、打はらふにもとは、又そのうへをいへるなり、

千五百番歌合に　攝政

ぬれてほす玉くしの葉の露霜にあまてる光いくよへぬらむ

玉くしの葉は、祭の時の榊葉なり、ぬれてほすとは、古今集の菊の歌を心得あやまりて、よみ玉へるか、此哥にては心得がたし、しひてたすけていはゞ、いくよ經ぬらむといへるにあはせて、ぬれてはかわき、ぬれてはかわきする意か、猶いかゞ、

俊成卿

君が代は千代ともさゝじ天の戸や出る月日のかぎりなければ

さゝじ出る、戸の縁なり、三の句やもじ、少しおだやかならず、をといはんかたやまさるべき、

千五百番哥合に　定家朝臣

我道をまもらば君をまもるらむよはひはゆづれ住よしの松

めでたし、上句、歌の道さかゆる君が代なれば、此道をまもり玉ふ住吉神は、さだめて君をまもり給ふにてあるべしとなり、四の句、松のよはひを君にゆづれなり、

八月十五夜和歌所ノ歌合に月多秋友　寂蓮

高砂の松もむかしに成ぬべしなほ行末は秋のよの月

「高砂の松もむかしの友ならなくに、といふ哥をとりて、此哥にては、その松を友として、さて友といふことをば、いはでしらせたり、又松もむかしの友云々とある、本歌の詞を、松もむかしになりぬべしととりなしたる、おもしろし、一首の意は、千年經む松も、つひに枯て、むかしになりぬべし、其後もなほ友とすべきものは、秋の夜の月ぞとなり、

家の哥合に春祝　攝政

春日山みやこのみなみしかぞ思ふ北の藤なみ春にあへとは

此御哥、喜撰が歌をとりて、しかぞ思ふといひ、北にむかへて南といへる、たくみなれど、都の南といへるとも、何の用なく、しかぞおもふといふとも、たゞ思ふにてこそあるべけれ、しかぞといふと、あまりて聞ゆ、其うへ結びのとはも、はもじ何の

意ぞや、

哀傷哥

定家ノ朝臣母のおもひに侍ける春のくれ
につかはしける　　　　攝政

春がすみかすみし空のなごりさへけふをかぎりの別なりけり

上句は、立のぼりし烟のなごりなりし霞さへ也、別レは、うせにし人の別れのうへに、又なごりと見し霞さへ、けふは別れ也といひて、春のわかれをかねたり、

公時ノ卿の母みまかりて歎き侍りけるころ大納言實國ノ卿のもとに申遣しける
後徳大寺左大臣

かなしさは秋のさがのゝきり／＼す猶ふるさとにねをや鳴らん

詞書、公時ノ卿は、實國ノ卿の息にて、其母は、中納言家成ノ卿の息女、實國ノ卿の北ノ方なり、歌めでたし、詞めでたし、なほは、此哥にては、いよ／＼ことにといふこゝろなり、ふるさとゝは、身まかりし人のなき跡をいふ、一首の意は、かなしきことは、秋のならひなるが、そこにはいよ／＼殊に、きり／＼すのごとく、ねをやなき玉ふらむとなり、きり／＼すは、野にも故郷にもよせあり、さが野といへるは、秋のさがといひかけ、又きり／＼すをいはん料のみか、はた實國卿さが野に別庄などありて、此時こもりゐられたるか、しらず、

女の身まかりにけるをさがのほとりにをさめ侍ける夜よみける　　俊成ノ卿ノ女

今はさはうき世のさがの野べをこそ露きえはてし跡としのばめ

めでたし、初句、さはゝさらばなり、二三の句は、うき世のならひとて、なきからをもとゞめず、送りてをさめし野べといふ意を、嵯峨野へいひかけたる也、きえはてしといふは、たゞきえしといふとは異なり、こゝにては、母の身まかられしが、きえたるにて、そのなきからをだにとゞめず、をさめたるがきえはてしなり、すべて今の世の哥人の、はてしはつるといふ詞を、何心なくみだりにそへてよむは、ひがことなり、

母の身まかりにける秋野分しける日もと住侍りける所にまかりて　　定家ノ朝臣

玉ゆらの露もなみだもとゞまらずなき人こふるやどの秋風

めでたし、詞めでたし、たまゆらは、しばしといふ意なりと、八雲御抄に見えて、此哥も、其意によまれたりと聞ゆ、さて露の風にさわぐさま、涙のこぼるゝさま、ともに玉のゆらくに似たれば、其よしをもかねてよみたまへるにや、ふるき抄に、露もなみ

だもとはあれども、たゞなみだのとにて、露のごとくふるといふとなりといへるは、かなはず、

父秀宗身まかりての秋寄風懷舊　秀能

露をだに今はかたみのふぢ衣あだにも袖をふくあらし哉

めでたし、詞めでたし、今は露をだにかたみとおもふ藤衣の袖なるを、あだに吹ちらす嵐哉也、今はといふに心をつくべし、つねには袖の露けきをば、いとふわざなるに、今はなり、

母の思ひに侍ける秋法輪寺にこもりて侍けるに嵐のいたく吹ければ　俊成ノ卿

うき世には今はあらしの山かぜにこれやなれゆくはじめざらむ

めでたし、詞めでたし、法輪寺は、嵐山に有、歌の意、うき世にはあらじ、今はのがれむと、思ひたつころなれば、此嵐や、程なく此山にかくれ住て、嵐になれゆくべき、はじめならんとなり、

定家ノ朝臣の母みまかりて後秋のころ墓所ちかき堂にとまりてよみ侍ける

まれにくるよはもかなしき松風を絶ずや苔の下に聞らむ

めでたし、まれに來てきくだにかなしき、この松風の音を、苔の下にて、夜どに絶ずや聞らむと也、

十月ばかり水無瀬におはしましゝ比、前ノ大僧正慈圓のもとへ、ぬれて時雨のなど、のたまひつかはして、つぎの年の神無月、無常の御うたあまたよみ玉ひて、つかはしける中に、

太上天皇御製

思ひ出るをりたく柴の夕けぶりむせぶもうれし忘れがたみに

おもひ出るをりふしといひかけ玉へるなり、忘れがたみは、けぶりとなりしかたみ也、

雨中ノ無常

なき人のかたみの雲やしぐるらむ夕の雨に色は見えねど

朝雲暮雨の意なり、又初二句は、けぶりとなりしなごりの雲の意をもかね玉へり、ふるき抄に、我ちぎりたる雨ならば、色も有べきに、ちぎらねば、色もなきなりといへるは、ひがことなり、結句は、それとしるき色は見えねどなり、

權中納言通家ノ卿の母かくれ侍にける秋攝政の許につかはしける　俊成ノ卿

かぎりなきおもひのほどの夢のうちはおどろかさじと歎きこし哉

通家卿は、光明峯寺殿也、ほどのといひ、うちはといへる、重なりて聞ぐるし、結句もくちをし、

かへし　攝政

見し夢にやがてまぎれぬ我身こそとはるゝけふも先悲しけれ

めでたし、若紫ノ巻「見てもまたあふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるゝわが身ともがな、みし夢とは、人の夢のごとはかなくなりにしをいふ、やがてはそのまゝになり、まぎるゝは、その夢とともにはかなくなるをいふ、

無常のこゝろを　慈圓大僧正

きのふみし人はいかにとおどろけど猶ながきよの夢にぞ有ける

三の句、どをぞとある本は、ひが寫しなり、ぞにては聞えず、きのふまで世に有し人の、けふはなくなりたるをば、こはいかにとおどろきながらも、なほえ無常をさとらず、長きよの夢にまよひゐるよと也、長き夜の夢、佛經の詞なり、おどろけどゝいひて、猶長きよの夢といへる、おもしろし、人はといへる、はもじの意は、人のうへをばの意なり、

よもぎふにいつかおくべき露の身はけふの夕ぐれあすの明ぼの

めでたし、二の句にてきれたり、夕暮曙、ともに露の縁なり、ふるき抄に、いつかおくべきといひたるも、まだ末久しきやうなれば、忍ひかへして、けふのゆふ暮あすの曙もしらぬといふ哥也といへるは、おもひかへしてといへるまで、いみしきひがとなり、いつかおくべきといふが、すなはちけふ明日もしらぬよしなるをや、

我もいつぞあらましかばとみし人を忍ふとすればいとゞそひ行

拾遺「世中にあらましかばとおもふ人なきがおほくもなりにけるかな、あらましかばと思ふとは、其人の世にあらば、とあらむかくあらんと、事にふれておもひ出るをいふ、こゝの歌の二の句のともじは、しのぶといふへかゝれり、見し人を、あらましかばとしのぶなり、結句は、本哥の下ノ句の意にて、我もいつ其數にいらむとなり、いつぞとは、前の哥の、蓬生にいつかおくべきの意とおなじ、

前參議教長高野にこもり居て侍けるが病かぎりにならぬときゝて賴輔ノ卿まかりけるほどに身まかりぬときゝてつかはしける　寂蓮

尋ね來ていかにあはれとながむらむ跡なき山の峯のしら雲

詞書、賴輔ノ卿は、教長卿の兄なり、初句、きては、行ての意なり、すべて今の詞ならば、ゆきてといふべきを、昔はきてといへる多し、峯のしら雲は、けぶりとなりしなごりの意あるべし、

なげく事侍ける人とはずと恨み侍ければ

西　行

あはれとも心におもふほどばかりいはれぬべくはとひこそはせめ

初句、ともはたゞとゝいふ意にて、もはそへたるのみなり、されど此もはよくもとゝのはず、せんかたなさときこゆ、然るを此もにまどひて、初句を四の句へかけて注したるは、いはれず、二の句へつゞきたる詞なるをや、ほどばかりと重りたるもいかゞ、結句もよわし、

覺快法親王かくれ侍りて周忌のはてに墓所にまうでゝよみ侍りける　慈圓大僧正

そこはかと思ひつゞけて來てみればことしのけふも袖はぬれけり

初句に、墓といふことをこめたり、但しそこはかとなくとこそいへ、そこはかとおもひつゞけてといへるは、聞えぬことなり、上下のかけあひもなき哥なり、

離別哥

守覺法親王家ノ五十首ノ歌に　藤原ノ隆信ノ朝臣

たれとしもしらぬ別のかなしきは松浦のおきを出るふな人

松浦は、もろこしへ渡る海なれば、誰ともしらぬ人のわかれも、かなしとなり、

遠き所に修行せむとて出たちける人々わかれをしみてよみ侍ける　西　行

たのめおかむ君も心やなぐさむとかへらむことはいつとなくとも

詞書、別をしみけるにとか、ければとかあるべきことなり、上句、二三一と句を次第して見べし、たのめおかんは、いつのほどは歸らむと契りおくなり、君もといへるに、我もの意あるべし、

さりともと猶あふことをたのむ哉しでの山路をこえぬわかれは

めでたし、

題しらず　俊成卿

かりそめの旅のわかれとしのぶれど老は涙もえこそとゞめね

めでたし、かりそめの旅と、引つゞけて見る時は、ちかき旅なり、又かりそめのと切て、旅の別と見る時は、死ぬる別にむかへていふなり、老はとあれば、さも聞ゆるなり、忍ぶは、かなしさをおさへしのぶ也、結句は、旅行人をえとゞめぬに、涙をもえとゞめぬなり、

定家朝臣

忘るなよやどる袂はかはるともかたみにしぼる夜はの月影

めでたし、詞めでたし、二三の句は、又こと人と契をかはして、今かたみにしぼる、我袂はかはりて、こと人の袂にやどるともなり、

かたみには　たがひになり、「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ、

云々、一首の意は、又と人とかたらひをなして、袂はかはるとも、今かたみにしぼりあひて、わかれをゝしむ此袂に、やどれる月影をば、わするなとなり、わかれゆく人の哥にて、とゞまる女によみかけたる意なり、

羇旅歌

守覺法親王ノ家ノ五十首ノ歌に旅　俊成卿

夏かりのあしのかりねも哀なり玉江の月の明がたの空

下句めでたし、二の句のもゝじを思ふに、此哀なりは、時所のけしきをめでたるかたと聞ゆ、もしかなしきかたならば、かりねぞ哀なる、と有べきと也、後拾遺「夏かりの玉江のあしをふみしだき云々、

立かへり又も來てみむまつしまやをしまのとまや波にあらすな

定家朝臣

とゝへよおもひおきつの濱ちどりなく〳〵出し跡の月影

いとめでたし、詞めでたし、古今に「君をおもひおきつの濱に云云、此本哥は、たゞ君を思ひて歎きつといへるにて、おきつのはまへいひかけたるにはあらざるを、こゝの歌は、思ひおくといひかけたり、思ひをのこしおきて、別れ來つるなり、跡の月影は別れこし方の空に見ゆる月也、さる故に、わかれ來つる跡の事を、語りて聞せよと、其月にむかひていへるなり、旅の情あはれなり、或抄に、とゝへよとは、千鳥にいひかけたるなりといへるは、かなはず、千鳥は、たゞなく〳〵といはむ料のみなり、

家隆朝臣

野べの露浦わの浪をかこちてもゆくへもしらぬ袖の月影

いとめでたし、詞めでたし、上句、やどれる月影の、袖にとまらぬ事を、露や波にかこつなり、露波の、袖にかゝるをかこつにはあらず、一首の意は、袖にやどれる月を旅ねのなぐさめに見つるを、其月も袖にとまらぬををしみて、やどしたる露や波に、かこちうらむれども、つひにその月影は、ゆくへもしらず、きえにしよしなり、ゆくへもしらぬといへる、旅によせある詞なり、ふるき注どもは、いふにたらぬひがことなり、

題しらず　西行

都にて月をあはれと思ひしは數にもあらぬすさび也けり

旅にて見る月のあはれさにくらぶれば、都に在て見しあはれさは、物のかずにもあらぬ、すさびにて有しよとなり、すべてすさびとは、まめやかに心をいれてするにはあらで、たゞ何となくはかなくすることをいふ、手ずさび口ずさびなどのたぐひなり、此すさびを、すまひと書る本は誤なり、

月見ばと契りて出し故郷の人もやこよひ袖ぬらすらん

故郷をわかるゝ時に、月見ばたがひにおもひいでむと、契りおきし人も、こよひわがごとく月を見て、おもひ出て、袖ぬらすらむかと也、

五十首歌奉りし時　家隆朝臣

あけば又こゆべき山の峯なれや空行月の末のしら雲

めでたし、白雲の下に、°はもじをそへて、其下へ上句をつゞけて心得べし、

雅経

ふるさとのけふの面影さそひこと月にぞ契るさよの中山

めでたし、別れしまでの面影は、月にうかべども、其後のおもかげは、いかならむしられず、戀しきほどに、今日の面影をさそひきて、見せよと也、佐夜ノ中山は、さやの中山なれども、此集の此に至りては、夜の意をこむる時は、さよの中山とよめり、今はなべて然いふなり、

和歌所ノ月十首ノ哥合の次に月　前ノ旅　攝政

忘れじと契りて出し面影はみゆらむ物をふるさとの月

三四の句は、我面影の、故郷に見ゆらむ也、結句は、故郷人の見る月なり、さて四の句、物をといへるは、さりとも我をわすれはせじ、思ひ出らむといふ意なるべし、されど此詞、少しおだやかならず、

旅のうた　慈圓大僧正

東路のよはのながめをかたらなむ都の山にかゝる月影

初めに、此ノ我ヵといふ事を添て心得べし、

百首ノ歌奉りし時　宜秋門院丹後

しらさりし八十瀬の浪を分過てかたしく物はいせの濱荻

旅のやうをもしらで、さま〴〵ならはぬ事どもの多きをいへる哥也、しらざりしといふに心をつくべし、波を分といふこと、鈴鹿川には、少し似つかぬこゝちす、

式子内親王

ゆく末は今いく夜とかいはしろの岡のかやねに枕むすばむ

めでたし、本哥、万葉一に「君が代もわが世もしれやいはしろの岡のかやねをいざむすびてな、君が代もわが世もしれやとあるにつきて、今我ヵ行末の旅ねは、又今いく夜ならむとなり、本哥のよは、代なるを、夜にとりなし玉へるなり、二三のつゞき、いはむといひかけたるにはあらず、二の句より結句へつゞけり、

松がねのをしまが磯のさよ枕いたくなぬれそあまの袖かは

上句詞めでたし、

千五百番ノ歌合に　　　　俊成ノ卿ノ女

かくてしもあかせばいく夜過ぬらむ山路の苔の露のむしろに

初句のしはやすめとばにて、かくても也、二三の句は、あかせばあかされて、いく夜過ぬるらむなり、

攝政ノ家哥合に羇中ノ晩ノ嵐　　　定家朝臣

いづくにかこよひは宿をかり衣日も夕ぐれの峯の嵐に

詞つゞきめでたし、

旅のうた

旅人の袖ふきかへす秋風にゆふひさびしき山のかけはし

秋風夕日山のかけはし、おの〳〵と〳〵にて、たがひに何のよせもなく、其うへに、三の句より下、旅人の縁もなし、かやうにただ物をあつめて、けしきをいひならべたるは、玉葉風雅のふりにちかし

家隆朝臣

故郷にきゝし嵐の聲もにずわすれね人をさやの中山

めでたし、詞めでたし、わすれねは、わすれよかしといふ意なり、此ねを、ぬと書る本共は誤也、結句は、さやといふ詞にいひかけたり、さやは、さやらにやはなり、一首の意は、嵐の聲も、故郷にて聞しには似ず、かはりたるに、さのみやは故郷人をわすれず、戀しのぶべき、今は故郷人の事を、忘れよかしと、我心にいふなり、又おもふに、上句、あらしの音さへかはりぬれば、人の心もさぞかはりつらむ物を、といふ意もあるべきか、哥ぬしの心はかりがたし、

雅經

白雲のいくへの峯をこえぬらんなれぬ嵐に袖をまかせて

あらしに袖をまかせてとは、嵐のふくまゝに、ふかれてゆくをいふ、

家長

今日は又しらぬ野原に行くれぬいづれの山か月はいづらむ

初句、又は下へつけて心得べし、日々にかはる意あり、下句、月の出る方さへしれぬさま、あはれなり、

和歌所ノ哥合に羇中ノ暮　　　俊成卿女

故郷も秋はゆふべをかたみにて風のみおくるをのゝしの原

初句もも゚じは、遠くへだゝり來ぬる故郷もの意也、二三の句は、秋はかならず夕暮に風の吹ものなれば、其夕風が形見にて、故郷のかたより、我をおくり來るよしなり、風のみといへるは、風より外には、故郷のかたみとすべき物なきよしなり、さてのみの

下へ、はもじを入て心得べし、小野のしの原は、風に緣はあれども、少しはたらかぬこゝちす、

雅經

いたづらにたつや淺間の夕けぶり里とひかぬる遠近の山

いとめでたし、いたづらにとは、宿かるべき里のけぶりならば、しるべとなるべきに、これは山の上のけぶりにて、里とふしるべにもならざる故にいふなり、夕けぶりは、宿かるべき時をいへり、をちこちとは、本歌の詞をもていへるにて、かなたこなたの山を、見わたしたるさまなり、

宜秋門院丹後

都をばあまつ空こきかざりき何ながむらむ雲のはたてを

めでたし、本歌「夕暮は雲のはたてに物ぞおもふ云々、此本哥によりて、雲のはたてといへるにて、夕暮になる也、天津空本歌の詞也、

秀能

草枕ゆふべの空を人とはゞなきてもつげよはつ鴈の聲

めでたし、上句は、わが旅の夕のさまを、故鄕人のとはゞ也、空とは、鴈の緣にて、其時のけしきをもいへり、鳴てもつげよとは、かなしきよしを告るをいふ、かなしきさまを見て、人の告るには、泣るゝ物なれば也、なきてといふを、輕く見ては歌の魂なし、

旅のこゝろを　　有家朝臣

ふしわびぬしのゝをざゝのかり枕はかなの露や一夜ばかりに

詞めでたし、四の句、露の、心なくいふかひなきを、はかなしといへりと聞ゆ、よのつねにいふはかなしの意にては、聞えがたし、一夜ばかりには、一夜ばかりなるにの意なり、ふしもかりも一よも、さゝの緣なり、一首の意は、たゞ一夜ばかりのかりねなれば、露も心すべきとなるに、しげくおきて、かやうにふしわびさするは、さても心なくいふかひなき露かなといへるなり、

石清水ノ歌合に旅宿ノ嵐

岩がねの床にあらしをかたしきてひとりやねなむさよの中山

旅のうた　　藤原業清

たれとなき宿の夕を契りにてかはるあるじをいくよとふらん

めでたし、詞もめでたし、誰となき宿の夕へとは、或抄に、夕になれば、たれとなくやどれば、かくよめりといへるも、さることなり、又思ふに、たれとなきは、宿のあるじのとにてもあるべし、さては四の句とかけ合よろしきなり、夕を契にてとは、ゆふべになれば、必やどるべきを契にてといふ意なり、

羇中ノ夕　　長明

枕こていづれの草にちぎるらむゆくをかぎりの野べの夕暮

三の句、ちぎらましとこそいふべけれ、らむにては、ふる郷人などの、旅なる人のうへを、思ひやりてよめるやうにて、かなひがたし、四の句も、「ゆきとまるをぞやどゝさだむる、といへる意とは聞ゆれども、行をかぎりとのみにては、ことたらはず、

東のかたへまかりける道にてよみ侍ける　　民部卿成範

道のべの草の青葉に駒とめて猶ふるさとをかへり見る哉

めでたし、二三の句調めでたし、此人は、信西が子なりければ、平治のみだれに、老たる母いときなき子をとゞめおきて、東の國に流されて、くだらるゝ時の哥也、後拾遺に増基法師が「都のみ歸り見られて東路を駒のこゝろにまかせてぞゆくとよめるは、駒のあへしらへなきを、これは草の青葉にとゝいへるなど、めでたし、

旅のうた　　秀能

さらぬだに秋の旅ねはかなしきに松に吹なり床の山風

四の句、山風の松にふくにつきて、故郷人の我をまつらむと、おもひやらるゝ意なるべし、

攝政ノ家ノ哥合に秋ノ旅　　定家朝臣

忘れなむまつとなつげそ中〳〵にいなばの山の峯の秋風

本歌「立わかれいなばの山の云々、初句は、故郷のことをおもへばくるしきほどに、いかでわすればやとおもふなり、然るを故郷人の待ときかば、わすれがたかるべきほどに、中々にさな告そとなり、中々には、なまじひになり、二の句の上へうつして心得べし、故郷人のまつといふたよりは、うれしかるべきとなれども忘れんと思ふには、妨となれば、なまじひにまつとな告そと也、此哥、秋ノ旅といふ題なるに、秋風といへるのみにて、秋の意なしいかゞ、

百首ノ哥奉りし時旅の哥　　家隆朝臣

契らねど一夜は過ぬ清見がた波にわかるゝあかつきの雲

清見がたに旅ねして、曉に立わかるゝ時に、浪のうへに雲もわかるゝを見て、思へるやう、あの雲と契りはせざりしかど、一夜は此浦に諸共にあかしぬるとよとなり、但し二の句、一夜はもろともにあかしぬといふとを、過ぬといへるは、たしかならず、されど、ちぎらねどゝいへるにて、然聞えたり、

千五百番ノ歌合に

故郷にたのめし人も末の松まつらむ袖に波やこすらん

めでたし、下句は、我をまちわびて、袖に涙のながるらむといふ

意なり、結句、心やかはりぬらんといふやうに聞ゆれども、其意にはあらず、末の松とおけるは、まつらむと詞をかされて、浪こすといはむ料のみにて、波こすは、たゞ涙のながるゝをいふなり、浮舟巻に「浪こゆるころともしらで末の松まつらんとのみ思ひける哉、三四の句は、此哥によれゝど、意はとなり、二の句、人もといへる、もゝじにて、我涙を流すとしられたり、

入道前ノ關白ノ家ノ百首ノ歌に旅のこゝろを　　俊成卿

難波人あし火たく屋に宿かりてすゞろに袖のしほたるゝ哉

めでたし、あし火たくやに、すゝといふことをよむは、万葉十一に「なには人あし火たく屋のすしたれど云々、とあるによれり、すしたるは、煤びたることなり、こゝの哥は、その煤を、すゞろにといひかけたり、ふるき抄に、すゝは芦の緣語也といへるは心得ず、

述懐百首ノ哥に旅

世中はうきふししげししの原や旅にしあれば妹夢にみゆ

こは旅のうきに、又妹が夢に見えて、さま〴〵うきふしのしげきといふ意なるべけれど四の句のやう、其意にかなひがたくや、されど右の意にあらでは、二の句のしげしといふこと聞えず、

天王寺にまゐり侍ける時にはかに雨のふりければ江口に宿をかりけるにかし侍らざりければよみ侍りける　　西行

世中をいとふまでこそかたからめかりのやどりををしむ君哉

めでたし、四の句は、旅の宿に、此世をかりのやどりといふをかねたり、

かへし　　遊女妙

世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

めでたし、宿かしまゐらせざるは、たゞしか〳〵と思ふのみにこそあれ、をしむには侍らずと也、

和哥所にてをのこども旅の哥つかうまつりけるに　　定家朝臣

袖にふけさぞな旅ねの夢もみじ思ふかたよりかよふ浦風

めでたし、さぞなとは、夢もえ見ざらむとを、かねておしはかりていふなり、さて夢の見えんにこそ、風をもいとふべけれ、とても夢は見ゆまじければ、思ふかたより吹來る風なれば、我袖にふけとなり、浦といへる、緣なきがごとし、山にても野にても同じ事なれば也、但し須磨ノ卷に「戀わびてなくねにまがふ浦なみは思ふかたより風やふくらむ、とあるにより玉へるなるべし、

家隆朝臣

旅ねする夢路はゆるせうつの山關こはきかずもる人もなし

下句、ことさらにいへるなれど、同じやうの意かさなりて、わづらはし、關にあらずは、もる人のなきと、いふにや及ぶ、

詩を歌に合せ侍けるに山路秋行こいふこころを

定家朝臣

都にも今や衣をうつの山ゆふ霜はらふつたの下道

めでたし、詞めでたし、霜ふりて寒き山路の夕暮に、故郷の夜寒をも思ひやりて、今や衣うつらんとなり、霜をはらふとて、手して衣をたゝくさまと、衣うつさまと、似たるにつきて、思ひやれる意も、あまりのにほひにて、おもしろし、うつの山につたの下道をよむは、伊勢物語の詞によれり、

長明

袖にしも月かゝれこは契りおかず涙はしるやうつの山ごえ

下句詞めでたし、月をかゝれとは、涙の縁をもていへるにて、かくあれといふをかねたり、四の句は、月影の袖にかゝる故を、我はしらず、涙はしれりやと、問かけたる也、さて此歌、月の縁の詞なし、うつの山の縁もなし、

慈圓大僧正

立田山秋ゆく人の袖を見よ木々の梢はしぐれざりけり

秋ゆく人は、秋の比こえゆく人なり、袖を見よとは、袖の色の深きを見よといへるにて、例の紅の涙也、下句は、この袖の色にくらぶれば、木々の梢のもみぢしたる色は、いと淺かりけりといふことを、しぐれざりけりといへる也、立田山といへるにて、下句は紅葉なることをしらせたり、又袖を見よを、たゞ涙のおつること の甚しきよしとして、それにくらぶれば、時雨は物のかずならず、といふ意ともすべし、さやうに見る時は、木々の梢といへるは、かろくして、たゞ時雨のあへしらひのみなり、猶前の意なるべし、

東の方へまかりける時　　西行

年たけて又こゆべしこ思ひきやいのちなりけり佐夜の中山

古今に、「年毎に花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり、

旅のうた

おもひおく人の心にしたはれて露分る袖のかへりぬる哉

思ひおく人とは、故郷人をいふ、のは《が》の意なり、心は我心也、袖のかへるとは、色のかはるをいひて、故郷にかへるといふ縁なり、野べの草葉などなくて、露わくるといふと、よせなく聞ゆ、

新古今集美濃の家つと四の巻

戀哥　一

和哥所歌合に久忍戀　　攝政

いそのかみふるの神杉ふりぬれど色にはいでず露も時雨も

結句は、露にも時雨にもの意なり、されば三の句は、年をへてふるくなりたる意にて、露時雨のかたは、詞の緣のみなり、露もしぐれも降ぬれどゝつゞく意にはあらず、さては詞とゝのはず、

小野宮歌合に忍戀　　太上天皇御製

我戀は眞木の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいでめや

時雨の下へ、如くといふ詞をそへて心得べし、

百首哥奉りし時　　慈圓大僧正

わが戀は松をしぐれの染かねて眞葛が原に風さわぐなり

めでたし、二三の句は、人のつれなき意、下句は、うらむる意なるべし、

家の哥合に夏戀　　攝政

空蟬の鳴音やよそにもりの露ほしあへぬ袖を人のとふまで

めでたし、詞いとめでたし、空蟬は、なくねといひ、森といはむ料なり、一首の意は、袖をほしあへず、人のあやしみとふ迄に、な

きぬらしたれば、さだめて此なくねも、よそにもりやすらんとなり、結句、人のとふ迄になりぬればと、詞をそへて心得べし、たゞに上へかへりて、人のとふまで鳴音やもりぬらむと、つゞけて見ては聞えず、さては詞もとゝのはざるなり、空蟬卷に、「うつせみの羽におく露のこがくれて忍び〳〵にぬるゝ袖かな、

寂蓮

思ひあれば袖にほたるをつゝみてもいはゞや物をとふ人はなし

本歌「夕されば螢よりけにもゆれども光見ねばや人のつれなき、「つゝめどもかくれぬものは云々、下句は、下上にうちかへして、物をとふ人はなし、いはゞやといふ意也、されどつゝみていはゞやとつゞくやうに聞えて、まぎらはしきいひざま也、一首の意は、我は螢のもゆるが如くなる思ひあれば、人の見てとひもやすると、螢を袖につゝみてあれども、本哥のごとく、光見ねばや、とふ人はなく、そのかひもなければ、今はたゞにかくと、言に出ていはゞやとなり、

水無瀨にてをのこども久戀といふことをよみ侍りしに　　太上天皇御製

思ひつゝへにける年のかひやなきたゞあらましのゆふぐれの空

本歌後撰に、「おもひつゝ經にける年をしるべにてなれぬる物は

こゝろなりけり、上二句に、此本哥のすべての意をこめてよませ給へるなるべし、さればたゞあらましとは、本哥のなれぬるものは心なりといへるによれり、すべてあらましとは、ゆくさきのことを、とせむかくせんと、かねて心に思ひまふくるをいへり、上句の意は、あはむ〳〵と、年をへて心におもひなれぬるかひやなきなり、三の句、かひもなく又はかひぞなき、などはあらで、や。とあるは、末つひにかひなくてやゝみなむの意なり、

百首哥の中に忍戀　式子内親王

玉の緒よたえなば絶ねながらへばしのぶることのよわりもぞする

めでたし、上句めでたし、もぞのてにをはの意、言葉の玉緒にいへるがごとし、

わすれてはうち歎かるゝゆふべ哉我のみしりてすぐる月日を

初句は、我のみしりて、その人はしらぬことゝいふことを忘れては也、とぢめのをは、なるものをの意なり、

我戀はしる人もなしせく床の涙もらすなつげの小まくら

本哥、「我戀は人しるらめや敷たへの枕のみこそしらばしるらめ、「枕より又しる人もなき戀をなみだせきあへずもらしつるかな、

百首歌奉りしに　摂政

かぢをたえゆらのみなとによる船のたよりもしらぬ沖津塩風

本歌「ゆらのとをわたる船人云々、湊によるたよりもしらぬ、といへるのみにて、さのみ本哥の意にことなるともなきは、いかにぞや、

題しらず　式子内親王

しるべせよ跡なき浪にこぐ船のゆくへもしらぬ八重のしほ風

本哥「しら波の跡なきかたに行舟も風ぞたよりのしるべなりける、これも本哥とことなる意なし、そのうへ大歌は、三の句のもじにて、戀の哥と聞ゆるを、此御哥は、戀ときこゆべき詞なし、

和哥所ノ哥合に忍戀　摂政

難波人いかなるえにかくちはてむあふことなみに身をつくしつゝ

二三の句、江を縁の意にとりて、終にいかなる縁にかくちはてんとなり、初句は江といひ、浪といひ、みをつくしといはん料に、戀する我身をさしていへるなれど、難波人のくちはつるといふ詞の、いかにぞや聞ゆるなり、

隱名戀　俊成卿

海士のかるみるめを波にまがへつゝなぐさの濱を尋ねわびぬる

めでたし、二三の句は、海邊なる海松(ミル)めの、浪に隱れて、見らしなひたる意にて、たとへたる意は、一度逢見つれども、その人や

どをも名をも隠せる故に、誰といふことをとめらしなひたる也、下句は、なぐさに、名といふことをもたせて、宿をも名をも尋ねわびぬとなり、上にぞ共やともいはで、ぬるととまりたるは、變格にて、尋ねわびぬるとよと、うち歎きたる意のてにをは也、さて此歌、くさ〲まぎらはしきとあり、まづ此前後はみな、いまだ逢ざる戀の哥のみなれば、是もそのこゝろかと思へど、もしいまだ逢ざる意ならば、名を隠すは、此方の名を隠すとなるべきに、さては下句聞えがたし、さればこれは必、かなたの名を隠す意なるに、さては又いまだあはぬさきにはいかゞなり、さればかならず逢見たる後の哥なるに、こゝに入たるは撰の誤なるべし、さて又二三の句を、彼方よりまがへたるとゝ見ては聞えず、其故は、下句は此方の事なるに、つゝといひてつゞけたれば、上の句も、必こなたの事ならでは、詞つゞきかなはず、近き世の人は、すべてかやうのわきまへをしらず、よく〱心をつくべし、又見るめをなみとつゞきたるは、逢事のなきといふやうにきこゆれども、そのいひかけにはあらず、これまたようせずはまぎれぬべし、

戀歌　二

五十首ノ歌奉りし寄雲戀　　俊成卿女

下もえにおもひ消なむけぶりだに跡なき雲のはてぞかなしき

めでたし、上二句は、煙の縁にて、忍ぶ戀にこひ死ぬる意、煙はなき跡のけぶり也、跡なき雲とは、いづれかけぶりのなれるともわかれず、なべての雲になりはてゝ、煙は跡もなくなれるをいふ、一首の意は、此世にて思ふ人にもしられず、いたづらに消るのみならず、けぶりの末だに、跡もなき雲となりなむとのかなしきとなり、

攝政ノ家ノ百首ノ哥合に　　定家朝臣

なびかじなあまのもしほ火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも

くゆるといふ詞を、くゆりとはたらかして用ひられたるを、難じたる、俊成卿の判に、うつろうつりとゞまるとゞまりなどを、例に出されたるは、くはしからず、くゆるは、これらとは格の異なる詞なり、ゆるといふ詞に、ゆりとはたらく例はなきとなり、見ゆる聞ゆるを、みゆり聞ゆりなどはいはぬをもてわきまふべし、されどくゆるは、源氏物語などにも、くゆらせとも、くゆりともいへる例あれば、難にはあらず、なびかじなと、こなたより定めたるこそ、いかゞとは聞ゆれ、

百首歌奉りし時戀哥　　攝政

戀をのみすまのあま人もしほたれほしあへぬ袖の果をしらばや

しらばやといへる、似つかはしからず、袖のはてをしらばやとねがふは、何の心ぞや、

戀のうたとて　　二條院讃岐

みるめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへなみのしたにくちぬる

めでたし、「しほみてば入ぬるいその草なれや云々、礒の草の、波の下に入ぬるのみならず、袖さへといふ趣意なり、此ぬるも、ぬることよと、歎きたるてにをはなり、

左大將に侍ける時家の百首哥合に忍戀　　攝政

もらすなよ雲ゐる峯のはつ時雨木葉は下に色かはるとも

二の句に忍びかくす意あり、三の句は、はじめて逢たる意、下句は、今より後、おもひは深くなりぬともといふこゝろ、もらすなよとは、逢たる人にいふなり、此歌、題も忍戀なり、哥のさまも、いまだ逢ざる戀のごとく聞ゆれども、さてはもらすなよとはいひつくべき人なし、みづからいましむるならば、もらさじなとこそあるべけれ、

戀のうた　　殷富門院大輔

もらさばや思ふ心をさてのみはえぞやましろのゐでのしがらみ

めでたし、四の句、やまじといふには、ぞふじてにをはかなはぬやうなれど、これは山城へいひかけたるなれば、難ならじ、えもといひてはよわし、

和歌所哥合に忍戀　　雅經

きえねたゞしのぶの山のみねの雲かゝる心のあともなきまで

めでたし、初句は、ひたぶるにおもひ死ねと、うちすてゝいふ詞にて、死ねを、雲の縁にてきえねとはいへるなり、さてかゝる所にいふたゞは、すべてひたぶるにといふ意にて、俗言にいつそのことにといふがごとし、かゝるは、かやうなるにて、忍びて思ふをいふ、心の跡もなきまでとは、なき跡に、執着の念ものこらぬまでに、きえはてよなり、

千五百番哥合に　　通光卿

限あればしのぶの山のふもとにも落葉がうへの露ぞ色づく

めでたし、詞めでたし、初句は、忍ぶも、しのばるゝかぎりの有て、つひには忍びはてられぬ物なれば、といふ意にいへるなり、麓といへるは、落葉のよせにて、又忍ぶ山をはなれて、あらはれたる意をもこめたるべし、さて梢の紅葉にても、おなじことなるべきに、落葉といへるは、程をへてはてにはといふ意也、又落葉とのみにてもたりぬべきに、露をいへるは、涙の色の、つひには紅になれるよしにて、涙の色のかはらぬほどは、しのぶれども、紅

になりては、え忍びあへぬ意なり、詞どに其意よくかなひて、露ばかりもいたづらなるとめまじらぬ哥也、すべて歌は、かやうにいたづらなる詞をまじへず、一もじといへどもよしあるやうによむべきわざぞかし、

ながめわびそれとはなしに物ぞおもふ雲のはたての夕暮のそら

本歌、「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ云々、それとはなしにとは、本哥のやうに、天つ空なる人をこふとにはあらでといふ意なり、或抄に、さしてつらしともうらめしともなく、と注せるは、いみしきひがことなり、

雨のふる日女につかはしける　　俊成卿

おもひあまりそなたの空をながむれば霞をわけて春雨ぞふる

四の句、たゞ何となくいへるとゝも聞えず、されど其意いまだ思ひえず、もしことなるよしなくは、詮なきいひごと也、

水無瀬戀十五首哥合に　　攝政

山がつのあさのさ衣おさをあらみあはで月日や杉ふけるいほ

本歌、「すまのあまの塩やき衣おさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ、万葉に、「杉板もてふける板目のあはざらば云々、此二首を合せて、間遠にあれや君がきまさぬの意もて、あはでといひ、月日の過るを、杉ふける庵といひかけたるなり、月日のとあるべきを、やと疑ひたるは、たゞ語の勢ひをあらせんためのみか、やにては、行末をかけておもひやる意になる也、杉ふける庵とゝぢめたる、本歌の詞にはあれども、庵は上にいさゝかも縁なければ、無用のはなれものなりいかゞ、然るを或抄に、本哥のとりあはせよろしとて、ほめたるは心得ず、此杉ふける庵、衣に縁あることならばこそ、よくとりあはされたりとはいふべけれ、これは上句と四の句とは、よくとりあはされたれども、二三の句と結句とは、さらにかけあはぬなことなるをや、すべて古への名高き人の哥といへば、よくかなへりやかなはずやをも、くはしく考へず、みだりにほめはやすは、後世諸注家のくせなり、そはまことにはよしやあしやをも、えわきまへず、くはしきことをもえしらずて、たゞおしこめて、古人の哥は、及びがたき物とのみ、みづから も思ひ、人にもおもはせて、まぎらかしたるもの也、然るを今歌をまなぶ輩、一すぢにこれを信じて、古への哥はみなすぐれて、手のつけられぬ物とのみ思ひおくゆゑに、そのわろき所を見しることもあたはず、又すぐれたる味を、まことにさとることもあたはず、さるからすべてよきあしきけぢめをわきまふることあたはざれば、みづからも、よき哥をばえよみいでぬぞかし古への名高き人たちといへども、その歌こと〴〵くよき物にはあらず、わろきもま

じり、又よき哥にも、疵もあるわざなれば、たとひ人まろ貫之の歌なりとも、よしやあしやを、及ばぬまでも、考へこゝろむべきとなり、つねに然するときは、おのづからよきあしきけぢめは見ゆる物にて、かのみだりなる注釋などには、惑はぬわざぞかし、こは事のちなみにいさゝかいふなり、

百首歌奉りし時　　俊成卿

あふ事はかた野の里のさゝの庵しのに露ちるよはの床かな

しのには、しげくといふ意にて、さゝの縁の詞なり、此哥、初句をのぞけば、二の句より下は、戀の哥にあらずいかゞ、さゝの庵とある故に、たゞさゝの庵の歌とこそ聞ゆれ、

入道前關白右大臣に侍ける時の百首哥に忍戀

ちらすなよしのゝは草のかりにても露かゝるべき袖のうへかは

詞めでたし、初句は、もらすなよの意なるを露の縁にて、ちらすなよとはいへる也、しのゝといふに、しのぶといふをこめたり、かりにても は、かりにもなり、一首の意は、何となくては、かりにもかやうに袖に露のかゝるべきならねば、かならず戀すと、人に見とがめらるべければ、心して、此露をちらしもらして、人に見とがめらるまじきぞとなり、然るをちらすなよとあるは、人にいひつくる詞なればいかゞ、これはみづからちらさじとおもふをいふなれば、ちらさじよとこそあるべけれ、

夕戀　　秀能

もしほやくあまの礒屋の夕烟立名もくるし思ひたえなで

題の夕の意はたらかず、

海邊戀　　定家朝臣

須磨のあまの袖に吹こす塩かぜのなるとはすれど手にもたまらず

「なれゆけばうき世なればやすまの海士の塩やき衣間遠なるらむ、といふ哥をとりて、衣を風にかへて、風は袖になれても、手にとられずといへるにて、大かたには馴たる人の、逢がたきをたとへたる也、結句は、いせ物語の哥に、「とりとめぬ風にはありともとあるがごとし、二の句、吹こすは、ふくとのみにてよろしき哥なるを、こすといふとあまりて聞ゆ、ふるき抄に、二三の句を、あだ人によせてよめりといへるは、かなはず、

攝政家歌合に　　寂蓮

ありさてもあはぬためしの名取川くちだにはてねせゞの埋木

めでたし、本哥「みちのくにありといふなる名とり川なき名とりてはくるしかりけり、「名取川瀬々のうもれ木云々、初句は、初の本哥の二の句の詞を、いきながらへて有とてもといふに取なせる、おもしろし、二の句は、なき名とりてはとあるを、あはぬた

めしといへる也、四の句のだには、死ぬるとを願ひはせねども、あはでなき名をたてられむよりは、死なりともせよといふ意なり、

千五百番歌合に　　攝政

なげかずよ今はたおなじ名取川瀨々のうもれ木くちはてぬ共

二三四の句は、「今はた同じ難波なる云々と、「瀨々の埋木あらはれば云々とを、とり合せ玉へり、さて今はた同じとは、今も既にうき名をたてられたれば、朽はてたるも同じとぞといふ意なり、然れば此うへたとひくちはつとても、歎きはせずとなり、

攝政家百首哥に　　高松院右衞門佐

よそながらあやしとだにも思へかし戀せぬ人の袖のいろかは

百首歌に　　式子内親王

夢にても見ゆらむ物をなげきつゝうちぬるよひの袖のけしきは

上二句、下とかけ合とうとし、二の句を、見せばや人にといひて、とぢめををとかへば、たしかにかけ合べし、けしきとよめる、此集のころの歌におほし、

千五百番哥合に　　攝政

身にそへる其面影も消なゝむ夢なりけりとわするばかりに

めでたし、夢なりけりといふ詞のいきほひは、夢にて有けるよといはむがごとし、

五十首歌奉りし時　　前大納言忠良

たのめおきし淺茅が露に秋かけて木葉ふりしく宿の通路

本哥いせ物語、「秋かけていひしながらもあらなくにこ葉ふりしくえにこそ有けれ、秋かけてといへる、本歌の詞なれば、なくてかなはざれども、此歌にてはかなひがたし、其故は、すべてかけてとは、前より後をかくることをいふ詞なれば、秋かけては、夏より秋をかけてにて、俗言に、秋へむけてといふ意なるに、木葉ふりしくは、時節たがへれば也、木葉は、夏より秋へかけてちる物にはあらざるをや、よみぬしの心は、木葉は、冬の初メちる物なるが、秋の末よりもかつ〴〵ちる意にや、されどさやうに後より前をかくるとを、かけてといふ例は、ふるくはなきとにて、ことわりもかなはず、

百首歌の中に　　通具卿

我戀はあふをかぎりのたのみだにゆくへもしらぬ空のうき雲

本歌、「わが戀はゆくへもしらず云々、本哥には、あふをかぎりと思ふとある、そのたのみだになきよし也、浮雲は、ゆくへもしらずきえゆく物なれば也、千五百番哥合、顯昭判に、空のうき雲といふ詞いかゞといひて、負としたるは心得ず、

水無瀬戀十五首歌合に春戀　　俊成卿女

面影のかすめる月ぞやどりける春やむかしのそでのなみだに

いとめでたし、面影のかすめる月とは、月を見れば人の面影のかすみて見ゆる、其月をいふ、春やむかしの袖とは、つゞめていはば、さきに逢見し人のことを、戀しのぶ袖といふ意なり、そは既に春部にいへるごとく、此集の頃、かのいせ物語の、月やあらぬの哥の、一首の意、其歌ぬしの其時の心を、春や昔の、といふ一句にこめてとれる例なり、

冬戀　　定家朝臣

床の霜まくらの氷きえわびぬむすびもおかぬ人のちぎりに

きえわびぬとは、身も心もきゆるごとく、かなしくわびしきをいふ、きえもむすびも、霜と氷との縁、おかぬも、霜の縁なり、下句、たゞ縁の詞のみにて、させる深き心もなければ、上句の思ひの甚せつなるにかけあはず聞ゆ、

攝政家百首歌合に曉戀　　有家朝臣

つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじ有明の空

めでたし、つれなさのたぐひとは、有明の月は、つれなき物にいへば、人のつれなきたぐひなるをいふ、までとは、「大かたは月をもめでじ、といふ本歌のごとく、老となるがつらきのみならず、人のつれなきたぐひ迄がつらきとなり、六百番歌合に、右方申云、本歌は、月をつれなしといひたりとは見えず、曉に人をつれなしといひたりとこそ見えたれ、いかゞといへるは、かへりていかゞ、本哥といへる忠岑が哥の、つれなく見えしは、顯昭注に、有明の月は、明るもしらずつれなく見えしなりといへるを、定家卿も、其意にこそ侍らめと注し玉ひ、契沖も同心にて、それにあはずしてかへす人のつれなき體をかねてよめる哥なるべしといへる、まことに其意なるをや、

宇治にて夜戀といふことををのこどもつかうまつりしに　　秀能

袖のうへに誰ゆゑ月はやどるぞとよそになしても人のとへかし

四の句は、よその事になしてなりともといふ意、人は思ふ人なり、或抄に、此涙は、君ゆゑなれども、それとは君がしるまじければ、たれ故ぞと、よそになしてもとへかしと也、といへるは、なしてといふ詞にかなはず、すべてかやうのなすといふ詞は、さはあらぬことを、しひてそれになすをいへば、よそになしてとは、我故とはしりながら、よそのことになしてといへるにこそあれ、

家の百首歌合に祈戀　　攝政

いく夜われ浪にしをれてきぶね川袖に玉ちる物おもふらむ

めでたし、下句詞めでたし、本哥和泉式部、「物おもへば云々、」おく山にたぎりて落る瀧つせの玉ちるばかりものなおもひそ、此本哥の玉ちるは、物おもふ心をいへるを、こゝの四の句は、涙を主として、それに本哥の意と、川浪のかゝるとをかねたり、

定家朝臣

年も經ぬいのる契ははつせ山をのへのかねのよそのゆふぐれ

二の句以下めでたし、詞もめでたし、下句、尾上の鐘なる故に、よそに遠く聞ゆる意にて、よそとつゞけたり、さてよその夕暮とは、よその人の、入相のかねに、來る人をまちてあふ意也、さてそれは、わが祈る契なるに、わが祈りは、しるしなくしてよその人のあふ契なるよと也、そのよその人にあふ人は、わがおもふ人なり、こはいとめでたき歌なるに、年も經ぬといへると、はたらかず、かけ合へる意なきは、くちをし、

片思　　俊成卿

うき身をば我だにいとふいとへたゞそをだに同じ心とおもはむ

上句人のいとふにつけて思へる心にて、いとへたゞといへるただは、ひたぶるにといふ意也、うき身とは、賤き身をいふ、賤き者は、うきこと多ければ也、人のいとふにつきておもへば、我はいやしき身なれば、我ながらみづからすらいとふなれば、人のいとふはことわり也、よしやこのうへは、人もいよ／＼ひたすらにいとへと也、下句は、我は人を思ふに、人は我を思はざるは、同じ心ならざるに、せめては我をいとふ心をなりとも、我とおなじ心ぞと思ひて、なぐさめんとなり、だにといふ詞二ッ有、上なるはすらの意、下なるはなりともの意也、

題しらず　　殷富門院大輔

あすしらぬ命をぞ思ふおのづからあらばあふ夜を待につけても

めでたし、下句詞めでたし、本歌拾遺、「いかにしてしばし忘れむ命だにあらばあふよのありもこそすれ、初二句は、明日死なむもしられぬ命なるを、かなしくおもふなり、おのづからあらばは、あらばおのづからといふ意にて、あらばゝ、命のあらばなり、あふよをまつとは、あふよもあらむかと待をいふ、さてかやうのおのづからは、俗言に、もし自然としか／＼の事あらばといふ意、又たまさかに自然としか／＼の事のあるなどいふ意也、歌に此類のおのづから多し、心得おくべし、

西　　行

思ひしる人有明の世なりせばつきせず物は恨みざらまし

人有明といひかけ、つきせずに月をいへる、いやしきたくみに

て、いとうるさし、そのうへ有明の月、此哥にいさゝかもよせなきと也、

戀哥 三

百首哥に　　式子内親王

あふ事をけふまつがえの手向草いくよしをるゝ袖とかはしる

本歌万葉一に、「白波のはまゝつがえのたむけぐさいくよまでにか年の經ぬらむ、初二句、からうじてはじめて今夜と契りて、逢事をまつなり、しをるゝは、草に縁あり、下句、はじめて逢たる時にいふべきさまにて、こよひとまつ時のさまにはうとし、或抄に、逢戀の哥也といへるは、二の句のまつといへる詞にかなはず、しをるゝといふも、まだ袖のかわかぬほどの詞なり、もし逢ていふならば、しをれしとこそいふべけれ、

題しらず　　西行

あふまでの命もがなとおもひしは悔しかりけり我こゝろかな

逢見て後、いよ／＼思ひのいやまされるにつきておもへば、いまだ逢ざりしほどに死たらむには、かゝる思ひはあるまじき物を、あふまであらむ命を願ひしは、今おもへば悔しとなり、古き抄に、あひぬれば、又いつまでもと命の惜くなりぬれば、あふまでの命と願ひしは、悔しといへるなりといへるは、初二句の詞のさまにすこしかなはず、てにをはのはこびを、こまかに味ふべし、歌ぬしの心、もし其意ならば、「あふまでとをしき命を思ひしは、といひてこそよろしき也、ともじとをもじとを思ふべし、をしきといふ詞も、今は惜きにて、悔しといふにかけ合べし、然るをあふまでの命もがなといひては、たゞいかにもして、あふまではながらへむと願ふ意なるを、

二條院の御時暁かへりなむとする戀といふことを　　其院讃岐

明ぬれどまだきぬ／＼になりやらで人の袖をもぬらしつるかな

題しらず　　西行

面影の忘らるまじきわかれかななごりを人の月にとゞめて

人のといへる詞、いかにぞや聞ゆ、袖のとあらば、難なく、心も深かるべし、其故は、袖の月といへば、涙にうつれる月なるが、その月をとゞめてといへば、いつまでも涙のかわかぬ意もこもれば也、

後朝戀　　攝政

又もこむ秋をたのむの雁だにも鳴てぞかへる春のあけぼの

めでたし、だにもといへるにて、戀の哥になる也、たのむは、頼むに田面をかねたり、一首の意は、春の曙に、又来む秋を頼みて別

るゝ、田面の鴈すら、かなしとて鳴て歸るものを、まして又いつ逢むといふ頼みたき此わかれはとなり、さて此御歌は、すなはち春の曙に別るゝをりしも、歸る鴈の聲をきゝて よみたる意に見ば、下句のさまいよ〳〵感情深かるべし、

題しらず　　藤原知家

これも又長きわかれになりやせむ暮をまつべき命ならねば

これもは、此今朝の別も也、又とは、此別がやがて又ながき別にもなりやせむといふ意なり、

西行

有明はおもひ出あれやよこ雲のたゞよはれつるしのゝめの空

四の句は、横雲の縁に、たゞよはれといへるにて、意はやすらはれつる意なるべし、此哥三の句より下は、はやく有し事にて、初二句は、それを今有明の空に思ひ出たる意なるべし、

西行法師人々によませける百首哥に

定家朝臣

あぢきなくつらき嵐の聲もうしなど夕暮にまちならひけん

初句は、三の句の次へうつして心得べし、一首の意は、まつ人の來ぬ夕暮には、嵐の音まで、つらくうきにつけて、我は何とてあぢきなくかやうに 人をまちならひつるとぞとなり、つらき嵐といひて、又うしとは、わづらはしきいひざま也、すべてあぢきなくといふは、俗言に、いらざると、無益のとゝいふ意也、此哥にては、とてもきもせぬ人をまつは、いらざるむやくのとゝいへる也、下句を古き抄に、いかなる人の、夕にはまちならひけむといへるは、ひがごとなり、

戀御哥とて　　太上天皇御製

たのめずは人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月

三の句とは、ともの意也、結句は、やすらひてねぬとを山の縁に、いさよひの月とよませ玉へるなり、

水無瀬戀十五首哥合に夕戀　　攝政

何故と思ひもいれぬゆふべだにまち出しものを山の端の月

待出しとは、此哥にては、わざと月をまちて出たるにはあらず、物おもひて、ながめをするほどに、月の出たるをいふ、一首の意は、何故とさして思ひいれたる事もなかりしほどだに、おのづから月の出るまで、ながめはせし物を、まして今は、思ひ入たる戀に、あけくれながめのみして、月の出るを見ぬ夕暮もなしと也、

寄風戀　　宮内卿

きくやいかにうはの空なる風だにもまつに音するならひ有とは

めでたし、下句詞めでたし、聞やいかにとは、云々のならひ有といふ事をば、聞及び玉へりやといふに、其風の音を聞ことをもかねたり、うはの空なるは、俗言にいふと同じ意にて、何の心も情もなき風といふ事にて、空をふく縁の詞なり、まつに音するは、松の梢に音するを、人待ところには音づるゝ事にとれり、契沖云、此發句、人をことわりにいひつむるやうにて、女の哥には、殊にいかにぞやある也、きくや君といはゞ、まさらむと申す人侍きといへり、まことにいかには少しいひ過して聞ゆる也、

題しらず　　八條院高倉

いかゞふく身にしむ色のかはるかなたのむるくれの松風の聲

後拾遺、「松風は色やみどりに吹つらむ物思ふ人の身にぞしみける、といへる哥によりて、松風はもとより物思ふ人の身にしむ物なるが、たのめたる暮には、又常よりもまさりて身にしむとなり、しむの縁に色といひて、かはるとは、色の常よりも深くなるなり、いかゞふくとは、いかやうにふくとぞといふ意なり、たのむるは、たのめしとあらまほし、此哥、初句のくもじと、二の句のむもじと重なりて、詞がらのびやかならず、すべてくすつぬふむゆるのもじ、かやうに重なる時は聞よからず、

長明

たのめおく人もながらの山にだにさよふけぬれば松風の聲

だにといへるにて、戀の哥となれり、我はましてたのめおきたる人のあれば、まつ心のせつなる事を、思ひやれとの意なり、さよふけぬればとは、夜のふくるまで、まつ人の來ぬにつけていへる意なり、松風は、例の待意にとれる也、さて松風の聲とゝぢめたるは、此集のころのさまなれども、これは我ヵ待ッ事のなぞらへにいへるなれば、松風ぞふくとあらまほしきなり、聲といひては、よその事のなぞらへのやうにきこゆ、

秀能

今こむとたのめしことをわすれずは此夕暮の月やまつらむ

本歌「今こむといひしばかりに長月の云々、こゝの哥は、本歌をうちかへして、こなたよりたのめおきしことゝ聞ゆ、さるはちかきほどに參らむとたのめおきつれども、さはり有て、えゆかぬにつきて、こよひなどは、其人の必我を月出ば來むとまちて、月の出るをまちやすらむと、おもひやれる也、又結句は「月まつと人にはいひて云々の意によりて、たゞに我をまちやすらんの意にもあるべし、たのめしを、あなたよりたのめたるにしては、下句おだやかならず、

待戀　　　　式子内親王

君まつとこ閨へもいらぬ槇の戸にいたくなふけそ山の端の月

本哥「君こずはねやへもいらじ云々、「云々槇の板戸もさゝずねにけり、或抄に、「足引の山より出る月まつと云々を本哥にてよめりといへるは、かなはず、此山端の月は、入かたの月なれば也、

戀のうたとて　　　　西行

たのめぬに君くやとまつよひの間の更ゆかでたゞ明なましかば

三の句以下は、更行となく、よひの間のまゝにて、早く明たらばといふ意にて、其下へ、うれしからむといふ意をふくめたる格なり、うれしからむと思ふゆゑは、たのめもせぬ人なれば、とても來るとは有まじきに、來や〳〵と夜ふくる迄かやうに待んとは、いとくるしかるべきに、早く明たらば、待心のやむべければ、うれしかるべきなり、此歌、戀の情にあらず、趣意のよろしからぬ哥なり、

　　　　定家朝臣

歸るさの物とや人のながむらんまつよなが〔ら〕のあり明の月

めでたし、我はまつ夜ながらに、むなしく明ゆく此有明の月を、よその人は、思ふ人に逢て、かへるさのものとや見るらむと、うらやみたる也、或抄に、有明の月のかなしさは、別れてかへるさの物とばかりや、人の思ふらん、といへるは、二三の句の詞にかなはず、

攝政家百首哥合に契戀　　　　慈圓大僧正

たゞたのめたとへば人のいつはりをかさねてこそは又もうらみめ

たゞたのめは、とやかくと疑はず、たゞひたすらに我がいふとをたのめと、契る人にいふ也、たとへばといふは、いまだ其事のなき時に、もししか〳〵の事あらむに、といふ時につかふ言也、此つかひざま、此ころの物には、たゞの文にもをり〳〵見えたり、此哥にては、いまだ僞を重ねはせざるに、もし此後いつはりのかさなる事あらば、其時にこそといふ意也、人は、こゝにては、我をいふ、かたのうへよりいへば、我は人なり、結句は、又とは、上のかされてといふにかけ合たり、然れば此哥は、人の恨むるにつきていへる意にて、今までの事は、ともかくもあれ、今より後は、ただ我を頼み玉へ、此うへ我ヵ僞リの重なりたらむにこそ、又も恨み玉はめといへるなり、或抄に、たとへばを、たとへば人に僞有とも、まづたゞたのめと注したるは、かなはず、

題しらず　　　　小侍從

つらきをもうらみぬ我にならふなようき身をしらぬ人も社あれ

我こそ、わがうき身のとがに思ひなして、君がつらきをも恨みね、その恨みざるにならひて、よきことゝ思ひて、人につらくあたり給ふなよ、人は我ごとくには、おもひなだめぬこともあらむにとなり、うき身をしらぬことは、我はうき身なればといふことをわきまへぬをいふ、

殷富門院大輔

何かいとふよもながらへじさのみやはうきにたへたる命なるべき

めでたし、人のつれなきまゝに、死なばやと思ふにつきて、又思ひかへして、さやうに何かは我身をいとはむ、かばかりの人のうきには、堪て長くはえあるまじき我命なれば、いとはずとても、よもながらへはせじ物をと也、或抄に、初句を、何かは我をいとひ玉ふと、つれなき人にいふ意なり、と注せるは、たがへり、さては命といへることつたなし、我身などこそあるべけれ、命といひては、我命を人のいとふ意になるをや、

西行

身をしれば人のとがとも思はぬにうらみがほにもぬるゝ袖かな

かこちがほなるわが涙かなといへる哥と、同じさまなり、

女につかはしける　俊成卿

よしさらば後の世とだにたのめおけつらきにたへぬ身とも社なれ

めでたし、我は、君がつらきにえ堪ずて、死ぬることもあるべければ、よしや此世にてはつれなくとも、さらば後の世に逢んとだに、契りおけとなり、

かへし　定家朝臣母

たのめおかむたゞさばかりを契りにてうきよの中の夢になしてよ

めでたし、然らば後の世を契りおくべきほどに、たゞそればかりを、此世にての縁にはして、今迄逢見し事は、夢に思ひなして、今逢がたきことを恨み玉ふなとなり、契は、俗にいふ縁の意也、さてたゞ世の事をもうき世といひて、うきといふにはさのみ意なきも、つねのことなるを、此哥のうき世は、うきといふことはたらきたり、此哥によりてみれば、思ひながら、逢事のなりがたかりし中と聞えてあはれ也、

戀哥四

題しらす　後徳大寺左大臣

うき人の月は何ぞのゆかりぞとおもひながらもうちながめつゝ

めでたし、二三の句詞めでたし、何ぞのは、何のにて、月はうき人の何のゆかりぞ、なにのゆかりにてもなきにとは思ひながらも、うちながめつゝ、かこたるゝことよと也、

西行

月のみやうはの空なるかたみにて思ひもいではこゝろかよはむ

月は、うはの空なる形見にて、さてたゞひに思ひ出たらむ時に、心の通はむ形見は、其月のみにやあらんといふ意なり、にてといふに心をつくべき哥也、

くまもなきをりしも人を思ひ出て心と月をやつしつるかな　八條院高倉

くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人のおも影

下句詞めでたし、

百首御哥の中に　太上天皇御製

わするゝ身をしる袖のむら雨につれなく山の月は出けり

下句は、むら雨には、空かきくもりて、月は見えぬ物なるに、わが袖の村雨には、さはらず、さりげもなく出たると也、つれなくとあるに、我袖の涙を、あはれともおもはず、しらずがほに出たる月をもかこつ意あり、

千五百番哥合に　攝政

めぐりあはむかぎりはいつとしらねども月なへだてそよそのうき雲

「わするなよ程は雲ゐになりぬとも云々、結句は、我ならぬ人にあふたとへなり、うき雲といふも用ありて聞ゆ、さて四の句は、こと人にあひて、我中のさはりとなるなといふ意にて、下句は、

落着はと人になあひそといふ意也、

我なみだもこめて袖にやどれ月さりとて人の影は見えねど

下句詞めでたし、「さりとて人にそはぬ物ゆゑ、「さりとて人のしらぬ物故、二三の句いうならず、

權中納言公經

戀わぶる涙や空にくもるらむひかりもかはるねやの月かげ

光もとは、人の契のかはりたる意を聞せたる也、光と影とはいかが、

通光卿

いくめぐり空ゆく月もへだてきぬ契りし中はよその浮雲

めでたし、詞めでたし、本歌のごとく空行月のめぐりあふ迄と、契りおきしは、よその契りになりて、我との中は、へだゝりて、其月も、いくめぐりか經ぬれども、逢こともなしと也、雲は、月もへだてきぬの縁なり、

通具卿

今こむと契りし事は夢ながら見し夜にゝたる有明の月

めでたし、下句詞めでたし、本哥「今こんといひしばかりに云々、とよめる時の意にて、有明の月をまち出て見てよめる意也、かやうに見ざれば、初句の詮なし、夢ながらとは、跡もなく夢の如

くになりぬれどもといふ意也、見し夜とは、逢し夜といふ意なるを夢の縁の詞にて、見しといへる也、

有家朝臣

忘れじといひしばかりの名殘とてその夜の月はめぐりきにけり

めでたし、「わするなよ程は雲井に云々、此本哥の初句も、わするなよ我も忘れじと、たがひにいへる意こもりたれば、それをとりて、わすれじとゝいひても、たがへるとなし、二の句のばかりは、月の所へもひゞきて、おのづからその夜の月ばかりはといふ意に聞ゆ、

題しらす　　攝政

思ひ出てよな〳〵月に尋ねずはまてと契りし中やたえなむ

初二句は、うちかへして、よな〳〵月に思ひ出ての意也、月見れば、夜毎に思ひ出るよしなり、よな〳〵たづぬるにはあらず、此所ようせずはまがひぬべし、尋ぬとは、月を見て、まてといひし人の許へおどろかしやるをいふ、そは月夜には必來べきほどにまてとのたまひしが、こよひはいかに、來玉ふべしやとやらに、いひやるなり、さてさやうにをり〳〵おどろかせばこそ、其人も思ひ出て、とひ來ることもあれ、さもせずは、人はわれ果て、絶やせむとなり、古き抄に、我は忘れず、よな〳〵尋ね行て、わすれ玉ふなと、たび〳〵いさめたるよしなりといへるは、すべていとつたなし、よな〳〵尋ね行てといへる、殊に俗意なり、すべてたゞとぶらふとを、尋ぬるとはいはず、尋ぬとは、たとへばさきだちて行し人の跡をとめてゆくやうの意、或は早く有し事の跡をとめ求るやうの事などにいへり、人を尋ぬといふも、さきにあひし跡を尋ねて行意也、尋の字の義を考て知べし、此哥にては、早く契りおきし跡をたづねて、おどろかしやるなり、

家隆朝臣

忘るなよ今は心のかはるともなれしその夜のあり明の月

有明の月を、わするなよといへるにて、然いふがすなはちむかしの契をわするなといふ意也、

秀能

人ぞうきたのめぬ月はめぐりきて昔忘れぬ蓬生の宿

初句は、うきものは人也といふ意にて、ぞもじ重し、めぐりきてとは、本哥のめぐりあふまでの詞にて、人は昔の契のかはりたる意をこめたるものなり、

八月十五夜和歌所にて月前戀　　攝政

わくらばに待つるよひもふけにけりさやは契りし山のはの月

初二句は、まれにたま〳〵こむと契りて待宵も也、四の句は、月

の山端にかたぶくまでまてとは契らざりしなり、

有家朝臣

こぬ人をまつとはなくて待よひのふけゆく空の月もうらめし

月ものもゝじは、まつとはなくてといふよりを受たり、まつとはなくて待よひにも、更行月はうらめしといへる意なり、或抄に、月もを、來ぬ人のうらめしきをこめたる也と注せるは、かなはず、さてはまつとはなくてといふこと詮なし、

定家朝臣

松山と契りし人はつれなくて袖こすなみにのこる月影

めでたし、下句詞めでたし、上句は、「君をおきてあだし心をわがもたば云々、と契りし人はつれなく、其契のかはりて也、四の句は、涙にて、かの本歌の詞也、又「かたみに袖をしぼりつゝの哥をも思はれたるなり、又こす波といふ詞に、契のかはりたるよしをこめたり、結句のこるといへるはたらきたる詞也、契は絶て、月影のみ殘りて、忘られぬつまとなるよしなり、

千五百番哥合に　俊成卿女

ならひこしたが僞もまだしらでまつとせしまの庭のよもぎふ

めでたし、下句詞いとめでたし、千五百番哥合に、四の句ののもじ、にとあり、さてはことなくおとれり、上句、ならひこしとは、世のならひとなり來りしといふ意にて、契をたがふる僞は、世のならひになり來りしなれども、我は其ならはしのたが僞も、いまだしらずして也、またしらでとは、その僞にいまだあはぬをいふ、下句は、それ故人の契りしことをまことゝ思ひて、まつとせし間に、はやく人は僞にて、とひも來ずして、かくのごとく庭は蓬生とあれたりと也、「我宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせし間に、或抄に、上句を、人はたが僞をならひ來て、いつはりするやらむ、わがならはぬ事なれば、まだしらでと也といへるは、笑ふべし、

經房卿家歌合に久戀　二條院讃岐

跡たえて淺茅が末になりにけりたのめし宿の庭のしら露

二三の句は、後拾遺に、「物をのみ思ひしほどにはかなくてあさぢが末に世はなりにけり、といふをとりて、庭のあれたるさまをかねて、露も淺ぢが末におくやうになりたりと也、

攝政家百首哥に　寂蓮

こぬ人をおもひ絶たる庭の面の蓬が末ぞまつにまされる

すべては、「たのめつゝこぬ夜あまたに成ぬればまたじと思ふぞまつにまされる、とあるを本哥として、其歌の意なるを、三四の句は、心得がたし、もしは庭の蓬の、いたく立のびて、松よりも高

くなりたる意にいひかけたるにや、もし其意ならばいかゞ、すべて物を甚しくいひなすは、つれのとながら、蓬の松よりも高くなれるとは、あまりなるいひざま也、

題しらす　通光卿

たづねても袖にかくべきかたぞなき深き蓬の露のかごとは

めでたし、蓬生ノ巻に、「尋ねても我こそとはめ道もなく深きよもぎの本のこゝろを、といへる哥をとれり、尋ぬるは、上にいへるごとく、昔の事をもとめ出て、いひ出る也、本歌に、本のこゝろをとあるにても知べし、蓬といふから、露といひ、露といふから、袖にかくべきとはいへるにて、二三の句は、かこち恨むべきかたぞなきといふ意也、深き蓬の露のかごとは、深き蓬生の宿とあれて、露しげきをいひたてゝ、恨むるをいふ、一首の意は、今は早く通ひし跡もなく、蓬生となれる宿にて、其人はたえてとひもこず、たよりも絶ぬれば、昔の契をいひ出て、君がつれなくなれるによりて、かく宿はあれはて侍りぬと、かこち恨むべきやうもなしと也、

藤原保季朝臣

形見こそほのふみ分し跡もなしこしはむかしの庭のをぎはら

めでたし、下句詞めでたし、二の句のほのは、三の句へかゝれり、ほのかなる跡もなしの意なり、むかしのは、昔になりしといはむがごとし、一首の意は、人の通ひこしは、昔になりぬる庭の荻原なれば、ふみ分し昔の形見とて、ほのかにのこれる跡だにもなしと也、荻原といへるは、上句に、古歌のより所などある歟、いまだ考へず、もしさるともなくは、蓬生とあらむぞまさるべき、

攝政家百首哥合に　定家朝臣

わすれずはなれし袖もやこほるらむねぬよの床の霜のさむしろ

床の霜の寒きさむしろに、ひとりねられぬにつけて、思ひやれる意にて、我を忘れずは、馴し人の袖も、此我袖のごとく、こほりやすらむと也、我袖のこほる意は、下句にそなはれり、

家隆朝臣

風ふかば峯にわかれむ雲をだに有し名残の形見ともみよ

上句「風ふけば峯にわかるゝ白雲の、とある古歌の詞によれり、有しなごりは、別れし曉の横雲の名殘也、但し上にいへる、別れむ雲は、よこ雲のとにはあらず、いつにても、風吹て峯に別れむ雲を見ば、それをだに也、だにといへるは、今は逢べきよしもなければ、せめてはそれを見だにせよの意也、名殘のかたみとは、名殘と思ひて、形見とも見よといふ意也、されど何とかや同じとの重なりたるごとく聞ゆ、

百首哥奉りし時　　　攝政

いはざりき今こむ迄の空の雲月日へだてゝものおもへとは

いはざりきは、人のいはざりし也、然れどもわがいはざりしやうに聞えていかゞ、二三の句、むつかしきやうなれど、よく聞えて、いとたくみなるいひざま也、そはまづ月日へだてゝといへるは、月日を經て、久しくあはぬとなるを、それに空なる月日をへだつることをかねて、空の雲とはいへる也、雲は月をも日をもへだつる物なれば也、さてそれを、今こむまでのといへるは、今近き程に來むとこその玉ひつれ、それ迄のあひだの空の雲に、月日をへだてゝ、待久しく物思へとはのたまはざりし物をといひかけて、恨むる心なり、さて又雲に物思ふといふよせあり、「夕暮は雲のはたてにものぞ思ふ、などあるごとく、月日を經て、夕暮ごとに待て物思ふ意也、

千五百番哥合に　　　家隆朝臣

思ひいでよたがかねごとの末ならむきのふの雲の跡のやま風

詞めでたし。昨日の空とは、風の吹はらひて、消うせて、今日はなき雲をいひて、早くの契の絶たる譬也、跡の山風とは、雲をば昨日吹はらひて、其跡に今も殘りて吹風をいひて、かねごとせし人の、つれなくしらずがほにてあるたとへなり、さてかくいへるは、雲を昨日殘りなく吹はらひたるは、たがしわざにもあらず、此、山風のしわざなるぞ、といふ意をいはん料也、一首の意は昨日の雲の跡にふく山風につけても、はやくのかねごとをおぼし出て、我かく物思ひするを、あはれとおぼせ、今かく絶はてたる契は、たがかね言の末にて侍るぞ、君がかねごとの末にては侍らずやといひて、とがめたる也、かねごとの末とは、かねて契りおきつる事の行末をいひて、此哥にては、其人のかね言の末とほらずして、今契りの絶たる所をさしていへり、千五百番哥合顯昭判に、源氏物語に、「見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつましき哉、もし此哥の心歟といへれど、さらによせ有とも聞えず、

題しらす　　西行

うとくなる人を何とて恨むらむしられずしらぬをりも有しを

今ぞしる思ひ出よと契りしはわすれむとてのなさけなりけり

思ひ出るは、忘れたるうへのこと也、もし忘らるゝことなければ、常に思ふなれば、思ひ出るといふことはなき故に、かくはよめり、此歌の趣にては、二の句、思ひ出むとゝいはでは聞えず、出よにてはたがへり、

建仁元年三月歌合に逢不遇戀　　土御門内大臣

逢見しは昔がたりのうつゝにてそのかねごとを夢になせとや

めでたし、詞めでたし、逢見しとは、昔語になりて、今はなごりもなけれど、それは猶うつゝにてありし物を、其時のかねごとをば、夢になせとにやとなり、二三の句、たゞうつゝといひては、今も逢見ることのあるごとく聞ゆるを、むかしがたりのうつゝといへる、おもしろし、

権中納言公経

あはれなる心のやみのゆかりとも見し夜の夢を誰かさだめむ

めでたし、詞めでたし、下句の詞殊にめでたし、「君やこし我や行けむ云々、かへし「かきくらす心のやみに云々、此二首をとれり、あはれなる心は、人をあはれと思ふ心也、夢を、心のやみのゆかりといふは、まづ逢と見る夢は、あはれとおもふ心から見れば、心のゆかり也、さて夢は、よる見る物なれば、闇のゆかり也、四の句は、一夜逢見し事也、結句は、本哥には、世人定めよとあれども、此夢を、わが人をあはれと思ふ心のやみのゆかりぞとは、誰か定めむといへるにて、落着は、わがかく深く思ふ心のやみを、思ふ人のおしはかりて、またあへかしと願へども、人はさもあらじと、歎きたる意也、見し夜の夢を定むるは、本哥に、夢うつゝとはこよひ定めよとあるを以て、又逢事にとれるにて、心のやみのゆかりと定むるは、人のわが深く思ふ心をおしはかりて、又逢をいへり、

通具卿

契りきやあかぬ別に露おきしあかつきばかり形見なれとは

露おきし云々とは、別れし時の涙の如く、今も曉ごとに袖をぬらす、それぱかりが形見にてあれとは、契らざりし物をと也、おましといへる詞、形見に残しおきし縁有、

寂蓮

恨みわびまたじ今はの身なれども思ひなれにし夕暮のそら

めでたし、下句詞めでたし、上句、恨みわびぬれば、今は待まじき身なれどもの意なり、二の句、今はまたじを、打かへしていへる也、すべて詞を、あるべきまゝにいひぐたしてよきと、下上にうちかへしていひてまさるとのけぢめあり、心得置べし、四の句、待なれにしといふ意なるを、思ひなれにしといへるは、待といふと、上にある故に、詞をかへていひて、上なる待を、こゝへもひゞかせて聞せたる格也、此格もつねに有こと也、心得おくべし、下句は、待なれたる夕暮なれば、今もまたずにはえあらずといふ意なり、

宜秋門院丹後

忘れじの言の葉いかになりにけむたのめし暮は秋風ぞふく

めでたし、下句詞めでたし、二三の句、秋風のふけば、木葉はちりうする物故にいへり、秋かぜは、人のこゝろに秋の來て、とひこぬよしなり、

家の百首哥合に　　攝政

思ひかねうちぬるよひも有なましふきだにすさべ庭の松風

めでたし、初句は、まちわびての意なるを、下にまつかぜとある故に、例の詞をかへたる也、四の句は、吹ゆるびだにせよなり、庭の松風の音に、しきりに待心をもよほす故に、ねられもせぬよしなり、

有家朝臣

さらでだに恨みむと思ふわぎも子が衣のすそに秋風ぞふく

「わぎも子が衣のすそを吹きかへし云々の哥をとりて、裾を風の吹かへせば、裏の見ゆるを、恨みといふにとれる也、此哥、詞のうへのたくみのみにて、情はなし、ついでにいふ、この本哥の初句、わがせことある本はわろし、

題しらす　　式子内親王

今はたゞ心の外にきくものをしらずがほなるをぎのうは風

二三の句、こぬまでも人のまたれしころは、夕暮の荻の上風につけても、心をいためしかども、今は來ぬものになり果て、待るゝ思ひもなければ、たゞ心の外に聞物をと也、しらずがほなるとは、さとはしらずがほに、今も猶むかしのまゝにふく事よ、といふ意なり、

家の哥合に　　攝政

いつもきく物とや人の思ふらむこぬ夕暮のまつかぜのこゑ

めでたし、こぬ夕暮の松風のこゑは、殊にいつよりも身にしみてかなしき物を、といふ意をふくめたる哥也、六百番哥合判に、こぬ夕暮、何のこぬとも聞えずや、とあるはいかゞ、上に人とある、其人の來ぬなると、あらはなる物をや、

和歌所歌合に逢不遇戀　　寂蓮

里はあれぬむなしき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞふく

下句詞めでたし、「手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞ有ける、此本哥の意は、逢し夜は、たがひの手枕のすきまの風だに、寒く覺えしを、今はひとりねのみするに、さてもねらるゝを思へば、身はならはしの物にて有けりといへる也、こゝの下句は、それをとりて、逢事も今は絶て、ひとりねのみするころの秋風なり、さて初句は、里はあれてと有べきを、あれぬといへるは、床のあたりまで、秋風の吹ばかりにあれぬといふ意なる

べく、又てにては、三の句のまでのでと重りて、少し調べもよろしからぬ故なるべけれど、あれぬといひて、秋風ぞふくとゝぢめては、詞かけあはずいかゞ、かやうにいひ切て、はもじを重ぬると、「秋は来ぬ紅葉は宿にふりしきぬ云々など、一ッの格なれど、それとは、此哥はやうかはれるをや、

水無瀬戀十五首哥合に　　太上天皇御製

里はあれぬ尾上の宮のおのづから待こしよひも昔なりけり

万葉廿、「高圓の野のうへの宮はあれにけり云々、又「高圓のをのへの宮はあれぬとも云々、これらをとらせ給ひて、此御哥にては、尾上の宮は用なけれど、里はあれぬとあるちなみに、此名を出して、おのづからと詞をかさねさせ給へる物なり、さて此おのづからは、たまさかにまれにといふ意也、上にもいへるが如し、

有家朝臣

物おもはでたゞ大かたの露にだにぬるればぬるゝ秋のたもとを

めでたし、下句詞めでたし、下句、秋の袂は、ぬるればぬるゝ物をといふ意にて、まして我袖は物思へば也、

雅經

草枕むすびさだめむかたしらずならはぬ野べの夢のかよひ路

上句は、本哥「よひ／＼に枕さだめむかたもなしいかにねし夜か夢に見えけむ、とある四の句は、いづ方にいかに枕をして寐たりし夜かといへる意也、こゝの意は、今までねならはず、方角もしらぬ野べなれば、枕を定むべき方もしられずと也、結句は、故郷の夢を見まほしく思ひての哥なれば也、通路、野べによし有、哥のおもては、たゞ旅宿の意なれ共、本哥によりて戀にはなる也、三の句いうならず、

和哥所歌合に深山戀　　家隆朝臣

さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲ふく風もみねに見ゆらむ

めでたし、二三の句詞めでたし、二の句、秋といへるは、雲吹風によし有、又人のあきの意也、四の句は、雲を風のふけば、なびく意なり、峯にといへる、見ゆらむによし有、一首の意は、ゆふは山の秋の夕暮に、風の雲を吹て、なびくけしきも見ゆらむ物を、つれなき人は、さても猶なびかずして、とひもこぬとなり、

秀能

思ひいる深き心のたより迄見しはそれともなき山路かな

いとゝきがたき哥也、されどこゝろみにいはゞ、心のたよりとは、わが思ひ入たる、深き心のほどは、たとふべき物もなきを、此み山の深きとは、我心の程をたとふべきたよりと迄、かねては

見しといふ意にて、さて分入て見れば、此山路も、さらに我心の深きには及はず、さしもなきことよといふ意也、たよりまでとは、たよりと逢の意にて、までは、それほどにまで深き山路と見しといふ意也、或注の說も、此考へと大抵は同じ、されどたよりまでといへる詞の說、たしかならず、又一ッには、み山のおくにすめる人を思ひてよめる意にて、たよりとは、心の行通ふをいひて、それともなきといふへかゝれり、たよりまでそれともなき也、見しはそれともなきとは、早く逢見し人は、心かはりて、昔の如くにもあらず、さるから我心のたよりまで、昔のごとくにはあらずなりぬる也、然いふ意は、いまだ人の心かはらで、逢見しころは、我思ひいりぬる心も、たゞ一すぢに戀しとのみ思ひしを、今は恨めしと思ふ心もそひて、昔のごとくにはあらざる也、又一ッには、「つくは山葉山しげ山云々、といふ哥の下句をとりて、はじめは、思ひいるにはさはらざりしを、今は思ひいるたより逢さはりて、むかしのやうにもあらず、といへるにもあらんか、なほ外に本哥などあるか、よく考ふべし、人といひ、深きといふは、山の縁、たよりも、山路の路に緣あり、或抄に、ふじのねのけぶりも猶ぞ立のぼるうへなき物はおもひなりけり、といふ哥と同じ意なりといへるは、はじめにいへる意か、

千五百番哥合に　　通具卿

言の葉のうつりし秋も過ぬれば我身しぐれとふる涙かな

「今はとて我身しぐれとふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり、といふ哥をとれり、然るにたゞ涙をいへるのみにて、其外は本歌にさのみかはるともなきは、いかにぞや、そのうへ秋も過ぬればしぐれとふるといふと、時節の次第はさることなれども、たとへたる戀の意のかたは、過ぬればといへるは、なにのよしぞや、上句「言の葉もうつろふ人の秋ふけて、などこそあらまほしけれ、

定家朝臣

消わびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしのもりの下露

いとめでたし、詞いとめでたし、本哥六帖に、「人しれぬ思ひするがの國にこそ身をこがらしの杜は有けれ、初句は、露の緣語にて、思ひきえてわびしき意なり、

攝政家哥合に　　寂蓮

こぬ人を秋のけしきやふけぬらんうらみによわるまつ虫の聲

初句のをもじ、六百番哥合には、のとあり、のなればことなし、をとは、此集に改めて入られたるにや、をにては、四の句へかゝれり、こぬ人を秋とはつゞかず、此哥は、やといひ、らんといへ

る、たゞ松虫のうへをのみよめるになりて、おのが戀の意をよそへたるにはなりがたし、いかゞ、松虫の聲もなどゝ、もゝじを加ふれば、戀の哥になれども、もゝじを置べき所なければ、せんかたなし、

戀の哥とて　　慈圓大僧正

我戀は庭のむら萩うら枯て人をも身をも秋の夕暮

此哥は、いかに思ひめぐらしても、心得がたし、其故は、下句秋といふを、あく心にとらざれば、二ッのをもといふ詞、落着なし、然るに身をあくといふは、さることなれども、人をもあくといふと、戀の哥に、あるべくもあらざれば也、しかれば三の句のてもじは、もしはぬを誤れるにはあらざるにや、されど拾玉集にも、てとある也、もしぬとせば、うらがれぬは、恨むといふ意にて、人をも身をも恨むる秋のゆふくれと、句をうちかへして見る也、一首の意は、秋の夕暮に、うらがれたる庭の萩をながめて思へらく、我戀は、あのむら萩のごとく、かれぬる中なれば、人をも身をも恨みしをれたりといへる也、三の句、契のかれたる意と、うらむる意とをかねたるべし、万葉十一に、「わがせこにわが戀をれば我やどの草さへおもひうらがれにけり、或抄に、人をも身をもとは、よし〳〵人を恨みじ、身をも恨みじ、といふ意也といへるは、いかゞ、うらみじといふ意は、いづくにあるにか、

被忘戀　　太上天皇御製

袖の露もあらぬ色にぞ消かへるうつればかはるなげきせしまに

四の句は、人の心のかはれるをのたまへり、二三の句は、あらぬ色にかはりてぞ消かへる也、下なるかはるを、こゝへもひゞかせて聞べし、さて消るは、露の縁にて、思ひきゆると、かへるは、消ることをつよくいへる詞なり、古き抄に、もと置しはきえて、さらにおくこと也といへるは、いふにたらず、

定家朝臣

むせぶともしらじな心かはらやに我のみけたぬしたのけぶりは

かはら屋は、瓦をやく屋也、人の心のかはれるにいひかけたり、我のみとは、人は心かはれる故にいへり、後拾遺に、「我心かはらむ物か瓦屋の下たくけぶりしたむせびつゝ、

家隆朝臣

しられじな同じ袖にはかよふともたが夕暮とたのむ秋風

おなじ袖とは、むかしも今も同じ一ッの我袖にて、人の契のかはれるにむかへて、我思ふ心の、昔にかはらず、同じき意をこめたり、かよふとも通ふといふことをもの意也、此所よくせずはまぎれぬべし、下句は、思ふ人の、今は我にはうとくなりて、よ

その人を頼みて、まつ夕暮の秋風といふ意にて、秋といふに、我方の契のかはりしとをもたせたり、一首の意は、此秋風は、むかし逢見し時の、同じ袖に今も通ひて、我は昔と同じく、戀しく思へば、身にしむ物を、思ふ人は、かくともしらじな、心かはりて、よその人を頼みて、まつ夕ぐれなればといふ意也、此哥、たがといふ事いかゞ、或抄に、たが夕暮と頼むぞやと注したり、よみぬしの意は、さも有べけれど、さては上句とかけ合がたし、これは必よその夕暮といはではかなはぬ哥なるを、さはいひがたきゆゑに、たがといひて、まぎらはしおきたる物也、又或抄に、同じ袖を、其人の袖にも、我袖にも、といへるはひがと也、

俊成卿女

露はらふ寐覺は秋の昔にて見はてぬ夢にのこるおも影

いとめでたし、詞めでたし、露はらふは涙にて、露といへるは、秋の縁なり、秋の昔とは、秋は人にあかれたる今のとにて、其今よりいへば、いまだ人のかはらで、逢見しことは、昔なるよしなり、然らばたゞむかしにてとのみいひてもよかるべきに、秋のといへるは、いかにといふに、此哥にては、秋のといふことなくては、逢見し事は昔にて、今はあかれたる意、あらはれがたければ也、一首の意は、人にあかれ忘られたるころ、夢に又逢と見たるが、見はてもせず、早くさめたる時によめる意にて、其夢さめたれば、もとのあかれたる時にて、夢に見たる逢事は、昔のことにて、たゞ其夢の面影のみ殘りて、涙をながすとなり、此哥を、契沖が、女の哥めかずといへるは、いと心得ず、【後撰「はらふばかりの露や何なり、古今「見はてぬ夢の覺る也けり、】

攝政家百首哥合に尋戀　　慈圓大僧正

心こそ行へもしらねみわの山すぎのこずゑの夕暮の空

本哥「わが庵は三輪の山本云々、上二句は、人の心の外へうつり行て、いかになれるもしられぬをいふ、心こそといへるてにをはは、やどをば尋ね來つれども、心はいかになれりとも、ゆくへしらぬよし也、三の句より下は、夕暮に其宿へ尋ねきたる意也、又は一二の句は、「我戀は行へもしらず云々をもとり合せて、あふをかぎりと思ひて、尋ね來たれども、人の心こそ、ゆくへもしらず成ぬれ、といへるにも有べし、さやうに見る時は、こその意かはるべし、本哥には、我戀は行へもしらずとあるを、是は人の心こそ也、

百首哥の中に　　式子内親王

さりともと待し月日ぞうつり行心の花の色にまかせて

本哥「色見えでうつろふ物は云々、二の句ぞもじ、もといふべき

所なれども、もうつりゆくといひては、しらべいといやしくなる故に、ぞとよみ玉へる也、下句は、人の心の花の色のうつろふままにといふ意也、

いきてよも明日迄人はつらからじ此夕暮をとはゞとへかし

いとめでたし、詞めでたし、上句は、人のつらきに堪がたければ、明日迄もえいきたるまじければ、此世に在て、人をつらしと思ふも、今日かぎりなるべしといふ意也、然るをあすまで人はつらからじ、とよみ玉へる詞のはたらき、いはんかたなし、下句は、とはむとならば、此夕暮にとへかし也、或抄に、上句を心得かねて、わが思ひのせつなるは、人もやうく見しるべきほどに、明日迄はつれなからじといへるは、いみしきひがと也、さてはいきてといへる、何の用ぞや、又下句にもかけあひがたし、此哥、いきてといふ詞、少しいうならず聞ゆれば、ありてとあるべきなれども、さては少したしかならざる故に、いきてとよみ給へるなるべし、

曉戀　　慈圓大僧正

曉の涙や空にたぐふらむ袖におちくるかねの音かな

千五百番哥合に　　權中納言公經

つくぐゝとおもひあかしの浦ちどり波の枕になくくゝぞきく

明石卷「ひとりねは君もしりぬやつれぐゝと思ひあかしのうらさびしさを、波の枕とは、涙のかゝるよしなるべけれど、三の句以下、何とかや旅泊めきて、戀の哥とも聞えず、

定家朝臣

尋ね見るつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

めでたし、詞めでたし、上句は、しのぶ山しのびて通ふ道もがな云々の意、おくの海は、万葉三に、飫ノ海とあるは、四の卷にも同人の哥に、飫宇能海とあると同じくて、出雲國の意宇ノ郡の海なるを、宇の落たる也、然るを飫ノ字は、よくの音なる故に、昔誤りて、おくとよめる本の有しによりて、かくはよみ玉へるなるべし、下句は、須磨卷に「いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけり、

水無瀬戀十五首哥合に　　雅經

みし人の面影とめよ清見がた袖にせきもる波のかよひぢ

詞めでたし、とめよは、關の縁の詞、四の句は、袖の涙を波といひて、清見がたの、縁に、關もるとはいへるにて、畢竟はたゞ袖の涙也、通ぢといへるは、關といひとめよといへる縁なれ共、哥の意に用なくていかゞ、拾遺に「むねは富士そでは清見が關なれやけぶりも波もたゝぬ日ぞなき、

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしはかりを待とせしまに　俊成卿女

めでたし、本哥「秋かけていひしながらもあらなくに云々、初二句は、袖に時雨はふりにけりの意なり、ふりは、本哥の四の句の詞にて、本哥には、木葉ふりしくとあるを、袖にしぐれのふるにかへたる也、秋かけていひしは、本哥のごとく、秋と契りしとなり、一首の意は、秋と契りしが、むなしく秋も過て、時雨はふりにけりにて、其しぐれは涙をいへり、

かよひこし宿の道芝かれぐに跡なき霜のむすぼゝれつゝ

三の句は、人のかれぐなるをかねて、跡なきは、其人の通ふ跡のなき也、

戀歌五

水無瀬戀十五首哥合に　定家朝臣

白たへの袖の別に露おちて身にしむ色の秋風ぞふく

めでたし、詞めでたし、初二句は、万葉の詞也、三の句は、涙なるを、露といへるは、秋風の縁なり、四の句は、紅の涙をいふ、身にしむとは、秋風の身にしむかたをかねたり、六帖に「吹くれば身にもしみける秋風を色なき物とおもひける哉、下句の意は、紅の涙の落るをふく風なる故に、風の色の身にしむ色に見ゆるよし也、落花の哥に、嵐も白し、などよめるは、さることなるを、戀の哥に、かく風の氣色を、たくみによまれたるは、あはれなる情はなく聞ゆ、

思ひいる身は深草の秋の露たのめし末や木がらしの風　家隆朝臣

めでたし、上句詞めでたし、深草といへるは、伊勢物語の、深草の女の意か、又思ひいるとの深きよしをもかねたるべし、三の句は、我身は草葉の露のごとく、はかなくきえぬべしといへる也、たのめし末とは、かねてたのめおきしごとくにもあらず、心のかはりたる所をいふ、さてやとうたがひたるは、たのめし末が木枯の風歟といへるなり、草の露を消しむるものは風なれば也、

野べの露は色もなくてやこぼれつる袖より過る荻のうはかぜ　慈圓大僧正

初句、例のもじあまり聞ぐるし、袖は、例の紅の涙のかゝる袖なるを、さはいはで、初二句にて、それと聞せたるもの也、一首の意は、我此袖の紅の涙を吹こぼして、過てゆく、荻の上風は、野べ迄もふき行つらんを、その野べの露は、我袖の涙のごとくなる色はなく、たゞよのつねの色の露にてこぼれたるか、いかゞあらん

と也、より過るといへる詞にて、野べゝ吹行く意聞えたり、荻の上風としもいへるは、音のかなしき物なれば也、此哥、事をたくみてよめるのみにて、戀のあはれなる情はなきうたなり、

題しらす　　通具卿

こへかしな尾花がもとのおもひ草しをるゝ野べの露はいかにこ

詞めでたし、

寂蓮

なみだ川身もうきぬべきねざめ哉はかなき夢のなごりばかりに

下句に川の縁あらまほし、

百首哥奉りしに　　家隆朝臣

逢こ見てとごこもなく明にけりはかなの夢の忘れがたみや

下句詞めでたし、忘れがたみとは、卽夢をいへるなり、夢は昔あひし時の形見なれば也、或抄に、夢の面影をかたみとする意なるべしといへるは、かなはず、もし其意ならば、二三の句を「しばしは殘る面影も、などあらでは、さは聞えがたし、

千五百番哥合に　　俊成卿

哀れなりうたゝねにのみ見し夢のながき思ひにむすぼゝれなむ

初句いうたらず、結句むすぼゝれなむとは、あはれ也と、上へかへる意なるべけれど、何とかや拍子のたがひたる心ちす、二三の句は、はかなく逢見しとをいへり、のみは、たゞうたゝねに見しばかりのといふ意也、されど此のみてふ言、見しの上にある故に、いつもいつもうたゝねにのみ見しといへるやうに聞えて、いかゞ、其意にては、下句にかけ合あしき哥なり、

題しらす　　定家朝臣

かきやりし其黑髮のすぢごとに打ふすほごはおも影ごたつ

めでたし、初二句は、ともに寐し夜、かきやりし女のかみなり、黑髮をいへるは、すぢごとと面影とのよせ也、すぢごとには、くはしくこまかにといふ意、打ふすほどゝは、今もうちふす時にはといふ意也、其女の面影の、くはしくこまかに見ゆるよしなり、

和哥所哥合に遇不逢戀　　俊成卿女

夢かこよ見し面影も契りしも忘れずながらうつゝならねば

めでたし、四の句迄詞めでたし、結句は、今は面影も見るとなく、契りし事も跡なくなりぬるをいふ、さて此哥にては、面影は常にいふとはいさゝかかはりて、其人の顏姿をいふなり、

戀のうたとて　　式子內親王

はかなくぞしらぬ命を歎きこし我かねごこのかゝりける世に

下句詞めでたし、上句は、人のかねごとの末のしられぬことをば

思はずして、たゞわが命の程のしりがたきことをのみなげきこしは、はかなかりけりと也、結句は、かくのごとくかねごとの末とほらざりける世なるにといふ意也、四の句、わがとあることいかゞ、たゞいたづらなるのみならず、わが人にいひしかねごとのごとく聞ゆるをや、此句、契りの末のなどあらばよけむ、ふるき抄に、わがゝねごとのみこそのこれ、人の契りしことは、跡もなくなりはてたることよと也、といへるは、いみしきひがことなり、

辨

過にけるよゝの契りも忘られていとふうき身のはてぞはかなき

過にけるは、契の絶て、昔になれるよしなり、よゝは世々にても、夜々にてもよし、わすられては、今は契の絶ぬることをもおもはずして也、結句、はてとは、今をいふ也、ちぎりのかはりしことを、うらみ／＼て、はてには、其事をもおもはず、たゞひたすらうき身をいとふやうになりたる也、然らば四の句、うき身をいとふとあるべきに、いとふうき身のといへるは、我身をいとふやうになりたるうき身のはて、といふこゝろにかねたる也、はかなきとは、いつまでも人をこそうらむべきに、其事をば今は思はで、たゞうき身をいとふは、はかなき事よと也、ふるき抄に、初二句を、生々世々の契といへれど、さては四の句にかけ合がたし、

崇德院に百首うた奉りしとき　俊成卿

思ひわび見し面影はさておきて戀せざりけむ折ぞ戀しき

初句、わびといへること、一首の趣にわたりて、殊に力あり、四の句を或抄に、戀といふことせざりしをりといへるは、似たることながらたがへり、これは其人をこひざりし時といふ意なり、けむと疑ひたるいかゞ、これは人のうへをいへるにもあらず、我身の昔のことなれば、けるとこそいふべけれ、又結句のをりもいかが、すべてをりとは、たしかにさす事のあるときにいふなれば、戀せしをりとはいふべく、せざりしをりとはいふべからず、こゝはほどゝこそあらまほしけれ、

新古今集美濃の家つと五の卷

雜哥上

入道前關白家百首哥に立春　　俊成卿

年暮しなみだのつらゝこけにけり苔の袖にも春やたつらむ

とし暮し涙は、年のくるゝを惜みし涙にて、おのづから老後の意もあり、

土御門内大臣家にて山家殘雪　　有家朝臣

山陰やさらでは庭に跡もなし春ぞ來にける雪のむらぎえ

庭の雪のむらぎえたるを、春の來たる跡と見て、それより外には、とひくる人の跡もなきよしなり、春ぞといへるにて、人は來ぬ意有、此哥三四の句、もなしといひて、ぞ來にけるといへる、てにをはのかけ合わろし、二三の句を、「さらでは跡もなき庭に、などやうにあらば、てにをはのかけ合よろしからんを、

近衞づかさにて年久しくなりて後、うへのをのこども大内の花見にまかりけるによめる、　　定家朝臣

春をへてみゆきになるゝ花の陰ふりゆく身をも哀れとやおもふ

めでたし、初二句は、春どの行幸に供奉しこ、なれたるよし也、近衞づかさは、必供奉すると也、三の句、陰なるゝといふによし有、さてみゆきといふに、花の雪をかねて、その緣にふりゆくといひて、我身の昇進もえせで、年のふりゆくにいひかけたり、身をものもじは、わが花の雪とふりゆくをあはれとおもふにつけて、花も又我をあはれとや思ふといふ意なり、「もろともに哀とおもへ山ざくら云々、

最勝寺の櫻はまりのかゝりにて云々　　雅經

なれ〳〵て見しはなごりの春ぞともなどしら川の花のした陰

詞はめでたし、此なごりは、今俗言にいふなごり也、此詞古へはかやうに用ひたるはなかりしを、此集のころより、をり〳〵見えたり、白川は、最勝寺のある所の名なるを、などしらざりしといふ事にいひかけたる也、されどなどゝいふと、こゝには正しくはあたらず、正しくいはゞ、なごりの春ぞともしらざりしとあるべき也、そのうへしらざりしといふことを、しら川といひては、詞たらず、しら川にては、しらんといふ意になる也、もし其意かとも思へど、などしらんといひては、此哥はよろしからず、かにかくに是はつたなきいひかけ也、すべて今よむ哥にも、物ノ名名所などへしひていひかけむとて、詞をいひまぐると多し、よく心得お

くべきとなり、

こもりゐけるころ、後徳大寺ノ左大臣しら川の花見にさそひければ、まかりてよみ侍ける、

源　師　光

いさやまだ月日のゆくもしらぬ身は花の春こもけふこそは見れ

初句のまだは、昨日までは、花の春ともしらざりし意也、されど月日のゆくもまだしらず といへるやうに聞えていかゞ、又としてはいよ〳〵いかゞ、

世をのがれて後、百首ノ哥よみ侍けるに、花のうた、

俊　成　卿

今はわれよし野の山の花をこそやごの物こも見るべかりけれ

世をのがれたる身なれば、吉野の山にこもり住べき事ぞと也、四の句「我やどの物なりながら云々、

入道前關白家哥合に

春くれば猶この世こそしのばるれいつかはかゝる花を見るべき

下句、死なば又いつかはかゝる花をば見るべきとおもへば、といふ意なるべけれど、たらぬ詞おほくていかゞ、

同家の百首哥に

てる月も雲のよそにぞ行めぐる花ぞ此世のひかりなりける

世に月花といへども、月は雲のよそなる物なれば、此世界のひかりは、たゞ花にこそ有けれといへる也、ひかりとは、月にくらべていふ故に、そのよせ也、此哥、上にもぞ°る°といひ、下にもぞ°け°る°といへる、てにをはかけ合わろし、菅き抄に、攝政殿を花によそへてよめりといへれど、其意はさらになし、

春の比大乘院よりい人につかはしける

慈　圓　大　僧　正

見せばやなしがのからさき麓なるながらの山の春のけしきを

「心あらむ人に見せばや云々の哥より出たり、二三の句、志賀の辛崎を麓に見るよしなれとも、を°もじなき故に、さは聞えがたくて、志賀の から崎といふ高山のふもとなるながら山と聞えていかゞ。

題しらす

柴の戸ににほはむ花はさもあらばあれながめてけりな恨めしのみや

咲る花に心のとまれるを、あるまじきとゝ思ひかへして、花はいかばかりおもしろく咲にほへりとも、さもあらばあれ、世をすてゝ柴の庵にすむ身の、心をとゞむべきにはあらざるに、はかなくながめてけりなといひて、花に心をとゞめし我身を恨みたる也、上句と下句との間に、何とかや詞たらぬこゝちす、又うら

めしの身やといへるも、此歌にはいかゞなるいひさま也、

西行

世中をおもへばなべてちる花の我身をさてもいづちかもせむ

三の句の下へ、ごくなりといふ詞をそへ、四の句は、さても我身をとうちかへして心得べし、さてもは、さりとての意也、詞たらずして、とゝのはぬ哥なり、いづちかもせむとは、いづちへ行ていかにかもせむといふ意とは聞えたれど、これも詞たらでとゝのはず、

千五百番歌合に　有家朝臣

春の雨のあまねき御代をたのむ哉霜にかれにし草葉もらすな

四の句にしを、ゆくと書る本もあり、これは我身をたとへたるにて、次第におとろへゆく意なれば、ゆくもさることなれ共、上句とのかけあひを思ふに、にしにあらざればよろしからず、三の句、かなといへる、近き世の哥ならば、必ぞよといふべし、すべて近き世には、頼むぞよいのるぞよ思ふぞよ歎くぞよなどよむこと多し、これもといやしげなる詞なれば、此集のころの人は、をさ／＼よまぬことにて、此哥もかなとはいへるなり、然れ共此哥は、かなにては、結句の終に、とゝいふ詞をそへざれば、かけ合がたし、されど此集のころには、終におくべきてにをははぶき、或は一言二言をも添て心得るやうによめると常也、

五十首歌奉りし時　慈圓大僧正

おのが波に同じ末葉ぞしをれぬる藤さく田子のうらめしの身や

初句、もじあまり例の聞ぐるし、おのが浪とは、藤は藤波といふ故に、藤のおのが波といふことなれ共、聞えがたし、同じ末葉とは、此僧正藤原氏にとりても、法性寺殿の御子にて、攝政關白にもなる人と、同じ流れなるをいふ、しをれぬるとは、我身は無才無能にて、世に何の勲功もなきことを歎きたるよしなるを、波の縁にしをるゝとはいへるなり、或抄に、御兄弟なとに、出家の人あまたあるを、藤原氏のおとろへの故と、述懐し給へるにやといへるは、かなはず、

いつきの昔を思ひ出て　式子内親王

ほとゝぎすそのかみ山のたびまくらほのかたらひし空ぞ忘れぬ

述懐百首哥の中に五月雨　俊成卿

五月雨はまやの軒端の雨ぞゝきあまりなるまでぬるゝ袖かな

八月十五夜和哥所にてをのこども哥つかうまつりしに　民部卿範光

和哥の浦に家の風こそなけれども波ふく色は月に見えけり

下句は、哥の道の家にあらざる我らまでを、すて給はぬ君のめぐ

みは、こよひ此和哥所の集ひにめしくはへられたるにてしられたりといふ意にや

和哥所歌合に湖上月明　宜秋門院丹後

夜もすがら浦こぐ船は跡もなし月ぞのこれるしがのからさき

こぎ行ふねは、古哥にもよめる如く、跡もなくて、その船の過し跡には、夜もすがらたゞ月のみ殘りて有と也、よもすがら浦こぎし船は、跡なくて、夜のあくれば、たゞ月のみ殘れり、といふやうに聞ゆれども、其意にはあらず、夜もすがらは四の句までにかかりて、夜のうちのけしきなり、月ぞ殘れるは、船の過し跡に殘れる也、或抄に、殘月のけしき也といへるは、ひがとなり、此哥三四の句、跡もなくて月ぞ殘れる、といふべき詞のはこびなるに、跡もなしといひて、ぞ殘れるといへる、てにをはのかけ合わろきこと、上なる爲家朝臣の、山家殘雪の哥と同じ、又しがのからは、いづれにかへてもおなじとなれば、上句に湖のあへしらひあらまほし、

永治元年、讓位ちかくなれるほど、夜もすがら月を見てよみ侍ける、　俊成卿

忘れじよわするなこだにいひてまし雲ゐの月の心ありせば

めでたし、詞めでたし、雲井の月とは、禁中にて見る月をいひて、忘れじよは、此禁中の月は、いつまでもわすれはせじと也、わするなは、わがかやうに思ふとを、月もわするなといへるなり、だにとは、名殘をしさはつくしがたきを、せめては一言かやうにいひなりともせむ物をといふ意なり、抑此御讓位は、御心にもあらざりし御事なれば、此哥ことにあはれ深し、

崇德院に百首哥奉りけるに

いかにして袖にひかりのやどるらん雲ゐの月はへだてゝし身を

めでたし、詞もめでたし、

百首哥奉りし時　攝政

月見ばこいひしばかりの人はこで槇の戸たゝく庭の松風

上句いひしばかりのとは、「今こんといひしばかりに云々の哥の詞にて、その下句までの意をこめて、有明の月をまち出たるほどまでも、其人はこぬよし也、かやうに見ざれば、ばかりのといへる詮なし、

五十首歌奉りしに山家月　慈圓大僧正

山里に月は見るやこ人はこず空行風ぞ木葉をもこふ

二の句、とはとてなり、空行とは、我をとふにはあらざる意にていへり、吹といはで、行ゝといへるも其意なり、木葉をもとふは、木葉をとひもするといふ意なり、我をもとひ、木葉をもとふには

あらず、或抄に、木葉を落葉と見たるは、ひがこと也、梢なるをいふ、此哥、下句に月のあへしらひあらまほし、此まゝにては、月は何にかへても同じことなればなり、

攝政大將に侍し時月哥五十首よませ侍けるに

有明の月のゆくへをながめてぞ野寺のかねは聞べかりける

三の句、たづねてぞとある本はわろし、月のゆくへは、西の方なる故に、世の無常を觀じ、極樂を思ひて、曉のかねをば聞べしと也、四一二三五と句を次第して見べし、

同家の歌合に山月　　藤原業清

山端を出ても松の木間よりこゝろづくしのありあけの月

「木間よりもりくる月の」云々の本哥と、となる意もたければ詮なき哥也、出ても心づくしのあるといひかけたるか、

和哥所哥合に深山曉月　　長明

夜もすがらひとりみ山の槇の葉にくもるもすめる有明の月

よもすがらは、槇の葉にくもるといふへかゝれり、深山の月は、夜もすがら槇の梢にさはりて、くもりたるが、曉に至りて、其槇の梢をはなれて、月のひきくなれる故に、晴てすめると也、

熊野にまうで侍し時奉りし哥の中に　　秀能

おく山の木葉のおつる秋風にたえ〲みねの月ぞのこれる

四の句、木葉のちるまゝに、たえ〲見ゆる也、のこれるとは、殘月をいふにあらず、木葉のおつるにむかへて、のこるとはいへる也、二の句よわし、

月すめばよものうき雲空にきえてみ山がくれをゆく嵐かな

めでたし、下句詞いとめでたし、空とみ山がくれとを、相むかへて見べし、浮雲のありしほどは、あらしも其雲を吹て、空をゆくと見えしが、雲の殘らず消て後は、空を吹とは見えず、たゞ山の梢などを吹音の聞ゆるを、み山がくれを行といへる、いとめづらか也、又月のすむは、嵐の雲を吹はらへる故なるに、かへりて、月のすめる故に、雲もきえ、嵐もみ山がくれを行やうにいひなせるもおもしろし、

秋の暮に病にしづみて、世をのがれ侍ける、又の年の九月十日あまり、月のくまなく侍ければ、　　俊成卿

おもひきや別し秋にめぐりあひて又もこの世の月を見んとは

わかれし秋とは、去年の此ごろ、既に世をのがれて、此世をわかれたる意也、それに、其時死ぬべかりし意をもこめたるべし、

題しらず　　西行

月を見て心うかれしいにしへの秋にもさらにめぐりあひぬる

上句は、世に在し時のことをいひて、下句は、世をすてたる後、又むかしにかはらぬ秋にあひたる意なり、

月の色に心をきよく染ましやみやこを出ぬわが身なりせば

二の句のきよくは、一本には深くとあり、染といふには、深くの方よくかなへり、清くは、染るによしなき詞也、然れ共此ほうしの哥は、すべて皆心にまかせてよみつれば、きよくにても有べし、歌の意には、清くの方まされり、

すつとならばうき世を出るしるしあらん我にはくもれ秋のよの月

初句もじあまり、例の聞ぐるし、とてもうき世をすつるとならば、すてゝうき世を出たるしるしあるべきことなり、然るに秋の夜のさやかなる月を見れば、猶思ひすてがたし、かくては世をすてたるしるしなければ、我にはくもりて見えよ、然らば月をも思ひすてらるべきほどにと也、或人、初句を、すつとは月の我をすつる也といへるは、かなはず、

ふけにける我身のかげを思ふまにはるかに月のかたぶきにけり

我身の影いかゞ、ふるき抄に、面影也といへれど、我身の面影を思ふとは、いふべきにあらず、月といひ、更にけるといふから、その縁にひかれて、影とはいへるなれど、猶いかゞ、一本には、わがよのと有、それにても猶影はいかゞ也、

五十首哥めしゝ時　慈圓大僧正

秋をへて月をながむる身となれりいそぢのやみを何なげくらん

月をながむると、やみとを、たゝかはせたる也、四の句は、つきよのやみにまよひて、五十年を經たるよし也、佛經に、生死長夜といふ故也、上句は、世をのがれて、まぎるゝことなく、心しづかに月を見る身のうへとなれる物をといふ意なり、されど詞たらず、三の句もいうならず、

百首哥奉りしに　藤原隆信朝臣

ながめても六十の秋は過にけりおもへばちかし山端の月

めでたし、下句詞めでたし、初句、もゝじは輕し、下句は、月の山端ちかくなりたるを見て思へば、我身も末近しといふ意也、ちかしをかなしとある本は誤なり、

千五百番歌合に　二條院さぬき

身のうさに月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもりくる

上句詞めでたし、上句は、身のうきまゝに、月も昔のやうにはあらぬかと思ひて見れば也、もりくるといへると、よせなし、もるとは、梢或は軒或は雲間など、もる物をいはではいかゞ、

世をそむきなむと思ひたちける比月を見て

寂超法師

・有明の月より外にたれをかは山路のこゝちぎりおくべき

月は山端をさしている物なる故に、わが山へいらん道の友といひて、山住して後の友とする意をもかねたり、

長月の有明の比、惟明親王のもとより山里より、「思ひやれ何をしのぶとなけれども都おぼゆる有明の月、とよみておくれりけるかへし、

式子内親王

有明の同じながめは君もとへみやこのほかもあきの山里

君もとへとは、みづからとひ來玉へといふ意か、されど今歌よみてとひ玉へるに、とへとあるはいかゞ、又都の外と山里とを、むかへてよみ玉へるもいかゞ、これは齋院にゐ玉へるほどにて、都の外とは、都のほとりといふ意か、されど山里もすなはちみやこの外なるをや、

春日社哥合に曉月

攝政

天の戸をおし明がたの雲間より神代の月の影ぞのこれる

春日の神天兒屋根命の御事より、かくよみ玉へゐ也、初二句は、此集古哥、「天の戸をおし明がたの月見れば云々の詞をとれり、雲間よりといひて、殘れるとゝぢめたる、雲間より見えてといふ意とは聞ゆれどより殘れるといへる詞、かけ合いかゞ、

右大將忠經

雲をのみつらき物とてあかす夜の月よ梢にをちかたの山

おつるを、をちかたといひかけたるは、假字ちがひなれば、古へはなきとなり、されど此集のころになりては、例多し、月につらき物は、たゞ雲のみと思ひつるに、遠方の山の梢に落るなれば、つらきは雲のみにはあらず、梢もつらしと也、四の句のよ°もじ、おほくの本にや°とあり、其時は、遠方の山の梢にいりやしなむと、後をかけたる意になる也、よ°の方はるかにまされり、

藤原保季朝臣

入やらで夜をゝしむ月のやすらひにほの〴〵明る山の端ぞうきめでたし、上句は、我ねやへも入らで、月見て夜の明るをゝしみて、やすらひ居る也、月のやすらひとは、月散にやすらふをいふ、月のやすらふにはあらず、下句は、我はねやへもいらで、やすらひ居るに、やすらひもせで、山端に入るがうきとなり、或抄に、月は入やらでといへるは、此集の頃のたくみもえわきまへぬ、いみしきひがと也、我入やらでを、下句の山端へひゞかせて、月は入るがうきといふ意、又我やすらひをも、下へひゞかせて、ほのぼの明るといふ詞にて、月のやすらはで入事をおもはせたる物

也、すべて哥のたくみは、かやうの所にあるとなるを、え見しらざるは、いとくちをし、

和歌所哥合に海邊月　　定家朝臣

もしほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬすまのうら人

めでたし、上句詞めでたし、もしほをくむすまの浦人は、袖に月をやどして見むとは思はねども、おのづからやどりて、よそならず、月を袖に見てあかすと也、「月やどれとはぬれぬ物からといへると、同じ意ながら、かれにはおとれり、

秀能

明石がた色なき人の袖を見よすゞろに月もやどるものかは

此歌くさ〴〵の論あり、まづ色なき袖とは、例の紅の涙にぬれぬ袖なれど、此哥にては、紅の色のとは、さらに用なければ、たゞぬれぬ袖といふ意なるべきを、色なきといへるは、あまりなることなり、又明石がたも、下にかけ合たる事なければ、はなれて聞ゆ、一首の意は、明石がたの人の袖を見よ、しほくみなどして、ぬれたる袖にこそ月もやどれ、同じ所の人にても、ぬれぬ袖には、月もすゞろにはやどりはせず、然ればすべて月の袖にやどる事は、あはれと見て、涙をこぼして、ぬらす人の袖にこそやどれ、あはれとも見ず、涙にぬれぬ袖には、すゞろにやどる物にはあらず、といふ意なるべし、かやうに見ざれば、たゞ明石がたの人の袖の事のみにては、何の詮もなき哥也、又右のごとく見ても、趣意おかしからず猶いかにぞや聞ゆ、或抄に、色なき人とは、心の色なく、なさけなき海士など也云々といへるは、むげにをさなき説にて、論ずるにたらず、人の袖を見よといふ詞、上なる慈圓大僧正の哥にもあり、いづれか先なりけむしらねども、すべて人のめづらしき詞をよみ出れば、うらやみて、事のさまをかへて、又其詞をぬすみよむと、此集の頃の人々のくせにて、いとよろしからぬとなりかし、

熊野にまうで侍し時、切目ノ宿にて、海邊眺望といふ心を、をのこ共つかうまつりしに、　具親

ながめよと思はでしもや歸るらむ月まつ波のあまのつり船

めでたし、詞めでたし、海邊にて月をまつ程、月のいづべき方の波の上を、つり船のかへるをながめてよめる意なり、あのつり舟は、我にかくながめよと思ひて、今かへるにてもあるまじきにやあらん、されど月もまだ出ぬ程なれば、おのづから先ッながめらるゝとよとよめる也、二の句、しもといふ詞は、必しもさやうにてもあらざらめどもといふ味也、歸るといへるも、月まつころに

かなへり、すべてかやうの所に心をつけて、かけ合をおもふべきとなり、

八十におほくあまりて後百首哥めしゝに
よみて奉りし　　　俊成卿

しめおきて今やとおもふ秋山のよもぎがもとに松虫の鳴

いたく老ぬれば、かれて葬處をしめおきて、今や〳〵とおもへども、まだ死にもせず、かくながらへて居れば、そのしめおきたる所の蓬が本に、松虫も我をまちわびてなくとなり、秋山は松虫の縁なり、結句、詞よわし、

千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれましして消なん露の夕暮

めでたし、下句詞めでたし、下句は、今だにかくあれたる庭の、我露と消なば、ましていかにあれなむとなり、夕暮は露のあへしらひにて、死にもよせあり、

寄風懐舊　　　通光卿

あさぢふや袖にくちにし秋の霜忘れぬ夢をふくあらし哉

いとめでたし、詞もいとめでたし、二三の句は、涙の露の霜となりて、つひに其霜に、袖も朽はてぬれば、霜もともに跡たくなりぬるよしを、つゞめていへる也、わすれぬとは、詞のうへは、霜を忘れぬにて、意はむかしの事をわすれぬなり、霜は即昔をしのびし涙の縁なれば也、夢をふく嵐とは、秋ふけて枯たる淺茅のらへの霜を、嵐のふく縁より出て、今は其霜を忘れぬ夢をふくといへる也、一首の意は、淺茅生とあれたる宿に、昔をしのびてなく涙の、秋ふけて霜となり、つひには庭の淺茅とゝもに、袖も其霜にくちて、霜も跡なくなりぬる後までも、猶昔を忘れもやらずして、夢に見たるに、其夢をさへ又嵐の吹て、はかなくさめぬるとよと也、忘れぬ夢を、或抄に、夢さめて後、その夢をわすれぬ心にいへるは、ひがことなり、

俊成卿女

葛の葉のうらみにかへる夢の世を忘れがたみの野べの秋風

めでたし、詞めでたし、二三の句は、恨みにかへる夢のごとくなる世なる物をといふ意也、うらみにかへる夢とは、つねにあかず恨めしと思ふとも、夢には、しばし思ふごとく、心にかなひて見ゆるとあるを、ほどなくさめぬれば、又もとのごとくうらめしきにかへりて、其夢に見しとは、後にこひしのべどもかひなきよし也、葛の葉はうらみにかへるをいはんためにて、結句野べの秋風、すなはち葛の葉を吹風也、一首の意は、野べの葛葉を吹く秋風は、物がなしきまゝに、過し昔の事の思ひ出られて、しのばし

ければ、昔の忘れ形見にて有けるよ、昔の事は、夢のごとくにて、戀しのびても、かひなき世中なる物をとなり、

最勝四天王院障子にあふくま川かきたる所　家隆朝臣

君が世にあふくま川のうもれ木も氷のしたに春をまちけり

めでたし、三の句のもじ、君が代にあふといふ所よりの意は、はといふべけれど、埋木につきては、もといはではわろし、結句は、我身のうへをいはむには、春をこそまてといふべけれど、これは我身のうへの意はうらにかくれて、埋木をおもてとしていへる故に、侍けりとはよめる也、

雪によせて述懐の心を　俊成卿

杣山やこずゑにおもる雪をれにたへぬなげきの身をくだくらん

めでたし、詞めでたし、なげきに木をそへたり、くだくは、雪にをれて、裂々くだくるによせたり、三の句のにもじ、少しおだやかならざるが如くなれど、いひまはせば聞ゆるなり、此哥、かなととぢむべきを、らんととぢめたるは、かなに通ふらむ也、此事言葉の玉の緒にくはしくいへるが如し、然れども此哥は、かなといはではたしかならざるを、らんとよまれたるは、しらべをおもひてなるべし、

題しらす

老ぬとも又もあはむとゆく年になみだの玉をたむけつるかな

下句、旅行人に、手向の物をおくる意にて、よまれたるなるべし、されどそれは、ゆく／＼手向の神にたむくべき料におくるにこそあれ、その旅行人にたむくるにはあらざるを、此哥は行年にたむくるといへるは、たがへり、又神に手向るに准へて年にたむくといへるならば、ゆくといふ言にかなふべからず、

雜哥中

五十首哥よみて奉りしに　慈圓大僧正

須磨の關夢をとほさぬ波の音をおもひもよらで宿をかりける

とほさぬは關の縁、よらでは浪の縁也、結句は、宿をかりけることよといふ意なり、

和歌所歌合に關路秋風　攝政

人すまぬ不破の關屋の板びさしあれにし後はたゞ秋の風

此結句、むかしよりめでであへるとなり、まことにめづらかなるいひざまにて、めでたきかたもあれども、させる意もなきに、いうならざる詞也、此おとゞのよみ玉へばこそあれ、今の人のかくよみたらんに、たれかよしとはいはむ、或抄に、此秋の風を、四季ともに秋風のごとくなり、といふ意なりと注せるはかなはず、

千五百番歌合に　　正三位季能

水の江のよし野の宮は神さびてよはひたけたる浦の松風

風より所なし、水の江のよし野の宮とは、丹後國熊野郡熊野神社あれば、此熊ノ字を、能に誤れる本などを見て、與謝郡も同國なれば、おしてよまれたるかと、契沖がいへる、さも有べし、されど此哥にはじめてよまれたるにはあらじ、右の誤りによりて、哥にまれ何にまれ、かくいへることのありしによりてぞ、此哥はよまれけむ、

海邊のこゝろを　　秀能

今さらにすみうしとてもいかゞせんなだのしほやの夕ぐれの空

初二句は、うちかへして心得べし、二三の句、我身の事をいへるなるべきに、此人なだのしほやにすめるよしもなければいかゞ、又なだのしほやに住人のうへをよめるにしてもいかゞなり、

海邊霞　　家隆朝臣

見わたせば霞のうちもかすみけりけぶりたなびく塩がまのうら

いせにまかりける時よめる　　西行

すゞか山うき世をよそにふりすてゝいかになりゆく我身なるらん

二三の句は、都をよそにして、世をすてゝゆく意也、ふりもなりも、鈴の縁の詞なり、

題しらす　　慈圓大僧正

世中をこゝろだかくもいとふ哉ふじのけぶりを身の思ひにて

心だかくとは、なべての人は、執着する世中を、いとひはなるゝとを、心たかしといへる也、下句は、たかくといへるかけ合に、ふじのけぶりといへるにて、意はたゞおもひのたえぬ故といふとなり、

あづまのかたへ修行し侍けるに富士の山を見て　　西行

風になびくふじのけぶりの空にきえて行へもしらぬ我思ひ哉

初句三の句、例のもじあまり聞ぐるし、下句、思ひのゆくへもしられぬにはあらず、上なる哥の、いかになりゆく我身なるらんと同意にて、身のゆくへもしらぬとを思ふ思ひなり、されど戀のうたと聞えていかゞ、

五十首哥奉りし時　　慈圓大僧正

花ならでたゞ柴の戸をさして思ふ心のおくもみよし野の山

初句は、此世の事に心をとめぬ意なるを、吉野山の縁に、花ならでとはいへるなり、花ならでたゞ柴といへる、詞のつゞきもにほひ有、二三の句は、柴の戸をさしこもりゐて、たゞ佛の道を觀念する意、下句は、よの人は、うき世をすつるとては、吉野の山に

こもるなれ共、必しも然られども、此世の事に心をそめず、さしこもりゐて、佛意を觀念する心は、いづくに住ても、すなはちよし野の山ぞと也、四の句、たゞ心といふとなるを、吉野の緣におくとはいへる也、初句、右のごとくに見ざれば、哥の趣混雜して、聞えがたし、混雜すとは、吉野山は、花をめづるにも、世をいとふにも入る所なれば、世をいとふこゝ混雜して、聞えがたき也、さる故に、花ならでといふ詞は、たゞ吉野山の緣のみにて、意は此世の事に心をそめぬ意也、

題しらす　　西　行

よし野山やがて出じと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん

めでたし、やがては、そのまゝといふ意也、花見に吉野山に入て、そのまゝとゞまり住て、二たびいでじと思ふ物を、花ちりなば歸るべしと、故郷人はまちやすらんと也、

藤原家衡朝臣

いとひても猶いとはしき世なりけり吉野のおくの秋の夕暮

うき世をば、いとひはなれて、吉野山に住ても、秋の夕暮には、かなしさのたへがたければ、猶いとはしき世ぞと也、

千五百番哥合に　　通具卿

一すぢになれなばさてもすぎの庵に夜な／＼かはる風の音哉

一すぢになれなばとは、風の音のいかにはげしく共、始よりかはらずいつも同じ事にてなれたらば也、ふるき抄の說誤れり、

守覺法親王家五十首哥に閑居　　有家朝臣

誰かはとおもひたえてもまつにのみ音づれてゆく風はうらめし

たれかはとひこむと、思ひたえても、風の松におとづるれば、待心のもよほさるゝを、さても我を音信てとふ人はなくて、たゞ松にのみおとづれてゆく風はうらめしと也、風はといへるに、人はこぬ意をもてり、又待心のもよほす意はなくて、たゞ我をばとはずして、松にのみとも見るべけれど、さては初二句とかけ合よろしからず、結句いうならず、

鳥羽にて哥合し侍りしに山家嵐　　宜秋門院丹後

山里は世のうきよりも住わびぬことのほかなるみねのあらしに

めでたし、下句詞めでたし、本歌「山里は物のさびしき事こそあれ云々、ことの外なるといふ詞、哥にはをさ／＼よまぬとなるを、よくつかひえてめでたし、

百首歌奉りし時　　家隆朝臣

瀧の音松のあらしもなれぬればうちぬるほどの夢は見せけり

めでたし、詞めでたし、四の句おもしろし、猶とけてのとかにぬ

るとはえあらねども、いさゝかまどろむほどの也、

題しらす　　　　寂蓮法師

事しげき世をのがれにしみ山べにあらしの風も心してふけ

事しげきといふを、さわがしきことにとりて、嵐の風もさわがしき物なれば、心してふけとよめる也、

　　　　西行

山ふかくさこそこゝろはかよふとこもすまで哀はしらむ物かは

めでたし、詞めでたし、山住してあはれなるまゝに思へるやう、世にある人の、山のおくを思ひやりて、あはれなるべしと、いかに心はかよふとても、住て見では、此あはれさはしるべきにあらずと也、

山陰にすまぬ心はいかなれやをしまれて入る月もある世に

かく山陰に住ても、心のすまずして、ともすればうき世の事を思ふは、いかなるとぞ、月はなべての世の人にをしまるゝ物なるが、それすら山に入ル物を、我はたれをしむ人もなき身なるに、うき世に心をかへすべきとかはとよめる也、又上句を、世の中の人の事として、山陰はかく住よき物なるに、よの人ののがれ來てすまぬは、いかなる心ぞや、月は人にをしまれてすら入ル山なるを、といふ意にても有べし、

山家送年　　　　寂蓮

立出てつま木をりこしかた岡のふかき山路と成にけるかな

はじめはつま木にをりしほどの小き木も、立のびて大木になりて、生しげりたる山路と成ぬといへるにて、題の送年といふ意を、めづらかによくよみ出たり、立出てつま木をるといへるにて、山家と聞えたり、二の句のこしは、庵にかへりし意と、年來の意とをかねたり、かた岡と深き山路とを、たゝかはせて見べし、はじめのほどは、山路といふばかりの所にもあらず、たゞ岡といふほどの道なりしも、大木の生しげりて、深き山路といふ程になれるよし也、

住吉歌合に山を　　　　太上天皇御製

おく山のおどろが下もふみ分て道ある世ぞと人にしらせむ

おく山の棘の下の、道なき所までを、ふみ分たづね入て、道ある世なりといふとを、世の人にしらせん、といふ詞の表にて、意は、奥山にかくれすむ賢人隱士までを、尋ねてめし出て用ひて、其人に道ある世なることをしらせんと也、或抄に、上句を、臣下のするわざをもし玉ひて、世に道を行はむと也といへるは、かなはず、此おどろはたとへたる意はなし、

百首歌奉りし時　　　　二條院讃岐

ながらへて猶君が代をまつ山のまつこせしまに年ぞへにける

猶は、ながらへての上におきて心得べし、松山のまつといひかけたり、年ぞへにけるも、松によせあり、

山家松　　　俊成卿

今はこてつま木こるべき宿の松千代をば君こなほいのるかな

「住わびぬ今はかぎりと山里につま木こるべきやどもとめてむといふを本哥にて、詞ばかりをとりて、意は、これは既に出住しての哥也、我ヵよはひも老て、末のほどなければ、屋戸の松も、殘しおきて用なければ、今はつま木にこるべきなれども、さはせず、猶のこしおきて、此松の千世を、君がよはひにと祈るとなり、

春日社歌合に松風　　　有家朝臣

我ながらおもふか物をこばかりに袖にしぐるゝ庭のまつかぜ

いとめでたし、詞いとめでたし、我ながらとは、我ヵことながら、それかとうたがふばかりにといふ意也、二の句、物を思ふかといふとなるを、打かへしていへるにて、こよなく意も詞もいきほひまさりて、いとめでたし、袖にしぐるゝとは、松風の聲の、時雨の音にまがひて、袖に吹をいふ、一首の意は、松風の音の、しぐれにまがひて、袖に吹ヶが、物をおもひて涙のふるかと、我ながらうたがはるゝばかりなるよとなり、いとめづらかなるいひなし也、

後白川院栖霞寺におはしましけるに、駒引の引分の使にてまゐりて、　　　定家朝臣

さがの山千代のふる道跡こめて又露わくる望月のこま

めでたし、詞めでたし、詞書、駒引のひき分の使の事、江次第公事根源などに見えたり、栖霞寺は嵯峨に有、後撰に「さがの山みゆき絶にしせり川のちよのふる道跡は有けり、三の句は、本歌の詞にて、その昔の行幸の跡とめてなり、露は道の縁にて、又時節にも月にもよせあり、又露分るといへるは、さきにも此使に參りしが、又といふやうに聞ゆれども、其意にはあらず、又は、三の句の事につきて、昔の跡をとめゝ、又今も嵯峨におはします故に參るよし也、

最勝四天王院の障子に布引瀧かきたる所　　　有家朝臣

久かたの天つをこめが夏ごろも雲るにさらす布引のたき

布引の瀧にあらねど、「何仙姫の布さらすらんとよめる、やま姫は、仙女なれば、それをとりて、天津をとめとはよめるか、又さはあらず、たゞ雲井にさらすと いふにあはせたるのみにもある

べし、夏衣といへるは、此障子の繪の哥、四季に分たる、これは夏の部に入たるが故也、又撫(ナツ)ともいひかけたるか、天女のいはほを衣して撫といふとのあればなり、もしそのいひかけならんにても、そはたゞ詞の緣のみ也、又そのいひかけにはあらぬにもあるべし、雲ゐといへるは、此瀧のいと高きよしなり、或抄に、夏衣は白重の意にて、瀧の白き故にいふといへるは、さも有べし、又布といふ名につきてなるべしといへるは、俗意なり、古へは、夏衣に分て布を用ひしとはなし、

天の川原をすぐとて　　攝政

むかしきく天のかはらをたづねきてあとなき水をながむばかりぞ

跡なきは水によせあり、結句いとちからなし、

題しらす　　慈圓大僧正

山里にひとりながめておもふかな世にすむ人のこゝろながさを

結句ながさ、一本につよさとも有、それもよし、二の句、ひとりといへるは、下句にあたりて、我より外に、山里にこもり住ム人のなきことよと思ふ意あり、

西行

山里にうき世いとはむ友もがなくやしく過し昔かたらん

「夢かとも何か思はむうき世をばそむかざりけんほどぞ悔しき

草の庵をいとひても又いかゞせむ露のいのちのかゝるかぎりは　　慈圓大僧正

上二句、「いとひても猶いとはしき世なりけり、と上に有し哥の意にて、世をいとひて、草の庵にこもりても、猶そのうへにもいとはしき也、かゝるかぎりとは、命のあるかぎりなるを、草に露のかゝる緣をもていへる也、

西行法師百首哥すゝめてよませ侍けるに　　家隆朝臣

いつか我苔のたもとに露おきてしらぬ山路の月を見るべき

世をのがれんの心ざしあれども、かゝづらふ事共有て、いまだえ本意をとげぬよし也、山路といへるは、山へ入事をいふ也、

百首哥奉りしに山家　　式子内親王

今はわれ松のはしらの杉の庵にとづべきものを苔ふかき袖

右の家隆朝臣の哥と同じ心ざしの哥也、四の句、とぢこもるべき物を、といふ意なるべけれど、詞たらずいかゞ、苔ふかきとは、松と杉とに緣は有げなれど、袖にはいかゞ、いかなる袖をか、苔ふかき袖とはいふべき、おぼつかなし、此下句、苔の衣をきてとぢこもるべき物を、といふ意なるべけれど、さは聞えがたく、袖をとづるといふやうに聞えたるも、又いかゞ、

小侍従

しきみつむ山路の露にぬれにけり曉おきのすみぞめの袖

昔わかくて、世に有し程は、人に逢て、曉におきて、別れの涙にぬれし袖の、今は引かへて、かくの如し、といふ意をこめたるか、

攝政

わすれじの人だにとはぬ山路かなさくらは雪にふりかはれども

詞めでたし、わすれじの人とは、しれじと契りし人をいふ、下句は、ふる物のかはれるにて、春より冬の末まで、時節のうつれるとをいへるなり、上下かけ合たる事もなき哥也、山路もよせなし、山ならぬやどにても、同じ事なれば也、或抄に、ふりといふに、月日を經る義をもふくませたりといへるは、ひがごとなり、經は、ふるとこそいへ、ふりとはたらく詞にはあらず、すべて近き世の人、經(フル)と舊(フリ)とをまぎらかして、或は年ふると年ふりとを、一ッ詞のごとく心得て、經るとを、ふりとつかふたぐひ、皆ひがとなり、經(フ)は、ふへふるとはたらきて、ふりとははたらかず、ふるき歌にふりとよめるは、舊(フリ)なり、經にはあらず、

五十首歌奉りしに　雅經

影やどす露のみしげく成はてゝ草にやつるゝふるさとの月

「君しのぶ草にやつるゝ故郷は云々の詞をとれり、露のみしげくとは、ほかの物は皆おとろへて、しげくなる物は、露のみなるをいふ、なりはてゝといふは、あれそめてより後、ふたゝびとりつくろふともなく、ひたぶるにあれたる意也、すべてはてゝといふ詞は、いづれもかやうの意也、みだりにそへてはよむべからず、

後白川院かくれさせ給ひて後百首哥に　式子内親王

をのゝえのくちし昔はとほけれど有しにもあらぬ世をもふる哉

結句、をも、一本にはにもと有、同じとなり、遠けれどゝは、其昔のためしは、遠き事なれども、今現に我もといふ意也、下句は、父みかどの世におはしましゝほどゝは、御身のうへ、何事もかはりて、有しにもあらぬよし也、「故郷はみしともあらずをのゝえのくちし所ぞ戀しかりける、といふ歌をもて見れば、仙洞を戀しくおぼしめす意もあるか、かの王質が斧の柄のくちし所は、仙人の栖なれば也、

述懐百首に　俊成卿

いかにせむしづが園生のおくの竹かきこもるとも世の中ぞかし

竹かきこもるとつゞきたるは、竹垣といひかけたる也、然らざれば竹をいへる詮なし、世中は竹の縁の詞也、

題しらず　西行

山がつのかた岡かけてしむる野のさかひにたてる玉のをやなぎ

初句、一本に山かげのとあるは誤也、三の句のしむるは、山がつのすみかにしめたるをいへば也、さかひは、その山がつのしめたる地と、野との堺なり、たゞ柳にて有べきを、玉のを柳とよめる、此集のころ多し、

しげき野をいく一むらに分なしてさらにむかしをしのびかへさむ

上句は、しげき野いくつを一むらに分なしてかといふ意也、一むらはたゞ、一つにといふ意なるを、野の草につきて、むらとはいへる也、さて一むらに分なすとは、俗言に一いきに分行といはんが如くにて、多くの野を、やすらはず一むらの野の如くに分入をいふ、一首の意ば、深く分入事を本意としてよめる意にて、いくつの野を一いきに分入てか、とゞまりて、昔の事をも思ひかへして見む、といへるなるべし、一三の句、しひごとなり、或抄にいへることは、いみしきひがごとにて、論ずるにたらず、

むかし見し庭の小松に年ふりて嵐の音を梢にぞきく

二の句、にもじ聞えがたし、もの誤なるべし、下句は、梢に嵐の音を聞ほどになれると也、

百首哥よみ侍けるに　攝政

ふるさとは浅茅が末（原イ）になりはてゝ月に残れる人のおもかげ

下句詞めでたし、

守覺法親王家五十首哥に閑居　定家朝臣

わくらばにとはれし人も昔にてそれより庭の跡はたえにき

めでたし、詞めでたし、それよりといふと、あまりていたづらなれ共、此詞かへりてめでたく、一首のにほひとさへなれり、

雜哥下

最勝四天王院障子に大淀かきたるところ　定家朝臣

大淀の浦にかりほす見るめだに霞にたえてかへるかりがね

めでたし、詞めでたし、上二句は、序の如くにて、すなはち大淀の浦の歸鴈なり、三の句、だにといへる意は、歸る鴈のとまらぬなごりををしみて、せめて空行ほどをなごりとも見おくらんと思ふに、それだに霞にたえて見えぬ意也、伊勢物語に「大淀のはまにおふてふ見るからに云々、」袖ぬれてあまのかりほすわたつみの見るをあふにてやまむとやする、

五十首歌奉りし時　慈圓大僧正

世の中のはれ行空にふる霜のうき身ばかりぞおき所なき

一二の句は、みだれたる世の、をさまれる世にかへるとゝ聞ゆ、

されど世中のはれゆくといへるつゞき、とやら也、ふる霜は身のふりぬるをいへり、されどおくといへる縁のみにて、霜のよせなく聞ゆ、

題しらず

思はねど世をそむかむといふ人のおなじ數にや我もなりなむ

世をまことにそむかんとは思はねども、言にのみさいふ人の多きを、我もそのおなじなみにやなりなん、とよめるにて、わが形のみ世すて人にて、心はさもえ世をすてぬことを、恥たる意の哥也、形のみ世をすてゝ、心はすてぬは、言にのみいふと同じことなれば也、

西行

數ならぬ身をもこゝろのもりがほにうかれては又かへり來にけり

うかれてとは、いかなるをいへるにか、何にうかるゝにか、心得がたし、下句のさま、うつし心なき人の、をり〳〵うつし心になるやうに聞えていかゞ、

おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひのおもひは

結句おもひは、俗言に料簡といふ意也、おろかなる心のひくまゝに、つねに佛の道にかなはぬ、不料簡なることのみおもへども、さやうにて然らば、命終の時にものぞみての料簡はいかにぞと、みづからいましめたるなり、

守覺法親王家五十首歌に　寂蓮

そむきても猶うき物は世なりけり身をはなれたる心ならねば

世をうしと思ひて、そむきても、さ思ふ心も、身をはなるゝことあたはず、其身はもとの同じ身なれば、そむきても猶うきことのたえぬ世ぞとなり、

述懐

身のうさを思ひしらずはいかゞせむいとひながらも猶過すかな

身のうきほどを思ひ知て、早く世をいとひすつべき事なるに、さもえせずて過さば、末いかにせむ、いとはしく思ひながらも、猶えすてずして、年月を過すことのおろかさよと也、いとひながらもは、いとはしく思ひながら也、既にいとひすてゝいふにはあらず、上句と照して心得べし、こはいまだ俗に在しほどの哥なるべし、

慈圓大僧正

いたづらに過にしこともなげかれんうけがたき身の夕暮の空

うけがたき人の身に生れながら、一生をいたづらに過さば、今はの時にいたりて、後悔してなげくべしと也、うけがたき身の夕暮といへるつゞきいかゞ、又命終る時の事を、夕暮の空といへる

も、上にあへしらひなければ、夕ぐれといへること、俄にていかが、

うちたへて世にふる身にはあらねどもあらぬすぢにも罪ぞかなしき

上句、我は出家なれば、ひたぶるに世にある俗人にあらねども、といふ意とは聞えたれど、うちたへてといふ詞いかゞ、下句は、出家の身ながらも、世のならひにて、おのづから罪をおかすとのあるを、かなしみたる意とは聞ゆれ共、あらぬすぢといふともあたらず、又罪の下に、おかすとかつくるとかいふやうの詞なくては、語とゝのはず、すべて此僧正の歌、西行が、心にまかせて、みだりによみちらしたるふりを、うらやみてよまれたりと見ゆるが多し、その心して見べきなり、

和歌所にて述懐のこゝろを

山ざとに契りし庵やあれぬらんまたれんとだに思はざりしを

めでたし、はやく遁世をおもひたちて、山里の庵にこもらむと思ひて、契りおきしかども、其後え本意をもとげずして、年をへぬれば、その庵も、さぞあれやしぬらん、そのかみ思ひたちて契りし時には、すみやかにこもらんと思ひしかば、しばらくもまたれんとも思はざりし物をと也、四の句、だにといへるは、あれぬらんといふに對へていへるにて、あれぬらんといふは、あまたの年をへたると、またれんとだにといふは、しばらくもおそきをいふ、さればしばらくもまたるゝほどもやすらひはせじと思ひし物を、おもひの外にあまたの年をへて、其庵のあれぬべきほどになれりといふ意也、

通具卿

袖におく露をばつゆとしのべどもなれゆく月や色をしるらん

上句、袖の涙を露ぞといひて、しのびかくせども、といへるにて、涙を露といふが、涙をしのぶ也、結句は例の涙の紅になれるをいふ、なれゆくといへるにて、程へたる意あり、人には猶涙をかくして、露といひなせども、はじめよりやどりて、なれきつる月は、色のかはれるにて、涙としるらんかと也、四の句、なれこしといはで、ゆくといへるは、今より後をもかけていへる也、「秋ノ夜の露をば露とおきながら云々、

定家朝臣

君が代にあはずは何を玉の緒の長くとまではをしまれじ身を

めでたし、詞めでたし、「あはずは何を玉の緒にせむ、といへる哥をとりて、君が代にあはずは、何を玉の緒にしてながらへむ、もし君が代にあはずは、その玉のをの長くもがなとまでは、をしまれじと也、何をといへる詞の結びなけれども、これは本歌の詞

にていひくだしたるなれば、くるしからず、かくさまにいふぞ、此の集のころのすぐれたる巧には有ける、とぢめのをは、なる物をの意にて、下句卑下の意、又述懐の意ありて、君が代にあひたればこそ、命もながくとをしまるれといふ意におつるなり、

家隆朝臣

大かたの秋の寐覺のながき夜も君をぞいのる身を思ふとて

めでたし、「ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞしるらんわが君のため、二三の句、本歌の初二句を、おもしろくとりなしたり、長き夜の寐覺には、ふしつおきつする物なれば也、大かたのとは、必しも君をいのるべきをりにもあらざる、たゞ何となき寐覺にまでもといふ意也、身を思ふとてとは、めぐみあまねき御代なれば、其御代の長ければ、我身も長く御惠みをかうぶる故にいふ、さて此詞、おのづからねざめによしあり、寐覺には、身のうへをいろ／＼とおもふ物なればなり、

わかのうらやおきつ塩あひにうかみ出るあはれ我身のよるべしらせよ

本歌「わたつみのおきつ塩あひにうかぶ沫のきえぬ物からよる方もなし、うかび出る沫といひかけたるは、假字ちがひたれど、此集のころはつねのとなり、本哥の下句の意をもちて、我身哥よみの數にて、年をへてながらへゐながら、そのしるしとて、いまだよる方もなし、此うへよるべをしらせよとよみて、身のなりいでむとを願へる意なり、

其山とちぎらぬ月も秋風もすゝむる袖に露こぼれつゝ

いとめでたし、詞いとめでたし、その山と契らぬ月とは、世をすてゝ、そこの山にて見べしとは契らぬ月といへることにて、ちぎらぬは、月にちぎらぬ也、すゝむる袖とは、袖に月のうつり、秋風のふけば、物がなくして、世をいとふ心の、いよ／＼もよほさるゝを、月と風との、遁世をすゝむるといひなせるにて、たぐひなくおもしろし、露のこぼるゝは、それにつけても、いよ／＼涙のおつるをいひて、風の縁也、一首の意、いまだその山とさして、月を見るべき所をば、契りおかね共、其月も秋風も袖に來て、早く山へこもれとすゝむるよし也、

雅經

君が代にあへるばかりの道はあれど身をばたのまず行末のそら

道はあれどゝは、立身すべき道はあれどゝいふ意なり、四の句は、我身はおろかなれば、その立身のたのみもなきよしなり、行末といへる詞、道によせあり、空とは、たゞ輕くそへたる詞なり、二の句、ばかりは、我身のおろかなる故に、立身すべきとわりはなけれど、惠み深き君が代にあへるのみは、そのたづきあるよし

なり、此詞に身を深く卑下したる意こもれり、ふるき抄に、三の句を、歌鞠両道時にあへるをいへり、といへるは、ひがことなり、

俊成卿女

をしむとて涙に月も心からなれぬる袖に秋をうらみて

月のかたむくををしむとて、我心から涙にぬらして、其月もなれぬる袖なるに、秋を恨みて、袖のぬるゝを、秋のとがのやうに思ふことよ、とよめるなるべし、をしむは、秋のくるゝををしむやうにも聞ゆれども、さにはたゞ袖のぬるゝ事ばかりをいひても同じことにて、月をいへる詮なければ、月をゝしむとてなり、然れども此哥、すべて題の述懐の意にうとく、そのうへ月はもとよりあはれなる物なれば、をしむほどならでも、見れば袖ぬらすはつねの事なれば、をしむとてといふ事、詮なく聞ゆ、されば此初句をながむとてといはゞ、述懐のかたにもしたしかるべく、又詮なき難もまぬかるべきか、此初句のとてを、多くの本に、ともとあり、さては心得がたし、然れども其本につきてしひていはゞ、をしむともなしといひかけたるにて、然いへる意は、暮行秋をば、世にをしむならひなれども、我はうらみてをしむともなしといへるにや、二三の句の意は、上に同じ、されどをしむともなみだに云々と、下へつゞきたれば、秋を恨みて、をしむともなし、といふ意にはなりがたく、詞とゝのはず、そのうへ恨むるによりて、秋をゝしまずといふは、哥人の情とも聞えず、されば今は一本にとてとあるによれり、初句と結句のてもじ、二の句と四の句とのにもじ、ともに重りてよからぬ哥也、

題しらす　　　　攝政

我ながら心のはてをしらぬ哉すてられぬ世のまたいとはしき

下句は「しかりとてそむかれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中、といへる哥の意也、此世をいとはしく思ひながら、さすがにえすてもせず、すてはせねども、又いとはしくおもはれて、とかく一かたに思ひさだめがたき、此心のつひには、何方に思ひさだまるべきとぞ、我ながら其はてをえしらぬと也、三の句、かなとゝぢめて、下句をいとはしきととぢめたる、詞かけあはず、聞ぐるし、いとはしきはと、はもじを添て心得べし、此集のころ、かゝる例多し、このましからぬと也、

おしかへし物を思ふはくるしきにしらずがほにて世をや過まし

此歌、右の哥にこたへたるやうなり、同時によみ玉へるなるべし、初二句、右の哥のごとく、いろ／＼とおしかへして考ふれば、くるしきにと也、しらずがほとは、此哥にては、心にかけぬ意也、

五十首歌の中に述懷　　守覺法親王

ながらへて世にすむかひはなけれ共うきにかへたる命なりけり

下句、或抄に、繪合卷、中ごろなきになりて、しづみたりしられへにかはりて、今までもながらふるなりと、源氏の君のたまへる詞を引たり、若菜下卷にも、これと同じ意の詞あり、それには、それにかへてや、思ひし程よりは、今までもながらふるなりとあり、うきかはりに、命のながらへてあるといへる也、

五十首哥中に　　慈圓大僧正

おもふことなどゝふ人のなかるらんあふげば空に月ぞさやけき

下句くさ〴〵說あれども、歌ぬしの意しりがたし、その意はいかにもあれ、かくさまにさかしだちたる哥は、うるさきもの也、結句ぞといへるてにをは、上になかるらんといへるにかけ合わろし、

大神宮歌合に　　太上天皇御製

大空にちぎるおもひの年もへぬ月日もうけよゆく末のそら

初二句は、結句と合せておもふに、行末の事を、とあるべしかく有べしと、かねて思ひさだめおくをよみ玉へる也、行末の事は、いかにあらんもしられず、たしかにとらへられぬとなる故に、大空とはよみ玉へるにて、そは月日の緣の詞也、四の句は、日神月神に、わがかく思ひ定めおく事を、受て助け守り玉へと也、

題しらず　　俊成卿

うきながら久しくぞ世を過にけるあはれやかけし住よしの松

身はいやしけれど、かく命の長くてある事は、哥の道に深く心をよするによりて、住吉ノ神のあはれみをかけて、守り給ひし故にやと也、松といへるは、二三の句の詞の緣なり、哥の道に云々の意は、詞には見えざれども、住吉にて然聞ゆ、三の句、へにけるとこそあらまほしきを、もじたらで、過にけるとあるは、くちをし、

春日社哥合に松風　　家隆朝臣

春日山たにのうもれ木くちぬとも君につげこせみねの松風

めでたし、上句は、我身のうへをたとへたり、春日山谷のとは、藤原氏のかたはしなるよしにて、身のえなりいでずして、年老たる意なり、峯の松風は、山の緣にて、風は物を吹つたふるたよりなる故に、此よしを君に告申せと也、三の句、ももじは輕く添たる詞にて、常のともとは異なり、

述懷百首に紅葉　　俊成卿

あらしふくみねのもみぢの日にそへてもろくなり行我なみだ哉

めでたし、日にそへてといふは、月日のうつり行まゝに、其事もそれにたぐひて、まさりゆく意なり、さて日にそへて涙のもろくなりゆくは、うきこともまさりて、年の老行故なり、橋姫卷に、「山おろしにたへぬ木葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな、ついでにいはむ、日にそへてを、近き世の人は、日にそひてとのみよめり、詞のことわりをもていへば、そひてといふ方あたれるに似たれども、古への哥には、そへてとのみよみてそひてといへるはなし、心得おくべし、

題しらず　宮内卿

竹の葉に風ふきよわる夕ぐれの物のあはれは秋としもなし

竹の葉に、風の吹よわる夕暮の、あはれなることをおもへば、物のあはれは、必秋の夕暮にかぎれることもなしとなり、竹の葉といふに、いつともわかぬ意をこめたり、一首の意、右のごとくにはおしはかられ共、詞のとゝのひあしき故に、さは聞とりがたくて、此物のあはれなることは、秋のやうにもあらずと、秋の夕暮によめるごく聞えていかゞ、一本に三の句、夕暮にとあれど、それもわろし、夕暮よとあらまほし、

西　行

またれつる入あひのかねの音すなりあすもやあらばきかむとすらん

またれつるは、表は入相の鐘をまてるにて、裏に死ぬることを待意をかねたり、さて下句、その意をもちて、かくては猶明日も死なずてやあらんの意をかねてよめり、四の句、あらば明日もやと打かへして心得べし、

曉のこゝろを　俊成卿

あかつきとつげのまくらをそばだてゝきくもかなしき鐘の音哉

上句、白樂天が、遺愛寺ノ鐘欹テレ枕ヲ聽ク、四の句、上句にあはせては力なく、何の味もなし、

百首哥に　式子内親王

曉のゆふつけ鳥ぞあはれなるながきねむりをおもふまくらに

生死長夜の眠を思ふ、寐覺の枕に、鶏のなくを聞て、よみ給へる意なり、曉の鳥のなけば、目のさむる物なる故に、今それを聞くにつけて、長夜のねむりは、いつかさむべきぞと、あはれにおもはるゝと也、

百首歌に懷舊　俊成卿

むかしだにむかしとおもひしたらちねの猶戀しきぞはかなかりける

たらちねは、今の如くあまたの年をへざりし程だに、昔の人にて有しを、今はまして遠きむかしと成ぬれば、いかに戀したひても、かひなきことなるに、猶戀しく思はるゝは、はかなき心なるよ

となり、

やまひかぎりにおぼえける時、定家ノ朝臣中将轉任の事申すとて、民部卿範光許に遣しける、

小ざゝはら風まつ露のきえやらでこの一ふしをおもひおくかな

めでたし、詞めでたし、二の句は、やまひかぎりなるさまのたとへ、三の句は、此世に心ののこりて、え死にやらぬ意、この一ふしは、此中将轉任の一事をいひて、子をそへ、ふしは笹の縁なり、おくは、此世に思ひおくにて、露の縁の詞也、かぜまつ露といふは、風の早くふけかしとまつ意にはあらず、露は、風のふけば消る物なれば、風のふくまでの露といふ意也、

題しらず　　慈圓大僧正

一かたにおもひとりにしこゝろには猶そむかるゝ身をいかにせむ

一かたにおもひとるとは、世をいとはしく思ふ心の、ひたぶるなるをいふ、猶そむかるゝは、そむきて出家せしうへにも、猶いとはしき也、一首の意は、もとよりひたぶるに世をいとひし身なれば、そむきたるうへにも、猶いとはしく思はるれば也、既にそむきたるうへなれば、此うへいかにともすべきかたなきよし也、

思ふべきわが後の世はあるかなきかなければこそは此世にはすめ

これらは、世にいはゆる道哥などいふ物のたぐひにて、いとうるさし、撰集などに入べき歌ともおぼえず、

西行

いかゞすべき世にあらばやは世をもすてゝあなうの世やとさらに思はむ

初句三の句もじあまり、例のいと聞ぐるし、二の句やはゝ、あはれなどいふごとく、歎息の詞なり、此詞、哥にはめづらしけれど、此ころほひの書共に、をり〳〵見えたる詞なり、一本に此やはを、こそ、とぢめを思はめとあるは、聞えやすけれど、そはやはにては聞えがたしと思ひて、後の人の改めたるなるべし、一首の意は、我猶世にある身ならば、あなうの世やといひて、あはれ今世をすつべき物を、一たび捨たるうへなれば、今はすべき方なし、いかゞすべきと也、かく思ふは、捨たるうへにても、なほうき事のある故也、結句、さらにといふことは、既に世を捨たるうへにて、さらにすてまほしく思ふ心にていへるなれど、さらに思はんといひては、聞えぬと也、初メにすつる時にしか思ひしが、今又さらに思はんの意也、とたすくべけれど、さては世にあらばといへるにかなはず、世にあるほどならば、初メにすてし事はあるまじければなり、

入道前關白太政大臣

むかしよりはなれがたきはうき世哉かたみにしのぶ中ならねども

かたみにしのびて、むつましき男女の中こそ、はなれがたき物なれ、それにはあらねども、昔より、いとひはなれがたきうき世ぞとなり、下句、我とうき世との間をいへるやうにも聞ゆれども、さては中といふこといかゞなるうへに、一首の趣おかしきふしもなかるべし、

寂蓮

數ならぬ身はなき物になしはてつたがためにかは世をもうらみん

身のためにこそ世のうきをも恨むべけれ、身をなきものになしはてつるうへは、たがために恨みむと也、

守覺法親王家五十首哥に　源師光

ながらへていけるをいかにもどかましうき身のほどをよそに思はゞ

わが如く賤き身の分際を、よその人のうへにして思はゞ、かくうきにたへて、ながらへゐるを、いかばかりかもどかしくおもはん、といへるにて、おのが、うき身ながらも、ながらへゐるとをはぢたる意也、或抄に、顯輔卿の「人のうへと思はゞいかにもどかましつらきもしらずこふる心は、といへる戀の哥を引たり、同じ意也、

八條院高倉

題しらず

うきよをば出る日ごとにいとへどもいつかは月のいるかたを見ん

いとへども月の入かたをいまだえ見ずとこそいふべけれ、いつかはといへるは、上と詞のとゝのひよろしからず、下句は、いつか西方極樂に生れむの意也、出る日といへるは、月の入といふにむかへたる也、此歌、句のかしらごとにいもじ四つ有て、いさゝかかしかまし、

清輔朝臣

ながらへば又このごろやしのばれむうしと見し世ぞ今は戀しき

めでたし、詞めでたし、かやうにこまかなるとわりをよみては、必〻歌さまめでたからぬものなるに、此哥はいと／＼めづらかなり、

千載集えらび侍ける時ふるき人々の歌を見て　俊成卿

行末は我をもしのぶ人やあらむむかしを思ふ心ならひに

三の句の下へ、とぞ思はるゝといふことを添て見べし、然らざれば詞たらず、

百首哥に　式子内親王

くるゝ間もまつべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなり

めでたし、詞めでたし、くるゝ間とは、露は夕の物なる縁なり、あだし野は、あだなる意にとる、嵐たつなりとよみ玉へるは、露の今きえむとするさま也、或抄に、嵐に消るが如しといへるは、似たることながら、さては味ひなし、嵐の吹立て、露のきえむとするを見て、世の人の命も、此露のごとくにて、無常の風の吹來なば、暮るまでをも待べきにあらず、今もきえなむ物をと也、二の句のかはといへる詞、世人を深くいましめたる意也、四の句、草葉といはで、末葉といへるも、露のあやふきことを、つよくいへるなり、嵐吹といはで、たつといへる、俄なるさま也、吹にては、のどかなり、すべて哥は、一首の趣にしたがひて、いさゝかのことにも、心をつけて、詞をつかふべきなり、

神祇歌

大將に侍ける時勅使にて大神宮にまうでゝ
よみ侍ける　攝政

神風やみもすそ川のそのかみにちぎりしことの末をたがふな

三四の句は、天照大御神と、御先祖天兒屋命と、君臣の間の御事也、結句は、君臣の間いつまでも、そのかみのごとくあらせ玉へと也、かみといひ末といへる、川の緣なり、

同し時外宮にてよみ侍ける　定家朝臣

契りありてけふみや川のゆふかづら長き世までもかけて頼まん

上句詞めでたし、見るといふこと、ゆふかづらにはしたしからぬ詞なり、但しこれは、見るは、宮川のことにて、木綿かづらへはかからぬにも有べし、

大神宮歌中に　太上天皇御製

ながめばや神路の山に雲きえてゆふべの空にいでむ月影

初句は、見まほしくおぼしめす也、二の句より下は、そのかみ東の北條が、よこさまなるしわざに障へられ玉ひて、天の下の政、おぼしめす御心にもえまかせ給はぬことを、雲のさはりにたとへて、うれたくおぼしめす御心を、大御神にうたへ祈り玉ふなるべし、

題しらず　西行

神路山月さやかなるちかひ有て天の下をばてらすなりけり

味なき哥なり、神にちかひといふことを多くよむは、佛道の心より出たるひがことなり、かの佛の如くなる誓といふことは、すべて神にはなきことなるをや、

いせの月讀社にまゐりて月を見てよめる

さやかなるわしの高根の雲ゐより影やはらぐる月よみのもり

二の句は、天竺の靈鷲山にて、佛のことなり、四の句は、これも佛

の道の意にて、佛のかりに神とあらはれたるよし也、すべて神祇の歌に、影やはらぐる、光やはらぐ、塵にまじはるなどよむ詞は、から書老子に、和光同塵といへるより出て、意は佛の道の意にてよめるひがとなり、神にさることあらむやは、そもほうしのよまむは、猶さも有べきを、ほうしのいふにならひて、たゞ人もつねによむことゝなれるは、いとかたはらいたきわざなりかし、

神祇　　　　慈圓大僧正

やはらぐる光にあまる影なれやいすゞ川原の秋の夜の月

月の五十鈴川にうつれるは、神のやはらぐる光のあまれる影ぞと也、

入道前關白家百首歌に　　　　俊成卿

神風やいすゞの川の宮ばしらいく千世すめとたてはじめけん

四の句、すむは、宮に住にて、川の縁の詞、

社頭納凉　　　　大中臣明親

五十鈴川空やまだきに秋の聲したついはねの松のゆふかぜ

空やまだきに秋なるらむ、松の夕風は、秋の聲しけり、といふとを、つゞめてよめる也、三四のつゞきは、秋の聲しけりとのいひかけ也、下つ岩根は、神の宮にいひならはしたるとにて、その神の宮の下つ岩根に、松は生る物ならねど、岩根の松といふに、下つ岩根をかりたる也、

八幡宮の權官にて云々　　　　法印成清

榊葉にそのいふかひはなけれども神にこゝろをかけぬ日ぞなき

二の句、いふに木綿をいひかけたり、假字づかひのみだれたるより、かゝるとさへあるなり、

文治六年女御入内屛風に臨時祭かける所　　　　俊成卿

月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山あゐの袖

影見えては、山藍の衣きたる人の影の、月によりてうつるなり、四の句は、月の影の、氷の如く見ゆる故にいふ、さて山あゐの衣は、すりたる物なる故に、その縁にすれるとはいへるなり、

十首哥合の中に神祇　　　　慈圓大僧正

君をいのる心の色を人とはゞたゞすのもりのあけの玉がき

下句、あけの玉垣の色のごとしといふ意なり、古語にあかき心といひ、漢文にも赤心などいひ、久世に丹誠といふも同じ、或抄に、ただすを、糺す意につゞけたりといふは、聞えぬことなり、

みあれにまゐりて、社のつかさおの〳〵あふひをかけけるによめる　　　　賀茂重保

跡たれし神にあふひのなかりせば何に頼みをかけて過まし

すべて神に跡たるといふも、佛法詞なり、

鴨社の歌合とて人々よみ侍けるに月を　　鴨長明

石川やせみの小河の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ

入道前關白家百首哥に神祇　　俊成卿

春日野のおどろの道のうもれ水末だに神のしるしあらはせ

めでたし、詞めでたし、初句は藤原氏の意、二の句は、大臣の末といふ意、三の句は、我身のうづもれたるよしなり、下句は、我身こそあれ、子孫にだに、かくいのるしるしをあらはして、榮えしめよと也、末は、水の流れの末といふ緣、あらはせも、うもれ水の緣なり、

述懐　　慈圓大僧正

おしなべて日吉の影はくもらぬに涙あやしききのふけふかな

結句みだりなり、或抄に、たゞ此ごろといふ意なりといひて、たすけたれど、此ごろの意にても、此ごろといふべきよしなくてはいかゞ、

もろ人のねがひをみつのはま風に心すゞしきしでの音哉

下句、おのがねがひをみちたらんにこそ、かくもいはめ、諸人にてはいかゞ、又しでに音も、似つかはしからず、

北野によみて奉りける

さめぬればおもひあはせてねをぞなく心づくしのいにしへの夢

上句或抄に、和尙の御身のうへに、菅家の讒にあひ玉ひしたぐひのことおぼしけるころの御哥にやといへり、さも有べし、さるよし、詞書になくては聞えぬ哥也、下句、菅原大臣のみづからよみ玉へるやうなりいかゞ、あはせては、夢の緣の詞なり、

釋教歌

五月ばかりに雲林院の菩提講にまうでゝよみ侍ける　　肥後

むらさきの雲のはやしを見わたせばのりにあふちの花咲にけり

めでたし、紫、あふちの花の色なり、

述懐　　慈圓大僧正

ねがはくはしばしやみぢにやすらひてかゝげやせまし法のともし火

ねがはくはと、やせましと、意かけ合ず、四の句、猶もかゝげんなどこそあるべけれ、

とく御法きくのしら露よるはおきてつとめてきえんことをしぞ思ふ

本歌「音にのみきくの白露よるはおきて云々、とく御法を聞て、夜のほどは、おき居て行ひて、明朝は忘れて、おこたらんことを思ふとなり、つとめては、明朝なり、或抄に、夜はいねず勤めて

のらへに、死なんことを思ふなりといへるは、ひがごとなり、もし其意ならば、三の句よるもとこそいふべけれ、はといへるは、つとめてに對へたる詞なり、又ことをしぞ思ふといふ、きえんことをられへ思ふ詞なり、もし死なんことを願ひ思ふ意ならば、消んとぞ思ふといはではかなはず、又つとめてを、行ひ勤むる意に見たるもつたなし、

家に百首歌よみ侍りける時十界のこゝろをよみ侍る緣覺　　攝政

おく山にひとりうき世はさとりにき常なき色を風にながめて

めでたし、題の十界は、佛と菩薩と緣覺と聲聞と天と人と阿修羅と餓鬼と畜生と地獄と也、二三の句は、緣覺を獨覺ともいふ其意なり、下句は、飛花落葉を見て、無常を觀ずる、緣覺の事なり、

攝政家百首哥に十樂のこゝろをよみ侍ける聖衆來迎樂　　寂蓮

むらさきの雲路にさそふ琴の音にうき世をはらふ峯の松風

上句は、來迎の菩薩の音樂也、四の句は、此世をわすれはなるゝ意なるを、はらふといへるは、松風の緣也、松風琴の音に緣あり、すべて釋教に、よき歌は有がたき物なるに、これらは哥さますぐれたり、されど琴のねにうき世をはらふといへれば、峯の松風は、用なく重なりて聞ゆ、よみ人の心は、琴の音は峯の松風にかよひて、うき世をはらふといふ意なるべけれど、さはよみえざりしか、又思ふに、三の句のにもじは、もしはもじを誤れるにはあらざるか、聖衆來迎の琴の音は、うきよをはらふ松風ぞといふ意也、

蓮花初開樂

これやこのうき世の外の春ならん花のとぼそのあけぼのゝ空

めでたし、題は、極樂の蓮花の内に生れて、其花のはじめて開けたる時の樂也、すべてこれやこの、これぞこのといふ、このは、かのといふ意なり、物語の詞などにも、かのといふべき所を、このといへること多し、此歌にては、うき世の外の春とは、極樂のさまをいへるにて、その極樂のさまを始めて見て、これやつねにねがひし、かの極樂ならんといふ意也、下句は、蓮花のはじめて開けたることを、花の咲る所の戸を、曙にあけたることにたとへていへるなり、

快樂不退樂

春秋もかぎらぬ花におく露はおくれさきだつうらみやはある

上句は、極樂の樂の不退なるをたとへたる也、彼國の蓮花のことと見るはひがごとなり、四の句は「末の露本のしづくや云々の哥の

意にて、極樂の樂は、さやうのうらみもなしと也、

引接結縁樂

立かへりくるしき海におくあみもふかきえにこそ心ひくらめ

めでたし、上句は、還リテ₂来穢國₁度₂スニ人天₁ヲといへる文の意にて、それを網を張リ置クにたとへたり、下句は、其中にもとりわきて、縁ある者をまづ慶せんとする意なり、世々生々恩所知識隨テレ心引₂接スト、と往生要集にもいへるが如し、深き江に、縁をかねたり、ひくは網によしある詞なり、これまで同じ十樂の内也、十樂といふとは、往生要集といふ書に出、

法華經廿八品の歌よみ侍けるに方便品唯有一乘法の心を　慈圓大僧正

いづくにもわが法ならぬのりやあると空ふく風にとへどこたへぬ

題の文は、十方佛土ノ中ニ、唯有₂一乘ノ法₁、無レ二亦無レ三とあり、四の句は、同經の中に、如下風於₂空中₁ニ一切無中障导上といへる文によりて、空ふく風は、いづくまでもゆく物なる故に、いづくにも云々といふに合せたり、こたへぬとは、いづくにも此法ならぬ法はなき故に、ありとはえこたへぬとなり、

化城喩品化作大城郭

思ふなよううき世の中を出はてゝやどるおくにもやどはありけり

思ふなよとは、うき世をいでゝやどりたる所を、こゝばかりと思ひて、心をとゞむなよ、猶おくにもやどは有と也、其事は、法華經を見てしるべし、此歌、おもふなよといふこと、詞たらざる故にとゝのはず、

分別功德品或住不退地

鷲の山けふきくのりの道ならでかへらぬやごにゆく人ぞなき

わしの山は、法華經を說たる所なり、かへらぬやどは、題の不退地なり、山といひ道といひゆくといふ、皆縁の詞也、一首の意は、かへらぬやどにゆくには、此妙法の道ならで、外に道はなしと也、

普門品心念不空過

おしなべてむなしき空とおもひしに藤咲ぬればむらさきの雲

聞レ名及見レ身、心念不₂空過₁、能滅₂諸有苦₁といへる文の意なり、名といひ身といへるは、觀音の名身にて、觀音の功德をいへる文なり、上句は、經文にはなき意なれども、かの文の空ノ字によりて、意は異なれ共、むなしき空といひて、結句の雲とかけ合せたるなり、四の句は、心念にたとへ、紫の雲は、觀音の感應によりて、能滅クス₂諸有苦₁のたとへ也、よくよみえたり共見えぬ哥也、

法師品加刀杖瓦石念佛故應忍のこゝろを

寂　　　蓮

深き夜のまごうつ雨に音せぬはうき世をのきのしのぶなりけり

初二句、加二刀杖瓦石一にたとへ、三の句は、應レ忍にたとへ、下句は、念佛故といふにたとへたり、さて結句は、詞のおもては忍草の生たる故也、といふことにて、しのぶといふに、題の忍ノ字をよせたるなれども、題の忍の意は、三の句にあれば、此所かの文の意と、まさしくはあたりがたし、されどすべて佛經の文の意をよめる哥は、さまでこまかにはいふべきにあらず、

五百弟子品内秘菩薩行のこゝろを

慈　圓　大　僧　正

いにしへの鹿なく野べのいほりにも心の月はくもらざりけり

上句は、釋迦の鹿野園といふ所にて、阿含經を説しを聞て、富樓那が小乘空理をさとりて、聲聞となりし事、下句は、その後法華經にいたりて、内秘二菩薩行一、外是現二聲聞一とて、かの鹿野園の時のさとりも、外は聲聞なれ共、もとより内には菩薩の行を秘したるなり、と説たる意なり、　以上六首の題、みな法華經なり、

人々すゝめて法文百首哥よみ侍けるに二乘

但空智如螢火

寂　　　然

道のべのほたるばかりをしるべにてひとりぞいづる夕やみのそら

題の二乘は、聲聞と縁覺となり、此二乘は、小乘にて、其智大乘より見れば、たゞ闇夜の螢火の如しといへると也、歌の意、はじめにこの小乘をまづさとるをいふ、夕やみの空とは、いまだ大乘の月の出ざる意なり、さてこれも、上なる内秘菩薩行の歌と同じ意にて、大乘の月出てこそ、螢火はいふにたらざれ、いまだ其月の出ざる程は、まづ螢火の光をしるべにせし意也、ひとりといへるは、獨覺の意をこめたるべし、縁覺を獨覺ともいへば也、一首の趣、いでゝ行ところなれば、初句もはたらきたり、釋教には、よくとゝのひたる歌なり、

菩薩清涼月遊於畢竟空

雲はれてむなしき空にすみながらうき世の中をめぐる月影

菩薩は、清涼なる月のごとくにて、畢竟空に遊べども、衆生にまじはる意なり、

梅檀香風悦可衆心

吹風に花たちばなやにほふらんむかしおぼゆるけふの庭かな

此題は、釋迦の法華經を說んとする時に、衆喜瑞とて、まつ衆生の心、何となく悦ばしくおぼゆる瑞相のある、是なり、二三一四五と句を次第して心得べし、吹風には、むかしおぼゆるといふへ

かゝれり、二の句へつゞけては、意たがへり、其故は、吹風といふが栴檀香風にて、二三の句は、今法華經を說給はんとするならんといふ意を、たとへたるなれば也、然るを初句より二の句へつゞけて、二三の句を、栴檀香風のヿゝしては、やといひ、らんといへる詞かなはず、二三の句は、栴檀香風のヿにはあらず、此所よくせずはまぎれつべし、下句は、むかし日月燈明佛の、法華を說んとせし時にも、まづ此瑞相をあらはしたりしヿを、文殊の思へる意にて、さて今釋迦佛も、さだめて法華を說玉はむとするなるべし、と思へるところが、二三の句也、昔おぼゆるの緣に花たち花云々とはいへり、

作是敎已復至他國

やみ深き木の本どに契りおきて朝たつ霧の跡の露けさ

題は、壽量品の文にて、醫師の譬とて、醫師の、子供に藥をあたへおきて、他國に行しとなり、こまかなるヿは、經をひらき見てしるべし、初句は、父の子を思ふ心の闇にて、經のたとへの煩腦の深き意も有べし、二の句は、子供なり、朝たつは、他國へたち行なり、霧といへるは、朝たつと、闇ふかきと、露けさとの緣なり、結句は、其父死たりと聞て、跡に子供の泣き歎く意也、以上四首も法華經也、

十戒の哥よみ侍けるに不偸盜戒

うき草の一葉なりとも礒がくれおもひなかけそおきつしら波

めでたし、三の句は、人にしのびかくれての意、かけそは浪の緣、しら波とは、盜人のことをつねにいへり、よくとゝのへる歌なり、

不邪婬戒

さらぬだにおもきがうへのさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ

めでたし、二三の句詞めでたし、さらぬだにおもきとは、佛法にては、邪婬のみならず、すべて女犯をば、重き罪とする意なり、重きもつまもかさねも、みな衣の緣なり、よくとゝのへり、

不酤酒戒

花のもと露のなさけは程もあらじゑひなすゝめそ春の山風

めでたし、二の句のなさけといふに、酒をこめたり、三の句は、此世のたのしみの、いく程もなくはかなきよし也、四の句、長き後のよの罪となるヿを思へと、いましめたる意なり、春の山は、其所をいへるにて、風も、花と露とにかゝりて、程もあらじといへるによくかなへり、以上三首、十戒の内なり、上にもいへるごく、すべて釋敎のうたに、よくとゝのへるは、ありがたきものなるに、此寂然法師の哥どもの、いづれもかくめでたきは、めづ

らかなるとなりかし、

百首歌の中に毎日晨朝入諸定　　式子内親王

しづかなるあかつきごとに見わたせばまだ深き夜の夢ぞかなしき

三の句、定に入て觀念する意也、初句のしづかなるといへるにも、定の意あるべし、まだ深き夜の夢とは、煩腦の夢の、いまださめやらぬをいふ、見わたせばといふ詞に、夢は似つかはしからずいかゞ、見渡す物をこそいふべきとなれ、此題は、地藏經といふ物に見えて、地藏の事なるを、此哥は、みづからの事にしてよみ玉へるは、經の意にはかゝはらず、たゞ文面によりてよみ給へる也、かの經には、毎日晨朝、入二於諸定一、遊二化六道一、拔レ苦與レ樂とも、我毎日晨朝入二諸定一、入二諸地獄一令レ離レ苦ともあればなり、

美濃の家つと折添の上の巻

家づとに残れる花もをりそへつ
　おなじ山路の末をたづねて

新勅撰集

春哥上

題しらす　　正三位家隆

いく里か月のひかりもにほふらむ梅さく山のみねの春風

めでたし、詞めでたし、契冲が、結句を、春の山風などとよりたるには似ず、少しもゝじりなるにや、といへるはいかゞ、空よりさす月の光なれば、風も高くいはざれば、かけ合ハざるをや、又春風も、書吹たるとはたがひて、よるはいと興なくやといへるも、いと心得ず、

春の歌とて　　後京極攝政前太政大臣

難波津に咲やむかしの梅花いまも春なるうらかぜぞふく

めでたし、詞めでたし、昔の梅ノ花とは、「冬ごもり咲やこの花とよみし、昔の梅花をいふ、下句おもしろし、春なる浦風とは、梅香に匂ふ浦風なり、

守覺法親王家五十首哥に　　皇太后宮大夫俊成

梅がゝも身にしむころはむかしにて人こそあらね春のよの月

いせ物語の、「月やあらぬの哥の段の意にてよめる也、初句のもゝじは、月も梅がゝも也、二三の句は、此ごろは、昔をおもひ出てしのぶ故に、月も梅がゝも、身にしむといふ意と聞えたれば、ころはのはもじは、此ごろはといふ意也、然れども身にしむころは昔にてといへるつゞき、むつかしくいかゞ也、昔にては、むかしのまゝにて也、月も梅がゝも、昔にかはらぬを云、四の句は、人のみぞ昔のごとくにはあらぬといへるにて、人はすなはち我をいふ、月も梅香も身にしむといふも、我身むかしのごとくにもあらぬ故なり

崇徳院近衛殿にわたらせ給ひて、遠尋山花といふことを講ぜられけるに、

面影に花のすがたをさきだてゝいくへこえ來ぬ峯の白雲

詞めでたし、上句は、(峯の白雲に)まだ見ぬ花の面影の、さきだちて見ゆるをいひて、ゆく道のさきにたつ意をかねたり、

百首哥に　　式子内親王

霞ゐる高間の山のしら雲は花かあらぬかかへるたび人

あの白雲と見ゆるは、花かあらぬかと、かへり來る旅人に問たる也、契沖が、白雲のうへに、又霞のゐたらば、重々にて花かあらぬかとも、見ゆまじくやといへるは、かたおちなり、霞のゐて、高き山のうへなる故に、さだかならぬ也、

千五百番哥合に　　　　家　隆　卿

けふ見れば雲もさくらにうづもれてかすみかねたるみよしのゝ山

めでたし、詞めでたし、二三の句は、雲もなくて、櫻のさやかに見えたるを、かくいひなせる也、つねには雲に櫻のうづもるゝ物なるを、返りて櫻に雲もうづもるといへる、いとめづらか也、四の句は、すなはち上の雲のかゝらぬとを、かくいひなせるなり、雲と霞とを二ッに見ては、三の句でもじにかなはず、雲は櫻に埋れてある故に、櫻をへだてむとすれども、えへだてぬを、かすみかねたるといへる也、いとめづらし、

春哥下

建暦二年春詩哥を合せられけるに山居春曙　　　　權中納言定家

名もしるし峯のあらしも雪とふる山さくら戸を曙の空

めでたし、下句詞めでたし、小倉の山荘に在て、嵐山の落花を見てよみ玉へる意にて、初句は、嵐山と云名もしろく見ゆと也、二三の句は、嵐にさそはれて、櫻花の雪とふれゝば、すなはち其嵐が、雪とふるさまなるをいふ、かの嵐もしろしなどいへるたぐひなり、嵐は色も形もなくて、目に見えぬ物なるを、ちる櫻によりて、よく見ゆる故に、名もしるしとはいへる也、契沖くさ〳〵難をあげたれども、皆あたらず、其中に、山櫻戸といふと、万葉によめる意と、たがへるとをいひて、山居の意なしといへるも、時代をわきまへざる難也、此卿のころは、戸のあたりに櫻のある、山家のことによめる也、其うへ此哥は、峯の嵐も雪とふる山とつづきたれば、たとひ万葉によめる意にとりても、山居の櫻戸なるをや、猶難をいはゞ、一首の氣色、必しも曙ならずとも同じとなるべければ、題の意はたらかず、又すでに名もしるしとあるうへは、嵐といふとはなくて、それと聞ゆるやうにあらまほしきに、嵐とあるは、少しくちをし、

五十首哥奉けるに花下送日　　　　後　京　極　攝　政

ふる里のあれまくたれかをしむらん我世へぬべき花のかげ哉

本哥、「いざこゝに我よはへなむすがはらや伏見の里のあれまくもをし、本歌は、あれまくをゝしみて、そこに我世へむとよめるを、此哥は、故郷のあれまくをば思はず、花の下に世をへぬべしとなり、

關路花

あふ坂の關ふみならすかち人のわたれごぬれぬ花のしら波

二の句は〔あふ坂の關の岩かどふみならし云々、といへ〕詞をとり、三四の句は〔かち人のわたれどぬれぬえにしあれば、〕またあふ坂の關もこえなむ、とあるをとり玉へる也、

題しらす

西行法師

風ふけば花のしら波岩こえてわたりわづらふ山川の水

二三の句、詞めでたし、

参議雅經

春の夜の月も有明になりにけりうつろふ花にながめせしまに

花のうつろふのみならず、月もうつろひて有明になりにけりとなり、

花の哥

前大僧正慈圓

花ゆゑにさひくる人のわかれまでおもへばかなし春のやま風

後京極攝政

花はみな霞のそこにうつろひて雲に色づくをはつせの山

下句詞めでたし、花の有しほどは、霞は花に色づきて見えしを、今は花は散過ぬる故に、霞も雲に色づきて見ゆとなり、霞は、花をつゝめば、花の色に見え、雲をつゝめば、雲の色に見ゆればなり、

高砂の尾上の花に春くれて殘りし松のまがひゆくかな

めでたし、二の句、にもじは、四の句へかゝれり、花に殘りし松とつゞく意なり、三の句に、花のちりたるこ、又青葉になれることをこめたり、四の句は、春はおしなべて花の咲たる中に、松のみ殘りて、花の絕間なりしをいふ、一首の意は、今は花の梢も、春くれて、みな青葉に成ぬれば、花に殘りて、色のわかれて見えし松も、それとまがひゆく也、ゆくとは、次第〳〵に青葉になりゆく故なり、三の句、散はてゝなどはいはずして、春くれてといへるは、青葉になりゆく意なればなり、下句めづらしき趣なり、

故鄉欵冬

俊成卿

ふりぬこもよし野の宮は河きよみ岸の山ぶき影もすみけり

ふりぬともよしといひかけたり、結句すみに、住をかけたり、

久安百首哥奉りける時三月盡

ゆく春の霞の袖を引さめてしぼるばかりや恨〔み〕かけまし

つれなく暮てゆく恨みをいひかけて、泣て、霞の袖をしぼるばかり、涙をかけむとなり、

夏哥

建保六年哥合に夏哥

雅經卿

ほとゝぎすなくや五月の玉くしげ二聲きゝて明る夜も哉

五月の玉とは、万葉に「時鳥なが初聲を我にもが五月の玉にまじへてぬかむ、「ほとゝぎすいたくな鳴そなが聲を五月の玉にあへぬくまでに、下句は、「時鳥なく一こゑに明るしのゝめ、とあるゆゑによめり、

後法性寺入道前關白家百首哥に五月雨　　俊成卿

ふりそめていくかになりぬ鈴鹿川八十瀬もしらぬ五月雨の頃

初句ふり、二の句なりぬは、鈴の縁也、四の句は、水まさりて、一つになれるよし也、いくかになりぬは、下句にかけ合わろし、

百首哥に　　後京極攝政

ほとゝぎす今いくよをか契るらむおのが五月のあり明のころ

家に五十首哥よみ侍けるに江螢　　入道二品親王道助

白露の玉江のあしのよひ〳〵に秋風ちかくゆく螢かな

詞めでたし、

題しらす　　如願法師

明ぬるか木間もりくる月影のひかりもうすき蟬の羽衣

木間は、せみといへるによせ有、影の光いかゝ、契沖、結句を何の用ともなくやあらんといへり、まことに少し餓なることゝちはする也、されど我衣にうつる月の光のうすきと、いふを、夏衣のうすきと合せたる、趣なきにはあらず、

六月祓　　後京極攝政

早き瀬のかへらぬ水にみそぎしてゆく年なみのなかばをぞしる

二の句、過行月日のかへらぬ意をこめたり、

寛喜元年女御入内屏風　　家隆卿

風そよぐならの小河の夕暮はみそぎぞ夏のしるし也ける

三四の句は、ゆふぐれのすゞしさは、みそぎのみぞ夏のといふ意なり、契沖、初句をおぼつかなしといひて、慈圓西行などならば、風にそよぐとぞよまるべきといへるは、いかゞ、これは風にそよぐといふ意とは異なり、ならの葉に、風のそよぐといふ意を、やがて風そよぐならの小河といひたるなれば、いかでか風にとはいふべき、

秋哥上

題しらす　　源具親朝臣

心なき草のたもとも花すゝき露ほしあへぬ秋はきにけり

めでたし、下句、詞めでたし、四の句は涙の意也、

養和のころ百首哥よみ侍し秋哥　　定家卿

天原おもへばかはる色もなし秋こそ月のひかりなりけれ

後京極攝政左大將に侍ける時月五十首よませ侍けるに

あけば又秋のなかばも過ぬべしかたぶく月のをしきのみかは

めでたし、初句、又は、秋も又なかば過ぬべしの意也、

入道二品親王家五十首哥に山家月　　家隆卿

松の戸をおし明がたの山風に雲もかゝらぬ月を見るかな

上句詞めでたし、「天の戸をおし明がたの月見れば云々

和歌所哥合に海邊秋月　　小侍従

おきつ風ふけひの浦による波のよるさも見えず秋のよの月

秋哥奉りけるに　　家隆卿

すまのあまのまごほの衣夜や寒きうら風ながら月もたまらず

下句は、うら風と共に、月もたまらず也、月のたまらぬとは、衣の口より、影のとほるをいふなり、浦風も吹とほし、月の影さへとほるばかりの、あらき衣なれば、夜や寒からむとなり、

秋哥下

秋のうた　　侍従具定母 俊成卿女同人也

うき世をも秋の末葉の露の身におきごころなき袖の月影

めでたし、詞めでたし、上句は、世をもあくばかりながらへて、末になりたる命にて、今きえむもしらぬ身といふ意なり、下句は、おき所もなきまで、涙の露の、袖にしげき意也、此哥にては、月はさのみ用なけれど、露を上にいひたる故に、月影といひて、露をしらせたる也、

建保二年秋哥奉りけるに　　雅經卿

身を秋のわがよやいたく更ぬらむ月をのみやはまつとなけれど

本歌、「有明の月の光をまつほどに我よのいたく更にける哉、契沖、下句てにをはおぼつかなし、かきたがへたるにやといへり、まことにやはといへる詞とゝのはず、新古今雜哥に西行が、「世にあらばやはよをもすてゝ、とよめるやはと同じきかと思へど、是はさも聞えず、もしはさはと有けむを、寫し誤れるにもやあらむ、本哥にかゝりて、さやうに月をのみまつとはなけれどなり、

　　家隆卿

かぎりあれば明なむとする鐘のおとに猶長き夜の月ぞ残れる

澗底鹿　　正三位知家

さをしかの朝ゆく谷のうもれ水影だに見えぬつまをこふらん

續後拾遺集谷鹿定家卿、「さをしかの朝ゆく谷の玉かづら面影さらぬつまやこふらむ、いとよく似たる哥也、いづれかさきに出來つらむ、今此二首のおとりまさりをいはんに、まづ兩方ともに、鹿に

朝行谷といふこと、古哥などにより所あるか、然らずは谷の詮なきに似たり、殊に題なれば、たしかに谷の詮あらまほし、さて三の句をくらぶるに、うもれ水は谷によし有、玉かづらは谷にうとし、四の句は面影さらぬは、朝によしあり、よべあひたる妻の面影さらぬなればなり、影だに見えぬは、朝に縁なし、然ればこゝの哥は、二の句を「へだつる谷のと改めば、右の難どもゝなく、へだつるは谷の詮もあるべく、影だに見えぬにも、よくかなふべくや、又定家卿の哥は、題を野鹿などにして、二の句を「朝ゆく野べのと改めば、野は、朝ゆくにも、玉かづらにも、谷よりはよくかなふべくや、契沖が、谷の玉かづらを難じて、玉かづらといふは、玉蔓にて、草の葛とは別にて、面影とつゞくるは、かの蔓のかたなれば、たがへりといへるは、中々に誤なり、此事は、別に論有、事長ければ、こゝにはもらしつ、

秋哥

家隆卿

白たへのゆふつけ鳥もおもひわびなくやたつたの山のはつ霜

初霜、にはかに聞ゆ、

百首哥奉りけるに　雅経卿

秋のゆく野山の淺茅うらがれて峯にわかるゝ雲ぞしぐるゝ

峯にわかるゝは、九月晦日の夜の曉をよめる也、然らざれば、此詞よしなし、されば此哥、こゝに入られたるは、いかゞなり、

百首哥の中に　式子内親王

秋こそあれ人はたづねぬ松の戸をいくへもとぢよつたのもみぢ葉

めでたし、初句は「人こそ見えね秋は來にけりの意にて、秋こそ尋ね來たれといへるなり、松はつたによせ有、とても來る人はなければ、とづるならば、いくへなりともとぢよ、いとひはせずといふ意かとも見ゆれども、さてはもみぢ葉といへる詮なければ、紅葉をめでゝ、とぢよとねがへる意なるべし、

秋の暮のうた　雅経卿

秋はけふくれなゐくゝる立田川ゆくせの波も色かはるらむ

めでたし、秋はけふ暮ゆくなれば、紅くゝるときく立田川も、紅葉のちりて、けふぞ波の色かはるらむと也、二三の句を、今見たるところとしては、下句とかけあはず、くれなゐくゝるといへる立田川といふ意なり、

冬哥

建保五年哥合冬山霜　家隆卿

かさゝぎのわたすやいづこゆふ霜の雲ゐにしろきみねのかけ橋

めでたし、詞めでたし、「かさゝぎのわたせる橋に云々とよめる、其橋は、いづくなるらん、今見れば、峯のかけ橋に、夕霜の置た

るぞ、雲井に白く見ゆると也、本哥に、しろきを見ればとあるにあたりて、四の句のしろきを、重く見べし、

冬のうた　　後京極摂政

さびしさはいつもながめの物なれど雲間のみねの雪のあけぼの

上句いかゞ、すべてのさま、玉葉風雅のふりにちかし、

しもとゆふかづらき山のいかならむ都も雪は間なく時なし

本哥、「しもとゆふかづらき山にふる雪の間なく時なしわがこふらくは、

入道二品親王道助家五十首哥に年の暮をゝしむ　　家隆卿

つらかりし袖のわかれのそれならでをしむをいそぐ年の暮哉

いそぐは、別れの時のは、常にいふ意、年の暮のは、春のいそぎとて、春のまうけをいとなむをなり、初句、正しくかなへりとも聞えず、しもじいかゞ、

羇旅哥

旅のこゝろを　　雅経卿

立かへり又もやこえむみねの雲跡もとゞめぬよものあらしに

新拾遺集にも、山旅といふ題にて、重ねていれり、跡もとゞめぬとは、今見る峯の雲は、嵐に跡もなくなりて、とゞまるまじきに、我は又かへり来て、こえむかと也、わが帰る時まで、雲は跡をとゞめおかじとなり、立かへりは、雲の縁の詞なり、結句のにもじ、四の句へはかゝれども、初二句へかゝらざる故に、たゞよはしく聞ゆ、

戀歌一

百首哥奉りけるに　　定家卿

松がねをいそべの波のうつたへにあらはれぬべき袖のうへ哉

上句詞めでたし、初二句は、詞と意とをかねての序也、「風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり、うつたへには、ひたすらになどいはんやうの意なり、

題しらず　　雅経卿

まさきちる山のあられの玉かづらかけし心やいろにいづらむ

詞めでたし、まさきのちりまじる故に、あられも色に出るのいひなし也、然れども、四の句深き心とか、思ふ心とか有てよろしきを、かけし心といへるは、しひて玉かづらへかけたる詞にて、おだやかならず聞ゆる故に、あられの玉かづらも、おだやかならずきこゆ、「み山にはあられふるらし云々、

侍従具定母

ながれての名をさへしのぶおもひ川あはでもきえねせゝのうたがた

めでたし、上句詞めでたし、後の名をさへ忍ぶ身なれば、中々にあはでも死ねかしと也、

家　隆　卿

おもひ川身をはやながら水のあわのきえでもあはん浪の間も哉

二の句は、水脈(ミヲ)の早きといひかけたり、さて身をはやながらは、伊勢が哥の詞なり、三四の句も、同伊勢が「水のあわのうたがた人にあはで消めや、といふ哥によれり、きえでは、きえずして也、死なずして、此身ながらあはまほしき也、もゝじはかろし、契沖、身をはやながらは、身を昔の世のまゝにて、といふ本哥の意なれば、こゝにてはおぼつかなしといへり、まことに此哥にては、此詞かなはぬが如し、されど本哥の詞なるうへ、四の句によりて見れば、消ての後にむかへていへるなれば、深き難にもあらざらむか、

戀哥二

建保五年四月庚申に久戀　定　家　卿

こひしなぬ身のおこたりぞ年經ぬるあらばあふよの心づよさに

いきてあらば、さりともあふよもあらむ、と思ふ心づよさに、戀死(シ)ぬべき身の、おこたりて、戀も死なず、年をへたると也、下句、あふよの心づよさ、詞たらぬやうなれど、拾遺「命だにあらば逢夜の有もこそすれ、といへるによれり、

雅　經　卿

つれなしと誰をかいはむ高砂のまつもいとふも年ぞ經にける

初句結句ともに、松の縁の詞なり、たれをかとは、「誰をかもしる人にせむ高砂の松も云々の哥の詞をとりていへる也、さて初二句の意は、我も、人の心のとくるをまつとて、つれなく年へたれば、人の我をいとふをのみ、つれなしとはいひがたしとの意なり、契沖、四の句を難じていはく、たとへば花にまつもをしむも、月に出るもいるもなど、むかへていへば、こゝも、まつもとはぬもとこそいふべけれ、もしいとふにむかへていはゞ、こふもいとふもなどこそいふべけれ、とやうにいひて、但し此まつは、あはれと思ふことも出來やせんとまつ意也、いとふもといへるにてしるべし、されどこれは、下の意にて、此よし上(ウヘ)に見えねば、まつとは、あふ夜をまつと見ゆれば、此難つひにとくべからずやといへり、まことにしかり、

百首哥奉りけるとき戀哥

みよし野のみくまがすげをかりにだに見ぬ物からや思ひみだれん

本歌万葉十一、「みよし野のみくまがすげをあまなくにかりのみかりてみだれなむとや、近き世の人は、万葉の哥は、今の世の風

にかなはぬ物とのみ心得たるは、ひがこと也、新古今のころの人々など、万葉の哥を、おもしろくさりなされたる歌多し、たとひ本哥にはとらずとも、今もとりてよろしき詞は、おほきぞかし、古今「見る物からや戀しかるべき、

戀哥三

家哥合に夜戀　　　　　後京極攝政

みし人の寐くたれ髪の面影になみだかきやるさよの手まくら

ねくたれ髪の、かきやるものなるにむかへて、なみだかきやるとよみたまへり、

晝戀　　　　　大藏卿有家

雲となり雨となるてふ中空の夢にも見えよよるならずとも

初二句は、朝雲暮雨の意にて、其朝と暮との中は、晝也、空の夢といふ詞、つゞき少しいかゞ、夢は、本文の雲となり、雨となるといふによせ有、

建保六年哥合に戀哥　　　　　定家卿

こぬ人をまつほのうらの夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ

めでたし、本哥万葉六の長哥、夕なぎ、人をまつ時によせあり、

題しらす　　　　　平忠度朝臣

たのめつゝこぬ夜つもりのうらみてもまつより外のなぐさめぞなき

上句、詞よくとゝのひたり、四の句、待に松をもたせたり、下句の意、めづらかにおもしろし、

前關白内大臣に侍ける時百首哥よませ侍けるに名所戀　　　　　定家卿

くるゝ夜は衛士のたく火をそれと見よ室の八嶋も都ならねば

戀哥五

旅戀　　　　　有家卿

旅衣かへす夢路はむなしくて月をぞ見つる有明のそら

初二句は、衣をかへしてぬれば、思ふ人を夢に見るといふによれり、四の句は、ねられぬ意にて、夢は見ずして、月を見るとなり、題の旅の詮なし、初句は、さよ衣としても、同じことなればなり、

題しらす　　　　　雅經卿

なげきわびぬる玉の緒のよひ〳〵はおもひも絶ぬ夢もはかなし

二の句は、夢をぬる玉といふといふとの有故也、さて絶ぬをいはむために、それをやがて玉の緒といひつゞけたり、四の句のぬ。は、畢ぬの如く聞ゆめれど、然らず、不の意のぬ。にて、思ひたえもせぬといふ意なり、一首の意は、うつゝにあふとこそ、今は思ひたえたれ、夢にあふとは、思ひたえもせざるに、歎きわびてぬる故に、其夢も、さだかにはえ見ず、はかなしと也、

建保六年哥合に戀　　定家卿

あふとはしのぶの衣あはれなごまれなる色にみだれそめけん

めでたし、詞めでたし、初句四の句、古今集の長哥に、あふとのまれなる色に思ひそめ、とあるによれり、結句は、忍ぶの衣の縁なり、四の句の色といへるとも、結句によし有てよろし、忍ぶ中なる故に、あふ事のまれなる也、

寄木戀　　家隆卿

思ひかねながむればまた夕日さすのきばの岡の松もうらめし

二の句又とは、思ひかねてながむるうへに又なり、結句は、本哥の下句の意にはあらで、たゞ「いつともわかぬとある詞によりて、つれなき意にとりていへるなり、

千五百番哥合に　　具親朝臣

後の世をたのむたのみも有なまし契かはらぬわかれなりせば

結句わかれは、死ぬる別れ也、たゞ別とのみいへるは、逢夜の別の如くにも聞えて、まぎらはしきやうなれ共、上句にて、死ぬる別れたることはしらる、然るを契冲が、逢てかへる朝のことならば、後の世を頼むなど、心得がたしといへるは、下句をこゝろ得たがへたる物なり、下句は、此世にて契かはらずして死ぬる別れならば、後の世の頼みも有べきを、既に此世ながらだに契かはりぬる中なれば、まして後ノ世の頼みもなしといふ意也、頼むたのみといへるは、言かさなりてわづらはし、又思ふにたへずして、戀死ぬるよしなどをもいはずして、たゞに死ぬる前のことをいへるも、一首の趣いかゞなり、

戀十首哥に　　定家卿

たれも此あはれみじかき玉の緒にみだれて物を思はずもがな

初句、用なく聞ゆ、三の句のにもじは、みじかき命なるにといふ意にも聞え、又みじかき命の程にといふ意にも聞ゆ、

百首哥に逢不遇戀　　後京極攝政

うつろひし心の花に春くれて人もこずゑに秋風ぞふく

春くれてといはゞ、夏の事をこそいふべきに、秋風は程とほくていかゞ、

雜哥一

題しらず　　如願法師

あだなりと何うらみけむ山ざくら花ぞ見しよの形見也ける

具定卿母

めぐりあはむわがかねごとのいのちだに心にかなふ春のくれかは

めでたし、初二句は、くれ行春にむかひて、又來む年、めぐりあはむと、契りおくかねごと也、わが、命へかゝれり、三の句だに

といへるは、惜めども、春の暮てゆくが、心にかなはぬは、せむかたもなきを、せめては又來ん年を契りおく、我命なり共心にかなはゞ、なぐさむかたもあらむに、それすら心にかなはぬ也、命のこゝろにかなはぬとは、定めなき世なれば、來ん春までも、たのみがたきよしなり、

藤原信實朝臣

暮て行空をやよひのしばしとも春のわかれはいふかひもなし

二三の句は、やよしばしといひて、とゞむる意を、やよひにいひかけたるなり、三の句より結句へつゞけて心得べし、

曉述懷　家隆卿

思ふことまだつきはてぬ長き夜のね覺にまくるかねの音かな

夜は長けれども、思ふ事はつきせず多くて、猶のこるね覺に、夜ははや明るをよめるにて、下句は、夜の長き方は負て、おもふことの多き方は、なほ勝チたるよしなり、かねの音は、夜の明るをいへり、

續後撰集

春哥上

建保四年百番哥合に　順德院御製

降雪にいづれを花とわきも子がをる袖にほふ春の梅がえ

いづれを花、いづれを雪といふことをば、いかに思ひわきて折たるぞと思へば、其袖のにほふほどに、さては匂ひによりてわきたるならむと、しれるよしなり、

參議雅經

霞みゆく日影は空にかげろふのもゆる野原の春のあわ雪

二三の句、雪けになれるさまにて、一首の意は、かげろふのもゆる春日の、いとのどかにて、次第に霞の深くなりゆく空の、たちまちにさえかへりて、日影の霞にかげろひたるが、やがて雪けにくもりはてゝ、あわ雪のふりきたるよしなるべし、されど此哥は、あわ雪を、春雨にかへまほしきけしき也、

春哥中

題しらず　後鳥羽院御製

霞たちこのめ春雨ふるさとのよし野の花も今や咲らん

正治百哥奉りけるに　皇太后宮大夫俊成

名に高きよし野の山の花よりや雲に櫻をまがへそめけむ

めでたし、詞めでたし、初句、花の多き心、又高きといふ詞、此二ッをもて、下句にかけ合せたり、雲に櫻はまがひそめけんといふべきを、をといひまがへといへるは、人の見まがふる意也、

故鄕花　如願法師

すむ人もあはれいくよのふるさとにあれまくしらぬ花の色かな

上句、昔住し人も、あはれいく世にかなりぬらん故郷に也、

建保五年四月庚申に春夜　　後久我太政大臣

天の原霞吹こくはるかぜに月のかつらも花の香ぞする

下句、新勅撰の、「いく里か月のひかりもにほふらむ、といふ歌にて心得べし、

春哥下

洞院攝政家百首哥に花　　皇太后宮大夫俊成女

さけばちる花のうきよと思ふにも猶うとまれぬ山櫻哉

めでたし、上句、何事もみな、花の如くあだなるうき世とは思へども意、下句は、さても猶櫻はうとまれぬといふ意なるべし、花のうきよといふ詞、心をつくべし、【拾遺、「さけばちるさかねば戀し山櫻云々】

名所の哥奉りける時　　前中納言定家

みよし野は花にうつろふ山なれば春さへみ雪ふるさとのそら

二の句、吉野は、冬は雪をめで、春は花をめで、雪より花へうつる山といふ意なり、さてみ雪ふるとは、花のちるをいふ、春さへといへるは、もと雪より花へうつりたる山なる故に、その雪の、春さへふる意なり、此春さへといふ詞にて、雪より花へうつりたる意は、しらるゝなり、かやうに見ざれば、二三四の句の詞つゞき、明らかならず、よく味ふべし、さてかくさぐさおもしろき所なる故に、古くよりたえず、行幸のありし故郷ぞといふ意をもかねたるべし、

建保二年詩哥合に河上花

名取川春の日數はあらはれて花にぞしづむ瀬々のうもれ木

めでたし、詞めでたし、本哥「なとり川せゞのうもれ木あらはればいかにせんとかあひ見そめけん、」ではなく

ば云々、あらはるゝとしづむとを、たゝかはせたり、花のはやく川瀬に散たるにて、春の日數のほどはあらはれて、しらるゝなり、

名取の御哥あまたよませ玉ひける中に春　　土御門院御製

宮木守なしこや風もさそふらん咲ばかつちるしがのはな園

本哥拾遺、「さゝ波やあふみの宮は石のみして霞棚引き宮木守なし、

千五百番哥合に　　後久我太政大臣

まがふとていとひし峯のしら雲はちりてぞ花のかたみなりける

白雲ぞ、ちりては花のとあらまほし、

百首哥奉りける時春月　　俊成卿女

ながむればわが身ひとつのあらぬよに昔に似たる春のよの月

「月やあらぬ春やむかしの云々の意なり、

暮　春　　藤原信實朝臣

今はまた花の陰ともたのまれず暮なばなげの春の日數に

本哥、「暮なばなげの花の陰かは、此哥にては、くれなばは、春のくれなばなり、

道助親王の家の五十首哥に河欵冬　　定家卿

山吹の花にせかるゝおもひ川色のちしほは下にそめつゝ

詞いとめでたし、上句は、いはぬ色の花なれば、思ひをしのびてえいひ出ぬ意、下句は、思ひの深きよし也、色の千入といふこと、山吹には似つかはしからず、結句は、「おもひの色の下流にせんの意をおもはれたるか、すべて寄山吹戀の哥ときこゆ、

春の暮の哥　　前大僧正慈鎭

わが物といかなる人のをしむらん春はうき身の外よりぞゆく

夏　哥

題しらず　　後鳥羽院御製

暮かゝる山田のさなへ雨すぎてとりあへずなくほとゝぎす哉

日の暮かゝるほどに、村雨のして、早苗をえとりはてぬ意と、むら雨の一しきりふるかと思へば、やがて時鳥の鳴意とを、かねてよませ玉へるなり、

六月祓　　俊成卿

なる瀧や西の川瀬にみそぎせむ岩こす波も秋や近きと

鳴瀧は、京の西にある川なり、結句、秋は西より來といふ故に、二の句にかけ合せたるなり、

秋哥上

初秋　　後京極攝政

風の音にけふより秋のたつた姫身にしむ色をいかでそむらん

めでたし、初句は、むねと四の句へかけて、又二の句へもかゝれり、身にしむ色は、風の音也、秋はけふ社立ぬれ、いまだ紅葉をそむる時にもいたらざるに、身にしむ色をば、いかで染らむとなり、

千五百番哥合に　　大藏卿有家

濱風にすゞしくなびく夏草の野しまが崎に秋はきにけり

三四の句、万葉の詞なり、

名所哥奉りける中に　　定家卿

秋とだに吹あへぬ風に色かはる生田のもりの露のした草

「君すまば云々の哥の、下句によりて、生田の杜は、初秋によせ有、秋とだに吹あへぬとは、秋立て、まだ風もかはりもあへぬをいふ、

題しらす　　寂蓮法師

今よりの秋の夜風やいかならむけさだにくずのうらみがほなる

源家清

すてはてゝあればある世のならひにもなほ物おもふ秋の夕暮

建暦二年松尾社哥合に初秋風

あら玉のことしもなかばいたづらになみだ數そふ荻のうは風

めでたし、詞めでたし、いたづらに年月をつみて、はや今年も半過ぬるに、たゞ荻の上風に、涙の數のそふのみぞさ也、下句は、年をふるまゝに、秋の悲しさのいやまさる故也、

建保三年五首哥合に行路秋　　從二位家隆

玉ぼこの道もやごりもしら露に風の吹しく小野のしのはら

しられずといふを、白露へいひかけたり、吹しくは、此哥にては、敷意なり」、さては三の句のにもじ、おだやかならぬやうなれども、「風の吹しく秋の野はといふ、古哥の詞によりて、やがて其意をもたせたる物也、一首の意は、篠原を風のふき敷故に、道もやどりもしられぬよしなり、やどりのしられぬは、枕にゆふべき、篠をふきしきたる故也、

同二年秋十首哥合に秋風　　雅經卿

今よりの荻の下葉もいかならむまづいねがての秋風ぞふく

此哥は、柴田ノ常昭が云ク、古今に、「秋荻の下葉色づく今よりや獨ある人のいねがてにする、是を本哥にてよめるなれば、荻(ヲギ)は萩(ハギ)を誤れる也といへる、まことに然るべし、本哥と、かへさまにとりなしたる、めづらし、まづといへるに、心をつくべし、

秋露　　家隆卿

をこめこが袖ふる山の玉かづらみだれてなびく秋のしら露

めでたし、詞めでたし、玉かづらは、頭にかくる鬘と、草の葛とをかねたり、さて袖をふる故に、頭の鬘のうごきて、みだるゝ意をもて、振山に生たる玉かづらのなびきて、露のみだるゝよしによめる也、これ新古今のころの人々の歌の、こまかなるたくみなり、

名所哥奉りける中に　　定家卿

うつりあへぬ花のちくさにみだれつゝ風のうへなるみやぎ野の露

めでたし、詞めでたし、うつりあへぬとは、風にふかれてちる露の、此花よりかの花へ、うつりゆくが、いまだかの花へうつりもあへず、みだるゝをいふ、ちくさといへるにて、此花かの花のさまをしらせたり、四の句は、かなたの花へうつりいたらぬ程なる故に、風の上にみだるゝ也、初句ぬは、ずとあるべきとなり、うつりあへずみだるゝとつゞく意なれば也、ぬにては、花のうつり

あへぬやうにて、まぎらはし、然れども露とよぢめたれば、その露のうつりあへぬ花と見れば、聞えざるにはあらず、

建保二年秋哥奉りけるに　家隆卿

はし鷹のはつかり衣露わけて野はらの萩の色ぞうつろふ

狩は秋よりはじむる故に、秋の狩を、はつかりといへり、ふるくも、はつとがりなどよめり、歌の意は、萩の露を分る故に、花の色の衣にうつりて、萩の花ずりになれるよしなり、狩にはすり衣をきる故に、かくよめり、

千五百番哥合に　後鳥羽院御製

日影さす岡べの松の秋風に夕ぐれかけて鹿ぞなくなる

初二の句は、「いつともわかぬ戀もする哉、といへる本哥の意をもちて見るべし、

秋の哥の中に　藻壁門院少將

かれはてむ後までつらき秋草にふかくや鹿の妻をこふらむ

本哥「かれはてむ後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな、かれはてむ後とは、こゝの哥にては、後は今よりいふ後にて、すなはちかれはてむ時をさしていへる也、かれはてゝの後にはあらず、秋草といふに、其の心に、あきのきつる意をもたせて、今より後、又つひにひたすらに枯はてんことさへ思はれて、つらき秋草といへる也、四の句、ふかくも、本哥の詞也、

秋哥中

西園寺入道前太政大臣家卅首哥に秋哥　家隆卿

朝日さす高根のみ雪そらはれてたちも及ばぬふじの川霧

月哥の中に　如願法師

心こそゆくへもしらね秋風にさそはれいづる月をながめて

さそはれといふ詞を、初二句へひゞかせたり、

正治百首哥に　後京極攝政

辛崎やにほてるおきに雲きえて月の氷に秋風ぞふく

秋哥下

千五百番哥合に　二條院讃岐

よとゝもになだのしほやきいとまなみ波のよるさへ衣打なり

よとゝもには、間なくいつもといふ意なり、夜と共にと心得るはひがごとなり、三の句みもじいかゞ、此哥衣を打て、夜さへいとまのなき意なれば、いとまなくと有べき事なり、みといひては、いとまのなさに、夜さへ衣をうつといふ意になれば、衣は夜はうつまじき物のやうに聞ゆるをや、本哥の詞のまゝによむも、事のさまによるべきことなり、

名所百首哥めしけるついてに　順徳院御製

水ぐきの岡の淺茅のきり〴〵す霜のふりはや夜さむなるらむ

本哥、「ねての朝けの霜のふりはも、四の御句は、本歌のはもじは詞なるを、これは霜のふりたる葉の意に、よみなさせ給へるなり、一本にふる葉とあるはわろし、さては本哥とらせ玉へる詮なきがごとし、

建保五年四月庚申に秋朝　定家卿

をぐら山しぐるゝ比のあさな〳〵きのふはうすき四方のもみぢは

四の句、一首のまなこなれども、あまりにいひすぐされて、少しこのましからず聞ゆ、拾遺「昨日よりけふはまさるるもみぢ葉の云々、

同二年内大臣家百首哥に遠村紅葉

山もとの紅葉のあるじうとけれど露もしぐれも程は見えけり

上句、峯の紅葉を、山本の里より見る意か、然らば詞をうちかへして、紅葉の山本のあるじといふつゞき也、あるじとは、我物として見る意なるべし、うとけれどゝは、我物としては見れども、峯と麓とへだゝりたれば也、又は上句は、麓の紅葉を、山上の里より見る意かとも思へど、然にはあらじ、そはいづれにしても、あるじといふに、題の村の意をば、もたせたるなるべし、されどそれは、遠村より見るもみぢにこそあれ、遠村の紅葉にはあらざれば、題の意にかなへりとも聞えずや、

冬哥

名所哥奉りけるに　定家卿

大井川まれのみゆきに年へぬる紅葉の舟路跡はありけり

めでたし、紅葉の船とは、行幸の時、屋形に紅葉をふきて、かざれる船なるを、こゝは水にちりうかみたる紅葉を、船に見なして、昔のその紅葉の船の跡といへる也、さて跡をいはむ料に、船路といへり、一首の意は、大井川に、紅葉の散て流るゝを、見てよめる意にて、昔の行幸は、年へぬれども、其時の紅葉の船の跡は、のこれりといへるにて、それに此所の行幸は、まれなる事なれ共、むかし其例はあること也、といふ意をかねたるものなり、「千代の古道跡は有けり、

落葉　俊成卿女

ふみ分てさらに尋ぬる人もなし霜にくちぬる庭のもみぢ葉

本哥、「ふみ分てさらにやとはむもみぢ葉のふりかくしてし道と見ながら、さらにやとはむとあれ共、そのふりかくしてし紅葉も、今は霜に朽ぬれば、尋くる人もなしと也、

文治のころ百首哥に　定家卿

浦風やこはに波こすはま松のねにあらはれて鳴ちごりかな

めでたし、初句やは、疑ひにて、二の句にて切たり、四の句、根さいひかけて、音の意也、とはに波こすといふを、松の根のあらはるゝ方と、千鳥の音に鳴かたと、二方へ用ひたり、古今「風ふけば波うつ峯の松なれや云々、

霰

あられふるしづのさゝやのそよさらに一夜ばかりの夢をやは見る

こはかの大貳三位が「いでそよ人を、といへる哥のいきほひをまねびてよまれたるにて、そよは、霰の笹にふる音によせたり、されど此哥にては、此詞かなへりとも聞えず、そのうへ此詞は、風にこそ似つかはしけれ、あられの音にはよわし、されば初句は、風すさむなどある方まさるべければ、霰の詠なき哥なり、結句のやは見るも、上よりのつゞきにあはせて、おだやかならず、かの三位がわすれやはするとよめるとは、いきほひことなるをや、

雪　寂蓮法師

庭の雪にけふこむ人をあはれこもふみ分つべき程ぞまたれし

本歌のごとく「今日こむ人をあはれと思はむとまたれしも、庭の雪のたゞ浅くて、ふみ分らるべき程のほどにこそ有けれ、今はさらにふみ分べくもあらぬ迄つもりたれば、さやうに人まつおもひも、

絶たりとなり、

釋教哥

化城喩品　八條院高倉

いこぎたてこゝはかりねの草まくら猶おくふかしみよし野の里

新古今に注せるがごとし、

戀歌一

寄雲戀　俊成卿女

しられじなゆふべの雲をそれとだにいはでおもひの下にきえなば

四五二三一と、句を次第して心得べし、それとだにいはでとつゞく意にはあらず、此哥よくせずはまがひぬべし、一首の意は、おもひを下にしのびて、いはずして死なば、夕の雲をその思ひのなごりとだに、其人はしらじといへる也、なき跡の煙の末は、雲となるなれば、夕の雲は、思ひに死たる人の名残也、又おもひのひを、火にとりて、火の消たる跡の煙の名残の意をもかねたり、

戀哥二

不逢戀　俊成卿女

思ひねの夢より外に道もなき心のかよふまぼろしもがな

道もなき心とつゞきたり、道はかよふの縁也、まぼろしは、かの蓬萊宮に尋ねゆきし、幻術の士なり、さてつねに夢幻とつらねい

へば、夢に益あり、

道助法親王家五十首哥に寄煙恋　家隆卿

たづねばやけぶりを何にまがふらむしのぶの浦のあまのもしほ火

初句は、たづね行てとはゞやの意也、わが思ひの煙の忍びてもまぎらかしがたきにつきて、忍ぶの浦のあまの、藻やくけぶりをば、何にまぎらかして忍ぶとぞ、行てとはゞやと也、忍ぶの浦といふを、しのぶとにとりて也、さて我忍ぶ思ひのことをば、一言もいはで、その意の聞ゆるは、上手のしわざ也、

正治百首歌奉りける時　定家卿

久かたのあまてる神のゆふかづらかけていく世を恋わたるらむ

詞めでたし、たゞかけてといはむ料ばかりに、久かたのあまてる神はあまりこと〴〵し、

恋哥三

題しらす　小侍従

まちも見よ逢夜を頼む命にて我もしばしの心づよさを

初句は、我とわが心にいへる也、焦死なばやと思はるゝにつきて、しばらく焦死なで、待も見よといふなり、我もといへる、もゝじは、人の心づよきにむかへていへり、一首の意は、さりとも逢むと頼むを命にて、我も心づよくおもふ、しばしの間を、まちも見よと也、

久安百首哥中に　俊成卿

露むすぶまゝの小菅のすがまくらかはしてもたゞ袖ぬらすらん

後朝恋　慈鎮大僧正

恋々てあふ夜の夢をうつゝこもしらずがほなるかねの音かな

鐘の音は、つねに夢をおどろかす物なるが、今はうつゝなるを、しらずがほに、まことの夢のごとく、おどろかすよといひて、鐘の音をうらみたるなり、

西園寺入道前太政大臣

見ても又我やゆきけむこばかりにけさ恋わたる夢のうきはし

初句、逢たることを、夢の縁に見てといへり、二の句は、君やこし我やゆきけむおもほえず云々の意、下句、うき橋といへるは、恋渡るの縁也、恋わたるとは、月日を経る時ならでは、いひがたきことなるを、後朝の恋によみ玉へるは、かなはず、されど此頃は、さやうのこまかなることまでは、かゝはらざりし也、

恋哥中に　後鳥羽院下野

おく山の日影のかづらかけてなど思はぬ人にみだれそめけん

みだるゝは、日かげのかづらの縁なり、

恋哥四

題しらす　定家卿

さゞなげく戀をするがのうつの山うつゝの夢の又ミ見えねば

さぞたしかぞにて、かゝぞといはむがごとし、此詞近き世にはただ、他のうへをおしはかることにのみいへども、昔はかやうにもつかひたる例多し、さてこゝは、かゝ歎く事をするとつゞきたる詞なり、歎くにて切たる詞にはあらず、さて此一句、詞いうならず、歎くといふとも力なし、なげかむ戀やは有べき、我ならぬ又もみぬ思ひするがのうつの山うつゝの夢をたどる枕に、とぞよままし、かくいふ二の句は、六帖に、人しれぬ思ひするがのともあり、たどるは、夢なりしか、うつゝなりしかとたどるにて、うつの山路にもよし有、哥よく見しれらむ人、わきまへてよ、と或人いへり、

建保二年内大臣家百首哥に名所戀

忘られぬまゝの繼橋おもひねにかよひしかたは夢に見えつゝ

忘られぬまゝに、夢に見ゆ、といふ意のいひかけ也、三四の句は、打かへして、通ひしかたは思ひねにとつゞく意也、通ひしは、橋の縁也、かたはいかゞ、

あしのやに螢やまがふあまやたく思ひも戀もよるはもえつゝ

一首の趣よろしとも聞えぬ、ことやうたるいひざま也、

題しらす　土御門院御製

涙ちる袖に玉まくくずの葉に秋風ふくとはとこたへよ

三の句以下、とはゞ恨むるとこたへよといふこと也、

戀哥中に　定家卿

やどりせしかりほの萩の露ばかり消なで袖のいろにこひつゝ

めでたし、詞めでたし、初二句は、むかし旅ねに逢見し意、露ばかり消なでとは、戀にくやみて、わづかに命の殘れる意、袖の色は、例の紅の涙にて、その色をみるにつけても、かの逢見しかり寢の萩を思ふといふ意也、

契りおきし末の原野の本がしはそれ共しらじよその霜枯

末の原野は、我わたは楢て、よそにかれる意也、本哥には、末の心は忘れずとあれども、今は霜枯に成ぬれば、本哥をそれともしらじといへるにて、然いふ意は、むかし契りおきし、末のわが事をば、わすれつらむと也、

戀哥五

恨戀　家隆卿

跡たえて今はこぬみのはまびさしいく夜の波の下にくちなん

ひさ木といふを、久しき意にとりていくよのとはいへり、それは跡たえてこぬことも、久しくなりぬ、いくよにか成ぬらんといふ意

にて、かくてはつひにくちなむと也、然れ共いくよのといふより、朽なむといふまで、詞のつゞきたれば、今よりいくよといふやうに聞えていかゞ、

雑歌中

題しらす　後鳥羽院御製

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は

初二句は、人をゝしくも又うらめしくもおぼしめす意、あぢきなくは、物おもふへかゝれり、天の下の政、御心にまかせぬ世なる故に、世中の事を、とやかくおぼしめすも、あぢきなき御物おもひとなり、

雑哥下

題しらす　順徳院御製

もゝ敷やふるき軒端の忍ぶにも猶あまりある昔也けり

あまりも、軒の縁の詞なり、

俊成卿女

見し人もなきが数そふ露の世にあらましかばの秋のゆふ暮

めでたし、詞めでたし、本歌「よの中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな、下句は、あらましかばとしのばるゝ秋のゆふ暮といふ意也、露といへること、上二句又結句にもよし有て、よく〳〵はたらきたり、

羇旅哥

旅宿松風　定家卿

なれぬ夜の旅ねなやます松風に此里人や夢むすぶらん

めでたし、詞めでたし、我は松風になやまされて、え夢も見ざるを、此里人は、此松風の音も、常に聞なれたる事なれば、夢見るらんかと也、上になれぬ夜のといひて、里人はなれたる意をふくめ、下に夢むすぶらんといひて、旅ねなやますといふ所に、夢むすばぬ意をふくめたり、

賀哥

建永元年八月十五夜、鳥羽殿に御幸ありて、御船にて御遊などありける、次の夜、和哥所のをのこどもまゐりけるよし、きこしめして、いださせ玉ひける、　後鳥羽院御製

いにしへも心のまゝに見し月の跡をたづぬるあきのいけ水

上句は、むかし白川院鳥羽院の、此殿にまし〳〵て、天の下の政を、御心のまゝに行はせ玉ひし事を、よませ玉へるにて、此みかどの御哥、此類の御述懐つねに多し、次の夜の御歌なれば、もしたゞ

月を御覽ぜし事のみならば、四の句、跡を尋ねしとあるべきに、たづぬるとあるは、昨夜の月の事のみにはあらず、つねにおぼしめす御心あることを、鳥羽殿の月によせて、よませ玉へるこさ、しられたり、

寄月祝　　　　後京極攝政

四方のうみ風しづかなる波のうへにくもりなきよの月をみるかな

めでたし、四の句、世と夜をかねたり、二の句も、世のしづかなる意をかねたり、ついでにいはむ、むかしは、四方の海さよめるを、今は多く四つの海さよむは、ひがとなり、四つの海さいひては、海の四つある意になれり、もと漢文に四海といふも、四方の海といふ意にこそあれ、

建仁三年、和哥所にて、九十賀玉はせける時、しろかねの杖を給はりて、後に奏し侍ける、　　　　俊成卿

此杖はわがにはあらず我君の八百万代の御代のためなり

神樂採物哥に、「此杖はわがにはあらず天にますとよをか姫の宮の御杖ぞ、下句に、杖の緣なくてくちをし、「千年の坂もこえぬべらなり、とあるによりて、「こえむ千年の坂のためなり、などやうにあらばいかゞ、とぞある人はいへる、

美濃の家つと折添の中の巻

續古今集

春歌上

建保三年百首哥奉りける時　定家卿

音羽川雪けの波も岩こえて關のこなたに春は來にけり

めでたし、四の句、「音羽山音にきゝつゝ」云々の本哥の詞なり、三の句こえてに、春の關こえてきつるにつきて、波も岩こえてなり、

春のはじめの歌　後京極攝政

氷ゐし水のしら波岩こえて清たき川にはるかぜぞふく

若菜　家隆卿

うちむれて若菜つむ野の花がたみこのめも春の雪はたまらず

四の句、めは花がたみの縁也、花がたみめならぶなどいへり、結句、花がたみに若菜はたまれども、雪は春なる故にたまらずとなり、此歌、上に雪の縁の詞あらまほし、初句、うちむれては、はたらかざる詞なれば、ふりはへてなどあらばいかゞ、又消ぬさてなども有べし、去年の雪は消たりとて、野に若菜つむなり、さて今ふるは、春の雪なればたまらぬ也、

花洛春月

春やとき花のみやこは名のみして雪けの月よ風もにほはず

初句「春やとき花やおそきと」云々の本哥の詞にて、花のおそき意、一首にわたれり、下句は、花も咲て、霞める月ならば、風のにほふべきに、といふ意なり、此歌、花洛の詮なく、春ノ月の詮もなければ、題にかなへりとも見えず、たゞ餘寒の哥也、又四の句、雪けの空はとしても聞ゆれば、月もはたらかざる也、

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹　定家卿

みつしほにかくれぬ礒の松の葉も見らくすくなく霞む春哉

めでたし、本歌「しほ見てば入ぬる礒の草なれや見らくすくなくこふらくのおほき、新宮撰哥合、左方より、松の葉こそあまりにくはしく聞ゆれ、と難じたるは、本哥の草(クサ)に心のつかざりしにや、草にむかへて、松の葉といへる社面白けれ、

歸鴈　衣笠前内大臣

ほの〴〵と霞める山のしのゝめに月を殘してかへるかりがね

上句詞めでたし、

花　後鳥羽院宮内卿

見わたせばふもとばかりに咲そめて花もおくあるみよしの山

めでたし、下句詞めでたし、四の句、吉野には、常に奥といふをよむ故に、山におくあるのみならず、花も奥ありと也、そは花の、麓も岑も、同時には咲ずして、先麓より咲初て、やうやくに日數へてさくを、おくあるとよめるなり、

春歌下

花月百首哥合によませけるに　後京極攝政

今日こずは庭にや跡のいこはれむこへかし人の花の盛りを

上句「あすは雪とぞふりなましの意なり、

建保二年詩哥合に河上花　定家卿

花の色のをられぬ水にさすさをのしづくもにほふ宇治の川長

初二句本歌「春毎に流るゝ河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ、とあると同じく、花の影のうつれるをいへる也、水中に花の見ゆるは、たゞ影のみなれ共、河邊の花盛なる故に、さす棹の雫までにほふと也、結句、川瀬とあらんぞまさるべき、川長は四の句よりのつゞきいかゞ、雫の川長の身につきたる物のごく聞ゆればなり、

弘長元年百首歌奉りけるに花　前大納言爲家

よしさらばちるまでは見じ山ざくら花の盛りをおもかげにして

花　鴨長明

吹のぼるきその御坂の谷風にこずゑもしらぬ花を見る哉

千五百番歌合に　大納言通具

吹はらふこの下風にかつきえてつもらぬ庭の花のしら雪

夏哥

正治二年百首歌に　定家卿

かた糸をよるよる岑にともす火にあはずは鹿の身をもかへじを

本哥「かた糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせん

秋歌上

百首御哥の中に　順德院御製

限あればきのふにまさる露もなし軒の忍ぶの秋の初風

上句、秋こぬさきも、本より至りてしげき露なれば、秋のきても、昨日にまさるともなし、とよみ玉へるにて、忍ぶ草の生しげりて、軒端のいたくあれたるよしの、御述懷なり、

道助法親王家五十首哥に早秋　雅經卿

うつ蟬の羽におく露もあらはれてうすきたもとに秋風ぞ吹

箒木卷「うつ蟬の羽におく露のこがくれて忍びしのびにぬるゝ袖哉、とある哥の、三四の句にあたりて、其露も、顯はれてとよめる也、うすき袂は、うつせみの羽、又あらはれてにも縁あり、

題しらす　　土御門院御製

露のぬきあだにおるてふ藤ばかま秋かぜまたで誰にかさまし

初二句は、「霜のたて露のぬきこそよわからし云々の意、四の句は、「秋風にほころびぬらし藤ばかまの意にて、ほころびぬさきにといふ意也、露は秋風にきゆるものなる意も、おのづからにほひとなれり、

秋夕　　定家卿

秋よたゞながめすてゝも出なまし此里のみのゆふべとおもはゞ

「いづくもおなじ秋の夕ぐれの哥より出たり、

建仁元年五十首歌合に　　家隆卿

いつもかくさびしきものか津の國のあし屋の里の秋の夕暮

秋の夕に、あしやの里に來て見るに、いはむかたなくさびしきにつきて、此里は、いつもかやうにさびしき所かと思へるさまなり、二の句、物といふといかゞ、さびしきかとこそあるべきさまなれ、又おもふに、此里の秋の夕暮は、いつの年とても、かやうにさびしきか、といへるにもやあらむ、

建永のころ、大神宮に奉らせ給ひける三十首御歌の中に、　　後鳥羽院御製

みよし野の岩のかけぢをならしても猶うき時か秋の夕暮

本歌「世にふれぱうさこそまされみよしのゝ岩のかけ道ふみならしてむ、四の御句、かもじ、かなの意の如くにも聞ゆれども、なほうたがひの意なり、

前内大臣家百首哥合に　　土御門院小宰相

なみださへ秋の物とはいつなりてくるれば人の袖ぬらすらむ

初句、露のみならず、涙さへ也、三の句、いつよりなりての意也、

秋歌下

十首歌合に　　家隆卿

天の川秋の一夜のちぎりだにかた野に鹿のねをや鳴らん

上句、七夕の契にくらべて也、天の川かた野同所也、

千五百番歌合に　　雅經卿

ともしせしは山しげ山忍びきて秋にはたへぬさをしかの聲

ともしせし頃は、其人にしられじと、ねをたてず、しのびきつれども、今秋にはえたへずなくと也、二の句は、ことかしこ、あまたゝびしのび來つる意也、

題しらず　　定家卿

ひさかたのかつらの里のさよごろもをりはへ月のいろにうつなり

月のいろにうつ、心得がたし、

冬歌

冬雨　定家卿

さえくらす都は雪もまじらねど山端しろき夕暮の雨

二三の句は、雨なるを、雪もまじらぬといひて、結句の雨なひゞかせて、それとしらせ、下句は、雪なるを、しろき雨といひて、二の句の雪をひゞかせて、それとしらせたるは、いとたくみ也、

最勝四天王院の障子に

をはつせや峯のときは木吹しをり嵐にくもる雪の山本

雪のつもりたる木を、吹しをる故に、其嵐に、雪をさそひきて、空のくもるなり、

冬歌の中に　家隆卿

まつ人のゆきゝの岡もしら雪の明日さへふらば跡や絶なん

初二句、今日は猶まつ人のゆきゝはするゆきゝの岡も也、

後京極攝政家歌合に雪中松樹低

聞なれし嵐の音はうづもれて雪になびく岑の松原

つねは嵐になびく松の、雪になびくと也、

釋教哥

清凉寺にてよめる　寂蓮法師

わしの山二たび影のうつり來てさが野の露に有明の月

此寺の釋迦をよめるにて、二三の句は、第三傳の像なる意也、

羇旅哥

建保三年七首歌合に冬夕旅　定家卿

引むすぶ草葉も霜のふるさとはくるゝ日ごに遠ざかりつゝ

霜のふるといふに、日數をへて、時節のおしうつれる意有、

後鳥羽院に名所哥奉りし時　雅經卿

ふみ分しむかしは夢かうつの山跡とも見えぬつたのした道

ふみ分し昔とは、伊勢物語、なりひら朝臣のこえし事也、四の句、その跡とも見えぬなり、そはさしも名高き昔の跡なれども、そのしるしの殘れるとも見えぬよしなるべし、

洞院攝政家百首に旅　藤原信實朝臣

しほ風に苫のうはぶきひま見えてうきねの枕あけぬ此夜は

羇中晩風　土御門院御製

吹風のめに見ぬかたをみやことてしのぶもかなしゆふぐれの空

戀歌一

名所百首哥合にめしける時　順德院御製

神なびのいはせの森のはつしぐれしのびし色は秋風ぞふく

二三の御句は、はじめて思ひをそれといはする意にて、結の御句は、秋風に木葉を外へちらすよしにて、もらす意なるべし、

題しらす　　土御門院御製

こへかしな槇たつ山の夕しぐれ色こそ見えねふかき心を

四の御句は、槇は色のかはらぬ意、ふかきは、槇たつ山の縁の詞也、とぢめのなもじは、なる物をの意也、

見戀　　定家卿

うしつらしあさかの浪の草の名よかりにも深きえには結ばで

二三の句、かつみにて、かつ見るといふ意にとれり、かりは、草の縁語、えは、江に緣をかれて、深き江は、淺かの名にむかへり、

戀歌二

戀の哥の中に　　後成卿女

かけて猶たのむもかなし玉ノ緒のあはずはなけの契ばかりに

玉ノ緒のあはずはといへるは、本哥の「あはずは何を玉の緒にせむの意なるを、さはいひがたき故に、玉のをゝ上にいひて、あはずはといひのこしたるもの也、あはずはにて、切て心得べし、此所強(シヒ)たるいひざまにて、語とゝのひがたし、なげのは、なほざりの也、とぢめはをとあるべきに似たるを、にといへるは、なげの契ばかりに、玉ノ緒をかけて、たのむといふ意なり、玉のをゝかくるとは、其契にかゝりて、命のながらふるよし也、一首の意は、たゞなほざりの契りばかりに、命をかけて、賴み居たるも、かなしきこと也、もしあはずしてやみなば、何を命にして、ながらふべきぞと也、

後京極攝政家歌合に契歲暮戀　　定家卿

あら玉の年のくれまつ大空はくもるばかりのなくさめもなし

本哥「いつしかとくれをまつまの大空はくもるさへこそうれしかりけれ、四の句、ばかりといへるは、本歌のさへといへるによくかなへり、そは本歌には、空のくもるはうれしかるべきにはあらざれども、それさへうれしきとあるを、今はせめてそれほどのなぐさめもなしといふ意也、

戀歌三

寶治二年百首哥に寄月戀　　後鳥羽院下野

月をたすくもらぬ空に見し物をたがおも影のかきくらすらん

めでたし、

同じ百首に寄枕戀

もらすなよ枕のほかにしる人もなくなくちぎるよゝのかねごと

なくなくは、少しかなひがたからんか、よゝは夜々也、

光明峯寺前攝政家百首歌に名所戀　　定家卿

やすらひに出けむかたもしら鳥のさば山まつのねにのみぞなく

初句、やすらひつゝの意也、二三の句は、別れのかなしさに、心まどひして、いづ方へいかにして出て來しと いふこともおぼえずといふを、しら島へいひかけたり、三四の句、万葉四の歌の詞也、結句、島に縁有、詞書に、上句を、これは我をとひ來れる人、かへるともいはず、かりそめに立出やすらふていにて見えざれば、その行末をもしらず、といふとなりといへるは、いとをさなし、とひ來し人の事にはあらず、我事をいへるにこそあれ、出けるといはずして、けむと疑ひたるは、人の事のやうに聞ゆめれど、さにあらず、我事ながら、心まどひして、出たる事をも、たしかには覺えざりしさまなるをや、

戀歌四

光明峯寺前攝政家十首歌合に寄枕戀　　定　家　卿

わするなよ三年のゝちのにひ枕さだむばかりの月日なりとも

これは夫婦のわかれて、三年を經れば、さらにこと人にあふことなれば、ゆるされたる、昔へのさだめにて、令に見えたる、その意をもてよめる也、

遇不逢戀　　後鳥羽院御製

うかりける人のこゝろのあさね髮何いたづらにみだれそめけむ

（美濃の家づと詳論の中の巻）

洞院攝政家百首歌中に　　定　家　卿

色かはるみのゝ中山秋こえてまたとほざかるあふ坂のせき

雜歌下

百首歌合に野行幸　　後京極攝政

芹川の波もむかしに立かへりみゆきたえせぬさがの山風

詞めでたき哥なるを、みゆきたえせぬの縁なきは口をし、

續拾遺集

春歌下

西園寺入道前太政大臣家卅首哥に　　藤原信實朝臣

雲よりもよそになりゆくかづらきの高間のさくら嵐吹らし

本歌「よそにのみ見てやゝみなむ云々、

土御門内大臣家哥合に雨中藤花　　定　家　卿

しひて猶袖ぬらせとやふぢの花春はいくかの雨に咲らん

本歌「ぬれつゝぞしひて折つる云々、しひては、本哥の詞なるを、これはいくかもあらず暮行春をゝしむとて、ぬらす袖を、猶しひてつよくぬらせとやといふ意にとりなされたり、春はいくかの雨とは、本哥によりて、春はいくかもあらぬところの雨といふ意にいへり、此歌、上にやとかゝりて、又いくといひて、らんと留りたる

たゞてにをはのさゝのひいかゞさ思ふ人あらんか、これは春はいくかの雨といふは、本哥の詞によりて、春はいくかもあらぬ頃の雨といふとなれば、いくてふ詞は、上下のてにをはにはかゝらず、たゞ上のやをうけてらんとはとまれる也、いくをらんへかけては見べからず、

夏歌

浦螢　　如願法師

うづもれぬこれや難波の玉がしは藻にあらはれて飛螢哉

本歌「たにはは江のもにうづもるゝ玉相云々、初二句、これやうづもれぬ難波のなり、

秋哥上

題しらず　　順德院御製

かり人の入野の露のしらま弓末もさをゝに秋風ぞふく

露の白しといひかけ玉へり、末は弓の緣の詞にて、野の草葉の末なり、弓、狩人に緣有、露の白くおきたる草葉を、秋風の吹ゆるに、末のなびくさま也、

行路薄　　藤原經衡朝臣

袖かへるをちかた人は分すぎてのこる尾花に秋風ぞ吹

袖は尾花へひゞけり、分過ても、尾花に緣有、遠方人の袖を吹かへしたる秋風の、今は殘れる尾花の袖にふくと也、

秋歌下

建保百首歌奉りける時　　後久我太政大臣

月にゆく遠山すりのかり衣しをるゝ露に夜は更にけり

二三の句は、古歌の詞なるを、其かり衣をきて、月夜に遠き山路を行意によみ玉へり、しをるゝは、其衣のしをるゝ也、露に夜は更にけりさいふに、月の影をもたせたるにも有べけれど、さは聞えにくし、さる故に、にもじもいかゞに聞え、下句に月のあへしらひのなきも、事たらぬことちす、しをるゝ袖に影ぞふけぬる、とぞあらまほしき、袖もあらまほしきもの也、しをるゝ袖といひ、影さいはゞ、露はいはずとも、おのづからそれと聞ゆべし、

家の六百番哥合に　　後京極攝政

山こほき門田の末は霧はれて穗なみにしづむ有明の月

よくとゝのひたる御哥也、初句さ四の句とを、相照して見べし、しづむも、涙に緣ある詞也、有明も、霧晴る時節にあたれり、二の句のはもじは少しくちをし、のさぞあらまほしき、

冬哥

建保五年四月庚申に冬夕　　雅經卿

あられふるまさきのかづらくるゝ日の外山にうつる影ぞみじかき

本歌「み山には霰ふるらし外山なるまさ木のかづら色付にけり、くるはかづらの縁也、冬の日は、みじかき物なるを、霰のふりて、かきくもる故に、いとゞ短くはやくくるゝ也、

冬の哥の中に　光俊朝臣

おのづからこふにつらさの跡をだに見て恨ばや庭のしら雪

雪にとはるゝは、跡のつらけれども、さびしさにたへねば、よしやとはれて、其つらき跡を見て、恨みだにせばやと也、三の句だには、恨みの下にある意也、すべてかやうの詞は、おくべき所におきがたき時は、所をかへておくも、例多し、上手の歌は、所をかへておきたるも、ひがとゝは聞えざる也、かやうの所、昔の哥を見るにも、今よむにも、よく心得おくべし、

藻壁門院少將

跡をしむたがならはしの山路とてつもれる雪をこふ人のなき

雜春哥

建保百首哥奉りける時　定家卿

花の色に一春まけてかへる雁ことし越路の空だのめして

めでたし、一春と今年とかけ合せたり、今年はの意也、初二句は、花の色にまけて、とゞまれ也、下句、越路の空を、そらだのめにいひかけたり、そらだのめとは、こゝはかへらんと契りおきしを、そらごとになすをいふ、

五社に、百首歌よみて奉りける頃夢の告あらたなるよしゝるし侍るとて、書そへける、　俊成卿

春日山たにの松とはくちぬともこずゑにかへれ北の藤なみ

三の句は、我身のしづみたること、四の句は、子の世に至りて、立かへり先祖のごとく昇進せよと祈る意也、かへるはなみの縁、

其後年をへて、此かたはらに書付侍りける、　定家卿

立かへる春を見せばやふぢなみはむかしばかりの梢ならねど

初二句ば、かのいのりおかれし父の卿に、我身の昇進したるとを、見せ奉らまほしと也、あはれ也、下句は、先祖の大臣の位までこそは、えいたらねども、といふ意也、梢は高き意にとれり、三の句のはもじいかゞ、こはのとあるべきところなれども、然いひては、下へのつゞきあしきによりて、せんかたなくはとはよみ玉へりと聞ゆ、又昔ばかりのといふ詞も、心ゆかず、我ならば「むかしには立及ばねど藤なみの梢にかへる春を見せばや、とぞよままし、とぞ或人はいへる、

雜秋哥

洞院攝政家百首歌に月　定家卿

むかし思ふ草にやつるゝ軒端よりありしながらの秋の夜の月

「昔しのぶ」草にやつるゝ、故郷は、とある哥によりて、昔思ふ草は、すなはち昔をしのぶ、忍ぶ草也、なみ〳〵の哥よみたらば、初句を、むかし忍ぶと、たしかによむべきを、此卿などは、さやうにみだりなる文字あまりは、よみ玉はぬ人にて、忍ぶを思ふといひて、忍ぶ草と聞せたるは、いさいうにおもしろし、

羇旅哥

道助法親王家五十首に旅春雨　如願法師

わすれずはしをれて出し春雨のふるさと人も袖ぬらすらん

三の句春雨、二の句よりのつゞきは、故郷を出し日の春雨なるを、下句へのつゞきは、今ふる春雨なり、いかゞ、

羇中秋　爲家卿

うつりゆく日數しられて夏草の露分衣あきかぜぞふく

三の句以下、夏と思ふまに、はや秋の來たるさま也、うつりといへる、草の露分衣に緣有、

戀歌一

道助法親王家五十首哥に寄枕戀　雅經卿

しられじなわが袖ばかりしきたへの枕だにせぬよはのうたゝね

本歌「しきたへの枕のみこそしらばしるらめ」しるといへば枕たにせでねし物を云々、二三の句は、枕はせずて、我袖ばかりを敷て寐といふこと也、結句は、かりそめにあへるないへるなるべし、

題しらす　俊成卿

もらしても袖やしをれむ數ならぬ身をはづかしの杜の雫は

戀歌三

千五百番歌合に　雅經卿

かけてだにたのめぬ波のよる〳〵をまつもつれなきよざの浦風

かけて波の緣也、四の句、松の葉のつれなき緣の詞也、風は、波のよるといふによせ有、一首の意、人のつれなきのみならず、契りもおかぬに、よる〳〵わが待もつれなしと也、

洞院攝政家百首哥に後朝戀　定家卿

はじめよりあふは別ときゝながら曉しらで人をこひける

戀けることよと、歎きたるける也、

千五百番歌合に　通具卿

めぐりこしよゝの契に袖ぬれてこれもむかしのうき涙かな

初二句の意は、さきの代に、わが人にうかりしむくひの、我にめぐり來つる契によりて、といふこと也、下句は、此涙も、前の世に、わが人にうくて、人に涙を流させし、むくひの涙ぞと也、

戀哥四

弘長元年百首歌奉りける時逢不逢戀

常盤井入道前太政大臣

おなじ世にまだゆふ暮を歎く哉こりぬうきみの心よわさは

人のつらきにこりて、死ぬるともえせず、心よわくながらへゐて、いまだ同じ此世にて、夕暮ごとに歎くとのかなしさよと也、

春の頃、物いひそめける人の、梅ノ花を、りて、さしおかせける、又のとし同じ所にてよめる、

定家卿

心からあくがれそめし花のかになほ物おもふはるのあけぼの

詞はめでたし、心からといふこと、はたらきても聞えず、

我のみや後もしのばむうめの花にほふあたりの春のよの月

右二首ともに、いせ物語の、月やあらぬの歌の段の意なり、

建保百首哥奉りける時

初かりのとわたる風のたよりにもあらぬおもひを誰につたへん

本歌「たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり、誰につたへんは、誰にことつてむの意にて、本哥の、人につくるに同じ、

御題しらす　　順徳院御製

言の葉もわが身しぐれの袖の上に誰をしのぶの杜のこがらし

本哥「今はとてわが身しぐれにふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり、初二句に、本哥のすべての意をもちて見べし、上句、我身時雨とふりぬれば、言の葉もうつろひたる袖の上に、といふ意也、下句、しのぶは、戀しのぶ也、木がらしは、本哥の下ノ句によせ有て、袖の上にふく木がらし也、誰をとは、言の葉はうつろひ散たるに、何をといふ意と、又思ふ人は心かはりぬるに、誰をかやうに戀しのぶ心ぞ、といふ意とを、かねさせ玉へる也、

建保五年哥合に冬夜戀　　雅経卿

なみだせく袖のこほりをかさねても夜はのちぎりは結びかねつゝ

袖の氷は、いく重もかさねて結べども、契は結びかねたりとなり、さて逢夜は、袖をかさぬるに、むかへたる意も有、

戀歌五

文治二年九月十三夜五首哥合に絶戀　　光俊朝臣

うきながらしばしは見えし面影もいつの月日かかぎりなりけむ

三の句も。ゝじ重し、

雜歌下

題しらす　　鴨長明

いかにせむつひのけぶりの末ならで立のぼるべき道もなき身を

下句のはてに、ばもじをそへて心得べし、下句は、官位などのぼるべきよしもなき意也、道は、のぼるといふによし有、新古今集の比は、初句にいかにせんとおける哥、いと多きを、おほくはかなへりとも見えざるを、此哥などは、此詞よくかなへり、

俊成卿女

身をかへてあらぬ命のきえぬ間をなき數にだに誰かしのばん

初二句は、此世ながらも、身をかへたるごとくに、むかしにもあらずなりぬる身の命といふ也、下句は、ひたすらに死て、なき人の數に入りたらば、さてだに人に忍ばるゝことも有べきに、猶きえのこりてあれば、さすがになき數にもいらぬゆゑにしのぶ人もなしとなり、

新後撰集

春歌下

後京極ノ攝政、左大將に侍りける時、伊勢ノ勅使にてくだり侍けるに、ともなひて、鈴鹿ノ關をこゆとて、花のもとにおりゐて、よみ侍ける、　定家卿

えぞ過ぬこれやすゞかの關ならんふりすてがたき花のかげかな

えぞ過ぬといひて、又ふりすてがたきは、ことかさなりて、わづらはし、

御題しらず　順德院御製

春よりも花はいくかもなきものをしひてもをしめ鶯のこゑ

二三の御句「春はいくかもあらじとおもへば、といふ哥をとらせ玉へり、しひては、本哥の詞なり、下御句「鳴とむる春しなければ云々、「聲たえずなけやうぐひす云々、などいふ歌によし有、

百首哥の中に　定家卿

尋ねばやしのぶのおくのさくら花人にしられぬ色やのこると

二の句、しのぶ山のおくとあらでは、とたらはぬ心地す、

後京極攝政家六百番歌合に　家隆卿

あらし吹花の梢に跡見えてはるはすぎ行しがの山ごえ

跡見えては、春の過ゆく跡の見ゆる也、

夏哥

初五月雨　後鳥羽院御製

五月雨のほどもこそふれみよし野のみくまが菅をけふやからまし

二の御句、今より末をかけてのたまへる詞にて、久しくふりもせんほどにといふ意也、三四の御句は、萬葉の詞也、その哥、まへに引り、題の初といふ意を、めづらかによませ玉へる御哥なり、

四の御句、みぐまを、みくさと書る本は、誤也、

冬　哥

建保三年五月哥合に曉時雨　　定　家　卿

まどろまぬすまの關守あけぬとてたゆむ枕もうちしぐれつゝ

たゆむは、ねぶる也、結句は、又時雨のして、ねぶりをおどろかす也、上に、時雨のよしの詞なくて、あたら哥也、

羇旅哥

旅のこゝろを　　定　家　卿

故郷をいでしにまさるなみだ哉あらしの枕夢にわかれて

二の句出しは、別れしの意なるを、其詞下にある故に、詞をかへたる也、此哥も、嵐のあへしらひあらまほし、

戀歌三

題しらず　　式乾門院御匣

分わびぬ袖のわかれのしのゝめになみだおちそふ道芝の露

戀歌五

建保二年内大臣家百首哥に名所戀　　定　家　卿

かたみこそあたの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし

初二句は、「かたみこそ今はあたなれ云々の本哥の意にて、あたは、仇なれば、たもじ清音也、さて名所のあだの大野のたもじは、濁音なり、しかれども、清濁を通はしていひかくるは、古へよりつねのこと也、又此哥に、あたを、もとよりはかなくあだなる意としてもよき也、

戀歌六

後京極攝政家六百番歌合に　　定　家　卿

いはざりきわが身ふる屋の忍ぶ草おもひたがへて種をまけとは

二の句は、人にふるされたる意、三の句以下は、しのぶ草を、思ひたがへて、忘れ草の種をまきたるよし也、いせ物語にて知べし、我をしのべとこそ契りたれ、忘れよとはいはざりきといふこと也、

賀　哥

文治六年女御入内屏風に　　後京極攝政

君が代ににほふ山路のしら菊はいく度露のぬれてほすらん

下句は、本哥の意によりて、いくかへり千世をへむといふ意也、四の句のもじ、いさゝか結にかなはぬやうなれども、難にもあらじ、

玉葉集

春哥上

建保二年二月詩哥をあはせられけるに野

外霞　　　　　　　　　　定　　家　　卿

松の雪きえぬやいづこ春の色に都の野べはかすみゆくころ

本歌「三山には松の雪だに消なくに、

千五百番哥合に　　　　　有　　家　　卿

山ざこはあらしにかをるまどの梅かすみにむせぶたにのうぐひす

あらしといひ、むせぶといへると、梅鶯ののどかなるに、似つか

はしからず、又一首のさまも、此集のふり也、

後京極攝政家六百番歌合に雲雀　定　　家　　卿

末遠き若葉の芝生うちなびきひばりなく野の春の夕暮

哥合に、右方申云、しばふ何になびくといへる、さると也、何に

もあれ、若葉の芝生のなびかむといかゞ、然るを、判に、何にて

もあれ、まとにさまでなびかずも侍らむとあるは、いかなるとぞ

や、

春歌下

暮山花　　　　　　　　　定　　家　　卿

たが春の雲(異イ)のながめにくれぬらん宿かるみねのはなのこの本

光明峯寺前攝政内大臣に侍ける時よませ

ける百首歌に尋花

鳥の聲霞の色をしるべにておもかげにほふ春のやまぶみ

花といふとなけれども、花を尋ぬと聞えたり、

建保五年四月庚申に春夜

山端の月まつそらのにほふより花にそむくる春のこもし火

にほふは、月の出むとするほど、山端の空のあかるをいふ、花

にも縁あり、下句は、月の出ぬほどは、むかひの山の花も見えざ

る故に、燈にむかひゐたるが、やゝ月のあかりの見えそむる故に、

ともし火をそむけて、山にむかふ也、

夏哥

建仁三年哥合に草野秋近　　定　　家　　卿

露わけむ秋のあさけは遠からでみやこやいくかまのゝかや原

四の句、みやこはなほ遠き意なり、二三の句にて然聞えたるは、

めでたし、契沖が、此哥題にかなひても聞えず、旅ノ部に入べし

といへるは、げにさると也、

秋哥下

千五百番歌合に　　　　　定　　家　　卿

思ひいれぬ人のすぎゆく野山にも秋はあきなる月やすむらん

過行といふも、思ひいれぬによし有、秋なる月は、あはれさの、

と時にまさる月なり、

月を見てよめる

こしかたはみなおもかげにうかびきぬ行末てらせ秋の夜の月

建保元年八月十五夜歌合に古寺残月　　俊　成　卿

又たぐひあらしの山のふもと寺杉のいほりにあり明の月

冬　歌

鳥雀群飛欲雪天　　土御門院御製

雲ゐゆくつばさもさえてとぶ鳥の明日かみ雪のふる郷の空

とぶ鳥のは、名所の明日香の枕詞なり、鳥のとぶことを、枕詞に用ひて、其明日香を、やがて明日やといふ意にいひかけさせたまひ、又み雪のふるさとゝつゞきたる、すべていとよくよみとゝのへさせ玉へる物なり、そのうへ題の欲レ雪といふ意を、めでたくよみとらせ玉へり、

建保四年内にて遠村雪といふ事を　　定　家　卿

跡もなき末野の竹の雪をれにかすむやけぶり人はすみけり

初句は、見渡したる野の雪に、人の通へる跡もなきなり、三の句は、竹もみな雪にをれふして、里ありとも見えざるさま也、下句は、煙の立のぼりて、かすめるを見て、人の家あることをしれるよしなり、此哥、三四の句、何とやらん、竹の、雪に今をるゝにつけて、かすむといへるやうに聞えて、すこしいかゞ、其意にては、結句にかなひがたし、

戀哥二

後京極摂政家哥合に　　定　家　卿

戀わびてわれとながむる夕ぐれもなるれば人のかたみがほなる

われとは、われと我心から也、

戀哥五

権中納言長方よませ侍ける五首哥の中に

久戀　　定　家　卿

それとだにわすれやすらん今更にかよふ心は夢に見ゆとも

三の句は、結句へかゝれり、下句、こなたより通ふ心の、かなたの夢に見ゆるなり、此哥、新千載集にも、かさねていれり、

題しらず

惜からぬいのちも今はながらへておなじ世をだにわかれずも哉

今はといふ詞、四の句の上へうつして心得べし、

雜哥一

保延の頃述懐百首に残雪　　俊　成　卿

春しらぬこし路の雪も我ばかりうきに消せぬ物はおもはじ

越路の雪は、物思ひをする物のやうにていかゞ、

承久三年八月、参議にて、駒引に参りて侍けるに、常盤井ノ入道前ノ太政大臣上卿にて、「引かへてけふは見ることそかなしけれさやはまたれし望月の駒」とよみて、檜扇のつまに書つけて、出ける車におこせける、かへし、　定家卿

物ごとにこぞのおもかげ引かへておのれつれなき望月のこま

みだれによりて、世のさまかはりぬる年なれば也、

雪の哥の中に　西行

折しもあれうれしく雪のうづむ哉かきこもりなんと思ふ山路を

雑哥三

山家のこゝろを　順徳院御製

あはれなる遠山はたの庵哉しばのけぶりの立につけても

閑居のこゝろを　定家卿

残る松かはる木草の色ならですぐる月日もしらぬ宿哉

残る松の色にては、いかにして過る月日をしりたまへるにか、

続千載集

春哥上

正治二年後鳥羽院に奉りける百首哥に　後京極摂政

春日野の草のはつかに雪きえてまだうら若き鶯のこゑ

春歌下

前大納言為家家に百首哥よみ侍けるに　家隆卿

かづらきや高間の嵐吹ぬらし空にしらるゝ花のしらゆき

本哥「空にしられぬ雪ぞふりける、

夏哥

御題しらす　順徳院御製

朝な／＼みづのうへ野にかる草のきのふの跡はかつしげりつゝ

建保五年四月庚申五首哥に夏暁　雅経卿

夏草の露分衣此ごろもあかつきおきは袖ぞすゞしき

建保四年百首哥奉りける時　定家卿

夏衣かとりのうらのうたゝねに浪のよる／＼かよふあきかぜ

秋哥上

名所百首哥奉りける時　定家卿

むすびおきし秋のさが野のいほりより床は草葉の露になれつゝ

秋歌下

月の哥の中に　　後成卿女

尋ねても忘れぬ月の影ぞとふよもぎが庭のつゆのふかさを

初句も〻じは、三の句のとふへかゝりて、とひもするといふ意なり、影ぞのぞもじにて、人はとはぬとしられたり、蓬生巻に「たづねても我こそとはめ道もなくふかきよもぎの本のこゝろを、

羇旅哥

御題しらす　　土御門院御製

朝霧に淀のわたりをゆくふねのしらぬわかれも袖ぬらしけり

此御哥、續後拾遺集にも重ねて入て、結の御句、袖はぬれけりとあり、それまさりて聞ゆ、

釋教歌

母の周忌に、法華經をみづから書て、巻々のこゝろをよみて、表紙に繪かゝせ侍ける、二の巻の心を、　　定家卿

をしまずよあけぼのかすむ花の陰これも思ひのしたの故郷

譬喩品、火宅の譬の意にて、二三の句は、其文に、諸子等於火宅内樂著嬉戲云々とある意、下句は、おもひのひを、火にとりて、火宅なるよしなり、故郷とは、柄故火宅とあるによれり、さて一首の意は、汝等莫得樂住三界火宅、勿貪麁弊色聲香味觸也、若貪著生愛、則爲所燒、とある意なり、

戀哥上

家の百首哥合に初戀　　後京極攝政

しらざりしわが戀草やしげるらんきのふはかゝる袖の露かは

哥合に、四の句を、かゝりしとこそいはまほしけれ、と難じたるは、さることなれども、かくいふも、つねの事なるうへに、これはかくの如くなるといふ意をかねたれば、難ならじ、二の句のわがといへるところそ、くちをしけれ、

戀哥四

建仁元年五十首哥奉りける時　　定家卿

かりにだにとはれぬ里の秋風に我身うづらの床はあれにき

いせ物語、深草の里の女の意也、

續後拾遺集

春歌上

建仁四年後鳥羽院に五首哥奉りける時

山花　　雅經卿

分まよふみ山ざくらや咲ぬらん雲よりおくにかをるはる風

春歌下

和哥所にて釋阿に九十賀玉はせける時の屛風に　　雅經卿

久かたの雲に高間の山ざくらにほふもよその春の明ぼの

四の句よそのは、「よそにのみ見てややみなん、といふ本哥の詞なり、

題しらす　　定家卿

春雨のふる野の道のつぼすみれつみてもゆかむ袖はぬるとも

秋哥上

建保二年内大臣家百首哥に谷鹿　　定家卿

さをしかの朝行谷の玉かづらおもかげさらず妻やこふらん

此哥の事、前にいへり、

秋歌下

建仁元年八月十五夜和哥所撰哥合に深山曉月　　有家卿

花をのみをしみなれたるみよし野の梢におつる有明の月

をしむといふ事、下句へひゞかせて聞べし、このうた、契沖は、春の月をゝしみたるやうにや、梢におつるといふにて、曉とはなるべければ、落句、秋のよの月といひても有べしといへりき、

羇旅歌

和哥所にて六首歌奉りけるに旅哥　　長明

旅衣たつ曉のわかれよりしをれしはてやみやぎのゝ露

戀歌一

戀の御哥とて　　後鳥羽院御製

久かたの日影のかづら手にかけてこゝろの色を誰に見せまし

此御哥、日蔭のかづらは、色のためしにいふべき物にあらざれば、かづらとあるは、たゞかけてとのたまはん料のみにて、日の色にとり給へるなるべし、

千五百番哥合に　　俊成卿女

しらざりき結ばぬ水に影見ても袖にしづくのかゝる物とは

戀哥三

御題しらす　　順德院御製

明日もまた同じゆふべの空やみんうきにたへたる心ながさは

夕の空を見るは、物思ひのながめ也、

光明峯寺入道前攝政家戀十首哥合に寄帶戀　　後鳥羽院下野

石川やあはに契やむすびおきし花田の帶のうつりやすさは

催馬樂呂石川「石河のこま人に、帶をとられて、からき悔する、

いかなる帯ぞ、花田の帯の中はたえたる、あはには、万葉四、又伊勢物語に、「玉の緒をあわをによりてむすべれば、ありて後にもあはざらめやもと有て、もと沫緒といふ緒のより方有し也、然るを拾遺集貫之哥に、「春くれば瀧のしら糸いかなれやむすべども猶あはに見ゆらん、清少納言「うす氷あはに結べる紐なればかざす日影にゆるぶばかりを、これらは、淡々しき意と聞えたり、この哥も同じ、万葉には、沫緒と書る、沫はあわ、淡はあはにて、假字異なるを、貫之のころは、題に通はしいへるにや、

雜歌下

題しらず　　寂蓮法師

すみわびぬいざゝば我もかくれなむ世はうき物ぞ山端の月

美濃の家つと折添下の巻

風雅集

春哥上

承久元年百番歌合に野徑霞　　順德院御製

夕づく日かすむ末野にゆく人の夢の小笠に春風ぞふく

下の御句け、春風の霞を吹とく故に、行人の笠の見ゆるさまなるべし、もし然らざれば、笠に春風のふくは、見ゆべきにあらざればなり、

後京極攝政左大臣に侍ける時家に哥合しけるに曉霞　　定家卿

初瀬山かたぶく月もほの〴〵霞にもるゝ鐘の音かな

鐘の音の、霞よりもれて聞えくるに、月ももれて見ゆる也、

百首御歌の中に　　順德院御製

ちくま川春ゆく水はすみにけりきえていくかの峯のしら雪

春の哥の中に　　後京極攝政

春の色は花ともいはじ霞よりこぼれてにほふうぐひすの聲

こぼれてにほふといふは、花のうへの事なるを、鶯にいへるが趣意なり、

題しらず　　定家卿

雲路ゆく雁の羽風もにほふらむ梅さく山の有明のそら

春歌中

題しらず　　定家卿

春雨よ木葉みだれしむら時雨それもまぎるゝ方はありけり

春雨は、まぎるゝ事もなく、さびしきよしなり、

春のうた

いつも見し松の色かははつせ山さくらにもるゝ春の一しほ

四の句は、櫻花の間に見ゆるをいへり、

春哥下

水上落花　　従三位頼政

よし野川岩瀬の浪による花や青根がみねにきゆる白雲

結句は、花のちりうするが、白雲のきゆるやうに見ゆるをいふ、今此よし野川に、流れくる花は、青根が峯に消ゆくと見ゆる、白雲にやと也、

夏歌

千五百番哥合に　　定家卿

時しらぬ里は玉河いつこてか夏のかきねをうづむ白雪

本哥のとりざま、おかしからず、富士の山を玉川の里に、雪を卯花にかへたるのみにて、たゞ同じ趣なるをや、

夏の哥の中に　　　　後京極攝政

雨はるゝ軒の雫に影見えてあやめにすがる夏のよの月

すがるとは、露にこそいふべけれ、雫にはいかゞ、とも聞ゆめれど、あやめは長き物なれば、上よりつたひて、其葉のほどを落くるほどの露は、雫ともいふべく、それにはすがるといはむも、難ならじ、又五月五日のよしもなくて、軒に菖蒲も、少しいかゞと聞ゆめれど、雨はるゝといひ、夏といへれば、五月雨のはるゝころと聞ゆれば、五日にふきたるあやめの、殘りて有べければ、これ又難ならじかし、

秋哥上

後京極攝政左大將に侍ける時の六百番歌合に殘暑　　　　定家卿

秋來ても猶ゆふ風をまつがねに夏をわすれし陰ぞたちうき

題しらず

山ざとは蟬のもろこゑ秋かけてそともの桐の下葉おつなり

蟬の聲とゝもに桐の葉のおつる也、

戀哥三

後京極攝政左大將に侍しときの六百番哥合に寄風戀

しらざりし夜深き風の音もせず手枕うとき秋のこなたは

初二句は、むかし手枕をかはしてねたりし頃は夜深くふく風をも、しらざりし也、三の句せずは、にずを書誤れる也、さかしらに改めつるか、昔には似ず、風の音も身にしみて、寒き也、せずにては聞えがたし、四の句は、「手枕のすきまの風も寒かりき云々の哥によりて、詞をかへたるにて、今はおはずうときよし也、結句は、秋になりてよりこなたにて、人の心の秋をかねたり、

戀哥五

遇不逢戀　　　　定家卿

こひこかしまだ同じ世の月を見てかゝるいのちにのこる契を

二三の句は、戀死もせず、まだながらへてゐて、うき人と同じ世にありて、おなじ月を見るよし也、四の句は、同じ世の月を見るにかゝりて、ながらへゐる命なり、結句は、同じ世の月を見るばかりが契の殘れる意なり、

雜哥上

題しらず　　　　定家卿

霞たつ峯のさわらびこればかりをりしりがほのやどもはかなし

をりは、蕨の縁なり、此哥、霞たつといふこと、さまたげとなれり、たゞ蕨のもゆるのみならんこそ、こればかりといふには、よくかなふべけれ、霞もたちたらんは、いかゞ、さてはわらびはもえずとも、春をば知べきにあらずや、

雑歌下

建保三年めされける名所百首哥の中に辰市

敷しまの道にわが名は辰の市やいさまだしらぬ倭言の葉

本哥万葉「なき名のみたつの市とはさわげどもいさまだ人をうるよしもなし

母の思ひに侍りけるほど、ひえの山の中堂にこもりて侍りけるに、夜雪のいみしくふりけるつとめて、父ノ卿のもとより、おぼつかなき事など書て、おくに「子を思ふこゝろや雪にまよふらん山のおくのみ夢に見えつゝ、と有けるかへし

うちもねず嵐のうへの旅まくらみやこの夢にわたるこゝろは

二三の句、山上の旅ねなる故に、あらしのうへといふ也、都の夢は、京にて父ノ卿の、山のおくのみ云々とよまれたる夢也、わたるとは、嵐の上といふにつきていへり、嵐のうへを渡りゆく意也、下句より初句へかへりての意は、我をかなしと思ひおこせ玉ひて、夢にさへ見玉ふ、父ノ卿の心を、いとほしく思ひ奉る心は、終夜えまどろみもし侍らずと也、さて又嵐はげしき山中のたびねなる故に、いとゞねられぬ意をもかねたり、

新千載集

春哥上

建保三年詩哥合に野外霞　雅経卿

春日野の雪間の草のすり衣かすみのみだれ春風ぞふく

本哥「春日野の若紫のすり衣忍ぶのみだれ限しられず、衣はすなはち霞の衣にて、そをすり衣によみなせる也、一首の意は、霞の衣を、春風の吹みだす故に、そのひま〳〵より、春日野の雪間の草の緑の、まだらに見えたるが、すり衣のごとくなると也、本歌の詞のはこびを、そのまゝに用ひて、意を右のごとく引かへたる、いと〳〵巧なり、下句、詞はいと〳〵巧に花やかなれど、意はあまりにほのかにて、おぼつかなし、おぼろけの人の、かゝるすがたをまねびよみたらんには、えもいはぬひがことにぞなりぬべき、

歸鴈　定家卿

契りおけ玉まく葛に風ふかばうらみもはてじ春のかりがね

初句は、又來むと契りおけ也、二三の句は、秋になりなばといふ意なるを、うらみといはむ料に、かくいへり、うらみは、歸りゆく春の雁を、物をうらみて、そむく意にとりていへる也、はてじとは、今はうらみてそむきいぬるとも秋に成なば、又來まほしく思ふべければといふ意也、

春哥下

元久二年詩哥合に水郷春望　　定家卿

宮木守なぎさの霞たな引てむかしも遠ししがの花園

初二句は、拾遺に「さゝ波やあふみの宮は名のみして霞たなびき宮木守なし、とある哥をとられたり、四の句は、霞の立へだてゝ、遠く見ゆるによりて、昔のとも、いとゞ遠きやうに思ひやらるゝよし也、たなびきの引は、宮木の縁にて、今は宮木守なければ、宮木はひかずして、霞のたな引と也、

五百番歌合に

木ノ本は日數ばかりをにほひにて花ものこらぬ春のふるさと

櫻の木ノ本も、今は花はやく散てなければ、たゞ春の日數の殘れるばかりぞ、木本のにほひなると也、

秋哥上

月前竹風　　後鳥羽院宮内卿

色かへぬ竹の葉しろく月さえてつもらぬ雪をはらふ秋風

ぬもじ二つ有、

羇旅哥

建仁元年五十首歌奉りけるに野徑月　　定家卿

めぐりあはむ空行月のゆくすゑもまだはるかなるむさし野の原

拾遺「わするなよほどは雲井になりぬともそらゆく月のめぐりあふまで、

戀歌一

後鳥羽院に奉りける百首哥の中に　　如願法師

思ふこもしらじな人めもる山の下ふく風の色し見えねば

戀哥三

六百番歌合に　　定家卿

身にたへぬおもひをすまの關すゑて人にこゝろをなどゝごむらん

初句は、身に堪ぬにて、身におはぬといはんがごとし、不絕にはあらず、不絕にては、身にといふことはいたづらなり、關すゑてとは、すなはち思ひをするをいひて、とゞむといはむ料也、此哥、初句、下句にかけ合ヮ意なし、我ならば初二句を、「うき名にも猶こりず

まのなどよまむ、さらば下句にかけ合よろしかるべくや、とぞある人はいへりし、

戀哥五

名所百首哥奉りける中に　定家卿

琴のねもなげきくはゝる契とて緒だえの橋の中も絕にき

初二句は、万葉七に、「琴とれば歎きさきだつ云々、古今雜下、「わび人のすむべき宿と見るなべに歎きくはゝる琴の音ぞする、とあるをとられたりと見ゆ、琴をとりてひきて、其音をきくにも、いとゞ歎きのくはゝる中と也、をだえは、琴の緒也、此哥、をだえといひて、又中も絕にきといへる、わづらはし、中たゆといはむ料に、をだえの橋のとはいへるにも有べけれど、猶いかゞ、そのうへ中絕たるによりて、歎きくはゝるとこそいふべけれ、歎きくはゝる契とて、中の絕たるとはいかゞ、ことたがひて聞ゆ、

題しらす　後鳥羽院下野

あれにけり心もしらぬ關すゑておやのいさめし人のかよひ路

本歌、「たらちねの親のいさめしうたゝねは物おもふ時のわざにぞ有ける、初句は、通路のたえたるをいふ、二三四の句は、戀しき人を、夢に見まほしく思ふ、我心をもしらずして、夢路に關をすゑて、ねさせぬよし也、そは本哥に、うたゝねを、親のいさむるとあるをもて、かくいひなしたるにて、畢竟はたゞねられぬによりて、夢にも見ぬよし也、結句は、戀しき人のみえ來る、うたたねの夢のかよひぢなり、

慶賀歌

建仁三年和哥所にて釋阿に九十賀給はせける時の屏風に　定家卿

花山の跡をたづぬる雪の色に年ふる道のひかりをぞ見る

初二句は、むかし仁和の御時に、花山の遍昭僧正に、賀を玉ひし例なるをいふ、雪は、跡を尋ぬるといひ、としふるといひ、道の光といはむ料也、四の句は、釋阿の、哥の道に年へられたるをいひて、此度賀を給はれるによりて、哥の道の光の見えたるよし也、

新拾遺集

夏哥

建仁元年鳥羽殿哥合に山曉郭公　定家卿

ほとゝぎす山の雫に立ぬれてまつとはしるや曉のこゑ

二三四の句は、万葉に、「あし引の山のしづくに妹まつと我たちぬれぬ山の雫に、とある詞をとれり、結句は、あかつきに聞たる意なり、

雨中郭公　後鳥羽院宮内卿

月影は思ひたえたる五月雨の雲より出るほとゝぎす哉

秋哥下

秋の哥の中に　　家隆卿

春日野に朝ゐる雲のあともなくくるればすめる秋のよの月

朝ゐる雲には、野よりも、春日山といはむかた、おだやかなるべきに、野としもいへるは、万葉四に、「春日野に朝ゐる雲のしく〳〵に云々、などあるによられたるなるべけれど、同じ巻に、「春日山朝ゐる雲のおほゝしく云々、ともあれば、なほ山とこそあらまほしけれ、

野鹿　　順徳院御製

さをしかの夜はの草ぶし明ぬれどかへる山なき武藏のゝ原

御題しらす

淺茅生や床は草葉のきり〴〵す鳴音もかるゝ野べの初霜

床は草葉なる故に、その草葉の霜にかるれば、なく音もともにかるゝなり、

羇旅哥

守覺法親王家五十首哥に旅　　有家卿

櫻色に春たちそめし旅衣けふみやぎのゝ萩が花ずり

二の句、京をたちしと、衣をたちしとをかねたり、そめしも衣の縁也、四の句、今日見るといひかけたり、けふはと、はもしあらまほしけれど、せんかたなし、花ずりとは、櫻色にむかへて、旅衣を、萩の花の色に摺んをいふ、一首は、「みやこをば霞とゝもにたちしかど云々の意なり、

哀傷哥

雨中無常　　家隆卿

末の露淺茅がもとを思ふにもわが身ひとつの秋のむら雨

初二句は、本歌「末の露本の雫や云々の意にて、世の無常なるよしなる中に、淺ぢか本としもいへるは、わが葬られむ墓の事にいへる也、下句は、本哥「我身ひとつの秋にはあらねどの意にて、世の無常なるを思へば、むら雨も、我身ひとつの秋の如く、ちぢに物のかなしきと也、村雨に、露をかけ合せてよめり、又下句、涙の意をもたせたる歟、

後鳥羽院かくれさせ給ひての比月を御覧して　　順徳院御製

同じ世のわかれは猶ぞしのばるゝ空ゆく月のよその形見に

これはひとつ都の内にもおはしまさず、隱岐と佐渡と、はるかの國にはなれおはしましての、御わかれなれば、もとより別れてはおはしましつれども、世におはしますほどは、同じ世の内なりしに、かくれさせ給へば、同じ世をわかれ玉へる也、猶とは、もとよりわかれておはしましつれども、なほしのばるゝ也、下ノ御句

は、月はいづこにても、一ッの月なれば、同じ世の物ながら、雲ゐのよそに見る故に、はるけき國をへだてゝ、よそにおはしましし、父帝の御形見と御覽ずればと也、さてその月は、今も同じ世にあるに、父帝は、同じ世にだにおはしまさぬとよと、かなしくおぼしめししのぶよしにて、あはれなる御哥也、

戀哥一

光明峯寺入道前攝政家百首歌に名所戀　　定家卿

かひがねに木ノ葉吹しく秋風もこゝろの色をえやはつたふる

本哥「かひがねを根こし山こし吹風を人にもがもやことつてやらん、此結より出たる趣意也、本哥の二三の句を、木葉吹しくとゝりかへて、四の句の色とかけ合せたる也、色ある木ノ葉をば、ふきしけども、我心の深き色をば、思ふかたへ、え吹つたへぬとよと也、

戀歌二

寶治二年百首哥奉りし時寄玉戀　　八條院高倉

きえねたゞ何ぞはあだの言の葉にかけてもつらき袖の白玉

本哥「命やはなにぞは露のあだ物を云々、白玉はこは、すなはち本哥の露にて、命のたとへなるを、涙のことをもかねて、袖のといへり、さてその露の緣語にて、死ねといふことを、きえねといへり、たゞはひたすらになり、あだの言の葉とは、人のあだなるなほざりの言の葉をいふ、言の葉にかけても、露の緣語なり、かけても は、本哥の下句のごとく、あふにしかへばと、命をかけてこふれども也、つらきは、人のつらきなり、

戀哥四

光明峯寺入道前攝政家戀十首哥合に寄鏡戀　　定家卿

ゆく水の花のかゞみの影もうしあだなる色のうつりやすさは

本哥「年をへて花のかゞみとなる水は云々、これはいまだちらぬ花の影のうつれるをよめり、うつりやすきは、ちりやすき意にて、影のうつる方をもかねたり、此哥、戀の意聞えず、たゞ花の哥也、

戀哥五

洞院攝政家百首哥に怨戀　　定家卿

おのれのみあまのさかでをうつたへにふりしく木葉跡だにもなし

二三の句は、伊勢物語に、あまのさか手をうちてなむ、のろひをるなる、とあるをとりて、深く恨むるよし也、下句は、同條の「木葉ふりしくえにこそ有けれ、といふ哥をとれり、さればこは、彼物語

の詞と哥とをとり合せて、したてたる哥也、

神祇哥

西行法師すゝめ侍ける百首哥に　定　家　卿

うきこともなぐさむ道のしるべにや世をすみよしと天降りけむ

初二句は、哥の道をいふ、下句は、住吉ノ神の御事にて、世をすみよしといふと、うきこともなぐさむといふとを、かけ合せたり、

釋教歌

如寒者得火　寂　蓮　法　師

谷の水みねのあらしを忍びきてのりの薪にあふぞうれしき

初二句は、寒き物をいへり、三の句は、堪忍び來て也、さて谷の水と薪とをよみ合せたるも、釋教にはよせあり、題は法華經の藥王品の文にて、經の利益をたとへたるなり、

雜哥上

道助法親王家五十首哥に遠歸雁　雅　經　卿

かすみゆくよものこのめもはるばると花まつ山にかへるかりがね

はるばるとかへるかりがねとつゞく意にて、四の句は、花まつ山なるにといふ意也、然れども花まつ山へかへるといふやうに聞えていかゞ、又題の遠の意、はたらかず、

石清水哥合に月前霞　正　三　位　知　家

(美濃ゝ家つと折添下の卷

横雲は峯にわかるゝ山びめのかすみのそでにのこる月かげ

朝五月雨　定　家　卿

玉水もしごろの軒のあやめ草さみだれながら明るいく夜ぞ

五月雨を、亂るゝにとりて、軒のあやめのみだるゝ故に、落る玉水のしどろなる也、されどあやめのみだるゝよしなくていかゞ、風などあらまほし、又玉水しどろに落る故に、あやめのみだるゝといへるか、さるにても、しどろなるよしなくていかゞ、又夜の明ることも、四の句までに、いさゝかもよしなし、題の意はたらかず、

雜哥中

名所百首哥奉りけるに　定　家　卿

まちこひし昔は今にしのばれてかたみ久しきみつの濱松

本歌は、いざこどもはやもやまとへ大伴のみつの濱松まちこひぬらむ、今には、今にいたる迄もなり、形見は、昔のかたみにて、まちこひしといふに、縁ある言なり、久しきも松に縁有、

新後拾遺集

春哥上

建仁元年五十首哥奉りける時　定　家　卿

にほの海やけふより春にあふ坂の山もかすみてうら風ぞふく

結句いかゞ、浦風は、殊に春ふく物にや、こはかならず春風とあらまほしきを、上に春といふことあれば、せんかたなさのしわざなるべし、

千五百番哥合に　雅経卿

晴やらぬ雲は雪げの春風にかすみあまぎるみよし野の山

四の句、上にかけあはず、これは古き哥に、あまぎる雪とあるを見て、あまぎるは空のさえたることゝ、心得誤りてよまれたるなるべし、

春哥下

百首哥めされしついでに　順徳院御製

花の色に猶をりしらぬかざし哉三輪のひばらの春の夕暮

万葉に「いにしへに有けむ人もわがごやみわのひばらにかざしをりけむ、二の句は、時節をしらぬと、花に折替ることをしらぬとをかねさせ給へる也、かざしは、檜原を、三輪山のかざしとしてよませ玉へるなり、夕暮は、かざしを折かざして、歸る時によせ有、一首の御意は、三輪山の、春も花はさかずして、いつも同じ色の檜原なるを、御覧じて、おぼしめしたるさまにて、三輪山も、春は檜原のかざしを、花にをりかへて、花をこそかざすべきに、猶いつもの如く、色もかはらず、檜原なるは、時節をしらぬかざしかなと也、

建保三年百首哥奉りける時　定家卿

いはつゝじいはでや染るしのぶ山こゝろの色のおくをたづねて

本哥「しのぶ山忍びてかよふ道もがな人のこゝろのおくも見るべく、いはでやといへる、本哥の二の句の意なるべけれど、心の色のおくを尋ぬるに、させるかけ合もなきとなり、深くぞ染しなどあらば、心のおくに、よくかけ合っべきをや、

百首御哥よませ玉ひける中に　順徳院御製

水鳥の羽がひの山の春の色にひとりまじらぬ岩つゝじ哉

はがひの山、萬葉に見ゆ、それを水鳥の青羽の色にいひかけて、春の色とよませ玉へる也、春の色は青し、まじらぬは、ひとしからぬ意也、つゝじのみ赤きなり、

九條前内大臣家三十首哥の中に江上暮春　定家卿

堀江こぐ霞のをぶね行なやみおなじ春をもしたふ頃哉

本哥「ほりえこぐたなゝし小船こぎかへり同じ人にやこひわたりなむ、霞のをぶねいかゞ、かすみの中なる船をいへるにや、三の句は、春のけしきを惜みて過やらぬなり、さて本哥の こぎ歸りの意

を、ふくめて、同じ春をといへり、

夏　哥

名所百首哥奉りける時　　定家卿

蟬の羽の衣に秋をまつらがたひれふる山のくれぞすゞしき

和哥所にて六首哥奉りける時　　後京極攝政

松たてるよざのみなとの夕すゞみ今もふかなむおきつしほ風

よざのみなとの松に、沖つ塩風のふくといふ本哥ありや、よりどころなくては、あぢはひなき哥なり、續拾遺集に、「しほかぜによざのうら松音さえて云々といふ、俊惠法師がうたあれど、むげに近し、

秋哥上

建保百首哥奉りけるに　　定家卿

たがかたによるなく鹿の音にたてゝなみだうつろふむさし野の原

初句は、次のよるへいひかけて、うつろふまでへかゝれり、鹿、古本には鴈とあり、かの「君がかたにぞよると鳴なるといふによりて、むさし野とはよみ玉へりと見ゆれば、鴈のかたよせ有、四の句は、涙の色のかはりたるをいひて、さて「鴈の涙や野べを染らんといふによりて、その色たるなみだにて、染て、草葉のうつろひたるむさし野といふ意なるべし、うつろふは、涙のかたと、草葉のかたとをかねたるべし、然らざれば、聞えがたき詞也、

名所百首哥奉りける時

初鴈のきなくときはのもりの露そめぬしづくも秋は見えけり

二の句、來鳴時といひかけたり、四の句ば、常盤ノ杜なる故に、染ぬ葉なれども、鴈の來鳴時は、其涙の落そふ故に、秋の見ゆると也、鴈の涙は、草葉をも染といへばぞ、

建保三首哥合に秋野月　　俊成卿女

思ひいでよ露を一夜のかたみにてさゝ分る野べの袖の月影

本哥「秋の野のさゝ分し朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢまさりける、本歌のさゝ分し云々は、くらべ物にいへるを、此哥は、今秋の野の篠を分行時によめる意也、一夜のかたみは、本哥のあはでこし夜の形見也、一首の意は、秋の夜に、今野べのさゝを分行、袖の露は、一夜人にあはでこし時の、袖の涙に似たれば、其夜の形見なるほどに、やどれる月影も、其夜の涙を思ひいでよと也、

題しらす　　有家卿

たえ〴〵に見ゆる野中の忘れ水夜がれがちにや月もすむらん

たえ〴〵とよがれがちとを、かけ合せたり、結句、すむは、女の許にかよひすむによせていへり、

秋歌下

題しらす　有家卿

末の松まつ夜ふけゆく空はれて浪よりいづる山の端の月

四の句は、末の松山を、波のこす物にしてよめる也、かの家隆卿の、波にはなるゝ横雲と、おなじさまなり、此哥二三の句、用なく聞ゆ、もしは四ノ句、人の心のかはりたるよしにて、戀の哥か、

爲忠朝臣家百首に有明月　俊成卿

秋の夜のふかきあはれは有明の月見しよりぞしられそめにし

冬哥

名所百首哥奉りける時　定家卿

あはぢ嶋むかひの雲のむら時雨そめも及ばぬすみよしの松

初二句は、むかひの淡路嶋の雲といふ也、下句、松は時雨にも色のかはらぬ物なるを、むかひの時雨なる故に、えそめ及ばぬといひなしたる也、

雜秋歌

百首御哥の中に　土御門院御製

立田山もみぢやまれになりぬらん河波しろき冬のよの月

戀哥一

建保二年百首哥奉りけるに　定家卿

かた糸のあだの玉の緒よりかけてあはでの杜に露きえねとや

上句本哥、「あはずは何を玉の緒にせむ、かた糸といふに、あひがたき意有、二三の句は命にかけてこふる意にて、結句にかけ合せて、あだのとはいへり、此哥、上句に杜の縁なき故に、上下意はかけ合たれ共、詞かけ合ず、我ならば、「よりかけてあはでのもりの木がらしにたへぬなげきの露の玉の緒とぞよみてむと、ある人はいへりき、

おなし百首に

あづさ弓いそまのうらに引あみのめにかけながらあはぬ君哉

上句は、目にかくるの序なり、さて網ひく浦は、よにおほかるに、梓弓いそまの浦をしもよみ玉へるは、引に緣をあらせたる物也、ふるき哥には、さることもなけれど、今序哥をよまむには、此こゝろばへ有べきわざ也、

戀歌四

千五百番哥合に　宜秋門院丹後

中々にこえてぞまよふあふ坂の關のあなたや戀路なるらん

これは逢坂の關こゆるを、あふことにとりて、逢ての後の意なれば、あなたといへる、いかゞ、（逢ノ後を）逢坂の關のあなたとは、いまだあ

はぬほどにこそいふべけれ、

題しらす　西園寺入道前太政大臣

まつとせしならひばかりの夕暮に面影殘る山の端の月

〇上句、其人の來てあへるにもあらず、たゞこぬをまちならひたるのみの夕暮なるにといふ意なり、

雜歌上

題しらす　家隆卿

さゝも猶あはれはかけよ老の波末ふきよわる和哥の浦風

上四の句は、年老て哥よむこともおとろへたる意也、二の句は、結句と合せて思ふに、玉津嶋ノ神に申す意なるべし、かけよは波の縁なり、

新續古今集

春哥上

水無瀨殿にて詩哥を合せられける時水郷春望　家隆卿

橋姫のあさけの袖やまがふらん霞もしろき宇治の河なみ

春の朝明には、霞も白く、たてば、橋姫の白妙の袖や、其霞とまがふらんと也、然るに河波はいかにぞや、こは波も白き物なる故に、いへるなるべけれど、霞の外に、白き物をいひては、霞にてまがふといふ詮なし、

遠山霞　權中納言雅緣

春寒みなほ吹上の濱風にかすみもはてぬきぢの遠山

大かた後の世に、新古今のふりを、よくよみえられたるは、此卿のみにして、殊に先祖の雅經ノ卿の口つきなり、めづらしき事なる故に、殊に此抄にも、これかれとぬきいでつ、然るに四季ノ部を過て、戀雜などには、ぬきいでむと思ふばかりの哥の、一ッも見えぬは、いとあかぬことなりかし、

後小松院に人々十首哥奉りけるに海邊歸鴈

なごりあれや霞の袖にしほなれて歸るいせをのあまつ鴈がね

初句は、鴈の心を思ひやれるにて、なごりは、わかれのおもひ也、天津を海士にいひかけたるは、たゞ袖の縁、しほなれての縁のみにして、哥の意にはあづからず、一首の意は、霞の中に、鴈がねのうちしをれてかへるは、なごりをおもへばにやとなり、

春哥下

河上落花　雅緣卿

雪とのみさそふも同じ河風にこほりてとまれ花のしら波

花のちるは、古哥にも、雪とのみこそたとよみて、たゞに雪のごとくなれば、さそふ風も、雪をさそふ冬の風と、同じことなるほ

どに、散て流れゆく花の波も、その風にこほりて、とゞまれとなり、

家の百首哥合に雲雀　　後京極攝政

かた岡のかすみもふかき木がくれに朝日まつまのひばり鳴也

四の句は、朝は霞の深きを、日の出ぬれば、霞もうすく成て、物あざやかになる故にて、一首の意は、木がくれの深きのみならず、霞も深ければ、朝日の出て、霞のはれむをまちて鳴と也、

後小松院にて人々題をさぐりて五十首哥
つかうまつりけるに紫藤を　　雅縁卿

むらさきのねすりの衣春くれて袖のなごりにかゝるふぢなみ

紫のねすりの衣は、むらさきの根をもて、すりたるをいふなれど、此哥は、人と寐て、其人の衣の色の、うつりたる衣をいふといへる説によりて、よまれたり、一首の意は、春のくるゝなごりに、藤の花の咲たるといふとなるを、かの寐すりの袖のなごりに、涙のかゝるを以て、かゝる藤波とよめる也、此哥は、定家卿のふりに似たり、

夏歌

百首御哥の中に五月雨　　順徳院御製

五月雨はまやの軒ばもくちぬべしさこそうきたの杜のしめ縄

くちぬべしは、朽なんとする也、一首の御意は、軒端さへくちなむとすれば、浮田の杜のしめなはゝ、さこそくちぬらめと也、かくよませ玉へるは、浮田の杜のしめ縄は、くつる物にいへる、古哥あるべし、万葉十一に「かくしてや猶やなりなん大あらきのうきたの杜のしめならなくに、といふ哥あり、二の句なりなんにてはよろしからざる哥也、もしはくちなむなりしを、朽の字の後に成に誤れるにはあらざるか、續古今集には、さてやゝみなんと、かへて入られたれどわろし、

新玉津嶋社に奉りける百首歌の中に　　雅縁卿

雲のゐるかづらき山の五月雨に木々のしづくも間なく時なし

本哥「しもとゆふかづらき山にふる雪の間なく時なしわがこふらくは、初句、五月雨のさまにて、葛木山によし有物也、

後小松院にて人々題をさぐりて五十首哥
つかうまつりけるに杜納涼

よそまではしのぶの杜の木がくれにかよふか秋の風のすゞしさ

初二句、よそまで吹とをば、しのぶといふを、杜の名へいひかけたり、四の句は、秋のかよふかといふことなるを、うちかへしたるにて、とよなくいきほひあり、秋の風とつゞくにはあらず、

秋歌下

新玉津嶋社に奉りける哥の中に山朝霧　　雅縁卿

今朝はなほはゝその色もうす霧の下にまたるゝ佐保の山風

朝霧のなほ晴やらぬに、へだてられて、佐保山の柞の色も、うすく見ゆる故に、吹はらふべき風のまたるゝ也、色もうす霧とは、色もうすく見ゆるうす霧といふ意なるを、つゞめて一ッにいへる也、立へだてながらも、ほのかに柞の見ゆることをいはむために、うす霧といへり、深き霧にては、ひたぶるに見えざればなり、下には、内にといはむがごとし、

冬哥

初冬嵐　　雅縁卿

はげしさも昨日にけふはまさきちる外山のあらし冬やきぬらん

後小松院にて人々題をさぐりて五十首哥つかうまつりけるに杜落葉

生田川水の秋さへことゝはで木ノ葉をおくるもりの下風

下句、上にかけあはず、杜の下風の、木葉をおくらんは、いまだ河水にうかばぬさきのさまと聞ゆれば也、

戀哥二

洞院攝政家百首歌に不逢戀　　俊成卿女

さゝ分し袖のためしのぬれ衣ほさでいく夜の道しばの露

本哥ニ秋の野のさゝ分し朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢまさりける、下句は、夜毎にえあはで、むなしくてのみかへる意也、

戀歌三

建保二年七月哥合に羇中戀　　順德院御製

命やはあだの大野のくさまくらはかなき夢もをしからぬ身を

本哥ッ命やは何ぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに、命やはあだのといふに、本哥の上句をこめさせ玉へり、はかなき夢とは、ばかなく夢のごとくあへるをいふ、夢もは、夢にかへてもの意也、一首の御意は、本哥のごとく、命は露のあだ物なれば、はかなき一夜の契にかへても、惜からぬ身なる物をと也、あだの大野は、一夜草枕して逢る所也、

戀哥四

光明峯寺入道前攝政家百首哥に名所戀　　家隆卿

思ひ川影見し水のうすごほりかさなるよはの月もうらめし

うす氷のほどは、猶うつれる月影の見えしが、夜をへて、氷のかさなるまゝに、月の見えずなれるを、恨みたる也、たとへたる戀

のこゝろは、もと逢見し人の、へだゝりて、今はあはずなれるを、恨みたる也、此哥、思ひ川とは、たゞ名所ならでも、つねによむことなれば、題の意はかけたり、古今集に大空の月の光し寒ければ影見し水ぞまづこほりける、

正治百首歌に　　土御門内大臣

有し夜を見はてぬ夢の枕にもなほうらめしきかねの音哉

ありし夜とは、逢見し夜をいふ、一首の意ば、有しよのごとく、又あふと夢に見たるに、鐘の音に驚きて、はやくさめたるよし也、にも猶といへるは、うつゝに逢夜にはあらねども、夢に見る夜の枕にも、なほうらめしと也、

寶治二年百首哥に寄草戀　　正三位知家

さのみやはうきに年へむうき草のねも見ぬ人をおもひ絶なで

うきは、沼の事なるを、人のうきに用ひたり、うき草の根といひかけたり、一首の意は、寐も見ず、うき人に、さのみ年を經て、戀わたるべきことかは、今は思ひたゆべきに、などえ思ひたえぬことぞと也、

戀哥五

建永元年七月哥合に深山戀　　後鳥羽院御製

跡たえて深きなみだの色までもこはれぬ山の秋ぞかなしき

深きは、涙の色のことなるを、山の緣に、跡たえて深きとはの玉へり、三の句にまでもは、涙の色の深くなるまでも也、秋ば、人のこゝろの秋也、深き涙の色といふに、紅葉の色の深きことを、したにむかへての玉へり、山の秋とあるにて、其御意見えたり、

後京極攝政家歌合に寄橋戀　　定家卿

人心をだえの橋に立かへり木葉ふりしく秋の通ひ路

二三の句は、絶て又あはぬ昔にかへりたる意、四の句は、伊勢物語の、木葉ふりしくえにあれば云々をとれり、此哥、橋は、いささか通路のよせはあれども、猶緣の詞あらまほしきうへに、をだえの橋は、殊によせなく聞ゆ、又人心も、秋といへるには、いささか緣あれども、二三四の句にかけあはぬことなり、初句、うき中は、などあらましかば、其難もなく、又をだえにも緣あらましを、

千載集

春哥上

十首哥の中に花　　俊成卿

みよし野の花のさかりをけふみればこしのしらねに春風ぞ吹

夏哥

攝政家右大臣なりける時の哥合に郭公　　俊成卿

過ぬるかよはの寐覺のほとゝぎすこゑは枕にあるこゝちして

秋哥上

百首哥奉りける時秋の哥　俊成卿

夕されば野べの秋風身にしみてうづら鳴なり深草の里

秋哥下

保延のころ身をうらむる百首の哥よみ侍りける時に虫　俊成卿

さりともと思ふ心も虫のねもよわりはてぬる秋のくれ哉

嘉應二年法住寺殿の殿上の哥合に關路落葉　従三位頼政

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白川の關

初句、みやこにてはの意なり、てもじなきは、くちをしけれど、せんかたなし、

冬哥

冬のはじめのうた　藤原定家

冬來ては一夜二夜を玉ざゝのはわけの霜の所せきまで

二の句の上へ、まだといふ詞をそへて心得べし、をは、たる物をの意なり、

圓位法師人々にすゝめてよませ侍る百首哥に時雨

しぐれつるまやの軒端のほどなきにやがてさし入月の影哉

三の句、時雨のふりて、いまだ程なき意にて、軒端のほどなきをかねたり、

離別哥

百首哥よみ侍ける時別　藤原定家

別れても心へだつなたび衣いく重かさなる山路なりとも

羇旅哥

崇徳院の百首哥めしける時旅のうた　俊成卿

浦つたふ礒のとまやのかぢまくらきゝもならはぬ波の音哉

苫や、かぢ枕にかなはず、いそのうきねのなどは、などよまざりけむ、

摂政家百首哥に旅

あはれなる野嶋が崎の庵哉露おく袖に波もかけゝり

野嶋、露おくに縁あり、

戀哥二

題しらず　藤原家隆

くれにとも契りてたれか歸るらん思ひたえぬる明ぼのゝ空

おもひたえぬるとは、人をまちたるが、つひに來ずして、夜の明

ぬるゆゑにいへり、

戀哥五

月前戀　　圓位法師

なげゝとて月やは物を思はするかこちがほなる我なみだ哉

雜哥中

圓位法師がすゝめ侍ける百首哥の中に花

藤原定家

いづくにて風をも世をもうらみまし吉野の奥も花はちりけり

世をうらむとは、世のうきをうらみて、のがれいる意にて、よし野のおくは、世をうらみて、のがれいる所なるに、そこにても、猶花はちれば、うきはのがれがたし、いづくにのがれすみてか、うきことのなからんとなり、さて風をもとは、花をちらして、うき物なるが、よし野のおくは、うきをのがるゝ所なれば、花に風もふかじと思へるに、猶吹て、花のちれば、風のうきを恨みて、いづくにかはのがれむの意なり、

述懐百首哥よみ侍りける時鹿　俊成卿

世中よ道こそなけれ思ひいる山のおくにも鹿ぞなくなる

五節のほど、侍従定家あやまちあるさまに、きこしめす事ありて、殿上のぞかれて侍ける、年もくれて、又のとしのやよひのついたちごろ、院に御けしきたまふべきよし、左少辨定長が許に、申侍りけるにそへて侍りける、

あしたづの雲路まよひし年暮て霞をさへや隔はつべき

初二句は、定家卿の殿上のぞかれたる事なり、然るをあしたづとしもよまれたるは、子をおもふ意をも、こめられたるにや、されどさては、二の句も、みづからの事になりて、いかにぞや聞ゆ、又みづからの、子を思ふ意と見ては、雲路といへるといかゞなり、下句は、今年の春さへ、さてくれなむとや、といふ意にて、霞をへだつるとは、さらでだに雲路はへだゝれるに霞にていよ〳〵へだゝるよしなり、

寛政三年四月十三日の夜書をへぬ

遠鏡序

この遠鏡はおのれはやくよりこひ聞えしま丶に師のものしてあたへたまへるなりこの集はしもよ丶の注釋あまたあれごもちうさくはかきりありていかにくはしくごきさごしたるもなほ物へたてたるこ丶ちのするをまことに書の名のたとひのことくちごせをへたて丶遠きあなたの世のこ丶ろふかき言の葉をいまの世のうつ丶の人のかたるをむかひて聞たらむやうにこ丶ろのおくのくまもあらはにはたらく詞のいきほひをさへに近くうつしてちかくたしかに聞とらる丶この鏡のうつし詞はおほろけの人のなしうへきわさにはあらすそのかみの世のこ丶ろことはをおのかものご手のうちににきりえたるわか師のしわさならてはごいごもいごもたふごくめてたくおもひあふかる丶につきてはか丶るいみしきよのたからをしもおのれひごりこ丶ろせはくわたくしもの

にひめおきてやみなむとのねしけかましくあたらしくおほゆるま丶にさくらの花のえならぬ色をひろく人にも見せまほしく松かえの千代とほく世にもつたへまほしくてこたみ名におふその植松の有信にあつらへつけて櫻の板にゑらしむるになむかくいふは木綿苑の千秋

古今集遠鏡

雲のゐるとほきこずゑもとほかゞみ
うつせばこゝにみねのもみぢ葉

此書は、古今集の哥どもを、こと〴〵くいまの世の俗語(サトビゴト)に譯(ウツ)せる也、そも〳〵此集は、よゝに物よくしれりし人々の、ちうさくどものあまた有て、のこれるふしもあらざゞなるに、今さらさるわざは、いかなればこいふに、かの註釋こいふすぢは、たとへばいとはるかなる高き山の梢どもの、ありとばかりは、ほのかに見ゆれど、その木とだに、あやめもわかぬを、その山ちかき里人の、明暮のつま木のたよりにも、よく見しれるに、さしてかれはと、ひたらむに、何の木くれの木、もとだちはしかしか、梢のあるやうは、かくなむとやうに、語り聞せたらむがごとし、さるはいかによくしりて、いかにつぶさに物したらむにも、人づての耳(ミミ)は、かぎりしあれば、ちかくて見るめのまさしきには、猶にるべくもあらざゞめるを、世に遠めがねとかいふなる物のあるして、うつし見るには、いかにとほきも、あさましきまで、たゞこゝもとにうつりきて、枝さしの長きみじかき、下葉の色のこきうすきまで、のこるくまなく、見え分れて、軒近き庭のうゑ木に、こよなきけぢめもあらざるばかりに見ゆるにあらずや、今此遠き代の言の葉の、くれなゐ深き心ばへを、やすくちかく、手染の色にうつして見するも、もはらこのめがねのたとひにかなへらむ物をや、かくて此事はしも、尾張の横井ノ千秋ぬしの、はやくよりこひもとめられたるすぢにて、はじめよりうけひきては、有ける物から、なにくれといとまなく、事しげきにうちまぎれて、えしもはたさず、あまたの年へぬるを、いかに〳〵と、しば〳〵おどろかさるゝに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつるを、さきに神代のまさことも、此同じぬしのねぎとにこそ有しか、さのみ聞けむとやうに、しりうごつこともがらも有べかゞめれど、例のいと深くまめなるこゝろざしは、みゝなし山の神とはなしに、さて過すべくもあらずてなむ、

〇うひまなびなどのためには、ちうさくは、いかにくはしくときたるも、物のあぢはひを、甘しからしと、人のかたるを聞

たらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、其事を今おのが心に思ふがごとは、さとりえがたき物なるを、さとびとに譯(ウツ)したるは、たゞにみづからさ思ふにひとしくて、物の味を、みづからなめて、しれるがごとく、いにしへの雅言(ミヤビゴト)みな、おのがはらの内の物としなれゝば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝことおほきぞかし、

○俗言(サトビゴト)は、かの國この里と、ことなることおほきが中には、みやびごとにちかきもあれども、かたよれるゐなかのことばゝ、あまねくよもにはわたしがたければ、かゝることにとり用ひがたし、大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也、たゞし京のにも、えりすつべきは有て、なべてはとりがたし、

○俗言(サトビゴト)にも、しな〴〵のある中に、あまりいやしき、又たはれすぎたる、又時々のいまめきことばなどは、はぶくべし、又うるはしくもてつけていふと、うちとけたるとのたがひあるを、哥はここに思ふ情(コヽロ)のあるやうのまゝに、ながめ出たる物なれば、そのうちとけたる詞して譯(ウツ)すべき也、うちとけたるは、心のまゝにいひ出たる物にて、みやびごとのいきほひに、いますこしよくあたればぞかし、又男のより、をうなの詞は、ことにうちとけたること多くて、心に思ふすぢの、ふとあらはなるものなれば、哥のいきほひに、よくかなへることおほかれば、をうなめきたるをも、つかふべきなり、又いはゆるかたことをも用ふべし、たとへばおのがことを、うるはしくはわたくしといふを、はぶきてつねに、ワタシともワシともいひ、ワシハといふべきを、ワシーヤ、それはをソレーヤ、すればをスレーヤといふたぐひ、又そのやうなこのやうなを、ソンナコンナといひ、ならばたらばを、ばをはぶきて、ナラタラ、さうしてをソシテ、よからうをヨカロ、とやうにいふたぐひ、ことにうちとけたることなるを、これはたいきほひにしたがひては、中々にうるはしくいふよりは、ちかくあたりて聞ゆるふしおほければなり、

○すべて人の語は、同じくいふとも、いひざまいきほひにしたがひて、深くも淺くも、をかしくもうれたくも聞ゆるわざにて、哥はことに、心のあるやうを、たゞにうち出たる趣なる物なるに、その詞の、口のいひざまいきほひはしも、たゞに耳にきゝとらでは、わきがたければ、詞のやうをよくあぢはひて、よみ人の心をおしはかりえて、そのいきほひを譯(ウツ)すべき也、

たとへば「春されば野べにまづさく云々、といへるせどうかの、譯のはてに、へ、〳〵へ、〳〵と、笑ふ辭をそへたるなど、さらにおのがいまのたはふれにはあらず、此ノ下ノ句の、たはふれていへる詞なることを、さとさむとてぞかし、かゝることをだにそへざれば、たはふれの答へなるよしの、あらはれがたければ也、かゝるたぐひ、いろ〳〵おほし、なすらへてさとるべし、

○みやびごとは、二つにも三つにも分れたることを、さとび言には、合せて一ッにいふあり、又雅言は一つなるが、さとびごとにては、二つ三つにわかれたるもあるゆゑに、ひとつ俗言を、これにもかれにもあつることあり、又一つ言の譯語の、こゝとかしこと、異なることもある也、

○まさしくあつべき俗言のなき詞には、一つに二ッ三ッをつらねてうつすことあり、又は上下の語の譯の中に、其意をこむることもあり、あるは二句三句を合せて、そのすべての意をもて譯すもあり、そはたとへば「こゝならばさかずやはあらぬ櫻花などの、こゝならばといふ詞など、一つはなちては、いかにもうつすべき俗言なければ、二句を合せて、トテモ此ヤウニ早ウ散ルクラ井ナラバ一向ニ初メカラサカヌガヨイニナゼサカズニハ井ヌゾ、と譯せるがごとし、

○哥によりては、もとの語のつゞきざま、てにをはなどにもかゝはらで、すべての意をえて譯すべきあり、もとの詞つゞき、てにをはなどを、かたくまもりては、かへりて一うたの意にうとくなることもあれば也、たとへば「こぞとやいはむことしとやいはむなど、詞をまもらば、去年ト云ハウカ今年ト云ハウカ、と譯すべけれども、さては俗言の例にうとし、去年ト云タモノデアラウカ今年ト云タモノデアラウカ、とうつすぞよくあたれる、又「春くることをたれかしらましなど、春ノキタコトヲ云々、と譯さゞれば、あたりがたし、來ると來タとは、たがひあれども、此哥などの來るは、來ぬることなるを、さはいひがたき故に、くるとはいへるなれば、そのこゝろをえて、キタと譯すべき也、かゝるたぐひいとおほし、なすらへてさとるべし、

○詞をかへてうつすべきあり、「花と見てなどの見ては、俗言には、見てとはいはざれば、花ヂヤト思ウテと譯すべし、「わぶ

ここたへよなごの類のこたふるは、俗言には、こたふこはいはず、たゞイフこいへば、難ー義チシテ居ルトイへこ譯すべし、又てにをはをかへて譯すべきも有り、「春は來にけりなごのはもじは、春ガキタワイこ、ガにかふ、此類多し、又てにをはを添ふべきもあり、「花咲にけりなごは、花ガ咲タワイこ、ガをそふ、此類は殊におほし、すべて俗言には、ガこいふとの多き也、雅言のぞをも、多くはガこいへり、「花なき里なごは、花ノナイ里こ、ノをそふ、又はぶきて譯すべきも有り、「人しなければ、「ぬれてをゆかむなごの、しもじをもじなご、譯言（ウツシコトバ）をあてゝは、中々にわろし、

○詞のこころをおきかへてうつすべきをおほし、「あかずこやなく山郭公なごは、郭公を上へうつして、郭公ハ殘リオホウ思フテアノヤウニ鳴クカこ譯し、「よるさへ見よこてらす月影は、ヨルマデ見ヨトテ月ノ影ガテラスこうつし、「ちくさに物を思ふころかなのたぐひは、ころを上にうつして、コノゴロハイロイロト物思ヒノシゲイヿカナこ譯し、「うらさびしくも見えわたるかなは、わたるを上へうつして、見ワタシタトコロガキツウマア物サビシウ見エルヿカナこ譯すたぐひにて、これ雅言（ミヤビゴト）こ俗言（サトビゴト）こ、いふやうのたがひ也、又てにをはも、こころをかへて譯すべきあり、「ものうかるねに鶯ぞなくなご、ものうかる音にぞこ、ぞもじは、上にあるべき意なれごも、さはいひがたき故に、鶯の下におけるなれば、其こゝろをえて、譯（ウツ）すべき也、此例多し、皆なすらふべし、

○てにをはの事、ぞもじは、譯すべき詞なし、たこへば「花ぞ昔の香にゝほひけるのごき、殊に力を入たるぞなるを、俗言には、花がこいひて、其所にちからをいれて、いきほひにて、雅語のぞの意に聞ゆるとなるを、しか口にいふいきほひは、物には書こるべくもあらざれば、今はサこいふ辞を添へて、ぞにあてゝ、花ガサ昔ノ云々こ譯す、ぞもじの例、みな然り、こそは、つかひざま大かた二つある中に、「花こそちらめ根さへかれめやなごやうに、むかへていふ事あるは、さこびごこも同じく、こそこいへり、今一つ「山風にこそみだるべらなれ「雪このみこそ花はちるらめ、なごのたぐひのこそは、うつすべき詞なし、これはぞにいこちかければ、ぞの例によれり、山風にぞ云々、雪このみぞ云々、こいひたらむに、いくばくのたがひもあらざれば也、さるをしひていさゝかのけぢめをもわかなこすれば、中々にうこくなるこ也、「たが袖ふれしやご

の梅ども、「戀もするかな、などのたぐひのもじは、マアと譯す、マアは、やがて此らの轉れるにぞあらむ、疑ひのやもじは、俗語には皆、カといふ、語のつゞきたるなからにあるは、そのはてへうつしていふ、「春やとき花やおそきとは、春ガ早イノカ花ガオソイノカと譯すがごとし、

〇んは、俗言にはすべて皆ウといふ、来んゆかんを、コウイカウといふ類也、けんなんなどのんも同じ、「花やちりけんは、花ガチツタデアラウカ、「花やちりなんは、花ガチルデアラウカと譯す、さて此、チツタデといふと、チルデといふとのかはりをもて、けんとなんとのけぢめをもさとるべし、さて又語のつゞきたるなからにあるんは、多くはうつしがたし、たとへば「見ん人は見よ、「ちりなん後ぞ、ちるらん小野のなどのたぐひ、人へつゞき、後へつゞき、小野へつゞきて、んは皆なからに有、此類は、俗語にはたゞに、見ル人ハ、チツテ後ニ、チル小野ノとやうにいひて、見ヤウ人ハ、チルデアラウ後ニ、チルデアラウ小野ノ、などはいはざれば也、然るに此類をも、しひてんなんらんの意を、こまかに譯さむとならば、散なん後とは、オツヽケチルデアラウガソノ散タ後ニサと譯し、ちるらん小野のは、サダメテ此ゴロハ萩ノ花ガチルデアラウガ其野ノ、とやうに譯すべし、然れども、俗語にさはいはざれば、中々にうとし、同じことながら、「春霞たちかくすらん山の櫻をなどは、山ノ櫻ハ霞ガカクシテアルデアラウニ、と譯してよろしく、又かの見ん人は見よなども、見ヤウト思フ人ハとうつせば、俗語にもかなへり、哥のさまによりては、かうやうにもうつすべし、

〇らんの譯は、くさぐ〵あり、「春たつけふの風やとくらんなどは、風ガトカスデアラウカと譯す、アラウらんにあたり、カ上のやにあたれり、「いつの人まにうつろひぬらんなどは、「イツノヒマニ散テシマウタヿヤラと譯す、ヤラらんにあたれり、「人にしられぬ花やさくらんなどは、人ニシラサヌ花ガ咲タカシラヌと譯す、カシラヌやとらんとにあたれり、又上にや何などいふ、うたがひとばなくて、らんと結びたるには、ドウイフヿデといふ詞をそへてうつすも多し、又「相坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しき音のみ鳴らんなどは、人ガ戀シイヤラ聲ヲアゲテヒタスラナクとうつす、これはとぢめのらんの疑ひを、上へうつして、やと合せて、ヤラといふ也、ヤラは、すなはちやらんといふ也、又「玉かづら今はたゆとや吹

風の音にも人のきこえざるらんなどのたぐひも、同じく上へうつして、やと合せて、ヤラと譯して、下ノ句をば、一向ニオトヅレモセヌと、落しつけてとぢむ、これらはらんとうたがへる事は、上にありて、下にはあらざればなり、

○らしは、サウナと譯す、サウナは、さまなるといふことなるを、音便にサウといひ、るをはぶける也、然れば言の本の意も、らしと同じおもむきにあたる辞也、たとへば物思ふらしを、物ヲ思ウサウナと譯すが如き、らしもサウナも共に、人の物思ふさまなるを見て、おしはかりたる言なれば也、さてついでにいはむは、世にらんとらしとを、たゞ疑ひの重きと輕きとのたがひとのみ心得て、みづからの哥にも、其こゝろもてよむなるは、ひがこと也、たとへば時雨ふるらんは、時雨ガフルデアラウ也、時雨ふるらしは、時雨ガフルサウナの意也、此俗言のアラウとサウナとの意を思ひて、そのたがひあることをわきまふべし、

○かな（哉）は、さとびどにもカナといへど、語のつゞきざまは、雅言のまゝにては、うときが多ければつゞける詞をば、下上におきかへもし、あるは言をくはへなどもして、譯すべし、すべて此辞は、歎息（ナゲキ）の詞にて、心をふくめたることおほければ、譯（ウツシ）には、そのふくめたる意の詞をも、くはふべきわざなり、

○つゝの譯は、くさ〲あり、又雪はふりつゝなど、いひすてゝとぢめて、上へかへらざるは、テと譯して、下にふくめたる意の詞をくはふ、いひすてたるつゝは、必ズ下にふくめたる意あれば也、そのふくめたる意は、一首（ヒトウタ）の趣にてしらる、

○けりけるけれは、ワイと譯す、「春はきにけりを、春ガキタワイといへるがごとし、またこその結びにも、ワイをそへてうつすことあり、語のきれざるなからにあるけるけれは、ことに譯さず、

○なりなるなれは、ヂーヤと譯す、ヂーヤは、デアルのつゞまりて、ルのはぶかりたる也、さる故に、東の國々にては、ダといへり、なりもとにありのつゞまりたるなれば、俗言のヂーヤダと、もと一つ言也、又一つ「春くれば鴈かへるなり、「人まつ虫の聲すなり、などの類のなりは、あなたなる事を、こなたより見聞ていふ詞なれば、これは、アレ鴈ガカヘルワ、アレ松虫ノ聲ガスルワなど譯すべし、此なりは、ヂーヤと譯すなりとは別（コト）にて、語のつゞけざまもかはれり、ヂーヤとうつす方は、

つゞく詞よりうけ、此なりは、切るゝ詞よりうくるさだまり也、

○ぬぬる、つつる、たりたる、きしなど、既に然るうへをいふ辞は、俗言には、皆おしなべてタといふ、なりぬなりぬるをば、ナーツタ、來つ來つるをば、キタ、見たり見たるをば、見タ、有き有しをば、アーツタといふが如し、タは、タルのルをはぶける也、

○あはれを、アヽハレと譯する所多し、たとへば「あれにけりあはれいくよのやどなれやを、何ッ年ニナル家ヂヤゾヤ、アヽハレキツウ荒タワイと譯せる類也、かくうつす故は、あはれはもと歎息く聲にて、すなはち今ノ世の人の歎息て、アヽヨイ月ヂヤ、アヽツライヿヂヤ、又ハレ見事ナ花ヂヤ、ハレヨイ子ヂヤなどいふ、このアヽとハレとを、つらねていふ辭なれば也、「あはれてふことをあまたにやらじとや云々は、花を見る人の、アヽハレ見事ナといふ其詞を、あまたの櫻へやらじと也、「あはれてふことこそうたて世の中を云々は、アヽハレオイトシヤト、人ノ云テクレル詞コソ云々也、大かたこれらにて心得べし、さてそれより轉(ウツ)りては、何事にまれ、アヽハレと歎息かるゝ事の名ともなりて、あはれなりとも、あはれをしるしらぬなども、さまざまひろくつかふ、そのたぐひのあはれは、アヽハレと思はるゝ事をさしていへるなれば、俗言には、たゞにアヽハレとはいはず、そは又その思へるすぢにしたがひて、別(コト)に譯言(ウツシコトバ)ある也、

○すべて何事にまれ、あなたなる事には、アレ、或はアノヤウニ、又ソノヤウニなどいひ、こなたなる事には、コレ、或は此ヤウニなどいふ詞を添て譯せるとおほきは、其事のおもむきを、さだかにせむとてなり、

○物によせて、其詞をふしにしたる、又物の縁の詞のよしなど、すべて詞のうへによれる趣は、雅言と俗言とは、ことごとなれば、たゞには譯しがたし、さる類は、俗言のうへにても、とわり聞ゆべきさまに、言をくはへて譯せり、

○枕詞序などは、哥の意にあづかれるとなきは、すてゝ譯さず、これを譯しては、事の入まじりて、中々にまぎらはしければ也、そも哥の趣にかゝれるすぢあるをば、その趣にしたがひて譯す、

○此ふみの書るやう、譯語(ウツシコトバ)のかぎりは、片假字をもちふ、假字づかひをも正さず、便りよきにまかせたり、譯(ウツシ)のかたはらに、

なり〳〵平假字して、ちひさく書るとあるは、其哥の中の詞なるを、こゝは此詞にあたれりといふことを、猶たしかにしめせる也、數のもじは、其句としめしたる也、又かたへに長くも短くも、筋を引たるは、哥にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり、そも〳〵さしも多く詞をそへたるゆゑは、すべて哥は、五もじ七もじ、みそひともじと、かぎりのあれば、今も昔も、思ふにはまかせず、いふべき詞の、心にのこれるもおほければ、そをさぐりえて、おぎなふべく、又さらにそへて、たすけもすべく、又うひまなびのともがらなどのために、そのおもむきを、たしかにもせむとて也、〔一〕〔二〕〔三〕、あるは〔上〕などしるせるは、枕詞序など、譯をはぶけるところをしめせる也、但しひさかたあしひきなど、人のよく枕詞と知りたるは、此しるしをはぶけり、一二三は、句のついで、上は上の句也、

〇うつし語（コトバ）のしりにつぎて、ひらがなして書るとあるは、譯の及びがたくて、　たらはざるを、たすけていへること、又さらでも、いはまほしき事ども、いさゝかづゝいへるなり、

〇大かたいにしへの哥を、今の世の俗語（サトビゴト）にうつすゝぢにつきては、猶いはまほしきことゞも、いと多かれど、さのみはうるさければ、なすらへてもしりねと、みなもらして、今はたゞこれかれいさゝかいへるのみ也、又今さだめたる、すべての譯（ウツシ）ごもの中には、なほよく考へなば、いますこしよくあたれることゞもゝ、いでくべかめれど、いとまいりて、此事にのみは、えさしもかゝづらはで、たゞ一わたり、思ひよれるまに〳〵物しつる也、哥よく見しれらん人、なほまされるを思ひえたらむふしもあらば、くはへもはぶきも、あらためもしてよかし、

本居宣長

やまさらたは人の心をたねとして よろづのとのはとぞなれりける

○哥ト云物ハ人ノ心ガタ子ニナツテ イロ〳〵ノ詞ニサナツタモノヂヤワイ

世ノ中にある人ことわざしげきものなれば心におもふとを見るものきく物につけていひいだせるなり

○世ノ中ニカウシテ居ル人ト云モノハ イロ〳〵ト事ノ多イモノヂヤニヨツテ ソノナニヤカヤノ事ニツケテ 心ニ思フコトチソノ時 見ル物ヤ聞ク物ニツケテ 云ヒダシタノヂヤ

花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけば いきとし いけるもののいづれか哥をよまざりける

○花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ 水ニスンデアル蛙ヤ ナドノ聲チキケバ ソレ〳〵ニ面白イトコロハ皆哥ヂヤ スレーヤ生(イキ)テアルホドノ物ハ 何(ナニ)ガ哥チヨマヌゾ 鳥ー類畜ルイマデ皆メン〳〵ニソレ〳〵ノ哥チヨムヂヤワイノ

ちからをもいれずしてあめつちをうごかしめに見えぬおに神をもあはれと思はせをとこ女のなかをもやはらげたけきものゝふのこゝろをもなぐさむるはうたなり

○チカラモ入レズニ天地チウゴカシタリ 目ニ見エヌ鬼ヤ神チ感ジサシタリ 男ト女トノアヒダチムツマシウナルヤウニシタリ アラクマシイ武士ノ心チヤハラゲタリナドスルモノハ哥ヂヤ

このうたあめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり

○サテ此哥ト云モノハ 天地ノハジマツタ時カラデケタワイ

あまのうきはしのしたにてめ神を神となり給へるとをいへる哥也

○ソレハカノ伊弉諾伊弉冉ノ尊ガ 天ノ浮橋ノ下デ 御夫婦ノ神ニオナリナサレタ⼂チオヨミナサレタ哥ノ⼂ヂヤ

しかあれども 世につたはることはひさか○清たのあめにしてはしたてるひ○清めにはじまり

○サウヂヤケレドモ シーツカリト哥ト云テ世ノ中ニツタハツテキタノハ〔ひさかたの〕天デハ下照姫ト云神カラハジマリ

したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとの神のかたちをか谷にうつりてかゞやくをよめるえびすうたなるべしこれらはもじのかずもさだまらず哥のやうにもあらぬとゞも也

○下照姫ト云神ハ 天若彦ト云タ神ノ御内(ゴナイ)シヤウデアツタ ソノ哥ト云ハ 下照姫ノ兄(アニ)ゴガ 殊ノ外ウツクシイ神デ ソノ身ノ光リカソコラノ岡ヤ谷ヘウツーヽテ照リカヾヤイタ⼂チヨンダエビス哥ト云ガアルガ 其事デアラウ(なるべし) コレラハ文字ノ數ナドモ定マツタ⼂モナウテ 哥ノヤウデモナイコトヾモヂヤ

あらかねのつちにしてはすさのをのみとよりぞおこりける

○〔あらかねの〕此ノ國ー土デハ 素盞嗚ノ尊カラサハジマツタワイ

ちはやぶる神代には哥のもじもさだまらず　すなほにして　ことのこゝろわきがたかりけらし

○〔ちはやぶる〕神代ノ時分ニハ　哥ノ文字ノ数モマダ定マツタヿモナシ　コトノホカ古風ナヿデ　ドウ云ヿヂヨンダモノヤラソノ哥ノ心ガ　今見テハ　ワカリニクイヿデアツタサウナ

人の代となりて　すさのをのみことよりぞ　みそもじあまりひともじはよみける

○サテ人ノ代ニナツテカラ　カノ素盞嗚ノ尊カラ始マツタ哥ノトホリニ　卅一字ニヨムヿニハナツタワイ

すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみ也女とすみ給はむとていづもの國に宮づくりし玉ふ時にそのところにやいろの雲のたつを見てよみ給へるなり

○スサノヲノ尊ハ　天照大神ノ御兄ゴ様ヂヤ　シテソノ御哥ト云ハ女ト一所ニ御住ナサレウトテ　出雲ノ國ヘ御殿ヲオタテナサル時ニ　ソノアタリヘ八色ノ雲ガ立ツタヲ御覧ナサレテ　オヨミナサレタ御哥ノヿヂヤ

八雲たついづも八重垣つまごめに八重垣つくるその八重がきを

○アレイクヘモ雲ガターツタ　アノ出ル雲ノ八重垣ワイノ　吾ガ妻ヲ入レル宮ノタメニ　アレ雲ガ八重垣ヲ作ツタ　アノ八重垣ワイノ

いづもは、いでくも也、でくつゞまりて、づとなる、こゝは國ノ名にはあらず、

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれび露をかなしぶこゝろことばおほくさま〴〵になりにける

○サウシテサ　花ヲ賞翫シタリ　鳥ヲウラヤンダリ　霞ヲ感ジタリ露ヲ愛シタリスルヤウナ心詞ガ　オホウサマ〴〵ニナツタモノヂヤワイ

とほきところもいでたつあしもとよりはじまりて年月をわたり　たかき山もふもとのちりひぢよりなりてあま雲たなびくまで　おひのぼれるごとくにこの哥もかくのごくなるべし

○キツウ遠イ所デモ　タツタ一足フミダス足モトカラ始マツテイク月モ何ヾ年モカヽルホドノ所マデモユキ　又キツウ高イ山デモ　フモトノチリホコリホドノ土カラ段々ツモツテ　雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デ　此哥モソノトホリナ物デアラウ

難波津のうたはみかどのおほんはじめなり

○サテ難波津ノ哥ハ天子ノ御事ヲヨンダ哥ノハジメヂヤ

大さゞきのみかどのなにはづにてみこと聞えける時東宮をたがひにゆづりてくらゐにつき給はで三年になりにければ王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつりける哥なりこの花は梅の花をいふなるべし

○難波津ノ哥ト云ハ　仁徳天皇ノ難波津ニ御座ナサレテ皇子ト申シ

タ時ニ東宮宇治ノ若郎子(ワキイラツコ)ト御タガヒニユヅリアフテ御位ニ御ツキナサレイデ三年ニナツタニヨツテ　王仁(ワニ)ト云タ人ガマチカネテシンキニ思フテ　仁徳天皇ヘヨンデ上(アゲ)タ哥ヂヤ　其哥ニコノ花トヨンダハ　梅ノ花ヲ云タデアラウ

わがをしへ子、須賀ノ直見がいひけるは、東宮をは、東宮とを、寫し誤れる也、ととをと似たり、

あさか山のことのはゝうねへのたはふれよりよみで

○アサカ山ノ哥ハ奥州ノ釆女ノタハムレカラヨンダ哥デ

かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりける時に國のつかさことおろそかなりさてまうけなどしたりけれどすさましがりければうねへなりける女のかはらけとりてよめるなりこれにぞおほきみの心とけにける

○コレハ葛城ノ王ト云ヲ　御川デ奥州ヘツカハサレタ時ニ　國ノ守ナドガ御馳走申シタケレドモ　アシラヒガ麁末ナトテ　葛城ノ王ガキツウブケウニ思ハレタ時ニ　其國ノ釆女デアツタ女ガ　盃ヲ持テ出テヨンダ哥ヂヤ　トコロガ此哥デサ　葛城ノ王ノキゲンガナホツタワイ

此ふたうたは哥の父母のやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

○此ナニハヅト　アサカ山ト　二首ノ哥ハ哥ノテヽ親ハヽ親ノヤウデサ　子供ノ手習ノ始メニモマヅ是レヲナラウコトヂヤヮイ

そも〳〵哥のさまむつなりからのうたにもかくぞあるべき

○サテマヅ哥ニ六ツノワケガアルヂヤ　唐ノ詩ニモ大カタ此六ツノワケガサアルデアラウ

そのむくさのひとつにはそへうたおほさゞきのみかどをそへ奉れる哥

○ソノ六イロト云一ツニハソヘ哥　カノ仁徳天皇ヲオヨソヘ申シタ哥

なにはづに咲やこの花冬ごもりいまは春べとさくやこのはな

○難波津ニサクコノ花ガ　〔三〕サアモウハ春サキヂヤト云テサクコノ花ガ

といへるなるべし

○ト云ヤウナガサウデアラウ

ふたつにはかぞへうた

咲花におもひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて

○咲テアル花ニ　ウーツカリト思ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルコトワイノ　身ニ心ー勞ナコトノデケテクルモシラズニサ

といへるなるべし

これはたゞことにいひて物にたとへなどもせぬものなり此うたいかにいへるにかあらむそのこゝろえがたしいつゝにたゞこと哥といへるなむこれにはかかふべき

○此カゾヘ哥ト云ハ　其事ヲタヾコトニ云テ　物ニタトヘナドモ

セヌモノヂヤ　ソレニ此咲花ニト云哥チカゾヘ哥ニ出シタハ　ド
ウ云心ヂヤヤラ　ガテンガイカヌ　五番メノタヾコトウタト云所
ヘ出シタ哥ガサ　此カゾヘ哥ニハ叶ウデアラウ

みつにはなすらへうた

君にけ(ガイ)さあしたの霜のおきていなば戀しきごとにきえやわたらむ

○オマヘガケサ別レテ（二）起(オキ)テイナシーヤーツタナラ　ワシハ今
カラ　戀シウ思フタビゴトニ消ルヤウニ思フテタテルデカナアラ(わたらん)
ウ君には、一本君がとあるよろし、

といへるなるべし

これは物にもなすらへてそれがやうになむあるとやうにいふ也
此哥よくかなへりとも見えず

○此ナスラヘ哥ト云ハ　物ニナゾラヘテ　其物ノヤウナト云ヤウニ
ヨンダヂ云ヂヤガ　此君ニケサト云哥ハ　ヨウ叶ウタトモ見エヌ

たらちめのおやのかふこのまゆごもりいふせくもあるか妹にあ
はずて

○蚕(カヒコ)ノマユニコモーツテアルヤウニ（一）親ノヒザモトニ居テ外
ヘ出ヌ娘ナレバ　ドウモエアハイデ　サテモ〳〵（四）シンキナヿカナ

かやうなるやこれにはかなふべからむ

○此ヤウナ哥ガ　此ナスラヘ哥ト云ニハ叶ウデアラウカ

よつにはたとへうた

わが戀はよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつくすとも

○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモ　オレガ戀ノシゲイ
數ハヨミツクサレマイ

これはよろづの草木鳥けだものにつけて　心を見する也此うた
はかくれたるところなむなきされどはじめのそへ哥とおなじや
うなればすこしさまをかへたるなるべし

○此タトヘ哥ト云ハ　イロ〳〵ノ草木ヤ鳥ケダモノナドニヨセテ思
フ心ヲ見セタモノヂヤ　ソレニ此ワガ戀ハト云哥ハカクレタ所ガ
サナイ　タトヘ哥ハ物ニタトヘテ云テ　アラハニハ云ハヌヂヤニ
ヨツテ　カクレタ所ガナウテハスマヌ　ヂヤケレド始メノソヘ哥
ト云ト同シヤーウナヿナレバ　スコシモヤウノカハツタ哥ヲ出シ
タモノデアラウ

すまのあまの塩やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

○スマノ浦ノ海士ガ塩ヲヤク烟ガ風ノハゲシサニ　思ヒモヨラヌ方
ヘナビイテイタワイ

此哥などやかなふべからむ

○此哥ナドガタトヘ哥ニハ叶ウデモアラウカ

いつゝにはたゞことうた

いつはりのなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし（○諸）

○僞リト云ヿガナイ世ノ中デアラウナラ　ドレホド人ノ云テクレル

詞ガサレシカラサゾ
といへるなるべし
これはことのとゝのほりたゞしきをいふなりこの哥のこゝろさらにかなけず　とめうたとやいふべからむ
○此タヾコト哥ト云ハ　コトノトヽノウテタヾシイノヲ云ヂヤ　此イツハリノト云哥ノ心ハネカラ叶ハヌ　此哥ハトメ哥ト云物デアラウカ
山櫻あくまで色を見つるかな花ちるべくも風ふかぬ世に
○山櫻ヲ腹一ハイ十分ニ見タ　サテモアリガタイ事カナ　花ノチルクラ井ノアラィ風モフカヌ　ケーツカウナ御代デサ　此哥ナドガ　タヾコト哥ト云ニハ叶ウデアラウカ
むつにはいはひうた
此とのはうべもとみけりさきくさ（○清）のみつばよつばに殿づくりせり
○此御屋形ハゲニモ　御繁昌ナ事ヂヤワイ　御殿〳〵ノツマ〴〵ガ段々ト〔三〕三ツモ四ツモツヾイテ　サテ〳〵ケツカウナ御普請ヂヤ
といへるなるべし
これは世をほめて神につぐる也此哥いはひ哥とは見えずなむある
○此イハヒ哥ト云ハ　御代ヲホメテ　其事ヲ神ヘ申スノヂヤ　ツレニ此御殿ハト云哥ハ　ドウモイハヒ哥トハサ見エヌテイヂヤ
春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふこゝろは神ぞしろらむこれらやすこしかなふべからむおほよそむくさにわかれむとはえあるまじきことになむ
○コレラナドノ哥ガ　イハヒ哥ト云ニハ　スコシ叶ウデモアラウカ　マアタイテイ　哥ノシナノ六イロニ分レウ事ハ　ドウモサーウハワケラレヌ事デサゴザル
今のよのなかいろにつき人の心花になりにけるよりあだなる哥はかなきことのみいでくれば
○サテ今ノ世ノ中ハ人ノ心ガ花〴〵シイ事ニツイテ　ウハキニナツタカラシテ　アダナキーツトセヌ哥バツカリデケルニヨツテ
いろこのみの家にうもれ木の人しれぬことゝなりてまめなるところには花すゝきほにいだすべきことにもあらずなりにたり
○大ー切ナ哥ガ　色事シノ家ノ〔うもれ木の〕ナイショウゴトニナツテ　カタイトコロヘハ〔花すゝき〕アラハシテダサレヌヤウニナツテシマウタ
そのはじめをおもへばかゝるべくなむあらぬ
○ホンタイノトコロヲ思ウテ見レバ　カウアラウコトデハサナイ
いにしへのよゝのみかど春の　花のあした　秋の月の夜ごとにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ哥をたてまつらしめ給ふ

○昔ハ御代々ノ天子樣ガ　春ノ花ノ時分ヤ　秋ノ月夜ナド云時ニハ　イツデモ（ここに）　ツメテ居サーツシーヤル衆ヲ御前ヘメシテ　ナンゾレカゾレ事ニツケテハ　哥ヲ上（アゲ）ルヤウニ仰付ラレタ

あるは花をこふとてたよりなきところにまどひあるは月を思ふとてしるべなきやみにたどれる心々を見給ひてさかしおろか也としろしめしけむ

○サウシテ或ハ花ヲ見タウ思フテ　ヨリツキモナイ所ナドマデ尋ネマハーツテアルイタリ　或ハ月ニ執心シテ見ニ行（イ）テハ　マダ出ヌサキヤ　入テシマウタアトヤナド　闇（クラ）イノニ　案内モシラヌ所ヲアチラヘコチラヘトシテアルイタリスルヤウナ風流ナ心々ヲ　ソノヨンダ哥デ考ヘテ御覽ナサレテ　ソノ哥ニヨツテ　アレハカシコイ者ヂヤ　アレハオロカナ者ヂヤト云コトヲ　御存知ナサレタモヤウヂヤ昔ハサ

花をこふとてといふより、やみにたどれるといふまで、すべて風流（ミヤビ）たる人々のさまをいへる也、然るに諸説、これを愚（オロカ）なるかたにとれるは、ひがこと也、さかしおろかなるをしろしめすは、さてよめる哥のさまをもてこそ考へ玉へるなれ、もしこれらを、おろかなるかたのしわざとせば、今一つかしこき方をもいはでは、こととゝのはず、たゞ愚なる方のみをいひて、やむべきにはあらざるをや、

しかあるのみにあらずさゞれ石にたとへつくは（○筑）山にかけて君をねがひ

○サテ又サウバカリデナシニ　サヾレ石ニタトヘタリ　筑波山ニツケタリシテ君ヲ御祈（オイノ）リ申シ

よろこび身にすぎたのしみ心にあまり

○又ハ身ニ過タヨロコビノアル時ヤ　心ニアマルホドオモシロイ事ノアル時ヤナド

ふじのけぶりによそへて人をこひ松虫の音に友をしのび

○アルイハ又富士ノ山ノケム（ム）リニヨソヘテ人ヲ戀シウ思フコトヲ云タリ　松虫ノ聲ヲキイテ友ダチヲナツカシウ思ウタリ

高砂住の江の松もあひおひのやうにおぼえ

○キツウ年ガヨツテハ　高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ松ト　相追（アヒナヒ）ナヤウニ思ハレタリスル時ニモヨミ　あひおひは、今の俗語にもいふことにて、相追也、そはもと、たがひに追（オヒ）み追（オ）はれみする意より出たる言にて、いくばくの前後もなく、大かた同じほどなることにいへり、

をとこ山のむかしを思ひいでをみなへしの一ときをくねるにも哥をいひてぞなぐさめける

○又年ヨツテハ　男ハ　チトコザカリデアツタ昔ノ事ヲ思ヒダシ　女ハ　ワカザカリノ早ウスギタコトヲ愚癡（グチ）ニクヨ〳〵ト思ウヤウナ時モミナ哥ヲヨンデッ心ヲハラシタコヂヤワイ

又春のあしたに花のちるを見秋の夕暮にこのはの落るをきゝ
○又春ノコロ朝花ノチルノチ見タリ秋ノユフカタ木ノ葉ノオチル
音チキイタリ
あるはとしごとにかゞみの影に見ゆる雪と浪とをなげき
○或ハ鏡ノ影ニ見エルワガ白髪ヤ面(カホ)ノシワノ毎ー年多ウナルノチ見
テ歎イタリ
草の露水のあわを見てわが身をおどろき
○草ノ露ヤ水ノ沫ノキエルチ見テ　我身モアノトホリヂヤト云フチ
知テ驚イタリ
あるはきのふは　さかえおごりて　時をうしなひよにわびしたしかりし
もうとくなり
○アルイハ昨日マデハ繁昌シテ何シノ思ヒゴトモナカツタ者ガ　ニ
ハカニ不仕合セニナツテナンギチシタリ　又モトシタシカーツタ
中ガ　ソエンニナーツタリシタトキ
あるは松山の浪をかけ　野中の水をくみ　秋萩の下葉をながめ　あかつき
のしぎのはねがきをかぞへ
○或ハ又末ノ松山ノ浪ヤ野中ノ清水チタトヘニシタリ　萩ノ下葉チ
ナガメタリ　曉ノ鴫ノ羽根ガキスル數チカゾヘタリ
あるはくれ竹の　うきふしを人にいひ　よしの川をひきて世の中をうら
みきつるに

○或ハ〔くれ竹の〕身ノウイ事チ人ニハナシ　吉野川チタトヘニ引
テ世ノ中チ恨ンダリ
きつるにといへる詞、次の文とあひかなはず、いかゞ、
今はふじの山もけふりたゝずなり　ながらの橋も造るなりときく人は
哥にのみぞ心をなぐさめける
○又今デハモウ富士山モ煙ノタヽヌヤウニナリ　長柄ノ橋モ又新シ
ウ出來タト聞ク人ナドハ別(ベツ)シテ哥ヨムバツカリデサ　心チハラシタ
ヿヂヤワイ
つくる也を、盡ル也と見たる説は、ひがごと也。もし盡なれば、つ
きぬなりとこそいへ、つくるなりとはいはず、これ雅言の、か
ならず定まれる格也、
いにしへよりかくつたはるうちにも　ならの御時よりぞひろまりにけ
るかのおほんよや哥のこゝろをしろしめしたりけむ
○ズーツト昔カラ右ノ通リ傳ハツテキタウチニモ奈良ノ御時代カラ
サ　別(ベツ)シテヒロマツタワイ　其御時代ニハ定メテ哥ノワケチヨウ
御存知デアツタモノデカナアラウ
かのおほん時に　おほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん哥のひ
じりなりける
○其御世ニ正三位柿ノ本ノ人麿ハ哥ノ聖ー人デサアツタワイ
これは君も人も身をあはせたりといふなるべし

○コレハマコトニ君ー臣合ー躰ト云モノデアラウ

秋のゆふべ立田川にながるゝもみぢをばみかどの御目に錦と見給ひ春のあした吉野山のさくらは人まろがこゝろには雲かとのみなんおぼえける

○秋ノユフグレニ立田川ニ流レル紅葉ヲバ　ソノ奈良ノ帝ノ御目ニハ錦ノヤウニ御覧ナサレ春ノ朝吉野山ノ櫻ヲバ　人麿ノ心ニハ雲カトバツカリサ思ハレタワイ

又山のべのあか人といふ人有けり哥にあやしくたへなりけり

○又山ノベノ赤人ト云人ガアツタワイ　コレモ哥ニ妙ナ名ー人デアツタワイ

人まろはあか人がかみにたゝむことかたくあかひとは人まろがしもにたゝむことかたくなむ有ける

○人マロハ赤人ノ上ニタツヿハナリニクカラウシ　赤人ハ人マロノ下ヘオキニクイクラ井ナコトデサアツタワイ

ならのみかどの御うた

たつた川紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

人まろ

梅花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば

ほの／＼とあかしの浦の朝霧に嶋がくれゆく船をしぞ思ふ

赤人

春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一よねにける

○春ノ野ヘスミレヲツマウト思ウテオレハ來タガ　アマリノドカデ面白サニ此ノ野デサ一夜寐タワイノ

わかの浦にしほみちくればかたをなみ芦邊をさしてたづなきわたる

○若ノ浦ヘシホガミチテクレバ干潟ガ無サニ芦原ノ方ヲ指テ　鶴ガ鳴テワタルアレ

此人々をおきて又すぐれたる人もくれ竹のよゝにきこえかたいとのより／＼にたえずぞ有ける

○此二人ノ外ニモ又スグレタ人ハ「くれ竹の」御ー代ー々「かた糸の」時々タエズサアツタワイ

これよりさきの哥をあつめてなむ萬えうしうとなづけられたりける

○サテ此奈良ノ御ー時ー代マデノ哥ドモヲ集メテ萬葉集トサ題号ヲツケラレタワイ

> こゝにいにしへのことをも哥のこゝろをもしれる人わづかにひとりふたりなりきしかあれどこれかれえたるところえぬところたかひになんある

かの御時よりこのかた年はもゝとせあまり世はとつぎになむなりにける

○其御時代カラコチヘ年ハ百年アマリ御代ハ十代ニサナルワイ

こゝにいにしへの事をも哥のこゝろをもしれる人よむ人おほからず
わづかにひとりふたりなりきしかあれどこれかれえたるところえぬ
ところたがひになむある

○其ノ間ニ昔ノ事モ哥ノワケモヨウ知ッタ人ヨンダ人ハ　タクサン
ニハナイ　ワヅカニ一人カ二人ト云ホドノ事デアッタ　ヂヤガソレ
モ　タガヒニ得タトコロト得ヌトコロガアッテ　カノ人麻呂ヤ
赤人ホドニ十ー分難ノナイ名ー人トハイハレヌ

今此事をいふにつかさくらゐたかき人をばたやすきやうなればいれず

○サテ今其ノ人々ノ事ヲ云ハウヂヤガ　其内ニ官位ノ高イ人ノ事ハ
云フノハ慮外ナヤウナ物ヂヤニヨッテ　ソレーヤノケテオイテ

そのほかにちかきよにその名きこえたる人は

○ソノ官位ノ高イ衆デハナシニ　其外ニ近イ代ニ哥ノ名ノ聞エタ衆ハ

すなはち僧正遍昭は哥のさまはえたれどもまことすくなしたとへばゑ
にかけるをうなを見ていたづらに心をうごかすがごとし

○マヅ僧正遍昭ハ　哥ノテイハ得テアッタケレ𪜈　マコトガスクナ
イ　物ニタトヘテイハウナラ　繪ニカイテアルオヤマヲ見テ　セ
ンノナイ事ニ心ヲウゴカスヤウナモノヂヤ

淺みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか
はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく
嵯峨野にて馬よりおちてよめる

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

ありはらのなりひらはそのこゝろあまりてことばたらずしぼめる花
の色なくてにほひのこれるがごとし

○在原ノ業平ノ哥ハ　コヽロガアマッテ詞ガタラヌ　テウドシボン
ダ花ノ　色ハナウナッテ　ニホヒノ殘ッテアルヤウナ

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがみひとつはもとの身にして
大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの
ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉

○諸 ふんやのやすひではことばゝたくみにてそのさまみにおはずいはゞ
あき人のよききぬきたらんがごとし

○文室ノ康秀ハ　詞ハタクミデ　哥ノ躰ガソノ詞ト相ー應セヌ　イハ
バアキンドノエイキル物ヲ着タヤウナモノヂヤ

吹からに野べの草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ
深草のみかどの御國忌に
草深きかすみの谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

宇治山の僧きせんはことばかすかにしてはじめをはりたしかならず
いはゞ秋の月を見るにあかつきの雲にあへるがごとし

○宇治山ノ僧喜撰ハ　詞ガオクフカウテ　ソシテ始メトハテトノ
ツリアヒガシーツカリトセヌ　イハヾ秋ノ月ヲ見ルノニ曉ノ雲ノ
デヽキタヤウナモノヂヤ

わが庵はみやこのたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
よめるうたおほく聞えねばかれこれをかよはしてよくしらず

○此人ハヨンダ哥ガ多ウハ傳ハラヌニヨッテ　アレヤコレヤヲ見合スヿガナラ子バトクトハシレヌ

をのゝこまちはいにしへのそとほりひめの流なり　あはれなるやうにてつよからずいはゞよき女のなやめるところあるにゝたり　つよからぬはをうなの哥なればなるべし

○小野ノ小町ハ昔ノ衣通姫ノ流ナ哥ヂヤ　アハレナヤウデ　ツヨウナイ　イハヾエイ女ノナヤム所ノアルニ似タ物ヂヤ　ツヨウナイノハ女ノ哥ユヱデアラウ

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを
色見えでうつろふ物はよの中の人のこゝろの花にぞありける
わびぬれば身をうき草の根を絶てさそふ水あらばいなむとぞ思ふ
そとほりひめの哥
わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

大とものくろぬしは〔コトバオチタリ〕そのさまいやしいはゞたき木おへる山人の花のかげにやすめるがごとし

○大友ノ黒主ハオモシロイ所ガアッテ　哥ノテイガイヤシイ　イハヾ薪ヲ負ッテ井ルヤマガオヤヂガ　花ノ木ノ下デ休ンデ居ルヤウ

ナテイヂヤ　【千秋云、譯に、オモシロイトコロガアッテとあるは、眞字序に、頗有二逸興一とあるによりて、補はれたるなるべし、此序には、これにあたる詞の有しが、落たる也、】

思ひ出て戀しき時ははつかりの鳴てわたると人はしらずや
鏡山いざ立よりて見てゆかむとしへぬる身はおいやしぬると

このほかの人々その名きこゆる野べにおふるかづらのはひひろごりはやしにしげきこの葉のごとくにおほかれど哥とのみおもひてそのさましらぬなるべし

○此ノ外ニモ名ノアル人々ハ野ニハヒヒロガッテアル葛ヤ林ニシゲウハエテアル木ノ葉ヤナドノゴトクニタントアルケレドモ　皆自分ニ哥ヂヤト思ウテ居ルバカリデ　實ニ哥ト云モノヽクハシイヤウスヲバ知ラヌモノヂヤト見エル

かゝるにいますへらぎのあめのしたしろしめすことよつのときこゝのかへりになむなりぬる

○サテ右ノ通リデアッタトコロニ　御當代上樣ノ天下ヲ治メサセヲルヽノモ　今年デ九年ニサナルガ

あまねきおほんうつくしみの涙やしまのほかまでながれひろきおほんめぐみのかげつくは山のふもとよりもしげくおはしまして

○ドコカラドコマデモモレタ所ノナイ御慈悲ガ　日本ノ外マデイキワタッテ　イヅクノウラマデモミナソノ御蔭ヲカウムラヌ者ハ

ナイ雖有イ時節デ
よろづのまつりごとを きこしめすいとまもろ〳〵の事をすてたまはぬあまりに
○イロ〳〵ノ御政事ヲトリ行ハセラルヽ御ヒマ〳〵ニ 其外ノ一切(イッサイ)ノ事マデヲ御ステアソバサレヌアマリニ
いにしへの事をもわすれじ ふりにし事をも おこし給ふとて今も見そなはし後の世にもつたはれとて
○古ヘアツタ事ヲモ御忘レアソバサルマイ 年久シウナツタ事ヲモ御取リ立テアソバサウト云ツ思召シデ 今モ御覧遊バサレ 又後々ヘモ傳ハレト思召テ
延喜五年四月十八日に 大内記きの とものり御書のところの あづかりきのつらゆき さきのかひのさうくわんおふしかふちのみつね右衛門ノ府生みふのたゞみねらにおほせられて
○當年延喜五年四月十八日ニ ワレラ四人ノ者ヘ仰付ラレテ
まんえうしうに いらぬ ふるきうたみづからのをもたてまつらしめ給ひてなむ
○万葉集ニ入ラヌフルイ哥 幷ニ自ー分〳〵ノ哥ヲモ集メテ差シ上ケマスルヤウニト仰セ付ラレテサ
それがなかにも梅をかざすより はじめて ほとゝぎすをきゝもみぢををり雪を見るにいたるまで
○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス哥カラウーツターツテ 郭公ヲキク哥 紅葉ヲ折ル哥 雪ヲ見ル哥マデ四季ノ部

又つるかめにつけて君をおもひ人をもいはひ
○又鶴亀ニツケテ君ノ御壽命ヲ長カレト思フテ御祝ヒ申シタリ 其外ノ人ヲモ祝フタ哥
秋萩夏くさを見てつまをこひ逢坂山にいたりて手向たいのり
○又秋ノ萩ノ花ヤ夏ノ草ヲ見テハ妻ヲ戀シウ思フタ戀ノ哥 逢坂山マデ旅立テ行テ手向ノ神ヲ祈ル哥ナド
あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〴〵の哥をなむえらばせ給ひける
○アルイハ四季戀ナドノ部ニモイラヌ イロ〳〵ノ雑(ザウ)ノ哥マデヲサ撰ミマセイト仰付ラレテ其通リ撰ンデ集メタ
すべてちうたはたまきなづけて古今和哥集といふ
○其哥數都ー合千首 巻ノ數ガ廿巻 題号ハ古今和哥集トツケタ
かくこのたびあつめえらばれて 山下水のたえずはまの まさごのかずおほくつもりぬれば
○カヤウニ此度此集ガ出來タデ 〔山下水の〕昔ノ撰集ノ跡モ斷絶セズ 〔はまの眞砂の〕ヨイ哥ガ數オホクアツマーツターナレバ
いまはあすか川の瀬になるうらみもきこえず さゞれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき
○モウコレカラハ哥ノ風(フウ)ノワルウ變(カハ)ルキヅカヒモナウテ 次第ニ此道ノ末長ウ繁昌スルメデタイ事バカリガサアラウ
それまくらことばゝ春の花にほひすくなくして むなしき名のみ秋の夜のながきをかこてれば
○サテ我々ドモガ義ハ ヨミ哥ハ〔春のはな〕オモシロイトコロモ

ナイノニ　實デモナイ名バカリ〔秋のよの〕上手ナヤウニ云ヒハヤサレルヿナレバ

おのがをしへ子なる、三井ノ高蔭がいはく、まくらは、われらを寫し誤れるなるべし、マヽ乱さおれと似たり、同じ貫之の大井川ノ序にも、われらみじかき心の云々、後拾遺集ノ序にも、仰せをうけ給はれるわれら云々、伊勢が長哥にも、涙の色のくれなゐは、われらが中の時雨にて云々、とありといへり、橘井ノ千秋も、われらなるべしといへり、又或人はいはく、それまくらは、それがしらの誤たるべし、おのがとを、それがしといへるとも、中昔の文に例ありといへり、今思ふに、此ふたつのうちなるべし、まろらの誤とするはわろし、まろといふは、無禮き語に用ひたる例なれば、此序などに、いふべきにあらず、

かつは人のみゝにおそりかつは哥の心にはぢおもへど

○世間ノ人ノ聞クトコロモナントアラウカト思ハレ又一ツニハ哥ノ思フ心モ恥カシケレドモ

たなびく雲のたちゐたなく鹿のおきふしはつらゆきらがこの世におなじくうまれて此事の時にあへるをなむよろこびぬる

○拙者ドモガ此世ニ同シヤーウニ生レアハセテ　カヤウナ仰付ラレノアル時節ニ逢フタコトヂサ〔たなひくくもの〕ターツテモ居テモ〔なくしかの〕寐テモサメテモ悦ビマス

ひとまろなくなりにたれど哥の事とゞまれるかな

○カノ人麻呂ハトウ無クナツテシマウタケレド　哥ノ道ハノコツテアルサテ〳〵難有イコトカナ

たとひときうつりことさりたのしひかなしひゆきかふとも

○コレカラ後タトヒ時代ガ段々カハツテ　ドノヤウニナリユクト云テモ

このうたのもし〔あるをや〕あをやぎの糸たえず松の葉のちりうせずしてまさきのかづら長くつたはり鳥の跡久しくとゞまれらば

○此集ガ若世間ニ〔青柳のいと〕〔松のはの〕タエウセズニ〔まさきのかつら〕末長ウ〔鳥のあと〕久シウ傳ハツテサヘアーツタナラバ

あるなやの四字は、次のあをやぎよりまぎれたる誤なるべし、もしは、若にて、久しくとゞまれらばといふへかゝれる詞也、

哥のさまをもしりことのこゝろをえたらむ人は

（末代ニ至テ　哥ノヤウスヲモヨク知リ　物モ心得テアヲウ人ハ

大そらの月を見るがごとくにいにしへをあふぎて今をこひざらめかも

○此集ヲ　サテ〳〵結構ナ集ヂヤト云テ　天ナ月ヲ見ルゴトクニ仰ギターツトンデ今此御當代ヲシタハヌト云ヿハアルマイワサテ【千秋云、いにしへとは、後ノ世よりいふ古へにて、すなはち此延喜の御代をさせり、】

古今和歌集巻第一遠鏡

春歌上

ふるとしに春たちける日よめる　　在原ノ元方

年のうちに春は來にけり一とせをこぞとやいはむことしとやいはむ

○年ノ内ニ春ガキタワイ　コレデハ同シ一年ノ内ヲ去年ト云タモノデアラウカ　ヤツハリコトシト云タモノデアラウカ

春たちける日よめる　　紀ノ貫之

袖ひぢ(漬)てむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

〇袖ナヌラシテスクウタ水ノコホーツテアルノヲ　春ノキタ今日ノ風ガ　フイテトカスデアラウカ(らんや)

題しらず　　よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよし野のよしのゝ山に雪はふりつゝ

○春ガキテ霞ノターツタハドレドコヂヤゾ　見レバ吉野山ニハマダ雪ガフーツテ　ナカ〳〵春ノケシキハ見エヌガ

二條ノ后の春のはじめの御哥

雪のうちに春は來にけりうぐひすのこほれる涙いまやとくらむ

〇マダ雪ノツモツテアル處ヘ春ガキタワイ(けり)　コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モ(今)モウトケルデアラウカ(らんや)

題しらず　　よみ人しらず

梅がえにきゐるうぐひす春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

〇梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴クケレド　マダ此ヤウニ春マデカケテ雪ガフツーテ　春ノヤウニモナイ　鶯なけども、春かけて、いまだ雪はとつゞく意也、

雪の(ガ)木にふりかゝれるをよめる　　素性法師

春たてば花とや見らむしら雪のかゝれる枝に鶯のなく

○春ニナツタレバ　花ヂヤト思フテヤラ(やらん)　雪ノフリカヽツテアル木ノ枝デ鶯ガナク

題しらず　　よみ人しらず

心ざしふかくそめてしをりければきえあへぬ雪の花と見ゆらむ

○トウカラ花ノ事ヲ深ウ思ヒコンデ居ルガソレユヱヂヤヤラシテ(五らん)　春ニナツタレバソノマヽ　雪サヘマダロクニ消ヌノニ　ソノ殘ツテアル木ノ枝ノ雪ガ　ハヤ花ニ見エル

此哥古く聞ゆれば、三の句、をりけれかなるべし、をりければにやの意なり、此格万葉に多し、然るを此集のころにいたりては、けれかといふ詞は、耳なれぬ故に、ければとなへ來つるか、はた後の人の、かはの誤と心得て、さかしらに改めたるにも有べし、然れども、ければにては、結ヒのらむとかけあひわろし、されば、結ヒを一本に、見ゆるかとあるも、後にかけあひを思ひて、改めたるにやあらん、

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちきみの哥也
二條后のとう宮のみやす所（御母儀様）ときこえ（申シタ）ける時　正月三日おまへ（康秀ヲ）にめしておほせごとあるあひだに日はてりながら雪のかしら（康秀ガ）にふりかゝりけるをよませ（オヨマセアソバサレタ）給ひける
ふんやのやすひで（〇清）

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ難有イ御恵ミヲ蒙リマスル私デゴザリマスレド　年ヨリマシテカヤウニ頭（ツムリ）ガ雪ニナリマスハサ難義ニ存ジマスル　コマリマシタ物デゴザリマス、

雪のふりけるをよめる　　きのつらゆき

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

○霞ガタツテ木ドモノコノメモ張リ出ル春ノコロ　此ヤウニ雪ガフレバ　花ノナイ里ニモサ花ガチルワイ　トント花ト見エル

春のはじめによめる　　ふぢはらのことなほ

春やとき花やおそきときゝわかむうぐひすだにもなかずも有かな

○ハヤ春ニナツタコトナレバ　モウ花ガサキサウナ物ヂヤニ　マダサカヌハ　春ノ来（キ）タガホドヨリ早イノカ　花ノサクノガホドヨリオソイノカ　鶯ナリトモ鳴イタラ　ソレデドチラヂヤト云コトガシレウニ　サテモマア鶯サヘナカヌコカナ

春のはじめのうた　　みふのたゞみね

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレド　マダ鶯ガナカヌ　ナンデモ鶯ノナカヌウチハイツマデモ　オレハ春デハアルマイトサ思ウ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　源ノまさすみ

谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる浪や春のはつ花

○春ノ初メニ　谷ノ風ニアソコヽトケル氷ノヒマ〳〵カラウチダス浪ハ　テウド花ノヤウニ見エルガ　コレガ春ノハツ花ト云モノデアラウカ（四や）

きのとものり

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

○風の（二）吹テイク幸便ニ花ノ香ヲ（一）コトツケテヤツテサ（三）ソレヲ（やら）鶯ヲサソヒダシテクル案内者ニハスルヂヤ

大江ノ千里

鶯の谷より出るこゑなくは春くることをたれかしらまし（〇清）

○谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ聲ガナクバ　春ノキタト云コヲタレガシラウゾ

在原ノ棟梁

春たてど花もにほはぬやま里はものうかる音に鶯ぞなく

○春ニナツテモ花モナイ山中ノ里デハ　ナニモハリアヒガナサニ鳴キトモナサヽウナ聲ヲシテサ　鶯ガナク【千秋云、下ノ句、ものう

かる音にぞ鶯のなくといふ意にて、ぞもじは、ものうかるねへかかれるてにをは也、此類おほし。】

題しらず　　よみ人しらず

野べちかく家ゐしせればうぐひすのなくなる聲は朝な〳〵きく

○ワシハ野ヘンノ近イ所ニスマヒヲシテヰレバ　鶯ガヨウ鳴テ毎日アサカラキヽマス

春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

○此春日野ヲバ今日ハ焼テクレルナヨ〔三〕妻モ來テアソンデ居ル我モキテ遊ンデ居ルホドニ

かすが野のとぶ火の野守出て見よいまいくかありてわかなつみてむ

○此春日野ノ飛火野ノ番人ヨ　出テヤウスヲ見テクレイ　ソチハ此野ニ住デ居レバ　タイガイ知レルデアラウガ　マーウイクカバカリアツテカラ　若菜ヲツミニハ來ウゾ

み山には松の雪だにきえなくにみやこは野べのわかなつみけり

○山ニハアレ雪サヘマダキエズニアツテ　松ナドモ白ウ見エルニ京ハハヤメツキリト春メイテ　野ヘンヘ人ガデヽ　若菜ヲツムワイ

あづさ弓おして春雨けふふりぬ明日さへふらばわかなつみてむ

○〔一〕オシナメテドコモカモ春雨ガマヅ今日ハフーツタガ　アスマ一日フーツタナラバ　オホカタ若菜ガツマルヽクラヰニナルデアラウホドニ　野ヘ出テ若菜ヲツマウゾ

仁和のみかどみこにおまし〳〵ける時に人にわかな給ひける御哥

君がため春の野に出てわかなつむわがころもでに雪はふりつゝ

○ソコモトヘ進ゼウト存ジテ　野ヘ出テ此若菜ヲツンダガ　殊ノ外寒イコデ袖ヘ雪ガフリカヽツテ　サテ〳〵ナンギヲ致シテツンダ若菜デゴザル

哥奉れとおほせられし時よみてたてまつれる　　つらゆき

春日野のわかなつみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

○ワザ〳〵春日野ノ若菜ヲツミニヤラ　アレ白妙ノ袖ヲフツテツレダツテ人ガイクワ

打聞、ふりはへの説いかゞ、延と、はえあふのはえとは、假字さへ異なる物をや、

題しらず　　在原ノ行平ノ朝臣

春のきる霞のころもぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

○春ノ着ル霞ノ衣ハ横ノ糸ガウスサニ　山風ニヤ　ミダレルデアラウサウ見エル

寛平ノ御時きさいの宮の哥合によめる　　源ノむねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今一しほのいろまさりけり

○イツモカハラヌ松ノ青イ色モ　春ガキタレバ　マ一入(ヒトシホ)染タヤウニ
色ガマシタワイ

哥たてまつれとおほせられし時よみて奉れる　つらゆき

わがせこがころもはるさめふるごとに野べのみどりぞ色まさりける

○〔一〕〔衣〕春雨ノフルタビニ　野ヘンノ草ノ青イ色ガサダン／＼マスワイ

わがせこがの説、打聞よろし、妻が夫の衣をはるといふ詞也、餘材説れり、

青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

○糸チヨーツテハホコロビモヌフヿヂヤニ　青イ柳ノ糸チヨリカケル春ノコロハ　ケーツクサ(しもぞ)花ガ咲ミダレテホコロビルワイ　ほころぶるは、花のひらくをいふ、

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどり糸よりかけてしら露を玉にもぬける春のやなぎか

○アレアノ柳チ見レバ　ウスモエギ色ノ糸チヨツテカケテ　キレイナ白イ露チマア(も)　玉ニシテツナイデ　サテモ／＼見事ナ春ノ柳カナ　餘材わろし

題しらず　よみ人しらず

もゝ千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく

○鶯ヤナニヤカヤ　鳥ノオモシロウサヘヅル春ハ　物ゴトニナニモカモ　改マツテアタラシウナルケレド　オレガ此身バカリハサ春ノクルタビニダン／＼トフルウナツテイク

をちこちのたづき(濁 ○猶)もしらぬ山中におほつかなくもよぶこどりかな

○アチモコチモ案内モシラヌ　此山中ニナンヂヤカ呼子鳥ガナイテ人チヨブガ　ドコヂヤヤラサテ／＼マア(も)シーツカリトシレヌヿカナ

鴈のこゑをきゝて。こし(北國)へまかりける人を思ひてよめる　凡河内ノ躬恒

春くれば鴈かへるなり白くものみちゆきぶりにことやつてまし(○濟)

○春ニナツタレバアレ鴈ガカヘルワ　鴈ハアノヤウニ　ソラチトン(しら雲 道)デ　北國ノ方ヘユクヂヤガ　コレハヨイトコロデ　ユキアフタ(四)コトツケチシテヤラウカヨ

かへる鴈をよめる　伊勢

春霞たつを見すてゝゆく鴈は花なき里にすみやならへる

○オーツツケ花ガサクヂヤニマア　此ヤウニ春ノ霞ノターツタノチ見ステ、イヌルアノ鴈ハ　花ト云モノ、昔カラナイ里ニスミナレタヿカイ　ソレデ花ノ面白イヿチシラヌデカナアラウ　餘材、花なき里の説わろし、

題しらず　よみ人しらず

をりつれば袖こそにほへうめの花ありとやこゝにうぐひすのなく

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ　ソレデ袖ガニホフノデコソアレ　コヽニ梅ノ花ハアリモセヌノニ　此ノ袖ノニホフノヲ　梅ノ花ガコヽニアルト思フカシテ　鶯ガ來テ鳴ク　打聞わろし

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

○梅ノ花ハ色モヨイガ　色ヨリ香ガサナホミイワイア、ハレヨイニホヒヂヤ　此ヤウニヨイニホヒノスルハ　タレガ袖ヲフレタ此庭ノ梅ノ花ゾイマア

やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

○ムヤクナコトヂヤニ　庭ノ近イ所ニ梅ハウヱマイゾ　花ガサケバアマリヨウ匂ウノデ　待ッ人ハ來モセヌニ　ソノ人ノ袖ノニホヒニトリチガヘラレルワイ【千秋云、梅うゑじ、花のあぢきなくと心得べし、】

梅ノ花たちよるばかり有しより人のとがむる香にぞしみける

○梅ノ花ノ下ヘチーヨーツト立ヨーツタト云ホドノヿガアーツタガソレカラ　人ノフシンヲウツヤウニ衣ガ香ニソマーツタワイ　キツイ匂ヒナモノヂヤ

うめの花をゝりてよめる

東三條ノ左のおはいまうちぎみ

鶯の笠にぬふてふうめの花をりてかざゝむ老かくるやと

○ソウタイ笠ハツムリヤカホヲカクス物ナレバ　鶯ガ笠ニヌウト云梅ノ花ヲチーツテ　吾ガ年ヨーツタ形ガカクレルカドウヂヤト　ツムリヘサシテ見ヤウ

題しらず　素性法師

よそにのみあはれとぞ見しうめの花あかぬいろ香はをりてなりけり

○オレハアハウナ今マデハ　梅ノ花ヲタヾヨソニバカリサブ、ハレ見事ナヿカナト思フテ見テ居タガ　梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ　折テカウ近ウ見テノヿヂヤワイノ又々ヨソニ見タヤウナヿデハナイ　餘材わろし

梅ノ花をゝりて人におくりける　とものり

君ならでたれにか見せむ梅ノ花いろをも香をもしる人ぞしる

○此ノ梅ノ花ヲ貴樣デナウテハ　誰ニ見セウゾイ　色デモ香デモヨウ知テ居ル人ガサ　ヨシアシハヨウシリマス　ソレヲ知ラヌ人ニ見セテハ　ナンノセンモナイヿサ

くらぶ山にてよめる　つらゆき

うめの花にほふ春べはくらぶやまやみにこゆれどしるくぞ有ける

○梅ノ花ノニホウ春サキノコロハ　暗部山ヲクライ闇ノ夜ニコエル時デモ　梅ガサイテアルト云ヿハ　見エイデモソノ匂ヒデ　サヨウシレルワイ

月夜に梅ノ花をゝりてと人のいひければをるとてよめる

月夜にはそれとも見えずうめの花香をたづねてぞしるべかりける　みつね

○ハテヨイトコロナ一枝折テヤラウト思ウガ　此ヤウナ月夜ニハ月ノ影ノサス所ガミナオンナシヤウニ白ウ見エルニヨツテ　梅ノ花ガソレヂヤトドウモ見分ラレヌ　コレデハ匂ヒナタヅ子テ行テ知ラウヨリホカハナイ

春のよ梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅ノ花色こそ見えね香やはかくるゝ

○春ノ夜ノ闇ト云モノハ　ワケノタヽヌ物ヂヤ　ナゼト云ニ　梅ノ花ガ　暗ウテ色コソ見エ子　香ガカクレルカ　香ハナンボクラウテモ隠レハセヌ　色ハカクレテ香ハカクレ子バ　隠レルデモナシ隠レヌデモナシドチラ𪜈ワケノタヽヌ闇ヂヤハサテ

はつせにまうづるごとに　やどりける人の家に　久しくやどらで　ほどへて後にいたれりければ　かの家のあるじかくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければ　そこにたてりける梅ノ花をゝりてよめる
（コヘカタ長谷ヘマ井ルタビニ　トマッタイヘヘ、久シウ中絶シテトマラズニヰテ　ソノノチマタ久シブリデソノイヘ、イタワイシタレバ　ソノイヘノテイシユガマウスニハ　此ヤドハコレコノトホリニサマヘカタノマヽデアヒカハラズシツカリトアルゾヤト口上デ申シテダシマシテゴザレバ　ソコニサイテアル）
　つらゆき

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香にゝほひける

○人ハドウヂヤヤラ心モカハラヌカカハーツタカシラヌガ　ナジミノ所ハ　梅ノ花ガサ　ワシガ来タレバ　コレ此ヤウニ　マヘカタノトホリノ匂ヒニ　アヒカハラズニホウワイノ

水のほとりに梅ノ花のさけりけるをよめる　伊勢

春ごとに流るゝ川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

○流レテイク川ヘ花ノ影ノウツーヽタノチ　アノ水ノ中ニモ花ガアルト見テハ　イツノ春デモダマサレテ　折ラレモセヌニ　チラウトシテハ　ソノ水デ袖ガヌレルガ　今年モ又ヌレルデカナアラウ

詞書に水とあるは、京極ノ院の庭の池なれば、哥に、ながるる川とよめるは、その池につゞきたる、やり水をいふなるべし、上ノ句、二三一と句を次第して心得べし、

年をへて花のかゞみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

○年ヲ重子テ　毎年春ハ花ノ影ガウツーヽテ　其花ノ鏡ニナル水ハ花ノチリカヽルノヲ　鏡ガクモルト云デアラウカ　花ノチリカヽルト云ト　年ヘテ鏡ヘ塵ガカヽルト云ト詞ガ同シヿヂヤニヨーツテカウヨンダノヂヤゾヱ　【千秋云、としをへてといふ詞は、上の句にはさして用なきを、たゞ鏡の年をへてくもるとにいはんために、おける也、さて此哥などは、俳諧ノ部にいるべきさまにあらずや、】

家に有ける梅の花のちりけるをよめる

貫之

くるとあくとめかれぬものを梅ノ花いつのひとまにうつろひぬらむ

○日ガクレルト云テハ見　夜ガアケルト云テハ見ィシテ　シバシモ目モハナサズニ見テ居ルノニ　此ノ梅ノ花ハ　イツノヒマニ此ヤウニ　チーツテシマウタ丁ヤラ

打聞、うつろふの説、中々にわろし、【千秋云、此初句の二つのとは、とての意なり、與にはあらず】

寛平ノ御時きさいの宮の哥合のうた　　よみ人しらず

梅ヵ香を袖にうつしてとゞめてば春はすぐともかたみならまし

○梅ノニホヒチ　袖ヘウツシテ　トメテオイタナラバ　春ハ過テシマウタト云テモ　ソレガ春ノ形見デアラウニ

素性法師

ちると見てあるべきものをうめの花うたてにほひの袖にとまれる

○ハアチーツタワトバカリ見テ　ソノブンデアラウ丁ヂヤニ　ヒーヨーンナ丁ヤ　匂ヒガ袖ヘノコーツタ　コレデドウモ散タ梅ノ花ノ丁ガワスレラレヌ

題しらず　　よみびとしらず

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花戀しき時の思ひ出にせむ

○梅ノ花ヨ　チーツタリモ　セメテハ香チナリトモ　ノコシテオケ

ソレチ後ニ戀シイトキ〳〵ノ思ヒダシグサニセウ

人の家にうゑたりける櫻の花さきはじめたりけるを見てよめる　　つらゆき

ことしより春しりそむるさくら花ちるといふ事はならはざらなむ

○春ハサク物ヂヤト云丁チ外ノ櫻ニナラウテ　今年カラ始メテ知テ咲イタ此サクラ花ヨ　ドウゾチルト云丁チバ　ホカノ櫻ニナラハヌガヨイゾヨ

題しらず　　よみ人しらず

山高み人もすさめぬさくらばないたくなわびそ我見はやさむ

○山ガ高サニコヽヘハ誰モ來テ見テ賞翫スル人モナイ此櫻花ヨ　人ガシヤウクワンセヌトテ　アマリツラウ思ウナイ　オレガ見ハヤシテヤラウホドニ

又は里とほみ人もすさめぬ山ざくら

山ざくらわが見にくれば春がすみ峯にも尾にもたちかくしつゝ

○山ノ櫻チオレガカウ見ニクレバ　霞ガ一メンニドコモカモ立チカクシテ　花チ見セヌワイ　サテモイヂノワルイ霞カナ

染殿ノ后のおまへに花がめに櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる　　前のおほきおほいまうちぎみ

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

○年ー數チ經ヘマシタレバ　ワタクシモイカウ年ハヨリマシタガ　サ

リナガラ　アナタノ御繁昌ナサル、此御殿デ　カヤウニ花ヲ見マスレバ　ナンニモ物思ヒモゴザリマセヌ

なぎさの院にてさくらを見てよめる

在原ノ業平ノ朝臣

世ノ中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのどけらまし（〇濟）

○イーツソ世ノ中ニトント櫻ト云物ガナイナラバ　ケーツク春ノジブンノ心ハ　ノドカニアラウニ　櫻ト云物ガアルデ　此ヤウニイロイロト心ガサワツイテ　春モノドカニオモハヌ

題しらず　よみ人しらず

石ばしるたきなくもがなさくら花手折てもこむ見ぬ人のため

○岩ノウヘヲハシル此早イ川ガナケレバヨイニ　ソシタラ内ニ居テミエ見ヌ人ノタメニ　アノ川ノアチラナ櫻ノ枝ヲ折テキテマアミヤゲニ持テイナウモノヲ　川ガアルデドウモヲリニイカレヌ

山のさくらを見てよめる　そせい法師

見てのみや人にかたらむ櫻花手ごとにをりて家づとにせむ

○カウシテアノ見事ナ櫻花ヲ見テ　人ニハタヾ咄（ハナ）スバカリデオカウ(ウ)カイ　ソレデハ見タカヒガナイホドニ　手ンデニ折テ來テ持テインデ　内ヘミヤゲニセウ

花ざかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける

○此山ノ上カラカウ見渡セバ　柳ノ青イ色ト櫻花ノ白イ色トヲコキマゼテ　トント錦ト見エル　此見リタシタトコロノ　京ノケシキガサ　春ノ錦ト云モノヂヤワイ

さくらの花のもとにてとしの老ぬることをなげきてよめる　きのとものり

色もかも同じむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

○櫻ハアノヤウニ色モ香モ　イツノ年モ同シヿデ昔ノトホリニサクケレ[ドモ]　年ヲ經タ人ハサ　コレ此トホリニ　若イ時トハ大キニカハーツタワイ　此哥三の句、さくらめどゝいひては、いさゝかかなひがたきやうなるを、櫻をたちいれむとて、しひたりときこゆ、【千秋云、さくらめどは、げにさけれどもとか、さくなれどとかいはでは、かなひがたきさま也、】

をれるさくらをよめる　つらゆき

たれしかもとめてをりつる春霞立かくすらむ山のさくらを

○此櫻ノアーツタ山ハ　サダメテ霞ガ立テカクシテ　知レニクカラ（らん）ウニ　タレガマアタンダヘテイテ折テキタヿゾ

哥奉れとおほせられし時によみてたてまつれる

櫻花咲にけらしもあしひきの山のかひより見ゆるしら雲（〇濟）

○櫻花モサイタサウナワイマア　アノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ見エルノハ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　友　の　り

みよし野の山べにさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

○吉野山ノアタリニ咲テアル櫻花ヲ見レバ　トント雪ヂヤナイカトトリチガヘラレルワイ

やよひにうるふ月の有けるとしよみける　い　せ

さくら花春くはゝれる年だにも人のこゝろにあかれやはせぬ

○櫻花ヨイツモノ年ハ早ウチルモ　セメテ春ノ一月加ハツテ長イ今年バカリナリモ　人ノ心ニタンノウスルホドユルリト咲テアーツタガヨイニ　ナゼニイツモト同シヤーツニ今年モ早ウチルゾイ

此結句のてにをは、一格也、例多し、詞の玉のをに出せるがごとし、打聞、いひざまあしくて、いかなる意とも、きゝとりがたし、

さくらの花のさかりに。久しくとはざりける人のきたりける時によみける　よみ人しらず

あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり

○櫻花ハアダナ物ヂヤト名ニコソターツテアレ　ナカ〱アダナ物デハゴザラヌ　一年ノ内ニモタマ〱ナラデハ　尋子テ下サレヌ人ナサヘ　キドクニ今日マデチラズニ待テ居タワイノ　スレーヤ久シウ尋子テモ下サレヌ貴様ノアダナ御心ヨリハ　櫻ガハルカマシヂヤ

かへし　なりひらの朝臣

けふこずは明日は雪とぞふりなまし消ずは有りとも花と見ましや

○貴様ハ櫻ハアダニハナイ業平ヲアダナト云ハシヤルガ　ソレーヤ大キナチガヒヂヤ　ワシガ今日参ツタレバコソアノ櫻ヲ花ヂヤトハ見レ　モシ今日参ラズバ　明日ハモウ雪ニナーツテ降テシマウデアラウ　タトヒソノ雪ニナーツタノガ　消ズニハアーツタトテモ　雪ヂヤトコソ見ヤウケレ　モトノ花トハ見ヤウカヤ

題しらず　よみ人しらず

ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそさくらをらばをりてめ

○櫻花ハチツテシマウテカラハ　ナンボ見タウ思フテモ　ソノセンハナイモノヲ　折ルナラ早ウ今日ノ内ニコソ折ウヿナレ　明日ハモウチルデアラウ

をりとらばをしげにもあるかさくら花いざやどかりてちるまでは見む

○此櫻ガアマリ見事サニ一枝折テ見ヤウカト思ヘド　折テ取ルノハ　イカニシテモマア惜イヤウナ物カナ　サテ〱ナントセウゾ　イヤ〱折ルノハ惜イヿヂヤニ　ドレーヤ此ノ木ノ下デ宿ヲカーツテ居テ　散ルマデハソノマヽデ見ヤウ

きのありとも

櫻色にころもはふかく染てきむ花のちりなむ後の形見に

○花ハオーツヽケ散テシマウデアラウ　ソノ後ノ形見ニキル物チ櫻色ニヨウ染ニ着ヤウノ【千秋云、此さくら色といへるは、たゞ櫻の花の色にといへるなるべし、櫻花とて、さだまれる染色をいへるにはあらじ、】

さくらの花のさけりけるを見にまうできたりける人によみておくりける　　みつね

我やどの花見がてらに来る人は散なむ後ぞ戀しかるべき

○コチノ花チ見ガテラニ尋子テクル人ハ　花見ガテラノヿナレバ花ガチツタラモウ来ハスマイヂヤニヨーツテ　散テシマウタ後ニサ其人ガ戀シカラウ

亭子院の哥合の時よめる　　伊勢

見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散なむ後ぞさかまし○濟

○来テ見ル人モナイ山里ノ櫻花ハ　ヨソホカノ花ガミンナ散テシマウテ後ニササカウコトヂヤニ　今ハドコニデモ澤ー山ニ花ハアルヂヤニヨーツテ　ソレデ遠イ山里ナドヘハ誰モ見ニクル人モナイヂヤガ　ホカノ所ノ花ガモウ無イジブンニナーツテカラ咲イタライヤトモ遠イ所デモ見ニクルデアラウヮサ

古今和歌集巻第二遠鏡

春歌　下

題しらず　　よみ人しらず

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

○霞ガタナビイテ　其霞ヘ色ノウツーヽテ見エルアノ山ノ櫻花ガチラウトテヤラ　霞ノ色ガカハツテキタ

まてといふにちらでしとまる物ならば何をさくらに思ひまさまし〇濟

○チリカヽーツタ櫻ニ向フテ　シバラクチラズニ待テクレト云ノチ聞入レテ　ソレデシバシデモチラズニ留ル物ナラ　何チ櫻ヨリマサーツタ物ヂヤトハ思ハウゾ　ソレデハモウ世ノ中ニ櫻ヨリマサーツタ物ハアルマイニ　惜イノニ早ウチルバツカリガ　アーツタラ櫻ノキズヂヤ

のこりなくちるぞめでたき櫻花有てよの中はてのうければ

○ヮルウナーツテウザ〱ト殘ツテアラウヨリ　サツーハリト殘リナシニ早ウ散テシマウノガッサアヽヽケーツカーウナヿヂヤ櫻花ハ　世ノ中ト云モノハ　ソウタイ何ンデモ　長ウアレバカナラズシマイクチガヮルイ物ナレバサ

此里にたびねしぬべし櫻花ちりのまがひに家路わすれて

○コヨヒハ此里デトマラウヿヂヤ　此ヤウニオモシロイ櫻花ノチ

ルマギレニ　内ヘイヌルヿチバ思ヒダサズニサ

うつせみの世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつ散にけり

○櫻花ハサ　咲イタワト思フタウチニ　ハヤモタ一方カラ散ニシマウタワイ　人間ノ一生ノアヒダハ　ナンノマモナイ物ヂヤガソレニマアヨウ似タヿカナ

僧正遍昭によみておくりける　　これたかのみこ

櫻花ちらばちらなむちらずとて故郷人の來ても見なくに

○遍昭師ガ大方此花ヲ見ニ來テクレラルヽデアラウト思フテ　毎日毎日マテドモ見エヌ　ケフマデ見エヌカラハ　モウ大方見エヌノデアラウ　スレバヤヨイワ櫻花ヨ　チルナラ勝手ニ散テシマヘナチラズニアーソタトテ在所ノ人ガ來テ見モセヌニ　カヤウニヨミ候ユヱ御目ニカケ候已上

雲林院にてさくらの花のちりけるを見てよめる

そうく法師

櫻ちる花のところは春ながら雪ぞふりつゝきえがてにする

○櫻花ノチル所ヘキテ見レバ　時節ハ春デアリナガラ　雪ガサチラチラトフツテ　ヂキニハキエニクイ　春ノ雪ハソノマヽ消ル物ヂヤニコレハ正ノ雪デナイ櫻バナヂヤニヨーツテサ　【千秋云、初二句は、さくら花のちるところはといふとなるを、さはいひがたき故に、花とちるとを、下上にはいへるなり】

櫻の花のちり侍けるを見てよめける

そせいほうし

花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよゆきてうらみむ

○サテモ〳〵アツタラ花ヲ　此ヤウニチラス風メガ逗留シテ居ル所ハ　タレゾハ知テ居ル者ガアラウ　誰レガ知ニ居ルゾ　オレニ敎ヘテクレイ　ソコヘ行テゾンブンニ恨ミテイハウ

うりんゐんにて櫻の花をよめる　　そうく法師

いざゝくらわれもちりなむ一さかりありなば人にうきめ見えなむ

○此ヤウニ櫻ノ早ウ散テシマウノハ　アヽヨイ料簡ヂヤ　ドレーヤ人ヨ　オレモイーツ・シーヨニ散テドウナリ𪜈ナーツテシマハウ　人ト云物モ　一サカリ盛リナ時ガアーツテ　ソレガ過キテカトロヘヌナラバ　老ボレニラーソシモナイヤウスヲ人ニ見ラルヽデアラウホドニ

あひしれりける人のまうできてかへりにける後によみて花にさしてつかはしける　　つらゆき

一め見し君もやくるとさくら花けふはまち見てちらばちらなむ

○此間タチーヨーツトキテ見テイナシーヤーツタ人ガ　ヒヨツトカ今日一日ハマア待テミテ　ソシテゴザラズバ　チルナラチーダタガヨイ　櫻花ヨ　大カタ今日ハゴザリサウナ物ヂヤ

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらむさくら花ちるまをだにも見るべきものを
○霞ハナゼニ此ヤウニ櫻花チカクスヤラ　エルリト見ルコトハナラズドモ　セメテハ枝カラチルアヒダナリドモマア見ヤウモノチ　ソノ間タサヘ霞デ見ラレヌ

こゝちそこなひてわづらひける時に風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだにをれる櫻のちりかたになれりけるを見てよめる　藤原ノよるかの朝臣
たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり
○ワシハアンバイガワルウテ　帳(ネドコロ)ノ帷(カタビラ)チオロシテ　ヒーツコモーツテバカリ居テ　春モイクカヤラ日ノ過テイクモシラヌマニ咲タラ見ヤウ〳〵ト思ウテ　セーツカク待ッタ櫻モ　ハヤ此ヤウニウツロウテシマウタワイノ

東宮の雅院にてさくらの花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる　すがのゝ高世
枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ
○水ノ上ヘチーツテ流レル櫻花ガアレトーツト沫ノヤウニ見エル枝カラモモロウ散タ花ヂヤニヨーツテ　下タヘ落テモ又同クアノヤウニモロイ水ノ沫ニッナルヂヤワ

櫻の花のちりけるをよめる　つらゆき
○濁ことならばさかずやはあらぬ櫻花見る我さへにしづ心なし
○トテモ此ヤウニ早ウチルクラヰナラバ　一ー向ニ　シーヨテカラサカヌガヨイニ　ナゼニサカズニハヰヌゾ櫻花ハ　此ヤウニ早ウ散テハ　見テ居ルコチマデガ心ガサワ〳〵トシテオチツカヌ
打聞、ことならばの說、いと物どほし、此詞は、いづれも右の譯の意を以て見べき也、例を考へ合せて、味ふべし、

櫻のごとゝくちる物はなしと人のいひければよめる
さくら花とくちりぬともおもほえず人のこゝろぞ風も吹あへぬ
○オレハ櫻花ハ早ウチル物ヂヤドモ思ハレヌ　ソレヨリハ人ノ心ガサアダナモノヂヤ　ナゼト云ニ　櫻ハマダ風ガフカヌバ　メッタニチリモセヌガ　人ノ心ハ風ノフクマデモマタズニ早ウ　ウツル物ヂヤワサテ　餘材、下句の注わろし、

さくらの花のちるをよめる　きのとものり
○濁ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ
○日ノ光リノノドカナユルリトシタ春ノ日ヂヤニ　ドウ云コトデ花ハ此ヤウニ　サワ〳〵ト心ゼワシウチルコトヤラ

春宮(トウグウ)のたちはき(帶刀)のぢん(陣)にてさくらの花のちるをよめる
藤原ノよしかぜ
春風は花のあたりをよ(○濁)きてふけこゝろづからやうつろふと見む
○春風ハ花ノ咲テアルアタリヲバヨケテフケ　モシ風ハフカイデモ花ハジブンノ心カラヒトリデニモチルモノカト　タメシテ見ヤ

ウニ

さくらのちるをよめる　　凡河内ノみつね

雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらむ

○サクラ花ハヒトリデニモヒダスラ(のみ)雪ノヤウニフルモノヂ　ソレサヘアルニ(だにあるを)　マダ此上ヘドノヤウニチレト云ヿデ風ハフクヿヤラ

ひえにのぼりてかへりまうできてよめる

つらゆき

山高み見つゝわがこしさくらばな風はこゝろにまかすべらなり

○アノ櫻ノアル所ヘ行(イ)テ見テ折リタカーツタケレドモ　山ガ高サニエノボライデ　殘念ナガラオレハヨソニ見イ〳〵來(キ)タニ　風ハアノ櫻ヂ心マカセニスルデアラウト思ハレル　餘材山高みの説わろし

題しらず　　一本大友ノくろぬし

春雨のふるはなみだかさくら花ちるをゝしまぬ人しなければ

○櫻ノチルヂ惜マヌ人ハナケレバ　此ヤウニ此節春雨ノフルノハ世間ノ人ノ櫻ヂヲシンデ泣クナミダカイ

亭子院ノ哥合のうた　　つらゆき

櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける

○櫻ノチル時ニ風ガ吹タテヽ　其花ガシバラク中(チウ)デサワグケシキハテウド浪ノタツケシキヂヤ　ソシテ海ベニナゴリト云ヿガアル其ナゴリハ浪ガタツヂヤガ　花ヂチラシタ此風ノアトノナゴリニハ　水ノアリモセヌ空ニサ浪ガタツワイ

ならのみかどの御哥

ふるさとゝなりにしならのみやこにも色はかはらず花は咲けり

○フルイ昔ノ都ニナーツテシマウタ此奈良ノ京ニモ　ヤーツハリ色ハ昔ニカハラズ都デアーツタ時ノトホリニ　花ハサイタワイ

春のうたとてよめる　　よしみねのむねさだ

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

○花ノ色ヂバ　霞ノ中ニコメテオイテ見セズドモ　セメテソノ香ヂナリトモ　霞ノ中カラヌスミダシテキテ　コヽヘモニホハセイ　春ノアノ山ノ風ヨコレーヤ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　　素性法師

花の木もいまはほりうゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

○花ノ咲ク木モ　モウ今カラハ　ホーツテ來テウヱマイ　春ニナレバ　花ガ咲テ早ウウツロウ色ヂ見ナラウテ　人ノ心モウツロヒヤスウナルワイ

題しらず　　よみ人しらず

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲るさかざる花の見ゆらむ

○春ノ色ハ　ドコモカモヒラ一マイナレバ　イキワターツタ里トイキワタラヌ里トノワケヘダテハアルマイニ　ドウ云ヿデ　花ヘ咲

タ所トサカヌ所トガアルヿヤラ

　春のうたとてよめる　　　　つらゆき

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ

○サテ〳〵三輪山ハキツウカスンダヿカナ　此ヤウニマア霞ノ隠スノハ　此山ニハ　人ニシラサヌナイショウノ花ガアルカシラヌ

　うりんゐんのみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる　　　　そせい

いざけふは春の山べにまじりなむくれなばなげの花の陰かは

○ドレーヤケフハ日ノクレルマデモ　此春ノ山ベナカケアルイテアソバウゾ　日ガクレタトテモ　花ノ陰ガナササーウナカイ　イクラモ花ノカゲガアレバ　モシ暮タナラ　サイハヒヂヤ花ノカゲニトマラウゾサテ　なげは、なは無にて、げは、何げとおほくいふ詞也、打聞、なげの説わろし、くれなばといへるにかなはず、

　春の哥とてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし

○花ガチラズバ　イツマデ此野邊ニ心ガウカレテ居ルデアラウ　モシ花ガチラズニ　アーツタラバ　千年デモ此野デタテーウヤウニ思ハレル

　題しらず　　　　よみびとしらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むとは命なりけり

○花ハ今年チーツテモ又來年カラ後モ春ゴトニ盛リハアラウケレドモ　ソノ盛リニ逢テ見ルヿハ　コチノ命次第ヂヤワイ　ナンボ花ザカリガ毎年アーツテモ　命ガナケレーヤ　又ト見ルヿハナラヌサウ思ヘバア丶殘リオホイ花ヂヤ

花のごと世のつねならば過してし昔は又もかへりきなまし

○花ハチーツテシマウテモ　又春ニナレバ年々相替ラズ定マーツテ吹ク物ヂヤガ　世ノ中ガ花ノトホリニ定マツテカハラヌ物ナラバ　過シテキタ昔モ　又フタ丶ビカヘーツテクルデアラウニサ世ノ中ハ過タ昔ガフタ丶ビカヘルト云ヿハナイ

吹風にあつらへつくるものならば此一本はよきよといはまし

○吹テクル風ニ　賴ンデイヒツケラル丶物ナラ　此ノ花一ー本ハヨケテ吹テクレトイハウニ　サウ云ヿハナラヌモノナレーヤ　ドウモ散テモセウヿガナイ

まつ人もこぬものゆゑに鶯のなきつる花ををりてけるかな

○此花ヲ馳ー走ニ折テ生テオイテ　來タナラバ見セウト思ウテ　待ッ人モ來モセヌニア丶丶鶯ノオモシロウ鳴テヰタアツタラ花ノ枝ヲオレハ折タワイ　サニモナシイコトヲシタヿカナ待ツ人ガ來ヌクラヰナラ　折ラ子バヨカーツタニ

こぬものゆゑには、來もせざるにといふ意也、

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　藤原ノおきかぜ

さく花は千種ながらにあだなれどたれかは春を恨みはてたる

○ヨニ春サク花ハイロ〳〵アルガ何レノ花デモ皆アダナ物ナレド
ソレデモ誰レガ春ノ花ハアダナト云テ　トント見カギーツタ者ガ
アルゾ　アダナ物ヂヤノ〳〵トハ誰モイヒツヽ　吹ケバ又ヤーツハ
リ賞ー翫スルヂヤ　餘材、後の說はわろし、

春霞いろのちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

○霞ノ色ガイロ〳〵ニ見エルノハ　其霞ノタナビイテアル中ナ山ノ
花ノ色ガ霞ヘウツーヽタノカイノ

在原ノ元方

かすみたつ春の山べはとほけれど吹來る風は花の香ぞする

○霞ノ立ヽテアル春ノコロノ山ハ遠サ見エルケレドモ　カクベツ遠
ウモナイカシテ　吹テクル風ハ花ノニホヒガサスル　此哥の意、
諸說ともに、くはしからず、

うつろへる花を見てよめる　　みつね

花見ればこゝろさへにぞうつりける色にはいでじ人もこそしれ

○ウツロウタ花ヲ見レバ　アヽヲシヤト思ウ心ガ花ニシミコンデ
コチノ心マデガ花ノ色ニウツヽヽタワイ　此ヤウニ花ノ色ニウ
ツーヽタ心ヲトヽノ顔イロニハダスマイ　人ガ知テモシンヌ
ホドニ　人ガ知テハアマリアハーウラシイヿヂヤ　打聞よろし、

餘材わろし、

題しらず　　よみ人しらず

うぐひすのなく野べごとにきて見ればうつろふ花に風ぞふきける

○鶯ノナク野ヘ來テ見レバ　ドコノ野モ〳〵　ウツロウタ花ヲ風ガ
吹テチラスワイ　鶯ガ惜シガーツテナクノハダウリヂヤ　【千秋
云、二の句のごとにといふ詞は、下の句へかけて心得べし、來て
見ればへはかゝらざる也、】

吹風をなきてうらみよううぐひすはわれやは花に手だにふれたる

○鶯ガオレガチカクヘ來テ恨メシサウニ鳴クガ　ソチハ花ノチル
ガ惜ウテ恨ミルナラアノ吹テクル風ヲ恨ンデナケサ　オレガア
ノ花ニチーヨツトナリト手ドモフレタナラコソ　オレヲ恨ミヤーウ
ケレ　オレハ手モフレハセヌゾヨ　スレヤーコチガ知タヿデハナ
イワサテ

典侍洽子朝臣

ちる花のなくにしとまる物ならばわれ鶯におとらましやは

○散テユク花ガ惜ンデ泣ノデ　チラズニトマル物ナラ　コチモ鶯ニ
オトロウカイ　鶯ニオトラヌホド泣ウケレド　ナンボ泣テモ花ハ
ドウモトマラヌワイノ

仁和の中將のみやすん所の家に哥合せむとしけるとき
によみける

藤原ノ後蔭

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの聲

○霞ノターツテアル、ノ立田山ニ鶯ノナク聲ガスルガ　花ノチルヿ
ガツラウ思ハレテ　アノヤウニ鳴クカイ

うぐひすのなくをよめる　　そせい

こづたへばおのが羽風にちる花をたれにおほせてこゝら鳴らむ

○鶯ガアノヤウニ花ノ枝チアチラヘコチラヘコヅタヘバ　自-分ノ羽ノアチチノ風デ花ハチルモノチ　ソレチ誰レガ咎ニシテ　アノヤウニ恨メシサウニシキリニ鳴クコトヤラ　外ノ物ガチラスカナンゾノヤウニマア【千秋云、こゝらは、物の數の多きをなれば、シキリニといふ譯は、あたらざるがごくなれども、俗語にていふときは、必ズしきりになくといふ勢なるところ也、すべて此類多し、なずらへてしるべし、】

鶯の花の木にてなくをよめる　　みつね

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

○鶯ノ何ンノセンモナイ鳴キゴトカナ　今年バカリチル花デハナイイツノ年トテモツヒニ鶯ノナクノデ花ガチラズニアツタト云ヿハナイニ

題しらず　　よみ人しらず

こまなへていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ

○ダレカレサソヒアハセテ　馬チノリナラベテ打ツレテ　ドレーヤ見ニユカウゾ　此節フル京ハサゾヤ雪ノフルヤウニヒタ／＼ト花ハチルデアラウワイ

ちる花をなにかうらみむ世ノ中に我身もともにあらむ物かは

○花ノチツテユクチ何ンノ恨メシウ思ハウゾ　コチガ身トテモ　イツマデモ　此世ニカウシテアラウモノカイ　花ト同シヤーウニオーツヽケ死ンデユク物ヂヤ　花バカリチ早ウチルトテ恨ミヤーウヤウハナイ

小野ノ小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

○エヽ花ノ色ハアレモウ　ウツロウテシマウタワイナウ　一-度モ見ズニサ　ヲシハツレソフテ居ル男ニツイテ　心-苦ナ事ガアツテ　何ンノトンヂヤクモナカツタアヒダニ長雨ガフーツタリナドシテ　ツイ花ハアノヤウニマア

世にふるとは、男女のかたらひするをいふ、男女の中らひのとを、世とも世ノ中ともいへる多し、此集戀の哥にも、これかれあり、いせ物語に、世ごゝろつける、源氏物語に、まだ世をしらぬ、などあるたぐひもこれ也、

仁和の中將のみやすんどころの家に哥合せんとしける時によめる　　そせい

をしと思ふ心はいとによられなむちる花ごとにぬきてとゞめむ

○散テユク花ヲ　チシイト思フ心ハ　ドウゾ糸ニヨラル丶物ナラヨイニ　ソシタラソノチル花ヲ一ツ〳〵　其糸デツナイデ　チラヌヤウニトメテオカウニ

しがの山ごえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける
つらゆき

あづさ弓はるの山べをこえくれば道もさりあへず花ぞ散ける

○〔一〕春ノコロ山ヲ越テクレバ　ドウモ道モヨケラレヌホド　花ガチツテクルワイ　アノ女等ガサ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合のうた

春の野にわかなつまむとこし物を散かふ花に道はまどひぬ

○此春ノ野デ若菜ヲツマウト思フテ來タモノヲ　アチラヘコチラヘチリマガウ花デ　ワカナヲツム所へユク道ハマギレテフミマヨウテ　ソカモナイ所へキタワイユレーヤ

山寺にまうでたりけるによめる

ある人のいはく、此詞書なる下のには、よを寫し誤れるなるべし、

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける

○春花ノチル時分ニ山ニトマツテ寐タ夜ハ　ソノ花ヲ惜イ〳〵ト思フユヱカ　夢ノウチニモサ花ノチルヿバツカリヲ見ルワイ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥

吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや

○フキチラス風ト流レテユク谷川ノ水トガナイモノナラバ　ミ山ノオクニカクレテ咲テアル花ヲバ見ヤウモノカイ　見ラレハスマイニ　スレーヤ風ヤ川ノ水モ　花ノタメニメツタニヨルイヿバカリデモナイモノヂヤ

志賀よりかへりけるをうなどもの花山にいりて藤の花のもとに立よりてかへりけるによみておくりける
僧正遍昭

よそに見てかへらむ人にふぢの花はひまつはれよ枝はをるとも

○チーヨーツト立ヨツタバカリデ足モ留メズニ　ヨソニ見テイヌル人ニ　ハヒマツウテイナスナ藤ノ花ヨ　タトヒ枝ハ折レルトモ　ドウゾハヒマツウテトメヨ

家に藤の花さけりけるを人のたちとまりて見けるをよめる
みつね

我やどに咲るふぢなみ立かへりすぎがてにのみ人の見るらむ

○コチノ庭ニ咲テアル藤ノ花ヲアノヤウニ人ガヒーツカヘシ〳〵シテ　ドウモ見ステヽイナレヌヤウニ　ヒタスラ見ルガ　ドウ云ヿヤラ　エイ庭デモナイニ

題しらず
よみ人しらず

いまもかもさきにほふらむたちばなの小嶋のさきの山吹の花

○タチバナノ小嶋ノ崎ノ山吹ノ花ハ、ケフコノゴロカナ　見事ニサイタデアラウ

○初句もは、二つともにやすめ辞にて、今か也、今もといふにはあらず、

はるさめにゝほへる色もあかなくに香さへなつかし山ぶきの花

○此ノ山吹ノ花ワイ　春雨ニヌレテ一入マサッタ色モドウモイヘヌニ　色バカリデナシニ　香マデガ　雨ニヌレテハ別シテシホラシウニホウ

春雨、香の方へもかゝれり、物のにほひは、しめればまさる物也、

山吹はあやなゝさきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに

○山吹ハワケノタヽヌ物ヂヤ　コンナヿナラサカヌガヨイ　花ガサイタラ見ニ來ウト思フテ植テオカシヽヤーッタデアラウニ　其御方ガコヨヒミエモセヌニ　咲テモ何ンノセンモナイヿヂヤ　咲ククラキナラ　其御方ガ見ニミエルヤウニシテクレレーヤ　ソレデハ咲タカヒガアッテワケノタット云モノヂヤニ　戀の哥なり

よしの川のほとりに山ぶきの咲りけるをよめる

つらゆき

吉野河きしのやまぶき吹風に底の影さへうつろひにけり

○吉野川ノ岸ノ山吹ヲ見レバ　風ガ吹テチルガ　ソノ風デ川ノ水ガウゴクニヨーッテ、底ヘウツーヽタ影マデガチーッタワイ

題しらず　　　よみ人しらず

かはづなく井手の山吹ちりにけり花の盛にあはまし物を

○〔一〕此井手ノ山吹ガハヤモウ散テシマウタワイ　アヽ殘念ナコトチシタ　マソーット早ウ　花ノサカリノ時分ニ逢フヤウニ來テ見ヤウデアッタモノ

此哥はある人のいはくたちばなのきよともが哥なり

春のうたとてよめる　　そせい

思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寐してしが

○ソンデフソコヘイクト云テ定マッタ旅デハ　ヨソニトマルノハウイ物ヂヤガ　サウイフ定マッタ旅デハナシニ　心ノアフタドウシ春ノ山ヘツレダッテイテ　一日日ノクレルマデアソンデ　イキガヽリニトマーッテミタイモノヂヤ　ソレデハオモシロイ旅寐デアラウ　打聞、下句の意、くはしからず、

春のとく過るをよめる　　みつね

あづさ弓はるたちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな

○古哥ニ梓弓春トツヾケテヨンデアルガ　マコトニ月日ガ早ウターツテ　矢チイルヤウニ思ハル、春ニナッテカラマダナンノマモナイニ　サテモ早ウターッタヿカナ

とし月とよめるは、まとは年の暮の哥なればなるべし、春の暮の哥にては、此詞いかゞにきこゆ、

やよひに鶯のこゑ久しう聞えざりけるをよめる　つらゆき
なきとむる花しなければうぐひすもはては物うくなりぬべらなり
○ナンボ惜ンデ鳴テモ〳〵花ハミナ散テシマウテ　鳴イタデトマル花ハナケレバ　コレデハセンノナイヿヂヤト思フデ　鶯モシマヒニハ鳴キトモナウナツタデアラウ　サウアリソナヿニ思ハレルソレデ久シウナカヌヂヤマデ　餘材わろし
やよひのつごもりかたに山をこえけるに山川より花のながれけるをよめる　ふかやぶ濁
此人は、こゝに始めて出たれば、姓をあぐべき例なるに、姓なきはいかゞ、又打聞に、此名のぶを、皆ぼとせるは、ひがと也
花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり
○花ノ散テ流レル川スヂニソウテ段々ミナカミノ方ヘ尋子テキテ見レバ　山ニハモウ花ハミナチツテシマウテ　ハヤ春モナイヤウニナツタワイ
春を惜みてよめる　もとかた
をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば
○春ヲ惜ムケレド　モウシーヨセントマリハセヌ　春ハモウタツテイヌル道ヘ旅ダチタレバ　トマラヌハズヂヤ

霞は、たつの縁にいへる也、結句は、たゞたちぬればといふ意にて、思には意なし、すべて思又いふといふ詞を、そへていへる例つれに多し、思へばを春の思ふと見たる説は、わろし、
寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　おき風
聲たえずなけやうぐひす一とせに二たびとだにくべき春かは
○春ハ一年ノ内ニイク度モ來レバ重疊ノヿヂヤガ　サウハナラズ氏　セメテ二度トナリ氏來レバヨケレ氏　二度トモクル春カイ　タッタ一度ナラデハナイ春ヂヤニクレテユクハサテサテノコリオホイヿヂヤ　ウグヒスハズイブン絶ズ鳴テ恨ミヨヤイイカニモ鳴キドコロヂヤ
やよひのつごもりの日花つみよりかへりける女どもを見てよめる　みつね
とゞむべきものとはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふこゝろか
○アノ花ガアマリ惜サニ　一本〳〵チッテユク花ゴトニ　コチノ心ガツイテイクワアノ女ニ　サテモマア　アホラシイヿカナ　ツイテイタトテトメラレウ物デハナイニ　打聞みなわろし
やよひのつごもりの日雨のふりけるにふぢの花をゝりて人につかはしける　なりひらの朝臣
ぬれつゝぞしひてをりつる年のうちに春はいくかもあらじと思へば
○此藤ノ花ハドウゾソコモトヘ御目ニカケウト存ジテ　今日ノ此

雨ニヌレ〳〵サムリニ折リマシタ　四春ハマダイクカモアルデハアルマイ　三モウ當年ノ内ニハタッタケフ一日ナラデハ春ハナイトと存ズル故ニサ　諸說、下句の意を得ず、

亭子院ノ哥合に春のはての哥　　みつね

けふのみと春を思はぬときだにもたつとやすき花の陰かは

○春ナモウ今日バカリヂヤトハ思ハヌ時デサヘ　花ノ下ハ立ッテイヌルノガ何シトモナイカサア　ソレデサヘ花ノ下ハ立チサリトモナイニ　マシテケフギリノ春ヂヤモノ

こほかゞみ一の巻をはり

古今和歌集巻第三遠鏡

夏哥

題しらず　よみ人しらず

我やどの池の藤なみ咲にけり山ほとゝぎすいつかきなかむ

○コチノ庭ノ池ノ邊ナ藤ノ花ガ咲タワイ　郭公ハイツ來テナクデアラウ

此うたある人のいはくかきのもとの人まろが也

うづきにさける櫻を見てよめる　紀ノとしさだ

あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとり咲らむ

○今月ニナツテ櫻花ノアルハメヅラシイヿヂア　コレハナンデモ見ル人ガ　アヽハレ見ゴトナ　アヽハレ見事ナト云フ其詞ヲ方方ノ櫻へ分テヤルマイ　己(ワレ)ヒトリガサウ云ハレウト思フテ　ワザト春ヨリ後ニオソウヒトリ咲タデアラウカ　【千秋云、結句にさくらをかくしてよみたるなり】

題しらず　よみ人しらず

さつきまつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふる聲

○郭公ハ五月ヲ待テ鳴クヂヤガ　マダ其五月ニハナラ子ドモ　去年ノ殘リノフルコヱヲ出シテ　ドウゾ今モナケカシ　【千秋云、うちはぶきは、万葉に打羽振と書て、羽をふるを云、此譯なきは、なきがよろしきなるべし】

伊勢

五月こばたきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや

○時鳥ハ五月ニナツタナラバ　モウ澤山ニナツテメヅラシウナイデモアラウ　ドウゾマダ其時節ニナラヌウチノ聲ヲ聞タイモノヂヤ

よみびとしらず

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖のかぞする

○五月ニサク橘ノ花ノニホヒヲカゲバ　マヘカタノナジミノ人ノ袖ノ香ガサスル

いつのまにさつきぬらむあしひき(○済)の山時鳥いまぞなくなる

○イツノマニ五月ニナツヌヤラ　ヒゴロマチニ待ツタ時鳥ガ　今始ぞメテサ　ナクワアレ(なる)

けさきなきいまだ旅なるほとゝぎす花たちばなにやどはからなむ

○ケサ始メテ來テ　マダエ住(スミ)ツカズニ　旅ガケデ居テ鳴ク時鳥ヨ　定メテ宿ヲトルデアラウガ　コチノ庭ナ橘ニ宿ヲバカレカシ　ソシタラ存分ニ聞ウニ

おとは山をこえける時に時鳥のなくを聞てよめる　きのとものり

音羽山けさこえくればほとゝぎす梢はるかにいまぞなくなる

〇音羽山ヲケサ越テクレバ時鳥ガアノハルカナ梢デ　アレ(なる)今始メテッナクワ　音羽山といへるに、郭公の意はなし、

ほとゝぎすのはじめて鳴けるをきゝてよめる　　　そせい

ほとゝぎすはつこゑきけばあぢきなくぬし定まらぬ戀せらるはた

〇時鳥ノ始メテ鳴聲ヲキケバ　オモシロウハアレド又サ　何トナウカンジヤウガオコツテ　無益(ムヤク)ナ　其人ト定マーツタヿモナイ戀ヲコチガスル

すべてはたは又也、此哥なるは、三の句の頭にうつして聞べし、おもしろけれども又の意也、

ならのいそのかみ寺にて郭公のなくをよめる

いそのかみふるき都の郭公こゑばかりこそむかしなりけれ

〇此石ノ上ノアタリハ昔ノ奈良ノ都ヂヤガ　今ハモウ何モカモ昔トハ變(カハ)ツテシマウタニ　郭公ノ聲バカリガサ　カハラズニ昔ノトホリヂヤ(なりけれ)ワイ

詞書なる石ノ上寺は、山邊ノ郡石ノ上にあるを、奈良といへる事は、今の京にては、石ノ上のあたり迄をも、ひろく奈良といひならへる也、たとへば今の世に、丹波ノ國なる愛宕(アタゴ)山をも、他國にては、京の愛宕といふ類也、打聞の説ひがごと也

題しらず　　　よみ人しらず

夏山になくほとゝぎす心あらば物思ふ我に聲なきかせそ

〇アノ山デナク時鳥ヨ　心ガアルナラ　此ヤウニ物思ヒヲシテキルワシニ　キカシテクレナイ

郭公なくこゑきけば別れにし故郷さへぞ戀しかりける

〇ホトヽギスノナク聲ヲキケバ　感情ガオコツテ　ハナレテキタマヘカタノ在所ノ事マデガサ　ナツカシウ思ハレルワイ

ほとゝぎすながなく里のあまたあればなほうとまれぬおもふものから

〇時鳥ヨ　ソチハ　ナク里ガアソコニモコヽニモアマタアーツテ　コヽバカリデ鳴カヌニヨツテ　五賞翫ニ思ヒハスレドモ　四(なほ)ソレデモウト〱シウ思ハレル

おもひいづるときはの山の時鳥からくれなゐのふり出てぞなく

〇戀シイ人ヲ思ヒダシタ時ニハ　〔の山の〕〔三〕〔四〕聲ヲアゲテサワシーヤナクワイノ

四の句は、たゞふり出の序のみにて、戀ニに、紅のふり出つゝなくとあるとは、異なり、さて此哥は、もはら戀の哥なるを、こゝに入れるは、いかにぞや、

聲はして涙は見えぬほとゝぎす我衣手のひづ(濁)をからなむ

〇時鳥ハ　ナク聲ハシテ　涙ハ見エヌガ　涙ガナクバ　オレガ袖ガヒツタリトヌレテアルヲ　借シテヤラウホドニ　コレヲソチガ泣(ナク)涙ニカーツタガヨイ

(○濟)あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく

○オレハイーツシーユク泣テバツカリ居ルガ　アノ時鳥モオンナシヤーウニ間タモナシニ鳴テ　オレト誰レガ勝(カツ)ゾ　サアナキクラベチセウトテ　ヒタスラ(のみ)ナクワイ

をりはへは、時延(チリハヘ)にて、時長くつゞく事をいふ詞也、をりはへて鳴クは、時長く、あひだもなしになくと也、

今さらに山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりは我やどになけ

○山カラ出テキテモウ里ナレタ了ヂヤニ　今サラ山へハカヘルナヨ時鳥　聲ノアリタケハシマイマデ　コチノ庭デナケ

みくにのまち

やよやまて山郭公ことつてむわれ世の中にすみわびぬとよ

○山へカヘル時鳥　ヤイノウ　チーヨーツト待テタモ　コトツテチセウ　ワシハモウ世ノ中ニ住ミアグンダワイノ(とよ)　ソレデ追ッ付ケワシモ山へコモラウト思フホドニ　サウ云テタモ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

紀ノ友則

さみだれに物思ひをれば時鳥夜深く鳴ていづちゆくらむ

○五月雨ガフリツヾイテ　イヨ／＼夜ルモモヤクヤト物思ヒチシテ居レバ　時鳥ガ鳴テイクガ　夜モフケタニ　ドチヘイクヤラ　オレモ此ヤウデハドチヘナリ𪜈イキタイ

夜やくらき道やまどへる郭公我やどをしも過がてになく

○夜ルデクライニヨツテドチヘモエイカヌノカ　又ハ道ニマヨウタノカ　郭公ガ　所モ多イニ(しも)　コチノ庭デバツカリ　ドウモ過テイナレヌヤウニヂーツト鳴テキル

大江ノ千里

やどりせし花橘もかれなくになど時鳥こゑたえぬらむ

○宿カツテ居タ橘モマダカレモセヌニ　時鳥ハナゼニヨソへインデ聲モセヌヤウニナツタヤラ

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一こゑにあくるしのゝめ

○子ルカト思ヘバ　時鳥ノナイタ一聲デ　ハヤモウ明ガタニナツタサテ／＼短イ夜カナ　下句又ハ　郭公ノナイタ一聲デ目ガサメタガハヤモウ夜ガアケル

しのゝめを、打聞の如く、朝(アシタ)の目とするときは、後の譯也、餘材、しのゝめの説、わろし、　【千秋云、初句のの゜もじは、が゜の意にて、結句のあくるへつゞく詞なり、】

みふのたゞみね

くるゝかと見れば明ぬる夏のよをあかずとやなく山郭公

○日ガクレルカト思ヘバ　ハヤアケタ此夏ノ夜チ　アマリ短サニ残リオホウ思フテ　郭公ハアヽノヤウニナクカナ

紀ノ　秋　岑

夏山に戀しき人や人にけむ聲ふりたてゝなくほとゝぎす

○此山ヘ時鳥ノ戀シウ思フ人ガコモーツタカシラヌ　ソヂーヤヤラ聲ナアゲテナク　餘材わろし　打聞よろし

題しらず　よみ人しらず

こぞの夏なきふるしてし郭公それかあらぬか聲のかはらぬ

○去年ノ夏タクサンニタエズナイテ　ヨウ聞知テ居ル　時鳥ガ今又ナク　アレハ去年ナイタ其時鳥歟　サウデハナイカ　聲ガオンナシヿヂーヤガ

郭公のなくを聞てよめる　つらゆき

五月雨の空もとゞろに時鳥なにをうしとかよたゞ鳴らむ

○時鳥ガ五月雨ノ空モドンドヽ　ヨヒトヨヒタスラ鳴クガ　何事ナウイト思フテアノヤウニナクヿヤラ

さふらひにてをのこ共のさけたうべけるにめして時鳥まつ哥よめと有ければよめる　みつね

ほとゝぎす聲も聞えず山彥はほかに鳴ク音をこたへやはせぬ

○郭公ガナクカ〳〵トマテ𪜈聲モ聞エヌガ　ヨソデ鳴ク聲ナリ𪜈コヽヘヒヾイテ聞エレバヨイニ　山彥ハナゼニコヽヘヒヾカサヌゾイ

山にほとゝぎすの鳴けるをきゝてよめる　つらゆき

郭公人まつ山になくなれば我うちつけに戀まさりけり

○人ガ來モセウカト待テ居ル此松山ニ　アノヤウニ郭公ガナケバ今マデハサホドニモ思ハナンダガ　ニハカニコチモ人ナ待ツ心ガマサーツタワイ

はやくすみけるところにて　ほとゝぎすの鳴けるを聞てよめる　たゞみね

むかしへや今も戀しき郭公ふるさとにしも鳴てきつらむ

○時鳥ヨ　ソチモオレト同シヤーウニ　昔ガ今デモ戀シイカ　所モ多イニ此本トノ在ー所ヘ鳴テ來タノハ昔ガ戀シイヤラ【千秋云、今もは、なれもとあらまほしくおぼゆ、】

時鳥の鳴けるをきゝてよめる　みつね

ほとゝぎすわれとはなしにうの花のうきよの中になき渡るらむ

○世ノ中チウイ物ニ思フテ泣テクラスモノハオレヂーヤガ　時鳥ヽオレデハナシニ、ドウイフヿデ世ノ中ガウイト云テ　卯ノ花ノアタリヘキテ　アノヤウニオレト同シヤウニ鳴テクラスコトヤラ

はちすの露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

○蓮ハ世ノ中ノ濁リニソマヌ譬ヘニ御經ニトイテアルガ　サウ云フ清浄ナ心デ　ナゼニアノヤウニ葉ノ露ヲ玉ト見セテ　人ヲバダマスコトヂイ

月のおもしろかりけるよあかつきがたによめる

ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらむ

○アヽヨイ月デアツタニ　夏ノ夜ノ短イヿハ　マダヨヒノマヽデフケル間モナシニハヤ明タモノ　コノ夜ノ短サデハ月ハ西ノ方ノ山マデイキツク間ハアルマイガアノ曉ノ雲ノドコラニ　トマーツタヿヤラ

となりよりとこなつの花をこひにおこせたりければをしみて此哥をよみてつかはしける

みつね

ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹とわがぬる床なつの花

○手前ノトコナツハ　カヽトワシガ二人寐マス床ナツテ　大事ノデゴザル　花ガサイテカラハ　塵サヘカケマイトサ存ズルホド大事ノデゴザル　折テハエシンジマスマイ　【千秋云、此哥上ノ句、三一二と句を次第して見べし。】

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空の通ひぢはかたへすゞしき風やふくらむ

○今晩クレテユク夏ト來ル秋ト　イキチガウ空ノ通リ道ハ　ソノ夏ノ通ツテユク片一方ハマダ暑ウテ　秋ノトホツテクル片一方ハスヾシイ風ガフクデアラウカイ

古今和歌集巻第四遠鏡

秋哥上

秋たつ日よめる　　藤原ノ敏行ノ朝臣

あきゝぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

○秋ガキタトイフテ　ソレトハーツキリト目ニハ見エヌケレド　ケフハ風ノ音ガニハカニカハーツタデサ　コレハ秋ガキタワトビーツクリシタ

秋たつ日うへのをのこどもかもの川原に川せうえうしける　ともにまかりてよめる　　つらゆき

河風のすゞしくもあるかうちよする浪とゝもにや秋は立らむ

○川風ガサテモマア涼シイコトカナ　浪モ立ット云也秋ノ来ルノモ立ットイヘバ　此岸ヘウチヨセル浪トイーツシーヨニ秋ガターツタカシラヌ

題しらず　　よみびとしらず

わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風

○〔上〕コレハ〳〵メヅラシイ秋風ヂヤ　サテモ涼シイコヽロヨイ　餘材に、わがせこは、女をさせりといへるは、いみしきひがこと也、これは女の哥なるべし、又哥林良材集に引れたるには、わぎもこがと有り、新古今集有家卿、「さらでだに恨みむと思ふわぎもこが衣のすそに秋風ぞふく、これらによれば、わぎもことある本も有しなるべし、

きのふこそさなへとりしか○濟いつのまにいなばそよぎて秋風のふく

○マダ昨日コソハ田チウヱタレ　ソレニマア　イツノマニ此ヤウニ稲ノ葉ガソヨ〳〵トシテ秋風ノフクヤウニハナーツタコゾ

秋風の吹にし日よりひさ○濟かたの天の川原にたゝぬ日はなし

○ワシハ秋風ノフキソメタ日カラシテ　毎日〳〵此ヤウニ此ノ天ノ川ノ川原ヘ出テ立テ君チマタヌ日ハ一日モナイ　【千秋云、此哥などは、たなばたつめになりてよめる也、七夕の哥此類多し、】

ひさかたの天のかはらのわたし守君渡りなばかぢかくしてよ

○天ノ川ノ渡シ守ヨ　君ガコチラヘ御渡リナサーツタナラ　ヂキニ其船ノ棹チシレヌヤウニカクシテオイテクレイ　ソシタラ　川渡ッテ御カヘリナサルヿガナルマイニヨッテ　イツマデモコチニ御逗留デアラウニ

天川もみぢを橋にわたせばやたなばたつ○濟めの秋をしもまつ

○天ノ川ノ橋ニ紅葉チ渡スユヱカシテ　時節モ多イニ（五しも）　棚機様ガ秋チ御待ナサル

こひ〳〵てあふよはこよひあまの川霧立わたりあけずもあらなむ

○一年ノアヒダ長、月日チ戀々テ　ターツタ一度彦星ト棚機ト御逢ナサル夜ハコヨヒヂヤ　ドウゾ天ノ川ヘ霧ガ一メンニ立テ

闇ウナッテイツマデモ夜ガアケ子バヨイ

寛平ノ御時なぬかのようへにさふらふをのこども哥奉れと仰せられける時人にかはりてよめる　と　も　の　り

あまのがは淺瀨しらなみたどりつゝ渡りはてねばあけぞしにける

○此天ノ川ノ淺瀨ノ所ヲシラヌ故ニ　オボツカナウテ　水ノナカヲアチヤコチヤトシテヒマドッテ　マダ渡ッテシマイモセヌウチニサハヤ夜ガアケタワイ　【千秋云、四の句ねばは、ぬにの意なり、】

同御時きさいの宮の哥合の哥　藤　原　お　き　か　ぜ

契りけむ心ぞつらきたなばたの年に一たびあふはあふかは

○一年ニターツタ一度ヅヽト約束シテオイタ棚機ノ心ガサキコエヌ　一年ニターツタ一度グラキ　アウノガアウノカ　ソレーヤアウト云モノデハナイ

七日の日の夜よめる　凡　河　内ノ　躬　恒

年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよの數ぞすくなかりける

○棚機ハ毎ー年逢ツシーヤリハスレド　一年ニターツタ一度ヅヽナレバ　逢ツシーヤル夜ノ數ハサスクナイコトヂヤワイ

たなばたにかしつる糸のうちはへて年のを長くこひや渡らむ

○タナバタ祭リニコヨヒ手向テオ借シ申シタ糸ノヤウニ長ウ引ノビテ　コレカラモ年久シウ此ヤウニ戀シウ思ッテ月日ヲタテルコトデアラウカ　是は七夕によめるおのが戀の哥也

題しらず　そ　せ　い

こよひこむ人にはあはじたなばたの久しき程にまちもこそすれ

○今夜クル人ニハアウマイ　今夜ハ七ー夕ヂヤニヨッテ　棚機ノ久シイ一年ノ間タチ待ッノニアヤカーッテ　コチモ久シウ待ッヤウナ中ニナルコトモアラウホドニ

なぬかのよの曉によめる　源ノむねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天の川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

○サアモウト云テ　別レルトキニハ　マダ天ノ川ヲ渡リモセヌサキニ此ヤウニ袖ガヒツタリト淚デヌレタ

やうかの日よめる　み　ふ　の　た　ゞ　み　ね

けふよりは今こむとしの昨日をぞいつしかとのみ待渡るべき

○タナバタ樣ハサゾ　今日カラシテハ　又今カラ來ー年ノ七月七日昨日ヲサ　イツカ〳〵トヒタスラ待テ　月日ヲタテサーツシーヤルデアラウト思ハレル

題しらず　よ　み　人　し　ら　ず

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり

○木ノ枝ノ間タカラモーツテクル月ノ影ヲ見レバ　廣ウ見ルトハチガウテ　スコシヅヽホカ見エ子バ　サテ〳〵シンキナ物ヂヤ　是ヲ見レバ　今カラ惣躰モノゴトシンキナ秋ガキタワイ

大かたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひしりぬれ

○世間一同ノ秋ガキタカラシテ　人ハ此ヤウニハナイサウナニ　オレヒトリガサ　秋ハカナシイ物ヂヤト思ヒシーツタ　秋ハオレ獨ノ秋デハナイ世間一同ノ秋ヂヤニ

わがためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけばまづぞ悲しき

○オレニ悲シウ思ハサウタメニ來ル秋デモナイニ　虫ノ聲チ　キケバ　人ヨリサキヘ　マヅ一番ガケニサオレハカナシイ

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひゆくをかぎりと思へば

○草木ノダン〳〵色ガカハーツテ散テイクノハ　草木ノシマイニナルノヂヤガ　オーツ、ケサーウ物ノシマイニナル時節ノハジメヂヤト思ヘバ　惣躰ノ物ナニ、ツケテモ　秋ハサ悲シイ　打聞よろし　餘材わろし

ひとりぬるとこは草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

○草ノ葉コソ秋ハ露デヌレルモノナレ　ワシガヒトリ子ル床ハ　草ノ葉デハナケレドモ　秋ニナレバ夜ルハ此ヤウニ涙デ露ノヤウニヌレルワイ

　これさだのみこの家の哥合のうた

いつはとは時はわかれど秋の夜ぞもの思ふとのかぎりなりける

○イツハ物思ハヌ時ヂヤト云フ時節ノ差別ハナシニ　イツデモ物思ヒハアルケレド　ソノウチニモ秋ノ夜ガサ　イーツチ　物思ヒスル頂上ヂヤワイ

かむなりのつぼに人々あつまりて秋の夜をしむ哥よみけるついでによめる　　　　みつね

つぼは、御坪(ツボ)の内にて、梅壺藤壺などいふは、その御坪の内にある木草をもて、そこの舍の異名にしたる物也、かむなりのつぼも、雷の落たる事有しより、異名になれる也、壺ノ字は、宮中衖謂ニ之壺一とある是也、器の壺とは別なり、まがふるとなかれ、

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき

○コレホドニ面白イアーツタラ秋ノ月夜チ　寐(ネ)テシマーウテムザムザト明(アカ)ス人モアラウガサウシタ人マデガサ　キコエヌコヂヤト思ハレル　餘材、いたづらの説わろし、いたづらにねては、ねていたづらにと心得べし、

　題しらず　　　　よみびとしらず

白雲にはねうちかはしとぶ鴈の數さへ見ゆる秋のよの月

○サテモサヤカナ月カナ　雲ヘトヾクホド高イソラチツレダツテトンデユク雁ノ數マデガヨウ見エル　【下秋云、はねうちかはしは、いくつもつらなりて、鴈と鴈と、羽をならべかはして、飛渡るをいへり、白雲と打かはすにはあらず、】

さよ中と夜はふけぬらし鴈がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ

○夜ハイカウフケタモウトント夜半(ヨナカ)ニナツタサウナ　見レバ鴈ノ

ナク聲ノ聞エルズツトソラノ方ヘ　モーウ月ガマハーツタ

是貞ノみこの家の哥合によめる　大　江ノ　千　里

月見ればちゞにものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

○月ヲ見レバオレハイロ〳〵ト物ガサ悲シイソイ　オレヒトリノ秋デハナケレド

たゞみね

ひさかたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ

○月ノ中ナ桂ハ此國土ノ木ノヤウニ秋ヂヤト云テモ　紅葉スルナド云コハアリソモナイモノヂヤニ　ソレモヤーツハリ　秋ハ紅葉スルカシテ　イツモヨリハ光リガテリマサーツタ　紅葉シタニヨツテ此ヤウニ照リマサルデアラウ　打聞わろし

月をよめる　在　原ノ　元　方

秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

○此ヤウニ月ノ光リノアカイ秋ノ夜ハ　ナンボ闇イクラブ山デモ越ラレウト思ハレル

人のもとにまかりける夜きり〴〵すのなきけるをきゝてよめる　ふぢはらのたゞふさ

きり〳〵すいたくなゝきそ秋のよの長き思ひは我ぞまされる

○コレ御亭主貴様ハ　心苦ガオホウテイロ〳〵ノ事ヲ思フテ夜ノ長イヲ明シカ子ルトイハシーヤルガ　御亭主アノキリ〴〵スト同シヤーウニアマリ泣カシーヤルナイ　心苦ガ多ウテ秋ノ夜ノ長イノガメイワクナコハ　貴様ヨリ拙者ハサナホノコトヂヤソイ

餘材打聞ともにわろし

是貞ノみこの家の哥合の哥　としゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらずなく虫はわがごと物やかなしかるらむ

○此長イ秋ノ夜ノアケルモシラズニアノヤウニナク虫ハ　オレガヤウニアレモ物ガ悲シイカシラヌ

題しらず　よみ人しらず

秋萩も色づきぬればきり〴〵すわがねぬごとやよるはかなしき

○萩ノ葉モ色ヅイテソロ〳〵枯カケテクル時節ニナーツタレバ　物ガナシウテ夜ルモ子ラレヌニ　アノ蛬モ同シヤーウニ夜ルハ鳴クハソチモオレガヤウニ物ガカナシイカ

秋の夜は露こそことに寒からし草むらごとにむしのわぶれば

○草ムラゴトニ　アノヤウニ虫ガ難義ガーツテ鳴クノヲキケバ秋ノ夜ハ露ガサカクベツニ寒イサウナ

君しのぶ草にやつるゝふるさとはまつ虫の音ぞかなしかりける

○人ガ見ステヽヨリツカイデ　ドコモカモキツウアレテ　軒ナドヘハシノブガハエテ見苦シウナツテ　其人ヲ戀ヒシタフテ居ル家デハ　庭デナク松虫ノ聲ガサ　人ヲ待ツト云名ユヱカ一入カナシウ聞エルワイ　打聞やつるゝの注わろし

秋の野に道もまどひぬまつ虫の聲する方にやどやからまし
○此秋ノ野デ　モウ日モクレニ及ブ　道モフミマヨウタホドニ　アノ人ヲ待ット云名ノ松虫ノ聲ノスル方ヘイテ　宿ヲカーツタモノデアラウカイ

あきの野に人まつむしのこゑすなり我かと行ていざとふらはむ
○此秋ノ野ニ　アレ人ヲマツト云名ノ松虫ノコヱガスルワ　ソチーヤオレヲマツノカト云テ　ドレーヤ行テオミマヒ申サウ

もみぢ葉の散てつもれるわがやどに誰をまつ虫こゝら鳴らむ
○モミヂガ散テツモーツテ　誰モフミ分テ來タ人モナイコチノ庭デタレヲ待ットテアノヤウニ松虫ハシキリニ鳴クコトヤラ　タレモ來ル人ハアルマイニ

打聞よろし餘材わろし

ひぐらしのなきつるなべに日は暮ぬと思ふは山の陰にぞ有ける
○ヒグラシガ鳴イタニツレテ(なべに)　日ハクレタト思フタハサウデハナカーツタ　山ノカゲデサ闇(クラ)イノデアツタワイ　【千秋云なべには、並(ナベ)にゝて、これとかれとならぶときにいふ言也、つねに云々幷ニ云と
いふも、これにちかし、】

日ぐらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし
○ヒグラシノナク此山里ハ　ユフグレニハ風ヨリ外ニハ一向ニ尋子テクル人モナイ　アヽサビシイコトヂヤ

はつかりをよめる　　在　原　元　方

まつ人にあらぬ物からはつ鴈のけさなく聲のめづらしき哉
○待ッ人ガキタカナンゾノヤウニ　ケサ始メテ鴈ノ鳴ク聲ガサテモメヅラシウ思ハレルコトカナ　コチガ待テ居ル人デハナイヂヤケレド

是貞ノみこの家の哥合のうた　　と　も　の　り

秋風にはつ鴈がねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらむ
○秋風ノ吹ク空ニアレ始メテ鴈ノ聲ガサスル　鴈ハ遠ー方カラノ狀ヲクビヘ掛テ持テ來ルト云ヿヂヤガ　アノ鳴鴈ハ　ドコカラ　タガ狀ヲカケテキタヿヂヤヤラ

題しらず　　よ　み　人　し　ら　ず

わがやどにいなおほせ鳥のなくなべにけさふく風に鴈はきにけり
○コチノカドデ　稻負鳥ガナクニツレテ　ケサノ風ニ雁ガキタワイ

いとはやもなきぬる鴈かしら露の色どる木々ももみぢあへなくに
○キツウ早ウマア雁ハナイタヿカナ　露ノ色ドル木共モマダロクニ紅葉モセヌウチニ

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧のうへに
○春　霞ノ中ヘカスミニ見エテインダ鴈ガソノ時ノ霞ト同ジヤーウナ秋ノ霧ノウヘノ方デ　アレ今サ又ナクワ

夜を寒みころもかりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり
○夜ガ寒サニ衣ヲカルト云名ノ鴈ノ鳴クニツレテ　萩ノ下葉モウツ

ロウタワイ

此哥はある人のいはくかきのもとの人まろが也と

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　藤原ノ菅根ノ朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船はあまのと渡る鴈にぞ有ける

○アレ〳〵アノ青イ海ノヤウナソラヲ秋風ニ聲ヲ高ウ帆ノヤウニアゲテ　船ノヤウニ見エテ來ルモノハ　鳴テワタル鴈ヂヤワイ

かりの鳴けるを聞てよめる　み　つ　ね

うきことを思ひつらねて鴈がねのなきこそ渡れ秋のよな〳〵

○鴈ノイクツモツラナツテ鳴テワタルヤウニ　オレハ秋ノ夜ノウイ事ノ数々ヲオモヒツヾケテ　毎夜〳〵泣テサアカスワイ

是貞ノみこの家の哥合の哥　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれしかの鳴音にめをさましつゝ

○山里ハイツデモト云フウチニ　秋ガサ別シテツラウナンギニ思ハレルワイ　ヨル〳〵鹿ノナク聲デ目ヲサマシテハ　夜ハ長シ何ヤラカヤラト難義ナ事ヲ思ヒツヾケラレテサ

よみびとしらず

おく山にもみぢふみわけ鳴鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき

○秋ハ惣躰カナシイ時節ヂヤガ　其秋ノ内デハ又ドウイフ時ガイーツチ悲シイゾトイヘバ　紅葉モモウ散テシマウタ奥山デ　ソノチーツタ紅葉ヲ　鹿ガフミワケテアルイテ鳴ク聲ヲキク時分ガサ秋ノウチデハイーツチ悲シイ時節ヂヤ　ふみわけは鹿のふみ分る也

題しらず

秋萩にうらびれをれば足引の山したとよみ鹿のなくらむ

○萩ノ葉モ段々枯テイクヲ見テ　時節ノ物ガナシサニ　此ヤウニウナジヲナゲテ居ルノニ　ドウ云フ事デアノヤウニ　山ノ下マデヒヾクホド　鹿ガ鳴クコトヤラ　アノ鹿ノ聲ヲキケバイヨ〳〵悲シウテドウモタヘラレヌニ　をればゝ、をるにの意也、

秋萩をしがらみふせてなく鹿のめには見えずておとのさやけさ

○野ノ萩ノ中ヲフミアラシテオシフセテシガラミニシテ　鳴テアルク鹿ノ目ニハ見エイデ　アノマア聲ノサヤカニヨウ聞エル事ワイ　【千秋云、古へは鹿などの鳴こゑをも、おとゝもいへり、万葉に、鶯のおとなどもよめり、】

是貞ノみこの家の哥合によめる

ふぢはらのとしゆきの朝臣

あきはぎの花咲にけり高砂のをのへの鹿はいまやなくらむ

○アレ萩ノ花ガサイタワイ　山ノ鹿ガモウナクデアラウカ

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひて物がたりしけるついでによめる　み　つ　ね

秋萩のふるえにさける花見ればもとの心はわすれざりけり

○萩ノ去年ノ古枝ハ　アレアノトホリ又花ノサイタチ見レバ　草木デモ　マヘカタノ事チバ忘レハシマセヌワイ　スレーヤソコモトモ　中-絶ハ致シタケレド　先-年御コンイニ致シタコハ　オワスレハナサルマイ

題しらず　よみ人しらず

秋はぎの下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

○萩ノ下葉ガソロ〳〵枯カケテキタ　ア、段々ト夜ハ長ウナラウシモウコレカラ又　オレガヤウナ獨ズミノ者ハ子ラレヌデアラウカイ　【千秋云、此哥、二の句にてきれたり、】

鳴わたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩の上の露

○アレハテ、悲シイコチノ庭ノアノ萩ノウヘ、露ガキツウシゲウオイタガ　ソラチワタル雁モ　オレガヤウニカナシイコガアルカシテ　泣テイク　スレーヤアノ雁ノナク涙ガオチタノカシラヌアノ萩ノ露ハ

萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

○萩ノ露ガキラ〳〵トシテアマリ見事サニ　玉ニシテツナガウト思フテトーツタレバ　ヂキニ消タ　エイワ　ソンナラ　見ヤーウト思フ人ハ　トラズニヤハリ　枝ニアルマヽデ見ヨサ

ある人のいはく此哥はならのみかどの御うたなりと

をりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露

○萩ノ花ノエダモヒワ〳〵トタワムホドオイタアノ露ガキツウ見事ナガ　アレナ折テ取テ見ヤーウトシタナラ　サダメテ落テシマウデサアラウ

はぎが花ちるらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさよはふくとも

○今夜妹ガトコロヘイカウト思フ野道ハ　萩ノ花ガ散テサゾ露モフカイデアラウガ　ヨイワヌレテイカウゾ　夜ガフケテ　露ハシゲクトモ　露霜といふは、たゞ露のと也、万葉に多し、　皆然り、【千秋云、ぬれてをのをは、助辞ながら、其事をつよくいへるとば也、】

是貞ノみこの家の哥合によめる　文屋ノあさやす

秋の野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すぢ

○秋ノ野ノ露ハ　玉ヂヤカシテ　蛛ノ糸スヂヘツナイデカケタ

題しらず　僧正遍昭

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

○女郎花ト云名ガヨサニ　チーヨーツト馬カラオリテ見タバカリヂーヤゾ　カナラズオレガ女ニオチタト人ニ云デハナイゾヨ　【千秋云、そのかみ然るべきほどの法師は、つねに馬にのりてありきたりし也、物に多く見えたり、】　おれるとは、馬よりおりたるをいふ、をみなへしを折れるにはあらず、打聞わろし、

僧正遍昭がもとにならへまかりける時に　をとこ山にてをみ

なへしを見てよめる　　ふるのいまみち

をみなへしうしと見つゝぞ行過るをとこ山にしたてりと思へば

○アノ女郎花ヲバアヽイタヅラナ女ヂヤト思フテ　オレハヨソニ見テサ通リ過テイク　コヽハ男山ナレバ男ノ中ニマジーツテ居ル女ヂヤト思フニヨツテサ

是貞ノみこの家の哥合のうた　　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすへし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

○トマルナラ秋ノ野ニトマルガヨイ　女郎花ガアツテ女ト云名ガムツマシサニ　ヨソデ寐ルヤウデハナイワサテ　二の句のはもじ心をつくべし、餘材打聞ともに、ときえず、わろし、【千秋云、必遠き所にはあらでも、常の家をはなれて、他所にて寐るを、旅ねといふと、つねなり、】

題しらず　　をのゝよしき

をみなへしおほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ

○女郎花ノオホクアル野ニトマーツタナラ　ワケノナイヿニアダナ名ガターーウカシラヌ　女郎ト云ハ名バカリデコソアレ　ホンノ女デモナイニ

朱雀院のをみなへしあはせによみて奉りける　　左のおほいまうちぎみ

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

○チミナメシガ　秋ノ野ノ風ニナビクガ　タレニ心チヨセテアノヤウニナビクヤラ　心ひとつといふは、たゞ心といふと也、

藤原ノ定方ノ朝臣

秋ならであふことかたき女郎花あまの川原におひぬものゆゑ

○天ノ川コソタナバタノ秋デナウテハアハヌ所ナレ　アノ女郎花ハ　天ノ川ノカハラニハエテアルデモナイニ　秋デナウテハアフヿガナリガタイ女ヂヤ

つらゆき

たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ

○誰ガ飽タトイフ秋デモナイニ　女郎花ハ　ドウシタヿゾ　アノヤウニ色ニデテ恨ンデ　マダ早イニウツロウノハ

みつね

妻こふる鹿ぞ鳴なるをみなへしおのがすむ野の花としらずや

○アレ妻チコヒシタウ鹿ガサ　アレナクワ　鈍ナヤツヂヤ　女郎花チ己ガカヨウ野ノ花ヂヤトハ知ラヌカイ　女郎花トイヘバ女ヂヤニ　ナゼアハヌゾイ

をみなへし吹過てくる秋風はめには見えねど香こそしるけれ

○女郎花ヲ吹テトホツテクル風ハ　目ニハソレト見エヌケレド　テウド女ニ逢テキタ男ノ　ウツリガノスルヤウデ　女郎花チ吹テキタト云ヿガ　香デサ　ヨウシレルワイ

たゞみね

人の見るとやくるしきをみなへし秋霧にのみたちかくるらむ

○女郎花ハ女ノ人ヲハヅカシガツテカクレルヤウニ　霧ニカクレテバツカリアルガ　ドウ云コデアノヤウニ霧ニカクレルヤラアレモ人ノ見ルノガメイワクナカイ

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見ましを

○女郎花ヨ　此野原ニ此ヤウニ露ニシヂレテ　ヒトリシホ〳〵トシテバツカリ居ヤウヨリハ　オレガヤドヘウツシテ植テ　見ハヤシテヤラウモノヲ　餘材にしたがふべし打聞わろし　【千秋云、ひとりとは、一もとにてあるよしにはあらず、女の男にそはずして、ひとりあるよしにいへる也、】

ものへまかりけるに人の家にをみなへしうゑたりけるを見てよめる

兼覽ノ王

女郎花うしろめたくも見ゆる哉あれたるやどにひとりたてれば

○アノ女郎花ハ　此アレタヤドニ　見レバ人モツカズニ　タッタ一人居レバ　サテモマアキヅカイナ物カナ

寛平ノ御時藏人所のをのこどもさが野に花見むとてまかりたりける時かへるとてみなうたよみけるついでによめる

平ノさだふむ

花にあかで何かへるらむをみなへしおほかる野べにねなまし物を

○見事ナ色々ノ花ヲ　ハライーツハイエ見ズニ　ナゼニ此ヤウニカヘルコヤラ　女郎花ノ多クアル野デ　コヨヒハネヤーウデアーツタモノヲ　女ト云名ナレバヨイトマリ所ヂヤニ

是貞ノみこの家の哥合によめる　としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけし藤ばかまくる秋ごとに野べをにほはす

○此フヂバカマハ　マヘカタ何人ノ着テヌギカケテオイタ袴ゾ　毎年〳〵秋ニナレバ此野ヘンナニホハス　今ニ此ヤウニニホウハナンデモコレハナミタイテイノ人ノ袴デハアルマイ　ヨク〳〵レキ〳〵ノ人ノ袴デ　香ガヨウシメテアルユヱデアラウ

藤袴をよみて人に遣しける　つらゆき

やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられがたき香にゝほひつゝ

○此藤袴ハ　イツゾヤ此方デオトマリナサレタ貴樣ノ形見ニオイテ御歸リナサーツタ袴デゴザルカ　今ニワスレガタイ香ガニホフテサ　貴樣ノ事ヲオナツカシウ存ズル

ふぢばかまをよめる　そせい

ぬしゝらぬかこそにほへれ秋の野にたがぬぎかけしふぢばかまぞも

○此フヂバカマハ　此秋ノ野ヘ　タレガヌイデ掛テオイタ袴ゾマア主ノシレヌ香ガサ　ニホウテアル

題しらず　平ノ貞文

今よりはうゑてだに見じ花すゝきほに出る秋はわびしかりけり

○スヽキハドコニモタクサンニアル物ヂヤガ　ソレーヤドウモセウコトガナイヂヤガ　今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセウゾ　アノヤウニ薄ノ穂ガデ、秋ノケシキガ見エレバ　キツウ物ガナシウテナンギナワイ　だには、なりとものの意也、餘材、だにの意、なほとき得ず、

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　在原のむねやな

秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖と見ゆらむ

○スヽキノホノ風デナビクノハ　テウド人ガ色ニデ、戀シイ人ヲマネク袖ノヤウニ見エルガ　スヽキノ穂ハ　秋ノ野ノ惣躰ノ草ノ袖カシラヌ　此哥にて袂と袖とは、たゞ詞をかへたるのみにて、同じ意也、【千秋云、かやうに留りたるらんの格、此譯にて心得べし、】

素性法師

われのみやあはれと思はむきりぎりすなく夕かげのやまとなでしこ

○キリギリスガ鳴テオモシロイユフカゲニ見事ニ咲テアルアノ撫子ト云兒ヲ　母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモぐニテウアイスルヤウニ　タレニモカレニモ見セテ賞翫サセタイモノヂヤニタッタ一人ノ手デソダテル兒ノヤウニ　オレバーツカリガア、ヨイ兒ヤト云ニ獨リ見ハヤサウヿカヤ　アツタラ此花ヲ　餘材後の説ちかし打聞わろし

題しらず　よみ人しらず

みどりなるひとつ草ぞと春は見し秋は色々の花にぞ有ける

○春見タ時ニハ　タヾ皆同シ青イ一ツノ草ヂヤトバツカリ思フタガサウデハナイ　秋ニナツテ今見レバ　コレ此ヤウニイロイロノサ見事ナ花ヂヤワイ

もゝくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとがめそ

○ソウタイ花ノ開クヲ紐トクト云ヂヤガ　此ヤウニイロイロサマザマノ草ノ花ノ帶紐トイテミダレテアル面白イ秋ノ野デ　ドレーヤコチモアノ花ヲ賞翫シテ　トモぐニミダレテ　アハーウチツクサウ　人ガ見タナラ　アレハマア何事ヂヤトフシンニ思ウデアラウガ　ユルセぐ

月草にころもはすらむ朝露にぬれてのゝちはうつろひぬとも

○キルモノヲバ　月草ノ花デスラウ　エイ色ナ物ヂヤ　シタガ外ヘ色ノウツリヤスイ物ヂヤニヨツテ　朝ノ露ニヌレタラ　色ガ外ノ物ヘウツー、テシマハウモシレヌガ　エイワサ　後ニハウツー、タト云テモ

仁和のみかどみこにおはしましける時ふるのたき御覽ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家にやどり給へりける時に庭を秋のゝにつくりておほむ物がたりのついでによみて奉りける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる

○此ヤドノ義ハ　里ハアレマシタ里也　住デヰリマスル者ハ老ー人也　致シマスレバ諸事不都合ナ宿ユヱカ致シマシテ　庭モ籬モ御覧下サレマストホリ　トントハヤ秋ノ野原デゴザリマス　上ノ句の二ッのはもじ、心をつくべし、

古今和歌集巻第五遠鏡

秋歌　下

是貞ノみこの家の哥合の哥　　文屋ノ康秀

吹からに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

○フクトソノマヽ　秋ノ草ヤ木ガアノヤウニシヲレヽバ　尤ナコトヂヤ　ソレデ山ノ風ヲアラシトハ云デアラウ　【千秋云、あらしといふ名は、此哥のごとく、物をあらす意にて、令レ荒か、又あらき風といふことか、風をしといふ也、】

草も木も色かはれどもわたつ海の浪の花にぞ秋なかりける

○草デモ木デモ　此秋ト云時節ガアッテ　皆色ガカハッテ枯テシマウケレドモ　アノ海ノ浪ノ花バッカリガ　イツデモ同シヤーウニ咲テ　秋ト云ヿガナイワイ

秋の哥合しける時によめる　　きのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風の音にや秋をきゝわたるらむ

○秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云ヿモナウテ常ー住同シヿヂヤト云常磐山デハ　時節ガイツヂヤカシレマイガ　秋ヂヤト云ヿハ風ノ吹ク音バッカリデヨソニ聞テタテルデアラウカ

題しらず　　よみ人しらず

霧たちて鴈ぞなくなるかた岡のあしたの原はもみぢしぬらむ

○霧ガ立テアレ鴈ガサナクワ　コレデハモウ片岡ノ朝ノ原ハ紅葉シタデアラウ

かみな月しぐれもいまだふりなくにかねてうつろふ神なびのもり

○木ノ葉ヲソメル十月ノ時雨モマダフラヌノニ　神ナヒノ杜ハヽヤカネテ　チーヤント色ガ染マツタ

ちはやぶる神なび山のもみぢ葉に思ひはかけじうつろふものを

○心ノカハリヤスイ人ニ思ヒヲカケルハアハーウナヿヂヤガ　此神ナミ山ノ紅葉モ　ソンナモノヂヤ　思ヒハカケマイゾ　ホドナウチツテシマウモノヲ

貞觀ノ御時綾綺殿のまへに梅の木有けりにしのかたにさせりける枝のもみぢはじめたりけるをうへにさふらふをのこどものよみけるついでによめる　　藤原ノかちおむ

同じえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

○同シ一本ノ木ノ枝ヂヤニ　西ノ方ヘサシタ枝ガ　トリ分テアノヤウニ色ノカハツタヲ見レバ　ナルホド西ガサ　秋ノハジメヂヤワイノ

いし山にまうでける時おとは山の紅葉を見てよめる　　つらゆき

秋風の吹にし日よりおとは山みねの梢も色づきにけり

○秋ノタチソメタ日カラシテ風ノ音モカハツテキタガ　今日見レバ此山ノ木共モソロソロ色ガツイテキタワイ　【千秋云、此譯にて、上句を心得べし、梢もといへるにて、風の音もかはりたる意を、思はせたるものなり、】

是貞ノみこの家の哥合によめる　　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちゞにそむらむ

○露ノ色ハ皆同シ一ツノ白イ色ヂヤニ　ドウシテ秋ノ木ノ葉ヲアノヤウニイロイロノ色ニソメルヿヤラ　【千秋云、ひとつをのをは、ものをの意にて、ひとつなるものをといへるなり、】

壬生ノ忠岑

秋の夜の露をば露とおきながら鴈の涙や野べをそむらむ

○秋ノ夜ノ露ヲバ白イ露デソノマヽデオイテ　別(ベツ)ニ鴈ノナク涙デアノ野ノ草木ヲバソメルカシラヌ

題しらず　　よみびとしらず

秋の露いろいろことにおけばこそ山のこのはの千種なるらめ

○秋ノ露ハタヾ白イ物ヂヤトバカリ思フテ居ルガ　サウデハナイサウナ　色々チガウテオクサウナ　ソレデコソ染(ソマ)ツタ山ノ木ノ葉ガアノヤウニサマざまノ色デアラウ

もる山のほとりにてよめる　　つらゆき

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

○露モ時雨モキツウモル　此守ル山ノ木共ハ　下葉マデノコラズ色ヅ

イタワイ

秋のうたとてよめる　　ありはらのもとかた

雨ふれど露ももらじをかさどりの山はいかでかもみぢそめけむ

○カサドリ山ハ傘(カサ)チモツト云名ナレバ　雨ガフツテモ　露ホドモモリハスマイニドウシテアノヤウニ紅葉シソメタコトヤラ

神のやしろのあたりをまかりける時に　いがきのうちの紅葉を見てよめる　　つらゆき

ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

○コレハマア神社ノイカキニハウテアル葛ナレバ　神ノ御守リデ色ハカハリソモナイモノナレド　ソレデモ秋ニハエコタヘズニ色ガカハツタワイ

是貞ノみこの家の哥合によめる　　たゞみね

雨ふればかさどり山のもみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞてる

○[一]笠取山ノ紅葉ハ　コトノ外ヨウ染テ　往來ノ人ノ袖マデサ色ガカヾヤイテテリマス

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　よみ人しらず

ちらねどもかねてぞをしきもみぢ葉は今はかぎりの色と見つれば

○此紅葉ヲ見レバ　マダチリハセネド　チラヌサキカラサ惜イ　今ハモウ十分ニソメタレバオツヽケチルデアラウト思ヘバサ

やまとの國にまかりける時さほ山に霧のたてりけるを見てよめる　　きのとものり

たがためのにしきなればか秋霧のさほの山べを立かくすらむ

○此サホ山ノ紅葉ハ　タガタメニドノヤウニ大切ニスル錦デ　アノヤウニ霧ガカクシテ人ニモ見セヌヿヤラ　セツカク紅葉ヲ見ヤウト思フテキタニ

是貞ノみこの家の哥合の哥　よみ人しらず

秋ぎりはけさはなたちそ佐保山のはゝその紅葉よそにても見む

○霧ハドウゾケサハ立テクレルナイ　アノサホ山ノ柞ノ紅葉ヲヨソカラナリトモ見ヤウニ

秋の哥とてよめる　　坂上これのり

さほ山のはゝその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

○ソウタイ柞ノ木ト云モノハナンボ染テモ色ノアマリ濃ウハナラヌ物ナレバ　今此サホ山ノ柞モ色ハウスウテ　深ウハナイケレドアノケシキヲ見レバ　サテ〳〵マア秋ハ　イカウ深ウナツタヿカナ

人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける哥　ありはらのなりひらの朝臣

うゑしうゑば秋なきときやさかざらむ花こそちらめ根さへ枯めや

○カウシテ　ウエテサヘオイタナラバ　コレカラ後　秋ト云時ガナイコトガアツタラバコソサカヌヿモアラウカシラヌガ　秋ト云

時節サヘアラバ咲カヌト云事ハアルマイ　此今年ノ花コソチツテシマハウケレ　根マデガ枯レウカ根ハカレハセネバ　イツマデモ、毎年秋ハ咲クデアラウハサテ

寛平ノ御時きくの花をよませ給うける　とし行ノ朝臣

ひさかたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

○カヤウニ禁中デ見マスル菊ノ花ハ　雲ノウヘデゴザリマスニヨツテ　天ノ星ヂヤトサトリチガヘラレマスルワイ

此哥はまだ殿上ゆるされざりける時に めしあげられてつかうまつるとなん

是貞ノみこの哥合の歌　紀ノ友則

露ながらをりてかざゝむ菊の花のおいせぬ秋の久しかるべく

○菊の露ハ壽命ヲ長ウスル物ヂヤトキケバ　イツマデモ年ノヨラヌ秋ヲ久シウ重ネテ長生ヲスルヤウニ　此菊ノ花ヲ露モソノママデ折テ頭ヘサヽーウ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　大江ノ千里

うゑし時花まちどほに有し菊うつろふ秋にあはむとや見し

○春ウヱタ時ニハ　早ウ花ノサク秋ニシタイトマチドホニ思フタ菊ガマア　盛リガ過テモウ花ノカハツテシマウ時節ニナツテ　此ヤウニナツタノヲ見ヤーウトハ思フタカイ【千秋云、結句やもじは、やはの意にて、うつろふ秋にあはむとは思はざりしものをといへる也、】

おなじ御時せられける菊合に すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりける哥ふきあげの濱のかたに菊植たりけるをよめる　すがはらの朝臣

秋風の吹上にたてるしらぎくは花かあらぬか浪のよするか

○秋風ノフク吹上ノ濱ニアル　アノ白イ菊ノ花ハ　花カ　サウデハナイカ　浪ノヨセルノカ　風ガフクナレバ浪ノヨセルヤウニモ見エルガ

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路のきくの露のまにいつか千年を我はへにけむ

○在所ヘカヘツテ見タレバモハヤ千年モ過タヤウスヂヤガ　オレハ仙人ノスミカヘイクトテ　山道ノ菊ノ花ノ中ヲ分テイテ其菊ノ露ニキル物ノヌレタヲ干ス間タホドノチツトノマデアツタニ　イツノマニマア千年モターツタ事ヤラ

きくの花のもとにて人の人まてるかたをよめる　とものり

花見つゝ人まつときはしろたへの袖かとのみぞあやまたれける

○庭ノ菊ノ花ヲ見イ〳〵クル人ヲ待テ居ルトキニハ　ソノ白イ花ガ

ソノクル人ノ白イ衣ノ袖ノヤウニ見エテ　ヒタモノ(のみ)　ソヂヤカト
トリチガヘラル丶ワイ

大澤の池のかたに菊うゑたるをよめる

一もと丶思ひしきくをおほさはの池の底にもたれかうゑけむ

○メノダ一本ヂヤト思フタ菊花ヂヤニ　アレ此池ノ底ニモアルワ
アレハ誰ガ　池ノ底ヘモウヱタコトヤラ　イヤ〳〵ヨウ見レバ影ノ
ウツーヽタノヂヤ　【千秋云、これまで四首の題は、みなかのすは
まのかた也、】

世ノ中のはかなきことをおもひけるをりに　きくの花を見て
よめる

つらゆき

秋のきくにほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬ我身を

○菊ノ花ヲ　カウ咲テアルウチハ散ルマデハ　カザシテアソバウ
ゾアノ花ヨリサキヘ死ナウモシレヌ我身ヂヤモノヲ　アソバイ
デハ

白菊の花をよめる

凡河内みつね

心あてにをらばやをらむ初霜のおきまどはせるしらぎくの花

○アノヤウニ初霜ガオイテ　花ヤラ霜ヤラシレヌヤウニマガウテ
見エル　白イ菊ノ花ハタイガイスイリヤウデ　チラバ折リモセウ
カナカ〳〵見分ラル丶コデハナイ

是貞みこの家の哥合のうた　よみびとしらず

いろかはる秋のきくをば一とせにふたゝびにほふ花とこそみれ

○ハジメノホド丶ハトント格別ニ色ノカハツタアノ菊ノ花ハ　同
シ本(モト)ノ花トハ見エヌ一年ノ内ニ二度サイタ花ヂヤトサ思ハル丶
餘材、下句意違へり、打聞よろし、

仁和寺にきくの花めしける時に哥そへて奉れとおほせられ
ければよみて奉りける　平ノさだふん

秋をおきて時こそ有けれきくの花うつろふからに色のまされば

○キクノ花ハウツロイマシテカラ　又カヤウニ始メヨリハ色ガマサ
リマスレバ　秋ノ一トサカリバカリデハゴザリマセヌ　秋ガ過テ
カラ又マイチド盛リノ時節ガサゴザリマス　恐レナガラ陛下(ゴゼン)ノ御
義モ此菊ノ花ノトホリト存ジ奉リマス

人の家なりけるきくの花をうつしうゑたりけるをよめる

つらゆき

咲そめしやどしかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

○此菊ノ花ハ始メニ咲タヤド丶ヤドガ替ツテウツーヽタレバ　所ノ
ウツーヽタバカリカ　花ノ色マデガサ　アノヤウニウツーヽテカハ
ツタワイ

題しらず　よみ人しらず

佐保山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへ見よとてらす月影

○アノナヽホ山ノ柞ノ木ノモミヂガ　オツヽケ散ラウヤウニ見エルニヨツテ　音バカリデナシニ夜ルモ人ニ見ヨト云テ　アノヤウニ月ガアカイ

みやづかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる　　藤原ノ關雄

おく山のいはかきもみぢゝりぬべしてる日の光見る時なくて

○此ヤウニ高イ岩ノ築地ノヤウニ立ツテアル陰ニアル奥山ノ紅葉ハ日ノ光ヲ見ル時モナシニ散テシマウデアラウト思ハレルガアヽクチヲシイオレガ身ノウヘモテツド此紅葉ト同シヿヂヤ

題しらず　　よみ人しらず

立田川もみぢみだれてながるめり渡らば錦中や絶なむ

○立田川ハ紅葉ガチリミダレテ今最中流レルヤウスニ思ハレル　ソレデハ今渡ツタナラバ　アツタラ錦ガマン中カラキレルデアラウカイ

此哥はある人ならのみかどの御哥也となむ申す

たつた河もみぢ葉ながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

○此川ニ紅葉ガナガレル　神ナビノ御室ノ山ニ時雨ガシテ風ガフクサウナ　時雨といふに、風のふくこゝろ、もたせたるなるべし、

又はあすか川もみぢ葉流る〔此哥不注人丸哥〕

戀しくは見てもしのばむもみぢ葉をふきな散しそ山おろしの風

○紅葉ハモウ散テシマウタガ　今カラモ散タ紅葉ノ戀シイ時ニハ此落葉ヲナリトモ見テ愛セウニ　ソノヤウニヨソヘフキチラシテヤルナイ　コレ山オロシノ風ヨ　【千秋云、此もみぢ葉は、ちりしきたる落葉をいへる也、見てもといふにて、然聞えたり、せめては落葉を見ても也、ももじあはれ也、】

秋風にあへずちりぬるもみぢばのゆくへさだめぬ我ぞかなしき

○秋風ニエコタヘズニ散ルアノ紅葉ノ　アチヤコチヤ散テイテ　ドコトモイク方ノ定マラヌヤウニ　オレガ身モ行末ノドウナルヿヤラシレヌガサカナシイ

秋はきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし

○物ガナシイ時節ニハナツタ也　紅葉ハ庭ニチツテシマウ　ソノ散リシイタ落葉ヲフミ分テタレモ尋ネテクル人ハナシ　サテモサテモ何モカモソロウテサビシイコトカナ　三つのはもじに、心をつくべし、餘材に、初句を、秋の暮には来ぬといへるは、しひごと也、秋とは、物がなしき時節といふ意にいへる、例おほし、

ふみわけてさらにやとはむもみぢ葉のふりかくしてし道と見ながら

○アノ家ヘハイル道ハ　アノヤウニ紅葉ガチリシイテ　タレモ人ノシラヌヤウニ　フミ分テコヌヤウニ隠シテアル道ヂヤニ　サウト見ナガラ　ソレヲフミ分テ今サラ見舞フベキヿカ　サウト見ナガラフミ分テ見舞ハウヤウハナイ

秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉のかずを見よとか
○月ノアノヤウニ山ヲサヤカニテラスノハ　オチル紅葉ノ数ハイクツヂヤト云コトヲトクト見ヨトテノヿカヤ

吹風のいろのちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり
○風ニハ色ハナイモノヂヤニ　アノヤウニ風ノフク色ガ　イロ〳〵ニ見エルハ　ドウシタコトカト思ヘバ　紅葉ノ　チルユヘヂヤワイ

せ　き　を

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる
○山ノ紅葉ハ露ヤ霜ニ染マツテソシテ錦ノヤウニナルヂヤ　スレバ霜ト露トガ錦ノハタヲ織ル竪ト横トノ糸ノヤウナ物ヂヤガ　ソノ露ト霜トノタテヨコノ糸ガサ弱イサウナ　ソレユヘカシテアノ紅葉ノ錦ガ　織ルカト思ヘバ　ハヤ片一方カラ破レルヤウニチリマス

うりんゐんの木のかげにたゝずみてよみける

僧　正　遍　昭

わびびとのわきて立よるこの本は頼むかげなく紅葉散けり
○ナンジフナ身ハ　ナニカラナニマデナンジフナモノカナ　コレハ頼モシイヨイ陰ヂヤト思フテ見タテ、立ヨル木ノ本ハ　ヨニモ早ウ紅葉ガチツテシマウテ頼ムベキカゲモナクナツテシマウタワイ　又ナンジフナ者ノ立ヨル木ノ本ハトリワケテ早ウ

二條ノ后の春宮のみやす所と申ける時に御屛風にたつた川に紅葉ながれたるかたをかけりけるを題にてよめる

そ　せ　い

もみぢ葉の流れてとまるみなとにはくれなゐ深き浪やたつらむ
○此立田川ノ紅葉ガ　ヅー、ト下ヘナガレテイテ　トマル湊ノアタリニハ　マーツカイナ色ノヨイ浪ガタツデアラウカ

なりひらの朝臣

ちはやぶる神代もきかず立田川からくれなゐに水くゝるとは
○此立田川ヘシゲウ紅葉ノ流レルトコロヲ見レバ　トント紅鹿子紅シボリト見エルワイ　サテ〳〵奇妙ナヿカナ　神代ニハサマザマノキメウナ事共ガアツタヂヤガ　此ヤウニ川ノ水ヲ紅ノクヽリゾメニシタト云ヿハ　神代ニモイーツカーウキカヌヿヂヤ
【千秋云、くゝりぞめは、令式などにも見えて、纐纈といへる是也、】

是貞ノみこの家の哥合の哥

としゆきの朝臣

わが來つるかたもしられずくらぶ山木々のこのはのちりとまがふに
○此クラブ山ノ木ドモノコノハノ最ー中チリマガウノデ　今トホツテ來タ方モドチカラキタヤラシレヌ

た　ゞ　み　ね

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきるこゝちこそすれ

○今秋ノコロ此神ナビノミムロノ山ヲトホレバ　紅葉ガチリカヽルデ　錦ヲ着ルコヽロモチガサスルワイ　【千秋云、たちの譯なきは、俗語には、此詞なきがよろしきなるべし、】

北山にもみぢをらむとてまかれりける時によめる

貫　之

見る人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり

○ナンデモセンノナイヿヂヤ夜ルノ錦ト云ヂヤガ　見ル人モナシニ此ヤウニムダニ散テシマウタ奥山ノ紅葉ハ　ナンボ見事デ錦ノヤウデモ　マコトニ夜ルノ錦ヂヤワイ

秋のうた　かねみの王

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木ノ葉のぬさと散るらめ

○立田姫ハ神様ヂヤガソレデモ又御手向ケナサル神様ガアルヤラコソ　御自身ノ御染ナサツタ紅葉ガ　アレトント手向ノ麻ヲチラスヤウニチリマス

小野といふところにすみ侍ける時もみぢを見てよめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞ旅ごゝちする

○秋ノ山デハアレアノトホリニ　紅葉ノチルヤウスガ　テウド旅人ノ道クダリ神々ヘ　麻ヲヌラシテ手向テユクヤウニ　見エルニヨツテ　住デ居ルコチマデガサドウヤラ旅ノコヽチガスル

神なび山を過てたつた川を渡りける時に紅葉のながれけるをよめる

きよはらのふかやぶ

神なびの山をすぎゆく秋なれば立田川にぞぬさはたむくる

○コチモ今神ナビ山ヲ過テキテ立田川ヲ渡ルガ　暮テユク秋モソノトホリデ神ノゴザル神ナビ山ノ紅葉ハモウ散テ　ソコハ過テ西ヘユケバ　アレアノヤウニ　紅葉ノヌサヲバ立田川ヘサタムケマス　神なび山は、山城國乙訓郡、立田川は其西にて、津ノ國嶋上郡也、ともに山崎のあたり也、此事別に考ヘ有、【千秋云、師の此考へ、玉勝間の初若葉ノ巻に、くはしく見えたり、】

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　藤原ノおき風

白浪に秋のこのはのうかへるをあまのながせる船かとぞ見る

○浪ノウヘヽ木ノ葉ノチツテウイテアルノハ　獵師ノ流シタ船デハナイカトサ見エル

立田川のほとりにてよめる　坂上ノ是則

もみぢ葉のながれざりせば立田川水の秋をばたれかしらまし

○木ノ葉ノ青イノハ色ノカハルデ秋ガシレルガ　水ノ青イノハ色ノカハラヌ物ナレバ　秋ガシレヌニ今立田川ノ水ヲ見レバ　紅葉ガ流レルデ秋ヂヤト云ヿガシレタ　モシ此ヤウニ紅葉ノナガレルヿガナイナラバ　水ノ秋ヲバドウシテ誰レガシラウゾ　シルモノ

ハアルマイ

しがの山ごえにてよめる　　はるみちのつらき

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり

○山川ヘアレ風ガモテキテシガラミヲカケタト見エルノハ　エナガレモセズニトマツテアル紅葉ヂヤワイ　アレハ風ガフクデアマリシゲウ紅葉ガチツテセキカケ〳〵流レテクルニヨツテ　サラサラト下ヘエ流レテハイカズニアノト　ホリニシガラミノヤウニヨドムヂヤ

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　　みつね

風ふけばおつるもみぢ葉水清みちらぬ影さへ底に見えつゝ

○風ガフケバ　チトヅヽソロ〳〵紅葉ガチリカケタガ　此池ノ水ガキヨサニ　マダチラズニ枝ニアル紅葉ノ影マデガ底ヘヨウウツヽテ　ハヤ大分チツタヤウニ見エル

亭子院の御屛風の繪に川わたらむとする人のもみぢのちる木の本に馬をひかへてたてるをよませ給ひければ（オヨマセナサレ）　つかうまつりける

たちとまり見てを渡らむもみぢばゝ雨とふるとも水はまさらじ

○シバラク立トマツテアノ紅葉ヲ見テカラ　此川ヲ渡ラウ　雨ガフレバ水ガマシテ川ガ渡ラレヌヂヤガ　紅葉ハ雨ノヤウニナンボフーツタトテモ　水ハマシハスマイホドニ

是貞ノみこの家の哥合の哥　　たゞみね

山田もる秋のかりほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり

○秋ノコロ山ノ田ノ番ヲスル　此小屋ヘ此ヤウニ　露ノオイタハ　稲負セ鳥ガ此コロハ來テシゲウ鳴ケバ　ソノナミダヂヤワイコレハ

題しらず　　よみ人しらず

ほにも出ぬ山田をもるとふぢ衣いなばの露にぬれぬ日はなし

○マダ穂モデヌ山ノ田ヲトウカラ番ヲシテルトテ　毎日〳〵稲ノ葉ノ露デキルモノヽヌレヌ日ト云ハナイ　百姓ト云モノハアヽ、ナンギナモノヂヤ　此ヤウナヤウスヲ上（カミ）ニハ御存知アルマイガ

藤衣は、いやしき者のきもの也、【千秋云、こは君たる人は、ことに深く心をとめて、味ひ玉ふべき哥也、下として、貴き人の御心ばへをも知り奉り、又貴き人の、下が下の有さまをも、よくしろしめすべきは哥也、】

かれる田におふるひつちのほに出ぬは世を今さらにあきはてぬとか

○刈テシマウタ田ヘ　又アトヘハエタヒツチノ穂ノデヌノハ　時節モモウ秋ガハテタ也　世ノ中ヲモウアキハテタレバ今サラ穂ヲダサウヤウハナイト思フテノヿカイ　【千秋云、今さらにといふ詞は、三の句の上へうつして心得べし、】

北山に僧正遍昭とたけがりにまかりけるによめる

そ せ い 法 師

もみぢ葉は袖にこきいれてもて出なむ秋は限と見む人のため

○此紅葉ヲバ袖ヘコキオロシテ入レテ持テ此山ヲ出テ　インデミヤゲニセウ　人ハ定メテ秋ハモウハヤシマイヂヤト思フテ居ルデアラウガサウ思フテ居ル人ノタメニサ

寛平ノ御時ふるき哥たてまつれとおほせられければ立田川もみぢ葉ながるといふ哥をかきてそのおなじ心をよめりける

お き か ぜ

みやまより落くる水の色見てぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

○モシヤ深山ナドニハマダ秋ガ殘ツテアルデモアラウカト思フタガ　此ヤウニ深山カラ　散ル紅葉ノ流レテクル水ノ色ヲ見レバササテハモウイヨ〳〵秋ハシマヒニナツタト思ヒシツタ

秋のはつるこゝろを立田河に思ひやりてよめる

つ ら ゆ き

年ごとにもみぢ葉ながすたつた川みなとや秋のとまりなるらむ

○毎年〳〵秋ノ紅葉ヲ　筏ヤ船ノヤウニ流シテヤル立田川ハ　川下ノ湊ガ秋ノトマル所デアラウカイ　ソレナラ湊ヘ尋ネテイテ秋ニアヒタイモノヂヤ　クレテユクノハノコリオホイ秋ヂヤニ

ながづきのつごもりの日大井にてよめる

夕月夜をぐらの山に鳴鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

○〔一〕ケフハ九月晦日デモウ日モクレカタニナツタガ　アレアノ小倉山デ鹿ノナク長イ聲ノキレヌウチニ　ハヤ秋ハクレテシマウデアラウカ

同じつごもりの日よめる

み つ ね

道しらばたづねもゆかむもみぢ葉をぬさと手向て秋はいにけり

○秋ハモウ紅葉ノチルノヲ道ノ神ヘノ麻(ヌサ)ニシテ手向テ　旅立シテインデシマーウタワイ　サテモ〳〵ノコリオホイヿカナ　道ヲシーツタナラ跡カラ尋ネテナリトモユカウ

古今和歌集巻第六遠鏡

冬哥

題しらず　　よみ人しらず

たつたがは錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

○立田川ヘ紅葉ノ散テ流レルトコロヲ見レバ　時雨ノ糸ノヤウナ雨ヲ竪横ノ糸ニシテ機ヘカケテ錦ヲ織ルト見エル

冬の哥とてよめる　　源ノ宗于ノ朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

○山里ハイツデモサビシイガ　冬ハサベツシテサビシサガマシタワイ　人ノコヌコトヲ人目ガカレルト云ヂヤガ　今マデハタマタマ見エタ人目モカレル　草モ枯レタニヨツテサ　かれぬと思へば、ゝ、たゞかれぬればといふに同じ、思に意なし、此例多し、

題しらず　　よみびとしらず

大空の月のひかりし清ければ影見し水ぞまづこほりける

○昨夜ノソラノ月ガキツウサエタニヨツテ　ソノ影ノ見エタ水ガサ　ケサハアレアノヤウニマヅ一バンニコホーツタワイ　【千秋云三の句、菅家万葉朗詠などに、寒ければとある、その方まさりて聞ゆ、】

夕されば衣手さむしみよし野のよしのゝ山にみ雪ふるらし

○此ゴロハ　ユフカタニナレバ　イカウ寒イ　マ一ツ着ニーヤナラヌ　コレハモツ吉野山ヘハ雪ガフーツタサウナ

いまよりはつぎてふらなむわがやどの薄おしなみふれる白雪

○コレカラハツヾイテ段々フレカシ　コチノ庭ノスヽキヲ　オシナビカシテツモーツタアノ雪ノケシキキツウオモシロイ

ふる雪はかつぞけぬらしあしひきの山の瀧つ瀬音まさる也

○山ハ雪ガフルヤウスヂヤガ　フルウチニ　ハヤ片一方カラヽキエルサウナ　ソノ雪ドケト見エテ　アノ山カラ流レオチル川ノ水ガマシテ　音ガアレ高ウナツタワ

此川にもみぢ葉ながるおく山の雪げの水ぞ今まさるらし

○此川ヘ紅葉ガ流レル　コレマデハ流レテコナンダガ　今アノヤウニ流レテキタノハ　川上ノ奥山ノ雪ドケデ水ガサ　マシタサウナソレデ川上ニヨドンデアツタ木ノ葉ガ今流レテクルヂヤ

故郷はよしのゝ山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし

○此吉野ノ里ハ高イ山ガ近イニヨツテ　ケガナ一日モ雪ノフラヌ日ト云ハナイ

我やどは雪ふりしきて道もなしふみ分てとふ人しなければ

〇コチノ庭ハ　イチメンニ雪ガツモーツタマヽデ道モナイ　フミ分テ尋ネテクル人ガナイヂヤニヨツテサ　通ツテクル人ガアラウナラセメテ道ハシレテアラウニ

冬の哥とてよめる　紀ノ貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける

〇冬ガレデマダメモデヌ草モ木モ　雪ガフレバ　春ニハサタナシノ花ガサヽサイタワイ　ソウタイ花ハ春ニナツテ咲クモノヂヤニ

しがの山ごえにてよめる　きのあきみね

白雪のところもわかずふりしけばいはほにもさく花とこそ見れ

〇雪ガドコト云ヿナシニ　タヒラ一メンニツモツタレバ　木デハナウテ花ノサクマイ岩ヘモサ花ガ咲タト見エル　【千秋云、志賀の山ごえは、花の名どころなれば、春の花のことを思ひて、よめるならんか。】

ならの京にまかれりけるときにやどれりけるところにてよめる　坂上ノこれのり

みよし野のしら雪つもるらし故郷寒くなりまさるなり

〇今夜ハ吉野山ノ雪ガイカウツモルサウナ　ソレデ此ヘンマデガ此ヤウニ　ダン〳〵サムサガマサルヂヤ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　ふぢはらのおきかぜ

浦ちかくふりくる雪はしら浪の末のまつ山こすかとぞみる

〇カノ奥州ノ末ノ松山ト云所ハ　古哥ニモ浪コエナントヨンデアツテ名ノ高イコトヂヤガ　今カウ海邊近イ所ヘ雪ノフツテクルケシキハ　白イ浪ガマコトニソノ末ガ松山ヲサ　コエルノカト見エル　餘材、此初句を末の松山のあたりの浦と見たるにや、ひがと也、此浦は、いづくにまれ、海の浦也、

壬生ノ忠岑

みよし野の山のしら雪ふみ分ていりにし人のおとづれもせぬ

〇吉野山ヘ深イ雪ヲフミ分テコモツータ人ガ　其後一向ニオトヅレモナイガ　雪ガ段々フカウナツテ便リモシラレヌヿカ　イヨイヨ無事ナカ　寒氣ノツヨイトコロナレバモシワヅラハレナドハセヌカ　アンジラルヽワイ

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ

〇雪ノフツテ段々フカウツモーツタ山里ハ　サゾヤ寒ウハアラウシサビシウハアラウシ　サウ云所デハ　住デ居ル人マデガ　心ノキエイルヤウニ思フデカナアラウ　雪ハシマイニハ消ルモノヂヤガソノ雪ノヤウニサ心マデガ

雪のふるを見てよめる　　凡河内ノみつね

雪ふりて人も通はぬ道なれや跡はかなくもおもひきゆらむ

○雪フリニカーウシテ居ル我心ハ　タトヘバ　此ヤウニ雪ガフツテ人ドホリモタエテ　足跡モナウナツテ　ソコト云筋モシレヌヤウニ消テシマウ道ノヤウナ物ヂヤヤラカウシテ居ル心ガキエルヤウナ【千秋云、三の句のなれやと、結句のらんとのあつかひ、此譯をよく味ひてしるべし、】

雪のふりけるをよみける　　清原ノふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

○マダ冬ナガラ空カラアノヤウニ花ノ散テクルハ　アノ雲ノアチラハモウ春ヂヤカシラヌ

雪の木にふりかゝれりけるをよめる

つらゆき

冬ごもりおもひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

○今ハ冬ガレデマダメモデヌアノ木ナレバ　思ヒガケモナイニ枝ノアヒダカラ花ノチルト見エルホドニサ　雪ガフルワイ

やまとの國にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる

坂上ノこれのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでによしのゝ里にふれる白雪

○カウ夜ノクーワラリーツトアケタ時ニ見レバ　テウド有明ノ月ノ殘ッタ影ト見エルホドニ吉野ノ里ヘ雪ガフツタ【千秋云、朝ぼらけのほらけは、朗明(ホガラアケ)のつゞまりたる也、集中戀三に、しのゝめのほがら〳〵と明ゆけば云々、是也、】

題しらず　　よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

○此雪ハ　マダキエヌウヘ、モ又ツヾイテフリカサナレ　オツヽケ春ガキテ霞ノタツ時分ニナツタナラ　マレニコソフリモセウケレ　度々ハ見ラレマイホドニ

梅ノ花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば

○〔三〕〔あまぎる〕　雪ガオシナメテドコモカモフーツタレバ　梅ノ花ガ梅ノ花トモ見エヌ　同シ白サヂヤニヨツテ

此哥はある人のいはくかきの本ノ人まろがうたなり

梅の花に雪のふれるをよめる　　小野ノたかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにゝほへ人のしるべく

○花ノ色ハ雪ニマジツテ　ソレト分レテ見エズ𪜈人ガ梅ノ花ヂヤトシルヤウニ　セメテ香ナリトモ　ハツキリトシレルヤウニ　ニホヘ

雪のうちの梅ノ花をよめる　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせばたれかこと〳〵分てをらまし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ雪ニマガウガ　モシ香マデガ色ノヤウニツモツタ雪ニマガウナラバ　誰レガ雪ト梅ノ花トヲヨウベツ〳〵ニ見分テ折ウゾイ　タレモエ見分ヶハスマイ　香ガマガハネバコソ

雪のふりけるを見てよめる　紀ノとものり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきてをらまし

○雪ガフレバ　何ンノ木モミナ花ノサイタヤウナワイ　ドレヲ梅ヂヤト見分テヲラウゾ　ドウモ見分ヶニクイ

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

○コチガマチモセヌ　來ル年ノ年ハモウ近ウキタケレド　今ジブンノ草ノヤウニカレテヨソヘインダ人ハ　コチガコレホド待ッノニマダカヘツテコヌノミナラズ　ネカラオトヅレモセヌ　カレルト云ハ　ヨソヘイテヨリツカヌヿヂヤゾイ

としのはてによめる　ありはらのもとかた

あらたまのとしのをはりになるごとに雪も我身もふりまさりつゝ

○[一]年ノ終リニナルタビゴトニ　雪モフリマサルガ　コチガ身モ段々フルサガマサツテサ　次第ニ年ガヨツテイク　アヽコマーツタモノヂヤ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　よみ人しらず

雪ふりて年の暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

○今マデ露ヤ霜ヤ時雨ガフツテモ　松ハ色ガカハラナンダガ　ソレデモマダ此ウヘ雪ガフツタラバ　モシ色ガカハルデモアラウカト思フタガ　今此ヤウニ雪ガフツテモ　ヤーツハリ色ハカハラズニ　モウ年ガクレタカラハ　サテハトウ〳〵シヤウ色ノカハラヌ松ヂヤト云ヿモコヽデコソ見エタモノナレ

としのはてによめる　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらして明日香川流れて早き月日なりけり

○昨日今日明日ト云テ一日〳〵トクラシテ　ツイモウ年ノクレニナツタヂヤ　アスカ川ノ水ノ早ウ流レテユクヤウニ　アヽサテサテ早ウタツ月日ヂヤワイ

哥奉れとおほせられし時によみて奉れる　きのつらゆき

ゆくとしのをしくも有かなます鏡見る影さへにくれぬと思へば

雪のふるを見てよめる　　凡河内ノみつね

雪ふりて人も通はぬ道なれや跡はかなくもおもひきゆらむ

○雪フリニカーウシテ居ル我心ハ　タトヘバ　此ヤウニ雪ガフツテ[二]人ドホリモタエテ　[四]足跡モナウナツテ　ソコト云筋モシレヌヤウニ消テシマウ[三]道ノヤウナ　物ヂヤ[三五]ヤラ（やらん）カウシテ居ル心ガキエルヤウナ　【千秋云、三の句のなれやと、結句のらんとのあつかひ、此譯をよく味ひてしるべし、】

雪のふりけるをよみける　　清原ノふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

○マダ冬ナガラ空カラアノヤウニ花ノ散テクルハ　アノ雲ノアチラハモウ春ヂヤカシラヌ

雪の木にふりかゝれりけるをよめる　　つらゆき

冬ごもりおもひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

○今ハ冬ガレデマダメモデヌアノ木ナレバ　思ヒガケモナイニ枝ノアヒダカラ花ノチルト見エルホドニサ雪ガフルワイ

やまとの國にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる

坂上ノこれのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでによしのゝ里にふれる白雪

○カウ夜ノクーワラリーツトアケタ時ニ見レバ　テウド有明ノ月ノ残ッタ影ト見エルホドニ吉野ノ里ヘ雪ガフツタ　【千秋云、朝ぼらけのほらけは、朗明（ホガラアケ）のつゞまりたる也、集中戀三に、しのゝめのほがら／＼と明ゆけば云々、是也、】

題しらず　　よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

○此雪ハ　マダキエヌウヘ、モ又ツヾイテフリカサナレ　オツヽケ春ガキテ霞ノタツ時分ニナツタナラ　マレニコソフリモセウケレ　度々ハ見ラレマイホドニ

梅ノ花それとも見えずひさかた（〔清〕）のあまぎる雪のなべてふれゝば

○〔三〕〔あまぎる〕　雪ガオシナメテドコモカモフーツタレバ　梅ノ花ガ梅ノ花トモ見エヌ　同シ白サヂヤニヨッテ

此哥はある人のいはくかきの本ノ人まろがうたなり

梅の花に雪のふれるをよめる　　小野ノたかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにゝほへ人のしるべく

○花ノ色ハ雪ニマジツテ　ソレト分レテ見エズ𪜈[五]人ガ　梅ノ花ヂヤトシルヤウニ（べく）　セメテ香ナリトモ（だに）　ハツキリトシレルヤウニ　ニホヘ

雪のうちの梅ノ花をよめる　　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせばたれかことゝ分てをらまし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ雪ニマガウガ　モシ香マデガ色ノヤウニツモツタ雪ニマガウナラバ　誰レガ雪ト梅ノ花トヲヨウベツ〳〵ニ見分テ折ウゾイ　タレモエ見分ケハスマイ　香ガマガハネバコソ

雪のふりけるを見てよめる　　紀ノとものり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきてをらまし

○雪ガフレバ　何シノ木モミナ花ノサイタヤウナヮイ　ドレヲ梅ヂヤト見分テヲラウゾ　ドウモ見分ケニクイ

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる　　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

○コチガマチモセヌ　來ル年ノ年ハモウ近ウキタケレド　今ジブンノ草ノヤウニカレテヨソヘインダ人ハ　コチガコレホド待ツノニマダカヘツテコヌノミナラズ　ネカラオトヅレモセヌ　カレルト云ハ　ヨソヘイテヨリツカヌコヂヤゾイ

としのはてによめる　　ありはらのもとかた

あらたまのとしのをはりになるごとに雪も我身もふりまさりつゝ

○〔一〕年ノ終リニナルタビゴトニ　雪モフリマサルガ　コチガ身モ段々フルサガマサツテサ　次第ニ年ガヨツテイク　アヽコマーツタモノヂヤ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　　よみ人しらず

雪ふりて年の暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

○今マデ露ヤ霜ヤ時雨ガフツテモ　松ハ色ガカハラナンダガ　ソレデモマダ此ウヘ雪ガフツタラバ　モシ色ガカハルデモアラウカト思フタガ　今此ヤウニ雪ガフツテモ　ヤーツハリ色ハカハラズニ　モウ年ガクレタカラハ　サテハトウ〳〵シヤウ色ノカハラヌ松ヂヤト云コモコヽデコソ見エタモノナレ

としのはてによめる　　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらして明日香川流れて早き月日なりけり

○昨日今日明日ト云テ一日〳〵トクラシテ　ツイモウ年ノクレニナツタヂヤ　アスカ川ノ水ノ早ウ流レテユクヤウニ　アヽサテサテ早ウタツ月日ヂヤヮイ

哥奉れとおほせられし時によみて奉れる　　きのつらゆき

ゆくとしのをしくも有かなます鏡見る影さへにくれぬと思へば

○年ノツモルニシタガウテ　次第ニ鏡デ見ル影マデガ　ツムリガ眞ッ白ニナツテ面（カホ）ハシワガヨツテ　此ヤウニオイクレテイクト思ヘバ　サテ〳〵暮テユク年ガマアナシウ思ハルヽヿカナ

遠かゞみ二の巻をはり

古今和歌集巻第七遠鏡

賀歌

題しらず　　　　よみ人しらず

我君は千世に八千世にさゞれ石のいはほとなりて苔のむす迄

○コマカイ石ガ大キナ岩ホニナツテ苔ノハエルマデ　千年モ万年モ御繁昌デオイデナサレコチノ君ハ

わたつ海の濱のまさごをかぞへつゝ君が千年のありかずにせむ

○海ノ濱ノ砂ノ数ナゾヲ／＼ニカゾヘテ君ノ御長寿ノ御年ノ数ヂリニセウ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千世とぞなく

○シホノ山サシデノ磯ニ住デヰル千鳥ノ鳴クヲキケバ　君ノ御代ヲバヤチヨ／＼トサ鳴キマス

わがよはひ君がやちよにとりそへてとゞめおきてば思ひ出にせよ

○ソレラガ此長命ナヨハヒヲ　ソコモトへ進ゼウホドニ　コレカラソコモトノ八千世ノヨハヒノ上へ　此ワレラガ齢モトリソヘテソコモトニトヾメオカレタナラバ　後ニ思ヒダシグサニシテ我ヲガ事ヲ思ヒダサーツシヤレ　打聞よろし餘材わろし

仁和ノ御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御哥

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな

○朕モドウシテナリトモ共ニ長命デ居テ　此度ノトホリニ　又イク度モ／＼賀ヲイハウテ進ジテ　ソコノ八千歳ノ賀ニドウゾ逢ウヤウニシタイヿカナ

仁和のみかどのみこにおはしましける時に御をばの八十の賀にしろかねを杖につくれりけるを見てかの御をばにかはりてよめる　　　　僧正遍昭

ちはやぶる神のきりけむつくからに千年の坂もこえぬべらなり

御をばゝ御祖母なるべし。おの假字を書べき也

○此杖ハ一トホリノ物トハ見エヌ　大カタ神ノ御キリナサレタ杖デアラウ　然レバ此杖ヲツクカラシテハ　千年ノ坂マデモ　心ヤスウ越ラルヽデアラウト思ハルヽ

ほり川のおほいまうちぎみの四十ノ賀九條の家にてしける時によめる　　　　在原ノ業平ノ朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

○四十ニ御ナリナサレタレバ　初老ト申シテコレカラ老ガコウト云ゲヤガ　ドウゾコヌヤウニシタイモノナレバ　ソノ老メガ來ル道ヲフミマヨウヤウニ其用意ニ櫻花ヨタントチリ　アウテソコラガ闇ウ曇ルヤウニセイ　ソシタラソレデ道ガ闇ウテ來ル　老ガフミマヨウテエ來マイホドニ　がには万葉に多き詞也疑ひのかにはあらず

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井にてしける日よめる　　　　きのこれをか

此をばも御祖母にておばなるべし

かめのをの山のいはねをとめて落る瀧の白玉ちよの數かも

○此大井ノ近所ナ龜ノヲノ山ノ岩ノネニソウテオチル瀧ノ白玉ノ多イ數ハ御壽命ノ千年ノ數カヤレ　山ノ名サヘメデタイ龜山ナレーヤ

さだやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風に櫻の花のちるしたに人の花見たるかたかけるをよめる　　藤原ノ興風

いたづらに過る月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき

○ナンモナシニタヾ過テイク月日ハ　多イヤラスクナイヤラ　何シモ思ハズニ　ウカ／＼トシテクラスガ　此ヤウニ面白イ花ヲ見テクラス春ハサキツウ日數ガ　スクナウ思ハルヽ　餘材に春のすくなきにおどろきて思へば過にし月日は多かりけりと始めておぼゆる意なるべしといへるはかなはず

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける　　きのつらゆき

春くればやどにまづさくうめの花君が千年のかざしとぞ見る

○春ガクレバ此御庭ヘマヅ一バンニサク梅ノ花ヲ　君ガ千年マデノ春ノ御カザシヂーヤトサ存ジマスル

素性法師

いにしへにありきあらずはしらねども千年のためし君に始めむ

○千年モイキタ人ハ　昔モアツタカナカツタカハシラヌケレモ　タトヒ今マデニハサーウ云人ハナイニモセヨ　千年イキルタメシヲ君カラ御始メナサルデアラウ

ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞしるらむわが君のため

○吾君ノ御年ノ數ヲドウゾ万年マデモト　寐テモオキテモ願ヒマスルコトハ　人ノ力ニコソ及バズトモ　神ガサ其通リニ御ハカラヒナサレウワサ　我君ノタメニ　神ぞしるらむは万葉に神ししらさむなどある類にてしるとははからひおこなふをいふ也　たゞつねにいふしるの意のみにはあらず

藤原ノ三善が六十ノ賀によみける　在原ノしげはる

つるかめも千年のゝちはしらなくにあかぬ心にまかせはてゝむ

○鶴龜ハ千年ノヨハヒヲタモツ物ナレド　ソレモ　ソノ千年ノ後ハドゥアルヤラシラヌガ　貴樣ハ千年ゴザツテモ　マダソレデハ十分ニハ存ゼ子バ　ソノウヘモマダ存分ニ長ゥ久シゥ御無事デオキマセウ

此歌はある人在原ノときはるがともいふ

よしみねのつねなりがよそぢの賀にむすめにかはりてよみ

侍ける　　　そせいほうし

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の陰にすまむと思へば

○君ハ萬年ノ御壽命ヲ待ッナレバ　ソノマツト云名ノ松デサ　オイハヒ申シマスル　サウシテソノ千年モアル松ノカゲニ　鶴ノスムヤウニ　ワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙ッテ共ニ長ウ居マセウト存ジマスレバサ　餘材につるといふ辞に鶴をもたせたりといへりまことに下句のことば鶴によれりと聞えたり

ないしのかみの右大將藤原ノ朝臣の四十ノ賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふこゝろは神ぞしるらむ

○御賀ノタメニカウ　春日野デ若菜ヲツミ〳〵心ノ内デ御壽命ヲ万年マデトオイハヒ申ス心願ノホドハ　御先祖ノ此ノ春日ノ御神ガサ御納受ナサレテ御守リナサルヽデゴザラウ　しるらむの意上にいへるがごとし

山高み雲ゐに見ゆるさくら花こゝろのゆきてをらぬ日ぞなき

○高イ山デ雲ノアタリニ見エルアノ櫻花ガ　キツウヨイ花ヂヤガ山ガ高サニドウモアソコヘハエイカ子バ　アヽドウゾ一枝折テキタイ物ヂヤト思ウ心ガ　毎日アノ山ヘイテアノ櫻ヲヲラヌ日ハサナイ

夏

めづらしき聲ならなくにほとゝぎすこゝらの年をあかずも有哉

○イツノ年モ同シ聲デナケバ　ナニモメヅラシイ聲デハナイニ　アノ郭公ハオホクノ年毎年聞テモサテモ〳〵マア聞アカヌヿカナ

打聞こゝらの説わろし

秋

すみのえの松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつ白浪

○住ノ江ノ松ヲ秋風ガサアヽトフクトソノマヽ　ドオヽト浪ノ音ヲウチソヘル

千鳥なくさほの川霧たちぬらし山の木ノ葉も色まさりゆく

○佐保山ノ木ノ葉モ段々色ガマサツテキタ　此トホリナレバ今マデニモウ　〔一〕此佐保川ノ霧ガターツタサウナ　『千秋云、露時雨のみならず、霧にも、木葉は色づく物なる故に、かくよめり、』

秋くれど色もかはらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

○秋ニナツテモ木ノ葉ノ色ノカハラヌト云常磐山ヂヤニヨッテ　此山ニハ紅葉ハナイニ　ヨソノ山ノ紅葉ヲ風ガ吹テ來テサ　此ノトキハ山ヘ借スワイ

冬

しら雪のふりしく時はみよしのゝ山下風に花ぞちりける

○此吉野ノアタリヘドコモカモ白イ雪ガフツタ時ニハ　山ノ風デ麓ハ花ガサ散ルワイ

○遠鏡三

春宮のうまれ玉へりける時にまゐりてよめる

典侍藤原ノよるかの朝臣

峯高き春日の山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり

○春日ノ神ノ御末ノ藤原氏ノ中デモ此上ヘモナイ御方ノ姫君ノ御腹ニデキマシナサツメ若宮様ナレバ　チウドソノ春日山ノ高ウウチハレニクモル所ノナイヤウニ　御行末イツマデモ　クモリナウ天下ヲ御照シアソバスデアラウト存ジラレマス

古今和歌集巻第八遠鏡

離別哥

題しらず

在原ノ行平ノ朝臣

立わかれいなばの山の峯におふるまつとしきかば今かへりこむ

○今此方(コノハウ)ハ京ヲ立テ別レテ因幡ノ國へ下ルガ　其國ノイナバ山ノ峯ニハエテアル松ノ名ノトホリニツナタガ此方(コノハウ)ヲ待ツト　聞メナラヂキニ又カヘーツテコウワサテ

よみ人しらず

すがるなく秋の萩はら朝たちて旅ゆく人をいつとかまたむ

○朝立テ旅ヘユク人ニ　〔一〕萩ノ咲テアル此秋ノ野デ今ワカレルガオカヘリナバイツト思ウテマタウゾ　ソレーヤキツウ遠イヿデアラウ　打聞すがるなくの説うけがたし

かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさ(○濁)むやは

○今カウ別レテ限リモナイ遠イ雲ヨリアチラノ國へ　ワシハイクヂヤガソレデモ　此故ー郷ノ人ノ事ハ常住忘レルマモナシニ思ウテ行ウヂヤニヨツテ　心ノ内ハドコマデモイーツシヨニツレダツテイクモ同シヿヂヤワサ　身コソカウシテ今別ルヽ心ノ内デハ　貴様タチヲアトへ殘(おくらさんやは)シテオカウカイ　心デハツレダツテ　イクワサテ　打聞結句の説いとわろし餘材よろし

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時にはゝのよ
める

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりは關なとゞめそ

○ソナタノ身ノ守リヂヤト思ウテ添ヘテヤル　此母ガ心バカリヲバ
ユクサキノ關所〳〵デモ　ドウゾトメテ下サルナ　トホシテヤツ
テ下サレ

さだときのみこの家にてふぢはらの　きよふが近江のすけに
まかりける時にうまのはなむけしけるよゝめる

きのとしさだ

けふわかれあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

○今日別レテ明日ハヂキニ　又アハレルホド近イ近江ノ國ヂヤトハ
思ヘド　カハツタモノデ別レトイヘバ悲シイ　アヽ夜ガイカウフ
ケタヤラ　袖ガ露デヌレタワイ　イヤ〳〵コレーヤ涙ヂヤワイ

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞たちわかれなば戀しかるべし

○北國ニハカヘル山ト云山ガ　アルト云ヿナレバ　其名ノトホリニ
オーツヽケ御無事デカヘラーツシーヤラーウトハ思ヘド　ソレデ
モアノ霞ノ立テアル方ヘ立テ別レテイカシーヤーツタナラバ戀シ
カラウ

人のうまのはなむけにてよめる　きのつらゆき

をしむから戀しきものをしら雲のたちなむ後は何ごゝちせむ

○ナゴリヲシウ思ヘバ　マダタヽーツシーヤラヌウチカラハヤ此ヤ
ウニ戀シイ物ヲ〔三〕立テイカシーヤーツタアトデハ　ドノヤウナ
コヽチガスルデアラウ

ともだちの人の國へまかりけるによめる

在原ノしげはる

わかれてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

○別レテカラハ遠イ道ヲヘダテヽ　久シウアハレヌヿヂヤガト思ウ
ユヱカシテ　マダカウシテ見テ居ナガラ　カタ（かつ）一ー方デハ　ハヤ（かねて）
今カラモウ戀シウ思ハルヽ

あづまのかたへまかりける人によみてつかはしける

いかこのあつゆき

思へども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

○ナンバウカナゴリヲシウ思ヘド　人ノ身ハ二ツニ分ラレヌ物デ
ドウモツイテハエイカ子バ　目ニハ見エヌケレド心ヲサ　其方ヘ
ソハセテヤリマス

相坂にて人をわかれける時によめる

【千秋云、人をわかるといふも、人にわかるといふと、同じ
と也、然るを打聞に、人の旅行に別るゝには、人をとい
ひ、我ヵ行クには、人にわかるといふといへるは、あたら

ず、万葉に、くやしく妹をわかれ来にけり、又たらちねの母を別れてまとわれ旅のかりほにやすくねむかも、これらわがゆく時の別れ也、】

なにはのよろづを

あふ坂の關しまさしき物ならばあかず別るゝ君をとゞめよ

○アフ坂ト云ガマサシク其名ノ通リチガヒナイ物ナラバ　人ニ逢ウハズヂヤ別レウハズハナイ　スレーヤ殘リ多イニ別レテユク此人ヲ．アヒカハラズ逢ウヤウニ此關デトヾメヨ　餘材まさしきといへるにかなはず　【千秋云、餘材抄は、關といへる言になづみて、二三の句を說たれども、關にて人をとゞむるは、常の事なるを、まさしきものならばなど、こと／＼しくいふべきにあらず、】

題しらず　よみ人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべき物を

○〔一〕御立チノ日ヲバ明日ヂヤト云ヿハ　ワシーヤモウ聞キマスマイ　ワシヲバステ、オイテ御出ナサルヿナレバ　明日御立ヂヤト聞テハ　明日ノ朝ニナツタナラワシーヤモウ露ノキエルヤウニアラウト存ジラレマスモノ

此哥はある人つかさをたまはりてあたらしきめにつきて年へて(カヨウタ女)すみける人をすてゝたゞ明日なむたつとばかりいへりける時にともかうもいはでよみてつかはしける

ひたちへまかりけるときにふぢはらのきみとしによみてつかはしける　寵

あさなけに見べき君とし賴まねば思ひたちぬるくさ枕なり

○毎日アハレル公利樣ヂヤトハ賴マレヌ　ミヅクサイ御心ナレバソレユヱワシーヤ存ジ立ッテ常陸ヘ下リマスル今度ノ旅デゴザリマス

きのむねさだがあづまへまかりける時に人の家にやどりてあかつき出たつとてまかりまうし(イトマゴヒ)ければ女のよみていだせりける　よみ人しらず

えぞしらぬ今こゝろみよ命あらば我やわするゝ君やとはぬと

○オマヘハワタシヲイツマデモ忘レハセヌトオーツシーヤルケレド　ワシハドウモソレハサ一エガテンセヌ　末四デワシガ忘レルカオマ五ヘガ忘レテトウテ下サレヌカハ　命ガアッテイキテ居タナラ　今二オツ、ケ知レウホドニタメシテゴラウジヨ三(こゝろみよ)　ワシハオマヘヲイツマデモワスレハスマイガ　オマヘハ追付ワタシヲバ御忘レナサルデアラウワサ

あひしりて侍ける人のあづまのかたへまかりけるをおくるとてよめる　ふかやぶ

雲ゐにも通ふこゝろのおくれねばわかると人に見ゆばかり也

○貴様ガ今度ドレホド遠イ所ヘイカシヤーヤーツテモ　拙者ガ心ハイツモソノ貴様ノ方ヘカヨウテ　コヽニ殘ツテハ居子バ　ヒーツキーヤーウ此身ガ　今別レテ跡ニ殘ルト見ラレルバカリヂヤ　心ハ別レハセヌ

友のあづまへまかりける時によめる

よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだく旅かな

○雲ノアチコチヘ分レテイクヤウニ　今度遠イ間タチヘダテヽ別レル悲シサニ　今ハナムケニ進ズル此手向ノ麻(ヌサ)ノコマカナヤウニ　拙者ハイロ〳〵ニ心ヲクダイテ　サテ〳〵ナゴリヲシイ御旅立デゴザルヿカナ　【千秋云、ぬさとて、五色の絹などを、こまかにきりて、袋にいれて、道の神に手向の料に、旅だつ人に贈る事有、ぬさぶくろといふこれなり、】

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

しら雲の八重にかさなるをちにても思はむ人に心へだつな

○ハルカニ雲ノイクヘモヘダヽーツテアルアチラ(をち)ノ國デ　アラウトモ　拙者ハ貴様ノ事ヲタエズ思ウテ居ヤウホドニ　タトヒ雲ハヘダテルトモ　心ハヘダテサーツシーヤルナヤ

人をわかれける時によみける

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

○色コソ物ニシム物ナレ　別レト云コトハ色デモナイニ　ドウ云コトデ此ヤウニ心ニシミ〴〵トツラウ思ハレルヤラ

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて京にまうできて又かへり(コシノ國へ)ける時によめる　凡河内ノ躬恒

かへる山なにぞは有てあるかひは來てもとまらぬ名にこそ有けれ

○貴様ノ又下ラーツシーヤル國ニアルカヘル山ト云山ハ　ヨソヘイタ人ノカヘルト云名ヂヤト思ウタニ　ソノカヘル山ハ何(なにぞは)ンノヤクニタツヿゾ　サウ云山ガ有テモ　アルカヒハナイ　アルカヒト云ハ　久シブリデ來テモ京ニハ居トマラズニ　又アチヘカヘルト云名デコソアレ

こしの國へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらむ白山のゆき見るべくもあらぬ我身は

○今カラハヨソニバツカリ　オナツカシウ(こひ)思ウテ　月日ヲタテルデ(わたらむ)ゴザラウカ(や)　アノハウヘ參ツテ御目ニカヽラレウトモ思ハレヌワシガ身ナレバサ　ゆきて見るといふことを白山の雪を見るといひかけたり

おとは山のほとりにて人をわかるとてよめる

つらゆき

おとは山こだかく鳴てほとゝぎす君が別れを惜むべら也

○此オトハ山ノ高イ木ノ上ヘデアレ郭公ガ高ウ鳴キマス　郭公モアノトホリ鳴テ貴様ノ御別レヲナゴリヲシウ思ウデアラウ　サウ聞エル　拙者ドモヽ同ジヿサ

ふぢはらのゝちかげがから物のつかひに（唐物シラベノ役ニ御付ケレテ西國ヘ）なが月のつごもりがたにまかりけるにうへのをのこどもさけたうびけるついでによめる

ふぢはらのかねもち

もろともに鳴てとゞめよきり／＼す秋の別れは惜くやはあらぬ

○トモ／＼ニ鳴テドウゾオトメ申セキリ／＼スヨ　今マ秋ノ別レノ時ー分ニオワカレ申スハ　コレホドナゴリヲシイニ　ソチハナゴリヲシウハナイカイ

平ノもとのり

秋霧のともに立出てわかれなばはれぬ思ひにこひや渡らむ

○アノ霧ノ立ツヤウニ貴様モ共ニ立テ出テイカシヤーツテ御別レ申シタナラ　ソレハ今カラハアノ霧ノハレヌヤウニ心ガハレズニイツモオナツカシウ思ウテタテルデゴザラウカイ

源ノさねがつくしへゆあみむとてまかりける時にやまざきにてわかれをしみけるところにてよめる

しろめ

いのちだに心にかなふ物ならば何か別れのかなしからまし

○命サヘ心マカセニナツテ死ナズニ居ラルヽ物ナラ　ナニガサテ御別レ申スガコレホドニ悲シカラウゾイ　人ノ命ハ御歸リノ時ニ分マデノヿモ知レヌニヨツテサ　悲シイワイノ

山ざきより神なびのもりまでおくりに人々まかりてかへりがてにしてわかれをしみけるによめる

みなもとのさね

人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなむ

○人ノサセル旅デハナイ我心カライク旅ヂヤニ　タイガイナヿナラ　モウイキトモナイト云テドレーヤカヘラウゾ

いまはこれよりかへりねとさねがいひけるをりによみける

藤原ノかねもち

したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず

○ドコマデモイーツショニイキタイトシタハレテコレマデキタ心ニ着（ツイ）テアル我身ヂヤニ　其心ガドコマデモ貴様ニツキソウテ參レバ　コレカラ歸ルトキニハ此身ハ心トハナレテ心ノナイヌケガラヂヤニヨツテ　カヘリシナニハ道モエシリマセヌ

藤原ノこれをかゞむさしのすけにまかりける時におくりに相坂をこゆとてよみける

つらゆき

かつ（かつ）こえて別れもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそ有けれ

○此坂ハ逢坂ナレバ人ニ逢ウハズヂヤニ　此坂ヲコエツヽソシテ

マア別レテイカーツシーヤルヿカ　コレデハ逢坂ト云名ハ　頼モシサウニ聞エテ　頼ミニナラヌッサ名ヂヤワイノ　コレガ人ダノメト云モノヂヤ　人ダノメトハ　人ニ頼モシウ思ハセテオイテソシテ其通リデモナウテムダナ事ヲ云ヒマス　【千秋云、かつとは、逢坂をこえながら、かつわかれゆくかといへる意にて、逢と別るると、まじはる事にいへるとば也、】

おほえのちふるがこしへまかりけるうまのはなむけによめる

藤原ノかねすけの朝臣

君がゆくこしのしら山しらねどもゆきのまに〳〵跡はたづねむ

○貴様ノ下ラーツシーヤル北國ノ道ハ拙者ハ不案内ナレド　白山ハモトヨリノヿ總躰雪ノ深イ國ヂヤト云ヿナレバ　貴様ノトホツテイカーツシーヤーツタソノ雪ノ跡ヲタヅ子テ　拙者モアトカラ參ラウ

人の花山にまうできてゆふさりつかたかへりなむとしける時によめる

僧正遍昭

夕ぐれのまがきは山と見えなゝむよるはこえじとやどりとるべく

○夕(ユフ)カタノ此庭ノマガキハ　山ト見エレバヨイニ　サウシタナラ夜ルハドウモ山ハコエラレマイト思ウテ　アノイヌル人モ　コヨヒハコヽデトマルヤウ(べく)ニ

山にのぼりてかへりまうできて人々別れけるついでによめる

幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに〳〵

○サテカウ御別レ申スハ　キツウ御殘念ナガ　ト云テ拙僧ガナンボオトメ申シタトテトマリハナサルマイホドニ　コレハナンデモ此山ノ櫻ニウチマカセテ　トメウドトメマイド　アノ花シダイニ致サウワイ　オノ〳〵ガタモヨモヤアノ花ヲフリモギーツテエカヘリハナサルマイワサテ

うりんゐんのみこの。舎利會に山にのぼりてかへりけるに櫻の花の本にてよめる

僧正へんぜう

山風にさくら吹まきみだれなむ花のまぎれに立とまるべく

○山風ニ此櫻ノ花ヲ吹卷(フキマイ)テチリミダレヨカシ　ソシタラ此花ノチリミダレルノニマギレテ　カヘル道ガシレヌト云テ　君ガオトマリナサルヤウニ

幽仙法師

○濟 ことならば君とまるべくにほはなむかへすは花のうきにやはあらぬ

○トテモ見事ニ咲クホドナラバ　君ノ殘リ多ウ思召テオトマリナサルヤウニ咲イタガヨイソレニ君ヲオカヘシ申スノハ　花ノキコエヌノデハナイカ　花ノキコエヌノヂーヤワサオカヘシ申サウヤウハナイワサテ　結句ヌ　花ヨソチガタメニモウイヿデハナイカソチガタメニモヤイヿヂヤワサテ

仁和のみかどみこにおはしましける時に ふるの瀧御らんじにおはしましてかへり給ひけるによめる

兼藝法師

あかずして別るゝ涙たきにそふ水まさるとや下は見ゆらむ

○ノコリオホウテ御別レ申ス拙僧ガ此涙ガ瀧ニソウテ流レル コレデハ川下デハ 水ガマシタト見エルデカナアラウ

かむなりのつぼにめしたりける日おほみきなどたうべて雨のいたうふりければゆふさりまで侍りてまかり出侍けるをりにさかづきをとりて

つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

○アノ萩ノ花ヲ此雨ニヌラシテシヲラカシテシマウノハ キツウ惜ウ思ヒマスレド マダソレヨリモ貴様ノ此雨ニヌレテ御歸リナサルノニ御別レ申スノガサ ナホサラ御名殘ヲシイヿヂヤト存ジラレマスワイノ マアマヒトツアガリマセ ソノウチニ雨モヤミマセウワサテ

とよめりけるかへし

兼覧王

をしむらむ人の心をしらぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

○ソノヤウニ別レヲ惜ンデ拙者ヲ御深切ニ思ウテ下サレウトハ今日マデ夢ニモ存ゼナンダ サウシタ貴様ノ御志シヲマダ存ゼナンダウチニ 拙者ガ身ハッ此秋ノ時雨ノフルト云ヤウニ舊(フル)ウナッテモーウラチノアカヌ物ニナリマシタ マソーット早ウ若イウチニ其御志シヲ知ッタラ 別シテ大慶ニゴザラウニア、殘念ナ

かねみのおほきみにはじめて物がたりして別れける時によめる

みつね

わかるれどうれしくも有かこよひより逢見ぬさきに何を戀まし

○御別レ申スハナゴリヲシウハアレド サテ〳〵マア嬉シイヿカナ ナゼニト申スニ今夜ヨリサキイマダ御近付キニナラナンダウチニハ 何ヲオナツカシウハ思ヒマセーウゾ 今夜始メテ御近付キニナリマシタレバコソ 御別レ申スナレ スレーヤ別レノナゴリヲシウ思ハレルヤウニ御近付ニナッタ所ガ ナンボウカ 嬉シイヿヂヤワサテ

題しらず

よみ人しらず

あかずして別るゝ袖のしら玉は君が形見とつゝみてぞゆく

○ノコリ多ウテ別レル袖ノ涙ハ トント玉ノヤウニ落ルガ此玉ヲバソコモトノ形見ヂヤト存ジテ卽チ此袖ニツ、ンデッ參ル

かぎりなく思ふ涙にそほぢぬる袖はかわかじ逢む日までに

○此別レヲナンボウカ悲シウ思フテ此ヤウニ泣ク涙ニヒーツタリトヌレタ此袖ハ 又逢ウ日マデハ乾(カワ)キハスマイ ナゼニト云ニコレホドニ悲シウ思ウヿヂヤニヨッテ イツマデモ忘レラレマイホドニ イツヲ限リト云ヿモナウ泣テヌラスデアラウニヨッテサ

かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめむ

○此春雨ハ　トテモフルホドナラバ　マーツクラニナツテマソーツトツヨウフーツタガヨイ　ソシタラ此雨チイヒタテニシテ　別レテイク君チトメウニ

しひてゆく人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふ迄ちれ

○ナンボトメテモトマラズニ　シヒテ別レテイク人チトメウニ櫻花ヨ　道ノシレヌヤウニチリウヅンデ　ドレガ道ヂヤトアノ人ノ迷ウテエユカヌホドニチツテクレイ

しがの山ごえにていし井のもとにて物いひける人の別れけるをりによめる　　つらゆき

むすぶ手のしづくにゝごる山の井のあかでも人に別れぬる哉

○總躰此ヤウナ山ノシミヅハ　淺イ物ヂヤニヨツテ　飲ウト思ウテスクヘバ　其手カラ落ル雫デヂキニ濁ルニヨツテ　思ウヤウニスクウテノマレヌ飲タラヌ物ヂヤガ　テウド其通リニ　サテ〳〵マア殘リ多イニアノ人ニ別レタヿカナ

道にあへりける人のくるまに物をいひつきてわかれけるところにてよめる　　とものり

下の帶のみちはかた〳〵わかるとも行めぐりても逢むとぞ思ふ

○帶チスルニ　ウシロヘアテタ所デハ　端ノ方ガ兩方ヘワカレルケレ圧　前ヘマハシテムスブ所デハ又イキアウ物ヂヤガ　共通

リニ今イク道ハカウ別々ニワカレテイク圧　又ソノウチドウシテナリ圧　出合ウワサテ

古今和歌集巻第九遠鏡

羇旅哥

もろこしにて月を見てよみける　安倍ノ仲麻呂

天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出し月かも

○今カウ空ナヅヽトハルカニ見渡セバ　アレ〳〵海ノウヘヽ月ガデタ　アヽヽアノ月ハ　故郷ノ三笠山ヘ出タ月デアラウカイマア

此哥は　むかしなかまろをもろこしに物ならはしにつかはしたりけるに　あまたのとしをへてえかへりまうでこざりけるを　此國より又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできなむとて　出たりけるにめいしうといふところのうみべ　にてかの國の人うまのはなむけしけりよるになりて月の　いとおもしろくさし出たりけるを見てよめるとなむかたりにつたふる

おきの國にながされける時に船にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける　小野ノたかむらの朝臣

わたの原八十嶋かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海士の釣舟

○ユクサキハイクラトモナク段々ニアマタアル嶋々ヲ過テイクベキ海上ヘ　今出船シタト云ヿヲ故郷ノ人ニハシラシテクレイコレアノアチヘ帰ツテイクアマノ釣船ヨ　餘材結句の説わろし

題しらず　よみびとしらず

みやこ出てけふみかの原いづみ川々風寒しころもかせやま

○今日京ヲ出テ此ミカノ原ヘキテアノ向ヒニ見エル山ハ鹿背山ヂヤガ　此イヅミ川ノ川風ガキツウ寒イニ　アノカセ山ヨ　オレニキルモノヲ一ッ借せ山　【千秋云、二の句のいひかけ、鹿背山を見るとのいひかけなり、譯は其こゝろなり、】

ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に嶋がくれゆく船をしぞ思ふ

○夜ノウス〳〵トアケテクル時分ニ　海上カラ見レバ　アノ向ヒナ明石ノ浦ガ　朝霧テカクレテ見エヌヤウニ　ナツテイクアノケシキヲ　遠ウヨソニ見テ過テイク　此船中ノ心ハサテモ〳〵心ボソイ物ガナシイヿヂヤ

此哥はある人のいはくかきのもとの人まろが也

此哥は、打聞に出されたるごとく、今昔物語に、小野ノ篁ノ卿の哥とてのせたるぞ、よろしかるべき、但し明石にて、海をながめてよめるとあるは、下ノ句を心得誤りて、おしあてにいへる詞也、今昔物語古本、廿四の巻に出たり、餘材四の句の説たがへり、すべて嶋がくれといふことを、よく解得たる人なし、嶋がくれとは、海をへだてたる所の、かくれて見えぬをいへり、必しも嶋にはかぎらず、此哥にては、朝霧にかくれて、明石の浦の見えぬを、海の沖

よりいへる也、　【千秋云、嶋がくれゆく船とは、船の嶋がくれゆくと聞ゆれど、さにはあらず、朝霧に明石の浦のかくれゆくを、見つゝゆく船といふ意也、此所むかしより人皆まどへり、】

あづまのかたへ友（ツレニスル人）とする人ひとりふたりいざなひていきけり三河ノ國八ッ橋といふところにいたれりけるにその川のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりけるを見て木の陰におりゐてかきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる　在原ノ業平ノ朝臣

から衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅をしぞおもふ

〇［一］［きつゝ］故郷ニナジンダ妻ガアレバ　別レテハル〴〵ト來タ此旅ガサコ、ロボソウ物ガナシウ思ハル、

むさしの國としもつふさの國との中にあるすみだ川のほとりにいたりてみやこのいと戀しうおぼえければしばし川のほとりにおりゐて思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかなと思ひわびてながめをるにわたしもりはや船にのれ日もくれぬといひければ船にのりて渡らむとするにみな人ものわびしくて京におもふ人なくしもあらずさるをりに白き鳥のはしとあしとあかき川のほとりにあそびけり京には見えぬ鳥なりければみな人見しらず渡し守にこれは何鳥ぞととひければこれなむみやこ鳥といひけるをきゝてよめる

名にしおはゞいざことゝはむみやこ鳥わが思ふ人はありやなしやと

〇都ト云フ名ニツイテ居ルナラバ　定メテ京ノ事ヲヨウ知テ居ルデアラウホドニ　ドレーヤモノトハウ都鳥ヨ　コチガ思ウ人ハ無事（ありや）デヰルカドウヂヤ（なしや）

題しらず　　よみ人しらず

きたへゆく鴈ぞなくなるつれてこし數はたらでぞかへるべらなる

〇北ノ方ヘイヌル鴈ガサアレマア鳴クワイノヲシバカリカト思ヘバ　アノ鴈モツレダツテキタ友ノ数ハタラヌヤウニナツテサ　歸ルデアラウ　ソレデアノヤウニ泣（ナイ）テイヌルト見エル

此哥はある人男女もろともに人の國へまかりけりをとこまかりいたりてすなはちみまかりにければ女ひとり京へかへりける道に歸る鴈の鳴けるをきゝてよめるとなむいふ

あづまのかたより京へまうでくとて道にてよめる　お　と

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれみやこのさかひなるらむ

〇［四］ドノアタリガ京ヂカクノ山ヂヤヤラ　片時（カタトキ）モ早ウカヘリタウ思ヘバ　モウ京ノ山ガ見エルカ〳〵ト氣ヲ付ケテ見ルケレド　ドレヂヤヤラシレヌ　アノヤウニ山ヲカクシテ　ハーツキリト見セヌ春ノ

霞ガッキコエヌ霞ヂヤ

　こしの國へまかりけるときしら山を見てよめる

きえはつる時しなければこしぢなるしら山の名は雪にぞ有ける

〇ノコラズ(はつる)消テシマウ時ト云ハナクテ　イツデモアノヤウニ雪ガアレバ　此北國海道ノ白山ト云山ノ名ハサ雪ノヿヂヤワイ　打聞說名といへるにかなはず

　あづまへまかりける時道にてよめる　　つ　ら　ゆ　き

糸による物ならなくに別路のこゝろぼそくもおもほゆるかな

〇ナンデモ糸ニヨレバ細ウナルヂヤガ　カウシテ故郷ヲ別レテキタ旅ノ道ハ　ソノヤウニ糸ニヨル物デハナイノニ　サテ〱マア心ボソウ思ハルヽヿカナ

　かひの國へまかりける時道にてよめる　　み　つ　ね

夜を寒みおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

〇此ゴロハ夜ガ寒サニ　草ヘハ霜ガフツテアルヲ　イク夜カ其霜ヲハラウテハ子ハラウテハ子　野ノ草ヲ枕ニシテ　モウハヤ何度(ナンド)モ何度モ子タ

　たぢまの國のゆへまかりける時に　ふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたらべけるに　とも(ツレテアッタ)にありける人々うたよみけるついでによめる　　藤原ノかねすけ

夕づくよおほつかなきを玉くしげふたみのうらはあけてこそ見め

〇〔三〕此二見ノ浦ノケシキナ　見タイ物ヂヤガ　コヨヒハ宵月夜デマダ影ガウスケレバ　ハツキリトハ見エヌニ　夜ガ明テカラサットクト見ヤウ

　これたかのみこのともにかりにまかりける時に　あまの川といふところの川のほとりにおりゐてさけなどのみけるついでにみこのいひけらく　かりしてあまのかはらにいたるといふ心をよみてさかづきはさせといひければよめる

　　ありはらのなりひらの朝臣

かりくらしたなばたつめにやどからむ天の河原に我はきにけり

〇此方ドモハ今日ハ一日狩ヲシテアルイテ　コレハ〱天ノ川ノ川原ヘキタワイ　日モクレタニ　サテヨイ所ヘキタ　天ノ川ナレヤ　タナバタニ宿ヲカラウ

　みこ此歌をかへす〴〵よみつゝかへしえせずなりにければ(トウ〱カヘシガテケナンダレバ)　ともに侍りてよめる　　き　の　あ　り　つ　ね

一とせに一たびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思ふ

〇イヤ〱天ノ川デハ一年ニ一度ヅヽ御出ナサル　彦星ト云御方ヲ待ツヂヤニヨッテ　ナカ〱外ノ者ガ　宿カラウト云タトテモ　借ス人モアルマイトサ存ズル

朱雀院のならにおはしましける時に手向山にてよめる

すがはらの朝臣

此たびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵

○此度ノ旅ハ御供ユエ　ヌサモ得用意致サナンダ　ソレユエ神ノ御心マカセニト存ジテ即チ此山ノ紅葉ノ錦ヲソノマヽ手向マスル

素性法師

たむけにはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

○神へノ手向ニハ　出家ノ身モ此ツヾリノ袖ナリトモ　切リキザンデ麻(ヌサ)ニシテ手向ルハズナレドモ　此ヤウニ見事ナ紅葉ノ錦ヲハラ一ッハイ見テ御座ナサルヽ神ナレバ　此ヤウナキタナイツヾリノ切レナドハ御受ケハナサルマイ　御返シナサルデカナゴザラウ　ソレユエサシヒカヘテ手向マセヌ

古今和歌集巻第十遠鏡

物ノ名

うぐひす　　藤原ノとしゆきの朝臣

心から花のしづくにそほぢつゝうくひずとのみ鳥のなくらむ

○オノガ心カラスキデ花ノ雫ニヌレナガラ　ツライコトヂヤ乾(カワ)カヌト云テ　鶯ノヒタスラアノヤウニナクノハ　ドウ云コトヤラ

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待わびてなくなる聲の人をとよむる

○郭公ガ待ツ妻ノ來ベキジセツガ過テコヌカシテ　マチカ子テナクアノ聲ガ　人ヲビーックリサセル　郭公のうへの戀の哥也　餘材わろし　打聞よろし但し結句の說はわろし

うつせみ　　在原ノしげはる

涙のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからむや

○涙ノウツ川ノ瀬ヲ見レバ　水玉ガ　トントマコトノ玉ガサチルヤウナワイ　アノ玉ヲヒロウタナラ　ホンノ玉デハナイホドニ　袖へ入レウトシタナラ　ヂキニ消ルデアラウカ　餘材わろし

かへし　　壬生ノ忠岑

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

○貴樣ハ袖ヘ入レウトシタナラヂキニキエルデアラウカト云ハシ

ヤルガ　デモ袖ヲオイテ外ニ玉ヲツ、マウカ　袖ヨリ外ニ玉ヲツツマウ物ハナイハサテ　スーレヤ貴様ノ袖ヘツ、ンデ　コレガサソレデコザルト云テ　ワシガ袖ヘウツサーツシーヤレ　ワシモ見ヤウワサ　打聞よろし　餘材わろし

う　め　　よみ人しらず

あならめにつれなるべくも見えぬかな戀しかるべき香はにほひつゝ

○梅ノ花ハヤレ〳〵ウイ物ヤ　マモナウ散テシマイサウデ　目ニ常ー住見ラレサウニモ見エヌヿカナ　ソノクセアトデ戀シカリサウナ香ハヨウニホウテサ

かにばざくら　　つらゆき

かづけども浪のなかにはさぐられで風ふくごとにうきしづむ玉

○海ニ浪ガ立テ水玉ノチツテキエルノハ　玉ノヤウナガ　ソレヲホンノ玉ヂヤト思ウテ其海ノ底ヘハイーツテ取ウトスレドモ　浪ノ中デハドウモ手ニアタライデトラレヌ　ソシテ風ノフク度ニテウド底ニアル玉ガ　ウイテハシヅミ　ウイテハシヅミスルヤウニ見エル

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすもゝのはながめておもふべらなり

○モウ春ノアヒダハナニホドモナケレバ　ソレヲ殘リ多ウ思ウテ人ト同シヤーウニ鶯モシンキサウナカホシテ　物思イスルヤウナサウ見エル

からもゝの花　　ふかやぶ

あふからもものはなほこそかなしけれ別れむことをかねておもへば

○逢ツタラウレシイハズヂヤニ　逢ヒナガラモヤーツハリ　ソレデモサカナシイワイ　アヘバマダ別レヌサキカラハヤ別レルヿヲ思ウニヨツテサ

たちばな　　をのゝしげかげ

あしひき（清）の山たちはなれゆく雲のやどり定めぬ世にこそ有けれ

○山カラ立テハナレテイク雲ノトマリドコロノ定マラヌヤウナモノデ　トント行末ノサ　ドウナラウヤラシレヌ世ノ中ヂヤワイノ

をかたまの木　　とものり

打聞をかたまの木の說らけがたし

みよし野のよしのゝ瀧にうかび出る沫をかたまのきゆと見つらむ

○吉野ノ瀧ヘウキデル水ノ沫ヲ　人ハ玉ガ出テキエルト見ルデアラウカ

やまがきの木　　よみ人しらず

横井ノ千秋云、山柿は、ちひさくむらがりてなる柿にて、世に信濃柿とも、吉野柿共いふ、又村に黒柿（キ）といふも是也、

秋はきぬ今やまがきのきり〴〵すよな〳〵なかむ風の寒さに

○秋ガキタ　コレデハ風ノ寒サニマガキノ蛬ガモウ（今）オーツヽケ

ヨナ〳〵ナクデカナアラウ

あふひかつら ○濟

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしとおもはざるべき

○コレホドニ逢フ事ガマレニナツタ人チ ドウシテツライト思ハズニ居ラレウゾ ツラウ思ハイデハ

人めゆゑ後にあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ ○濟

○人目チツヽムユヱニ コレカラ後ニモシ逢フ丁ガ遠ウナツタナラ ソノワケハシラズニ コチガツライノニナルデモアラウ

くたに 僧 正 遍 昭

ちりぬれば後はあくたになる花を思ひしらずもまどふてふ哉

○花ハチツテシマヘバ後ニハ芥ニナツテシマーウテ ナンデモナイ物ヂヤニ ソレチエガテンセズニアハウナ サテモマア花ニマヨウ丁カナ

さうび つ ら ゆ き

われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

○オレハ花ト云物チ今朝始メテヨ見タガ 花チバ世ー間ノ人ガアダナ物ヂヤト云ヂヤガ ナルホド見レバ アダナ物ト云ベキ色ヂヤワイノ 打聞よろし

をみなへし と も の り

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも糸をみなへし

○露チ玉ニシテツナグトテヤラ 蜘ガ女郎花ノ花ヘモ葉ヘモミナ糸チ引テカケタ

朝露を分そほぢつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

○女郎花チ見ヤウト思ウテ 朝ノ露チ分テヌレ〳〵アルイテ今日サ野ヤ山チドコモカシコモミナトホーツテ知ッタ

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふいつもじをくのかしらにおきてよめる つ ら ゆ き

をぐら山みね立ならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

○小倉山ノ峯ノアタリチアチコチアルイテ鳴ク鹿ノ コレマデ經ヘテキタ秋ノ数チサ何シ年ヂヤカシル人ハナイ

きちかうの花 と も の り

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆく

○野ノケシキチ見レバ 冬ガレノ物ガナシイ時ー節ガ近ウナツタワイ 露ノオイタ草ノ葉モ色ガカハツテキタ(ゆく) 秋とは、物がなしき時節をいへり、さる例秋ノ部にも、「秋はきぬ紅葉はやどにふ々など有、考へ合すべし、

しをに よ み 人 し ら ず

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞうつろひにける

○ドレーヤ昔ノ在所ノ花チイテ見ヤウゾト思ウテ ワザ〳〵キタ物チモウサ色ガカハツタワイ

りうたんのはな　　　友のり

わがやどの花ふみしだくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

○コチノ庭ノ大事ノ花ヲフミアラスアノ鳥ヲオウテヤラウ(うたん)　住ム野ガナイカシテ　トカクコヽヘ來(キ)オル　しだくは、しのぐと本同言也

をばな　　　よみびとしらず

をばなは尾花也、打聞の說わろし、萬葉の哥の見誤リ也

ありとみて頼むぞかたきうつせみのよをばなしとや思ひなしてむ

○總ジテ世ノ中ノ事ハナンデモ　有ル物ヂヤト思ウテ　頼ミニシテモ頼ミニハサナリガタイ　スレーヤ〔三〕世ノ中ノ事ヲバ皆無イ物ヂヤト　レウケンヲツケルガヨカラウカイ

けにごし　　　やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露のそむるばかりを

○花ヲ見テサーツキーヤークニ濃イ色ヂヤト見ヤウモノカ　アレハ花ノ色ノコイノデハナイ　オイタ露デヌレテソレデアノトホリニ濃(ロ)ウ見エルバカリヂヤモノヲ

二條ノ后春宮のみやすむ所(御毋儀)と申ける時に　めどにけづり花させりけるをよませ(オコマセナサレタ)給ひける　　　ふむやのやすひで

花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

○此ケヅリ花ヲ見マスレバ　花ノ咲クベキ木デモ　アルマイケレド花ガサキマシタワイ　致セバナルマジイ木ヘモ木實(コノミ)ノナルヤウニ　年ヨリマシタ私ガ此身モドウゾ立ー身イタス時ー節モアレカシト願ヒマスル儀デゴザリマス　餘材四の句の初メの說いとわろし

しのぶぐさ　　　きのとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞ散ける

○近ー所ナ山ガ高サニ　ジヤウヂウ嵐ノフク里ノ花ハサ(ロ)　咲テアルマモナシニツイ散テシマウワイ　打聞四の句の說わろし

やまし　　　平ノあつゆき

郭公峯の雲にやまじりにしありとはきけど見るよしもなき

○郭公ハ峯ノ雲ノ中ヘトンデイタカシラヌ　アソコラデ鳴クトハ聞エルケレド　ドウモ形ハ見ヤウガナイ

からはぎ　　　よみ人しらず

千秋云、淸暑堂の御神樂の時に、人長、かれたる荻(ヲキ)の枝を持ツと有(リ)、これを枯荻(カラヲギ)といふよし、體源抄などに見え、又いとしろく枯たるをぎを、たかやかにかざしてなど、源氏物語にも見えたり、さればこれはもと、からをぎと有て、哥も二の句、からを木毎にと有けむを、題の荻(ヲギ)を、萩(ハギ)に誤りて、哥のてにをはをも、それによりて、改めつるものにはあらじ歟、

うつせみのからはきごとにとゞむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき

○蟬ノカラヲバヌギステヽドノ木ニモトメテオイテ　其身ハドコヘカ飛シデイヌルガ　此人ノ間モテウドソンナモノデ　人ゴトニ死ヌレバ皆カラダヲバ棺ノ中ヘトメテオケドモ　カンジンノ玉シヒハ　ドコヘトンデイヌルヤラ　ユクヘガシレヌヤウニナツテシマウノハサテカナシイヿヂヤ　打聞よろし

かはなぐさ　　ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまむうつゝにだにもあかぬこゝろを

○逢ヒタイト思フ人ハ夢ニデモ見レバ心ガヰルト云ヿナレドモ〔一〕夢ニ見タバカリデドウシテ心ガヰヤーウゾ　シヤウジンニ逢テサヘマダタラヌヤウニ思ウ心ヂヤモノヲ

さがりこけ　　たかむこのとしはる

花のいろはたゞ一さかりこけれどもかへすがへすぞ露はそめける

○花ノ色ノ濃イノハ　タツタ一サカリデ　ワヅカノ間バカリナレドモ　ソレヲ露ハ毎朝毎晩ナンベンモ〳〵サソメルワイ　タツタ一サカリナモノヲソノヤウニ染ズトモヨイヿヂヤ

にがたけ　　しげはる

にがたけは、次なるかはたけと共に、くさびらの名なり、うつほ物語にみゆ、【千秋云、にがたけは苦茸、かはたけは革茸なり】

いのちとて露をたのむにかたければ物わびしらになく野べの虫

○野ヘンノ虫ハ　露ヲ命ヂヤト思ウテ頼ミニスレドモ頼ミニナリニクイハカナイ物ヂヤニヨツテ　難義ニ思ウテカナシサウニ鳴ク

かはたけ　　かげのりの王

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月ふきかへせ秋のやま風

○夜ガフケテモウ半分ホドモタケテイクアノ月ヲ東ノ方ヘ吹カヘセ秋ノ山ノ風ヨ

わらび　　しんせい法師

けぶりたちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけむ

○ワラ火ナラバ煙モ立ッテモエルハズヂヤニ　煙モタヽズモエルトモ見エヌ草ノ葉ヂヤモノヲ　タレガワラ火ト云名ヲツケソメタヿヤラ【千秋云、此哥は、物ノ名のよみざまにあらざれば、此部に入べきにあらず、】

さゝまつ　ぴは　はせをば　きのめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

○近イウチニ逢イマセウトタガヒニ約束ヲシテオイテ　其日マデハツイワヅカノ間タノヿニ思ウテ待ッアヒダニサ大分日数ガタツタワイ　コレデハドウアラウカ逢ウヿハ心モトナイモノヂヤ逢ハウト云ワシガ心アヒヲバ人ニ見ラレテマア　エヽコンナヿナラ約束セネバヨカツタニ

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくるみをばすてぬ物から

○イロ〳〵サマ〳〵ノウイ事ニアフテ来タ此身チエ ステモセズニ居ナガラ ソノウイ事ノカズ〳〵チトリアツメ テナゲカウヿデハナイ アヽムヤクナヿヂヤ

からことゝいふところにて春の立ける日よめる　安倍ノ清行ノ朝臣

浪の音のけさからことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらむ

○アノ浪ノ音ノケサカラカハツテ聞エルノハ 此唐琴ノ調子モケサカラハ 春ノ調子ニナツテ キノフマデトハ改マーツタカシラヌ

いかゞさき　かねみのおほきみ

かぢにあたる浪のしづくを春なればいかゞさきちる花と見ざらむ

○舟ノカヂヘアターツタ浪ノクダケテチル雫ガ 今ハ春ナレバ花ガチルト思ハレル トント花ヂヤ アレチドウシテ花ト見ヌ者ガアラウゾ 花のさきちるといふは、たゞちること也、例皆然り、打聞わろし

からさき　あほのつねみ

かのかたにいつからさきにわたりけむ浪路は跡ものこらざりけり

○見レバアレアノ辛崎ニ 人ガ立テヰルガ アソコヘハ今マデニ何時渡ツテ イツカラアヽシテ居ルヿヤラ 今マデニ渡ツタナラ其跡ガアリソナ物ナレドモ 浪ノ道ナレバ渡ツタ跡モ残ツテハナイワイ

伊勢

浪の花おきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

○浪ノウチヨセテクルノハ テウド花ノチツテクルヤウニ見エルガ 此ヤウニ打ヨセテ磯ヘチツテクル浪ノ花ハ アノ沖ヘサイタ花ガ 沖ノ方カラチツテ来ル様子ヂヤ サテ花チサカスノハ春ノヿ也 浪ノヨセテクルノハ風ユヱ也 スレーヤ水ノタメニハ風ガ春ニナリカハツテ アノヤウニ花チサカスカシラヌ 打聞ノ説上ノ句にかなはず

かみやがは　つらゆき

うばたまのわが黒かみやかはるらむかゞみの影にふれるしら雪

○オレガ黒イ髪ガ色ガカハツテ シラガニナツタカシラヌ 鏡ヘウツヽタ影チ見レバ ツムリヘマーツ白ニ雪ガフーツタ

よどがは

あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

○山里ニ住ンデ居レバ ジヤウヂウ雲ノハレル時モナイ サウナウテサヘ氣ノツマーツタ山ノ中ヂヤニ 何シトセイト云ヿデ此ヤウ

ニ雲サヘ晴ルトキモナイヿゾ

かた野　　たゞみね

夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな

○拙者ガ身ハテーウド　ウヘニハ夏ノ草ガ一ハイハエシゲツテ　アルヤラナイヤラシレヌ沼水ノヤウナモノデ　世間ノ人ニモシラレズ立身モエセネバ　テウド又ソノ沼水ノ流レテユク所ノナイヤウニサテ〳〵心ノユカヌヿカナ　オモシロウナイヿカナ

かつらの宮　　源ノほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを

○ソウタイノ木ハ秋ハ實ガナル物ヂヤガ　月ノ中ナ桂ハ　秋ガキタトテ實ガナルカ　實ハナリハセヌ　タヾ秋ハ常ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ四方ヘチラスバカリノヿヂヤモノヲ　ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカクベツニ賞翫スルハドウ云ヿゾイ

百和香　　よみ人しらず

花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

○花ト云花ヲバドレモカレモ皆　殘リオホイニチラシテシマーウタヤツナレバ風ヲバオレハドレホドフソクニ思ウゾ　タイテイフソクニ思ウヿデハナイ

すみながし　　しげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば秋くる鴈はかへらざらまし

○春ノ霞ノベツタリトフサガツテアル中ニ　通ツテイク　道ガナイナラバ　秋キタ鴈ガ春カヘリハスマイニ　霞ノ中ニモ道ガアルデ春ハカヘルデアラウ

おき火　　みやこのよしか

流れいづるかたゞに見えぬ涙川おきひむときや底はしられむ

○流レテ出ル源サヘドチヂヤカシレヌ　涙川ナレバ　マシテ底ノ深サハイカホドアルカシレヌガ　モシ沖ノ深イ所マデ水ノ干ル時ガアツタナラ　底ノ深サモ見エルデアラウカ

ちまき　　大江ノ千里

のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく

○後蒔ノオクレテハエタ苗デモ　ムダニナツテシマイハセズニ　秋ハヤーツハリ實ノツテ頼ミノアル　田ノ稲ヂヤトサ聞及ンデ居ル　スレーヤ學問デモナンデモオソ　ガケヂヤト云テ爲マイヤウハナイゾヤ　打聞四の句の注俗意也

はをはじめるをはてにてながめをかけて時の哥よめと人のいひければよめる　　僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分ゆけば心ぞともにちりぬらべらなる

○ヅンブン日ニ見アクカト思ウテ　花ノタントト咲テアル中ヲ分テイケバ　花ニ目ガ移ッテ　コチノ心ガサ、花トイーツショニアチコチト　チツテイクヤウナ心モチガスル

遠鏡三の巻のをはり

古今和歌集巻第十一遠鏡

戀歌一

題しらず　　よみ人しらず

郭公なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

○〔上〕ドノヤウナワケナ物ヤラマダシラズニワシーヤマアムチーヤナ戀ヲスルヿカナ

素性法師

音にのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

○音ニキクバカリデ〔の白露〕マダ見タヿモナイ人ヲ思ウテ　夜ルハネラレネバオキテ居テ　昼ハ又戀シサニエコタヘイデ消サウニ思ハル、

紀ノ貫之

よし野川岩浪たかくゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし

○〔上〕アノ人ヲオレーヤ　トウカラサ思ヒソメタ　又オレガアノ人ヲ思ウノハ　サイショカラモウ吉野川ノ早瀬ノヤウニヤルセモナウ思ウ　【千秋云、後の譯の意は、「たきつ心をせきぞかねつる、」「たきつせの中にもよどはありて」ふを云々、などの意也、】

藤原ノ勝臣

白浪のあとなきかたにゆく船も風ぞたよりのしるべなりける

○浪ノ上ノ人ノトホツタ跡モナイ方ヘイク舟デモ　風ト云物ガサ手ヨリノ案内者ヂヤ　ソレニワシガ戀ハソンナ風ノヤウナタヨリニセウ物サヘナイワイノ　餘材打聞ともにわろし　例をもてしるべし

在原ノ元方

音羽山おとに聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

○音羽山ハ逢坂ノ關ノコチラニアル山ヂヤガ　其山ノ名ノトホリニコナタデ音ニハキヽナガラ　關ガアツテコエラレネバコチラニヂーツトトマツテ居ルヤウニ　逢坂ト云名ノヤウニ思フ人ニ逢フヿモエセズニ　何ン年モタテルヿカナ　サテモ早ウ逢ヒタイ

立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

○此ヤウニヨソニハナレテ居テモ　心ハジヤウヂウカノ人ノ所ヘバーツカリイテ居レバ　〔つ白浪〕又シテモ〳〵アヽハレ逢タイヿヤトサ思ウ　打聞いとわろし

つらゆき

世ノ中はかくこそ有けれふく風のめに見ぬ人も戀しかりけり

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタヿヂヤワイ　マア聞テ下サレ〔三〕マダ一目モ見タヿモナイ人モ　此ヤウニ戀シイヂヤワイ

右近のうまばのひをりの日むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほのほのかに見えければよみて　つかはしけ

る　　　　　　　　　在原ノなりひらの朝臣

ひをりといふ名は、袖中抄の說のごく（○清）なるべし、

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふやながめくらさむ

〇見ヌデモナシ見タデモナイ人ガ　此ヤウニ戀シイヂヤガコレデハ
ワケモナイヿニ　今日ハ一日シンキニ思フテクラス　デアラウ
カ

かへし　　　　　　　　　　よみ人しらず

しるしらぬ何かあやなく分ていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

〇見タノ見ヌノト分テハ何シノイハウヿゾ　ソレーヤワケモナイ(あやなく)ヿ
ヂヤ　戀ト云モノハ　思ヒバッカリコソハ　イツヅハアハレルシル
ベナレ　其外ノ事ハナニモドウコウト云ヿハナイワイナ

かすがのまつりにまかれりける時に物見に出たりける女の
もとに家をたづねてつかはせりける

みふのたゞみね

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えしきみはも

〇春日野ノ雪ノアヒダカラ　ハエデヽクル草ノチツトバカリ見エ
ソメタヤウニ　ハツ〱ニチーヨーツト見エタ御方(オカタ)ワイノマア

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後
によみてつかはしける

つらゆき

山櫻霞のまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ

〇山ノ櫻ノ花ヲ霞ノアヒダカラ見ルヤウニ　ウス〱ト見タ人ガサ
マアサテ〱戀シイヿヂヤワイ

題しらず　　　　　　　　　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり

〇何シゾノタヨリニコソ物ハコトツケテヤルモノナレ　タヨリデモ
ナイ此ワシガ思ヒノ　カハツタコトハ　此ヤウニ思フ心ヲソノ人
ニツケルノヂヤワイ　カウイフノハ　タヨリニ物ヲコトツケルト
心ヲ人ニツケルト云ト詞ガ同シヿヂヤニヨーツテサ

條材わろし、打聞、いかなる意とも、聞とりがたし、

凡河内ノ躬恒

はつ鴈のはつかに聲を聞しより中空にのみ物をおもふ哉

〇空ヲ飛テイク始メテノ鴈ノ聲ヲ聞クヤウニ　人ノ聲ヲハツ〱ニ
チーヨーツト聞テカラ　心ガヒタスラ　ウテウテンニナーツテサテ
モ〱物思ヒヲスルヿカナ

つらゆき

逢事は雲ゐはるかになる神の音にきゝつゝこひわたるかな

〇コレホド戀シウ思ウケレドモ　ナカ〱逢ハレサウナモヤウハ遠イ
ヿデ　タゞ雲ノ中デ鳴ルカミナリノ遠イ音ヲヨソカラ聞クヤウニ
音ニバーツカリ　聞テ月日ヲタテルコトカナ

よみびとしらず

かた糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉のをにせむ
○一筋ヅヽノ糸ヲ合セテ玉ヲツナグ緒ニヨラウト思ウテ　ソノ糸ヲアチラヘコチラヘトヨリカケテ　モシソレガ一ツニ合ハイデ緒ニナラズバ　玉ツナグ緒ニハ何ヲセウゾ　ワシガ戀モテウドソンナ物デ　此ヤウニイロ〳〵トスレド　モシシゾウ逢ハレズバ　ドウシテ命ガツヾカウゾ　餘材打聞共に、二の句の注わろし、これはたゞ、さま〴〵として、心をつくす事を、たとへたる也、男女のこなたかなたを、たとへたるにはあらず、

夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつ空なる人をこふとて
○ユフカタニハ雲ノ旗手ト云テイロ〳〵ノ雲ガ　タツ物ヂヤガ　テウドソノ雲ノタツ空ノヤウニ何シノ手ガヽリモナイ　遠イ人ヲ思ウトテ　ワシハユフカタニナレバソノ雲ノハタテノヤウニイロイロサマ〴〵トサ物思イヲシマスル

かりこもの思ひみだれてわがこふと妹しるらめや人しつげずは
○苅タマコモノミダレルヤウニ　ワシハイロ〳〵ト心ガミダレテ此ヤウニ思フト云コヲ　妹ハ知ラウカイ　人ガ云テキカナズバコレホドニ思フトハ知リハスマイ

つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとはしのばむ
○〔三〕オキルト云テハナゲキ　ネルト云テハシタウテ　アノアイソモナイ氣ヅヨイ人ヲ此ヤウニ思ハウコカヤ　サテモクチヲシイコヤ　ドウゾ思ウマイゾ

ちはやぶるかものやしろのゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし
○〔上〕ワシハ一日モオマヘノ事ヲ云ダシテ思ハヌ日ト云ハナイ

我戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行ク方もなし
○ワシガ戀ハ　サテケシカラヌ戀デ　虚空ヘ一ツハイニフサガツタサウナ　サウヂヤカシテ　思ヒヲハラシテヤラウト思ヘド　ドーツコヘモ行クトコロガナウテ　ナンボウデモ此思ヒガハレテユカヌ

するがなるたごのうら浪たゝぬ日はあれども君をこひぬ日はなし
○此タゴノ浦ノ浪ハオホカタイツデモ立ツガ　ソレデモサタマ〳〵ニハ此浪デモタヽヌ日ハアレドモ　ワシガオマヘヲ戀シウ思ハヌ日ト云テハケガナ一日モナイ

ゆふづくよさすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もする哉
○アレアノ夕日ノ影ノサス岡ノ松ノ葉ハ　四季トモニ同シ色デ　イツト云ワカチモナイガ　テウドソノヤウニワシハ　イツト云ワカチモナイ戀ヲマアスルコカナ　サテモ〳〵　【千秋云、此初句、夕づくよ、夕づくひ、昔より兩本有しと見ゆ、千五百番ノ哥合に、公經卿「さびしさをいかにとはまし夕づく日さすや岡べの松の雪をれ、季經判にいはく、万葉集には、ゆふづくひさすやと侍り、古今の哥を思ひて、松をよまば、夕づくよとこそ侍るべき云々、か

かれば公經卿は、夕づく日とある本によりてよまれ、季經は、夕づくよとある本につきて、判ぜられたる也、今師も、評は、日とある本によられたり、打聞に、松を待ッにとりなしてとあるは、わろし、其こゝろはなし

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

○山ノ陰ナ川ハ　シゲツタ木ノ下ニカクレテ　ヨソヘ見エハセネド　ゲウサンニサーツト流レオチル物ヂヤガ　ワシガ戀モテウドソノヤウデ　見エヌヤウニカクシテハ居ルケレド　胸(ムネ)ノ内ハサツサト瀧ノ流レルヤウデ　ソレヲセキトメウト思ヘド　中々セキトメラル丶コデハサナイ

吉野川いはきりとほし行水の音にはたてじこひはしぬとも

○吉野川ハケシカラヌ早イ川デ　ドウ〳〵ト鳴ッテ　岩ヲ切リトホシテイクヤウニスルドイ流レヂヤガ　ワシガ戀モムネノ内ハ吉野川ヂヤ　ソレデモタトヒコレデ死(シニ)ハスルト云テモ　吉野川ノヤウニ音ニタテ丶人ニハシラレマイゾ

たぎつせの中にも淀はありてふをなど我戀の淵瀬ともなき

○山川ハ早イ物ナレド　ソレデモ其間タニハ淵ガアツテヨドム所モアルト云コヂヤニ　ワシガ戀ハナゼニ淵ヂヤ瀬ヂヤト云ワカチモナシニ　イッツモ早瀬ノヤウナコゾイ

山高み下ゆく水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも

○山ガ高サニ上(ウヘ)ノ方ヲバイカズニ下ノ谷バッカリ流レル水ノトホリニ　ワシモタトヒ此分(ブン)デコヒジニ丶死ヌルト云テモ　ウハベヘアラハシハスマイゾ　イッツマデモ心ノ内デバッカリ思ウテ居ヨウゾ

思ひ出るときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しき物を

○〔の山の〕〔三〕口(クチ)ヘダシテイハヌデコソアレ思ヒダシタ時ニハソレハ〳〵戀シイ物ヲ

人しれず思へばくるしくれなゐの末つむ花の色にいでなむ

○人ニシラサズニ心ノ内デバッカリ思ウテ居レバキツウジユッナイコレデハドウモタマラヌホドニ〔三四〕イーツソウチダシテノケウ

秋の野の尾花にまじり咲花のいろにや戀むあふよしをなみ

○此ヤウニ心ノウチデバッカリ思フテ居テハ　トテモドウシテモカウシテモ　逢ハレサウナモヤウガナサニ　シアンシテ見レバ〔上〕イーツソウチダシテカ丶ヲウカイ　上句打聞の說よろし

わがそのゝ梅のほつえに鶯のねになきぬべき戀もするかな

○アレコチノ庭ノ梅ノ木ノ高イ枝デ鶯ガナクガ　ワシモアノヤウニ聲ヲアゲテナキモセウヤウニ思ハレル　ホドノ戀ヲマアスルアラレモナイコカナ

あし引の山ほとゝぎすわがごや君にこひつゝいねがてにする

○夜ルモヨヒトヨネラレヌニヨッテ聞テ居レバ　ヒタモノ郭公ガナクガ　アレモワシガ君ヲ思フヤウニ　戀ヲシテネラレヌコトカイ

三四の句は、わが君に戀るとや、こひつゝ、といふ意也、

夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまで我身下もえにせむ

○夏デイハウナラ　テウド家ノマヘデタク蚊遣火ノ　上(ウヘ)ヘアラハレテハモエズニ　イツマデモクスぐ\トフスボツテアルヤウニ　ワシガ身モ此ヤウニイツマデ人ニハイハズニ　胸ヲモヤシテ居ルヿデアラウ　夏なればゝ、夏の物にてたとへていはゞ、といはむがごとし、秋なればともある、それも同じ意也、

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

○ドウゾ戀ヲスマイト思フテ　御手洗川デシタミソギヲ　神ハトウ御(オ)ウケナサレヌサウナワイマア　サウカシテネカラ戀ガヤマヌ

あはれてふとだになくはなにをかは戀のみだれのつかねをにせむ

○思ヒガ胸ニ一ッ杯(ハイ)ニナルトキニハ　聲ヲアゲテアヽヽハレアヽヽハレトイヘバコソスコシハ胸モユルマレ　ソノアヽヽハレアヽヽアハレト云ヿサヘナクバ　戀スル者ハ何ンデモ心ヲヲサメウゾ　テウド萱(カヤ)ナドヲ苅テ亂レタ時ニ　一トコロヘトリアツメテ緒デユヒツカネルヤウニ　戀デ心ガ亂レタ時ニハアヽヽハレアヽヽハレト云ノガ束(ツカ)ネ緒ヂヤ

思ふにはしのぶるとぞまけにける色には出じとおもひし物を

○ナンボシノンデ見テモ　思ウ方(ハウ)ガツヨイニヨッテ　トウぐ\シノブ方(ハウ)ガヲサマケタワイ　イツマデモ色ニハダスマイト思ウタモノヲ

我戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ

○此通リニキツウシノベバ　ワシガ戀スルノハ　人ガシラウカヤ　タレモ知ル人ハアルマイ枕バッカリコソハ　夜ルぐ\シテネル物ナレバ　モシ知ルナラシリモセウケレ

あさぢふのをのゝしのはら忍ぶとも人しるらめやいふ人なしに

○〔一二〕此ヤウニ忍ンデ思フト云ヿモ　君ハ知ウカイシリハスマイ　云テキカス人ナシニハ

人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしのなき

○人ニシラサヌ此思ヒトシタヿワイノ〔三〕マヂカイ所ヂヤケレドモ　ナゼ(なぞと)ニアハレルモヤウノナイヿゾ　千秋云、二の句、なぞとのともじ、顯注打聞などに、たゞなぞ也、とゝいふ辭は、いはれぬやうなれども、とばのたすけにおきたる也、とあるは心得ず、助(タスケ)辭(コトバ)に、ともじを用ひたるヿ、をさぐ\見えず、此とは、かならずもを寫し誤りて傳へたるにて、もとはなぞもにてぞ有けむ、なぞもは、古哥に例多く見ゆ、ちかくは此卷の中にも、かゞり火に云云などもかくと有、もとゝ、字の形よく似たり、

思ふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくどくるしたひも
○イカホド思フタト云テモ　コヒシタウタト云テモ　逢ハレウモノカイ　ドウデアハレルヿデハナイニ　ソレニ又シテモ〳〵ムスブ手モダルイホドセーツ〳〵下紐ガトケル　惣躰シキリニ人ニ逢ヒタウ思ウ時ニハ　下紐ガトケル物ヂヤト云ヿジヤガ　ワシハナニホドアヒタウ思フテ下紐ガトケタト云テモ　トテモ逢ハレハセネバ　何シノセンノナイヿヂヤニ　打聞、下句の説、上句にかけ合わろし、

いで我を人なとがめそ大ぶねのゆたのたゆたに物おもふころぞ
○イヤサコレ貴様タチソノヤウニ　トガメテ下サルナイ　ワシハ大キナ舟ノ浪ニユラレルヤウニ物思ヒデウカラ〳〵トシテ居ルジセツヂヤ　スレーヤアヂナ顔ツキニ見エルハズヂヤ

いせの海に釣するあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる
○戀チスルワシガ心ハ　イセノ海デ猟師ノ釣チスルウケヂヤカシテ　フハラ〳〵トウカレテ　シヅメウト思フテモドウモシヅメラレヌ　釣ノウケト云モノハ　浪ニユラレテ　フハラ〳〵トウキアルク物ヂヤガ　心ガテウドソノヤウニサ

いせの海のあまのつりなはうちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ
○〔一二〕戀ユエニ長[三]イ月日チ此ヤウニジユツナイヿヤトバツカリ思ウテタテルヿデアラウカ　千秋云、あまのつりなはうちはへてくる、とつゞけたるは、いと〳〵長き縄に釣の枝糸をあまたつけて、海の中へ、遠くうちはへおきて、その縄をくりよせあげて、かの釣をくひたる魚共をとるわざあり、これ也、今ノ世にこれを、ながのゝ釣といふは、長縄の釣といへるを、訛れる也、國によりては、ながなはともいへり、此哥うちはへて、くるといへる、よのつねの釣にては、かなはぬ事也、

涙川なにみなかみをたづねけむ物思ふ時のわが身なりけり
○涙川ト云川ノミナカミハドコヂヤカト　ナゼ思フタヿヤラ　其川ノミナカミハドコデモナイ　物チ思フ時ノ此ワシガ身ヂヤワイ　ハテ涙ハ身カラ出ルハサテ

たねしあれば岩にも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめやは
○タネガアレバ岩へモ松ハハエルワイ　スレーヤナンボ出來ニクイ戀ヂヤト云テモ　[四]随分骨チ折リサヘシタナラ逢ハレヌト云ヿガアロカイ　ドコゾデハアハレヌト云ヿハアルマイ

あさな〳〵たつ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり
○毎朝タツ川ノ霧ノ中ニウイテアルヤウニ　イーツヽモ落チ付カヌ思ヒノアル世ヂヤワイ

わすらるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく
○ワスラレル時ガナケレバ〔三〕イロ〳〵ト思ウテ泣テバツカリサ居ルワシーヤ

から衣ひも夕ぐれになるときはかへす〴〵ぞ人はこひしき
○〔一〕〔ひも〕毎日ユフカタニナレバ　カヘス〴〵モツ　カノ人ガ戀シイ
よひ〳〵に枕さだめむかたもなしいかにねし夜か夢に見えけむ
○イツゾヤ戀シイ人ヲ夢ニ見タヿガアツタガ　其夜ハドチラ枕ニドウシテ寢タ時デアーツタヤラ　思ヒダシテ見レド覺エヌ　ソレデ此ゴロモ毎晩〳〵ドウゾ又夢ニ見ヤウト思ヘド　ドチラ枕ガヨカラウヤラ定メウヤウガナイ　餘材打聞共に、上句の說たがへり、よく上下の詞を味ひてしるべし、
戀しきに命をかふるものならばしにはやすくぞあるべかりける
○命ヲ此戀シサノクルシイノニカヘテ　死ナル丶物ナラ　死ヌルノハヤスイヿデサアラウト思ハレルワイ　此クルシイメヲセウヨリ死ンダ方ガハルカマシヂヤ
人の身もならはし物をあはずしていざこゝろみむこひやしぬると
○人ノ身ト云物モナンデモナラハシカラナモノヂヤニ　戀シイ人ニアハズニ居テモソレガナラハシニナツテ　其通リデ居ラル丶モノカ　又ソレデハコタヘラレイデ死ヌル物カ　ドレーヤ逢ハズニ居テタメシテ見ヤウゾ
しのぶればくるしきものを人しれず思ふてふとたれに語らむ
○思フヿヲ隱シテ居ルノハ　サテモ〳〵苦シイニ　此ヤウニ人ニシラレズニ心デバカリ思ウト云コトヲ　誰ニナリトモ語リタイ物ヂヤガ　タレニ語ラウゾ　タレニモ語ラウ人ガナイ
來む世にもはやなりなゝむめのまへにつれなき人を昔と思はむ
○イーツソ早ウ來世ニナツテシマヘバヨイニ　ソシタラ此現在日ノマヘニツレナイ人ヲ　昔ノ事ヂヤト思モワウニ　昔ノ事ヂヤト思フタラ　コレホドニツラウハ思ハレマイワサ
つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな
○アイソモナイ人ヲ戀シウ思フトテ　ワシハマア　山ノ中ナラコタマノヒヾクホドニ　サテモ〳〵大キナタメ息ヲツイテナゲイタヿカナ
行水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり
○流レテイク水ヘ物ノ數ヲカキトメルノハ　ヂーツキニ消テシマヘバ　ナンノセンノナイラチノアカヌヿヂヤガ　ソレヨリマダキツイラチノアカヌヿハ　コチヲ思ウテモクレヌ人ヲ　コチカラバツカリ思フノヂヤワイ　ワシガ戀ハサウヂヤワイノ
人をおもふ心は我にあらねばや身のまどふだにしられざるらむ
○人ヲ戀シウ思ウ心ハ　我心ヂヤケレド　我心デハナイヤラシテ此我身ノマヨフノサヘシレヌ　モシ此心ガキーツト我心ニチガイナクバ　我身ノマヨフノガシレヌト云ヿハナイハズヂヤワサテア丶戀ト云モノハカハツタモノヂヤ

おもひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人のなき

○人モナイハルカナ國ヘイタナラ道デ逢ウ人モアルマイガ　テウドソンナモノデ　ワシガ戀シイ人ノ事ヲ思ヒヤル其心ノイク道モダン〳〵遠ウナルカシラヌ　サウカシテ　アチコチト思ウテ夢ヲ見テモ　思フ人ニアウ夢ハ見ヌ　打聞、上句の意、たがへり、

夢のうちに逢見むことを頼みつゝくらせるよひはねむかたもなし

○セメテハドウゾ夢ノウチニ逢ハウト思フテ　ヒルノ内カラソレヲ頼ミニシテ暮ラシタ夜ハ　ドヲ枕ニドウ寝タナラ夢ニ見ラレウゾドウ寝タ物デアラウゾト心ガマヨウテ　ドウモ寝様ガナイ　餘材打聞共に、結句を解きえず、上なる「いかにねし夜か夢に見えけむといふ哥と、合せて心得べし、

こひしれとするわざならしらば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ

○コレハマア戀デ死ンデシマヘト云ヿサウナ　ナマナカニ夜ルハヨヒトヨ夢ニ見エテ　思ヒヲサセテ　ソシテホンマニハネカラアハレイデサ

涙川まくら流るゝうきねには夢もさだかに見えずぞ有ける

○涙ガ川ノヤウデ枕ガ流レテ　川舟ノ中デ浮テ寝ルヤウナ　カウイフ浮寝デハ　見ル夢モハーツキリトハッサ見エヌワイノ

戀すれば我身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

○戀ヲスレバ　ワシガ身ハ此ヤウニヤセテ　影ノヤウニナツタワイサウカト云テ思ウ人ニ添ヒモセヌモノ、クセニサ　影ナラ人ニソヒソナモノヂヤニ

かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもゆらむ

○鵜飼舟ノカヾリ火コソ川ニ浮テモエル物ナレ　カヾリ火デモナイワシガ身ノ　ナゼニマア此ヤウニ涙ノ川ニウイテ　胸ニ思ヒノ火ガモエルヿヤラ

かゞり火の影となる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

○川ヲ流レテクダル鵜飼舟ノカヾリ火ノ移ッタ影ハ　水ノ下デモエルガ　ワシモテウドソンナモノデ　戀ニヤツレテ　影ノヤウニナツタ身ノツライ難儀ナコトハ　四 長イ月日ヲ心ノ内デバッカリ思フテムネノモエルノヂヤワイ

早き瀬にみるめおひせば我袖の涙の川にうゑましものを

○ミルメト云モノハ海ノ中ヘハエル物ヂヤガ　ソレガ若シ川ノ早イ瀬ヘハエテソダツナラ　ワシガ袖ノ涙ノ川ヘウヱウモノヲ　ナゼニナレーヤ　ワシガ涙ハ早イ瀬ノヤウニ流レル　ソシテ戀シイ人ニ逢フヿヲミルメト云ニヨツテサ

○濟 おきへにもよらぬ玉もの浪のうへにみだれてのみや戀渡りなむ

○ワシガ戀ハ　沖ノ方ヘモ磯バタヘモヨラズニ　浪ノ上デミダレテアル藻ノヤウニ　ドチラヘモツカズニ心ガ亂レテ　イツマデモ此ヤウニ　戀シイ〳〵ト思フテバッカリ月日ヲタテルデアラウカ

あしがものさわぐ入江のしら浪のしらずや人をかくこひむとは
○[上]人チ今此ヤウニ戀シウ思ヲウトハ　思[四]ヒモヨラヌ事ヨ
人しれぬおもひを常にするがなるふじの山こそ我身なりけれ
○常ー住人ニシラサヌ思ヒチスルワシガ身ハ　外ニハナイ　駿河ノ
富士ノ山ガサ　ワシガ身ヂヤワイ　ナゼト云ニ富士ノ山モ火ハモ
エズニ常ー住煙ガ立テモエルハサテ
とぶ鳥のこゑも聞えぬおく山のふかき心を人はしらなむ
○イカウ深イオク山デハ鳥ノ聲モセヌモノヂヤガ　ソノクラキノ
奥山ホド深イ此ワシガ心チ　思フ人ハサウトハシラヌサウナガ
ドウゾ知テクレカシ
あふ坂のゆふつけ鳥もわがごく人や戀しきねのみなくらむ
○相坂ニハナシテアルアノ木綿(ユフ)チツケタ鶏モ人ガ戀シイヤラ(五らん)　オ
レト同シヤウニ聲チアゲテ　ヒタスラ鳴ク　打聞ゆふつけ鳥の説
わろし
逢坂の關に流るゝいはし水いはで心に思ひこそすれ
○[上]イハズニ居ルデコソアレ　心ニハタイテイ思フ事デハナイ
うき草のうへはしげれるふちなれや深き心をしる人のなき
○ワシガ深イ心ー底ハ　ウヘニハ浮草ノシゲツテ見エヌ淵ヂヤカシ
テ　此深イ心ー底チ人ガ知テクレヌ　フカイ事ガ見エヌサウナ
うちわびてよばゝむ聲に山びこのこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

○サシツマーツテセンカタナサニ大キナ聲チシテヨバヽツタナラ
其聲ニハヨモヤコタマノヒヾカヌ山ハアルマイトサ思フ　大キナ
聲チスレバ必コタマノヒヾキ通リデ　ワシガコレホドニ深ウ思
フ事ナレバ　アチラカラモスコシハ何シトゾ思フテクレソナモノ
ヂヤ
こゝろがへする物にもがかたこひはくるしき物と人にしらせむ
○タガヒニ人ノ心ガトリカヘラレル物ニシタイモノヂヤ　ソシタ
ラコチノ心トアチノ心ト入レカヘテ　片思ヒハクルシイ物ヂヤト
云事チアノ人ニ思ヒシラサウニ
よそにしてこふればくるしいれひもの同じ心にいざむすびてむ
○今ノトホリニ　ヘダーツテヨソデ戀シウ思フテ居レバクルシイニ
兩ー方ノ紐チ　一所(ヒト、コロ)ヘムスビ合スヤウニ　ドレーヤコレカラハ一
所ニ居ルヤウニセウゾ
同じ心にといへるは、或人ノ云、からぶみに、同心結といふことあ
るによれる也、といへり、又今思ふに、ところを、こゝろと寫シ
誤れるにや、
春たてばきゆる氷のゝこりなく君がこゝろは我にとけなむ
○春ニナレバ氷ノ殘ラズトケルヤウニ　君ガ心ハドウゾ　オクソコ
ナウ我ニウチトケヨカシ
あけたてば蟬のをりはへ鳴くらしよるは螢のもえこそ渡れ

○夜ガ明レバ晝ハ蟬ノヤウニヒガナ一日ナイテクラシ　夜ルハ螢ノヤウニ思ヒニモエテ夜ヲアカシテサ月日（わたれ）ヲタテルワイ

夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

○夏ノコロ虫ノ火ノ中ヘトビコンデ　ツイ我身ヲムダニシテシマウノモ　火ヲトラウト云フ思ヒ一ツニヨツテノヿヂヤワイ　人ノ戀ヲスルノモテウド其通リデ　人ニ心ヲカケテツイ我身ヲシモテノケルヿヂヤ　ア丶戀ハスマイヿヂヤゾヤ　餘材打聞ともに、ひとつおもひの説わろし、

夕されはいとゞひがたき我袖に秋の露さへおきそはりつゝ

○戀ヲスレバ　タヾサヘ涙ガカワキニクイソシガ袖ヘ　ユフカタニナレバ　此時節ノ露マデガオキソフテサ　イヨ〳〵カワカヌ

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

○イツヂヤト云テモ　コヒシウナイト云ヿハナケレド　其内ニモトリワケテ　秋ノ時分ノユフカタハ又カクベツニドウモタヘラレヌワイ

秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘れしもせむ

○〔一〕サーウト顯（アラ）ハレテ思フフリコソスマイケレ心ニハ何シノ忘レウゾイ　ワスレハセヌ

秋の田のほのうへをてらすいな妻の光のまにも我やわするゝ

○秋ノ田ノ稻ノ穗ノウヘ丶イナヅマノヒカリツト光ルホドノチヨツトノマモ　ワシハオマヘノヿヲ忘レルカイ　ソレホドノ間モワスレハセヌゾイワシーヤ

人めもる我かはあやな花すゝきなどかほに出てこひずしも有らむ

○人目ヲハヾカル我身カイ　オレハ何シニモ人目ヲハヾカルヿハナイニ　ア丶ワケモナイ（あやな）　ナンノタメニ此ヤウニ〔三〕アラハサズニバッカリ思フテ居ヤウゾ

あわ雪のたまればかてにくだけつゝわが物思ひのしげきころ哉

○沫雪ノ夕マルカト見レバエタマラズ（かてに）ニクダケテ　消ルヤウニ　オレハ心ガクダケテ此ゴロハサテ〳〵物思ヒノシゲイヿカナ

おく山のすがの根しのぎふる雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

○此ヤウニ思ヒガシゲウテハ　ドウモタマラヌニ　〔上〕ワシハモウキエル死ヌルト云テヤラウカイ

古今和歌集巻第十二遠鏡

戀哥　二

題しらず　　小野小町

おもひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを

○思ヒ〳〵寐(ネ)ルユヱニヤラ(三らむ)　戀シイ人ガ夢ニ見エタ　其時ニ夢ヂヤト知ッタナラ　サマサズニオカウデアッタモノヲ　ヲシイヿヲシテサマシテノケタ

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき

○イツゾヤウタヽネシタ時ニ　戀シイ人ヲ夢ニ見テカラ　夢ト云モノハヨイ物ヂヤト思ヒソメテ　ソレカラ又見ヤウ又見ヤウト思ウテ　夢ヲ頼ミニシテ居ル

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞきる

○衣ヲカヘシテ着テネレバ思フ人ヲ夢ニ見ルモノヂヤトイヘバ　ワシモキツウサシツマーツテ戀シウテタヘラレヌ時ニハ　ネマキヲウラガヘシテッキテネル

素性法師

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるゝよごとに

○ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレドッサ　秋風ガ身ニシンデ寒ケレバ　日ガクレヽバ毎夜　モシヒヨーツト見エルヿモアラウカト思フテ　ワシハソレヲ頼ミニスル

しもついづもでらに人のわざ(ツキゼンノ法事)しける日しんせい法師のだうしにていへり(説法ニ)けることばを哥によみてを　のゝこまちがもとに遣しける　　あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人を見ぬめのたみだなりけり

○眞セイノ談義ニトカレタカノ法華經ノ衣裏寶珠ノ事ニツイテサナンボ袖ヘツヽンデモタマラズニ　コボレテ出ル玉ハ　戀シイ人ヲエ見ヌ目カラコボレル涙ヂヤゾイ

かへし　　こまち

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつせなれば

○ワシガ涙ハ又々ソンナコーツチーヤナイ　ドウモセキトメラレヌホド流レテ瀧ノ水ヂヤ　スレーヤオマヘノソノ袖ニツヽマレヌ玉ト見エルクラキノ涙ハ　オロカナヿイノ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合のうた　　藤原ノとしゆきの朝臣

戀わびてうちぬる中に行かよふ夢のたゞぢはうつゝならなむ

○思フテモ〳〵モアハレハセズ　戀アグンデスコシネムーツタ間(タ)ニ通(カヨ)ウト見ル夢ノスグミチハドウゾホンマノヿデアレカシ　夢デコソズーツト通ハレル直道(スクミチ)ナレ　ホンマニハソンナヿハ及ビモナイヿ　イーツヽモ戀ワビテ居ル中ヂヤモノ　中は、思ふ人との

中也、然るを餘材に、ねたゞ中也といへるは、かなはず、もし然らば、うちぬるほどにとこそ有べけれ、

すみのえのきしによる浪よるさへや夢の通路人めよくらむ

○晝ホンマニ通フ道デハ人目チハヾカルモ　ソノハズノヿヂヤガ〔一二〕夜ル夢ニ通フト見ル道デマデ　人目チハヾカツテヨケルヤウニ見ルノハドウシタコトヂヤヤラ

をのゝよしき

わが戀はみやまがくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

○ワシガ戀ハ　山ノオクニカクシテアル草ヂヤカシテ　段々トシゲサガマサルケレドモ　サウト云ヿチ　知テクレル人ガナイ

きのとものり

よひのまもはかなく見ゆる夏虫にまどひまされる戀もする哉

○アノヤウニ夏虫ノ火チトラウト　思ウテ飛入テ　宵ノ間チモエタモタズニ　ツイ命チシマウテノケルノハ　キツイアハウナヿヂヤト思ハル丶ガ　ワシガ又此ヤウニ人ニアヒタイ〳〵ト思フテ戀ニ身チシマウノハ　アノ夏虫ノ火ニマヨウノヨリハ　ナホマサツテサテモ〳〵マアアハウナヿカナ　餘材よひのまもの說たがへり

夕されば螢よりけにもゆれども光見ねばや人のつれなき

○毎日ユフカタニナレバ　螢ヨリモナホワシハ思ヒガモエルケレド　ワシガ此ヤウニモエル思ヒハ　螢ノヤウニ光リガナイニヨツテ見ヌユヱニ人ガツレナイカシラヌ　光リガアツテ見タナラヨモヤカウツレナウハアルマイヿヂヤワサ

さゝの葉におく霜よりもひとりぬるわが衣手ぞさえまさりける

○サヽノ葉ヘフツタ霜ハキツウサエル物ヂヤガ　ソレヨリ　モヒトリネルワシガ袖ガサ　ナホキツウサエテ寒イワイノ

わがやどの菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

○〔上〕イヤモウキツウ〳〵キエ入ルヤウニサ戀シイワイノ

餘材打聞共に、きえかへりの說わろし、すべてわきかへりしにかへりなどいふ類皆、其事の、いたりて甚しきをいふ詞也、今ノ世の語にも、にえかへるひえかへるなど多くいふと、同じことなるをや、

河の瀨になびく玉藻のみかくれて人にしられぬ戀もする哉

○川ノ瀨ノ底ニハエテナビイテアル藻ノ水ニカクレテシレヌヤウニ　思ウ人ニシラレヌ戀チワシハマアスルヿカナ

みふのたゞみね

かきくらしふる白雪の下ぎえに消て物思ふころにも有かな

○雪ノ下カラ消ルヤウニ　ワシハ人ニハ云ハズニ此ゴロハホンニ消入ルヤウニ物思ヒチマアスルヿカナ

藤原ノおき風

君こふる涙のとこにみちぬればみをつくしとぞ我はなりける

○ミチツクシト云物ハ海ノ中ニ立ッテアル物ヂヤガ　ワシハ君ヲ戀シウ思ウテ泣ク涙ガ　テウド海ノシホノミチタヤウニ　床一ハイニミチタレバ　ソノ床ニネテ居ルワシガ身ハ　トント ソノミヲツクシニサ　ナーツタワイ　ソシテソノミヲツクシト云名ノトホリニ　身ヲツクシテシマウテノケルデアラウ

しぬる命いきもやするとこゝろみに玉のをばかり逢むといはなむ

○ドウデ戀デ死ヌル此命ガ　若シヒーヨーツト生ノビルヿモアルカ物ハタメシヂヤニドウゾ　短イ玉ノ緒ノアヒダホドナリトモチーヨーツト逢ハウト云テクレカシ

わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

○トーツトモウ戀ニナンギシハテタレバ　ドウゾシテムリニ此事ヲ忘レウト思ヘド　夢ニ逢ウト見ルヿガアルニヨッテ　又ヒヨーツトアハレルヿモアラウカト　ソレガ頼ミニ思ハレテソシテアハレモセネバ　アヽ夢ト云物ハサ　人ニ頼モシウ思ハセテオイテ　何シノヤクニタヽヌモノヂヤ　打聞に、人だのめを、人だのまれとあるは、たがへり、人だのませとこそいふべけれ、めは即ちませのつゞまりたる也、

よみびとしらず

わりなくもねてもさめても戀しきか心をいづちやらばわすれむ

○ナラヌヿヲムリニ此ヤウニマア　サテ〳〵ネテモオキテモ　戀シイヿカナ　コレデハドウモタマラヌガ　此心ヲドチヘヤーツタラ此戀ヲワスレルデアラウゾ

戀しきにわびてたましひまどひなばむなしきからの名にや殘らむ

○此ヤウニ戀シイノニ　トーツト難義シハテヽ　モシヒーヨーツト魂ヒガマヨウテ　ドコゾヘインデシマウタナラバ　アトハ此身ハムナシイヌケガラニナルヂヤガ　ソシテ思フ人ニアヒモセヌムナシイ戀ノクセニ　戀デ死ンダト云名ガ殘ルデアラウカ

四の句は、魂のさりて、むなしきからとなる意を、逢事なくて、むなしき戀ながらにといふ意に、いひかけたるもの也、

紀ノ　貫　之

君こふる涙しなくはからころもむねのあたりは色もえなまし

○君ヲ戀シウ思フワシガ胸ハ　思ヒノ火ガモエルケレド　泣ク涙デケセバコソアレ　モシ此涙ガナクバ　衣物ノムネノアタリハ　思ヒノ火デモエル色ニナルデアラウ

題しらず

よとゝもに流れてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり

○川ハ冬ハ氷ッテ流レガトマルモノヂヤガ　ワシガナク此涙ノ川ハ

ツヤツヂウ流レテサトマル(ゆく)時ハナイ　冬デモ氷ラヌ水ヂヤワイ

【千秋云、哥にみなわとあるを、水の沫とは譯せずして、たゞ水とのみ譯せられたる、これをもて、すべて哥の譯法を思ふべし、又此哥、みなわとよめるは、水とのみにては、詞たらざる故なることをもさとるべし、】

夢路にも露やおくらむよもすがら通へる袖のひぢてかわかぬ

○夢ニ思フ人ノトコロヘ通フ道ヘモ露ガオクヤラ　ヨヒトヨ夢ニ其道ヲカヨウタ袖ガ　ヒツタリトヌレテ今朝モカワカヌ　イヤイヤヨウ思ヘバサウデハナイ　コレーヤ涙ヂヤワイノ

そせい法師

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞおきうかりける

○タヾチーヨーツト夢ニデモ思フ人ヲ見タ夜ハソノ朝(アサ)ノ床ガサハナレテ起(オキ)トモナイワイ

ふぢはらのたゞふさ

いつはりのなみだなりせばから衣しのびに袖はしぼらざらまし

○戀シイフリヲシテ　ウソニ泣イテ見セル涙デアラウナラ　隨分人ニ見セウトコソセウケレ　此ヤウニ人ニ見ラレマイト　シノンデキル物ノ袖ヲシボル事ハアルマイニ

大江ノ千里

ねになきてひぢにしかども春雨にぬれにし袖ととはゞこたへむ

○泣テ此ヤウニヒツタリトヌレタ袖ヂヤケレド　モシ人ガ問フタラ春雨ニヌレタノヂヤトイハウ

としゆきの朝臣

わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよたゞなくらむ

○郭公モオレガヤウニ物ガカナシイカイ　時シホナシニ夜ルハヒタモノアノヤウニナゼナクヤラ

つらゆき

さつき山梢をたかみほとゝぎすなくね空なる戀もするかな

○〔上〕泣テバツカリ居テ　ウカウカトシテ　心モソヾロナ　戀ヲマアスル事カナ

凡河内ノみつね

秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐの空もおもほえなくに

○〔一〕戀ヲスルデハレル時モナイ心デハ　トント起居(タチヰ)スルノモソゾロデウカウカトメオボエヌ

清原ノふかやぶ

虫のごとこゑにたてゝはなかねども涙のみこそ下にながれる

○人マヘヲシノブユヱニ　虫ノヤウニ聲ヲタテヽハナカヌケレド　ナイショウデハ涙ヲナガシテバッカリヰリマスワイノ

是貞ノみこの家の哥合の哥　　よみ人しらず
秋なれば山とよむまで鳴鹿にわれおとらめやひとりぬる夜は
○ヒトリネタ夜　オレガ泣クノハ　秋デイハウナラ　山ヂウヘヒヾクホドニナク鹿ニモオトラウカ　オレハ鹿ヨリナホキツウ泣ク
秋なればとは、秋の物にてたとへていはゞといふ意也、夏なればともあるに同じ、

題しらず　　貫　　之
秋の野にみだれて咲る花の色の千種に物を思ふころかな
○〔上〕此ゴロ(五ころ)ハイロ〳〵サマ〴〵ニ心ガミダレテ　サテモ〳〵物思ヒナスル٦カナ

み　つ　ね
ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふ人のなき
○ヒトリ此ヤウニ物思ヒヲシテ心ヲクルシメテ居ルニ　〔三〕〔いなばの〕ソレヨ御(オ)ダウリト云テクレル人ガナイ　ひとりしては、ひとり也、思へばゝ、思ふにの意也、皆ふるきいひざまなり、

ふ　か　や　ぶ
人を思ふ心は鴈にあらねども雲ゐにのみもなきわたる哉
○人ヲ思フ心ハ鴈デハナケレド　鴈ノ空ヲ鳴テワタルヤウニ　サテモサテモワシガ心ハウカ〳〵トウハノソラニナツテマア　泣テバツカリタテル٦カナ　餘材、二三の句の注、ひがことなり、かりそめの意はなし、打聞、雲ゐの説、此哥にはかなはず、

た　ゞ　み　ね
秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人のこひしかるらむ
○自身トヒキナラス　琴ノ聲ノ秋風ノ吹クヤウニ聞エルニマデ人ガ戀シイ　此ヤウナチヨーツト(はかなく)シタ٦ニマデヂキニ此ヤウニ戀シウ思フハドウシタコトヂヤヤラ(らん)　【千秋云、譯に、自身トヒキナラスとある、自身といふこと、哥に見えず、いかにといふに、これはみづからひく琴にあらざれば、かきなすといへる詞、いたづら也、さればよその琴のねにはあらざることを、たしかにしめさむために、わきて自身といふことを、添られたる也、すべて此類多し、なほざりに見過すべからず、】

つ　ら　ゆ　き
まこもかる淀のさは水雨ふればつねよりことにまさるわが戀
○〔一二〕雨ガフレバ　ウーツトシウ物サビシイ故ニ　ツネヨリモカクベツニ戀ガマサル

やまとに侍りける人につかはしける
こえぬまはよし野の山のさくら花人づてにのみ聞わたるかな
○ソチノ大和ノ國ヘマダコエテイカヌウチハ　見タイ〳〵ト思フ吉

野山ノ花チ人ノハナシニバカリ聞テクラスヤウナモノデ　大和ニゴザルオマヘノ事チワシガツネ〳〵戀シウ思ウノモソノトホリヂヤ　ア丶シンキナヿカナ　初句は、あはぬまはといふ意にいへるにはあらず、

やよひばかり（ジブンニ）にもの丶たらびける（イヒケル）人のもとに　又人（又外ノ人ガ）まかりてせらそこすとき丶てよみてつかはしける

露ならぬ心を花におきそめて風ふくごとにものおもひぞつく

○花ニハ露ガオクモノヂヤガ　ソノ露デハナイワタシガ心チ　オマヘノ花ニオキソメテキルユヱニ　風ノフクタビニ　花ガヨソヘチラウカト　ソコヘ心ガツイテヰ　思ヒコトガゴザル　ドウカヨソヘチリサウナウハサモチラトウケタマハーツタゾヱ

題しらず　　坂上これのり

我戀にくらぶの山のさくら花まなくちるとも數はまさらじ

○暗部山ノ櫻花ノサイチウト　ヒマモナシニチル數ハオビタ丶シイヿデアラウケレド　ワシガシゲウ思ウ　戀ノ數ニクラベタナラマサリハスマイ

むねをかのおほより

冬川のうへはこほれる我なれや下に流れて戀わたるらむ

○ワシハ　ウハツラノ氷ツテアル冬ノ川ヂヤヤラシテ　其氷リノ下チ水ノ流レルヤウニ　外（ソト）ヘハアラハサズニ　心ノ内デ長ノ月日チ戀シウ思フテタテル

たゞみね

たぎつせにねざしとゞめぬうき草のうきたる戀も我はするかな

○早イ川ノ瀬ニアル浮草ノ根モトノ底ヘ　ツカズニウイテアルヤウニ　ワシハウイタ戀チマアスルヿカナ

とものり

よひ〳〵にぬぎてわがぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

○〔上〕心ニカ丶ツテカタ時ノマモ思ハヌヿハナイ　【千秋云、ぬぎてわがぬるは、ぬるとてわがぬぐといふ意なり、】

東路のさやの中山なか〳〵に何しか人をおもひそめけむ

○アハレモセヌ人チ〔一二〕ナマナカニナゼニ此ヤウニワシハ思ヒソメタヿヤラ

しきたへの枕の下に海はあれど人をみるめはおひずぞ有ける

○〔一〕枕ノ下ニ涙ノ海ハアルケレド　戀シイ人チ見ルメハサハエヌヿヂヤワイ

年をへてきえぬ思ひは有ながらよるの袂はなほこほりけり

○何シ年カキエズニモエル思ヒノ火ハアリナガラモ　夜ル〳〵ソレデモヤッハリ袖ハナミダガ氷ルワイ　思ヒノ火デトケサウナモノ

ヂヤニ

つらゆき

我戀はしらぬ山路にあらたくにまどふ心ぞわびしかりける

○シラヌ山道コソマヨウモノナレ　ワシガ戀ハシラヌ山道デモナイニ　此ヤウニマヨウ心ハサツライナンギナ〻ヂヤワイ

くれなゐのふり出つゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ

○聲ヲアゲテ泣ク血ノ涙ノ紅ハ　ソメルタビニ袖バツカリガサ色ガマスワイ　ツネニ紅デ衣ヲ染ルノハドコモカモ同シヤーウニコソ染メルモノナレ　此ヤウニ袖バカリ染メルモノデハナイニサ　初二句、夏ノ部に、「からくれなゐのふり出てぞなくとあるとは、意異也、此哥にては、紅といふに用あり、ふり出は、紅をふり出て染る事を、聲をあげてなく事にかねたり、餘材、四の句の說わろし、

白玉と見えし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり

○始メノホドハ白イ玉ノヤウニ見エタ涙モ　ダン〳〵ト年ガヘレバマーツカイニ色ガカハツタワイ

みつね

夏むしをなにかいひけむこゝろから我も思ひにもえぬべらなり

○夏虫ノ火ノ中ヘハイツテ心カラ身ヲモヤシテシマウ〻ヲ　エ、エハカナイオロカナコトヂヤトハ　ナゼニ云タ〻ヤラ　夏虫バカリデハナイ　オレモ其通リニ心カラ思ヒニ身ヲシモテノケルデアラウヤウニ思ハル、

たゞみね

風ふけば峯にわかるゝしら雲のたえてつれなき君がこゝろか

○〔上〕サテ〳〵ルキモナイ　ケシカラヌキヅヨイ君ガ心カナ

月影に我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

○月ヲバ數寄人ガア、、ハレト思ウテ見ルモノヂヤガ　ワシガ身ヲ月ニカヘラル、モノナラ　カハツテ月ニナツテミタイ　ソシタラツレナイ人モ見テ　ア、ハレカアイヤト思フテクレルデモアラウカイ　餘材、影といふに、心をつけたる說わろし、月影は、たゞ月也、

ふかやぶ

こひしなばたが名はたゝじよの中のつねなき物といひはなすとも

○ワシガモシ此通リデ戀死ンダナラバ　ツレナイ人ハ　深養父ハカワイヤワシユヱニ死ンダトハイハズニ　タヾ一ト通リニ世ノ中ガ無常ナ物デ死ンダヤウニ云ヒナシテオクデカナアラウガ　タトヒサウハ云ヒナストモ　世間ノ人ハヨウ知テ居レバ　外ノ事ニホカデ死ンダトハ云マイ　君ユヱニ死ンダト云ヒフラシテ君ガ名ハ

立ツデアラウ

貫之

津の國の難波のあしのめもはるにしげき我戀人しるらめや

○難波ノ芦ノハルカニ見エル所マデヒツシリトシゲウハエテアル知クニシゲイ此ワシガ戀ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ　コレホドニアラウトハ知ルマイ　めもはるにといへるは、たゞ見渡しのはるかなる意のみ也、芦の芽、又張ル春などの意はなし、

手もふれで月日へにけるしらま弓おきふしよるはいこそねられね

○弓ヲ久シウ手モサヘズニオクヤウニ　思ウ人ニ久シウアハネバ其人ノ事バツカリ思ウテ　夜ルハネタリオキタリシテ　ヨノメモサネラレヌワイノ

人しれぬおもひのみこそわびしけれわが歎きをばわれのみぞしる

○思ウ人ニ知ラレヌ戀ホドサナンギナコマーツタ物ハナイ　此ワシガ歎クノヲバ　ワシバツカリガサ知テヰテ　ソノ思ウ人ハネカラシラヌヂヤ

とものり

ことに出ていはぬばかりぞみなせ河したに通ひて戀しき物を

○ワシガ戀ハテウド水無瀬川ノウハベハ水ノナイヤウニ見エテ下ノ方ナ水ガトホツテ流レルヤウナモノデ　詞ニダシテ　イハヌト云バカリヂヤゾイ　心ハジヤウヂウ思フ人ノ所ヘ通ウテ戀シイモノヲ

みつね

君をのみ思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

○オマヘノ事バツカリヲ思ウテ寐テ見タ夢ナレバ　逢ウト見タノモ　オマヘノナサケデハナイ　ワシガ心カラ見タノヂヤワイ

たゞみね

いのちにもまさりてをしくある夢は見はてぬ物のさむるなりけり

○イノチホドヲシイ物ハナイヂヤガ　ソレヨリマダ惜ウ思ハレルモノハ　戀シイ人ニ逢ウト見ル夢ノマダトクト見テシマハヌウチニ早ウサメルノヂヤワイ

はるみちのつらき

梓弓ひけば本末わがゝたによるこそまされ戀のこゝろは

○晝ヨリモ〔上〕夜ルガサカクベツニ戀シウ思フ心ハマサルワイ

みつね

わがこひはゆくへもしらずはてもなしあふをかぎりと思ふばかりぞ

○ワシガ戀ハ　タトヘテイハヾ道ナイクニ　ドコヘイクヿヤラサキモシレズ　ドコマデト云限リモナイヤウナモノデ　ドウナルヿヤラネカラサキノシレヌヿデ　タヾアウノヲイキトマリト思ウバ

カリヂヤ

われのみぞかなしかりける彦星もあはで過せる年しなければ

○世ノ中ニオレホドサカナシイ物ハナイワイノ　彦星ノ戀ガ一年ニタツタ一度ヅヽナラデハアハレネバカナシイヤウナ物ナレドソレモ年ニ一度ヅヽハチガヒナシニ逢ウヿガアツテ　一年モアハズニスギタ年ハナケレバ　ワシホドニカナシイ戀デハナイワサテ

ふかやぶ

今はゝやこひしなましをあひ見むと頼めしことぞ命なりける

○モウハヤ今ゴロハ　戀死ンデシマウデアラウニ　イヅゾヤ逢ハウト　アチカラ約束シテオイタヿガアルチ頼ミニシテサ　ソレバツカリガ命デマダカウ生テ居ルワイノ

みつね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ

○イク度カく逢ハウト約束シテ頼ミニ　サセテオイテハアハズニ何ヽ年カタツダマシコトニコリズニヤツハリ頼ミニ思フワシガ心底ノ深イ所ヲ推量シテクレカシ

とものり

いのちやはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに

○命ガサ何シヂヤゾイ　ホンノ露ノヤウナアダナ物ヂヤモノ　逢フニカヘテナラ　此命シマウノハチシイフハナイ

古今和歌集巻第十三遠鏡

戀歌 三

やよひのついたちよりしのびに人にものらいひて後に雨のそほふりけるによみてつかはしける

在原ノ業平ノ朝臣

おきもせずねもせでよるを明しては春の物とてながめくらしつ

○オキルデモナシネルデモナシニ　ウツラ〳〵トシテ夜ヲアカシテハ　又昼ニナレバ　此ゴロノ空ノヤウニ　長雨ハ春ノ物デ―日ナガメテシンキニ思ウテクラスヂヤ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとに よみてつかはしける

としゆきノ朝臣

つれ〴〵のながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし

○ウチツヾイテ日ヨリハワルシ　日ハ長シ　ヒマデサビシイニツケテハ　イヨ〳〵シンキデナガメナシテ　涙ノ川ノ水ガマシテ　袖ガヌレルバッカリデ　ソシテ川ノ水ガマセバ渡ラレヌヤウニ　逢ハレサウナモヨウモナイ

かの女にかはりてかへしによめる

なりひらの朝臣

浅みこそ袖はひづらめ涙河身さへながるときかばたのまむ

○袖ガヌレルトオーツシーヤルガ　ソレーヤオマヘノ涙川ガ浅サニ　サウデアラウ　袖バッカリヌレルグラキノ浅イコデハ　頼ミニナリマセヌ　身マデガ流レルトオーツシーヤルクラキノ涙川ノ深サナラ　ソレデハ頼ミニ致シマセウ　餘材打聞、四の句の説わろし、身さへながるとは、たゞ袖のみひづるにむかへて、深きとをいへるのみ也、たとへたる意はなし、

題しらず

よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき

○近ウヨルテスヂガナサニ　身コソカウシテ遠ウヘダテ、居レ心ハジヤウヂウオマヘノソバヲハナレハセヌ　影ノヤウニトウカラ心ハオマヘニソフテ居ル　餘材に、古へは、よるといふことを、よるべといへり、といへるはひがと也、さるとなし、引たる万葉の哥のべは、可の意なるを、心得誤れる也、

いたづらにゆきては來ぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

○行テハムダニカヘツテクルモノ、クセニ　逢ヒタイト思ウ心ニサソハンテハ　又シテモイキ又シテモイキスルワイ　ドウ云テモトカク逢ヒタサニサ

あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべき物を

○雪ノツモルヤウニ逢ハヌ夜ガイクヨモ〱ツモーツタナラ　其雪ノキエルヤウニ　ワシマデガ共ニ消ルデアラウト思ハレルモノヂサテモアハレヌヿカナ

此哥はある人のいはく柿本ノ人まろが哥なり

なりひらの朝臣

秋の野に篠分しあさの袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける

○秋ノ野デ篠ノ中ヲ分テトホツテキヌ朝ノ袖ハ　キツウ露デヌレルモノヂヤガ　ソレヨリモ　思フ人ノ所ヘイテエアハズニモドツテキタ夜ガサ　ナホキツウ涙デ袖ガヌレルワイ

小野ノ小町

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

○海松メノ無イ浦ヂヤト云ヿヲシラズニ　海士ガミルメヲ苅ウト思フテヒタモノ來ルヤウニ　アノ御人ハ　ワシガ身ヲ　ドウモ逢レヌ身ヂヤトハ　知ラシーヤラヌカシテ　一夜モカヽサズニ足ノダルイニ　毎夜〱逢ハウト思フテ見エル　トテモアハレハセヌノニサ　初二句の意、むかしより說キ得たる人なし、是は「春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝといへる類にて、詞を下上に打かへして心得べき格也、我身をみるめなき浦としらねばやといふと也、みるめなき浦とは、逢がたき身といふ意也、浦は、たゞ見るめによれる詞のみ也、されば我身を恨むとも、うしとも、いひかけたるにはあらず、さて後に、わが身のうらとよめる哥多きは、此哥の詞によれるものなり、

源ノ宗于ノ朝臣

あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

○今夜ハゼヒトモドウアツテモト思フタニ　又トウ〱エアハズニアカスヂヤサウナ　今夜アハイデハモウ逢ウベキ時節ハナイニ　此トホリデエアハズニ夜ガアケタナラ　春ノ此日ノ長イノニシンキニ思ヒクラシテ　イツマテモツライ人ヤ〱ト思ウテ一生ヲタテルデカナアラウ

みふのたゞみね

有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし

○マヘカタ女ト曉ニ別レタ時ニ　有明ノ月ヲ見タレバ　シキリニアハレヲモヨホシテ　アヽアノ月ハ夜ノアケルノモシラヌカホデアノヤウニヂーツトユルリトシテアルニ　オレハ夜ガアケレバカヘラネバナラヌヿトテ　ノコリ多イトコロヲ別レルヿカヤト身ニシミ〲ト思ハレタガ　其時カラシテヨニ曉ホドウイツライモノハナイヤウニ思フ　餘材、上句を、あはずしてかへる意とせ

ろは、哥の入りどころになづめる、ひがと也、顯注の如く、逢ヒて別れたる也、然るをこゝに入たるは、ふと所を誤れる也、六帖も、此集によりて誤れり、

ありはらのもとかた

あふことのなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立かへりける

○浦ノ磯バタヘヨッテキクル浪ノヂキニ引テ沖ノ方ヘカヘルヤウニ逢事モナイ人ノ所ヘイクワシナレバ　イツデモ ソノ人ヲ恨ンデバッカリサカヘルワイ

よみ人しらず

かねてより風にさきだつ波なれやあふことなぎにまだきたつらむ

○マダ逢ウタ〻モナイサキカラ　早ウ名ノタツノハ　云テ見ヤウナラ　浪ハ風ガフクニヨツテタツモノヂヤニ　マダ風ノフカヌサキニ　マヘカタカラ　ナギニ浪ノ立ツヤウナ物カシラヌ　ナゼニ此ヤウニマダ早ウカラ名ノタツ〻ヤラ

たゞみね

みちのくにありといふなる名取川なき名とりてば(濁)くるしかりけり

○〔上〕ナイ〻ヲ云ヒタテ、名ヲタテラレテハ　メイワクナコトヂヤワイ

みはるのありすけ

あやなくてまだきなき名の立田河わたらでやまむ物ならなくに

○マダ早ウカラ此ヤウニ名ノタツハ　ワケノタヽヌ〻ヂヤ　トテモカウ名ガタ〻ツタカラニハ　ドウシテナリトモ　逢ズニオカウモノデハナイ

もとかた

人はいさ我は(○清)なき名のをしければ昔も今もしらずとをいはむ

○人ハドウアルカ　ワシハナイ〻ヲ云ヒタテラレル名ガ惜ケレバマヘ方モ今モソンナ〻ハシリマセヌト云ハウ

よみ人しらず

こりずまに又もなき名はたちぬべし人にくからぬよにしすまへば

○マヘカタモナイ〻ヲ云ヒタテラレテメイワクシタ〻ガアツタガソレニコリモセズニ　又ドウヤラ名ヲタテラレウヤウニ思レハル　世ノ中ノナラヒデ　ニクウナイ人ガアルデサ

ひむかしの五條わたりに人をしりおきて(ナジミヲコシラヘテオイテ)まかりかよひけりしのびなる所なりければかど よりしもえいらでかきのくづれよりかよひけるをたびかさなりければあるじきゝつけてかの道によごとに人をふせてまもらすればいきけれどえあはでのみかへりてよみてやりける　なりひらの朝臣

人しれぬわがかよひぢの關守はよひ〳〵ごとにうちもねなゝむ

○人ニシラサヌオレガ通ヒミチノ關所ノ番ハ　ドウゾ毎夜ヨヒヨヒニ　チヨーツトナリトネムーツテクレカシ　ソシタラソノ間ニハイラウニ

題しらず　　　　つらゆき

忍ぶれど戀しき時はあしひきの山より月のいでゝこそくれ

○ズイブンカクシシノブケレド　キツウ戀シイ時ニハ　エコラヘズニ　月ガ出テヨウ見エルノニ　此ヤウニ出テクルワイ　又三四の句は、たゞ出ての序のみともすべし、

よみ人しらず

こひ／＼てまれにこよひぞあふ坂のゆうつけ鳥はなかずもあらなむ

○ハラ一ハイ戀／＼テタマ／＼コヨヒ始メテ逢フヌニ　[illegible]今夜ハ庭鳥ハマアナイテ　クレネバヨイガ　鳥ガナケバオキニ別レネバナラヌニ

をのゝこまち

秋の夜も名のみなりけりあふといへばことぞともなく明ぬる物を

○秋ノ夜チ長イ物ヂヤト云モ名バカリヂヤワイ　タマ／＼戀シイ人ニアウ夜トイヘバ　コレガコウト云コモナシニ　ツイ早ウ明タモノヂ　ナンノ秋ノ夜ガ　長カラウゾ

凡河内みつね

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば

○秋ノ夜ハ一ッタイハ長イモノヂヤケレド　アウ人ニヨッテ　秋ノ夜デモミジカウオボエル物ヂヤト　昔カラモ云トホリデ　此ノ節ハ秋デ夜ノ長イ時節ヂヤケレド　スイタ人ニ逢タ夜ヂヤニヨッテ長イトモナ　ドウモ思ヒキハメラレヌ

よみびとしらず

しのゝめのほがら／＼とあけゆけばおのがきぬ／＼なるぞかなしき

○目ガサメテ　夜ガクッヅラリーソト明テクレバ　一ツニネテ居タ二人ノキルモノガ別々ニナツニ　ワカレルガヨナナシイ

打聞、ほがら／＼の説わろし、餘材、きぬ／＼の說、いさゝかたがへり、面々とりきるを、きぬ／＼とはいはず、千秋云、結句、顯注本に、きるぞかなしきとあるぞ、よろしかるべき、なるぞは、おだやかならず聞ゆ、余揃に、又此書寫の誤にやとのたまへるは、きるぞの誤、なるぞの誤、

藤原ノ國經ノ朝臣

あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひそふらむ

○夜ガアケタト云テ　サアモウ別レルヂヤト思フ心ガツクカラシニ　ナヤニ此アヤ一　ノ一一イハヤヌ思ヒ[illegible]

寛平御時きさいの宮の哥合の哥　　としゆきの朝臣

あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ
○此ヤウニ雨ノツヨウフルノニ　夜ガ明ヌト云テ　別レテ歸ル道デハ　涙モ雨ト同シヤウニ物ナコキオロスヤウニヒタノ〳〵ト落テイヨ〳〵ヒツタリトヌレテ　サテモノ〳〵カナシイナンギナ事カナ

題しらず　　寵

しのゝめのわかれをゝしみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる
○日ガサメテ別レルガナゴリヲシサニ　鶏ヨリサキヘ　ワシガサマヅ泣キハジメタ

よみ人しらず

郭公ゆめかうつゝかあさ露のおきて別れしあかつきのこゑ
○〔三〕オキテ別レタ曉ニ今鳴イタ郭公ノ聲ハ　聞テモ夢ヂヤカウツツヂヤカ　オボエヌ　心ガ亂レテアルニヨツテサ　打聞よろし、よざいわろし、

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人見けむかも
○〔一〕夜ガ明テカラ　カヘツタナラ　人ガ見テ　君ガ名ガタヽウト思ウテ　マダ夜ノ深イウチニ別レテキタガ　ソレデモモシ人ガ見ハセナンダカシラヌ

大江ノ千里

けさはしもおきけむかたもしらざりつ思ひ出るぞきえてかなしき
○ケサハマア　別レニ心ガ亂レテ　ドウシテ起テキタヤラネカラオボエナンダガ　其事ヲ思ヒダシテ　今サキエルヤウニカナシイ
打聞、日影の說あれど、さまではあらじ、

人に逢て朝によみて遣しける　　なりひらの朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな
○ユフベ逢テ寐タノハドウデアツタヤラ夢ノヤウデアマリハカナサニ　セメテハホンノ夢ニナリ厂マイチド見ヤウト存ジテ眠ツテミレドネラレモ致サネバ　夢ニサヘエ見イデ　サテモ〳〵イヨ〳〵ハカナイ事ニナリマスル事カナ

業平ノ朝臣のいせの國にまかりたりける時　齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

君やこし我やゆきけむおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか
○ユフベノ事ハオマヘガワシガ方ヘ御出ナサツタデアツタヤラワシガオマヘノ方ヘ參ツタデアツタヤラ　又夢デアツタカ　ホンマノ事デアツタカ　眠ツタ內デアツタカ　目ノサメテ居ルウチノ事デアツタカ　ドウデアツタヤラワシヤネカラ覺エマセヌ

オマヘハドウヂヤイイナ

かへし　　　　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

○サイナエウベノヿハ　イーツソ心ガクラガッテ闇(ヤミ)ノ夜ニ道チイクヤウデ　ドウデアツタヤラワシモサッ一向オボエマセヌ　夢デアツタホンマデアツタト云ヿハ世間ノ人定メテクレイ

題しらず　　　よみ人しらず

うば玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

○闇(クラ)イノニチーヨーツト逢タノハホンマノ事デモ　タシカナ夢ニ何ホドモマサツタコトハナイワイ　夢ニ見タト同シクラキノヿデアツタ

さよふけてあまのと渡る月影にあかずも君を逢見つるかな

○〔上〕君ニ逢ッテサテモ〳〵マア〳〵ノコリオホカーツタヿカナ

三の句のには、のゝ誤にて、上句は、あかずの序なるべし、万葉に例多し、

君が名もわが名もたてじなにはなるみつともいふなあひきともいはじ

○ドウゾオマヘノ名モワシガ名モタ、ヌヤウニセウ〔三〕ワシニ逢タトオモヘモイハシーヤルナ　ワシモオマヘニ逢タト云マイホドニ　あひきは、難波の縁に、網引にいひよせたる也、

名取川せゞのうもれ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ

○〔二〕世間ヘシレテ名ガターツタラ　ドウセウト思フテ逢ヒソメタヿヤラ

よし野川水の心ははやくとも瀧の音にはたてじとぞ思ふ

○吉野川ノ水ノ早イヤウニ心ニハヤル　セナウ思フモ　瀧ノヤウニ音ニハタテマイトサワシーヤ思フ

戀しくはしたにを思へむらさきの根すりの衣色にいづなゆめ

○戀シウ思ウナラ心ノ内デ思フテ居タガヨイゾ〔三四〕色ニダスデハナイゾカナラズ(ゆめ)〳〵

花すゝきほに出てこひば名を惜み下ゆふひものむすぼゝれつゝ　　をのゝはるかぜ

○アラハシテ思フタナラ　名ガタッテアナウト　ソレガナシサニ四心ノ内デバッカリ思ウデ　五ムシーヤクシーヤトシテ　サテモ〳〵苦シイ戀ナスルヿヂヤ　打聞、下ゆふ紐の説、俗(サトビ)たり、

たちばなのきよきがしのびにあひしれりける女のもとよりおこせたりける　　よみ人しらず

思ふどちひとり〳〵がこひしなばたれによそへてふぢ衣きむ

○カウ思ヒアフタドウシノ内ニ　オマヘカワシカドナラヅ　一人ガ若シヒーヨーツト戀死ンダナラ　服(ブク)チ着(キ)ヤウナレド　表(オモテ)ハレタ夫

婦デナケレバ服ハキニクイヂヤガ　親類ノ内ニ誰レガ死ンダニヨーツテキルト云テ　服ハキタモノデアラウヅ　餘材、ひとり〳〵を、我事にとれるはわろし、打聞よろし、すべてひとり〳〵といふは皆、俗言にどちらぞひとりといふ意也、

かへし　　たちばなのきよき

なきこふる涙に袖のそほちなばぬぎかへがてらよるこそはきめ

○ナルホドソンナ物ヂヤ　モシワシデモソナタデモ　ドチラゾ戀死ンダ時ニハ　カナシウテ泣テ戀シタウ涙デ　定メテ袖ガキツウヌレルデアラウ　ソシタラヌレタチヌギカヘガテラニ　夜ルサ服チバ着ヤウワサテ　夜ルナライカーウタレモ知ルマイホドニ

題しらず　　こまち

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ

○ホンマニハサウモアリソナ物ヂヤガ　夢ニマデ人目チハヾカルヤウニ見ルヿノナンギサワイノ

かぎりなき思ひのまゝによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ

○カギリモナイホド思フ此心ニマカセテ　セメテ夢ニナリトモセイダシテ行テ逢ハウ　ホンマニ通フハカクベツノヿ　夢ニ通フ道マデチ人ハ見トガメハスマイホドニ　よるもは、夢になりともの意也、下に夢路といへる故に、詞をかへて、よるとはいへり、こむは、ゆかむの意也、此例つねにおほし、

夢路にはあしもやすめず通へどもうつゝに一め見しごとはあらず

○夢ニハ足モヤスメズニ毎夜セイダシテ通ウテタビ〳〵逢ト見ルケレド　ソレデモイツゾヤチーヨーツトホンマニ逢タヤウニハナイ　アヽ夢ハヤクニタヽヌモノヂヤ

題しらず　　よみ人しらず

思へども人めつゝみのたかければ川と見ながらえこそ渡られね

○戀シウ思フ人チ見テハ　アヽアレハト思ヒナガラモ　人メチツヽム心ガイーツハイヂヤニヨツテ　ドウモヨウサアハヌワイ　四の句、かれはといふことを、川にいひよせたり、

瀧つ瀬の早き心をなにしかも人めつゝみのせきとゞむらむ

○早イ川瀬ノヤウニヤルセモナウ思ウ心ヂヤモノチ　ドウ云ヿデマア　堤デ川ノ水チセキトメルヤウニ　人目チツヽンデ此ヤウニコラヘ忍ンデクルシイメチスルヿヤラ

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　　きのとものり

くれなゐの色にはいでじかくれぬのしたに通ひてこひはしぬとも

○〔三〕此ヤウニ心ノ内デバツカリ思フテ居テ　タトヒ戀死ヌルト云テモ　〔一〕色ニハダスマイ　餘材打聞共に、下に通ひてを、たがひの心といへるは、わろし、かよひとは、たゞ沼水の縁の詞にていへるのみにて、哥の意は、たゞ下に思ふと也、

題しらず　　みつね

冬の池にすむにほどりのつれもなくそこに通ふと人にしらすな

○〔上〕其所ノ家ヘワシガ通ウト云ヿヲ人ニシラスデハナイゾ

餘材、つれもなくの注わろし、上句は序にて、 四の句のそこは、序よりは、底とつゞきたり、つれもなくは、氷の下を通ふ故に、上へはさも見えぬよし也、 此詞は、序のうへの事のみにて、 哥の意にはあづからず、

さゝの葉におく初霜の夜を寒みしみはつくとも色にいでめや

○笹ノ葉ヘフッタ霜ガ夜ノ寒サニシミツクヤウニ ワシガ戀心モシミツクヤウニハ思ウト云テモ 色ニダサウカイ ドノヤウニアツテモ色ニハダスヿデハナイ

よみ人しらず

山しなの音羽の山の音にだに人のしるべくわがこひめかも

○ナンボ戀シウ思ウトテモ 〔一二〕音ニモ人ノシルヤーウナフリヲセウカマア ソノキヅカヒハナイゾイナ

此哥はある人あふみのうねへのとなん申す

きよはらのふかやぶ

みつしほの流れひるまを逢がたみみるめの浦によるをこそまて

○〔一〕〔ながれ〕晝ノ間々ガ逢ヒガタサニ〔四〕夜ナリシハ待ツワイ

平ノ貞文

白川のしらずともいはじ底清みながれてよゝにすまむと思へば

○人ガ問フタラ〔一〕シラヌトモイハウナレドサウハ云マイ オレーニ眞ー實ナ心ー底ヂヤカラハ イツマデモ末長ウツレソハウト思フ料ー簡ナレバサ スレーヤソノヤウニナニモ人ニカクスヿデハナイワサテ

と も の

したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人なとがめそ

○ナイセウデバッカリ思フテ居レバキツウジユツナイニ モウワシモイーツソウチダシテ〔三〕〔たえて〕ミダレウ ソシタラ人ノ目ニカヽルデアラウガ 必スタレモトガメテ下サルナヤ

我戀をしのびかねてばあし引の山たちばなの色に出ぬべし

○ワシガ此思ヒヲ今マデハマアドウヤラカウヤラ忍ビカクシテ居ルガ コレカラモウドウモコタヘラレヌヤウニナツタナラバ〔三四〕色ニデヽ人ノ目ニモカヽルヤウニナルデアラウト思ハレル

よみ人しらず

大かたは我名もみなとこぎ出なむよをうみべたにみるめすくなし

○礒バタハ海松メガスクナサニ 舟ヲ湊カラ沖ヘズーツトコギ出シテ存ー分ニミルメヲ苅ルヤウニ ワシガ中モ 大ガイナヿナラモウ名ノタツヿヲカマハズニ世ー間ヘバーツトウチ出シテシマハウ 隱シ忍ブ中ハ 思ウヤウニ度々モアハレヌガ イカニシテモウイ

コトヂヤホドニ　餘材打聞、よをうみの說わろし、世は、男女の中をいへるにて、忍ぶ中をうく思ふよし也、又餘材、船の名のさだ、用なし、

平ノ貞文

枕より又しる人もなき戀を泪せきあへずもらしつるかな

○ワシガ戀チバ　枕ハトウカラモ知テキタヿモアラウガ　枕ヨリ外ニハ又ト知ル人モナカーツタニ　涙チドウモエセキトメイデ　ツイトリハヅシテモラシテノケタワイ　サテモ〳〵ツライヿチシタヿカナ

よみ人しらず

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべら也

○風ガ吹テ浪ノウチヨセル岸ノ松ハ根ガ顯レル物ヂヤガ　ワシガ戀モソンナモノカシテ　ドウヤラネニアラハレテ泣キサウニ思ハル、　ドウモコタヘラレネバサ　カウ云タバカリデハ聞エマイガ　聲ナアゲテ泣クヿナ　哥デハネニ顯レルト云ニヨッテサ

此哥はある人のいはくかきのもとの人まろが也

池にすむ名をゝし鳥の水を淺みかくるとすれど顯れにけり

○池ニ住デアル鴛ノ底ヘカクレルト思ヘド　水ガ淺ッサニアラハレテ見エルヤウニ　ワシガ戀モ　ウキ名ノタツチ惜ウ思フテ　隨ー分トカクシシノブヤウニスルケレド　ゼヒモナイヿハ　人ガ知タワイ

あふことは玉のをばかり名のたつは吉野の川の瀧つせのごと

○玉チツナグ緒ハズンド細イヒヨワイワヅカナ物ヂヤガ　ワシガ中モ　逢ッ事ハテウドソノ玉ノ緒グラキノワヅカナヿデ　ソシテ名ノタツヿハ　吉野川ノ瀧ノ音ノ高イクラヰデ　ソレハ〳〵ヤカマシイヿヂヤワイノ

むら鳥のたちにし我名今さらにことなしふともしるしあらめや

○〔一〕一トタビ立ッタ名ハ　モウドウモゼヒガナイ　今サラ　ワシーヤ〔四〕ソンナ事ハナイト云ヒワケシタトテモ　〔五〕ヤクニタヽウカイ　ナンノヤクニタヽヌヿヂヤ　となしふの注、打聞よろし、餘材わろし、

君により我名は花に春霞野にも山にも立みちにけり

○君ユエニワシガウキ名ハテウド野ヤ山ノ花ニ霞ガイチメンニタツヤウニ　ドコカラドコマデ知ラヌ人モナイヤウニナーツタワイナ　花ニ霞ノタツハツライモノヂヤガ　ウキ名ノ立ッタモ同シヿデサテモツライヿヂヤ　花にといへる意の說、餘材打聞ともに、わろし、

伊勢

しるといへば枕だにせでねし物をちりならぬ名の空に立らむ

○ナンボカクス戀デモ　枕ハヨウ知ルト云ヿヂヤニヨッテ　ワシー

ヤ枕サヘセズニ寐タモノチ　誰レガマア知テ　ウキ名ガバーツト
高ウ立ッタヿヂーヤヤラ　塵コソ空ヘバーツトタツ物ナレ　塵デ
モナイウキ名ガサマア

こほかゞみ四の巻の終

古今和歌集巻第十四遠鏡

戀哥四

題しらず　よみ人しらず

みちのくのあさかの沼の花がつみかつ見る人に戀やわたらむ

○〔上〕カツ〳〵ニチーヨーツトカウ逢タバカリノ人チ　コレカライツマデモ戀シウ思ウテ月日チタテルヿデアラウカイ

逢見ずは戀しきこともなからまし音にぞ人をきくべかりける

○一ー度モ逢タヿガナクバ　此ヤウニ戀シイヿモアルマイ　アソタヿガナクバタヾヨソノコトニ　聞テ居ルバカリデッアラウニト思ハル、

つらゆき

いそのかみふるの中道中々に見ずは戀しとおもはましやは

○〔二〕ナマナカニ　一ー度モ逢タヿガナクバ　此ヤウニ戀シイトハ思モハウカイ　此ヤウニハ思フマイニ

藤原のたゞゆき

君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆる我戀

○富士ノ山ノモエルノハジヤウザウノヿデ　メヅラシイヿモナイガワシモオマヘノヿトサヘイヘバ逢テモアハイデモ　イツデモフジノ山ノヤウニ戀ノ思ヒガモエマス

伊勢

夢にだに見ゆとは見えじ朝な〳〵わが面影にはづる身なれば

○ワシーヤモウ思フ人ノ夢ニモ見エルトハ見ラレマイゾ　朝々鏡チ見ルニモ　キツウヤツレタオモカゲデ　ハヅカシイ身ヂヤニヨッテサ

よみ人しらず

石間ゆく水の白波立かへりかくこそは見めあかずもある哉

○〔二〕ドウゾ又ヒーツカヘシテ來テ此通リニッアハウワイ　サテモ〳〵マアノコリオホイヿカナ

いせのあまの朝なゆふなにかづくてふみるめに人をあくよしもがな

○〔上〕ドウゾ〳〵思フ人ニ存ー分ニハラ一ッパイ　逢ハレルヤウニシタイヿカナ　朝な夕なけ、朝食の菜、夕食の菜也、魚類をもなといふ、菜と同言也、此哥などの朝な夕なを、たゞ朝夕のことゝ見るは、ひがごとぞ、

とものり

春霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

○霞ノタナビイテアル山ノ櫻花チ見ルヤウデ　見テモ〳〵逢テモ

逢テモサテモマアアカヌ君ヂヤヿカナ

ふかやぶ

心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからや戀しかるべき

○心ト云モノハ　ムリナヿヂ思フ物ヂヤトサ思ハレル　サウシテ逢テ居ナガラモヤーツハリ戀シイヅイ　逢テ居ナガラ戀シカラウハズカイ　逢テ居テハ戀シカラウハズハナイニ

凡河内ノみつね

かれはてむ後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

○夏シゲル草モ　冬ハ殘ラズ枯レルモノヂヤガ　ワシガ思フ人モ今コソアレ　後ニハカレテ遠ノイテシマウデアラウニ　サウ云ヿチバガテンセズニ　サテモ〳〵夏草ノヤウニ深ウ思ハレルヿトカナ

よみ人しらず

飛鳥川ふちは瀨になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ

○アスカ川ハ淵瀨ガヨウカハルト云ヿデ　世間ノ人ノ心モソンナ物ヂヤト云ヿヂヤガ　タトヒソノヤウナ世ノ中ヂヤトテモ　ワシハ一トタビ思ヒソメテアラウ人ヂバ　イツマデモ忘レハスマイ

寬平ノ御時きさいの宮の哥合のうた

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらむ

○ソウタイ木デモ草デモ　秋ハ色ガカハル物ヂヤガ　秋ナコシテモ色ノカハラヌ物ハ　ワシガオマヘナ思ウト云此詞バカリデカナアラウ　何ハカハルト云テモ此ワシガ詞バッカリハカハリハセヌゾエ　打聞わろし

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治の橋姫

○今夜モ帶ナトイテ　フトンノ上ヘヘキルモノヽ片一方ヲ敷テ我ヲ待テ居ルデアラナアラウ　宇治ノ橋姫ガサ　打聞、はし姫の說いかゞ、

又はうぢのたまひめ

君やこむ我やゆかむのいさよひに眞木の板戶もさゝずねにけり

○君ガクルデアラウカ　ワシガ行ウカト　シバラク見合セテ居タデ戶モサヽズニ子タワイ

そせいほうし

今こむといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつる哉

○オーツヽケソレヘ參ラウト云テオコシタバッカリニ　此九月ノ末ノ夜ノ長イニ　サテマツホドニマツホドニ　オソイ有明ノ月ガハヤモウ出タワイ　約束モセナンダ有明ノ月ナヘ待ヽダシタニ　ソレニサ待ツ人ハサテモ〳〵來ヌヿカナ　コレハマアドウシタ

ヿゾ

よみ人しらず

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふにゝたりまたずしもあらず

○今夜ハキツウ月ガヨウゴザル　月ガヨウゴザルト人ノ所ヘシラセテヤーツタラ　ソレデハ四チトゴザレト云テヤルモ同シヤーウナモノヂヤ　ドレーヤシラセテヤラウ　オレモアマリヨイ月ヂヤニヨツテ　モシワセモセウカト五マタヌデモナイニ

月夜よしよゝしは、月夜よし、月夜よしと、重ねたる詞なるを、はぶきたる物也、東屋のまやのと云るも、同じ格にて、東屋の東屋のと、かさねたり、こてふは、こよといふ也、こんといふにはあらず、こよをことといふは、常也、こんをことのみいへる例なし、すべて此哥、諸注みな説キ得ず

君こずはねやへもいらじこむらさきわが本ゆひに霜はおくとも

○君ガコズバイツマデモ閨ヘモハイルマイ　カウシテ外ニ立ッテキテ　髮ヘ霜ガオクト云テモイトヒハセヌ　ヤーツハリコヽデ待テ居ヤウ

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風をまつごと君をこそまて

○宮城野ノ本アラノ小萩ノ露ガ重サニ　風ノフイテクルノヲ待ツヤウニサワシハ君ヲマツワイノ　本あらは、本だちのしげからず、あらく生たる也、さる故に、なびきやすくて、殊に露の重きよし也、こ萩のこは、小菅小柴などの類の小也、木萩にはあらず、又小は、つけていふ詞のみにて、ちひさきをいふにもあらず、

あな戀し今も見てしが山がつのかきほに咲るやまとなでしこ

○アヽヽ戀シイ　ドウゾ今モ逢タイモノヂヤ　山ー中ノ家ノ垣ニヨウ咲テアルアノヤマトナデシコノヤウナ　カアイラシイソノコニサ

津の國のなには思はず山しろのとはに逢見むことをのみこそ

○〔一〕何事モホカノ事ハ思ヒハセヌ　タヾ逢ヒタイ〳〵ト　ソレバッカリヂャ　〔三〕ジヤウヂウワシーヤ思ウテ居ルワイ　とはには、あひ見むへかゝれるにはあらず、とはに思ふといふ意也、上の思はずといふを、下へひゞかせて、思ふといふことをしらせたり、

つらゆき

しきしまのやまとにはあらぬから衣ころもへずして逢フよしもがな

○〔上〕ドウゾ四アヒナシニ又アウヤウニシタイヿヂヤ

ふかやぶ

戀しとはたがなづけゝむことならむしぬとぞたゞにいふべかりける

○戀シイナドヽ云名ハ　タレガツケタヿヂヤヤラ　ソンナマハリ

ドホイ名チイハウヨリハナニカナシニ　死ヌルトツスグニ云タガ
ヨイワイ　キツウ戀シウ思フトキニハ實ニ死ヌルヤウナワサテ

よみ人しらず

みよし野の大川のべの藤なみのなみに思はゞわがこひめやは

○〔上〕一トトホリニ思フヿナラ　ワシガ此ヤウニコヒシタハウカイ
一トホリノヿデハナイワイナ

かくこひむ物とは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける

○サイシヨカラサ後ニハ此ヤウニ戀シカラウ物ヂヤトハ　ワシモ
思ウタヿヂヤ　サイシヨノワシガ心ノウラナヒガヨウ合タワイ
ナ

天の原ふみとゞろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

○神ナリト云物ハ　ヨニオソロシイ何シデモタマラヌ　ケシカラヌ
イキホヒナ物ヂヤケレド　ソレデモ人ノ思ヒアーウタ中ヲバト
ホノケルモノカイ　ソンナカミナリサヘトホノケハセヌヿナ
レバ　タトヒ何事ガアーツタトテモノクヿデハナイワシーヤ

梓弓ひき野のつゞら末つひにわが思ふ人にことのしげゝむ

○〔一二〕末デハドウデ　ミガ此ヤウニ思フ人ニ　名ガ立テ　イロイ
ロトウソサガシゲウナルデアラウ

此うたはある人あめのみかどのあふみのうねべに給

ひけるとなむ申す

夏引の手びきの糸をくりかへしことしげくとも絶むと思ふな

○タトヒ世間ノウワサハ　ドノヤウニシゲウゴザリマセウトモ
〔一二〕イツマデモ　ワタシヲ絶ウトハ思召テ下サリマスナ
くりかへしとは、長くつゞきて、たえきれざる意にいへる也、

此哥はかへしによみて奉りけるとなむ

里人のことは夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは

○人ノウワサヲハヾカツテ　君ハトホノイテイクガ　在所デノウ
ワサハ　タトヒ夏ノ野ノ草ホドシゲクモ　オレガ逢ハズニ居ヤウ
カ　コレカラトテモアハズニハオクマイ　餘材說くだ〳〵し、打
聞きこえず

藤原ノ敏行ノ朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひし
りてふみつかはせりけることばにいまゝうでく雨のふりける
をなむ見わづらひ侍るといへりけるをきゝて女にかはりて
よめりける　　在原ノ業平ノ朝臣

かず〳〵に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

○ワタシガヿヲシンセツニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ
ソコノホドハドウモ　キヽタヾシガタサニ　コヨヒノ雨デソレヲ
考ヘテ見テ　ソレデワシガ身ノ仕合セ不仕合セモシレルヂヤガ

四ソノ雨ハサ此ヤウニ五段々ト大ブリニナリマス　コレデワシガ不仕
合セモシレタヂヤワイナ　此雨デワシガ身ノ仕合不仕合ナ知ル
ト申スソケハ　マアタヾ今ノ御文ノ通リナレバ　此雨ガ止ンダナ
ラ御出ガアラウシヤッハリフッタラ御出ハアルマイヂヤ　スレヤ
此雨ハワシガ身ノ仕合不仕合ノシレル雨ヂヤワサテ　かずく
にといふ詞、諸說みなあたらず、これは俗言に深切にといふに
あたれり、そはまづ數々とは、物の多きをいふ言也、さて古哥
に「我戀はよむともつきじ云々など、戀の數おほきよしをつね
によみ、又思ひのしげきよしをいふ、多きしげきは、戀る心の深
く切なるをいへり、これにてかずくにをもさとるべし、こゝ
の外にも、此詞をよめる古哥ども、皆此意也、考へ合せて知べ
し、

ある女のなりひらの朝臣をところさだめずありきすと思ひ
てよみてつかはしける　　　よみ人しらず

大ぬさのひくてあまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

○祓ノ時ニ大麻ナアマタノ人ガ手ン手ニ引ッヤウニ　オマヘハ近イ
コロハ方々カラヒーツハル所ガ多ウナツタナレバ　思ヒハスル
ケレド ッシハドウモオマヘヂ頼ミニハエイタサヌワイナ

かへし　　　なりひらの朝臣

おほぬさと名にこそたてれ流れてもつひによる瀬はありてふ物を

○サアソミハソノヤウニ引ッ人ヵ多イ大ヌサヂヤト　名ニコソタテ
ランメン　其大ヌサハ川ヘ流シテハユクケレド　ドコゾデハ流レ
テヨル所ノ瀬ハアルト云ノニ　アンマリソノヤウニ大ヌサヂヤ
大ヌサヂヤト云テ下サルナ　ワシヂヤトテ末デハドウデヨル所
ガナウテハサ　ソノヨル所ハオマヘヨリ外ニアロカイノ

題しらず　　　よみ人しらず

須磨のあまのしほやく煙風をいたみ思はぬ方にたな引にけり

○スマノ浦ノアマノ塩チヤク煙ガ風ノツヨサニワキノ方ヘナビイ
テイクヤウニ　ワシガ思フ人モ　思ヒモヨラヌ人ノ方ヘナビイテ
イタワイノ

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし

○オマヘハテウド　カヅラノアノ木ヘモ此木ヘモハヒカヽルヤウ
ニ　アチコチト御通ヒナサル所ガ方々ニデケタレバ　ワシガ方
チタエハナサライデモ　ソノタエヌ御心ガナンノウレシイコトモ
ナイ

たがさとによがれをしてか郭公たゞこゝもとにねたるこゑする

○夜中ニアレ　郭公ガツイコヽデサ鳴ク聲ガスル　イツモトマル
里ハ　ドコノ里カシラヌガソノ里ヂハ今夜ハトマルノヂ一夜閑

シテ メヅラシイコチノ庭デ寐タトミエル アッコデ子テヰテナク聲ヂヤ これはたゞ郭公の哥なるを、こゝに入たるは、誤なるべし、戀のたとへとしては、ねたる聲するといへること、聞えがたし、然るを戀の意に注したるは、しひごと也、菅家万葉には、夏の哥とし、六帖にも、郭公の哥とせり、

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

○イヤモウ人ト云モノハロバッカリナサ物ヂヤ 〔三〕ウツリヤスイ心ハ ロトハキツイチガヒデサ

いつはりのなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

○誰デモロデハ嬉シイヿヲ云テクレルケレド 皆ウソデ 子カラ頼ミニハナラヌガ ウソ云コトノ無イ世ノ中デアラウナラ 人ノ云テクレルヿガ ドレホドウレシイヿデアラウゾ

いつはりと思ふ物から今さらにたがまことをか我はたのまむ

○ウソヂヤガトハ思ヒナガラモ コレマデ頼ミニ思フテ居ル人ノ云ヿナレヤ ワシヤヤツハリソレヲ頼ミニ思フテ居ルワイノタトヒ外ニマコトナ人ガアツタトテモ 今サラ 心ヲウツシテ誰レヲ頼ミニハセウゾイノ ワシヤトツトサウ云心ハナイ

素性法師

秋風に山のこのはのうつろへば人のこゝろもいかゞとぞおもふ

○此ゴロノ秋ノ風ニ山ノ木ノ葉ノ色ガカハッテチツテイクヲ見レバ 人ノ心モドウアラウゾ カハリハスマイカトサキヅカヒニ思ハル、

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　　とものり

蟬の聲きけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

○蟬ノ鳴ク聲ナキケバ モウオツヽケ秋ガ近イト思ヘバ 頼ミニ思フ人ノ心モ 秋風ガタツテ心ザシガ 此節ノ夏衣ノヤウニウスウナルデアラウカト思フノデ カナシイワイノ 餘材說、あまりくだくくし、夏衣といへるは、蟬の羽衣の緣をかねて、たゞうすくといはん料の、枕詞のみ也、打聞說、二の句にかなはず、

題しらず　　よみ人しらず

うつせみのよの人ごとのしげゝればわすれぬものゝかれぬべら也

○〔一〕世間ノ人ノウワサガシゲヽレバ ワシヲ忘レハセヌナガラオノヅカラトヲノクデアラウト思ハル、 又人ヲワスレハセヌナガラ オノヅカラトヲノクデアラウト思ハル、

あかでこそ思はむ中ははなれなめそをだに後のわすれがたみに

○思フ中ナラ タガヒニアキノコヌウチニサハナレテシマハウヿヂヤ ドウシテモ久シウナレバアキノクルナラヒナレバ セメテ

今此タガヒニアカヌトコロヲナリ𪜈　後々ノ思ヒダシグサニシテサ　ハヤアキガキテカラハナレテハ　何ンニモ思ヒダシグサモナイワサテ　餘材、わすれがたみの說わろし、

わすれなむと思ふ心のつくからに有しよりけにまづぞかなしき

○コチノ思ウヤウニモナイ人ヲ　思ウテ此ヤウニ心ヲ苦シメウヨリハ　ワスレテシマハウゾト思ヘバ　又ドウヤラ心ボソウナツテ今マデヨリハナホキツウカナシイ　サウ思フ心ガツクカラシテハヤマア此ヤウニカナシウテハ　トテモワスレテ　シマハル、コデハナイ　【千秋云、ともじは二の句へつくべし、】

わすれなむ我をうらむな郭公人の秋にはあはむともせず

○ワスレテシマウト思フガ必ズオレヲ恨ムナヨ　郭公ノ秋ニナラヌサキニ早ウドコヘカインデシマウヤウニ　オレモ人ノ秋風ニハアハウトハ思ハヌ　【千秋云、二の句にてよみ切て、三の句は、下へつゞけてよむべし、】

たえずゆく飛鳥の川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

○タエズ流レテツヒニヨドンダヿノナイ　此飛鳥川ノヨドンダヤウニ　オレガモシタマ〳〵　サシツカヘデモアツテ通ハヌヿガアツタラ　ナンゾ心ニシナノアルヤウニカノ人ガ思ウデカナアラウ　四の句、一本に、心あるとやとあるにつきて、　田中ノ道まろが、心あるどやの、ごもじのおちたるならむといへる、まとにさると也、此哥、ふるきすがたなれば、必然るべし、万葉の哥の例、皆しか也、あるとやにては、語とゝのはず、

此哥ある人のいはくなかとみのあづま人が哥也

淀川のよどむと人は見るらめど流れて深き心あるものを

○此間タワシガエイカヌヲ　川ノヨドンダヤウニ　ナンゾトヾコホリガアルト思ウデアラウケレ𪜈　ワシーヤ　末長ウイツマデモト思フ深イ心ヂヤモノ　ナンノトヾコホリガアロゾイ

素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺きせにこそあだ浪はたて

○山ノ川ノ淺イ瀬コソザワ〳〵ト浪ハタツモノナレ　底ノナイヤウナ深イ淵ガサワグ物カ　深イ淵ハケーツクサワギハセヌテウドソンナモノデ　シンジツニ深ウ思フ人ハ口ヘダシテ何ントモイヒハセヌ　シンジツヲシウナンノカノト云ノハ　ソレーヤケーツク心ノ淺イアダ浪ヂヤ

よみ人しらず

くれなゐのはつ花ぞめの色ふかく思ひし心われわすれめや

○〔一二〕サイショカラ深ウ思ヒソメタ心ヲ　ドンナヿガアーツタトテワスレウカ　ワシーヤイツマデモワスレルコトデハナイ

かはらの左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに

○〔一二〕タレユヱニ外ハ心ナチラサウゾ　オマヘヨリ外ニ心チチラスワシヂヤナイゾエ　しのぶもぢずりの說、顯注よろし、打聞わろし、

よみ人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびく淺茅の色ことになる

○ワシハコレホドニ深ウ思ウニマダ此ウヘチドウセイト云ヿデ

〔三四〕人ハ心ガハリノシタヿゾ　コレホドニ思ウ此ウヘハモウドウモシヤーウガナイ

かゞのいろにうつろふらめどしらなくに心し秋の紅葉ならねば

○人ノ心ハアチヤコチヤイロ〳〵ニウツルデアラウケレド　心ハ紅葉ノヤウニ色ノ見エル物デハナケレバ　ウツロウノガシレヌ

餘材、初メの說わろし、打聞よろし、

小野ノ小町

あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ

○海邊ノアマノスム里ノ案-內-者ニコソ浦チ見ヤウトハ云ハウバズノヿナレ　ワシハソンナ浦ノ案-內-者デモナイニ　ドウ云ヿデ　ウラミチ云ハウ　ウラミチ云ハウトバツカリ　ヒタモノ人ノイフヿヤラ

しもつけのをむね

くもり日の影としなれる我なればめにこそ見えね身をばはなれず

○ソラノクモーツタ日ニハ　人ノ影ノアツテモ見エヌヤウナモノデソレト目ニ見エコソセ子　ワシハ戀ニヤセホソーツテ　此ヤウニ影ノヤウニナルホド思フヿナレバ　人ノ影ノ身チハナレヌヤウニ　心ハジヤウヂウ思フ人ノ身チハナレハセヌ

つらゆき

色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもほえなくに

○色ノアル物ナラバコソ　ウツロウテカハリモセウケレ　人ノ心ハ色ハナイモノナレバ　ソノ色モナイワシガ心ガ　カノ人ニシミコンダカラハ　イツマデモカハラウトハ思ハレヌ

よみ人しらず

めづらしき人を見むとやしかもせぬ我下紐のとけわたるらむ

○久シウアハヌ　メヅラシイ人ニアハウトテヤラ　サウシモセヌノニ　ワシガ下紐ガコノゴロハ度々ヨウトケル　【千秋云、譯にサウシモセヌノニとあるは、即チ下紐をときもせぬにといふと也、

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞぬれぬる

○〔一〕サウカサウデハナイカ　モウ見ワスレタクラ井ヂヤ　サテモサテモ〔三〕久シウアハナンダ人ヲ見レバイゼンノ事ガ思ヒダサレテ　涙ガサコボレル　四の句、六帖又顯昭本に、ふる人見ればとあるぞよろしき、　【千秋云此集のなればゝみを玄に寫し誤れる也みと玄と似たり】

ほりえこぐたなゝしをぶねこぎかへり同じ人にや戀渡りなむ

○堀江ヲ往來スル小船ノ　イク度モ同シ川筋ヲノボリ下リスルヤウニ　ワシハマヘ方ノ同シ人ヲ　又タチモドリ〳〵　此ヤウニイツマデコヒシタウヿヤラ

伊勢

わた○清つみ○同とあれにしとこを今さらにはらはゞ袖や沫とうきなむ

○ワシガ床ハ　久シウウチタエテ思フ人ト逢テ寢タヿモナイユヱ　カナシサニ涙ハ海ノヤウデ　ソノ海ノアレルヤウニアレテシマウタ床ヂヤニ　久シブリデ又今サラ　其人ニ逢ウ(ア)ヂヤトテ　ソノ床ノツモツタ塵ヲ　袖デハラウタナラ　海ヘ沫ノウクヤウニ　ワシガ袖ガ涙ニウクデカナアラウ

つらゆき

いにしへに猶立かへるこゝろかな戀しきと○清に物わすれせで

○今デモヤツハリ昔ニ立カヘツテ　マヘ方ノ人ガ戀シイ　サテモサテモ物ワスレセヌ心カナ　ドウゾ此ヤウニ戀シイ事ニ物ワスレヲシテ　マヘ方ノ人ノヿヲバ　ドウゾ忘レテシマハイデ

人をしのびにあひしりてあひがたく有ければ　その家のあたりをまかりありきけるをりに鴈のなくをきゝてよみてつかはしける

大とものくろぬし

思ひ出て戀しきときははつ鴈のなきてわたると人しるらめや

○思ヒダシテ戀シイ時ハ　アノ鴈ノ鳴テワタルヤウニ　我モ此トホリニ此門(カド)ヲ泣テトホルト云ヿヲ　此家ノ内ノ思フ人ハ知ウカヤカウヂヤトハシリハスマイ

右のおほいまうち君すまずなりにければ(モウカヨハヌヤウニナツタレバ)かのむかし　おこせたりける文どもをとりあつめてかへす　とてよみておくりける

典侍藤原ノよるかの朝臣

たのめしこし言の葉今はかへしてむ我身ふるればおきどころなし

○コレマデイロ〳〵ト末賴モシサウニオーツシーヤーツテ下サレタ御文ドモ、　モウ(いまは)御モドシ申シマセウゾワタシガ身ガ此ヤウニアカレテシマウタレバ　今デハモウ此ヤウナ御文ナドハ　此方ニハオキドコロガゴザリマセヌ

ふるればは、ふるさるれば也、ふりぬればとは異也、

かへし

近院ノ右のおほいまうち君

今はとてかへすとのはひろひおきておのが物から形見とやみむ
〇モウハト云テカヘシテオコサレタ此文ヲ　ヒロウテトーツテオイテ　モト自ー分ノ物ナガラモ　ソナタノ形見ヂヤト思ウテ見マセウカイ

題しらず　　よるかの朝臣

玉ぼこの道はつねにもまどはなむ人をとふとも我かと思はむ
〇オマヘハ今デハ　毎夜御通ヒナサル所ガ外(ホカ)ニアルヂヤガ　タマタマ今夜コレヘ御出下サレタハ　定メテ道ヲトリチガヘナサーツタデアラウヂヤケレド　此ウヘトテモ　イツデモ(つねにも)コヨヒノヤウニドウゾ道ヲトリチガヘテ御出下サレバヨゴザリマス　ソシタラ餘ノ人ノ所ヘ御出ナサルノデモ　實(ジツ)ニワタシガ所ヘ御出下サレタノカト思ヒマセウワサテ

よみ人しらず

まてといはゞねてもゆかなむしひてゆく駒の足をれまへのたな橋
〇マアシバラク申スカラニハ　コヨヒハトマーツテモイシテ下サレカシ　ソレニナンヂヤ　トリイソイデトツカハトイナシヤルハサテモ〳〵キコエマセヌ　カウシテフリモギーツテイナシヤルアノオ人ノ馬ノ足ヲツマヅカシテ　コケサシテクレイ　門ノマヘナ溝ノ橋ヨコリーヤ　【千秋云、譯のはてに、コリヤといふ詞をそへられたる、おもしろし、さる勢ある哥也、さて此哥、俳諧の類也、】

中納言源ノのぼるの朝臣のあふみのすけに侍ける時によみてやれりける　　閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなく〳〵も見め
〇ワシガ身モ　相坂ノ關ニハナシテアル庭鳥ナラバコソ　ナキ〳〵モセメテハ　オマヘノ近江ヘ御通ヒナサルノヲナリ𪜈見ヤウケレワシハサウシテ　御往ー來ナサルノヲ見ルヿサヘナラヌガ　カナシイワイナ

題しらず　　伊勢

故郷にあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらむ
〇故郷コソアレテ見エル物ナレ　ワシガ思フ人ノ心ハ　故郷デハナケレ𪜈　ワシガタメニ此ヤウニアレテウト〳〵シウナーツタハドウ云ヿヤラ　心のあるゝは、外へうつろひて、こなたへうとくなるを也、餘村打聞わろし、見ゆといへるは、故郷のあれて見ゆる方にいへる詞也、人の心の方へかけては見べからず、

寵

山がつのかきほにはへる青つゞら人はくれどもこゝつてもなし
〇[上]思ウ人ノ所カラ此アタリヘ　人ハ度々來(ク)ルケレドモ　ワシガ

方ヘト云テハテカラコトツテモナイ　上句はたゞくるの序也、

さかゐのひとざね

大そらは戀しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

○空ハ戀シイ人ノ形見カイ　形見デモナンデモナイニ　ドウ云ヿデ戀シウ思ウタビゴトニ此ヤウニナガメラル丶ヿヤラ

よみ人しらず

あふまでのかたみも我は何せむに見ても心のなぐさまなくに

○又アウマデノ形見ノ物モ　ナニ丶セウゾ　ヤクニタ丶ヌ物ヂヤ　コレナ見テモオレハ　戀シウ思フ心ガ　子エカラヤスマルヿモナイ

おやのまもりける人のむすめにいとしのびにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければ　いそぎかへるとて（キフニヘヤヘカヘルトテ）もをなむぬぎおきていりにける其後もをかへすとてよめる

おきかぜ

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかふもくづなりけり

○此裳ヂノコシテオカシーヤーツタハ　定メテ又逢フマデノ形見ニ見ヨトイフ御心デコソゴザラウガ　コレヂ見レバ　オマヘノ事ガ思ヒダサレテ　涙ガナガレテサ　海ノ浪ニウク藻屑（モクヅ）ノヤウニ　涙ニウク裳ヂヤワイノ

題しらず

よみ人しらず

かたみこそいまはあた（○清）なれこれなくは（○清）忘るゝ時もあらまし物を

○形見ハサ　ケーツク今デハモウ　ニクイカタキヂヤワイノ　コレガナクバ　チリニハ又ワスレテ井ル時モアラウ物ヂ　形見ガアルユエ　見テハ思ヒダシ見テハ思ヒダシ　シバシノマモワスレラレヌ

古今和歌集巻第十五遠鏡

戀哥　五

五條のきさいの宮のにしのたいに住ける人にほいにはあら（オモテハレテハナ）で物いひわたりけるを　む月のとをかあまりになむほかへかくれにけるあり所はきゝけれどえものもいはで　又のとしの（アクルトシノ）春梅の花ざかりに月のおもしろかりける夜　こぞをこひてか（去年ノコヲ）の西のたいにいきて月のかたふくまで　あばらなるいたじき（戸シヤウジモナイ所ノ）にふせりてよめる

在原ノ業　平ノ朝　臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとのみにして

○今夜コヽヘ來テ居テ見レバ　月ガモトノ　去年ノ月デハナイカサア　月ハヤッハリ去年ノトホリノ月ヂヤ　春ノケシキガモトノ去年ノ春ノケシキデハナイカサア　春ノケシキモ梅ノ花サイタヤウスナドモ　ヤッハリモトノ去年ノトホリデ　ソウタイナンニモ去年トチガウタヿハナイニ　タヾオレガ身一ッバッカリハ　去年ノマヽノ身デアリナガラ　去年逢タ人ニアハレイデ　其時トハ大キニチガウタヿヂヤイノ　サテモ〳〵去年ノ春ガ戀シイ

二つやは、やはの意也、さて結句の下へ、もとのやうにもあらぬとかな、といふ意をふくめたり、然ふくめたるとは、月やはあらぬ、春やはあらぬ、月も春も、もとのまゝなるにといへる、上ノ句にて聞えたり、すべて此朝臣の哥は、心あまりて、詞たらずといふは、かゝるところ也、餘材打聞ともにわろし、かの説どものごくにては、してとゝぢめたる語のいきほひにかなはず、よく〳〵語のいきほひをあぢはひて、心得べき哥ぞかし、

題しらず

藤原ノなかひらの朝臣

花すゝき我こそ下に思ひしかほに出て人にむすばれにけり

○内々我コソ逢ハウト思ウテ其心デ居タニ　ソレニマア我ガオモイレハ　ムダヿニナッテ　此花薄ノ穂ニデタノチ結ンダヤウニオモテハレテ外ノ人ガトリクンデ　逢テシマウタワイ　ハレ殘念ナヿヤ　花薄をむすぶ事、伊勢家集此哥のはしの詞に見えて、餘材抄に引り、

藤原ノかねすけの朝臣

よそにのみきかまし物を音羽川わたるとなしにみなれそめけむ

○タヾヨソニバカリ聞テ居ヤウデアッタモノヲ　〔三〕アウデモナシニ　ナニシニ此ヤウニナレソメタヿヤラ　ナマジケニナレナジンテソシテ逢ハレヌノハ　サテ〳〵ツライモノヂヤ

凡河内ノみつね

わがごく我を思はむ人もがなさてもやうきと世をこゝろみむ

〇サテ〳〵ウイ〔コト〕ヤ　オレハコレホド人チ深ウ思フニ　人ハトカクソレホドニ思フテクレヌ　オレガ思ウトホリニオレチ思フテクレル人ガアレカシ　ソレデモヤツハリ此ヤウニウイモノカ　タメシテ見ヤウニ　世は、男女の中をいふ世也、【千秋云、世といへる詞の譯なさは、一首の譯のうちに、そのこゝろはあればなるべし】

もとかた

ひさかたのあまつ空にもすまなくに人はよそにぞ思ふべらなる

〇天ニ住デ居ルワシデモナイニ　ドウシタ〔コト〕カ　人ハワシチトホウヨソニサ思ウヤウスニオモハル、

見てもまた又も見まくのほしければなるゝを人はいとふべらなり

〇オレハ逢テモ〳〵ヤッハリ又々アヒタウ思ウニ　人ハ段々ナレルノチイヤガルヤウスニ見エル　見まくのほしければなるゝ、見まくのほしきにといふ意也、古き哥には、此格おほし、

きのとものり

雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみよをばへぬらむ

〇雲モナウテ風モナイデアル朝ノ空ハヨウ晴テアルモノヂヤガ　オレハソノヤウナモノヂヤヤラ　人ニイトヒキラハレテバッカリ一生チタテル　カウタトヘテイフワケハ　甚晴ト被厭ト詞ガ同シ〔コト〕ヂヤニヨツテサ　哥ト云物ハアヂナ〔コト〕チヨムモノヂヤナイカイノ

よみ人しらず

花がたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらむ数ならぬ身は

〇〔一〕ホカニイクタリモヨイノガアルナレバ　ワシガヤウナ人カズデモナイ身ハワスレラレタデアラウ

うきめのみおひてながるゝ浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

〇ナニ、ツケテモウイコトバッカリデ泣テクラスワシナレバ　思フ人ノタマ〳〵ニミエルノモ　タヾカリソメニ口フサゲニチーヨーツト立ヨラル、バカリノ〔コト〕デコソアラウケレ　マコトノ心ヂシデ見エルノトハ思ハレヌ

いせ

あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝがほなる

〇此ヤウニ物思ヒヂシテ涙デ袖ノヌレテアル時節ヂヤトテ　此袖ヘウツー、タ月ノカホマデガ　ワシガ顔ト同シヤーウニ　ヨウツウロテヌレテ見エル〔コト〕ワイノ　あひにあひての説、餘材わろし、打聞もときをへず、すべて此詞は、これとかれと、よくあひかなひて、同じやうなる意也、

よみ人しらず

秋ならでおく白露はねざめするわが手枕のしづくなりけり

○露ハ秋ヨウオク物ヂヤガ　秋デナシニオク露ガアル　ソレハ物思ウテ夜半ニ目ヲサマシテ居ルワシガ枕カラ床ヘオチル涙ノ雫ヂヤワイ

すまのあまの塩やきごろもをさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

○〔上〕道ノアヒダガ遠イユヱカシテ　マテドマテドマダ御出ナサラヌ　アヽオソイヿヂヤ　上句の意、餘材の如し　【千秋云、四の句の譯、まどほなる故にや、といふ意にとられたる也、まとに此哥、その意にあらざればよろしからず、】

山しろの淀のわかこもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

○〔一二〕セメテカリソメニチヨツトサヘ來テクレヌ人ヲ頼ミニ思フテ居ルワシハサ　アヽラチノアカヌ心ヂヤ

あひ見れば戀こそまされみなせ川なにゝ深めておもひそめけむ

○ワシガ中ハ　水ノナイト云水無瀬川ノヤウナモノデ　逢事ガナケレバ　タヾ戀シイコトコソマサレ　水ノマサツテ深イヤウナヿハナイ中ヂヤニ　ナニシニ末カケテ深ウワシハ思ヒソメタヿヤラ

暁の鴫のはねがきもゝはがき君がこぬよはわれぞかずかく

○暁ニハ鴫ノハ子ガキト云テ　鴫ガキツウシゲウ羽タヽキヲスル物ヂヤガ　君ガコヌ夜ハ　ソノ鴫ノハ子ガキホドシゲウ　ワシガサイク度トナシニ　タメ息ヲツイテナゲキマス　此哥の下句の意、ときえたる人なし、數かくとは、たとへの鴫の百羽がきの詞によりていへるのみにて、意はたゞ、歎きするとのしげきよし也、

玉かづら今はたゆとや吹風の音にも人のきこえざるらむ

○〔一〕モウハキレテシマウトテヤラ　此ゴロハイーツカウ〔三〕オトヅレモセヌ

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋やきぬらむ

○マダソノ時節デモナイニ此ヤウニワシガ袖ヘ時雨ノフーツタハ君ガ心ニ秋ガキタカシラヌ　ソレデ此袖ノヌレタハ涙ノシグレヂヤ

山の井のあさき心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

○ワシハ山ノ井ノヤウニ淺イ心デハナイニ　ドウ云ヿデ君ハ　イツデモ影バカリ見エテヨリツカシーヤラヌヿヤラ　ばかりのみとは、いたづらに重なれる詞にはあらず、のみは、いつとてもの意也、

わすれ草たねとらましを逢とのいとかくかたき物としりせば

○此ヤウニキツウ逢フコトノナリニクイモノヂヤト云ヿヲ　トウカ

ヲシツタナヲ　忘草ノタ子ヲトーツテオカウデアツタモノナ
ソシタヲソレヲ蒔テハヤシテ　此節戀ヲワスレルヤウニセウモノ

こふれどもあふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひしげるらむ

○ナンボ戀シウ思ウテ寐テモ　夢ニモ逢ウト見ル夜ノナイハ　カノ人ガワシヲ忘レタワスレ草ガ　夢ノ道ヘマデハエシゲーツタカシラヌ

夢にだにあふとかたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝ

○夢ニサヘアハレヌヤウニナツテキタノハ　ワシガ物思ヒデエ子ムラヌユヱカ　又ハ君ガワシヲ忘レテ心ガカヨハヌノカ　餘材わろし、打聞よろし、

けんげい法師

もろこしも夢に見しかばちかゝりき思はぬ中ぞはるけかりける

○唐ハキツウ遠イ所ヂヤト聞テ居ルニ　ソレモ夢ニ見タレバ　近イヿデアーツタガ　トカク唐ヨリモドコヨリモ　遠イノハ思ハヌ中デゴザルワイ

さだのゝぼる

ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞおひける

○長雨ガフレバフルイ家ノ軒ハ　クサツテ　忍草ガハエシゲルヤウニ　タツタヒトリ物思ヒノシンキナナガメバッカリシテ月日ヲオクルワタシナレバ　人ヲ戀シノブ心ノ忍ブ草ガッサシゲウナルワイ

僧正遍昭

わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

○心ヅヨウテ來モセヌ人ヲ　クルカ〳〵ト待テ居タマニ　ツイ月日ガタツテ　コチノ庭ハ　草ガアノヤウニシゲツテ　道モナイホドニアレタワイ

今こむといひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞなく

○チカイウチニ又來ウト云テ別レテインダ朝カラシテ　毎日其人ノ事バッカリ　思ヒグラシニクラシテ　ヒグラシノ鳴クヤウニオレーヤ泣テバッカリッサ居ル

よみ人しらず

こめやとは思ふものからひぐらしのなく夕暮はたちまたれつゝ

○ナンボ待ッタトテ來ウカヤ　クルヿデハナイトハ思ヒナガラモ夕カタヒグラシノ鳴クジブンニナレバ　門口ヘ出テ　立テ居テハモシモヤト待ッ心ガアツテ　ドウモ思ヒ切ッテハ居ラレヌ

今しはとわびにし物をさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる

○カウ久シウ來ヌカラニハ　モウハト思フテ　力オトシテ氣ヲクサラシテ居タモノヲ　蛛ノ糸ガキルモノヘカヽツテ　ドウカ又頼ミノアルヤウニ思ハセル　此蛛ガ　蛛ノ糸ノキルモノヘカヽルノハ

待ッ人ノクルシラセヂヤトヤラ云ヿヂヤニヨッテサ
いまはこじと思ふものからわすれつゝまたるゝことのまだもやまぬか
〇モウ來ルコトハアルマイト思ヒナガラ　ソレヲワスレテハ又シテハ待ッ心ガマダマアヤマヌヿカナサテモ〳〵
月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむわびつゝもねむ
〇此ヤウニサヤカナ月夜ニハ　來ヌ人ガモシヤ來モセウカト待タレテキガモメル　イーツソマーックラニ曇ッテ雨ガフリデモスレバヨイニ　ソシタラツライヿヂヤト思ヒ〳〵モ寐テシマハウニ
うゑていにし秋田かるまで見えこねばけさ初雁のねにぞなきぬる
〇五ー月ノコロ此田ヲウヱテオイテインダ人ノ　此ヤウニモウ其田ヲ刈ルジセツニナルマデ　待ッテモ〳〵ワセ子バ　サテモ〳〵ナサケナイ人カナトオモハレテ　ケサ始メテ雁ガナイタガ　ソノ雁ノヤウニサワシモナイタ
こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ
〇コヌ人ヲ待テ居ルユウ方ノ秋ノ風ハ　ドノヤウニ吹クコトデ　コレホド悲シイツライヿヂヤヤラ
久しくもなりにけるかな住の江のまつはくるしき物にぞ有ける
〇ワシガ思フ人ノ來テ逢フタハイツノヿデアッタヤラ　ソレカラ一向ニアハズニ　マア〳〵久シウナツタヿカナ　來モセヌ人ヲ待ッノハサテ〳〵クルシイ物デッゴザルワイ　久しくといふ縁に、住のえの松といひ、其松を、人をまつにいひかけたる也、

かねみのおほきみ

すみのえのまつほど久になりぬればあしたづのねになかぬ日はなし
〇コヌ人ヲクルカ〳〵ト待テ居ル間タガ久シウナツタレバ　ワシハ毎ー日ナカヌ日ト云ハナイ

なかひらの朝臣あひしりて侍けるをかれかたになりにければちゝがやまとのかみに侍けるもとへまかるとてよみてつかはしける

伊勢

みわの山いかにまちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじとおもへば
〇ワタシモモウ京ニ居テモオモシロウナイニヨッテ　此度大和ヘ下リマスルガ　三輪ノ山本トムライキマセト古哥ニヨンデアルヤウニ　今カラアノ方デ戀シイ人ヲ待ッタトテモ　何ン年タッテモ　タレモ尋子テ來テクレル人モアルマイト存ジマスレバ　ドウシテマア待チヲ丶セテ逢ハレマセウゾイノ

題しらず

雲林院のみこ

吹まよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の
〇アチコチトフキマヨウ野ノ風ガサムサニ　萩ノ花ノチッテニクヤウニ　ヨソヘウツー丶テユクカマア　人ノ心ガ　餘材わろ

し、打聞よろし、

をのゝこまち

今はとて我身時雨にふりぬればことのはさへにうつろひにけり

○ワシガフルウナツタレバ　モウイヤト思召テ　マヘカタオーツシヤーツヽ御約束ノ御詞マデガチガウテ参ツタワイナ　時雨は、ふりといひ、又とのはうつろふといはむ料なり、【千秋云、此哥は、二三一四五と、句をつゞけてこゝろうべし、】

かへし　小野ノさだき

人を思ふ心このはにあらばこそ風のまに〳〵ちりもみだれめ

○人ヲ思フ心ガ木ノ葉ナラバコソ　風ノフクニシタガウテ　チリミダレモセウケレ　ワシガソナタヲ思ウ心ハ　木ノ葉ノ風ニチリ乱レルヤウナカル〴〵シイ心デハナケレバ　何事ガアーツタトテモナンノメーツタニカハラウゾイ

なりひらの朝臣きのありつねがむすめにすみける（ノ所ヘカヨヒケルガ）をうらむる事有てしばしのあひだひるはきてゆふさりは（イツデモカヘリケレハ）かへりのみしければよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆる物から

○空ノ雲ハ目ニハ見エルケレド遠イヨソナ物ヂヤガ　オマヘモチカゴロハテーウドツレデ　晝ハ御出ガアツテ　サスガ目ニ見エハ

シナガラ　ヨソ〳〵（ニ）シウナーツテマア　ネカラ夜ルオトマリナサーツテ下サルヿハナイ　サテモ〳〵キコエマセヌナサレカタカナ（三か）

かへし　なりひらの朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

○ワシヲ雨雲ニタトヘラレタガ　ナルホドヨイタトヘヂヤ　其雲ノヤウニ　ワシガ　イタリキタリバッカリシテ足ヲトメズニタテル（ふる）ノハ　其雲ノカヽツテ居ル山ノ風ガツヨサニ　トヾマツテ居ルヿノナラヌヤウナモノデ　ワシガカヽツテ居ルソナタノ心ガミヅクサヽニ　ドウモ夜ルハトマラレヌヂヤワイノ（なり）　ふるは雨雲の縁也、

題しらず　かげのりのおほきみ

唐衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひむと思ひし

○キルモノハ着（キ）ナレヽバヤハラカニナツテ　身ニヒツタリトツキマツハレル物ナレハ　ソノ通リニ人モ　ナレタナラバ身ニシタシウコソナラウハズナレ　ソレニ馴テカラモヤツハリ此ヤウニヨソヨソシウテ　ジヤウヂウ心ニカケテ戀シウ思フテバッカリ居ヤウヿトハ思ウタヿカイ　ナレテカラモヤッハリ此ヤウニアラウトハ思ハナンダ　かけては衣の縁也

と　も　の　り

秋風は身を分てしもふかなくに人の心のそらになるらむ

○秋風ハ雲ヤ霧ナドヲ吹分ルヤウニ　人ノカラダヲ分ケテ腹(ハラ)ノ内ヘ吹テハイルモノデモナイニ　ワシガ思フ人ノ腹ノ内ナ心ガ　風ニ木ノ葉ノ空ヘチルヤウニ　ヨソヘウツーヽタハドウ云ヿヤラ

上句の說、餘材打聞ともにわろし、かの說どものごとくにては、身を分てといふこと、いたづら也、

源ノ宗于ノ朝臣

つれもなくなりゆく人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

○次第ニツレナウナツテユク人ノ詞ガサ　秋ヨリサキノ紅葉ヂヤワイ　ナゼトイフニマヘカタ云テオイタヿガサツハリカハツテシマウタワサ　木ノ葉ノ色ノヤウニ

こゝちそこなへりけるころ(ビヤウキノジセツ)あひしりて侍ける人のとはでこ(ク)こちおこたりて(ワイキシテカラ)後とふらへ(ム)りければよみてつかはしける

兵衛

しでの山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

○サキダツテハワタシモワヅラヒマシテ　スデニ死(シニ)マスデアツタガツレナイオマヘヨリ先キヘ　ワシハシデノ山ハコエマイゾト存ジテ　ソノ麓マデ參ツテ見テサモドツテ參リマシタ

あひしれりける人のやうやくかれかたになりけるあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける

こまちがあね

時過てかれゆくをのゝ淺茅には今は思ひぞたえずもえける

○秋モ過テ冬ガレニナツタ野ハ　火ヲツケテヤイテモエル物ヂヤガ　テウド其通リデ年ガイテオマヘノ御心ノカレ〴〵ニナツタワタシハ　今デハモウ　ジヤウヂウ子ノ思ヒガサモエマスワイナ　ソレデ此淺茅モ此通リニヤケマシタ　ゴラウジテ下サリマセ

ものおもひけるころ物へまかりける道に野火(ヤクヒ)のもえけるを見てよめる

いせ

冬枯の野べとわが身を思ひせばもえても春をまたまし物を

○人ニ見ステラレタワシガ身モ　冬枯ノアノ野ヂヤト思フナラ　アアシテ焼(ヤク)ヤウニ　今コソ思ヒガモエルケレド　ソレデモ又春ニナツタナラ　芽(メ)ガデルデアラウト思フテ　春ヲ待タウモノヲ　ワシハモウアノ冬枯ノ野トハチガウテ　春ニナツタトテモ芽(メ)ノデル賴ミモナイ身ヂヤワイノ　從女(ソナタ)シウモス井リヤウシテタモイノ

題しらず

とものり

水のあわのきえてうき身といひながら流れて猶もたのまるゝかな

○水ノ沫ノキエルヤウニキエルホドウイ我身ヂヤト思ヒナガライツモカウバカリデモアルマイト　マダ末ヲ賴ミニ思フテヤッハ

リマア消モセズニカウシテ居ルハ　サテ〳〵ヲチノアカヌ我心
カナ　【千秋云、ながらへてを、水の縁にて、ながれてとはいへ
り、】

よみ人しらず

みなせ川有てゆく水なくはこそつひにわが身をたえぬと思はめ
○水無瀬川ニ　有ッテ流レル水ガナイナラバコソ　ワガ中ナ　トチ
トチ切レテシマウタトハ思ハウヿナレ　水ノナイト云名ノ水無
瀬川サヘヤッハリ水ハアッテ流レルナレバ　我中モ絶タヤウナレ
ド　ヤッハリ縁ハアッテタエキリハセヌヿモアラウワサテ
四の句わが中をといふべきを、身をといへるは、少しいかゞ也、
身をに、川の水脈(ミチ)をかねたるにや、

みつね

よし野河よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ
○人ノツライハ【一】ハテゼヒガナイ人コソツラカラウケレ　オレ
ハマヘカタ云テオイタコトハイツマデモワスレマイト思ウ
はやくは、吉野川の縁也、

よみ人しらず

世ノ中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有ける
○世ノ中ノ人ノ心ト云モノハ　テウド花染ノ色デ　カハリヤスイ物
デサゴザルワイ
こゝろこそうたてにくけれそめざらばうつろふともをしからましや
○ウタテヤ　人チ思フコチノ心ガサ　ニクイヤツヂヤワイ　コチカ
ラ思ハズバ　サキノ心ノカハルモ惜(ヲシ)カラウカイ　人ノ心ノカハ
ルガツライモ　コチカラ思ウユヱヂヤワイ
色とはいはざれども、三四の句は、色につきていへる詞なり、

こまち

色見えでうつろふものはよの中の人の心の花にぞありける
○草ヤ木ノ花ハ　花ガアルユヱニウツロウヂヤガ　色ハアルトモ見
エズニ　ウツリカハルモノハ　世ノ中ノ人ノハナ〳〵シイ心ノ花
デサゴザリマスワイ
色見えでは、色のなきをいふ也、餘材、初二句の注わろし、

よみ人しらず

我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば
○花ノチッテシマウタヤウニ　ツレソウ人ノ心ガカハッテ　ノイテ
シマウタナラバ　ウイヿヤツライヿヤト思フテ　相手ナシニワシ
ヒトリ　鶯ノナクヤウニ泣テ居ルデアラウカ
世は、男女の間をいふ、打聞、下句を、人の心の、花とともにちり
なばとあるは、わろし、花とは、花の如くにといはんがごとし、鶯

とのとゝおなじ【千秋云、なきわびんの譯に、泣テ居ルデアラウカとあるは、わびといふ詞の譯、たらざるが如くなれ共、是は上に、ツライコトヤト思フテとある、是にあたれり、此たぐひなほおほし、心をつくべし、】

そせい法師

おもふともかれなむ人をいかゞせむあかずちりぬる花とこそ見め

○イカホド殘念ニ思ウタト云テモ 心ガカハツテ トホノイテユク人ヲバ ナントセウゾ ドウモセウヿガナイ スレヤ マダ見タラヌウチニ早ウ散タ花ヂヤトサ思ウテ居ヤウマデ

よみ人しらず

今はとて君がかれなばわがやどの花をばひとり見てやしのばむ

○モウコレギリト思フテ 君ガトホノイテ來ヌヤウニナツタナラコチノ庭ノ花ヲバ ワシヒトリガ見テ 君ノ事ヲイロ〳〵ト思ヒダスデアラウカ

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなむ

○人ノワシヲ忘レタワスレ草モ枯テモシ又モトノヤウニ思フテクレルヿモアラウカト思ヘバ ワシヲワスレタツレナイ人ノ心ヘ霜ガオケバヨイニト思ハレル 霜デハソウタイ草ガ枯レルモノナレバ ソノワシヲワスレタ忘草ノカレルヤウニサ

寛平ノ御時御屏風に哥かゝせ給ひける時よみてかきける

そせいほうし

わすれ草何をかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

○ワスレ草ト云物ハ 何ヲタ子ニシテハエルコトカト思フタガ ソノタ子ハ ツレナイ人ノ心ヂヤワイノ ハテツレナイ心カラシテ人ヲバ忘レルモノヂヤワサ

題しらず

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ

○〔一〕ワシガキラウテモウイ子ト云詞ヲ カケタヿモナイニ 人ノ此ヤウニ遠ノイテ來ヌハ 何ヲウイト思ウテノヿヤラ

かけ、かる、皆稲の縁の詞也、

きのつらゆき

初鴈のなきこそ渡れよの中の人のこゝろの秋しうければ

○人ノ心ノ秋ガウイユヱニ ワシハ空ヲワタル初鴈ノヤウニ泣テサタテルワイ

よみ人しらず

あはれともうしとも物を思ふときなどか涙のいとなかるらむ

○物ヲアハレト思フ時モ ウイト思フ時モ トカク涙ガホロ〳〵ホ

ロホロホロ〳〵ホロ〳〵トコボレル　ナゼニ此ヤウニ涙ガイソ[五]ガシウコボレルヿヤラ　餘材打聞ともに、くだ〳〵しき注也、

身をうしと思ふにきえぬものなればかくてもへぬる世にこそ有けれ

○キツウ身チウイト思ウニハ命モ消エサウニ思ハレルケレ𪜈　ソレデモサスガキエハセヌモノヂヤ　スレバ此（かくても）ヤウニウイ身デモヤッハリソレナリニ　タッテユク世デッゴザルワイノ

典侍藤原ノ直（ナホイ）子（コ）ノ朝臣

あまのかる藻にすむゝしの我からとねをこそなかめ世をば恨みじ

○海士ノ苅ル藻ノ中ニワレカラト云虫ガ住デヰル　物ヂヤト云ヿヂヤガ　ソノ虫ノ名ノトホリニ　何事モワレカラヂヤ　我身カラノコトヂヤトレーウケーンシテコソ　泣クナラ泣キモセウヿナレツレソウ人チバ恨ミマイゾ　ヨウ思ヒマハシテ見レバ　人チウラミルノハ大キナフカクヂヤ　【千秋云、われからの事、己つらつら思ふに、もしは虫の名にはあらで、たゞ藻にすむ虫のごく、はかなく数にもあらぬ我身から、といへるにはあらじか、又海人といひて、我からといへる詞は、仁徳紀に、あまなれやおのが物からねなく、とあるをも思ひて、よまれたるにやあらん、】

いなば

あひ見ぬもうきも我身のから衣思ひしらずもとくるひも哉

○逢タイ人ニアハレヌノモ　其人ノツライノモ　ミンナ我身カラノヿヂヤ　スレーヤドレホド思フタトテアハレルヿデハナイニ此ヤウニ下紐ノトケルハ　サテモ〳〵マア　ガテンノワルイ下紐カナ　下ひものとくるは、人にあふべきしるし也、

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　すがのゝたゞおん

つれなきを今はこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

○ツレナイ人チモウ（今ハ）戀シウ思ウマイゾト　タシナムケレドモ　ナントヅスルト思ヒダシテ涙ガコボレル　サテモ〳〵マア心ヨワイヿカナ

題しらず　伊勢

人しれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

○シャウ世ー間ヘシレズニ絶タ中デアラウナラ（ましかば）　絶ルハツライヿナガラモ　無イ事ヂヤト云テ　セメテハ　ウキ名ノタヽヌヤウニナリ𪜈セウモノチ　ワシガ中ハハヤ世間ノ人モ知テ居レバ　無イ[三]事ヂヤ𪜈イハレ子バ　絶タバカリカウキ名サヘ立ッテ　サテモサテモメイワクナツライヿカナ　【千秋云、すべてまし物をととめたる哥は、此譯のごく、おほく意をふくめたるもの也、心をつくべし、】

よみ人しらず

それをだに思ふこととて我やどを見きとないひそ人のきかくに

○人ヲ深ウ思フ時ニハ　其人ノ家ナリ𪜈見タイヤウニ思ウモノヂヤガ　サウツ子〴〵思フテ居ルヿトテ　ヒヨツトシタ詞ノハシニモ　ワシガ所ヲ見タト云ヿモ　人ノ聞クトコロデ必ス云デハナイゾヤ　エテハソンナヿカラシレルモノヂヤ　此哥は、こゝに入べき哥にあらず、然るを餘材は、部立になづみて、哥の意にたがへり、此集ならむからに、まれ〳〵は、などか部立の誤りもなからん、

あふ事のもはら絶ぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

○自由ニアハレル時ニハ　戀シイト云ハドノヤウナモノヤラシランダニ　今カウ　スキト絶テアハレヌ時節ニナツテハジメテ人ノ戀シイヿモ知ッタワイ

わびはつる時さへものゝかなしきはいづこをしのぶ涙なるらむ

○此ヤウニ戀ニアグミハテタ時節ニサヘ　其人ヲヤッハリイトシイ戀シイト思ウテ涙ノコボレルハ　ドコガ戀シウテノヿヤラ　此ヤウニウイツライメニアハスル人ナレバ　イトシイヿモ戀シイヿモナイハズヂヤニ　此かなしきは、いとほしく思ふ意也、さて三の句と、しのぶ涙といへる詞とを、たがひに相まじへて心得べし、打聞に、忍びに涙のおつらんとあるは、たがへり、

藤原ノおきかぜ

恨みてもなきてもいはむかたぞなき鏡にみゆる影ならずして

○ウランデモ泣テモ　此カナシサヲバ誰ヲ相手ニシテイハウゾ　思フ人ハモハヤ絶テ一向ニアウヿモナケレバ　鏡ヘウツルオレガ影デナウテハ　外ニ相手ニシテ云ハウヤウハナイ

よみ人しらず

夕されば人なきとこをうちはらひ歎かむためとなれる我身か

○ユフカタニナレバ　君ガキテ寐モセヌ床ヲハラウテ　獨リ子ルトテハ　イツノ夜デモ〳〵　ツライヿヤト思フテタメイキヲツイテ寐ルヂヤガ　ワシハマア此ヤウニツライ歎キヲセウタメニ生レテキタ身カヤ　サテモ〳〵イングーワナ身カナ

わたつみの我身こすなみ立かへりあまのすむてふうらみつるかな

○サツハリ絶テシマウタ中ヂヤノニ　其人ノ心ノカハツタヿヲ又ヒーツカヘシテ此ヤウニ恨メシウ思フヿワイノ　今サラ恨ンダトテナンノセンガアラウゾ　サテモグチナワシガ心カナ

あら小田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやまめ

○アラ田ヲ何ンベンモ〳〵スキカヘスヤウニ　マア何ンベンモ人ノ心ヲトーツクリトヨウカンガヘテ見テコソ　モウラヲアカヌト云

ヿハ定メウヿナレ

ありそ海のはまのまさごと頼めしは忘るゝことの数にぞ有ける

〇濱ノ眞砂ノ数ハヨミツクスト云テモ　我戀ハ　ヨンデモ〳〵ツキマイナド、　ギヤウサンニ云テ　[三]ヲシチヨロコバシテオイタ　ソノ濱ノマサゴノ數ハ　ミヅクサイヿノケシカラヌタトヘデサアツタワイ

あしべより雲ゐをさしてゆく鴈のいやとほざかる我身かなしも

〇芦原カラ空ヲサシテヅーヽトトンデユク鴈ノダン〳〵ト遠ウナルヤウニ　[いや]ダン〳〵ト思フ人ノトホノイテユクワシガ身ハマア[五も]カナシイヿヂヤ

しぐれつゝもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき

〇時雨ガフリ〳〵[つゝ]シテ　木ノ葉ノ色ノカハッテユク秋ノコロハツライモノヂヤガ　ソレヨリハ　云テオイタ詞ノ　カハル人ノ心ノ秋ニアウ身ガサナホツライ

秋風のふきと吹ぬるむさし野はなべて草葉の色かはりけり

〇秋風ガフキサヘスレバ　アノ廣イ武藏野デモ　野ハサッハリミナ[なべて]草ノ色ガカハッテ枯ルワイ　人ノ心モソノトホリサ　餘材くだくだし

小　町

秋かぜにあふたのみこそかなしけれわがみむなしくなりぬと思へば

〇秋ノ大風ニアウ稲ハサキノドクナモノヂヤ　百姓ノ頼ミニシテ居ル田ガ　サッハリシマヒニナル　ワシガ中モテウドソンナ物デ人ノ秋風ガフイテ　頼ミニ思ウタ事ガ　皆ムダニナッタト思ヘバ[三]サカナシイワイノ

たのみは、田の實によせたり、さて四の句、我身むなしくと、つゞけては心得べからず、我身は、秋風にあふといふへかゝり、むなしくは、たのみへかゝれり、

たひらのさだふん[〇清]

秋風のふきうらがへすくずの葉の恨みてもなほうらめしきかな

〇〔上〕ウラミヲ云テモ〳〵　マダヤッハリ恨ミガハレヌ　サテモサテモウラメシイヿカナ

よみ人しらず

秋といへばよそにぞ聞しあだ人の我をふるせる名にこそ有けれ

〇秋ト云ヿヲバ　ヨソノヿノヤウニサ思ウテ居タガ　ヨソ事デハナイ　ウツリギナ人ノワシヲ見捨タノガ　ワシヲアキト云モノデ其名デサゴザルワイノ

わすらるゝ身をうぢ橋の中絶て人もかよはぬ年ぞへにける

〇テウド橋ノ中ガキレテアレバ渡ル人モナイヤウニ　思フ人ニ忘レラレタ身ハ　ウイモノデ　[五]何ン年カモーウ子カラ使[四ヒト]モコヌワイ

【千秋云、四の句、人もかよはずしてと見れば、やすくきこゆ、】

又はこなたかなたに人もかよはず

坂上ノこれのり

あふとをながらの橋のながらへてこひわたるまに年ぞへにける

○逢事モナイニ ヤッハリアヒカハラズ 戀シタウテ月日チオクルウチニサ ハヤ何ン年カターツタワイ ヌハ アヒタイ〳〵ト思ウテ戀シタウテ月日チオクルウチニサ【千秋云、後の譯の意なれば、逢とを戀わたるとつゞきて、逢となくてと、いひかけたるにはあらず、をもじによれば、さやうにも聞ゆ、然れ共、逢と無と、いひかけたるやうにも聞ゆる也、】

とものり

うきながらけぬる沫ともなりなゝむ流れてとだに頼まれぬ身は

○セメテハ又末デナリ圧思フ頼ミサヘナイワ シガヤウナウイ身ハイーツソノ水ニ ウキナガラ 消ル沫ノヤウニキエテシマイナリ圧スレバヨイ【千秋云、うきながらは、憂(ウ)きまゝにての意にかねたるなるべし、】

よみ人しらず

流れてはいもせの山の中に落るよし野の川のよしや世の中

○紀ノ國ノ妹山トセ山トノ間タサヘ 吉野川ガ流レテ來テ 中ノヘダテガアルカラハ ソウタイ人ー間ノ男女(イモセ)ノ中モ イツマデモ始メ

ノヤウニムツマシウハナイハズノ〻デ 久シウナレバ オノヅカラカレコレガ出來テクルノモ ソノハズノ〻ヂヤ ハテゼヒガナイ山デサヘサウヂヤモノ 世の中は、男女の中をいへる也、すべて男女のなからひを、世とも世の中ともいへると多し 心得おくべし、

古今和歌集巻第十六遠鏡

哀傷歌

いもうとの身まかりける時よみける

小野ノたかむらの朝臣

なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに

○雨ガフツタナラ三途(セウヅ)川ノ水ガマスデアラウ ソシタラ 妹トガヨウ渡ラズニ又此世ヘモドツテクルヿモアラウソノタメニ 此オレガ泣ク涙ガドウゾ雨ノトホリニフレバヨイ

さきのおほきおほいまうちぎみを白川のあたりにおくりける夜よめる

そせい法師

ちの涙おちてぞたぎつ白川は君がよまでの名にこそ有けれ

○此川ノ名ヲ白川ト云ハ 此度オカクレナサツタ良房公様ノ御在世ギリノ名デアツタワイ 此殿ノ御カクレナサレタレバ 悲シサニ拙僧ガ泣ク此眞赤(マツカ)イナ血ノ涙ガサーツサト流レル スレバヤモウ白川デハナイ赤川ヂヤ

ほりかはのおほきいまうち君みおほまかりける時にふかくさの山にをさめてける後によみける

僧都勝延

うつ蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて

○蟬ハカラヲヌギステヽオイテ ドコヘカインデシマウ物ヂヤガソレモソノヌケガラハ イツマデモ殘ツテアルニ 人ハ死ヌルトソノマヽ ヌケガラサヘ燒(ヤイ)テシマウテ 跡ヘ殘シテオカヌモノデ此基經公様モ 御尊骸サヘノコラヌハ サテ／＼オノコリオホイヿヂヤ セメテソノ御火葬ノ煙ナリトモ殘ツテアレ 此深草ノ山ヨソシタラソレヲ見テナリトモ 御尊骸ノナゴリヂヤト思フテ 少シハカナシサヲハラサウニ

なぐさめつといふと、蟬の方にいひたれども、意は蟬にはかゝらず、蟬には、からを見てなぐさむる事、よしなし、此詞は、煙だにたて、それを見てなぐさめん、といふ意なるを、上にいひて、下へひゞかせたるもの也、古哥には、かゝるとおほし、さる例をしらでは、まどふと也、心得おくべし、

かむつけのみねを

深草の野べの櫻しこゝろあらばことしばかりは墨染にさけ

○此度基經公ヲヲサメマシタ此深草ノ野ノ櫻 心ガアルナラ 今年バカリハ墨染ノ色ニサケサ 人モミナ墨染ノ服ヲキテ居ル春

ヂヤニ

藤原ノ敏行ノ朝臣の身まかりける時によみてかの家につかはしける　　きのとものり

ねても見ゆねでも見えけり大かたはうつせみのよぞ夢には有ける

○此度ノソコモトノ御不幸ニツイテ　ヨウ思ウテ見マスレバ　夢ト云モノハ　子ムツテ居テモ見ルモノナリ　又寐イデモ見ルモノデゴザルワイ　此人一世ノ世ガサ　ソウタイミナ夢デゴザルワイ　スレーヤ寐イデモ見ルヂヤワサ　アヽ、敏行殿ノ御事マコトニ夢ノヤウニ存ジマス

あひしれりける人のみまかりければよめる
　　きのつらゆき

夢とこそいふべかりけれ世の中にうつゝある物と思ひけるかな

○世ノ中ヲバソウタイ皆夢トサ云ハウヿヂヤワイ　ソレニ今マデハ正眞ノコトガアルモノヂヤト思ウテ居タハ　サテモアハウナヿカナ

あひしれりける人の身まかりける時によめる
　　みぶのたゞみね

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつゝとは見ず

○子ムツテ居ルウチニ見ル夢バカリヲ夢ト云ハウヿカイ　ソレバカリデハナイ　ソウタイ此無常ナヨノ中モ正眞ノヿトハ思ハヌ　ミナ夢ヂヤ

あねのみまかりにける時よめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別れをとむるしがらみぞなき

○川ノ瀬ヲシガラミデセキトメレバ　流レテユク水デモ　淵ニナツテトマル物ヂヤワイ　ソレニサ死ンデユク人ヲセキトメルシガラミハナイ

藤原のたゞふさが昔あひしりて侍ける人のみまかりにける時にとぶらひに遣すとてよめる　　閑院

さきだゝぬくいのやちたびかなしきは流るゝ水のかへりこぬなり

○人ノ死ヌルハ　テウド流レテユク川ノ水ノトホリデ　ニタビ返ツテクルト云ヿハナイ　此度ノ御事サゾヤ御力ヲ落シ御申推量シマシタ　ワタシモ御同前ニ力ヲ落シマシタ　サキヘ早ウ死ニマシタラヨカツタニ　カウシテ生テヲリマスノガ悔シウテ　クリカヘシ〳〵カナシイハ　此度ノ御事デゴザリマス　サキヘ死ニマシタナラ　コンナ事ハウケタマハルマイモノ　餘材打聞ともに、

たしかならず、三の句のはもじと、結句のなりとを、相照して味ふべし、さて二の句、くいのと、しばらく切て、八千度かなしきはとつゞけて讀べし、八千度は、かなしきへかゝれり、悔(クイ)にかゝれる詞にはあらず、

紀ノ友則が身まかりける時よめる

つらゆき

あすしれぬ我身と思へどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

〇我身モ明日ハシレヌトハ思ヘド　マダ暮テ明日ニナラヌ今日ノウチハ　マアオレハカウシテ殘ツテ居レバ　人ノ死ンダノガサ悲シイワイ

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しき物を

〇時節モアラウニ　秋ノ時-分ニ人ノ死ナウ事カイ　秋ハ物ノカナシイ時節ナレバ　生(イキ)テアルノヲ見テサヘ　ナツカシウ思ハレルニマア

はゝが思(ノ忌中)ひにてよめる

凡河内みつね

かみな月しぐれにぬるゝもみぢ葉はたゞわび人のたもとなりけり

〇此十月ノ時雨ニヌレタ紅葉ヲ見レバ　トント悲シイ事ノアル者ノ袖ヂヤワイ　今度母様ニハナレテカナシサニ　血ノ涙ヲ流シテヌレル我ガ袖ト　アノ紅葉ト　色モヌレタヤウスモ　トツトオンナジ事ヂヤ

ちゝが思ひにてよめる

たゞみね

ふぢ衣はつるゝ糸はわび人のなみだの玉のをとぞなりける

〇ワシガ今服(ブク)デ着(キ)テ居ルキモノヽ　ハツレテ來(ク)ル糸ハ　涙ノ玉ヲツナグ緒ニナルワイ　涙ノテウド玉ノヤウニコボレルノガ　ハツレタ糸ヘカヽルハ　玉ヲ緒ヘツナグヤウニ見エテサ

思ひに侍けるとしの秋山でらへまかりける道にてよめる

つらゆき

朝露のおくての山田かりそめにうきよの中をおもひぬるかな

〇[一二]今マデハ世ノ中ノウイ物ヂヤト云事ヲ　タヾカート　カリソメニ思ウテ居タ事カナ　今度不-幸ニアウテ　世ノ中ノウイ事ヲ　眞-實ニ思ヒシツタ

おもひに侍りける人をとふらひにまかりてよめる

たゞみね

墨染の君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

〇貴様ノキテゴザル服(ブク)ノツノ袖ハ雲ヂヤカシテ　涙ガタエズヒタ(のみ)

モノ雨ノヤウニフリマス

（妻ノ親ノ忌中デ此コミ人ガ）めのおやの思ひにて山寺に侍けるをある人のとふらひつか

はせりければ返り事によめる　　よみ人しらず

あしひ（○濁）きの山べに今はすみ染の衣の袖のひるときもなし

○私モモウハヤ只今ハ御開及ビノ通リ山ニ住ミハジメマシテ泣テバカリオリマスレバ服（ブク）ノ袖ノカワキマスヒマモゴザリマセヌ

諒闇のとし池のほとりの花を見てよめる

たかむらの朝臣

水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

○アノ池ノ水ヘウツーヽタ花ノ影ノハーツキリト見エルヤウニ崩御ナーツタ君ノ御顔（カホ）ガアリ〳〵トマアチガヤウニ思ハルヽヿカナ　しづくは、物の水の中に見ゆるとなり、万葉に多し、其哥どもを考へて知べし、然るを或は沈浮也といひ、或は沈ム也といふは、皆ひがごと也、万葉にまれに、沈（シヅク）とかけるところのあるは、借りて書る字也、たゞ沈むとを、しづくといへるとなし、

深草のみかどの御國忌の日よめる

文屋ノやすひで

草ふかき霞のたにゝ影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

○サイチウト照ル日ー中ノ日ガ深イ霞ニカクレテニハカニ闇（クラ）ウナツタヤウニ　先帝様ハマダサカリノ御年デ俄ニ崩御ナツテ草ノフカイ深草山ノ谷ヘチサメ奉ツタガ　ホドナウ御一周忌ニナツテ今日ハソノ去年ノ御崩御ノ日デハナイカイマア　アヽ其時ハ悲シイヿデアツタガ　去年ノケフデアツタト思ヘバ又其時ノヤウニ思ハレテ　サテモ〳〵カナシイヿヂヤ

深草のみかどの御時に藏人ノ頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇になりにければさらに世にもまじらずしてひえの山にのぼりてかしらおろしてけり（○濁）その又のとしみな人御ぶくぬぎてあるはかうぶ（ム）りたまはりなどよろこびけるを聞てよめる

僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきだにせよ

○世間ノ人ハ皆此節ハモハヤ御服チヌイデ花ヤカナ衣ニナツタぬヂヤ（なり）ガ　我（ミ）ハソンナ花ノ衣ドコロデハナイ　マダ今ニ涙チコボシテ泣テバッカリ居レバ　セメテハ此涙ニヌレタ苔ノ衣ノ袖ヨカワキナリトモセイサ　人ハミナ花ノ衣ニサヘナツタヂヤニ

河原のおほいまうち君のみまかりての秋かの家のあたりをまかり（トホリ）けるに紅葉の色まだ深くもならざりけるを見てかの

家によみていれたりける

近院ノ右のおほいまうちぎみ

うちつけにさびしくもあるかもみぢ葉もぬしなきやどは色なかりけり

○[四]亭主ガナクナラレタレバ　庭ノ紅葉サヘ　ホーツコリトシタ色ガナイワイ　ソレユヱコノ紅葉ヲ見タレバ　ニハカニマアドウヤラ此屋敷ガサビシウ思ハルヽヿカナ

藤原ノたかつねの朝臣のみまかりての又のとしの夏郭公の鳴けるをきゝてよめる

つらゆき

ほとゝぎすけさなく聲におどろけば君に別れし時にぞ有ける

○ケサ郭公ノナク聲ニビーツクリシテ目ガサメテ　思フテ見レバ　アヽモウ郭公ガナケバ　去年君ニハナレタ時節デサオヂーヤルワイ

櫻をうゑて有けるにやうやく(ソロソロ)花さきぬべき時にかのうゑける人身まかりにければその花を見てよめる

きのもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに戀むとか見し

○櫻花ハキツウ早ウチツテハカナイ物ヂヤガ　ソレヨリサキヘウヱタ人ガサハカナウナツタワイ　アヽ無常ナ世ノ中ヂヤ　花ト

人トドチラガサキヘアダニナツテ　戀シウアラウト思フタゾ　此ヤウニ花ヨリサキヘウヱタ人ガアダニナツテ戀シカラウトハサラ〳〵夢ニモ思ハナンダヿヂヤ

あるじみまかりにける人の家の梅ノ花をみてよめる

つらゆき

色も香もむかしのこさにゝほへども植けむ人の影ぞ戀しき

○此梅ノ花ヲ見レバ　色モ香モマヘカタノ濃(コ)サニカハラズ同シヤウニ　咲(にほへ)テ見ユトナケレド(ども)　今年ハウヱタ亭主ガ居ラレヌユヱ此花ヲ見ルニツケテモ　ウヱテヒサウシラレタ亭主ノ面影ガサ戀シイ

河原の左のおほいまうちぎみのみまかりて後かの家にまかりて有けるに　しほがまといふところのさまをつくれりけるを見てよめる

君まさでけふり(ム)絶にし塩がまのうらさびしくも見えわたるかな

○君ノゴザナサレヌデ　塩モヤカ子バ　煙ノタエテシマウタ此シホゲマノ浦ハ　カウ見ワタシタ(わたる)トコロガマア　物ガナシウサビシウ見エルヿカナ

ふぢはらのとしもと　の朝臣の右近ノ中將にてすみ侍けるざうしの身まかりて後人もすまずなりにけるに　秋の夜のふけ

て物よりまうできけるついでに見いれければ　もとありしせんざいいとしげくあれたりけるを見て　はやくそこに侍ければむかしをおもひやりてよみける

みはるのありすけ

君がうゑし一むらすゝき虫の音のしげき野べともなりにけるかな

○君ノウヱテオカセラレタ　ターツタ一ムラノ薄ガ　シゲウナツテ虫ノシゲウナク野ニマアナツタワイ　サテモ〳〵ケシカラヌアレヤウカナ

これたかのみこの、ちゝの侍りけむ時によめりけむ哥どもとこひければかきておくりけるおくによみてかけりける

とものり

ことならば言の葉さへもきえなゝむ見れば涙のたきまさりけり

○我父ハトテモ死ナル丶ナラバ　ヨンデオカレタ哥マデモ　ミナイツショニ　イーツソ消テシマヘバヨイニ　ナマナカニ此哥ガ殘ツテアツテ　跡デ見レバ　一シホ思ヒダサレテ　イヨ〳〵カナシサガマスワイ

題しらず

よみびとしらず

なき人のやどにかよはゞ郭公かけてねにのみなくとつげなむ

○郭公ハ死ンダ人ノ居ル所ヘカヨフ鳥ヂヤト云ヿヂヤガ　イヨイヨサウナラバ　コレーヤ　郭公ヨ　オレガジヤウヂウ思ウテ泣テバツカリ居ルト云ヿヲ　アチヘシラシテクレカシ　又かけてはイヒダシテ

たれ見よと花さけるらむ白雲のたつ野とはやくなりにし物を

○此家ノ此花ハタレニ見ヨトテ咲タヿヤラ　亭主ハ死ナレテ　家モアレテ　此庭ハモハヤ今デハ　中遠イ野ノヤウニナツテシマウタ物ヲ　花ガ咲タトテタレガ見ヤウゾ　打聞に、三四の句を、火葬のけぶりによせたりとあるは、わろし、

式部卿ノみこ閑院の五のみこにすみわたりけるをいくばくもあらで女みこのみまかりにける時にかのみこのすみける帳のかたびらのひもにふみをゆひつけたりけるを　とりて見ればむかしの手にて此哥をなむかきつけたりける

かず〳〵に我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ

○御一深一切ニ思召テワタシガヿヲ御忘レ下サレヌモノナラバ山ヘタチマス霞ヲ　アハレトハ思召テゴラウジテ下サリマセ　山ノ霞ガ　ワタシガ煙ニナリマシタ跡ノヱカリデゴザリマスルホドニ　打聞、かず〳〵にの注、わろし、

をとこの人の國にまかりけるまに　女にはかにやまひをして

いとよわくなりにける時よみおきてみまかりにける

よみ人しらず

聲をだにきかでわかるゝたまよりもなきとこにねむ君ぞかなしき

○追付京へ御カヘリナサツタラ　ワタシハモウ今度死ンデシマウテ居モセヌ床ヘオヒトリサビシウ御寢(ギヨシ)ナルデアラウト存ジマスレバ　オマヘノ御聲ヲサヘエキカズニ　ワカレテ死ニマスルワタシガ魂ヨリモ　オマヘガサワシーヤオイトシイ

やまひにわづらひ侍ける秋こゝちのたのもしげなく(ドウヤラ快氣シソモナウ)おぼえければよみて人のもとにつかはしける

大江ノ千里

もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり

○紅葉ヲ風ノフクナリニシテオイテ見ルヨリモ　マダハカナイ物ハ　ワシガ命デゴザル(なりけり)ワイ　モウノヽカウ申ス今モシレマセヌ

みまかりなむとてよめる

藤原ノこれもと

露をなどあだなる物と思ひけむ我身も草におかぬばかりを

○ヒゴロ露ヲハカナイ物ヂヤトハナゼ思フタコヤラ　ハカナイノハ露バカリデハナイ　サウ思フタオレガ身モ　露ノヤウニ草ノ葉ニオカヌト云バカリデコソアレ　今消ウモシレ子バ　露トナンニモカハルコハナイニ

やまひしてよわくなりにける時よめる

なりひらの朝臣

つひにゆく道とはかねて聞しかど昨日けふとはおもはざりしを

○死ンデユク道ハ　タレデモ　イツゾ(つひに)ハゼヒニユク道ヂヤト云コハ　カ子〴〵聞テ居テ　ヨウガテンシテ居タケレド　ソレデモ此ヤウニモウ今日カ明日ユカウコトハ思ハナンダニ　ハヤ其時節ガキタツテ死ナネバナラヌコカヤ　【千秋云、此哥、儒佛などの、さとりがましき意にへつらはずして、思ふ心のありのまゝに、よみ出られたるとの、いとも〳〵あはれふかく、たふときとを味ふべし、これぞ皇國の古への意にて、人の眞心なりける】

かひの國にあひしりて侍ける人とふらはむとてまかりける道なかにてにはかにやまひをしていま〳〵(モウヂヤ〳〵ト云ホドニナツタレバ)となりにければよみて、京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍(イヒツケテ)りける(ヤリケル)哥

ありはらのしげはる

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

○甲斐ノ國ヘ參ル此旅ヲ　ツイカリソメナ往來ヂヤトッサ存ジテ　出(こし)

テ参リマシタガ　其時ガモハヤ此世ノイトマゴヒノ門出デゴザリマシタワイナ

遠鏡五の巻の終

古今和歌集巻第十七遠鏡

雑歌上

題しらず　　よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなる天の川と渡るふねのかいのしづくか

〇ワシガウヘヽ　コレ空カラ　露ガフーツテクルヮ　コレハナンデモ天ノ川ノ渡シ船ノカイノ雫デアロカイ

思ふどち圓居せる夜はからにしきたゝまくをしき物にぞ有ける

〇カウ心ノアフタドウシ　ウチヨッテ居ル夜ハ〔三〕ターッテイヌルノガノコリオホイモノデッサゴザルヮイ

うれしきなにゝつゝまむから衣袂ゆたかにたてといはましを

〇此マアウレシイノチ　何ニツヽマウゾ　此ヤウナ嬉シイ事ガアラウトシーツタラ　キルモノヽ袖チマソツトユーツクリトタテト云ハウデアーツタモノチ　此キツイウレシサガ　コンナセバイ袖ヘハ中々ツヽマレルヿデハナイ

かぎりなき君がためにとをる花は時しもわかぬものにぞありける

〇御命ノカギリモナイ君ニ御目ニカケウト存ジテ折リマスル花ハカヤウニイツト云時節ノツカチモナシニ咲クモノデッサゴザリマスヮイ　君ノ御命ガ限リモナイユヱニ　花モ時節ノカギリナシニイツデモ咲クデゴザリマス

ある人のいはく此哥はさきのおほいまうちぎみのなり

【千秋云こはさきのゝ下に、おほきといふ三字、おちたるなるべし。】

紫の一もとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る

〇武蔵野ハ一本ノ紫チアハレニ思フ故ニ　其縁デ同シムサシ野中ノ草ガ皆ノコラズアハレニサ思ハレル

めのおとうとをもて侍ける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりける　　なりひらの朝臣

むらさきの色こきときはめもはるに野なる草木ぞ分れざりける

〇拙者ガ妻チ大切ニ存ズレバ　ソノユカリノ人ハ誰レデモ皆サ妻同前ニ　ワケヘダテナシニ大切ニ存ズルヮイ

大納言ふぢはらのくにつねの朝臣宰相より中納言になりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる　　近院ノ右のおほいまうちぎみ

いろなしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを

〇コレハ白ノ綾ナレバ　ナンニモ色ガナウテ　興ノナイヤウニ思ハーツシーヤルデカナゴザラウ　吾ハトウカラ貴様ヘキツウ深イ心ザシデ濃ウ染テオイタ綾デゴザルモノチ

いそのかみのなみまつがみやづかへもせでいそのかみといふ
ところにこもり侍けるをにはかにかうふりたまはれりければ
よろこびいひつかはすとてよみてつかはしける

ふるのいまみち

日のひかりやぶしわかればいそのかみふりにし里に花もさきけり

○御上ノ御メグミハ　ドコマデモユキワターツテ　テウド日ノ光ノドノヤウナアレタ所デモワケヘダテナシニ御照シナサルヽ通リナレバ　久シウ引ッ籠ッテゴザーツテ御沙汰モナカーツタ貴様モ此度ケーツカーウニ仰付ラレテ　マコトニ花ガ咲マシタワイ　マヅ日出度ゥゴザル

二條のきさきの東宮のみやすむ所と申けるときにおほはら野にまうで給ひける日よめる　　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひ出らめ

○カヤウニ御子孫ノ藤原氏ノ御息所ノ東宮ノ御母儀トシテ御參詣ノアルナレバ　此大原野ノ御神モ　カノ神代ニ天照大神ノ此神ヘ勅定ノアラセラレタ御事モ　今日コソ思召シ出サレテ御満足ニ思召メデゴザラウ　此哥の説打聞よろし

五節のまひ姫を見てよめる　　よしみねのむねさだ

天つ風雲のかよひぢふきとぢよをとめのすがたしばしとゞめむ

○アノ天女ノ舞ノスガタガ　キツウ面白イコトデ残リオホイニ　空ヲフク風ヨ　アノ天女ガ雲ノ中ヲ通リテ天ヘイヌル道ヲ吹トヂテイナレヌヤウニシテクレイ　ソシタラモウシバラク留メテオイテマソーツトアノ舞ヲ見ヤウニ

餘材に、風雲共に、うきたる物なれば云々の説は、くだ〳〵し、

五節のあしたにかむざしの玉のおちたりけるを見てたがならむとゝぶらひてよめる　　河原ノ左のおほいまうちぎみ

ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

○此玉ノ主ハタレヂヤトヽヘド　皆ワシーヤシラヌ〳〵ト云テ　タレモワシガノヂヤト云モノモナシ　誰レガノヂヤト云モノモナイニ　ソンナラユフベノ舞姫ヲバ誰レト云コトナシニ惣々ヲアハレイトシヤト思ウテヤロカイ　上句叉主ハ誰レヂヤト玉ニトヘドイハヌニ

寛平ノ御時にうへのさぶらひに侍けるをのこどもかめをもたせてきさいの宮の御方におほみきのおろしときこえにたてまつりたりけるをくら人どもわらひてかめをおまへにもていでてともかくもいはずなりにければつかひのかへりきてさなむありつるといひければくら人の中におくりける

としゆきの朝臣

玉だれの小がめやいづらこよろぎの礒の浪わけおきに出にけり

○サキノ小亀ハドコヘイタソ　催馬樂ニ玉ダレノ小瓶(ヲガメ)ヲ中ニスヱテ肴求メニコヨロギノ礒ニトアルガ　コチノ小亀モコヨロギノ礒ノ浪ヲ分テ沖ヘ出ダソイ　御前(オキ)ヘサ　玉だれのこがめ、諸説皆わろし、打聞よろし、【千秋云、留りのけりは、けむを寫シ誤れるにやと、田中道まろがいへる、さも有べし】

女共の見てわらひければよめる　けんげいほうし

かたちこそみやまがくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

○女ー中タチメーツタニワシヲ笑ハシーヤルガ　此通リ形コソ深山ノオクノ朽木ノヤウナレワシモ　花ニセウナラ心ハ花ニモナラウワサ

かたゝがへに人の家にまかれりけるときにあるじのきぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよみける

きのとものり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな

○ユフベオカリ申シタ此衣ハ　時節ナレバウスウハゴザルケレドウツリガヾサテモマア濃(コ)ウニホヒマスルヿカナ　オタシナミノホド感心致シタ　餘材わろし、打聞よろし、

題しらず　よみ人しらず

おそくいづる月にも有かなあし引の山のあなたもをしむべらなり

○サテモ〳〵マアオソウ出ル月デゴザル(まる)ヿカナ　コレハナンデモコチラデ此ヤウニ待ッテホリニ　アノ東ナ山ノアチラデモ　山ヘ入ルノヲ人ガ皆惜ムト見エマス　ソレデコチラヘヱ出テコヌデゴザラウ

わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

○今夜此ヲバステ山デ月ヲ見レバ　サテ〳〵サヤカナ月デ　見テ居レバドコトモナウ物ガナシウナーッテキテ　ワシハドウモ心ガハラサレヌ　此哥、をばすてといふ、山の名にかゝはるとにあらず、又所からにもかゝはらず、所はいづこにても同シ事にて、哥の意はたゞ、月見ればちゞに物こそかなしけれ、などいへるたぐひなるを、たま〳〵をばすて山にて見たる時によめるのみ也、

なりひらの朝臣

大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

○タイガイナヿナラ　モウ月モアマリ賞ー翫スマイゾ　コノ(これ)見ル月(ぞ)ガサ　アノ(この)ダン〳〵トツモレバ人ノ年ノヨル年月ノ月ヂヤ　すべてこれぞこのといふ詞は、俗語に、コレガアノ云々(ナニく)ヂヤ　といふ意、これやこのは、コレガアノ云々(ナニく)カといふ意なり、このはかのの意也、此外にも雅言には、かのといふべきとを、このといへる例多し、打聞に、初句、大かたのとある本をとりて、ははあしきよしあるはいかゞ、

月おもしろしとて凡河内ノ躬恒がまらできたりけるによめる

紀ノつらゆき

かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば

○月ハカウシテ見テ居ツヽモ(かつ)マア　ウト〱シウ思ハルヽヿカ　コヽバカリデハナシニ　ドコヘモカシコヘモ影ノユカヌ里モアルマイト存ズレバサ　貴様モソンナモノカシラヌ

【千秋云、はじめ二句、見れどかつうとくもあるかなの意にて、かつは、見るとうときと一つにまじれるにおきたる詞なり】

池に月の見えけるをよめる

ふたつなきものと思ひしをみな底に山のはならでいづる月かげ

○月ハ二ツハナイ物デ山ノハデナケレバ出ヌモノヂヤト思ウタニ　アレ山ノハデナイアノ池ノ水ノ底ヘモ出タ　コレデハ二ツモアル物ト見エル

題しらず　　よみ人しらず

天の川雲のみをにてはやければひかりとゞめず月ぞながるゝ

○天ノ川ハ雲ノ水スヂデ瀬ガ早イニヨーツテ　月ノ光ガサシバラクモ留ラズニ早ウ流レテユク

あかずして月のかくるゝ山もとはあなたおもてぞこひしかりける

○マダ見タラヌノニ月ノカクレルソノ山ノフモトデ見テ居レバ　月ノ入ルアノ山ノアチラウラヘ行(イ)テサ　又見タイワイ

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどりにかへりてよひとよ酒のみ物語をしけるに十一日の月もかくれなむとしけるをりにみこゑひてうち(オクヘ)へいりなむとしければよみ侍ける

なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなむ

○アノ月ハマダ見タラヌニ　キツウ早ウマウカクレルヿカナ　アノ月ノ隠レル山ガ　ワキヘニゲテインデ月ヲ入レテクレネバヨイニ　カウ云ノハ月ノ事バカリヂヤナイゾエ

田村のみかどの御時に齋院に侍(デアツタ)けるあきらけいこのみこをは(母)はあやまちありといひて齋院をかへられむとしけるを其事やみにければよめる

あま敬信

大空をてりゆく月し清ければ雲かくせどもひかりけなくに

○空ヲ照テイク月ガ清イニヨーツテ　ナンボ雲ガカクシテモドウシテモ　光ハキエハセヌワサテ

題しらず　　よみ人しらず

いそのかみふるからをのゝ本がしはもとの心はわすられなくに

○〔上〕モトカラノ心ハ　ナンボウデモワスレラレヌモノヂヤ

いにしへの野中のし水ぬるけれど本のこゝろをしる人ぞくむ

○ムカシキツイケーツカーウナ清水(シ)ヂヤト云テ　名ノ高カカーツタ野中ノ清水ハ　今ハモウナマヌルウナーツテアルケレド　ソレデモ昔ノヿヲ知テ居ル人ハサ　今デモ汲(クン)デノミマス

いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりは有し物なり
○〔一二〕ヨイ衆バカリデハナイ　我ラガヤウナ賤シイ者デモ　——
　度ハ男ザカリハアツタ物ヂヤ
今こそあれ我もむかしはをとこ山さかゆく時も有こしものを
○今コソ此ヤウニ年モヨツテビンボフチスレ　オレモ昔ハイーツカ
ドノ男デ　繁昌ニクラシタ時節モアツテキタモノヂ　アヽクチヲ
　シイヿヂヤ
世ノ中にふりぬる物はつの國のながらのはしとわれとなりけり
○ナンデモフルウナーツテオトロヘタ事ノタトヘニハ津ノ國ノ長柄
ノ橋ト云ヂヤガ　世ノ中ニフルウナーツテシマウタ物ハ　其長柄
ノ橋トオレトヂヤワイ
さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆくわがさかりはも
○篠ノ葉ヘ雪ガツモーツテ　末ガオモサニ本ノ方ガカタムイテユク
ヤウニ　オレモ此ヤウニダンダン年ガヨーツテ衰ヘテユクガ　昔
男ザカリノ時節ハマアイツノヿデアーツタゾイ　ハアヽヽ
大あら木のもりの下草おいぬればこまもすさめずかる人もなし
○大荒木ノ森ノ草モ　キツウタケテカラハ　馬モ喰タガラズ　苅ル人
モナイガ　人モソンナモノヂヤ　年ガヨツテカラハ　誰レデモキ
ヲウテヨリツカヌワイ
又は、さくらあさのをふの下草おいぬれば

かぞふればとまらぬものをとしといひてとしはいたくおいぞしにける
○シバラクモトマラズニ早ウ過テユク年ヲ　アヽ早ウターツタ〳〵
ト云テハ過ギ云テハ過ギシテ　ソノ年ノ數ナカズヘテ見レバ　今
年ハモウオレモ　キツウヨイ年ニナナーツタワイ
初ノ句は、四の句の上につけて心得べし、餘材に、上の三句。引
つゞけてよみて心得べしといへるは、誤也、　とまらぬ物とは、
早き物といふ意にて、年のこと也
おしてるや難波のみつにやくしほのからくも我は老にけるかな
○〔上〕アヽヽナンギナ　オレハマアキツウ年ガヨーツタヿカナ
　又はおほとものみつのはまべに
おいらくのこむとしりせば門さしてなしとこたへてあはざらましを
○此老ト云モノガ　來ウト云ヿヲ　トウカラ知タナラ　門ヲサシテ
オイテ　留守ヂヤト云テ　逢ハズニ居ヤウデアーツタモノヲ
　此三つのうたは昔有けるみたりのおきなのよめるとなむ
さかさまに年もゆかなむとりもあへず過るよはひやともにかへると
○月日ガドウゾマアサカサマニアトヘユケバヨイニ　ソシタラ何シ
ノマモナウツイターツテユク人ー間ノ年モ　ソノ月日トイーツシー
ヨニ跡ヘモドーツテ　又若ウナルデアラウカト思ヘバサ
とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうと過しつる哉
○月日ノターツテユクノハ　トリトメラルヽ物デナケレバ　ドウモセ

ウヿガナナニ　アヽハレ早ウターツタヿカナ　アヽウイコトヤト云ニ々テヽユクヂヤ

とゞめあへずむべもとしとはいはれけりしかもつれなく過るよはひか

○トメウト思フテモドウモトメラレイデ　此ヤウニマア　チシムノニ　シラヌカホデ心ヅヨウズカ〳〵ト年ハ過テユクヿカヤ　トシト云ハレルノハ　モーツトモナヿヂヤワイ　トシト云ハ早イト云ヿナレバサ　打聞に、句をおきかへて、一四五二三と次第して心得べしと有、よろし、

かゞみ山いざ立よりて見てゆかむ年へぬる身はおいやしぬると

○鏡山ト云山ナラ　人ノ影ガヨウウツルデアラウホドニ　久シウナーツタ此身ハ　年ガヨーツタカト　ドレーヤタチヨーツテ見テユカウヅ

此哥はある人のいはく大とものくろぬしが也

なりひらの朝臣のはゝのみこ長岡にすみ侍ける時になりひら宮づかへすとて時々もえまかりとふらはず侍ければしはすばかりにはゝのみこのもとよりとみの事とて文をもてもうできたりあけて見ればことばゝなくて有けるうた

おいぬればさらぬわかれもありといへばいよ〳〵見まくほしき君哉

○世ノ中ノナラヒデ　ゼヒトモノガレヌ別レモアルト云ヿナレバ年ヨーツテハ　殊ニ明日モシレ子バ　イヨ〳〵君ニドウゾ逢タイヿカナ　上句、二三一と次第して心得べし、

かへし　なりひらの朝臣

世ノ中にさらぬ別れのなくもがなちよもと歎く人の子のため

○親ノ寿命ナアヽドウ　千年モト願フ子ノタメニ　世ノ中ニハドウゾ遁レヌ別レト云ヿノナイヤウニシタイヿカナ　【千秋云、人の子と云は、親にむかへて、たゞ子といふこと也、人のおやといふも、たゞ親也、これ古語の例也、】

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　ありはらのむねやな

白雪の八重ふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな

○オレガ頭ハマア　雪ノイクヘモ〳〵ツモーツタヤウニマーツ白ニナツテ　カヘス〴〵モキツイ年ノヨリヤウカナ

おなじ御時うへのさぶらひにてをのこどもにおほみき給ひておほみあそび有けるついでにつかうまつれる

としゆきの朝臣

おいぬとてなどか我身をせめぎけむおいずはけふにあはまし物か

○我身ナ年ガヨーツタト云テ　ナゼニフソクニ思ウタヿゾ　今日思フテ見レバ、年ノヨーツタハ　ウレシイヿヂヤ　カウ年ノヨルマデ生テ居ズバ　今日ノヤウナアリガタイ事ニアハウモノケイ　年ガヨーソテ生キレバコソ　せめぎの詞、顯注よろし、

題しらず　よみ人しらず

ちはやぶ[四]る宇治のはし守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

○〔一〕宇治ノ橋守ヨ　ホカノ人ヨリハ　其方ヲサ　オレハフビンニ思フ　オレト同シヤーウニ年ヘタ老人ヂヤト思ヘバサ

我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

○此住ノ江ノ岸ナ松ドモハ　オレガ見キタツテモモウ久シウナルガ　ソレヨリマヘ始メカラハ　イカホド年ヲ經（ヘ）タコトヤラ　サダメテキツウ久シイコトデアラウ

住吉のきしのひめ松人ならばいくよか經しとゝはまし物を

○住吉ノ岸ノ姫松ガ人ー間ナラ　イカホド年ヲ經（ヘ）タゾト問テ見ヤウニ

梓弓いそべの小松たが世にか萬代かねてたねをまきけむ

○〔一〕此礒べノ松ハ最ー初ニタ子ヲマク時ニ定メテ　コ[四]レカラ後万年モオヒシゲレト思ウテ　蒔テオイタデアラウガソレハ　昔イツノ代ニ誰ガマイタコトヤラ

此小松は、たゞ松也、ちひさきをいふにはあらず、そはたゞ馬を駒といひ、猪をゐのこ、鹿を鹿子（カコ）といへる例也、これらの例、みな古書に見ゆ、

此哥はある人のいはく柿本ノ人まろが也

かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾ノ上にたてる松ならなくに

○オレハ此ヤウニ年バッカリヨーツテ　今マデ何一ッコレゾト云テシダシタ事モナイガ　モウ此通リデ一ー生ハテルデアラウカ　高イ山ノ上ニアル松コソ　何スルコトモナシニ久シウアル物ナレ　オレハソノ松デモナイニサ　【千秋云、わかき人の、よく心得べきうたにぞ有ける、】

藤原ノおきかぜ

たれをかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

○オレハ此ヤウニキツウ年ガヨーツテ　今デハモウ同ジコロアヒノ友モ子カラナイガ　誰ヲマア相手ニセウゾ　山ノ上ヘノ松ガ年久シイ物ナレド　ソレモ昔カラノ友デナケレバ　相手ニハナラヌ　モウ松ヨリ外ニオレガクラ井年ヘタ物ハトントナイ

餘材わろし

よみ人しらず

わたつ海のおきつしほあひにうかぶ沫（ム）の消ぬものからよる方もなし

○オレハ海ノ沖ノシホアヒヘ浮ク沫ノヤウナ物デ　消ズニハアリナガラ　ドコヘモヨリツク所モナイ

わたつみのかざしにさせる白たへの浪もてゆへる（ゆへる）あはぢしま山

○浪ノ白ウタツノハ　トーツト花ノヤウニ見エルガ　ソレデアノ浪ハ　海ノ神様ノ御ツムリノカザシヂヤトイノ　ソレニアノ淡路嶋ヲコレカラ見レバ　アレマア其ノマーツ白ナ浪デ　クルリーツトトリマハシテ　テウド帶ヲシタヤウナ　サテモ見事ナケシキヂヤ

打聞わろし、かざしにさせるとは、浪の事にこそあれ、又前後の説あはず、

わたの原よせくる泪のしば〱も見まくのほしき玉づ嶋かも

○此玉津嶋ヲ見レバ　涙ノウチヨせルヤウスナド　サテ〱面白イケシキカナ　ドウゾ度〻モ來テ見タイトコロヂヤ　【千秋云、玉つ嶋は、三代實錄に、玉出嶋とかゝれ、うつほ物語には、玉出る嶋とも有り、つを濁るべし、】

なにはがたしほみちくらしあま衣たみのゝ嶋にたづ鳴わたる

○ハアシホガミチテクルサウナ　難波ノ〔三〕タミノヽ嶋ニ鶴ガトビサワイデ鳴ク

貫之がいづみの國に侍ける時にやまとよりこえまうできてよみてつかはしける

藤原ノたゞふさ

君を思ひおきつの濱になくたづの尋ねくればぞありとだにきく

○拙者ハ貴樣ヲ思フテ忘レヌニ此邊マデ〔三〕尋子テ參ツタレバコソ御無事ナト云〻ナリトモ聞タレ　貴樣ノ方カラトテハ一向御尋子モ下サレヌ　サテ〱キツイオミカギリデゴザル

かへし

つらゆき

おきつ浪たかしのはまのはま松の名にこそ君をまち渡りつれ

○〔一〕アノ高師ノ濱ノ松ノツノ松ト云名ノ通リニサ　拙者ハトウカラ貴樣ヲ御待申シタワイノ

なにはにまかれりける時よめる

難波がたおふる玉藻をかりそめのあまとぞ我はなりぬべらなる

○難波ガタノ風景サテ〱面白サニ　シバラク此邊ニ逗留シテ當分玉藻ヲ苅ル海士ニサオレハナラウヤウニ思ハレル

あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける

みふのたゞみね

住吉とあまはつぐともながゐすな人わすれ草おふといふなり

○住吉ヘゴザーツテモシソコノ海士ハ住ヨイ所デゴザルト云テキカスモ　必ス長居バシサーツシーヤルナヤ　住吉ハ在所ノ人ヲ忘レルト云ワスレ草ガハエテアルト云ヿヂヤホドニ

なにはへまかりけるときたみのゝ嶋にて雨にあひてよめる

つらゆき

雨によりたみのゝしまをけふゆけば名にはかくれぬ物にぞ有ける

○雨ガフルニヨーツテ　蓑ト云名ヲ賴モシウ思フテ　此難波ノ田蓑ノ嶋ヲ今日トホーツテユケバ　所ノ名ハ蓑ナレド　名ニハ身ガ隱レヌモノデ　雨フリノ間ニハアハヌ物デ　ゴザルワイ

法皇西川におはしましたりける日つるすにたてりといふことを題にてよませ給ひける

あしたづのたてる河べを。吹風によせてかへらぬ浪かとぞみる

○川ノハタニ白イ鶴ノ立テ井ルノヲ　ワシハ風ガフイテヨセタ浪ノカヘラズニアルノカトサ見タ　千秋云、すべてあしたづとは、白き鶴をいへり、蘆の花の白きによれる名也、萬葉にも白鶴とあり、

なほおのれくはしき考へあり、

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじめてあそびける日法皇御らんじにおはしましたりけり夕さりつかたかへりおはしまさむとしけるをりによみてたてまつりける　　伊　勢

水のうへにうかへる船の君ならばこゝぞとまりといはまし物を

○君ガ　水ノ上ニウイテアル船デアラセラレウナラ　コヽガ船ノ泊リマス所デヲ　ゴザリマスト申シ上ケテ　コヨヒハ御留メ申シマセウモノヲ【千秋云、此哥上ノ句の意、此譯にて、いとよく聞えたり】

からことゝいふ所にてよめる　　眞　せ　い　法　師

みやこまでひゞきかよへるからことは浪の緒すげて風ぞひきける

○京マデ聞エテ名ノトホーツテアル唐琴ト云所ヲ來テ見レバ　風ガフケバ浪ガ立テ音ガスル　スレーヤ此カラ琴ハ　浪ノ糸ヲスゲテ風ガ弾クノヂヤソイ

布引のたきにてよめる　　在原ノ行平ノ朝臣

こきちらすたきの白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

○此瀧ヲ見レバ　水ノトンデ走ルノガテウド玉ヲ緒カラコキチラスヤウナガ　此玉ヲヒロウテオイテ借リマス　ソシテヲシガ身ノウハノカヤウニウイ此節ノ涙ニセウト存ズル

布びきの瀧のもとにて人々あつまりて哥よみける時によめる

なりひらの朝臣

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

○此マアセバイ袖ヘ　ツヽマレモセヌホド　玉ガアヒダナシニシゲウマアチーツテクルヿカナ　コレハナンデモ　ツナイデアル玉ヲ　誰レゾ緒ヲトイテバラ〳〵ニシテ　此瀧ノ上ヘノ方カラチラス人ガヲアルサウナ

よしのゝ瀧を見てよめる　　承　均　法　師

たがために引てさらせる布なれやよをへて見れどとる人もなき

○アノヒーツハーツテサラシテアル布ハ　誰ガキルモノニスル布ヂヤカ　ヅヽトマヘカタカラ見ルガ　イツ見テモソノマヽデアツテトリイレル人モナイ

瀧を、すなはち布にしてよみたる也、次なる三首も同じ、

題しらず　　神たい法師

清瀧のせゞのしら糸くりためて山分ごろもおりてきましを

○此清瀧川ノ瀬々ニタツ浪ハトント白イ糸ヂヤ　此糸ヲクーツテタントタメテ　山ヲアルク時ノ衣ヲ織テ着ヤウニ　清瀧ノ清イ糸ナレーヤ　出家ノ山アルキノ衣ニヨカロヲサテ

龍門にまうでゝ瀧のもとにてよめる　　い　せ

たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山びめの布さらすらむ

〇タチモヌイモセヌ衣ヲ着タト云昔ノ仙人モ今ハ居モセヌノニ　ナシノタメニ山姫ノアノヤウニ布ヲサラシナサルヿヤラ

朱雀院のみかど布引の瀧御らんぜむとてふむ月のなぬかの日おはしまして有ける時にさふらふ人々にうたよませ給ひける
によめる　　　　　　　　　　　　　　　　たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布をたなばたに我こゝろとやけふはかさまし

〇ヌシモナウテサラシテアルアノ布ヲ　オレガ物デハナケレド　ヌシガナケレバ　オレガ心デ　タナバタニ借シテ進ゼウカイ　今日ハ七夕ヂヤニ

ひえの山なるおとはのたきを見てよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　たゞみね

なちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老にけらしな黒きすぢなし

〇タギーツテ落ルアノ瀧ノミナカミガ　久シウナーツテ　年ガヨーツタサウナワイナ　昔白髪バーツカリデ　黒イ筋ハ一スヂモナイカ　ウ云ノハミナカミヂ髪ニシテヂヤゾヱ　サウ聞エルカノ

おなじ瀧をよめる　　　　　　　　みつね

風ふけどところもさらぬ白雲はよをへて落る水にぞ有ける

〇雲ハ風ガフケバ段々ヨソヘウツヽテユクモノヂヤガ　風ガフイテモ同ジ所ヲサラヌニ　イツデモ同シヤーウニ　アルアノ白イ雲ト見エルノハ　昔カラ落ル瀧ノ水デサゴザルワイ

田村の御時に女ばうのさふらひにて御屏風のゑ御らんじけるに瀧おちたりけるところおもしろしこれを題にてうたよめとさふらふ人におほせられければよめる　三　條　の　町

思ひせく心のうちのたきなれやおつとは見れど音の聞えぬ

人ノ思ヒヲコラエテ隠シテ居リマスル心ノ内ハ瀧ノヤウニワキカヘリマスル物デゴザリマスルガ　此繪ノ瀧ハサヤウノ心ノ内ノ瀧ヂヤカ致シマシテ　落ルトハ見エマスレド　子カラ音ガ聞エマセヌ

屏風の繪なる花をよめる　　　　　　つ　ら　ゆ　き

咲そめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

〇咲ソメタ時カラシテハ　ウチツヾイテ世ノ中ハイーツヽモ春ヂヤカシテ　此ノ花ハ色ガジヤウヂウオンナシヿヂヤ

屏風のゑによみ合せてかきける
　　　　　　　　　　　　　　　坂　上ノこ　れ　の　り

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

〇オレハ秋ガツライニヨツテ〔一二〕此ヤウニヒタノヽト涙ヲ流シテ泣テサクラスワイ　かりてに、扉をこめて、下句の縁とせり、

古今和歌集巻第十八遠鏡

雜歌　下

題しらず　　　よみ人しらず

世ノ中はなにかつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる

○世ノ中デハ何ガイツモカハラヌ物ヂヤゾ　アノ飛鳥川ヲ見レバ　昨日マデ淵デアツタ所ガサ　今日ハモウ淺イ瀬ニナル　川サヘサウヂヤ　スレーヤナンデモカハラヌ物ト云ハナイ

いくよしもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるゝ

○モウ生テ居ルアヒダモ何ホドモアルマイ此身ヲ　海士ノ刈ル藻ノ亂レタヤウニ　ナゼニオレハマア此ノヤウニ　ドウカウトイロイロニ苦勞ニ思ウヿゾ　モウソヅカノ間タナレーヤ　ドウデモカウデモヨイヿヂヤニ

鴈のくる峯の朝霧はれずのみおもひつきせぬよの中のうさ

○〔一二〕心ノハレル時モナシニ常ー住思ヒゴトノツキルト云ヿモナイ　此世ノ中ノツラサワイノ

小野ノたかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあればまづ歎かれぬあなうよの中

○サウヂヤト云テ　ノガレヲレモセヌ世ノ中ヂヤニ　三ナンゾト云トマヅアヽヽウイ世ノ中ヤト云テナゲカルヽ

かひのかみに侍けるとき京へまかりのぼりける人につかはしける　　をのゝさだき

京へまかりのぼりとあるを、打聞に、誤也といひて、まうのぼりと、改められたるは、ことわりはさることなれども、中々に例にたがへり、そは古へになづみて、此集のころの詞づかひを、わきまへられざるなり、哀傷ノ部の詞書にも、京にもてまかりてとあるを、今の京となりての詞には、すべて京にまれゐなかにまれ、かなたこなたの尊卑上下にはかゝはらず、あなたへゆくを、まかるといひ、こなたへ來るを、まうでといへる一種あり、例を考へわたして知べし、常に多き詞也、

みやこ人いかにとゝはゞ山たかみはれぬ雲ゐにわぶとこたへよ

○モシ京ノ人ガ　ワシガヿヲ　ドウヂヤト尋子タナラ　山ガ高サニヂヤウヂウ雲ノハレヌヤウニ心モハレヌ遠イ國ニ難ー義ニ思フテ居ルト云テ下サレ

ふんやのやすひでがみかはのぞうになりてあがた見にはえいでたゝじやといひやれりけるかへりごとによめる

打聞あがたの説わろし

小　野　小　町

わびぬれば身をうき草の根を絶てさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

○ワタシハモウウイツライ身デ 難-義ヲ致シテヲリマスレバ 浮草ノ根ガナウテ ドチヘデモ水ノユク方ヘサソハレテユクヤウニ誰デモサソウテクレル人ガアラウナラ ドツチヘナリ𪜈参ラウトサ存ジマスル

題しらず

あはれてふことこそうたてよの中を思ひはなれぬほだしなりけれ

○人ノアヽハレオイトシヤト云テクレル詞ガサ ウタテヤ 世ノ中ヲエ思ヒハナレヌホダシヂヤワイ タマ〳〵ニモサウ云テクレル人ガアルト 又ドウヤラステルモ殘リオホウナーツテサ

打聞うたての説わろし

よみ人しらず

あはれてふ言の葉ごとにおく露は昔をこふるなみだなりけり

○昔ヲ戀シウ思ウテ アヽヽハレアヽヽハレト云タビゴトニ 涙ガコボレル スレバソノアヽハレアヽハレト云言ノ葉ヘ 草ノ葉ヘオクヤウニオク露ハ 涙ヂヤワイ

よのなかのうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

○世ノ中ノウイヿモツライヿモ 云テキカセモセヌノニ マヅ一番ニ知ルモノハ涙ヂヤワイ

世の中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらず有てなければ

○夢デアラウカ 正眞ノ事デアラウカ ツウタイ世ノ中ノ事ハミナアーツテナケレバ 正眞ノ事ヂヤ𪜈 夢ヂヤ𪜈 ドウモシレヌ

よの中にいづら我身の有てなしあはれとやいはむあなうとやいはむ

○世ノ中ニドレドコニ我身ガアルゾ 人ト云モノハ 明日死ナウモシレヌガ 明日ニモ死ネバヂキニ埋ミカ焼キカシテシマヘバ 此ノ身ハアツテモナイ物ヂヤ ソレヲ思フテ見レバ アハレトイハウカ アヽヽウイトイハウカ サテモ〳〵人ノ身ハハカナイ物ヂヤ

餘材、四の句を、おもしろき物とやいはむと注したるは、たがへり、

山里はものゝさびしきことこそあれ世のうきよりはすみよかりけり

○山-中ハ物ノサビシイヿコソアルケレ ソレデモ世ノ中ノウイノヨリハマシデ 住ミヨウゴザルワイ

これたかのみこ

白雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそ有けれ

○雲ノフダンタナビク此ヤウナ高山ノ峯デサヘ スメバカウシテスンデトホル世ノ中デサゴザルワイ

ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへよの中は涙のさわぎに風ぞしくめる

○コレ世-間ノ衆 知テ居ラルヽデモアラウガ モシ知ラシーヤラズバ 今ワシガ云テキカスヲ 聞テナリ𪜈 此世ヲバ早ウステ

サーツシーヤレ　テウド風ガ吹テ浪ノサワガシウシキリニウチヨセテクル荒イ海ベノヤウナ世ノ中デ　アヽヽドウモ落付カヌアンドノナラヌヤウスヂヤゾヤ　【千秋云、下句、風吹て、浪ぞさわぎしくめる、といふ意なるを、さはいひがたき故に、風と浪とを、分てはいへるなり】

そ　せ　い

いづくにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

○世ヲステヽドコニサ住ウゾ　タトヒ野ニスンダリ氏山ニスンダリ氏　ヤッハリ心ハサマヨウデアラウト思ハルヽワイ

よみ人しらず

世ノ中はむかしよりやはらかりけむ我身ひとつのためになれるか

○ヨノ中ハ昔カラ此通リニウイ世ノ中デアツタカ　但シ又オレガ身ヒトリノタメニ此ヤウニウイ世ノ中ニナツタノカ　【千秋云、二の句やは、たゞやの意なり】

よのなかをいとふ山べの草木とやあならの花の色に出にけむ

○セケンノ人ガ　アナウヤト云テ世ノ中ヲイトウテ來テ住ム山ノ草木ヂヤトテヤラ　ウイト云名ノ卯ノ花ガ此山ヘ咲イタ

みよし野の山のあなたにやどもがなよのうき時のかくれがにせむ

○吉野山ハズイブン深イ山ヂヤガ　オレガノゾミニハ　マダソノ吉野山ノアチラニ家ガホシイモノヂヤ　世ノ中ノウイ時ノヒーツコミドコロニセウニ

よにふればうさこそまされみよしのゝ岩のかけ道ふみならしてむ

○世間ニカウシテ居レバ　次第ニウイツライ事バカリマシテクルニ　一日モ早ウ　吉野ノ難所ナ山ノオクヘヒーツコモラウゾヤレ〱イヤナ世ノ中ヤ

いかならむいはほの中にすまばかはよのうき事のきこえこざらむ

○ドノヤウナ深イ山ノ中ニスンダナラ　此世間ノウイ事ガキコエテコヌデアラウゾ

すべてかやうに、いはほの中といへるは、皆たゞ岩のたちめぐれる所のよしにて、深き山の中をいふ也、まことに岩窟の内をいふにはあらず、

あしひきの山のまに〱かくれなむうき世中はあるかひもなし

○山ノオクヘ　ドコマデナリ氏カクレウゾ　此ヤウナウイ世ノ中ニハ住デ居ルセンモナイ

よの中のうけくにあきぬおく山のこのはにふれるゆきやけなまし

○世ノ中ノウイ事ニアキハテタ　モウドコマデナリ氏〔四〕ユキゲニ奥山ヘカクレウカシラヌ

おなじもじなき哥　　ものゝべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へいらむには思ふ人こそほだしなりけれ

○世ノ中ノウイ事ヲ見モ　聞モセヌ山中ヘハイツテ住ウト思フニ

ハ　ドウモ見ステラレヌ人ガアツテ　ソレニサツナガレルワイ

山のほうしのもとへつかはしける

凡河内ノ躬恒

よをすてゝ山にいる人山にてもなほうきときはいづちゆくらむ

○御坊様モ　山ニオスマヒヂヤガ　ソウタイ　世ガウイト云テステテシマウテ　山ヘハイツタ人ガ　山ニスンデモ　ソレデモマダヤツハリウイ時ニハ　ドチヘイクヿヂヤシリマセヌ

物思ひける時いときなきこを見てよめる

いまさらに何おひいづらむ竹の子のうきふししげきよとはしらずや

○此子ハマアイマサラナゼニ生レテキタヿヤラ　何ニツケテモ此ヤウニ　ウイ事ノオホイ世ヂヤトハシラヌカヤイ

題しらず　　よみ人しらず

よにふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとにうぐひすぞなく

○世ニアレバ　ナンノカノト人ニイロ〳〵〔三〕ウイ事チイハルヽヿガ多ウテサツノ度ゴトニ〔うぐひす〕泣キマス　【千秋云、結句、鶯のごとくにぞなくといふ意也】

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべら也

○ワシハ木デモナシ草デモナイ竹ノヤウデ　ドチラヘモツカヌ物ニナルデアラウヤウニ思ハルヽ

ある人のいはくたかつのみこのうたなり

わが身からうきよのなかと歎きつゝ人のためさへかなしかるらむ

○ナンジフナ身ハ　ツテ〳〵サニモウイ世ノ中カナ〳〵ト歎イテソシテ人ノタメニマデ世ノ中ガ悲シウ思フテヤラレルガ　此ヤウニ世ノ中ノウイノハ　我身カラノヿデコソアレ　人ハソノヤウニモアルマイニ　ドウ云ヿデ人ノタメニマデカナシウ思フテヤラルヽヿヤラ　餘材たがへり

おきの國にながされて侍けるときによめる

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれにおとろへて海士の繩たぎいさりせむとは

○遠イヰナカヘ別レテ來テ居テ　此ヤウニオチブレテ　漁師共ノスルシゴトヲマアセウトハ思フタカイ　思ヒモヨラナンダヿヂヤ　【千秋云、なはたぎは、繩たぐり也、網繩釣繩など、長く打はへおきたるを、たぐりよするわざをいへり】

田村ノ御時に事にあたりて津ノ國のすまといふところにこもり侍けるに宮のうちに侍ける人につかはしける

在原ノ行平ノ朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

○京デ身ガ事ヲ誰モ問テクレル人ハアルマイケレド　モシモシゼント問テクレル人モアツタラバ　身ハ須磨ノ浦デ海士ノスルシゴトヲシテ　キツウ難儀ヲシテ居ルト云テ下サレ

左近ノ将監さけて（ノ官ヲメシアゲラレタル）侍ける時に女のさふらひにおこせたりける

返り事によみて遣しける　　　をのゝはるかぜ

あまびこの音づれしさぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

○ソタシモ御聞及ビノトホリノ仕合セデ　タウツク（下）致シテ　我身デハナイカト存ズル時節ニ　カヤウニ御訪（オトヒ）下サルレバ　今デハモウハヤ　天-人ノ御尋子下サレタヤウニサ存ジマスル　サテ〳〵御深-切ナヨウコソ御尋子下サレタレ　あま彦とは、天上の人をいへり、物語どもに、これかれ見えたり、餘材打聞に、山彦と同じとて、説（トキ）たるはかなはず、これは昔より、誤りて、まぎれたるとも有しにや、集中貫之の長哥には、山彦の事を、あまびことよめり、但しかれは、もし後にふと寫し誤れるにてもあらむか、そはいかにまれ、こゝの哥は、山彦にはあらず、かれになずらへて、思ひあやまることなかれ、

つかさとけて侍ける時よめる　　平ノさだふん

うきよには門させりとも見えなくになどか我身のいでがてにする

○オレハ門ナサシテ出入セヌヤウニモ見セヌニ　ナゼニ（四）我身ノタメニハ　ウイ（一）世ノ中デ　得（エ）（五）世ニ出ヌヿゾイ　初句は、四の句の、などかの下にうつして見べし、さて出がてを、打聞に、籠居る事とあるは、わろし、これは、官をさらるゝは、つぎ〳〵になり出ッべき道をうしなふなれば、出がてとよめる也、

ありはてぬ命まつまのほどばかりうき事しげく思はずもがな

○イツマデモ生テ居ル命デハナイ　オーツヽケ死ヌルナ待ツソヅカノ間（タ）ヂヤニ　セメテソノ間（タ）ナリトモドウゾ此ヤウニツライ苦-勞ノオホウナイヤウニシタイモノヂヤ

みこの宮のたちはきに侍けるをみやづかへ（ツソトメナトテ）つかうまつらずとてとけて侍ける時によめる　　みやぢのきよき

つくはね（○消）のこの本どにたちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ

○筑波山ノキツウシゲツテアルヤウニ御（下）メグミノ深イ春宮ノ御蔭ヲ此上ヘナガラドウゾト頼ミ奉ツテハヒタスラ其（一三）ノ御-所邊ンヲサオシタイ申シマスル　餘材上の句の説わろし

時なりける人の（ハブリノヨカツタ人ノ）にはかに時なく（ブシ一ビニナツテ）なりて歎くを見てみづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる　　清原ノふかやぶ

光なき谷には春もよそなれば咲てとくちる物思ひもなし

○日ノ光リノアタラヌ谷デハ　春モヨソノ事デ　花ノサクヿモナケレバ　ソノカハリニ又　早ウ花ガチツテ惜イ思ヒモナイヤウナモノデ　オレガヤウニ本カラ花モサカヌ身ハ　人ノ今度ノヤウナ歎キモナケレバ　ケーツクコレモマシカヤ

かつらに侍ける時に七條ノ中宮とはせ給へりける御返り事にたてまつりける　　伊勢

ひさかたの中におひたる里なればひかりをのみぞ頼むべらなる

〇此ノ里ハ月ノ中ニハエテアルト申シマスル桂ノ里デゴザリマスレバ　ヒタスラアナタ様ノ光リヲサ　頼ミニハ致シマセウト存ジマスル　ワタクシハ　后をば、月にたとへ奉ると也、

きのこしさだがあはのすけにまかりける時にうまのはなむけせむとてけふといひおくれりける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければつかはしける

なりひらの朝臣

今ぞしるくるしきものと人またむ里をばかれずさふべかりけり

〇人ヲマツノハ　ナンギナ物ヂヤト云フヲ　今日サ始メテ知リマシタ　コレナレバソウタイ　人ヲ待テ居ル所ヘハ　ブサタヲセズニ早ウイテヤルベキヿデゴザルワイノ

これたかのみこのもとにまかりかよひけるをかしらおろして小野といふところに侍けるに正月にとふらはむとてまかりたりけるにひえの山のふもとなりければ雪いとふかゝりけりしひてかのむろにまかりいたりてをがみけるにつれ〴〵として

いと物かなしくてかへりまうできてよみておくりける

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみ分て君を見むとは

〇深イ雪ヲフミワケテ　トホイ山里ヘ参ツテ　君ニ御目ニカヽリマセウトハ存ジマシタカイ　存ジモヨリマセナンダヿデゴザリマス

ソナタヘ御籠リナサレタヿヲフトワスレテハ　コレハマア夢デハナカーツタカトサ　存ジマスル

深草の里にすみ侍りて京へまうでくとてそこなりける人によみておくりける

年をへてすみこし里をいでゝいなばいとゞ深草野とやなりなむ

〇年久シウ住ミキターツタ此里ヲデ、インダナラ　タヾサヘ深草ノ里ヂヤニ　イヨ〳〵アレテ草ノフカイ野ニナルデカナゴザラウ

かへし　　よみ人しらず

野とならばうづらと鳴て年はへむかりにだにやは君はこざらむ

〇サイナア此里ガ野ニナツタナラ　ワシハ鶉ト同シヤーウニ泣テ月日ヲタテマスデゴザラウニ　モウコレカラ　オマヘハ　セメテチーヨーツトモ御出ナサルマイ御レウケンカヱ　ソレーヤアンマリデゴザリマスゾヱ　かりには、うづらを狩りにといふによせたり、

題しらず

我を君なにはのうらに有しかばうきめをみつのあまとなりにき

〇オマヘガ　ワタシヲナンデモナイモノニナサーツテ　ウイメニアフタユヱニ　ソレデワタシハ此難波ノ三津寺ヘ参ツテ尼ニナリマシタ　難波浦、三津、海布、海士にてしたてたり

此哥はある人。むかしをとこ有けるをうなのをとことは

ずなりにければ難波のみつの寺にまかりてあまになりて
　よみてをとこにつかはせりけるとなむいへる

かへし

なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつの海士とかはなる

○ソシハ　ソノヤウニソナタニ恨ミラルヽヤウナ　ナンニモ覺エハナイニ　何ヂマアフソクニ思ウテ尼ニハナリーヤーツタゾイ

浦を見るべき間もなきに、いづれの所を見たるぞ。といへるをもてしたてたる也、間(マ)といひ、いづことといへるに、心をつくべし、さてその間といひ、いづことといへるは、たゞ詞のしたての方のみにて、哥の意にはあらず。此ところをよくわきまへずは、まぎるべし、哥の意は、恨みらるべきこともおぼえず。何事をうらみてといふ意也、

今さらにとふべき人もおもほえず八重むぐらして門させりてへ

○子供ヨ　アレ案ー内ガアル　カウ云テヤレ　今ニナリマシテ御尋下サレサウナ御方ハ　オボエガゴザラヌ　此ノ方ノ内ハ　イクヘモシゲーツタ萑(カヤノ)デトヂテ門ナサシテ　ゴザル　ニヨツテ　アケラレマセヌト云テイナセヨ　此哥は、右の返しのともにはあらず、別(コト)哥也、

　友だちの久しうまうでこざりけるもとによみてつかはしける

みつね

水のおもにおふるさつきのうき草のうきことあれや根を絶てこぬ

○〔上〕ナンゾ此ノ方ヲ　フソクニ思召ス事ガゴザルカシテ　チカゴロハ　トント打絶テ御出ガゴザラヌ　ケシカラヌオミカギリデゴザル

【千秋云、結句根をといへるは、たゞ上のうき草の縁にいへるにて、哥の心にはあづからず。】

　人をとはで久しう有けるをりにあひうらみければよめる

あひは、一本に、あひてとあるぞ、よろしかるべき、

身をすてゝゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり

○オウラミ御尤デゴザル　拙者モナニカト據(ヨンドコロ)ナイ事ドモニトリマギレテ　存ジナガラ久シウ心ー外ニ御無沙汰ヲ致シタ　〔下〕我身ナガラドウ心ニ思フヤウニハナラヌ物デゴザルワイ　身ハ我身ナレバナリト我心シダイニナルハズデゴザルニ　心ニ思フヤウニナラヌノハワシガ心ハ　〔上〕身ヲバ捨(ステ)テオイテヨソヘインデシマウテ　心ト身トガ別々ニナツタカシリマセヌ

餘材よろし、打聞わろし、下句は、心に思ふより外なる物は、身なりけりといふ意なるを、さはいひがたき故に、心なりけりとはいへる也、

　むれをかのおほよりがこしの國よりまうできたりける時に雪のふりけるを見ておのが思ひ(ワシガ昔様ヲオナツカシウ思フ思ヒハ)はこの雪のごとくなむつもれるといひけるをりによめる

君が思ひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじとおもへば
○貴様ノ思ヒガ雪ノヤウニツモーツタナラ　ソレーヤドウモ頼ミニナリマセヌ　ナゼト申スニ　ソンナラ春カラハモウサウハアルマイト存ズレバサ　雪ハ春ニナレバミナ消マスゾヤ

かへし　宗岳ノ大頼

きみをのみ思ひこしぢのしら山はいつかは雪のきゆるときある
○イヤ〳〵サウデハゴザラヌ　貴樣ノ事バツカリ思ウテ　ワシガ來タ北國海道ノ白山ハ　イツサ雪ノ消ル時ガゴザルゾイ　御聞及ビデモアラウガ　白山ノ雪ハ春デモイツデモキエハ致サヌ　ワシガ思ヒモソノトホリデゴザルゾヤ

こしなりける人につかはしける　きのつらゆき

おもひやるこしのしら山しらねども一よも夢にこえぬ夜ぞなき
○君ノコトヲ思フテ常ー住我心ハ北國ヘ通ヒマス　ソレデ白山ト云所モドンナ所カシラ子ド　毎夜心ガカヨフニヨツテ　其白山ヲ夢ニコエヌ夜ハ一夜モゴザラヌ

題しらず　よみ人しらず

いざこゝに我世はへなむ菅原やふしみの里のあれまくもをし
○モウレウケンヲキハメテ　ワガ一ー生ハ此伏見ノ里ニ住ミハテーウゾ　オレガモショソヘ移ツテインダナラバ　此家ガアレテシマウデアラウ　ソレハマアイカニシテモ殘ー念ナヿザヤニ

わがいほはみわの山本戀しくはとぶらひきませ杉たてるかど
○ワシガ内ハ　三輪ノ山ノ麓ヂヤ　逢ヒタクバ尋子テ御出ナサレ　杉ノ立ツテアル門ガソデゴザンス

きせん法師

わが庵はみやこのたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり
○ワガ庵ー室ハ京カラ辰巳ノ方　遠カラヌ　宇治山ト云處ヂヤ　外ノ人ハ　此山ニ住ンデミテモ　京ガ近イユヱ　ヤツハリ世ノウイ事ガアツテドウモスマレヌ山ヂヤト云ヂヤガ　拙僧ハ　コレ此通リニサ年久シウ住ンデ居ル

餘材に、他人は山の名を、うぢ山となづけてといへる、たがへり、打聞もわろし、さて都のたつみとしもいへるは、京の遠からぬよしにいへる詞なるに、昔より其こゝろを得たる人なき故に、此詞いたづらになり、又四の句をも、たしかにときえざる也、四の句は、京ちかき故に、なほ世のうき事のある山、といふ意にいひかけたる也、【千秋云、譯に、ドウモスマレヌとある詞、よをうぢといへる詞の勢ひにあたれり、】

よみ人しらず

あれにけりあはれいくよのやどなれや住けむ人の音づれもせぬ
○此家ハア丶丶ハレキツウアレタワイ　此ヤウニシテ何ン年ニマアナル家ナレバ　昔シ住ンダ人ノ音ヅレモセヌヿゾ　サダメテ住ンダ

人ハアツタデアラウニ

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるをきゝて
よみていれたりける　よしみねのむねさだ

わび人のすむべきやどゝ見るなべ(濁)に歎きくはゝる琴の音ぞする

○此家ハナンジフナ人ノ住ムヤウナ家ヂヤガト見レバ　ソレニツレテ又ソノ歎キノソフ琴ノ音ガサスル

はつせにまうづる道にならの京にやどれりけるときよめる　二条

人ふるす里をいとひてこしかどもならのみやこもうき名なりけり

○京ハ人ノワシチフルイ物ニシテ見ステタ所ヂヤニヨッテ　イヤニ思フテ出テキタケレドモ　此奈良ノ都モ　フルサトヽ云ナレバ　同ジクフルイ物ニ思ハレル　ツライ名ヂヤワイ

題しらず　よみ人しらず

よの中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞやどゝ定むる

○モノゴト定メナイ此世ノ中デハ　イヅクノドノ家ガ　コレゾト云テ　定マッタワガ家デアラウゾ　定マッタヿハナイ　ドコデアラウガ　イキトマッタ所チサ　オレハ家ヂヤトシテ居ル

逢坂のあらしの風は寒けれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる

○此相坂山ハキツウ嵐ガフイテ　夜ルハ寒イケレドモ　所ヲカヘテドコヘイタト云テモ　サキガ又ドノヤウニアラウヤラシレ子バ　ナンギナガラモシンバウシテ　コヽニヤカウシテ寐マスル

風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべら也

○ドコト云ヿナシニ　風ニフキアゲラレテアルク塵ノヤウナ何ンデモナイ此身ハ　テウドソノ塵ノヤウニ　ユクサキハドコヘドウナッテユカウヤラシレヌヤウニ思ハレル

家をうりてよめる　伊勢

飛鳥川ふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆく物にぞ有ける

○アスカ川ノ淵コソ瀬ニカハル物ヂヤト聞及ンデ居レ　ソノ飛鳥川ノ淵デモナイワシガ家モ　不仕合セナ時節ニナレバ　瀬ニカハッテユク物ヂヤワイ　瀬ニト云ノハ　ソレアノオアシノヿサ　ガテンガエ

つくしに侍ける時にまかり通ひつゝごうちける人のもとに京にかへりまうできて遣しける　きの友のり

故郷は見しごともあらずをのゝえのくちし所ぞ戀しかりける

○京ハ故郷ナガラ　久シブリデモドッテ見マスレバ　何事モキツウモヤウガカハッテ　先年ノヤウニモナウテ　シラヌ所ヘ參ッタヤウニゴザル　ソレユヱ貴樣ト毎度碁ヲウッテ　何事モワスレテ面白ウクラシタ　其許ガ戀シウゴザルワイナ

女ともだちと物がたりしてわかれて後につかはしける　みちのく

あかざりし袖の中にや入にけむわがたましひのたきこゝちする

○ワシガタマシヒハ　オノコリオホウ存ジテ　別レマシタオマヘノ袖ノ中ヘハイーツテ　アナタニトマツテアルカ存ジマセヌ　サウカシテ　アナタカラ歸リマシテカラ　トツトワシハオマヘノヿバカリ思フテ　ウカ〳〵ト致シテ　タマシヒガコヽニハナイヤウナコヽロモチデゴザリマス

寛平御時にもろこしのはうぐわんにめされて侍りける時に東宮のさぶらひにてをのこどもさけたうべけるついでによみ侍ける　ふぢはらのたゞふさ

なよ竹のよ長きうへに初霜のおきゐてものをおもふころかな

○此節夜ハ長シ　竹ノウヘヽハヤ初霜モオイテ寒イニ寐モセズニオキテ居テ　遠イ別レノ物思ヒヲスルヿカナ　此遣唐使は、扶桑畧記に、寛平六年八月廿一日に、其詔有し事見えたる、度の事なるべし、

題しらず　よみびとしらず

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

○〔一二〕アノ立田山ヲ　夜ガフケテカラ君ガターツタオヒトリコエテ御出ナサルデアラウカ　サテモ〳〵アンジラルヽヿカナ

立田山の事、打聞に、或人の書そへたる説よろし、但し立田川は、おのれ別に考へ有り、【千秋云、此立田川の師の考、玉がつまの一の巻、又二の巻に出たり】

ある人此哥はむかし大和ノ國なりける人のむすめにある人すみわたりける此女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあひだ此男かふちの國に人をあひしりてかよひつゝかれやうにのみなりゆきけりさりけれどもつらげなるけしきも見えでかふちへいくごとに男の心のごとくにしつゝいだしやりければあやしと思ひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせんざいの中にかくれて見ければ夜ふくるまで琴をかきならしつゝうち歎きて此哥をよみてねにければこれをきゝてそれより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたの山にをりはへてなく

○〔三〕此立田山ニ　誰ガ禊ヲシテ　ハナシテオイタ庭鳥ヂヤカサキカラヒキツヾイテ久シウ鳴ク　木綿付鳥の説、餘材よろし、

わすられむ時しのべとぞはま千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゞむる

○人ハドウナラウヤラ〔三〕ユクサキノシレヌモノナレバ　後ニモシ人ニ忘レラレタ時ニ　コレヲ見テ思ヒ出セト思ウテサ　此通リニ物ヲカイテ　手ー跡ヲノコシテオキマス

貞觀ノ御時萬葉集はいつばかりつくれるぞとゝはせ給ひけれ

ばよみて奉りける　　　　ふんやのありすゑ

かみな月時雨ふりおけるならのはの名におふ宮のふることぞこれ

○〔上〕コレハ奈良ノ宮ノ御時代ノ古イ書デゴザリマス　又ハ奈良ノ宮ノ御時代ニ古哥ヲ集メタト申ス集ガ　此万葉集デゴザリマス

ならの葉の名におふとは、楢の葉の、名につきてあるといふ意にて、すなはち奈良といふ也、時雨に、ふりおけるとはめづらし、

寛平ノ御時哥たてまつりけるついでに奉りける

大　江ノ　千　里

あしたづのひとりおくれてなく聲は雲のうへまで聞えつがなむ

○世間ノ人々ハミナ立身致スニ〔一〕我一人オクレテエ立身モ致サズ歎イテヲリマスヲバ　誰レモ申上テ下サル人ハナイヿカヤ　ドウゾ此様子ヲ上ヘ申シ傳ヘテ下サレカシ

ふぢはらのかちおん

人しれずおもふ心ははる霞たち出て君がめにも見えなむ

○人ニハイハズニ我カ望ミ願フ事ノアル此心ハ　ドウゾ春ノ霞ノヤウニタチ出テ　上ノ御目ニモ見エヨカシ　ソシタラ此願ト望ノ叶ウヿモアラウニ

うためしける時に奉るとてよみておくにかきつけてたてまつりける

伊　　　勢

山川の音にのみきくもゝしきをみをはやながら見るよしもがな

○御所ノ御事ハ　モウタヾ今デハ〔一〕音ニバカリ　ウケタマハツテヲリマシテ　ウチタエテ上リマスルヿモゴザリマセヌガ　ドウゾマヘカタ宮ヅカヘ致シテヲリマシタトホリノ身デ　今モ参ツテ　見マシタイヿヂヤト存ジマスル

古今和歌集巻第十九遠鏡

雑躰

短歌

題しらず　　　　　よみ人しらず

あふことの　まれなるいろに　おもひそめ　わか身はつねに
あまぐもの　はるゝときなく　ふじのねの　もえつゝとはに（ジャウヂウ）
思へども　あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　おもひてし　おもひは今は
いたづらに　なりぬべら也　ゆく水の　たゆる時なく
かくなはに　思ひみだれて　ふる雪の　けなばけぬべく
おもへども　えぶの身なれば（ボンプノ身ナレバ）　なほやまず　おもひはふかし
あし引の　山した水の　こがくれて　たぎつ心を
たれにかも　あひかたらはむ　色にいでば　人しりぬべみ（人ガシラウヤウニ思ハレルニヨッテ）
すみぞめの　ゆふべになれば　ひとりゐて　あはれ〳〵と（アヽハレアヽハレト）
なげきあまり　せんすべなみに（センカタナサニ）　庭に出て　たちやすらへば
しろたへの　衣のそでに　おく露の　けなばけぬべく
おもへども　猶なげかれぬ　春がすみ　よそにも人に
あはれと思へば

ふるうた奉りし時のもくろくのそのながうた　　　　　つらゆき

ちはやぶる　神の御代より　くれ竹の　よゝにもたえず
あま彦の　音羽のやまの　春がすみ　思ひみだれて
さみだれの　そらもとゞろに　さよふけて　山ほとゝぎす
なくごとに　たれもねさめて　からにしき　たつたの山の
もみぢ葉を　見てのみしのぶ　神なづき　しぐれ〳〵て
冬の夜の　庭もはだれに　ふる雪の　猶きえかへり
としごとに　ときにつけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ
君をのみ　千代にといはふ　世の人の　思ひするがの
ふじのねの　もゆる思ひも　あかずして　わかるゝなみだ
ふぢごろも　おれるこゝろも　やちくさの　言の葉ごとに
すべらぎの　おほせかしこみ　まき〳〵の　中につくすと
いせの海の　浦のしほがひ　ひろひあつめ　とれりとすれど
たまのをの　みじかきこゝろ　思ひあへず　なほあらたまの
年をへて　大宮にのみ　ひさかたの　ひるよるわかず
つかふとて　かへりみもせぬ　わがやどの　忍ぶ草おふる
いたまあらみ　ふる春雨の　もりやしぬらむ

ふるうたにくはへてたてまつれるながうた　　　　　壬生ノ忠岑

くれ竹の　よゝのふると　なかりせば　いかほのぬまの
いかにして　おもふこゝろを　のばへまし　あはれむかしへ
ありきてふ(アツタトイフ)　人まろこそは　うれしけれ(大慶ナ事ナレ)　身はしもながら
言の葉を　あまつ空まで　きこえあげ　すゑの世までの
あとゝなし　今もおほせの　くだれるは　ちりにつげとや(人マロノアトヲツゲトテヤラ)
ちりの身に　つもれるとを　とはるらむ　これをおもへば
いにしへも　くすりけがせる　けだものゝ　雲にほえけむ
こゝちして　ちゞのなさけも　おもほえず　ひとつこゝろぞ
ほこらしき　かくはあれども　てるひかり　ちかきまもりの
身なりしを　たれかは秋の　くるかたに　あざむき出て
みかきより　とのへもる身の　みかきもり　をさ／＼しくも
おもほえず　こゝのかさねの　中にては　あらしの風も
きかざりき　今は野山し　ちかければ　春は霞に
たなびかれ　夏はうつせみ　なきくらし　秋は時雨に
袖をかし　冬は霜にぞ　せめらるゝ　かゝるわびしき
身ながらに　つもれる年を　しるせれば　いつゝのむつに
なりにけり　これにそはれる　わたくしの　おいのかずさへ
やよければ(ヨケイニナツタレバ)　身はいやしくて　としたかき　ことのくるしさ
かくしつゝ　ながらの橋の　ながらへて　なにはの浦に
たつ浪の　なみのしわにや　おほゝれむ　さすがにいのち
をしければ　こしの國なる　しらやまの　かしらはしろく
なりぬとも　おとはの瀧の　音にきく　おいずしなずの
くすりもが　君が八千代を　わかえつゝ見む

やよければゝ、今の世の言に、物の多きを、よけいとも、ようけともいふ、これ也、よけいは、餘計などの字音かとも聞ゆめれど、然にはあらじ、古言なるべし、餘材に引る、佛足石ノ歌の、夜與(ヤヨ)都(ツ)も是也、よけいといふは、やを略ける也、此やよければを、彌(イヤ)過(ヨギ)ればといふ說、ひがごと也、數の過(ヨギ)るといふこと、有べくもあらず、
又打聞に、さへぎるとゝあるも、いはれず、

君が代にあふ坂山のいはし水こがくれたりとおもひける哉

○カヤウナアリガタイ君ノ御世ニアウ時節モアルモノヲ　今マデハタヾヒタスラ　ウヅモレテ居ルヿトバツカリ思フタヿヨ　アハウナヿカナ

冬のながうた　　凡河内ノ躬恒

ちはやぶる　神な月とや　けさよりは　くもりもあへず
うちしぐれ　紅葉とゝもに　ふるさとの　よし野の山の
山あらしも　寒く日ごとに　なりゆけば　玉のをとけて
こきちらし　あられみだれて　霜こほり　いやかたまれる
庭の面に　むら／＼みゆる　冬くさの　うへにふりしく
しら雪の　つもり／＼て　あらたまの　年をあまたも

すぐしつるかな

七條ノ后うせ給ひけるのちによみける　　伊勢

おきつ浪　あれのみまさる　宮のうちは　年へてすみし
いせの海士も　船ながしたる　こゝちして　よらむかたなく
かなしきに　涙のいろの　くれなゐは　われらがなかの
時雨にて　秋のもみぢと　ひと〴〵は　おのがちり〴〵
わかれなば　頼むかげなく　なりはてゝ　とまるものとは
花すゝき　君なき庭に　むれたちて　空をまねかば
はつ雁の　なき渡りつゝ　よそにこそ見め

旋頭歌

題しらず　　よみ人しらず

うち渡すをちかた人に物まうすわれ。そのそこにしろく咲るはなにの花ぞも

○ウチ見ワタス　アチノ方ノ人ニ　ワシハ物トヒマシーヨ　ソノソコニ咲テアル白イ花ハ　ナンノ花デゴザルゾマア　サテモ見事ナ花ヂヤ　打渡すは、見わたすこと也、古哥の例皆然り、

かへし

春されば野べにまづさく見れどあかぬ花。まひなしにたゞなのるべき花の名なれや

○コレハ春ニナレバ　野ヘンニマヅ一番ガケニサク花デ　見テモ見テモ見アカヌ花デゴザルガ　其名ハ　何ンゾツカハサレ子バドウモ申サレヌ　タヾデ申スヤウナ　ヤスイ花ヂヤゴザラヌ　ヘヽ〳〵ヘヽ〳〵　【千秋云、まひとは、人に物を贈るをいふ、今俗にいふまひなひにはかぎらず、】

題しらず

はつせ川ふる川のべに二本ある杉年をへて又もあひ見む二もとある杉

○〔上〕年ガタツテ後ニモ　重子テ又御目ニカヽラウ　上三句は、年をへての序にや、又稲掛ノ大平がいはく、上は又といはむ序也、二本ある木の岐(マタ)の意につゞけたる也、

つらゆき

君がさすみかさの山のもみぢ葉の色かみな月しぐれの雨のそめるなりけり

○〔一〕三笠山ノ紅葉ノ色ハ　ドウシテアノヤウナヨイ色ニナツタカト思ヘバ　シグレノ雨ガシミツイテ　染(ソマ)ツタノヂヤワイ　そめるは、そみたるといふ意也、俗言に、そむることを、そめるといふとは異なり

誹諧歌

題しらず　　よみ人しらず

梅ノ花見にこそ來つれうぐひすの人く〳〵といとひしもをる

○梅ノ花ヲ見ニキタノデコソアレ　ドウモスル事デハナイニ　ナゼニヤラ　鶯ガ人ガクル人ガクルト鳴テ　人ノ來(ク)ルヲ　イヤガツテマア居ル

素性法師

山吹の花いろごろもぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

○此山吹ノ花ノ色ノ衣ハ　ヌシハ誰レヂヤト　トヘドヘンジセヌ　山吹ハ梔子(クチナシ)ノ色デ口(クチ)ガナイニヨツテサ

藤原ノ敏行ノ朝臣

いくばくの田をつくればかほとゝぎすしでの田長を朝な〳〵よぶ

○ドレホドノ田ヲ作ルトテ　時鳥ハアノヤウニ　シデノタヲサヲ毎朝〳〵ヨブ事ゾ

七月六日たなばたのこゝろをよみける

藤原ノかねすけ

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の川原をけふや渡らむ

○今日ハ六日ナレバ　天ノ川ハ昨日ワタルヂヤケレド　牽牛(オレ)ガ此イツカ〳〵ト待チカネテ居ル心ヲ　織女(ミタナバタ)ニ見セウタメニ　今日渡ラウカシラヌ

人に物を、かくと顯はし見することを、古への語に、はぎにあぐといふことの有しなるべし、土佐日記にいへるも、其意也、此哥にては、待わびたる心を見せむために、七日に渡るべきを、六日に渡らんといへる也、さて脛(ハギ)をかゝげて渡ることをかねたり、右の如く見ざれば、心をといへる詞、聞えず、よく味ふべし、

題しらず　　凡河内ノ躬恒

むつごともまだつきなくにあけぬめりいづらは秋の長してふよは

○ムツゴトモマダ皆マデエ云ハヌノニ　ハヤ夜ガアケル樣子ヂヤ　秋ノ夜ノ長イト云ハ　ドコガ長イゾ

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひとゝき

○秋ノ野ニアノヤウニ女郎花ガ大ゼイ　ヂヤラクラト云テ立テ居ルガ　アヽヤカマシヤ　アノヤウニ花ヤカナモ一サカリノワヅカノ間ノ事ヂヤ　オーツヽケシボンデ見苦シイ物ニナル事ヲバシラズニアヽ

よみ人しらず

秋くれば野べにたはるゝをみなへ(メ)しいづれの人かつまで見るべき

○秋ニナレバ　野ヘンニ　ジヤラツイテ居ル女郎花ヲ　來(キ)テ見ル人ハ誰レデモツメーツテタハムレル　ツメツーテ見ヌ者ハナイ　つむは、花を摘ムをかねたり、

秋霧のはれてくもれば女郎花花のすがたぞ見えかくれする

○霧ガハレタリクモーツタリスレバ　女郎花ノウツクシイ姿ガサ見エタリカクレタリスル　結句かくれのかもじ、清(スミ)てよむべし、

餘材打聞ともにわろし、
花と見てをらむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ
○女郎花ヲ花ヂヤト思フテ折ラウトスレバ 女郎ト云名ハ ヒーヨ
ンナ名デコソアレ ドウモ女郎ニ手ヲカケテ折ラレハスマイ
餘材打聞さもに、うたゝあるの注かなはず、すべて雅言をとくに、
其本の意にのみかゝづらひては、中々に物ごほくして、用ひたる
意に違ふと多し、哥にまれ文にまれ、その用ひたるやうを、他の
例ごもを引合せて、よく考へてとくべき也、
寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　在原ノむねやな
秋風にほころびぬらし藤ばかまつゞりさせてふきり〴〵すなく
○藤袴ガ秋風デホコロビタサウナ ソノホコロビヲ ツヾクリサ
セサセト云テ キリ〴〵スガナク
あす春たゝむとしける日となりの家のかたより風の雪を吹こ
しけるを見てそのとなりへよみてつかはしける
きよはらのふかやぶ
冬ながら春のとなりのちかければ中垣よりぞ花はちりける
○マダ冬ナレド モウ明日春ガタツ今日デ 近イ春ノトナリヂヤニ
ヨツテ サカヒノ垣ノウヘカラサ ソノ春ノ花ガチツテクルワイ
題しらず　よみ人しらず
いそのかみふりにし戀の神さびてたゝるに我はいぞねかねつる

○何シデモ年久シウナレバ 神ノヤウニ性ガ入ルモノヂヤガ オレ
ガ戀モ年久シウナツタユヱ 性ガ入ッテ ソノ戀ガタヽツテ オ
レハ夜ルモエ子ムラヌ
枕より跡より戀のせめくればせむかたなみぞとこなかにをる
○オレハ夜ル子テ居ルノニ 枕ノ方カラモ 跡ノ方カラモ 兩方カ
ラ シキリニ戀ト云フ鬼メガ セメヨセテクルニヨツテ 跡ヘモ
ヨラレズサキヘモヨラレズ ドウモシヤーウガナサニ 床ノマン
中ニサ ヂーツト起テ居ル　をるは、臥ずして坐してゐるを
いへり、かやうのをるは、例皆然り、なみは無み也、涙の意は
なし、打聞に、戀を泥になして云々、とあるはわろし、
戀しきがかたもかたこそありときけたてれをれどもなきこゝちする
○ドノヤウニ戀ヲスル人ノ形デモ ヤツレナガラモホソリナガラモ
其身ハアル物ヂヤトコソキケ ソレニオレハ戀デ心ガ心デナケレ
バ 立テヰテモスワーツテヰテモ 此身躰ガドウヤラ無イヤウナ
心モチガスル　戀しきがかたと云、戀をする人の身躰をいへ
る也、なきこゝちするは、我身躰のなきやうにおぼゆる也、ある
かなきかのこゝちしてなどいへるに同じ、たてれをれどもといふ
も、身躰につきていへる也、心をつくべし、　餘材打聞さもに、
上下のかけ合かなはず、
ありぬやさこゝろみがてら逢見ねばたはふれにくきまでぞ戀しき

〇アハズニモ居ラルヽモノカト　タメシテ見ガテラニ　アハズニ居レバ　ソンナジヤウダンデモシテ見ラレヌホドサ　戀シウテ　ドウモ逢ハズニハ居ラレヌ

みゝなしの山のくちなしえてしがな思ひのいろの下ぞめにせむ

〇アヽ耳無シ山ノ支子ガホシイ物ヂヤ　戀ノ思ヒノ色ノ下染ニセウニ　ソレデ下染ヲシタナラ　忍ブ思ヒヲ　耳無シデ人モエ聞クマイシ　口ナシデ人ニ云レモスマイホドニ　ソシテ思ヒト云ニヒノ字ガアルニヨッテ　緋ノ色ト云ヂヤ

あしひきの山田のそほづおのれさへ我をほしといふられはしきと

〇山ノ田ノカヾシヲ見ルヤウナ汝サヘ　ワシヲノゾンデ逢ヒタイトイフ　サテモイヤラシイコマーツタヿヤ　人をいやしめても、おのれといふ也、打聞に、あやしの我をさへとあるは、かなはず、

きのめのと

ふじのねのならぬ思ひにもえばもえ神だにけたぬむなし煙を

〇出來ヌ戀ノ思ヒニム子ノモエルノハ　キツウ苦シイケレド　ハテドウモセウヿガナイ　モエルナラモエヨサ　富士ノ山ノ神樣サヘエ御消シナサレイデ　ジヤウヂウ思ヒノ煙ニモエサーツシーヤルモノヲ　人間ハソノハズノヿヂヤ　初句は、四の句へつゞきて、ふじのねの神といふ也、

きのありとも

あひ見まくほしは數なく有ながら人につきなみまどひこそすれ

〇アヒタイト思フ心ハ腹一ハイアリナガラモ　其人ニアハレル手ガカリガナサニ　ドウシタラヨカロカ　カウシタラヨカロカト　イロイロニ心ガサマヨウワイ　ソレヲ夜ルノ月ヤ星ノヿニソ星ハタントアリナガラモ月ガナイ故ニクラウテ道ニマヨフト云ヿニシタノガ俳諧デゴザル

小野ノ小町

人にあはむつきのなきには思ひおきてむねはしり火に心やけなり

〇思ウ人ニアハレル寄付ノナイ夜ハ　其人ヲ思フ思ヒガ　火ノハシルヤウニハシツテ胸ガモエテ　エ寐ズニ起テ居ル　二の句にはゝ、夜はとある本よろし、にもじは、よを寫し誤れる也、さて二三の句は、月のなき夜は、月を思ひてといふ詞のしたて也、又おきてに、熾をかねて、はしり火とはいへり、餘材に、かねてより思ひおきてと注したるは、ひがと也、其意はなし、たゞ思ひて起て居る也、

寛平ノ御時きさいの宮の哥合の哥　藤原ノおきかげ

春霞たなびく野べのわかなにもなり見てしがな人もつむやと

〇モシ思フ人ガツムカドウヂヤ　春ノ野ヘンノ若菜ニマアナッテツマレテ見タイ物ヂヤ　若菜ハ誰デモツム物ヂヤワサテ　ツマレ

テ見タイトハ　ツメラレテ見タイト云ヿヂヤゾヱ　若菜といへるを、老たる人の、若きを願ふ意に見るはわろし、其意はなし、

題しらす　　　よみ人しらず

思へども猶うとまれぬ春がすみかゝらぬ山のあらじとおもへば

○ワシガ思ウ人ハキツイ性(シヤウ)ワルナレバ　方々ヘカヽリアルイテテウド春ノ霞ノドコノ山ヘモカシコノ山ヘモカヽラヌ所ハナイヤウナモノデアラウト思ヘバ　思ヒナガラモヤッハリ　ウト〱シイ心モチガスル

平ノ貞文

春の野のしげき草葉のつまごひにとびたつ雉のほろゝとぞなく

○〔一二〕オレハ女ヲ思フ思ヒガシゲウテ〔四〕ホロ〱トサ泣(ナキ)マス

上句は、春の野の草葉のごとく、しげき妻戀といふ也、草葉のつまとつゞきたるに、意はなし、打聞に、草のはしとあるは、わろし、

きのよしひと

秋の野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく

○毎年(ニ)〱　秋ノ野デ　妻ノアリモセヌ鹿ガ　我戀ノカヒヨ〱トサナクガ　アレハドウシタ(ナゼ)ヿヂヤゾ　妻ニアフタラバコソ　戀ノカヒガアルトハ鳴ウヿナレ　妻ノナイノニ戀ノカヒヨト鳴ウハズハナイニ　此哥下句のてにをはの事、なぞと切て、右の意に見べし、又詞の玉の緒二の卷の終にいへるも、一つの見やう也、

みつね

蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ

○〔一〕今コソ一向ニウスイ心ナレ〔三〕馴(ナレ)タラバユク〱ハ厚(アツ)ウ我ニ思ヒヨーツテ來(キ)サウナ物デハナイカ　馴タラ大カタヨツテ來サウナモノニ思ハルヽ　打聞よろし、餘材よろし、但しよりなむといへるは、衣の縒(ヨル)にていへるは、たがはず、

たゞみね

かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬ名はたゝじくるないとひそ

○一(イツ)ショニ寐(ネ)サヘセズバ　メーツタニ名ハタチハスマイホドニ　隨一分忍ンデ　オレガ來(ク)ルバカリヲバ　ソノヤウニイヤガラシヤルナイ

よみ人しらず

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞよの中の玉だすきなる

○トテモ逢テクレヌクラヰナラ　イーツソイヤヂヤト云ヒ切テシマヘバヨイニ　ナゼニイヤトモオヽト云ヒキラズニ　ヒーツカヽツテ居ルヿゾ　アヽ世ノ中ト云モノハ

打聞、ことならばの說わろし、此哥は、かけたるといふことを、玉だすきなるとのみいへるが俳諧也、下に、いでや心は大ぬさに

してといへると、同じたぐひ也、

思ふてふ人のこゝろのくまぐに立かくれつゝ見るよしもがな

○オレヲ思フ〳〵トイツデモ云人ノ心ノ内へ　其度ゴトニ　ハイツテ隱レテ居テ　實ニ思フニチガヒナイカ　ウソデハナイカ　ジツシヤウノ所ヲ　見トヾケタイモノヂヤ

おもへども思はずとのみいふなればいなや思はじおもふかひなし

○コレホドニワシハ思ウケレド　ソレヲ其人ハトカク　思ハヌ〳〵トバッカリ云ナレバ　イヤ〳〵　コレカラモウ思ウマイゾ　思フテモソノカヒガナイ

我をのみ思ふといはゞあるべきをいでやこゝろは大ぬさにして

○思ウ〳〵ト云ノモ　ワシバカリヲ思ウノナレーヤ　ソレデヨイガイヤモウ　面白ウナイ　其人ノ心ハ大麻デサ　引ク手ガ多ケレバドウモ

我を思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人の我をおもはぬ

○ワシヲ思フテクレル人ヲ　コチカラ　ワシガ思フテヤラヌムクイカシテ　ワシガ思フ人ガ　ワシヲスッキリ思フテクレヌ

一本ふかやぶ

思ひけむ人をぞともに思はましまさしやむくいなかりけりやは

○マヘカタ誰レゾオレヲ思フタ人ガアツタデアラウ　其時ニコチカラモ　其人ヲ思ウテヤレバサヨカツタニ　コチカラハ思ハナンダデ　ソノムクイガキテ　今オレガ思フ人ガ　オレヲ思フテクレヌ　アヽヽアラソハレヌヿヂヤノ　ムクイト云ヿハナイヿカイキーットアルヿヂヤワイノ

一本よみ人しらず

出てゆかむ人をとゞめむよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな

○出テイナウトスル人ヲ　ドウモ留ウシカタガナイニ　ドウゾ今近所隣デタレナリトクサメヲスレバヨイニ　エヽヽカウ云トキニハクサメヲスル人モナイヿカナ

くれなゐにそめし心も頼まれず人をあくにはうつるてふなり

○深ウ思ウノモドウモ頼ミニハナラヌ　其人ヲアイテクレバ　ドノヤウニ深カーツタ心デモカハルヂヤ　紅灰汁にうつるをもて、詞をしたてたり、

いとはるゝわが身は春の駒なれや野がひがてらにはなちすてつる

○人ニキラハルヽワシガ身ハ　春ノ駒カシテ　テウド春ノコロ駒ヲ野飼ガテラニハナシテヤツテカマハズニオクヤウニ　ワシヲ見ステヽ子カラカマハヌ

うぐひすのこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらむ

○ワシニ人ノツレナイノハ　〔一二〕フルイ物ニシテシマウテノヿカシラヌ

上二句は、たゞ詞のつゞけのみ也、打聞に、ふるすのごとくとある

は、わろし、

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

○オレモ夏ノ間タハイシコサウニ暑イニヨツテ獨リ寢ヲスルト人ナミニ云テマギラカシテオケド冬ニナツテ此ヤウニ寒イ夜獨リ寢ルノハ何トモ云ヒヤウガナイ

平ノ中興

逢事の今ははつかになりぬれば夜ふかゝらではつきなかりけり

○逢フ事モモウ今デハハツ〳〵ナコトニナツテ夜ガフケテカラデナケレバ其サリーヤークガデケヌワイ　三の句、ぬればさいふてにをはゝ、廿日になりぬれば、月のおそきよしの、詞のしたての方のみによれり、哥の意にはかゝらず、

左のおほいまうちぎみ

もろこしのよしのゝ山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに

○吉野山ハ殊ノ外深山ヂヤケレド日本ノ吉野山ハオロカナヿタトヒソナタガ唐天竺ノ吉野山ノオクヘコモツタト云テモ我ハ其ノ分ンニシテ跡ニ殘ツテ居ヤウトハ思ハヌドコマデモアトヲシタウテオーツカケテユカウトサ思ウ

なかき

雲はれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

○何ンゾ氣ニイラヌヿガアツテソシニ逢フ事ヲ止ウト思フナラ下コチノ心ヲトーツクリト見定メテ其上ヘデコソヤメルナラ止メタガヨイ　上雲ノカヽツテアル山ノヤウナモノデ　コチノ心ハドウヂヤヤラ知レハスマイニ　カル〳〵シウ逢事ヲ止メタノハマア　三アマリケシカラヌキモノツブレタヿヤノ　人は我也、あなたのとに見たるは誤也、餘材、結句のてもじを濁る説はわろし、打聞、あさましの説わろし、

伊勢

難波なるながらのはしもつくるなり今は我身をなにゝたとへむ

○今マデハ何シデモフルウナツテシマウタ物ヲバ難波ノ長柄ノ橋ニタトヘタヂヤガソノ長柄ノ橋モ今度新シウ出來タヂヤスレーヤ此ヤウニ人ニアカレテ舊イ物ニナツテシマウタワシガ身ヲバ　モウ今デハ何ニタトエウゾ　ナンニモ譬ヘル物モナイ

よみ人しらず

まめなれどなにぞはよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし

○オレハ隨分實躰ニ堅ウ身ヲ持ツケレドモ何ンノエイ事ガアルゾソレデモナンニモエイヿハナイ世間ノ人ハ苅萱ノ亂レタヤウニ亂レテハーウラーツナ者モアレドソレデモサノミワルイヿモナイスレーヤ實躰ニタシナムブンガソンヂヤ

おきかぜ

何かその名のたつことのをしからむしりてまどふはわれひとりかは

〇ナンノソノ名ノタツヿガチシカラウ　戀チスレバ名ガタツトシリナガラ迷フノハ　オレヒトリカ　オレバカリヂヤナイ皆サウヂヤ

いとなりけるをとこによそへて人のいひければ

此詞書の意は、くそがいとこなる男の、くそを思ひて、けさうするよしを、或人の、しかしかの事をきゝつと、くそにいひければ也、よそへては、さもあらぬことを、さ也と、言依する也、万葉などに例多し、考へて知べし、餘材、此詞書の意を誤れるから、哥をもとき誤れり、

くそ

よそながら我身にいとのよるといへばたゞいつはりにすくばかり也

〇ソンナコトハワシーヤ夢ニモシラヌ　スレーヤソノヤウニ　ワシガイトコガ　ワシニ戀サスルヤウニ　ヨソナガラ云ノハ　ソレーヤホンノヿデハナイヂヤ　タヾウソニソノヤウニ云バカリヂヤ　ソレガモシホンノヿナレーヤ　ワシガ方へ何シトゾ云ヒカケサウナ物ヂヤヽサテ

三の句いへばは、いふはなるべし、そはもさ、云は書とたるを、心得誤りて、いへばとは寫しなせるなるべし、餘材わろし、すくは、すきごとをする也、過にはあらず、　糸よる針に着るをもて、詞とせる哥也、

題しらず　　さぬき

ねぎことをさのみ聞けむやしろこそはては歎きの森となるらめ

〇ソノヤウニメツタニ人ノ云ヿヲ聞入レテ　タレニモカレニモ逢フ人ガサ　シマイニハ　ナゲキガシゲウナルデアラウワイ　ねぎとやしろ杜をもてしたてたり

稲掛ノ大平がいはく、下ノ句は、歎きのきを、木にとりて、その木のしげくて、杜となるならんとよめる也、歎きのと、切て心得べし、然るを後の世に、なげきの森といふ名所とせるは、此哥を心得たがへたるより出たるひがこと也、さる森の名あるにはあらずといへり、此説よろし、

大輔

歎きこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞまづつかれける

〇イロイロノ歎キガ山ノヤウニツモーツタレバ　ヤヽモスレバヒタモノマヅ臂杖チツイテ　ツムリチ傾ケルヤウニサナルワイ

木をこり來て、山高くて、道すがら杖をつくをもて、したてたり、

よみ人しらず

なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり

〇戀ユヱニ此ヤウニ歎キバッカリガツモーツテ　シヾウソノカヒモナイヿニナルデアラウヤウニ思ハルヽ

人こふることを重荷とになひもてあふごなきこそわびしかりけれ

○重何チニナウタヤウニ　ジユツナイ戀チシテ　ツシテイツアハレルト云時一節モナイハ　サテモ難義ナヿデコソアレ　枴と荷をになふとをもてしたてたり、

よひのまに出て入ぬるみか月のわれてもの思ふこゝろにもあるかな

○〔上〕コノゴロハマア　サテモ〳〵ワリナイ物思ヒチスルヿカナ

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさぎるさに

○ドウシタガヨカラウカカウシタガヨカラウカト　レウケンノ定メニクイヿチ　イロ〳〵ニ思案シテ見テ　ヨイレウケンチ一ツ思ヒツイテ　サウヂヤト定メテ　其通リニスレバ　又一方ニサシツカエガアリ　又思案チカヘテシテ見レバ　又一方ニサシツカヘルヿガアリ　トカク世ノ中ノ事ハ　アヽドウモナラヌモノヂヤ一方ガヨケレバ一方ガワルウテ　三の句の下に、とありといふとを、くはえて心得べし、上にならはせて、此詞をはぶける物也、餘材わろし、但しそへにの注に、古今著聞集を引たるは當れり、其意也、

世の中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそ淺くなりなめ

○世ノ中ノウイ度ゴトニ　コレデハ〳〵ト思ウテ　人ガ身チナゲタナラ　死骸ガオビタヾシウツモーッテ　深イ谷ガサ淺ウナルデアラウワイ　此ヤウニウイヿノ多イヨノ中ナレバ

在原ノもとかた

よの中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人にうらみらるれば

○人ゴトニ世ノ中ハウイ物ヂヤ〳〵ト云テ恨ミル　サウ數万人ノ人ニウラミラルヽヿナレバ　世ノ中殿ハサゾヤ　メイワクニ思ウデアラウ

よみ人しらず

何をして身のいたづらに老ぬらむ年のおもはむことぞやさしき

○オレハマア何チシテ此ヤウニ年ヨツタヿヤラ　何ンニモセズニ年バツカリヨツテ　身ニツモーツタ　齢ノ思フトコロガサハヅカシイ

おきかぜ

身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

○トテモ立身ナドモエセ子バ　此身ハモウ無イ物ニシテ居ルヂヤガセメテハ心バカリナリ𪜈　大切ニ持テ　ステコンジヤウニハナルマイゾ　ソシテシヾウハ　ドノヤウニナルゾト　見トヾケルヤウニサ

ちさと

しら雪のともにわが身はふりぬれど心はきえぬ物にぞ有ける

○我身ハ此ヤウニ年ヨツテドコモカモ大ニチガウタケレ𪜈　心ハクヅチレヌモノデサ　ヤッハリ若イ時ニカハラヌワイ　雪にふるきえぬといふ、詞のしたて也、

題しらず　　よみ人しらず

うめの花咲ての後のみなればやすき物とのみ人のいふらむ

○梅ノ花ノ咲テチツテシマウタ跡ヘナル實ハ酸イ物ヂヤガ　オレハソノ梅ノ實ヂヤヤラシテ　人ガタレデモオレヲバ　スキモノヂヤスキモノヂヤト云

　酸きと好色とをもていへり

法皇にしがはにおはしましたりける日さる山のかひにさけぶといふことを題にてよませ給うける

わびしらにましらなゝきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ　　みつね

○猿ヨ　ソノヤウニ難義サウニアマリナクナイ　今日ハ此通リニ忝クモ法皇様ノ御幸ガアツテ　此山ノカヒシテアルカヒガアルデハナイカ　アリガタイ日ヂヤゾヨ今日ハ

題しらず　　よみ人しらず

世をいとひこの本どに立よりてうつふしぞめのあさのきぬなり

○此衣ハ　世ヲイトウテ一所不住ノ僧ノ　イツデモドコナリトユキガヽリニ　木ノカゲヘ立ヨツテハ　帯ナドモトカズ　ツイソノマヽデ寐ル　五倍子染ノ麻ノ衣デゴザル

うつぶしとは、神代紀に、全剝とある全と同じくて、そのまゝにて臥をいふ、まろねといふに同じ、うつむきに臥にはあらず、又打聞に、五倍子は、うつろなる物なる故に、うつふしといふとあるも、いとわろし、空臥を、五倍子にいひかけたるにてこそ、俳諧には有けれ、

古今和歌集巻第二十遠鏡

大歌所ノ御歌

おほなほひのうた

・たらしき年のはじめにかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ

○[四]行末千年マデモ　毎年トシノ始メニハ　此通リニサ[三]　タノシイ事ヲ存ㇾ分ニシツクサウワイ　をへめは、終めにて、極むる也、つめの時は、千年までもといはひて、かくのごとくたのしきつみ木を、つむといへる也、

日本紀にはつかへまつらむ萬代までに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆる哉

○[一]葛城山ハ　冬ハ雪ノフラヌ間ト云ハナイガ　ソノ葛城山ノ雪ノトホリデ　ワシハイツト云ㇷモナシニ　ジヤウヂウ君ノㇷガ思ハレテ　サテモ忘レルヒマノナイㇷカナ

あふみぶり

あふみよりあさたちくればうねの野にたづぞ鳴なる明ぬこの夜は

○近江カラ今朝　夜ノ内ニヌツテクレバ　ウネノ野ニアレ鶴ガサナクヮ　サア夜ハヨウアケルゾ

みづぐきぶり

みづぐきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

○山城ノ國ノ此岡屋縣(ヲカノヤガタ)デ　妹(カヽ)トオレト寐(ネ)テ夜ノアケタ今朝ノアノ霜ノフリヤーウワイノマア　アノ霜ヲ見レバ　昨夜(ユウベ)ハヽキツウヒエタサウナ　コチハ二人子タデ　ソレホドヒエル夜ヂヤトモ思ハナンダニマア　水ぐきは、すべて岡の枕詞也、別に考へあり、又古へに、家を屋形といへること、さらになし、打聞わろし、もし彼説のごとくならば、四の句、ねてし朝けなどあらでは、かなはぬこと也、

【千秋云、みづぐきの考へ、玉がつまにくはしく見ゆ、】

しはつ山ぶり

しはつ山うち出て見ればかさゆひの嶋こぎかくるたなゝしをぶね

○シハツ山カラズーツト出テ見レバ　コイデ歸ル小船ガアレ　笠ユヒノ嶋ノアタリヲユクワ

神あそびのうた

とりもののうた

神がきのみむろの山のさかき葉は神のみまへにしげりあひにけり

霜八たびおけどかれせぬさかきばの立さかゆべき神のきねかも

きねは、木根にて、すなはち榊をいへる也、木を木根といふは、万葉に、草を草根とよめる哥多く、又岩を岩根、屋を屋根、矛を

矛根などいふ例にて、根は添へたる言也、されば神のきねは、神の木也、然るを拾遺集賀之哥に、あし引の山の榊葉ときはなる陰に榮ゆる神のきね哉とよめるは、既にこゝの哥を、巫覡の事と心得誤りて、よめりとぞおぼゆる、

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに(ヨヤウニノタメニ)やまかづらせよ

打聞に、見るがにな、見てしかなにとあるはわろし、がにの、他の例にたがへり、

み山にはあられふるらし(フルサウナ)とやまなるまさきのかづら色づきにけり

みちのくのあだちの眞弓わがひかば末さへ(末ゝマデ)よりこしのびのびに(ヨツテコイ)

わがゝどい板井のしみづ里とほみ(サトガトホサニ)人しくまねばみ草おひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへかげをだに(カゲナリトモ見ヤウニ)見む

かへしものゝ哥

青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ

眞金ふくきびの中山おびにせるほそ谷川の音のさやけさ

此哥は承和の御(オホン)べのきびの國の哥【千秋云、おはんべは、大嘗(オホニヘ)のにを、音便にんといひ、へを濁るは、上をんといへば也】

みまさかや久米のさら山さらさらにわが名はたてじ萬代までに

これは水のをの御ンべの美作ノ國のうた

みのゝ國關のふぢ川たえずして君につかへむよろづよまでに

これは元慶の御ンべのみのゝうた

君が世はかぎりもあらじ長はまのまさごの數はよみつくすとも

これは仁和の御ンべのいせの國のうた

大とものくろぬし

近江のやかゞみの山をたてたればかねてぞ見ゆる君がちとせは

これは今上の御ンべのあふみのうた

東歌

みちのくうた

あふくまに霧たちわたりあけぬとも君をばやらじまてばすべなし

〇アノアフクマ川へ霧ガズウーツ(わたり)ト立テ夜ガアケタリ𪜈　君ヲバヤルマイゾ　イナセテ又見エルマデ　待ッアヒダガドウモナラヌ(すべなし)

初二句はたゞ、夜の明るけしきのみなり、打聞、詞にかなはず、もしかの注の意ならば、わたりは、わたれといはでは聞えず、餘材に、あふくまを、人に逢ふによせてといへるも、わろし、

みちのくはいづくはあれど塩がまのうらこぐ船のつなでかなしも

〇奥州ニハドコニモカシコニモ面白イ所ハオホクアレドモ　中デモ此塩竈ノ浦ヲ　アレ綱手デ船ヲ引テユクアノケシキガ　ドウモイヘタ物デハナイ　オモシロイ(かなし)コトヂヤワマア(も)

わがせこをみやこにやりて塩がまのまがきの嶋のまつぞ戀しき

○コチノ人チ京ヘヤツテ　留守ヂウ　イツモドラル、ヿヤラト待テ居レバサテモ戀シイ

〔三四〕をくろざきみつのこしまの人ならば都のつとにいざといはましを

○アノ黒崎ノミツノ小嶋ガ人ナラ　京ヘノミヤゲニ　イザ來イト云テ　ツレテイナウモノヂ　をゝろざきのをは、をはつせなどのをにて、黒崎といふ地ノ名也、

みさふらひ御かさとまうせ宮城野の木の下露は雨にまされり

○御侍衆　ソレ御笠ト申シ上ケサーツシーヤレ　此宮城野ノ木カラオチル露ハ　ケシカラヌモノデ　雨ヨリモキツウヌレマスゾエ

もがみ川のぼればくだるいなぶねのいなにはあらずこの月ばかり

○〔上〕イヤデハナイガ　此月中ハドウモナラヌ

のぼればくだるは、のぼるもあれば、くだるもあるをいふ、

君をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山浪もこえなむ

○ドウ云ヿガアツタト云テモ　オマヘチオイテ　ワシハ外ヘ心チウツスヿデハナイ　モシソンナ心チワシガ持ッタラ　アノ末ノ松山ノウヘチ　浪ガコエルデアラウ　ソンナ事ハナイ事ヂヤハサテ

末の松山といへるは、するといふ所の、松山なるべし、

さかみうた

小よろぎの礒たちならしいそなつむめざしぬらすな沖にをれ浪

○小ヨロギノ礒ヘ出テ居テ　礒菜チツムアノ子供ガ　アレ〱浪ニヌレル　浪ヨコレーヤ　ソノヤウニアノ子供チヌラスナ　沖ノ方ヘ折レヨ　又ハ立テコズニ沖ノ方ニ居レ

をれは、をれよにても有べし、又浪のたちゐなどもいへば、居れにても有べし、

ひたちうた

つくばねのこのもかのもに陰はあれど君がみかげにます陰はなし

○筑波山ノアチラウラニモコチラウラニモ　木ノカゲハオビタヽシウシゲウアレドモ　君ノ御蔭ニマサツタカゲハナイ

つくはねの峯のもみぢ葉おちつもりしるもしらぬもなべてかなしも

○此ツクハ山ノ紅葉ノチッテツモッタチ見レバ　惜ウ大事ニ思ハルヽガ　テウド此紅葉チ思ウトホリニ　此常陸ノ國ノ内ノ百姓ハドレカレト云ヿヘダテナシニ　コト〱ク　フビンニ大切ニ思ハルヽヿヨマア　上ノ句は、結句のかなしもといふへかゝれる、たとへ也、さてしるもしらぬもなべてといふ詞は、上ノ句の、落葉のたとへの方へは、あづからず、此所よくせずはまぎれぬべし、さて此哥、何人のいかなる事をよめるにか、さだかならざれば、結句の譯も、其さす事によりて、かはるべきを、今はしばらく、國ノ司の部内の民をあはれびたる事にとりて譯しつ、さるは京人の哥にても、其國に傳はりぬるは、其國の哥とせること、萬葉の東哥の中にも見えたり、餘材わろし、又打聞に、女の男を思へると

にとりわれたるけ、いかゞ、もし其意ならば、四の句、これもかれもたどはいひもすべけれど、しるもしらぬもなべてとは、あまり廣くして、ひたゝけたり、

かひうた

かひがねをさやにも見しがけゝれなくよこほりふせるさやの中山

○甲斐が嶺ナハーツキリト見タイモノヂヤ アノサヤノ中山ガヨコタワツテアルデ ツカヘテ ハーツキリト見エヌ アヽ心ナイサヤノ中山ヂヤ 【千秋云、四の句のふせるを、顯注に、一本にくせる、又一本にこせるともあるよしいへり、東哥にて、心なも、けゝれといへれば、その同じさまの國詞なるべければ、右の三つの内ぞ正しかるべき、但し古言に、ふすなこやるといへれば、くせるこせるともに、せもじは、やを寫し誤れるにはあらざるか】

甲斐が根をねこし山こし吹風を人にもがもやことつてやらむ

○峯ナコシ山ナコシテ 甲斐ガ根ノ吹テコエル風ナ ドウゾ人ニシタイ物ヂヤナア ソシタラ京ヘ コトツケナシテヤラウニ 此哥も、京より下り居る、國の司などのよめるなるべし、顯注にしたがふべし、上なるみちのく哥に、みやこのつとに云々とあるも、京人のとこそ聞えたれ、 餘材の說は、かひがねをといへる、なもじにかなはず、又遠江も、上なる哥によりていへるなれど、此哥にはよしなし、

いせうた

をふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはむ

○〔上〕ナルナラザルハトモカクモ マアナンデアラウト イーツシーヨニ寢テハナシナセウ なるとは、父母などもゆるして、顯はれて夫婦となる事の、成就するないふ、

冬のかものまつりのうた

藤原ノ敏行ノ朝臣

ちはやぶるかものやしろの姫小松よろづよふとも色はかはらじ

家々稱二證本一之本作二書人一以レ墨滅哥今別書レ之

巻第十 物名部

ひぐらし つらゆき

そま人は宮木ひくらしあしひきの山のやまびこよびとよむなり

○杣人ガ材木チヒクサウナ アレコタマガキツウヒヾイテ 大ゼイノ人ゴエガスルワ

在二郭公下空蟬上一

かちおん

かけりても何をかたまのきても見むからはほのほとなりにし物を

○死ンダ人ノ魂ガ ソラチ飛ンデ又カヘツテ來テモ 何チ見ヤウゾ

何モ見ル物ハナイ　ジブンノ死ダ骸ハヤイテシマウテ灰ニナツタ
モノ

をかたまの木友則ノ下

くれのおも　　　つらゆき

こし時とこひつゝをれば夕ぐれのおもかげにのみ見えわたるかな
○ユフカタニナレバ　アヽ今ゴロハ思ウ人ノ來タジブンヂヤガト
戀シウ思フテ居レバ　其人ガヒタスラ面影ニ見エテ　サテモ今コ
コチアルクヤウニ見エルヿカナ

忍草利貞ノ下

おきのゐ　みやこじま　　　をのゝこまち

おきのゐて身をやくよりもかなしきはみやこしまべの別れなりけり
○カラダヘ熾火ヲ居テ我身ヲヤクヨリモカナシイハ　京ト嶋ベトノ
別レヂーヤワイ　　下句は、思ふ人の、京より、嶋べといふべき
遠き國へゆく、別れをいへるなるべし、

からと清行ノ下

そめどの　あはた　　　あやもち

うきめなばよそめとのみぞのがれゆく雲のあはたつ山のふもとに
○我ラハ今　世ノ中ノウイ事ヲバトントノガレテヨソニ見テ　雲ノ
フカイ山ノフモトヘ引ッ越シテユキマス　　あはたつは、深くた
つ也、万葉十二に、ふる雪のあはにたふりそとあるも、深くなふり

そ也、此事說有リ、此哥の事、打聞のごし、但し染殿と粟田とは、
何の緣もなき地ノ名なるを、つらねて題にしたるは、かの清和天
皇の御事有しによりて、そのころよめるなるべし、されば左の注
も、其意にて見れば、難なし、かのみかどの御事によらざれば、
染殿と粟田とつらねたること、よしなし、

此哥は水のをのみかどのそめどのよりあはたへうつりた
まうける時によめる　　　桂ノ宮ノ下

卷第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪の下

けふ人をこふるこゝろは大井川ながるゝ水におとらざりけり
○今日オレガ人ヲ戀シウ思フ心ハ　大井川ノ流レル水ニモオトラヌ
クラキヂヤワイ

わぎもこにあふ坂山のしのすゝきほには出ずもこひわたるかな
○〔上〕ソシハ色ニモ詞ニモ出サズニ　心デバッカリマア戀シウ思
フテクラス　サテモシンキナコトカナ

卷第十三

戀しくはしたにを思へ紫の下

いぬかみのとこの山なるいさや川いさとこたへよわが名もらすな
○モシ人ガ問フタナラ　〔上〕ソンナヿハ　ドウヂヤカシラヌト云ヂ
ヤゾ　必、我名ヲモラスデハナイゾ　　打聞に、万葉の此哥をと

かれたるやう、いたゝたがへり、調もたがへり、万葉にあるは、いさとを寸許瀬(キコセ)、余名告奈(ワガナノラスナ)にて、こゝなると同じ意也、きこせは、のたまへといふに同じ、

此うたある人あめのみかどのあふみのうねべに給へると
かへし　うねべのたてまつれる

山しなの音羽のたきの音にだに人のしるべくわがこひめやも

巻第十四

おもふてふことのはのみや秋をへてノ下

そとほりひめのひとりゐてみかどをこひたてまつりて

わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

○コヨヒハ必ス御出ガアラウト思ハルヽ夜ヂヤ　アレアノ蛛(クモ)ノスルヿデ　サウヂヤト云ヿガサキヘヨウシレルワマア　蛛をさゝがにといふは、蟹(カニ)に似て小(チヒサ)きよし也、

深養父戀しとはたがなづけゝむことならむノ下

貫之

道しらばつみにもゆかむすみのえの岸におふてふ戀わすれ草

○道ヲシーツテ居ルナラ　住ノ江ノ岸ニハエテアルトイフ　戀ヲワスレル忘草ヲツミニデモユカウ　貫之、萬葉の哥をおぼえずして、かくよまるまじきにあらず、又おぼえずして、此集にも入まじきにあらず、又貫之のよみくちにあらずといふも、うけられず、すべて古哥は、さまでまさしくは、わかるゝ物にあらざるをや、

遠鏡六の巻をはり

源氏物語年紀考

清蕣庵宣長撰

おほよそ此物語において源氏君をはじめ人々の年齢のことさのみ深く沙汰をせずとも有ぬべき事なれども古来先達の諸抄にこまやかに其さたありされば今さらさしおきてひたふるにかうかへざるべきよしもあらずさて是をつまびらかにかうかへ見るにつけては諸抄の説の中にいさゝか相違のことどもまゝ見ゆれば今あらたに愚意をもてあらためたゞして今より後のかしこき人のかんかへをまつものならし

桐壺巻

源氏君誕生より十二歳元服のこと迄見えたり此巻の末に云「おとなになり給ひてのちは」云々花鳥餘情に此詞に十三歳十四歳十五歳三ヶ年の事をこめて帚木巻は十六歳なりといへり今按この説いかゞおとなになり給ふとは元服して成人の形になり給へばおとなゝみになり給ふといふ心なり此詞に三年の間をこめて實に成人になり給ふにあらず其故は下の文に「ただ今はおさなき御ほどにつみなくおぼしなして」云々是にて知べし其上彼あたりの文章を味ふに年を經たる心にあらず只元服し給ひしことをかくいへるなり此巻と帚木との間年紀つゞかざる故に先達うたがひ有てしひて年紀をつゞけんためにて此說あるなれどもあながち此巻と帚木とつゝかずとも有べき事なり此巻は只誕生より元服までを書て此君の始めをいふなり伊勢物語に「昔男うゐかうぶりして」とかき出せるも業平の成人の始をあらはしおきてさて奈良へくだられしはいつにても有べしあながち元服してやがてつゞきてくだるにはあらずされば此物語も此巻にまづ元服迄の事を書おきてさて帚木よりして年紀をばつゞくべき事なり此巻は序文までもいりたゝすといへるも此心なるべし帚木の發端に「まだ中將などに拜し給ひし時は」とあるにても此巻とつゞかざること知べしされば此巻は十二歳迄と見て帚木へはつゞかずと心得べきなり

帚木巻

源氏君十七歳の夏の事なり官中將「但し中將に任し玉ふことは此卷と桐壺卷との間にあるべし」古來此卷を十六歳とす諸抄みな同じ誤なり今按おほよそ源氏の年齢の事桐壺卷に十二歳といへるより後藤裏葉卷に三十九歳のよし見えたるまで其間に一所も年齢をいへることなしされば諸抄に此卷をもて十六歳とさだめたるも藤裏葉若菜より逆に年數をかぞへてさだめたる物なり物語においては此卷幾歳の時とも見えたる事はなきなりさて若菜より逆におしかぞふるにつきて諸抄の說いささか相違有て今改めかんがへて此卷十七歳とす下の卷々に至りてつまびらかに其說あり

空蟬卷　此卷の發端は別に端を起さずして帚木の終と同夜の事より書つゝけたりさて其夜の事はさしたることもいはで後のことへ書きうつせりさしたることもなきに帚木の終を少し云ひのこして此卷の始めに少し書きつけたること是又一つの文法か

源氏君十七歳帚木卷と同じ夏の事なり

夕顏卷　此卷の始は六月なるへし其故は「いとしのびてさつきのころほひよりものし玉ふ人なんあるべけれど云々これ夕貌君のことをかくいへはなり

源氏君十七歳空蟬卷と同じ夏より冬「十月上旬までなり」迄のことをかけり諸抄の說は是迄を十六歳とす誤なり

若紫卷

源氏君十八歳の春「三月下旬」より冬までの事見えたり諸抄に十七歳とするは誤なり

末摘花卷

源氏君十八歳の春「二月中旬なるへしそのゆゑは朧月夜のころと云ひいざよひの月をかしきほどにおはしたりと云てやゝ下の文にわらはやみのことあれはなりこのわらはやみは三月十日ごろよりと若紫にあり」より十九歳の春「正月八日のころまであり」までの事見えたりはじめは若紫卷と同じ春「若紫より少し前なり」の頃より書出して終は若紫卷の翌年の春の事なり諸抄に十七歳より十八歳の春迄とす誤なり或問云夕貌ノ上のうせられしは去年の秋の事なるに此卷の發端に「思へどもなほあかざりし夕貌の露年月ふれどおぼしわすれずといへる秋より翌年の春迄の事を年月ふれとゝいへるはいかが

答云此例猶あり玉蔓君は冬はじめて源氏君の御方へわたり給へるに其翌年の春の源氏の詞にかくとしへぬるむつまじさにとあり胡蝶巻に見えたり〔又蜻蛉巻卅三丁に去年の夏よりのことを今年の夏の詞に年ごろといへり　浮舟巻十八丁にも秋より明年の春までのことをとしごろとあり〕是も冬より春迄の間を年へぬるといへり是と同じ

紅葉賀巻

源氏君十八歳の冬〔十八歳の十月叙正三位〕より十九歳の秋〔十九歳の七月源氏任宰相〕までの事みえたり諸抄十七八歳とするは誤なり此巻源内侍かことをかけるところに源氏と頭中將とのことを二十(ハタチ)のわかうどたちといへり頭中將の年齢はしれざれども源氏は十九歳とすれば十八歳とせんよりは今すこしよせあらん歟是等は證據にすべき程の事にはあらねどこしはよせある事なり問云若紫末摘花此巻いづれも其はじめ同年なること何をもてしるか答云若紫巻の末に朱雀院行幸の沙汰あり末摘花にも此事見え此巻の始にまさしく其事見えたり是只一度の行幸なり是をもて同年なることを知べし〔若紫巻に藤壺女御夏より御懐胎のよし見えて此巻の終の年二月に御産ありこれ又此の巻の始めと若紫と同年の證なり又紫の上の外祖母は若紫巻の九月に卒去にして此巻に三箇月にして紫の上除服のことありこれ又同年の證なり〕

花宴巻

源氏君二十歳の春〔自二月下旬至三月下旬〕の事なり諸抄十九歳とす誤なり

花宴巻と葵巻との間に一年をへだてたり花宴は源氏廿歳葵巻の初は廿二歳なり此間に廿一歳のことをこめたり若菜上巻に〔若菜上云廿(ハタチ)がうちは納言にもならずなりにきかし一つあまりてや宰相にて大將かけ玉へりけん云々これ本より宰相にてありしを廿一歳のとき大將を兼玉ひきとなり〕源氏廿一歳にて大將になり給ひしよし見えたれば源氏の任大將は花宴の巻の次の年なり葵巻の始に御身のやむごとなさもそふにやと書て次の詞に大將の君とかけり是去年すでに大將に任じ給へるよしの書ざまなり或説に葵巻の初年と花宴巻とを同年とす此説による時は若菜下に紫上を卅七歳といへるによくかなひたれども源氏任大將の事冷泉院の年齢などにかなはず其上花宴は三月の下旬迄の事あり葵巻には四月よりあ

りもし同年ならば其間に爭でか朱雀院の受禪冷泉院の立坊齋宮卜定等の事あるべきなり且齋院の御禊の事大相違あるよし委しく一條禪閤の年立に辨じ給へり又秋好中宮齋宮になり給ふは朱雀院御卽位以後の事なるべきに初年の詞なり葵卷に「齋宮は去年内にいり給へかりしを」といへるも相違せり然ればかた〴〵此說用るにたらざる事年立にくはしく見えたり

問云然らば葵卷を花宴の次のこととすることはいかゞ答云冷泉院は花宴卷には二歲なり澪標卷に十一歲にて御元服あり此御年齡に相違せり其外の事はさてもかなふべけれども此一つかなはざればなほ兩卷の間に一年をへだつると知べし

葵卷

源氏君「源氏官大將」廿二歲「四月より」より廿三歲の正月「正月朔日まで」迄のこと見えたり諸抄廿一二歲とするは誤なり

榊卷

源氏君廿三歲の九月より廿五歲の夏「五六月までと云べきかそのゆゑは夏の雨のどかにふりてと云ひ又雷雨のこともあればなり」迄の事見えたり諸抄廿三四歲とするは誤なり

花散里卷

源氏君廿五歲の夏「五月廿日ごろのことなりそのゆゑは五月雨郭公立花などを云て廿日の月とあればなり」の事なり諸抄廿四歲とするは誤なり「榊卷の末に夏の雨のどかにふりてと云ると此卷の五月雨と同時と見るべきか然らばかの榊卷の末の雷雨の所は此卷より少し後なるべし」

須磨卷

源氏君廿六歲の春「三月下旬」より廿七歲の春「三月上旬まで」までの事見えたり諸抄廿五六歲とするは誤なり

明石卷

源氏君廿七歲の春「三月上旬須磨卷の同時よりかきつゝけたり」より廿八歲の秋「八月までなり」迄の事見えたり諸抄廿

六七歳とする誤也

冷標巻

冷標巻の初年の冬の文に云 朱雀帝なり おりゐなんの御心つかひちかくなりぬるにも云々とかきて翌年二月廿日に御國ゆつりのことあり立坊のこともつゝきてかけり源氏内大臣になり玉ふ此例を以て見れは桐帝の譲位朱雀帝の受禅冷泉院の立坊は花宴の年源十九歳の時にあるへきこと明らかなり源氏の大将になり玉ふも同年のことなるへきかもし然らは若栄に廿一歳にて大将とあるに二年相違せりこれにつきて思ふに葵の巻の初つかたはなほ花の宴の次の年なるへしそのゆゑは夕霧は八月に誕生なるに葵上の懐妊のはじめを此巻にかける所は誕生の前の年の十一月のことなるへきか 此説非 若栄下冷泉院譲位の所考ふへし

源氏君廿八歳冬〔十月より〕より廿九歳冬までのこと見えたり諸抄廿七八歳とするは誤なり

蓬生巻

此巻は四月に源氏のとふらひ玉ふ處が詮なれは源氏廿九歳の四月のことなり

此巻は常陸宮の姫君の事を始終かけたる故に始は源氏君廿六歳須磨浦へ左遷し比より書出して歸京以後廿九歳の四月に此姫君をとふらひ給ふこと有て末には二年ばかり此ふる宮になかめ給ひてと有又かの大貳の北の方のぼりてともいへり此大貳は此巻源氏御歸京の事をいへる年の冬下向したればそれより任限五ヶ年を經てのぼるべければはるかに後の事迄かけるなり

關屋巻

此巻は源氏石山まうでの日ひたちが上洛にゆきあひ玉ひしは九月廿日とあれとも下の詞に「石山より出玉ふ日右衛門佐御むかへにまゐれり一日かりすぎしかしこまりなと申す云々此の詞をみれは此のあたりは十月になりてのことと聞ゆ又その後うつせみへつかはす文の詞にも一日はちぎりしられしを云々されど廿日と云は大やう下旬のことをいへはなほ九月のことゝ見てもありなん但し伊豫介うせたることとうつせみの尼になりしことなれはほどへて後のことなるべし

源氏君廿九歳の秋〔九月下旬〕のことなり諸抄廿八歳といふは誤なり

洽標關屋等の巻と繪合巻との間に一年をへだてたり洽標關屋は源氏廿九歳迄なり繪合巻は卅一歳なり此間に三十歳の一年あるべし問云此間に一年をへだつる事何をもつてしるか答云六條御息所は洽標巻の末の秋かくれ給へり然るに繪合巻の始に前齋宮の入内の御事見えたりもし繪合を洽標の翌年の春とせば母君の服の中なれば入内あるべきにあらず又松風巻の源氏君の詞に「ひるのこかよはひにもなりにけるを云々是明石中宮三歳になり給事をのたまへり明石中宮は洽標巻

に三月誕生し給へり松風卷と繪合とは同年なりもし繪合を澪標の翌年とせば三歲の年齡不足すべし然ればかた〴〵此間に一年をへたつと知べし

繪合卷

源氏君卅一歲の春の事なり〔前齋宮の御入內のことをいへる所は正二月の間なるへきにやそのゆゑは下に三月十日のほどと云は御入內ありてやゝ日數すぎたるやうに聞ゆれはなゝさて末は三月下旬までなり　末にさがの御堂つくり玉ふよしあるもなほ春のうちなり松風卷にそのよしみゆ〕諸抄卅歲とするは誤なり

松風卷

源氏卅一歲繪合同年なり〔始めは夏のことなるへきにやそのゆゑは此春のころよりと云詞ありかの大井の家を修理し畢て明石より上京せしは秋のころとあれはかの家修理するほどもあるへけれはなり、さて源氏のわたり玉ひしは八月とみえたりそのゆゑは「山のにしきはまだしう侍けり野への色こそさかりに侍けれとありされは此卷末は八月ごろまてと云へし〕

薄雲卷

源氏卅一歲冬〔初冬より〕より卅二歲秋〔八月のころまでなるべし「せんざいどもこそのこりなくひもとき侍にけれなと云詞あり〕迄の事見えたり諸抄卅一歲とするは誤なり

槿　卷　問云此卷の詞に云「みそとせのあなたにもなりにける世かなとこれ源氏卅一歲なるへきか答云みそとせは大數なりことにあなたとあれは卅二歲の時にしても少しも相違なきなり

源氏君卅二歲薄雲卷の末と同年の九月〔末つかたなるべきにや歌に「秋はてゝきりのまかきにむすほゝれなとあれはなり〕より冬〔十二月までと見えたり雪まろばしなと十二月のことなるべし又冬のよのすめる月に乃至すさましきためしにいひおきけん人の心あさゝよ是しはすの月なり〕までの事見えたり諸抄卅一歲といふは誤なり

乙女卷

源氏君卅三歲の夏〔首夏より〕より卅五歲の冬〔十月までなり〕迄の事見えたり諸抄卅二三四歲とするは誤なり

玉鬘卷

源氏卅五歳の歳の暮までなり乙女卷の末と同年なり此卷の始めは源氏卅五歳の秋のころとみるへし發端にとし月へたゝりぬれごあかざりし夕貌をつゆわすれ玉はす云々これ卅五歳のあき比のことなり其のゆゑは右近か詞に此のとのうつりのかずの內にはまじらひ玉ひなましと云々これ六條院移徙ごろなること知るべしさてはるかに前のことより云ふは玉葛の從來を昔より云ひつゞくるなり（七丁）父おとゞのすぢさへくはゝればにや云々これ後より云詞なり玉葛大臣になり玉ふは乙女こ卷なればかく云る時はいまだ大臣にあらず

此卷は玉鬘君の從來をはじめより書るゆゑにはじめには玉葛君四歳のこき筑紫へ下向のことよりかけり玉葛君は夕貌卷に去々年誕生のよし見えたれば四歳の時は若紫卷にあたれりそれより筑紫にて年をかさね成長し給ひて「はたちばかりになり給ふまゝに云々玉葛君廿歳はすなはち乙女卷の中間の年にあたりて源氏卅四歳（諸抄の說によれは卅三歳）の時なりそのすこし下の詞に「さまかへたる春の夕暮なりこあり（此の春の夕暮を年立には玉葛廿二歳の春こして是より源氏の年をゝ數ふるゆゑに卅の春を乙女卷の次の年の春こせりこれ誤なり爰はまだ玉葛のことばかりにて前のことなれば源氏の年數にはこるべからず」是は上にはたちばかりこいひし翌年の春（三月）こ聞えたれば玉葛君廿一歳にて乙女卷の末の年にあたり源氏卅五歳（諸抄の說によれば卅四歳）の時なりさて其年の三四月の比筑紫をにげ出て上洛し給へりさて其年の秋初瀨詣有て右近にめぐりあひ給ひやがて十月に六條院にうつりすみ給へりされば此卷の末は則乙女卷の末こ同年にして源氏卅五歳の時なり諸抄の說は此卷の末を乙女卷の末の翌年こすさて源氏君の年齡は帚木卷を十六歳こして次第にかそふる故に乙女卷の末にて卅四歳なれば一年相違あるを此卷の末を乙女の翌年こする故に源氏此卷の末にて卅五歳こするなり然れ共此說誤なり此卷の末則乙女卷の末こ同年なることこ明らかなり一說に此卷の末を乙女卷の末こ同年こして源氏君の年齡をば猶諸抄の說に隨て乙女の末を卅四歳こして此卷をも卅四歳こすさて末に（眞木柱卷）「秋の夕へのたゝならぬにこいふ詞あるを又一年こして源氏の年齡を合せたり（若菜上四十歳）今按此說此卷こ乙女卷末こ同年こするは誠にしかり其證據にいへる事こもみなさる事にて先達の說誤なり然れごも源氏の年齡をばなほ古來の說のごこくにかそへて卅四歳こしさて若菜卷にて四十歳こいふにかなへんために眞木柱卷の秋の夕の一言をもて一年こしてしひて年數をあはせたる是大なる誤な

り其故は此詞をもて前に一年とするはみづからも心よからずは思ふべけれども源氏の年一年不足して若菜巻にて四十歳といふにかなはざる故にやむことを得ずやう／＼此一言をみ出してしひて一年を足して四十歳にみたしむるものなり是は帚木巻を決定して十六歳といふ説になつてある故なりおよそ源氏の年は若菜上迄は幾歳ともいへることなければ帚木巻十六歳に決したる事なしされば帚木巻を十七歳とする時は若菜にて四十歳によくかなひ其外いつれもよくかなひて相違なきなり然るを帚木を十七歳とする事をしらぬ故にかやうのひがことあるなり秋の夕などいふ一言をもて一年とすること此物語にかつて其例なし委しくは真木柱巻にいたりて辨ずべしさて此巻をもて乙女巻の翌年として一年を立ること古來諸抄の誤にて此巻は則乙女巻末と同年なること其證は、かの一説に書あらはせり今なほ委しく是をしるす事如左

一、玉鬘君に夕顔巻には去々年誕生のよし見えたれは乙女巻の中朱雀院行幸の年廿歳にあたれりさて此巻の詞にはたちばかりと有て上洛は其あくる年のことゝ見えたり一年隔てゝ後のとゝは見えざれば諸抄説一年相違の様なり

一、此巻に右近が初瀬詣より歸りてやがて六條院へまいりたる所の詞にみかどひきいるゝよりけはひことにひろ／＼としてまかでまゐる車おほくまよふ數ならで立出るもまはゆきこゝちする玉の臺なりこれ此院造營ありてまた程なくめづらしきやうすなり六條院は乙女巻末に成就して八月移徙の事見えたりもし諸抄の説の如くは今右近が參るはその翌年の秋のことなれば移徙以後一年ばかりも過つらんに右近はたび／＼參るべければかやうにめづらしげにはいかでか思ふべき一年ばかりがほど參らぬことはあるまじきなりされば八月に移徙有て則其ほどのことゝみて此詞は相應すべきなり

一、初音巻發端に「ましていとゞ玉をしけるおまへはなどいへるわたり六條院新造の翌年始ての初春と見てこそ興あるべし正月臨時客の時に催馬樂のこのとのをうたひたるも新造の始ての正月のこと故と見えたりさらでは興なし又「つねのとしよりもことなりといふ詞も細流には玉鬘君の居給ふゆゑなりとあれども此詞も此院新造美麗なる故にもかゝるべし

一、胡蝶巻の春の風景逍遙すべて六條院新造のはじめての春と見えたり

一、同巻云春まつそのはとはげまし聞え給へりし御かへりと此ころやとおぼし云々「花ぞのゝこてふをさへや下草に秋ま

つ虫はうごくみるらん是は去年〔乙女巻〕の秋中宮の御方より紫上へ「心から春まつそのはわかやどのもみぢを風のつてにだにみよと有ければ「春の花ざかりに此御いらへは聞き給へと源氏ののたまひしが今花ざかりなればかの御返ごと此比よろしかるべしとて一年そのゝことてふをさへやの歌を紫上より中宮へ奉らせ給ふなり然るに諸抄の説によらば乙女と初音との間に一年をへだてたれば如何その間の一年の花盛の比何の沙汰もなく過て年をへだてゝ今春その沙汰あるべけんや乙女巻に「春まつそのはとあるしは去年の秋にて則今年の花ざかりにその御返事あるなりおよそ諸抄の年紀の相違せること此一事にても知るべし

一、螢巻五月五日六條院馬場のおとゝにて騎射競馬の時花散里のことをいへる詞に云としころからをりふしにつけたる御あそびどもを人つてにのみ聞給けるに今日めづらしかりつることはかりをぞ此まちのおぼえきら／＼しくおぼしたる云々是も此院新造翌年はじめての五月五日と聞えたり

一、初音巻より野分巻迄六帖は六條院の四季の風景を詮として月次のやうにかけり是新造の翌年ゆゑなり「初音より野分まで六帖に正月より八月までを月次にかきて九月より末をかゝざることは去年八月に移徙ありて九月より冬のことはほゞ乙女玉葛にかけるゆゑなり」およそ此院は四季の風景逍遙を旨として建られたる意趣〔薄雲巻乙女巻〕前の巻に見えたり故に秋八月に移徙有てより九月のことは乙女巻にかきてさてあくる年の正月より秋迄のことかの六帖に次第にかけり然るを古抄の説の如くは一年の間四季風景何ともいはず過て其次の年かやうにくはしくかくべきやうなしここに胡蝶巻「胡蝶巻の發端に云春の以前のありさま常よりことにつくして匂ふ花のいろ云々」などは新造ありて始ての春といふ事そのおもかけしるき書さまなり

右のごとく明證おほければ決して玉葛巻は乙女巻の末と同年にして源氏君卅五歳なり諸抄に此巻を乙女の翌年として源氏卅五歳とするは誤なり又彼一説に乙女と此巻と同年として源氏卅四歳とするも大なるひがことなり

問云乙女巻末と此巻末と同年といはゝ不審有乙女巻に明石上十月に六條院へうつり給へり然るを此巻九月の比の詞に明石

上のことを北の町に物すべき人とありもし同年ならば九月にはいまだかの院へうつられぬ前なり如何答云北の町は明石上の住給ふべき所にかねて定まりたるべしここに十月にうつり給ふべき九月の事なればはやとく定めて北の町との給はんことも有べし此事すでに彼一說に辨じおけり〔五十一丁乙女卷六條院造り玉はんとての詞に云おぼつかなき山里人なとをもつどへすませんの御心にて云々これは造作以前より明石の上の御心あてあれは北の町の定めも造營ありては早速にあるへきことなり又同卷造營畢て八月に明石に御移徙の處の詞に云いぬゐの町はあかしの御方とおぼしおきてさせ玉へり云々これ八月の詞なり　問云冷泉院在位十八年のよし若菜下卷にみゆ此年數いかゞ答云くはしく彼卷に至て辨ずへし〕問云若菜上卷に夕霧君の事を二十(ハタチ)にもまだわづかなるほどと云々夕霧は葵卷に誕生なれば諸抄の說によれば此所(若菜の詞)は十九歲の時なりされば二十にわづかなるといへるよくかなへりもし今の說にしたがはゞ此所は夕霧十八歲なれば此詞にかなはぬやうなり答云此詞は夕霧十八歲の十二月としの暮の詞なり〔紅葉賀卷源內侍かことを云る所に源氏と頭中將とを廿のわかうどたちと云り此時源氏の年十九なり諸抄の說にては十八なり然るを廿といへりされは爰も實は十九になり玉ふことを大やうに成數を以て廿になるといへるなり又玉葛卷三條か詞につくしの國にはたとせはかりへにたると云るも實は十八年なり〕故に二十にわづかなると有りもし十九歲のとしのくれなれば二十にわづかなるとは書べからず今すこしの日數にて二十歲なればうちまかせて二十にもなればなど書べし又はあけんとしは二十にもあればなど有べし若菜下に朱雀院の御年をいふとて此たびとり給はんとして云々これも明年五十歲になり給ふ事を今年の詞に此度といへり大かた物語のならひ何ごともなだらかに大やうにかきたれば十九の歲の暮に二十にわづかなるほどゝはかくべからず十八歲として見むははるかにまさるべし

・

初音卷

源氏君卅六歲の正月〔自元日至十五日〕の事なり則乙女卷六條院移徙の翌年なり彼一說に卅五歲とするは誤なり

胡蝶卷

源氏君卅六歲初音と同年の三月〔自下旬〕四月の事なり

螢　巻

源氏君卅六歳胡蝶と同年五月「上旬より」の事なり

常夏　巻

源氏君卅六歳螢と同夏「六月のことゝ見えたり年立にも六月とし玉へりさて月もなきころなれはと云詞あれは末つかたとみゆ」の事なり

篝火　巻

源氏君卅六歳常夏と同年の秋「七月五六日ころのことなり」の事なり

野分　巻

源氏君卅六歳篝火と同秋「八月のことなり」の事なり

行幸　巻

源氏君卅六歳の十二月より三十七歳の二月迄の事見えたり初音巻より此巻の始まで同年の事なり一説に卅五歳十二月より卅六歳二月までとするは誤なり

藤袴　巻

源氏君卅七歳行幸巻の末と同年の秋のと「八月九月のことなり」なり一説に卅六とするは誤なり

眞木柱巻

源氏君卅七歳藤袴と同年の冬「十月より」より卅八歳の冬「十一月までなり」までの事見えたり彼一説には卅六歳の十月より卅七歳の十一月迄有て又末に「秋の夕のたゞならぬにとあるをもて一年として源氏卅八歳の秋迄といふ今按此説用るにたらず大なる誤なり是は玉葛巻に辨するごとくしひて若菜巻源氏四十歳の年數にあはせんためやむことを得ずして「秋の夕の一言をもて一年とせりおよそ此物語の例同じ巻の中において來年へうつるにはかならず歳のかはるよしをいへり或

はとしゝかはりぬとしかへりてなどいへりさて春夏秋冬と次第にかけり但春より秋へうつり又は秋迄書て冬をかゝずして年もかはりぬなど書ることはあれどもかやうにふと秋の夕などいふ一言をもて一年とすることかつて其例なし其上この詞は近江君の事をいふ所なればいよ〳〵是を一年とはなしがたし近江君のことをいはんとて上に「まことやとかき出せりおほかたまことやといふ詞はいつかたにてもふと前がたのことを思ひいたしてかきいたす所にかけば爰も近江君の事をふと思ひ出してまへつかたへ立かへりて書出す文章なればかの秋の夕もいつにても有べしされば「いかなるをりにか有けんと上にいへり此詞をもて一年とするはかへす〳〵おさなくいやしき説なり〔年立云これは秋のことを思ひいたして巻の末にかけるなり云々此説よし須磨の巻云まことやさかしかりしほどのまぎれにもらしてけり云々これさきに云ふへきことをわすれて後に思ひいたして云と云證なり〕

梅　枝　巻

源氏君卅九歳の春のことなり〔自正月下旬かけり末は三月下旬歟古抄に此巻正月のことゝし或は正二月のことゝするはいかゞ末に花さかりすぎてあさみどりなるそらうらゝかなることあれは二月の末までとみゆ但藤うらはの始め三月廿日とあれは此巻は中旬までともみるへし梅枝の末と藤裏葉の始めとを引合せて見るに藤うらはの始め三月廿日ころは内大臣雲井鴈を夕霧にゆるし玉ふ心に定まる梅枝の末にはいまた心さだまらずゆるさるゝ氣色みゆされは梅枝の終は廿日よりまへなること知られたり

藤　裏　葉　巻　此巻にて源氏の年始めて卅九歳のよしみえたり

源氏君卅九歳梅枝と同春より十月迄のこと見えたり

若　菜　巻上

源氏君卅九歳藤裏葉と同年の十二月より四十一歳の三月迄のこと見えたりおほよそ源氏君の年齢の事前にもいへることく桐壺巻に十二歳といへるより此巻迄一所も其沙汰見えず此巻の中間の年四十賀のこと有故うら葉巻にあけんとしよそぢに

なり給ひければ云々是にて始て源氏卅九歳なることを知てさて逆にかぞへて巻々の年紀をたてたる物なり

同　下　此巻の發端は上巻の終りよりかきつゞけたるやうなり空蟬巻の發端明石巻の發端に同

源氏君四十一歳上巻の末と同三月より四十七歳の十二月迄のこと見えたり但四十二歳より四十五歳迄の間四ヶ年の事は何事も見えず「はかなくて年月もかさなりて」といふ詞あれば是に四ヶ年の事もこもるべし次に「内のみかど御位につかせ給ひて十八年にならせ給ひぬ」といふは源氏君四十六歳の時にあたるなり問云はかなく年月かさなるとは幾年ともいはざるにおして此間を四ヶ年と定むることはいかゞ答云柏木巻に源氏四十八歳のよし見えたり且つ女三宮は若菜上のはじめに十三四歳と有て此巻の末の年に廿一二歳と有又冷泉院のみかどは澪標巻に即位有それより十八年をかぞふこれらをもて四ヶ年過ることをしれりさて冷泉院即位より十八年といふに舊抄の説と今按の説と一年の相違有其故は舊抄の説は玉鬘巻を一年の年紀にたつるによりて此帝即位の年より源氏四十六歳の年迄をかぞふれは十九年にあたるなり故に即位の翌年より數へて十八年といふにあはせたり今按は即位の年よりかぞへて十八年といふに合ふなりおよそ帝王の年紀をたつるに即位の翌年をもて在位の始とすること常のことなれども又即位の年より數ふる例もおほきことなり「醍醐御時延喜五年にかける古今序に天下しろしめす四の時こゝのかへりと云昌泰三年と延喜五年と合て八年なりこれも寛平九年即位の年よりかぞへて九年とするなり」其うへ是は御位につかせ給ひて十八年といふことなれば即位の年よりかぞへんかた然るべきにや

柏木巻

源氏四十八年の正月「改年より」より秋「四月までのことを書て終りに又秋のかたになれば此君ははひいさりなどゝ云へり」迄のこと見えたりすなはち此巻の詞に五十八を十とりすてたる御よはひ云々今年薫誕生あり

横笛巻

源氏君四十九歳春「二月」より秋までのこと見えたり

鈴虫巻

源氏君五十歳の夏〔蓮の花の盛りとあれは六月よりなるへし〕より秋〔八月十六日までなり〕迄のこと見えたり今年夕霧廿九歳〔諸抄の説によれは卅歳にあたる誤なり〕薫三歳なり

夕霧卷

源氏君五十歳鈴虫と同秋〔八月より〕より冬〔十月ころなるへきか〕迄のことなり

御法卷

源氏五十一歳の春〔三月十日ころより〕より秋迄の事見えたり

幻卷

源氏五十二歳の春〔正月ころより〕より冬〔歳の暮まて〕迄の事見えたり薫五歳

雲隱卷

此卷名有て詞なし義諸抄にくはし源氏此卷にてかくれ給ふとしるべしさて年數のことは薫幻卷にて五歳なるに匂宮卷に至て十四歳といふ事見えたれば其間薫六歳より十三歳迄八年のこと此卷にこもるとしるべし源氏のかくれ給ふは其間いつの程とも知がたし

匂宮卷

薫十四歳といふこと見えて下に十九になり給ふといふ事あり〔十四歳春元服任侍從同年秋任中將十九歳任宰相叙三品〕又末に六條院にてのり弓のかへりあるしのことあり賭射は正月にある事なれば是は薫廿歳の正月なるべき歟然らば此卷の年紀薫十四歳より廿歳の春迄といふべし年立に此卷を十九歳迄とし給ふは如何

紅梅卷

此卷は按察大納言の御方におひ出給ふ姫君達の從來を書いだして中央に至て梅花の歌贈答四首あり是は薫廿四歳〔諸抄の說によれは廿三歳〕椎本卷の末の年の春にあたれりさて末に至て匂宮宇治の姫君に心さし深くてしげく通ひ給ふよしある

は〔廿四歳〕總角巻にあたれり然れば此巻の年紀を立るときは竹川巻の次にして薫廿四歳の事なり花鳥餘情年紀大に相違せり誤なり〔つまひらかに末にしるす〕又細流及諸抄此巻をもて竹川巻の中央とし或は竹川の前に次第するは大に誤なり〔つまひらかに末にしるす〕此巻は竹川の巻より後なり然れ共先達の定めにまかせて今しばらく竹川の前にしるせり實はきはめて竹川の後なり〔姫君を東宮へまゐらせ玉ふわたりよりして竹川の後なりそのゆゑは竹川の終りに姫君たちとあり紅梅大臣の女は二人なればなり一人をばたちとは云べからずされば竹川の終りはまだ東宮へまゐり玉はぬ以前と知へし〕

竹川巻

此巻は紅梅の前に次第すべき證は此巻發端に云これは源氏の御ぞうにもはなれ玉へりし後の大殿わたり云云これ即匂宮巻の發端をうけて書るなり匂宮發端に云ひかりかくれ玉ひにしのちかのみかけに立つき玉ふへき人そこらの御すゑゝゝにありかたかりけり云々さて匂薫なとのことをかけりこれみた源氏の御末なりさてそれにつゝきたる巻なるゆゑに此巻の始めにこれはその源氏の御末にはあらてとことはりたるものなり前巻に源氏の御末のことないへるゆゑにかくことはりわけたるなり此發端の説諸抄誤れり

此巻は鬚黒大臣のなき御跡におひいて給ふ姫君達の従來を書出て薫十四五歳の比よりかき末に至りて中納言に任ずる事迄云々したりされば匂宮巻薫十四五歳より椎本巻の始廿三歳〔諸抄説によらは廿二歳なり〕の秋迄の事なりされば此巻は紅梅巻のまへなる事明らかなり紅梅巻は廿四歳の春なり花鳥及び諸抄誤なりくはしく左に辨ず

一、匂宮の巻より東屋巻に至るまでの中間紅梅竹川橋姫椎本總角早蕨宿木等の巻々花鳥年立の趣年紀大に混亂してその誤すくなからずよりて細流及び諸抄これを改めたゝしてつまびらかなり故に今しばらく花鳥年立の説をばさしおきて論ぜず〔花鳥年立の年紀誤おほき事くはしく別に左に記す〕さて細流諸抄の説によるに又不審なきにあらず先づ紅梅巻をもて竹川の前に次第し此巻〔紅梅〕は竹川の中央にあたるといふこと心得がたし紅梅は決して竹川の後なること明らかなり其故は竹川巻の終に薫中納言に任し夕霧左大臣に任す紅梅巻始よりして夕霧を左大臣といひ薫を中納言といへり竹川の中央は薫いまだ中納言に任せず夕霧左大臣にあらず是をもて紅梅は後竹川は前なることを知べし又竹川巻は薫任中納言の比にて終り紅梅巻は匂宮の宇治へかよひ給ふこと迄あり此宮の宇治へおはして始て中宮にあひ給ひしは總角巻秋なりとてしば〱

かよひ給へり薫任中納言は椎本の始の秋なり匂宮の宇治へかよふはその翌年總角の秋よりはじまれり是をもて竹川紅梅の次第を見るべし大方竹川の終より紅梅の始へつゞくべし〔竹川巻の末に紅梅の大臣の姫君達を匂宮にこゝろざし玉ふことあり是紅梅巻の張本なり紅梅巻は決して竹川の後なり其故はかの竹川末の詞に姫君たちと云へり紅梅の大臣の女は二人なり紅梅巻に一人東宮へ參り玉ひてのこりは中の君一人なり然ればもし紅梅巻を竹川の中央とせば一人の姫君は東宮へ參り玉ひて後なれば竹川の末に姫君たちとは云ふまじきことなり中の君一人なればなりされはかの姫君たちと云へるはまだ東宮へ參り玉はぬ以前と知るへし然れば紅梅巻はその後にして竹川の次なること明けし問云竹川の末に姫君たちと云る所は東宮へ一人は參り玉へる後なれどもかの螢にはあまの宮の姫君と中の君とをさして姫君たちと云るなり答云これ又相違せり其故はかの姫君たちと云る詞のつゞきに匂宮の心とめ玉はぬよし見えたり螢兵部の宮の姫君には匂宮ふかく心をかけ玉ふこと紅梅巻に見えたれば心とめ玉はぬと云は大臣の君の姫君たちのことなり〕又竹川巻の末に按察大納言〔紅梅右大臣なり〕のもてかしつき給ふ姫君達を匂宮かと心ざし給ふよしみえたり是紅梅巻の張本とみえたり此あたり紅梅巻の始にあたるべし　問云紅梅巻は竹川の中央にあたるといふ事其證あり按察大納言は竹川巻に右大臣に任じ給ふ事見えたり紅梅巻には末迄大納言とのみいへり是をもてみれば紅梅巻は右大臣に任じ給はぬまへとみえたりもし紅梅巻を竹川の後とせば此辨いかゞ答云紅梅は竹川の後たることまへにいふごとく明白なれども諸抄にも竹川を後と定むるは何故ぞとたづぬれば此事一つによつてなりもし紅梅右大臣の昇進によつて前後をいはゞ夕霧薫を左大臣中納言といへるをばいかゞ定むべき現に夕霧の左大臣薫の中納言になるは竹川の末にあり按察も此時同時に右大臣に任せらるゝよしなれば紅梅巻始より夕霧左大臣薫中納言とあるうへは按察をも紅梅巻には始より右大臣と書べき事なり紅梅巻は右大臣に任じて後の事なりもし紅梅巻を竹川の中央といはゞいまだ左大臣に任せぬ夕霧を左大臣といひ中納言にならぬさきに中納言と薫をいふべけんやおよそ官位をいふことはたとへば右大臣に任して後も猶いひつけたるまゝに大納言といふやうの事は其例多く此物語にもある事なりいまだ任せぬさきに左大臣とも中納言ともいふべきことはりなし然れば按察大納言も紅梅巻にては右大臣に任して後

なれども此卷は此人の姫君達の從來をまへつかたよりいふゆゑに按察大納言とかき出してさて任大臣のことは竹川卷にしるしたれば此卷には畧してかゝす書出したるまゝに末まで其まゝに大納言とかけるなるべし實は紅梅卷梅の歌の贈答ある春の比は右大臣になり給ひし翌年の春なり此人は右大臣に任して後もなほ按察大納言といふことは此卷にかぎらす宿木卷東屋卷までも右大臣とはいはすしてあせち大納言とのみいへり「柏木右衞門督も中納言に任して後もなほ云ひなれたるまゝにかんの君とのみ書りかんの君は督の君と云ふことなり柏木卷に至りても衞門督とのみ云へりさて權大納言になりて卒去の後横笛卷の詞にも衞門督とあり夕霧卷にもかんの君とあり橋姫卷には衞門督にてかくれ侍りにしと云ふこともあり　○紅梅卷發端に云わらはよりらう／＼しうはなやかなる心はへものし玉ひし人にてなりのほり玉ふとしつきにそへてまいてことよにあるかひありあらまほしうもてなし御おほえいとやんごとなかりけり云々このなりのほり玉ふと云る大臣になり玉へる心もあるへし柏木うせられて後は攝家の嫡子なれは大納言になるはこりのほるとはいふましくや」されば此卷も任大臣の後を猶大納言といひつけたるまゝにかけると思へば此うたがひなし宿木東屋にも大納言といへるをもてしるべし　問云宿木東屋に按察大納言とかけるは故有てなりまづ宿木に按察大納言の紅梅の御方云々是は大納言にて有し時分をさしていふなり又云按察大納言われこそかゝる目もみんと思ひしか云々是もいまだ大納言なりし時のことをいふ東屋云左大臣殿按察大納言式部卿宮などの云々是は常陸守の妻るなか人にて右大臣になり給ふことをしらずしていふ詞なりと先達「年立にすでに辨じおき給へり　答云これらは猶いかやうにもいひまげらるべしされどもみな牽強の說なり宿木卷に云左のおとゝ按察大納言藤中納言左兵衞督云々これは前のことをいふにもあらす又紫式部るなか人にて右大臣になり給ふことをしらずともいはれまじければいかにともいひまぐべきやうなしされば先達も疑をなしてこの按察大納言は別人なりといふ說もあれどうたがひもなく紅梅右大臣のことなり爰をもて見ればまへの三所の年立の說牽強なること明らかなりさればかの紅梅卷も右大臣になり給ひて後といはんに何の難かあらんや

一、紅梅は紅梅右大臣の傳なり竹川は竹川左大臣の傳なりといふ說如何紅梅卷は大納言の傳とはいふべからず姫君達の傳

こはいふべし又竹川卷を竹川左大臣の傳なりといふはいかなる心得たがへにや大なる誤なりまつ此竹川左大臣といふ人は前後にかつて見えず此卷に只一言二言ふと書たるばかりにて此人のことゝて書つゞけたる所かつてなく前後に一向其沙汰なき人なり此卷かつて此人にあづかる事なし但此人を竹川左大臣と稱するは竹川卷に見えたる左大臣といふことなり此卷をいはゞ鬚黑大臣の姫君達の傳といふべし

一、竹川卷の年紀を委しくいはゞ始つかたに薫を四位侍從十四五歲ばかりと有是匂宮卷の始にあたれり匂宮卷にては十四歲にして侍從に任すると見えたり此卷には四位侍從とばかり有て今任するよしにあらねば任して後のことなれば十四歲十五歲いづれとも定めがたければたゞ十四五歲と見るべしさて下の文に正月の事みえたるは十五歲か十六歲の正月なりさて其年もかはりて男踏歌のことみえたるは十六歲か十七歲の春なり爰に至て薫をなほ侍從とのみいへり匂宮卷にては十四歲にて侍從になり其秋中將に任するよし見えたるに此卷にてはかやうに十六七歲迄侍從とのみ有て中將といはざること不審のやうなれど是もいひつけたるまゝにやはりかける物なり此ことすでに細流に辨じおき給へり大かた中將に任けぬ前に中將といはゞ相違なれども中將に任して後まへの官をいはんことは不審とするにたらず是もかの按察大納言の例と心得べしさて又下に「年比有て云々此詞に二三年も過るとみえてその下の文には薫を始て宰相中將とかけり宰相に任せしは匂宮卷に十九歲の時なり然れば爰は十九歲以後と見えたり但し爰に宰相中將とかけるも又今任するよしにあらず是より前に〔源侍從とていとわかうひはづなりとみれば宰相の中將にて云々〕任したるかきざまなればかの年比といふ詞に十九歲にて宰相に任することもこもれるなり然れば爰に始て宰相中將とかける所も十九歲以後廿三歲迄の內いつ比とも定めがたし只宰相中將にてある時のことなりされば又かの年比有てといふ詞も幾年過るとも〔十六七歲より廿三歲になるまでの內〕定めがたきなりさて末に至て夕霧左大臣に任し薫中納言に任し按察大納言右大臣に任するよしみえたり爰は即橋姫を過て椎本の始に薫中納言に任する同時になるなり此時廿三歲なり

花鳥年立の說大に誤なり〔委しく末に辨す〕

橋姫卷 宇治一

此卷は宇治八宮の從來をかき出す故に始ははるかに前つがたのことなりまつ彼宮の姫君の誕生し給へること見えたるは若菜下卷の比にあたるなり其故は椎本に此姫君廿五歳とみえたればなりさて京の宮やけて宇治へうつり給ひしよしあるはそれより年比過て後と見えたり大方雲隱卷のあたりにやあたるべからん其故はそれより前にはや姫君達の歌よみ給へることなどあればやゝ成長の後と見えたりさて下に宇治山の阿闍梨京にいて冷泉院へ參りて彼宮の御ことを物語申されし所より此卷の年紀を立へし此時薫を宰相中將とあり廿歳の時なるべしその故は薫十九歳にして宰相中將三位〔三位の宰相になりて中將もとの如し〕になるよし匂宮卷に見えてその後翌年廿歳の正月の事迄かの卷〔匂宮〕に見えたればなりさて次に〔橋姫〕薫宇治宮へ始て參り給ふこと有同年の內なるべし其下の詞に「心よせつかうまつり給ふこと三年ばかりになりぬとありて「秋の末つかた云々此秋は薫の宇治へまゐりそめて後三年めの秋ならば廿二歳の秋なるべしさて末に至て其年の冬〔十月上旬〕の事迄見えたりされば此卷薫廿歳より廿二歳の冬「十月上旬まで」迄なり問云此卷花鳥年立の年紀は大に相違あればさしおきて論ぜず細流及諸抄に十九歳より廿一歳冬迄とあり然るに今のいふところ一年相違あるはいかゞ答云細流及諸抄にはかの阿闍梨の冷泉院へ參りし所を薫十九歳とすその故は匂宮卷に十九歳にて三位宰相になるよし見えたればなり然れ共爰は十九歳とは定めがたし其故は匂宮卷にこそ宰相に今まさしく任するよしみえたれ此卷には只うちまかせて宰相中將とあれば昇進以後いつにても有べし十九歳と決して定むることは何も證據はなきとなれどもかの匂宮卷へつゞけて十九歳と定めたる物なり實は十九歳とも廿歳ともしりがたきことなり問云しからば廿歳と定むるは又何のより所あるか答云右にいふごとくたしかに知れたる證文はなけれど匂宮卷に十九歳の翌年の正月迄をかきたればそれにつゞけてみる時は十九歳と定めんよりは廿歳と定むるかたや少しまさりぬべからんさりながら是は好むかたにしたがふべきなり十九歳を誤といふにはあらず〔匂宮卷にすでに廿歳正月のことをかきたれは此卷もそのつゞきなれは廿歳なること明らかなり何とて前へかへりて十九歳とすることあらん此例は葵卷に源氏廿三歳の正月のことまでを書てさて次の榊卷もその同年のことよりかけり〕

橋姫につゞきて則次の年薫廿三歳二月〔廿日ころ〕よりかきて其秋中納言に任す是竹川巻の末にあたれりさて其年かはりて廿四歳の夏迄の事見えたり諸抄の説は右にいふごとく橋姫巻よりして一年相違ある故に此巻も廿二歳廿三歳とせりかくのごとくして終り夢浮橋に至るまで一年づゝの異有と知べし

總角巻 宇治三

椎本の末につゞき　同年薫廿三歳の秋より其年の暮までのこと見えたり

早蕨 宇治四

總角につゞきて薫廿五歳の正月〔年の始めより〕二月〔末に二月廿日あまりとありて下に花さかりのほどゝいへる處は三月へもかゝりたるか〕の事なり

宿木巻 宇治五

此巻は今上女二宮の從來をかき出す故に始ははるかに前つかたの事なりさて此宮十四歳になり給ふとあるは椎本の末總角と同年にあたりて早蕨より前なり其夏ごろ母女御うせ給ふとあり則椎本の末にあたれりさて帝の此宮を薫にと心ざし給ひて其よしほのめかさせ給ふことは總角巻にあたるなりさて其年かはると有て次の年則早蕨巻にあたれりさて女二宮御母の服おはるよしあるは夏なれば早蕨より後になるなり故に是迄はひたすら女二宮の御うへをのみかきて此所よりして末は早蕨の次を書つゞくる心にて宇治姫君のうせ給ひしよしの沙汰中君の御事を二條院のうへなどゝかき出せり是等みな總角早蕨に有しことのつゞきなりさて其年も暮て薫廿六歳の二月權大納言右大將になり給ふその末〔四月廿餘日まで〕四月迄のこと見えたり然れば此巻は廿四歳の夏より廿六歳の四月迄なり　問云 此巻の年紀年立にはかの女二宮十四歳になり給ふといふて母女御の夏うせ給ふ年をもて早蕨と同年とす早蕨には春のことにて終るを此巻は夏より有て則早蕨につゞけ給ひたり然るを細流及諸抄には是を用ひずかの年をもて總角と同年として次の御服はつる年を早蕨の年として一年相違せり大

方年立は誤おほしといへども此巻の年紀の立やうは年立の說然るべきか然るに今年立を用ひずして諸抄に從ふはいかなることぞや諸抄の年紀に不審のこと有其故は總角早蕨巻に女二宮のこと一向其沙汰見えずもし此巻總角の年よりのことならばかの巻にも少くは其沙汰あるべきことなり　答云總角早蕨の巻はもつはら宇治の方へあづかることを書故に女二宮の御事迄はかきをはらざることとするにたらず此巻の始つかたに宇治の沙汰見えざるも同じ事なり〔此巻の始に女二宮を薰にと思召しよりて思ふ人もたりとてなとゝ云處には宇治の大姬君のことはたとひ死後なりとも沙汰あるへきことなれどもそのこと見えず是を以て總角早蕨に女二宮の沙汰なきと同じことを知るべし又夕霧の六の君のことにつきて匂宮のことをいへる處にも紅梅の御方のことは沙汰あれども宇治の中君のことは一向にみえすもし此巻に早蕨の後ならは中君すでに二條院へうつり玉ひて後なれは此所に必す中の君のことは沙汰あるへきことなり〕女二宮の御服はつるよしある所迄は此巻と總角早蕨とに宇治方のことゝ女二宮御ことゝを書分てさて御服はつるといふ所よりして後に兩方を合せて書なりおほかた此物語抄筆なればそれといはねど文章の面影にてさ聞ゆることおほし此巻の年紀のことも何とやらんかの御服はつる所が早蕨の次へつゞくやうに聞ゆるなりされば總角早蕨に此女宮の御こと見えぬももと作物語のことなればさのみ糺明して疑ふべきことにあらず猶いはゞ紫式部が心を察してみるに總角早蕨を書終て後に薰の北の方を書出さんと思ひよりてにはかに女二宮をつくり出たる物と見ても有ぬべきことなり〔問云此の巻の末の春の詞にかくて三年になりぬれど云々これ中君二條院へうつり玉ひて三年めになり諸抄說の如きは一年相違すいかゝ答云これは匂宮の中君にあひそめ玉ひてより三年なり又問云されは下の詞に一所の御志こそおろかならね大方の世にはもの〳〵しうももてなしきこえ玉はざりつるを云々これ二條院へうつり玉ひて後のことを云るかきざまなり宇治におはしますほどは世間よりもの〳〵しうし奉らぬは勿論のことなり〕問云諸抄の說に此巻帝の女二宮を薰にと思召よりて「もとより思ふ人もたりとて云々是宇治姬君のことゝ有然れども是はあながち宇治の姬君のことゝかぎりては聞えず其の故は「つひにはさやうのことなくてしもあらじさらぬさきに云々此詞をもてみればかの思ふ人とあるももとよりとはあれども今現に思ふ人有といふことにはあるべからず只もしじね

んに思ふ人などある事ありともいふこと聞えたり然れば宮も宇治姫君うせ給ひて後とせんに何事かあらん〔難問に云四十七丁蜻蛉卷云むかしの人ものし玉はましかばいかにも〳〵ほかさまに心をわけましやときのみかとのみむすめを玉ふともえ奉らざらましましてさ思ふ人ありときこしめしながらはかゝることもなからましを云々此末の詞を以て見れは宇治の姫君死後のことゝみえたり」答云これはいかにも宇治の姫君のことゝいはずとも只大方のことにて有りなん宮は宇治姫君まだ存生の內なりといふ說はそれとあてゝいふやうなれどいかゞなり〔「此卷の始に女二宮の御ことにつきて薫の思へるやう「さま〳〵にいとをしき人々の御ことゝもをもよくきゝすくしつゝ云々此わたり宇治姫君の死後ならは必そのことのかなしみなどをかくへきに一向その心みえず」然れども此詞宇治の姫君のことにあらずとて此卷年紀を早蕨の後とする證文にはならぬとなり問云早蕨卷末に夕霧の六君を匂宮の心いれ給はぬにつきて此中納言〔薫のことなり」をこそ人にゆつらんがくちをしきにさもやなしてまし年比人しれぬ物に思ひけむ人をも〔宇治姫君のことなり」なくなして云々又此卷始に女二宮の御ことを聞給て夕霧の「六君はさりとも此君〔薫のことなり」にこそはしふ〳〵なりともまめやかにうらみよらば云々此二所の詞を按ずるに早蕨の方の詞は前にて此卷の詞は後のことのやうに聞えたり早蕨は始めて六君を薫にてもと心づき給ふやうの書ざまなり此卷の詞はそれより前に此こと沙汰有しうへのことのやうにかけり其上早蕨には宇治の姫君をなくなしたる沙汰あれども女二宮を帝の心ざし給ふよしの沙汰なし此卷の詞には「思ひの外なることいできぬへかめり云云是女二宮のことをいふなりもし宿木は早蕨よりまへならばかの早蕨に六君のことのついでにかならず女二宮の御こと沙汰あるべきことなり答云まづ夕霧の六君を匂宮に心つきそめ給ひしとはすでに匂宮卷に見えたり然れば早蕨卷を始とはいはれず宿木の書ざま「さりとも此君にこそはといへるはいかにも早蕨の詞をうけていへるやうなれどもすでに匂宮卷に其沙汰有うへは前後不審に及ばず又早蕨に六君を薫にといふ所にはいかにも女二宮の御こと沙汰なくてかなはぬ所なり然れども是も前にいふごとく作物語なれば總角早蕨書終て後思ひよりて此卷女二宮の御ことをかける物とみれば不審なし是等は年紀の齟齬といふ迄のことにあらず問云此卷に云れいのかの御忌日の經佛のこと云々此忌日は宇治姫君の忌日なり年立

によれば爰は第三年にあたるなり諸抄の說の年紀にては一周忌なりもし一周忌ならば御はてといふべきに忌日といへるは第三年なるべきにや此物語いづれも一周忌をばはてとのみいへり此姬君の御はてのこと前後に見えず又れいのといへるも一周忌とはみえぬにやいかゞ答云一周忌ならばいかにも御はてといふべきことなれども又御忌日といはんも何どこかあらん又れいのことといへる詞は例の忌日といふ心にあらずかほるはかやうのことにいつも心をつけてねんごろにつかうまつらるれば此御忌日の經佛のことも例のやうにおほせつけらるゝといふ心なり大方此卷の年紀は年立と諸抄とをくらべみるに兩方ともたしかなる證文もなく又大なる相違もなければ決しがたしといへどもよう〳〵文章の書ざまを按ずれば猶諸抄の年紀の方まされるやうに覺ゆる故是にしたがふものなり

東屋卷 宇治六

宿木の末と同年薫廿六歲の八月より〔始めに少將をむこにとることをいへる處に八月ばかりと定めて云々このわたりは夏五六月のことなるへし さてそのちぎりしころ少將常陸か女に通ひそめし處はやゝのちなれば此卷五六月よりと云ふへし〕九月〔十三夜まで〕迄なり〔九月十三夜のことまであり但し年立にはその前夜薫のはじめて浮舟にあひ玉へる夜を十三夜とすこれによらば十四日の夜までと云へけれどけふは十三日なりけりとあるは翌日のことゝきこえたり子の刻より以後は明日の分なるうへに爰はほどもなうあけぬる心地するなと云る詞まへにあればいよ〳〵翌朝のことなりそのうへ宇治へおはしてそのよ月のことをいひて歌にも月をよめるなどかた〳〵十三夜ときこゆるやうなれば十三日の夜までと云ふへし〕

浮舟卷 宇治七

東屋の翌年の廿七歲の正月より同三月下旬うき舟君入水せんとする所迄見えたり

蜻蛉卷 宇治八

蜻蛉卷年立には浮舟君の入水を四月とし「月たちてとあるより五月とすこれは月たちてと云詞の下に「たちはなのかのなつかしきに時鳥の二こゑばかりなきてわたると云て歌にも橘時鳥をよみて五月めきたるゆゑなり此說によれば此卷四月よりと云へしされど浮舟君の入水は三月の下旬とみえたりそのゆゑは匂宮の浮舟をとりかくして京へわたさんとあるはつごもりごろとありしその頃入水せしなり此のつごもりかたと云るは

三月のことゝ見ゆたりそのうへ薫の浮舟を京へわたさんとあるはうづきの十日とさため玉ふよし浮舟の巻にみえて此の巻に月たちてと云處にけふぞわたりこしとおほしいて玉ふとあるこれかねて定めし時節になりたるゆゑ也にあらばけふそ京へわたさましと思ひで玉ふなりされば此處四月とみゆ但し晴五月めきたり四月上旬にたち花を云ふこと可考かけろふ或る卿の宮のうせ玉ひしこと十四丁此巻にありそれを末に五十丁此の春うせ玉ひぬると云りもし年立の説の如くは此巻の始め四月なれば春と云ことたがへり又手習巻に僧都の母の長谷詣せしこととも三月といへり五十二丁又同巻紀の守が詞に浮舟のことをこぞの春うせ給ふと云六十二丁

浮舟卷の終と同時浮舟君入水の翌朝より其年の「七八月ころまでなり「花のひもとく御前のくさむらと云ひ又人々月みることなどあり」秋迄のことあり薫廿七歳なり

手習卷 宇治九

蜻蛉の發端浮舟ノ君入水の頃「横川僧都の母妹宇治にやどりたる處即浮舟入水の比なり 宇治院にて浮舟を始て見つけたるは即入水せんとて出し夜のことなり」より出て其年くれて次の年三月浮舟君の一周忌の比すぎ五月あたり迄のこと見えたり薫廿七歳の三月下旬より廿八歳の夏迄なり「五月八日までなり薫の山へのぼり玉ふは八日なるへし但夢浮橋に僧都の詞にまかりおりしことけふあすさはり侍る月たちてのほどに云々これをみれは下旬のことゝ聞ゆ○五月と云證は夢浮橋にいとふかくしけりたる青葉の山にむかひてまぎるゝことなくやりみつの螢はかりを昔覺ゆるなくさめにて云々これ五月の景色なり此處即ち此卷の終りの翌日の夜のことなり」

夢浮橋卷 宇治十

手習卷の終より書つゞけて猶薫廿八歳の「五月のこと」夏のうちにて書終れり諸抄薫の年齢は橋姫卷よりして一年の異ある故此卷の年齢も廿七歳にて終なり花鳥年立の年齢は相違あれば用ひがたし

自匂宮至椎本卷々年立ノ年紀「一條禪閤御作」大相違事

まづ薫の昇進を考ふるに匂宮卷云「十四にて二月に侍從になり給ふ秋右近中將になりて云々同卷云「十九になり給ふ年三位の宰相にて猶中將もはなれ給はず椎本卷に云「宰相中將其秋中納言になり給ふ云々薫の官位昇進かくのことし是をもつ

て紅梅橋姫の巻に引合せみるに相違のことなし只竹川巻に合せみるに少く相違のやうにおもはる匂宮には十四の秋中將になれるを竹川にては十四五歳といへる所より三年めの所まで猶侍從とのみ有て中將の沙汰なしさて又年ごろ有て後に始て宰相中將と有是中將昇進のこと匂宮と相違のやうなれども是は相違にあらずすでに竹川巻の所に辨ずるがごとしさて中納言に任ずることはかの椎本と竹川と引合するに相違なしされば彼是引合せみる時みなよく相叶ひて只竹川に十六七歳迄侍從といへるのみ匂宮の詞に相應せぬやうなれば年立の誤はもと是より出たる物なり其故は匂宮の巻の昇進と竹川巻の詞とをしひて引合せて相かなへんとし給ふ故にさま〲の牽強の說出來て年紀大に雜亂せりたゞ竹川巻に侍從とあるを按察大納言の例に大やうにみる時は巻々雜亂なく順にして年紀明らかなり下に圖するがごとし考へみるべしさてその年立の牽強の說といふはいかにといふに如左

一、年立に薰十六歳秋中將に任ず十四歳秋中將に任ずるにあらずと云々今按是かの竹川に十六七歳迄侍從とあるによつてしひてそれに合せん爲の說なり大なる誤なり其故はまづ中將に任ずるは十四歳侍從に任ずる年にあらずといふはかの匂宮巻にその秋といはずして只秋とはかりある故に十四の秋にあらずとしひていひまげたるなれどもひがとなりかの巻のやう其秋とはなけれど十四歳の秋ならんことうたがひなき物なり 一たびかの巻をひらき見てたちまちしるべきことなり 委しく辨ずるにたらずさて又中將に任ずる事を十六歳と定め給ふは何故ぞと按ずるにかの竹川に十四五歳と有て後第三年めの所迄侍從と有て其下には宰相中將とある故なりされども是又心得がたし其故はまづ始に十四五歳とこそあれ十四とは見えねば三年めも十六とも十七とも定めがたし「竹川に始めて宰相中將といへるは十六七歳の後年ころありてと云詞の後なれは十六にして宰相中將に任すと云ふこと決して誤なり橋姫を十六歳とし玉ふも始めて宰相中將とあるゆゑなるにそれを其時に任したるとせは此の竹川に始めて宰相中將とあるをも其時に任したると見玉ふなるべししからは十六七歳の後に年ころありてと云る後なれは十六歳にして任すと云こと決して誤なり彼れ是れ齟齬せり是によれは橋姫を十六歳とするも又齟齬せり」

匂宮には十四にて侍從に任ずるよしあれども竹川には今任ずるよしは見えずすでに侍從になりて後なれば十四五歳といふ所十四とも十五とも定めがたきことなり然るをさして十六歳中將といふこと大におぼつかなし其上十六七歳の年も過て後猶いとせ有て中將になるといふことも竹川には見えず其故は下に始て宰相中將と出たる所は其まへに年比有てといふ詞有て後のことなれば此年比といふ詞のうちに宰相になる年はこもるべしいつの比とさしていふべきにあらず然るを十六歳とおして定むることいよ〳〵おぼつかなし此説はかの「年比といふ詞を見おとし給へるにや

一、薫宰相に任ずること十六歳の秋冬のあひだなるべし匂宮卷十九歳三位宰相中將如レ故是は此程宰相中將にて有しか今三位になりて宰相も中將ももとのとしといふ事なりと云々「匂宮卷に十九歳にて宰相三位になるまではたゞ中將とのみ云て宰相とはなしもし十六歳にて宰相になりたらばこれよりまへにも宰相と云へきことなり十六歳にて宰相になると云ふこと大なる誤なり」今按此説は前の中將に任ずる事十四歳にあらずといふと同じ事にて牽強の說一向いふにたらぬことなり現に十九歳の時三位宰相になりて中將もとのごとしとこそ見えたれ三位になりて宰相中將もとの如しとはなし是等はとかく論ずるにもおよばず匂宮卷を見ればたやすくわきまへらるゝことなり然るを何とてかやうに年紀をたて給ふぞといふに是もかの竹川卷に始て宰相中將と見えてそれより前にたゞ中將といふ事見えぬ故に宰相と中將とは同年に任ずと思ひ給ふなりさて又十六歳の時と定められたるは是もかの中將と同じく竹川に十四五歳とある所より第三年め迄侍從と有て其下にはじめて宰相中將と有故なり然れども右にいふ如く其中間に「年ごろ有てと云詞あれば十六七歳以後幾年有て宰相に任ずといふをかつて此卷にては知べからずされば十六にて宰相といふ說大に誤なり十九歳にて宰相中將に任ずると明らかなりかの竹川に侍從といひて後すぐに宰相中將とかきうつすは中將昇進を中間に畧せる物なり

一、年立に橋姫卷に薫十六歳より十八歳迄なり今按此説又大に相違のことなり抑此卷の始つかた宇治阿闍梨の冷泉院へ參りし所を薫十六歳の時とし給ふは何故ぞと云に彼所に薫のことを宰相中將とある故なり此御說薫の宰相中將となられしを十六歳の時とし給ふ故なりまづ宰相中將に任ずること十六歳にあらざることは右にくはしく辨ずるがごとし今爰に畧すたと

ひ十六歲の時宰相中將になるにしても橋姫を十六歲と定むるはおぼつかなし〔總て年立の說は始めて書る官位をば其時に任じたるやうに心得玉ふなり竹川に薰の十四五と云るより三年めに始めて宰相中將とあるをも卽おして十六歲にて宰相中將に任すとし又橋姫に宰相中將とあるをも卽ちその所を十六歲とす是みな誤なりその時に任すといはされば任じて後いつにてもあるべし〕其ゆゑは此卷に始て宰相中將と書たるもその時あらたに昇進するにあらず昇進して宰相中將にてある時のよしなれば宰相中將になりて後いつにても有べし其うへかの昇進十六歲にあらざることうたがひなければ此卷の始を十六歲とすれどいよ〳〵誤なり

一、紅梅卷に薰を源中納言といふ事誤なり此卷は中納言にならぬさきなれば源中將といふべし〔紅梅卷の年立に云いまだ源中納言とは申すべからざれども同年のことなるによりて源中納言とはかけり物語つくるとはみな後に人のかくゆゑなり云云是れしひて年紀の相違をたすけんための說なれども大にひがことなり源中納言とかけること相違あらざれども見やうあしきゆゑに年紀みだれて相違のやうに思ひ玉へるなりすべて此物語まへつかたの官を後まで云ふことは多く例あり前に辨するか如し未た任ぜぬ前に昇進の官をあらかじめ云ことは一つもその例なしいかに同年のことなればとて中納言にならぬ以前に中納言と云へきことなし此物語にさらにその例なし大なる誤なり〕其故は夕霧の左大臣に任ずるも紅梅の右大臣に任ずるも薰の中納言に任ずるも同時なるに此卷に紅梅をば按察大納言とかき夕霧をば右大臣とあれば薰もまた中將なること明らかなり今按察大納言のことは委くまへに辨したり今爰に畧す夕霧を紅梅卷に右大臣とありといふこと不審なり今數本を考へ見るにみな左大臣とありもし河內本右大臣とあるにやもし夕霧を右大臣とあらは薰を中納言とあるは相違なれども今諸本いづれも夕霧は左大臣とあれば薰を源中納言とある事相違なし

一、大方花鳥年立年紀雜亂相違する事右にいへるごとく竹川卷に侍從とある詞になつみて匂宮卷の昇進をあしく見給ふ故なりよつて細流および諸抄不用之今又委く考ふるところにいよ〳〵年立の說誤なること右に辨するがごとし只竹川の詞をば大やうに見て匂宮卷の昇進明白なるにしたがふべしおほよそ此年紀のことは彼是入りまじれるやうにて詞にのべたるの

みにてはさとしがたきやうなれば今その圖を撰て桐壺巻より下宇治十帖にいたるまでくはしく年紀を次第すること如左

おほよそ此物語において源氏の外は年齢の沙汰無用のよしいへる説もあれとすでに源氏薫の年を論ずるうへは人々の年をも沙汰せずはあるべからざることなりかつは他人の年齢をもて源氏君の年を考ふるたすけとなることもおほければ今これをかんかへて左にしるすものなり

源氏君之外人々年齢之事

朱雀院　若菜下巻の終の年五十歳にならせ給よし見えたれば源氏に三歳の御兄なり然れば桐壺巻にて春宮に立給ふは七歳の御時なり御位につかせ給ふは花宴巻の年なるべければ廿三歳の御時なり澪標巻にて御譲位は卅二歳の御時なり又紅葉賀巻に御母弘徽殿大后の御事を春宮の御母にて廿餘年といへる此時此帝廿二歳にならせ給へば此帝をうみ奉らせ給ひて廿餘年といふ事なり此時春宮にておはします故に春宮の御母にてといふなり春宮になり給ひて廿餘年といふにあらず一説に此大后禁中へまゐり給ひて廿餘年といふ事なりとあるは大なる誤なり此帝の御年を考へざる説なり扨此帝の崩御は雲隠巻の内に有べし

冷泉院　紅葉賀巻に御誕生澪標巻に十一歳にて御元服其年御位につかせ給ふ若菜下巻にて御譲位は廿二歳にあたらせ給ふなりさて橋姫巻にて宇治阿闍梨の此院へ參りし所は四十九歳にならせ給ふときにあたれり

今上　明石巻の末の年二歳にならせ給ふよしあれば源氏廿七歳須磨巻の末より明石巻の始の年に御誕生と見えたり澪標巻に春宮に立給ふは三歳の御時なり若菜下に位につかせ給ふは廿歳の御時にあたれりさて宿木巻の始女二宮十四歳にならせ給ふとある年は此帝四十五歳の御時にあたれり

薄雲女院　薄雲巻にかくれさせ給ふ卅七歳のよしなれば源氏に五歳の兄なり桐壺巻にて御入内ありしはいづれの年ともなし源氏君七歳より十一歳迄の内なれば此后の十六歳迄の内なるべし此宮十六歳は源氏の十一歳の年にあたれりさて若紫巻にて御懐胎は廿三歳紅葉賀にて冷泉院をうみ奉り給ふは廿四歳の御時にあたれり　榊巻にて御出家は廿九歳の御時にあた

れり

秋好中宮　榊巻に齋宮にて伊勢へ御下向の時十四歳にならせ給ふよしあれば桐壺巻源氏十歳の時うまれ給ふべしさて澪標巻母御息所におくれさせ給へるは廿歳にあたり御入内は繪合巻の春かその前年の冬なるべければ廿一の冬より廿二歳の正月二月の間なるべし乙女巻にて中宮に立給ふは廿四歳の御時にあたれり

明石中宮　澪標巻に御誕生松風巻に三歳になり給ふよし見ゆ藤裏葉に春宮〔今上の御事なり〕へ參り給ふは十一歳の御時なり若菜上に一ノ宮を生奉り給ふは十三歳にあたれり御法巻に中宮のよし見えたり廿三歳にあたれり早蕨巻は四十四歳にあたれり問云今上の一宮春宮御誕生の事諸抄の說によれば明石中宮十四歳の御時なり今の說にては十三歳なり十三歳にして產育の事おほつかなし答云婦人は十四歳にして天癸いたるといふ事を執していはゝ諸抄の說の十四もおほつかなきことは同じことなり〔令に曰凡そ男は年十五女は年十三以上聽ニ婚嫁ー又上條の義解曰下條云男年十五聽ㇾ婚既定ニ夫婦ー理當ㇾ有ㇾ子〕其故は十三よりはらみ給ふ所なり然れども御產十三にもあれ不審すべき迹もなしもと作物語なるうへ現に十三にて子うむ例もある事なりかつ若菜上巻に此御懷姙のことを「まだいとあえかなる御ほどにいとゆゝしくそたれも〳〵おほすらんかし云々又云まだいとあえかなる御ほどにいかにおはせんとかねておほしさふらふ云々さて御產有て後の詞に「ほどなき御身にさるおそろしきことをしたまへれば云々是等の詞をもて其御幼稚常ならぬことをしるべし

夕霧左大臣　葵巻に誕生乙女巻に元服あり十二歳なり若菜上に二十にもまだわづかなるほどなれど云々是十八歳の歳の暮の事なり右大臣に任することは雲隱巻の內にあるべし竹川巻に左大臣に轉し給ふは四十九歳にあたれり

匂兵部卿宮　若菜巻下の末に誕生横笛巻に三歳のよし見ゆ匂宮巻初年は十五歳なり浮舟蜻蛉巻にては廿八歳にあたれり薰は廿七歳なり

薰大將　柏木巻に誕生匂宮巻始に十四歳のよし末に十九歳のよし見ゆ浮舟蜻蛉巻は廿七歳にあたれり匂宮は廿八歳なり然るに浮舟巻云かの君〔匂宮〕と同じほど〔匂宮と同しほどなり〕にていま二三まさるけちめにやすこしねびまされるけし

きやうい云々此詞不審なり匂宮は薫に一の兄なるを返て薫を二三年の兄といへる年紀相違なり匂宮は若菜下に生れ給ひ薫はその次の年柏木巻に生れ給へり如何

柏木右衛門督　柏木巻に逝と有則彼巻に夕霧に五六の兄と見えたれば卅二三なるべし然れば帚木巻の年か其前年かの内に誕生なるべし

女三宮　若菜上の始に十三四歳と見えたれば須磨巻の初年かその次の年か御誕生なるべしさて若菜下の末の年に廿一二歳のよし有前に十三四といへると年紀相かなへりさて匂宮巻薫十四歳侍従に任する年は卅五六歳になり給ふべし早蕨巻にては四十六七歳にあたり給ふなり

今上女二宮　宿木巻初に十四歳のよしあり同巻の末に薫の方へわたらせ給ふは十六歳の御時なり

六條御息所　榊巻云十六にて故宮前坊に参り給て廿にておくれ奉り給ひ三十にてぞ今日又こゝのへを見給ける云々此詞不審なり其故は今年三十歳とあれば十六歳にて前坊へ参り給ひし年は桐つぼの巻源氏君九歳の年にあたれり朱雀院立坊有て六年めなり是をもて見れば前坊すてに春宮を辭し給ひてはるか後に參り給にや〔此説非なり〕しからば御息所とは申すまじきことなりと先輩もうたがひをのこし給へり今つら〳〵按するに帝の御位をさり給ひて後に院御所へ入内あるをも女御と申せば其例にて春宮を辭し給て後には參り給へども女御子をうみ奉り給ひしかば御息所とも申すまじき物にもあらず〔院へ参りても御子を生み奉り玉へは御息所と申す證は竹川巻に故鬚黒大臣の姫君冷泉院へ參り玉ひて七月より懐姙翌年正月の文に始て御息所とかけり〕さやうに見る時は此詞うたがひなく年紀相違なしさて秋好中宮を生奉り給ふは其翌年十七歳の御時にあたり二十にて前坊におくれ給ふといふは桐壺巻源氏君御元服の翌年にあたれり澪標巻にうせ給ふ卅六歳なるべし

葵上　紅葉賀巻に源氏君に四はかりの兄と見えたれば桐壺巻源氏御元服の時そひふしになり給ふは十六の時なるべしさて葵巻にてかくれ給ふ廿六歳なるべし〔年立に廿五とあるは年紀一年の異あるゆゑなり〕

紫上　若紫巻に十ばかりと見え紅葉賀巻正月の詞に十にあまり給ふよしみゆ葵巻に始て源氏君と夫婦の交有十四歳なり玉葛巻に廿七八歳と見えたり此時廿七歳にあたり給へりさて若菜下巻の末の年卅七歳とある此詞年紀相違せり諸抄の説によれば此時四十歳にあたれり三年の相違なり今按の説によれば此時卅九歳にあたれり二年の相違なりよつてつら〱按ずるに九と七とはやゝ字の形も相似たればもし卅九をうつし誤て卅七とかきつたへたることもあるべきにやされども今つたはる諸本みな卅七なり先達の本どもゝ卅七なりと見えたりなほいふかしきことなり牽強の説は用ひかたし大かたかやうのことは今の人ならば心をつけてよく〱かんかへてかくべけれどむかしは義理に害なき事はなほざりにして紫式部も只大方にかんかへて深くたゞさで何心なくかける物なるべしそれをとかく義理をつけてしひて紫式部をたすけんとするは返て式部が本意にあらざるべし是等はたゞ相違と見るべし薫を匂宮に二三年の兄といへるも此例と聞えたり

宇治宮ノ姫君　椎本巻の初年に廿五とあれば若菜下巻冷泉院御譲位の年に誕生なるべし總角巻にてうせ給ふは廿六歳なり薫に二の兄なり

同中君　椎本巻初年廿一歳とあれば柏木巻に誕生なるべし總角巻にて始て匂宮にまみえ給ふは廿四歳なり薫と同年と見えたり

玉葛君　夕顔巻に去る年誕生ありと見えたり源氏十五歳の時にあたれりさて玉葛巻に廿ばかりとあるは乙女巻中間の年にあたれり其翌年上京有て六條院へうつり給ふは廿一歳なり眞木柱巻にて始て鬚黒大将にまみえ給ふは廿三歳の時にあたれり竹川巻に此君の御腹の姫君冷泉院へ入内ある時は四十八九歳になり給ふべし

浮舟君　宿木巻の中間の年に廿ばかりとあれば幻巻の次の年誕生にて中君には五歳ばかりの弟なるべし浮舟巻は廿二歳にあたり手習巻の末夢浮橋にては廿三歳なるべし「夕霧の六君宿木巻の中間の年廿一二とあり此の君は夕霧の巻の終りにすでに見えたれば夕霧の巻に誕生としても宿木の中間の年は廿三歳にあたるなり一二年相違のやうなり但し夕霧巻に此君の名を出せる處は夕霧大臣の子息姫君たちをかぞへあげてすべて十二人ましますよしあれは此の六の君はまだ誕生なけれど

もまづ豫めかぎりの姫君たちの全備をいへるにてもあるへしこの人の年齢につきて諸抄の說こ今の說このとを論する人あるへし其ゆゑは夕霧の卷の終にかぞへ上けたる御子たちの外に系圖にはなほ多し然れはこれは以前誕生の分ばかりなりこも云へしされご內侍ばらの內に此の六の君の次に次郎君五郎君ありわつかに一年はかりのこごにいかでか二人を生ん但しこれは男子こ女子をかきわけて前後にかゝはらずあげたる歟さやうにみえたり

右人々の年齢いづれも今改正する所の年紀によつて考へ定むるこころなり諸抄の說こ少々異ありこ心得べし

源氏物語玉の小櫛の序

いそのかみふるき物語ぶみは。世におほかる中に。かしのみのひとりぬけ出て。いともく心ふかく。めでたくおもしろきは。此源氏の物語になんありける。かかればそのここのこゝろこける書も。くれ竹の代々につぎくあまたあめれど。千ひろの濱の貝は。ひろへどもつきせず。底ふかき沖のみるめは。かづきえがたきわざにしあれば。なほあかぬとのみおほく。その蜑の子が黒髮の。むすぼゝれたるふし。みだれたるすぢもまじれるを。わが鈴の屋の翁の君は。天の下の物しり人にして。もこよりやまごこゝろのいとくかしこくおはすれば。ちはやぶる神代のみふみをはじめて。いにしへの書こいふふみを。こきあかしたまふまゝに。紫のふかき心をも。よくさとりえて。かのあまの子が黒かみをも。いさゝかもまよふすぢなく。ときくだしたまへる。此めでたき玉の小櫛を。こたみかくとり出たまふよしは。うごきなき石見の國。しき浪よする濱田の里をしらせたまふ。色かへぬ。

松平の君の。かしこくもきこしめし及びて。ねんごろにとひ玉へるに。此翁の君しも。めかりしほやきとかいふらむやうに。いとまなくて。あらたまの年久しく。とりも見たまはざりけるを。くしげの中よりさがし出て。あかづけるをのごひきよめて。奉り給へるを。おなじくは世にひろめて。天のしたの人のたからとなしてんと。ありがたくおもほしよりて。せちにそゝのかしたて給へるになんありける。おのれはた。年ごろ此物がたりをふかくこのむ心は。うれしともうれしきあまりに。さし出ん手つきのはづかしさをもわすれて。おほけなくしぢのはしがき。そのよしいさゝかかきしるしつ。かく申すは。まかねふく吉備の中山に。宮柱しきたてゝ。しづまりいますかる。

神の宮人

藤井高尙

源氏物語玉の小櫛一の巻

そのかみのこゝろたづねてみだれたる
すぢときわくる玉のをぐしぞ

本居宣長

すべての物語書の事

中むかしのほど、物語といひて、一くさのふみあり、物がたりとは、今の世に、はなしといふことにて、すなはち昔ばなし也、日本紀に、談といふ字をぞ、ものがたりと訓たる、それを書に名づけて、作れることは、繪合の巻に、物語のいできはじめのおやなる、竹取の翁に、うつほのとしかげを合せてとあれば、此竹取やはじめなりけむ、その物語、たがいつの代につくれりとは、さだかにはしられねども、いたくふるき物とも見えず、延喜などよりは、こなたの物とぞ見えたる、そのほかかのたぐひなる、古き物語ども、此源氏のよりさきにも、かず／＼多く有しと聞えて、その名ども、あまたきこえたれど、後の世には、傳はらぬぞおほかゝめる、又同じころ、それより後の物も、多くして、今の世にも、これかれと、あまたのこれり、榮花物語の、煙の後の巻に、物語合せとて、今あたらしく作りて、左右かたわきて、廿人合せなどせさせ給ひて、いとおかしかりけり、といへるを見れば、そのころも、おほく作りたりし也、さてもろ／＼の物語のさま、おのおのすこしづゝかはりて、さま／＼なれども、いづれも、昔のよに有し事を、かたるよしにて、あるはいさゝかかたち有し事を、よりどころにして、つくりかへてもかき、あるは其名をかくしもし、かへもしてかき、あるはみながら作りもし、又まれには、有しことを、そのまゝに書るも有て、やう／＼なる中に、まづ多くはつくりたるもの也、さてそはいかなる趣なる物にて、何のためによむものぞといふに、大かた物がたりは、世の中に有ッとある、よき事あしき事、めづらしき

こゝをかしきこと、おもしろき事あはれなる事などのさま〴〵を、書あらはして、そのさまを、繪にもかきまじへなどして、つれ〴〵なるほどの、もてあそびにし、又は心のむすぼゝれて、物おもはしきをりなどの、なぐさめにもし、世ノ中のあるやうをも心得て、ものゝあはれをもしるものなり、かくていづれの物語も、男女のなからひの事を、むねとおほく書たるは、よゝの哥の集共にも、戀の哥の多きと、同じことわりにて、人の情(ココロ)のふかくかゝること、戀にまさるはなければ也、すべてこれらのこと、猶つぎ〴〵に、くはしくはいふべし、

此源氏の物語の作りぬし

此物語は、紫式部がつくれりといふことは、世にあまねくしれることにて、はやくみづからの日記にも、そのおもむきに見えたれば、論なきを、それにつきても、くさ〴〵の說あり、まづ宇治ノ大納言の物がたりに、源氏は、越前守爲時これを作りて、こまかなる事どもを、女(ムスメ)の式部にかゝせたり、といへること、花鳥餘情にも引玉へり、されど此說用ふべからず、かの書にも、たしかには申さず、いづれかまことならむなど見えたり、又河海抄に、御堂殿、奥書を加へられて、老比丘筆をくはふるところ也、と書給へりと見ゆ、これ又ひがこと也、そのよしは、安藤ノ爲章といふ人の、紫家七論といふ物に、くはしく辨へたるがごとし、これらをおきても、くさ〴〵の說どもあれど、みな後の人のつくりいへることどものみ也、たゞ紫式部作れりといふほかは、みなうけがたし、又末の宇治十帖は、式部が作れるにあらず、といふ說あれど、ひがことなり、同じ人のつくれること、明らけし、又雲隱ノ卷は、名のみ有て、詞なきは、式部が心有ル事なるを、今の世に、其卷とて、別にあるは、後の人のしわざにて、見るにもたらぬ、つたなきものなり、又山路の露とて、夢浮橋ノ卷の末につづけたる物あり、そはかの雲隱といふものよりは、ふみことばなど、まさりざまなれど、なほ後の人の作りたるにて、式部が筆には、似べくもあらず、いとこよなし、

紫式部が事

紫式部系圖は、諸抄に見えたり、父爲時が事、越後守とも、又越前守ともいへり、越後守なりしとは、後拾遺集八の卷、

式部が兄の惟規が哥のはし書に見え、越後より越前守になりたりし事は、續世繼の九の巻に見えたり、然ればはじめ越後にて、後に越前になれりしなりけり、夫宣孝は、良門の五世の孫にて、勸修寺の家の先祖也、式部、上東門院に宮づかへせしは、論なし、鷹司殿の官女といへるは、よりごころありや、しらず、御堂殿の妾といへるは、みだりごなるべし、さて紫式部といふ名は、實の名にはあらず、すべて女房に、式部少納言弁右近などいふたぐひ、みないはゆる呼名(ヨビナ)也、こは初學のためにまづいふ也、此人、實の名は世につたはらず、すべて古へ名高かりし女房、おほくは實の名は見えず、撰集ごもにも、よび名をしるされたり、さて式部といふに、紫和泉小式部などあるは、式部といふが、あまた有て、まぎる故に、わかむため也、そは或は其姓、或は父また夫などの官、母の名など、たよりにまかせてよべりしなり、清少納言江侍從などは、清原大江の姓也、和泉式部は、和泉守道貞が妻也、小式部は、和泉式部が子也、伊勢ノ祭主輔親の女なり、大貳三位は、太宰ノ大貳成章の妻也、さて紫式部も、もとは姓によりて、藤式部といへりしこ也、そはとうしきぶとよむべし、江侍從も、ごうじゞうとよむべし、清少納言などの例なり、ふぢしきぶえのじゞうなどは、よむべきにあらず、男にても、江帥藤大納言在中將などのたぐひ、みなこゑによめり、さて又紫としもいへるよしは、河海抄に一說云々、もと藤式部といへるを、幽玄ならずとて、藤の花の色のゆかりに、紫の字にあらためらるとあり、今思ふに、此說は、紫といふによりて、思ひよりて、おしはかりにいへるもの也、其姓をよぶに、なにの幽玄ならざることかあらむ、殊に藤は、みやびたるもじなるをや、又清輔ノ朝臣の袋册子にいはく、紫式部といふ名に、二說有り、一には、此物語に、若紫ノ巻を作れる、甚深なる故に、此名をえたり、一には、一條院の御乳母の子なり、しかうして上東門院に奉らしむとて、わがゆかりのもの也、あはれとおぼしめせと申さしめ給ふ故に、此名あり、武藏野の義也とあり、此二つのうち、諸抄みな前の說にしたがひ玉へり、河海にも、一部のうち、紫ノ上の事を、すぐれてかきなしたる故に、藤式部を改めて、紫式部と号せられたりとあり、今思ふに、紫ノ上の事を、すぐれてかける故といふは、さも有べし、若紫ノ巻を作れる、甚深なる故といふは、心得ず、いかでか若紫ノ巻のみ、殊に甚深なることあらむ、さて御乳母の子なりし故に、一條のみ

かごの、わがゆかりのもの也、とのたまひつる故といふも、さも有べきと也、これは後の人のおしはかりとは聞えず、式部母は、常陸ノ介爲信ノ女と、系圖に見えたる、此人、一條ノ帝の御乳母なりし事、物に見えたりや、考ふべし、ゆかりのものとは、御乳兄弟のよし也、むさし野の義也とは、古今集雜ノ上に「むらさきの一もとゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれとぞ見る、といへる哥の意にて、これより紫をゆかりといひならはせり、紫式部日記に、左衞門ノ督、【公任卿】あなかしこ此わたりにわかむらさきやさぶらふと、うかゞひ玉ふ、源氏にゝるべき人見え給はぬに、かのうへは【紫ノ上】まいていかで物し給はむと聞るたりといへり、此日記の文につけても、ゆかりの說、まさりておぼゆる也、其故は、ゆかりの說によるときは、紫といふ名、かの紫ノ上にはあづからぬとなるを、それとよそへてのたまへるぞ興なる、すべてたはぶれ言は、あらぬ事を、めづらかによそへていふをこそ、興とはすなれ、もし紫ノ上の事を、すぐれてかけるによりての名ならむには、たはぶれて若紫とのたまへる、なにのめづらしげかあらむ、

つくれるゆゑよし

此物語、いかなるよしにて作れりといふ事、さだかにしりがたし、あるは上東門院にさぶらふ時、大齋院より、めづらかなる物語やと、のぞませ玉へるをりに、作りて奉れりといふ說など、うけがたき事、かの七論にも、くはしくわきまへたるがごとし、又西ノ宮殿に、をさなき時、なれ奉れりといへるは、時代もたがへり、あるは石山にこもりて、かけりといひ、大般若經の料紙にかけりなどいへる、みな妄說也、行成卿淸書といふも、此人名高き手かきなる故に、つくりていへるなるべし、又かの石山にこもれるをりしも、八月十五夜の月、湖にうつりて、心のすみわたりけるまゝに、物語の風情の、心にうかびければ、まづ須磨明石の卷を、かき始めける故に、須磨ノ卷に、こよひは十五夜なりけりと、おぼし出てと侍り、といへるなども、いと〳〵うけられず、もしこよひは十五夜也とあるをもて、十五夜に書たる證(シルシ)とせば、初音の卷に、けふは子ノ日なりけりとあるなどをも、正月の子の日にかきたりとせんか、いともをさなき事也、又今石山寺に、源

氏ノ間といふ有て、式部が像、またその机硯などゝてあるは、みなかの説によりて、事好むものゝつくれる也、又源氏ノ君を、西宮ノ大臣になずらへたるは、さることなれども、紫ノ上を、式部みづからよそへてかけりなどいふは、いとをこ也、いかでさるおふけなきことをば、思ひよらむ、

作れる時世

此物語、寛弘のはじめにいできて、康和の末に流布すと、河海に有て、諸抄それによられたり、今式部日記をもて考ふるに、寛弘の始めにいでくとあるは、さも有べし、これらの事、なほ七論に、こまかに考へて、出來たるは、いかにも長保の末、寛弘の始メなるべしといへり、然るに或人、榮花物語浦々の別れの卷に、かのひかる源氏も、かくや有けんと見奉るとあるは、長徳二年四月の事なれば、それよりさきに、はやく此物がたりは、世に流布せりと見ゆ、寛弘のはじめに作れりといふは、ひがこと也といへるは、中々にたがへり、榮花物語作れるが、長徳二年ならばこそ、さもいはめ、かの榮花は、寛弘より後に出來つれば、なでふことかあらむ、さて康和の末に流布すとあるは、いかゞ、日記のおもむき、式部がみやづかへして在しほど、はやく宮の內には、ひろまれるさまに見えたるをや、又殊に世にもてあそぶことは、俊成ノ卿定家ノ卿のころより也、といへる說も、いかが也、こは俊成ノ卿の、六百番ノ歌合の判の詞、又定家ノ卿の賞美の詞などのあるをもて、例のゆくりなく、おしはかりにいへることなるべし、

此物語の名の事

大かたもろ〳〵の物語の名の例、おほくは其中に、主(ムネ)としていふ人の名をもてつけたり、此物かたりも、そのでうにて、光源氏ノ君の事を、むねとしてかける故に、源氏の物かたりとはいふ也、此君の名、光といふ事は、桐壺ノ卷に、なほにほはしさはたとへむかたなく、うつくしげなるを、世の人ひかる君ときこゆと見え、又ひかる君といふ名は、高麗人(コマウド)のめできこえて、つけ奉りけるぞと見えたり、これを二說と見むは、わろかゝめり、たゞ世の人の申す、ひかる君といふ名は、もとこま人のつけ奉りたる也、といふなるべし、かくて卷々に、此君のかたちをほめたる詞にも、多くひかるといへり、

紅葉賀ノ巻に、かほのいろあひまさりて、つねよりもひかると見え給ふ、又同じひかりにてさし出玉へれば、葵ノ巻に、一ところの御ひかりには、おしけたれためりなど、なほ多し、匂宮ノ巻のはじめに、此君のかくれ給ひし事をも、ひかりかくれ給ひにし後と書出せり、又薫ノ君をほむるには、多くかをりといふ事をいへり、さて源氏は、此君の姓也、桐壺ノ巻元服の時、源氏になし給へると見えたり、物語の中に、ひかる源氏とつゞきたる詞は、帚木ノ巻のはじめ、若紫玉かづら紅梅竹川などの巻々にも見えたり、さて物語の名、光源氏の物語といふべし、たゞ源氏ノ物語とはいふべきにあらず、といふ人あれど、さしもあらず、はやく作りぬしの日記にも、たゞ源氏の物がたりといへるをや、

准　據

此物語、諸抄に、准據といへるとあり、たとへば光源氏といへる人はなけれども、西宮ノ左大臣【高明公、】になそらへて書たり、といふたぐひ也、されど物がたりに書たる人々の事ども、みなこと〴〵くなそらへて、あてたる事あるにはあらず、大かたはつくり事なる中に、いさゝかの事を、より所にして、そのさまをかへなどしてかけるとあり、又かならず一人を一人にあてゝ作れるにもあらず、源氏君一ところのうへにも、いにしへの人々のうへに有し事どもを、やまともろこしにもとめて、一事づゝとりたることもありて、すべて定まれるとはあらざる也、おほかた此准據といふ事は、たゞ作りぬしの心のうちにある事にて、必しも後にそれを、こと〴〵く考へあつべきにしもあらず、とてもかくても有べきなれども、昔よりさだしあへる事なる故に、今もそのおもむきを、いさゝかいふ也、さてついでにいはむ、五條に、夕皃ノ君の跡、須磨ノ浦に、源氏ノ君の跡、長谷に、玉かづらの君の跡、などいひてあるたぐひは、みな事好めるものゝ、つくりものがたりぞといふ事をだに、わきまへざるしわざ也、これらはむげにをさなき事なれば、人のまどふべきにもあらざめるを、かくいふは、たゞうひまなびのために、おどろかせるのみぞ、

くさ〴〵の事

よに此物語を、源氏六十帖といひて、そは天台の六十巻に擬ふといふ説、ひがと也、此物語は、五十四帖こそあれ、

六十帖ふよしなきを、かの天台の書にしひて合せむことさはいひなせるにこそあらめ、たとひ六十帖あらむにても、天台の書の事は、いと物ごほし、又巻々の例、史記の本紀世家列傳によれりといふも、あたらぬこと也、すべてさやうの事は、後にあてゝいへば、似たることもあへることもあるものなれど、そはおのづからにこそあれ、それにかたどれり、これによれりなどいふすぢは、大かたあたらぬこと也、竪横の并の事、さしも用なき事なれど、むかしよりさだあることなれば、一わたりこゝろえおくべし、物語の人々の系圖は、たしかにおぼえおくべきことなり、其人々の系圖をしらでは、まどはしきことおほく、又こまかなるこゝろばへの見えがたきもの也、然るに有り來つる系圖は、もれたることおほく、をり〳〵誤りも有て、人のまどふことにて、後の抄どもに、或は改め考へなどもせられたれども、なほ全からず、これによりておのれ、いまあらたに、くはしくかむかへ定めて、新系圖を作らまほしく、思ひわたれど、いとまなくて、いまだはたさず、人人の年齢、巻々の紀年の事、作り物語ながら、みな合せてかける物なれば、たゞさずは有べからず、さればむかしよりさだ有て、後成恩寺殿のあらはし給へる、年立あり、然れどもすべて誤りおほくて、宇治の巻々にいたりては、ことにまがひたるひがことゞも多きを、諸抄に考へたゞされたれども、なほよろしからざる事どもある故に、おのれ又ことに考へをあらはして、くはしくわきまへつゝ、猶巻々の年月のついで、見やすからむために、圖をも物して、たよりとしつ、本は、むかし河内本といふと、青表紙といふと、大かた二やう有しとぞ、其中に、定家ノ中納言の本なるをもて、ちかき諸抄なべて、よきあしきをいはず、ひたぶるに青表紙のかたをとられたるさまなるは、いかにぞや、いづれの本にまれ、よきあしきにつきてこそ、とりもすてもすべきわざなれ、かならずそのぬしによりて、さだむべきにはあらざるをや、かくて今の世にある本ども、摺たる寫したる、あまたなるを、おの〳〵こころ〴〵に、すこしづゝの異有て、たがひによきとあしきことあるを、おのれあまたよみ合せて、これかれ異なるところ〴〵、中によきをとりて、しるしつる、そのくだり別におくに物しつ、すべて假字がきのふるき書ども、今の世につたはれる、いづれも〳〵、寫し誤れること、おちたることなどおほくして、よみときがたきふしおほかるに、此物語はしも、よゝの人々の、ことにふかくめでられて、ひろくもてひらるゝ

との、こよなかりしけにや、あだし書どもにくらぶれば、寫し誤は、いとすくなくなむ有ける、されどなほ、ひが寫しと見ゆる所々も、たえてなきにはあらずかし、

註釋

ちうさくは、河海抄ぞ第一の物なる、それよりさきにも、これかれとあれども、ひろからずくはしからざるを、かの抄は、やまともろこし、儒佛のもろ〳〵の書どもを、ひろく考へいだして、何事も、をさ〳〵のこれるくまなく、解(トキ)あきらめられたり、さては花鳥餘情あり、河海の誤れるところをわきまへ、もれたる事どもを考へくはへなど、すべてたよりとなることおほし、此二つの抄は、かならず見ではかなはぬもの也、但し誤りもいとおほく、語の注などには、殊にひがことのみおほくして、用ひがたし、其後哢花抄細流あり、河海花鳥の誤りをたゞし、かれこれと考へくはへられたり、さて又明星抄孟津抄岷江入楚万水一露湖月抄など、なほくさ〴〵、頭書や何やと多かり、皆さき〴〵の抄どもを引出て、さしもことなることなく、たゞすこしづゝかはれるのみ也、其中に、今世中にあまねく用ふるは、湖月抄也、げに此抄は、さき〴〵のもろ〳〵の抄どもを、あまねくよきほどに、頭ラと傍ラとに引出、師説今按をもまじへ、すべて見るにたよりよきさまにぞ書キなしたる、さて又契沖ほうしの源註拾遺といふ物八巻あり、ことごとく注せるにはあらで、たゞ諸の抄にもれたる事、誤れる事どもを、こゝかしこ、わきまへ解(トキ)たる物也、此人は、よにことなるさとり有し人なれば、めづらしきこと多し、すべてこの人のあらはせる書どもは、近き世のうきたる説をば、さらにとらで、何事も、古き書を證(アカシ)として、新に見明らめたることおほき也、又さきにもいへる、紫家七論といふもの一卷、これは注釋にはあらず、たゞ此物語の大むねを論じ、紫式部が才徳など、日記を引出て、くはしく考へ、昔よりの妄説(ミダリゴト)どもをわきまへなど、さまかはりて、一ふしある物也、かならず見べし、但しそのおほむね、たゞもろこし人の、書ども作れる例をのみ思ひて、物語といふ物の趣をおもはず、物のあはれをむねとかけることをば、いまだしらざるものにして、諷諭と見たるは、なほ儒者ごゝろにぞ有ける、又吾師縣居ノ翁も、此物語の新釋といふ物あるとは、はやくよりきけれど、いまだ其書をえ見ず、たゞその

總考といふ一巻を見たり、その趣、大かた契沖爲章がいへるにゝたり、新釋の例をも擧られたり、又熊澤了介とかいふ人の、外傳といふ物などもあれど、ひたぶるの儒者ごゝろのしわざにて、ものがたりのためには、さらに用なし、これらをおきて、世にしられぬ物どもゝ、なほ有べき也、そも〳〵かくしるべのふみどもは、いとこゝらあれども、なほうはべの一わたりのことこそあれ、文章(フミコトバ)のこまやかなるこゝろばへ、作りぬしの、ふかく心をこめたるおもむきなど、くはしきくまぐまでは、いまだゆきたらはぬ事のみ多かめれば、たゞ注釋にのみすがりて、事の意の聞ゆるをよきにして、やむべきにはあらず、なほこまやかなるこころを、おく深く尋ぬれば、えもいはぬあぢはひのあるふみぞかし、

引哥といふものゝ事

物語の詞の中に、古き哥の、たゞ一句などを引出て、またくその一首(ヒトウタ)の意をこめ、あるはその句のつゞきの詞の意をこめなどしたるを、引哥といひて、其哥は、大かた河海抄に引出されたり、まれにもれたるなど、花鳥にも出たり、其後々の抄どもに、しるされたるは、皆河海花鳥に出たるをとれる也、然るに河海抄に出されたる引哥、かなはぬも有り、又詞のたがへるといと多く、あるは此哥とかの哥と、本末をとりまがへて引れたるなど、あるは又古哥にあらで、其意聞えぬえせ哥なども有り、すべていとみだりなり、此事は、契沖もいへるごとく、たゞそらにうかべ玉へるが、たがへるなどを、そのまゝに、ゆくりなくしるされたるものとぞおぼゆる、然るを後の抄どもにも、その考へなく、たゞ河海のまゝにとられたる、それも又みだりなるわざなり、すべてその心して見べし、さて又河海其外の抄にも、引哥未勘としるされて、いかなる哥の詞ともしられぬも、をり〳〵あるは、猶よくかむかへて、引出まほしきわざなり、

湖月抄の事

此物語、今の世、これかれあまたの本どもある中に、たよりよきまゝに、おほくは湖月抄を見る事也、それにつきて、こゝろうべき事どもあり、まづ此抄の本、おほかたはよろしき中に、をり〳〵あしき事、又詞いおちたるところなどあるは、今他本(コトマキ)とよみくらべて、みなえり出て、奥にしるせるがごとし、又此抄、すべて句讀(ヨミキリ)いとみだりにして、誤りおほく、中に

は句(ヨミキリ)によりて、いたく語の意をも、誤ること多し、その心してよむべし、清濁(スミニゴリ)も、わろきことおほし、假字づかひのことごとくたがへるは、後の世のおしなべたることなれば、わきていふべきにあらず、さていはゆる引哥の例に、「の点をかけたるに、引哥ならぬところおほし、引哥とは古き哥によりていへる詞にて、かならず其哥によらでは、きこえぬ所也、然るに此抄、河海花鳥などに、引哥とはなしに、たゞ詞の例などに、古哥を引たるをも、そのわきまへなく、引哥といふ物と、ひとつに心得て、かの点をかけたるところの多き也、又註の中に、河海抄花鳥餘情などにある事を引るには、河また花と標(シル)すべきわざなるに、それをばおきて、後の抄に引たるかたによりて、岷あるは細などしるせる事つね也、されば、岷細などゝて引たるには、河海花鳥の説おほしと心得べし、大かたこれらの事ども、今思ひ出るまゝに、一ッ二ッしるしぬ、なほもあらむは、なずらへても心得べき也、さておのれ今此小櫛を物するにも、世にあまねく見る本なるゆゑに、たよりよからむために、何事も、此湖月抄につきていふことおほし、巻々の、そのひら／＼としるすたぐひなり、

大むね

此物語のおほむね、むかしより、説どもあれども、みな物語といふものゝこゝろばへを、たづねずして、たゞよのつねの儒佛などの書のおもむきをもて、論ぜられたるは、作りぬしの本意(ホイ)にあらず、たま／＼かの儒佛などの書と、おのづから似たるこゝろ、合へる趣もあれども、そをとらへて、すべてをいふべきにはあらず、大かたの趣は、かのたぐひとは、いたく異(コト)なるものにて、すべて物語は、又別(コト)に物がたりの一つの趣のあることにして、はじめにもいさゝかいへるがごとし、かくて古ル物語は、こゝらあるが中にも、此源氏のは、一きはふかく心をいれて、作れる物にして、そのよしは、猶末に別にくはしくいふべし、さてすべて物語どものおもむき、又それをよみたる人の心ばへなどは、此源氏の物がたりの、巻々ところどころに見えたるをもてさとるべし、今そをこれかれ引出て、その事の意をも、いさゝかいひてさとさむ、蓬生ノ巻にいはく、はかなきふる哥ものがたりなどやうの、御すさみ事にてこそ、つれ／＼をもまぎらはし、かゝるすまひをも、思ひなぐさむるわざなッめれ、

かゝるすまひとは、末摘花ノ君の、心ぼそくさびしきすまひをいふ也、物語をよみて、さる人の心をなぐさむるゆゑは、わが身と似たるさまの事をかきたるをよめば、世にはわがどくうき身のたぐひも有けりとやうに思ひて、心のなぐさむ也、

繪合ノ巻にいはく、かの旅の御日記云々、しらで今見む人だに、すこしもの思ひしらむ人は、涙をしむまじく、あはれ也、まいて云々、

旅の御日記は、源氏ノ君の、須磨の御旅ゐのほどの日記也、しらで今見むとは、そのをりの事はしらで、今はじめて、此日記ばかりを見む人だになり、ましで其時の事をしり、其事にあへる人の、よむ心はと也、

こてふの巻にいはく、むかし物語を見玉ふにも、やう／＼人のありさま、よの中のあるやうを、見しり給へば、

すべて物語は、世にある事、人の有さま心を、さま／＼かけるものなる故に、よめば、おのづから世の中の有さまを、よくこゝろえ、人のしわざ情のあるやうを、よくわきまへしる、これぞものがたりをよまむ人の、むねとおもふべきことなりける、

螢ノ巻に云ク、長雨例のとしよりもいたくして、はるゝかたなく、つれ／＼なれば、御方々、繪物がたりなどのすさみにて、明しくらし玉ふ、又いはく、こまのゝ物語の、繪にてあるを、いとよくかきたるゑかなとて、御らんず、ちひさき女君の、何心もなくて、ひるねし給へるところを、むかしのありさまおぼしいでゝ、女君は見玉ふ、

下なる女君は、紫ノ上にて、むかしの有さまとは、みづからのいはけなかりしほどの事を、おぼし出たる也、

眞木柱ノ巻に云ク、昔物語などを見るにも、よのつねの心ざし深きおやだに、時にうつろひ、人にしたがへば、おろかにのみこそ有けれ、ましてと云々、

これ物語を見て、世の中のあるやうをしれる也、

下の若菜ノ巻にいはく、對には、例の、おはしまさぬ夜は、よひゐし給ひて、人々に物がたりなどよませて、聞玉ふ、かく

世のたとひに、いひあつめたる、むかしもの語にも、あだなる男色このみ、ふた心ある人にかゝづらひたる女、か（わが歟）やうなる事を、いひあつめたるにも、つひによるかた有てこそあんめれ、あやしううきても過しつる有さまかな、

かくといふより下皆、紫ノ上の、物語をよむを聞給ひての心也、かやうなるは、わがやうなること有けん、わもじのおちたるなるべし、あやしう云々も、みづからの御身の事也、

夕霧ノ巻にいはく、よその人はもりきけども、おやにかくすたぐひこそは、むかし物語にもあんめれと云々、橋姫ノ巻に云々、むかし物語などに、かたりつたへて、わかき女房などの、よむをもきくに、かならずかやうの事をいひたる、さしもあらざりけむと、にくゝ、おしはからるゝを、げにあはれなる物のくま有りぬべき世なりけりと、心うつりぬべし、總角ノ巻ニ云々、云云、後の世のためしに、いひいづる人もあらば、昔物語などに、ことさらにをこめきて、つくり出たる、ものゝたとひにこそは、なりぬべかんめれ、又云、げにふることぞ、人の心をのぶるたよりなりけるを、おもひいで玉ふ、

此ふることは、ふるき哥のことなれど、古物語も同じこと也、

宿木ノ巻ニ云々、かゝる道を、いかなれば、淺からず人の思ふらむと、むかし物語などを見るにも、人のうへにても、あやしう聞思ひしは、げにおろかなるまじきわざなりけりと、我身になしてぞ、何事もおもひしられ給ひける、

これは、宇治の中ノ君の、古物語にある事を、今我身のうへにて、思ひしりて、げにとおぼせる也、かゝる道とは、女の、男のふた心あるすぢにて、物思ひすることをいへる也、

またいはく、げにかくにぎはゝしく、はなやかなることは、みるかひあれば、物がたりなどにも、まづいひたてたるにやあらん、蜻蛉ノ巻に云、昔物語の、あやしき物の、事のたとひにか、さやうなることもいふなりしかど、おもひいづ、又云、せり川の大將のとほ君の、女一ノ宮おもひかけたる、夕ぐれに思ひわびて、出ていきたるかた、おかしうかきたるを、いとよく思ひよせらる、しかばかりおぼしなびく人のあらましかばと、おもふ身ぞくちをしき、

これは薰ノ君の、女一ノ宮を思ひ玉へる心也、

手習ノ巻にいはく、むかし物がたりのこゝちもするかなとのたまふ、夢浮橋ノ巻ニ云ク、むかしものがたりに、たまどのにおきたりけむ人のたとひを、思ひ出て、さやうなる事にやと、めづらしがり侍て云々、などあり、大かた物語をよみたる心ばへ、かくのごとし、昔の事を、今のわが身にひきあて、なずらへて、昔の人の物のあはれをも、思ひやり、おのが身のうへをもむかしにくらべみて、ものゝあはれをしり、うきをも思ひなぐさむるわざ也、かくて右のごとく、巻々に、古物語をよみたる人のこゝろばへを書るやう、すなはち今源氏物語をよまむ人の心ばへも、かくのごとくなるべきと、しるべし、よのつねの儒佛などの書を、よみたらむ心ばへとは、いたくことなるものぞかし、さて紫式部が、此物語かける本意は、まさしく螢巻にかきあらはしたるを、それもたしかにさとはいはずして、例のふる物語のうへを、源氏君の、玉かづらの君に、かたり給ふさまにいひて、下心に、この物語の本意をこめたり、然るにその注釋ども、誤りおほくして、作りぬしの下の意もあらはれがたければ、今こゝに殊に其文を、また〳〵引出て、つぎ〳〵其意をも釋き、下にこめたるこゝろをあらはして、此物がたりよまむ人のしるべとす、その文にいはく、さま〴〵に、めづらかなる人のうへなどを、まことにやいつはりにや、いひあつめたる中にも、わが有さまのやうなるは、なかりけりと見玉ふ、

これは玉葛ノ君の、古物語どもを見玉ひての心也、

住吉の姫君の云々、かのげんがゆゝしさを、おぼしなそらへ玉ふ、

住吉物語をよみて、わが身のうへに、昔有し事を、思ひ合せ給ふ也、

殿は、こなたかなたに、かゝる物どものちりつゝ、御目にはなれねば、

殿とは源氏ノ君也、かゝるものどもとは、古物語の本どもをいふ、

あなむつかし、女こそ、物うるさがりせず、人にあざむかれむと生れたるものなれ、

これより源氏ノ君の、玉かづらの君にのたまふ詞也、いつはりおほき、すゞろごとの物語は、見るにうるさき物なるを、うるさしとも思はで、めづるは、女といふものは、人にあざむかれんために生れたるものにこそと也、かくのたまふは、

まづ少したはふれて、古物語をいひおこし給へる也、さてこれよりして、作りぬしの下(シタ)にふくめたる意は、此源氏物語をよまむ人の心になりて、まづかくいひおこしたるは難(ナン)ずる意也、さてつぎ〳〵、或はほめもし、或はおこしもして、つひにはすてがたきいはれをのべたり、

こゝらの中に、まことはいとすくなからむを、かつしる〳〵、かゝるすゞろごとに心をうつし、はかられ給ひて、あつかはしきさみだれ髪の、みだるゝもしらで、かき給ふよとて、わらひ玉ふものから、

わらひ玉ふといふにて、すこしたはふれてのたまふ詞なることをしるべし、さて物からといふにて、意を轉ずる也、下ノ心、此源氏物語を、まづ僞りのすゞろごとゝして、かやうの書に心をうつして、よまむは、あぢきなきわざぞと、難ずる也、

又かゝるよのふることならでは、げになにをか(に歟)、まぎるゝことなきつれ〳〵を、なぐさめまし、

はじめにいひおとしつるは、たはふれにこそ有れ、げに又かやうの古物語ならでは、つれ〳〵なぐさむよしなからんと也、げにとは、物語をめづる人に、同心したる詞也、下ノ心、難じたるに、こたへたる意なり、

さてもこのいつはりどもの中に、げにさもあらむと、あはれを見せ、つき〳〵しくつゞけたるはた、はかなしごとゝしりながら、いたづらに心うごき、らうたげなる姫君の、物思へる、見るにかた心つくかし、

物語は、おほかたつくりごと也とはいへども、其中に、げにさもあるべきことゝ思はれて、作り事とは知りながら、あはれと思はれて、心のうごくと有と也、いたづらにとは、作り物語を見て、心をうごかすは、何のかひなく、いたづらなればいふ、古今集の序に、繪にかけるをうなを見てといへる、是也、らうたげなる姫君の云々は、古物がたりに、さるさまを繪に書たるを見る也、心つくも、心うごくと同じやうの心ばへ也、下ノ心、げにさもあらんと、あはれを見せといへる、これ源氏物語のまなこ也、此物がたりは、しか物のあはれをしらしむることを、むねとかきたるもの也、此事なほおくに別にくはしくいふべし、そも〳〵此物語を、勸善懲惡のため、殊には好色のいましめなどいふは、ひがこと

なること、こゝの詞にても知ルべし、物語を見ては、心うごくことこそあれ、いかでか好色のいましめにはならん、猶おくにくはしくはいふべし、

又いと有ルまじき事かなと見る〳〵、おどろ〳〵しくとりなしけるが、めおどろきて句しづかに又きくたびぞ、にくけれど、ふとをかしきふし、あらはなるなども有べし、

これ又ふる物語にある一種の事也、上のげにさもあらむと云々は、見てあはれに思はるゝ一種の事、これは見るにおどろおどろしく、めづらかにおもはるゝ事也、めおどろきて、ふとをかしきふしとつゞく也、見るといひきくといふは、みづから見ると、人によませてきくとにて、同じこと也、すべてあまりめづらしく、おどろ〳〵しき事は、今一たびしづかに見聞クときは、うるさきもの也、然れども、それも又一ふしの興ぞと也、下ノ心、源氏物語にかける事共を、二くさに分て、その意をのべたり、二くさは、上にいへるげにさもあらむと云々、これ一種にて、よむ人の心を感ぜしめ、ものゝあはれをしらせたり、心うごくといへる、すなはち物のあはれに感ずる也、さてこゝにいへる、おどろおどろしき事、これ一種也、かくて上の一くさぞ、この物語の本意にて、後の一種は、たゞまれに興に書たるのみ也、さる故に、しづかにきくときはにくしといひて、此物語の中に、さるおどろ〳〵しく、めさむるやうの事は、いとまれにのみ有て、たゞあはれを見せたるすぢのみぞおほかる、しかるをよには、たゞあやしくめづらしき事を書たるふみをのみ、好みめでゝ、なだらかにあはれを見せたる事などをば、興なきがと思ふめるは、ものゝこゝろもしらぬ、おれ人なりかし、

此ごろをさなき人の、女房などに時々よまするを、たちきけば

絵物語といふ物、まづははかなきもてあそびなれば、女童べなどの、よむ物にて、うちまかせては、男などの、わざと見べき物にはあらざる故に、かく女房のよむをたちきけばとは、いひなし玉へる也、然れどもまことには、さのみにもあらず、男もつねによめることにて、たれも〳〵ともすれば、古物語を、物のためしにも引出らるゝと、此物語にも、所

所見えたるがごとし、下ノ心、卑下なり、

物よくいふもの〻、世にあるべきかな、そらごとをよくしなれたる口つきよりぞ、いひ出すらむとおぼゆれど、さしもあらじやとのたまへば、

そらごとをはしりながら、げにとおぼえて、心うごき、又あるまじきことゝ思ひながら、ふとおかしく思はるゝやうに、かきなせるは、世には、そらごとをしなれて、巧(タクミ)に偽りをよくいふ者のあるにこそと思ふは、いかにと、問かけたる也、さしもあらじやとは、さは思へども、さもあらぬことにやといふ也、下の心、よむもの〻難ずる也、かくて此こたへの意は、次の詞どもをへだてゝ、下にのべたり、

げにいつはりなれたる人や、さまざまにさもくみ侍らん、たゞいとまことのことゝこそ、思ひ玉へられけれとて、硯をおしやり給へば、

玉葛ノ君の詞也、つねに偽をよくいひなれたる人は、みづからの心ならひに、人のいへることをも、さまざまに疑ひて、偽ならむと、おしはかるべきことぞと也、さてこれを、源氏ノ君のことをさしていへりと注したるは、たがへり、もし源氏ノ君をのたまへるならば、さもくみ給ふらんとこそ有べけれ、侍らんとあれば、たゞ大かたの人にていへる也、たゞいと云々とは、むつかりて、いひはげまし給へる也、硯をおしやり給ふは、上にさみだれ髪のみだるゝもしらで書給ふ、とありしにことよれり、それをおしやるは、むつかり玉へるさま也、

こちなくも聞えおとしけるかな、神代より世にある事を、しるしおきけるなゝり、日本紀などは、たゞかたそばぞかし、これらにこそ、道々しくくはしきことはあらめとて、わらひ玉ふ、

これより又源氏ノ君の詞にて、こゝは、玉かづらの君の、むつかりて、我はみなまことの事と思ひ侍る、と申ッ給ふをうけて、まことに然りと、たはぶれ給ふ詞也、わらひ玉ふといへるにてしるべし、

下ノ心、もしすべて物語を、ひたぶるにほめて、よきさまにのみいひなしたらむには、みづから作れる此源氏物語を、道

道しくくはしく、日本紀などにもまされる物と思へるにこそと、世の人にあざけられんことを、くみはかりて、その難をのがれむために、まづかくいひおく也、

その人のうへとて、ありのまゝにいひいづることこそなけれ、よきもあしきも、よにふる人の有りさまの、見るにもあかず、きくにもあまる事を(の誤)、後の世にも、いひつたへさせまほしきふし〳〵を、心にこめがたくて、いひおきはじめたるなり、

上に、わらひ玉ふといひて、たゞに此文へつゞきたる、うつりあしきやうに聞ゆるは、もし此間に、詞の落たるにやあらん、よしさらずとも、今こゝろみにおぎなはゞ、かやうに聞ゆるは、たはぶれにこそあれ、まことには、などやうの詞あらば、うつりの意たしかなるべし、さてこれより上に、物語をいひおこし玉へるは、みな實の心にはあらず、玉葛ノ君の、此事にいみしう心をいれて、かきよみ玉ふを見て、ことさらにさかひて、あしくいひなし給へる、たはぶれにして、こゝにいたりて、其人のうへとてといふよりぞ、實に物語を論(サダ)め玉へる意には有ける、かくてもろ〳〵の物がたり、さま〴〵なる中に、おほくは作りたる事なるを、こゝは紫式部、此物語つくれる下心を、顯はさむために、かく實に有しことにつきて書る物のやうにいへる也、よきもあしきも云々、すべてよきあしきといへるに、心得あり、下に、よきさまあしきさまなどあるも同じ、此事奥に別にくはしくいふべし、見るにもあかず、聞クにもあまるとは、見る事聞ク事の、そのまゝに心にこめては、過しがたく思はるゝをいふ、すべて世にあらゆる、見る物きく物ふるゝ事の、さま〴〵につけて、うれしとも、おかしとも、あやしとも、をかしとも、おそろしとも、うれたしとも、うしとも、かなしとも、ふかく感ぜられて、いみしと思ふ事は、心のうちにこめてのみは、過しがたくて、かならず人にもかたり、又物にかきあらはしても、見せまほしくおもはるゝものにて、然すれば、こよなく心のさはやぐを、それを聞見る人の、げにと感ずれば、いよ〳〵さはやぐわざなり桐壷ノ巻ニ云ク、くれまどふ心のやみも、たへがたきかたはしをだに、はるくばかりに、聞えまほしう侍るを、わたくしにも、心のどかにまかで給へ、早蕨ノ巻ニ云ク、中納言ノ君、心にあまることをも、又たれ

にかはかたらはむと、おぼしわびて、兵部卿ノ宮の御方にまゐり給へり云々、なげかしき心のうちも、あきらむばかり、かつはなぐさめ、又あはれをもさまし、さま〴〵にかたらひ玉ふ云々、げに心にあまるまで、思ひむすぼゝるゝ事も、すこしづゝかたり聞え玉ふにぞ、こよなくむねのひまあくこゝちし給ふ、宿木ノ巻にいはく、一日うれしく聞侍し心のうちを、例のたゞむすぼゝれながら、過し侍りなば、思ひしるかたはしをだに、いかでかはと、くちをしさに云々、手習ノ巻ニ云ク、おもふことを、人にいひつゞけむことのはゝ、もとよりだに、はか〴〵しからぬ身を、まいてなつかしくことわるべき人さへなければ、たゞ硯にむかひて、思ひあまるをりは、手習をのみぞ、たけきことゝは、かきつけ玉ふ、などあるを以てもしるべし、手習とは、心にうかぶ事を、何となくかきすさむをいふ、「さて此、何事にまれいみしと思ふことの、心にこめて過しがたきすぢは、今の世の、何の深き心もなき、大かたの人にても、同じことにて、たとへば世にめづらしくあやしき事などを、見聞たる時は、わが身にかゝらぬ事にてだに、心のうちに、あやしきことかな、めづらしき事かなと、思ひてのみはやみがたくて、かならずはやく人にかたりきかせまほしく思ふもの也、さるはかたりきかせたりとて、我にも人にも、何のやくもなけれども、然すれば、おのづから心のはるゝは、人の情のおのづからの事にて、哥といふ物のよまるゝもこれ也、」下ノ心、上に、そらごとをよくしなれたる口つきよりぞ云々、といへるは、此物語を難じたる意なるを、これよりして、その答への意にて、紫式部此源氏の物語を作れる本意を、まさしくのべたるものにて、此物語は、まことに皆そらごとにてはあれども、むげにあともなき、すゞろごとにはあらず、其人の事と、正しく名をさして、有りのまゝにこそいはね、みな世ノ中につねにある事共にて、よき事あしき事の、目にあまり耳にあまるを、後の世にもいひつたへまほしく思はるゝが、心のうちにこめて、過しがたき故に、物がたりによせて、其事どもを書るぞ、然ればそらごとながら、そらごとにあらずと知べしと也、然らば、此物語にかける事どもは、みな紫式部がまのあたり、その代に見たる事聞たることを、その人の名をかくして、書たる物かといふに、かならずしもしかまさしく、其人の其事とはなけれど、たゞつねに世ノ中に有て、見聞ノ事の、深く心に感ぜられて、過しがたきすぢを、其人其事を

つくりまうけて、其人に思はせいはせて心をのべたる也、

よきさまにいふとては、よきことのかぎりをえりいで、

作り物語なれば、よくいはむとては、一人のうへに、よの中のあらゆるよき事のかぎりをえりいで、とりあつめて、よきことばかりをいふとなり、　下心、源氏ノ君これにあたれり、そのしわざ心は、さらにもいはず、かほかたちしなくらゐ、身のさかえ、すべて世の中のよきことのかぎりを、此人にとりあつめてかけり、これ物のあはれを深くして、よむ人を、深く感ぜしめんためなり、

人にしたがはむとては、

次の文をもて見るに、こゝはよきさまにいふ反對(ウラ)にて、あしきさまにいふとては、とあるべき所なるを、さはいはで、かくいへること、紫式部ノ心しらひおもしろし、すべて人のあしき事をいひたつるは、よろしからぬとなれば、あしくいはむことにはあらざれども、よの人の、わろしと定むる事をば、その定めにしたがひていふとの意也、人にしたがふとは、我は好まねども、世の人のいふまゝにいふよし也、紅葉賀ノ巻に、人にしたがへば、すこしはやりかなるたはふれごとなど、いひかはして、などあるがごとし、

又あしきさまのめづらしき事を、とりあつめたる、

あしきとは、かならずしも、よのつねの儒佛の書などにいふ、悪行をいへるにはあらず、此事は、おくにくはしくいへり、　下心、末摘花ノ君近江ノ君などのたぐひ、これにあたれり、其外すべてよからぬさまにいへる事は、みな此うち也、さるは人のうへのあしき事をいひたてゝ、そしらむの心ならねど、たゞよまむ人の興に、をり／＼は、あしき事のめづらかなるさまどもをも、書キたりと也、　人にしたがはむとてはといひ、めづらしき事をといへるにて、その意しられたり、さて上にいへる、げにさもあらんとあはれを見せ云々と、おどろ／＼しくとりなしたるが云々との、二種は、すなはちこゝの、よきさまとあしきさまとの二くさにて、上なるは、物語をよみたる心ばへ、こゝはつくれるこゝろばへを

いへる也、かしこと引合せかむかへて、そのよき事のかぎりをいへるは、げにさもあらむとあはれを見せて、よむ人の心を感ぜしめんためなるとをさとるべく、又あしき事の、めづらしきさまなるをいへるは、物語の本意にはあらず、たゞをり〳〵の興のみなるを、上に、めおどろきといひ、しづかにきくたびぞにくけれど、ふとをかしきふしあらはなる、といへるにてしるべし、

みなかた〴〵につけて、此世の外の事ならずかし、

そのよきかたにつけ、あしきかたにつけて、いへる事どもみな、此世になき事にはあらず、つねにある事ども也、

人のみかどの、ざえつくりやうかはれる、

人のみかどは異朝也、ざえは、人の學問也、すべて物語には、學問のとを、ざえといへり、つくりやうは、書の作りざま也、かはれるとは、ざえのかはれると、つくりやうのかはれるとを、一つにいへる也、才ある人のつくれるを見るは、文にかなはず、さてざえのかはり、つくりやうのかはれるは、異國の人の、學問の趣、書の作りやうと、こ この物語のおもむき、作りやうとは、同じからず、いたく異なるをいへり、おほかた異國の書は、ひたすら人の善惡是非を、きびしくこちたく論ひ、物の道理をうがちて、さかしげに、人ごとに、われがしこにいひきそひて、風雅のすぢの詩藻のたぐひといへども、皇國の哥とは、こよなくかはりて、なほ情のおくのくまをばかくして、あらはにはのべず、うはべをつくろひかざりて、とにかくにさかしくつくりなせるを、皇國の物がたりぶみは、世の有さま、人の情のやうを、ありのまゝに書出たる故に、大かた物はかなく、しどけなげなる事のみにて、をゝしくさかしだち、したゝかなるとはなき、これ異國と、つくりやうのかはれるなり、

同じやまとの國のとなれど、むかし今のにかはるなるべし、

なれどを、なればと書る本は誤也、もろこしの書のかはれるのみならず、此同じ皇國の書といへども、昔と今と、作りやうかはれりとなり、なるべしといへるは、しかかはれるゆゑは、むかしと今とのかはりなるべしとの意也、さて

皇國の昔の書こいふは、上にも出たる日本紀などのたぐひをいふべし、そは漢文に書て、事のさまも、物語とはいたくかはれる也、今のこいふは、物語書也、かの日本紀などのふるきにくらぶれば、古物語も、近き世の物なればなり、下心は、今のは、今つくれる此源氏の物がたり也、

ふかきこゝあさきとの、けぢめこそあらめ、

ここは、二つ共に文詞にて、深きこゝは、異國の書、又日本紀のたぐひの、女童などの、たやすく心得がたき、漢文なるをいへり、淺きこゝは、物語書の、つねのことばのまゝに、しどけなくかける、女もじなるをいへり、深き淺きこのみはいはで、ここゝいへるをもて、文詞のさまをいへるとをしるべし、

ひたぶるにそらどゝいひはてむも、ここの心たがひてなむ有ける、

とのこゝろたがふとは、俗言（サトビゴト）に、心得たがひ也こいふほどのとなり、下ノ心、その人のうへとてこいへるより、これまで、上にそらど也こて、難じたる答の意なる故に、かくいひてむすびたり、さて此次は、そらごとゝても、ひたぶるにすてはつるは、心得たがひなりこいふ證（アカシ）に、その例を引る也、

佛のうるはしき心にて、ときおき給へる御法も、方便こいふと有て、

うるはしきは、俗言に、きつこしてたゞしきこいふ意也、佛のたゞしき心よりとき玉へる御法に、そらごとは有まじきとなれども、それにだに、方便こいふとのあゝなれば、ましてたゞ人は、とによりては、なごか方便には、なき事をも、作りいはざらんと也、さて同じことながら、そらごとゝいふこ、方便こいふとは、心ばへかはれり、そらごとは、いはゆる妄語にて、いひてあしき事、方便は、きく人に益あらむためにいふ言也、下ノ心、上にそらどゝいへるは、物語をあしくいひなせる詞なるを、それにこたへて、これはひたすらにそらごとゝいふべきたぐひにはあらず、もろもろのよきとあしき事を、かきあらはして、人に物のあ はれをしらしめんためなれば、佛の方便こいふとのたぐひぞこなり、

さとりなきものは、こゝかしこたがふうたがひをおきつべくなん、

佛說の方便の本意を、さとる智のなき者は、こゝに說ると、かしこに說ると、違ふとのあるを、うたがはむと也、

下心は、たゞ此物語をあしくいふ意のみなり、

方等經の中におほかれど、

方便は、方等部の經どもの中に、殊に多きをいふ、

いひもてゆけば、ひとつむねにあたりて、

方便は、實說とは異なるやうなれども、きはまるところは、一つ意におつるなり、

菩提とぼん惱とのへだゝりなん、此人のよきあしきばかりのことはかはりける、

一つむねとは、即チ此菩提と煩惱とをさしていへり、佛の法は方便さまぐ〵有て、こゝかしこたがふやうのともあれども、きはまるところは、實說も同じことにて、菩提と煩惱との、へだゝる間々のことを說る、一つむねにおつる也、さて、此といふより、右のたとへを、物語へ合せたるにて、此とは、物語書をさしていへる也、人は、物語の中なる人人也、かはりけるとは、物語どもに、人のよきとあしきとの、かはりたるさまを書たるは、かの佛說の、菩提と煩惱とのへだゝりを說キたるがごとしと也、或人とひけらく、然らば、物がたりも、きはまる所は、人のよきあしきをしめせるなれば、これすなはち勸善懲惡にて、漢文の書どもと同じきを、物語は、儒佛の書と、趣いたく異なりといふはいかゞ、答ふ、上にいへるごとく、物語にいふよしあしきは、儒佛の書にいふ、善惡是非とは、同じからざるとおほき故に、そのおもむきいたくことなる也、下心も、表のごとし、

よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、

よくいへば云々とは、物語をば、はかなき無益（ムヤウ）の物のごとく思へども、よくとりなして、ことわりをつくれば、さはあらずとの意也、わざとの事とは、はかなきすさび事にはあらで、せではかなはぬ事をいふ、物語は、女童のもてあそ

び物にて、はかなきすさびなるを、今かく源氏ノ君の、よまではかなはぬ物のやうに、いひなし給ふこ也、　下心、物語をこいふより、紫式部が心しらひにて、上ノ件のごとく、此源氏の物がたりを、よしありげには申せれども、まことは、はかなきあだことなりこ、卑下したる意にて、筆をとゞめたる也、文の意をよくあぢはひさとるべし、さて上にもつぎつぎいへるごとく、螢ノ巻の此段は、下の心に、此物語をつくられる心ばへをのべたる物にて、一部の大むねなるを、一部のはじめにもかゝず、終りにもかゝで、たゞかく何となきところに、それとしもあらず、なだらかに書あらはせるさま、いとめでたし、さて昔より、此段の注釋ども、たゞ一わたり、うはべをのみときて、つくりぬしの下の心あらはれず、又すべて誤れることども、多かる中に、佛說にたとへていへるところの注釋ども、たゞかの經文のうへの意ばかりを、とどりく注して、こゝに引出たるたとへの意にあたれるは、一つもなし、そもそも此段のこゝろ、明らかならざれば、源氏ノ物語一部のむね、明らかならず、これによりて、今いさゝかその注釋どもの、誤をもさとさむとす、まづ佛のうるはしき心といへるを、經文を引て、ことごとしく佛のうへにつきて、注せられたる、皆あたらぬこ也、うるはしこいふ詞は、物がたりには、たゞ俗にきつとしてたゞしきといふ意にこそいひたれ、其外に何の深き意あらむ、又方便の事、法華を眞實として、餘の爾前の諸經をば、皆方便とするは、法華宗の意は、さることなれども、それによりて、こゝに引出たる方便といふことを、小乘と見たるは、いみじきひがこと也、こゝに方便といへるは、たゞ何れの經にもあれ、衆生をすくはむがために、まうけて說たる方便也、大小乘四教五時のさだは、こゝには無用のことにて、さらにかなはず、又さとりなき者といへるは、佛の在世に、その會座にありて、說法を聞たる人ども、事をとりて、いへるにはあれども、こゝの意は、たゞ末の世に、佛經を見聞ク人のうへにいへる也、べくといへる辭にてしるべし、又いひもてゆけば、ひとつむねにあたりてといへるを、或は五時の教、ことごとく法華一實に歸すと注し、或は畢竟皆空、或は萬法一如などと釋したる、みなこゝにはさらにあたらぬこ也、又菩提と煩惱とのへだゝりといへるところに、龍女成佛の事などを引出て、煩惱菩提差別なきことをいはれたるは、へだゝりとあると、表裏(ウラウヘ)のたがひにて、いみじきひがことな

り、此菩提と煩惱とのへだゝりといへるは、物語にいへる人々の、よきとあしきとにたとへたるものなるを、差別なしとしては、人も、よきあしき差別なしといふ意におつるものをや、すべてこゝの文の意をもたどらずして、たゞかの經文のうへをのみ、いみしげにとかれたるは、いとみだりなることかし、又紫式部は、天台の許可をうけて、宗旨をきはめたれば、こと〴〵く天台の法文をもて書りとあるも、いと心得ず、式部をみだりにほめあげむとして、中々に其意にそむけるもの也、かの人の心は、女の學問だてをし、さかしだちたることをば、いみしくにくみはぢたると、卷卷にその意見え、みづからの日記にも、しば〳〵いへるものを、いかでかさるしたゝかなることをば物せむ、ここにこゝは、源氏ノ君の、玉蔓ノ君へかたり給ふ、ものがたりなるに、さるわかき媛君にむかひて、いかでか佛法のこと〴〵しき奥旨などをば、引出語り給はむ、此物語に、すべてさやうの、につかはしからざることをば、かゝざるをや、

○上の作者ノ巻を引出たる文の中に、よきもあしきも、よにふる人の云々、よきさまにいふとては、よきとのかぎりをえりいで、人にしたがはむとては、あしきさまの云々、人のよきあしき云々など、此外もすべて、物語にいへるよきあしきは、よのつねの儒佛などの書にいふ善惡とは、同じからざることあり、されば物語にいへるよきあしきを、ひたぶるに儒佛の善惡とのみ心得ては、たがふふしおほかるべし、まづすべてよきあしきは、萬のうへにひろくわたれることにて、人のうへにつきても、必しも心しわざのみならず、しなくらゐにも、よきあしき有て、尊きをよしとし、賤きをわろしとす、即チ物語にも、位の高き人を、よき人といへり、俗言にも、家がらのよき、格のよきわろきなどいふこれ也、又かほかたちにも、よきあしきあることいふもさらなり、又命長く、富榮え、物を得る事などは、皆よき事也、命みじかく、まづしく、衰へ、物をうしなふなど、其外病災ヒなど、みなあしき事也、さて又人のうへのみならず、衣服調度家居などをはじめ、萬のうへに、おの〳〵皆よきとあしきとは有て、かならず人の心しわざのみにはかぎらず、又物により事により、時にしたがひて、よしあしのかはることも有リ、たとへば矢さきは、物をよくとほすをよしとし、甲冑は、とほさぬをよしとし、夏のあつき日には、ひやゝかなるをよしとし、冬の寒き時には、熱きものをよしとし、夜ル道ゆく人は、闇をわろしと

し、形をしのぶものは、月夜をわろしとするたぐひ、何事にも有ルわざ也、されば人の心しわざのよきわろきも、さばかりうらうへのたがひこそあらざゝめれ、道々にしたがひて、かはれることの有て、儒の道によしとする事の、佛の道には、わろしとし、佛の道によしとする事の、儒の道には、わろしとするたぐひも有て、一ヤウならざるがごとく、物語書にても、又よしとしわろしとする事の中に、よのつねの儒佛の善悪とは、かはれることもあるぞかし、然らば物語にて、人の心しわざのよきあしきは、いかなるぞといふに、大かた物のあはれをしり、なさけ有て、よの中の人の情にかなへるを、よしとし、物のあはれをしらず、なさけなくて、よの人のこゝろにかなはざるを、わろしとはせり、かくいへば、儒佛などの道の善悪と、いとしも異(コト)なるけぢめなきがごとくなれども、こまかにいはむには、世の人の情にかなふとかなはざることの中にも、儒佛の善悪とは、合ハざることもおほく、又すべてよしあしを論(サダ)むることも、たゞなだらかにやはらびて、儒者などの議論のやうに、ひたぶるにせまりたることはなし、さて物語は、物のあはれをしるを、むねとはしたるに、そのすぢにいたりては、儒佛の教へには、そむける事もおほきぞかし、そはまづ人の情(コヽロ)の、物に感ずる事には、善悪邪正さまぐ\ある中に、ことわりにたがへる事には、感ずまじきわざなれども、情(コヽロ)は、我ながらわが心にもまかせぬことありて、おのづからしのびがたきふし有て、感ずることあるもの也、源氏ノ君のうへにていはゞ、空蟬ノ君朧月夜ノ君藤つぼの中宮などに心をかけて、逢給へるは、儒佛などの道にていはむには、よにうへもなき、いみしき不義悪行なれば、ほかにいかばかりのよき事あらむにても、よき人とはいひがたかるべきに、その不義悪行なるよしをば、さしもたてゝはいはずして、たゞそのあひだの、もののあはれのふかきかたを、かへすぐ\書のべて、源氏ノ君をば、むねとよき人の本(ホン)として、よき事のかぎりを、此君のうへに、とりあつめたる、これ物語の大むねにして、そのよきあしきは、儒佛などの書の善悪と、かはりあるけぢめ也、さりとて、かのたぐひの不義を、よしとするにはあらず、そのあしきことは、今さらいはでもしるく、さるたぐひの罪を論ずることは、おのづからそのかたの書どもの、よにこゝらあれば、物どほき物語をまつべきにあらず、物語は、儒佛などの、したゝかなる道のやうに、まよひをはなれて、さとりに入べきのりにもあらず、又國をも家をも身

をも、をさむべきをしへにもあらず、たゞよの中のものがたりなるがゆゑに、さるすぢの善悪の論は、しばらくさしおきて、さしもかゝはらず、たゞ物のあはれをしれるかたのよきを、とりたてゝよしとはしたる也、此こゝろばへを、物にたとへていはゞ、蓮をうゑてめでむとする人の、濁りてきたなくはあれども、泥水(ヒヂミヅ)をたくはふるがごとし、物語に不義なる戀を書るも、そのにごれる泥を、めでゝにはあらず、物のあはれの花をさかせん料ぞかし、源氏ノ君のふるまひは、泥水よりおひ出たる蓮の花の、よにめでたく咲きにほへるたぐひとして、その水のにごれることをば、さしもいはず、たゞなさけ深く、ものゝあはれをしれるかたを、とりたてゝ、よき人の本(ホン)にしたること、今いはむもさらなれど、猶ひとつふたついはゞ、須磨ノ巻に、かの浦へ下り給ふことを、世ゆすりてをしみ聞え、下にはおほやけをそしり奉る、明石ノ巻に、そのとし、おほやけに物のさとししきりて、ものさわがしき事おほかり、三月十三日、神なりひらめき、雨風さわがしき夜云云、又こぞより、后も御物の氣になやみ給ひ、さま〴〵のものゝさとししきり、さわがしきを云々、又御目のなやみさへ、此ごろおもくならせ給ひて云々、蓬生ノ巻に、ゆるされ玉ひて、都へかへり給ふと、天の下のよろこびにて、立さわぐ、眞木柱ノ巻に、世にたんつけられ給はぬおとゞを云々、などあるがごとし、此明石ノ巻の文どもを見れば、神も、此君をあはれみ給へる也、もし儒佛の意にていはむには、さるいみしき不義のふるまひある人を、神も佛も天も、かくあはれみ給へるさまには、いかでか書クべき、又女にてよき人のためしにいへるは、藤壺ノ中宮紫ノ上朝兒ノ齋院などなる、其中に、かの中宮の御事は、薄雲ノ巻にも、かしこき御身のほど、きこゆる中にも、御心ばへなどの、世のためにも、あまねくあはれにおはしまして、がうけにことよせて、人のうれへとある事なども、おのづからうちまじるを、いさゝかもさやうなることのみだれなく、人のつかうまつる事をも、よのくるしびと有べきことをば、とゞめ給ふ云々、何ことわくまじき、山ぶしなどまで、をしみ聞ゆ、をさめ奉るにも、世ノ中ひゞきて、かなしと思はぬ人なし、などほめ聞えたる、これ又儒佛などの意と、ひとしからむには、かゝるよき人の御うへに、源氏ノ君にあひ給へるやうの、不義の事を書クべきにあらず、又さる不義ある御方をしも、よき人のためしにいふべきにあらず、おほかたこれらにて、物がたりのよきあしきは、儒佛などの

善悪と、ことなるとあるほどを、さとるべく、又おくに引出たる、柏木ノ君の事などをも、思ひわたして、とにかくに物のあはれをなむ、ゝねとはたてたることをしるべき也、然るによゝの物しり人たちみな、ひたぶるに儒佛の道々しくさかしく、したゝかなるをしへのふみのこゝろにのみかゝづらひ、思ひいひ、あらぬすぢを引かけて、物語といふものゝおもむきをば、たづねむものとも思ひたらず、物のあはれといふことに、心のつきたる人のなきは、いかにぞや、ものゝあはれといふことの、くはしきさまは、つぎの巻にぞいふべき、

源氏物語玉の小櫛二の巻

なほおほむね

物のあはれをしるといふ事、まづすべてあはれといふはもと、見るものきく物ふるゝ事に、心の感じて出る、歎息の聲にて、今の俗言にも、あゝといひ、はれといふ是也、たとへば月花を見て感じて、あゝ見ごとな花ぢや、はれよい月かななどいふ、あはれといふは、このあゝとはれとの重なりたる物にて、漢文に嗚呼などあるもじを、あゝとよむもこれ也、古言に、あな又あやなどいへるあも同じ、又はやともはもともいへるはも、かのはれのはと同じ、又後の言に、あつはれといふも、あ、はれと感ずる詞にて、同じ事也、さて後の世には、あはれのはもじを、音便にてわといへども、古へはすべてかやうのこころもみな、本の音のまゝに、はもじは、葉歯などの如くとなへしなり、殊に此あはれといふ言は、歎く聲にて、あゝとはれとの重なりたるなればさら也、古語拾遺に、あはれを言天晴也といへるは、いみしきひがことなれども、これにても、そのかみはれを晴のごとくとなへしことをしるべし、かくていにしへの哥に、あはれとよめるは、「ひとつ松あはれ、「あはれその鳥、「あはれいくよのやどなれや、「あはれむかしへ有りきてふ、などのたぐひは、感じて直に、あゝはれと歎きたるまゝをいへるにて、此詞の本也、「あはれ〳〵となげきあまり、「あはれあなうと過しつるかな、などのたぐひも同じ、「あはれてふ言をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらんといふ哥も、人の花を見て感じて、あゝはれといふ詞を、其花の心に、ほかのあまたの花には、分ヶやらずして、おのれひとり、然いはれむと思ひてや、他の花の皆ちりて後に、ひとりおくれては咲ぬらんとよめる也、これらをもて、まづあはれといふ詞の本をしるべし、さて又あはれと見るあはれときく、あはれと思ふなどいふたぐひは、いさゝか轉じたるいひざまにて、これはあゝはれと感じて、見聞思ふ也、又あはれなりといふたぐひは、あゝはれと感ぜらるゝよし也、又あはれをしる、あはれを見す、あはれにたへず、などいふ類は、すべて何事にまれ、あゝはれと感ぜらるゝさまを名づけて、あはれといふ物に

していへるにて、かならずあゝはれと感ずべき事にあたりては、その感ずべきこゝろばへをわきまへしりて、感ずるを、あはれをしるとはいふ也、又物をあはれむといふ言も、もとあゝはれと感ずること也、古今集ノ序に、霞をあはれび、こあるなどをもてしるべし、又後の世には、あはれといふに、哀の字を書て、たゞ悲哀の意とのみ思ふめれど、あはれは、悲哀にはかぎらず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべてあゝはれと思はるゝは、みなあはれ也、されば あはれにおかしくとも、あはれにうれしくとも、つらねていへり、そはおかしきにもうれしきにも、あはれと感じたるを、あはれにとはいへる也、但し又、おかしきうれしきなどゝ、あはれとを、對へていへることも多かるは、人の情のさま〴〵に感ずる中に、うれしきことおもしろき事などには、感ずること深からず、たゞかなしき事うきこと、戀しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることこよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわきても、あはれといへるなり、俗に悲哀をのみいふも、その心ばへ也、たとへば若菜ノ巻に、梅の花を、花のさかりにならべて見ばや、といへることあるがごとし、梅の花も花なれども、それにむかへても、櫻をとり分て花といへり、さて又物に感ずとは、俗にはたゞよき事にのみいふめれども、これも然らず、字書にも、感は動也といひて、心のうごくことなれば、よき事にまれあしき事にまれ、心の動きて、あゝはれと思はるゝは、みな感ずるにて、あはれといふ詞に、よくあたれるもじ也、漢文に感(セシム)鬼神と有て、古今集の眞名序にも、然書れたるを、かな序には、おに神をもあはれと思はせ、とかゝれたるにて、あはれは、物に感ずることなるをしるべし、大かたあはれといふ言の本、又うつりてつかひたるやうなど、上ノ件にて心得べし、かくて又物のあはれといふも、同じことにて、物といふは、言(イフ)を物いふ、かたるを物語、又物まうで物見物いみ、などいふたぐひの物にて、ひろくいふときに、添ることばなり、さて人は、何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきこゝろをしりて、感ずるを、ものゝあはれをしるとはいふを、かならず感ずべき事にふれても、心うごかず、感ずることなきを、物のあはれしらずといひ、心なき人とはいふ也、ものゝわきまへ心ある人は、感ずべきことには、おのづから感ぜてはえあらぬわざなるに、さもあらぬは、何ともおもひわくかたなくて、かならず感ずべきこ

ころをしらねばぞかし、後撰集に、あるこころにて、すのまへに、かれこれ物がたりし侍けるを、きゝて、内より、女のこゑにて、あやしうものゝあはれしりがほなるおきなかな、といふをきゝて、貫之、「あはれてふ言(コト)にしるしはなけれども、いはではえこそあらぬものなれ、此哥の意、あゝはれといひて、歎きたりとて、そのかひはなけれども、感ずべき事にふれては、たへがたくて、しか歎息(ナゲ)かではえあらぬものぞと也、物のあはれをしれる人は、何につけても、かくのごとし、さて人の心の、物に感ずるとは、上にもいへるごとく、さま〴〵なるを、此物語は、殊に人の感ずべきことのかぎりを、さま〴〵かきあらはして、あはれを見せたるものなり、まづおほやけわたくし、おもしろくめでたく、いかめしき事のかぎりをかき、又春夏秋冬をり〳〵の、花鳥月雪のたぐひを、おかしきさまに書あらはせるなど、これみな人の心をうごかし、あはれと思はする物にて、心に思ふ事ある時は、殊に空のけしき木草の色も、あはれをもよほすくさはひとなるわざ也、桐つぼの巻にいはく、風の音むしのねにつけても、物のみかなしうおぼさるゝに、帚木ノ巻ニ云ク、何心なき空のけしきも、たゞ見る人から、えんにもすごくも見ゆるなりけり、葵ノ巻ニ云ク、朝ぼらけの霧わたれるに云々、人の世を云々、たゞ今の空に、思ひ玉へあまりてなむと有、又、風あらゝかにふき、時雨さとしたるほど云々、あさがほの宮に、けふのあはれは、さりとも見しり給ふらむと、おしはからるゝ御心ばへなれば云々、松風ノ巻ニ云ク、秋のころほひなれば、物のあはれとりかさねたるこゝちして、朝兒ノ巻にいはく、木ノ葉の音なひにつけても、過にしものゝあはれとりかへしつゝ、そのをり〳〵、おかしくもあはれにも、深く見え玉ひし御心ばへなども思ひ出聞えさす、蜻蛉ノ巻ニ云、ものゝせちにおぼゆる時は、いとかゝらぬことにつけてだに、空とぶ鳥の鳴わたるにも、もよほされてこそかなしけれ、などあるがごとし、又人のかほかたちのよきに感ずるとは、桐壷ノ巻ニ云ク、いみしきものゝふ、あたかたきなりとも、見てはうちゑまれぬべきさまのしたまへれば云々、帚木ノ巻云、おに神も、あらだつまじき御けはひなれば、はしたなく、こゝに人とも、えのゝしらず、夕かほの巻ニ云、ましてさりぬべきついでの御言の葉も、なつかしき御けしきを見奉る人の、すこし物の心を思ひしるは、いかゞはおろかに思ひ聞えむ、紅葉賀ノ巻ニ云、めもあやなりし御さまかたちに、見給ひしのばれずや有けん、又、青海波のかゞ

やき出たるさま云々、空のけしきさへ、見しりがほなるに、又、物見しるまじき下人などさへ、すこし物のこゝろしるは、涙おとしけり、須磨ノ巻ニ云、入ッかたの月、いとあかきに、いとどなまめかしうきよらにて、物をおぼいたるさま、ことおほかみだにも、なきぬべし、夕霧ノ巻ニ云、いとめでたくきよらに、此ごろこそねびまさり給へる、御さかりなめれ、さるさまのすきごとをし玉ふとも、人のもどくべきさまもし給はず、おに神も、つみゆるしつべく云々、浮舟ノ巻ニ云、いみしきあたを、おにゝつくりたりとも、おろかに見すつまじき、人の御さまなり、などあるを思ふべし、人のかたちのよきに感ずることなきは、とらおほかみにもおとれる心也、又人の品位に感ずるとも、巻々に多く見えたり、さるは勢ひあり、富る人に、ことさらにへつらひ、つゐしようするすぢとは、ことにして、其人のほどにつきて、おのづからやむとえず、しのびがたきすぢある物ぞかし、空蟬ノ君の、しひて思ひしらぬかほに見けつも、いかにほどしらぬやうにおぼすらむと、むねいたく云々、とあるたぐひにて、これ源氏ノ君のしなくらゐに感じたるより思へる也、須磨ノ巻にいはく、きんの聲、風につきてはるかにきこゆるに、ところのさま、人の御ほど、物のねの心ぼそさ、とりあつめ、心あるかぎり皆なきにけりとある、これさまざまの感ずべき事どもを、とりあつめたる故に、みな泣也、然るを心あるかぎりとはいへるは、かく感ずべきことをとりあつめても、心なく、物のあはれをしらぬ人は、何とも思はず、感ずることなき也、上に引出たる巻巻に、すこしものゝ心をおもひしるは、などあるをも、おもひあはすべし、さてもものゝあはれをしらぬを、あしきことにしたるは、桐壺ノ巻ニ云、風の音虫のねにつけても、物のみかなしうおぼさるゝに、弘徽殿には、久しううへの御つぼねにもまうのぼり給はず、月のおもしろきに、夜ふくるまで、あそびをぞし給ふなる、いとおしたち、かどかどしきところものし玉ふ御方にて、事にもあらず、おぼしけちて、もてなし給ふなるべし、此ごろの御けしきを見奉るうへ人女房などは、かたはらいたしと聞けり、

物のあはれをしらぬ人のやう、かくぞ有ける、帝は、風のおと虫の音にも、ものをかなしくおぼしめすころしも、心あらむ人は、月をおもしろしとは見給ひなんや、まして御あそびなどし玉ひなんや、すべて月は、見る人から、とんにもす

ごくもこいへるごくなるに、こゝに月のおもしろきにこは、こきでんの御心をもて書る也、ここにもあらず、おぼしけちてこは、帝のかなしみ給ふを、事こもし給はぬ也、此ごろの御けしきこは、みかごのかなしみ玉ふみけしきをいふ也、

榊ノ巻ニ云、院のおはしまいつる世こそ、はゞかり給ひつれ、后の御心いちはやくて、かたぐ\おぼしつめたるとゞもの、むくいせむこ、おぼすべかめり、又老もておはするまゝに、さがなさもまさりて、院も、くらべくるしく、たへがたくぞ思ひきこえさせ玉ひけるこあるも、こきでんの御后の御事也、同巻に、源氏ノ君こ朧月夜ノ君この事を、此大后又父大臣の、いみしくあしくのたまへるこころに、父大臣の御事を、いこきふにさがなくおはしますこいひ、子ながらも、はづかしこおぼすらむかしこ、さばかりの人は、おぼしはゞかるべきぞかし、されごいこきふに、のごめたるこころおはせぬおこごの、おぼしもまはさずなりてこいひ、思ひのまゝに、こめたる所おはせぬ本上に、いこゞおいの御ひがみさへそひ玉ひにたれば云々、又眞木柱ノ巻ニ云、此大北ノ方ぞ、さがなものなりける、下ノ若菜ノ巻ニ云、大北ノ方こいふさがなもの云々、これらは、紫ノ上のまゝ母の事也、そもぐ\此物語のあるやう、源氏君の不義の事をばおきて、さしもあしきさまにもいはず、たゞ源氏ノ君のかたさまに、心よからず、あしくあたれる人をば、みな物のあはれしらず、あしき人こしたるこ、上の件のごこし、そは源氏ノ君を、ものゝあはれしりて、よき人こするが故也、もしよのつねの論のごく、儒の道などのこゝろばへをもていはむには、藤つぼの中宮などをこそは、弘徽殿ノ大后よりも、あしき人にいふべきを、それをば、よにすぐれて、よき人のほんにいひて、不義などはおはしまさぬ、こきでんなごをしも、かくいみしくあしき人にいへるは、物語は、物のあはれをしれるかたを、むねこゝりて、よきとゝすればぞかし、夕霧ノ君こ雲ゐの鴈ノ君この事を、雲居鴈ノ君の御父大臣の、きびしくせいしいさめ給へるさまを、あまり心なきとのやうにいひて、夕霧ノ君雲居鴈ノ君をば、あしきさまにもいはざる、これはたよのつねの論ならば、父大臣のいさめは、さるべき事にて、夕霧君こ雲居鴈ノ君こは、罪あるをや、すべて物のあはれをしるこしらざるこをもて、よきあしきをわかてるおもむき、巻々をよみて、おのづからもささ

るべき也、これはよし、これはわろしと、たしかにことわらねども、そのいひざまにて、よしとしわろしとしたるけぢめは、しるきぞかし、さて又法師を、物のあはれしらぬものにいへるとあり、柏木ノ巻ニ云ク、なほあはれとおぼせと聞えたまへば、かゝるさまの人は、ものゝあはれもしらぬものとこそ聞しを、ましてもとよりしらぬことにて云々、

これは女三ノ宮の、かざりおろし給へる後の事にて、源氏ノ君の、出家はし玉ひつれども、なほわが心ざしをば、あはれとおぼせと聞え玉へば、宮の御答へに、すべてかく出家したる人は、物のあはれはしらぬ物也と聞侍るを、まして我は、もとより物のあはれはしらぬ、いふかひなき身なれば、何とかは御いらへは聞えさせんと也、これ法師は、ものゝあはれしらぬものに、いひならへるによりてなり、

そも／＼かくほうしを、ものゝあはれしらぬものにいふなるよしは、先ッ佛の道は、はなれがたき父母妻子の恩愛を、きよくふりすて、をしき身の形をやつし、家をもたからをもすてゝ、山林にこもり、魚肉の味と聲色の樂ミをたちなど、すべて人の情の、しのびがたきかぎりなれば、心よわく物のあはれをしりては、おこなひがたきすぢなれば、しひて心づよく、あはれしらぬものになりて、おこなふ道也、又人をすゝめみちびくにも、此世のものゝあはれを思ひ、心よわくては、物しがたし、そはしばしあはれしらぬやうなれど、長きよの闇にまどはむ事を、あはれみてのをしへなれば、其道よりいへば、まことは物のあはれを深くしれる也、儒のをしへなども、その心ばへは、同じことぞかし、椎が本ノ巻に、阿闍梨の、あまりさかしきひじり心を、にくゝつらしとなんおぼしけるとある、これ宇治ノ八ノ宮の、かくれ給へるほど、その姫君たちの、いみしくかなしくおぼせるに、阿闍梨の、佛の道の意をもて、執着の心をはなれしめむとて、親子のあはれをかへりみず、つれなきさまに聞えしらするを、あまり心づよく、にくゝつらしとおぼせるにて、ほうしの物のあはれしらぬといふは、大かたかやうなる故也、又ひじりごゝろなる僧は、世中の事に、うとき物なれば、まことにしらぬかたも有べき也、さて又すべて、物のあはれをしりがほをつくりて、なさけを見せむとするをば、いたくあしきことゝしたり、さるたぐひは、まことにあはれをしるにはあらで、うはべのつくろひごとにて、いとうるさきわざなれば也、帚木ノ巻ニ云、

すべて男も女も、わろものは、わづかにしれるかたの事を、のこりなく見せつくさむと思へるこそいとほしけれ云々、萬の事に、などかはさしもとおぼゆるをりからとき〲、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみなさけだゝざらむなん、めやすかるべき、すべて心にしれらむ事をも、しらずがほにもてなし、いはまほしからむ事をも、一つ二つのふしは、過すべくなむあべかりける、胡蝶ノ巻ニ云、すべて女の、物づゝみせず、心のまゝに物のあはれもしりがほつくり、おかしき事をも見しらむ、そのつもり、あぢきなるべきを云々、などいへるこれ也、かの木枯の女のやうに、あだなる人に、此たぐひおほし、すべてけしきだつ、よしばむ、なさけだつなどいへるたぐひは、うはべをつくりて、見せむとするもの也、さて又物のあはれをしり過すといふを、あしき事にしたるも、ものゝあはれをしる事の深きを、過たりといふにはあらず、過つとは、さしもあるまじき事にも、よろづにあはれをしりがほなるふるまひの過て、あるは人にもなびきやすに、あだなるなどをいふ也、さればよきほどにといへるも、しりがほの過たるを、わろしとしていへるにて、深くしるをわろしとにはあらず、薄雲ノ巻ニ云、女御は、秋のあはれをしりがほにいらへ聞えてけるも、くやしくはづかしと云々、

女御は、秋好中宮也、これは、春と秋とは、いづれにか心よせたまふと、源氏ノ君のとひ聞え玉へるに、げにいつとなきなかに、あやしと聞し夕へこそ、といらへ玉へる事をおぼせる也、

同巻ニ云、ことしはかならずのがるまじき年と、思ひ給へつれど、おどろ〲しきことゝちにも侍らざりつれば、命のかぎりしりがほに侍らんも、人やうたてこと〲しう思はむと、はゞかりてなん云々、

これも同じ心ばへにて、みづからの命のかぎりをしりがほにいふ事をだに、はぢ玉へる、紫ノ上の詞也、

御法ノ巻ニ云うへは、御心のうちに、おぼしめぐらす事おほかれど、さかしげに、なからむ後など、のたまひいづることともなし、

これも同じうへの、わがなからん後は、云々(シカく)、などいふ事を、さかしげなる事として、はぢ給へるなり、

これらを思ふべし、女はよき人は、かばかりの事をだに、はづかしくおぼしたる也、ましてあはれしりがほをつくり

て、見せむとするをや、かくて女の中に、よきためしにいへる、此ノ紫ノ上の心ばへを考ふるに、螢ノ巻に、繪物語の事をいへるところにいはく、うへ、心あさげなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ、

うへは紫ノ上にて、そのゝたまふ詞也、人まねとは、物語どもの事也、よの人のうへを、まねびて書る故にいへり、心淺きは、あだ〳〵しき女のありさま也、かたはらいたきは、俗言にせうしなるといふ意也、見るにもといへるにて、まして現にさやうならん女をば、かたはらいたくおぼせるほど、しられたり、

うつほの藤原ノ君のむすめこそ、いとおもりかに、はか〴〵しき人にて、あやまちなかッめれど、すくよかに、いひ出たるしわざ、さも女しきところなかッめるぞ、ひとやうなめるとのたまへば、

すくよかは、やはらびなまめかしきことのなきさま也、女しきは、女らしき也、ひとやうは、一偏にかたよれる也、此人は、うつほ物語にありて、其事花鳥餘情に、要をつみてしるし給へり、くはしき事は、かの物語を見てしるべし、此人は、かの心淺げなるといへるを、うらうへにて、多くの人々のけさうを、聞いれず、つれなかりしかば、其人人いたく恨みて、死けるなども有しかど、いさゝかもあはれとも思はざりし人なり、かやうの女は、よのつねの儒者などの論にては、貞烈也と、ほむべきさまなるを、一偏也といへり、末摘花ノ巻に、つれなく心づよきは、たとしへなくなさけおくるゝまめやかさなど、あまり物のほどしらぬやうに云々、とあるたぐひ也、

かくて此紫ノ上の詞をうけてのたまへる、源氏君の詞にいはく、うつゝの人も、さぞ有べかッめる、人々しくたてたるおもむきことにて、よきほどにかまへぬや、

うつゝの人とは、古物語にある人に對へて、現在の人をいふ、さぞは、さやうにぞ也、人々しく云々は、かの藤原ノ君の女のやうに、人がましく、みさをゝたてたるとの、世の人に異なるをいふ、よきほどにかまへぬや、といひすてたるは、紫ノ上のゝたまへることを、諾なひて、まことに一トやうなるべし、といふ意をふくめたる也、帚木ノ巻ニ云、君は、人一人の御ありさまを、心のうちに思ひつゞけ玉ふ、これはたらず、又さし過たる事なく物し給ひけるかなと、ありが

たきにも云々、

よしなからおやの、心こゝろあておふしたてたる人の、このかしこきをいけるしるしにて、おくれたることおほかるは、何わざをして、かしづきしぞと、おやのしわざとへおもひやらるゝこそ、いとくちをしけれ、

おくれたることおほかるとは、言葉などまでにいたるべけれど、上は物のあはれしらぬといつゞきなれば、物のあはれをしるとの、おくれたるを、むねとしていへる也、文に引る詞は帚木ノ巻の詞にてもしるべし、

げにといへど、その人のけはひよしと見えたるは、かひありて、おもだゝしかし、

げにといへど云々は、俗言に、なるほどどうでも、其人のむすめほどありてといふ意也、かひ有とは、親の心とゞめて、おほしたてたるかひの有なりおもだゝしは、親の面目なる也、

夕霧ノ巻に、夕霧ノ大将と、女二ノ宮との間の事を問給ひて、源氏ノ君の、紫ノ上に、我なからむ後には、君の御心も、うしろめたしといふことを、のたまへる時に、紫ノ上の思ひ玉へる心を書ていはく、女ばかり、身をもてなすさまの、ところせう、あはれなるべき物はなし、

女はど、身をもつことのむつかしく、物のあはれなるとの有べき物はなしと也、さるゆゑは、物のあはれを見しりたる心のごとくふるまへば、さるまじき折ふしいでくれば、思ふとの、心にむすぼゝれがちなる故に、ものゝあはれなるとの、殊に多き也、此詞心をつくべし、

ものゝあはれをも、をかしき事をも、見しらぬさまに、引いりしづみなどすれば、なにゝつけてか、世にふるはえ〴〵しさも、つねなきよのつれ〴〵をも、なぐさむべきぞは、

見しらぬさまに引入りしづむとは、女といふもの、心に感ずる事有ても、物のせちにあはれなるをりも、黙はしてそのさまを見すれば、かいしりがほつくり、物のあはれしり過すといふかたにおもむくを、はゞかりつゝむほどに、えあらはさず、しりても、しらぬさまに、忍びこめてすぐす故に、いとゞ心のうちにむすぼゝれて、あはれは深きとこれぞこの、

身をもてなすとのこころせく、あはれなるよしなりける、さてさやうにては、何につけてかは、世にふるはえ〲しさもあらん、又なにゝつけてかは、つれ〲をもなぐさめむと也、さてつねなき世としもいへるは、此世は常なくて、いくほどもあらぬ命のほどなるに、心のなぐさむわざなくては、くいをもかゝるべしとの意にていへるなるべし、然らざれば、つねなきといふ言、いたづら也、さて物のあはれを顯はして見すといふは、末摘花ノ巻に云、さやうなるすまひする人は、物思ひしりたるけしき、はかなき木草、空のけしきにつけても、とりなしなどして、心ばせおしはからるゝをりをりあらむこそ、あはれなるべけれ、とあるやうに、ものゝあはれなる時は、木草などによせて、哥にもよみ、ふみにも書て、おくるたぐひにて、心のあはれを、人に見せて、なぐさむる也、又蓬生ノ巻に云、わざとこのましからねど、おのづから、いそぐことなきほどは、同じ心なるふみかよはしなどもうちしてこそ、わかき人は、木草につけても、心をなぐさめ玉ふべけれとある、これ又わかき女などの、よるべなく心ぼそきすまひする人の事をいへり、わざとこのましからねどゝは、木草につけたる、文通はしなどを、わざと好みてするは、かのものゝあはれしりがほつくるすぢにて、好ましからぬをいへり、さる故に、おのづからといへり、わざと好みてはせねどの意也、おほかた物のこゝろをしらず、いふかひなきものにならひたらんも、おふしたてけむおやも、いとくちをしかるべき物にはあらずや、

もの丶こゝろをしるは、すなはち物のあはれをしる也、それしらぬを、いふかひなきものといへり、心をつくべし、上に引る螢ノ巻に、おくれたるとおほかることあるを、ものゝあはれをしらぬを、むねといへりといへると、こゝに思ひ合すべし、

心にのみこめて、無言太子とか、ほうしばらの、かなしき事にする、むかしのたとひのやうに、あしきことよきことを、おもひしりながら、うづもれなんも、いふかひなし、

無言太子の事、河海抄に注せられたり、あしき事よき事は、上にくはしくいへる、よきあしき也、そを見しりわきま

ふるぞ、物のこゝろをしれるにて、ものゝあはれをしれるなりける、うづもれなむもいふかひなしとは、上に見しらぬさまに引入りしづみ、といへるこれ也、此こころ、紫式部、此物がたりを作れる本意をもこめたるべし、此物語は、紫式部が、世の中のよき事あしき事を、見しりたるを、心にこめて、うづもれむがいふかひなさに、かきあらはせるものなり、

わが心ながらも、よきほどには、いかでたもつべきぞと、おぼしめぐらすも、今はたゞ女一ノ宮の御ためなり、

よきほどは、上の螢ノ巻の詞に、よきほどにかまへぬやとあること、ひき合せて見べし、いかでたもつべきぞとは、よきほどにたもつとのかたきを、おぼしめぐらす也、女ばかり、身をもてなすさまの、こころせう、あはれなるべき物はなしとあるこれ也、今はたゞ女一ノ宮の御ため也とは、紫ノ上みづからは、すでに御身のうへも、定まりたまひて、年もさかり過給ひぬれば、何事も心やすきを、今はたゞ女一ノ宮を、おふしたて奉る心ばへこそ、大事なれと也、

上ノ件の詞どもを考へて、人は、あだなるがあしきとは、さらにもいはず、さらでも、物のあはれしりがほの過たるも、あしきとを知べし、そも〳〵人のねぎこゝになびきやすに、あだなるは、物のあはれをしりて、なさけあるに似たれども、然らず、いひもてゆけば、あだなるは、まとには、ものゝあはれしらざる也、此人かの人に心をうつすは、これをもかれをも、あはれと思はざるからにこそはあれ、もし一人をあはれと思はゞ、こと人に心はうつすべきにあらず、但し源氏ノ君などの、これかれあまたの人を、思ひかけ給ふは、いづれも〳〵、物のあはれのすぐしがたきにて、あだなるたぐひにはあらず、その心ばへは、物語をよみて、味ひしるべし、一トやうにはいひがたし、御心ならぬ事ながら、藤壺ノ中宮の、源氏ノ君に逢玉へるなど、世にすぐれて、よき人どちにて、物のあはれのしのびがたきかたもあれば也、同じ似たるすぢなれど、朧月夜ノ君をば、心かろくあだなるかたとし、かの中宮をば、よろづすぐれて、よき人としたる、そのけぢめを考へて、物語の意をさとるべし、又空蟬ノ君の心ばせを書たるやう、帚木ノ巻ニ云ク、ほのかなりし御けはひ有さまは、げになべてにやはと、思ひ出聞えぬにはあらねど、おかしきさまを見え奉りても、何にかはなるべきと、思ひかへす、又云、心

のうちには、いとかく品さだまりぬる身のおぼえならで、過にしおやの御けはひとまれる、故郷ながら、たまさかにも、まちつけ奉らば、おかしくもやあらまし云々、さすがに思ひみだる、又云、女もさすがにまどろまざりけり、空蟬ノ巻ニ云、御せうとも絶てなし、おぼしこりにけりとおもふにも、やがてつれなくて、やみ給ひなましかば、うからまし、しひていとほしき御ふるまひの、たえざらむも、うたて有べし、よきほどに、かくてとぢめてんと、思ふものから、たゞならず、ながめがち也、

しひてといふより、思ふ物からといふ迄を、つゞけて心得べし、うたてあるべしといふにて、意切れたるごとくなれど、然らず、うたて有べければ、よきほどに云々、とつゞく意也、

又云、つれなき人も、さこそしづむれど、いと浅はかにもあらぬ御けしきを、ありしながらのわが身ならばと、とりかへす物ならねど、しのびがたければ、此御たゝう紙のかたつかたに、「うつせみのはにおく露のこがくれて、忍び〳〵にぬるゝ袖かな、夕兒ノ巻ニ云、さすがにたえて、おもほしわすれなむとも、いといふかひなく、うかるべきことにおもひて、さるべきをり〳〵の御いらへなど、なつかしう聞えつゝ云々、などある、此人の心ばへ物のあはれをよくしりて、さてよきほどにかまへたる物なり、又女の一種のすぐれたる人の本として書たる、朝兒ノ姫君のありしやう、葵ノ巻ニ云々、かゝることを聞給ふにも、朝がほの姫君は、いかで人にゝじと、深うおぼせば、はかなきさまなりし御かへりなども、をさ〳〵なし、さりとて人にくゝ、はしたなくはもてなし給はぬ、御けしきを、君もなほこと也と、おぼしわたる、

人に似じとは、世中の女の、大かた源氏ノ君になびかぬはなきを、さるなべての女の如くにはあらじとおぼす也、これ此姫君の、人にまさりたるところ也、さてさりとて云々は、物のあはれをしり玉へるところ也、末摘花ノ巻に、つれなく心づよきは、たとしへなくなさけおくるとあるごとく、人にゝじと、たてたる人は、必ずかのうつほの藤原ノ君の女ノのやうに、かたおもなる物なるに、此姫君は、然らざるは、有がたき心ばへなる故に、源氏君も、猶こと也とおぼせる也、

朝兒ノ卷ニ云、げに人のほどのおかしきにも、あはれにも、おぼししらぬにはあらねど、物思ひしるさまに見え奉ること、おしなべてのよの人の、めで聞ゆらむつらにや、思ひなされむ、かつはかろぐ〳〵しき心のほども、見しり給ひぬべく、はづかしげなる御有さまを、とおぼせば、なつかしからんなさけも、いとあいなし、よその御かへりなどは、うちたえておぼつかなからまじきほどに、聞え玉ひ、人づての御いらへ、はしたなからで、過してむ、

これも同じ姫君ノ、源氏ノ君の御事を、思ひとり給へる、御心のおもむきにて、上の葵ノ卷と、もはら同じ心ばへ也、人のほどのおかしきとは、源氏ノ君の、しな高く、御かたち有さまのすぐれたるをいひ、あはれには、源氏君の御心ざしの、あはれなるをいふ、おぼししらぬにはあらねど、これ品かたち有樣に感じ、心ざしのあはれなるに、感じ給へる御心なり、物思ひしるさまに見え奉ることとは、その感じたるほどを、源氏君へしらせ奉らむとて、なさけを見せ奉りたらば也、おしなべての云々は、源氏ノ君は、世ノ中にめで奉らぬ人もなければ、さるおしなべての女のなみにや思はれんと也、これかの、いかで人に似じとおぼせるこころなり、かつはといへる詞、心をつくべし、源氏君の、わがつれなきをば、ふかく恨み給ひながら、かつは又、心かろしと見おとし給ひなんと也、すべてかつといふ詞のつかひざま、皆かくのごとし、今の人の、又といふべき所に、みだりにつかふとはこと也、はづかしげなる御有さまとは、源氏君は、よに心ふかく、何事もはづかしき御方なるに、かろぐ〳〵しと見られんは、はづかしきと也、なつかしからむなさけとは、なつかしくおぼすべきなさけを、見せ奉るをいふ、うちたえてのては、清(スミ)て、下へつゞく語也、うち絶ておぼつかなきやうにはあらで也、

かくのごとくにて、此姫君は、物のあはれをよくしりて、そをよきほどにもてなして、やみ給ひし人にて、まことに有がたく、女の本(ホン)とすべき人にぞおはしける、さるゆゑに源氏ノ君は、なほ人にことなりと、心にくゝおぼして、いよ〳〵御心とまりしぞかし、そも〳〵紫式部が本意、とにかくに物のあはれをしるをむねとはして、しらざるがいふかひなきとは、さらにもいはず、又そをしりたるふるまひの過たるも、あぢきなく、よからぬことにて、其事のすぢによりては、かなら

ずあだなるかたに、ながれやすきわざなれば、心には深く思ひしりて、そのよきほどを思ひめぐらして、顯はしふるまふべきすぢもあること、上の件に引出たる、巻々のことどもを、考へわたしてしるべし、これぞ此物語の大むねなりける、さてそは、作りぬしの、みづから、すぐれて深く物のあはれをしれる心に、世ノ中にありとある事のありさま、よき人あしき人の、心しわざを、見るにつけきくにつけ、ふるゝにつけて、そのこゝろをよく見しりて、感ずることの多かるが、心のうちにむすぼゝれて、しのびこめてはやみがたきふし〴〵を、その作りたる人のうへによせて、くはしくこまかに書顯はして、おのが、よしともあしとも思ふすぢ、いはまほしき事どもをも、其人に思はせいはせて、いふせき心をもらしたる物にして、よの中の物のあはれのかぎりは、此物語にのこることなし、さてこれをよむ人の心に、げにさもあらむと、深く感ぜしめんために、何事も、ことさらに深くいみしく書キなしたり、かゝれば此物がたりをよむは、紫式部にあひて、まのあたりかの人の思へる心ばへを語るを、くはしく聞クにひとしく、又物語の中に見えたる、よきあしき人のしわざ心のおもむきをよく考へみれば、しか〴〵の物を見聞たる時は、かやうに思はるゝもの、しか〴〵の事にあたりたる時の心は、かやうなる物、よき人のしわざ心は、かやうなるもの、わろき人は、かやうなるものとやうに、すべて世ノ中の有さま、なべて人の、心のおくのくま〴〵まで、いとよくしられて、物のこゝろをわきまへしりて、からぶみにいはゆる、人情世態によく通（ツウ）ぜんこと此物語をよむにしく物あらじとぞおぼゆる、

○人の情（コヽロ）の感ずること、戀にまさるはなし、されば物のあはれのふかく、忍びがたきすぢは、殊に戀に多くして、神代より、世々の哥にも、其すぢをよめるぞ、殊におほくして、心ふかくすぐれたるも、戀の哥にぞ多かりける、又今の世の、賤（シヅ）山がつのうたふ哥にいたるまで、戀のすぢなるがおほかるも、おのづからの事にして、人の情のまこと也、さて戀につけては、そのさまにしたがひて、うきこともかなしき事も、恨めしき事もはらだゝしきことも、おかしきこともうれしきこともあるわざにて、さま〴〵に人の心の感ずるすぢは、おほかた戀の中にとりぐしたり、かくて此物語は、よの中の物のあはれのかぎりを、書あつめて、よむ人を、深く感ぜしめむと作れる物なるに、此戀のすぢならでは、人の情の、さま〴〵

ことまかなる有さま、物のあはれのすぐれて深きところの味ゞは、あらはしがたき故に、殊に此すぢを、むねと多く物して、戀する人の、さま〴〵につけて、なすわざ思ふ心の、とり〴〵にあはれなる趣を、いとも〳〵こまやかに、かきあらはして、ものゝあはれをつくして見せたり、後の事なれど、俊成ノ三位の、一戀せずは人は心もなからまし、物のあはれもこれよりぞしる、とある哥ぞ、物語の本意に、よくあたれりける、かくて戀のあはれの、殊に深き、しのびがたきさまは、桐つぼの卷にいはく、よにいさゝかも、人の心をまげたることは、あらじとおもふを、たゞ此人ゆゑにて、あまたさるまじき、人の恨みをおひ云々、

これみかどのおぼしめせる御心也、此人とは、きりつぼの更衣也、

又云、人のそしりをも、えはゞからせ給はず、よのためしにもなりぬべき、御もてなし也云々、やう〳〵天の下にも、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて云々、又云、そこらの人の、そしりうらみをも、はゞからせ給はず、此御事にふれたる事をば(にはイ)、だうりをもうしなはせ玉ひ、今はたかく世ノ中をも、おぼしすてたるやうになりゆくは云々、

同じ卷に、あくるとしの春、坊さだまり給ふにも、いとひきこさまほしくおぼせど、御うしろみすべき人もなく、又世のうけひくまじきことなれば、なか〳〵あやふく、おぼしはゞかりて、いろにも出させ給はず、とあるごとく、此みかどは、いさゝかもまげたることはあらじと、つゝしませ玉ひて、いと有がたく、かしこき君におはしませども、戀には、忍びがたくて、みだれさせ玉へるを、上ノ件のごとし、

あふひの卷ニ云、としごろあはれと思ひきこえつるは、かたはしにもあらざりけり云々、かくて後は、內にも院にも、あからさまにまゐり給へるほどだに、しづ心なく云々、あやしの心やと、われながらおぼさる、

これは源氏ノ君の、紫ノ上に、新枕かはし給へるほどの事也、

薄雲ノ卷ニ云、かうあながちなる事に、むねふたがるくせの、なほ有けるよと、我ながらおぼししらる、

これは源氏ノ君藤壺ノ中宮との御事を、冷泉院のしろしめして後に、源氏君の、いとおそろしくおもひ玉ひながら、なほ

こりずまに、又も秋好中宮に、心をかけ給ふことを、みづからおほせるこゝろなり、

胡蝶ノ巻ニ云、戀の山には、くじのたふれ云々、

これは戀にはまどはぬ人なきよしの世のたとひ也河海抄の引哥に「いかばかり戀の山路の深ければ入といりぬる人まよふらむ、

夕霧ノ巻ニ云、人のうへなどにて、かやうのすき心、思ひいらるゝは、もどかしく、うつしごゝろならぬことに、見聞しかど、身のうへにては、げにいとたへがたかるべきわざなりけり、あやしや、などかうしも思ふらむと、おもひかへし給へど、えしもかなはず、

夕霧ノ君の心也、戀に思ひいらるゝを、人のうへに、見聞たる時は、うつし心とも思はれず、もどかしくて、いとあるまじきことゝ思ひしに、今わが身のうへに、戀をして、思へば、げにたへがたかるべきわざ也と、おもひしれる也、かの上に引たる俊成ノ三位の哥、思ひ合すべし、戀の心の忍びがたきにつけては、さらぬよろづの事にも、人の心の思ひやられて、物のあはれをしるなりけり、

又云、げにかやうのすぢにてこそ、人のいさめをも、みづからの心にも、したがはぬやうに侍りけれ、

同ニ君の詞也、戀の道ばかりは、人のいさめにも、みづからの心にも、したがはぬ物と、世にいふは、まことにさることと也と、我身のうへになりて、思ひしれるよし也、此君は、さばかりのまめ人なるだに、かくぞ有ける、人のいさめをもといふ下に、詞おちたるか、

上ノ件の文どもに、あやしの心やと、われながらおぼさる、又思ひかへし給へど、えしもかなはず、などあるをもて、此道のものゝあはれの、ふかくたへがたきほどをしるべし、されば此すぢにつけては、さるまじきあやまちをも引いで、ことわりにそむけるふるまひも、おのづからうちまじるわざにて、源氏ノ君のうへにて、空蟬ノ君の事、朧月夜ノ君の事、藤壺ノ中宮の事などのごとし、戀の中にも、さやうのわりなくあながちなるすぢには、今一きはもののあはれのふかきことある

故に、ことさらに、道ならぬ戀をも書き出て、そのあひだの、ふかきあはれを見せたるもの也、榊ノ卷に、此源氏ノ君と中宮との御あひだのことを、なのめなる事だに、かやうなるなからひは、あはれなることもことなるを、ましてたぐひなげ也、といへるにてしるべし、たゞよのつねの、さしも心ふかゝらぬ人の、なほざりなるあひだにてだに、かやうにわりなき事は、殊にあはれのまさるならひなるに、ましてこれは、いと〳〵心深きどちの御なからひにて、男君の、いみじうおぼしゝみたる事なれば、たぐひもなきあはれさ也といへる也、又柏木ノ卷に、右衛門督の、女三ノ宮の御事によりて、病づきて、おもりゆきて、今はのほどになりて、よみ玉へる哥に、「いまはとてもえむけぶりもむすぼゝれ、たえぬ思ひのなほや殘らん、宮の御かへし、「たちそひてきえやしなまし、うきことを思ひみだるゝけぶりくらべに、此物語こゝらの戀の中にも、此右衛門督の心は、殊にあはれなる中にも、いまはのほどのさま、此おくりこたへなどは、又こゝにあはれ深し、此けぶりばかりは、此世の思ひ出なりといへるわたり、よむこゝちにも、すゞろに涙おちぬべくおぼゆ、かくてつひにはかなくなり給ひて、同じ卷にいはく、おやたちの、子だにあれかしと、なげい玉ふらむにも、え見せず、人しれずはかなきかたみばかりをとゞめおきて、さばかり思ひあがり、およすけたりし身を、心もてうしなひつるよと、あはれにをしければ、めざましとおもふ心も、ひきかへし、うちなげかれ給ひぬ、

これ源氏ノ君の、薫ノ君を見て、柏木君の事を、思ひ玉へる心也、めざましと思ふ心も、引かへし、うちなげかれ玉ふといへる、物のあはれをしれる人は、かくぞ有ける、

又いはく、六條院には、ましてあはれとおぼし出ると、月日にそへておほかり、又云、たかきもくだれるも、をしみあたらしがらぬはなきも、うべ〳〵しきかたをば、さる物にて、あやしうなさけをたてたる人にて、ものし給ひければ、さしもあるまじき、おほやけ人、女房などの、としふるめきたるどもさへ、こひかなしび聞ゆる、ましてうへには、御あそびなどのをりごとに、まづおぼし出てなん、しのばせ玉ひける、あはれ右衛門督のといふとぐさ、何事につけても、いはぬ人なし、横笛ノ卷ニ云、故權大納言の、はかなくうせ給ひにしかなしさを、あかずくちをしき物に、こひしのび玉ふ人

おほかり、六條院にも、おほかたにつけてだに、よにめやすき人のなくなるをば、惜み玉ふ御心に、ましてこれは、朝夕にしたしく參りなれつゝ、人よりも御心とゞめ、おぼしたりしかば、いかにぞやおぼし出る事は有ながら、あはれは多く、をり／＼につけて、しのび給ふ、御はてにも、誦經など、とりわきせさせ玉ふ、よろづもしらずがほに、いはけなき御有さまを、見玉ふにも、さすがにいみしくあはれなれば、御心のうちに、又心ざし給ひて、こがね百兩をなん、べちにせさせ給ひける、

權大納言は、柏木ノ君也、いはけなき御有さまとは、薫ノ君の事なり、こがね百兩を云々は、柏木ノ君のために、薫ノ君の心ざしとして、べちに又誦經し玉ふ也、

鈴虫ノ卷ニ云、御ことゞものこゑ／＼、かきあはせて、おもしろきほどに、月見るよひの、いつとても、ものあはれならぬをりはなき中に、こよひのあらたなる月の色には、げになほわがよの外までこそ、よろづおもひながさるれ、故權大納言、なにのをり／＼にも、なきにつけて、いとゞしのばるゝことおほく、おほやけわたくし、物のをりふしの、にほひうせたるこゝちこそすれ、花鳥の色にもねにも、おもひわきまへ、いふかひあるかたの、いとうるせかりしものをなど、の給ひ出て、みづからも、かきあはせ玉ふ御琴の音にも、袖ぬらし給ひつゝ、みすのうちにも、みゝとゞめてや、聞給ふらんと、かたつかたの御心には、おぼしながら、かゝる御あそびのほどには、まづ戀しう云々、

月見るよひのといふより、源氏君の詞也、みすの内にも云々は、女三ノ宮也、かたつかたの御心とは、あざましくおぼす心也、まづ戀しうは、源氏君の柏木ノ君を也、

そも／＼此右衛門ノ督の事は、不義なるふるまひ有て、身をさへいたづらになしぬるは、いかによき人ならんからに、よのつねの議論もて、いはむには、あはれむべきとにはあらざるを、かく殊にあはれ深きさまに書なして、世の人にをしまれ、源氏ノ君さへ、ふかくをしみ、あはれがり給ふさまに、かへす／＼いへるは、戀の道に、もののあはれのふかきこと、又よき人は、あはれをしるとの、深きこゝろをいへるにて、物語の大意、とにかくに、物のあはれを、むねとしたるほどを

しるべき也、橋姫ノ巻ニ云、げによその人のうへときかむだに、あはれなるべき、ふることゞもを云々、これは、宇治にて、弁の尼が、柏木ノ君の事を、語るを、はじめて聞て、薫ノ君の心也、此詞を思ふべし、此物語をよみこて、此柏木ノ君の事を、あはれと思はぬは、心もなき人ぞかし、

又梅枝ノ巻ニ云、かやうの事は、かしこき御をしへにだに、したがふべくもおぼえざりしかば、ことまぜまうけれど云々、これは、源氏ノ君の、夕霧ノ君に、教訓の詞のうち也、かやうの事とは、戀のすぢをいふ、かしこき御をしへとは、むかし父みかどの、源氏ノ君へ、御教訓有しこと也、したがふべくもおぼえざりしとは、ことさらに、したがはじとおぼせるよしにはあらず、御教への如くに、守らんとは、かたかるべきやうにおぼせる也、さて此夕霧ノ君へ教訓の御詞、いと長きを、みな好色をいましめ玉へり、親の子をゝしふる、もとよりさ有べきわざ也、然るに我もむかし、かしこき御をしへのごとくには、えあるまじくおぼえし事なれば、今も此すぢの事は、詞をまぜて、とかくいはんとは、うけれども、そのたまへるは、すべてわかきほどは、たれも〳〵、此すぢには、えしも心しづめず、おもはぬあやまちもあるわざなるを、年たけて、をさまれる心にまかせて、とがむべきにはあらねどゝのたまへるにて、物のあはれをしれる人の心は、かくゆるやかにて、かたおちにはあらざりけり、

夕霧ノ巻ニ云、かの事は、きこしめしたれど、何かはきゝがほにもとおぼいて、たゞうちまもり給へるに、いとめでたくきよらに、此ごろこそ、ねびまさり給へる、御さかりなめれ、さるさまのすきごとをし玉ふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も、つみゆるしつべく、あざやかに物きよげに、わかうさかりに、にほひをちらし給へり、物思ひしらぬ、わかうどのほどにはたおはせず、かたほなるところなう、ねびとゝのほり給へる、ことわりぞかし、女にて、などかめでざらむ、かゞみを見ても、などかおごらざらむと、我子ながらもおぼす、

かの事とは、夕霧ノ君と、落葉ノ宮との事をいふ、いとめでたくといふより、源氏君の、夕霧ノ君のさまをうちまもりて、おぼせる心也、さきの教訓の詞には、好色を深くいましめ給ひながら、心のうちには、ことわりぞとおぼせるなり、

薄雲ノ巻ニ云、これは、いとにげなき事也、おそろしうつみ深きかたは、おほくまさりけめど、いにしへのすきは、思ひやりすくなきほどの、あやまちに、佛神も、ゆるし給ひけむ云々、

源氏ノ君の心也、これはとは、みづから秋好中宮に心をかけ給ふ事なり、おそろしう罪ふかきかたとは、むかし藤壺ノ中宮に逢奉り給へりし事を、今はかくおぼす也、よはひたけては、よろづに、思ひやりの深くなる故に、今は秋好中宮に、思ひをかくる事を、にげなしと思ひかへし玉ふ也、然れどもそのうへにも、なほつゝしみあへ玉はぬかたも有て、此後もなほ朧月夜ノ君には、たえずしのび〳〵に逢給へり、そこの文にいはく、いとあるまじき事と、いみしくおぼしかへすにも、かなはざりけりとあり、戀の情は、かくぞありける、

榊ノ巻ニ云、かむの君の御事も、猶たえぬさまにきこしめし、けしき御らんずるをりもあれど、何かは、今はじめたる事ならばこそあらめ、有ッそめにける事なれば、さも心かはさむに、げなかるまじき人のあはひなりかし、とぞおぼしなして、とがめさせ給はざりける、

かむの君の御事は、朧月夜ノ君の、源氏ノ君に逢玉ふ事也、きこしめし云々は、朱雀院の也、かの柏木ノ君を、源氏君のあはれがり玉ふと、同じ御こゝろばへなり、

又浮舟ノ君よ、薫ノ君をおきながら、匂宮に、たやすくなびきたるほどのさまは、あまり心かろくあだ〳〵しく、すこしにくくさへおぼゆれども、後にその思へる心を、かきつゞけたるをよめば、又あはれさやらんかたなし、そのおもへるやう、浮舟ノ巻ニ云、いかで見え奉らむとすらんと、そらさへはづかしう、おそろしきに、あながちなりし人の御有さま、うち思ひ出らるゝに、又此人に見え奉らむを、思ひやるなん、いみしう心うき、我はとしごろ見る人をも、皆思ひかはりぬべきこゝちなむするとのたまひしを、げに其後、御こゝちくるしとて、いづくにも〳〵、例の御有さまならで、御す法などさわぐなるをきくに、又いかに聞ておぼさむとおもふも、いとくるし、此人はたいとけはひことに、心ふかくなまめかしきさまして、久しかりつるほどのおこたりなどのたまふも、ことおほからず、戀しかなしとおりたゝねど、つねにあひ見ぬ戀のくる

しさを、さまよきほどに、うちのたまへる、いみしういふにはまさりて、いとあはれと、人の思ひぬべきさまを、しめたまへる人から也、えんなるかたはさる物にて、行末長く、人の頼みぬべき心ばへなど、こよなくまさり給へり、思はずなるさまの心ばへなど、もりきかせ給はむとき、なのめならず、いみしくこそあゝべけれ、あやしううつしごゝろもなく、おぼしいらるゝ人を、あはれと思ふも、それはいとあるまじく、かろきとごかし、此人にうしとおもはれて、わすれ給ひなん心ぼそさは、いとふかうしみぬべければ云々、此春のほどに、さりぬべくはわたしてんと思ひて、のたまふも、かの人の、ゝどかなるべきこころおもひまうけたりと、昨日ものたまへりしを、かゝることもしらで、さおぼすらむよと、あはれながらも、そなたになびくべきにはあらずかし、と思ふからに、有し御さまの、面影におぼゆれば、われながらもうたて心うの身やと、おもひつゞけてなきぬ、

　いかで見え奉んは、薫ノ君に也、あながちなりし人、おぼしいらるゝ人、かの人などいへるは、匂宮の事也、此人といへるは、みた薫ノ君の事也、我はとしごろ云々とは、匂宮ののたまひしと也、

又いはく、わが心にも、それこそは有べき事に、はじめよりまちわたれ、とは思ひながら、あながちなる人の御事を、思ひいづるに、恨み玉ひしさま、のたまひしことゞも、おもかげにつとそひて、いさゝかまどろめば、夢に見え玉ひつゝ、いとうたてあるまでおぼゆ、又云、ここにいとおもくなどはあらぬ、わかきこゝちに、いとかゝるを、思ひもまさりぬべけれど、はじめより契り給ひしさまも、さすがにかれはなほいと物ふかう、人がらのめでたきなども、世中をしりにしはじめなればにや、かゝるうき事聞つけて、思ひうとみ給ひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかとまどふおやにも、おもはずに心づきなしとこそは、もてわづらはれめ、かくこゝろいられし玉ふ人はた、あだなる御本上とのみ聞しかば云々、我心にもあらず有て、かの人にうとまれ奉らむは、なほいみしかるべしと、思ひみだる、又云、さて有まじきさまにて、おはしたらむに、いま一たび、物をもえきこえず、おぼつかなくて、かへし奉らむとよ、又時のまにても、いかでかこゝにはよせ奉らむとする、かひなくうらみて、かへり給はむさまなどを、思ひやるに、例のおもかげはなれず、たへずかなし

くて、此御文を、かほにおしあてゝ、しばしは、つゝめども、いといみしうなき玉ふ、又云、おやにさきだちなむつみ、うしなひ玉へとのみ思ふ、有し繪をとりいでゝ見て、かき玉ひし手つき、かほのにほひなどの、むかひきこえたらむやうにおぼゆれば、よべひとことをだに聞えずなりにしは、なほ今ひとへまさりて、いみしとおもふ、かのこゝろのどかなるさまにて、行末とほかるべきことを、のたまひわたる人も、いかゞおぼさむと、いとほしう云々、おやもいと戀しく、例はことに思ひいでぬはらからの、見にくやかなるも、こひしう、宮のうへを思ひいで聞ゆるも、すべていま一たびゆかしき人おほかり、などある心のほど、まとにとらおほかみだにも、なきぬべきあはれさ也、

〇此物語の本意を、勸善懲惡といひ、殊には好色のいましめ也といふは、いみしきしひごと也、つくりぬしの意、さらにさることにあらず、又よむ人も、さらにさるいましめにはなりがたし、そのゆゑは、まづ源氏ノ君をば、よろづにすぐれて、よき人の本に作りたれば、見む人も、此君のしわざ心を、何事もよしと心得つべし、然るに此人殊に戀のみだれおほく、中にはたぐひなき不義もあるを、見む人は、かゝるよき人にだに、さるふるまひのあんなれば、なにかはくるしからん、とやうに思ふ心こそつきもすべけれ、又女にては、藤壺ノ中宮は、殊によき人にして、ほめたれば、これをふまむ女も、その心ばへを、ならひしたふべきわざなるに、源氏ノ君との事を書るをば、いかにとかいはむ、ことわりをもていはゞ、中中に好色をいざなふかたこそ有りもすらめ、いかでかそのいましめにはなるべき、又よき事をしたる人は、さいはひあり、あしき事をせし人は、わざはひにあふさまに書キたらむこそ、勸善懲惡にはあらめ、かの柏木ノ君浮舟ノ君などの、戀によりて、身をうしなひたるなどをもて、さも思ふめれど、さては源氏ノ君をば、何とかいはむとする、さばかり戀のすぢには、みだれおほくして、殊にいともかしこき、みかどの御たねをさへみだり奉りたる、人なれば、よのつねの論をもていはゞ、神も深くにくみとがめ給ひて、いみしき禍にもあひ玉ふべきに、よのかぎりめでたく榮えて、帝と后と大臣とを、御子にもち給ひ、その身太上天皇の尊号をさへ得玉ひ、大かた此世にあかぬ事なく、末々までさかえ玉ふを見れば、たれかは好色をつゝしむ心をばおこさむ、中ごろしばししづみ給ふと有しは、弘徽殿ノ大后の、よこさまにかまへ玉へるしわざとし

て、天の下の人みなかなしみ、神佛もとがめ給ふさまに書きたれば、いよ〱好色のいましめにはなりがたく、懲悪の意さらになし、なほしひて、ことわりをもていひはげまさば、此君は、好色によりて、太上天皇にはなり給へるにあらずや、かくてもなほ懲悪といはむとするか、好色のいましめになりがたきよしを、なほいはむには、夕兒ノ巻ニ云、かやうのなみなみまでは、おもほしかゝらざりつるを、有し雨夜の、しなさだめの後、いふかしくおもほしなるしな〴〵あるに、いとゞくまなくなりぬる御心なンめりかし、

これ源氏君の、かのしなさだめを聞玉ひて後、いよ〱好色の心の、まさり給へるよし也、今それをよまむにも、そのいましめとなるべきよしなきことをさとべし、

末摘花ノ巻ニ云、かやうのこころにこそ、昔物語にも、あはれなることども有けれど、思ひつゞけて、物やいひよらましとおほせと云々、總角ノ巻ニ云々、在五が物語をかきて、いもうとにきんをしへたる所の、人のむすばむといひたるを見て云、いにしへの人も、さるべきほどは、へだてなくこそならはして侍けれ、これらを思ふべし、大かたむかしの人の、昔物語をよみたる心も、かくこそは有けれ、戀をつゝしむ心をおこしたるさまは、見えたるとなし、今よまむ人の心も、然るべき事を思ふべし、されば螢ノ巻ニ云、ひめ君のおまへにて、此世なれたる物語など、なよみきかせ玉ひそ、みそかごゝろつきたる物のむすめなどは、おかしとにはあらねど、かゝることよには有けりと、見なれ給はんぞ、ゆゝしきやとのたまふ、

今此源氏ノ物語をよまむ人も、戀のすぢを書るこゝろ多きを見ては、かゝる事、世には多く有けりとこそは思ふべけれ、此物語、もし好色のいましめにせむの意ならませば、まさにかくはいふべしやは、巻々の中には、人をゝしへたることも、好色をいましめたることもおほかるは、すべてありとある事を、ひろくかけるなれば、其中には、おのづからさることも、あるべきことわり也、下ノ若菜ノ巻ニ云、ことばづかひきら〱しく、まがふべくもあらぬことどもあり、年をへて思ひわたりけることの、たまさかにほいかなひて、心やすからぬすぢを、書つくしたる詞、いと見どころ有て、あはれなれど、いとか

くさやかにはかくべしや、あたら人の、ふみをこそ、思ひやりなくかきけれ、落ちちることもこそと、思ひしかば、むかしかやうにこまかなるべきをりふしにも、ことそぎつゝこそ、まぎらはしゝか、しか人の深きよういは、かたきわざなりけりと、かの人の心をさへ、見おとし給ひつ、

これは女三ノ宮におくれる、柏木ノ君ノ文を、見つけ給ひて、其文がきのやうをおもひ玉へる、源氏君ノ心也、もしすべて教誡とせば、これらは、けさう文の書きやうををしへたるなれば、悪をすゝめたるかたにぞなりぬべき、そも〳〵よゝの物しり人、いづれの書を注するにも、そのふみの趣をば、よくも尋ねずして、たゞひたぶるに儒仏の意にのみへつらひて、しひてかの書どものおもむきに、かなへむとのみ説まげらるゝは、昔より、皇国の物しり人の癖にして、儒仏にへつらはぬ人は、一人もなきぞかし、されば此物語をも、例のあながちに、かの儒仏の教のかたへ、ひきつけむとせらるゝから、物のあはれをしりて、よきことにいへるすぢをも、かの教の意にはかなはぬをば、しひてときまげて、あしき事のごとく注して、これはしか〳〵のをしへぞ、しか〳〵のいましめぞなどいひなせり、さるたぐひを、懲悪の教と心得るときは、物のあはれの深きも、さむることあれば、いみじく作りぬしの本意をうしなふこと多きぞかし、すべて儒仏の意に引つけて、物語をとくは、かの書どもの、道々しく、善悪是非の議論きはやかに、かしこくさかしく、言よきを、うらやみへつらひたる物にて、みなしひごと也、すべて書のおもむきは、おの〳〵ことなれば、かならず儒仏の意にことなりとて、なでふことかあらむ、もののあはれを見せむと作れる物語を、教誡にとりなすは、たとへば花を見むとて、植おふしたる桜の木を、伐りくだきて、薪にしたらむがごとし、薪は一日もなくてはえあらず、せちなる物なれば、それわろきにはあらねど、薪には、よき木どもの、ほかにあまたあんなるに、あたら桜をきりとらむは、中々に心なきしわざとぞいふべき、なほいはゞ、儒仏の教とは、おもむきかはりてこそあれ、物のあはれをしるといふことを、おしひろめなば、身ををさめ、家をも国をも治むべき道にも、わたりぬべき也、人のおやの、子を思ふ心しわざを、あはれと思ひしらば、不孝の子はよにあるまじく、民のいたつき、奴のつとめを、あはれとおもひしらむには、よに不仁の君はあるまじきを、不仁なる君不孝なる子も、よにあるは、いひも

てゆけば、もの丶あはれをしらねはぞかし、されば物語は、物のあはれを見せたるふみぞといふことをさとりて、それをむねとして見る時は、おのづから教誡になるべき事は、よろづにわたりて、おほかるべきを、はじめより、教誡の書ぞと心得て見たらむには、中々のものぞこなひぞありぬべき、住吉ノ物語のをはりにいはく、むかしも今も、人にはらぐろなる人は、かゝると也、これを見聞む人々は、かまひて人よかるべきなりとぞ、といへるを思ふべし、これは住吉ノ姫君のまゝ母の、物のあはれをしらざりしふるまひを、いましめたる詞にて、そのまゝ母は、末あしくてはてたるさまをしるし、姫君は、少將に逢て、戀の罪あれども、末さかえて、めでたかりしさまに書たり、さればこそはまさしく勸善懲惡のいましめの心ばへなるに、たゞもの丶あはれをしらざるを、いましめたれば、よのつねの儒佛のいましめとは、すぢこと也、此源氏の物がたりも、なすらへて知べし、はじめにもいへるごとく、物語は、べちに物語のおもむきあることなるを、そのちかき例をばさしおきて、いと物どほく、たぐひことなる儒佛の書をもて、いふべきにあらず、その中に、盛者必衰、會者定離のことわりをしらしむといへる説は、げにさもと思はるべき事おほかるを、それはた心得の有ル事也、まづ佛の道といふ物は、殊にもののあはれをば、すつる道にして、儒の道などよりも、をしへのきびしき事有て、すべて人の情には、遠かるべき道なれども、かへりて人のこゝろの、おもむきやすくして、むげに物のこゝろしるまじき山がつ、女童べまでも、あやしく感ずることふかく、何事につけても、まづ此道を思ふならひなり、さるは世の中の事も、人の身のうへも、まことには、露ばかりもかの道のあづかることにはあらざれども、とりたてゝそのことわりを、ひろ〳〵身をかへたる後の世かけて、人のおもむきぬべく、よげにときしらせたるみちにて、そを聞なれたる、世の中の人の心は、たかきもみじかきも、さかしきもおろかなるも、おしなべてみな、此をしへにしみぬるがゆゑに、あるは世のはかなきを見るにつけ、あるは身のうきなげきにたへぬをりなど、さかりのかたちを、墨染の衣にやつし、よばなれたる山のおくに、たえこもりて、おこなふなど、又さるかたにつけて、物のあはれの深きこともおほきによりて、此物語にも、源氏ノ君をはじめて、心ふかき人はみな、ともすれば此佛の道を思ひ玉ふことを書たる、これ世の中のありさまにて、さるならひになりぬるよの、人の情の、もの丶あはれ

にぞ有ける、されば卷々に、佛の道のことを多くかけるも、そのことわりをしらしめむとにはあらず、たゞそのすぢにつきての、あはれを見せたるもの也、もし佛の道の道理をしめさむためならば、かならず、源氏ノ君の、老の世のおとろへのさまをもかき、終りをもかくべきわざなるに、此君の事は、衰へのさまをも、終りをもかゝず、たゞよき事のかぎりにてやみぬる、これをもて、盛者必衰などいふことわりをしらせたるにはあらざることをしるべし、又注釋どもにこそ、然いへれ、たれかは此物がたりをよみて、さることわりを思ひしるものゝあらむ、そも〳〵此物語に、佛の道に入るすぢの事を、こころ〴〵にいへるを見て、紫式部を、儒者ごゝろなる者は、佛者の見識也と思ひ、ほうしのともがらは、人を此道におもむけむために書り、などいふたぐひ、いづれもおのがよる道にかたよれるもの也、此物語は、しかゝたよれるものにはあらず、よの人の心は、みな佛の道を思ふ物なれば、そのすぢの多きも、たゞ世の中の有さまのまゝを書るにこそはあれ、いかでかそをつくりぬしのこゝろとはいふべき、又さきにいへる、熊澤氏が、此物語の外傳といふものゝ、はじめにいはく、源氏物語は、おもてには好色のことをかけども、實は好色の事にあらず、此故に此物語を好み見る人にも、正しきに過たる人あり、此物がたりを書たる意趣は、萬の事、世の末になりゆけば、上代の美風おとろへて、俗に流れんことを、歎き思ふといへども、あらはに正しき書は、人いみて近づけず、見る人すくなければ、世にあまねからず、敎をたてゝ書たることは多けれども、詞すくみて、人いとふ心あれば、其書久しからず、又有ても、見る人なければ、無きにひとしければ、書おきても、其詮なきことを思ひはかりて、しひて敎がましき筆法をあらはさず、たゞ好色のたはふれことゝなして、其中に古への上﨟の美風、心もちひを、くはしくしるし殘せる物也、これを本意なく、一向の作り物語として、よくいへり、よくかけりなどいひて、よのつねの、口にまかせて書たる、物語のやうに思へるは、淺見の人の、和漢の書にくはしからざる故也云々、古への禮樂文章を見るべき物は、此物語にのみのこれり、故に此物語において、第一に心をつくべきは、上代の美風也、禮の正しくしてゆるやかに、樂の和して優なる躰、男女ともに上﨟しく、常に雅樂を翫びて、いやしからぬ心もちひ也、次には書中人情をいへること詳也、人情をしらざれば、五倫の和を失ふとおほし云々、す

べて此物語は、風化を本としてかけり、中にも音樂の道を、くはしく記せり云々、風をうつし、俗を易るは、樂よりよきはなしといへり、此物語においては、音樂の道、とりわきて心をとゞめて書おけるは、此故也云々といへり、宣長今これを論ぜむ、まづ此物語を好みて見る人にも、正しき道たてたる人のいへる、さはさる人によるべき事也、もとより好色を、あしきわざと、深く心得て、心うるはしからん人こそ、さもあらめ、好色の心ふかゝらむ人などは、ようせずは、いとゞもよほさるゝかた有べきをや、次に此物語の書たる意趣は、萬の事、世の末になりゆけば、上代の美風おとろへて、俗に流れむことを歎き思ふといへるは、後の世のいやしきならひにくらべて見れば、古への人の有さま心ばへは、こよなき故に、然思はるゝにこそあれ、作り主の意は、さることにはあらず、その世にしては、さることゝも思はねば、儒者ごゝろ也、古へのみやびたる有さまを見るべき物は、まことに此物語なれども、そは後の世に、よむ人のうへにこそあれ、はじめより、さる事を見せむとて書るにはあらず、次にあらはに正しき書は、人いみて云々、たゞ好色のたはふれことゝなして、といへるは、まことにその心ばへは有べけれど、好色を書たるを、たはふれことゝせるは、たがへり、上にかへす〴〵いへるごとく、物のあはれをむねと書るものにて、そのあはれのふかきこと、戀にまさるはなきが故に、そのすぢを、殊に多くむねと書るもの也、されば戀する人の有さま情を書るさま、さらにたはふれにはあらざるほどあらはなる物を、しひてしかいふは、例の儒者ごゝろにぞ有ける、次に人情をいへると詳也とは、まことにさることにて、やまともろこしの書に、ならぶものなし、次に風化を本として書りといへるは、又例の儒者心也、中にも音樂の道を、くはしく記せりといへるも、あたらず、樂の事の多く見えたるは、今の世の人の、さみせんじやうるりなどいふ物を、おもしろきことにして、もてあそぶと、同じことにて、たゞそのかみの世の有さまにて、おもしろき事をしるせるにこそあれ、風をうつし俗をかふるは、樂よりよきはなしなどいふは、儒者のつねのことにて、物語には、さらによしなきしひごとなり、すべてかくさまの、したゝかなることをいひて、あらぬすぢにときなすは、かの佛ごゝろの人々の、盛者必衰などゝ、もはら同じことにて、いづれも、おのがつねにならひたる書のこゝろをのみ思ひて、別に物語ぶみといふ物のおもむきのあることを、しらざるものぞかし、

此外傳といふ物のやう、物語の卷々の中の詞を、つぎ〳〵にすこしづゝつみ出て、文の意にもかゝはらず、たゞおのがいはまほしき、儒者ごゝろを、心にまかせていへる物にて、中にはおかしき事も、まれにはまじりたれども、すべていとみだりなる事也、又かの七論にいはく、此物語は、もろこしにて、司馬遷など、窮愁よりして、憤(イキドホリ)を書に發(ハツ)して、一家の言をなせるがごとく、式部も、父爲時にわかれ、夫宣孝におくれて、二女子を養育すとて、身のたづきなく、世の辛苦なる時にあたりて、此物語を作り、世に有ふとある事をかき出して、風刺教誡をしるし、いきどほりをやすめけりといへる、これ又じゆしや心のおしはかりにこそあれ、物語のこゝろともおぼえず、又冷泉院の物のまぎれを、諷諭にとりて、一部の大事也として、そのよしを論じたるも、なほ儒者ごゝろにして、ひたすらもろこしのふみどもの例にのみなづみて、物語のこゝろをしらざるもの也、その論の中に、源氏ノ君と藤壷中宮との密事を、はじめには、いともやさしきさまにかきなし、終りには、いとおそろしく、有まじきあやまちなりけりと、ことわりたる氣象を見よ、といひて、しひて諷諭にせむとしたれども、さきにも薄雲ノ卷を引ていへる如く、源氏ノ君、此事を後には、いとおそろし、あるまじかりける事と、おもひしり給ひながら、其後もなほ、朧月夜ノ君に、忍び〳〵逢給ひしは何とかいはむ、もし藤壷ノ中宮の御事を、いとおそろしきあやまちなりと、ことわれる心ならば、其後にかゝる事を、まさに書べしや、もしはたして諷諭ならむには、一たびはいましめながら、又立かへりてすゝむるにぞなりぬべき、又みをつくしの卷にいはく、當代の、かく位にかなひ玉ひぬることを、思ひのごとうれしとおぼす、

これは源氏ノ君のおぼせるにて、當代とは、冷泉院の御事也、

もしかの論の如くならんには、源氏ノ君、冷泉院の御位につき給へるにつきては、いよ〳〵おそろしく思ひて、皇胤のまぎれぬることを、歎き玉へるさまにこそ書べけれ、かやうに、思ひのごとうれしとおぼすなどは、書べきものかは、なほ此物のまぎれのかの説ども、あたらぬこと多けれども、かしこきすぢの事なれば、今はその辨へはもらしつ、かにかくに此御事、わきて諷諭といふべきにもあらず、そも〳〵此物のまぎれは、古今ならびなき大事にはあれども、物語は物語な

れば、さる世の中の大事を、一部の大事として、書くべきにはあらず、これも物語にては、たゞ物語の中の一つの事にぞ有ける、然らば此事は、いかなる意にて書るぞといふに、まづ藤つぼの中宮との御事は、上にもいへるごとく、戀の物のあはれのかぎりを、深くきはめつくして見せむため也、こは男も女も、よきことのかぎりをとりぐし給ひて、よろづにすぐれて、物のあはれをしり給へるどちの御うへといひ、又ことわりにたがへる、あながちなるあひだの戀には、殊に今一きは、あはれのふかきことある物なる故に、ことさらにわりなくあるまじき事のかぎりなる戀を、此御方々のうへに書出て、かた〴〵ものゝあはれの深かるべきかぎりを、とりあつめたる物ぞかし、さて冷泉院のものゝまぎれは、源氏ノ君の榮えをきはめむために書る也、そはまづいづれの物語にも、むねとして、よきさまにいふ人有て、その人のうへをいふことては、よにあらゆるよき事を、えりあつめていふ中に、身のさかえは、人のよのよき事のかぎりなれば、其人の萬にさいはひ有てつひにうへなき身となりぬる事などをいふぞ、物語の多くの例にて、此物がたりも、源氏ノ君の榮えをきはめてかゝむとするに、人のさかえのきはまりは、帝の御位にして、執政大臣といへども、たゞ人はなほあかぬところある故に、太上天皇の尊号をかうぶらしめむとするに、さるべきよしなくては、ゆくりなくて、まことに淺はかなる、作り事めくゆゑに、帝の御父とせむ料に、此物のまぎれは書るもの也、そも〳〵此君、帝の御子にて、后と大臣とを御子にもち給へるうへに、帝の御父にてさへおはしますよしをもて、太上天皇になり給へる、かくてぞ、たふとくめでたき御身の榮えは、きはまりける、なほ此尊号かうぶらしめ奉ん料也といふあかしは、薄雲ノ巻に、夜居の僧の、此物のまぎれを、はやくよりしり居たるが、みかど【冷泉院】へひそかに奏せむとする時の詞にいはく、これはきしかたゆくさきの大事と侍ることを、過おはしましにし、院きさいの宮、たゞ今よをまつりごち給ふおとゞの御ため、すべてかへりてよからぬ事にやもり出侍らむ、かゝるおいほうしの身には、たとひうれへ侍りとも、何のくいか侍らむ、佛天のつげあるによりて、奏し侍るなり云々、きしかたゆくさきの大事とは、今冷泉院の、實の御父をしり給はざることをいふ也、さて此事を奏して、實の御父をしりて、孝(ケウ)じ給はむは、いと〳〵よき事なれども、桐壺ノ帝藤壺ノ中宮源氏ノ君などの御ために、かへりてよからぬ事に、

もり聞えやせむと也、然るにもしこれを、物のまぎれのかたを、大事といふと見ては、かへりてよからぬことゝいへるにかなはず、物のまぎれの事ならば、此御方々の御ために、よからぬことは、もとよりのことなれば、いかでかかへりてとはいふべき、此かへりてといへる言に、心をつけて、文の意をさとるべし、さて侍ることをといへる、を°もじは、佛天云々といふへかゝれり、大事なる事を、佛天の告にまかせて奏すといふ也、

かくて奏したることを、きこしめして、みかどの、此僧にのたまへる御詞にいはく、心にしらですぎなましかば、後の世までのとがめ有べかりける事を云々、

源氏ノ君は、實の御父なることを、しろしめさで過なば也、此御詞にて、上の文の意、いよ／＼明らけし、もし物のまぎれの事ならば、冷泉院は、しろしめさで過給ふとも、御身にはさしもとがめ有べきにあらず、

又僧の申せる詞に、天變しきりにさとし、世の中しづかならぬは、此氣也、いときなく、物のこゝろしろしめすまじかりつるほどこそ侍りつれ、やう／＼御よはひたりおはしまして、何事もわきまへさせ玉ふべき時にいたりて、とがをもしめす也、よろづの事、おやの御ン世よりはじまるにこそ侍るなれ云々、

佛天の告といひ、後の世までのとがめ有べしといひ、天べんのさとしは此氣也といひ、とがをしめすといへる、みな實の御父をしろしめさである故也、もしこれら、物のまぎれの方の故ならむには、そのとがめは、おほノ源氏ノ君にこそかゝるべきに、たゞ冷泉院にのみかけて申せるを思ふべし、橋姫ノ卷に、薫ノ君の、宇治にて弁ノ尼に、實の父は、柏木ノ君なることを、始めて聞給ひしところの詞に、かゝるたいめんなくは、罪重き身にて、過ぬべかりけること、などのたまふことあるをも、引合せてさとるべし、萬の事、親の御世よりはじまるとは、人の子の、幸ヒあるも、然らぬも、親のなしおきたる善惡の、むくい也といふなり、かくいふは、冷泉院の、今かく帝位にのぼらせ給ひて、天の下をしろしめすことも、御父源氏ノ君の、よろづに善事をなし給へる、御德よりおこれることなれば、いよ／＼御父にておはしますことを、しろしめさであるべきにあらずとの意也、もしかのとがめを、物のまぎれのとがめとするときは、此詞、よろ

づの事、子の世にむかはるにこそ侍るなれ、といはではかなはず、文に心をつくべし、同じことなれども、上の文のやうによりて、親のかたをいふべきと、子のかたをいふべきとの、かはりあることぞかし、

かくて次の文にいはく、いよ〳〵御學問をせさせ給ひつゝ云々、一世の源氏又納言大臣になりて後に、さらにみこにもなり、位にもつき玉へるも、あまた例有けり、人がらのかしこきにことよせて、さもやゆづり聞えましなど、よろづにぞおぼしける、秋のつかさめしに、太政大臣になり給ふべきこと云々、

いよ〳〵御學問をせさせ玉ふは、源氏ノ君を、御位につけ奉らまほしくおぼしめして、其例を考へさせ給へる也、あまた例有けりといへるにて知べし、さてつひには、御位をゆづらむとおぼしめして、まづ太政大臣にはなし奉り給へる也、そも〳〵此物のまぎれの事、さき〴〵の巻より、つぎ〳〵にいひ來て、こゝにいたりて、源氏ノ君を、御位につけ奉らむと、おぼしめしよりたるところへおこしたる、次第のおもむきを、よく考ふべし、さて此君の榮えをきはめて書むとならば、今一きざみすゝめて、帝の御位につけ奉るべきを、太上天皇にてやみぬると、作りぬしの、深く心をつけたるもの也、そは狹衣ノ物語に、かの大將を、つひに帝にしたるは、此物語の源氏君をまねびて、今一きはすゝめて書るものなるを、かの大將は、帝の位につけたるによりて、何とかやまことにつくりことめきて、そのよしなく、中々に淺はかに聞ゆるを、紫式部は、そこをよく思ひたるものにて、帝の御位をばのこして、太上天皇も、そのよしなくては、ゆくりなき故に、桐壺ノ巻に、こま人の相したる詞に、國のおやとなりて、帝王のかみなきくらゐにのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、みだれうれふる事やあらむと、はじめよりまづ下がまへをまうけおきて、此物のまぎれをかきて、かならず尊号を蒙り給はではかなはぬさまに、かきもてゆきて、薄雲ノ巻に至りて、御位につけ奉らむとある所に、此君の詞に、故院の御心ざし、あまたの御子たちの御中に、とりわきておぼしめしながら、位をゆづらせ給はむことをば、おぼしめしよらずなりにけり、何かその御心あらためて、及ばぬきはにはのぼり侍らんとある、これ帝の御位にのぼり給ふべきなれども、その一きはをば、ことさらにのこせりといふ、つくりぬしの下心を、思はせたる詞にて、いとも〳〵心ふかき作りざま也、大

かた此ものゝまぎれをかきたるとは、此源氏ノ君の榮えをきはめむため也といふこと、上ノ件のおもむきごとをかむかへてしるべし、なほいはゞ、かの狹ごろもは、おほかた何事も、此物語をまねびて、すこしづゝ事のさまをかへて書る中に、大將の、女二ノ宮に忍びて逢奉りて、うみ給へる御子を、さがのゐんの皇子にしなして、まぎらはして、後にその御子を、東宮にたて奉らむといふさだめある時、天照大御神の御告によりて、つひに此大將を、位につけたる事は、もはら此冷泉院の物のまぎれを、まねびて書たる物なるを、それも、かの大將を、位につけて、榮えをきはめんためなること、此物がたりと同じ作りぬしの意也、さればかれを以ても、これをなすらへしるべき也、

くさ〲のこゝろばへ

こゝらの物語書どもの中に、此物がたりは、ことにすぐれてめでたき物にして、大かたさきにも後にも、たぐひなし、まづこれよりさきなる、ふる物語どもは、何事も、さしも深く、心をいれて書りとしも見えず、たゞ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事をむねとし、おどろ〲しきさまの事多くなどして、いづれも〲、物のあはれなるすぢなどは、さしもこまやかにふかくはあらず、又これより後の物語どもは、さごろもなどは、何事も、もはら此物がたりのさまをならひて、心をいれたりとは見ゆるものから、こよなくおとれり、其外もみなことなることなし、たゞ此物語ぞ、こよなくて、殊に深く、よろづに心をいれて書る物にして、すべての文詞のめでたきことは、さらにもいはず、よにふる人のたゝずまひ、春夏秋冬をり〲の空のけしき、木草のありさまなどまで、すべて書ざまめでたき中にも、男女、その人々の、けはひ心ばせを、おの〲こと〲に書キ分ケて、ほめたるさまなども、皆其人〲の、けはひ心ばへにしたがひて、一トやうならず、よく分れて、うつゝの人にあひ見るごとく、おしはからるゝなど、おぼろけの筆の、かけても及ぶべきさまにあらず、さて又よろづよりもめでたきことは、まづからぶみなどは、よにすぐれたりといふも、世の人の、事にふれて思ふ心の有さまを書ることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく淺きもの也、すべて人の心といふものは、からぶみに書ると、一トかたにつきゞりなる物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだ〲しくめゝしく、みだれあひ

て、さだまりがたく、さま〴〵のくまおほかる物なるを、此物語には、さるくだ〴〵しきくま〴〵まで、のこるかたなく、いともくはしく、こまかに書あらはしたること、くもりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて、大かた人の情(ココロ)のあるやうを書るさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさきにも、たぐふべきふみはあらじとぞおぼゆる、又すべて巻巻の中に、めづらしくおどろ〳〵しく、めさむるやうの事は、をさ〳〵なくて、はじめよりをはりまで、たゞよのつねの、なだらかなる事の、同じやうなるすぢをのみいひて、いと長き書なれども、よむにうるさくおぼゆることなく、うむことはなくて、たゞつぎゆかしくのみぞおぼゆるかし、おのれをしへ子どものために、はやくよみ、此ものがたりを、よみときてきかすること、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、説(トク)にうむ心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、いさゝかもうむこゝろいでこず、たびごとに、はじめてよみたらむこゝちして、めづらしくおかしくのみおぼゆるにも、いみしくすぐれたるほどはしられて、かへす〴〵めでたくなん、

○ある人のとひけるは、伊勢物語は、たゞ一言二言に、心をこめて、すべて詞すくなく、みじかく書とれるは、まことにすぐれたる文といふべきを、此物語は、かれにくらぶれば、こよなく言おほく長くて、あまりくはしきかたに過たるにはあらずや、此ことわりいかにといふに、こたへけらく、まづもろこし人の、文のさまを論ずるやう、大かたことずくなに、みじかく書とれるを、よしとするは、まことにさることにて、こゝの文はた同じことにて、いせ物語は、まことにことずくなに、めでたきを、こと物語にまされり、然るに此物語の、詞長くくはしきは、いせ物がたりにはおとれるにこそと思ふは、其文のよきあしきをば、たづねずして、たゞ言の長きとみじかきとをもて、おとりまさりをさだめむとするは、かのもろこしぶみのさだめに、なづめるもの也、つたなくて、言多きがあしきとは、もとより論なけれど、然りとて又、ひとむきに、長きをわろしと定むべきにはあらず、みじかくても、わろきはわろく、長くても、よきはよし、此物語の文は、言おほけれども、さらにいたづらなることなく、よきほどに長くて、いと長きところも、長きまゝに、いよ〳〵めでたくこそあれ、かの伊勢物語などゝは、もとより書ざまのおもむきの、ことなるものにして、ことずくなにみじかく書むと、つ

こめたる物にはあらず、こまかにくはしくかゝむこしたる文なれば、かの物語などを、例に引出て、おとりまさりをいふべきわざにはあらずなん、

○すべて物語の哥の事、伊勢物がたりなどのは、おほくは古哥なれば、よきがおほきを、作りぬしの、あらたによみたりとおぼしきは、よからず、中にはえもいはずわろきもあり、其外の古き作り物語ども、大かた哥はみなわろし、然るに此源氏の物語なるは、みな作りぬしのよめるなるに、わろきはをさ／＼見えず、みなよろしき中に、すぐれたるもまじれり、哥は源氏なるよりは、狭衣ぞよろしき、といふ人もあれど、然らず、さごろもの、ほかの古物語どもの哥にくらぶれば、げにこよなくよろしけれども、源氏のよりまされるとはあらず、

○此物語、源氏ノ君をはじめて、よき人とこしたる人のうへの事は、何事も、めでたきさまにほめたるに、そのよみ玉へる哥のみは、ほめたる所一つもなくして、其人の他事(こと〳〵)のよきにあはせては、哥はあしきやうにいへるとのみ、ここ／＼見えたる、そは此物語の中の人々の哥は、みな紫式部みづからよめるなれば、ほむれば、われぼめになるゆゑ也、桐壺ノ巻に、「あらき風云々、などやうに、みだりがはしきを、心をさめざりけるほどゝ、御らんじゆるすべし、夕顔ノ巻に、「さきのよの云々、かやうのすぢなども、さるはこゝろもとなかゝめり、心もとなしとは、哥よむ事なども、はか／＼しからぬよし也、榊ノ巻に、わりなき御心まどひどもに、中々こともゆかぬにや、「大かたの云々、又「かげひろみ云々、なにばかりのことにもあらぬを、をりからの物あはれにて、大將の御袖いたうぬれぬ、「さえわたる云々、とおぼすまゝに、あまりわか／＼しうぞあるや、朝兒ノ巻に、「秋はてゝ云々、何のおかしきふしもなきを、初音ノ巻に、「引わかれ云々、をさなき御心にまかせて、くだ／＼しくぞあめるや、こてふの巻に、「花ぞのゝ云々、「こてふも云々、とぞ有ける、すぐれたる御らうどもに、かやうの事は、たへぬにや有けん、おもふやうにこそ見えぬ、御口つきどもなゝめれ、野分ノ巻に、されどあやしくさだまりて、にくき御口つきこそ物し給へ、「風さわぎ云々、眞木柱ノ巻に、「九重に云々、ことなることなきなれども、御有さまけはひを見奉るほどは、おかしくもや有けむ、ゆふ霧ノ巻に、「ふぢ衣云々、よからねど、をりからに、忍びやかなるこわづかひ

などを、よろしう聞なし給へり、橋姫ノ卷に、「いかでかく云々、よからねど、そのをりは、あはれなりけり、總角ノ卷に、「へだてなき云々、いとゞなほ〳〵しきを、おぼしけるまゝと、まち見給ふ人は、たゞあはれにぞ、思ひなされ玉ふ、宿木ノ卷に、「すべらきの云々、「萬世を云々、「君がため云々、「よのつねの云々、かやうに、ことなるおかしきふしもなくてのみぞ、あゝなりし、東屋ノ卷に、「ひたぶるに云々、「うきよには云々、となほ〳〵しきことゞもを、いひかはしてなん、心をのべける、手習ノ卷に、「ふかき夜の云々、となふかたはなると云々、などあるたぐひ、みなつくりぬしの、卑下の心しらひにていへる詞どもなるを、むかしより、そこに心づける人なくて、たゞまことにその詞のよからぬやうにのみ、注せられたるは、いかにぞや、

○紫式部が心ばへは、此物語と、かの日記とをもて考ふるに、女の學問だてして、さかしだちたがるをば、いみしくにくみて、みづからも、人にしか思はれじと、深く用意したるさま、所々に見えたり、帚木ノ卷に、すべて男も女も、わろものは云々、といふより、いはまほしからんことをも、一つ二つのふしは、すぐすべくなむあンべかりける、といふまでの詞など、みづからの、學問だてをにくみてせぬ心を、しめしたる物なり、同卷に、などかは女といはむからに云々、めにもみゝにもとまること、じねんに多かるべしといへるは、女とても、さばかりの事は、もとよりたれも有べきことなれば、これにほこるべきわざにあらずといひて、みづからほこる心なきことを、しらせたる也、又同卷に、はかせのむすめの事を、式部ノ丞が語りたるを、君たち、むくつけきことゝ、つまはじきをして、あはめ給へるよしかきたる、此女のやうをかむかふるに、さばかりあしくいふべき事は見えざるを紫式部みづから、學問だてをにくむ心を見せむために、ことさらにいみしくあしき事のやうに、いひなしたるものなり、又をとめの卷に、大學寮の衆の、ふるまひよはひ物いひなどを、いともあやしげに書るも、一興ながら、わざととりたてゝ學問する者の、優ならぬふしを、ことさらにいみしくいひなせるなり、さるはよの人のならひ、すべて何わざも、おのが好みたふとむすぢの事をば、殊にめでたく、よきさまにいひなさむとするわざなるに、みづからことに學問を好みながら、かへりてかく、よからぬさまにいへることもあるは、人にことなる。

ふかき心しらひにぞ有ける、

○ある人とひけるは、此物語に、源氏君をはじめて、よき人とした る人々の、事にふれて、思へる心のやうを書るを見るに、すべてをゝしくうるはしきことなく、ものを一かたに思ひさだむることあたはずして、いろ／＼におもひみだれて、たゞめゝしく心よわく、はかなきさまなるは、いかにぞや、こたへけらく、大かた人のまことの心のおくの、くま／＼をさぐりて見れば、みなたゞめゝしく、はかなきことの多かる物なるを、をゝしくさかしげなるは、みづからかへりみて、もてつけ守りたるものにして、人にかたる時などは、いよ／＼つくろひて、うるはしきさまにうはべをかざりてこそ物すれ、有のまゝにはうちいでず、たとへばいみじきもののふの、君のため国のために、たゝかひのところにおきて、いさぎよく討死といふ事したるを、物にしるさむに、そのしわざも心も、まことに丈夫といふものにして、心のうち、さこそをゝしく有けめと、おしはからるゝを、それも其時の、心のおくのくま／＼までを、くはしく書出むには、かたつかたには、さすがに故郷の父母も、恋しかるべし、妻子のかほも、いま一たびあひ見まほしく思ふべし、命もいさゝかはをしからざらむ、これみな人かならず、のがれがたき人のまことの情なるを、大丈夫ならんからに、さるめゝしき心は、露も思はずといはゞ、中中にこゝろなき、岩木のたぐひなるべし、然るをもろこしやうの、よのつねの書どもは、おのが心をいふは、さらにもいはず、人をほめてしるすことても、たゞもてつけまもりたる、うはべの心のかぎりを書て、人わろきくま／＼をば、はぶきかくしたる物なる故に、うち見るにかしこくをゝしく、うるはしくおぼゆるを、さる書どもにのみなれたる、めうつしに、物語書に、しかはかなくめゝしくおぼゆる也、すべて物語は、しか、かなたの教誡などの書にはあらず、もののあはれなるすぢを見せむために、人の情のあるがまゝを書たる中にも、此物がたりは、殊に心をいれて、人の情のあるやうを、くまなくくはしく書あらはせる物にて、その中にも、よき人は、物のあはれをしるかたの深ければ、其人々の、思ひ思へる心のやうをしるせるには、殊にめゝしく心よわく聞ゆる事の多き也、

○又とふ、男女のなからひのはじめ、みそか事はさる物にて、おや／＼のうけひきゆるして、あはするすぢも、もろこし

などのやうに、正しくきはやかにはあらで、みだりがはしきさまなるはいかに、こたふ、そは昔と今とかはれるを、今のもろこしやうのならはしを、本として見る故に、むかしのは、みだりがはしきがごとおぼゆる也、すべて何事も、もろこしはもろこし、皇國は皇國、今は今、むかしはむかしなるを、儒者などは、ひたぶるにもろこしの國俗(クニブリ)を本として、物をさだめ、今の人は、今のならはしになれて、昔をあやしむ、これみなかたおち也、そも〳〵昔は、大かた男女、つねにたいめするに、うとき人は、簾のまへにだによせず、やゝしたしきも、簾をへだてたるうへに、几帳をさへ立てへだてゝあへり、はらからなどゝいへども、おほくは几帳をへだてゝ、あらはに面をば見せず、すべて男には、聲をきかするをだに、つゝましくせり、これらのならひをもて見れば、今の世のならひ、又もろこしのならひは、いと〳〵みだりがはしくこそ有けれ、又新枕のほどのさほうも、昔は、女のもとに、男のゆきかよひたりしとなるを、今は、男の家に、女のゆくことなれるは、もろこしの國俗にうつれる也、これはたことわりをもていはゞ、男のゆくこそ、正しきにはあれ、女のまづゆくは、いかゞとこそおぼゆる、されば又かへりて、むかしの人の、今のよのさまを見たらんには、いとみだりがはしく、正しからずとぞいはまし、

○又とふ、物語のうち、病などにいへば、物のけ〳〵とて、祈り加持などをのみしさわぎて、いみしきなやみにも、ひたぶるに法師をのみたのみて、くすしに見せ、藥を用ひたることは、かつて見えざるは、おろかなるわざにあらずや、こたふ、これも又そのころの、世ノ中の有さま也、但し藥の事の見えざるによりて、そのかみ藥を用ふることは、なかりしかと思ふは、たがへり、いにしへより、醫藥の事は、古き書どもに見え、又病を、くすりの事といひ、若菜ノ卷の詞に、くすしなどやうのさまして云々、宿木ノ卷に、くすしのつらにてもさぶらはむ、などあるをもて、藥をも醫をも、用ひたりし事をしるべし、然るにくすしの事はかゝずして、げんざの事のみを、多くかけるは、神佛のしるしをあふぎ、げんざの力をたのむは、物はかなくおほとかに、あはれなるかたに聞ゆるを、くすしをたのみて、藥を用ふるは、さかしだちて、すこしにくきかた有て、あはれならず、されば東三條ノ院は、御病の時も、くすしに見せ給はざりしと、榮華物語に見えたり、そ

のかみのさばかり何事もあてに、けたかゝりしならひにては、やむごとなき女の御あたりなごには、げにさるものを、ちかづけ給はむ事は、つゝましく、あるまじきわざにおぼしけむも、ことわりなりけり、又帚木ノ巻に、ごくねちのさうやくをぶくしたる女を、いみしくむくつけき事に、いひおこしたるなごをも、思ふべし、されば薬をば、くすりとはいはで、たゞ御湯といへり、病者（ビヤウザ）の事をかける所に、御湯とあるは、多く薬のことゝ聞えたり、同じ言ながら、病を、くすりの事なごやうにいふは、さしも聞えぬを、くすりをのむなごいふことは、あやしげに聞ゆるなるべし、すべて此物語の中には、いさゝかの事にも、心をつけたる、かやうのたぐひ多し、今の世の心にては、薬をのむなごいはむは、なにの、賤（アヤシ）きことかあらむと、おぼゆべかめれご、かやうのことは、時世によりて、かはるわざぞかし、たとへばかしらつきつらつきなごいふ言は、今の世にては、いと賤しき詞なれごも、むかしはさはあらざりしにや、物語には、高き人の形を、ほめたる詞にもおほくいへり、これらにても、時代〳〵のならひあることを、しるべし、すべて其時のならひをよくしるべき事、ものがたりを見る一つの心得也、

○例のとふ、此物語、よの中に有ッとある事を、かけりとならば、下ざまのものゝうへをも、くはしくかくべきわざなるに、たゞ上ざまのことのみにて、いやしき者のうへとては、をさ〳〵かゝざるは、いかなる心にか、こたふ、すべて世ノ中は、ときよ〳〵、人のほご〳〵、國ところ、むれ〳〵に、おの〳〵その世の中のある物にて、いにしへはいにしへのよの中、今はいまのよの中也、高き人は、たかき人ごちの世ノ中あり、いやしきものは、賤きものゝよのなかあり、ものゝふはもののふのよの中、百姓は百姓の世の中、あきびとはあき人の世ノ中有て、つねに心に思ふことも、おほくはそのおのれ〳〵が世の中の事を、おもふわざなり、かくて物語書は、今の世こそあれ、むかしは、おほかた下ざまのいやしき者なごの、見る物にはあらで、然るべきほごより、上ざまの人の、もてあそぶものなりしかば、その上ざまの人々の世ノ中に、つねにある事を、むねと書る也、よろづの事、我身にしたしく、つねに見聞ヶ事ならでは、ものうとくして、感ずること浅きものなればぞかし、かのつくしのげんが、むくつけかりしけはひ、うき船の君のまゝ父の常陸ノ介が、あらゝかにゐなかびたりし

さまなどを思へば、ましてそれより下ざまには、いかでか上ざまの人の、みゝにも目にもとまるふしはあらむ、夕顔ノ巻に、物のなさけしらぬ山がつといひ、紅葉賀ノ巻に、物見しるまじき下人などのなどいひ、榮華物語音樂ノ巻に、法成寺つくらるゝ事をいへるところに、池にある翁の、哥よめるを、かゝる者も、物思ひしるにやとあはれ也といひ、須磨ノ巻に、源氏ノ君の、海人どもの、身のうへの事を、うれへ申せるを、聞給ひて、そこはかとなくさへづるも、心のゆくへは、同じことなるかなと、あはれに見給ふ、とあるたぐひをもて、下ざまの事の、物どほくうときはさとしるべし、又つくりぬし紫式部みづからも、むげに下ざまの人ならねば、つねに見聞て、思ひける事は、皆上ざまの事にして、下ざまの事にはあらざめるをや、

〇哥よむべき心ばへをしらむとならば、此物がたりを、つねによく見べし、此ものがたりに書たる事ども、人々のしわざ心ばへは、ことごとく哥よむべきこゝろばへ也、然いふ故はいかにといふに、まづ人の情(コヽロ)は、古へ今、たかきみじかき、かはることなき物とはいへども、其中に、時代のならひ、身のほどなど、おのれ〳〵が世ノ中につきて、いさゝかゝはれるこゝろも、なきにあらず、かくて哥も、情(コヽロ)の物に感ずるより、よみ出るわざなれば、いにしへ今高きみじかき、かはりはあるまじかるべきことわりながらも、上つ代こそあれ、中むかしよりこなたの哥ぶしも、かならず今思ふ心をのみ、有りのまゝによみいづるにもあらず、いにしへの哥をまねびて、其おもむきによむわざなれば、いにしへの世の有さま、人の心ばへしわざを、よくしらではかなはぬわざ也、又いにしへをまねぶといふ中にも、萬葉集よりあなたのは、世あがり、事ことほくして、そのさまいたくふりにたれば、さしおきて、おほかた古今集よりこなたを、まねぶとなるに、そのよゝの哥どもはみな、むげにいやしき山がつのよめるにはあらず、されば古への哥をまねぶにつきては、中の品より上ざまの人の、心しわざ、その品の世の中をも、しらではかなはぬわざなるを、今の世にして、それこまかにしらんためには、この物語を見るにまさるはなし、いにしへのも、たゞ哥を見たるのみにては、その哥のいできつる、もとの心の、くはしきやうをしらざる故に、まねぶに猶うときかたにあるを、此物語を明暮によみなれぬれば、源氏ノ君をはじめて、よき事のかぎ

りをこりあつめて、みやびたる人々にまじらひて、まのあたりそのけはひかたちを見、その物語をきくがごこくにて、そのしわざになれ、その心のうちまで、こまかに見しられ、又そのかみの雲の上の有さま、をり〳〵のおほやけ事、やむとなき家々の、うち〳〵の事ごもまで、雅たる事のかぎりを、今のうつゝのめのまへに、見るがごこくなれば、いにしへびこの哥の出來たる、本の有さま心の、よくしられて、かやうの哥は、しか〳〵の時にいできて、そのをりのよみ人の心は、しか〳〵なる物ぞこやうに、くはしくしらるゝわざぞかし、さるゆゑに、此物語に書たる事ごも、人々のしわざ心ばへは、ここ〴〵く哥よむべきこゝろばへぞこはいふ也、さて今の哥は、古へのをまねびてよむこいふよしを、なほくはしくいはゞ、まづ哥こいふもの、其本をいはむには、おのか心に思ふふしをこそ、よみいづべきわざなれ、人のよめる意詞を、ならひまねぶべきにはあらざれごも、そは上つ代こそあれ、中昔よりは、然のみにもあらず、又すべて哥は、神にも人にもきかしめて、あはれを見するわざにしあれば、よくよまむこかまふるも、ゝこよりの眞心にして、後の偽りにはあらざるを、よき哥をよまむこするには、かならず古へのよき哥を、ならひまねばではえあらず、さていにしへにならふにつきては、今の世こ、ここなるこ多くして、今はさしもあらぬ事も、古への人は、いみしき事にして、おほくよめるもおほく、今の人の、いみしくもてはやす事も、古への哥には、よまぬもおほきを、さるたぐひ、大かた今の世にはかゝはらで、もはら古へにしたがひて、物するこ也、古へ人は、月花をめでつる心の深きこ、又それにつけて、思ふ事のすぢを感ぜしほごなご、今の人こはこよなかりき、今の人は、一わたりこそ、花はおもしろし、月はあはれなりこも見るなれ、ふかく心にそむばかりはあらぬを、哥には、たゞいにしへ人のごこ、深く思ふさまによまずはあるべからず、今の人の心のまゝによみたらんは、あはれ淺かるべし、又旅せぬ人も、旅の哥をよみ、戀せぬ人も、戀の哥よむたぐひ、すべてみな古のをならひまねぶにあらずや、そも〳〵よろづの事、いにしへ人の情ならむからに、またく哥によめるばかりはあらざりしとも有べけれご、せちにおもふとを、たしかにいはむこては、まとより過て、いみしくなるは、おのづからのいきほひぞかし、かのよきさまにいふこては、よきとのかぎりをえりいで、こいへる如く、哥も、物のあはれをふかくいひて、見る人

聞ク人を、深く感ぜしめむとするわざなれば、いにしへの哥ども、たとひ實(マコト)には過たる事のあらむにても、それはとまれかくまれ、いふべきにあらず、たゞそのこゝろありさまを、まねぶべきわざになむ有ける、さて此物語をつねによみて、心を物語の中の人々の世の中になして、哥よむときは、おのづから古へのみやびやかなる情(コヽロ)のうつりて、俗の人の情(コヽロ)とは、はるかにまさりて、同じき月花を見たる趣も、こよなくあはれ深かるべし、さるを近き世の人は、古への哥をまねぶとはすれど、古ヘ人の世ノ中をしらず、その情(コヽロ)にうとくして、たゞおのが今の心にまかせて、よむ故に、古へにたがひて、鄙(アヤ)しげなるとのみ、おほくいでくるぞかし、哥のみにもあらず、ふるき集どもの詞書などを見るにも、物語にうとき人は、其世の有リさまを、くはしくしらざる故に、しらぬ世界のこゝちせられて、物どほくおぼゆるふし多きを、此物語をよくよみて、そのかみの世の中のありさまに、心のなれぬれば、ふるき哥はさらにもいはず、一くだり二くだりよむ詞書も、今の世の、おのが里の事を、見聞たらむやうに、ちかくしたしくおぼえて、物のあはれも、今一きはまさるわざぞかし、かへすぐも、哥よまむ人、又古へのみやびをしのばむ人は、殊に此物語をなん、よく見べきわざなりける、」

源氏物語玉の小櫛三の巻

改め正したる年立の圖

桐壺帝御在位

きりつぼ

年齢	事項
	桐壺ノ更衣ときめき給ふ事
一歳	源氏ノ君生れ玉ふ
二歳	
三歳	桐壺更衣うせ玉ふ
四歳	一の宮立坊後に朱雀院と申す是也
五歳	
六歳	
七歳	源氏君御ふみはじめ
八歳	
九歳	
十歳	
十一	
十二	源氏君元服し給ふ
十三	

年	官位	巻	事
十四	源氏君任中將		
十五			○玉かづらの君今年の春生れ玉ふよし夕顔巻に見ゆ
十六			
十七		帚木	夏 源氏君の官中將也
		空蟬	夏
		夕顔	夏 十月
十八	源氏君正三位	若紫	三月源氏君わらは病 紫ノ上十歳ばかり 藤壺女御懐妊 十月朱雀院行幸
		末摘花	春源氏君わらはやみ 朱雀院行幸
		もみぢの賀	十月朱雀院行幸
十九	源氏君宰相		春 冷泉院御誕生 藤壺ノ女御后に立給ふ
			秋 七月源氏君任宰相 帝御譲位の御心づかひちかくなる

源氏君	大將	朱雀院御在位
二十	花宴	春　○桐壺ノ帝の御譲位朱雀院の受禪などの御事今年に有べし
廿一		○源氏君今年大將になり給へるよし上ノ若菜ノ巻に見ゆ
廿二	あふひ	御代改まれり　源氏君官大將也　前坊の姫宮齋宮に定り玉ふ 桐壺帝の女三宮齋院になり給ふ 夕霧ノ君生れ給ふ　八月葵ノ上うせ給ふ
廿三	あふひ / 賢木	正月 九月前坊の姫宮伊勢に下り給ふ年十四 桐壺ノ帝かくれさせ給ふ
廿四	賢木	朝顔ノ姫君齋院になり玉ふ 藤壺ノ中宮御かざりおろし給ふ
廿五	花散里 / 賢木	夏 左大臣致仕 夏
廿六	須磨	三月源氏君須磨ノ浦に下り給ふ
廿七	須磨 / 明石	三月 三月　二條ノ太政大臣薨

年	官位	巻	事項
廿八	源氏君 権大納言	蓬生	源氏君歸京
			源氏君修八講
		石	今上二歳にならせ給ふ
			八月源氏君京にかへりのぼり玉ふ
			八月源氏君権大納言になり給ふ
			十月源氏君八講を行ひ給ふ
廿九	源氏君 内大臣	關屋	四月源氏ノ君末摘花ノ君をとひ玉ふ
			秋
		みをつくし	二月冷泉院御元服御とし十一
			朱雀院御譲位　今上東宮に立玉ふ
			源氏君任内大臣　三月明石ノ姫君生れ玉ふ
			六條ノ御息所かくれ給ふ　冬
十三	冷泉院 御在位		
卅一		絵合	春前齋宮入内梅つぼと聞ゆ後秋好中宮と申す是也
			三月
		松風	明石ノ姫君三歳のよし見ゆ
			秋
			冬
卅二		薄雲	薄雲女院かくれさせ給ふ御年卅七　秋
		朝顔	九月
			冬

源氏君
太政大臣

年	巻	事項
卅三	をとめ	夏夕霧君元服 梅壺ノ女御爲中宮 秋好中宮 源氏君任太政大臣
卅四		秋夕霧君任侍從 八月六條院わたまし 十月
卅五	玉鬘	玉かづらの君 廿歳ばかり 春 玉葛君上京 秋玉葛君初瀨詣 紫ノ上年廿七八のよし見ゆ 十月玉葛君六條院にうつりすみ玉ふ 歲の暮
卅六	初音	正月 夕霧君中將のよし見ゆ
	胡蝶	三月 四月
	螢	五月
	常夏	夏 六月と聞ゆ

源氏君准太上天皇

篝火	秋 七月と聞ゆ	
野分	秋 八月と聞ゆ	
行幸	十二月大原野行幸 二月	
藤袴	夕霧君宰相中将のよし見ゆ 秋	卅七
槇柱	冬	卅七
	冬	卅八
梅枝	春	卅九
藤末葉	三月 源氏君卅九歳のよし見ゆ 同君准太上天皇 夕霧君中納言になり玉ふ 十月	卅九

今上御在位

薫君誕生

年	巻	事
四十	上若菜	十二月 女三宮十三四歳のよし見ゆ 源氏君四十御賀 夕霧君任大将
四十一	上若菜	三月東宮御誕生
四十一	下若菜	三月
四十二	下若菜	年月ふるよし見ゆ
四十三	下若菜	
四十四	下若菜	
四十五	下若菜	
四十六	下若菜	冷泉院即位より十八年 御讓位 立坊 夕霧君任大納言左大將
四十七	下若菜	朱雀院御年五十 女三宮御年廿一二 紫上卅七歳 匂兵部卿宮誕生 十二月
四十八	柏木	正月 薫君誕生 源氏君四十八歳のよし見ゆ 秋
四十九	横笛	二月 匂宮三歳のよし見ゆ 秋

鈴虫	夕霧	御法	幻	雲がくれ
夏 秋	秋 冬	春 秋	春 冬	
		紫上かくれ給ふ		此巻の間に源氏君かくれ給ふ
五十		五十一	五十二	

薫君	侍従	中将

薫君	三位宰相

たけがは	
	薫ノ君十四五歳とあり 官は四位ノ侍従
	年をふるよし見ゆ
	薫ノ君宰相中將のよし見ゆ
	夕霧君任左大臣 紅梅君任右大臣 薫君任中納言

薫君	巻	
十四歳	にほふみや	薫君十四歳と見ゆ 春任侍従　秋任右中將
十五	にほふみや	
十六	にほふみや	
十七	にほふみや	
十八	にほふみや	
十九	にほふみや	薫君三位ノ宰相になり給ノ 中將本のごとし
二十	橋姫	正月 薫ノ君宰相中將と見ゆ 同君始メて宇治ノ八宮に參り給ノ
廿一	橋姫	
廿二	橋姫	薫君宇治ノ宮に參り給ふと三年に なるよし見ゆ 冬
廿三	椎本	二月 秋薫君任中納言
		夏

薫君
中納言

紅梅

夕霧君左大臣のよし見ゆ
薫君中納言のよし見ゆ
匂宮しば〳〵宇治に通ひ給ふ

宿木

夏
女二宮十四歳

浮舟ノ君廿歳許

夕霧君の六ノ君を匂宮にあはせ玉ふ

総角

秋　匂宮はじめて宇治の中ノ君に逢給ふ
冬　宇治の大姫君かくれ給ふ

早蕨

正月
二月宇治の中ノ君匂宮の二條院にうつり給ふ

薫君
権大納言
右大将

二月　薫君任権大納言右大将
四月
八月
九月

東屋

浮舟

正月
三月

蜻蛉

三月
秋

手習

三月

夢浮橋

四五月ごろ
夏

廿四	廿五	廿六	廿七	廿八

桐壺巻

源氏ノ君生れ玉へるより、十二歳元服の事まで見えたり、かくて巻の末に、おとなになり給ひて後は云々とあるを、花鳥餘情に、此詞に、十三歳十四歳十五歳、三箇年の事をばこめて、帚木ノ巻は、十六歳也とあり、今思ふに然らず、おとなになり給ふとは、元服して、おとなの形になり給へるよしなり、これに三年こもれりとはいふべからず、なほ下の文に、たゞいまはをさなき御ほどに、つみなくおぼしなして云々、とあるにてしるべし、されば此巻は、十二歳までにて、帚木へ、年立はつゞかざる也、伊勢物語に、むかし男、うひかうぶりしてと、書出せるも、業平ノ朝臣の成人のはじめを、まづいひおきて、さて奈良へ下られたるは、其後いつにても有ルべきがごとく、此物語も、此巻に、まづ元服迄を書おきて、さて年立は、帚木よりつゞけたる也、桐壺ノ巻は、序文までもいりたゝずといへる說、いはれたることなり、

帚木巻

源氏ノ君十七歳の夏の事也、此時官は中將也、但し中將に任ぜられし事は、桐つぼと此巻との間に有べし、さて諸抄に此巻を十六歳とせられたるは、誤也、とも〳〵源氏ノ君の齢(トシ)は、桐壺巻に十二といへるより後、藤末葉(フヂノウラバ)ノ巻に、三十九歳のよし見えたる、そのあひだには、すべて齢(トシ)をいへることなければ、此巻を十六歳とせられたるも、たゞかの藤末葉巻より、逆(サカサマ)にかぞへて定めたるものなるを、諸抄の說、其間ダに一年の違ひ有ル故に、此巻は十七歳也その一年たがへるよしは、玉かづらの巻のこころにいふべし、

空蟬巻　夕顔巻

帚木巻の同年にて、源氏君十七歳也、十六とするは誤なると、上にいへるがごとし、これよりつぎ〳〵處女(ヲトメ)ノ巻まで、諸抄一年のたがひ有ッとしるべし、

若紫巻

同君十八歳なり、

末摘花巻

同君十八の春より、十九の正月まで也、　或人問、夕顔ノ上のうせられしは、去年の秋なるに、此巻のはじめに、思へども猶あかざりし夕顔の露、とし月ふれど、おぼしわすれずとあり、秋より明年の春までの事を、年月ふれどゝはいかゞ、答、さる例多し、胡蝶巻に、玉葛ノ君は、去年の冬、はじめて源氏君の御方にわたり給へるに、その又の年の春の、源氏君の詞に、かく年へぬるむつましさにと見え、蜻蛉巻に、去年の夏よりの事を、今年の夏の詞に、年ごろと見え、浮舟巻にも、秋より又の年の春までのことを、としごろと有ルたぐひ也、

紅葉賀巻

同君十八の十月より、十九の秋まで也、　或人問、若紫も末摘花も此巻も、はじめの同年なるとは、何によりてしれるにか、答、朱雀院行幸の事、若紫の末、又末摘花にもまだ有て、此巻の始ノに、まさしく見えたり、これにて同年なるとしるし、又若紫に、藤壺ノ女御、夏より姫玉（ハラミ）へるよし見えて、此巻の末の年の二月に、御産あり、又紫ノ上の祖母（オバ）ノ尼君は、若紫巻の九月にかくれ給ひし、此巻に、三箇月にて、紫ノ上除服（ブクヌギ）の事あり、これらにてもしるべし、

花宴巻

同君二十歳の春なり、

あふひの巻

同君廿二より、廿三の正月まで也、問、花宴と此巻との間に、一年へだゝれる事は、なにゝよりて知れるにか、答、上ノ若菜巻に、源氏ノ君の事を、壮（ハタチ）がうちは、納言にもならずなりにきかし、一つあまりてや、宰相にて大將かけ給へりけむとある、これ宰相にておはせしが、廿一のとし、大將を兼給へる也、さて此巻のはじめに、御身のやむごとなさもそふにやといひて、次の文にはじめて、大將の君とあるは、去年すでに大將になり給へる書ざま也、然るにもし此巻の始ノを、

その同じ廿一歳のことゝすることきは、冷泉院の御年齢に違へり、此帝は、紅葉賀巻に生れさせ給ひて、みをつくしの巻に御元服、十一歳にならせ給ふよし見えたればなり、これにて花宴と此巻との間に、一年へたることをしるべし、或説に、花宴巻と、此巻の初ノ年とを同年とせるはひがこと也、其故は、花宴に、三月の末までの事有て、此巻のはじめは、四月なるに、其間ゝにいかでか、朱雀院の受禪、冷泉院の立坊、齋宮の卜定、源氏君の任大將、なごの事はあるべき、又齋院の御禊のことも、いたく違へり、又秋好中宮の齋宮になり給ふは、必朱雀院即位の後なるに、此巻の初ノ年の文に、齋宮は去年内にいりり給ふべかりしをといへるも、いたくたがへり、しかればこれかれ、此説用るにたらざると、一條ノ禪閤の年立に、くはしく辨へ玉へり、

榊　　巻

同君廿三歳、葵巻の末と同年の九月より、廿五の夏まで也、

花　散　里　巻

同君廿五歳、榊巻の末と同じ夏五月の事也、

須　磨　巻

同君廿六歳の三月より、廿七歳の三月までなり、

明　石　巻

同君廿七歳、すまの巻の末と同じ三月よりつゞきて、廿八の秋まで也、

みをつくしの巻

同君廿八歳、明石巻の末と同年の十月より、廿九歳の冬まで也、

蓬　生　巻

此巻はもはら常陸宮の姫君の事を書て、始ノは源氏君の須磨ノ浦に下り給ひしころより有て、同君京にかへり給ひて、又の

こし廿九歳の四月に、此姫君をとふらひ玉へる事見えたり、さて末には、二年ばかり、此ふる宮にながめ給ひてといひ、又大貳の北ノ方のぼりてともあり、此大貳は、源氏君の京にかへり玉へる事をいへる年の冬、下りつれば、それより五年有て、のぼるべければ、遥に後の事也、然れども此巻と立は、源氏君廿八歳の秋、歸京のほどより、その又の年四月までとすべし、

關屋巻

同君廿九歳の秋九月也、

繪合巻

同君卅一歳の春也、問、關屋と此巻との間に、一年へだゝれることは、何によりて知れるにか、答、六條御息所は、みをつくしの巻の末の秋、かくれ玉へるに、此巻のはじめに、前齋宮の入内の事有ㇽ、もし此巻を、みをつくしの明年の春とせば、母君の服のうちなれば、入内あるべきにあらず、又明石ノ姫君は、みをつくしの末の年、生れ玉へるを、此巻と同年の松風巻に、源氏君の詞に、ひるの子がよはひにもなりにけるをとあるは、三歳になり給へるよし也、これらにてしるべし、

松風巻

繪合巻の同年にて、同君卅一の秋也、

薄雲巻

松風と同年の冬より、その又のとし、同君卅二の秋まで也、

朝顔巻

薄雲巻の末の同年にして、同君の卅二の九月より、冬までなり、

をとめの巻

同君卅三歳の夏のはじめより、卅五の十月まで也、

玉かづらの巻

此卷は、はじめは、玉鬘ノ君四歳にて、筑紫へ下り給ひし事より、書出せり、此君は、夕顔卷に、をとゝし生れ玉へるよし見えたれば、四歳の時は、若紫卷にあたれり、それより筑紫にて、年をかさね給ひて、はたちばかりになり玉ふまゝにとあるは、源氏君卅四歳、をとめの卷の中の年にあたれり、此卷の年立は、これよりとすべし、さてその少し下の詞に、さまかへたる春の夕暮也とあるは、廿ばかりといひし次の年の、三月と聞えたれば、廿一歳の時也、かくてその同じ年の、三四月ごろ、つくしをにげ出て、京にのぼり給ひ、その秋、初瀬詣有て、右近にめぐりあひ玉ひ、十月に、六條院にうつり住玉ひて、その年の暮の事まで見えたり、これ源氏君卅五歳、をとめの卷の末と、同年の暮也、然るを諸抄の説は、此卷の末の年を、をとめの卷の末の明年として、其年を、源氏君卅五歳とせり、そはまづ源氏君の年、帚木卷を十六として、次々にかぞへ來て、をとめの卷の末にて、卅四なるを、此卷の末にて、卅五とはする也、然れども、此卷の末を、をとめの末の明年とするは、いみしきひがことにて、源氏君の齡も、卷々一年たがひ來つる也、此卷の末、すなはちをとめの卷の末と、同年なると明らけし、そのよしは、下にくはしくいふべし、さて又一説には、をとめの卷の末と、此卷の末とを、同年として、源氏君の齡は、をとめの末まで、猶諸抄の説のまゝにて、此卷の末をも、なほ卅四歳として、眞木柱卷の末に、秋のゆふべのたゞならぬにといふ詞あるを、一年とたてゝ、年を足して、若菜卷の、四十歳の數に合せたり、此説は、をとめの末と、此卷の末とを、同年としたるは、いとよろしくして、その證にいへるとゞも、みなよろし、然るに源氏君のとしをば、なほ諸抄の説のごとくにかぞへ來て、卅四歳として、眞木柱卷の、秋の夕への一言を、一年として、しひて年の數を合せたるは、又いみしきしひごと也、さるはたゞ此一言を、一年とすると、みづからも、心よからずは有けめども、源氏君のとし、一年たらずして、若菜卷の四十歳に合はざる故に、やむことえざりし説と聞えたり、されど秋の夕へなどいふ、たゞ一言をもて、一年とすること、さらにさる例なし、そはなほ眞木柱卷のところに、委くあかすべし、そもそもかゝるしひごせるは、帚木卷を、十六歳といへるに、なづめる故也、源氏君の年は、上にもいへるごとく、藤末葉卷までは、いくつと

も見えたるとなければ、帚木は、さかさまにかぞへて、いくつにもあれ、あたる年に定むべきわざなれば、十七歳とすべき也、然定むることは、いづこも〱たがふとなし、かの一説は、此ところをしらずして、誤れるもの也、さて此巻の末は、すなはち處女ノ巻の末と、同年なることの證どもは、かの一説にも、大かたいへるを、今なほくはしく、條々にいはゞ、一、玉かづらの君は、夕顔巻に、をとゝし誕生のよし見えて、此巻の詞に、廿ばかりとあるは、をとめの巻の中の年にあたれるを、京のぼりは、そのあくる年とこそ聞えたれ、一年へだてゝ後のとゝは聞えざれば、諸抄の説たがひて聞ゆ、一、此巻に、右近が初瀬詣よりかへりて、六條院に参りたるところの文に、御門ひきいるゝより、けはひことに、ひろ〱として、まかでまゐる車おほくまよふ、かずならで立出るも、まばゆきこゝちする、玉のうてなゝりと有、これ此院造り出られて、まだ程なくて、めづらしきさま也、此院は、をとめの巻の末に出來をへて、八月にわたましの事見えたり、然るに諸抄の説のごとくにては、此右近が参れるは、その又の年の秋なれば、わたましの後、一年ばかりも過つれば、そのあひだには、右近は度々参りたるべければ、いかでかかくめづらしげには思ふべき、一、初音巻のはじめに、ましていとゞ玉をしけるおまへは云々、といへるわたりなど、六條院新に造られて、始めての初春とこそ聞えたれ、正月臨時客の時に、催馬樂の此殿をうたひたるも、新造の所なる故也、すべて大饗臨時客などに、新所たるに依て、此殿をうたふといへると、古き記に見えたり、又同巻に、つねのとしよりもこと也といへる詞も、細流には、玉葛君のおはするゆゑ也とあれども、なほ此院新しくいかめしく造られたるにかゝるべし、一、胡蝶巻に、春まつ園はと、はげましきこえ給へりし御返りも、此ごろやとおぼし云々、「花園のこてふをさへや云々とある、これは去年の秋、をとめの巻に、中宮の御方より、紫ノ上の御許へ、「心から春まつそのは云々と有ければ、春の花ざかりに、此御いらへは聞え玉へと、源氏君のゝたまひしに、今その明年の花さかりなれば、かの御返り、此ごろぞよろしかるべきとて、此花ぞののこてふをさへやの哥を、紫ノ上より、中宮に奉れ玉へる也、然るに諸抄の説のごとくにては、其間ダに一年へだゝれるといかゞ、明年の花盛リのころは、何のさたもなくて過て、一年をへだてゝ後の春、その御返リ事あるべきものかは、大かた諸抄の、こゝの年立のたがへる事

は此一事にてもしるべきなり、一、螢卷、五月五日、六條院の馬場のおとゞにて、騎射競馬の時、花散里ノ君の事をいへるところに、としごろかくをりふしにつけたる御あそびどもを、人づてにのみ聞給ひけるに、今日めづらしかりつるとばかりをぞ、此まちのおぼえ、きら／＼しくおぼしたるとある、これも此院つくられて、明年の事ならではいかゞ也、一、初音卷より、野分卷まで六帖は、六條院の四季のけしき、そのをり／＼の御あそびを、月次にかきたる、これ新造の明年なるが故也、そも／＼此院は、四季をり／＼の花紅葉、御あそびを、むねとしにて、造られたること、薄雲卷處女卷などに、そのよし見えたり、さる故に、秋八月にわたまし有て、九月より冬の間の事は、處女卷にかき、さてあくる年の正月より、八月までの事共を、此六帖に、つぎ／＼書たり、然るを諸抄の說のごとくならむには、一年のあひだ、その月々の事を、何ともいはず過て、其次のとしに至りて、かくくはしく書たるにや、さることは有べくもおぼえず、おほかた上の條々にて、諸抄の此年立の誤れることは、しるきものなり、問、をとめの卷の末と、玉かづらの卷の末と、同年とすると、なほ疑はし、をとめの卷に、明石ノ上は、十月に六條院にうつり給へるを、玉かづらの卷に、九月のころの文に、北の町にものする人とあり、もし同年ならば、九月には、いまだかの院へはうつられぬ前也、いかゞ、答、をとめの卷八月の文に、すでに、いぬゐの町はあかしの御方と、おぼしおきてさせ給へりとあれば、北の町は、此人の住玉ふべき所に、かねて定まれりし也、又問、夕霧君は、葵卷に生れ玉ひて、上ノ若菜卷に、二十(ハタチ)にもまだわづかなるほどと云々、とある所、諸抄の說にては、十九歲の時なれば、かなへるを、をとめ玉かづらの末を、同年とする時は、十八歲にあたれば、此詞にかなはざるにや、答、おほかた物語の例、廿(ハタチ)卅(ミソヂ)などは、必しもまさしく其年ならでも、たゞ大やうにいへると多し、紅葉賀卷に、源氏君と頭中將とを、はたちのわかうどたちとあるも、其時源氏君十九也、諸抄の年立にては、十八也、又玉鬘卷、三條が詞に、つくしの國に、はたとせばかりへにたるといへるも、十八年の間の事也、さればこの夕霧君ノ事をいへるも、十八歲の十二月の詞なれば、大やうに廿になるといへる、たがふとなきをや、

初音卷　胡蝶卷　螢卷　常夏卷　かゞりびの卷　野分卷

此六卷は、源氏君の卅六歳の正月より、八月まで、月次に書り、さて諸抄の說は、帚木卷より、をとめの卷まで、一年づつたがひきて、をとめの末、卅四歳なるを、玉かづらの卷の末を、卅五歳とする故に、これより次々の年立は、たがはざる也、然るにかの一說に、此卷々を、卅五歳とせるは、誤なると、上にいへるがごとし、

行幸卷

上の六卷の同年、同君卅六の十二月より、卅七の二月まで也、

藤袴卷

みゆきの卷の末の同年、同君卅七の秋也、

眞木柱卷

藤ばかまと同年、源氏君卅七の冬より、卅八の冬まで也、然るをかの一說には、これを卅六卅七として、又末に、秋の夕べのたゞならぬにとあるを、一年とたてゝ、卅八歳の秋までとしたる、これは玉かづらの卷のところに、辨へたるごとく、しひて若菜卷の、四十の年の數にあはせむために、やむことえずして一年をたしたるものにして、いみしきしひごと也、おほかた此物語の例、同じ卷の中にて、次の年へうつるには、かならずとしもかはりぬ、あるはとしかへりてなどいへり、さて春より秋へうつり、あるは夏まで書て、秋冬をばかゝで、はぶけるたぐひなどはあれども、かやうにふと秋のゆふべといふやうなる一言をもて、一年としたる事は、例なし、そのうへ此詞は、上にまことやと書出して、過にしかたへ立かへりて、近江ノ君の事をいへるところなれば、過にしかたの事にて、いつの秋にても有べし、されば上に、いかなるをりにか有けむともいへり、すべてまことやといふ詞はみな、前にいふべかりし事を、忘れて有つるを、ふと思ひいでゝ、書出す所につかひたり、かへす〳〵も此詞をもて、一年とすべきにはあらずかし、

梅枝卷　藤末葉卷

源氏君卅九歳にて、梅枝は、春三月のなかばまで、藤のうらばゝ、同月の廿日ごろより、冬十月まで也、

上ノ若菜巻

梅枝藤末葉の同年、同君卅九の十二月より、四十一の三月まで也、そも〳〵源氏君の齢の事、前にもいへるごこく、桐壺巻に、十二こいへるより、藤末葉に、あけんこしよそぢになり給ふべければこ有て、此巻の中の年、四十ノ賀の事有んまで、其間の巻々には、いくつこも見えたることなければ、藤末葉こ此巻こによりて、逆(サカサマ)にかぞへて、上の巻々をば、さだめたるもの也、

下ノ若菜巻

上ノ若菜の末の同年、同君四十一の三月の晦より書つゞけて、四十七の冬十二月までなり、但し四十二より、四十五まで、四こせの間は、何事も見えず、たゞはかなくて年月もかさなりてこいふ詞有、これに四年のとこもりたるべし、さて次に、内のみかご御位につかせ給ひて、十八年にならせ給ひぬこあるは、源氏君四十六歳の時にあたる也、問、はかなくて年月かさなるこいへるは、いくこせこもしるべからざるに、おして其間を、四年こは、何によりて定むるにか、答、柏木巻に、源氏君四十八のよし見え、又女三ノ宮は、上ノ若菜のはじめに、十三四歳こ有て、此巻の末の年に、廿一二歳こ有、又冷泉院のみかご、みをつくしの巻に即位より、十八年をかぞふ、これらをもて、四年過たる事をしるべし、さて冷泉院の御位十八年こいへるに、諸抄の説こ、今定めたるこ、一年の違ひあり、諸抄の説は、玉鬘巻の末を、一年にたつるによりて、此帝即位の年より、源氏君四十六のこしまでは、十九年なるを、即位の明年よりかぞへて、十八年こいふに合せたり、今定むる年立は、即位の年よりかぞへて、十八年也、すべて帝王在位の年を定むるに、即位の明年を始めにこるも、常の事なれごも、又即位の年よりかぞへていふもつね也、古今集ノ序に、天の下しろしめすこと、四ッの時こゝのかへりになむなりぬるこあるも、昌泰三年延喜五年、合せて八年なるを、九年こいへるも、寛平九年即位のこしよりかぞへたるにあらずや、ついでに問、此若菜二巻をば、むかしより若菜上若菜下こいひならへり、やまこもろこしのもろ〳〵の書に、巻を上下こ分ていふ例、みな然なり、然るに今その上下こいふもじを、上にうつして、上の若菜下の若菜こもいふは、何のよしぞや、答、

もろ〳〵の書に、卷を分て、某ノ上某ノ下といふは、もと一ッなるを、二つに分て、上下とはせる物也、然るに此若菜二卷は、もとより別事にして、二つの若菜なれば、かの一つなるを分たる卷の例とは、異なれば、上下といふもじを、下にいふべきにはあらざるを、むかしよりわかな上わかな下といひ來つるは、さる心もつかずして、たゞ何となく、もろ〳〵の書の例にならへるもの也、そも〳〵上下の若菜、別事なれば、はじめ紫式部がみづから書る本などには、二卷おの〳〵たゞ若菜とのみぞ有けむを、さてはまぎるゝことある故に、後にかりに上下とはいふなるべければ、今又ことわりによりて改めて、その上下を、上にいはむも、なてふことかはあらむ、

柏木卷

源氏君四十八の正月より、秋まで也、卷の中の詞に、五十八を十とりすてたる御よはひ云々とあり、薫ノ君今年生れ玉ふ、

横笛卷

源氏君四十九の春より秋までなり、

鈴虫卷　夕霧卷

同じ君五十歳にて、鈴虫は、夏より八月まで、夕霧は、同じ八月より、冬までなり、

御法卷

同君五十一の春より秋まで也、

まぼろしの卷

同君五十二の春より、年の暮まで也、薫君五歳也、

雲隱卷

此卷、名のみ有て、詞なし、其事諸抄にくはしく見えたり、源氏君、此卷のあひだにかくれ給へり、年立は、薫君、幻ノ卷にて五歳なるに、匂宮卷に、十四歳のよし見えたれば、其間ノ薫ノ六歳より十三まで、八年、此卷にこもりたるべし、源氏君

のかくれ玉ひしは、そのあひだいづれのこしこもしりがたし、

匂宮巻

薫君十四歳のよし見えて、下に十九になり給ふこ有て、又末に、六條院にて、賭弓(ノリユミ)のかへりあるじの事あるは、廿歳の正月也、此巻より次々の年立は、薫君の齢をもてさだむる也、

竹川巻

此巻は、鬚黒ノ大臣のなき御跡におひ出玉へる姫君たちの事を、むねこかきて、年立は、薫君十四五歳より、廿三歳の秋までなり、然るに花鳥餘情の年立は、此巻より次々、いたくみだれて、誤りいこ多きを、そは細流など諸抄に、改め正されたれば、しばらくさしおきて、こゝには論はず、奥に別に委く辨ふべし、さて細流など諸抄の年立も、なほ誤りあり、まづ紅梅巻を、此巻の上に次第(ツイデ)られたるこ、違へり、此二巻の次第は、竹川紅梅こ定めたる説ぞ、よろしかりける、そのよしは、此ノ竹川巻のはじめに、これは源氏の御ぞうにもはなれ給へりし、後の大殿わたりに有ける云々、こ申出せるは、匂宮巻のはじめの文をうけていへる文也、匂宮のはじめに、ひかりかくれ給ひにし後、かの御かげにたちつぎ玉ふべき人、そこらの御末々に、有がたかりけりこ書出て、さて匂宮の事、薫君の事などをいへる、匂宮は御孫、薫君は御子にて、みな源氏君の御ぞう也、さて此竹川の始メに、これは其源氏の御ぞうにはあらでこ、ことわりたるにて、これ匂宮の次に次第(ツイヅ)べき證(シルシ)なり、なほ此巻こ紅梅この前後の事、紅梅巻のこころにいへる事どもを、考へ合せてしるべし、さて此竹川巻の年立、諸説まぎらはしきにつきて、猶こまかにいはど、はじめに薫君を四位ノ侍従、十四五歳ばかりこいへるこころは、匂宮巻のはじめにあたれり、かの巻に、十四歳にして、侍従に任ぜられし事見えたればなり、さて下に【此巻】正月の事見えたるは、十五六歳の正月也、その年もかはりて、男踏哥の事見えたるは、十六七歳の春也、さて匂宮巻にては、十四歳の秋、中將に任ぜられしよし見えたるに、此巻【竹川】にては、十六七歳のほごまでも、なほ侍従このみ有て、中將こいはざるは、はじめに書出たるまゝに、後まで書る物也、此事は、はやく細流にも辨へ玉へり、大かたいまだ任ぜぬさきに、後の官をいは

むは、違ひなるを、他官に任じて後に、なほ前の官をいふは、つねのことにて、例多し、柏木君なども、中納言になり、權大納言になりて、うせ給へる後の卷々にも、なほゑもんの督といへるがごとし、紅梅ノ右大臣を、紅梅卷に、なほ大納言とのみいへると同じ、さて下ノ文に、としごろ右ニ云々と、ある詞に二三年も過たりと見えて、その下の詞には、薫君を、はじめて宰相ノ中將とかける、そは十九歳のとし、宰相に任ぜられたるよし、匂宮卷に見えたる、其後のことにて、いつにまれ宰相ノ中將にてありしほど也、此時任じたるよしにはあらず、さて末にいたりて、夕霧卷左大臣に、按察大納言右大臣に、薫君中納言に任じ給ふと見えたるところは、橋姫卷を過て、椎本卷に、秋薫君中納言になり給へるよし見えたる時にて、齡は廿三歳の秋也、然るにこれを、廿二歳といへる說は、誤也、そは細流の年立、橋姫卷に、一年のたがひある故也、此事かの卷のところに辨ふべし、さて終りかた【此卷】に、紅梅ノ右大臣の、姫君たちを、匂宮にこ心ざし給へることを、いさゝかいへるは、紅梅卷の下がまへと聞えたり、さて或說に、竹川卷は、竹川ノ左大臣の傳也といへるは、むげによしもなきひがこと也、此卷は、ひげくろの大臣の姬君たちの傳とは、いひもすべし、竹川ノ左大臣といふ人は、前にもかつて見えたることなく、此卷にも、たゞ一ところ二ところ、ふと左大臣とて出たるばかりこそあれ、其人のうへとては、つゆもいへることなければ、此卷、さらに此人にあづかれる事なきをや、但し竹川ノ左大臣としも稱したるとは、此竹川卷に見えて、うせ給へる左大臣といふ意にて、かりにつけたるものなり、

紅梅卷

此卷は、按察大納言の御方におひ出玉へる姫君たちの事を、むねとして、始メより書て、年立は、卷のなかばに、梅ノ花の哥四首、贈リ答へあるところは、椎本卷の末の年にあたりて、薫君の廿四歳の春也、さて末にいたりて、匂宮の宇治にしげしけ通ひ玉ふよしあるは、總角卷にあたりて、同年の秋冬也、然るに細流など諸抄に、薫君廿二歳とせられたるは、違へり、又此卷を竹川の上に次第で、或は竹川卷の中間にあたるといへるなども、みなたがへり、そのゆへは、夕霧君左大臣に、薫君中納言に任じ給へるは、同時にて、竹川卷の終リなるを、此卷には、始メより左大臣といひ、源中納言といへり、

但し夕霧君をば、此卷に一本には、右大臣とあれども、薫君を中納言とあるうへは、夕霧君も、左大臣なること論なければ、右とある本は誤也、又竹川卷は、薫君の中納言になり給へるころにて終れるを、此卷は、末に、匂宮の宇治へ通ひ玉ふ事まである、薫君の中納言になり給へるは、椎本卷の秋也、匂宮の宇治へ通ひそめ給へるは、その次の年の秋也、大かたこれらをもて、此卷は、竹川の後にして、その中間にはあらず、又竹川の上に次第づまじきことをしるべし、そも〳〵此二卷の次第は、かく明らかにして、疑ひなき事なるを、諸抄に、いろ〳〵と論有て、紅梅竹川と定められたるは、何故ぞと尋ぬるに、按察大納言、竹川卷には、右大臣になり給へること見えたるに、此卷には、末まで大納言とのみ有て、右大臣といはざる、此ノ一つにかゝはられたる物なり、然れどももし此人の官によりて、此卷の前後をさだむることは、此卷【紅梅】に、夕霧君を左大臣、薫君を中納言といへるにかなはず、上にもいへるごとく、いまだ任ぜざるさきに、後の官をいふことなければ也、さて按察ノ大納言も、紅梅卷にては、既に右大臣に任ぜられて後なれども、此卷は、その姫君たちの事を、いまだ按察大納言にておはせしころより書キ出して、任大臣の事は、竹川卷に見えたれば、略きて、はじめに書出したるまゝに、末まで、大納言とは書る也、實は梅ノ花の哥の贈答有しころは、右大臣になり給へる明年の春也、然るを此卷のみならず、末なる宿木卷東屋卷などまでも、なほ此人をば、右大臣とはいはずして、按察大納言とのみいへり、もし大納言とあるをもて、此卷を竹川の中間とせば、かの宿木東屋をも、竹川の中間とすべきにや、大かた他官に任じて後も、なほもとの官をいふとは、上にいへるがごとくなるをや、問、宿木卷に、按察大納言とあるは、いまだ大納言にておはせしほどの事をいへる也、又東屋卷にいへるは、常陸ノ守の妻、ゐなか人にて、右大臣になり給へることをしらずしていへる詞也、されば、これらは、此卷の例にはいひがたからむか、いかゞ、答、そも〳〵此人宿木東屋に、こゝかしこ見えたる、皆按察大納言とある中に、宿木に、左のおとゞ按察大納言藤中納言左兵衛督云々とあるは、前の事をいへるにもあらず、又紫式部ゐなか人にて、右大臣に、なり給へるをしらでいへりともいひがたかるべし、餘の所は、とかくいひまげもすべけれども、此一ところは、いひまぐべきやうなし、されば此按察大納言は、別人也といへる說もあれども、まがふべくもあらず、紅梅ノ右大臣のことなる

をや、さて或説に、紅梅卷は、紅梅右大臣の傳也といへるも、あたらぬこと也、此卷は、此人の姫君たちの傳とはいひもすべし、紅梅右大臣の傳とはいふべきよしなし、そも〳〵此人を、紅梅ノ右大臣といふも、あたらぬことなれども、そはたゞ此卷の名によりて、かりにつけたるなれば、さてもあるべし、さて又細流に、此卷の年立を、薫君廿一二歳とせられたるも違へる、そのゆゑは、薫君の中納言になり給へるは、椎本卷なるに、此卷【紅梅】に、はじめより中納言といへる、廿一二歳は、橋姫卷にて、椎本の前(サキ)なるをや、

橋姫卷　宇治一

此卷より、をはり夢浮橋まで十卷をば、宇治十帖といふ、そは竹川卷は、ひげくろの大臣の姫君たちの事を、むねとかき、紅梅卷は、紅梅大臣の姫君たちの事を、むねと書るごとく、此十帖も、宇治の八ノ宮の姫君たちの事を、むねとして書たれば、實はかの竹川の紅梅と同じく、幷の卷といふべきものなれども、此十帖は、事ひろく、卷の數も多ければにや、むかしより幷とはせず、匂宮卷よりつゞけて、別に宇治十帖とはいふなり、さて年立は、此卷は、まづかの八ノ宮の御事を、はじめつかたよりかき出せる故に、始めは、はるかに前(サキ)の事にて、大姫君の生れ玉へるは、下ノ若菜卷のほどにあたれり、椎本卷に、此姫君廿五歳と見えたれば也、さて京の宮やけて、宇治にうつり給ひしは、それより年ごろ過て後と見えたるは、雲隱卷のほどにやあたるべからむ、それより前に、姫君たちの、哥よみ給へる事などあれば、やゝ成長(ヒトヽナ)り給へりしほどなりけむ、さて下に、宇治山の阿闍梨の、京に出て、冷泉院へ參りて、かの宮の御事を、語り申せる所より、此卷の年をば立つべき也、此時薫君宰相中將とあり、廿歳の時なるべし、其故は、此君十九歳にして、三位ノ宰相になりて、なほ中將もはなれ給はずと、匂宮卷に見えてその明年、廿歳の正月の事まで、かの卷【匂宮】に見えたれば也、さて此卷【橋姫】に次に、薫君はじめて宇治ノ宮に參り給へる事は、同年のうちなるべし、かくて其下の詞に、心よせつかうまつり給ふと、三年ばかりになりぬと有て、秋の末つかた云々とある、これ薫君の宇治にまゐりそめ玉ひて、三年ならば、廿二歳の秋とすべし、さて末に至りて、其年の十月の事まで見えたり、されば此卷は、薫君廿歳より、廿二歳の冬まで也、然るを細流など諸抄に、十

九歳より、二十一歳までとせられたるは、一年たがへり、そのゆゑは、まづはじめを十九歳と定められたるは、薫君を、宰相中將といへる、宰相になり給へるは、十九歳の時なるによりて也、然れども匂宮巻にこそ、宰相に任じ給ふよしは見えたれ、此巻【橋姫】にては、其時任じ玉へるよしにはあらず、いつにまれ、宰相ノ中將にておはせしほどのとなれば、十九歳と定むべきよりどころなし、さて今廿歳よりとさだむるも、同じくよりどころなきに似たれども、匂宮巻に、すでに廿歳の正月の事まで書たるに、つゞくべき此巻なれば、其年よりとこそ定むべけれ、よしなく過しかたへ立かへりて、十九歳とすべきいはれなし、紅梅巻に、源氏君廿三歳の正月の事まで書て、次の椎巻も、その同じ年より書る例などをも思ふべし、

椎本巻 宇治二

かをるの君廿三歳の二月より始まりて、其秋中納言に任じ給ふは、竹川巻の末にあたり、さて年かはりて、廿四の夏まで也、然るに諸抄の年立は、橋姫巻に一年のたがひある故に、此巻をも、廿二廿三とせられ、終り夢浮橋巻にいたるまで、次次一年づゝ違へる也、

あげまきの巻 宇治三

椎本の末の同年、同君廿四の八月より、その年の暮まで也、

早蕨巻 宇治四

同君廿五歳の春なり、

宿木巻 宇治五

此巻は、今上の女二ノ宮の御事を書出せるゆゑに、はじめのほどは、はるかに前つかたの事也、さて此宮十四歳になり給ふよしあるは、椎本の末、總角と同年にあたりて、其夏ごろ母女御うせ玉ひ、その年かはれるよし有て、次の年は、早蕨巻にあたれり、さて女二ノ宮御服をはれるよしあるは、夏なれば、これより早蕨の次へつゞく也、おほかた此あたりまでは、たゞ女二宮の御うへをのみ書るを、此所よりして、宇治の姫君のうせ給ひしさだ、又中ノ君の事を、二條院のうへといへる

なごみな、あげまき早蕨に有し事より、つゞきたるさま也、さてその年も暮て、薫君、廿六歳の二月、權大納言右大將になり給ひ、その末四月までの事あり、然れば此卷は、廿四の夏より、廿六の夏まで也、但し花鳥の年立には、かの女二宮十四歳の夏、母女御のうせ給へる年をもて、早蕨卷の年として、早蕨は春なるを、此卷は、その夏よりとして、すなはち早蕨よりつゞけられたり、そは今定めたると一年違ひて、かの母女御のうせ玉へる年は、薫君廿五にて、大納言大將に任ぜらるゝは、廿七歳也、そも〳〵かの年立は、すべてはいたく誤りにて、此卷も、薫君の齡(トシ)は、誤りなれども、此母女御のうせ給へるを、早蕨の年とせられたるは、いはれたることゞもあれば、したがひても有りぬべきを、今はしばらく細流など諸抄によりて、定めたり、それも又いはれたる事どもあればなり、見む人心のよらむかたにしたがふべし、もし此卷の年立、花鳥の趣によるときは、次々の卷どもゝ、一年づゝすゝみて、夢浮橋にいたりて、薫君廿九歳也、さて此卷の年立、花鳥も諸抄も、たがひにいはれたることどもある、その條々を論はむには、事長く、あまりくだ〳〵しければ、もらしつ、おつるところ、いづ方にしたがひても、たがふふしはなきなり、

東屋卷　宇治六

宿木卷の末の同年、薫君廿六の秋也、

浮船卷　宇治七

同君廿七の正月より、三月の末、うき舟ノ君の身なげむとせし所までなり、

蜻蛉卷　宇治八

浮舟卷のをはり、浮船ノ君の身なげむとせし夜の、翌朝(ツトメテ)より、その年の秋までにて、なほ薫君の廿七歳のとし也、うきふねの君の身なげむとせしを、花鳥年立に、四月とあるはわろし、三月といふ說よろし、

手習卷　宇治九

うきふねの卷の終り、かげろふの卷の始の同じころより、明年(アクルトシ)の三月、浮舟ノ君の一周忌(ハテ)すぎて、五月ごろまでにて、薫君

廿七の三月の末より、廿八の夏までなり、

手習巻のをはりよりつゞきて、なほ薫君廿八歳の五月の事也、

夢浮橋巻　宇治十

匂宮巻より下花鳥の年立いたくみだれ誤れる事

一花鳥の年立に、薫君の中將に任ぜられしを、十六歳の秋として、十四歳の秋にはあらざるべしとあるは、匂宮巻に、十四にて、二月に侍從になりて、秋右近ノ中將になり給ふとあるにかなはず、いみしきひがこと也、其秋といはずして、たゞ秋といへるをもて、十四の秋にあらずと、しひていひまげられたるなれども、侍從になれるその秋なること、いちじるしき書ざまなるをや、おほかた薫君の昇進は、匂宮巻椎本巻に、正しく見えて、それを紅梅巻橋姫巻などゝ引合するに、年のたがひなく、みなよく合へるを、それにそむきて、かくしひたる説をなし給へるは、いかなるよしぞと尋ぬるに、竹川巻に、十六七歳のころまで、なほ侍從とのみ有て、中將とはいはざるに、なづみ給へる物也、大かたかの年立の誤は、みな此竹川巻になづみ給へるよりおこりて、さまざまの強説(シヒゴト)はせられたる也、竹川巻に中將といはざることは、かの巻の所にいへるごとくなれば、かゝはるべきことにあらず、匂宮巻に、まさしく見えたるにこそよるべきものなれ、

一又薫君の宰相に任ぜらるゝを、十六歳の秋冬の間として、十九歳のころにいはく、三位の宰相にて、なほ中將もはなれ給はずと云々、此意は、宰相中將にて有しが、三位になり侍れど、宰相も中將も、なほもとのごとくのよし也、宰相は、四位の相當の官なる故也、宰相中將といはれしことは、橋姫巻のはじめに見えたり、とあるもいみしき強説(シヒゴト)なり、匂宮巻に、十九になり給ふとし、三位の宰相にて、中將もはなれ給はずとあるは、十九歳にて、三位宰相になり玉へること、まぎるべくもあらぬ文にて、中將もはなれ給はずとこそあれ、宰相ももとのごとしとは、いかなるひがことぞや、四位ノ相當の官なればとて、三位になれる時、宰相もとのごとしといふことは、さらに例もことわりもなきこと也、中將もはなれ給はずとは、宰相にな

りて、もとよりの中將も、猶兼(カケ)たるよしにてこそいへ、宰相をその例にはいふべきことにあらざるを、これ又かの竹川卷に、侍從といへる後に、たゞ中將といへることには見えずして、始めて宰相中將と見えたる故に、宰相と中將とは、同年に任ずと、心得たがへ玉へるなるべし、さて又宰相中將になれるを、十六歳の時とせられたるは、かの竹川に、十四五歳とある所より、三年にあたる所までは、侍從と有て、その下にはじめて宰相中將とある故に、十四より、三年にあたる十六と定められたる物なれど、これ又ひがことなり、其故は、その中間に年ごろ有てといふ詞あれば、宰相中將とあるところは、十六七歳の後、年を經てのことなるに、此年ごろありてとある詞を、見おとし給へるなるべし、そのうへ竹川に、宰相中將といへるは、その時に任じたるよしにはあらず、それより前に既に任じて、其官にて有しほどのことなれば、任じたる年は、かの卷【竹川】にては、いつとも定めがたきことなり、されば此昇進は、匂宮卷に、十四にて中將に任じ、十九にて宰相に任ずとあるによるときは、いと明らかにて、竹川卷の趣にもたがふことなきものを、匂宮のたしかなる方をおきて、たしかにいはざる竹川にのみかゝづらひて、いろ〳〵しひごとし給へるは、かへすがへす心得ぬわざなりかし、

一橋姫卷を、薫君の十六歳より、十八歳までとせられたるも、ひがこと也、そは卷のはじめつかたに、宰相中將とある此官に任ぜられたるを、十六の時とし給ふからの誤也、宰相中將に任ぜられたると、十六の時にあらざること、上に辨へたるが如し、そのうへ此卷に、此官をいへるも、其時に任じ給ふとにはあらざれば、これを任じ給ふ年とは、いかでか定むべき、

一紅梅卷を、十九歳として、此卷に源中納言といへるは誤なり、源中將とかくべき也、其故は、夕霧の左大臣に任じ、あぜちの大納言の右大臣に任ずる事は、此秋薫の中納言に任ずると、同時なるに、夕霧を右大臣とかき紅梅大臣を按察大納言とかき侍れば、昇進の前の事也、さればいまだ源中納言とは申すべからざれども、同年のことなるによりて、源中納言とはかけり、物語つくることは、みな後に人のかくゆゑ也とあるも、みなひがこと也、紅梅卷に、夕霧君を右大臣とある本は、誤なると、又紅梅右大臣を、按察大納言とかけるよしなど、上に辨へたるがごとし、されば薫君を中納言と書たると、誤にあらず、中納言になり給ひて後の事なること、上にいへるが如し、同年のうちの事なればとても、いまだ任ぜざるさきに、

後の宮をいへることなし、

人々の年立

此物語に、源氏君をおきては、諸の人々の年齢のさだは、無用なることしいへる説もあれども、すでに源氏君薫君の年を論ずるうへは、ほかの人々の年をも、さだせずはあるべからず、かつはほかの人のこしをもて、源氏君の年を考ふるたすけこもなることもおほければ、今これを考へて、しられたるかぎりを、左にしるす、

朱雀院のみかどは、下若菜巻の終の年、五十歳にならせ玉ふよし見えたれば、源氏君に、三とせの御このかみにおはしませり、然れば桐壺巻にて、東宮にたゝせ給ふは七歳、御位につかせ給ふは、花宴巻の年なるべければ、廿三歳、みをつくしにて譲位は、卅二歳の御時なり、さて物語の御事を、紅葉賀巻に、東宮の御時にて、廿余年こいへるも、其時此帝廿二歳にならせ給へば、此帝を生れ給ひしよりの年の数なるを、此時東宮にておはしますに、東宮の御時にてとはいへるにて、東宮とは、此帝をさして申せる詞也、東宮にたち給ひし廿余年のよしにはあらず、一説に、太大臣、内に参り給ひて廿余年といふと也とあるは、此帝の御としを考へざる説にて、誤也、さて此帝、おりゐさせ給ひては、冷泉院のほどに有べし、

冷泉院の帝は、紅葉賀巻に生れさせ給ひ、みをつくしの巻に、十一にて御元服、其年御位につかせ給ひ、下ノ若菜にて譲位は、廿八歳にあたれり、さて橋姫巻にて、宇治の阿闍梨の、此院に参りしことあるは、四十九歳の御時にあたれり、

物語の末のほどの帝は、明石巻の末の年、二歳にならせ給ふよし見えたれば、源氏君廿七歳、須磨巻の末、明石巻の初めの年に、御誕生也、みをつくしの巻に、東宮にたゝせ給へるは、三歳、下ノ若菜に、位につかせ給へるは、廿歳の御時にあたれり、さて宿木巻の始め、女二宮十四になり給ふとある年は、此みかど四十五の御年にあたれり、さて事のついでにいはむ、此帝を書中に、今上と申せるは、いかゞなれど申しならへる也、桐壺帝と申し、又外の人々みなこの例によりて、若菜のみかどなどこそは申すべきわざなれ、若菜巻に御位につかせ給へればなり、

薄雲ノ女院は、薄雲巻にかくれさせ給ひし時、卅七歳のよしなれば、源氏君に五つの御このかみ也、桐つぼの巻に、内に参り給

へるは、いづれのとしにか有けむ、源氏君の七歳より、十一までのあひだなれば、此后の十六歳までのほどなるべし、若紫ノ卷に御懐妊は、廿三、紅葉賀に、冷泉院を生奉り玉へるは、廿四の御時、榊卷に、御かざりおろさせ給ひしは、廿九の御年にあたれり、

秋好中宮は、榊卷に、齋宮にて伊勢に下らせ給ひし時、十四歳のよし見えたれば、桐壺卷、源氏君十歳のとし、生れ玉へるなり、みをつくしに、母御息所におくれさせ給ひしは、廿歳、内にまゐらせ給へるは、繪合卷の春、もしはその前の年の冬なるべければ、廿一廿二歳のほど也、をとめの卷に、后にたゝせ給へるは、廿四の御時にあたれり、

明石ノ中宮は、みをつくしの卷に、生れさせ給ひ、松風卷に、三歳になり給へるよし見ゆ、藤末葉に、東宮【今上】に參り給へるは、十一の御年也、上の若菜に、一ノ宮を生奉り玉へるは、十三の御としにあたれり、御法卷に、中宮のよし見えたり、廿三歳にあたれり、早蕨卷は、四十四の御年にあたれり、さて一ノ宮をうみ奉り給へるは、諸抄の年立にては、十四の御時なるを、今定むる年立にては、十三也、十三にして、御子うみ給はむこといかゞ、と思ふ人も有べけれど、さる例もあると也、上ノ若菜卷に、此御懐妊の事を、まだいとあゑかなる御ほどに、いとゆゝしくぞ、たれもたれもおぼすらむかし云々、又、まだいとあゑかなる御はごに、いかにおはせむと、かねておぼしさわぐに云々、といひ、御產有て後のこゝろにも、ほどなき御身に、さるおそろしき事をし給へれば云々、などいへる、殊にまだいと幼くおはせしさまに聞ゆ、令に、凡男年十五、女年十三以上、聽婚嫁とありて、その上ノ條の義解に、下條云、男年十五聽婚、既定夫婦、理當有子とある、女の十三も、なずらへて、子あるべきことをしるべし、

匂兵部卿ノ宮は、下ノ若菜卷に生れ玉ひ、横笛卷に三卷のよし見ゆ、匂宮卷のはじめの年は十五也、浮舟蜻蛉の卷にては、廿八にあたれり、そのとし薫君は廿七なり、

朱雀院の女三ノ宮は、上ノ若菜に、十三四と見えたれば、須磨卷のはじめの年、もしはその次のとし、生れ給へる也、さて下ノ若菜の末の年に、廿一二のよしあるは、かの十三四といへるより計るに、年の數よくあへり、さて匂宮卷、薫君十四に

て、侍従に任ぜられたるとしは、此宮卅五六になり給ふべし、早蕨にては、四十六七歳にあたり給ふなり、

今上の女二ノ宮は、宿木巻の始メに、十四のよし有リ、同巻の末に、薫君のかたにわたらせ玉ふは、十六の御とし也、

六條ノ御息所は、榊巻にいはく、十六にて故宮【前坊】に参り給て、廿にておくれ奉り給ひ、三十にてぞ、今日又こゝのへを見給ひけるといへり、此文年紀違へりとて、疑ひたる説有リ、そは、今年卅歳ならば、十六にて前坊に参り給ひしは、桐壷巻、源氏君九歳の年にあたりて、朱雀院立坊ありて、六年になれゝば、前坊は、はやく春宮を辞し給ひて後也、いかゞ、されば坊を辞し給ひて後に、参り玉へるか、と云フ説もあれども、さては又、御息所とは申しがたきにやといへり、今考ふるに、帝の、御位をさり給ひて、後の院に参り給へるをも、女御と申シて、御子を生奉り給へば、御息所と申せる例、竹川巻にも見え、さて前坊は、院に准へられたるともあり、されば此御息所も、前坊春宮を辞し給ひて後に参り給へるにても、御子うみ奉り給ひて、御息所と申せることは、不審なし、されど右の文の上に、父大臣のかぎりなきすぢにおぼし心ざして、いつき奉り給ひし有さまかはりて、といへるなど、かぎりなきすぢにとは、后に立チ玉ふとなれば、坊を辞し給ひて後のことゝは、聞えざれば、かの疑ひいはれたるとなりかし、されどしばらく、榊巻の文によりていはゞ、秋好中宮を生奉り給へるは、十七歳にあたり、廿にて前坊におくれ奉り給へるは、桐壷巻、源氏君元服有し明年にあたり、みをつくしの巻にうせ玉へるは、卅六歳にあたれり、

夕霧ノ左大臣は、あふひの巻に生れ玉ひ、をとめの巻に元服有しは、十二のとし也、上ノ若菜に、二十にもまだわづかなるほどなれど云々とあるは、十八の年の暮のこと也、右大臣に任ぜられしは、雲隠巻のほどに有べし、竹川巻に、左大臣に轉じ給へるは、四十九の年にあたれり、薫大将は、柏木巻に生れ玉ひて、匂宮巻のはじめに、十四歳、末に、十九歳のよし見ゆ、浮舟蜻蛉の巻は、廿七にあたれり、其年匂宮は廿八歳也、然るをうきふねの巻にいはく、かの君【薫君を云】も、おなじほどにて、【匂宮と同じ程なるをいふ】いま二つ三つまさるけぢめにや、すこしねびまされるけしきようい云々、といへるは、齢（ヨハヒ）たがへり、匂宮は、薫君に一つこのかみなるを、かへりて薫君を、二ツ三ツのこのかみのごといへるは、いかにぞや、

柏木ノ右衛門督は、柏木巻にかくれ玉へる、彼巻に、夕霧君に五つ六つのこのかみなりと見えたれば、卅二三歳なるべし、然れば帚木巻の年、もしは其前のとしに、生れ給へりし也、

あふひの上は、源氏君、に四つばかりのこのかみと、紅葉賀巻に見えたれば、桐壺巻、源氏君御元服の時、そひぶしに參り給へるは、十六のとしなるべし、葵巻にかくれ給ひしは、廿六歳也、廿五といへる説は、年立一とせたがひあるゆゑ也、

紫ノ上は、若紫に、十ばかりと見え、紅葉賀巻の正月の詞に、十にあまり給ふよし見ゆ、葵巻に、源氏君と新枕は、十四の年也、玉鬘巻に、廿七八と見えたるは、廿七にあたり給ふ年也、さて下ノ若菜巻の末の年、卅七とあるは、違へり、諸抄の説によるときは、そのとしは四十歳にあたりて、三年のたがひあり、今定めたる年立にては、卅九歳にあたりて、二年の違ひ也、これによりてつら／＼思ふに、九と七と、文字の形やゝ近ければ、もしは卅九を、卅七と寫し誤れるにはあらざるか、されど今傳はれるもろ／＼の本、みな卅七也、そも／＼かやうの事は、今の人ならば、心をつけて、よく考へ合せてかくべきを、むかし人は大らかにて、かの薫君と匂宮との、よはひのたがひのたぐひにて、これも紫式部ふとあやまてるにもあるべし、さるをとかくにいひくろめて、紫式部をたすけむとするは、しひごとにぞ有ける、

宇治ノ宮の姫君は、椎本のはじめの年に、廿五とあれば、下ノ若菜巻、冷泉院の御讓位の年に、生れ玉へる也、薫君に二つのこのかみにて、あげまきの巻に、うせ給ひしは、廿六のとしなり、

同宮の中君は、椎本巻の初ノのとしに、廿三とあれば柏木巻、薫君と同年に生れ給へるにて、總角巻に、匂宮にはじめて見え給へるは、廿四のとしなり、

玉かづらの君は、夕顔巻に、をとゝし生れ玉へるよし見えたり、源氏君の十五歳の時にあたれり、さて玉鬘巻に、廿ばかりとあるは、をとめの巻のなかばのとしにあたれ、りその明年、京にのぼりて、六條院にうつり住玉ふは、廿一のとし也、眞木柱巻に、始めてひげくろの大將に見え玉ひしは、廿三、竹川巻に、姫君の冷泉院に參り給へる時は、四十八九歳なるべし、

夕霧ノ大臣の六ノ君は、宿木卷のなかばのこゝし、廿一二ゝ有リ、然るにはやく夕霧卷の末に見えたるは、違へるがごとし、もし夕霧卷の年に、生れ玉ひても、宿木のなかばの年は、廿三歲にあたれば也、但しゆふ霧ノ卷に、此君の見えたるところは、かの大臣の男女の御子たちを、かぞへあげて、すべて十二人おはするよしなれば、此君は、いまだ生れ給はねごも、末までかけて、すべてをいへるにも有べし、されご此大臣の御子たちは、系圖に、かの十二人の外にも、猶多く出たれば、かねてすべてをあげたりごもいひがたからなか、

浮舟ノ君は、宿木卷のなかばの年に、廿ばかりこあれば、幻卷の次の年、生れられたりけむ、中ノ君には、五つばかり弟也、

かくて浮船卷は廿二、手習卷の末夢浮橋は、廿三ばかりの年なり、

源氏物語玉の小櫛四の巻

此巻は、湖月抄の本と、これかれの異本どもとを、よみくらべみて、湖月抄のわろきところの、こと本に、よきがあるかぎりをあげたり、そのよきあしきを見くらべむたよりに、湖月の方をも、古とて、かたはらにちひさくしるしつゝ、古といふは、湖ノ字をはぶけるなり、さてかく物するも、おのが見たる本のかぎりにこそあれ、なほあまたの本どもを、考へ合せたらむには、又よき事ありぬべき也、又いづれの本も、同じくあしきは、出さず、かならず某字の誤りと、しるく見えたるとなども、こゝらあれど、本に見えぬは、みなさてある也、巻々、某丁としるすも、湖月抄のなり、そも〳〵かくのみ何も〳〵、湖月抄をむねとして、物することは、世にあまねくひろまれる本にて、人の見る、おほくはこの本なればぞかし、

桐壺巻

「さらにえゆるさせ給はず七オ「思ひ玉へ○侍る十四オ「むしのねにつけても物のみ十八オ「いと○ゆゝしう廿オ「御かたちびと廿四オ「おはしまさましよりは同ウ「御心ざしのあやにく廿五オ「おろそかなることもことごと廿六ウ「御いし廿七オ「くわ○さの御座同「ともかくもえあへしらへ廿八ウ「ひとつ御きさいばら卅ウ「四の君にあはせ給へり同「つみなくおぼしなして卅一ウ

箒木巻

「おほいとの三オ「ふかくとりおき四オ「かくるゝこと○おほく五ウ「非参議の三四位ども七オ「心とまるわざなる八オ「世のかためとなるべきも九オ「心ばせ十二オ「やがてあひそひてとの思ひいで十三ウ「こゝかしこ○てんながに十六ウ「すくめる十七ウ「まつかたは○のどかに十九オ「まづかりをだに○と廿六ウ「をこづきて廿九ウ「あなうたて此かたの卅一ウ「かうしはあげ卅五ウ「さるかたの心もとなくては卅六ウ「えうけ給はらずとかしこまりて同「うけひき侍らずなんど申す卅七ウ「御心○のほども四十一オ「契ありとは四十二オ「のちせもやとも思ひ同ウ「出て○くるしがれば四十三ウ「引たてゝ別れ入玉ふほど同「かくけしからぬ心○は四十八ウ

「おやしと誰も〳〵四十九オ「さもえおぼしはつまじく五十ウ

空蟬巻

「けはひの○にかよひ二オ「この子はい○といとほしく同「手つきやせ〳〵にて四オ「あやしくやう○かはりて八オ「いかゞはせんに同ウ「けしき○なく十オ「ぬぎすべしたりと見ゆるうすきぬを同「い○とにくゝて同「こよひ○うへにや同ウ「物もえ聞えず十二オ「身こそ○と心づきなしと同「たゝう○が○み○に手ならひのやうに同ウ

夕顔巻

大貳のめのとのいたく二オ「見給へ侍りぬれば四ウ「昨日○夕日の残りなく八ウ「かたはなべかりける十ウ「あはれと○おぼしぬべき十一オ「わらはべのいそぎゝて十三ウ「其車をぞ見まし十四オ「とひはて給はず十八オ「まくらがみとおぼゆる十九ウ「とかくのたまふほどにゝはかに廿二オ「いとつらしと思へれば廿四オ「めさましうぞ思ひをる廿五オ「女の思ひたれば同ウ「ざうしのかたへ○いぬる也廿八オ「けはひ物うとくなりゆく廿九ウ「風のやゝ卅ウ「久しさ○千夜を卅一オ「おほいとのゝ卅四ウ「まこととも思ひ玉へられね卅五ウ「右近をばいざ卅九オ「うちしきるなかにも四十ウ「内に○きこしめし四十一オ「何やかやとむつかしう四十二ウ「さばかり○思ふをしらで四十三ウ「まどはしたりと四十五オ「もみぢのやう〳〵同ウ「長かるまじくてなりけり四十六オ「思ひたまへ出れば同「思ふにもむねのみ四十七オ「いとどうつくしげなり四十八オ

若紫巻

「おこり給ひければ二オ「おどろきさわぎて三オ「こころ〴〵は有ながら五ウ「侍るなると聞ゆれば六ウ「君○なに心有て七ウ「御みゝとゞまらんをやと同「めやすき人な○り九オ「なぐさめにも十一オ「それにつけても物思ひの十四ウ「きゝしらぬやうにやとて十五ウ「はづかしけれど十六オ「けに○くからず廿二オ「まださらにかゝる人の廿二オ「御ありきにはいかゞと廿三オ「久しく見給はぬほどにいとゞ同ウ「おぼえ給へらん廿五オ「むせかへり玉ふさまなゃ廿八オ「ときゞ○御せうそこあり廿一オ「いとまなし卅五オ「はかなさも同「しひて引いり卅八オ「思ひたれば同「二かへりばかり四十ウ「しもづかへ同「たてまつり給へるに四十一ウ「とひ玉

〇玉のをくし 四

へるにより(○古ナシ)同「心ぼそしとおぼい(も)て(ひ古)四十二オ「もてなし聞ゆな○との(な古ニ)給はせ四十三ウ「思ひ給へ(み古)出てなん四十五ウ「夜ふかうは出(立古)させ
四十六オ「ね玉へ(つ古)るを同ウ「あやしとおぼ(く古)して四十七オ「おくれ聞え玉へ(○○古ナシ)るが四十八オ「女房なども(○古ナシ)同ウ「ほのきく人は(○○古ナシ)四十九オ「こあまぎ
みのにぞ(○古ナシ)五十一オ「こまりにし人々は(○古ナシ)同「めのとのいとさし(○古ナシ)過々し同ウ「さるかたに○(は古ニ)いみしう五十二ウ

末摘花巻

「おほかりけり(に古)三オ「のこりる玉へ(た古)るを同ウ「思ひ給へる(○○古ナシ)と四オ「よ○(る古ニ)のけはひに五オ「まかで給ひけるを(○古ナシ)やがて七ウ「えしり(み古)給は
ぬに同「御なほしども(○○古ナシ)めして九オ「ひたちのみや(き)(み古)には十二オ「聞えすまひ(さ古)十五オ「御有さまになほ(ん古)世をおぼし同ウ「おくゆかしう(よ古)
おぼし十六ウ「いとわかびたる(○古ナシ)ころの十七ウ「よしよべうけ(○○古ナシ)給ふり十九オ「雲間まち出(見古)むほど廿オ「なきぬばかり○(に古ニ)思へり廿一ウ「出
玉ひぬるを○(御古ニ)命婦は廿二オ「心しらぬ人々は(○古ナシ)同ウ「いとほしかり(をかし古)し物ごりに廿四ウ「女の御さう(○古ナシ)ぞくけふは同「なご○(か古ニ)かう廿五ウ「見
まうきまました(る古)り廿六オ「よりて御硯のかめの水にみちの國紙をぬらして(○○○○○○○○○○○○○○○○○○古ナシ)のごひ玉へば同

紅葉賀巻

「持經のやうにひきひろげて(○○古ナシ)四オ「せさせ給ふをきく人もこ(○○○○古ナシ)とわりと同ウ「あひたる山の松風(○○古ナシ)五オ「さるべきかぎり○(の古ニ)よろこび
六オ「玉ふ○(御古ニ)心づきなさ(き古)に同ウ「見奉りそめてしかば(○○古シ)同「けさやかにももてなし(○ナシ)八オ「やすからず思ひ給へど(○○古ナシ)同「おぼゆるにおは(○○古ナシ)
いとの九オ「とりわき○(思ひ古ニ)玉へる同ウ「同じ大臣と聞ゆる中にも(○古ナシ)十二オ「あやふげに思ひ(ふ古)玉へれば廿オ「御なぐさめにとおもへれ(ひつ古)ど廿
四ウ「かぎり有けるを○(と古ニ)や同「より○(ゐ古ニ)給へるに廿五オ「いりくる(け古)に廿六ウ「ねられ給はぬ(○○古ナシ)同「物おもひさ(○○古ナシ)れげる廿七ウ「もろともに○(ゐ古ニ)こ
とこ廿八オ「こり給ひぬらむかし(○○古ナシ)卅オ「こきでんはいとゞ(○古ナシ)卅一ウ

花宴巻

「さりとらおぼろ○(れ古ニ)じ○(な古ニ)このたまへば六オ「すかい玉ふかとも○(え古ニ)いひあへず同ウ「柳花苑なむまとに(○○古ナシ)十オ「もてなし給ひてまぎれ(○古ナシ)十
二ウ「ふさはしからずとまづ(○古ナシ)十三オ

あふひの巻

「いとあまりにも侍るかな六オ「ぎしきも同ウ「たふれまどひつゝ九オ「おぼさゞりけめども十ウ「おぼいたらぬ御心おきてに同「ふ
「いかでえ給へる所ぞ十二ウ「神のゆるしの同「人にもさらにうつらず十四ウ「おぼしあはてたり十五ウ「御こゝちなほ十六オ「ふ
かゝらぬ御かどになむ十七オ「あらずみな人十九オ「つくるしげに同ウ「中はゆきめぐりても廿ウ「のこるなき廿二オ「こゝろみ給
へど同ウ「のどめ給ふ同「えんにのみあるべき中にもあはれをいたうおとろへ玉へりといひながらものごしにてなどするべ
きかはとて廿四オ「いとらうたげにこゝろぐるしげ也同ウ「いとうれしかるべきを同「かくも物し給ふぞ廿五オ「引つゞきて出給
ひぬ同「まかンで玉ひぬればぢもくの夜なりけれどかくわりなき御さはりなりければみなとやぶれ同ウ「御あたりの御こぶら
ひども廿六オ「八月廿余日廿七オ「ふかくぞそめ給はましと同ウ「おはせぬをだに廿八ウ「おぼし歎きて同「さらばおぼししる
らむとてなん卅ウ「正日まではなほ卅二オ「うちわらひ同「いとよひのさやかならざりし同ウ「御あのとの宰卅四ウ「つらき人し
もぞあはれに卅六オ「こゝちし侍るをばさる物卅七オ「我こそは思ふべき人同ウ「ものいと心ぼそくて卅八ウ「のたまはするに
より同「あきとほりたる四十オ「めをおしぼり四十一オ「かへりてはつらく四十二オ「御さまにたがふ所なく四十四ウ「しばしここ
かたに同「御しのびどころ同「にくき心なるを四十五オ「人々はしりぞきてさぶらへば四十六ウ「わざとよとて同「かゝる御思ひ
のほど四十七オ「みつがひとつにても同ウ「おぼさゞりしを五十オ「心うきとゝ恨み五十一オ「いとゞかくさへわたり同ウ「春宮の御
おなじさま同「御覧ぜられ侍らむと五十二オ

榊巻

「渡り給ふをりもあれど三オ「御よそひいと同ウ「こしば垣をおほがきにて四オ「物うちいひたる同「いとほしうなど五オ「おぼ
しづむれど六ウ「もどきもいはれがりも八ウ「御ぐし奉り給ふほどいと十一オ「よはひのほどよりは代を十二オ「出玉ふほど
かなしきこと十五オ「まして大將殿は十六オ「とぶらひにこのる物の袋同「けいしどもばかり同「わすれがたう思ひなげき給同ウ
「むかし物がたりに十八オ「おほぢおとゞ十九オ「御こゝろしかよへば同ウ「わが世はかくて廿ウ「人のこゝちどもいとむつかし
廿二ウ「兵部卿ノ宮ノ大夫同「こもり給へらむとは廿三オ「御心まどひ廿四オ「かゝづらひいりて同「このみあり御手は卅ウ「思

ひ玉ふる○もかひなく卅一ウ「のゝみやのあはれなりしとゝおぼし卅二オ「かへらんともものう卅三オ「しわふる○人同「なり侍に
ける卅四オ「かしこうこそ物し給○けれ卅六オ「おほこのごも○るを卅七ウ「かき給ひつらむ卅八オ「ものうきはごにて同ウ「えらせ給
へれば四十オ「こゝのさまも四十一オ「たへがたうおぼさるれご同ウ「世のうきにたへず四十三オ「西のたいのみなみに四十四オ「こり
わきたる御おこなひ同「かゝるべきとなれご同ウ「學問をも四十八オ「かたわか○せ給へり四十九オ「おもてのいたうあかみ五十三オ「
こゝさらにかろめ五十七オ

花散里巻

「さきぐもきゝし○ころ三ウ「かたらふこゝろはそれながら同「いこまなくくるしげなりこし月をへても○猶かうやうに四オ「な
つかしきかたには同ウ「よ○にめなれぬ御さまなれば六オ

須磨巻

「まれになんこきゝ二オ「明くれにそへて○思ひ同ウ「おもひ玉へるを三オ「わざこならずうちしのび四オ「やつれたるにて女の
同ウ「思ひ玉へよらざりし五ウ「御なほしの袖もえ引はなち六ウ「御めのこの宰相のきみ八オ「まとやかの御かへし九オ「みじかの
夜のほごや十三ウ「した○ひ聞ゆる十四オ「いりたるはこ同ウ「世を思ひ玉へはつるほごの十五ウ「たぐひなきとに○こそ同「思給○る
のみなん同「御物語は○よろづの十六ウ「いづち○かきえうせ十八ウ「いこ○露しげきに同「かずしらぬを思ひ廿ウ「月影にいみし
う廿一ウ「すまひをやせむ廿二ウ「うちずんじ給へる○さる世の同「入道の宮のこは廿四ウ「うらのみるめの同「御心○しづめ給て
思ひたき世におらせたてまつり給へこ心ぐるしきまゝに廿九ウ「御おもかげの同「ちゝはゝにもなりて廿六オ「うちな○かれ玉ひ
ぬ廿八ウ「御心にしみにしかたのみぞ卅一オ「その人のなきここそ同ウ「よからぬともいでく卅二オ「手ならひをし給ひ卅三ウ「なご
をめしてつくりゑ○つかうまつらせ卅四オ「まづいつしかこ卅七ウ「しばしもえたちこ○まらず卅八オ「あしきとゞも聞え卅九ウ「さ
ぶらひし人々も同「めでたくのみおぼえければ四十二オ「も○たまひて四十三オ「人をしも思ひかけむ同「ゐなかびてもてなし四十六ウ
「かりそめにしなして同「おなじこゝなにかとなるこ四十六オ「御こもの人々もみな四十七オ「いばえぬべければなんこ同「あはた

○古ナシ たしければ四十九オ

明石巻

「さわがされてなん二オ「ことゞもをかきあつめ三オ「しづめまもり給へ四ウ「身にかへて五オ「やすめ玉へこ同ウ「月さし出てし
ほのちかくみちきける跡も六オ「故院の七オ「あるによりて○なん同ウ「たのもしううれしう八オ「涙もこゞめあへず十七ウ「めづら
しき手ひとつ同「はま風すゞしうて廿ウ「年ごろの春秋ごとに廿一オ「つたなくてこそ廿一ウ「なりにてはべり同「おこりまから○ば
同「浪の中にも廿二オ「こよひの御物がたりにきゝあはすればげにあさからぬさきのよの契にこそはとあはれになん同ウ「う
らなれ給ひつらん人は廿三オ「見給へも及び廿四オ「おぼしよつるをり〳〵廿六ウ「あらじかしとすむ人のこゝろおぼしやらるゝ
卅ウ「ゆるされ給べきさだめ卅六オ「いさゝこわりなり卅七オ「よろこび思ひ京よりも同「さやかにはまだ同ウ「ふかきよのすめる
には卅九オ「入道○えたへで同「おもひむせびたるも四十オ「みづからは此度はえまうで四十三ウ「かへし給はりしに四十四ウ「めづら
しうおぼし悦びたるを四十六オ「たもたせ給はむに同「見おほせたまひて四十七オ

みをつくしの巻

「神無月に○御八講二オ「ゆづり聞え玉ふを五オ「くらるをもかへし同「かへし申シ給ける同ウ「うせ給ひにし六ウ「さしてかなふな
めりとおほかた八オ「きこえあつめたるを同「まだわかく○何心も九ウ「うちわらひて十ウ「入道の思ひ十一オ「世をへてなづこ同
「五月五日○ざいかには十四ウ「かたはなりけりと十五オ「いだしたに給ふ同「むかへとりて同ウ「あはれ人はかうこそ十六オ「まとは
かくまで同ウ「西のつまごには夜ふかして十七ウ「をりのこと○もの給ひ十八ウ「つごへてもし思ふさまに十九オ「御位を又あらため
廿オ「みふ給はらせ玉ひるんじ同「世の人もやすからず同ウ「この御行さまを廿二オ「やうをかへてさうざう廿四オ「立出給へる
○○こころに同ウ「いさゝかなる○せうそこをだに廿五オ「つかうまつる同「○はらへの物につけて廿六オ「みてぐら奉り廿七オ「きこえう
ごかし給ひても同ウ「聞えむとなん思ひ玉ふる廿八ウ「おほとなぶらのほのかに卅オ「もし○やと同「ある〳〵日○いかに卅二ウ「人つ
てにては卅三オ「なほあらずおぼし同「ひるよなうおぼし卅五オ「たかきもいやしきも同「入道の宮○は卅八オ「ひまある御中にて同

蓬生巻

「わが御身の二オ「なぐさめ給ふこも有けむ同「みこぶらひ聞ゆる五オ「時々いさかよふ七ウ「えこぶらひ聞えず八オ「心をつくし同「侍従にも同ウ「あはれこおぼし九ウ「おぼしへだてゝ十三オ「心わけ給ふかたもなかなり十四ウ「めづらしきこいこど十七オ「はしつかたおしのごはせて十八ウ「ほごになんありける同「こゝろゆかずおぼされし廿一ウ「の給ひすべして廿二ウ「丁こぼちたる人も廿三ウ「わたたり給ふとはなし廿四ウ「かみしもの人々廿五オ「思ひ出でなんきこゆべきこそ廿六ウ

関屋巻

「たゞこのかふちの守のみぞむかしより六ウ

絵合巻

「院にきこしめさむ二オ「けはひあらまほしあはれ五オ「御らんじつきたれば六オ「かの御事を聞え出玉へるに同ウ「心しらでいま見む九オ「この人々のこりぐ十一オ「口つきごもをおかしこ同「うらふりぬらめ十三ウ「げにいこいみしくかきつくし十七ウ「ならはさせ給はざりけむ廿一オ「聞え給ひて同ウ「見たてまつりしり玉ひてぞ廿二ウ「此世にはよ廿三オ「すぎにたり同

松風巻

「人々のつごひ二オ「御やすみ所に同「かゝる所におひ出三オ「こ思ふここ有て四オ「いたづらにあれ同ウ「こゝにはしるまじ同「人わろきこすにやこ五ウ「うらやましくおぼゆ六ウ「外のことなし同「かたらひたに七オ「君の御ための思ふやう八ウ「よもぎむぐらのもこの九オ「御かた十一オ「心あれば同「なれて聞ゆるを十四オ「思ひ玉へみだるゝを十五ウ「よにしらずのみ十六ウ「ほごはしりきや十七オ「こまやかにかたらひ玉ふ出給ふこて十九オ「なり給ひにける御すかた同「せうそこをだにせでこ廿三ウ「ほごをしひておぼしくらぶるも廿四オ

薄雲巻

「もてなし聞え給はむ四ウ「ながめゐたるやうだい六ウ「おぼつかなからむこ同「いだきて出玉へり七ウ「七日の御よろこび十ウ

「べたうけいしごもゝ十一ウ「見たてまつりおくり給ふ十二オ「めさましさも同ウ「いかに思ひおこすらむ我にて同一さてもあゝべきをなど十三ウ「引ぐしけんと十四オ「中々いとどめなれて十五オ「たまさかにてもかやうに同「過させ給ふことをだに十七オ「歎きわたり給つるに同ウ「うせ給なんことをおぼしなげく十八オ「御有さまなどさるべき同ウ「をしき人の御有さまを十九オ「いとそうしがたくかへりては廿二オ「くはしくはほうしの廿三オ「つゝましくてふとも廿六ウ「有けりやとことひきかむとぞ廿七オ「さまざまのふみどもを同「ゆづらせ給はむことをばおぼし廿八オ「こひきこえ玉ふ廿九ウ「さかりをなんむかしよりとり〴〵に卅二ウ「侍りかしと聞え玉ふに卅三ウ「御にほひのとまりたるさへ卅四ウ「ゆゝしうと聞え同「おぼししられ給ふ卅五オ「いらへ聞えてけるも同「物むつかしうてなやましげに

朝顔巻

「時々見奉るどに四オ「まめやかにはいと六オ「たち給ふはひ同ウ「おぼしつどけらる七オ「朝霧をながめ給ふかれたる同「さぶらふ人々もさしも八ウ「女五ノ宮なども九オ「いごみ給ひし女御十四オ「つれなきを昔に十六オ「こゝろづからのと同「いとあいなし十七オ「よその御かへりなどはうちたえで同「こゝろぐるしう見奉り十八ウ「さも思ふにはいとほしく廿二ウ「人によりことなるべき廿三オ

をとめの巻

「前斎院には二オ「すくよかにて同「うちもゆるばむ四ウ「ゆくりなからん五オ「文才をまねぶにも六オ「つかうまつりたうぶ八ウ「ならぶべき人なきおぼえごと十三オ「いとどはげみまし玉ふ同ウ「それにこそとて十五ウ「おはしける同「ひとつ所にて同「見かくしつゝあるなるべし十六ウ「年へたる人のいかで十七オ「そばみ臣へる十八ウ「おいごたちなど涙おこしつゝとゝかしこの十九オ「きんのかんならねど十九オ「ざえのほどより同ウ「ここわざもし給へ廿オ「おこと拍子同「かゝる御あだけ廿一ウ「よこに侍らんかぎりは廿二ウ「めにちかきがまじらひ廿三オ「聞え給ふに夢にも廿四オ「さぶらふ人々も同ウ「おぼしたらざりしを廿六ウ「まちよろこび聞え玉ふを廿七オ「深う、へだてし思ひ玉ふるとは卅一オ「さもさばれこひたぶるに卅四ウ「殿入玉へば卅五ウ「人々のさう

○玉のをぐし 四

ぞく卅六オ「内へ参ることもせず卅九オ「大納言殿のことは同ウ「大殿のにはえ及ぶ同「あはれをえ忍び玉はぬばかりのおかしう四
十オ「こしごろなれあそびし所のみ四十三オ「おはせずなりなん同「あひ思はめこおもひ同ウ「まだしきほごなれご四十六オ「さる
べきさまにきこえてことさらにさぶらひてなんこ四十九ウ五十オ「后はなほ同「よはひの末のさかえにも五十二オ「八月にご六條院同ウ「た
つみは殿の同「南のひむかしは五十三オ「へだてのかきにから竹うゑて松の木五十四オ「朝霜むすぶべき同「外のにはにず五十五ウ

玉蔓巻

「かなしきことなほ父君に四オ「京のかた思ひやらるゝに五オ「しらせ奉りて御すくせにまかせて見奉らんにも六ウ「命さへた
へず同「いひなげくほご佛神に七ウ「よからぬ女ごも十一オ「いかにおほせらるゝこ十二オ「さまぐ\思ひつゞけらる十五ウ「き
こえあんなり十七オ「おくにいりほかにかくし十九オ「ひこへめく物にきこめ廿二ウ「申ッけり廿三ウ「し水の御寺観世音寺に廿四オ
「いふをきくも廿五オ「のこるなく同ウ「父おこゞにきこしめされ廿七オ「五條にぞこゞめ奉り給へらんこぞ廿八オ「こゝちしけり
廿九ウ「へだて聞えけりこや卅オ「あることなきことはへだて同ウ「思ひ玉へしを卅二オ「このきみことゝの給へば同「かくきゝそめ給
てのちは同ウ「われはかうさうぐ\しきに同「かくてつごへるかたぐ\の卅三オ「たづねしり聞え卅四ウ「聞えつけ奉り給ふ卅七
ウ「をさなき人の有しかばこしごろも同「ことにおほからで卅八オ「身はそれながら四十一オ「うらやみなくこそ四十三オ「まゐらせ
たるうち物ごも同「山ぶきのほそながは四十四オ「つき給へるごさかしらに四十六オ

初音巻

「よにくもりなき三ウ「御有さまにもてなし五ウ「やさしきかたにはあらねご同「心かろき人のつらにて同「御心のながさをも
六オ「人かげあまた同ウ「すみなしたまへり同「こゝぞくもれるこ同「さうがちになごも八オ「かたぐ\心おきて九オ「残る
なく同ウ「ろくごもなご十オ「けおされ給ふもわろし同「人めのかぎりばかりは十一ウ「人は侍りや十三オ「朱雀院のきさいの宮
の十六ウ

胡蝶巻

「枝をたれ○花も三ウ「岸より同「かきこらまほしきにまとに四オ「底にほへり同「○こゝろ〲に同「御かた〲の同ウ「てふに○は八オ「こびちがひて九オ「まひい○る同「わらはべに給ふ同「いと○よくおぼえて十一オ「此宮をなんかたみに十二オ「をかしうもあはれにも同「今やうのひとの十三オ「われに思ひしるに同「心たつやうにもあり同「見え給ひにけれ十四オ「思ひ聞え給てうへにも十八ウ「かつはわか〲しう十九オ「にほひとも見えぬ廿オ「おほとかなるさまにて○袖の香を同ウ「けしきもしるければ廿一オ「さりげなくてをもてなし給へ同「うしろめたくこそ同ウ「おきてちかくも同「年へぬるむつましさに廿二オ「はかなきことをも聞えん廿三オ「なやましげに見えさせ玉ふ同ウ「身ぞ○うかりける同「おとゞの御ゆるしを○ほの聞て廿九オ

螢 巻

「なきこえ給ひそ○御かへり時々聞え玉へとて○をしへてかゝせ三ウ「いとうたて同「むつかしき○さかしら人の四ウ「人の御いらへ同「したがひたること五ウ「もていでさわぎ給はじ六ウ「などかはいとにげなくも八ウ「けふの御かへりはなど十オ「からきぬなどけふの十一ウ「出給へりげに十二オ「てつがひどもおほやけ同「むかしの内わたりにて十三オ「おほきみ○けしき同ウ「はなれ聞え玉へ○れば十五オ「かぞへのかみがほと〲し同ウ「かた〲につけて此世の十七ウ「やまとの國の事なれど十八オ「かはるなるべし同「いかにされたりけん廿ウ「よみきかせ給ひそ同「しわざさも女しき廿一オ「御いきはひにてみななしたて玉ふ廿四オ「姫君の○ことたがふ同「合せさせ給ひけるに廿五オ「をさ〲なしかし同

とこなつの巻

「おとゞの此ごろほかばらの三オ「かしづき給ふなること同「こゝにこそいとゝもしきに四オ「かたにてもゝてなされなんはや四ウ五オ「きびしく○もてなし同「おもふべかめるわざなれば六オ「まさりたり同ウ「心にいれて九オ「かきほにおひし十一ウ「かぎりなき○こゝろざしこ十二ウ「うたて○おぼえ玉ひしか十三オ「そしりきこゆこ十四オ「さかしかしこにこそは同「おとゞのあやしく此わたりの同ウ「大かたの子のすくせなくて十五オ「おこりばらな○れど同「御あはひどもならん同ウ「はだつきなどいこ十六オ「御くしのほどいこ同ウ「ならし給へるに同「うつくしくのみ見ゆ同「かくの給ふ○がつゝまし十八オ「今姫君を同「つゝまずいひ

をしへ同ウ「こまかにおかしげには十九オ「すぐろくをぞうち給ふ同ウ「こふこゑぞいこ同「はづかしきも見しらず廿一オ「やぶい
給フいでゝさましし廿三ウ「深きすぢおもひえぬほどの廿四オ「みゝもこまるかし同「ほどいこかろらかなりや廿五オ「まこと〇や同
「はゆるにや侍らん同「かきざま〇しもじ同ウ「たいふの君こいふ〇もて參廿六オ「君こいふ〇ちかう同「わろしこや思ひ同ウ「お
もひおこされなんやがてかき玉へこ同

かゞり火巻

「もてなしから〇こそ二オ「たいの姫君はおぼし同ウ「秋に〇なりぬ同「かゞり火のすこし三オ「見る〇かひあり〇御くし同ウ「下も
えなりやこ四オ「秋になりにけりこ同ウ

野分巻

「あさゆふ露のひかりも二オ「見るには又春の同「にほひちりてまたなく四オ「今まゐれるやうに五オ「いはほをも同「風に〇侍
り同ウ「さのみこそあンなれ〇こ六オ「ゆづりてなんこ同「たちならび玉へらむ七ウ「吹まよふほど八オ「中將のこわづくりにぞ九オ
「あるまじう〇こそうれへ十オ「じゞうのかにとにゝほふかうのかをりも十一ウ「中將のながめいりて十三ウ「かの戸のあきたり
し〇よこ同「うちあかみて同「中將はわたどのゝ十四オ「おほかたの荻の葉同ウ「かゞみなども見給ふほどなりける十五オ「思ひ
わたるこゝろにて十六オ「吹みだり侍り〇しか十九ウ「こりおろして同「まめ心もなまあくがるゝ廿一ウ「あはれなりける廿二オ「そ
のついでに〇いこ同ウ「見ぐるしきとに〇侍る同

行幸巻

「あつかひ聞え玉へど二オ「かむたちめなどもたかに三オ「けしきここなり女はくはしくも見しらぬかたの事なれどたゞめづ
らしう「よき車ども多かり同ウ「ごたちなどのきえかへり心つくす四オ「有さまにもやこ五オ「さやうのをりのことはまねぶ
に同ウ「跡やなからんなど六オ「うちとけたる御ふみのこまやか同ウ「御かへり〇昨日は同「女御又さてさぶらひ玉へば七オ「御も
ぎのとをここそはこ同ウ「なにくれのぎしきも同「おもほさぬと〇だに同「うたて有べし八オ「いこさだめなし九オ「宮もうせ〇給

はど同「いこど御こゝちの同「物し給ふにかこ同ウ「參り侍らず同「なりにて侍り同「月ごろになり侍りぬるを十オ「なきになきての給ふ御聲の同ウ「思ひ給ふるとの侍るを同「ゆるし○すて給ともやこ十一オ「世なめれ同ウ「きゝ思ひ給ふるなど同「なにかはこばかりに思ひ玉へ十二オ「たづねにたぐふべき人なんなきを同「わたくしの家のいこなみ同ウ「大かたのおぼえだにえらばせ同「思ひたまふる十三ウ「人に○もらさせ給ふまじこ十四オ「人めのいこほしうも同ウ「御世の殘りすくなげ十五オ「此とをせちに同「思ひいられぬるを見るには同「宮もかくの給ひ同「御なほしにいまやう十六オ「侍れどこれはうち〳〵の十七ウ「かずにも侍らでうれしき十八オ「出玉ひてけり同「そのかみ○いかになりに同「いまかくすこし同ウ「參りきあひてはさらに十九オ「し侍らずこそこて同「かなしくてこどめ同「いこゆかしう廿オ「そのつらには同「ここども○あるに廿一オ「御有さまよりも見ごころはまさりぬべかりしをなほもあらず同「見たまひて同ウ「いこからく御手廿二オ「かをりふかくて奉同「くしあふぎなごまで同ウ「めでたくしける色あひしたるあはせの廿三オ「しのびがたくてなむ同「これ○いこあやし同「あやしきふるめき人同「にくさまにかき廿四オ「かへす〴〵もからころもかな同「ゐの時にぞ○いれ奉同ウ「かぎりなきかしこまり廿五オ「つぎ〳〵の人人同ウ「さま〴〵○人の聞え廿六ウ「おほせごこにしたがひてなん廿七オ「いかでさやかに同「おこりばらなりこ同ウ「たがいひしとをきゝてかく廿八オ「なにがし○こそ同「まじるまじかりけり同ウ「つらくはおはする同「かたきいはをも同「いこよう思ひ廿九オ「侍らんこ○手をおしすり卅ウ「きこえるた○り同

藤袴卷

「かやうにて聞ゆるより六ウ「思ひ玉へしられけれ七オ「しぶ〳〵げにこそ八オ「こ思ひ給へりき同「もてはなれじさ思ひて同「たがふまじ○なご九ウ「げにさ○思ひ十オ「めさましくもおぼ○さめ十三ウ「女の御心ばへは十七ウ「聞え玉ひけりこや同

眞木柱卷

「寺のげんもあらはれける二ウ「御心ゆかず同「內侍なごも四オ「心のくせもこそ五ウ「おぼしの給ふをおやの九オ「今はかばかりの身にて同「本上はいこ同ウ「人のおやだちてもてない十二ウ「くるしかゝべきここなご十三オ「今はかぎり○こどむこもこ同ウ

「御びんのわたりにも十五ウ「夜一夜いみしうたれ十六オ「いそぎ出給ふ十七オ「こゝろおくべきわたり〇こ廿オ「見るめのまへにだに同ウ「夕なりけり同「ひはだいろのかみつかさね廿一オ「はかなき〇こずゑをも廿二オ「かゝると〇を聞給ふ廿四オ「かたちなごゝうはあらねご廿五ウ「いさらうたけにて同「見おくりたるさまつごも廿六オ「あはれなるにも物思ひ同「思ひくらぶる〇もこよなく廿七同ウ「こゝにおふべき罪もなしこ廿七オ「御かた〳〵〇めぐるほごに廿八ウ「大殿の君達〇四五人同「すぐい給はましをこ廿九オ「心げさうしこへて同「此御つぼねのあたり卅オ「あかずおぼさる〇れご卅二オ「ひさまに忍びて卅九オ「御こゝろにかけ卅六ウ「いこおほか〇るを御らんじ卅七ウ「こりかへすべき卅八ウ「さすがなる〇けしき四十オ「おはせぬ御なげきを同「やみぬべかめる同「なりけりこ〇をかしうて四十一ウ

梅枝巻

「御らんじあてつゝせさせ給て二ウ「その事かのこゝ〇聞え四オ「合せ給へる深さ七オ「ほうのすぐれたるは同ウ「なまめかしきをこりあつめ同「きこえ給八ウ「雲ゐにこほるばかり九オ「宮は見奉り玉ふ十ウ「思へりしも心ぐるしうて十一オ「よろしき〇だに同「心にもいれずはしり十二ウ「御名をもたて十三オ「みだるゝためし〇有ける廿ウ

藤末葉巻

「おぼしよわりて四ウ「わざとはなくて同「對面にあかず同「おまへに〇かくなんこ五オ「ひきつくろはれむや五ウ「べくなんなごの給て七ウ「よこたはれる松の九オ「うたふ同「いさわりなくてなかなましきに十一オ「御あさがほ同ウ「又きえぬべきを同「なべてならぬさまにて給へり十二オ「あまりすゝみて同ウ「御かた〳〵より十三ウ「まつりの日の曉十四ウ「さだめなき世なれば〇何事も十五ウ「みづからはえつさしも十七オ「かなひぬること〻ちして同「なにかのとも同「みがきたて奉り給同ウ「あかぬとかなこ〇おぼしける十八オ「そこらの御中にも同ウ「見奉るにも涙のみ十九オ「あらまほしき人の〇有さま同ウ「御参りかひある廿オ「御賀の事〇おほやけより同ウ「さまことにいつくしさそひ玉へば同「位をえゆづり廿一オ「おぼしなるに同ウ「つぶやきしよひのと同「おもしろく〇うつろひ同「山のもみぢ〇いづかたも廿四ウ「賀王恩こいふ物を廿五ウ「青海波のをりをおぼし廿六オ「おこりたま

はむ廿七ウ

上ノ若菜巻

「いと〇うしろめたく四ウ「おぼしなげきてこしくれ五オ「はかなきことの〇あやまり六オ「おもむけ〇をもおこし同ウ「えなすらひ聞え八ウ「なげかしく〇かまたの御中に十二ウ「おぼしのたまはすなるげに十三オ「名をたちあざむかれ十五オ「もの出む〇いとうきこと十六オ「さらではよろしかるべき十七オ「こしいさわかくてむげに同ウ「そうせさせたまひ御け　き十八ウ「聞給はんこころも同「くるしくこそはあらめなどもことより十九ウ「こゝにも又いくばく廿ウ「さだめなさなりやこ同「にしおもてにみちやう御木丁よりはじめて廿二ウ「内春宮の残らず廿三オ「よろこび聞え廿四オ「まうけゝるほいたがひて廿五オ「思ひ玉へ〇たゆたふことのみ廿六オ「心のぬるさは同「心ぐるしく見奉廿七オ「きよらをつくし廿四オ「おぼし出ることゞも同ウ「思ひもこがめられず卅五オ「こりつゞき給へり卅六ウ「一品ノ宮のこのみ卅七ウ「うぐひすもおごろき卅八オ「かぞへしらせ給へ〇るにつけては同ウ「こりなし給へば四十一ウ「こどもゝ今はこ四十二オ「もとより思ひはなれたる四十三ウ「久しかりつるに身も四十五オ「花をまさぐり給つゝ友まつ四十六オ「人の御ほど四十七オ「かためたれば五十三ウ「此ごろのとなり〇かしこ五十五オ「御物語のこゝろめ〇はげに五十六オ「あかしの御方は今は五十八ウ「聞えなれなば同「思ふやうなるべき御かたらひ同「いでたつそのついでに五十九オ「心たゞ〇よき人同「うちとけたりつる六十ウ「くちをしかりけること六十二オ「おこりなんなど〇いひ同ウ「極樂思ひやらる六十三オ「ゆきか〇ふおこ同ウ「からの六十四オ「しろかねの枝に同「たちつ〇きたる六十五ウ「又いとおもしろし同「〇こしのこゝろ六十六ウ「ふるき世の一の物こ六十七ウ「ひとよろこびに七十オ「ゆくへすゑ見えたる同ウ「見給ひてしかば七十一オ「わが御すくせも七十二オ「なげきしをわが君の同ウ「いとほしきことゞもを聞え七十四ウ「らうたき人なぞへ奉りたること七十七ウ「えたへまじかめ七十八オ「たゞすこし〇おぼつかなきこの殘りければ同ウ「ここなることなくて同「かたく見給ふるは七十九オ「のぞみつうたがひなく八十一オ「藤の衣にも同「又對面は侍りなむ同ウ「あひみむこころた同「こゝろへにもかゝす同「思ひ玉へる八十三オ「いひ〇〇ゝあかし給八十五オ「あらまほしくおぼしたい八十六オ「思ひ玉へなりゆけば八十七オ「物つゝみし給へるさまなり同ウ「五六枚つきすがに八十八オ「あへかなひつゝ人やりなら

〇玉のをぐし　四

す同ウ「おはしまさむにだに(○古ナシ)同「御らんじおくべく(き古)やさて八十九ウ「よしありさかしき(る古)九十オ「かよひすみに(わ古)たりこそ同「わかれ
侍(○古ナシ)にしかど九十一オ「よこさまの人のなげり(○ ○古ナシ)九十二ウ「世のたとひにも(へ古)同「はぐゝみげなれなど(○古ナシ)同「まことに心の(の古)くせなく九十三ウ「ま
たまことに(さらに古)こゝちゆき九十六オ「いはけたる○あそび(あ古二)同ウ「人よりまさりて○のみ物し(こ古二)九十九ウ「みなおり給て(み古)同「いろ〱○ひもとき(の古二)
百オ「ひきあげ玉へる(り古)同ウ「よづきてぞ見ゆる○からねこの(に古二)百一オ「いとまの口まちつけて(へま古)百五オ「なほいはまほしけれど院には(○古ナシ)同
ウ「ふみやり給ふ(て古)百七オ「一日○風にさそはれて(の古二)同「こあれど○一日の心も(侍従は古二)同ウ「のたまひて(ふ古)百八オ「さることの有しこ(○古ナシ)同

下ノ若菜巻

「此兒し人はこ(か古)五ウ「したりける(り古)心なん同「右大將の君をばなほ昔の(ん古)六ウ「まき柱の姫君をえて○かしづかまほしく(○古ナシ)(もて古二)七オ「ひがみ
給へれど(つ古)九ウ「心ぐるしくてもて(○古二)はなれ十オ「かけむになにか(○古ナシ)十一ウ「のごひたゞらして(○古ナシ)十三ウ「命ながさうれしげ(さ古)同「あはれに
も(○古ナシ)おほけなくも十四ウ「まうでさせむこ(ま古)十六オ「思ひわたさる(○古ナシ)十七ウ「まじらはましも見ぐるしくや(心古)廿一オ「ついでなくすさましき(○古ナシ)
廿三ウ「大將の御子り内侍の(○古ナシ)廿四オ「こゝろえしらぬを(に古)廿七オ「つたへごもをも殘さず(○古ナシ)同「をしへ聞え玉ふ○げに(に古二)廿八オ「よそ○ひごも(ほ古一)
廿九オ「御むまごの(○古ナシ)卅二オ「此御方○は(を古二)卅五ウ「さなん侍りける(り古)卅六ウ「なりにためるを(○古ナシ)卅七オ「ほゝゑみ給げにけしうは(り古)卅八ウ「いとあ
はれになんなど(と古)四十一オ「おひ出玉ふ物し給はゞ(○古ナシ)同「參りて○けぢかき御あそびに(すこし古二)同ウ「花の色香ももてはやされて(○古ナシ)同「おもだゝ(○ ○古ナシ)
しこ思ひ(く古)四十二ウ「こごものあつかひを(○古ナシ)四十四オ「つねよりもことりわきて(○古ナシ)四十六オ「思ひいたらぬこと○もあらむを(に古二)同「たぐひすくな(○古ナシ)
くなん同「やむとなくえさらぬ(○古ナシ)四十八ウ「心ざまになん有し(○古ナシ)四十九オ「思ひしめ玉へりしが(○古ナシ)同「ふたみちに(す古)五十ウ「つひにはよるか(○古ナシ)
た五十一オ「けぢめあるはたのもしきを(ら古)五十二ウ「心をつくして(○古ナシ)五十三オ「はや○まるり給ひね(く古二)五十四オ「ねんごろに聞え給はむに(○ ○古ナシ)五十七ウ
「聞えさせつべくたばかり(給古)五十八オ「いかなるをり○かは(を古二)五十九ウ「すゑ奉りつ(○ ○古ナシ)六十ウ「あやしうきゝもしらぬ事どもをぞ(○ ○古ナシ)六十一オ「か
けぐしきすぢはなくて(こゑ古)六十二オ「おぼしおぼゝるゝを(○古ナシ)六十三オ「かきいだきて出るに(○古ナシ)六十四オ「戀しく思ひ出らる(と古)六十五ウ「おぼえ
んこそゆゑ○は(に古二)六十六オ「過し侍るにこそ(○ ○古ナシ)六十七オ「君たちかきつれきて(○古ナシ)同ウ「ながめゐたまへるに(○古ナシ)同「くらしがたくおぼゆ○(る古二)同「す
さましげさも(○古ナシ)六十八オ「いとかくひたぶるに(○ ○古ナシ)六十九オ「のごめ玉へ(ひ古)同「此わらはの(は古)七十ウ「た○ふれたるが(は古二)同「まゝはゝの御こゝに(を古)

七十四オ「ちかくてもふだんの七十五ウ「御あふぎをおき給ひて八十一ウ「侍從よりきて八十二ウ「たゞいで○に出くれば同「まぎらは
しゝかしゝ人の八十四オ「いであなこゝろう○同ウ「つくら○せ給ひけむ八十六オ「いこ○つゝましく八十八オ「さまもいこ○心をさなし八十
九ウ「いたらざりしほごはさう〴〵しし九十三オ「こぶらふべきを九十四オ「いそがせ給ひけり同ウ「つくし給ひけり同「おぼしすて
てし世九十六オ「ほごにて見玉ふこのとゝなくてしば〳〵もきこえなほごにおぼつかなくてのみ同「こゝのやすからず九十七オ
「をしへてかゝせ奉り九十九オ「びやうざを○みあつかひ百二オ「其事をだにはたさむこて同ウ「此おまへをこく百四オ「又大將の○
内侍のすけばらの百五ウ「しほたれ○玉ふ百六オ「そらゑひをしてかく同ウ「こゝこ思ひ玉へつれ百八オ「思ひ玉ふるになん同「や
うにぞ見え玉ふ百九ウ「ころほひにて物すさましき百十オ

柏木巻

「あなれこ思ふに二ウ「侍るかなゝご聞ゆるに三ウ「いふべきことなん○こ四オ「おぼえ給へれ同「はづかしげなる○御けしきの同ウ
「いこゞしきこゝち○も七オ「おくるべうやはこ八オ「ゐさりいり給ひぬれば九オ「あまたの人の見る物ならねば十オ「むかはり
きぬれば同「出おはしたる御おぼえ同ウ「まだむつかしげに十一ウ「御かたちここにてもなまめかしう十四ウ「おこなひをも十七ウ
「え見奉り給はず十八ウ「參り侍りてなんこ同「世にふべき○身こて廿一オ「おほやけにも同「しばしいだし○て廿二オ「ならまし
物を同ウ「なごのたまへば廿三ウ「そこゝころこ同「よろづに思ひなげき廿六ウ「思ひ玉ひけるなりけりこ廿七オ「かくなんこきゝ
玉ふは同ウ「いろ〳〵をつくしたる廿八ウ「御ごゝものきかちたる廿九オ「かくてしも同「此きみはいこ卅オ「なげい玉ふらんに
も卅一ウ「御なやみにもあらで卅二ウ「きゝしをばいみしき同「つひに○かけこゞめ同「心をみだりて卅三オ「御ずきやうなごを同
ウ「恨みさへそひて卅四オ「のごめがたき世なれご卅五オ「さらばみづからの卅六ウ「しかすくよかにえ思ひすつまじう卅七オ「た
だ○こゝなかりし四十ウ「例のわたり給へり四十一ウ「ほの見えたる四十二オ「ちかき世の事なれば四十四ウ「をりごゝにもまづ四十五オ

横笛巻

「事ごもおほくし給ひ二ウ「らうたげなる四ウ「月草して五ウ「見○はてむこすらんやは六ウ「うちいで○聞えむも七ウ「わが○この

の八オ「人しげくて物さわがしく同「たつるぞかしこ同ウ「中々におもにゆれば十オ「物をのみ同「人げにぎはゝしきに十三オ「給へるもことわりに同ウ「いさかはらかなるを十四ウ「人きたるなめり同「まろかはかくさむ十六オ「うつくしみて同ウ「まだえよくも見ぬ十七ウ「御をしへばかりは心づよげ十九ウ「女ばらのつたへに廿一ウ「おぼしけりこそ同

すゞむしの巻

「ぎやうがうの人々三ウ「ひさしにさしのぞき同「かりの御しつらひに同「御契をはちすのいさこに五ウ「山のみかごにも同「むしのね聞給七ウ

夕霧巻

「なぐさめ給ふ事ども一オ「御けはひをも見むこ同ウ「しひてはえさぶらひ給はず三オ「なやみ給ふ人よは同ウ「うちなびける色も七ウ「りしかぢするさ同「おぼすとのやるかた十一オ「うしろやすさなども十二ウ「そしりをばさらにもいはず十四ウ「思はむこころよふ十五オ「思ひみだれつゝ十六オ「ゆくかたしらず十八オ「人こそはへりけれ廿三オ「すくせ心うくおぼし廿四オ「心ぐるしうてなんも同ウ「くるゝやうにし給をめをおし廿六ウ「きゝぐるしかるべしこ廿七オ「ちへに物を思ひ同「けしきをばの同ウ「こみにもえ見こき給はで同「にくゝはあらず廿九オ「思ひ給へらぬをげに卅ウ「かくかき玉ひつらん卅二オ「うれしう見給ふるに同ウ「侍しここなれば末の世まで卅五オ「かぎりある道はかへり卅六ウ「きこえさせ侍るべき卅九オ「物なりけりこ見奉る四十一オ「東おもてつきなたの同「御つみにさへやおらんこ四十二オ「さしも思ひ臣へらず同ウ「さまでもえ忍びはつまじう四十四オ「あくがれいでゝ四十六ウ「をぐらの山も四十八オ「うれしうおぼしわたるを五十一オ「女の御たぶ同「もてなすべききさまも同ウ「かうせゆくよ五十三オ「みこはいかゞ同「まうでさぶらひ五十四オ「やうのものこあらそひ同ウ「あるべききさはうのたまふ五十五ウ「あるべきかぎりめでたう同「かべしろ屏風同「たふるにしたがひて五十六オ「御車にのり給ふもかたはら五十八オ「聞ゆるはいかなる六十一ウ「のたまはせなす姫君かな六十三オ「わづらはしきやうにはゞからるゝ同「うちあかみ給へる六十五ウ「ちかくてこそ同「今よりのちのよその六十八オ「げにこて思ひ六十九ウ「おほしなすら八七十ウ「くらきこゝちするに七十一ウ「御かたちまほにはおはせず

こ七十二オ「わたり給にけり七十三オ「かろくおぼゆるわざなるを七十六オ「むかしの御中だえのほどには七十八オ

御法巻

「御心のうちに物あはれに二ウ「ついでにもこもよほされて同「女君はうらめしく三ウ「薪こるほどしさんだんの五オ「例ならずおきゐたまへりし六ウ「ふし給へり同「けふや見聞玉ふべき同「まかりて侍すゐ八ウ「いとはしげなる　この人かの人八ウ「めをすりてまぎらはし十オ「院わたり給ひし十一ウ「とまるべうもあらぬ　よそへられ十二オ「かゝることも侍めるを十四オ「物おぼゆるもなければ十六オ「くれまどひ玉へり十七オ

まぼろしの巻

「夢にても又は四オ「おまへちかくて御物語同ウ「ありき玉ふを七ウ「しらずがほにも八オ「ありき給ふ同「大かたこの世の同「花の色もすさましく十ウ「今はのかぎりのほど十二オ「ひとつすぢに同ウ「侍らむやつひに同「ゆゑあることも十四オ「御文奉り給同「中將の君の東おもてに十五ウ「さし出たる十六オ「をりこども十七オ「おほせしよには十八ウ「ひとりのみ見玉ふは十九オ「一こころおき給ひし同ウ「のこし給へりけるを廿一ウ「かきつけ　みなやかせ廿三オ「つかうまつりて御らんじ同ウ「其日そ出る給へる廿四オ

にほふ宮巻

「御元服し給ひ　兵部卿　聞ゆ女一ノ宮は六條院の二ウ「御しつらひ　あらためず同「月ごとの御念佛六ウ「御光をまばゆからずもてしづめ玉ひ七ウ「けはひの人ににぬ十オ「立よらむ物のくまも同ウ「三ノ宮のさしにそへて十三オ「もたまへら　で十五オ

紅梅巻

「あはせ奉り給へりしを二オ「女二人のみぞ同ウ「今の御はらにぞ同「うつくしさおぼしたり八ウ「ゆるされにたゞめりな十一オ「思ふべかゞめるこ十二オ「すくなくやあらまし十三オ「名をやちらさんいすきぐしや同ウ「紅梅盛なりしを十四オ「たきにはさで同ウ「まめやかにはおもはし十五ウ

竹川巻

「こころ〴〵なごそのかたの二ウ「姫君たちをば三ウ「おぼされにしが〇はづかしう四ウ「けごはくもてなし同「思ひなすが心こゝなるにや六オ「わかき人々〇心とに同ウ「いひなやましける七オ「思ひ玉へらるゝ八ウ「おしあけてつあづまを十一ウ「びはもになくいまめかし〇故有て十二オ「さそはれ玉へかしこ同「心にもいらず同ウ「世におはせずないにきこ思ふに同「こぼれおつるやうに十九オ「心深きけはひは同ウ「うらみこもせず十九ウ「なだらかならん〇こ申廿一オ「春の藤かな同ウ「さまたげざまに廿四ウ「あないこはし〇たはふれに同「思ひはつる命の廿六オ「松よりこゆる廿八ウ「えこそかゝらざりけれ廿九オ「思ひいられざりしかご同「参り給て後はをさ〳〵同「所々〇かきありきて卅二ウ「心こゝなりこさだめ聞えし卅三ウ「たのみむなしき同「かたちはたいこおかし卅四ウ「かくいひ〳〵〇のはて卅五ウ「おぼしおきてしかご卅六オ「思ひ玉へてなん同ウ「いにしへを思ひこしがさすがに卅七ウ「みかごはまして卅八ウ「御こゝろ〇あてに四十一ウ「思ひ玉へねごも同「うちかうがへさせ玉ふにやこ同「おもひ玉へていだしたて四十二ウ「おかしさぞかしこ四十三ウ「通ひ玉ひしこゝをいこ四十四ウ「里におはす〇こ思ふに四十五オ

橋姫巻

「うせ給ひにしこなたは五ウ「うるはしくておほかりける八ウ「まゐりこふらひ同「心をいれておひ出同「こはせ給ふこゝども ある十一オ「すぐしくれ〇こ同ウ「十のみこにぞおはしましける十二オ「御とつてにてもあはれなる同ウ「うらみのこりけりこ十三オ「なべての世〇うらめしう十四オ「のたまはするなりこ申せば十九ウ「よむを〇きくに廿一オ「物のくまありぬべき同「きゝやし給ひつらんこ廿二オ「よろづのこともこおぼいて同ウ「よしあり〇あてなるこゝろ廿三オ「すゝむる人侍りこも同ウ「みすのうちにこそ廿四オ「しらぬやうに侍こここ同「おぼゝれ侍る涙にくれて廿五ウ「かくれ給にしは廿六ウ「人にしらせず廿七オ「末つかたにめしよせて同「こはずがたいすらむやうに同ウ「たちわたれい廿八オ「ここわりぞかしなごおぼゆ同「思ひきこえたるを同ウ「はしをだに見せさせ給はぬ卅三ウ「思ひ玉ふるやうある卅四ウ「思ふにたがふべき同「おもひ玉へわたりつゝ卅九オ「わたくしごこにはあらず四十一ウ

「久しくなりにけりや四オ「さるこゝろして五ウ「かへり見のみなんせられ七ウ「御文はつねに有けり八オ「かゝる人なんこ同「たゞ此御ことゞもにいこ九オ「一所〳〵世に住つき同ウ「なごする人は父同「かはすべかめるに十一ウ「さればにやたちて十二ウ「三ノ宮いこゆかしう十四オ「さるべきこゝごもきこえ十五オ「いかに〳〵こは十九オ「かゝるここにも涙も同「おほかたの世の有さま廿オ「思ひ玉へりしかば同ウ「涙のひまもやこ廿二オ「なごし侍るがげに限同ウ「すまじきをやえり出廿三ウ「おまへにめしていたく同「うちもおかれず同「こゝごもをも見たる廿七ウ「かりそめの世の思ひしらるゝ同「御こことものほだしなご廿八オ「うけ給はらまほしさになん同「おしはからるゝがねたくも廿九オ「えんにおぼさるべかめるに卅ウ「きゝ見しかごわれも同「中納言の君あたらしき卅二ウ「おほごけたる卅四ウ「さるべきにぞなごも同「心ぐるしう見めぐらさるゝ卅七ウ「行まじらぬ所侍るをさも同「おぼし出て卅八ウ「よりゐる玉へるをわかき人々同「はかなきことゞもを四十オ「あかしくらし給同「御けしきのみ見ゆれば同ウ「出玉ひけれご四十一ウ「日影まばゆくて同「すこしたらぬほごならむこ四十三オ

あげまきの巻

「あざりなんつかうまつり二オ「うるさけれご三オ「おぼえ侍れごいかなる五オ「物の給へるさまなごの十ウ「出給はむけしきも十五ウ「よのうきとは十六オ「へだてにてもたいめし十七ウ「人もなくておや心に十九オ「あらため給ひつらん同「聞えすまひし同「え聞えぬこあり同ウ「こあるともかゝるここも廿オ「見奉りしり給へらんこ廿六ウ「ふこ聞つけ給て同「ふし給へるをさるこゝろしける廿七ウ「え思ひはなつまじけれご廿八オ「聞え給ふらん同ウ「きり〴〵すはゝひ出廿九ウ「わすれ給まじく卅ウ「同じくは心たかくこ同「いそぎ出給ひぬ卅一オ「さま〴〵思ひ給に同「しめをゆふらん卅四オ「見おこりし玉ふまじく同「かの御心ごもには同ウ「宮づかへにぞ侍るや卅五オ「きこしめしつけてば同「ひたやごもりにてはえやむ卅六オ「辨まゐりて卅七オ「思ひ玉へり今は同ウ「ゆるし給へこ卅九オ「うちすて玉ひそこて同「こき御ぞの袖のいたく四十二ウ「さうやくもやこ思給ふれご四十四ウ「げにこなたかなた四十五ウ「あまた宮たちのかくおこなび四十七ウ「めこまるあれごさらに〳〵四十八オ「けしうはあらずかた

○玉のをくし四

ち四十九オ「見わたし給て同ウ「おぼえ給けり五十オ「男の御さま○かぎりなく五十一ウ「雨○ひやゝかに五十四オ「此君をば〳〵なじ同ウ「いかでか○うちこけん五十五オ「なびき給ふこと○はた五十六オ「さはいへどいとよく同「夜をだにあかしはて給はぬ五十八オ「たれかはあつかふらん同「さるべきようなん同「申シさだめ給同ウ「また出ぬ○こおぼえ五十九ウ「おかしきことにおもへれば六十一オ「過給ふ○心ぐるしさこ六十二ウ「わりなきさは○りこそは六十四オ「さること〻ろして同ウ「おくれ奉るらめ同「あしきなり○こ六十六オ「冷泉院の姫宮六十七ウ「御らんずるに御ぐしの六十八オ「いふともや有けん七十四ウ「思給ふるやうなんなご聞こ七十六オ「ここのしげきをうちすてゝ同ウ「命○ながさにて七十七オ「思給へいり○侍こ同「不断によませ七十八オ「このゐ人にてさぶらふべし七十九オ「さいつころ○夢になん八十オ「いかにあへなき八十二ウ「かゞやきかくれ八十三ウ「さりこもいとかゝるこそあらじ夢かこおぼえて八十六ウ「いまはいとどもするに御ぐしを同「偈をしへけむ鬼九十オ「夜ふかきほどの雪のけはひ九十一オ「歎きくらし給つ九十二ウ「うとましさよりはあはれに同

早蕨巻

「ながらへにける月日二オ「いやめになんなり給へること四オ「たはふれかはし給へる同ウ「空のけしきも又けにぞ五オ「かたり聞えし玉ふにぞこよなく同ウ「いかにおぼしえたるぞこ七オ「つゝましうてなんこ○くるしげに九ウ「見なしつることと思ふにいとくやしく十ウ「ゆゝしく見思べければ十二オ「かたらひ給ひげにむげに十三オ「かのきしにいたることとはあれごさしもあるまじうてふかきそこに同「すべてなべてむなしく同「心よせ○聞えためりしを十五ウ「此中納言をよそ人に十八オ「ぬしなきやどの○まづ思ひ同ウ

やどり木巻

「うへにもおぼしなげく三オ「参らせ奉り給へり同ウ「御をぢなど四オ「空のけしきの同「事どもゝ出來て五オ「たはふれにて○これなん六オ「ひじりやうのものゝ七オ「なめげなり○こおぼし九オ「かへるべきなめり○こ十ウ「人わらへないかしこ返々同「もてなし給○を十二オ「霧のたちみちたる十六ウ「なほいとめさましう十七オ「おごろきがほにはあらず同「物思はぬ人はえある十八ウ

「まぎらはしにもこ思て十九ウ「物し侍りしに同「まことにいことあれはてゝ同「人なくこそ侍りけれかたく廿オ「女房なごは
たまして同「おぼえ侍けるまゝに同「きゝもこゞめぬさまに廿四ウ「こもかくも思はねご廿五オ「うち歎きていでや此御事廿七オ
「なりはてさせ給ふじ同「まちつけ聞え玉へる同ウ「いひ出玉はぬおもがくし廿八ウ「まち出てもなほ廿九オ「夜居にはさふらは
す同「ざらんもうたてあれば同「かやうなるをりは同「世人も思ひ聞え卅一オ「え給はなでもごき同「いこほしなごも思ひ同「
人のうへにても同ウ「我身になりてぞ同「いこあしけれこてよしある同「こすらんこ思ふには卅三ウ「ひこつ御車にてぞいで
給同「いそがしくまかで給て卅四オ「こゝのかし申給へご同ウ「かずはかぎり有とを卅五オ「なごの中には同ウ「心おごいせらる
卅六ウ「らうたきここそかのたいの卅八ウ「まちごほなるをりく卅九オ「かゝらんこすることゝは同「思しり給へるなめり四十オ「よろし
「御返りうけ給はりぬ同ウ「めしこは侍らざりしかご四十一ウ「さるはこしごろの同「つゝましげにのたまふが四十二オ「よろし
く思ひ玉へられんほごに四十三オ「いつばかりおぼし同「こよなうおぼしけるこそ四十四オ「わが心のみだれに四十五ウ「あてに
らうたげなりつる四十六オ「おぼいためるをさもや同「心のゆくべきこ心も同ウ「うちこくべくはたあらざりけり四十九オ「いふ
べきかたもなきをいかゞはこて五十オ「たゞには思はむ五十一ウ「さりげなくてさがし給へご同「おはするをきくにも五十二ウ「
なえばみためりしをこ思ひやり同「あまたくだりにほそながごもゝ五十三オ「はかまのぐはなかり同ウ「むつましげなるに同
「いかゞこも五十四オ「すがたごもなごにしろき同「人めあやしかるべし五十六オ「みなあたらし見玉ひなれたるこては同ウ「よこ
しいでさせ給て五十七オ「げにいこ同「おさえたるはくるしう五十八オ「まじきさまにさまよく同ウ「あるなごしのびやかに六十
ウ「わびにて侍り同「為にもかきこりて同「いこほしくていますこゝちかくすべりよりて六十一ウ「世にやあらんこも六十二オ「
かばかりにては同じくは六十三オ「さまで思ふべきには同「さばかりのきはなゝれば六十五オ「つゝましくてなんこ同ウ「あた
り川づら六十七オ「御はうべんにてなんかの同ウ「おほせ給ふはかなく六十八オ「其夜はこまり同「かへてつくるべき同「心うく
侍る六十九オ「わなゝきたれごかたるもこめかしく同ウ「故北の方のうせ七十オ「の給はせはなちたりければ同ウ「ほのかにきく
七十一オ「かきつゞけてはべめりしか同「こゝろあるを同「さやうのついでに同ウ「ふみ分たる七十二オ「なぐさめにはおぼしけ

る同ウ「山里に物し侍て七十三オ「辨の尼○に同「ほかざまに○むき同ウ「うちなびきたるなど七十四オ「猶あはれなるころなりかし
同「心にいれ給へる同「はなたざるらめと同ウ「まねぶ人も物し給ひしか○はかぐしくひきもとめずなりにし物をと○つゝ
ましげ七十五ウ「あまたせさせ玉ふに又々七十七ウ「おぼしさわぐ○に○おとらず七十八オ「こともはてぬに七十九オ「かひありてう
れしく同ウ「五日の夜は八十オ「ここさらにしなし同ウ「后の宮○の御うぶ同「かくさへおこなび八十一オ「その月の廿日あまりの
同ウ「のたまひいづれば八十二オ「そのほどの事どもわたくし同ウ「奉らむこそおぼしおきて同ウ「給ヒにたらんと思ふに心やす
くて八十四ウ「わが有さまのやうにぞうらやみ八十五オ「へだてがほにはあらん同「思ひよられぬここ同ウ「わたし奉り給フ八十六ウ「
ひさしの同「朱雀院の御物ども八十七ウ「三ノ宮びはなどとりぐに同「めし出て同「まゐらせ給へり同「までぞ○見えける八十九オ
「聞えかよひ玉ひて同「のぞむけしきももらし同「ゆかしかりければ同ウ「又御むかへの九十一オ「心をばいれ九十二オ「しも人も
数おほく同ウ「とも○くるしげに九十四ウ「にび色あをにびといへど九十五ウ「かたちよきも○あてなる○もこゝらあくまで見あつ
め給へれど九十六オ「ためらひてなんと九十七オ「そばみゐたる同「ゆかりなどにてだに同ウ「たよりにはじめてたいめんし九十八ウ
「かくなんとも聞え同「しげ木を分て九十九ウ

東　屋　巻

「ありぬべき○を三オ「人もあてなり○これより四ウ「心のしりがたきを五ウ「うかびたることをつたへ六ウ「も給へらむとも○き
き侍らじオ「さやうのあたりに同「同じど○うちくには同ウ「人のいひなすべき同「中にあたるをなん八オ「人にそしらる○
とも同ウ「ゐよりていふやうこの月ごろ九オ「日をはからひていつしかと九オ「思ふべき人なれど十オ「此人の思給へんとを十一
オ「あらずとなんの給ひつる同ウ「なり給ひなんとす十二オ「奉らんと申ス所々同ウ「よりつかで参りぬかみの十三オ「かの心ざし
はここにおもひはじめ給へらんに同ウ「奉り給なり○たゞなかの同「の給ふらんさまにもおふけなくとも十四ウ「めでたからん
御子の御むすめをば十五オ「ゝはだてられたれど同「口いれじと思ふにいかで十六オ「おこしむると、思て同「こゝちのし侍り
し同ウ「見奉れ○いかにして十七ウ「○帳のうちに廿三オ「わか君はわかき人めのと同「たよりのあるぞなど廿四オ「思ひより侍るな

ごいふ廿六ウ「さりとてもえ廿七オ「おきて給へりし身だに同「車よりおり給なること廿九オ「参りたりしを宮たちの同「あさうは思ひなすまじう卅一ウ「有さまなども思へば卅二ウ「思玉ふるにしもづかへの卅三オ「心ふかさにうちとけて同ウ「うれしくもおもほえ卅四オ「おしとゞめてたて同「なにかあら、かなる卅七ウ「つとこひゐるて卅九ウ「おぼえさせ給はめ四十一オ「一所の御うへを同「ねんじ侍れあがきみは四十二オ「おきゐ侍るを同ウ「おぼえ侍らずたゞいと四十三オ「思はむとどいとはづかしげに同ウ「こなたのさうじのもと四十四オ「身もあつう同ウ「わびにためるもいとゞかにても同「右近にことばよませて四十五ウ「たわみたるさまのし給へりしに四十六ウ「いとゆかしう見奉らず同「こゝはなにどか四十八ウ「人げなうさるかたに四十九ウ「いかゞいふこころみに五十二オ「宮は思ひはなれて同ウ「ものかなと思ふに五十三ウ「あやしきあづまごゑ同「しつらはれたい五十五ウ「いがたうめにやとつゝましくなんと五十七ウ「さうのものどもの五十八オ「あやしき所に同ウ「尼君あはれに人しれず同「思ひ出聞えさせぬをり同「まだきに此事六十二オ「かしこもしるべ同「をこに思ふ六十三オ「まいてかやうのこも六十七オ

浮舟巻

「さるまじき里までも二ウ「御本上なるに同「御心からなるべし四オ「なぞかうかぎりある五オ「たえずなほ同じ同「御らんぜさせ給へとてなんここまぐしと七オ「人はいかで見ざり八オ「さるべきことなどはせさせ玉ふ九ウ「尼をぞとふらひ同「すみ侍なる同「すゑ給へらん十オ「きゝしはかゝると同「いかでうとからぬにかあらん同ウ「うち出給へれば十二オ「けふあすよにおはせじ十三オ「心はづかしげにあてなる十五ウ「うちかけなどして十六ウ「右近は北同「たそこゝふ同「もとよりもほのかに十七オ「逢見ざらんとを十八ウ「出おはしまさんはまとに同「なほけふは出おはし十九ウ「もどかんもいはんもしられず同「身のとをおもひはゞからん人の同「おぼさるゝまゝによろづの同「いかにいはむはつせの廿一オ「たづね出けんなど廿四オ「人にしられさせ給はぬ同ウ「かの人見つけたることは廿八ウ「あまた参り給へれど廿九オ「御心さわぎの同「おぼしいで女は卅二ウ「見かはしたらんにてだに卅三オ「雪のやうくつもるが星の卅四ウ「右近はいかに卅六オ「夜のほどにて立かへり同ウ「物語しをるを卅九オ「さてな見えそや同ウ「すこしこゝろのどかなる四十ウ「よろづにの給ひあかして四十一オ「御けしきもかはるを同ウ「い

こか、る○を思ひも四十三ウ「いとあだなる御心の四十三オ「京にもかくしすゑ同「我心にもきず有て同「奉らんはなほいみし同ウ「例の人ならで○過ぐしてんと四十五ウ「こゝちしてなんと同「人や侍らん○世の人の同「かくなん○思ふゆめ〳〵四十六ウ「くれて○月いとあかし四十八オ「涙のいとゞとめがたきは同「うきたるとにやは侍りけるなど四十九オ「中々くるしくなどあり五十二オ「后の宮の出させ五十三オ「かしこまりてをり同「おはしますとて宮たち同「人○ちかければ五十五オ「ゐてあり奉りしみちにしも同「くまあらんがわがためも同ウ「いろ〳〵に心のうちに五十六ウ「御かたに○二三人同「例の御随身の人まにめしよせたり五十七オ「むね○ふたがりぬ同ウ「さいふぞなどもえとひ給はず五十八オ「これもかれもおとらぬ同「御命まで○は五十九オ「一かた〳〵におぼし同ウ「いと○くるしくいとほし同「なきこえ○給ひそ同「おほせられたるなゝり六十ウ「おほくやはあ○るとて六十一ウ「うつぶしふし給へれば同「よなか暁のこと○も六十二オ「しらではいかでかさふらふ同ウ「とりおきたりけむよ六十五オ「つみふかゝなる同「物をもえ聞えず同ウ「給はむとするにか○と思ふに六十六オ「御心づかひせさせ給ひつべからん夜六十七ウ「里びたる聲したる犬どもの六十八オ「いみしきあたをおにゝ同ウ「今さらにかゝるぞ○猶人々の六十九オ「よりはなど思つゞけて七十ウ「見にくやかなるも戀しく宮の同「いかになりにけんと七十一ウ「せさせなどし侍るをやがて同「夢もさわがし○との給はせつ七十二ウ

蜻蛉巻

「さらに思ひうるかたなくて二オ「身をなげ給へるかとは同「ちかゝんなれど同ウ「いましめおほせらる○とて四オ「ひがと○いふなりと同ウ「いかゞかへり参り侍らん五オ「すこしもこゝち○のどめ同「とり奉りたらん同ウ「かくし○聞え玉へるか六オ「ふるきためしども同ウ「まだかゝるとは此世に○あらじと同「今さらに人の七オ「雨のいみしうふりつるまぎれに母君もわたり同ウ「もの思ひ給ひつらんとも同「心しらぬやあること〳〵へどいと八オ「いそぐべきものどもなど同「なやみ給ふ御事により十二オ「いらへやらずなりぬ十二ウ「心のみだれ侍るほどをいま〳〵しくてなんと十三オ「おもきさまにのみ見せて同ウ「しづみてのみはあらぬ御こゝち十四ウ「世中のつねなさをも十五オ「思給ふるとて同「物のあはれをしらぬ人同ウ「はかなくてなくなり侍十六ウ「きこしめすとうも侍○らん十七オ「ことめがたきけしきの同「思給へ○し人になん同「すこし○けしきばみて同ウ「つゝしませ給へ

くなご同「おもひ出給ひし日のゆふ暮いと物あはれなり十八ウ「いとゞ心ぐるしければ十九ウ「物になんと人に廿一オ「かたり聞えさせ
侍らまほしき同「おはさせ給へり廿二ウ「さてさふらはんに廿三オ「かなしからんを思玉ふれば同「聴にかへるに同ウ「せさせ給
へりけるとは多かりけれど同「人々いかゞ見ん同「いかでかゝくきんこと廿四オ「かく思ひかけぬ同「右近をめし出て同「わゝ
れつゝわづらはしく同ウ「こゝろえぬさまの御せうそこ廿六オ「何事をかはこ同ウ「あやしく侍し所へは廿八オ「聞えさせ給ひし
同「御文はたび〳〵侍めいしかど同「うたてあるやうになんなどご同「おろかには思はざりける同ウ「行かへりしも今は同「人
がたこつけそめたりし同「さこそ思ふらんかし廿九オ「見ぐるしければ同ウ「こゝをさすべきこと日〳〵に同「かへらましやは
こ卅オ「物もおもひ玉へられず同「思ひおき給へ卅一オ「見給へはてゝは同ウ「たのみ聞えさせ侍べき卅二オ「やらずなんなど同「
ふみづのとのたうびて同ウ「はづかしくなん人に同「さまでもをもみな同「思ひしるばかりいふういは卅三オ「むかへ玉ひてん
後同ウ「まことにさなんせさせ卅四オ「いかでかゝなごいひける同ウ「ふりずかなし宮はあやにく卅五オ「つまおとこばかりおとこも人
には卅六オ「つねなしここゝら同ウ「うへつぼねにしたり卅八オ「人のきぬのおとす同「かぎりなくうれし卅九ウ「たれかさう
じは明たりし四十ウ「かゝしたしくて四十一ウ「給はおほこうれし〳〵は同「けいし玉ふを同「みすのうちの人々四十四オ「わたら
せ玉ひにけり同ウ「まゐりつるはさゝひ給同「さすがに人に心こゞ四十五オ「めりこなごやうの四十六オ「人にちかろく心つ
きなき同ウ「はかなきことをもた四十七ウ「心をわけよしや同「むびこのさしつぎには四十八オ「うれしきせもやつこ四十九オ「姫君のみ
おほくまゐり同ウ「尋ねい給はするをなご御せうそこ五十オ「参らせ給ひなん五十一ウ「紅葉のこのなごを五十一ウ「朝夕にめなれ
てよ五十二オ「おのづらしくおぼすべきや同ウ「中々侍けれ五十三オ「うちみじかき五十四オ「のどやかにこいこゝく同「大かたの野邊の
同ウ「見渡し給ふも物のみ五十五オ「はらわたたゆるは同「こゝろのみあるかな同ウ「此御里ずみの五十七オ「ひきゆるがすべか
あれば五十九オ「つまなめるこ同ウ

手習巻

「まうでたりけり二オ「ほいふかゝりし同ウ「みたけさうじし侍るを同「いむべかりけるを三オ「まうでにけること同「下すごもは

（古ナシ）みな四ウ「あやしきわざ○（なん古ニ）し侍る五ウ「かくあやしきこと○（なべて古ニ）世にあらじ六ウ「又物の（○古ナシ）へんぐゑ七オ「此ひんがしの（○古ナシ）八オ「かくは（○古ナシ）のたまふ
ぞ九ウ「老人の（○古ナシ）のり給へるには十一オ「うちはへかく（て古）あつかふ十二ウ「物し給ひて（さ古）かぎりと十三オ「かくても（○古ナシ）いきたる同「道びき給
（ら古）けめ同ウ「何やうの物し（○古ナシ）かく十四ウ「おとろへたるものども（○○古ナシ）のみ十五オ「しづみ給へり（○○古ナシ）つる日ごろは十六ウ「まゐるた（こ）りも有（と古）つる同
「おもやせもてゆく（き古）十七オ「うちやりたりつれど（○○古ナシ）同ウ「御心を○（へ古ニ）たてゝは十八オ「あまりこふを（○古ナシ）ばくるしと同ウ「東路○（など古ニ）のことなども
十九ウ「今は限と思ひはて（○○古ナシ）しほどは廿ウ「こゝちのみし侍る（たまふ古）に廿四ウ「風の（○古ナシ）さわがしかりつる廿五オ「このみいへば（ど古）うちつけに同ウ
「おもひわすられにて（○古ナシ）侍る廿六ウ「かゝることゝちやすらん（○古ナシ）廿七オ「今はしるべき人世に（○古ナシ）同「心ばせある人は（○古ナシ）かたく同ウ「ふびんな
るとなりかし（ぞ古）同「あやしくて見出たる（○古ナシ）同「もの思給ふらん人に（○○古ナシ）卅オ「世をうらみ給めれば（侍古）同「これをだに○（な古ニ）せむれば卅一オ「出
給ひなん（○○古ナシ）とするに卅二ウ「思出つるをあまり（に古）同「あやしきことをもせいし（○古ナシ）卅四ウ「ぼさちなども（つ古）同「かたちはいとけうらに（○○古ナシ）卅五オ「
めのとなどのかやうに（○古ナシ）卅七オ「みな出たちぬるを（け古）卅八オ「いかゞはせんと（○古ナシ）同「時々ははれ〴〵しく（○古ナシ）卅九オ「おはします○かな（もの古ニ）同ウ「こ
ひきゝたるなるべし（○○古ナシ）四十オ「人より○（ゐ古ニ）けにもてなし四十一オ「ゐ給へる（た）（る古）かたに同ウ「今やくる今やくると（○○古ナシ）同「中にこそはあらまし
（○古ナシ）かと四十二ウ「思はずにてたえすぎ（たゞ古）同「思ひさだめ給へりし人に（○○古ナシ）同「なやましくなんと（○古ナシ）四十四オ「つかうまつらせ（○古ナシ）同「おりさせ給な
り○（なん古ニ）と同「月ごろはなどの給ふ（いふ古）四十五オ「身になんと聞え（○古ナシ）四十六オ「物になんと（○古ナシ）同ウ「物思ひしり侍て後は（○古ナシ）同「今までもいきたるべ
き四十七オ「こよひ○（は古ニ）かの宮に同「こゝゝも思ひ玉へられざりしを（おぼえ給はざり古）同ウ「いひみだる○（と古ニ）もゝのしと四十九オ「いける○（ほとけは古ニ）しるし有て同「手
習をのみぞたけき（○古ナシ）五十オ「なほみづから○（は古ニ）いと同ウ「かゝるとなんと（○古ナシ）同「かゝる心の（○古ナシ）ふかく同「○（いと古ニ）はかなき物のはしに五十一オ「う
きゝをと例の（○古ナシ）同「さもやかたらひ○五十四ウ「かの（かゝる古）人世にある物とも五十五オ「のぼり給ひぬ（○○古ナシ）同ウ「なにがし○（が古ニ）侍らん限は五十六オ「はる
かなる谷の軒ばより（○○古ナシ）同ウ「見つけたらむは（○古ナシ）五十七オ「思給へてなん猶（○古ナシ）同ウ「ことさらにも人に○（め古ニ）見せ（○○古ナシ）五十八オ「思はずこそありしか○
（古ナシ）同ウ「聞えつべく○（なん古ニ）侍る五十九オ「きしかたのわすれがたく（○古ナシ）同「ことなどおほくいひつたふ（○○古ナシ）六十オ「人に○（見古ニ）すてられてやみなん同ウ「
みゝとゞまるに（とまれるに古）六十二ウ「なり侍りぬるを（に古）同「しげくてむつかしくのみ（○古ナシ）同「したしき人なりけりと（る古）六十三ウ「頼み聞えさせてなん（○○古ナシ）
六十四オ「わすれ玉はぬにこそはと（○古ナシ）六十五オ「なくもなりなんのちに（け古）同ウ「此月ごろにうせや（○古ナシ）六十六オ「えきこえいでね（○古ナシ）同ウ「かうふ

りしたるは（りしは古）同「ならさんとぞおぼし（○古ナシ）同「そこにはおそろしき（○古ナシ）物や六十七オ「御まへにだに（○古ナシ）六十八オ「かたくなし○とや（な古ニ）人の六十九ウ「月どの八日には（○古ナシ）七十一オ「せうとのわらはなるゐて（○○古ナシ）同「うきとをきゝつけ（○古ナシ）同ウ

夢浮橋巻

「かへり侍ける道に（○古ナシ）五ウ「念佛をも（○古ナシ）六オ「ゐて奉りたりけるにやと（○○古ナシ）同ウ「かなしひ（ミ）たえず（にたへず古）七オ「同じとしのほどゝ○見ゆる（なん古ニ）人の同「後になん（○古ナシ）同「女の御身○は（といふもの古ニ）いかゞ九オ「けふあすはさはり（○古ナシ）同ウ「忍びやかにを○この給ッ（な古ニ）十一ウ「ながめゐ給へるに（○古ナシ）同「ゐなかびにたりや（ゐ古）十二オ「もてかくし（へ古）玉へと十六ウ「ものゝけにや（て古）おはすらん十九ウ「山ふかく（風ふ古）とも廿オ

上ノ件湖月抄ノ本わろくて、他本（コトマキ）のよきかぎりを、えり出あげたる中には、かの本、心せでふと書誤れりと見ゆるところどころもあり、又必ズわろしとにもあらねど、他本のまされるをもあげつ、さてすべてにわたりて、いふべきことゞもこれかれとあり、長くみじかくなどのたぐひのくを、うといひ、又后の宮をきさいの宮、泣（ナキ）玉ふをない玉ふといふ類のいなどは、音便にくづれたる言なるを、此物語のころは、はやくさも書いけるにや、今の本ども、いづれも〳〵此うもいもおほかるを、湖月抄本には、殊に多し、此たぐひ一ッの本には、くとかき、きと書るを、又の本には、うとかき、いとかけるたぐひ、たがひに異（コト）なるとつねにして、定まれるとなし、又給ひてを、給ふてともあるも、音便ながら、よろしとも聞えず、思ひ玉ふるを、思ふ給ふるとあるも同じ、又此おのがうへにいふ、給ふるのはたらきの給へを、給ひとあるは、誤也、こはひとへとのたがひにて、人を敬ひていふと、己がうへにいふとのけぢめある言なるをや、又きとさと、本によりて、ことなるとあり、かなしきとかなしさとのたぐひ也、これはきとさとのたがひにて、其語のこゝろばへかはる事なれば、よく正（タヾ）すべき也、又いとるとは、上のてにをはのかゝりによりて、異（コト）なるとなるを、たがひに誤れるところのおほかるは、近き世の人、すべててにをはのことのへをしらざる故に、いづれにても同じことゝ心得て、おろそかに思へるから也、又あればなければ、あれどなけれどなどのたぐひの、ばとどと、本どもたがひに誤れると、つねにおほし、さるはばにてもどにても、聞ゆるやうのところもおほくして、まぎらはしきとあり、そこの文の意をよく考へて、定むべき也、又云々なんといへる

と、云々などといへること、まがへることおほし、そはなどをも、ンをくはへて、なンどゝよむことなる故に、たゞ同じこと、心得たるより、まがへるなるべし、なんとは、どに通ふなんにて、とは附たるてにをは也、さる故にともじ清てよむこと也、などとは意いたく異(コト)なり、此たがひは、上の文にて分ることなるを、湖月抄ノ本、なんとを、誤りてなどゝ書る所多し、又たゞとあるべきところを、などゝ書る所もおほし、さておもほしとおぼしと、かうやうとかやうと、かとかはと、いかでといかでかといかでかはと、こそとこそはと、すぐしとすごしと、かろしとかるしと、とゞめととめと、こまやかとこまかと、くんじてとくつしてと、ふんじてとふうじてと、たいめとたいめんと、ねぶつとねんぶつと、奉れと奉りと、文の返事を、かへりとかへしと、これらのたぐひ、本どもたがひにかはれるは、いづれにても有りぬべし、さて又湖月抄、文字の書キざまわろきことこれかれ有リ、東の對(タイ)西の對などの對を、臺とかき、かくれがすみかなどのかを、家(カ)と書る類也、本(ホン)性(ジヤウ)を本上、几帳を木丁とかけるたぐひよく、うちとけがきにて、つねのことなれば、難なし、又掟(オキテ)の意なるを、置てと心得誤れる所おほし、掟は俗言(サトビゴト)には、體言(ナコトバ)にのみいふを、雅言(ミヤビゴト)には、用言(ハタラキコトバ)にも多くいへる故に、置(オキ)て置(オキ)つるにまがへる也、又腐(クタ)しを下(クダ)しと心得、負(マケ)てを曲(マゲ)てと心得あやまれる類も多し、其外も清濁(スミニゴリ)を誤れる多く、濁るまじきもじを、にごれる殊におほし、云々てけりのけ、こそ云々しかのか、はしりかきのか、くらかためのか、さいつころのこ、そゝのかしの下のそ、けしうはあらずのけ、けさやかのさ、風のふと吹くなど、ふとのと、とざまかうざまの上のと、ゐざりのさ、あはめのは、きしろふのき、こうじのこ、ほけのほ、これら濁るまじき言なるを、濁れるは、皆ひがこと也、なほすべてみだりなることもおほかるを、よく正(タヾ)してよむべきわざ也、さるは此物がたりのみにもあらず、もろもろのふみをよむにもわたれることぞかし、

源氏物語玉の小櫛五の巻

桐壺巻

いづれの御時にかこのひら　此物語は、すべて作り物語にて、今ノ世にいはゆる昔ばなし也、さる故に、むかしいづれの御時にかありけん、かゝる事の有しこいへるにて、此詞一部にわたれり、伊勢集なるも、みづからのうへなるを、おぼめきて、昔物語のどいひなせるにて、意は同じ、註無用の説どもおほし、

はじめよりわれはこ同　注に、桐壺ノ更衣より前に入内してこいへるは、すこし違へり、はじめよりは、たゞもこよりこいはんがどし、

めさましきものに同　此詞卷々に數しらず多かるを、思ひわたして考ふるに、さは有まじき事をこ思ひて、いきごほれる意の詞也、

人の心をうごかし同　注に、下らふの更衣云々こいへるはいかゞ、是は上らふ下らふなべてにわたるべし、

あつしく同　身よわく病あるをいへり、拾遺に、病の重きを、厚しこいふにやこいへるは、物語にてはかなはず、すべての詞、時代によりて、用ふる意かはることあれば、物語にては、物語に用ひたる例をもていふべき也、拾遺こは契冲の源注拾遺をいへり、下皆同じ、

あいなくこのひら　此詞數もなく多く有り、そをことごとく見わたし合せて、かむかふるに、何こいふわきまへもなしに、うちつけに物するを也、ことごとその意にて、おのが身にかゝらぬ人までも、何こいふとなしに、目をそばむる也、注に、無愛也、あぢきなく也などいへる、皆かなはず、

まばゆき同　拾遺に、日のかゞやく時、まばゆくて、見がたきやうの意なるべきにや、こいへるどくにて、なべて人に目をそばめらるゝ、これまばゆき也、

かゝることのおこりにこそ同　かゝることよみて、事のおこりとよむべし、かゝる事のと、つゞけて見るはわろし、おこり起リにて、はじまりといはんがごとし、驕とするはひがごと也、

あぢきなう同　天の下の人も、あぢきなき御しわざとするよし也、或抄云、はじめに女中のねたみをいひ、次にかんだちべうへ人といひ、こゝに天の下にもといへり、

いとはしたなきと同　こゝは更衣の身に受るかたよりいへり、

よしあるにて同　よしある人にての意也、人は上にある故に、はぶけり、さて此にては、下のもてなし給ひけれどゝいふへつゞく詞也、

花やかなる同　河海に、鮮花白氏文集とあり、すべて此物語のうち、詞の注に、かやうにからぶみ又は日本紀などの文字を引れたるをおほし、それが中に、まれにはあたれるも有て、一ッの心得にはなるべきもあれども、おほくはあたりがたくして、みだりなることもおほし、さればひたぶるに注のもじにすがる時は、詞の意を誤ること也、大かたいづれも〳〵、注の文字にはよるべからず、こゝの鮮花も、白氏文集にては、はなやかとよみて、かなふべけれども、然りとて、はなやかを、鮮花の意とのみ心得ては、いたく違ふべし、されば鮮花をはなやかとは訓べけれども、はなやかを、鮮花とは心得べきにあらず、おほかたいづれの詞の注も、此わきまへ有べきなり、

玉のをのこみこ同　万葉五の巻に、生れ出たる白玉のわが子古日は云々、うつほの物語たゞこその巻に、玉ひかりかゞやきたる男の、いとおかしげなるをうみ給へり、白居易詩に、掌珠一顆兒三歳、花鳥に、玉のをと、命のかたへとりなし侍る也とあるは、ひがこと也、

よせおもく同　續日本紀八の巻に、寄重務繁、文粹、貞信公辭攝政表に、擔重寄於微身、負大任於小材、これらは、寄せ任ぜらるゝ事の重きをいへるを、それより轉りて、こゝなどは、傍注に、外戚がたのおも〳〵しき也といへる、其意也、

此御にほひには四のひら　拾遺にいへるごとし、黍稷云々を引れたるは、さらにかなはず、

大かたのやむごとなき同　おほかたのは、俗に一トとほりのといふ意也、

はじめよりおしなべての同　此上に一本に、母君と有よし、さもあるべし、さらでは言たらず聞ゆ、

わりなく同　あるまじき事を、しひてあながちにすると思ふと也、河海に、無別無破など注せられたる、さらにかなはず、

やがてさぶらはせ給ひ同　更衣を局へ退らしめず、翌日もそのまゝ御前にさぶらはしめ玉ふ也、花鳥に、夜の御姿を改めず

云々とあるは、ひがことなり、さてすべてやがてには、直にそのまゝといふ意也、俗にいふとは異也、

心ぐるしう同　此詞は、おほく今ノ世の俗言に、氣ノ毒に思ふといふ意にいへり、又心にかゝりて案じるといふ意にもいへり、

こゝは弘徽殿のおぼすこゝろを、きのどくにおぼしめす也、注たがへり、

うち橋五のひら　移橋をつゞめたる名也、よのつねの橋は、いつも同じ所にかゝりて、こゝろをかふる事はなきを、これは時

にのぞみて、いづこへもいづこへも、用ある所へもて行て渡す、かりそめの橋にて、こゝかしこへうつす橋といふ意也、

こゝは渡殿などの間に、横に下を通はんために、切れたる所のあるに、時にのぞみてわたせる也、内橋打橋など注せる

は、かなはず、萬葉などに、打橋と書るは、例の借リ字なるをや、

あやしきわざをしつゝ同　不浄をまきちらすは、人を詛ふしわざなり、釋日本紀に見えて、神代須佐之男ノ命の故事よりお

これり、但しこゝは、詛までにはあらで、たゞ衣のすそを、穢さんためのみにてもあるべし、

こなたかなた同　さしこめたる戸の、こなたとかなたと也、

はしたなめ同　はしたなからしむるにて、更衣を迷惑せしむるをいふ、

うへつぼね同　つねの局の外に、御座所ちかきあたりに、別に休息所にまうけたる局也、

およすけ六のひら　拾遺云、万葉に助及の言なし、用ふべからず、

あさましきまで同　此詞は、よき事にも、あしき事にもいひて、俗言に、けしからぬきものつぶれたるなどいふ意也、

御息所同　此物語の例をもて考ふるに、細流にも注せられたるごとく、御子をうみ奉り給へば、御息所と申せり、さてこそは、女御更衣などの外に、別に此品あるにはあらず、女御更衣などにわたれり、若紫ノ卷、源氏ノ君の詞に、此御母更衣の事を、故御息所とのたまひ、上ノ若菜ノ卷に、明石ノ女御をも、御子を生ミ奉り玉へる後のこころに、御息所と申せり、六條ノ御息所といふも、姫宮【秋好中宮】の御母なるにつきての稱也、又竹川ノ卷に、鬚黑ノ大臣の姫君、冷泉院に參り給ひて、朧胎のほどにも、御息所とあり、然れば御子いまだ生れ玉はねども、すでに姙み給へば、申せるにこそ、

御子をばとどめ奉りて同　源氏ノ君もともに退出給はんには、人のよくしるべき故に、ひそかに人のしるまじきさまにて、更衣のみ退出也、そは人のひろくしりては、ねためる人々のしわざにて、恥がましき事などもあらむかとてなり、

ここにいでゝも七のひら「點ひがこと也、

まみなどもいとたゆげにて同　拾遺に、目をあげて物を見る目つきなり、目也とのみある注はたらず、といへり、又まばゆき也といへる注も、かなはず、たゆきは、俗にだるきといふことにて、目つきのだるげに見ゆる、病者のさま也、河墮巓、これもかなはず、

いかさまにかと同　俗言に、これは何とせうぞといふ意也、まどはるといへるにてしるべし、傍注に、何としてか、更衣の病をたすけんと也といへるは、少したがへり、

てぐるまのせんじなど同　續日本後紀に、承和六年六月庚戌朔己卯、女御從四位下藤原ノ朝臣澤子卒、故紀ノ伊ノ守從五位下總繼之女也、天皇納之、誕三皇子一皇女也、寵愛之隆、獨冠後宮、俄病而困篤、載之小車、出自禁中、纔到里第、便絕矣、天皇聞之哀悼、遣中使贈從三位也とあり、桐壺ノ更衣の事、これに據て書るなるべし、似たること多し、

うちすてゝはえゆきやらじ同　ゆくは、死てゆく也、上の語次の哥にてしるべし、注に、里へえゆかれじと也といへるは、ひがこと也、

哥いかまほしきは同　拾遺にいへるごとく、生に行をかねたり、但し行のかたは、たゞわかるゝ道といへる緣のみにて、哥

の意は生也、

御むねのみつとふたがりて八のひら　かやうのゝみは、胸のみふたがりて、他の所は、ふたがらざる意にはあらず、ふたがりの下にある意にて、ふたがるのみにて、ふたがらぬひまはなきよし也、つとは、俗言にぢつと見てゐるなどいふぢつとの意にて、ぢつとは、即此つとの訛れる言也、御むねのふたがりたるが、ぢつとしてゆるばぬ也、注に、頓てといふに同じといひ、又集都などいへる、みないみしきひがこと也、

御使のゆきかふ同　河海に交加とある、さらにかなはず、

夜なかうち過る云々同　これは更衣の里の人々のいへる詞を、御使の聞たるこころをいふ也、

あへなくて同　俗言に、はりあひなく、力の落たるといふ意也、

かくてもいと御らんぜ同　かくてもは、御母更衣はうせ給ひてもの意也、

なきこがれ給て同　こがれは煙の縁の詞をもていへるにて、文のあやなり、此たぐひ多し、心をつくべし、

むなしき御からを云々思ひなりなんと同　これはいまだ葬に出たゝれざるさきにいはれたりし詞にて、かねてはかくの給ひつれどゝ也、

三位のくらゐ九のひら　弄花細流などに、みつのくらゐとよむべきよし、注せられたり、三位を然いふは、もとよりのことなれど、これは三位のくらゐと書たれば、三位は音にて、さんゐと訓んぞ、物語の詞つきなりける、

すげなう同　河海に無人望日本紀、拾遺云、日本紀に此言なし、今云、たとひ日本紀に有りとも、此字さらにかなはず、

うへの女房同　すべてうへとは、帝の御あたり近き事にいへり、うへつぼねうへみやづかへなどのごとし、これは帝の御前ちかくつかうまつる女房をいへり、

はた寒き十のひら　はたは又の意にて、又寒くもありといふ意の詞也、そは秋になりて、大かたはまだ暑くて、涼しきがこゝちよきころ、俄にあまり涼しくなりて、こゝろよきながら、はや又すこし寒くもある意也、今もさることある物也、さる

故に此詞は、かならず八月ごろにのみいへり、心をつくべし、几帳などにはたかくれてゐるも、同じ意にて、大かたは顯はれて居ながら、又すこし隱れもしたるさまにて居るをいへり、拾遺に、萬葉の膚寒（ハダサムシ）を引ていへるは、ひがこと也、かの膚寒とは別なるをや、

いだしたてさせ給ふて同　給ふてのふもじ、一本になきを用ふべし、すべて給ひてといふべきを、給ふてといふ類は、音便の中にも、殊に正しからざる、後ノ世のいひざまなるを、それに耳なれたる人の、寫す時に、ふもじは添たる物と見えたり、皆給ひてと書べくよむべきこと也、

はかなく聞えいづる言の葉も同　俗言に、なんでもないことを、ちよつといふ詞もといふ意也、傍注に、哥也といへるは、わろし、

まかでつきて同　ゆきつきて也、すべて禁中より他所へゆくをば、まかで出といへる例也、

みなみおもてに十一のひら　すべて人の家も、南向を正しとする故に、南おもての舍屋を、正面とするから、必しも南向の家ならで、南おもての屋にはあらざれども、方角は何方にまれ、正面のところを、南おもてといひならへる也、内々の方を、北おもてといへるも同じ、物語の中に多かること也、心得おくべし、

もろこもにはぐゝまぬおぼつかなさを十二のうら　これは諸共にはぐゝまぬがおぼつかなきをと有けんを、°がもじを落し、き°をさに誤れるなるべし、本のまゝにては穩ならず、或抄に、おぼつかなさを思ひやりつゝと返りたる文也といへるは、わろし、さてはつゝといふ詞よしなし、さてもろこもには、更衣の母と諸共に也、若宮里におはしまして、祖母一人してはぐゝみて、帝のもろ共にはえはぐゝみ給はぬよし也、更衣と諸共にといへる注はひがこと也、さてはおぼつかなきといふ詞にかなはず、

おかしの形見になずらへて物し玉へ同　物し給へとは、母に禁裏へまゐり給へとのたまへる也、上の勅言に、とく參り給へとあれば、こゝには物し給へと有て、其事とは聞ゆる也、若宮を、われもそこと諸共にはぐゝまぬが、おぼつかなき

ほどに、今は若宮を更衣の形見ぞと思ひて、具し奉りて参り給へ、われもそこともろともにはぐゝまむと也、注に、更衣のかたみに見給へと也といへるは、かなはず、さては上の文下の御哥にいとうとし、

御哥宮城野の云々同　拾遺に、類哥を證に引て、宮城野を、宮中にかくるまでは有まじきかといへれど、猶宮中の心有べし、東屋巻に、「みやぎ野の小萩が本としらませばといふ哥も宮城野とは、八ノ宮の事にいへるたぐひ也、花鳥に、露吹むすぶを、涙とあるは、わろし、

かなしう見奉り侍るなどうち〳〵に思玉へるさまをそうし給へ十三のひら　思給へるさまとは、更衣ノ母の思へるさまにて、上の命長さの云々より、見奉り侍るといふまで、その思へるさま也、さてこれは、みづからのうへをいふ語なれば、思う給ふるさまと有べきに、思給へるとあるは、寫し誤也、すべて思給へるとは、他のうへをたふとみていふ言にて、みづからのうへをいふには、思う給ふるといふ定なるを、後ノ世の人、かゝる詞のけぢめをわきまへず、なほざりにたゞ同じことのごと思へるから、誤る也、此誤り、所々に見えたり、

宮はおほとのごもりにけり同　これより命婦が詞也、地よりいふにあらず、　さて此けりは、おしはかりて定めたる言也、

これもわりなき心のやみになッどいひもやらず十四のひら

なッどは、なんとを誤れる也、此事四の巻の末にいへるがごとし、

なく〳〵同　此詞は下のいそぎ参るといふへかゝれり、此類つねにおほし、すべて語のつゞきの、おだやかならず聞ゆるところは、下の文をよみもてゆきて、係る所を考ふべし、その心得なくして、ゆくりなくつゞけて見る時は、たがふこと多かるべし、傍注に、決前生後の句といへるは、右の趣をしらざるひがこと也、

夜いたうふけぬればなど同　或抄に、前に夜もふけぬといへる故に、こゝには、いたうふけぬればとかけりといへる、まとに心をつくべきふし也、すべて此物語、かく何となき詞にも、心をいれたる所多きぞかし、

哥すゞむしの云々つくしても同　此てもは、常にいふてもの意にはあらず、ももじは、俗言にまあといふにあたりて、一首

の意を深くいふ辭也、後京極殿の、「里はあれて月やあらぬとかこちてもたれ淺茅生に衣うつらむ、などのても、同じ、

哥いとゞしく云々雲のうへ人十五のひら　花鳥に、昇殿の人を、男女ともに、雲の上人といふべし、とあれども、こゝはたゞ禁中の人なるゆゑにいふ也、昇殿の事にはかゝはらじ、

御おくり物同　すべておくり物といふは、客のかへるを送る時に、贈る物をいひて、送り物也、たゞなべて贈る物にはあらず、

さう〴〵しく同　拾遺にいへるがごとし、さてつれ〴〵といふもさびしきことなるを、同じさびしきも、つれ〴〵とさう〴〵しとは、意異也、つれ〴〵とは、すべきわざのなくて、ひまにてさびしきをいひ、さう〴〵しとは、あるべき事のなくて、たらぬがさびしきをいへり、此けぢめを心得おくべし、

うしろめたう同　河海影護（ウシロメタシ）和名、拾遺云、和名に全く此字なしといへり、此詞は、後目痛（ウシロメイタシ）といふことにて、うしろやすきの反（ウラ）也、俗言に氣遣（キヅカ）ひなるといふ意也、

すが〴〵ともえまゐらせ奉り給はぬなりけり同　すべて文に、なりけりといへるは、上の事の由を、解釋したる如き語のとぢめにおく辭也、こゝは上にわかき人々云々といふより、これまで、帝は、若宮の參り給はむことを、早くといそぎおぼしめすに、更衣の母の、すみやかにも參らせ奉り給はぬは、かやう〴〵の故也と、其故を解釋したるがどし、此次に、御物語せさせ給ふなりけりといへるも、帝のまだおほとのごもらざるよしを、解釋したる文のとぢめ也、皆此意也、

長恨哥の御繪亭子院のかゝせ給ひて十六のひら　此繪を、亭子院の御みづから書給へるやうに聞ゆれども、さにはあらず、繪師に仰せて、かゝせ玉へる也、さて上に、女房四五人さふらはせ玉ひて、御物語せさせ給ふといへるは、すなはち此長恨哥のすぢの事を、御物語せさせ玉ふ也、たゞそのすぢをぞ、まくらどにといへる、すなはち上の御物語せさせ玉ふよしをことわれる也、此所かやうに見ざれば、長恨哥の繪哥の事、こゝにはよしなし

なごやうにみだりがはしきを同　細流に、兩義あり、第二三の句、御門の御うへをいふに似たり、仍可レ憚といふ心也、又義、此ほどのみだりごゝちに、かきざまなどもみだりがはしき也、弄花に、たゞ書ざまの心にて可然か、今いふ、湖月抄には、此細流の後の義をのみ擧たり、二義ともにひがこと也、みだりがはしとは、哥のよろしからざるよし也、なごやうにと、哥よりつゞきたるにて心得べし、もし書ざまのとならば、上にその書ざまの事をいはでは、なごやうにとはいふべくもあらず、さて此哥、實にみだりがはしきにはあらず、例の紫式部が卑下の心ばへにて、かくいひなせるもの也、其事くはしくは、上の巻に、例共を引ていへるがごとし

かくてもおのづから十七のひら　かくてもは、更衣はなくなられてもなり、おのづからは、さるべきついでもといふへかゝれり、若宮云々へはかゝらず、

なき人のすみか云々同　あけくれ長恨哥の事を、まくらごとにせさせ給ふほどなるから、ふと此事をおぼしめしよれると、よしあると也、

からめいたるよそひはうるはしうこそ同　すべてうるはしといふ言は、古書にては、美麗の意なれども、物語などにいへるは、たゞ美麗の意にはあらで、俗言に、きつとしてかたいといふ意、みだれず正しき意にいへり、こゝは、楊貴妃の唐めきたるよそひは、あまりきつとしてかたくて、たをやかにはあらざりけむといへる也、

なつかしう同　すべて此詞は、なつくといふ詞をはたらかしたるにて、やはらかにしたしくむつましく思はるゝ意也、俗にいふ意とはやゝ異也、

らうたげなりしを同　此詞は、俗にあいらしきといふ意也、さてついでにいはむ、らうたしと、らう〳〵しとは、其意いたくことなるを、詞のさまのよく似たる故に、あひ誤る人有リ、らう〳〵しは、俗にいふ、物の功者なる意なり、

花鳥の色にも音にも云々同　かの楊貴妃がゝたちは、猶芙蓉柳などにもたとへしを、更衣のかたちは、然たとふべき物もなく、すぐれたりしと也、さて「點は、例のひがこと也、次のはねをならべの「點も同じ、

かたはらいたし十八のひら　傍痛にて、かたはらより見聞て、痛く思ふ意也、俗言に笑止なるこいふにあたれり、片腹痛こ書るは、いみしきひがとなり、

いこおしたちかごく〳〵しき同　拾遺に、河最押立才日本紀、今按、日本紀に、才の字をかごゝはよめれご、かくつゞきたるを、またくなし、今のかごく〳〵しきは、才の字の心こは見えず、たゞ石なごのこがりたるかごの心なるべし、こいへり、此說の如し、今ノ世の言にも、かごひしをたつるなごいふかご也、

雲のうへも云々同　いかですむらんこは、雲の上にてだに、涙にくるゝ月なれば、まして淺茅生のやごには、月影のいかで淸む、さこそ淚にくるらめこ、月のすむとをいひて、住をかねたり、さて更衣の草の陰をおぼしめしやるこいふ說は、ひがと也、

あさがれひ十九のひら　或抄云、陪膳の女房、御さばをこり云々こいへり、此說は皆、いこ後ノ世の趣にて、こゝの趣にはかなはず、こゝのやうは、大床子の御ものは外ざま、朝がれひは御內々也、大床子の御ものなごは、いこはるかにおぼしめしたれば、こいへるにてしるべし、大床子のを、常の御膳也こいへるも、まぎらはし、

此御事にふれたることをば同　をばのをもじいかゞ、にはこ有べき語也、

たいぐ〳〵しき同　こはもこ、たみく〳〵しこいひけむを、音便にてみをいこいひなせる詞也、たみく〳〵しこは、舌たみて詞たみてなごいふたみにて、直からず、横さまにゆがめるやうの意也、万葉に、回轉なご書て、まがれる道を、たみたる道なごよめり、注皆かなはず、

いこゞ此世のものならず同　久しく見給はで、月日へて見玉ふ故に、いよく〳〵うつくしくなりまさり給へる也、すべていこごこいふ詞は、然いふべきよし有ていふ詞也、

中々あやふく廿のひら　源氏ノ君を、坊に立テ給ふとを、あやふくおぼしめす也、注いさゝかたがへり、

かぎりこそ有けれこ同　帝の、源氏ノ君を、さばかりおぼしめせごも、かぎり有て、坊にはえ立テ給はざりけるよこ、世人申

す也、

御かたぐ（廿一のひら）　なべて女御更衣たちをいふ也、御兄弟の女宮たちのことにはあらず、

こまうどのまゐれる（同）　延喜のころ参れるは、みな渤海國の使にて、高麗にはあらざれども、渤海も、高麗の末なれば、皇國にては、もといひなれたるまゝに、こまといへりし也、寶龜八年に、参れりし渤海の使の事をも、文德實錄一に、高麗國遣レ使と記されたり、その時にかの大使、橘ノ清友の弱冠にてあるを見て、おどろきて、骨法非レ常、子孫大貴と相せし事あり、はたして嵯峨ノ皇太后を生奉れりき、

國のおやとなりて云々又其相たがふべし（同）

源氏ノ君は、つひに天皇の御父にて、太上天皇の尊号を得玉へれば、はじめより帝王の相おはせし也、然れどもまさしく帝位にはのぼり給はざれば、帝王の相は有ながら、いさゝか闕たるところの有しなるべし、これによりて今此相人、その闕たるところを、心得がたくて、あやしみかたぶきつゝ、思ひめぐらすに、もしくは帝王になり給ひては、みだれうれふる事などもやあらん、又帝王の相に少しかけたる所あるは、もしくは又攝政關白などゝなり給ふべき相かとも思へども、帝王の相なれば、攝關にしては、其相かなはず、たがふべしといふ也、みだれうれふる事といへるは、帝王の相にて、闕たるところのあるを、疑ひて、もしさることやあらんといへる也、然るをもとよりみだれうれふべき相の有しやうに注したるは誤也、又其相たがふべしを、輔佐の人臣にておはしまさば、みだれうれふる相はたがひて、吉たるべしといへるも誤也、さては宗祇契沖などもいへるごとく、又といへる言にかなはず、これは花鳥の說ぞよろしかりける、

いみしきおくり物を（廿二のひら）　源氏君の、鴻臚館よりかへり給ふ時の、こま人の送り物なり、

かしこき御心にやまとさうをおほせて（廿三のひら）　みかどの御心に、此御子を、もし親王にもなさば、人の疑ひなど出來て、かへりて御ためによろしからじと、考へ玉へるを、やまとさうとはいへる也、「かくこひむものとは我も思ひにき、心のうらぞまさしかりける、薄雲ノ卷に、さ

かしき人の心のうらどもにも、物とはせなどするにも、などあるも、心に考ふるを、心の占(ウラ)といへるたぐひ也、さてかの高麗の相人の、みだれうれふる事やあらんと申せるが、御みづからおぼしめし考へたるところと、あへる故に、相人はかしこかりけりとおほせる也、細流に、和國の相人も、かやうに申す也とあるは、たがへり、これは相人に見せ給へるよしにはあらず、もし實の相人のとしては、かしこき御心にといへるも、用なく、おぼしよりにけるといへるも、かなはず、帝の御心に、かむかへ玉ふことを、やまと相としもいへるは、こまの相人の事をいへる所なる故也、さて相(サウ)といふから、おほせてともいへる也、

きはことに同　拾遺に、毎際也、ごの字濁るべしといへるは、ひがこと也、さてはきはといふこと聞えず、なほ際殊也、こもじ清むべし、

内侍のすけ廿四のひら　上にゆげひの命婦が、内侍のすけのそうし給ひしといへると、同人たるべきか、

三代(ミヨ)のみやづかへに同　河海に、此ノ先帝相當光孝天皇ニ歟、典侍ノ詞にも、三代のみやづかへとあり、光孝宇多醍醐たるべきかとあるを、弄花細流に、さして三代ならずとも、たゞ久しくといはむためか、とあるはいかゞ、久しくといはんためばかりに、三代とはいかでかいはむ、河海に從ふべし、先帝も、光孝天皇に當(アテ)たるなるべし、

うけばりて廿五のひら　事のたらひて、かけたるかたなくして、はゞかり邊つらふべきところなき意也、河海に、諸(ウケハリ)承諸の心也、受張(ウケハリ)相當の心にやと見え、拾遺に、人のうけてそむかぬ意也といへる、まことに言の本の意は、人にうけらるゝ方より出たるにも有べけれど、つかひたる意は、かならずしも然らず、

おぼしまぎるゝとはなけれど同　まぎるゝのるもじ、一つは削(ケヅ)るべし、すべてとゝ承るところは、るゝとはいはぬ定まりなれば、もとはまぎるとはと有けんを、後に、かゝる詞つゞきの格も、みな乱れ誤れる世になりては、何心なく、寫し誤れる也、此類多し、心をつくべし、

こよなく同　卷々におほく見えたる詞にて、いづれも〳〵、殊の外と注せられて、たれも其意と心得て、みづからの文などに

も其意につかふめれど、たゞ殊の外といふ意のみにはあらず、此言は、必ス他に對へてくらぶる事のある時につかふ言にて、たとへばかれよりはこれは、こよなくまされりなどやうにいひて、くらべていたくかはれる意也、されば俗言に、かくべつにといふにあたれり、こゝは藤壺の參り給ひて後を、いまだまゐり給はざりし程とくらぶれば、かはりて、帝の御心、かくべつにおぼしなぐさむやう也といへる也、此詞みな此意をもて見べし、其中に、くらべたる所の、あらはには聞えがたきやうなるもあれど、よく見れば、それもくらべたるこころある也、河海に、無此世(コヨナシ) 無越(コヨナシ) 閑雅(コヨナシ)などある、みなひがごと也、拾遺に、こゆる事なき意なりといへるも、あたらず、すべてむかしより、此詞のつかひたる意を見つけたる人なし、

なづさひ同　河海に、昵近(ナツサヒ)なれむつぶ事なりと見ゆ、此詞物語文に見えたるは、みな此意也、萬葉にもおほく見えたるを、かの哥どもによみたる意は、いたく異(コト)也、思ひまがふべからず、萬葉にての意は、玉がつまのからあゐの卷にいへり、上の昵近の字は、河海なるを、湖月抄に、孟として出したるは、本を尋ねずして、末をとれる也、此たぐひ多し、心得おくべし、

あやしくよそへ聞えつべき同　或抄に、藤壺の、桐壺ノ更衣によく似たまへれば、源氏の御母とも、よそへいふべきことゝちし給ふと也、といへるよろし、湖月ノ說は、いみしきひがごと也、

いとようにたりしゆゑ廿六のひら　うせにし更衣の、つらつきまみなどは、此源氏君とよく似て有しとのたまふ也、湖月に、藤壺と源氏と似玉ひてといへるは、かなはず、にたりしのしは、いはゆる過去のしなれば、更衣の事ならではかなはず、

通ひて見え玉ふも同　通ひては、是も似(ニ)てといふ意にて、藤つぼの御顏の、源氏ノ君と似て見え玉ふよし也、湖月に、うつくしきどちなれば、いひ通ひて見え玉ふも云々、といへるはたがへり、おのれも、はじめには、然思ひつるを、後によく思へば、其こゝろにては、通ひてといふ言も、こゝには穩ならず、又見え玉ふも、必ス藤壺へかゝりたる詞と聞えたるに、藤つぼの、源氏君にいひ通ひて見え玉ふとは、のたまふべき詞にあらず、もし又見え玉ふを、源氏君へかけて見んも、玉ふといふ言いかゞ也、藤壺へのたまふ御詞に、源氏君の事を、玉ふとのたまはんと、例にたがへれば也、

にげなからずなん同　よそへて、母と申し、子といはんに、似げなきにあらずと也、上に、あやしうよそへ聞えつべきことあるをうけて、然聞ゆるなり、さて此こころ、上よりの文の意をとほしていはゞ、うせにし更衣の、つらつきまみなど、此源氏といとよく似て有しかば、又藤つぼの、源氏と似て見え玉ふところも、あやしう母子ともよそへいふべきことのすれば、しかよそへて、母と申し、子といはむに、につかはしからざるにあらずとの給へる也、

聞えつけ給へれば同　つけは、仰せつくるいひつくるなどのつけ也、けもじ清てよむべし、告ツゲにはあらず、濁りをさしたるは、ひがこと也、

こよなう心よせ同　他ホカの女御更衣たちとは、かくべつにまさりて、藤壺へは、心をよせ奉り給ふ也、

そばそばしき同　言の本の意は、拾遺の説の如くなるべし、然れども物語につかひたる意は、側々しき也、

おほやけどにつかうまつれる同　東宮の御元服の時は、たゞおほやけざまの、定まりのまゝにつかうまつりし也、さてはなほおろそかなることもごあらむと也、すべておほやけざまの事は、たゞさだまれるあとのまゝに、たがへじとまもるのみにて、ことに心をいるゝとはなく、こまやかなるかたはなきものなれば也、注に、東宮の御元服には、念入レざりし也といへるは、少したがへり、

殿廿七のひら　でんとよむべしといへるはいかゞ、たゞとのとよむべし、一本には、すなはち假字にて、とのとかけるをや、

ひきいれ同　加冠の人をいふ

みづら同　拾遺に、河髮臥以典、今按此二字出るところをしらずと云り、

大藏卿くら人つかうまつる同　これは大藏卿なる人の、理髪の役をつかうまつるといへるなれば、理髪にあたる詞あるべきに、なきは聞えがたし、さればこれは、みくし上アゲと有けんを、くら人とは寫し誤れる歟、理髪を、御くし上アゲといふべき物也、もし又花鳥の説の如く、大藏卿にて、藏人頭をかねたるよしならば、くら人の下に、理髪をいへる詞の有しが、おちたるか、いづれにまれ、其詞なくては、何事を仕奉るとも聞えず、

御やすみどころにまかんで給ひて云々同　注に、花康保二年云々、敷ニ土鋪二枚茵一枚ニといへり、今花鳥餘情を考るに、茵一枚の下に、爲ニ親王換ニ衣所ニといふ文あり、こゝの注には、此文までを引かでは、事たらず、略けるはいかゞ、

とひぶし廿八のひら　北山抄、皇太子加元服ノ儀ノ裏書ニ云、息所参事、寛平九年七月三日丙子、爲子内親王當夜参入、延喜十六年十月廿二日甲辰、故左大臣女参入、用レ輦、應和三年二月廿八日辛亥、昌子内親王参入、俗謂ニ之副臥ニ乎、

おとゞけしきばみ聞え玉ふ同　万水一露に、左大臣の、源氏に、葵ノ上の事を、ほのめかし給ふをいへり、といへるよろし、湖月の或説、ひがこと也、

うへの命婦同　帝の御まへちかくつかうまつる内命婦也、弄花に、内裏に伺候するを、内命婦といふ、それを上への命婦といふべしといへるは、たがへり、これは外命婦に對へる内命婦のよしにはあらず、うへといふは、うへみやづかへうへつぼねなどあるうへ也、

廿九むすびつる云々廿九のひら　三ツ句のにもじは、結句の下へふくめたる意有て、そこへかゝれるてにをは也、ふくめたる意は、紫の色しあせずは、仰せのごとく、もとゆひに長き契をこめ奉らんといふ意也、かくのごとく見されば、にもじ聞えがたし、

たまはり給ふ同　たははりは、賜物を大臣の受らるゝ也、たまふは、此大臣を尊みて、添ていふ言也、次なるもそのでう也、

こもの同　籠物なり、獻物にはあらず、

ゆゝしう三十のひら　すべて此詞、本は齋々しなるを、次々にうつりて、末はさまざまの意に用ひたる中に、こゝは源氏ノ君を、なべてならずすぐれてうつくしとおぼす也、ゆゝしき大事などいふゆゝしきに同じ、細流に、ゆゑ〳〵しき心かとあるは、いたくたがへり、

右のおとゞの御中は云々同　おとゞのといふにて、詞を切て心得べし、おとゞのえ見過し給はでとつゞく意也、

心にもつかずおぼえ玉ひて〔廿一のひら〕　此上に詞たらず脱たるにや、その故は、さやうならん人をといふより、人とは見ゆれど、いふまでは、源氏ノ君の心を、直にいへる語、心にもつかず云々は、物語の地よりいへる語なれば、かならずこの堺に、云々とゝいふ詞なくては、とゝのはず、さるは後の人の、寫すとて、おとしたる物か、はたもとより紫式部が、とりはづして誤れるものか、此たぐひなると、巻々にをり〳〵ある也、

御ひとへごゝろ〔同〕　をさなきほどの心は、物をたゞ一すぢに思ひて、他の事にわたらぬをいふ、注に、心淺く無分別なるこゝろ也といへるは違へり、

おとなになり給ひて後は〔同〕　元服し給ひて後はといふヿ也、

母御息所の御かた〲の人々〔同〕　御かた〲とは、更衣の局と、母の里とにつかへし人々をいへるか、

になう〔同〕　無二の意とするはひがヿ也、又無似の意とするもよろしからず、言の本はいかなる意かしらず、たゞたぐひもなくといふやうの意につかひたり、

帚木巻上

ひかる源氏名のみこと〲しう云々かた野の少將にはわらはれ玉ひけんかし〔二のひら〕　此語は、見るに心得べきやうある也、まづ此帚木ノ巻は、細流にもしるされたる如く、此物語一部の序のごとくなるを、此ノ發端の語も、又一部にわたりて、序のごとくにて、源氏ノ君の壯年のほどの事を、まづとりすべて、一つに評じたるもの也、此巻のはじめのころの事にはあらず、いひけたれ給ふとがの多きといふも、かゝるすきごとゝいふも、皆これより後の巻々にある事共をさしていへる也、これより前、桐壷ノ巻には、いまださることなし、かたりつたへけむといへる、すなはち此物語、此ノ後の巻々の事ども也、かくてまだ中將などに物し給ひし時、といふより、其始めへ立かへりて、その有しやうを、つぎ〳〵に語るよし也、

名のみこと〲しう　此下にてもじをそへて心得べし、

いひけたれ給ふとが　源氏君のすべての好色のとがにて、世人の、そのふるまひを、あしき事にいひけつ也、ひかるとい

ふに、けたれこいへる、おのづから文のにほひなり、

いこゞかゝるすきごゞもを　いひけたれたまふ、　好色のこがおほきに、　其中にも、殊にいたく忍び玉へるかくろへ事をさへ也、いこゞこいひ、さへこいへるを思ふべし、かゝるこいへる詞は、そのかくろへ事をし玉ふ時に、みづからおぼせる心をいふ語なれば也、物語の地よりいふにはあらず、かゝるすきごゝいふより、名をやながさんこいふまでは、その時に源氏君の、みづからおぼせる心をいへる也、宗祇注など、かゝるすきごゝいふを、物語の地の語こ心得たるから、いひけたれ玉ふこがをば、好色の事にはあらざるさまにいへるは、ひがこ也、すきごのすきを、河海に、逸数奇(スキスキ)など注せられたるは、ひがこなるこ、拾遺にわきまへたるがごし、

なよびかにおかしきこごなくて　實におかしき事なしこにはあらず、是はかた野の少將などのごき、もて出てたはれたる人の、見てわらふかたの心よりいへる也、

また中將などに物し給ひし時は同　上の、發端(ハジメ)のすべての語をうけて、其始メつかたよりの事ごもを、これより語りはじむる也、まだこいふも、その始メへ立かへりていふ故也、なごゝいふも、はじめつかたをひろくいへる詞也、給ひしのしもじは、すべて昔有し事を語るよしなれば也、然るに此過去のしもじを、疑ひたる注はいかゞ、

うちにのみ云々うちまじりける同　これまでの文、中將などにて物し給ひしころのさまを、ひろくいへる也、此巻の時のこにはかぎらず、

御物忌同　河海に引れたる儀軌の事、拾遺にわきまへたるがごこし、この儀軌にいへる説は、物忌こいふ札を、簾などにつくる事あるによりて、それをやがて鬼王の名こして、造りたるもの也、いこ拙し、

いこゞながゐ三のひら　上に、内にのみさふらひようし給ひてこあるを、此ほごは、御物いみのさしつゞきて、いよ〳〵内に長居し給ふ也、すべていこゞこいふ詞は、みな此意をもて見べし、

おほいこのにはおぼつかなく同　すべておぼつかなく又こゝろもこなくなごいふ言は、待遠(マチドホ)なる意に多くいへり、こゝも源

氏君の、久しく來給はぬを、まちどほにおぼせる也、近きころ雨夜物語たみ詞といふ物に、源氏の御心を、おぼつかなく思ひ玉ふやうに注せるは、俗意也、

御とのゐどころ同　禁中にて、源氏君のおはする所也、

つとめ給ふ同　すべてつとむとは、俗言に、精出(セイダ)してするといふ意也、俗にいふとは、いさゝかたがひ有、

右のおとゞのいたはりかしづき給ふすみかは同　たみ詞に、四の君のすみかといへるは、又俗意也、頭ノ中將のすみか也、男の女の許へ通ふを、すむといひて、此すみかは、通ひすむ所といふこと也、さればいたはりかしづき玉ふといふも頭ノ中將の也

をさ〳〵たちおくれず同　かくさまにつかひたるをさ〳〵は、物をさしつめて、たしかにはいはず、大かたに定めていふ詞也、拾遺に、大かたといふに似たりといへる、よくあたれり、こゝもさしつめてたしかに立おくれずとにはあらず、大體おとらぬ意也、されば俗言にあまりといふ言、これによくあたれり、あまり立おくれもせぬ也、此次の文に、殿上にもをさ〳〵人ずくなにとあるは、いさゝかいひざまはかはりたれども、意は同じことにて、殿上にもあまり人もないといふ意也、註に、治定の心といひ、或はもはらの意也などいへるは、さらにかなはず、又花鳥に、漸又頗などいふが如しとあるも、かなはず、

「むつれ聞え同　「一點ひがこと也、さてこゝに引たる哥、孟とあれど、河海に出たり、二の句いとしも人にと有、此哥の事、拾遺の説のごとし、

のどやかなる同　俗言に、しづかなるといふこと也、

おほとなぶら同　ふるく御殿油(オホトノアブラ)と書たり、油は、油火といふこと也、

かたは同　河海に頑片輪とある、ともにひがこと也、拾遺の説のごとし、

おのがじゝ同のひら　面々それ〳〵にといふ意也、弄花細流に、みづからの心ざしのまゝなるをいへりといひ、湖月に、女の心の

まゝにといへる、皆河海に、各自恣とある、字によりて、誤られたるもの也、さらに此字の意にあらず、「點も例のひがこと也、

まちがほならん夕暮などのこそ同　夕暮など、まちがほならん文こそといふ意也、まちがほは、文のさまをいふ也、夕暮へかゝれる詞にはあらず、さてまちがほといへるは、まつよしをあらはにはかゝで、其心をかすめたるをいふなり、

おほざうなる同　此言は、万葉にあふさわといふ言ある、それと意同じく聞ゆれば、もとはあふさわなりけんを、さわを、例の音便にさうといひ、つひにあふをも、おほと書なしたるなるべし、音便にいふこと多く、又假字づかひのみだりがはしくなれるより、かゝるたぐひおほし、

かたはしづゝ見るに同　これは必ス見せ給ふにと有べき語也、其ゆゑは、上のゑんずればといへるは、こゝへかゝる言なるに、見るにといひては、ゑんずればのかゝり所なくて、とゝのはず、にもじも、次の語にかなはざれば也、ゑんずればといひすてたることを、くさ〴〵たすけていへる説あれど、しひごと也、

そこにこそ同　花鳥に、足下は、人をかしづく詞也、拾遺に、そこを足下と心得るは大に誤也といへるがごとし、そこは其所にて、今の世にも、人にむかひて其許といふに同じきをや、

たゞうはべばかりのなさけに同てはしりかき同　なさけにと、讀きりて、てはしりかきとよむべし、なさけのために、手をはしりかく也、かきのかも、すべて清てよむべし、濁るはひがこと也、拾遺に、うはべといふことに、万葉の、うはへなきといふ詞を引て、一つ言とせるは、いみしきひがこと也、かれとはいたく異なるをや、さて上の、女のこれはしもと云々より、品定の始メ也、しなさだめといふ名目も、はやく物語のうち、夕顔ノ巻に見えたり、

よろしきも同　すべて物語によろしといへるは、つねにいふことは、こゝろばへことにして、わづかにゆるさるゝほどの意にて、俗言に、たいがいよきといふほどのこと也、漢文に可ゞといふこゝろばへ也、

そのかたをとりいでむ云々五のひら　そのかたとは、上の手はしりかき、をりふしのいらへうちしなどするたぐひをさしていふ

也、それもほど〳〵に大ていよきは、多き物なれども、然らばとて、其方のすぐれたるかた、えり出むとする時に、そのえらびにも漏まじきほどによくするは、又有がたしと也、

わがこゝろえたる云々おほかり同　これは、上のうはべばかりの云々のたぐひなる女に、多くあるぞといふ也、別に一種にはあらず、

おひさきこもれる窓のうちなる同　注に、窓の内にこめてそだつる心也といへるは、こもれるとあるを、窓の内にこもるとと思へるにや、ひがとなり、おひさきこもれるとは、年わかくて、行さきの多く長きをいふ、わかき人を、よごもれるといふも同じ、さてこもれるといひて、窓の内とつゞけいふは、おのづからの文のにほひ也、さて窓の内といふは、長恨哥の語によりて、人の女の、親の家にあるほどをいふ詞也、實に窓の内にすめるよしにいふにはあらず、

おほどき同　おほどくおほとかおいらかこめくなど、皆おほやうなる意にして、其内に、おの〳〵いさゝかかはりあり、

ひとつゆゑづけて同　何にまれ一藝などをば、大ていにしいづる也、たみ詞に、ゆゑづきてと改めたるは、わろし、こゝはならひ學びて、ゆゑをつけたる意なれば、つけてといふべけれ、又ゆゑといふをも、むつかしく說たれど、かなはず、すべて萬葉などの、ふるき意をもて、言の本をとけるは、此物語などにては、かなはぬと多し、たゞ此物語は、此物語のころのやうをもて、とくべき也、ゆゑといふとも、此物語などにては、かならずしも故の字由の字の意にもあらず、たゞ藝能にもあれ、心おきてにもあれ、ふるまひにもあれ、とるべきふしのあるを、ゆゑ有りとも、よしありともいへり、

まねびいだすに同　すべてまねぶとは、その有さまのまゝをかたるをいふ、

思ひくたさむ同　腐さん也、下さんにはあらず、

ほゝゑみて同　たみ詞に、含笑也といへるよろし、ゑみを愛み也といへるは、たがへり、咲は、假字惠、愛は延にて、別なるをや、

このかたかどもなき人は同　上にたゞかたかどを聞つたへてといひ、ひとつゆゑづけてなどいへるは、かたかどある女なるを、さればかりの能(ノウ)もなき女も、世に有べきにやとゝひ玉ふ也、傍注に、あるべきかはといへるは、たがへり、さては次の中將の詞にかなはず、

見えてわかるべきこと六のひら　よしあしの見えわかるゝこと也、上文に上品の人は、かくるゝこともおほくといへるに、對へて見べし、

物よくいひとほれるを同　深くこまかなるところまで、よくゆきとほりていふ也、

わきまへさだめあらそふ同　すべてさだむとは、物語にては、物を論ずるをいへり、即チ品定メといふも、女の品々を論ずるよし也、俗言に、一かたに決定するをのみいふとは異也、

きゝにくき事同　世の女のよきあしきをいふ故也、注に、當時の人のうへをいふゆゑといへるはたがへり、

さはいへど同　此詞は、いづこにても、俗言に、何といふてもといふ意也、

やむごとなき同　此言はもと、なほざりにしがたき意よりいひて、もだしがたしといふと同じくて、無レ止事(ム)レ也、高き人をいふも、なほざりにしがたき意より出たる也、たゞ詞に、惱事(ヤムコト)なき也といへるは、ひがことなり、

とり／＼に同　それ／＼に也、こゝはなりのぼれども云々と、もとはやむ事なき云々とを、それ／＼にことわりて也、注に、さま／＼にいひとわりてといへるは、たがへり、とり／＼には、さま／＼の意にはあらず、

きざみ／＼有て七のひら　段々の有て也、湖月に師說とて出せる注、すつべし、用なくまぎらはし、

けしうはあらぬ同　けは異(ケ)にて、あやしからぬ也、賤しきを、あやしとつねにいへば、即賤しからぬにて、さてつかふところは、必しも貴賤の事にはかぎらず、物のさしもあしからぬを、けしうはあらずといふなり、こゝも然なり、

ころほひなき同　當時のさまをいふ也、又ほどゝいふ意にて、受領の分際をさしていへるごとくにも聞ゆれど、上よりの語のはこびを思ふに、なほ然にはあらじ、

なま〳〵のかんだちめ同　俗言になまじけの公卿といふこと也、公卿といふばかりにて、世のおぼえも何も、公卿のやうにもあらぬをいふ、次の非参議の云々と、相對へて見べし、花鳥に、物のなまなりなる心とあるは、言の本の意にはかなふべし、始めて公卿になりたる家とあるは、いたくたがへり、そはなまなりより出たるひがこと也、たゞ詞に、もとは筋目なき人の、公卿になりたるをいふといへるも、同じひがこと也、

非参議の三四位どもの同　いまだ参議に任ぜずして、公卿にあらざる、三位四位の人共をいへり、つねには位を以て、三位以上をば、公卿とするともあれど、こゝは官に就て、参議以上を公卿として、それに對へていへる也、なま〳〵のかんだちめよりも、非参議のといへる、語の勢ひをもて知ルべし、青表紙ノ本には、三の字なしとて、それによれる本は、ひがこと也、かならずひろくゆるやかに、三四位とあるべき語也、四位とかぎりていふべきところにはあらず、

やすらかに云々同　公卿にあらざれば、よろづ心やすき也、

家のうちにたらぬことなど云々同　よのおぼえくちをしからざれば也、

すべてにぎはゝしきに云々同　すべてとは、上の受領の事をも、合せていへり、

こと人のいはむやうに云々同　今馬ノ頭のいへるは、さらににぎはゝしきをよしといふにはあらざる物を、其意（コヽロ）を得ずして仰せらるゝと、中將の、源氏君にいふ也、源氏ノ君は、よくこゝろをえ給ふべき事なるに、こゝろもえぬこと人のいはんやうにと也、色このみならぬ人のいはんやうにといふ注は、ひがこと也、

さらにもいはず同　此詞は、次のうちあひてすぐれたらむも云々、心もおごろくまじ、とある下へかけて心得べし、さやうの品の人は、何事もうちあひて、すぐれたらんも、もとより然るべきことなれば、めづらしからぬを、ましておくれたらんは、さらにもいはず、いふかひなくおぼゆべしと也、

うちあひてすぐれたらむも同　此うちあひは、其女の、身のほどにあひかなひて、何事もすぐれたるをいふ、上のうちあひとは、さすところ異なり、さてこれも、もとのしなときよのおぼえ云々の中（ウチ）の女のこと也、別に一種にはあらず、注たがへ

り、さて又上にいへる條々は、或はもとのしなはよけれども、時代(トキヨ)のおぼえなく、或はときよのおぼえはあれども、もとのしなわろきなどをいへるを、これはともにうちあひてよきをいへるにて、これもなほ中の品の一種也、上が上の品をいへるにはあらず、思ひまがふることなかれ、もとの品とは、家がらのよきをいふ也、もとのといふに心をつくべし、やむごとなきといふも、もとの品ときよのおぼえと、うちあひたるをいふ也、上が上のよしにはあらず、さればこれを、女三ノ宮に當れり、薄雲にあたれりなどいへるは、かなはず、

なにがしが八のひら　すべてみづからのことを、人にむかひて、かくなにがしといへるは、其時實になにがしといひしよしにはあらず、古ヘは名をいへることなるに、これは作リ物語にて、惟光良清などをおきて外は、すべて人々の名をば、作らずして、名をいふべき所を、なにがしと書る也、なにしの院なにがし寺、なにがし僧都などいへるたぐひも、その名をいふべきを、かくいへり、うつほの物語などは、作り物語ながら、皆人々の名をも作れる故に、人にむかひていふ所にも、皆名をいへるぞかし、

上が上はうちおき侍りぬ同　まづ此品定は、はじめより終りまで、すべて皆、もはら中の品の女の事也、さてこゝの語は、上の件リなりのぼれどもとより云々といふより、次々こゝまでの條々をうけていへるにて、又これより下の段々、をはりまでへも、おのづからわたる語なり、されば此語を以て、此品定は、みな中の品の事にして、上が上と、下が下とは、あづからざることをしるべし、はじめに中將の詞に、人のしな高くうまれぬれば云々、中の品になん云々、下のきざみといふきはになれば云々此語のやうを思ふに、もはら中の品を論ずべき、下がまへに書る物也、かくて中の品の事をいふうちに、おのづから上と下との心ばへもこもりて有ル也、さて又上ノ件リ、なりのぼれども云々の條より、もとのしなときよのおぼえ云々までの條々は、女の身の品の種々を、むねといひ、これより下の條々は、其女の、心おきてふるまひのしなをいひて、これより上と、これより下とは、品定の竪(タテ)と緯(ヌキ)との如し、大かたこれらの事ども、心をつけて、こまかにわきまへ味ふべし、なほざりに見むは、作りぬしのさばかり心をいれたるほいなきわざなりかし、

世にありと人にしられず云々同　花鳥に、これは下の品の人をいふ也とあるは、たがへり、これらもみな中の品のうち也、

とぢられたらんこそ同　葎の門といふから、とぢられといふ也、

ちゝのとしおい云々同　式部が身上をうちあてゝ云々といへるは、ひがこと也、

かたかどにても同　たとひわづかに一つ二つのかどあらんにてもといふ也、細流に、かやうの中にも、とり所有べき義也とあるは、かなはず、

さるかたにて同　中の品にとりてはといふ意也、すぐれてきずなき云々といふより、つゞきたるをもて、さとるべし、

すてがたきものをばとて同　ばもじは、やを誤れるなるべし、ばにては聞えず、たみ詞に、をばの下に、なほえり出べきもの也、といふ詞を加へて、心得させたれども、其意にはあらず、ひがこと也、

いでや同　俗言に、いやもうといふによくあたれり、此詞いづれも其意也、

かみのしなと思ふだに云々同　世をのをは世なるものをの意也、

大かたの世につけて九のひら　湖月に、師説とて出せる注、こゝにはかなはず、いたづらこと也、けづるべし、此段、萬のうへにわたりて、まことにさること也、

かしこしとても同　傍注たがへり、これはたゞ、かしこき人にてもといふ也、

ひとりふたり云々同　人数おほきよし也、

かみは下にたすけられ同　湖月師説、いたく違へり、此段は、花鳥に、天下は、ひろしといへども、諸人力を合せてをさむれば、中々やすきなり、せばき家の中の事は、あるじ一人のはからひなれば、ゆづるかたなくして、大事なる心也、此あるじは、うしろみの事をいふべし、とあるぞよろしき、

下はかみになびきて同　聖徳太子憲法に、上行下靡、なびくは隨ふにて、こゝは、上にたてる人の仰するまゝにだに行へば、事たれるよし也、

せばき家のうちの同　せばきとは、天下の政道の廣きに、對へていふ也、廣き家に對へていふ意にはあらず、

たらはであしかるべき大事ども同　注に、家内も天下の如く、さま〴〵のこと有てといへるは、ひがと也、大事とは、緊要の事共をいふ也、

云々すくなきを同　下の、同じくは云々、といふ所へかゝる語也、

同じくは我らからいり云々同　男のたすけてなほすとのいらざる也、いりは、俗言にも、錢がいるかねがいるなどいふいり、注に、天下の政をなす賢大夫だに云々といへる、さらにかなはぬと也、又葵上に源氏の云々も、あたらず、

心にかなふ同　思ひさだむべきよるべとすばかりに、心にかなふ、とつゞく語なり、よるべとすべきほどに心にかなふ也、

さだまりがたきなるべし同　上に、おほかる中にも、えなん思ひ定むまじかりける、といへるをうけていへる也、然思ひ定めがたきとは、かやう〳〵なる故なるべしと、みづからおしはかりたるよし也、

こゝろにくゝおしはからるゝなり同　久しくたもたるゝは、女もよきゆゑならんと、おしはかられて、女のためにもよろしき也、

されど何か十のひら　されどゝは、心にくゝおしはからる、といへるにあたりていへり、何かは、何かは也、心にくゝおしはからるとはいへども、さやうのたぐひも、なにかはゆかしからんの意也、湖月師説は、何かといへる詞の勢ひにたがへり、又たみ詞に、何かを、何やかやと、世の中を見しる時は云々と注したるは、俗意也、

心に及ばず同　及びなきやうに思はるゝをいふ、注に、これをと思ひ及ぶともあらず、といへるはかなはず、

こころせく思ひたまへぬだに同　細流に、こゝにて句を切て、心を上へかけて見る也、とあるが如し、我らが賤き身にだに、然思ひ侍るを、まして君たちのかみなき御えらひにはといふ也、たみ詞に、あまねく女を見あつむるだに、といへるはたがへり、そは所せく思はぬを、廣く見あつむる意にとりて、いへるなれど、さる意にはあらず、すべてこころせしといふ詞は、言の本の意は、所の狹き意より出たるなれども、用ゐる意は、必しもしからず、こゝは、貴人は、身の重々しく

て、萬の事たやすからぬを、こころせしと常にいふ、其意にて、妻をえらび玉ふとも、貴人は、なにくれとむつかしくして、たやすからぬを、我らがどき下ざまの人は、さやうに事むつかしくはあらざるを、それだにといふ意にていへる也、

又さやかにも云々同　細流二説の中に、後の説よろし、初ノの説はひがこと也、

いとよくもてかくすなりけり同　文をかけど云々、わづかなる云々の二つを、合せていふ也、さやうの女は、身のおくれてたらはぬところを、よくかくして、男に見あらはされぬ也、俗言に、しがを見せぬといふ意也、注に、あだ〳〵しさをあらはさぬ也、といへるはたがへり、さてなりけりといへる意は、すべて世ノ中の女は、おくれてたらはぬ難ナンあるが、多かる物なるを、右のごとくなるが、それをよくもてかくすことぞやといふ意也、

とりなせばあだめく同　此所いひざまむつかしくして、ふと心得にくし、すべての意をよく得て、さとるべし、まづあだめくとは、あだなるさまに見ゆるをいひて、たゞにあだ也といふとは異也、さて物やはらかに、女らしき女ぞと見れば、さやうの女は、必ス心よわくして、あまりなさけに引こめらるゝ物なる故に、おのづから、とりなすときは、あだなるにとりなさるゝさまなるものぞといふ也、細流に、とりよりて見れば云々とあるは、いみしき強説シヒゴト也、とりよることを、いかでかとりなすとはいはん、

これをはじめのなんとすべし同　右のなんは、殊に世に多くある物なる故に、女はまづこれをつゝしむべきことぞ、といふ意にていへる也、第一の難といふごと聞ゆれども、さにはあらじ、とりなせばあだめくといへるは、たゞにあだ也といふにはあらざれば、第一の難とはいふべくもあらざれば也、

ことが中になのめなるまじき云々同　此所、むかしより讀ミ誤れるから、意もたがへり、これは、なのめなるまじきと讀て、人のうしろみのと、つゞけてよむべし、人のうしろみとは、夫のうしろみするをいふ、夫のうしろみをする方の事は、女のよろづの事の中に、殊になのめにてはえあるまじき、第一のわざなるをいへり、注どもの意にしては、事が中にと

いふ詞聞えず、よく味ふべし、

おかしきにすゝめるかたなくても云々同　物のあはれしり過し云々のやうなる、風流の方は、夫のうしろみの方には、なくてもよかるべきが如くなれども也、物のあはれしり過しとは、物のあはれしれるよしのふるまひするをいふ、

又まめ／＼しき云々同　又といふ詞、下にいかゞはくちをしからざらんといへるへかけて見べし、風流なる方は、なくてもよかるべしと見えたれども、又さやうにもあらずの意にて、そのよしをいひつゞくる也、注に、又といふ詞を、あしく心得て、これより又別に一種とせるは誤也、

みゝはさみがちに同　古への女は、みな髪をたれたるに、額髪とて、左右に、耳より前へもたるゝとなるを、かたちをつくろはぬ女は、耳より前へたりたる髪を、うるさくむつかしく思ひて、耳のうしろへかいこして、耳にはさむをいふ、或物語に、わかけれど、すこしもはぢらひたることなく、みゝはさみをして云々といへり、【此物語、題号に正三位とあれども、此名はうけがたし、】

びさうなき同　貧相なるといふはひがこと也、拾遺に、無美相とせるは、貧相よりはまさりたれど、なほ別となるべし、

家とうじ同　刀自を、音便に、とうじとはいふ也、童子のよしにはあらず、家の妻室のとなり、

きゝわき思ひしるべからむに十一のひら　むつましくかたらふ妻の、物のあはれをしりて、かやうの事のこゝろをも聞わけて、分別あらんに、語らまほしと也、

うちも笑まれ同　かたりてかひなき妻の、こちなきことを思ひて、ひとりわらひもせられ、又いふかひなきことを思ひて、涙もさしぐむ也、傍注たがへり、

おほやけはらだゝしく同　おのが身にはあづからぬ、人のうへの事を、かたはらより見聞て、はらたゝしく思ふと也、此おほやけは、俗のいやしき言に、身にあづからぬ、人のうへの事に、妬するを、法界りんきといふ、法界の意にあたれり、枕册子に、あさましうおほやけはらだちて、けんぞくのこゝちも、心うく見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐる

しきを思ひしらぬよ、紫式部日記に、すゞろに心やましう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくゝこそ思ひ玉へられしか、榮花物語見はてぬ夢ノ卷に、げにはおほやけはらだゝれける、など見えたり、あやなきとは、我身にあづからぬ事に、腹だつをもていへる也、注に、例も考へざる、みだりど也、

心ひとつに思ひあまること同　これはおほやけはらたゝしくとは、別事也、つゞけて心得べからず、さてなにゝかは云々は、二つを合せていふ也、

思ひ出わらひ同　有し事を、心のうちに思ひ出して、わらふをいふ、こゝは心ひとつに思ひあまる事の中に、笑ふべき事を思ひ出しては、わらひもする也、思ひあまる事は、必しもうき事かなしき事などにはかぎらず、あやしき事をかしき事などにても、心にあまりて、人にかたらまほしき事はある也、宗祇注に、くちをしく思ふ相手などを云々、といへるはひがと也、

あはれともうちひとりごたるゝに同　これは思ひあまる事共の中に、あゝはれと歎息すべき事を思ひては、歎息する也、さて人しれぬといひ、ひとりごたるといへる、皆妻に語りても、かひなかるべきが故也、宗祇注に、あはれ我身が云々といへる、又ひがと也、何事とさしていふべきにはあらず、

なにごとなど同　夫のそのさまを、妻の見て、それは何事ぞなどいひて也、

あはつかに同　河海に、淡々しき也と有、俗にいふしみやかならぬなり、さしあふぎるは、うち仰のき居るにて、あはつかなるさまをいふ也、

いかゞはくちをしからぬ同　くちをしきよしを、つよくいへる詞也、ことが中に云々といふよりこれまで、一つゞき也、

こめきて同　おほやうなるをいふ、花鳥に、をさながましき心也と見え、たみ詞に、むすめの子めきて也といへる、よろし、親めくに對ひたる詞也、親は、よろづに子のあつかひをするを、子は、親にしたがひて、親のするまゝに、大やうにてある意也、

とかくひきつくろひて同　たらはぬ事をば、男のたすけて、とりつくろふなり、傍注に、異見などする也といへるは、たがへり、

こゝろもとなく同　すべて此詞は、物のあかぬことあるを、かくあれかしと、願ふやうの意也、おそきを待つことにいふも、其意也、皆俗にいふとは、少しことなり、注に、男に引つくろはるゝほどの女なれば也といへるは、俗にいふ意に見たるにや、

げにさしむかひて云々同　此げにといふ言のつかひざま、いさゝかむつかし、まづしばらく諾(ウベ)なひたるこころにつきていへる也、

たちはなれては同　別所(コト)に離れて居るほど也、

我心と思ひうることなく同　夫の助けをからず、我心にて思ひ得てすることかなはざるをいふ、

深きいたりなからんは同　俗に功者(コウシャ)のなきといふ意也、

いとくちをしく同　注に、前にいかゞはくちをしからぬといふを受ていへり、といへるはいかゞ、上なるかの詞をうけたるとなし、

たのもしげなき同　立はなれゐる時、わが心と、物をし得ることあたはざる女は、頼みにしがたき也、とがは咎にて、難(ナン)といふと也、

なほくるしからん同　注に、かのひさうなき云々、よりは、此たのもしげなきとがは、猶くるしからんと也といへるは、なほてふ詞、俗意になる也、此物語などに、猶を、さる意にいへることなし、こゝはかのひさうなき云々に、くらべていへるにはあらず、なほといへるは、こめきやはらかなるは、よけれども、それもなほにて、やはりまだの意也、拾遺に辨へたるがごとし、くるしからんは、俗言に、なんぎなる物にてあらんといふ意也、

そばそばしく同　たゞみ詞に、よそよそしく、したしからぬ也といへる、よろし、細流に、其形などの、よくもなきによりて、とあるはいかゞ、其形など、さしてはいふべきにあらず、さてこは、男の心に、そばそばしく、心づきなくおもふ也、女

の方より、そば〲しきにはあらず、

いでばえ同　事にふれて、はえ〲しきしわざのある也、

くまなき物いひも同　世ノ中の女のさま〲のやうを、のこるところなく、よく知ッていふ、馬ノ頭なれども也、注に、くもりなき心といへるは、たがへり、

さだめかねて同　上ノ件にいへる、さま〲の女をすべて、いづれをよしとも、定めかぬる也、注に、たゞ此上（カミ）の二種をのみあげていへるは、かなはず、

しなにもよらじ同　花鳥に、三界唯一心云々の心也とは、いたくたがへる也、ともすればかやうのよしなきことを引出らるるは、いかにぞや、

ねぢけがましきおぼえ同　此詞、巻々所々に見えたるを、合せて考ふるに、人の、心にもあれ、形にもあれ、しわざにもあれ、有べきまゝに直（ナホ）からずして、わろくまがれる意也、俗言に、物のまがれるを、ねぢれたりといふと、もと同言にて、意も通へり、注に、口きゝがましき人をいふといへるは、たゞ佞ノ字につきていへるにて、ひがこと也、

しづかなる心のおもむき十二のひら　かろ〲しく動かぬ心をいへり、

よるべ同　通ひすむ女をいふ、注に、本妻也といへるは、たがへり、次につひのたのみ所といへるぞ、本妻なる、

あまりのゆゑよし心ばせ同　ゆゑよしの事、上にもいへるごとく、何わざにもあれ、ひと才（カド）あるべきふしあるを、ゆゑ有とも、よし有ともいふ也、

心ばせうちそへたらんをば同　注に、萬の事に氣のつくやうの心也といへるは、いみじきひがこと也、うちそへは、ゆゑよしをも合せていへる詞にて、あまりのといへるこれ也、

よろこびに思ひ同　拾遺に、俗にいふひろひ物の意也といひ、たみ詞に、まうけ物といふほどの詞也、といへるが如し、湖月師説に、かくまめやかにしづかなるうへに、云々もはや堪忍すべし云々といへるは、いたくたがへり、此よろこびに

思ひてといふ詞を、何と心得たるにか、

うしろやすくのどけき所だにつよくは同　これ即チ上の、物まめやかに、しづかなる心の趣といへるもの也、

うらみいふべきことをも同　うらみは、用言によむべし、細流に、論語の文を引れたる、さらにあたらぬこと也、

見しらぬさまに同　恨むべき事とも、しらぬさまにてある也、

「うへはつれなく同　「點、例のひがこと也、

みさをつくり同　みさをにもてつけてともいへり、くづれぬやうに、心をつけてもてつくる也、

見るめのまへに同　男のつね〴〵の深き心ざしをば、しらぬものゝやうに、さしあたりて當座に、少々つらきこと有とても也、

長き世の物思ひになる同　さやうの事によりて、つひに離別することもあるをいへり、

あはれすゝみぬれば十三のひら　はじめ心ひとつに思ひあまれるすぢの、いよ〳〵すゝむ也、

やがて尼になりぬ同　家を出てかくれたるまゝにて直(スグ)に也、俗言にいふやがての意にはあらず、

ひたすらにうしとも云々同　上に心をも見むとするほどにと有しごとくにて、此女、ひたすらに、男をうしと思ひはなれたるにはあらざる也、

ふるごたち同　古き女房ども也、河海に、後漢書を引れたると、拾遺にいへるがごとし、

君の御心は同　君とは、此女の男をいへる也、

ひたひがみをかきさぐりて同　あたら髪をそぎすてたる事よと後悔するさまなり、

やがてあひそひてとの思ひいで云々同　一本に、やがての下に、あひそひてといふ五もじのあるぞよろしき、此詞なくては、やがてといふと聞えず、湖月の本に、此言なきは、同じ言の下にもある故に、わづらはしと思ひて、さかしらにはぶけるにや、又一本に、その思ひ出といふより、あしくもよくもといふまで、廿七もじのなきは、あひそひてといふ詞の、二

つあるによりて、その中間(アヒダ)の語を見おとして、おちたる也、此語ども、なくては聞えず、やがてあひそひてとは、一たびそむきし後、男の心の、なごむべきふしもなくて、そむきしまゝにて、又かへりてあひそふ也、その思ひ出は、さきにそむきて家を出し事を、思ひ出るをいふ、

なのめにうつろふ同　このなのめは、たしかにうつろふにはあらで、たゞいさゝかうつろふ意也、なほざりにといふ注、少したがへり、又たみ詞に、なのめにしてといへるは、もとよりの女を、なほざりにする意か、そは違へり、

見そめし心ざしいとほしく思はゞ上四のひら　たみ詞に、女の、男をいとほしく思はゞの意にいへるは、たがへり、男の心に、女をいとほしく思はゞ也、

さるかたのよすが同　見そめし心ざしを、いとほしく思ふ方のよすが也、よすがとは、通ひすむ所をいふ、すべてよるべ又よすがなどあるを、本妻と心得たるは、たがへり、必しも本妻にはかぎらず、

たぢろきに同　動きさわぐ心也といへる注よろし、俗言に、さやうのごさくさにといふにあたれり、たみ詞の說、わろし、

よろづの事なだらかに同　注に、男に對する顔色心ばへまでといへるは、かなはず、よろづの事とは、萬の事をいふ也、

ゑんずべき事をば云々うらむべからむふしをも云々　こは同じ事の二つ重なりて聞ゆるにつきて、つらく／＼思ふに、ゑんずるは、心にうらめしく思ふと、うらむべからんふしは、恨みをいふべきふしにて、心に思ふかたと、言にいふかたとを、二つに分ていへる也、見しれるさまにを、たみ詞に、見て見ぬふりに也といへるは、うらうへの違ひ也、

それにつけて同　此下に、かへりてといふ言を加へて心得べし、

見る人から同　そへる女の、あへしらひからによりて也、をさまるは、他へうつる心のやむをいふ、

つながぬ舟の同　河海に、文選を引れたるは、本也、然れどもこゝは、白氏文集の偶吟ノ詩に、無レ情キ水ハ任セ二方圓ノ器一ニ、不レ繫ルカ舟ハ隨フ二去住ノ風一ニ、といへるをとりて書る也、さてげにあやなしは、此本文にかゝりていへり、

たのもしげなきうたがひ同　女のあだにして、他(ホカ)へ心を分るやうのうたがはしき事あるをいふ、たみ詞に、あまり男をさし

ゆるして、たのもしげなきといへるはたがへり、又夕顔ノ上の事にあてたるも、あたらず、又拾遺集の哥を、こゝに引たるもかなはず、此哥、契沖が引たる所はかなへり、

さしなほしても 同 これは、なほりといふべきことなるを、なほしといへるは、あやまちなくて見過して、直らしむる、男の方につきていへば也、

ともかくもたがふべきふしあらむを云々 同 注に、紫ノ上は云々といへるは、こゝにはあたらず、こゝはたゞ、たがふべきふしをも、のどやかに見しのぶを、第一として、ますと有ルまじかりけりといへれば、紫ノ上の、ゑんずべき事をば、見しれるさまにかすめなすを、女の本樣とすることは、中將の語の意にあづからぬこと也、

ひゞらきゐたり 同 俗言に、口をたゝきゐたりといふこと也、紫式部日記に、よろづつれ〴〵なる人の、まぎるゝ事なきまゝに、ふるき反古ひきさがし、おこなひがちに、くちひゞらかし、ずゝの音たかきなど、いとこゝろづきなく見ゆるわざ也、とあるも、口ひゞらかしは、經よみ念佛など、口やすめず、いひつゞくるをいへり、注に、ほこりたる躰也といひ、たみ詞に、引拔きて座を改め居る也といへる、皆ひがこと也、

そばつき 十五のひら 傍の形也、つきは、顔つき手つきなどのつき也、

されぱみたるも 同 俗言に、しやれたるといふこと也、注共、皆たがへり、又河海に、此たとへを人にとらば、人にたはふれ事を好む人也と見え、宗祇抄に、宮づかへ人にたとへいふ也といへるも、皆ひがこと也、これはうはべの風流めき、なさけだちて、實なき女のたとへ也、

うるはしき人のてうどの 同 うるはしきは、てうどへかゝりて、人へはかゝらず、人のうるはしきてうどゝいふこと也、たみ詞に、うるはしき人と見て、善人也といへるはたがへり、又此てうどを、花鳥に、香壺の箱薬の箱など也とあるもいかが、何々などゝ、さしてはいふべきにあらず、又此たとへを、人の本臺になるべき人は云々、とある注もたがへり、其意にはあらず、たゞこれは實なる女のたとへなるをや、

すみがき同　彩色をするに對へて、たゞ繪をかくをいへる名目也、古へは、繪をかきて、彩色をばべちに他人(コトヒト)にせさすることも有し故に、二つに分て、墨書(スミガキ)つくり繪といへり、つくりゑとは、彩色するをいふ也、墨繪彩色繪といふことにはあらず、須磨ノ卷に、このごろの上手にすめる、千枝つねのりなどをめして、つくりゑつかうまつらせばやとあるも、河海に、つくりゑとは、墨書のうへを、彩色するをいふ、源氏のかゝれたる繪を、彼輩に色どらせばやと也、とある說よろし、弄花細流の說は、ひがこと也、こゝの傍注にも、彩色はまさるゝ事有、墨繪大事也、とあるはかなはず、其意にしては、此段の意、くだ〴〵しくなる也、

つぎ〴〵に同　此下に、かくにといふ詞を、加へて心得べし、

すくよかならぬ山のけしき十六のひら　嶮岨ならぬ也といへる注よろし、河海に健(スクヨカ)、たみ詞に、すげなからぬ山とある、みなわろし、さてこゝに嶮岨ならぬ山を殊にいふは、嶮岨なる山は、繪にかくに、けしき有て、書やすきを、なだらかなる山は、書にくき故也、

おきてなどをなん同　此を。もじ、下に受たる言なく、穩ならず、いきほひことにかくをと、かくをといふ言を、加へて心得べし、

猶じちになんよりける同　これは上件の三つのたとへを、すべていふ也、三つのたとへみな同じ意にて、女の、けしきばめる、うはべのなさけと、實なるとのたとへなり、注に、その實なる方のたとへを、本妻たるべき女のたとへなどあるは、意たがへり、又宗祇注に、源氏君頭中將は、世をまつりごち玉ふべき云々といへれど、さる意はなし、とにかくにしひて、から書の意にかなへむとするは、むかしのものしり人の、おぢきなきくせ也かし、

源氏物語玉の小櫛六の巻

帚木巻下

のりのし の十七のひら ことめずなん有けるこいふまでは、地の語なるを、たみ詞に、馬ノ頭が詞こせるは、ひがこと也、

まほ同 たみ詞に、眞顔(マガホ)を畧きたる言こいへる、ひがこと也、

なきてをいだし同 おのがえせぬ及ばぬ事までを、さは思はれじこ、しひてする意なり、

すくめるかた同 次にいへるなよびのうらにて、きすくなる也、すゝめるこある本は誤也、さし過たる心也こある注もわろし、

なよびゆき同 もこきすくなるかたの女なれども、馬頭に、露にても、心にたがはじこ思ふまゝに、やう〳〵次第に、なよびゆく也、

みさをにもてつけて十八のひら 俗言に、たしなむこいふ意にて、容貌のこと也、傍注に、そのふるまひをこいへるは、たがへり

此かたもすこし云々同 此かたは、嫉妬の事也、よろしくなるは、うすくなのめになる也、さてなりの下へ、てもじを加へて心得べし、

さがなさも云々同 たみ詞の説、物語にはかなはず、物語にてはたゞ、口さがなきにて、俗言に、口やかましきこいふこと也、さて此かたも、さがなさもこいへるは、二つの如く聞ゆめれど、然らず、さがなきは、嫉妬してさがなきなれば、一つ事也、嫉妬もなのめになりて、さがなさのやむ也、さてやめむこ思ひこは、やむべくせんこ思ひて也、

まことにうしなども思ひて同 女をこらさむために、つくりてする事なるを、實にうしこ思ふごく見せての意也、此所、たみ詞の説は、いみしきひがこなり、

たえぬべきけしきならば同 こなたより、絕ぬべきけしきに見せたらば也、

ちぎりふかくとも同　たゞ詞に、いかばかり宿世の契深くともといへるよろし、

ならぶ人なく有べき同　なくの下に、なんといふ辞の、落たるなるべし、この辞なくては、べきのてにをはとゝのはず、一本には、有べきやうなどゝあれど、これも語とゝのはず、

いひそし同　宿木ノ巻にも、引たがへこゝろえぬまで、好みそし給へる、注に、いひすごす心也とは、さも有べし、殺ノ字はあたらず、

のどかに思ひなされて十九のひら　其方の事は、さのみ切ヒタにも思ひいれざるよし也、

あいなだのみ同　すべて此詞は、いかにあらんもしりがたき、行末の事を、そのわきまへもなく、頼みに思ふと也、たゞ詞の說　いみしきひがとなり、又弄花細流に、かひなき頼みとあるもたがへり、

はらだゝしくなりて同　こりなんと、かねて思ひしに、たがへる故也、

およびの同　拾遺にいへるごとく、たゞ指也、一つといへるにても知べし、小指にあらず、

はづかしめ給ふめるつかさ位同　上に、見だてなく物げなきほどを云々と、女のいへるに、あたりていふ也、

手をゝりて云々同　やはゝ、たゞやの意也、やといふべきを、やはといへる例多し、君がうきふしは、女の、馬頭をうしと思ふべきふし也、一首の意は、指を、りて、逢見そめしより、こなたの年月を、かぞへて、其間の事を思ふに、君が我をうしと思ふべきとは、たゞ此度の一ふしのみこそはあらめ、外にはなしと也、次の言に、え恨みじといふも、此意にてこそたしかなれ、注は誤也、もし四の句、これのみならずの意ならば、これ一つかはとこそ有べけれ、やはといふべき語にあらず、古人の哥に、さやうのつたなきとはなき也、

あくがれまかりありくに同　方々の女のもとへ、通ひありく也、あくがれとは、かのよるべとは思へる女にはなれたる故也、

又なかりけり廿のひら　かの女をおきて、外には又也、

そゞろさむくやと同　こよひの寒きに、けしきばみ風流ならんあたりは、うちとけがたくて、そゞろはしく、寒からんと也、

いかゞ思へるこ云々同　寒き夜は、心やすくうちとけてぬる所こそよけれこ思ひて、かの女の戀しく思はるゝから、けしきも見がてらゆく也、

なま人わろく同　かやうのなまは、俗言に、どうやらこいふこゝろばへ也、

さうじみ同　物語の例、其本人(ソノホンニン)こいふ意に用る稱也、正身の字は、古書にも、をりをり見えたり、

けしきばめるせうそこ同　馬頭を恨みたるけしきを見せたるやうの消息也、傍注ひがこと也、

ひたやごもりに同　河海に、直隱(ヒタヤゴモリ)こある字のごとく、何のいへるともするともなくして、その故こいふこともしられず、たゞひたすらにかくるゝやうの意也、やこいふは、こもりこいふによれる言にて、屋(ヤ)の意より出たる言か、

我をうこみねこ云々　我は、馬頭が我也、うこみねこ、我を思へるにやこいふ意也、我を、女の我こ見たるは、ひがこと也、さては我をこいふ言、いたづらなるをや、これは、もし他(ホカ)に心をかはせる男のあるによりて、いかでうこめかしこ、我をば思ひしにや、こいふ意にてこそ、我をごはいへるなれ、古へ人の文は、今の人のごとく、みだりにはかゝざりし事なれば、かやうのとも、なほざりに見べきにあらず、

わが見すてゝむ後をさへなん同　此わがは、女の我也、これも人の手にうつる意をふくめたる所なる故に、わがこはいふ也、さて見すてこいふも、俗言にいふこは、心ばへとにして、これはうしろみするとをすてゝ、やむるをいふ也、上下の詞を、よく思ひ合せてしるべし、

かゞやかしからず同　馬頭が方より、とかくいふに、その返事の、おだやかにおこなしきをいふ也、傍注かなはず、

のどかに思ひならば同　方々へうつす心をやめて、しづかにおちつくをいふ也、

つなびきて同　たみ詞に、引はりあふ体也こいへる、よろし、

さばかりにて有ぬべく同　其上へをくはへずとも、そのまゝにてたりなんこ也、

げにそのたつた姫の云々同　これは其女のやうを聞て、げにその女にしくものはあらじこ、女のすべてのうへをほめたる詞

なり、たゞ物染るかたのみをほめたるにはあらず、にしきこいへるはたゞ、しく物こいはんための縁のみにて、その錦をいはんこて、上の語によりて、女を立田姫こはいへるなり、

はかなき花もみぢこいふも云々同　いふもは、いへごもの意か、又はかなき物にいふ花紅葉もこいふ意にも有べし、さてこれは、本妻こもさだむべき女は、大かた何事も、たらはではあしかるべきよしにていへるにて、はかなき花紅葉だに云云なれば、まして妻こすべき女は、何事もたらはではこいふ意也、然るを上に立田姫の錦こいひ、こゝにもをりふしの色あひこあるになづみて、たゞ物染ること、心得たる注は、誤也、をりふしの色あひこは、花紅葉は、もはら色をめづる物なる故にいへるにこそあれ、人の物染る色の、くらべ物にいへるにはあらず、こゝは上に、はかなきあだ事をも、まとの大事をも云々こいふより、そのかたもぐしてこいふまでを、すべてうけて、花紅葉をくらべ物にいへる也、これをたゞ物染る事のみのくらべ物こしては、次の語に、さるにより、かたき世ごこは云々こいへると、似つかはしからず、物染るとのつたなからんばかりをば、かくはいふべきにあらず、女の身のうへの、すべての事こしてこそ、次の此語もよくかなへれ、又たみ詞の、此あたりの説も、ひがと也、

さるにより同　此上ミに、まして妻こもすべき女は、大かた何事もたらはではかなはず、こいふ意を、ふくめたる物也、上の詞に、その立田姫の錦に云々こ、かの女をほめて、花紅葉のくらべ物をいへるにて、そのふくめたる意は聞ゆる也、さてそのふくめたる意をうけて、さるによりこいふ也、

かたき世ごこは云々同　妻こすべき女は、何事もたらはでは、あしかるべきわざなるによりて、さやうの女は、有がたき世ノ中にて、定めかねたりこ也、此所湖月又たみ詞など、すべての意を誤れるによりて、ひがこと多し、かの女の、早くうせて、契のみじかゝりしとを、難こしていへるはたがへり、又或注に、嫉妬の深かりしを、難こしていへるも、たがへり、こゝはかの女の事は、もはらほめたる所にて、難の方をいへる所にはあらず、定めかねたりこいふは、かの女のごく、大かた何事もたらひたるは、有がたき世中なる故に、定めかねたるよし也、次の詞に、いひはやし玉ふこあるを以て、か

の女をば、もはらほめたるにて、雛の方をいへるにはあらざることをしるべし、さて又湖月に、世は定めがたき物ぞとゝいへるも、いみしきひがこと也、定めがたきは、女の事にこそあれ、世の事にはあらず、つひのよるべとも定むべき女は、有がたき世中なる故に、定めがたき也、

ゆゑありと見えぬべく廿二のひら　人の見んに、まことにゆゑある女と見ゆべきさまなりしと也、

見きゝわたり侍き同　見は、よみたる哥、手かきたるなどを見る事、聞は、琴をひきたるを聞也、これらのわざ、たどたどしからざるさまに、馬頭が見聞て、年月をわたりこしといふ也、

まかりかよひし同　たみ詞に、大内よりといへるは、いみしきひがこと也、物語のころの、まかりといふ言の、つかひざまをわきまへざる注也、

このさがなものを同　すべてかのといふべきを、このといへること多し、心得おくべし、哥にこれやこのとよめるも、皆これやかの也、

うちとけたるかたにて同　心やすき所にして也、傍注に、本臺といへるはいかゞ、

時々かくろへ同　木枯ノ女を也、

すこしまばゆく同　うるさく思はるゝ心ばへ也、たみ詞に、はづかしく思はるゝ也といへるは、たがへり、

この人のいふやう云々心ぐるしきこと同　これは馬頭が、木枯ノ女の家に立よらむと思ひて、殿上人にいふ語也、然るを昔より、これを殿上人の語と心得たるはいかゞ、さては此所聞えがたし、されば、この人のいふやうとあるは、もとこの人にと有けんを、殿上人の語と心得たる人の、にをのに改めたるか、はたのと誤りたるから、殿上人の語と心得たるにも有べし、もしこれを殿上人の語とする時は、下に、もとよりさる心をかはせるにや有けむ、といへるとたがへり、其故は、待ッやどのあると、初メにいひたらんには、心かはせるは、もとよりの事なれば、にや有けむなど、疑ふべくもあらず、そのうへこれ殿上人の語にては、とてといふ辞も、下にかゝる所なし、おのれもさきには、殿上人の語と心得て、

此とての下に、そなたざまに物するに、なごいふ詞の、落たるかと思へりしを、なほよく考ふれば、とにかくに殿上人の語にては、かなはず、馬ノ頭が語にて、とては、下の下り侍りぬかしこいふへかゝれる辞也、殿上人に云々こいひて、車よりおるゝ也、されば此語は、さすがにてこいふ下へうつして心得べし、

此女の家はた云々同　はたは、も又也、大納言の家にゆくに、此女の家も又かならず通る道なればと也、大納言の家にとまらんこするに、此女の家はた云々、とつゞく語のはこび也、

おり侍りぬかし同　馬頭車よりおるゝ也、もし上のこよひ云々の語を、殿上人の語とはして、とてを、こゝへかけて、殿上人のおるゝにしては、上よりのつゞきかなはず、

しらべとゝのへたりけるを廿三のひら　かねてよく調子をあはせおきたるを也、もしこれを、今ひくとゝしては、下のかきあはせたりしこいふと、重なり、又とゝのへこいふ言もいかゞ也、

いまめきたる物のこゑ同　帚花よろし、管絃も云々は、ひがこ也、

ねたます同　ねたましむる也、総角ノ巻に、なべてやはなど、ねたまし聞ゆれば、蜻蛉ノ巻に、などかくねたましがほに、かきならし給ふこのたまふに、なごも有、さて物語に、ねたしこいふ言は、すべてつねにいふごく、深く妬忌む意にはあらず、たゞ時にのぞみて、かろく思ふ事にいへり、たとへば人の我にむかひて、いふとする事なごにふれて、その時にあたりて、そをくちをしなご思ふやうの意にて、こゝも、ふみ分たる跡もなしこいはるゝを、くちをしと思ふが、ねたく思ふ也、さてねたますとは、さやうにねたく思はするをいふ也、

きゝはやすべき人同　殿上人みづからの事也、

こがらしに云々同　此殿上人を、こよひとまるべく、引とめん詞もなしこなり、木枯に、とゞむべき葉もなしこいふ、詞のしたて也、

まばゆき廿四のひら　上なるに同じ意也、

さるべきこころにて同　しかして有べき所として也、

御心のまゝに同　御心のまゝに、女のなびきしたがふ也、細流に、御心のまゝならばとあるはたがへり、

いづかたにつけても廿五のひら　いづれにしても也、

しれもの、物がたり同　我身のうへに有し事を、卑下して、かくはいへる也、細流に、夕皃上の事也、かの性、おろかにて、癡なる方ある人也とあるは、違へり、

もてつけたらむ有さまに見えて同　心には恨めしく思ひながら、つゝしみて、その色を顯はさゞるやうに、おしはからる、也、さる故に心ぐるしき也、朝夕には、いつも〳〵の意也、朝夕に馴たるやうに也といふ注は、みだり也、

ことなる事もなかりきや廿六のひら　源氏君の、ゆかしげにとひ玉ふにつけて、いなとよ、さして語り申すべきほどのともなかりしよと也、たみ詞の注、わろし、

虫の音にきほへる同　虫のなくにおとらずきほひて物思ふけしき也、湖月に、きほひもよほさるゝさま也といへるは、たがへり、

やまとなでしこをば云々同　宗祇注に、玉かづらは、我御子なれば、さしおきて、といへるはひがと也、其意はなし、たゞ子をばさしおきて也、

卄「うちはらふ云々同　「點、例のひがと也、

あはれと思ひしほどに廿七のひら　あはれと思ひし女なりしかばの意也、

あはれたえざりしも同　たえざりしもといふと、おだやかならず聞ゆれど、然らず、上の文に見えたる如く、かくれうせて後までも、あはれと思ふと、たえざりしよし也、下に今やう〳〵忘れゆくきはに、とあるをも思ふべし、

やくなきかた思ひ同　此かた思ひは、心得あり、實に片思ひなるによりていふにはあらず、これは、我をば深く恨みて、かくれうせぬるほどの女を、此方には、なほ絶ずあはれと思ふは、これも片思ひといふ物なりけりと、一種の片思ひにつくり

ていへる詞也、次の言に、かれはたえしも云々、とあるをもて、實に片思ひといふにはあらざることをしるべし、
えたもつまじく　たもつは、男の女をたもつ也、上に、さてたもたるゝ女のためもと有がごとし、或抄に、夕皃の性、堪忍の性を、えたもたぬ人也といへるは、ひがこと也、
さればかのさがなものも云々わびしかりぬべけれ　これより、又馬頭が語といふ說と、中將の語といふ說と、いづれもすてがたきところ有てさだめがたきを、たゞ詞に、賀茂ノ翁のいはく、これより、下の皆わらひ玉ひぬといふまでは、まづ馬頭のいふよりはじめて、中將の詞も有り、上には、問と答へを分て書、こゝにては、二人の語を、ひとつに書たる物也、さて皆わらひ玉ひぬといふにいたりては、源氏をもかねたり、とある說よろし、それにとりて、なほ二人の語を、分ていはんには、さればかのといふより、ありなんやといふまでは、馬頭也、其故は、中將の語には、馬頭に對ひて、かの女を、さがなものとはいふまじく、わすれがたけれどゝいふも、人のことゝは聞えざれば也、有なんやのやは、よの意也、次に琴の音云々より、うたがひそふべければといふまでは、中將の語ときこえたり、すゝめりけんは、馬頭が物語をきゝていへるやうに聞え、この心もとなきもといふは、おのがうへの事をいふやうに聞ゆれば也、さていづれとつひにといふよりは、馬頭ともすべけれど、上より詞つゞきたれば、猶中將の語なるべく、このさまぐ\のといふよりぞ、馬頭なるべき、されどこれもなほ中將とせむもあしからじ、
この心もとなきも　このとは、今みづから語りつる、夕顏ノ上をさしていへり、心もとなきとは、恨みいふべきをも、忍びていはざるは、その心のほどのしりがたきをいふ、さてこのといふは、夕皃上をさしたる言なれども、心もとなきも云云は、ひろくいへるにて、此夕顏ノ上のやうにといふ意也、
うたがひそふべければ　或抄に、別人に心をかはしやすることの疑ひ也といへり、
世ノ中や　やはよ。の意也、
くらべぐるし　これをとりて見ても、かれをとりて見ても、とにかくに難ありて、思ふにかなひがたき意也、

吉祥天女廿八のひら　靈異記に、聖武天皇の御世に、信濃ノ國のうばそくが、和泉ノ國の血停(チヌ)の上山寺なる、吉祥天女の像に、深く思ひをかけて、云々せし事見ゆ、又狹衣の物語に、まだかゝることはなかりつる物を、いかばかりなる吉じやう天女ならむ、

ほうげづき同　濱松ノ中納言の物語に、にび色かうぞめなど、あまたかさねて、うちやつれ給へる、いろ〳〵にしやうぞきたらんよりも、なまめかしく、さまかはり、ほげづき、たふとげになりて云々、

何事をとり申さん同　とりは、御けしきとるなどのとるにて、俗言に、何事を御意(ギョイ)に入れませうぞといふ意也、傍注たがへり、

ざえのきは同　ざえは、才の字の音なれども、物語にいへるはいづれも、才智の意にはあらず、俗(ヨ)に學問のある學問のなきなどいふ、學問の事也、きはゝ分際にて、學問のほどゝいはんがどし、

いときよげに廿九のひら　假字をまじへずして、眞名のみに書るをいふ也、

さいし同　妻子にて、こゝはたゞ妻の事をいへり、古今集の哥に、「世ノ中をいとふ山べの草木とや云々、とよめるも、卯ノ花は木なるを、草木といへると、同じ類の言也、たゞ詞に、しはそへていふ詞也といへるは心得ず、

なまわろならん同　なまは、上になま人わろくと有ルなまに同じ、わろは、わろびれたるふるまひ也、

はかなしくちをしと云々侍るめれば同　此下へ、女はさのみ學問などは、なくてもありぬべきものぞ、といふ意をふくめたる語也、そは上に、はか〴〵しくした、かなる御うしろみは、何にかはせさせ給はんといへるにて、然聞ゆ、

をのこしらなんしさいなき物に侍める同　子細なきといふを、心得がたきを、上よりのつゞきの趣をもて、よく考るに、何の一ふしもなきよしにて、こゝは學問などなきをいふ也、さてすべての意は、世ノ中には、男にてすら、學問なき者は侍る也といへるにて、まして女は、學問なくとも、なてふとかあらんの意也、諸說みな、子細といふに泥(ナヅ)みて、大かたの意にかなはず、

はなのわたりをこめきて〔詞〕俳優めきたる顔をして也、西宮記に、右近衛内ノ藏富繼長尾ノ末繼、善ク散樂ヲ、令ムル人ヲ大ニ咲ハ、嗚呼ノ者也、注に、をかしきをこらへたるさま也といへるは、ひがこと也、こもじを濁るもわろし、

ふびやう〔廿のひら〕腹病風病二說のうち、風病のかたよろしかるべし、春記に、長曆四年四月十四日云々、今日始メテ服ス韮草ヲ依テ也風病ニ也とあり、さてふびやう、ごくねちのさうやく、ざうじらなど、女のいふべき詞にあらざるを、此女はすべて、せうそこ文にも、かんなといふものかきまぜず、といへるたぐひにて、つねの物いひも、こは〳〵しくさかしだちたるさまを、ことさらにかく書る也、此物語すべて、ほうしの詞儒者の詞など、おの〳〵その心ばへを書り、心をつくべし、

なにごとかはいはれ侍らむ〔詞〕蒜を服したる事の、いとうたて心づきなく思はれて、何ともいらふべき詞もなき也、

おひて〔詞〕追てにて、跡より、人に追かけさせて、此哥をやる也、たみ詞に、此女おひ出てといへるは、ひがこと也、おひてとは、みづからならでも、跡より物するをいふ例なるをや、

おいらかに云々〔詞〕俗言に、じんじやうにといふに、よくあたれり、さやうのむくつけき女とそはむよりは、じんじやうに鬼とそひゐたるこそまさらめといふ也、注に、まめやかにとも、まことにともある、みなあたらぬこと也、じんじやうに腹きるなど常にいふ類、おいらかにといふにあたれる詞也、

あはめ〔廿二のひら〕河海に、淡アハメとあるよろし、淡アハしとするにて、うとみにくむをいふ詞也、はを濁りて、拒也といひ、又いさめにくむやうの心などいへるは、ひがこと也、たみ詞の、發アバクといふ說も、いとわろし、

これよりめづらしき事は云々〔詞〕これも、をこめきていふ詞也、

むげにしらずいたらずしもあらん〔詞〕學問のすぢを也、

すこしもかどあらむ〔詞〕人のみ、にもめにも云々　かどあらんにて切ルべし、たてゝ學問とてはせねども、すこしもかどあらん女は、世の人の耳にとまる詞、めにとまるしわざは、おのづからおほかるべきことにて、めづらしからねば、それに高ぶりほこるべきことにはあらずとの意也、かどあらん人のと、つゞけて見るはわろし、かどあらんは、其女の事にて、人

は世の人なり、

哥よむと思へる人の同 我と哥よみ也と、心に思ひほこれる人也、さて細流に、哥よむべき人の敎也とあるは、たがへり、これは哥の事をいふにはあらず、消息文の事をいへるなれば、消息文の敎とはいひもすべし、

やがて哥にまつはれ同 我は哥よみぞと、思ひほこれる人の、せうそこぶみかくには、かゝるとの、よくある物なるを、よからぬ事にいふ也、やがてとは、哥よみ也と思ひ居る心にて、そのまゝ消息文も哥にまつはるゝ也、

よみかけたるこそ廿二のひら 消息文に、哥をよみてやる也、

ものしき事なれ同 かやうには有ルまじきとをと、人を恨むる意にいふ詞也、此詞巻々に多し、皆其意也、たみ詞に、物らしき也といへるは、あたらぬと也、

さるべき節會など同 とはすなはち、次にいふ五月のせち、九日のえんのとを、まづいふ也、

なにのあやめも同 あやめとは、其日の縁の詞にていへる文也、

ねをひきかけ同 菖蒲の根の事を、ふしにしたる哥をよみおこする也、引かけとは、あやめの根の縁の詞にていへる文也、

かたき詩のこゝろを同 かたきとは、すべて詩を作るを、むつかしきわざとしていへる也、難題と見るは、わろかめり、

つきなきいとなみにあはせ同 あはせの意、拾遺のごとし、俗言に、じゆつないめにあはするといふと也、さてこれは、五月のせちに云々九日のえんに云々を、合せていへるにて、いとゞ參內せんとするをり、かたき詩を案ずるをりなどにて、他へは心はちらしかだきに、それに似つかぬいとなみをせさする也、いとなみは、返哥を按ずるをいふ也、

さならでもおのづから云々同 さならでもとは、かならず其日ならずとも、其日過て、しづかになりて後に、よみおこせたりとも、よかるべき物をの意也、おのづからとは、まづ菖蒲の根は、五日、菊の露は、九日ぞ其時節にてはあれども、よしや其日は過て後なりとも、おのづからおかしからんの意にていへり、

げに後に思へば同 其哥を後に見て思へば也、げにとは、其哥に同心していふ也、さてとは、後に思へばげにと、うちか

へして心得べし、さて又此所の語、さならでもおのづからと、後に思へばとは、二つに分ていへるにて、後に思へばさならでもといふ意にはあらず、かくてそのさならでもおのづからと、後に思へばとの二つを合せて、おかしくも云々ともつゞき、又さならでもおのづからおかしくも云々ともつゞく意也、すべてかやうのこゝろ、言のいひざま、てにをはなどを、こまかにわきまへて、すべての語の意を心得べし、よくせずはまぎれぬべし、

なごかはさても詞　なごかはかゝることはせん、さてもあれかしといふ意なり、さてもあれかしとは、そのまゝにてもあれかしにて、俗言に、物をせずしてやむを、まゝにするといふ是也、哥などをもよみてやらず、何ともせずしてあれといふ意也、注誤也、

これはたらず云々詞　これはたらずとおぼゆる事もなく、又さし過云々などいはでは、これはといふ言いかゞ、一本に、これにと有り、うちきくにはいかゞなるやうなれども、にとあるかたまされるにや、これとは、今馬ノ頭の論に、よろしとして願ふこゝろをさしていふ、されば、此論によろしとするこゝろに、たらざる事もなく、過たる事もなしと也、なほよくかむかふべし、

さかしれいもいみ玉ふかたなりけり卅三のひら　これは又一人が申す詞にて、下のいとあしき事也、といふへつゞけるを、源氏君の語を、そゝ中間にはさみたる物也、二條院にもといふよりは、源氏君の詞也、

げによろしきおまし所にも卅四のひら　弄花に、紀伊守が詞とあるよろし、たはぶれていふ也、おまし所とは、その木丁のうしろにとの給へるにつきていへる也、

わたどのより出たるいづみ卅五のひら　渡殿の下をとほりて、庭へ流れ出る泉也、

思ひあがれるけしきに云々詞　空蟬は、今は伊豫ノ介が妻なるに、むすめといへるは、いかゞなるやうなれども、これは思ひあがれるやうにきゝ玉ひしは、人のむすめにて有しほどのことなれば、たがへることなし、いよの介がむすめの事かとも思へ

ご、さにはあらじ、

やをら同 拾遺の說のごとし、俗言に、そつと、いふと也、

もや廿六のひら 身屋也、身を、古へはむといへる例多し、さてむともとは、殊にちかく通ふ音にて、も屋といひなせるを、母ノ字を借りて、母屋とも書る、そは母をおもといふ故に、借りて書るのみ也、おも屋の義也といふ說はわろし、さて身屋とは、屋の內の眞中に在て、主ある所なるよしの名也、俗言にも、物の眞中を、身といふに同じ、

ほゝゆがめて同 ほゝの意は、いまだ思ひえざれども、ゆがむとにて、かの哥などを、正しくもあらず、誤りまじりに語る也、河海をはじめ、細流孟津などに、ほゝを、方の意に注せられたるはひがと也、又拾遺に、頰也として、顔をかたぶくれば、頰のゆがむ也といへるも、いかゞ也、枕册子を引たれど、かれも頰の意にはあらじか、此詞、たとひ本は頰のゆがむより出たるにもあれ、かならずしも頰のゆがむをいへるにはあらじ、こゝも、物へだてゝ聞玉ふなれば、その頰のゆがめるは、見ゆべくもあらず、

さるかたのこゝろもとなくては同 さるかたのまうけもあれかしと、ねがひてまたるゝに、其まうけのなきを、心もとなしといふ也、湖月本、心もなくてはとあるは、おこれり、さてかくのたまふは、皆たはぶれ也、

何よけんこもえうけ給はらずとかしこまりて同 さるべき女あるべきとも覺えぬの心也といへる注は、わろし、其意はなし、たゞ催馬樂の詞にて答へたるのみにて、いかにしてよく侍らんえ思ひより侍らずと申せる意也、うけ給はらずは、え承諾し奉らず也、湖月本に、うけ給はらずとのともじなきはわろし、

殿上のほどに同 殿上してあるを、殿上のあたりにて、といふほどの意也、

伊豫ノ介同 上にいよの守ノ朝臣とあるによりて、花鳥に、守なるを、通はして介といへる也、と注せられたるは、たがへり、實には介なるを、上には守といへる也、すべて介を守といふは、つねのとなるを、守を介といへるとはなし、須磨卷に、太宰ノ大貳を、帥とあるも、次官を長官といへる例にこそあれ、又常陸ノ介を、常陸ノ守とあるも同じ、

さりこもまうこたちの云々廿七のひら　紀の守などは、いかにつき〴〵しくいまめきて、のぞむこも、空蟬をゆるして、あはせじを、伊豫ノ介は、得て妻にしたるは、けしきばみよしある男ぞよこ、たはぶれての給ふ也、注、よし有てけしきばめるこいふにかなはず、又上文よりのうつりも、よろしからず、ひがこと也、

みな下屋に云々廿八のひら　實に下屋におろしたるにはあらず、源氏君のわたり給へるに、女どもを、然るべき所におくは、憚ある故に、かく申すのみ也、さる故に、えやまかりおりあへざらんこいへり、下屋へおるべく申シ付侍りしかども、俄の事に侍ればいまだえおりあへ侍らずやあらんこ申す也、

「いたづらぶし同　「點ひがこと也、

ねたう同　心こゞめても云々同　或抄に、心こゞめてもこひきかぬがねたき也、

なまわづらはしけれご廿九のひら　おしやるこいふまでへかゝれる詞也、までこいふへはかゝらず、

やこおびゆれご同　萬水一露に、やは、おびえたる聲なるべし、

こゝに人こも同　こゝに誰にかあらん人の來つるこも、えよばゝらぬ也、

あさましく四十のひら　空蟬の心也、詞にあらず、人たがへより詞也、

やゝこのたまふに同　曉に御むかへに物せよ、こいはんこて、かくよびかけ給へるなるべし、然らざれば、此言よしなし、

それだに人の云々同　たゞひなみ〳〵の人ならんにても、あらゝかにして、あまたの人のしらんは、よきことにもあらじを、ましてこれはの意也、

おぼしくたし四十一のひら　朽(クタ)し也、下しにあらず、

きはゝきはここそ同　かやうに夫ある女は、夫ある女こ、そのきはをたつるとにてこそ侍れこいふ也、

さるべきにや同　かやうに深く思ひて、あるまじきふるまひをし侍るも、然るべき前世の因縁にやこ也、

あはめられ同　淡(アハ)められ也、阻こいふ注は、ひがこと也、

見ざらましかば云々四十二のひら　既に實事有しうへ也、さてかく逢見たる事は、空蟬のためには、心ぐるしけれども、逢見ずは、くちをしき事ならんとおぼす也、注たがへり、

なぐさめがたく同　空蟬の心也、源氏君に逢奉りし事の、かなしきを、思ひなぐさめんとすれども、なぐさめがたくうしと思ふ也、源氏君のなぐさめ給へども、といふやうに心得たるは、たがへり、

世を思ひしらぬやうに同　世をしるは、男女のかたらひをしること也、思ひしらぬといふも、たどしらぬといふに同じ、

見なほし給ふのちせもやとも云々同　こよひこそかく、心なきものに思はれ奉るとも、後には又、さもあらずと、見直し給ふやうもあらむかと思ひて、わが心をなぐさむべきにといへる也、なぐさむるは、源氏君に、なさけなきものに思はるゝがかなしきを、なぐさむるなり、花鳥に、御心ざしおろかなりとも云々とあるは、聞えず、又河海に引れたる、「わかさなる云々の哥は、万葉四に、「かにかくに人はいふとも若狹路の後瀨の山の後もあはん君、といふ哥を、おぼえたがへ玉へるなるべし、

いとかうかりなるうきねのほどを同　我は、夫のある身なれば、二たびと逢見奉るべきにあらざれば、こよひかくわりなく、一度逢奉りしは、たゞかりそめのうきたる契といふ也、空蟬の心、始終かくのごとし、拾遺集戀二、「かた岸の松のうきねと忍びしはされぱよつひに顯れにけり、宗祇注誤也、

さしはへてはいかでか御文なども云々四十三のひら　いかでかの下に、ともじ落たるか、本のまゝにては、語とゝのはず、其故は、いかでかといふ迄は、源氏君の心を、たゞにいへる語、御文といふよりは、地よりいふ語なれば、必その堺あるべければ也、

なまめきたり同　傍注ひがと也、

身のうさを同　身のうさとは、夫の定まれる身にて、源氏君に逢たるを、うきことに思ふ也、歎くにあかでは、歎きのあまり有て、いまだつきざる意也、とりかさねは、別れのかなしきに、身のうさを歎く思ひを重ぬる也、注に、いろ〳〵の心

を、こりあつめていへるは、上ノ語にかなはず、

こゝろあかくなれば同　こゝは、何事にふれ、其事を、こりたてゝ事とする意にて、こりたてゝあかくなる也、家持集といふ物にある哥に、「秋風はとく吹來ぬとあるも同じ、河海に、事と也とある、よろし、わざとがましき心也とあるは、たがへり、細流に、ことごとくとあるは、かなはず

かみよりの同十四のひら　かみは紙也、前にも見えたり、野分ノ卷にも有、皆同じ、是はあかり障子にて、うすき紙一重なれば、おのづから破れそゝけたるところ、穴などのあるより見ゆる也、上といふ説はわろし、小障子といへども、上よりあなたの見ゆるばかりひきゝ障子は、有べくもあらず、たとひ有とも、上より見むには、あなたよりも、よく見ゆべければ、ひそかにはいかでか見ん、

ひかりをさまれる物から云々同　ひかりは、月のあかり也、をさまるは、きゆるなり、影は、地にもあれ物にもあれ、あたりて見ゆる月の影也、有明のさま、まことにこゝにいへるごとくなるもの也、

何心なきそらの云々同　空には、差別する心はなけれども也、

なほいとかきたえて同　なほは、あるまじき事とはおぼしながら猶也、

姉なる人にのたまひ見む同十五のひら　みづからいふことを、のたまふとは、これは源氏君の仰せを傳ふることなる故にいふか、又たゞ敬ひたる詞にても有べし、今ノ世にも、敬ひていふ詞には、おのが方にも、御といふ言を添るたぐひならむか、

けしうは侍らざるべし同　すべてけしうはあらずといふは、わろくはあらずといふ意也、よしといふ意也といへるは、たがへり、

世のたとひにて同　河海に、白氏文集を引れたるは、さることなれども、これはかならずしも、かの本文をさしていへるにはあらず、たゞ世ノ中にいひならはしたることを、世のたとひとはいふ也、

涙もいできぬ同　もといへるは、源氏君の御文を持て、小君が出來たるにあはせて涙もなり、

目あさへあはでぞ 思ひにてねられぬ也、注に、涙にあもあはねばといへるは心得ず、さへとは、夢のあはざるうへに、めさへあはずといへる詞也、あふといふは、夢の縁の言也、

こゝろえぬすくせ 受領の妻になれるばかりの、うき身なるに、又源氏君のごとくなる、すぐれたる御方に、かやうに思はれ奉ることは、心得がたきすくせの添ること也、

つゝしやうしよる心は 空蟬に心をかけし也、

ふつゝかなる 太(ふと)つかといふことにて、物の太(ふと)く丈夫なる意也、注に、げすしき心也といへるは、後に轉じたる意にて、こゝにはかなはず、

いとつきなかるべく 受領の妻と定まれる身にて、高貴の源氏君などへ、御返事などせんは、似つかはしからずと也、好色風流はといへる注は、たがへり、

げになべてにやはと げには、よの中の人のめで聞ゆるもげに也、

思へりしけしきは 源氏君に逢奉りし事を、かけてもあるまじきことゝ、いみしくうき事に思へりし、空蟬の、其時のけしきなり、注に、源氏の思はぬにはあらざりしなるべしといへるは、こゝにはかなはず、

にはかにまかで給ふまねして にはかには、おはしましたりへかゝれり、俄にまかで玉ふといふにはあらず、まねしては、忌の方をたがへにゆくまねをして也、

やり水のあはひにくと 源氏君の、此家に、はじめにおはしましたりしも、水せきいれて、すゞしき陰に侍ると、人の申せしによりてなれば、又此度おはしましたるも、此やり水の面目といへる也、

人げなき有さま 注、一説とあるは、ひがこと也、

まばゆけれど 人げなきさまにて、源氏君に見え奉らんが、はづかしくてまばゆき也、注に、人のおもはくはづかしければといへるは、いたくたがへり、

つぼねしたるかくれに同　かくれとは、かくれたる所をいふか、又思ふに、つぼねしたるにかくれにて、かくれむためにといふ意なるを、後の人、にもじの重なれるを、いかゞと思ひて、上なるをば、さかしらに除きたるか、

ほどしらぬやうに四十九ウ八行　源氏君の、御心ざし御身のほどを、しらぬやうになり、

ふようなるよしを同　事かなはざるよし也、注に、不用不要などの字を出して、其字の意に解れたるは、みなかなはず、字はさも有べけれど、意は然らず、又不豫と書れたるは、殊にわろし、

同かずならぬ云々五十ウ八行　上ノ句は、受領の妻と定まれる、賤き名のうきに也、此人の心、始終かくのごとし、上の文に、身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば云々、いとかくしな定まりぬる身のおぼえならで云々、などある意也、注ども にたゞ、よ𛀁が定まりたる身なれば、とのみいへるはかなはず、下ノ句は、あるにもあられず、思ひきゆるよし也、さて四の句も、きゆるも、帚木の縁の言也、

すさましく同　不興におぼす也、あぢきなくといふ注は、かなはず、

かしこげにと聞ゆ同　所のさま、むさ／＼として、人共もあまたつどひゐて侍ればさる所へ入れ奉らむは、あまりおそれ多きよし申せるにて、所のさまの、源氏君へ恐れ有也、拾遺の說、中々にわろし、

おぼさるこそ同　細流に、こぞとは、紫式部、わが書たることを、しらせじのため也とあるは、たがへり、しらせじとてにはあらず、たゞことさらにおぼめきたる詞にて、かやうに語り傳へたりと、昔物語になしたる詞也、

空蟬卷

おぼしこりにけるとこの巻　るは、りを寫し誤れるなるべし、すべて後の世の人は、古へ詞づかひの、定まり有しとをえしらずして、けりといふも、けるといふも、たゞ同じことゝ心得たるから、なほざりにして、りとるとを、たがひに寫し誤れるとおぼし、心すべし、

はうぞくなる同　傍側俺足など注あれど、いかゞ、拾遺に、放俗の字をあてたれど、これもいかゞ、すべてかやうの字

音の詞は、その意によりては、字は當(アテ)がたき物也、字は字にて、意はあらぬさまにも轉し用ふるものなれば也、

すこしなおくれたい おなひら　注ごもに、軒端ノ荻のことゝせられたるはいかゞ、下へつゞきて、これも空蟬のことなるべし、次なる文に、軒端荻をば、此まされる人とあるをも思ふべし、

たとしへなく同　軒端荻の、はうぞくなんもてなしとは、いたく異にして、たとへがたきよし也、

めすこしはれたる同　腫たる也、晴たるにあらず、

ねびれて同　あざやかなるところなうといひ、にほはしき所も見えずといへるぞ、すなはち此詞の注の如くなる、草木の萎(ナエ)しぼみたるやうのさま也、湖月師説ひがこと也、

しづまりぬなり おなひら　細流に、源氏の詞也とあるは、たがへり、地の詞也、いりてといふより、源氏君の詞也、

さかし同　さやうぞかし也、かうしには木丁をへて侍と申せると也、注に、さもあらんと也といへるは、意たがへり、

たゝみひろげ　ふす おなひら　屏風を、かたはらへたゝみよせて、ふすところを廣くよる也、又ひろげてには、風の吹とほすべき道を、廣くする意にても有べし、人ある方にたつる也といふ傍注は、ひがこと也、たゞ源氏君の入玉ふべき道をあけんため也、拾遺に、たゝみひろげにふすと有けむを、ひろげてと寫し誤れるかとて、そのいはれをいへれどいかゞ、下に、屏風をひろげてといへるを、重疊也といへれど、然らず、たゝみよせたるかの屏風を、火あかき方に引ひろぐる也、

夢のやうなることを同　此なもじ、下につけたる詞なくていかゞ、のとあるべき語なるをや、

身じき おなひら　退の字は、こゝにあたらず、ひがこと也、

なほ〳〵しく おなひら　すぐめにかぎらず、たまふ也、とある注にかなはず、花鳥に、よのつねのなほざりにかたらふ心なるべし、とあるぞよろしき、すべて此詞は、俗言に、なんの事もない、なんでもないといふ意也、

ぬぎすべしたいと見ゆるうすぎぬを おなひら　一本に、かくあるぞよろしき、ぬぎすべしたるとは、源氏君は、たしかには知(リ)玉ふまじければ、と見ゆるといふ詞あるべければ也、拾遺に、日本紀の垂髪于背(スベシモトドリ)を引て、ぬぎたれたるといふ心也、と

いへるは、垂ノ字になづめるひがこと也、衣をぬぎすべよといふに、いかでかたるゝ意はあらむ、

あらずこゝもとへ同　あらずは、俗言に、いや何事でもないといふ意也、

けしうはあらぬおもとの云々同　わろくはあらぬたけだちかなと背長の高きを、たはぶれていへる言也、傍注ひがこと也、

うへにやさぶらひ玉ひつる同　或抄に、うへとは、主人のおはします所をさしていふ也、といへるよろし、傍注に、妻女をあがめていふ詞也といへるは、たがへり、こゝは妻女をうへといふとはこと也、次の文に、しもに侍つるといへる、下と對へて心得べし、下は下屋也、

「またしる人も十二のひら　「點ひがこと也、

哥うつせみの云々　此哥の事、拾遺に、伊勢集古本には有けるにや、今考るに、あることなし、「うつせみを思ふに聲のたたさらば又衣手に露やおきなん、此哥のみ有、」古人おぼえ損じけるか、といへり、今思ふに、此哥伊勢集に有とは、河海に見えたり、後の注どもは、そのもとをば尋ねたゞさずして、たゞ河海によりていへれば、伊勢集にあるよしいへるも、とりがたし、さて河海は、古哥をおぼえたがへて引れたるたぐひなど、いと多かれば、これもおぼえたがへにこそ有けめ、此哥もしかの集の古本には有しかとも思はるれど、此物語の例は、古哥を今の哥にして入れたることなければ、河海に、他の物語のさる例どもをあげられたるは、よりがたし、又これは空蟬の贈答にはあらず、此時に相應したれば、伊勢集の古哥を、御たゝう紙のはしに書そへたる也といへる注も、とりがたし、此哥をあげたるやう、たゞ空蟬のあらたによめるさまにこそ聞えたれ、すべて此物がたりのやう、しか古哥を、全く一首あげたるやうの例は、なきことなるをや、

夕顔巻

むね〳〵しからぬ三のひら　たしかにそれともなきさまにて、はかなきをいふ、俗言にしかともせぬといふ意也、注ども、棟ノ字にかゝりていへる、みなかなはず、棟も宗も、言の本は一つなるべけれど、これらの字によりて解べき詞にあらず、

されたる同　俗言に、しやれたるといふと同言也、注ども皆たがへり、さすがにといへるにかなはず、又さすがにを、出來

たる童へかけてこけるもわろし、

枝もなさけなげなめる花を四のひら　夕顔の枝は蔓にて、おほごれはびこりたる物なれば、手よりたゞには奉りにくかるべきはごに、此扇にするゑて奉れこいふ也、

うらみのこるは五のひら　かやうのうらみは、俗言に、ざんねんなる事こいふ意也、

かたほ同　注みなひがこと也、まほこ反對したる詞にて、まほは、物のろくなること、かたほは、ろくにもあらぬこと也、さて言の本は、船の眞帆片帆より出たるかこも思へご、然にはあらじ、ほの意は別に有べし、

身もいたはしく同　我身も大切に思はるゝ也、

つきしろひめくはす同　詞にはいはで、肩膝なごを衝て、目くはしをするなりこ、或抄にいへるがごとし、

おしなべたらぬ人の御すくせ同　かくまで世にすぐれ給へる源氏君の御乳母こなれることは、なみ〳〵ならぬ宿業ぞこいふ也、注に源氏こ乳母の緣の淺からぬこいへるは、かなはず、

哥こゝろあてに云々六のひら　源氏君を、夕皃の花にたこへて、今夕露に色も光もそひて、いこめでたく見ゆる夕皃の花は、なみの人こは見えず、心あてに、源氏君かこ見奉りぬこ也、三四の句は、白露の、夕顔の花の光をそへたる也、露の光にはあらず、細流に、源氏こ推したるによりて、花の光もそひたるこ也こあるは、いみしきひがこと也、二の句のてにをはにかなはず、

やうめいのすけなる人の云々同　これより、惟光が源氏君に申す語にて、きかよふこいふまでは、やごもりが、惟光に語りしさまにて、こ申すは、やごもりがかやうに申せるこいふ也、

哥よりてこそ云々七のひら　細流に、此五もじ、をりてこそこいふ本ありこ見えたり、それもあしからず、さて哥の意、うちまかせては、注のごく聞えたるを、又思ふに、四の句、かなたより見たることならば、見けんなご有べきに、見つるこあるは、源氏君のみづから見玉へることのやうに聞ゆるは、もしは此哥にては、かの籬のすきかげに見えし女ごもをさして、

夕兒の花にたとへたるにもあらむか、詞はよみかけたる哥によりながら、たとへならば、こなたかなたうちかへして答るも、例あるとぞかし、但シ初二句のさまは、注のごとく見る方、まさりて聞ゆ、

御心ざしのこころ同　拾遺に、此詞にて、浅からず思ひ玉へることと見えたりといへるはいかゞ、これはかの御息所の御方へと、心ざしておはしますに、その道の間にて、大貳の乳母、又夕顔などのこころの事をいへる故に、御心ざしの所とはいへるにこそあれ、

げにわかき女どもの云々八のひら　げにには、かしづく人侍めりといふへかゝれり、上に、さ月のころほひより、物し給ふ人なん有、といへるをうけてげにとはいへる也、注たがへり、

まけてやみなんを九のひら　これは、まけてややみなんとゝ有けんを、やを一つ落し、とををに誤れるなるべし、本のまゝにては語とゝのはず、

かたつかたの人を同　此をも、かならずもの誤なるべし、

かたちなどねびたれど十のひら　すべてねびといふ言は、ひねびの、ひの畧かりたるなるべし、今ノ世の言にも、人の容を、ひねたりといふとあるなり、さかりになりとゝのひたるをいへるも、稚幼きけはひのうせて、ひねたるよしなるべし、

ゆげたはいくつと云々同　これはたゞ、伊與ノ國の事どもをとはむとおぼすよし也、必ス湯げたの事にはあらず、さてまばゆくおぼすは、空蟬の事ある故也、花鳥に、軒端ノ荻の碁うち侍し事を、おもひ出し玉へばまばゆくてとあるは、よしなし、

かの碁うちしこころに、いよのゆげたも云々とあるは、こゝにはさらにあづからぬことなるをや、

物まめやかなるおとなを云々同　實躰なる年ねびたる人をといふこと也、傍注に、源に忠節の翁なるをといへるは、たがへり、其意にはあらず、わかく風流なる人ならばこそ、まばゆくも思ふべきことなれ、伊與ノ介がやうなる翁を、かくまばゆくはづかしく思ふは、をこがましきことゝ、みづからおぼす也、げにとは、空蟬の、源氏君に逢奉ることを、似つかはしからぬ身と思ひて、つれなきを、ことわりとおぼせる詞也、

されどよそなりし云々十二のひら　上にいとほしかしといへるも、册子地よりいへる也、さてそれをうけて、いとほしきとなれども、源氏君は、さしもおぼさぬは、いかなるとにかと也、注に、今もなのめにはおぼしめさぬとはいひながらといへるは、なのめならんはいとほしかしといふを、源氏君の心と見たる、ひがと也、もし源氏君の心ならむには、いとほしとおぼすものから、よそなりし云々などいはでは、聞えぬとなり、

ねぶたげなるけしきに云々同　けしきにといへるに、心をつくべし、よもすがら、女の御心のとけざりし故に、とけてもね玉はぬけしきを、中将などにもしらさむために、ことさらに、ねぶたげなるけしきをし給ふ也、いたくそゝのかされ玉ひても、ねぶたきよしにもてなし給ふ也、名残をゝしみてといへる注は、かなはず、さて中将がふるまひは、此源氏君の御けしきを、いとほしく思ひ聞えて也、

さぶらひわらは十二のひら　細流の説よろしかめり、

わがゝなしと思ふむすめを同　注に、長恨哥の句を引たるは、さらによしなきと也、此事拾遺にもいへり、

あけくれうちとけてしも云々十三のひら　これは、此中将などが、然思ふべきものぞと、册子地よりいふ也、

惟光があづかりの同　夕顔の宿の事は、惟光に仰せつけて、まかせおき給へる故に、かくいふ也、俗言に、これ光がうけとりのといふに同じ、傍注は、無用のいひどなり、

なかや同　注に引る哥、万葉に長屋と有り、こゝも長屋なるべきか、

右近の君こそ同　こその事、拾遺にいへり、

いそぎくるものは十四のひら　花宴巻に、こなたざまにくるものか、明石巻に、月夜にいでゝ、行道するものは、紫式部日記に、雪はふるものか、などあり、これらを合せて思ふに、ものはともかと、一つにて、はとかとのうち、一方は寫し誤なるべし、さていづれ正しからむと思ふに、ものかの方正しかるべし、かくてこれは、其事にいきほひをあらせて、つよくいふ詞也、

其車をぞ見ましし同 ほかの散なん後ぞさかまし、といへると同じ格の詞也、おほくの本に、ぞもじなきは、落せる也、拾遺に、疑ひて、ましの下にをの字落たるかといへるは、よき心づき也、されど見ましをとても、なほよろしからず、一本にぞもじあるにて、いと明らか也、

わかきおもと同 夕顔也、

はかられまかりありく同 此下に、をもじあらまほし、

けさう人の云々十五のひら 人にけさうする者は、いかにも我身を物々しく見するとなるに、かく歩行にて、物げなきさまを見られんは、からきとゝ、たはふれて申す也、注に、源の方の人といふとをかくせばといへるは、ひがとなり、

人のけはひいとあさましく云々十六のひら あさましくとは、やはらかにおほどきたるとの、甚しきをいへる詞也、やはらかにおほどきたるをさしていふにはあらず、注たがへり、

さまをかへかほをも云々同 かくまでわりなく、忍びかくし給ふとは、いやしき小家に通ひ玉ふとを、ふかくつゝみ玉へば也、

さるべきにこそは十七のひら 或抄に、宿業にてこそあらめ也といへり、これも然るべき宿縁なるべければ、びんなかるべき事なりとも、よしやいかゞはせん、といふ意をこめたる詞也、

いさいと心やすき云々 傍注に、さの字清てよむべしといへるは、ひがと也、是はささふ言なれば、ざもじ濁るは論なし、すべていさのさの清濁の事、不知、又いさよふなどは、清也、ささふ詞のいざは、濁る也、此清濁は、古書の假字にて、いとよくわかれたるをや、

「なる神よりも十九のひら 「點ひがこと也、

されたるくれ竹同 花鳥に、上にされたるやり戸口といへるに同じ、とあるよろし、細流わろし、

きりぎりすだにまどほに云々廿のひら 壁の中になくは、屋の内なれば、間近きとなれに、それだに間遠に聞ならひ玉へるは、殿の廣くて、かべもやゝまどほき故也、然るに此やどは、狹き故に、庭になく虫どものこゑも、耳にさしあてゝ鳴やう

に、間近くおぼす也、細流ノ說は、だにといひ、間違といへるにかなはず、注あたらぬこと也、

心ばみたる同 俗言に、氣のあるといふ意と聞ゆ、夕兒ノ上は、おげに氣のなき人なれば也、

鳥のこゑなどはきこえで廿一のひら はもじなき本、又てもじを清とよむといへる、皆わろし、下にたゞおきなびたる聲に、ぬかづくぞ聞ゆるといへるにて、鳥の聲は、聞えざることしるきをや、

なもたうらいのだうし云々同 此禮する聲にて、みたけさうじぞと聞知ッ玉ふ也、といふ注はひがこと也、此ノ名を唱るを聞て、來世を祈ることを知ッ玉へるにこそあれ、

かやうのすぢなども云々同 かやうのすぢとは、哥よむことをいへり、心もとなきは、未熟なるよし也、さてかくいへるは、實に此哥のこゝろもとなきにはあらず、例の紫式部がひげ也、諸抄此意を得ず、ひがことなり、

いさよふ月に廿二のひら 入ッかたちかけれども、いまだいらで、しばしあるほどの月をいふ、出むとして、しばし出ざるをもいふ、同じ意也、さもじ清音也、さて女は思ひやすらひ、一本に、女もとあるぞまされる、いさよふ月にといへれば、女もやすらふといふべければ也、

まだかやうなる事を云々同 注に、又の義に云ッ云々は、かなはず、

哥山のはの云々廿二のひら 初二句は、源氏君のいかなる心にて、いづこへゐてゆき玉ふとゝもしらで、といふ意のたとへ、月は我身のたとへ也、細流に、山の端は、月をかくすべき所とはしらでとある、其意はなし、

けいめい同 河海に、經營とある是也、えをめといふは、三位をさんみ、陰陽をおんみやうといふ類也、敬命と書るは、ひがこと也、

しりはてぬ同 いよ〳〵たしかにしりたる也、

うちあはず同 うちあふは、物のとゝのほり、そろひたること也、

おきながゞは同 ながは長也、中にあらざること、いふもさら也、

いとけうとげになりにける所かな廿四のひら　これは下に源氏君の、のたまへる詞よりまがひて、寫し誤れるところ有べし、其故は、同じ語のつたなく重なれるうへに、こゝは地の詞なれば、かなゝどいふ言あるべき所にあらざれば也、さればもとは、いとけうとげにあれたり、などぞ有けんかし、

べちなう同　河海に、別に建たる屋也、別納にて、大饗おこなはれたるとおぼし、小寝殿也とあり、細流に、雜舍也とあるはいかゞ、

廿ひかりありと云々同　さきに光ありと見しは、そらめにてぞ有ける、今よく見れば、光はなきものをとよめる也、さるはあくまで光ありと見ながら、ことさらに逆ひて、かくそのうらをいふ也、此たぐひ今の世にもよくあること也、然るに花細流などの注は、此意を得かねて、光ありと見しはそらめぞといふとの、聞えざるから、初メの句をばすてゝ、しらずがほに、まぎらかしおかれたる物也、但し又の義とて、たそかれ時に見しは、そらめなり、今見れば、しかなほざりにいふべきかぎりにはあらず、よにすぐれ玉へりといふなるべし、然れどもなほ其意にはあらじ、又湖月師説は、何の用もなき注也、

げにうちとけ同　此げには、源氏君の哥に、夕露にひもとく花とよみ、露の光やいかにとのたまへるなどを、うけていへり、

なごりなくなりにたる御有さまにて廿五のひら　これは源氏君、みづからの御事をのたまへりと聞えたるに、御の字いかゞ、後に誤りて加へたるにや、

何心もなく云々廿六のひら　拾遺に、夕顔を、こゝには、なに心もなきさしむかひを、あはれとおぼすまゝにといへるは、とりすてたき意あるにあらず、此めやすきにくらべて、御息所の、あまり心ふかく、見るもくるしきまでなるを、とりすてたきと也、といへるよろし、注に、ゆづろへたきとも、たがひにとりすてたくともあるは、文にかなはず、

ここなるとなき人を同　ここにすぐれたるともなき人也、

われかのけしき廿七のひら　拾遺にいへるがごとし、

さいへど廿二のひら　俗言に、どういふても、なんぼいふてもといふと、同じ言なり、さはいへども同じ、必しも上にうくる事なくてもいふ詞也、

右近をそへてのすれば廿四のひら　此ノればといふ詞、下にかゝる所なし、いかゞ、

おほいとのゝ君たち参り給同　これすなはち内よりの御使に参り玉へる也、下にさらばさるよしをこそ奏し侍らめとあるにてしらる、

かしこくもとめ廿五のひら　或抄に、かたじけなく也といへるよろし、傍注はたがへり、

さらにことなく云々廿七のひら　さらには、のたまへどゝいふへかゝりて、あらためてのたまふよしなるべし、ことなくは、難なくにて、故障なくといふ意也、孟津又湖月の一説、ともにわろし、

なにかことゞ〳〵しく云々同　葬のほどの事を、源氏君のおぼつかなくおぼしめして、事なくしなせなど、あらためてのたまふ故に、何かはさやうにおぼつかなくはおぼすべき、ことゞ〳〵しくし侍るべきにもあらざれば心やすしと申す也、注たがへり、

たいだ〳〵しき同　すゝまぬ事とは思へどもといふ注は、退々と心得たるひがごと也、此詞、上にいへるがごとし、

たゞ今のからを見では云々廿八のひら　たゞ今のとは、今夜葬むとするなれば、今のうちに見ずはといふ意也、傍注、魂と魄とのさだは、よしなきこと也、たゞ今といふを、今生のことゝ思へるにや、其意にはあらず、

火とりそむけて同　源氏の御出によりてといふ註いかゞ、

かなしきことをばさる物にて廿九のひら　かなしきことは、いふもさらなれば、それはそれにてといふ意也、すべてさるものにてといふ詞は、皆しかり、傍注たがへり、

さなんよのなかはある同　世ノ中といふ物は、さやうに、頼みに思ふ人に、思ひかけず俄に別るゝやうの事も、つねにおほくあるならひぞとなり、そも〳〵此所の源氏ノ君の語はすべて、右近が、夕皃ノ上の、にはかに非業なるごとくにてうせられ

たるとを、殊に深くなげくを、なぐさめんとてのたまへるなれば、其こゝろを得て解べき也、

わかれといふものゝ云々同　たとへば年老て後、よのつねのごと病て死ぬる別れなどにても、かなしさは同じとにて、すべて別れに、かなしからざる別れはなければ、夕兒の事をも、さのみ殊にな思ひそと也、花鳥に、杜子美が詩を引れたるは、かなはぬと也、

とあるもかゝるも云々同　よのつねのやうに、病して死ぬるなども、又夕顔のごとく、思ひかけぬ事にて、俄に死ぬるも、その別れのやうは、さまぐかはれども、いづれもみな、定まれる命のかぎりある物にて、別るゝなれば、畢竟は同じとぞと也、注、ことわりとほらず、ひがと也、

うちかはし給へりしが云々四十四ウ　すべてかはすとは、たがひに相交ふるをいひて、衣をうちかはすは、寝たる時、男女たがひにうちかけまじへきる也、さればこゝは、河原院にて、夕顔とね玉ひたりし時、たがひにまじへ玉へりし、源氏君の御衣の、夕顔の死骸の方につきて、そのまゝにてあるを、見給へる也、きられたりつるといふも、たしかに着たるにはあらず、おのづから死骸にまつはれて、着たるやうにてあるさま也、注に、わが御衣をきせ給ひしがといへるは、うちかはしといひ、きられといへるにかなはず、又或抄に、衣をたがひにとりかはして、着給ひたる也といへるも、たがへり、取かはすを、うちかはしとは、いかでかいはん、

つゝみのほど同　拾遺に、此堤は、こころの名也といへる、よろし、

はふれぬべきにや同　拾遺にいへるがごとし、

まとにふし給ひ云々四十五ウ　注、一説とある方よろし、まとには、くるしがり給ひへかゝれる言也、

まつりはらへ同　此ころ、病のいのりなどに、祭祓といふと、おほく見えたるは、陰陽家のおこなふわざ也、

けいめいし給て四十六オ　經營也、俗言にていはゞ、きつう御せわをし玉ふといふと也、　花鳥細流などに、こゝは驚く心也とあるは、みだりなり、おどろくを、けいめいといへると、例もとわりもなし、

ひとつにみちぬるよなれば（同） よは夜也、内の御とのゐどころに参給といふへかけていへる也、世と心得たるは、ひがと
也、世とはいふべき所にあらず、

さばかり思ふをしらで（四十三のひら） しらでは、俗言に、とんぢやくせずかまはぬといふ意也、すべて雅言には、しらずといへるに、其意なるおほし、心得おくべし、つねにいふしらずの意にしては、聞えぬ所多きぞかし、

御名がくしも云々（同） 注、一說よろし、ながらを、つゝの意としたる方の說は、かなはず、聞え玉ひながらは、夕皃の、おしはかりて、源氏君ならん、それゆゑに、かゝる小屋に通ひ玉ふ事を、つゝましくおぼして、名をば顯し給はぬにこそあらめと、詞には申し給ひながらも、心の内には、うきことにおぼしたりしと語る也、

あはれとおぼえ玉ひけむ（四十四のうら） これはみづからの事なれば、給ひといふ言、いかゞなるごとく聞ゆれども、然らず、すべておぼえは、思はれといふことにて、其中に、人に思はるゝ意なるあり、こゝもそれにて、夕皃の、我にあはれと思はれ玉ひけんといふ意なる故に、玉ひは、夕皃へかゝれり、

給ふありしかと（四十五のうら） しかといふ詞、上にこそといふ言なくて、いかゞ、か。もじけづるべきか、もしかといはゞ、上を、
つれなくのみもてなしてこそと有べし、

とさまかうさまにつけて（同） 夕皃の形見にもあり、又頭中將の子にて、葵ノ上の姪にてもあれば、いづれにつけても、外ならねばと也、傍注たがへり、

あゑかに（四十六のうら） 拾遺に、淡路ノ國ノ郷ノ名の平安（アヱカ）を引て、此字にて心得べきかといへるは、もとは一つ言なるべけれど、物語のあゑかは、さらに平安の意にはあらず、用る意の、うつりかはれるなるべし、

いとしも人に（同） 拾遺に、孟津に引れたるは、拾遺愚四の哥にて、今の本には、いとこそ人になれざらめと有り、糸によれる物ならなくにを、物とはなしにと引たるたぐひなるべし、といへり、

物づゝみし（同） 孟津に、わが男にはしたがひ、世上には物づゝみし、とあるはたがへり、物づゝみしは、すべて[illegible]やうをい

へるなれば、夫に對しても同じとなり、見ん人の心にはといへる、にはは、世上の人に對へていふ詞にはあらず、

哥見し人の云々四十七のひら　二の句、けふりと雲をといはでは、事たがへるやうなれど、然らず、けふりを、あの雲ぞと思ひてながむれば也、結句、むつかしき哉とある本は誤也、

めづらしきにこれも四十八のひら　たゞ今は、ひたすら夕皃の事をおぼすころなる故に、これもといふ也、

あやしやいかに思ふらんと同　軒端荻の、すでに男女の交マジラヒをなしたることを、少將の、あやしく思ふべしとおぼす也、さてそれは我ぞといふことを、少將にもしらせがてらの心にて、此文はつかはす也、下にわれなりけりと思ひあはせばさりとも云々、とあるにて心得べし、思ひあはせばは、男女の交をなしたるは、源氏君にて有けりと、此文にて思ひ合すなり、たゞ注のまゝにては、思ひあはすといふこと聞えず、よく味ふべし、

しにかへり同　かへりは、其事をつよくいふ詞也、きえかへるわきかへるなどのごとし、今ノ世の言にもいふこと也、注ひがこと也、

哥ほのかにも云々同　露のは、荻又むすばずはの縁にて、意はいさゝかのといふ意也、かどはいひくさ也、

かどにて同　いひくさにて也、哥はわろけれども、早く出來たるばかりを、申しわけにしてといふ意也、申シわけは、即チ其事をいひくさにする也、

心うしと思へど同　源氏君のつれなきを、心うくは思へど也、注わろし、

哥ほのめかす云々　なかばゝとは、うれしくもあり、又思ひむすぼゝれもする意なるべし、

うちとけでむかひ云々四十九のひら　これは空蟬の事にて、うちとけずして、向ひゐたる也、軒端荻のその時の顔を、おぼし出るにつけて、向ひゐたりし空蟬の事をも、ふとおぼし出て、思ひくらべ玉ふ也、これを軒端荻の事としては、人はといへる詞、かなはず、こゝはもはら軒端荻の事をいへる所なるに、ゆくりなく空蟬の事のまじらむは、いかゞと思ふ人あるべけれど、たゞ其時見玉ひしさまの、御心にうかべるさまのまゝに書る文也、又此むかひゐたる人を、藏人ノ少將といへる說は、殊にひがこと也、もし少將の事ならば、むかひゐるん人はとこそいふべけれ、又少將は、軒端荻をうとみたる事見えざ

れば、うごみはつまじきこいへる、はつてふ言よしなし、

あみだ佛にゆづり五十のひら　此世にては、わがあひ見し人なるを、今は極樂へやりて、阿彌陀佛を賴み奉るこいふ意也、注にいへる佛經のさだは、無用の事也、

哥なく〳〵も云々同　こけて見るべきは、うちこけて逢見るべき也、注に、解脫の義こいへるは、かなはず、

ゆくへなくて五十一のひら　玉かづらの、いかになり給へるもしられぬ也、

こまやかなるとども五十二のひら　源氏君の御文に也、注或說ひがと也、

哥せみのはも云々同　衣をかへすは、あはざる人のしわざなればこいへる注、ひがと也、其意はなし、

ふりはなれぬるか六同　万水一露に、伊與へ下向の事也こいへるよろし、

冬たつ日同　だもじ濁るは、ひがと也、

哥過にしも云々　上に冬たつ日こいへるは、九月の末、立冬の日なるべければ、此哥に秋の暮こよめる、論なき事也、又上に十月のついたちごろにくだるこいひて、此哥に、けふ別るゝこよめる、けふは今こいふ意にて、かならずしも其日にはかぎらず、秋のくれごいふと、妨なし、細流わろし、

みかごの御子ならんからに同　いかに帝の御子なればこて、こいふ意の詞也、

見む人さへ五十三のひら　源氏君のふるまひを、かたはらより見る人にて、すなはち、見て物語をかきたる人をいふ也、

若　紫　卷

人々まじなひわづらひしを二のひら　湖月師說のごし、

「山のおくらは同　「點ひがとなり、

いはの内にぞ云々三のひら　すべていははの中にすむこいへるは、山のおくの、岩はの立めぐれる地也、岩窟こ心得るは、ひがと也、

つゞらをり同　をれまがりたるさまの、黑葛の蔓のさまに似たるよりいふ名なるべし、

ゐによくも云々四のひら　此詞、上よりのつゞきは、地の詞のやうなれども、地の詞のさまにあらず、これより源氏君の詞とすべし、

いといたし五のひら　いたしは、さしもあるまじき物の、思ひの外に、ほどよりはよきを、ほめたる詞也、他卷に見えたるも、皆同じ意也、こゝも播磨前守の分際には餘りてよきよし也、注みなひがこと也、

ひがもの同　變なる人といふこと也、すべてひがといふは皆、あるべきさまに違ひたることにて、ひがくしひがことひがむなど、みな其意也、

心をやれるすまひ同　みづからあかぬことなしと、ほこりたるやうの意也、注は、上よりつゞけて見て、かつはといふ言を、忘れたるひがこと也、拾遺に、心をはらしやり、なぐさめんためといふ心也といへるは、言の本の意は、さることなれども、物語書に用ひたる例は、然らず、

こころえぬやうなりけれ同　いきほひもなく、慊たらぬやうに有しよし也、注みなたがへり、湖月師說、殊にをさなし、

思ひおきつる六のひら　つねに掟ノ字を書て、おきてといふ詞を、用言にいへる詞にて、事をかやうくと定むる也、物語に此言いと多きを、置て置つること、まぎらはしきこと有、心得おくべし、

かいりうわうのきさき同　細流の注にてよろし、花鳥無用也、

をさなくより云々七のひら　をさなくより云々、したがひたらんは、ゐなかびたらむと、上へかへる意の語也、

はゝこそ云々同　細流に、良淸が詞也とあるはいかゞ、下に、いふもありとあれば、又一人がいへる詞也、いでやといふよりつゞけて、同人の詞にても有べし、

なさけなき人になりゆかば同　河海細流などに、後々の國司の事とあれども、もし其意ならむには、たゞなさけなき人になりゆくといひては、聞えぬこと也、一本には、なりてゆかばと、てもじ有るによらば、良淸などが、なさけなきものになり

て、行て、おしてのぞまばといふ意かとも思へども、それも、ゆかばといふ詞、心ゆかず、又思ふに、になりは、くだりを寫り誤れるにて、國司にまれ、さらぬ人にまれ、情なくおしたちたる人、かの國にくだりゆかば、おしてのぞむべきほどにといへるか、

そこのみるめも云々（同）　底の見る目も、きたなき所なるべきに、何とて海のそこまでは思ひ入て、海に身をなげよとはいふらんといふ意也、引哥無用、

くれかゝりぬれど（同）　どはばの誤なるべし、日も暮かゝりぬる故に、人々、云々　はやかへらせ給なんと申す也、然るを後の人、おこらせ給はずへかけて、ばにては聞えずと思ひて、さかしらにどに改めたるか、さらでもど、ばとは相誤れること多し、こゝの文は、どにては、中々にとゝのはざること也、其故は、くれぬれどゝいふは、地の詞、おこらせ玉はず云云は、人の申す詞なれば、其堺に、詞なくてはとゝのはず、よく味ひ見べし、

たゞ此西おもてに（八のひら）　かやうのたゞは、今の俗言に直（ヂキ）にといふこと也、

ふせごのうちに（九のひら）　こゝは寺なれば、鳥をいるゝ籠などは、なき故に、かりにふせごにいれたる也、弄花の注、ひがこと也、

やう〳〵なりつる物を（同）　やう〳〵おかしうなりつるとつゞく意也、傍注は、此意を得ずして、なりを、馴と思へるにや、ひがこと也、

立てゆく（同）　雀を尋ねんとて也、

したひ玉ふほどよ（同）　ほどは、心のほど也、年のほどゝいふ注は、たがへり、

かんざし（同）　髮のさしざまといふことにて、木の枝のさしたるさまを、枝ざしといひ、目の物をさして見るさまを、まなこざしといふたぐひ也、さればこれは、額の際より頂（イタヾキ）の方へ、髮の生（オヒ）のぼりさせる所のさまをいふ言也、髮のさすといふも、枝のさすと、同じこゝろばへなり、此詞巻々に多し、皆然也、しかるを人みなたゞ笄と心得られたるから、そのかみの女の髮に、笄させることはなきに、考へわづらひて、くさ〴〵強（シヒ）たる注ある也、

すゞろにかなし十ウ八　さもあるまじき事に、何故となく、おぼえずかなしきなり、

ふしめになりて同　ふしは、なえふすにて、目つきのしをるゝ也、俗言にしを〳〵としていふ、是也、

又ゐたるおとな同　少納言にはあらず、上におとな二人と有て、少納言が事は、此ゐたるおとな云々とて、上に見えたるに、

又ゐたるといへるは、いま一人のおとな也、又といふを、哥へかけて、ゐたるおとなの又よめるといふ意ともすべけれど、少納言は、既に立てゆくとあれば、こゝにゐたるとはいふべきにあらざるをや、

さてもいとうつくし云々十一ウ五　此さてもは、俗言のさてものどし、雅語には、めづらしきつかひざま也、

よきりおはしましけ十一ウ八　すべてよきるといふ言は、よきて過る意と聞えたり、こゝも其意にて、僧都の坊へは、立よらで過給へるをいふなるべし、然るをからぶみに、來訪ことを過といふ、その過ノ字を、よきると訓るは、つねにすぐとよむ字なるから、まぎれて誤れる訓とこそおぼゆれ、さて又よぎるも、つねにきを濁れども、共に清べき言なり、さて又よきるといふ言は、物語書などには、をさ〳〵聞なれぬを、こゝはほうしの語なるゆゑにいへり、

草の御むしろ同　一點例のひがこと也、さてこれは、草枕といふごとく、旅寢の御むしろなる故に、草のとはいへる也、

いまそかたにも十三ウ八　細流たがへり、湖月師説も、頻〻驗あればといふことをば、はぶきすてゝ取べし、

まだ見ぬ人々同　源氏君を、まだ見ぬ人々也、

まして後の世の同　いけるかぎりの云々に對へて、まして後ノ世は也、細流たがへり、

中々さかしら心なく十四ウ八　まだをさなくはあれども、さかしら心なく〳〵て、それもかへりてよからんの意也、さかしらはかしこだて也、

をさなかりつるゆくへの同　ゆくへは、僧都の物がたりの末也、

つねの人におぼし云々同　我をよのつねの人の思ふ心のやうにおぼして、まだ似つかはしからぬよはひなれば、はしたなくやおぼさん、我は、よのつねの人のやうに、いもせの交の事を思ひて、申すにはあらずとの意也、

まだむげに同　まだはいまだ也、又と見るはひがこと也、

女は人にもてなされて云々十五のひら　この語は、おば北の方にかたらひて、といふへかけて心得べし、まだいときなくは侍れども、女は云々なれば、祖母にかたらひて見侍らんといふ意也、注三從のさだ、さらによしなし、

瀧のよどみも云々同　すこしうちとゝくといふばかりの雨に、瀧の水のまさむこと、いかゞとも聞ゆれど、瀧はたゞ山川の早瀬のことなれば、その細き流れなどは、しばしふる雨にも、たちまち水はますこと也、

すこししぞきて十六のひら　源氏君也、此詞、ほとけのといふ上へうつして心得べし、すこし退き給ふ故に、見え玉はぬによりて、ひがみゝかとたどる也、

佛の御しるべは云々同　注に、尼君へ哥まゐらせ給はむしるべに云々は、ひがこと也、

さるにては同　それにしてはといふこと也、

あさはか十七のひら　淺くはかなき心歟といふはひがこと也、拾遺にいへり、

おこな〳〵しう云々同　尼君のさまの、はづかしげなるにつゝまれて、源氏ノ君の、おぼす事をば、とみにもえいひ出玉はぬ也、拾遺誤れり、

たぐひに同　湖月師說、詩を引たるはかなはず、

哥吹まよふ云々十八のひら　上句、せんぼうの聲を聞て、煩惱の夢の、さめぬることゝちす、といふ意をふくめて、感淚をもよほす意を、かねたるか、

哥さしぐみに云々同　拾遺に、後撰集の、さしぐむものは淚也けり、といふ哥を引て、次に蜻蛉日記に云々、雲るよりこちくの聲をきくなべにさしぐむばかり見ゆる月影といふ哥を引たり、此蜻蛉日記の哥によれば、淚といはでも、さしぐむといへば、淚のさしぐむ也、然ればこゝの哥も、初二句、さしぐむ淚に袖ぬらしけるにて、源氏の君の哥の四の句のとなり、さて下句は、花鳥に、山にすめる身は、心もさわがぬといへる也、とあるがごとし、僧都の哥なることは、論なし、

すきひがめる十九のひら　ひがめるは、よのつねのさかりの人の聲とは、かはれるよしなり、調子にのきたるといふは、あまりことぐし、

中々にも同　此度かく對面し奉れるは、うれしきものから、別れ奉りてば、中々に名殘かなしかるべしと也、注いみしきひがこと也、

時ありて一たび云々廿のひら　金光明經讃佛品に、希有希有、佛出於世如優曇華時一現耳、この文にていへる也、

哥おく山の云々同　此哥の注どもの論、拾遺にくはし、孟とて引たる哥ゞ、河海に引れたる哥にて、例のおぼえたがへのひがとなるを、後々の抄に、そのかむかへもなく、本をも尋ねず、たゞ河海のまゝに、みだりに引れたるも、いとおろそかなること也、此たぐひ常に多し、心得おくべし、

こと奉る見玉ひて同　奉ることよみ切て見べし、見玉ひては、たゞ僧都のそれを見たるよしのみ也、弄花の説あたらず、無用の注也、

すきたる袋同　透たる袋かと、拾遺にいへるがごとし、河海説、ひがこと也、

こんるりのつぼどもに同　河海説、用なきいたづらごと也、

こよらの寺の云々廿二のひら　えのは井、瀧の本なるに縁あり、

僧都きんを云々廿三のひら　湖月に、源氏わらはやみの云々、もし心あるかといへれど、さる心はさらになし、

むつかしき日の本の同　かく皇國をいやしくいひなすは、ほうし心のならひにて、つねのことながら、いともかしこきまがこと也、

こしのかさなるにそへて云々廿四のひら　これより源氏君の詞也、さてまさるをのをもじ、おだやかならず、思はずにといへるも、言たらず、はぶきていひのこすも、詞にこそよれ、かくては、語との〻はず、さればこゝは、御心のへだてもまさるは、いとくるしく思はずにこそ、と有けむを、はをを〻に誤り、こゝを落せるなるべし、さてとき〳〵はといふより、源

氏ノ詞としたるは、ひがこと也、さては、上におもほしてといへるにかなはず、おもほしての下より、詞なることしるし、

とはぬはつらき同　拾遺にも、六帖の哥二首を引り、

よしやいのちだに同　これはよしや命だにながらへてあらば、我こゝろざしの淺きにはあらざるほどの、おのづからしらるべし、といふ意の引哥あるべし、

思ひ玉ふるさまをも云々廿五のひら　注に、云々をなん、殘りおほく思召故、又かく文をまゐらすとの心也、といへるはたがへり、云々をなんの下に、のこりおほく思ひ侍る、といふ意をふくめたるまでにて、それゆゑ又文をまゐらすといふ意はなし、かばかり聞ゆるにてもといふは、その意にはあらず、下へかゝれる詞なるをや、

哥おもかげは云々同　四の句、拾遺に、我心の有ルほどをば、と注したる如くにて、下句、我心はとゞく、あるかぎり、山櫻の本に、とゞめおきて來つれどもといへる也、

哥あらしふく云々廿六のひら　今ちらむとする櫻の、ちらぬ間を、さやうに御心とゞめておぼすは、いとはかなき御心なるよ、といへるにて、此哥は、たゞ花のうへのみをよめるにて、紫上に心をかけ給ふことを、たとへたる意はなし、

いとゞうしろめたう同　さやうのはかなき御心にては、紫上をまかせ奉らん事は、いよ〳〵うしろめたしと也、いとゞとは、源氏ノ君の文に、夜のまの風もうしろめたくなん、と有ルをうけていへり、

まほならねども云々同　まほは、俗言にろくといふにあたれり、こゝもろくには見ねども、ほのかには見たるよし也、注まさしくさしあてたるやうの心とあるは、さらにかなはず、

哥くみそめて云々廿七のひら　下ノ句、本哥に、淺ければ袖のみぬるゝとあるを、その淺きをしりがら、影を見せ奉るべきことかはと也、我身を卑下したる也といふ注、かなはず、

つらうさへぞ廿八のひら　よろづすぐれ給へるが、つらくさへおぼさるゝ也、

くらぶの山に云々同　曾禰好忠集に、いざせこゝをぐらの山に家居して、みじかき夏の夜をもうらみじ、此哥、こゝの意と同じ、

あやにくなる同　俗言に、いぢわるくといふ意也、

哥見ても又云々同　あふは、夢の縁の詞也、夢には、あはすといひ、あふといふこと有也、見てもといふも、夢につきていへる言也、

哥世がたりに云々同　さめぬ夢とは、夢は、さめて又本の現にかへる物なるを、夢になしてきゆる身は、かへる事なきをいふ也、

御なほしなどは云々同　傍注よろし、細流わろし、

「なきね同　泣きながら眠るをいふ、「點ひがこと也、

御めのとごの辨命婦廿九のひら　辨と命婦と二人にて、命婦は、王命婦也、かたみには、辨と命婦とたがひに也、さて猶のがれがたかりけるといふは、命婦一人が思ふ也、さる故に命婦はと、二たび名をいへり、源氏君の密通の事は、辨はしらず、命婦のみしれる事なる故に、かく分ていへる也、

げに入るものなく卅のひら　げにとは、帝の御思ひかぎりなきもげにと也、

ものふかきおまし所に卅一のひら　これは物げなきを、寫し誤れる也、本のまゝにては聞えぬこと也、注はしひごと也、

此世の事には云々卅三のひら　此世のみの事にはあらじ、前の世よりの因縁にこそと也、過現未三世の事といふ注は、いみしきひがこと也、

よろづおもほししらぬさまに云々同　尼公のいたくよわり給へることなどをも、何ともおぼしいれぬよしの意也、

哥いはけなき云々卅四のひら　あしまになづむは、思ひなやむをたとへたり、えならぬは、淺からずにて、思ひなやむとの淺からざるよし也、えに江をもたせたり、えならぬの注どもみだり也、

同じ人にや同　河海に引れたる、湊入の哥は、例のおぼえたがへの誤なり、拾遺にわきまへたるがごとし、

山里人にも久しう云々卅五のひら　云々いとまなしといふよりつゞきて、源氏ノ君も、舞などならひ玉ふにいとまなくて、といふ意をふくめたり、

ふりはへつかはし同　細流に、云々かやうの同じ詞を云々、心をつくべしとあるは、いまだしき注也、すべてかやうの同じ

詞の、こゝにもかしこにもあるは、たゞおのづからのとにこそあれ、意あるとにはあらず、心をつけて、何にかはせむ、
心をつくべき事は多かるをば、おきて、かゝる事にとに心をつけむは、いたづらど也、
こひやすらむと御息所に云々同　とぢじ、多くの本に、こと有、ことは一本にある也、故といふとも、あらまほしけれど、
とゝいふ言は、必ずなくてはかなはぬ所也、もしは戀やすらんと、と御息所に、と有しを、たがひに落せるにやあらん、
哥あしわかの云々廿七のひら　結句、かへるべき波かはといふべきを、かへる波かはといへるは、すこしいかゞ、
めざましからん同　面目なしと也といふ注かなはず、
わりなきこと同　立ながらかへるべきかはとのたまふは、わりなきと也といへるなり、細流たがへり、
すべりいりて廿八のひら　うるはしく歩み行て入にはあらで、たゞ居ながらにじりよりて、入ルやうのさまなるべし、俗言にい
ふすべるも同じと也、衣をぬぎすべらかすも、同じこゝろばへ也、
今より見奉れど四十のひら　我はわづかに今よりはじめて見奉れど也、
いと忍びて通ひ玉ふところの云々同　此段を書るとは、上にまとのけさうもおかしかりぬべきに云々といひて、紫ノ上幼き故
に、かへるさうざうしくおぼすから、此女の家におとづれ玉ふ也、注に、此段物語のかざりにて、寄妙也云々、との
みあるはとたらず、
おほとのごもりおきて四十一のひら　たゞおき給ふとを、かくいふは、おほとのごもりて有しが、おき給ふよし也、花にさきちる
といふも、たゞちる事にて、咲て有しがちる意なるに同じ、
あつしくさだ過玉へる人に云々同　上のとしごろもは、物せしをといふへかゝりて、としごろも云々といひしを也、さてこゝ
の語の意は、あつしくさだ過たる尼公にそひる給へるによりて心ぐるしさに、時々はかしこへも渡りて、見ならし玉へ
と、年ごろもいひしとなるにとのたまふ也、細流に、云々と後悔し玉ふ也とあるはたがへり、後悔の意はなし、
はかなき物もきこしめさずとてげにいと云々四十二のひら　此とては、云々とめのとなどの申すが、それ故とて、げにいと云々の

意也、

たはふれにても四十三のひら　かりそめにてもこいはんがごこし、注に、たこへ源の當座のたはふれにし給ふこてもこいへるはたがへり、かくいふ詞の例をしらざる注也、たはふるゝ事にはあらず、

それをば何こも同　それこは、今めのこがいふ事の趣をさしていへる也、

ひたちには云々四十四のひら　風俗常陸哥、比太知仁波(ヒタチニハ)、太乎己曾川久禮(タヲコソツクレ)、安太己々呂(アダコヽロ)、可奴止也支見加(カヌトヤキミガ)、山乎己衣(ヤマヲコエ)、乃乎己衣(ノヲコエ)、安末與支末世留(アマヨキマセル)、これは常陸なる女の、こなりの國などより、通ひ來たる男に、よみかけたるにて、哥の意は、我は田を作りてこそ居れ、他事はなきに、もし君が來まさぬ間に、あだ心有て、他男(コト)をかねて通はすかこ、疑ひやし給ふらん、はる〴〵こ野山をこえて、かゝる雨夜に來ませるこよめる也、さて今源氏君のうたひ玉へるは、我は此常陸の女の、田をこそつくれこよめるごく、あだ心はなきに、あだ心ありこおぼすにや、葵上の、こみにも對面し給はぬとよ、こいふ意にて也、注に、末摘花の事こあるは、いこものごほく、こゝによしなきと也、

をさなき人をぬすみ云々同　かの宮に渡りて後に、むかへ出たらば、ぬすみ出たりこ、よの人にいはるべし、さればかしこへわたらぬさきにこ也、湖月師說、意たがへり、もしかの注の意ならば、もごきおふこもなごいはでは聞えず、おひなんこいへるを、いかでか其意こはすべき、

おきてたれ四十五のひら　掟(オキ)てゝあれにて、掟よこいふと也、

見るべきとの侍るを同　かやうの見るは、俗言に、こりあつかふなごいふ意にて、看病なごの看ノ字にあたれり、

いかにはか〴〵しき云々四十六のひら　いかには、さぞこいふ意にて、さぞはか〴〵しき御返答あるべきこ、たはふれていふ也、うちわらひてこあるにて知ルべし、此いかにを、いかでかこいふ意に見るはわろし、すべて近き世の哥に、さぞこよむを、古ゝの哥文には皆、いかにこいへり、心得おくべし、

かゝる朝霧をば同　すべて夜半も過れば、夜の內ながらも、朝こいふは、常の事也、古今集あふみぶりの哥に、近江より朝

立くればといひて、とぢめに、明ぬ此夜は、とよめるなどにても知べし、傍注、面白しとはいかゞ、

まろも同じ人ぞ同　宮と同じことぞ、かはることなしと也、

おもひやりなきほどの事に四十七のひら　あまり俄にて、何の用意思案もなき事なればといふ也、傍注たがへり、

よし後にも人は云々同　孟津たがへり、湖月師説のごとし、

ひきさげて同　拾遺に、蜻蛉日記に、ずゞ引かけ、經ひきさげなどあり、提の字にて、たゞ取て持也、といへるがごとし、細流ひがこと也、

御木丁のかたびら云々四十八のひら　御木丁おましなどは、こゝにもとより有て、たゞかたびらを引おろせばよく、引つくろへばよきさまにてある也、

おひさきかぎりことさらに四十九のひら　ことさらには、俗にいふわざとにて、わざと小(チヒサ)き童ばかりといふこと也、別して也といへるはたがへり、

すゞろなる人は同　すゞろの意、上にいへるがごとし、

女は心やはらかなるなんよき同　こと〳〵しく、からぶみを引べき事にもあらず、

御かたちは云々同　これは上下の言のつゞきざま、源氏君の御かたちをいへるやうにも聞えたり、

見給にび色の同　にもじを上へつけて見る説は、ひがこと也、さてはにといふ言とゝのはず、

「こことまぜに五十のひら　「點例のひがこと也、

ふくよかに五十一のひら　ふくらかにて、たゞをさなき人の書たるさま也、注に、大やうなる年といへるはわろし、其意はなし、

おひさき見えてといふは、ふくよかへかゝれることにはあらず、

いまめかしき手本云々同　尼公の手は古風にて、今の風にはあらざるが、今より後、いまめかしき手本をならはゞの意にていへる也、

びんなし㊂　傍注ひがと也、此詞卷々にいと多きを、たゞこゝのみたよりなき意ならんやは、

あとはかなくて㊂　僧都の許へ尋ね給ひても、さらにゆくへしられぬよしなり、

これはいとさまかはりたる云々五十三のひら　これはまとのむすめとはさまかはりたる、かしづきぐさぞといふ也、注に、よのつねの夫婦のかたらひのやうにもあらず云々と、夫婦の事へもかけていへるは、わろし、かしづきぐさとは、もはらむすめにつきていふ詞也、夫婦のかたの、さまかはりたる事は、いとおかしきもてあそび也と、すでに上にいひて、こゝへはかゝらぬ也、

上ノ件ノ五ノ卷は、思ひとりたる事ども、をさ〳〵のこさず、しるしいでつるを、次々なほそこらの卷々、末いと長きを、事しげき身には、えたへずなん有ければ、しばしこゝにとぢめてむとす、さるはいと〳〵くちをしく、いふかひなきわざとは思へど、我身七十ちかくなりて、いとゞけふあすもしらぬ、よはひの末に、むねと物する、古事記のちうさくなどはた、いまだえ物しをへざるうへに、何やくれやと、むつかしくまぎるゝことゞもはた、いと多くてなん、思ひの外に、今しばしながらふるやうも有て、心もほけず、いとまもあらば、又々もおもひおこして、すぎ〳〵しるしもつぎてんかし、

源氏物語玉のをくし七の巻

末摘花よりつぎ〳〵の巻々よ、又々もとは思ふものから、そはいとたのみがたきわざにしあれば、としごろ考へ出つる事どものあるところ〴〵、こゝかしこと、書つけおきつるかぎりを、今とりあつめて、いさゝかながら、かつ〴〵しるしつぎてんとす、はやくの注釋ども、ときひがめたる事共、見過しがたくおぼゆるふし〴〵は、いと〳〵おほかれど、いかゞはせむ、はじめ五巻に、ものせしにならひて、見む人、さる心して、注釋どもは見よかしとぞ、

末摘花巻

兵部ノ大輔三のうら　此人、いかむとはりとのみいひて、いづれの子ともしられず、まぎらはしきしるしざまなるを、今よく考ふるに、これも常陸ノ親王の御子にて、末摘花ノ君の御せうとの如く聞えたり、其故は、むすめの命婦が事をいふに、父君の許を里にてといひて、下に、父の大輔の君は、ほかにぞ住ける、こゝには云々【四のひら】といへるは、末摘花と御兄なれば、同じ宮にも住べき人なる故也、もし御兄弟にあらずは、ほかにすむよを、ことわるべきよしなきにあらずや、父命婦が常陸ノ宮に參り通ふも、此縁によりてなるべし、もし然らずは、參り通ふゆゑよしをいふべきよとなるに、それを何ともいはずして、たゞ父君の許を里にて、行かよふといへるつゞきにやがて、こひたちのみこの云々と書出たるは、其父君の御父の常陸ノ宮といはぬばかりに聞えたり、又下に、命婦が、源氏ノ君のために、媒する事をいへる所に、父君にも、かゝる事なんとも、いはざりけりとあるも、末摘花の御せうとなる故とこそ聞えたれ、もし他人ならむには、人の忍び事の媒する事を、父などにはいふまじきは、もとよりのよなれば、かくことわるべきにあらざれば也、されば必ず末摘花の御せうとゝ聞えたるに、たしかに然いへる文もなく、又末摘花の御身のたづきなき事どもなどいへる中に、蓬生巻に、まれにも訪ひくる人は、御せうとの禪師の君のみなるよしのみ見えて、此大輔ノ君の事は、此巻にもかの巻にも、いかにとも見えたる事なきなどは、御せうとのやうにも聞えず、これかれまぎらはしき事也、然るに諸抄に、かつてその

さだなきも、又いかにぞや、

父君のもとを同　これを父宮といへる說は、いみしきひがと也、拾遺にわきまへたるがごとし、又父宮を、父君といふとなし、宮なれば、宮とかみことかいふ例なるをや、

おもきこうに九のひら　こうは功にて、わが手がらにおぼす也、碁の劫の事は、さらによしなし、

わざとびはゝひけど同　拾遺に、琵琶をひくを、わざとする也といへるは、言の本は、さる意なれども、用ふる意は、いさゝか異也、俗言に、びはをば、もつはら精(セイ)をだして、つねにひけども、といふやうの意也、

まさにさては過し給ひてしんや十のひら　すべてまさにといふ詞のつかひざま、物語なるは、みなかやう也、漢文に豈(アニ)といふが如し、

夢にもしり給はざりければ十六のひら　ばはどの誤なるべし、又上なるつゝましげにおぼしたれどのどは、ばの誤なるべし、

御めのとごじゞう十七のひら　御めのとの子の侍從也、小侍從にはあらず蓬生卷に、侍從などいひし御めのとごのみこそ、こあるにてもしるべし、又わかうどゝあるにても、乳母にはあらざるとしるし、

こころせくもあるに云々十九のひら　禁中よりかへり給ふ道も、雨ふりて、うるさくこころせくもあるに、末摘花の御方は、立よりて、やどり給はんに、よき所なるに、さもおぼさぬにやといふ也、注、あるにといふ言にかなはず、みだり也、

えかたのやうにも云々廿のひら　拾遺に、えの字は、引くだして、えつゞけ玉はねばと見るべし、といへるがごとし、かたのやうは、かたのごとくといふに同じ、注ひがと也、

手さぐりの云々廿二のひら　あやしく心得ぬこころのあるやうにおぼえしは、たゞ手さぐりのたどたどしき故にて、實には然らざるにや、よく見まほしといふ也、傍注たがへり、

をせなかに廿四のひら　かもじ、濁るべし、背(セナカ)のたわみまがれるをいふなるべし、なかは、長の意にはあらじ、たゞ背の長きばかりは、むねつぶるといふべきほどにもあるべからず、

えゆるすまじく卅のひら　かんにんのならぬほどゝいふこと也、注わろし、

たゝうめの花の卅二のひら　これはたゝらめの花のと有しを、此名聞なれぬ故に、らをうの誤ならんと思ひて、さかしらに改めつるなるべし、たゝらめを、梅とかへてうたふべきよしもなきうへに、たどといふとも、穏ならざるをや、注に、たゝらめの花といふは、たゞむめの花といへるを、書誤れるなるべしとあるは、いみしきひがこと也、新撰字鏡に、華太々良女（ハタヽラメ）と見え、内膳式には、多々良比賣花（タヽラヒメノ）と見え、後の書どもには、たゝらべともあり、風俗哥、花鳥に引玉へるどし、是を求子とあるはたがへり、さて三笠の山の云々とは、心得ぬこと也、これもかのたゝらめの哥の末にある詞にや、かの哥、政事要畧に載たるを、今考るに、花鳥に引玉へる如くにて、末は見えず、なほよく尋ぬべし、

哥あはぬ夜を云々卅三のひら　下ノ句は、かの末摘花よりおくり給へる衣の事にてよみ給へる也、逢ぬ夜をへだつる衣のあるうへに、いとゞこれを重ねて見よとやといへるにて、いよ〳〵重ねてへだてんとやの意也、

おぼしつゞけらる卅四のひら　上にぞとあれば、らるは、らるゝと有しが、るもじ一つ落たるならん、

紅葉賀巻

花のかたはらの云々二のひら　目もうつらぬよし也、人にはことなるを、たちならびてはといへる、語のいきほひにてもしるべし、細流たがへり、下に帝の、かたてもけしうはあらずこそ見えつれ、とのたまへるによりて、しひて注し玉へるなるべし、

大かたにはと四のひら　密通の方にて、あはれと見しにはあらず、たゞ公界にてあはれとは見侍しと也、にはのはもじにも、其意あり、

手づから云々十二のひら　もたせて渡り給ひて、手づから、御ぞの御うしろ云々、とつゞく意也、

いとゞ思ひあはせて十三のひら　源氏君の、藤壺の御懐妊を、我御たねならむと、思ひ疑ひ玉ひしに、月のび玉ひて、正月も過ぬるによりて、いよ〳〵然也と、思ひ合せ給ふ也、

げにかよひ玉へる十五のひら　此げにはうくるこころなし、もしはけもじ衍か、

かた〴〵うつろふこゝちして十六のひら　おそろしくも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、心のさま〴〵にうつりて思はるゝ也、傍注ども、いかなるひがことぞや、

中々なるこゝちの十七のひら　若宮を、はやく見まほしくおぼしけるに、見玉ひては、かへりてかなしさのまさるよし也、注ひがこと也、次なる哥にてもしるべし、

哥袖ぬるゝ云々同　初句、御みづからの也、四の句、猶うとまれざる也、にも猶といふにてしるべし、此ぬを、畢ぬといへるは、猶を、俗意の猶に見たるひがこと也、

心なげにいはけて廿のひら　拾遺にいへるがごとし、

うへはみうちぎの人めして廿二のひら　枕册子に、日のいるほどに、おきさせ玉ひて、山ノ井の大納言めしいれて、みうちきまゐらせ給ひて、かへらせ給ふ、櫻の御なほしに、紅の御ぞの夕ばえなども、かしこければ、とゞめつと見えたり、これも御装束の事のやうにも聞ゆ、猶よく考ふべし、

かなはぬものうさに廿四のひら　ものうきは、俗言にいやなるといふ意にて、こゝは、なぐさめむとはおぼせど、其心にもかなはず、いやなる也、

うりつくりになりやしなまし廿五のひら　催馬樂山城ノ哥、伊加爾世无の上に、和禮乎保之止伊不といふ句あり、されば我をほしといふ、いかにせむ、なりやしなましといふを、心づきなくおぼせるなるべし、

うらやみなき廿八のひら　我と人とのうへを、くらべ見るに、人のまされる事もなく、我と同じき事をいふ詞也、こゝは我も人もともに、すがたの見ぐるしきをいへり、詞のつゞきにても心得べし、宿木ノ巻に、それもわが有さまのやうに、うらやみなく、身をうらむべかりけるかし、

花宴巻

巻の名、此度の櫻の宴の事を、須磨ノ巻薄雲ノ巻をとめの巻などにはすなはち、花の宴と見えたり、

其道のは二のひら　上に文學の事見えざるに、其道とは、いかゞなるごとくなれども、すべて宴には、詩を作るを、むねとすれば、かくいへり、

哥おほかたに云々四のひら　此大かたは、源氏君の舞を、密通の事なくて、たゞ大方の世の人にて見たらばと也、　紅葉賀巻四のひらに、大かたには、とあるこころにいへるに同じ、考へ合すべし、

三の口同　紫式部日記に、ほそどの、三の口に入てふしたればとあり、これは禁中の事にはあらず、禁中ならでもあるなめり、

よの中のあやまちは五のひら　世の中の女の、あやまちする事のあるも、かやうなるよりおこることぞと、源氏君の、心のつき玉ふ也、注ども、あやまちを、みづからの事に見て、用なきことおほくして、意明らかならず、

聞えたがへたるもじかな六のひら　もじかなは、文字かなにて、詞かなといふことなり、詞をもじといへる例、あふひの巻に、いまはさるもじいませ玉へ、　これもあだ也といふ詞の事をいへる也、　須磨巻にも、わかれといふもじこそとあり、さればこゝも、申しそこなひたる詞哉といへる也、　注どもいかゞ、然也を、しかなとはいかでかいはん、又これにては、もといへるもあたらず、

かのわたりの有さまの云々七のひら　藤壺わたり也、奥にも見えたれども、妨なし、

女みこたちなども十二のひら　みことあるは、姫宮たちのごとく聞ゆれども、　こゝのやうを思ふに、なほ右大臣の御むすめたちの事とこそ聞えたれ、源氏君の御姉妹としては、事のさまおだやかならず、

何ゆゑかと十四のひら　引哥あるべし、なくては聞えぬ詞也、

葵　巻

うしろめたさに三のひら　さは、きの誤なるべし、

それにしたがひたる四のひら　此詞は、下の深うしもあらぬといふへつゞけて心得べし、御息所の心とけぬけしきなるにしたが

ひて、こなたよりも、深うもあらぬさまなる也、したがひては、俗に、應じてこいふ意也、
あまりつゝまぬ云々同　あまりつゝまぬ御けしきなる故に、こても恨みても、かひなきとゝおぼせばにやあらんこいふ意也、
かくなごいへご七のひら　かくなは、かくなせそこいふ也、
ひこだまひ同　人に給ひて、乗らしむる意の名にて、供の女房なごの乗る車也、花鳥いかゞ、其人に給ふを、人だまひこはいかでかいはん、
いこゞしういでばえを八のひら　うは、きの誤なるべし、
殿上のぞうなごのするとは同　のは、ぐの誤なるべし、
けふはここわりに九のひら　此下に、思はれこいふ詞をそへ、又下なる見奉りあげたるもの下に、ありこ詞をそへて心得べし、
のりこぼれたる十二のひら　袖口なごの、こぼれ出たるをいふ、上にも見えたり、
哥はかなしや云々同　あふひゆゑは、あふひなる物をの意也、
よわめにいできたるなご十五のひら　此下に、ぞもじ有べし、
哥そでぬるゝ云々十七のひら　かつはゝ、云々戀路こしりながら、かつおりたつこいふ也、上におく故に、はもじはそはれる也、
ここなりはてぬれば廿一のひら　はてこいふは、上にいへる胞衣も、すでに出ぬるよし也、
ゆすりみちて廿五のひら　河海に動響同、拾遺に云々、今考るに、拾遺に引たる万葉七の巻なる哥、同巻に二所出たる、今一つには、二の句水底豊三こありて、ゆすりここよみこ同意也、かくてこよみは、万葉のうちに、多く動ノ字響の字を書り、
然ればこれらの字を、ゆすりこ訓たるともありけんかし、
かつそこなはれ廿六のひら　此かつの意、拾遺にいへるがごこし、
人ひこりか廿七のひら　此詞聞えがたし、寫誤なごにや、猶よく考ふべし、
さらばおぼししるらんや卅のひら　さらばこいふ詞に、心をつくべし、

かつはおぼしけちてよ同　かつはといふに心をつくべし、恨めしくはおぼすとも、かつはその恨みをおぼしけちて、思ひいれ玉ふなと也、

哥今も見て云々卅五のひら　おのがをしへ子稻掛ノ大平がいはく、此はじめの句は、古今集に、あな戀し今も見てしが云々の哥によりてよめる也、然らざれば、今もといふ詞、いたづら也、さてかの哥の一首のこゝろをもちて見るべき哥也、といへり、

「つらき人しもぞ云々卅六のひら　「天のとをおし明方の月見れば、うき人しもぞ戀しかりける、新古今集に入たる古哥也、うき人をつらき人、戀しをあはれとかへて引る也、しもこそはとある本はわろし、しもぞとある本どもによるべし、

あまりのなんも云々同　ゆゑよしのあまり過たる難也、これをかの御息所にあてられたる注は、さらにかなはず、

御袖もひきはなち玉はず卅九のひら　いとしば〳〵涙をのごひ玉ふさま也、

あいなだのみ四十のひら　いかにあらむもしりがたき、行末の事を、何の思ひわきもなく、うちつけて頼みにする也、此詞、いづれも皆其意也、

めをおししぼりつゝ四十一のひら　涙の出るを、しひておさへのごふが、ぬれたる物を、しぼるがごとくなるをいふ也、拾遺の説ひがこと也、

らう〳〵しう四十五のひら　此詞、上にも下にも、巻々にいと多きを、こゝにいはむ、これは功勞の勞にて、俗言に、いふ物事功者なる事也、こゝも碁うちへんつきのしざまの、さとく功者なるよし也、さて又らうたしといふ詞は、別にして、その意いたくかはれり、思ひまがふべからず、

思ひよりぬ惟光云々四十七のひら　こゝに惟光といへると、心得ず、其故は、思ひよりぬといふも、惟光なれば、さらに又惟光といふべきよしなければ也、さればこれは、思ひよりぬればと有しを、ればを、惟光と寫しあやまれるなるべし、

あだになどいへば四十八のひら　なは勿の意也、

「春や來ぬるとも云々五十二のひら　拾遺の説よろしく聞ゆ、

榊　巻

いでや三のひら　此詞いづこにても、俗言に、いやもうといふ所につかひたり、其中に、輕きと重きとあり、俗言のいやもうも同じこと也、こゝなるは重し、いやもう逢奉らじとは也、引哥、詞の例にはあれども、かの哥によれることにはあらず、注ひがこと也、

たけからねば五のひら　つよくよきこともあらねばといふ意也、此詞みな此意也、又たけきことゝは、ねをのみなき給ふ、などいへる所あり、それはたゞひたすら泣クことをいへるにて、泣クより外には、つよくよきしかたもなきよしにいへる詞也、こゝの注は、他の例をも考へ合せざる、みだりごと也、

哥神垣は云々同　湖月師說よろし、

八省に十一のひら　八省院は、大極殿の惣構へ也、こゝは其築垣の邊に、出ッ車をたてつゞけたるをいへり、注無用の事共のみにて、意明らかならず、

くらう出玉ひて同　くらくなりて出玉ふ也、次にいとくらうとある、いよ〳〵くらくなれるよしにて、いとゝいへり、一本に、くぢうと有、宮中也、

いときうに十四のひら　俗にいふ氣のみじかき也、

哥かげひろみ云々十五のひら　三の句、枯ぬればと有べきを、けんと疑ひたるは、院の帝にたとへながらも此松は、全く枯はせざれば也、四の句は、后女御たちの、ほか〳〵へうつり給ふたとへ也、

とのゐもの、袋十六のひら　拾遺にいへるがごとし、猶とのゐ物といふことは、これかれ物に見えて、まがひなし、又藤原經衡集に、越中守となりて、宇治殿にて、同じ所によるふして、とのゐ物をとりかへて、袋にいれて侍りける、かへすとて云々とある、これに袋も見えて、明らかなり、

おぼしつめたる十七のひら　つめは、集め也、今までいろ〳〵の事を也、

たちまふ同　まふは、ふるまふのまふにて、即チふるまふと同じ、

又此わたりに云々廿のひら　是より、源氏君のおぼす心也、地よりいふにあらず、このゐづかさは、こゝにては、宿直したる大將次將の中の上首をいふ也、さてすべての意は、とのゐ申シする者の、こゝに來たるは、我を尋ねて來たるにはあらず、我ならで、外に又次將などの、かくろへゐるを、尋ね來つるなるべし、といへる也、かくろへたるとは、忍びて女房の局などに、入ふしてあるなどをいふ也、花鳥、又云クのかたの說は、下にをかしき物からとあるにかなはず、

はらぎたなきかたへの云々同　はらぎたなきは、心のあしき也、かたへとは、此とのゐ申シする者の傍輩をいふ也、さてさやうに忍びかくれてある人の所を、敎へおこするが、はらぎたなき也、俗言に、いぢのわろきといふもの也、はらぎたなきを無骨なるとある注は、たがへり、

をかしきものから云々同　源氏君を尋ね來たるにはあらざれども、源氏君も、近衞司にて、大將なる故に、何とかや我を尋ねきつるやうなるが、をかしくおぼえながら、又何とかや聞ぐるしくおぼす也、

哥なげきつゝ云々同　夜は明クと告れども、我むねは開アクべき時ぞともなきよし也、時といふは、夜のあくる時刻の方へ、ひびかせたる詞也、細流たがへり、

めづらしくうれしきにも廿三のひら　昨夜逢給ひしかども、御顏は見給はざりし故に、今見玉ふは、めづらしき也、

こよひも明ゆく廿五のひら　さきの夜は、實も有し如くにも聞えたれども、宮いとこよなくもてはなれ聞え玉ひてとあるは、實なかりしをいへる也、こゝにこよひもとあるにて、前の夜も、實なかりし事しらる、

哥あふことの云々同　かたきとは、難きに敵をそへたり、返しの下の句、これをうけたりと、拾遺にいへるがごとし、さて敵とは、逢フ事の難き敵といふ意をもていへる也、けふにかぎらずはとは、上にやがてうせ侍りなんとあるごとく、我命は、今日限リなるべけれども、逢事の難き敵ぞと思ふ、執着の心の、今日に限らで殘らばの意なり、上に、又此世ならぬ罪となり侍りぬべきとある是也、四の句は、今より後生々世々也、諸抄に、かたきを、只難きとのみ見て、敵のさ

たなきは、次に、御ほだしにもこいひ、返哥に、あたこあるなごにかなはず、拾遺の説の中にも、いさゝかたがへる所まじれり、

いふよしなき廿六のひら　いはんかたなしこ、ほめたる詞也、傍注ひがこ也、

宮をいこ戀しう廿九のひら　宮は東宮也、源氏君の、東宮へ參り給はねば、藤壺の、いかゞこおぼしめす故に、然思はせ奉らんために、戀しけれごねんじて、參り給はぬ也、此宮こいへる、もし藤壺の御事ならんには、つたなき文也、藤壺ならば、宮をこいふこ、なくてよろし、

からく\こならしつゝ同　閼伽奉る時に、花皿をすゝぎて、重ねて、からく\こならす作法ありこぞ、たゞおのづからなる音にはあらず、

哥あさぢふの云々卅のひら　初二句に、よものあらしを合せて、上に、所からいこゞ世ノ中のつねなさをおぼし明して、こある心をもて見べし、

哥風ふけば云々同　色かはるは、源氏君の心のかはれるよし也、下【卅三のひら】に色かはるこ有しも云々こいへるにてしるべし、注、こゝもかしこもたがへり、さゝがには、さゝがにの糸也、然らざれば、みだるゝこいふに緣なし、

「霞も人の廿七のひら　此哥の事、拾遺にいへるがごこし、

哥こがらしの云々卅八のひら　木枯は、木葉をふきやる物なる故にその使に、源氏君のおこづれの言の葉を待しよし也、

そこらつごひ玉へる人の四十一のひら　これは、つごひたる人のこあるべき文なり、中宮をおき奉りて外は、皆女房のみなれば、地の詞に、給ふこいふべき例にあらざれば也、

哥月のすむ云々四十二のひら　月のすむ雲ゐこは、中宮の、此世をはなれて、出家し給ひて、心をすまし給へるをいふ、したふは、源氏君の、みづからしたひ玉ふにて、中宮の出家し給ふをうらやみて、我も出家すこも、東宮の御事に、なほ心はまよはむこ也、次なる語にて心得べし、細流のごくにては、かひなくこいひ、うらやましさはこいへるにかなはず、さ

て此哥よみ玉へるは、人もきく所なれば、四の句、表はたゞ、此世のやみ也、
御だうの西の對の南に四十四のひら　御だうの、とよみきるべし、西ノ對の南の方、すこしはなれたる所に、此御堂のあるよし也、
湖月本、にしのみなみにとあるは、誤也、
猶ひきかへぬ物にて同　ひきとは、靑馬の縁の言にていへり、此物がたりの文、此たぐひ多し、心をつくべし、
くしいたげに同　くしは屈し也、くし給ともあるに同じ、
つかさめし四十五のひら　あがためしつかさめしといふは、事を分ていふ時の名にこそあれ、ひとつにいへば、春のも秋のも、ともにつかさめしにて、論なきと也、後撰集春下詞書に、やよひにうるふ月あるとし、つかさめしのころ云々、此外にも、春のをも、つかさめしといへる、常のこと也、
そればかりやまだ云々五十一のひら　まだはいまだ也、かの周公のいへるは、既に成王の世になりての事なる故に、成王の伯父といへるを、今はいまだ東宮の御世にあらざれば、まだとはいふ也、さて何とかのたまはんとは、東宮の御父なれども、父とはえのたまはじの意也、湖月師說はいかゞ、
ひたおもて五十四のひら　遠慮もなく、ひたすらにそれと顯はす也、
しいでられじとなん五十五のひら　となんは、下のうたがひ侍らざりつるといふへかゝれり、
そのほいたがふさまにて五十六のひら　源氏君へと、皆人の心よせしほいの違ふ也、かくてもさふらひ玉ふとは、宮づかへし給ふをいふ、

花散里卷

哥たちばなの云々五のひら　萬葉八に「たちばなの花ちる里のほとゝぎすかた戀しつゝなく日しぞおほき、
哥人めなく云々同　下句の意、傍注のごくならんとは聞ゆれども、そをひきのつまとなるとは、心得ぬいひざま也、

須磨卷

ひたゝけたらん二のひら　俗言に、とりしまりなく、ばつとしたるといふこと也、叨ノ字滔ノ字なども、其意にてかなへり、人しげくにぎはゝしき心といふは、みだり也、此詞、上ノ若菜巻にも見ゆ、考へ合すべし、又拾遺にいへるをも考ふべし、

こしのべて五のひら　花鳥よろし、河海誤也、

おこたり六のひら　俗言に、あやまりといふこと也、我ヵあやまりにて候と、謝するを、おこたり申すといひ、又今ノ世にいふ誤り證文を、昔は怠状といへり、

さまことなる罪同　俗言に、かくべつなる罪といふことにて、たゞ重き罪なるよし也、新法といふ注は、ひがこと也、

いひ出るふし有てこそ云々七のひら　此詞をもて思へば、源氏君の遠流のさだめは、さして何の罪といふことはなかりしと聞えたり、

いへばえに同　六帖に、恨、「いへばえにいはねばくるし世ノ中をなげきてのみもつくすべき哉、　此哥こゝによくかなへり、えには、拾遺の説も、さることなれども、猶思ふに、えは得、には不ヌの意にて、いひえずといふことならんか、万葉などに、不知をしらに、不有をあらになど、不をにといへる例多ければ也、さればいへばえにも、古言ののこれるにやあらむ、

たゝみところ〳〵云々十のひら　引かへすとは、敷たる疊を、あげて、うらを顯はして、壁などによせて、たておくをいふ也、臺盤につく人なくて、疊も不用なる故にかくのごとし、注は、かへすといふを、心得たがへて、不審とはいへる也、

わかきわらはべ同　童の中にも、稚ワカきをいふ、

涙をひとめうけて十二のひら　拾遺に云ク、涙の目にみちたるをいへり、

心のどまるよなくこそ十三のひら　と°も濁るべし、心ののどまる也、

例の月の云々同　女君の心を、册子地よりいふ語也、例のは、あはれ也といふへかゝれり、いつもかやうに、曉に源氏君のかへり給ふ別れは、あはれなるを、今朝も例のあはれ也といふ也、よそへられては、源氏君の、別れてかへり玉ふが、入月によそへられて也、注ひがこと也、哥にても心得べし、

心をくらす十四のひら　心をかきくらす也、後(オク)らすにはあらず、
あけぐれ同　くれは闇(クラ)き也、あけぐれとは、夜の明方の、まだくらきほどをいふ、くれといふを、くらくなると〻のみ心得るから、あしき注有、

哥わかれしに云々十七のひら　このよのうさといふに、子の意をこめて、東宮の御事也、東宮に別れ奉るうさは、又まされりと也、さて表はたゞ此度のうさ也、

哥なきかげや云々十九のひら　月の雲がくる〻は、人のかなしみによりて、涙に目のかきくる〻によそへて、故院の御心にも、源氏君の此度の御事を、かなしくおぼしめして、涙にくれさせ給ふにやの意也、注に、藤壺の密通の事を思ひ玉ふなるべしとあるはたがへり、もし其意ならば、前後の詞に、かならずさる意の詞有べきに、一言もなきを思ふべし、

哥さきてとく云々廿のひら　行春といふに、別れゆく源氏君をそへたり、然らざれば、來む春はとなくては、見よといふにかなはず、

はかなき世をわかれなば廿一のひら　死なばといふ也、

まだ申の時ばかりに云々廿二のひら　京をたち給ひし日の事にはあらず、難波より船出し給へる日の申の時也、そも〳〵京よりは、難波までも、一日ばかりにゆく道なるに、いかなるおひ風なればとて、須磨まで、其日にはいかでかいたらむ、作物語ながら、さやうのてづ〻なることは、かくべきにあらず、かの浦さしも遠き國にもあらざれば、道のほどなど、紫式部、人にきゝても、大かたしるべきわざなるをや、

哥ふる里を云々廿三のひら　結とのかは、拾遺にいへるごとく、疑のか也、

大殿(オホイドノ)にも宰相のめのとにも廿五のひら　此二つのにもは、大殿と宰相ノ乳母とを並べていふにはあらず、上なるは、二條院入道の宮などに並べて、大殿にも也、下なるは、其大殿への御文どもの中に、此宰相乳母にも也、

御心をしづめ玉ひて同　此下の文、湖月の本はわろし、其故は、源氏君の御身の祈りの事は、上に御いのりの事などは聞ゆとあ

る、是なれば、又こゝにいふべきにあらず、かつはかくといふより下は、もはら紫上の御身の祈ﾘ也、かつはといへるに心をつくべし、他本どもの文は、四の巻に出せるがごとし、

きくほどは廿六のひら　人にきく道の程は、近けれど也、

御すくせのほどを云々同　東宮に生れ玉へる宿縁也、

かつはめやすく云々廿七のひら　まかせずといふまでは、源氏君の御心むけ也、かつは云々は、藤壺の、御みづからの事也、かつはといふに、心をつくべし、かつは我もといふ言也、又もてかくし給へるぞかしといはで、もてかくしつるといふも、御みづからの事なる故也、

哥鹽たるゝ云々同　此哥、三四一二五と、句を次第して心得べし、

哥浦にたく云々同　二の句、海人といひかけて、数多(アマタ)に也、拾遺もわろし、

大殿の若君の廿八のひら　大殿のと、切てよむべし、大殿よりの御返事に、若君の御事云々といふ意也、

哥うきめかる云々廿九のひら　結句、うら人とあるべきを、にてといへるに、意あり、もしほをたれ玉ふ、わびしさを以て、こなたをも、おしはかり玉へ也、

いけるよにとは卅二のひら　引哥あるべし、いまだ思ひえず、河海に引れたる哥はかなはず、引哥しられざる故に、げにといふ言も、聞えがたし、

つくりゑを云々卅四のひら　河海のごとし、弄花細流はわろし、其故は、源氏君の墨書の繪の、またなくおかしく出來たる故に、早く彩色をせさせて見まほしきよし也、こゝろもとながるといふも、其意の言也、もし弄花細流の説のごとくにては、源氏君の繪を、ほめたる意もなく、かへりて源氏君の墨書、おかしからざる故に、千枝常則が繪を思ふになる也、

哥うしとのみ云々卅六のひら　弄花よろし、細流はたがへり、

きんの聲風につきて云々卅七のひら　琴の音は、いとかすかなる物なるに、五節がのれる船まで聞えたるといかゞと、疑ふ人あ

るは、古への上手のきんの音のやうをしらざる也、いとかすかなるやうなれども、上手のひくには、思ひの外に、遠きところまで、よく聞えし也、今の世、琴(キン)の傳へ絕たるを、近きほど、もろこしの國の後ノ世の琴ひく人、まれ〳〵に有て、みづからは心をやりて、上手と思ふめるもあれど、そはわづかにひくといふばかりにこそあらめ、さらに古への上手の足もとにもよるべからねば、さることもがらの、とかくいにしへをうたがふは、あぢきなきわざ也、

うまやのをさに云々 廿八のひら　諸抄の說いづれも、こゝの語にかなひがたし、猶よく考ふべきこと也、

いかでかはうちぐしては云々 四十のひら　拾遺に、いかでかはの下にて、句を切べしとまではいへれど、句を切ても、猶此所語ととのはず、いかでかはの下に、かならずこもじ有べし、落たるなるべし、いかでかはと、思ひかへし玉ふ也、

哥 いづかたの云々 四十一のひら　われもとては、下句の意と、かけあはざるが如し、もゝじはたゞ、雲路ばかりへかけて心得べし、まよふといふへはかゝらず、月はまよふ物にあらざれば也、注のまゝにては、もゝじの意明らかならず、すべて古への哥は、はといふべきを、はにては優ならずとて、もといふやうなる、みだりなる事はなし、月も雲路をゆく物なる故に、雲路に我もとは云也、

哥 友千鳥云々 同　此友千鳥は、源氏君の、ねざめの友とし給ふよしなり、二の句は、ひとりねざめして泣玉ふに、もろともに千鳥も鳴ゝよし也、たのもしは、我ひとりと思へるに、又泣ゝ友も有て、たのもしき也、かくのごとく見ざれば、たのもしといふと聞えず、注のごとくにては、四の句にうとく、又言たらず、

いかに物し給ふ君ぞ 四十三のひら　注おだやかならず聞ゆ、もしこれは、源氏君の事をいへるにて、源氏君をいかに物し給ふ君と思ひて、さはいはるゝとぞといふ意ならんか、猶よくかむかふべし、

からめきたり 四十五のひら　よのつねにとなるよし也、必しももろこしのさまといふにはあらず、すべてから某(ナニ)と、物の名に多くいふも然り、鳥のから聲になくなどもいひ、又明石巻に、入道の琴ひく手づかひをも、からめきといへり、

かひつもの 四十六のひら　貝つ物也、大神宮延曆ノ儀式帳に、貝物とある是也、

くらかなにぞなる同 倉のやうに見えて、たしかに倉にもあらず、かりそめなるさま也、下に人かなにぞとだに云々とも有、
拾遺文字のさだ、さして用なし、

哥たづかなき云々四十八のひら 此初句の事、拾遺にくはしくわきまへたるは、さることなれども、續日本紀十七の巻宣命に、拙久(ツタナク)多豆何奈伎(タヅガナキ)朕時爾(ワガトキニ)云々、此たづがなきも、たづきなきの意と聞え、又六帖鶴の哥に、かの万葉十五の巻の、たづがなきの哥を出せるに、初句たづきなきと有り、しかれば紫式部が、心得誤れるにはあらず、より所はあると也、

やよひのついたちに云々同 ついたちは、六日七日ごろまでをいふ、さて上巳の祓は、上の巳の日にするを、ついたちのほどに、その巳の日のあるを、いできたるとはいへる也、

哥しらざりし云々同 上句、思ひかけざりしかゝる海邊に、さすらへ來ての意也、そを人がたによそへていふ故に、大海の原に云々とはいへる也、

哥八百萬云々四十九のひら 四の句も、祓ノ詞によれり、

ふすまをはりたらんやうに同 衾はひかる物にはあらざれども、電光の廣く大きにひかるさまを、たとへていへる也、細流ひがと也、

明石巻

空のみだれ二のひら すべて雨風などをいふ、さみだれといふも、五月のころのみだれといふと也、花鳥の說、こと〴〵し、

我ながらかたじけなく三のひら かたじけなしは、俗言に、おそれおほきなどいふやうの意にて、他より思ふことなるを、今みづから然おぼす也、さる故に我ながらといふ也、注に、はづかしき心とあるは、たがへり、かたじけなしといふ詞、はづかしき意に用ひたる例、さらになし、

雨のあししめり六のひら 拾遺に、神代紀に衰(シメル)、

いりもみつる七のひら 風のひまなく吹しきりて、はげしきさま、物を熬(イル)ごとく又揉(モム)がごとくなるをいふ也、此詞野分巻【六のひ

ら】にもあり、

そのつみをふるほど同　此世にて、おのづから犯したる罪の報に、苦を受る、その罪の盡(ツク)るまでのあひだ也、

かゝるさわぎ八のひら　雷雨大風のさわぎ也、

ついたちの日の夢に九のひら　これをかの上已の日の事といふ注は、たがへり、上已は、ついたちのほどゝ有て、朔日の日よりは後と聞ゆ、さればこゝにいへるさまも、雨風いかづちの變は、夢見たる日より後の事也、

うつゝの人の云々十のひら　細流よろし、

はかなきことをもかつ見つゝ同　此下に、我より齢高き人のいふことを、そむくべきにあらず、といふことをふくめて心得べし、かの雨風雷の變にあひて、せんかたなく悲しとおぼせる、みづからの心を、なきことゝはいふなり、さる故に、よはひまされる人にしたがふべきことゝはおぼせる也、

かぎりなくよろこび云々十一のひら　これは入道のやうに聞ゆるを、下に、ほのかに見奉るより云々とあるは、入道は明石に在て、はじめて源氏君を見奉れるやうなれば、御迎に参れるは、入道にはあらで、使のやうにも思はる、

今はいみしき道に云々十二のひら　今はと言は、下の、つかはすといふこころへかゝれり、今はとて、京へかへしつかはす也、

いひしにたがふ十四のひら　此詞、蓬生巻にも有て、そこには、「いとどこそまさりにまされわすれじといひしにたがふことのつらさは、といふ哥を、同じ河海に引れたり、かくこゝとかしこと違へるにても、河海の引哥の、いとみだりにして、頼みがたきほどをしるべし、

哥あはと見る云々十六のひら　あはとの意、拾遺にくはしくいへるが如し、猶又やまと物語にも、「はま千鳥とびゆくかぎり有ければ雲たつ山をあはとこそ見れ、人まろ集といふ物にも、「梢のみあはと見えつゝはゝきゞの本をもとより見る人ぞなきなども有り、はやくの抄どもは、此詞をしらずして、みだりに注せられたる物也、さてこゝの哥の初句は、かの躬恒が、彼(カレ)はと見たりしをいひて、今源氏君の、みづから見玉ふをかねたる也、さる故に見しとはいはずして、見るとはいへり、三

の句のさへは、かの躬恒があはと見し時のあはれさへ也、上にあはとはるかにと、誦し給へる、これ其時のあはれを思ひやり玉へるもの也、拾遺、此さへの注は誤也、

延喜の御手より云々 十八のひら　これを桐壺の帝とあてゝ見るはわろし、桐壺ノ帝をさして申すにはあらず、たゞ延喜と見てあるべき也、其故は、今入道、源氏君に對ひて、父帝の御事を、よそげに延喜の御手などは申すべきにあらず、もし桐壺ノ帝ならば、故院の御手より、などこそいふべけれ、すべて准據は、たゞおほやうに見るべき也、事ごとにあつべきにあらず、

松風を聞わたし云々 同　わが女(ムスメ)の箏を、さやうによろしきやうに思ひ侍るは、わがひが耳にて、それは箏にはあらず、松風の聲を、女のひく箏の音ぞと、聞たがへ侍るにやと、卑下して申す也、

かきなでの心やり 十九のひら　かいなでとも有て、これは琴(コト)をひく事には限らず、萬の藝にいふヿにて、たゞ物のうはべを撫(ナデ)たるはかりにて、中のヿをばしらざる如く、深き事はなく、たゞ一わたりなるをいふ也、注ひがヿ也、

來ゐたりけるもしるければ 廿四のひら　御使の來むと、思ひまうけて、待うけに來居たるに、案のごとく、御使の來たればといふ意也、注、かやうのしるしといふ詞の例をしらざるひがヿ也、次の語へのつゞきもかなはず、

さるは 同　上を受て、さあるはといふヿにて、俗言に、それはといふに同じ、

哥 思ふらむ云々 廿五のひら　下句、まだ我を見もせぬ人の云々、といへる注よろし、

みかどの御夢に云々 廿七のひら　上文、入道の夢に、十三日にあらたなるしるし見せむとある、同じ日、京にもかく有し也、又院の帝、源氏君の夢に見えさせ玉ひしは、十二日の夜なれば、それより京にのぼらせ給へるさまに書るものなり、

よこもりて 廿八のひら　こしわかき人の、行末の齡の多きをいふ、注ども、此詞の例をしられざる、ひがヿ也、

此ごろの浪の音に 廿九のひら　下に、浪の聲、秋の風には、猶ひゞきヿこそなり、

げに物思ひしらん人にこそ 卅一のひら　拾遺にいへるがごとし、

引ならされたる 同　注ども、こゝには用なき事のごとし、もしは、明石ノ上の、奥ざまへ引入ルにつきて、几帳の紐のひかれ

たるが、ふれて、箏の鳴りたる事に見られてにやあらん、さやうにも聞ゆれども、もし然らば、その明石上の引入る事をいはでは、聞えず、そのうへ次に、云々程見えてとあるにかなはず、もし鳴らされたるならば、ほどしられてなど有べきわざなり、されば猶近くおかれたる箏のうへに、几帳の紐の、うちかゝりてあるさまを、見玉へるさまなるべし、

何事をか心をも廿四のひら　をかは、にかの誤なるべし、

哥かきつめて云々廿八のひら　三の句おだやかならざる哥也、

哥こしへつる云々四十のひら　あれてうきといひかけて、うき波のかへるは、源氏君の京にかへり給ふとをかねて、下句の意は、浪のかへる方の沖に、身をなげてや死なんの意也、上に今ぞまことに身もなげつべきこゝちする、とあると同じ、思ひ合すべし、

今はと世を云々四十一のひら　世の事は、思ひはなれたる身なれども、別れのかなしきよし也、

すくよかにおきゐて四十三のひら　いさゝかもねず、おきゐるをいふなるべし、

もとの御位あらたまりて四十四のひら　もとは参議大将なりしを、それをば改めて、此度は、權大納言に任じ給ふ也、官をも、位といへり、

哥なげきつゝ云々四十六のひら　拾遺にいへるがごとし、注どもに、心得がたき哥也とあるは、万葉にうとき故也、又我なげく息と思ひ玉へとあるも、かなたこなたのたがひあり、人を思ひやるとあるを、いかゞ見られけん、

みをつくしの巻

故院にさふらひしせんじ九のひら　宣旨は職也、名といへるは誤也、

はかなきさまにて同　湖月師說よろし、

うへの宮づかへ十のひら　御前ちかくつかふると也、桐壺巻に、おしなべてのうへみやづかへし給ふべききはにはあらざりけり、

哥うちつけの同　拾遺にいはく、乳つけをそへたり、

御はかし云々十一のひら　河海云々、此物語は、一條帝の御世に出來たると、紫式部日記にてもしるければ、長和の例といへるは、たがへり、

ここにあらはして云々十二のひら　姫君の生れ玉へる事を也、ことには殊に也、

さこそあなれ同　抄とてあげたる說よろし、細流弄花はたがへり、

ほの見しこゝのねの十三のひら　見しの下に、こゝの二字、今一つ有しが、おちたるか、又は見しは、聞しを誤れるか、本のまゝにてはいかゞ也、

われはわれと同　源氏君は源氏君と、明石の事を思ひ玉ひ、我は又我と、別にながめし給ふ也、

哥たれにより云々十四のひら　海山に云々は、須磨明石の艱難をいへり、

身もいとたけく云々十六のひら　利運に思ふ也、すべて此たけくといふ詞、注釋しがたき詞也、こゝろ〳〵にあり、考へ合せて、みづから心にあぢはひしるべし、傍注ひがこと也、

あはれ人はかうこそ云々めのとのことは云々同　此所、女の情を、よくおもしろく書たり、心をつくべし、

哥かずならぬ云々同　注に、源氏のたまさかにも云々といへる、其意はなき哥也、

あはれとながやかに云々同　深く歎息して、あゝはれとのたまふ聲の長き也、

まとは同　こはたゞかばかりのといふへかゝれり、はもじにとある本は誤也、

めづらしく御めおどろく云々十七のひら　花やかにめづらしく、目おどろくやうなる事なく、さやうの文などおこせて、驚かし玉ふやうなるともなき間、おのづからおこたり玉ふ也、次にいまめかしう云々とある意也、

もし思ふさまに十九のひら　湖月本、しもじを落せり、

雲ゐはるかに廿四のひら　抄とある說よろし、

哥あらかりし云々同　初二句は、かの風雨雷の變の事也、孟津に、惡后の心むけ云々はわろし、さて此哥、二の句の下に、

詞たらず、意をふくめて見べし、

又の日ぞよろし廿六のひら　日ぞの下に、今一つ日の字有しが、落たるなるべし、

もしやとおぼえて卅のひら　えは、しの誤なるべし、

なほあらずおぼし卅三のひら　たゞにもあらず也、あらずを、あかずと書る本は誤也、

かず〳〵なる御うしろみ卅五のひら　かず〳〵は、ねんごろなる也、此事別に委くいへり、

心にものこすまじうこそは卅六のひら　心は、御息所のみづからの心、のこすは、いはまほしき事を、いはでやむ也、さてこゝの意は、御息所の御心に、もし源氏君を頼もしからずおぼさば、此遺言も、心にのこして、のたまふまじきに、さはおぼさず、心にのこさず、いひおきてよろしからんと、源氏君を、さすがにたのもしくおぼしたればこそ、此遺言もし給ひけめの意也、注に、源氏も齋宮の御事を、御心にかけて、のこしすてまじく云々といへるは、ひがことなり、のこすといへる詞にかなはず、遺ノ字につきては、さる意もあれども、かやうの見すつるやうの事を、のこすといへること、さらになし、

かやうのことわざとも廿七のひら　かやうのことよみて、わざとも讀べし、湖月、とものとを濁れるは、ひがこと也、すべてかの木、清濁いと〳〵みだりなる中に、これらは清むと濁るとにて、意もたがふことぞかし、

さらば御けしき有て云々同　薄雲ノ女院の、前齋宮を入内せしめ給はんとおぼしめす御氣色有て、齋宮をかずまへ給はゞ、源氏はたゞそれをもよほし奉る詞をそふるばかりの趣になし侍らんといふ也、

おほいとのゝ御子にて廿八のひら　これは權中納言は、大殿の御子にて、御むすめの女御を、もてかしづき玉ふ、といふことなるを、弄花細流に、御子といふを、女御のことゝ見られたるはたがへり、

蓬生巻

かいはきなどする人もなし六のひら　なしは、決てなくの誤也、なしといひては、いとわろきところ也、

はやう此宮なりけり十八のひら　此はやうは、俗言に、もとよりそのはずぢやといふ意也、

人たがへしては上八のひら　もし今は住ム人のかはりたる事もあらんかとおぼして、かくのたまふ也、上にこゝに有し人は云々、うしろやすくをと十九のひら　上にもし狐などの云々とあるごとく、惟光をあやぶみたるさまなる故に、我をあやぶみ給ふな、うしろやすく思ひ玉へといふなり、注此詞にかなはず、

のたまひすべして廿二のひら　河海に、すべらかして也といひ、或抄に、いひのがれ玉ふ也といへるがごとし、衣をぬぎすべすといふと、同じこゝろばへなり、湖月本、すぐしてとあるは、誤也、

丁こぼちたる廿三のひら　丁は帳也、たうとある本は誤也、塔も堂も室もよしなし、顔叔子が事も、こゝにさらによしなきを也、河海或説の桂ノ中納言ノ物語の事、こゝによくあたれり、

つくらせ給をそこになん廿四のひら　給ツは、侍ルを誤れる也、

關屋卷

つくはねの山を云々二のひら　これはかの甲斐がねをの哥に、人にもがもやとあるを、やがて人にして、つくは山を吹こす風といふは、すなはち人のゆき通ふ使の事也、人の往來の使のついではあれども、うきたるこゝちして、もし世にもれやせんと、あやふさにといふ意也、

關屋よりさとはづれ出たる三のひら　源氏君の御前の行列の人々の、關屋をはづれて出たるさまの、はなやかに見えたる也、さとは、さつと出たるけしきをいへる也、注ども、いみじきひがと也、

哥ゆくとくと云々同　空蟬のみづからの事にて、常陸へゆくとても、今又かへりくとても、涙をせきとめずといふ也、二つのとは、とての意也、注に、源氏と空蟬と、往クと來ルと行ちがひて云々、とあるはひが事也、源氏君の、家を思ひて、涙をせきとめ給ふと、みづからよむべき事かは、又ゆきちがひてせきとめがたきとは、いかなる事にか、心得ず、

繪合卷

こゝろ葉三のひら　箱にまれ何にまれ、物を入れて、紐を結びたるところに、かざりに花の作り枝を着ツクるを、心葉といへり、さ

て後には、それより轉りて、必しも紐を結びたる所ならでも、物にさゝる作ッ花を立ッるをもいへり、とも〳〵心葉は、右のごとくにて、まがひなき物なるを、諸抄の說、さだかならざるさまにいはれたるは、いかなることにか、いふかし、

哥わかるとて云々四のひら　かへりては、却てといふ詞にて、京に歸り給へることをかねたり、さて却てかなしきとは、はるかにのたまひし一言は、つらけれども、却てかなしき也、此度の御哥の、かたじけなき御心ざしに、かの一言も、今ぞ却てあはれにかなしく思ひ奉るとの意也、

にくきことをさへ云々同　齋宮の色情の方までを、おぼしやるをいへり、

ものなりければ五のひら　ばは、とを寫し誤れる也、物なりけれど、思ひ出聞え玉ふといふ語の意なれば也、ばにては、語とゝのはず、一本に、此字なきもわろし、必どゝ有ルべきところ也、

さすがにうら〳〵の云々九のひら　此さすがには、上のかたはなるまじき、とあるにあてゝ見べし、とかたはなるまじきをとは、えり給へども、さすがに浦々の、くだ〳〵しきさまの、よく見えたるをと也、

かみ繪十四のひら　障子屛風などの繪に對して、たゞ書たるを、紙繪とはいへる也、花鳥の說いかゞ、

同じき心葉の十五のひら　おなじきを、拾遺に、沈の箱に、沈の心葉をさしたるなりといへるは、ひがこと也、よのつねの心葉にかはることなく、同じさまなれども、しざまのいまめかしき也、

御哥身こそかく云々同　しめの外とは、禁裏をはなれておはします意にて、しめ繩をかねたり、そのかみに、神をかねたり、又心の內の內に、禁中の意あり、しめの外と、相對へて心得べし、

かみゑはかぎり有て十七のひら　諸抄かみ繪といふを、絹に對へていふと心得られたる故に、ことわり穩ならず、たとひ絹は、はたばり廣しといへども、紙といくばくのけぢめかあらん、紙繪の事、上にいへるがごとし、たゞ紙をつぎて書たる卷物などは、上下のみじかくて、障子屛風などの繪のごとくに、廣くゆたかには書がたきよし也、

左なほ數ひとつ云々十八のひら　なほ數一つあるはてに、左須磨ノ卷いできたりといふこと也、左といふを、はてにの下にうつし

て心得べし、細流の説みだり也、

その世に心ぐるし云々同　源氏君の、須磨におはするを、京なる人々の、心ぐるしかなしと、其時におぼせしよりもまさりて、今此繪を見ればいよ〳〵也、

さうの手にかんなの十九のひら　下なるの。もじは、寫し誤なるべし、かんなをとあらでは、語とゝのはず、もしの。ならば、所所まじりたるなどあるべし、

左かつになりぬ同　かつは、かちと有べき也、こはもと勝と書るを、誤れる也、

おれもの廿のひら　拾遺の説いかゞ、おれは、即チおろかのおろと同言也、

あとをくらうなしつべかめるは廿二のひら　いづ方ともゆくへなく、にげうするをいひて、今ノ世の俗言に、はだしでにげるといふに、よくあたれり、

松　風　巻

つなし四のひら　心得がたき詞也、注さらにあたらぬこと也、拾遺の、魚の名のつなしの説も、とりがたし、

ゆゝしきまで八のひら　此詞は、下のつゝみあへずへかゝれり、つゝみあへずして、泣クさまの、ゆゝしきまで見ゆる也、さて父上の心ざまなどといふは、かた時見奉らでは云々へかゝれり、すべてかやうの所、その語のすぢを、よくわけあきらめて見べし、

天にうまるゝ人の云々十のひら　此所の意、拾遺にいへるがごとし、さて一時とは、天人の報つきて、三途にかへる時をさしていへる也、一といふ言は、入道の今の別れの方につきていへる也、今わかるゝかなしさは、たゞ一時のかなしさにこそあれ、といふ意にていへり、

同身をかへて云々十三のひら　初句は、昔此所に住し時と、身のさまのかはりたる事と、入道と別れて、ひとりになれるとゝをかねたり、ひとりかへれるといふにて知ルべし、下句は、明石ノ上の琴の音をかねたり、返哥にてしるべし、四の句は、明

石にて聞しにかはらぬ琴の音こ也、さて昔住し時に聞し松風の意をもかねたるべし、

くらべくるしき十三のひら　人の心のこりぐるしく、まじはりにくきをいふ、

心のやみも同　姫君のうへを思ふ思ひにて、子を思ふ心也、次にやがて、云々若君を見玉ふも、こあるにてもしるべし、

水の音なひかどがましう聞ゆ十六のひら　尼公の、親王の昔をかたるを、清水も聞て、むかしを戀て泣くごこく也こいふ也、拾遺に引たる、同じ紫式部の哥にて心得べし、

哥いさらるは云々同　いさらる、卽上なる哥のし水也、はやくは、流るゝ水の縁の詞にていへり、下句は、し水にこひかけたる趣也、おもがはりは、尼公年を經てかへられたれば、昔こはおもがはりせる歟こゝふ也、女なりしが、今は尼なるをいふやうに注せられたるは、たがへり、さてはやこいふにかなはず、

しらべもかはらず十七のひら　調子もかはらずしてある也、

哥かはらじこ云々同　四の句、表は松風にて、卽我がひく琴の音の事也、

さりげなく云々十八のひら　參りたる殿上人たちの、思はんこころをはゞかりて、なごりをしきさまを見せじこて也、

はたかくれたる十九のひら　此はたの意、上なりし巻に、はた寒きこあるこころに、いへるがごこし、

我も思ひなきにしもあらざりしを廿一のひら　此段の意を考るに、此ゆげいのぜうも、はじめ須磨にありしほごなご、良清がやうに、明石ノ上に心をかけたりしなるべし、其事を今けしきばむを、女房の、さこはえさこらずして、たゞ大かたの事こ心得て、答へたる故に、こよなしこ思へる也、すべてこよなしこいふ詞は、殊の外にたがひたることなれば、こゝも其意にて、今の女房の答への、我心こは、との外たがへるよこ思ふなり、さて此女房の、わがけしきばむ心を、えさこらざるほごに、思ふ心を、人にもえもらさで、やみぬるとゝ、あさましくおぼゆる也、此段、かくの如く見ざれば、こよなしやこいひ、あさましうこいへる詞にかなはず、又かしこけれぱえこそこいへるも、明石ノ上の事なる故也、注に、此人は、源氏君に、いみしき忠義の人なれば、明石ノ上に、さるおふけなき心はあるべきにあらずこいへるは、あたらぬと也、もし

然いはゞ、源氏ノ君の、藤壺ノ中宮朧月夜ノ君などに、密通ありしは、桐壺ノ帝朱雀院へ、孝行なりや、忠義なりや、すべて哥物語に、さやうの儒者めきたる論は、あぢきなき事なり、ましてこれは、須磨に在しほどの事と見れば、明石上は、源氏ノ君のいまだ逢給はぬほどなれば、此人の思ひかけたらん、なてふことかあらむ、又明石にてかたらひし女房を見つけてといへるも、人かげを見つけてといふ詞にかなはず、人影を見つくとは、誰にもあれ、人のあるをほのかに見つけたるにこそあれ、すべて此段の注ども、皆あたらぬ事也、

哥めぐりきて云々廿三のひら　初句は、月の縁の言にて、明石より京にかへり給へる事也、二三の句は、かの躬恒が哥の下ノ句の意也、下句は、源氏君の、明石にて、淡路嶋を見やり給ひし時の事也、

せめて見かくし廿五のひら　見まほしきさまを隱して、しひて見ぬさまにもてなすなり、

いはけなげなるしもつかた同　袴を着ざれば、腰より下のさまの、しどけなくて、幼く見ゆる也、しもつかたとは、腰をいへりとあるは、たがへり、腰より下也、

薄雲巻

いかにいひてかなど云々二のひら　本哥には、恨みての後さへとあるを、こゝは、近き所にうつりて後さへ、人のつれなくはといふ意に用ひかへたる、おもしろし、

思ひわたることなれば同　ばは、どの誤也、

又みこたち大臣の御はらといへど云々四のひら　さしむかひたるとは、今さしむかひて、そひ居る北ノ方をいへるにて、おとりの所とは、そのさしむかひたる北ノ方の、種姓の、かの親王大臣の御女よりおとりて、ひきゝよし也、さてすべての意は、たとひやむごとなき親王大臣の御女の腹の子といへども、それは、今さしむかひたる北の方の、おとりたる腹の子よりは、世の人も思ひおとし、父のもてなしも、さしむかひたる北ノ方の子ほどには、えあらぬ物ぞといふ事也、注に、此所を心得がたきやうにいひて、其説のいたく誤れるは、所にはといふ語を、あしく心得られたるより、すべてをも誤れるなるべ

し、所にはゝ、所よりはといふと同じ意にて、すべていとよく聞えたることなるをや、

哥おひそめし云々八のひら　初二句は源氏君と明石上と、契ッ深き中に、生れたる姫君なればといふ意也、さてたけくまの松は、二木なれば、源氏君と明石ノ上とにとりて、つひには我と君と、かの松のごとく、一つ所にならびゐて、もろともに、姫君の千代のおひさきを見んと也、

ものあひたる九のひら　葵ノ巻に、ことあひたるとあると同意也、かしこにいへり、

たすきひきゆひ十のひら　拾遺にいへることをも考ふべし、こゝのやうは、袴着の時に、たすきをゆふこと有と聞えたり、

まちかけて十二のひら　かはうの誤なるべし、待かけてといふは、俗言也、

たゞよのつねのおぼえに云々十三のひら　父の入道、ひがものにあらずして、よのつねのさまなる人のむすめならば、たとひすこし種姓はいやしくとも、かきまぎれて有べし、かばかりなるきはの女も、やむことなき人の北ノ方にてあるたぐひも、なきにあらざれば、さても有べしと思はるゝを、此明石ノ上は、父の入道の、ひがものなる故に、世の聞えの、殊にまぎれがたく、くるしきといふ也、次の文へつゞきて、其意明らか也、注どもみな、いみしきひがことなり、拾遺もなほ誤れり、

哥入日さす云々廿一のひら　結句やもじ心得ず、

そのころのげにと云々廿二のひら　そのころとは、春と秋とをさしていへるか、いさゝか心ゆかぬいひざま也、

いたづらなる野べの虫廿三のひら　野べに鳴虫は、聞ク人なき故に、いたづらといへり、

しのびがたきをり〳〵云々同　源氏君の詞也、

こゝろえずと同　源氏君の、哥又しのびがたきなどのたまふ詞の、たゞならぬを、あやしく、あるまじきことゝ、秋好のおぼせる御けしき也といふ也、細流説かなはず、

ふさはしからね廿五のひら　心にかなはぬと也、

思ふとしてしがなと同　上に御心とまるばかりのあそびなどしてしがなとある、即其事也、傍注、隠道の事にいへるは、い

みしきひがこ也、拾遺に、こ゜の字は衍字歟こいへる、まことにさるこ也、又こ゜の下に、おもへごなごいふこの落たるかこいへるは、これも隱遁の事こ心得たる、ひがこ也、

たゞ御ため云々同　おほやけわたくし、事しげきいこなみにまぎれて、御心こまるばかりのあそびなごも、思ふまゝにえせで、君のさう〴〵しくやおぼさんこ、たゞ君の御ためを思ふこそ、心ぐるしけれ也、これ又六條院造り給ふべき下がまへ也、注、隱遁の事につきていへるは、いみしき相違也、上に時々につけたる木草の花に云々、なごあるつゞきを考へてさこるべし、隱遁の事は、こゝによしなく、ゆくりか也、

朝顔巻

いまに思ふさまに四のひら　いまには、いかにを寫し誤れる也、

哥なべて世の云々六のひら　三の句からには、物からのから也、

しなごの風同　たゞ風の事也、東南の風、乾方の風なごいふは、皆俗説也、

みそぎを神は同　拾遺にいはく、「戀せじのみそぎを神は云々、此哥は、定家卿の詠なり、

哥見しをりの云々七のひら　見しこは、朝顔の花にかけていへり、注に、逢見んこをいそぐよし也こあれご、其意はなし、次なる詞にてしるべし、此物語大かた、哥にふくめたる意あれば、必〻次なる語にて、顯はるゝさまに書たり、此哥の下句も、たゞ次の詞に、こし月の云々にて心得べし、

かつは同　さりこもおぼししるらんやこ、かつは頼もしく思ひ侍る也、細流は、こなんこいふ詞にかなはず、すべてはやくの注ごも、語のいきほひ、てにをはなごに、心をつけられず、いこおろそかなるこのみ也、

につかはしき御よそへに八のひら　源氏君の、色かはれる朝兒の花につけて、哥にも、さかりは過やしぬらんこのたまふは、我身の衰へに、似つかはしきよそへ也こいふ也、露けくこは、それにつけても、かなしくて、涙をおこし侍るこ也、注ごも、あたらざる無用の事ごも有り、

人の御ほど云々同　これより、おほかりけりといふまでは、例の紫式部、哥の卑下を、下（シタ）にこめていへる語也、

うすゝぎいできて十二のひら　古事記中巻に、立はしりいすゝぎゝとあると、同じ詞にて、いそぎはしりて來るさま也、いとう。

とは、殊によく通ふ音なり、拾遺の説ひがこと也、

きのふけふとおぼすほどに云々同　此語、夕霧巻【五十二のひら】にも有て、それもみとせみそとせ、本のかはりあるを、かの巻なるは、柏木ノ君のかくれ給へるより、三年にてよく聞えたれば、みそとせは決てわろし、然るにこゝなるは、いづ方にしても、心得がたし、猶よく考ふべし、

いひこしほどに十四のひら　弄花の説よろし、引哥別に有べし、

哥あらためて云々十六のひら　かゝりと聞しは、人の心がはりせし事を、かやうかやうと、人の語るを聞しといふとか、されど此詞穏ならず、もし寫シ誤リにや、

おぼししりにしかば十七のひら　人の口さがなきとは、今までも有て、よく心得るたまへば也、

まろかれたる十九のひら　髪の、涙にいたくぬれて、すぢもわかず、ひとつになれるをいふ、

松と竹との云々同　松につもりたるさまと、竹につもりたると、そのさまのかはりて見ゆる也、拾遺の説、あまりくだくだし、

ふくつけがれど廿一のひら　俗言に、だうよくに、多くまろばさんとすれどゝいふと也、力をいれたるかたち也といふ注、かなはず、

今もいみしく云々廿四のひら　上に涙もながれといへるは、ふとおどろき給へる時の事、今もといふは、しばし思ひしづめて、かなしくおぼすなり、注に、夢中より云々とあるはたがへり、

をとめの巻

哥ふぢごろも云々二のひら　はてのをもじ、おだやかならず聞ゆ、

おひつかすまじう五のひら　生着（オヒツク）也、元服せしめて、おとなにし玉ふと也、兒のひと、なる行末を、おひさきといふおひに同じ、

おろす八のひら　心得がたき詞也、下【十三のひら】にも有、注ども、よりがたし、

かくばかりの云々同　しるしとあるといふと、心得がたし、もしは、なにがしとは、官位をいへるにて、かくばかりよくわかれて、人の尊卑のしるしたる、官位のほどをもしらずしてやといふにや、女の五障をも、五つの何がしなどもあれば、官位をも、何かしといへるにや、猶よく考ふべし、

けうさうしまどはされなん九のひら　心得がたし、これは源氏君も、たはふれて、ことさらに儒者詞をつかひ給ふと聞えたり、

え心づようもてなし十二のひら　う。の下に、今一つも。じ有しが、落たるなるべし、

すげなくて同　此詞、こゝにかなへりとも聞えず、もしは上にた。もじなどありしが、落たるにや、

風のちからけだしすくなし十九のひら　上におまへの梢、ほろ〳〵とこぼるゝに、といひおきて、さて風之力云々と誦し給ひ、琴の感ならねど云々とのたまへる、みなかの河海に引玉へる、豪士ノ賦ノ序にて書る物にして、こゝの意は、内大臣のひき給へる、和琴の音に、老どたちなどの、あはれをもよほして泣ッは、かの賦ノ序にいへるごとく、いまちらむとする木ノ葉は、すこしふく風にも、さそはるゝなれば、風の力は、いさゝかなるごとく、又もとより泣ッぬべきかなしみのあるものは、はかなく淺はかなる物の音にも、たちまち感じて、泣ッなれば、物の音の感は、いさゝかなるごとくにて、今かくあはれをもよほして、人のなくは、わがひく和琴に感じたるにはあらず、をりから物がなしき夕へなる故に、さしもあらぬものゝねにも、感じたる也といへるにて、内大臣のみづからの和琴なれば、卑下し給へる詞也、かの本文を、おもしろくとりなして書キたり、さて又あやしく物あはれなる夕へかなとのたまへるは、みづからも感じ玉ひて、かの女御の御事の述懐も、もよほされたる意ありてきこゆ、されど細流に引玉へる、是ノ故ニ苟クモ時云々の文の意までをば、こめたるにはあらず、たゞかの不レ足ラレ繁クスルニ二哀響ヲ一也、といへるまでの意をとれるのみ也、その次なる文の意は、こゝにはあたらぬと也、

又さもこそあらめ廿一のひら　夕霧雲ゐの鴈の、我にへだてたるは、又さも有べきとにこそあれと也、注たがへり、
對面をさせ給へり廿四のひら　給へりは、奉れりを、寫しひがめたるなるべし、
うへの五節廿六のひら　河海ノ説よろし、
わびて廿七のひら　俗にめいわくがりてといふ意也、
かしづきおろして廿八のひら　おろすといふと、心得がたし、
その人ならぬを四十一のひら　奉るまじき人の子を奉れる也、實子にあらざる也とある注は、たがへり、
みどりのうすやうに四十二のひら　みどりの色は、日かげ又天女の縁に、そらの色にとれるか、それまでにも及ばざるべきか、六位の衣によれりとある注は心得ず、哥に縁もなきを、けさうぶみに、わが六位なるとを、何のよしにかは顯はし給はむ、
いそぎたちにけり同　宮づかへに出したつるいそぎをする也、注いみしきひがと也、いそぎといふにかなはず、
思ふにかなはぬとの四十五のひら　夕霧を、六位になし給へるとなど也、おほかるといふをば、かろく見べし、
ふみをだにえやり給はず同　雲居鴈へなり、次の語へかけて心得べし、五節へといふ注はたがへり、
御時九重を云々四十八のひら　洞中を恨み給へる意は、かつてなし、
御こしみの事五十一のひら　玉がつまの、たちばなの巻にいへるがごとし、
色こかるべき五十三のひら　濃かるべき也、

玉かづらの巻

よこゝもの五のひら　俗にいふ、つねぐ\じやうぢゆう也、。よは世なるを、夜と書るは、いみしきひがと也、此詞、夜のとゝ心得誤る人ある故に、おごろかしおく也、
ねんさう八のひら　後撰集賀に、年星おこなふとて、女だんをちのもとより、ずゞをかりて侍りければ、くはへて遣しける、ゆいせいほうし「もゝとせに八十年そへていのりける玉のしるしを君見ざらめや、

今は御さいはひ九のひら　今はとは、やむごとなき人の御子ながら、かゝるさすらひ玉へる、今の御身にてはといふ意也、注に、此筑前などにてはといへるは、かなはず、

いとたみたりける十のひら　たもじ清むべし、すべて此たみのたを、濁るはひがこと也、拾遺集物ノ名の哥の、舌たみてこそも、かくしたる小蝶(シタヾミ)のだこそ濁れ、舌たみのたは、濁るべきにあらず、すべて言の首(ハジメ)をにごる例なし、

みづからも同　下の來(キ)たりへかゝれり、

いかうに同　聞えがたき詞也、うたといはずして、和哥といへる、ゐなか人の詞也、

此和哥は十一のひら　威光はあたらず、

此人の云々すらく思はれむを十二のひら　此所の語、まづ大かた注どものごとくには聞ゆれど、何とかや、いさゝか穏ならずおぼゆ、

いもうとたちも云々いでたつ十三のひら　こゝにかくあれども、御供して、のぼりしは、兵部ノ君一人にして、姉おもとは、え出たゝずとあれば、はじめには、二人ともに出立んとせしを、姉はつひにえ出立ざりしにや、

ひゞきのなだ十四のひら　拾遺考ふべし、

哥うきことに云々同　結句、拾遺に、さわがざりけりなるべしといへる、然るべし、さはらざりけりは聞えず、

いとかなしき妻子(メコ)もわすれぬ十五のひら　これはかの船子共の哥の、おすほどはのつときなるを、豊後ノ介もともにうたひたる也、されば次に、げにぞといへるは、此船哥をうけて也、傍注に、此妻子もといふを、豊後ノ介が妻子也といへるは、ひがこと也、さては、げにぞといふこと、よしなし、

くがにまどへる十六のひら　水をうしなひて、よるべなくまどふ也、

五師十七のひら　三代實錄、貞觀九年十一月云々、命ニ七大寺ニ講ニ演(セシム)仁王般若ヲ云々、與ニ專寺僧綱及別當三綱五師等ヒ相共ニ勤メテ加ヘ撿察ヲこあひ、此五師、板本には、法師とあるを、今は古寫本によれり、さて五師は、五人ある物と見えたり、台記の別

記に、五節五人とも見え、又五節相憲俊勝彦實覺頼珍寛と、五人の名をあげたるこゝろもあり、わが國のうちにこそ云々同　こゝは語を下上になして、心得べし、とほき國のさかひに、年へ玉ふといへども、我國の内にこそあれ、然ればといふ意也、こその辞の結びは、給ひつれにて、それをやがて下へつゞくとて、つればといへる也、文には此格あり、

つば市十八のひら　津場市(ツバイチ)にて、たゞ市のとにて、もとは地ノ名にはあらざりけむを、後におのづから地名になりて、國々所々にある也、長谷なるも其一つ、又今丹波市といふも、其名の訛(レル)にて、別に一つの跡なるべし、

いたゞきをはなれたる光廿六のひら　これは世に、佛の頂よりは、光明を放つものに、常にいひ、その像にも、光明といふ物を、別に作り、又ゑかく事なる、それに對へていへるにて、人のかたちのめでたきは、いかにすぐれたりといへども、佛の光明のやうに、頂よりはなれて、別に光ッある物にはあらずといへる也、河海の說、さらにかなはず、花鳥も、その意いたくたがへり、

むかしの夕がほと廿二のひら　此人の事をこゝに、夕がほといへるは、顔といはんとて也、

此君とゝのたまへば同　此君は紫ノ上也、紫ノ上とは、おとりまさりいかゞとゝひ玉ふ也、湖月本、。ともじ一つ落たり、拾遺に、此君とは、源氏の自稱なると明らか也といへるは、ひがと也、我にゝたらばしもとのたまふは、たゞみづからの御子のやうにしてのたまへる也、此君とゝいふには、あづからぬ事也、

おやめきてのたまふ同　我にゝたらばしも云々、とのたまへると也、子はおやに似るものなれば也、拾遺の說、いとわろし、

をむなになるまで廿七のひら　女(ヲンナ)と嫗(オンナ)と、兩說のうち、女といふを用ふべし、女になるとは、女子のおとなになれるをいふ、男子のおとなになれるを、をとこといふと同じ、すべて中昔に、をとこといひ、をんなといふは、いときなき老たるわかきをわかざる、通稱なれども、又童なるに對へて、おとなゝるを、をとこともをんなともいへるとあり、こゝはそれ也、拾遺に、嫗(オンナ)としていへる說、しひど也、卑下もことにこそよれ、廿(ハタチ)あまりの人を、嫗といふやうは有べき、をんなと

をうなこ、又おんなこおうなこは、同じこと也、たゞをこおこにて、老たるわかきをわくる也、

ふる物のつかひ卅八のひら　はやくかたらひ玉ひし人を、尋ね出玉へるよしにて、ふるものとはいふ也、注いたく誤れり、拾遺もわろし、

戀わたる云々四十一のひら　わが、玉かづらの母なる、夕皃上を、戀わたるとは、まことの父のごとくなれども、といふ意の上ノ句也、下ノ句は、然れども我はまことの父にはあらざるに、いかなる縁を尋ねて、我方には來つらん、まことの父にしられぬとの、あはれなることよ、とおぼせる意にて、あはれとひとりごち給ふと、次の詞にて、ふくめたる意をしらせたる也、

いかでかかりにても云々四十二のひら　見るべきの下に、こもじ落たるなるべし、

なほそこひある四十五のひら　限らずして、なほ底のこもれる意也、

をりふしおまへなどの云々四十六のひら　此所、さだかに聞えぬ語也、うつしあやまりなどあるにや、

つようは云々四十七のひら　此詞、いかにいへるにか、

初音卷

はかぐしきおきてにも十一のひら　にもじ衍か、

心まどはし給ひし世の十四のひら　源氏君のけさうによりて、空蟬の、心をまどはし給ひし也、むくひは、空蟬に、心をまどはさしめしむくひ也、心まどはしを、源氏君の心をまどはせしといへる注は、ひがこと也、さては給ひしといふ詞もかなはず、又まどひし罪のむくひといふも、物どほし、又下ノ文に、空蟬の詞に、かゝる有さまを云々といへるにつきて、こゝは空蟬の、源氏ノ君の心をまどはさしめしむくひとも見るべきやうなれども、さては佛にかしこまり云々といふにかなはざる也、

もてしづめ云々十八のひら　うるさかめりは、うるはしかめり也、夕霧ノ中將も、うはべばかりこそ、すくよかにうるはしからめ、したには、ほのすきたる云々と云意なり、注ひがこと也、うはべばかりとあるをば、いかゞ見給ひけむ、

こてふの巻

哥ふちに身を云々七のひら　初二句の意は、淵に身をなげつべきほどの花か、さもあらざるか、此春は云々也、注明らかならず、

哥こてふにも云々九のひら　初句、來てふの意をもたせたり、

深き御心もちひや云々十のひら　たゞ一たびはじめて對面し給へるのみなれば、深き御心もちひのほどは、淺からんか、いかゞあらん、それはしりがたけれど、まづけしきいとらうあり云々也、注ども、あたらぬと也、

よのたとひの云々十七のひら　親ならぬ人を、親としてあるを、世に、後の親といひならはせるとを、よのたとひのとはいふ也、

哥たちばなの云々廿のひら　初二句心得ぬ哥也、四の句身は、橘の縁の詞也、

おほたの松のと廿四のひら　引哥こゝにかなはず、外に有べし、

みてこそかたよりに廿五のひら　こは、みるこがたよりに、と有しを、うつし誤れるものなり、みる子の事、上十五のひらに見えたり、考ふべし、此語、本のまゝにては、むげに聞えぬと也一本に、此語なきは、聞えぬ事なる故に、のぞきたるなるべし、

螢巻

たのみ聞えさせ給へる二のひら　させの二字、のぞくべし、

なにかと思ふにはあらず四のひら　玉かづらの君、兵部卿宮に、心をかけたまひてにはあらずの意也、

夕やみすぎて同　下に五日のよしあれば、こゝは三日四日ごろの事なるべきに、夕やみいかゞ、夕ぐれを誤れるにや、

とさまかうさまに五のひら　兵部卿宮のおはせる事と、源氏君と二かたに也、

うすきかたに六のひら　かたは、かみを誤れる也と、拾遺にいへるがごとし、

さすがなる御けしきを八のひら　源氏君の、親のごと、ねんごろには有りながら、まとの親ならねば、さすがににくき御心、又こよひのやうなる事のまじるを、うくおぼす也、

哥にほとりに云々十四のひら　には鳥は水鳥にて、菖蒲の生たるあたりにすめるを、駒も、影の其水にうつりて、鳰鳥とならぶ故に、あやめにうとからざるよし也、さてかげも引も、駒の縁の詞也、かくてかげをならぶるといひ、いつか引わかるべきといへるなど、源氏君と花散里との契、かはるまじき意をこめたり、注みなたがへり、

かぞへのかみがほと〳〵しかりけん十五のひら　すべてほと〳〵といふは、あやふき意にて、俗言に、すでにあぶなき事にて有しといふと也、されば住吉ノ姫君、ほと〳〵主計ノ頭に娶られんとせしよし也、

とこなつの巻

又あなづらはしからぬ方にても四のひら　今まで、源氏君の御子として有しかば、あなづらはしからぬ方なれば、それにつけても、もてなされんと也、

しらべもなしやしごけなしや八のひら　一本には、しらべもてなし、しごけなしやとあり、それもこれも、上下の語にかなはず、誤有べし、今こゝろみにいはゞ、ここ〳〵しきしらべもなく、しごけなき物から、此物よ、などあるべきところ也、

おやさくるつま十のひら　此詞催馬樂にては、親のいさめさくるつまなるを、今源氏君のわらひ玉ふ意は、親をいとひさくる妻也、そは親はみづからにあて、玉かづらの君を、妻にあてゝ也、心をかけ給ふをもて、妻にはあてたり、源氏君のけさうを、玉葛君のいとひ玉ふを思ひて、此詞のをかしくおぼえて、わらひ玉ふ也、上なる哥に、おやにそむける子ぞたぐひなき、とあるをも思ふべし、

人になんはぢぬわざなり同　りはるなるべし、

心のうちに思ひて云々同　そのひくべき手を、ひかずして、たゞ心の内に思ひつゞけて、まぎらはしおく也、

人も有けめ同　有けめといへるを思ふに、此事古物語などに見えたることなるべし、大かたの世の人につきていはんには、けめといふべきにあらず、

かろ〳〵しさを十二のひら　さは、きなるべし、

みこころそまつはし十五のひら　こそは、ぞなるべし、

ふどうのだらによみ十三のひら　これは世のたとひに、人のかたちもてならの、あまりかたくゆるがぬさまなるを、不動のだらによむとも、印つくるとも、いひならはしたる也、註に、實に此わざをするやうにいへるは、ひがこと也、

かたへはかまやかしき十三のひら　かやうのかたへは、、俗言に、ひとつはそれでと云意なり、

あはつけさこに十五のひら　さは、きの誤りなるべし、

たゞそのつみのむくひなゝり同じひら　そのつみとは、かの明富大德の、産屋にいりたりたる事をいへるにて、むくひとは、それにあやかりたる也といふ也、それを罪といひ、むくひといへるは、法華經に、皆僧は、此經をそしりたるむくひ也、とあるを借て、たはふれ玉へる詞にて、實はこの大德にあやかりたる也といふのみ也、さてそしりことも、こぞ云々とのたまへるは、つみといひむくひとのたまへることの、詞釋にのたまへるのみ也、註に、近江ノ君の語ことは、前言に大乘を云々といへるは、いみしきひがこと也、上文をうけて、そのつみといへるにこそあれ、下にいへることを、上にそのといふ文やはあるべき、

ようしき親の廿三のひら　ようしきは、あまりすぐれたる品ならで、よきほどのといふ意也、

いとふにはゆる十三のひら　かなたよりいとへば、これにつけて、いよ〳〵思ふ心のさかりになるをいふ、はゆるは、夕ばえなどいふはえ也、註、さかゆるの意なし、

草わかみ云々同じひら　常陸のいかゞ崎の哥、拾遺に引り、

大川水の同じひら　拾遺に引る哥は、かなはず、

やがてかき給へ同じひら　やがては、俗言にすぐにといふ意也、此文を中納言ノ君にわたして、見せて、すぐに返事を書給へとのたまふ也、湖月本に、がをこに誤れり、

かゝり火巻

なほざりのかごとにても三のひら　なほざりのいさゝかのことにてもなり、さて此語は、かく人に見せ云々といふへかゝりて、こもりゐたらん女子を、さばかりに物めかし出て、なほざりのかごとにても、かく人に見せいひつたへらるゝこそと、次第せる意也、注ひがこと也、にてもといへるにかなはず、

げによくこそ同　こもじ衍なるべし、

うち松三のひら　拾遺に、定家卿の哥の句を引て、折松を誤れる歟といへる、然るべし、打松は聞えがたき名也、定家卿ノ哥は、四季百首に、冬夜といふ題にて「いたづらにをり松たきてふけしよも猶九重のうちぞ戀しき、

くはや四のひら　此詞、末摘花ノ巻にも見ゆ、こゝと同じ意に聞ゆ、

忍ばれぬともこそ五のひら　これは人々の聞べき、うはべの意は、たゞ何事とはなくて、忍ぶべき事をも、え忍ばぬともこそにて、下の意には、玉かづらの君の實父の事など、いひ出る事もやの意あるべし、

げにあはれと聞給ふ同　頭中將の和琴を、あはれと聞玉ふ也、げにとは、上に、みすのうちにものゝ音云々、といへるをうけたり、

野分卷

かばざくら四のひら　和名抄に、朱櫻、邇波佐久良とあるは、加ノ字の落たるにて、かにばざくら也、かばざくらといふは、此にもじをはぶきたるなり、此外拾遺にいへることゞも、考ふべし、

うれへがほなる九のひら　拾遺考ふべし、露のおもきをわびて、草葉の、日にむかひて、うれへいふやうなるをいへり、朝日の影は、露をかわかせば也、

をりにあはぬよそへごともなれど十七のひら　これは上の紫ノ上の、かば櫻のたとへをも、合せていへる也、他本どもに、よそへごともとあるよろし、湖月本、ともの二もじなきはわろし、

うちとけわざにや十八のひら　此詞、朝寒といへるによしなし、思ふに、うちつけわざを、寫し誤れるなるべし、野分の翌朝、に

はかに寒くなれるにおどろきて、うちつけに衣服のまうけをいそぐ也、
いづくのゝべのほとりの花よ五のひら　此語心得がたし、よもじも穏ならず、

行　幸　巻

けさやかなる御もてなし二のひら　源氏君の、玉葛君に逢給ひたらんに、内大臣殿聞給ひて、もし源氏君を、けさやかに聟君のやうにもてなし給はゞ、をこがましからんと也、

昔をしは山云々六のひら　大原野行幸は、今日はじめといふ注は、哥にかなはず、既に延長六年の例あるを思ひて、みゆきつもれるとはよめる也、然るに此度の行幸を、かの延長のにあてゝ見るは、ひがこと也、

よだけく七のひら　俗言に、たいそうなといふ意にて、此詞いづこなるも、みな其意也、注みなたがへり、

名かくし給ふべきほどならぬも同　もは、をの誤なるべし、

うぢあらたむる八のひら　うぢは氏也、ことばの打にあらず、

よだけく云々九のひら　今は出行(イデアリク)も、たいそうなる身になれりと也、

いふかひなきにゆるし十一のひら　今はいひても、かひなき事なれば、それにゆるして也、上に、立そめし名の、とりかへさる物にもあらずとある、これいふかひなき也、注に、をさなき時の事なればといへるは、ひがこと也、

よちとり云々同　一たび立ぬる名は、清まりがたしといふことを、水にていへるにて、よちとりといひ、出來といふは、流れくる水につきていへる詞也、注、いみしきひがこと也、

しかたぐふべきも云々十二のひら　したゝかにかしこきかたをえらむには、高き家の人ならでも、なることあれども、もし其任にかなへる人なき時には、まづ高き家の人をとり給はんと也、

此としごろ云々十三のひら　此語、うけ給はりてといふと、聞えがたし、もし源氏君の御子ぞと聞て、そのよしを申して、此としごろ、御子になりてゐるにやの意にてもあらんか、細流の説いかゞ、

おのづからわざともなきに十六のひら　これは、わざともなきに、おのづからと、下上にうちかへして、下の十餘人つどひ玉へれば、といふへかけて心得べし、おぼえたかくといふへはつゞかず、

藤ばかまの卷

宰相中將同じ色の云々三のひら　内大臣の御方の大宮のかくれ玉ひしは、三月廿日なりしと、藤末葉卷にてしらる、さて夕霧君のためには、母方の祖母におはすれば、服は三箇月にて、六月にぬぎ玉ふべきに、今八月まで、なほ服なること、いかゞ、もしくは夕霧君には、とりわきて恩深き祖母におはせしかば、父方になずらへて、五箇月ものし給へるにや、然らば必ずそのよしをいふべきことなるに、何ともいはざるはいふかし、作り物語なれば、とりはつしの誤りにやあらむ、あらはし衣五ノひら　服の色にて、親あるは祖父母などいふとの、しらるゝ故に、常にもいへるとか、又は此度玉かづらの君の、大宮の服をき給へるは、内大臣の御子といふとを、顯はしたるなれば、殊にかくいへるにや、

哥たづぬるに云々六のひら　初句は、我身の本を尋ぬるに也、二三の句は、我もし實は内大臣の子にて、源氏君の御子にあらずは、といふ意也、さるはみづからも、もとよりしり給へるとなれども、此度はじめて聞てしりたるやうに、おぼめきて、ならはとよめる、心しらひ也、下句は、我もし源氏君の御子にあらずは、夕霧君と、兄弟のゆかりもなきに、ゆかり深きやうにのたまふは、服を同じくきたるによりての、かことごとならんかといへる也、夕霧君の哥のかどは、少しばかりの意なるを、これはかこちたる方に、用ひかへたる物也、うす紫とは、たゞ藤袴の花の色につきていへるばかりにて、うすに意はなし、たゞゆかりといふことに、紫をいへるのみ也、かくて夕霧君の哥は、けさうの心なるを、これは表は、其意をしらずがほに、兄弟のゆかりをかこち給ふとによみて、裏に、そのけさうの方にとりあはず、もてはなれたる意をしめしたるもの也、註二つともに、趣意とほらず、又三の句のならば、下句のやといひ、ならましといへる詞にもかなはず、

ついでをたがへて十のひら　すべて女は、嫁しては、夫にしたがふなれども、いまだ嫁せざるほどは、父の心にしたがふべき

に、父のゆるさゞるさきに、夫にしたがはむは、從ふ次第をたがふる也、されば父のゆるしなきに、源氏君の、おのが心にまかせて、夫婦のかたらひをなすべきことにはあらずとのたまふ也、諸抄の說、ことわり聞えがたく、ついでをたがへてといへる意も見えず、みなひがこと也、

かやうにて聞ゆるより云々六のひら　御簾ごしながらも、かやうに直に對面して、申すより外に、深きゆゑは、いかゞ、しり侍らずと也、かやうにてとは、哥をさしていふにはあらず、湖月本に、てもじなきはわろし、此一くだりは、尋ぬるにの、哥の次にいふべかりしを、忘れつる也、

なほもていでず十二のひら　此詞は、かつらのかげにといふへかゝれり、しのびやかに云々は、今の事にはあらず、今までの事をいふ也、

いかにぞやこだいの云々同　かやうに申すは、何とやらん、むかし風なることなれどもといふ也、拾遺說、ひがこと也、

哥いもせ山云々十三のひら　をだえの橋なほいかゞ、

御使さへぞ云々十六のひら　拾遺よろし、餘の注、みなわろし、

哥心もて云々十七のひら　あふひは、わが心から、日影にむかへども、これだに霜をおのれとはけたず、日影にてきゆるは、せんかたなしと也、たとへたる意は、まして我は、心から天子へ宮づかへに出るにはあらざれば、いかでか君の御心ざしを、思ひしらざらん、されど心にまかせぬほどは、おしはかり給へと也、

源氏物語玉の小櫛八の巻

眞木柱卷

げにそこら三のひら　げにこは、玉かづらの君の、辨を恨み玉ふも、ここわりなりこいふ也、見しかごは、そこらのけさう人たちの媒共の、おの〳〵見しかご也、さて此見しかごの下に、それはいづれも、驗(ゲン)もなくて、こいふとをそへて心得べし、

心淺き人のためにぞ云々同　人はひげ黑ノ大將、心あさきは、玉葛君の方より心淺き也、兵部卿宮をはじめて、おほくのけさう人たちの中にも、此大將は、玉葛君の、心づきなく、淺くおぼす人なるに、その人のためにしも、寺のげんの有しとよこいふ也、注みなかなはず、この驗の事を、ここわりを以ていふもひがと也、拾遺もわろし、

宮づかへはなご四のひら　なごは、何ぞにて、宮づかへは、なごし玉ふまじきこ、ふくめたる詞也、一本に、はもじあるよろし、

殿もいこほしう五のひら　もははの誤歟、もにては、上文よりのつゞきいかゞ、もしもならば、いこほしうおもほす物から、なご有しが、落たるか、

同おりたちて云々六のひら　拾遺のどし、

まめやかには同　心をさなの云々こいふよりは、たはふれてのたまへる詞なるを、これよりは、たはふれにはあらずの意にて、實にはこいふと也、

御心もしり給はず八のひら　俗にいふかまひ玉はず也、

さこいかけ給ふ十五のひら　細流に、沃懸とあるよろし、いは、沃(ソヽ)ぐとにて、鑄(イ)るも本同言也、枕册子に、そこ立はしりて、白き水を、いかけさせよこもいはぬに、しありくさまの云々、榮花物語根合ノ卷に、内の御にきみの事、なほおこたらせ給はねば云々、なほ水などいさせ給ひてや、よろしからむこ申せば、そのさほうの御しつらひして、い奉る、いこ寒きこ

ろ、たへがたげに見えさせ玉ふ、など有り、俗にいふあぶせる也、こゝは火とりの灰を、うしろよりうちかけ給ふ也、拾遺誤也、

詳心さへ云々 十六のひら　雪のみだるゝに、心さへ也、雪もよは、雪も夜也、ひとりに、火取をこめたり、注わろし、

心ときめき 同　玉かづらの、我をまち恨むらんと思ふをいふ也、

いといたし 十七のひら　此詞のこと、上にいへるが如し、拾遺誤也、

かくゝれなんに云々 廿一のひら　册子地よりいふ詞也、

詳みやま木に云々 三十のひら　深山木を、大將にあてゝ見るはわろし、二三の句ぞ、大將と玉かづらとなる、

むかしのなにがしがためしも 廿二のひら　昔物語にある事なるべし、河海に引れたる貞文が事にはあらじ、

われはわれと思ふものを 同　大將に心はとまず、帝につかへまほしく、心の内には思ふものを、さやうとはしろしめさじといふ意の詞也、

詳かばかりは云々 廿三のひら　初二句は、帝の、いかでか聞ゆべきとのたまはせるにこたへて、いさゝかにても、おとづれはせさせ給へと也、三の句は、女御更衣たちなどをいへるか、又は帝をたとへ奉れるか、

ゑんじ聞えさせ給ふも 廿四のひら　させの二字、似つかはしからずいかゞ、大かたかやうの詞づかひ、人の人にいふ言、又地よりいふ言、おの〳〵その人のほど〳〵にしたがひて、わきあること也、こゝは大將の事を、地よりいふ語なれば、聞え玉ふと有てよろしきを、聞えさせ給ふとては、みかどきさきなどの御うへのやう也、物語の詞づかひの例、心をつけて考ふべし、

わらゝかなるけもなき人にて云々 同　大將の、玉かづらの君にそひゐる也、玉かづらの、大將にそひゐるといふにはあらず、湖月本、てもじなきはわろし、

かつは思はむことを云々 廿五のひら　玉葛君の、いかゞに思ひ玉はんことを、かつはゞかりて也、又右近が思はんことをも、かつ

はゞかりてにも有べし、

哥かきたれて云々同　結句は、しのぶや、いかにといふ意にて、しのび玉ふか、いかにぞといふ也、注、意たがへり、

哥ながめする云々同　うたがたの事拾遺にくはし、たしかには心得がたき詞也、なほよく考ふべし、

玉もはなかりど廿六のひら　これをうたひ玉ふ心、いかならん、さだかならず、細流の説かなはず、拾遺の説も、猶かなへりとも おぼえず、又おひを、老ならんといへるも、かなはず、風俗ノ古本に、はての句、於比毛川久加爾也、於比毛川久加仁と あり、

梅枝巻

一くさなどかいさゝかの云々六のひら　か。もじは、の。を誤れるなるべし、必の。と有べきところ也、濁りてが。とよめば、のゝ意 なれども、上にが。とあれば、これは猶の。なるべし、清てなどかとよむ説は、いみしきしひごと也、さるつたなき文やは 有べき、

さきの朱雀院七のひら　宇多ノ帝也、宇多ノ帝の御方を、其後の御代に、うつさせ給ひて、公忠ノ朝臣にえらばしめ給へる也、諸抄 ともに、是を承平ノ御門とせられたるは、公忠ノ朝臣、承平の御代の人なるにのみなづみて、つぎの語をも忘れて、考 へ玉はざりしにや、中々にいみしきひがこと也、そのゆゑは、もし承平ノ帝とする時は、うつさせ玉ひてといへるをば、 いかゞ解すべき、うつさせ給ひてとは、宇多ノ御門の御方を、延喜承平などの御代に、うつさせ玉ひて、公忠ノ朝臣の、と にえらべるにこそあれ、そのうへ此物語の朱雀院、すなはち承平ノ御門に准へたるを、前の朱雀院と申すべきよしな し、すべて前ノ朱雀院とは、必ズ宇多ノ帝をこそ申せれ、承平ノ帝を、然申せる、例もことわりもなきことなるをや、

哥霞だに云々九のひら　月も花も、霞のへだつればこそあれ、さもあらずは、ねぐらの鳥も、此おもしろさに、たへかねて、ま だ夜の内ながら、ほころびて、鳴つべしと也、ほころぶとは、鳴クまじき夜の内に、たへかねて鳴クよし也、さて次に、 まことに明方になりてぞといへるは、鳥はいまだ夜の明ざるに鳴べし、とよめるをうけて、これは然らず、實に明がたに

なりてといふ意にて、まことにとはいへる也、

ことめづらしと云々十のひら　花のにしきとは、宮の哥に、えならぬ袖にとあるをうけて、こなたよりも、ことさらにたはふれて、かくのたまへるなり、もしたはふれにあらずは、我方より贈り給ふ物を、花の錦とは、いかでかよみ給はん、注誤也、

又なきことゝ云々同　かやうのめづらしき花の錦をきてかへり給ふは、又なきことゝおぼさるらんにて、これも花の錦と同じたはふれ也、注ども、いみしきひがこと也、

いといたうからがり給ふ同　源氏君の返しは、卑下したる哥なるべきに、かへりてたはふれて、花の錦など、ことごとしくのたまへる故に、こなたより、えならぬ袖などよみ給へるは、たゞよのつねの賞美になりて、けおさるゝを、からがり玉ふ也、

さゝめきて聞え玉ふ十三のひら　もし中宮の御方の女房などの、たちきくことやあらんとての用意也、

えかきならべじやと十四のひら　我にはえならばじよと也、

さうのもたゞのも女手を同　女手とは、漢文に對へて、哥物語などを書クをいふ、土佐日記のはじめに、男もすといふ、日記といふ物を、女もして見むとて、といへる心ばへ也、さてその哥物語は、草のもじがちにも、假字がちにも書クゆゑに、草のもたゞのもといへり、假字をたゞのといへるは、哥物語などは、まづは假字書キをむねとする故也、

だんのからくみ十七のひら　だんは、緂ノ字也、拾遺に、和名抄を引ていへり、からくみの事もいへり、

女ごをもて侍らましにだに云々十八のひら　たとひ女子あらんにてだに、云々なるを、まして我は、女子をもゝち侍らねば、いたづらにくちぬべきを、今源氏君の姫君の御ために奉るは、本懐也といひて、奉り給ふ也、

しりびに廿のひら　拾遺に、後居(シリヰ)なるべしとて、いへる説、よろしとも聞えず、猶びにて、しりよわりなる事を、しりびといへるなるべし、

藤末葉巻

あまけなりと三のひら　雨氣也、下に、心あはたゝしき雨風にとあり、注も、雨氣と見ての説かはしらねど、まぎらはしき故に、おごろかす也、

みのりのゑ同　ゑはえと書て、緣なるべきか、會はいかゞに聞ゆ、

けうなかりし五のひら　興なかりし也、拾遺にくはし、

おくしにけれ同　中々にをりやまどはんとある哥の事也、

あそびせむなどにや侍らん同　なもじ衍なるべし、

御こきよく八のひら　此詞いさゝか心得ず、よき時分とてといふ意か、さうどきては、さわぎたつ意也、

げにまだほのかなる梢どもの九のひら　まだ若葉のわづかなる木々の梢也、さてげにといへるは、下の、かゝれる花のさまよのつねならず、といふへかゝれり、上の内大臣の、わがやどの云々の哥などをうけて、げにといふ也、

としへにける此家の同　花鳥にのたまへるごとく、とゞろけるを、寫し誤れる物なり、とゞろくは、音に聞えて名高き也、わがむすめの事にあてゝ、これをうたひ玉ふは、うちみだれたるたはふれ也、注に、詞をかへて、うたひ玉ふとあるは、心得ず、女の年へたるといふは、ふるくなれるよしなるに、いかでか祝言にとはうたひ玉はむ、又とゞろけるを、衰へたるとゝあるも、誤也、

河口のここそ云々十のひら　催馬樂の、まもれども出てわれねぬやの意にて、年ごろ内大臣の、きびしく制し給ひしかど、逢見し事は有しよし也、

哥淺き名を云々同　初二句は、上の夕霧の、川口のここそ云々とのたまへるを、とがめて、淺き名を、いひ流し給ふといふ也、三の句、口といふに、夕霧のいひもらしたる口をかねたり、二の句のいひは、此口の緣也、下句は、いかなるとにて、さやうに淺き名を、いひもらし玉ふとぞ、あさましと也、注皆誤也、拾遺の説も、名といひ、いひながしといひ、もらしゝといへるに、すべてかなはず、ひがと也、又後の説は、下句の意、いたく誤れり、

哥もりにける云々同　くきだの關をかたく守るごとくに、父大臣のきびしく制し給ひしつらさをば、とがめずして、たゞわがいふことをのみ、心淺きやうに、とがめ給ふこそ、からけれ、さやうに、我にのみ、とがをなおふせ玉ひそといふ也、初二句は、くきだの關のごとく、守(もり)にけるものとの意也、注、誤なり、拾遺も、上の雲ゐの鴈の哥を、誤れるから、此哥の心得も、たがへること有、

哥かざしても云々十六のひら　博士は、物をよくしれるものなれば、君こそしり給はめといふ也、次なるはかせに、葉風の意はなし、

思ふことかなひ侍る心ちして十七のひら　侍るは、はつるを、はへると誤れる也、こゝは地よりいふ語なれば、侍るといふべきよしなし、かなひはつるとは、ねがひ思ふ事の、殘るかたなく、全くかなへるをいふ、

まことにあはれに十八のひら　まゝ子は、さしもあらぬものなるに、眞實にあはれにうつくしとおぼす也、又次なるまことには、實の我子にてかゝる事あらば也、

年月のほどしられ侍れば云々同　同じ六條院に住て、したしくなりそめて、年月久しくなりぬる程もしらるれば也、注に、明石上の、姫君を見奉り給はぬ、年月のほどもしらるれば云々といへるは、たがへり、さては語たらず、其意はなし、ただ紫上と明石上と、したしくなりそめ玉ひてより、久しきよしのみ也、

むかしの例をあらためて云々廿のひら　てもじ清ムべし、位に即(ツキ)給はで、太上天皇の尊号を得玉ふことは、此時までは、いまだ例なき事なるに、昔の例といへるは、いさゝか心得がたし、もしは追号ながら、淡路ノ廢帝の御父舍人ノ親王を、盡敬天皇、光仁天皇の御父施基ノ皇子を、田原ノ天皇と号シ奉られしなどを思へるか、さてこれらは、尊号を奉るといへども、そのかみいまだ、院と申す事は、すべてなかりしを、今はおりゐの院に准へて、院司を補せらるゝを、昔の例を改めてとはいふにや、花鳥に、改と不改と二説を擧られたる、ともに心得ず、其故は、太政大臣なるを改めて、院司を補せらるゝ事を、昔の例をとは、いかでかいふべき、又まことの太上天皇の例を改めずしてといふことならば、例のまゝになどこそ

いふべけれ、改めてといふもあたらず、殊に昔のといはんことよしなし、すなはち此時にも、朱雀院太上天皇にてましませば、その例は、現在にもあるものをや、

哥なれこそは云々廿三のひら　いはもる、もるは、岩をもるゝに、やどを守るとをかねたり、

上ノ若菜巻

しるべきにもあらず十六のひら　それにかまふべきにもあらず也、

こしもくれぬ廿二のひら　上に年くれゆくまゝにとあるは、十二月になれるころなるべく、下に年かへりぬとある所、まさしく歳暮より、正月へうつれる也、然ればこゝは、十二月廿日ごろなどの事なるべし、

世をたもつさかりのみこにだに云々廿八のひら　世を今たもち給ふ、當代の帝の姫宮にだに、御むこをえらびてとり給ふたぐひ、古へもおほくあるを、まして朕ワレは、もとより位をさり、殊にいまはと世をはなるゝきはなれば、むこをとらんに、さしもことゞゝしく、思ひわづらふべきにもあらねどゝのたまふ也、さるは帝の御女は、まづはうちまかせては、人には嫁し給はぬをよしとし、さる事あるをば、かろき事とするにつきて、かくはのたまへる也、注、いたくたがへると也、

かゝる末々のもよほしになん廿五のひら　もよほしは、おどろかすやうの意也、子孫コウマゴのおひたてるを見れば、おのが年の老ぬるほどの、おどろかるゝ也、

いづかたにつけても廿六のひら　大將は父にて、玉葛ノ君も後の母也、又紫の上も、御をばなれば、何方につきてもしたしき也、傍注に、槇柱ノ君の兄弟なれば也といへるは、いかにぞや、槇柱君は、こゝによしなきをや、

見給ひくらべよかし廿八のひら　くらぶとは、時々見て、前のたびと、老のまされるかと、見くらぶるをいふ、

ましてことわりも何もいづこに云々四十一のひら　ことわりとは、上の源氏君の詞に、こよひばかりはことわりと云々とのたまへるを、うけてのたまへる也、源氏君の、みづからの御心にだに、え定め玉ふまじき事を、まして我は、ことわり也とも何とも、いかでかえ定め侍らんと也、さてとまるべきは、聞えがたし、もしはとわるべきを、寫し誤れるにはあらざるか、い

づここにことわるべきにかとは、何方をとわり也とか、ことわり定めんの意也、
いふかひなげに云々同　源氏君の、よくいひしらせ給ふかひもなげなるこたへなるをいふ也、
今より後も四十三のひら　此もゝじの下に、とゝ有べき文也、其故は、としごろ云々といふより、こゝまでは、紫上の心を、直に
いへる文、うしろめたうといふよりは、冊子ノ地よりいふ詞なれば、必ずその堺に、とゝあらでは、文とゝのはず、
おいらかにおほしたて四十八のひら　帚木巻にもいへるごとく、俗言に、じんじやうにといふ意、おほやうなる意、おとなしき意
也、これらの意を、ひとつに合せて心得べし、さてこゝにいへるは、かど／＼しきかたのおくれて、たらはぬ意也、俗
言のおほやうなるも其意にかなふとあり、同じ心ばへ也、河海說ひがごと也、拾遺に、老らか也といへるは、言の本の意
也、これ又おとなしきといふと、おのづから意かよへり、
哥身をなげむ云々五十六のひら　上句は、御心ざし深げに、身をなげむとの給ふも、まことにはあらざるに、といふ意也、下句
は、御心ざしの、まことに深きならば、昔の、すまの浦にさすらひ玉ひしさわぎにも、こりずして、なほも見奉るやう
もあるべけれど、まことの深き御心にはあらざれば、今さらに、かゝづらふべきにあらずといふ也、須磨の縁に、波と
いひ、浪の縁に、かけじといへり、注どもいかなる意にか、ことわり聞えがたし、
われよりかみの人やは有べき五十九のひら　此語いかにぞや聞ゆ、上文よりのつゞきをもて見るに我も親王の御女にて、今まで源
氏君の北の方として、又ならぶ人もなくてならひたれば、今さら人を上(かみ)にたてゝ、したがふべき身にはあらぬものを、と
いふ意なるべし、
哥水鳥の云々六十のひら　下句は、紫上をたとへたるにて、したは下葉也、結句は、萩のうへにては、色のかはれるを、たとへた
る意は、思はずなる御けしきなるよと也、
同じかざしを云々六十一のひら　尋ね聞ゆれば、とよみ切て、かたじけなけれどわかぬさまにと、つゞけてよむべし、さてわかぬ
さまにの下に、思ひといふ詞の落たるにや、本のまゝにては、聞えさすれどゝいふと穏ならず、

せんすいだんなど六十四のひら　だんは、下【六十九のひら】に、からのあやのうすだんに、とあるだんと同じかるべく、せんすいも、泉水の繪にはあらじ、四季の繪に、泉水壇などいひたつべきにあらず、せんすいは、もじの寫し誤にやあらむ、よはひのほどをもかぞへて六十五のひら　今又かく二人の御子どもの、昔のごとく、立ならびて舞給ふを見て、源氏君と太政大臣との、よはひのほども、かぞへらるゝ也、

年ごろそひ玉ひにける六十九のひら　何事も、年をふれば、功勞のつもりそひて、まさる物なれば、此大臣の和琴も、さぞあらんとおぼすから、さやうに聞なし給へるにやといふ也、

いとさかり過給へりや七十三のひら　さかりは、もじの寫し誤り有べし、もしはさかしすぎなどにや、

らうたき人をぞえ奉りたると七十七のひら　ぞはてにをは、えは得なり、湖月本に、えをへと書て、添といへるはひがこと也、一本にえと有り、

あひ見むことをおぼせさてかの云々八十一のひら　さては、とての誤なるべし、とてといはでは、消息の語より、地の詞にうつる堺なくてとゝのはず、

おぼろけならでは八十三のひら　細流のどし、萬葉ノ哥などにも、此たぐひのこと例有り、拾遺中々にわろし、

ゆゝしきかねどなれど八十五のひら　此若宮の、東宮に立チ給ふは、御代かはりての事なれば、ゆゝしきかねごとはのたまふ也、

よこさまの人の九十二のひら　もとよりさるべく、えさらぬ人にはあらぬ、他人をいふ也、よこといふは、これは、よそ外かたはらをいふ也、つねにあしきことをいふとはこと也、注に、非道なる他人とあるはいかゞ、非道は、こゝにかなはず、

さこそうはべにははぐゝみげなれど同　ともじ、清ミてよむべし、濁りては、意たがひて、語とゝのはず、

ひとり/\九十三のひら　何方にもあれ、其内に一人といふこと也、

そこにこそすこし云々九十四のひら　すこしといふこと、明石上にたゞにむかひての御詞にはいかゞ、もし寫し誤にはあらざるか、

えなのめならざめるは九十五のひら　すべてなのめは、俗に、たいがいなるといふ意にて、こゝは女三宮の御方へ、わたり給ふこと、

たいがいなるほどにもあらば、さも有べきを、たいがいにだにえあらず、まれ／＼也といふ也、注いみしきひがと也、上にうはべの御かしづきのみ、めでたくてといひ、次にかたじけなきわざ也といひ、心ぐるしくといへるなどにかなはず、

ふくちの園に云々同 耶輪多羅（ヤスタラ）が云々、此哥、河海に、或勘文として出されたり、こゝによくかなへり、用ふべし、

又まとにこゝちゆきげにとゞこほり云々九十六のひら 心のうちには、人しれぬ思ひのある人も、さる花やかなる所にまじはれば、事にふれては、まとに心ゆきて、おもしろしと思ふふしも、まじれば、かたへの思ひなき人々と、同じやうに見えて、分れず、みなはなやかに見ゆと也、げにとは、かたへの人々の花やかなるを、うけていへり、にしもは、ふしもを誤れる也、なだらかは、平等に見えて分れぬ也、

御ちぬし九十八のひら めのとごとは、乳母の子をすべていふを、ちぬしは、其中に、其時の乳のぬしなる子也、

よしあるかゝりのほどを九十九のひら 鞠の懸りとて、殊に木をうゑて、かまへ造るは、後の事なれども、此物語のころも、はやく其名は有て、何となく鞠蹴（ケ）るに、よし有てよろしき所を、かゝりといひけるなるべし、こゝのいひざま、鞠につきたるとゝ聞えて、たゞ大かたに、かゝりのよき所といふとゝは聞えず、拾遺もよろしからず、

もえぎの陰に百のひら 拾遺に、萌木なるべしといへるよろし、

哥いかなれば云々百六のひら 二の句は、諸木の花にこづたふ也、こづたふといふに、ねぐらとする意をこめたり、下句は、分て、櫻をのみねぐらにはすべきとなるに、などさはあらで、櫻ならぬ花の木にも、寐るとぞと也、

櫻ひとつにとまらぬ心よ同 哥と同じ意にて、櫻ひとつにのみ、心をばとゞむべきとなるに、さもあらざるは、あやしと也、とまらぬは、拾遺にいへるごとく、心をとゞめぬ也、

下ノ若菜巻

いでやなぞ二のひら なぞにて、語を切て心得べし、なぞかくとつゞくには非ず、

まへしりへのこゝろ同　聞えにくきと也、

いとけしきと也三のひら　聞えず、一本には、けの下に、はの字あれど、それも聞えず、いとほしきを、寫し誤れるにや、

ねう〳〵と六のひら　拾遺のごとし、

うたてもすゝむかな同　これも拾遺のごとし、一本に、すゝむるかなともあれど、わろし、物思ひをすゝむるとしては、ほほゑまるといふも、かなはず、

ここになかりし物を十のひら　此下に、とのもじ落たるなるべし、

となるけぢめわかれて十七のひら　拾遺わろし、かざしの花は、作り花也、

哥すみのえを云々十八のひら　けふやしるらんと、疑ひたるは、我身のとをよせたるは、裏にて、表はたゞ、住の江の海人なれば也、

かぐらおもて十九のひら　聞えぬと也、或人のいはく、かぐらをのこを、寫し誤れるなるべし、

うへのきぬのいろ〳〵云々廿のひら　源氏君をはじめて、紫上女御殿夕霧君明石上などの料の懸盤を、四位五位六位の、とりつづきて、はこぶをいふなるべし、次に尼君の料をいへるにてしるべし、さてうへのきぬの色をもていへるは、とりはこぶさまを、見たるこころ也、けぢめおきてといふは、源氏君のよりして、つぎ〳〵の御方々のを、とりはこぶ人をも、つぎ〳〵品をわかてる也、すべて旅ごころなれば、かやうのさほうも、つねとは、かはれる事おほかるべし、拾遺の説いかゞ、もしかの説のごとくは、たゞに四位五位六位とこそいふべけれ、うへの衣の色々は、よしなし、又源氏君御方々の、おまへの物をいはずして、尼君のゝみをいはんとも、いかゞならずや、

青にびのおもておりて同　おりては、おしての誤なるべし、俗にいふ張り付ると也、河海の説のごとし、細流の説は、聞えぬと也、

うらのみかどさへ云々廿二のひら　此上に、宮はかくなどいふ言なくては、ここたらはぬやう也、

さいへどならびなし廿九のひら　此宮の御方は、物深からず、よろづのけはひ、かろ〴〵しきよしつねにいへるにあたりて、さはいへども也、注誤也、

春のことのねは云々卅のひら　春は、ほかと有しを、はると誤れるか、

かきかへしたるねの卅二のひら　今も、つまがへしとて、爪のうらにて、はぬるとある、そのたぐひなるべし、

宮の御方をのぞき給へれば卅三のひら　源氏君ののぞき給ふ也、夕霧といふはひがこと也、此時のさま、夕霧君は、簾の外にあらはにさふらひ玉ふをりなれば、かくれたる所のやうに、内をのぞき見玉ふべきよしなし、拾遺に、夕霧也とて、其證にいへることども、あたらぬこと也、云々にやあらん、とあるをもて、源氏にあらざること明らか也といへれども、これらの詞、源氏としては何事かあらん、夜のことなれば、はじめより、御方々の衣服を、よく見おき給ふべきにあらざれば、火影にのぞき見ては、必ずそれ〴〵にやあらんと有べきこと也、又いとよくもてをさめ玉へりといふまで、さらに明らか也といへるも、たがへり、おしをれるかをりおぼゆ、といふまでは、源氏君の見玉ふこころをもていへるにて、これもかれも云々といふよりぞ、夕霧君の事には有ける、大将もとある、もゝじを以てもしるべし、上文の源氏君の事にならべて、大将も也、すべてけはひを見るといふは、其形をたゞには見ざれども、物などへだてゝ、そのあたりのさまを見るをもいへり、されば内ゆかしくとはいへり、簾の外に在て、内をば見ざる故也、又たいのうへの、見しをりよりも云々、といへるにても、夕霧君は、此時は、見ざること明らけし、もしほのかにても、此時に見たらんには、かくは思ふべしやは、

すみのぼりはてなん卅六のひら　はてなんといふを、穏ならず、もしははへらんを、寫しあやまれるにや一本、はてずなんも、わろし、

ひときざみにえらばるゝ人々卅七のひら　第一のつらに擇ばるゝ人々也、

みなひとしく卅八のひら　いづれも〳〵、耳おどろかぬはなきよし也、ひとしくは、みゝおどろくへかゝれり、傍注わろし、

かくをりにつけて同　かゝは掻なるべし、ひくこと也、

こしらへなびかしたる同　わが心に思ふまゝに、いかさまにも音を出し給ふよしなるべし、俗にじゆふなる音の出るこいふ意也、

よろづの物の音のうちにしたがひて卅九のひら　此語心得がたし、注こゝにかなはず、拾遺もわろし、つらく味ふに、もろくの樂器の中に就て、琴は殊にこいふ意なるべし、うちは中こ同じく、したがふこつくこ通へば也、

五六のはら四十二のひら　はらかはちか、さだかならず、はちにても、はゞ濁るはひがこ也、さて此事、近き世に、これかれ説ごもあれごも、たしかならざることなれば、こゝにはいださず、

かやうなることをいひあつめたる五十一のひら　かやうなる、聞えがたし、これは、わがやうなるこ有し、わもじの落たるなるべし、

いこきよらになんおはします五十六のひら　これは、いこきよらにおはしまして、なご有べき所也、本のまゝにてはいかゞ、文よく見しらん人は、わきまふべし、

なにしに奉りつらむこ六十三のひら　いかなることにて、奉りつらんこ思ふ也、なにしには、何のためにこいふ意也、注兩說こもにあたらず、

うつし心にはあらずなんおぼえ侍る同　此下に、こてこいふ詞なくては、文こゝのひがたし、

哥おきてゆく云々六十五のひら　拾遺かむかふべし、

哥我身こそ云々七十のひら　それながらは、源氏君は、そのかみのまゝの身ながら也、結句は、そらおぼれし給ふ君は、猶そのかみのまゝの君也、こいへる也、さて我身こそは、昔にあらぬさまになりたれ、君はそのかみのまゝなる御身なれば、よくしい給ふべきに、いかなれば、そらおぼれをばし玉ふぞこ、こがめたる意也、

すほうご經この、しるとも云々七十一のひら　これらは、たゞその病者の祈りにのみするわざなる故に、死靈の追福にはならぬ也、

本の御おぼえ七十二のひら　もこ朱雀院のみかごの、いみしくかしづき奉り給ひしほごの、御おぼえ也、傍注たがへり、

らうろう七十四のひら　聞えがたし、

うつし人にてだに云々同　これは葵上の御物のけになり給ひし事をのたまふ也、注かなはず、氣のとりぐるしかりし事ばかりを、いかでかはむくつけかりしとまではおぼさん、

思ひぐまなかるべければ七十六のひら　此下に、と。もじ有べし、

さばかりの人に云々八十五のひら　拾遺ひがこと也、

内よりはたびたび云々八十六のひら　女三宮御こゝちの、御とぶらひの御使なり、弄花の說いかゞ、

げにあながちに思ふ人のためには云々八十七のひら　此所の語、心得にくきを、稻掛ノ大平がいはく、まづげにとは、上文紫ノ上の詞をうけたる也、あながちに思ふ人とは、紫上にあてゝのたまへるにて、紫上の、女三宮を、あながちに大切に思ひ玉ふよし也、さてその紫上のためには、女三宮は、わづらはしきよすがなれども也、よろづにたどり深きことゝは、女三宮を大切に思ひ奉り給ふあまりに、さまざまと思ひやり深きことかなといふなり、おほよそ人の云々とは、女三宮につきたる女房などの思はんところをさへ、とやあらんかくやあらんと、思ひめぐらし玉ふと也、よろづにたどり深きことは、即此事也、さて紫上の志は、かばかり深きに、我ヵ心ざしは、淺しといはんとて、めぐらさるゝをとはのたまふ也、さてすべての意をつゞけていはゞ、女三宮を、あながちに大切に思ひ聞え玉ふ君のためには、女三宮は、わづらはしきよすがなれども、さもおぼさで、さばかりよろづにいたはり奉りて、おほよその女房などの、思はんところまで、とやかくやと思ひやり給ふは、たどり深き事かなとのたまふ也、さてかく實は、紫上と女三宮との間の、事なれども、すべて語のうへは、たゞ公界にてのたまへるにて、おほよそ人といひ、又思ひめぐらさるゝをといふも、深く思ふ人のためには、云云まで思ひめぐらさるゝ物なるをと、公界にてのたまへる詞也、といへり、注、意とほらずひがこと也、

これはたゞ國王の云々同　女三宮へ、紫上の心ざしの深きに對へて、源氏君の、みづからの心ざしは、淺きよし也、紫上はかの女房などの、思はんところまでを、思ひやり給ふに、我はたゞ、國王のおぼしめすところばかりをはゞかる、心ざしは、淺きことゝ思はるゝと也、

いかにかごあることなりけり九十のひら　此てにをはの事拾遺にいへる、さること也、たゞし是は、別に一種のいひざまにて、例有ルこと也、いかには、俗にいかばかりかといふ意也、

哥あま船に云々九十二のひら　明石の浦といふに、明石ノ上の意は、さらになし、たゞ須磨の浦にといはむも、同じこと也、

ゐかうにはあまねきかたにても云々同　すべて廻向は、あまねく一切の衆生に及ぼす物なれば、そのかたにても、源氏君を、いかゞはもらし奉らむ、まして年ごろの契あればの意也、注はいみしきひがこと也、

はづかしめられたり同　右の哥の上ノ句の事也、さればそれをうけて、げに心づきなしやとのたまふ也、まことに此哥の上句のどく、人におくれて、え發心もせぬ我身は、心づきなしと也、

ものを心ぼそげにて九十四のひら　をもじ、おだやかならず、

九月は院の大后の云々同　此大后のかくれ給へる事は、いつとも見えたることなし、さきにかくれ玉ひしよしは、上ノ若菜巻に、始メて見ゆ、

いたりすくなくたゞ人の云々九十七のひら　たゞは詞にて、人はかたへの人共也、注に、たゞごゝして、これを柏木といへるはいみしきひがこと也、さていたりすくなくは、聞えなすへかゝりて、人のいたりすくなくて源氏君のあしきやうにのみ、申しなすかたにのみより給ふこと也、

れいならずなやみわたりて百のひら　柏木ノ君の事也、注に、紫上女三などの事也といへるは、たがへり、もし然らば、わたり給ひてとこそあるべけれ、又院にはたといへる、はたも、さてはかなはず、

たれもくヽ百一のひら　女三宮も柏木君も、といふことなるべし、然らでは、此詞聞えがたし、注はみだり也、

柏木巻

物わらひし給ふおとゞの云々六のひら　つねには、花やかなるところありて、物わらひなどし玉ふおとゞなるに、柏木君の重くわづらひ玉ふをりとて、かゝるくすみたる験者などゝ、しめやかに物語して、病者の事をのみ、せちにかたらひ玉ふが、

あはれ也といふ也、　注わろし、　又拾遺の説は、おとゞのとある、のもじにかなはず、此のは、なるにといふやうの意なり、もしかの説のごとくは、おとゞにてとか、おとゞなれば、とこそ有べけれ、

あへなん廿一のひら　拾遺にいへるごとく、堪なんの意にて、俗言に、かんにんのなるといふにあたれり、

ふたついはんには同　拾遺に、ふたつをくらべていはゞ也、といへるがごとし、

おぼろけのことならで廿七のひら　拾遺説、中々にわろし、上にもいへり、

お契ありけるにこそはと同　とは、次の語をへだてゝ、まじる侍ける、といふ迄へかゝれり、

心淺しと思ひ給へりし廿八のひら　との下に、なん、もしはぞと有べし、もしこれらの詞なくは、給へりきと有べきてにをは也、

いまいましきすぢなりければ同　此時は、柏木君の喪の中なれば、かやうのすぢ、忌むべきをりにあらざるに、かくいへるは、

　これは諒闇の哥なる故に、おほやけのいみをはゞかりて也、

ちじの大殿に廿九のひら　湖月本に、ちゞとあるは誤也、父にはあらじ、

おやのけうよりもけに同　けうは孝也、すべて親の喪を、孝といふ也、もろこしにても然いへり、けには、まさりての意也、

注にいへる論は、こゝには用なきこと也、　こゝはたゞ、大臣の、かなしみにやつれ給へるさまの、いみしきをいへるのみにて、外に意はなし、けにのけを濁りて、　まことにの意にいへるもひがこと也、　又拾遺に、けうを凶といへるも、　ひがこと也、

哥ここならば云々四十二のひら　こゝならばの事は、別にいへり、　哥の意は、柏木君の、遺言も有つれば、ゆるし有し事とおぼして、落葉宮を、同じくは、此庭の柏木かへでの枝かはせるごとくに、我にならし玉へかしといふ也、細流、いみしくたがへり、拾遺も、たがへる事有、

哥かしは木に云々同　御息所の哥也、

ちかうとほう四十四のひら　近うは、柏木君の事、遠うは、保忠ノ卿の事なり、此卿の事は、近き世とあるに、遠うといふは、たち

まちがへるやうなれども、然らず、近き世のうちにてゝ、柏木君の近きにくらぶれば、とほきむかしなればなり、

よこぶえの巻

哥よをわかれ云々三のひら　拾遺に、よをわかれは、笋(タカウナ)の縁といへるは、いかゞ、笋をいはで、よとのみいへるは、いかでか縁ならん、所は野老(トコロ)によせたりといふは、さる事也、入なん道は、佛の道のおこなひ也、弄花ひが事也、

いろこのみかな六のひら　抄とある説よろし、たはふれ言也、細流わろし、

哥ここに出て云々十のひら　結句のをもじ、にゝあらではとゝのはず、

哥ふかきよの云々同　四の句、琴をそへたるは、論なけれど、それは裏なるを、表は、こゝは、いかなるよしにか、聞えにくし、もしはこれは、琴を表に出していへるにや、猶よく考ふべし、

これはよばゆくなむ十二のひら　此笛を吹んとは、まばゆしと也、此笛をつたへんとは、いかゞと也、とある注はたがへり、

哥笛竹に云々十四のひら　三の句、上に有し哥の、こゝならばならしの枝に云々の初句と、同じ詞也、こもじ、清てよむべし、

大将こそ十六のひら　こそは、さきの巻に、右近の君こそなど有し、こゝ也、

宮たちの御つらには云々十七のひら　薫君は、源氏君の、わが御子なれば、宮たちとは、一きざみおとすべき事ゝはおぼせども、女三宮は、柏木君の子とおぼす故に、おとし玉ふとやおぼさんと也、

鈴虫巻

みちをかくしほろゝけて二のひら　かくしとは、蜜(アハ)を和せたりとは見えぬやうに、ほろ〳〵としたる也、蜜をのぞく也といふ注は、たがへり、

あやのよそひにて五のひら　これは法服のすべてをいへる也、傍注に、袈裟といへるはたがへり、さてはにてといふ詞にかなはず、

まだ影かくしたる八のひら　月は見えながら、まだ暮はてざる故に、影のさゝざるほど也、下に月さし出てといへるは、さだか

に影のさしそめたる也、

哥大かたの云々九のひら　拾遺のごとし、但し下句の説はいかゞ、

哥こゝろもて云々同　拾遺のごとし、

なほ心いれ給へり同　出家し給へれども猶也、

哥月かげは云々十一のひら　四の句は、誰にもあれ、月を見る人の、我やごからにて、ひろく大かたのうへ也、わがといふは、空なる月に對へて、見る人の、こなたのといふ意也、院のみかどの御哥に、物わすれをせぬことあるをうけて、まことに然おぼしめすべきこと也、空なる月に、かはりはなけれども、見る人の、おのがやごからによりて、秋の思ひは、かはり侍るわざ也、と申し給ふ也、下句を、源氏君の、みづからの事に注したるは、誤也、みづからの御事は、此御返しによしなく、又次なる語にもかなはず、

夕　霧　巻

あなたの御せうそこ云々五のひら　拾遺のごとし、

おれて六のひら　癡^{オロカ}にてこいふと也、おれ〳〵しなどもいへり、

くるすのゝさう九のひら　拾遺考ふべし、さうこいふは、此栗栖野ノ鄕に、夕霧君の領のあるをいふ也、今ノ世に、たゞ何となく、某ノ庄こいふとは異なり、

哥我のみや云々十三のひら　此のみは、我ばかりこいふ意にはあらず、ひたすらの意也、柏木に逢たるうへに、又夕霧にも逢て、ひたすらにやは名をくたすべき、とは有ルまじき事こいへる也、

めさましき心のなりにしさまよ十四のひら　落葉宮の、柏木君に逢給へる心を、我ながらめさましき心とおぼせる也、さて心のこ詞を切て、めさましき心にて、かくなりにしわがさまよこいふ也、

しらぬと〳〵こ十五のひら　下のこもじは、なくて有べし、

わが御みづからも云々同　今より後、もしおしたちたるわざをせば、われながら、我身も心おこりやせんとおぼす也、御といへるは、册子地よりいへる詞にて、我ながら心おこりやせんと、御みづからもおぼしてといへる也、さて御みづからといふに、我ながらの意は有也、

人々有しまゝに云々十七のひら　拾遺誤れり、次に、とおぼすとあるまで、つゞきたる語なるをや、

心をいたして十九のひら　拾遺云、致す也、出すにあらず、

そよや同　俗言に、それよといふがごとし、ふと思ひ出て、いひいだす時に、今もそれよといふ也、

まいていふかひなく云々廿三のひら　箋とてあげたる説よろし、弄花も拾遺もわろし、

おぼしよわる御心もそひて廿五のひら　拾遺ひがと也、

けさやかなるけしきにもあらで廿六のひら　拾遺のごとし、

めさましげにこゝちよがほに同　拾遺、いみしきひがと也、

こよひもつれなきを云々同　拾遺、又いみしきひがと也、

おきなのなにがし云々廿九のひら　ふるき物語にある事なるべし、

さすがに此ふみの同　のもじは、をゝ寫し誤れるなるべし、

いかでとりてしがなと卅のひら　下なる、ともじ、衍なるべし、

一夜のみ山風に云々卅一のひら　なゝりといふ詞、穏ならず、其故は、なゝりといふまでは、雲居鴈の、夕霧君に、たゞ申給ふ語のさまなるに、それをやがて、落葉宮の御方へ、云々と聞え玉へかしとは、いかゞなり、なやましさなゝりとは、かなたへいひやり給ふべき語のさまにあらず、文よく、見しれらん人は、わきまへつべし、

あだへかくして卅二のひら　ざれ隱(カク)して也、注どもかなはず、

ひたやごもり卅三のひら　然る故をも、何ともいはず、たゞおしこめて、ひたすらに引籠(コモ)る意の詞にて、よろづの事に、其意に

用る詞也、こゝはよべの我におふせ給ふ罪は、事のさまをもよく尋ね給はで、たゞひたすらにおしこめて、罪になし玉ふにやといふ也、注何事にか聞えず、

わが御あやまちならぬに廿五のひら　わがは、御息所のわがなるに、御といへるはいかゞ、

あいなくいみしといへば廿六のひら　あいなくは、あへなくなるべし、

いかにしてかくにはかにと廿九のひら　とは、はを誤れるなるべし、いかにして、かくにはかには、かくれ玉へるぞと、ふくめたる語也、此次もなほ、同じつゞきの語なれば、とゝはいふべき所にあらず、

いと御心のひまあらじ四十一のひら　いとは、いとゞなるべし、

月ごろへければ同　月ノ字は、日を誤れるにて、日ごろへければなるべし、八月より、九月になる間を、月ごろへてとは、いふべきにあらざれば也、

哥いづれとか云々四十三のひら　きえかへるは、きゆるとを、つよくいふ言也、わきかへるしにかへるなどいふたぐひ、みな同じ、

すのこのほどもなけれど四十五のひら　すのこのと、切てよむべし、夕霧君のゐ玉ふすのこの、少將のゐる所へ、ほどもなけれど也、

いふかひなき御こゝちなり四十七のひら　ちは、ろを誤れるなるべし、

かゝる御わかれの同　母御息所の御別れ也、柏木に別れ給ふことゝあるは、わろし、

哥里とほみ云々同　拾遺考ふべし、

をぐらの山も四十八のひら　拾遺引哥有リ、かむかふべし、

哥朝夕に云々五十のひら　音なしの瀧、此哥にては、たゞ小野山にある瀧の名をいへるばかりにて、音なしといふに、意はなし、たえぬわが涙や、此小野山に有といふ瀧ならんといふ也、

さりとて又云々五十五のひら　これより、朱雀院のおぼしめす御心也、

げにこのかたにとりて五十六のひら　このかたといふこと、聞えにくし、もじの誤りぞあるべき、

まだしらぬはげに云々六十のひら　げにとは、まだしらぬと、夕霧君ののたまへる詞を、同心して、さてそのまだしらぬとのたまふは、よづかぬ御心がまへの故にこそ侍れと、とがめたる也、世づかぬ御心がまへとは、此たび夕霧君の思ひかまへたまへるしわざの、世に似ず、有ルまじきさまなるをいふ、さてげにこそはとゝある、ともじは、後の人の、さかしらにくはへたるにや、こゝは決キハメてともじ有べき所にはあらず、のぞくべき也、

ことわりはげに云々同　此げにも、夕霧君の、人にもとわらせんとのたまへるを同心したるにて、さてしかことわらせたらば、何方をことわりとか人は申さん、君をことわり也と申す人は、よも侍らじといへる也、

こゝいへば六十一のひら　此上下に語の落たるなるべし、注は、むげに聞えぬ、しひごと也、

人のいさめをも六十二のひら　にもとあるべきを、をもといへるは、きかずといふとを、次のしたがはぬといふにこめて、はぶきたる文也、

哥なる、みを云々六十七のひら　拾遺のどし、

哥まつしまの云々同　此ぬれぎぬは、たゞぬれたる衣也、ぬぎかふるは、墨染にかふるをいふ、さて上句は、かけ哥の詞のみをとりて、意をばかへて、夕霧君のみづからの事によめる也、一首の意は、我身【夕霧】ふりぬればとても、それをいとひて、尼になりたり、といふ名を立チ玉ふべきとかはといへる也、注どもに、こと人に思ひかふる事にいはれたるは、たがへり、

うち〳〵の御心づかひは六十九のひら　これは夕霧君の、みづからの事をのたまふなれば、御の字は衍也、こは後の人の、宮の御事をのたまふ詞と、こゝろえひがめて、さかしらに加へたるなるべし、さるたぐひあまた見ゆ、

心ばへ有てしつらひたり七十二のひら　服中ながら、いさゝか婚儀のこゝろばへをくはへて、しつらひたる也、

かぎりなめりと七十三のひら　ともじ、衍なるべし、

ひが〳〵しき事共しいで給つべきと同　べきは、べしを誤れるなるべし、すべててにをはのとゝのひを、見しらぬ後の人は、

かゝる寫したがへ有也、

なごしんでんの御まじらひは七十四のひら　などは、何事ぞこ、とがめたる詞なり、子たちを、こゝかしこにすておきて、寝殿の御まじらひは、何事ぞこのたまふ也、されば此所にてよみ切ルべし、ふさはしからぬ御心とは、雲ゐの鴈の、つねの御心をいふ也、寝殿のまじらひの事をさしていふにはあらず、本に、なごを上の詞へつけて句を切たるはひがこと也、さては此なンごゝいふ詞、あまりてこことわり聞えず、又ふさはしからぬの所に、決前生後の詞也こあるもひがこと也、

たが名かをしき七十五のひら　引哥有べし、河海に出されたる哥はこゝにかなはざるのみならず、こことわりも聞えがたし、例のおぼえたがへのひがことなるべし、拾遺に引る哥ごもゝ、こゝにかなへるは見えず、

哥契あれや云々七十六のひら　二三の句は、柏木はうせぬれご、君をば、わが心のうちにとゞめおきて、わすれざるよし也、

哥何ゆゑか云々七十七のひら　かずならず、たゞ一つの身なるを、こいふ詞のしたて也、さて四の句は、うらめしこきくこ有しをうけ、結句は、あはれこ思ひこ有しをうけたり、

御　法　巻

げにいそのかみのよゝへたる四のひら　一本に、ちりのかずのよゝへたることあるよし、そは法華經によし有て、よろしかるべし、いそのかみのは、すこしうきてきこゆ、

御かたち有さまのおのがじゝの六のひら　有さまのゝのもじ、衍なるべし、

哥たえぬべき云々七のひら　こぢめのをもじ、三の句の類まるゝこ、かけ合たがへり、ちぎりはこ有べきてにをは也、

かたぐ\におはしましては云々八のひら　此こころ、紫上の詞こいへること、中宮の御詞こいへること、兩說ある中に、中宮の御詞こいへる說よろし、そのよしは、拾遺にわきまへたり、但し此時に中宮のおはします東ノ對を、六條院の東對こ見たるは、ひがこと也、其故は、上文に、中宮此院にまかゝでさせ給ふこ、此院こここわれるは、二條院なるが故也、六條院ならんには、たゞまかゝでさせ玉ふこいふ例也、こなたにはこ云々とは、東對へまかゝで給ふを、同じ院の内なる故に、紫上

の寝殿にもまた聞え玉ふ也、さればかた〴〵にとあるも、寝殿と東對と也、又末の文に、わが御方といひ、あなたといへるも、みな二條院の内にての事にて、東對をいへる也、六條院にはあらず、さて又此所を、紫上の詞といへる說は、あなたに渡らせ給はんも、といへるにかなはず、もし紫上の詞ならば、こなたにとこそ有べけれ、又拾遺にもいへるごとく、なりにて侍ればと云々といへるも、紫上の詞ならば、なりにて侍ればと聞え玉へば、とあらでは、詞たがへり、注ども、これらをば、いかに心得られたるにか、いとおろそかなること也かし

月のかほの明らかにおぼえしをこよひは云々十七のひら　おぼえしをまでは、源氏君の心を、たゞにいへる文、こよひは云々は、册子地よりいへる文なるに、その堺なきはいかゞ、おぼえしをの下、何とかや、つゞきの語たらざるこゝちす、これらは後に誤れる物とも見えず、紫式部の、とりはづしたる誤なるべし、

おくるとてもいくよかはふべき云々同　これも又、源氏君の心を、たゞにいふ語より、册子地よりいふ語へ、たゞにつゞきて、堺なし、大かた此物語、こゝらの巻々、いとも〳〵長く、大きなる文なれば、その間には、まれ〳〵には、かうやうのとりはづしも、などかなからむ、

おぼしめしたる心のほどには十九のひら　おぼしめしたるは、おぼししめしたるを、寫し誤れる也、ほどは、ほかを誤れるなるべし、遁世のことをおぼすよりほかには也、

まぼろしの巻

ひきさけつゝ三のひら　引避なり、

哥夏ごろも云々十五のひら　大平がいへる、すゞみは、涼み也、思ひを、例の火にとりて、火のほとほりの、さむる意にて、思ひのやすまるを、涼むといへる也、夏衣にたちかへて、涼しきに事をよせて、いつは御思ひのやすまらずとも、今日ばかりは、御思ひをやすめ玉へとよめる也、といへるよろし、注、けふばかりといふにかなはず、

哥さもこそは云々十六のひら　よるべの水の事、拾遺にいへるごとく、神の託玉ふ水にて、べは、其水を入れたる瓮也、哥の意

も拾遺のごとくにて、下句は、名さへわすれ玉ふは、あまりなる御事よと、かこちたる意こもれり、ふるき注どもは、すべて例のいとおろそかにて、おぼ〳〵しくして、さだかならず、いまだしきとゞも也、

哥つれ〳〵と云々十九のひら　かど、拾遺のごとし、

哥たなばたの云々同　ことしは、紫上のかなしみによりて、星合の空をも見ず、たゞ星の別れの、今朝の庭に、わがなく涙の露をぞ、おきそふる也、

「いまゝでへにける廿のひら　河海に、「人の身も云々、此哥例のいとみだり也、拾遺にいへるがごとし、後の抄どもにも、そのまゝに引れたる、いとおろそか也、

鴈のつばさも云々同　紫上のゆくへをしたひ玉ふ御心に、大空を、心にまかせて通ふが、うらやましき也、次の哥にてもしるべし、

哥大そらを云々同　鴈の空をわたるを見て、かの楊貴妃が魂のありかを、尋ね逢たりし、幻術士の事を思ひて、よみ給へる也、鴈を幻術士に比したりとあるは、いさゝかたがへり、

まめやかにつもりにけり廿三のひら　かつ消などもせず、ひた〳〵と、おほくつもるをいふなるべし、

雲隠巻

此巻は、名のみ有て、詞なし、さるは巻の名に、源氏君のかくれ給へることをしらせて、其事をば、はぶきてかゝざるにて、紫式部の、ふかく心をこめたると也、そも〳〵源氏君をば、よき事のかぎりを、とりあつめてかきたり、御かどの御子にして、御妻には、摂政の御女と、親王の御女と、姫宮とをもち給ひ、みかどゝ后と大臣とを、御子にもち給ひ、其身太上天皇の尊號をえ玉ひ、御末々まで、めでたく榮え給ふ、これよき事のかぎり也、さて死ぬるは、人の世に、凶(アシ)きとのきはまりなる故に、此君には、老ィ衰へ玉へるさまをもかゝず、かくれ給へる事をば、かゝざるにぞ有ける、さて又此物がたりは、すべて物のあはれを、むねと書たるに、むねとある源氏君の、かくれ玉へる、かなしさのあはれをかゝざ

るは、いかにといふに、長きわかれのかなしきすぢのものゝあはれは、幻の巻に書つくしたり、そは紫ノ上のかくれ給へるを、源氏ノ君のかなしみ玉へるにて、ものゝあはれのかぎりをつくせり、同じかなしき事も、その人の心の、深さあさゝにしたがひて、あはれのふかさあさゝも、こよなきを、よろづすぐれて、物のあはれを深くしり給へる、源氏君の、かなしみ給へるにてこそ、ふかきことはかぎりなきを、もし源氏君のかくれ玉へるかなしさを、かゝむとせば、たがうへのかなしみにかはかくべき、源氏君ならぬ人の心のかなしみにては、深きあはれは、つくしがたかるべし、これはた源氏君のかくれ給へるとを、かゝざるゆゑの一つなり、ふるき抄ども、此巻の論、あたらぬと、又ようなき事おほし、あるは古へ人の、終りをしらざる例、又もろこしの國の、逸詩といふ物を、例に引れたるなど、あたらぬと也、あるは佛の道の、天台の法門を、こと〴〵しく引出られたるなど、ことによしもなきひがごとにて、さらにようなきと也、また仁義禮智信を専にして、人の教たりといひ、人に佛道をすゝめんためなりなどある、すべて物語といふものゝ意をば、尋ねむともせず、ひたすらからぶみ佛ぶみにのみへつらひて、あながちにそのおもむきにかなへむとて、よしもなきことどもを、引あてられたる、かへす〴〵あぢきなく、こちたくうるさきわざにぞ有ける、

にほふ宮巻

ぜんげうたいしの（七の八ひら） 河海花鳥などに引れたる、羅睺羅（ラゴラ）の事は、こゝにかなへりとも聞えず、我身にとひし事、猶考ふべし、又善巧太子の事をもたづねて、本のよきあしきをもさだむべし、

〔詞〕おぼつかな云々〔詞〕 四の句、上のぜんげう太子の事に、よしあるにや、さらでは、はてもといふ事いかゞ也、注に、云々これ又はてをしらぬ也、とあるは、みだり也、又こと〴〵しき佛教のさだ、例のいとこちたし、

つくり出ざりけるかりに云々（十の八ひら） つくりいでず、かりにとあらでは、語とゝのはず、又出ざりける人にて、などありしが落たるか、

香（カ）のかうばしさぞ云々〔詞〕 此事いとうたがはし、其故は、大かた人身に、おのづからのかうばしき香は、なき物なるに、

かくいへるは、作りことめきたり、此物語は、さるあやしきつくり事めきたることはかゝず、みな世にあるさまの事なるに、此事のあやしきは、いかなることにか、

紅梅巻

なぐさめのこともあらなんと五のひら　拾遺に、あらなんは、ありなんなるべし、あらなんは、末をかけたるねがひなれば、上にわがよにやといへる、てにをはたがひて、かなはず、といへる、まことにさること也、次のいのりてといふと、ありなんにても、妨なし、

おやがり給へど六のひら　とは、ばを誤れるなるべし、

いはゆる御さかりの大将などに九のひら　大かたかゝるやむごとなき人々の、宮のすゝみを考るに、わかくさかりなるころほひは、いづれも大かた大将也、源氏君夕霧君薫君など、みな然り、つねに夕霧ノ大将薫大将狭衣ノ大将などよぶも、そのさかりのほどの、官をもていふ也、さる故に、いはゆる御さかりのといへる也、

さかしきひじりの十のひら　拾遺のごとし、河海あやまり也、

時とられて十一のひら　時は、時にあふ、時をうしなふ、時めくなどの時也、

うらみて後ならましかば同　恨みて後に、かゝる哥をもおくられば、おかしくもやあらましの意也、注、いたくたがへり、

人の御有さまなどかはさても云々十五のひら　などかはといふこと聞えず、かもじ衍にて、などはなるべし、

竹川巻

これはげんじの云々二のひら　此はじめの語、いづれかはまことならむといふまで、注どもことごとく誤也、これによりて、今あらためて、くはしくさとさんとす、これはとは、此巻にしるしたる事どもをさしていへり、源氏の御さうにも云々とは、匂宮ノ巻をうけていへり、かの巻のはじめに、ひかりかくれ給ひにし後云々と、書出して、匂兵部卿宮及薫ノ君など、源氏君の御子御孫たちの事をしるせるをうけて、その源氏の御末にはあらぬ、後の大殿といふ也、後の大殿は、髯黒ノ君也、

わるごたちとは、口さがなき女房共をいふ、おちとまり云々は、生のこれるよし也、しおきたるはとは、しおきたる物語は、といはんが如し、紫のゆかりとは、紫上の御方にありし、女房共をいへり、紫といふから、ゆかりとはいへる也、さて今いふ、後の大殿わたりのわるごたちの、物語は、紫上の御方の女房の語れるとは、似ざるべけれど、同じやうに、そのわたりの事を語りおきしといふ也、かくいふは、かの源氏君の御末々の事は、紫上の御方に有し女房共の、語りおきたるになしていふ也、かの女ごもは、かのわるごたち也、源氏の御末々に云々、これかの女ごものいへる詞也、ひがことごもとは、紫上の御方の女房の、源氏君の御末々の事共を、かたりおきたるには、あらぬさまにあやまりて、實ならぬ事共のまじれるを、そしりたる詞也、さてそれは、紫上の御方の女房の、我らよりも猶年老て、ほけ〳〵しきが、語り誤れるにやと、かのわるごたちがいひて、あやしがりたるとも也、われは、わるごたちのいふ我也、いづれかはまことならむとは、上の語をうけて、此物語の作りぬしのいふ也、そは後の大殿わたりの女房は、紫上の御方の女房の、源氏君の御末々の人々の事を、かたりおきたるは、ひがことゞも多きを、我らが申す、此大殿わたりの事共は、みなまこと也とて、語りたる、二方ともに、年老たる人々の、語りしとなれば、いづ方かまことならんともにさだかならぬ事なれども、まづ聞たるまゝに、いづ方をもすてず、しるしおくぞといふ意にて、その紫上の御方の女房の語れるは、匂宮ノ巻、後の大殿わたりの女房のかたれるは、即チ此巻也、さて此物語は、すべてみな作り物がたりなるを、實に世に有し事を、人の語れるを聞て、書るごとく、ことさらにおぼめきて、かくいへるも、一ッの興也、注ども皆誤なる中に、ひがことゞもといふを、花鳥に、冷泉院の帝、薫ノ君などの物のまぎれ、又玉葛君の事などにあて給へるは、殊にいみしきひがこと也、かの物のまぎれごもの事を、ゆくりなくこゝにいはんは、何のよしぞや、

内侍のかみの御はらに云々同 これより、かのわるごたちのかたりし、後の大殿の姫君たちの事をしるす也、玉かづらの君の事をしるすにはあらず、

にほひが九のひら にほふ香をいふ、にほひと香と也といふ注は誤也、

めてくつがへる十一のひら　くつがへるは、たゞめづることの甚しきをいふ詞にて、きえかへるわきかへるなどいふ、かへるに同じ、再三めでたる也といふは誤也、

すきものならはさんかし同　ならはさん、聞えがたし、ならはんもいかゞ、もしはならさんを誤れるにはあらじか、

心にもいらず十二のひら　いらずは、いれずなるべし、

いとなんあはれなる同　つねにはかなき事のついでにだに、父大臣の御事は、思ひ出るに、まして此薫君の和琴は、父大臣の爪音によく似たれば、此物の音に深く感じて、殊に深くあはれとおぼす也、

同じ聲に出して十三のひら　同じこゑにとは、薫君などの、竹川をうたひ出し給ひたるにつれて、同じくうたふをいふ也、薫君の、竹川をうたひ出されたることは、こゝには見えざれども、下なる哥に、竹川のはしうち出し、とあるにてしらる、さて出しては、うたひ出して也、

水うまやにて云々同　こよひは、何の御馳走もなきに、いたづらに夜をふかしたりと、たゞたはふれたるのみの詞也、

哥をりからや云々同　此をりからは、たゞをりといふ意のみにはあらず、人から所からなどのからにて、をりによりてといふ也、こよひ薫君をここにもてはやさるゝことは、をりのさまによりて、あはれをしり玉ふにや侍らんと、玉葛君のために、ことわりをいへる也、下句は、必しも薫君をのみもてはやして、君をおろそかにおぼせるにはあらじと也、

哥竹川に云々十四のひら　三の句、も。は、を。の誤にて、ものをの意也、四の句、を。は、と。の誤也、本のまゝにては、一首の語とゝのはず、哥の意は、よべは、夜をふかさじとて、いそぎてかへり給ひし物を、深き心の底はしりきやとのたまふは、いかなることとか思ひおき侍らん、いと心得ぬ御事よと也、注、いみしきたがひ也、

花鳥の色をも音をも云々十七のひら　二つのを。もじ、下のとまる物なれといへるにかなはず、色も音もとこそ有べけれ、

つゝましければ同　ば。もじ、衍なるべし、

かげにそひてぞ十九のひら　物の陰にそひて忍びつゝ也、

哥さくらゆゑ云々同　思ひぐまなきは、思ひやりのなき意にて、こゝにては、此櫻の、妹ノ君の方によりて、姉君のために、思ひやりのなきと也、

哥心ありて云々同　みぎはにといふに、右方によれるとをもたせたり、然らざれば、心有てといふと、聞えず、

哥さくら花云々廿のひら　結句、一本、袖は有きやとある、まされるか、古哥にも、大空におほふばかりの袖もがなとは、ねがひたれども、さる袖は、昔もなかりしものをといふ也、

なぐさめさせ給へ同　少將の思ひを、なぐさめ給へなり、玉葛君のこたへに、此ほどをおぼししづめて、なぐさめ聞えんさまをも、とあるにてしるべし、注いみじきひがこと也、

哥いでやなぞ云々廿二のひら　初句にて、句を切て心得べし、かくまで思ふは、いでや何事ぞと、みづからとがめたる也、さて數ならぬもまけじも、碁の緣の詞也、返哥と考へ合せてしるべし、

哥けふぞしる云々廿四のひら　此哥は、中將のおもとなるべし、玉葛君の哥としては、たはふれにのみもとりなすかなといふこと、似つかはしからず、もし玉葛君のならば、とりなし給ふかなとこそいふべけれ、

參るべきと思ひ玉へつるに廿五のひら　べきは、べしなるべし、後の世の人は、かうやうの詞のさだまりを、しらざる故に、ふと寫し誤れるならん、

哥あはれてふ廿六のひら　つねならぬ世を、あはれといふ一言も、その人によりて、かくべきことなるを、我は、いかなる人にかくる物とも、わきまへしらずと也、下句の心しらひ、いとおもしろし、

ゆゝしきかたにてなん云々同　あはれといふ一言も、いかなる人にかくる物かは、しらねども、今かぎりときく、ゆゝしき方にて、心にはほのかに、あはれと思ひしりたり、それも戀の方にはあらず、たゞゆゝしき方にてぞ、しりたるといふ也、かたにてなんといへる詞に、心をつくべし、又ほのかにといへるも心しらひ有、注どもは、おろそかにて、こまかなる意あらはれず、又拾遺の、哥の說も、下句の詞にかなはず、

哥いける世の云々廿七のひら　ゆゝしきかたにてなん云々、とあるをうけて、然らば、我ㇾきはめて死なば、あはれとのたまふとのありもやせん、然れども死ぬるとは、心にまかせねば、いかならん、決(キハ)めてはしりがたければ、その君があはれとのたまふ一言をも、つひにきかでやゝまんと也、

しばしさふらひ玉ひなんと廿八のひら　玉ひなんは、玉はなんなるべし、

哥手にかくる云々同　松山の意はなし、四の句のこゆるは、たゞよそになる意にいへるのみなり、

哥むらさきの云々同　結句、藤の花の緣にて、かゝらざりけれとある本、まされり、意は、まかせざりけれと同じ、

かんの君を申給ふ廿九のひら　かんの君を、いとものしと思ひて、そのよしを申給ふ也、かんの君にといふとは異也、

藏人ノ少將の月の光に云々卅三のひら　かゞやきは月の光を、まばゆく思ふにて、はぢかゞやくといふかゞやく也、容貌のめでたくて、照ッかゞやくといふにはあらず、踏哥の夜、此院中にて、藏人ノ少將の、月の光を、まばゆく思ひたりしけしきも、月の桂のかげを、はづかしく思ひてにはあらで、新(イマ)女御の見給はむと思ふによりて、まばゆかりしにやあらん、さればこそ、禁中にては、さしもまばゆげにも見えざりし、といへるなり、院中に對しても、雲の上とは、禁中をいふと、鈴虫ノ卷なる、冷泉院ノ帝の御哥にも見えたり、注どもいみしき誤也、さて此段、藏人ノ少將のうへをいへるにことよせて、下の心には、薫君の、みづからの心をも、こめたり、はじめに、一夜の月影は、はしたなかりしわざかなといひ、又かゞやきたりしけしきもといへる、もゝじも、みづからの事と、兼たる詞也、又次なる女房の詞哥ともに、薫君の事なるなどにて知べし、

哥ながれての云々同　二の句、たのめとある本は、誤也、たのみとたのめとの違ひの事、拾遺にいへるが如し、初二句の意は、髭黑ノ大臣の姫君を、思ひかけて、末を頼みしも、院へ參り給ひて、むなしくなれるよし也、さて此事によりて、大方世はうき物ぞと、思ひしれりと也、注ども、いかなる意にか、趣聞えがたし、

物のはえもなきやうなれど卅五のひら　帝おりゐ給ふ後なる故也、下の、男宮の生れ玉へるところに、おりゐ給はぬ世ならまし

かば云々、こあるこ合せて知べし、姫君故也こいへるは、俗意也

わづらはしくておほやけざまにて云々廿六のひら　姫君のごく、又中の君も、中宮などゝ、うるはしからぬ事有てはこ、わづらはしき故に、たゞおほやけざまの宮づかへにこおぼす也、上にくるしくも有べきかなこおもほすに、こいふより、わづらはしくてこいふへ、つゞく意也、

こおこどの御心をおぼして同　大臣の世におはせしほご、姫君を、みやづかへに出し参らせん事を、奏しおき給ひし、その御心をおぼして也、注共、御心こいふにかなはず、

むかしの例同　河海に、以尚侍譲子例、可勘こあり、

こしごろ申シ給ひしは云々同　上に、こしごろかうおぼしおきてしかご、えじゝ給はざりしを、こあるをうけていへるにて、玉葛君の、辭し申シ給ひしとの、かなひがたかりしをいふ也、諸人の望の事歟、こある注は誤也、

おもひ玉へてなんわづらひぬる同　てもじ衍也、後の人のくはへたるならん、

おほやけごこにつけても云々同　玉葛君は今まで、尚侍にて有リながら、人の北ノ方にて、おほやけ事をば、をさ〱つこめもし給はざりしを、さやうにては、彼所のまつりごもかけて、然るべからざる事也、はやく讓りて、中ノ君に、宮づかへせしめ給へこ也、語のさまをよく味ひてしるべし、

みこたち大臣の御むすめを云々四十のひら　みこたちの御女を、薫ノ君にこ心ざし給ひし事は、蜻蛉巻に、式部卿ノ宮の姫君の事をいへるこころに、薫君の詞に、きのふけふこいふばかり、春宮にやなごおぼし、我にもけしきばませ給ひきかしこ見え、大臣の御女の事は、匂宮巻に、夕霧ノ右大臣の御女一こころを、薫君にこ、心ざし玉ひしと見えたり、

大臣殿は四十四のひら　紅梅ノ右大臣を、こゝにかくうちまかせて、大臣殿こ書るは、すこしゆくりなきやうに聞ゆれご、新任の大臣にて、次に引つゞきて、大饗の事をいへれば、かくもあるべき文にや、

源氏物語玉のをくし九の巻

宇　治

はし姫巻

ふる宮おはしけり二のひら　惟喬親王に准據して書るなるべし、冷泉院の御世になりて、世にはしたなめられ給へる事、似たることあり、又宇治にすみ給ふは、かの親王の、小野の山里にこもり住玉へりしに准へたるなるべし、薫君のとぶらひ参り給へるも、業平ノ朝臣のおもかげあり、菟道ノ稚郎子の御事は、さらによしなし、

かぎりある身にて三のひら　世にかずまへられ給はねども、さすがに皇子にておはしませば、かぎり有て、たゞ人のごとくにはあらざる也、細流に、天子に對へて解玉へるはたがへり、かの説のごとくは、上へ限ある也、これは然らず、下へ限リ有て、たゞ人とはことなるよしにこそあれ、

いたはしくやむごとなき云々四のひら　姫君の事也、中ノ君といふはひがごと也、

わが御時九のひら　或抄に、御威勢の時也といへるごとく、この時は、時にあふ、時をうしなふなどいふ時也、

中將の君は中々云々十二のひら　院の御かどは、姫君たちをゆかしくおぼしめすに、年わかき薫ノ君は、かへりてさはあらで、父宮をゆかしくおぼせるといふ也、細流、中々のあてごころたがへり、

はかぐ\しくもあらで過ぬべかめるを十四のひら　をは、もを誤れるなるべし、

さすがに物むつかしくなどのみあるを十六のひら　上のその人ならぬ云々の意也、

世のためしにきゝ出べかめるを十九のひら　きゝは、ひきの誤なるべし、

をしへよせ奉れり廿のひら　此ことのゐる人が、薫君を、かくみちびきよせ奉りしは、上ノ文に、御けはひかほかたちの、さるなほ

なほしきこゝちにも、いとめでたく、かたじけなく、おぼゆれば云々、とあるごとく、さるなほなほしき心にも、人の品の高きと、かたちのめでたきとに、おのづから感じて、やむことえぬ心のあるは、おのづからの人の情にて、これ物のあはれをしれる也、されば紫式部も、そこをはめて、さるなほ〳〵しきこゝちにもとはいへる也、然るに弄花細流に、このゐ人の心、然るべからず、不忠也とあるは、物語を、いはゆる經書などのごとく思ひ玉へるにや、例のからぶみにへつらひたる、あぢきなき論也、

扇ならでこれしても月はまねきつべかりけり　廿四のひら　河海に、水源に、月を學ぶといふ說ありと見ゆ、此說然るべし、まねびを、後にまねきとは、改めつるなるべし、さるは次に入日をかへすばちこそ有けれ、とあるにつきて、まねびは、まねきの誤と、ゆくりなく思ひとりて、さかしらに改めつるなれど、扇を以て、月を招ける事、故事も何も、よしなきことなれば、中々にひがこと也、そのうへ月のあかくさし出たるとあるにも、まねくは、似つかはしからず、まねぶは、かの撃テ扇ヲ喩フ之といふに、よくかなへり、下にこれも月にはなるゝものかはといへるも、まねぶにてこそ、よくかなへり、さて入日をかへす云々とは、たゞ撥につきていへるなれば、まねぶといふに妨なし、

まだきにおぼゝれ　廿五のひら　萬水一露に、いまだいひも出ぬに、はや涙にくれたると也、といへるよろし、はやくとのみにては、此詞の意にたがへり、

弁が母になん侍る　廿六のひら　此詞心得ず、其故は、こゝに始めて逢給へるこゝろにて、いまだ名のりはせざれば、薫君は、弁といふ名は、いまだ知り玉ふまじきに、ゆくりかにかく、弁がとは申すべきにあらず、

さしかへる云々　廿六のひら　初二句は、薫の事をいへりといふ說は、かへるといふ詞になづめるにて、ひがこと也、かへるといふに、意はなし、

かくあやしうよづかぬ云々　廿七のひら　姫君たちの事を、八宮のおぼせる心也、よづかぬとは、琴をひき給へと、たび〳〵のたまへども、聞入れずして、ひたすらすまひ玉ふ事をさしてのたまへる也、思ひやりは、人の思ふこゝろ也、思ひの外なるは、

八宮のおぼしめす御心のやうにもあらぬ也、はづかしうは、薫君のおぼさんこころをなり、

おまへにてうしなはせ玉へ四十一のひら　薫君の御まへにてうしなひ玉へと、弁が今申す語也、我なほといふより、柏木君のいひ玉ひし詞也、

かの御名のふうつきたり四十二のひら　これは柏木君の、みづからつけ玉へる封にはあらずして、弁が、柏木君の御名をかきて、つけたる封なるべし、其故は、此中に、かの君のいまはのほどになりての文あり、これは女三宮の御許にこそ有べけれ、柏木君の許にとゞめて、みづから此袋に入れおかるべきよしなし、されば、かの文は、弁がうけとりながら、小侍従にはわたさで、とゞめおきたるか、はた女三宮よりこひかへして、此袋には入レおきたるか、とはいづれにまれ、柏木君の、みづからの封にはあるまじき也、

さまぐ〵かなしき事を同　をは、とをあやまれるなるべし、

哥命あらば云々四十三のひら　二の句、或抄に、よそながらも見んものをと也、といへるよろし、それともといふは、よそながらもの意也、

椎が本巻

まいていまやうの四のひら　此まいてといふ詞、心得がたし、

いといとほしく九のひら　見奉る人も、いといとほしうおしはかり也、

一こころ〲世に住つき云々同　ひとり〲といふと同じことにて、姉君中ノ君、いづれにまれ、一ところといふ意也、湖月本に、一こころとのみあるは、雅言をしらぬ人の、さかしらにはぶきすてたる也、

さるべきにやおはしけん十のひら　上へつきたる語也、下へかくるはひがと也、昇進をかくいはむと、いともにつかはしからず、

久しうなりにけるを同　此下に、ともじ落たるなるべし、

猶尋ねきたるに云々同　みやこにはまだ入たゝぬ秋を、尋ねきたるに、とうくる語也、猶は、おかしう云々へかゝれり、

山のはちかきこゝちするに十一のひら　拾遺に、此山のはを、東の山といへるは、さし出てといふを、心得たがへたるひがこと也、此物語、月の出るといへるは、東の山より出るにはかぎらず、雲にかくれなどしたるが、顯はるゝをも、又日のくれて、光の見えそむるをも、出づといへり、こゝは雲に隱れたるが、顯はれたるにて、山のはゝ、西の山のは也、下に、入かたの月は、とあるにてもしるべし、

ならしそめつる十三のひら　姫君たちを、薰君に馴しそめつる也、

むかしざまにても廿六のひら　たゞ我らへの御心ざしにはあらで、たゞ昔の八宮への御心ざしの、なごりばかりなるにても、といふ意也、

心ぼそくかなしきことを卅一のひら　をは、もの誤なるべし、

絕侍らむが心ぼそきになん卅二のひら　きは、さの誤なるべし、

哥きみなくて云々同　下句は、中君にとひかけ玉ふ也、君はいかゞ見給ふぞ、古宮の終りにおはせし所と思へば、あの山の雪も、今年は我は、あはれとこそ見侍れの意なるべし、

哥おく山の云々同　哥の意次の詞にてしるべし、注に、作者のみづからの哥を入れたりとの論、ようなきこと也、

心より外なること思ひ玉へれど卅四のひら　思ひ玉ふれどなるべし、

何事にもあるにしたがひて云々同　これより、心ながきためしになるやうもありといふまで、すべて女のあるやう、心もちひをいへる也、注ども、誤多し、次々にいふべし、

おほどけたる同　大やうなる也、よからぬ人のこと也とあるは、いみじきたがひなり、こゝは大やうなるを、よきことにいへるにこそあれ、

すこし心にたがふふしあるにも云々同　男の心の、あだになど有て、心にたがふふしある時も、よしやいかゞはせん云々と、思ひなして、堪忍してすぐせば、心長きためしになりて、末長く契りたえぬ事も有と也、中々とは、男のあだなるにより

て、かへりて女の心長きためしになるよし也、これみな、女の大やうなるを、よきにいへる語也、

くづれそめては云々同　これより上ノ件の裏ウラにて、女の大やうならざるが、あしきよしをいへる也、くづれそめてはとは、いさゝか心にかなはぬ事有とて、男をうらみて、そむく事有ればといふを、川岸の崩れそむるにたとへていへる也、にごる名をも云々とは、嫉妬ふかく、心みじかき名のたつ事を、たとへたる也、此わたり、注どもいみしき誤也、

名残なきやうなるとなども云々廿五のひら　女の、男を恨みそむくから、契りの、なごりなくたゆるやうの事も有と也、

みなうちまじるめれ同　此下に、ども。じ落たるなるべし、上にこそといはでは、めれとはいひがたければ也、さて此語の意は、世ノ中の男女のなからひの中には、さやうなる事も、まじりて、つねに皆よくある事ぞと也、

心のふかくしみ給ふべかめる云々同　上ノ件のごとく、女の心みじかく、嫉妬ふかくなど有て、契りたゆる事も、世に多けれども、匂宮は、そのおぼしめす御心ざまにかなひて、そむくと多くなどだにあらざれば、然なごりなく絶玉ふやうなるとはなしと也、おほくなど物せざらんをばといふべきを、し給はざらんをばと、敬ひてのたまふは、やがて中ノ君へかけて也、そむくとおほくなど云々の注、いみしきひがと也、おもしろき詞也とは、いかにおもしろきにか、

わが御みづからのとゝは同　下のと。は衍にて、ここはなるべし、薫君の、姉君に心をかけて、けしきばみ給ふとあれども、そのみづからの事は、もてはなれて、おぼしもかけず、すておきて、中君の事を、親になりて、返答申さんとおぼせど也、注どもに、上件の薫君の語を、下には、我ヵ姉君への心ざしをのたまへる也とあるは、こゝの御みづからのとゝは、とある詞によりてなれども、然にはあらず、上ノ件の語は、たゞ匂宮の事のみ也、

御みづから聞しめしおふべき云々廿六のひら　わがかく申すは、中君の御事にこそあれ、御みづからの事に、聞おひ玉ふべきにあらずと也、

影さへ見ゆるしるしも云々廿七のひら　しるしは、しるべを、寫し誤れるなるべし、しるしにては、聞えがたし、さて影さへ見ゆるとは、山の井の意にて、常には淺き事にいふを、こゝはかの淺香山の哥の、下ノ句の意にて、淺からぬ意にいへり

と聞ゆ、さて影さへ見ゆるしるべとは、淺からず思ひ玉ふ、匂宮のためにし玉ふ、薫君のしるべ也、淺うは侍らじとはこれもかの哥の詞にていへるにて、我も淺からず、心のかぎりつくして、しるべをし奉らんと也、

物ごほくすみたる同　すみたるを、すゝみたるとある本は、わろかめり、

おい人にまぎらはし給ひつ卅九のひら　弄花の說のごとし、

薫君がをる云々同　下句、今年は、父宮のましまさねば、かゝるものを見ても、春ともおぼえずとの意也、

いろなりとかいふめる四十四のひら　拾遺をも、考ふべし、

あげまきの卷

みやうがうの糸二のひら　花鳥說然るべし、河海說いかゞ、机にたるゝ糸を、名香の糸とはいふべきにあらず、

かくてもへぬる同　へぬるは、糸の縁にていへり、

わがなみだをば云々同　拾遺に、伊勢參の詞書を引る、考ふべし、

心ぼそきすぢに云々同　ほそきもすぢも引かけも、糸の縁にていへる詞也、

心をのぶるたよりなりけるを三のひら　をは、とを誤れるなるべし、

けさやかにおとなびても云々五のひら　姉君の、中君の事を、心ぐるしくはおぼしながらも、さかしだちて、親などのやうには、いかでかあつかひ玉はんと、薫君の、ことわりとおぼせる也、注どもたがへり、

いかにおぼしおきつるかたの云々同　いかにと讀切べし、然らざれば、てにをはとゝのはず、さてこれは、姫君の、ことと人にと、おぼし掟（オキテ）つるにや、いかゞといへるなり、注、古宮のおぼしおきてしやうに聞ゆるは、たがへり、

ここよがり六のひら　心に思はぬ事をも、といへる注は、少したがへり、

さやうにおもむけて云々七のひら　薫君の、もし中君をのぞみて、さやうにおもむけて、申給はゞ、ゆるしもし玉ふべきやうに、姉君のおぼすめるといふ也、花鳥說、おもむけてを、姉君へかけて解れたるは、たがへり、

もてはなれ給はざらなんと十のひら　ざらなんは、願ふ詞にて、もてはなれず、夫婦のかたらひもし給へかし、と思ふべければ也、注たがへり、

おそろしさもなぐさみて十四のひら　夜も明たる故也、心もとけ玉ふ也といへるは、たがへり、

同山里の云々十五のひら　とりあつめといふに、鷄(トリ)をこめたり、とりあつめたるは、あはれなることを也、

あらため給ひつらむ十九のひら　此下に、とおぼせば、などいふ詞の落たるならん、本のまゝにては、文とゝのはず、

長月もしづ心なくて同　此詞、九月になりての事のごとく聞ゆれども、下に、まだけはひ暑きほどなればともあれば、猶八月の內也、然れば長月をまたんも、しづ心なくてといふ意にや、少しいかゞに聞ゆ、

こゝに出てはいかでかは云々廿のひら　言にいでゝ、しかじかといはむには、然らばと、薫君のうけひかぬはことわり也、されば言にいでゝ、とはいはずして、中君をあはせん、然せば、薫君の、中君に思ひうつるべしと、思ひかまへ玉ふ也、細流の說は、いみじきたがひ也、まちとる人のあらんとあるをば、見玉はざりしにや、

さるべき人のおはせず廿四のひら　ともかくもあつかひ玉ふ父母の、おはせぬよになりて、といふこと也、注、おはせずといふにかなはず、似合たる人おはせずしてといはんは、俗意也、

いかにするわざぞと廿六のひら　姉君の、我ながらおぼす也、

げに心もしらざりけりと廿七のひら　とよひかく薫君の、ちかづき給ふべき事のこゝろを、かねてしらざりけるさまに見ゆれば也、傍注ひがこと也、

例のおかしく云々廿八のひら　さきに姉君と、そひぶしゝ給ひし時のごとく、例の實事はなくて、夜を明し給ふよし也、注ひがこと也、

何かこれは云々同　何かは、上の詞をとがめて、何かは、外(ホカ)の事にはあらず、これは云々の故也といふ也何事ぞといふ注は、意たがへり、

あふ人からの云々廿九のひら　實事はなかりし故にいへるやうにも聞ゆ、

すてがたくおこしおき卅のひら　おこしは、おぼしを誤れる也、さてこは花鳥の說よろし、古宮の、世を捨玉へる御心にも姫君たちをば、すてがたき物に、おぼし置つるよし也、花鳥の外の注、いみしきひがこと也、

いかにしつる事ぞ卅二のひら　これも我がかまへ玉へるを、我ながらおぼす也

哥同じえを云々同　哥の意、湖月師說の方、よろしく聞ゆ、

かばかりの世ノ中を卅二のひら　かばかりのは、心へかゝれる詞にて、世中をば、思ひすてむと、かばかり深く思ふ心に、とい ふ意也、

ひたやごもりにては云々卅六のひら　此こころ、注ども、姉君と中君とのあひだ、まぎらはし、これは薫君の、姉君のおぼすごくに、今よりは、中君に思ひうつるべし、然れども、姉君へ、今一言申さまほしきことをも申さず、ひたやごもりにては、えやむまじければ、まづ姉君に對面して、申すべき事を、一言申シて、さて中君の御方へは物すべきほどに、中君の御方へは、今しばし待て、みちびき給ふまじくやと、かたらひ玉ふ也、

いかなりけることかは云々卅八のひら　との上に、ことの二字落たるなるべし、さて又おしはかり給はんは、おしはかり聞えん、などゝ有べき語也、これは世の人の、おしはかるにても有べく、又姉君の、みづからおしはかりにても有べし、いづれにても、給はんといふ詞は、かなはず、注に、匂宮も、何とか云々といへるは、ひがこと也、

おろかならぬ云々四十のひら　薫の詞にて、匂宮の、はるかなる道をへて、宇治へおはせし事を、おろかならぬ御奉公の御心ざしよと、たはぶれたまへる也、注たがへり、薫君の、匂宮への心ざしを見ては、御こゝろざしといへる、御の字にかなはず、匂宮の宇治へおはせし事を、宮づかへとは、たはぶれたる詞なれば也、

おひつぎかき給ひて四十五のひら　きもじ濁るべし、追繼也、先キのくだりを追て、同じさまに、つゞけてかくをいへる也、

哥さよごろも云々同　上句は、姉君にも中君にも、實事はなかりしかば、實に逢たりとはいはれずとも也、下句は、然れど

も二所ともに、そひぶしはし給ひしとなれば、かどばかりは、かくまじきにもあらずと也、注、哥の詞に、なき意なり、

人しれずわづらはしきみやづかへ四十六のひら　宇治への媒しるべの事也、さてそのしるしには、かへりて中宮などの勘當をかうぶり侍らんかと也、

かほのいろたがひ侍りつる同　日ごろへてかくといふより、これまでは、匂宮の、宇治の事を、深くおぼすかいかゞと、御心を引見んために、ことさらにつくりての給へる語也、實にかくおぼせるにはあらず、

おなじ御さわがれにこそは四十七のひら　たとひ今夜宇治へおはせずとても、もとよりさわがれ玉ふとなれば、同じ御さわがれなれば、おはしませといふ也、俗の諺に、一寸きらるゝも、二寸きらるゝも、同じとゝいふ心ばへなり、注は、いみしきひがと也、語の勢にてもしるべし、

ひが〳〵しくもてなし給ふを四十九のひら　をは、例のとを誤れる也、

いつきすゑたらむ姫君も云々五十一のひら　世ノ中に、やむごとなきの家の姫君の、かぎりなくもてはやされ、いつきすゑられたらむも、これにさのみまさるはあらじ、これほどの事なるべしと也、思ひなしのわがかたさまの云々とは、さやうにいつき居たる姫君は、こなたよりの思ひなしにて、いつくしく思はるゝぞといふ也、細流などにこれを、女一宮の御事として説玉へるは、わが方さまといふを、匂宮の我と心得られたるよりの誤也、わが方さまとは、かの姫君を見る人の、こなたのといふことにこそあれ、又姫君を、姫君とはいへることなきをや、

哥絶せじの云々五十二のひら　二の句、わがといへるは、匂宮は、たえじとはのたまへども、いかゞあらん、しられぬことなるを、我は、それを頼みにする意なるべし、

所につけてはいとゞ云々五十四のひら　所につけてはといへる意は、京のやむごとなき所にくらべては、此宇治ノ宮は、よろづさびしき所なれば、いかにかしづき奉るとても、限有て、いとことになどいふばかりにはえあらねども、此所のさまにあはせては、いとことにかしづき奉れるをいふ也、

物思ひくはふるほごすごし五十五のひら　過し也、一本にすぐしこ有、少しにあらず、

わたり給はむ心まうけに云々五十八のひら　三條宮へわたましの心まうけにかねてしおかせ給へるを、まづ宇治へ奉り給ふ也、注たがへり、

ゆかしげなけれご五十九のひら　薫君の、悉皆あるじのごくに、萬をさだし玉ふを、ゆかしげなき事ごおぼす也、かつはこいへるは、うれしき物の、かつは也、

哥櫻こそ云々六十二のひら　櫻は、葉のよく紅葉する物なるによりていへる也、春は花、秋は紅葉して、さくらこそ也、

哥いづこより云々同　拾遺に、八宮の秋かくれ給へるによせたるよしいへる、よろし、さていづくにかなごはいはずして、いづこよりこいへるは、此紅葉のかげは、かくばかり過うければ、八宮も、こゝよりは、え立て行給ふまじきに、いづこより立てゆき給ひしとぞの意也、

哥見し人も云々同　岩垣こは、岩の、おのづから垣の如く、たちめぐれるをいふ、石を、垣のやうにつみたる也こあるは、たがへり、

見おこりする御心を云々六十三のひら　匂宮の御心の事也、注たがへり、

かつはかの中納言も云々同　中君へ、匂宮の御心の淺きは、中君のかたち心ばへなごの、よくもあらぬ故にやなご、薫君も思ひやし給はんこ、はづかしく、姉君のおぼす也、

こりかへす物ならねごをこがましう六十六のひら　ならねごの下、もしはをこがましうの下に、詞落たるなるべし、

うらなくものをこ云々六十八のひら　伊勢物語の心は、妹をいたはりて、うつくしみにいへる也こは、例のからぶみにいたくへつらひたる、しひご也、

御心のうつろひやすきは六十九のひら　きは、さの誤也、

哥ながむるは云々七十四のひら　ながむるこころは、京も宇治も、同じ雲るにて、へだてはなきを、時雨のすれば、その雲にて、同

じ空をも、へだつる故に、何とて同じ空をへだてゝ、おぼつかなさをそふるとぞと也、
ものゝつみめきたる八十二のひら　或抄に、物のけなどにてもなしと也、
けぶりもおほくむすぼゝれ給はず八十七のひら　こゝの注みな、なくて有べし、
哥きしかたを云々九十三のひら　拾遺のどし、結句は、上文に、行さき長きことを契り聞え玉ふも云々、とあるを受て見るべし、
此類むは、たのむるにて、あなたより、こなたを頼ましむる也、匂宮の契り給ふをいへり、
中々いぶせう同　かく人づてならで、哥をもよみかけ玉ふばかり近くあひ見ながら、物へだてたるを、中々といふ也、
哥行末を云々同　拾遺のごとし、
ましていかに云々同　細流のごとし、湖月師説は、つらんといふにかなはず、
つれなき物から九十四のひら　抄とある說のどし、
二條院のにしの對に九十五のひら　一本に、六條院のとあり、今思ふに、次の卷に、京へうつり給へるこころは、まさしく二條院なれども、こゝの次の文をもて見れば、これは六條院にも有べきか、其故は、時々も通ひ玉ふべくといへると、二條院にてはたがへり、二條院は、匂宮のつねの宮なれば也、又女一宮の御方に云々も、二條院にては、さはおぼすまじきこと也、但しこれもし六條院ならば、次の卷に、中宮は、六條院へこのたまひしかども、しか〳〵の故にて、二條院に渡り奉り給ふと、そのよしをいふべきに、さることもいはで、二條院に渡り玉ふよしなるは、猶うたがはし、

早蕨卷

哥君にこて云々二のひら　つねをわすれぬは、年ごろならひたることを、わすれぬよし也、時をわすれぬ也、とある注は、たがへり、
のこりありげに五のひら　心にのこして、いはぬことありげにおぼして、其趣にこひたまふ也、
いはせのもりの云々六のひら　拾遺に、花鳥に、いはせの森に、しかとしたる古哥なしとのたまへるを、考へもらし玉へるさまにいひて、萬葉八の卷なる、いたくなゝきそ我戀まさる、といふ哥を引て、その哥こゝにかなへるよしをいひ、又一本、

いはたの森とあるよしにつきて、六帖なる、いはたのもりの哥を引て、いよ〳〵こゝにかなへるよしいへれども、いづれの哥も、こゝにはかなはず、なほ別にかなへる哥有べし、花鳥に、しかとかなひたる哥なし、とのたまへるがごとし、又かの万葉八の哥は、すでに河海に、奥入伊行釋とて、戀しくは云々の哥と、ならべて引れて、按スルニ之此兩首、猶今の心に不ㇾ叶歟とあれば、考へもらされたるにはあらずかし、

やどをばかれじと十のひら　河海に引れたる、今ぞしるの哥は、さらにかなはず、引哥なほ外に有べし、其哥をしらでは、この意、しひてはいひがたけれど、こゝろみにいはゞ、此里をば、かれじと思ふ心は、ふかく侍れども、ちかくこのたまふにつけては、又うれしくも有て、さま〴〵思ひみだれ侍るとのたまふ也、薫の殿と近き所へうつり侍らんは、たのもしく、うれしきかたもあるよし也、みだれ侍てとは、いろ〳〵と思はれて、思ひさだめぬよし也、注ども、意さだかならず、

哥見る人も云々十一のひら　見る人は、中君みづからの事也、二の句、花の風にみだるゝによせて、みづから心のさわぎまよひ玉ふよし也、見る人もあるまじと、いひかけたるにはあらず、

哥袖ふれし云々同　おのがをしへ子長谷川ノ常雄がいはく、此哥は、薫の、思ふ心を、有リのまゝによめるにはあらず、中君の、姉君の事をおぼし、又宇治の里を別れんとを、こゝろうくおぼせるを、なぐさめんためによまれたる也、さて袖ふれし姉君、梅は、中君をたとへたるにて、姉君の大切におぼせし、御兄弟の中ノ君といふ意也、二三の句は、姉君は、かくれ給ひしかども、中君は、有しにかはらず、たひらかにておはしますよしなり、四の句は、此度京にうつり給ふ事也、二三の句より、四の句へ、引つゞけて心得べし、結句は、うつり給はん京のやども、何かは此里にことなるとある、といへるにて、やはやはの意也、一首の意は、姉君の大切にし玉ひし中君の、有しにかはらぬ御さまにて、うつり給ふなれば、京のやども、此宇治の里に異なるとやはある、たゞ同じとゝおぼせと、なぐさめ玉へるなり、次の詞に、又も猶かやうにてなん云々といへるも、其意にて也、たへぬ涙を、のごひかくしてといへるも、我ガかなしき心をば、かくしていはず、

たゞ中君の心を、なぐさめたるよし也、といへるよろし、これにて、やどやことなるといへる意、明らか也、かたちもかへてけるを十二のひら　下文に、そぎすてたれば、ひたひの程、さまかはれるにとあるにて、さげ尼なると、論なきをや、

かの岸にいたることはあれど云々十三のひら　湖月の本の方は、聞えがたし、

哥身をなげん云々同　これは弁への返哥にはあらず、たゞ弁が哥の詞を思ひて、別にひとりどによみ給へる哥也、

哥しほたるゝ云々十四のひら　三の句ことならんやはの意也、古今集の、「思ふともこふともあはむものなれや云々などゝ、同シ格のなれや也、

哥ながむれば云々十六のひら　あの月も云々なれば、我も今山里を出てゆけども、行末いかならん、京にすむとわびしくて、又山里にかへるやうにやなりなんと、あやふくおぼせる也、次の語にてよく聞えたり、注ども、言外の意を得ず、

さまかはりて云々同　匂宮に迎へられて、今はかく京に出れども、もし後に見捨られて、我身の有さまかはりて又宇治へかへるとやあらん、末つひにいかならんと、哥の餘意をのべたる語也、

哥しなてるや云々十七のひら　河海抄万葉の引哥、ひがとなる事、拾遺にいへるがごとし、ひらき見るべし、但ししなてるやの説は、拾遺もひがと也、さてしなてるやにほのみづうみ、とつとけいふとは、例もとわりもなきとなるを、これは紫式部、にほてるといふとゝ、思ひまがへたる誤なるべし、

おまへの梢も霞へだてゝ云々十九のひら　梢を霞のへだつるを、見るにつけても、宇治の事を思ひいでゝ、有し世の、へだゝりゆくこゝちして、あはれなるとおほく侍る、とのたまふ也、上に、世中かはりたるこゝちすといひ、下に、げにおはせましかば、といへるなどをもてしるべし、傍注、いみしきひがと也、

わがためはをこがましき云々廿のひら　薫君と中君と、あまりしたしくし給はんは、人の思はんところも、我ためには、をこがましくやあらんと思へども、とのたまふ也、傍注たがへり、薫君をうたがひ玉ふ語は、次の文にあれば、こゝは然には

あらず、

宿木巻

きくの花うつろひはてゝ四のひら　下のてもじ清ムべきと、拾遺に、くはしくいへるがごとし、うつろひはてゝとは、全くよくうつろひたるをいふ也、

なにをかはなどの給はする六のひら　をは、との誤也、此のり物、何とかあらんとのたまふ也、薫君の心、しりがたき故に、かくのたまふ也、何をかはにては、聞えがたし、傍注はしひごと也、

まづけふは云々同　かののり物をわたすべきなれども、まづけふは也、

御哥霜にあへず云々同　下句、上におまへの菊、うつろひはてゝ、さかりなるといへること也、うつろひざかりとて、うつろひたるうへの又一盛ッ也、

やがてあとたえなましよりは十のひら　或抄に、むかしよりのごとくにて、そのまゝ山里にたえこもりてあらんよりは云々、といへるよろし、湖月師説傍注、ひがごと也、

朝まだきまだきゝにけり十六のひら　必ス引哥有べき詞也、

さらばいかゞは侍るべからむ云々十七のひら　然らばいかなる方に居玉はんとおぼしめすぞとゝふ也、さて薫君のこたへに、わがやうなるふる人などに、相應なるやすみ所は、北おもてなどの、かくれたるところぞかしとのたまへる也、此答への語、かくのごとく、下上にうちかへして心得べし、

思ひくらぶる心もとになくて廿一のひら　山里に住たりしほどは、世中と思ひくらべて、世のうきよりは住よしとも、思はざりしを、今世中に出てぞ、かの山里のすみよかりしとを、しれると也、細流の説は、いさゝかたがへり、

げに此世は廿九のひら　げにとは、匂宮の、後の世を契り給ふをうけて也、

つらき御心は見えぬべければ同　ばは、どの誤也、ばにては聞えず、

三をみなへし云々三十二のう　下句、匂宮の、いかにおき別れて、かへり給ひしなごりならんと、昨夜の匂宮の御心を、おぼつかなくおぼせる也、

あまりにならはし給ひて三十二のう　給ひてを、拾遺に、給はてかといへれど、これはあまりに夜がれなくならはし給ひての意なるべし、

くやしきにも又げにねはなかれけり四十四のう　拾遺に、六帖第四に、「青山のいをうの花のほとゝぎす悔しくもげにねをのみぞなく、げにといへる所、此哥をふめり、

なほいとうきみなりけりと四十八のう　ともじ衍なるべし、

我こそさきにならと四十九のう　拾遺に、六帖に、「人よりは我こそさきに云々、細流に、此五もじを人ならばと引玉へるは誤也といへり、此哥花鳥に、卽六帖とて引れたり、初句一本には、人ならば、一本には、人よりはと有、細流には、本書をも見ず、花鳥の誤れる本を、引れたる也、

三みなれぬる云々五十二のう　四の句、おもては、これはかりにて、香はかりの方は、たゞ下にふくめたる物也、拾遺集雜春の哥、「春過て散はてにける梅の花たゞかはかりぞ枝にのこれる、詞書を考ふべし、これは、表は香はかりにて、下にこればかりの意をかねたり、哥によると也、

そゞろさむく花の露をもてあそびて五十四のう　わづかに花の露をもてあそび玉ふほどの事をだに、そゞろ寒きやうにおぼすよしにて、貴人の、手いたきわざを、むげにし給はぬことをいへる也、えんにとゝのみ切て、そゞろさむく花の露をとつづけて心得べし、

めづらかなる事なめれば五　ばは、どの誤か、花鳥細流などの御説のごとくにては、なのめなどゝあらでは、さは聞えがたし、もし本のまゝならば、匂宮の、中君の御ためには、かゝまめやかなる事まで、まつかひ玉ふを、めづらしくあまりなる御事と、匂宮の御乳母は、そしり奉るも有といふなるべし、花鳥には、こゝろしらぬ御乳母などは、匂宮の御後

見の方、おろかなるやうに、そしり申すなりと有リ、

いとほしの人ならはしやとぞ五十五のひら　此薫君は、宮にもおとり給はず、人にかしづかれたる、貴人にておはしませば、人の身のうへのさびしき事などは、むげにしり給はでも有べき御身なるに、宇治宮の御有さまにて、さる事をならひしりて、深く心にいれ玉ふは、いとほしき人ならはし也といふなり、いとほしきとは、薫君をいたはりていふ也、注どもひがと也、

むねはおさへたる云々五十八のひら　或抄に、思ふことをおしこめたる胸は、くるしきものをといふ、下心也、といへるよろし、拾遺の趣も然り、

げにぞしたやすからぬ同　むねは云々といへるをうけて、げにぞといへり是は薫君の下の心を、冊子地よりいふ也、

かぎりだにあるなど六十のひら　河海に、六帖「戀しさのかぎりだにある云々とあり、今薫君の、此哥を誦し給ふ意は、宇治の姉君の戀しさの、限だに有て、今は忘るゝほどならば、今中君のつらきを、しひてかくはなげかざらまし物を、かく中君のつらきを、深く歎くも、姉君の戀しさの、わすられがたきよりのことぞと也、

みたらし河ちかき同　孟津の説、よろしきやうに聞ゆるを、もしかの説のごとくならば、みそぎ川などいふべきを、みたらし川としもいへるは、猶戀せじの意にやあらん、戀せじ忘れんとの心は、姉君へ心の淺きことなる故に、姉君のため、いとほしきとゝ、思ひやらるゝとのたまふ也、細流などに、佛の道には、遠きとゝ也とあるは、かなはず、戀せじと思ふは、佛の道には、かなふべき事也、いかでか遠きとあらん、

たくみもゑしと同　思ふ人の形を、ゑに書し事、彫刻せし事の、もろこしにての例、河海に引出られたり、

花ふらせたるたくみ六十一のひら　此事、古物語にあるなるべし、

あはれにおぼえなり侍しか六十二のひら　なりとは、はじめのほどは、何かはむつび思はんと思ひしかども、今はあはれにおもはるゝやうになり侍しと也、

人のほいにもあらずは六十五のひら　人のと切りて心得べし、人とは、浮舟君をいふ、其人のさまの、わがほいのごとくにもあらずは也、もし中君のゝ玉へるやうにはあらで、姉君に似ずはの意也、

いとかしこけれどまして云々同　木丁をへだつるは、かしこけれども、いたく老て、いとおそろしき形になりたる身に侍れば、直に見え奉らんは、ましてかしこければ、つゝましくてなんと申す也、

中ごろは文にさへ云々七十一のひら　これは陸奥に在しほどの事なるべし、上に、常陸になりて後は、おとにも聞えざりし、とあれば也、

たいふがもとより同　或抄に、中君の女房に、此名あり、それなるべし、

かゝるおほせ事なと同　なの下に、んを落せる也、なんと也、

こたになど七十二のひら　細流のごとくなるべし、下に、匂宮の詞に、おかしきつたかなとあれば、蔦(ツタ)の中の、一種の名なるべし、こゝも然聞ゆ、

哥やどり木と云々同　初句、むかしやどりし所、といふ意によめりときこゆ、注に、一生をよりどころなく思ふ云々とあるは、さらによしなき事也、

哥ほにいでぬ云々七十四のひら　中君をたとへたる也、

うつろひはてゞ同　細流に、菊のさかりなる也とあるは、はてゞといふ詞にかなはず、こゝのすべての語にもたがへり、

びはの手をしへけるは七十五のひら　此下に、古へはすぐれて有けんを、といふ意をもちて心得べし、

けせうにもあれば六十七のひら　拾遺に、顯證にて、はれ〴〵しき也、といへるがごとし、他巻にも多くある詞なるを、狭少也とは、いかなることぞや、

こなたにおはしますほどなりければ云々七十八のひら　こなたとは中君のましますかたをいふ也、傍注に、これをたゞ二條院と心得たるはひがことなり、二條院に參り給ふよしは、此宮にも參り給ふと、上にあるをや、

やがて參り給へり同　薫君、二條院にまゐり給へるに、をりしも匂宮は、中君の御方におはしますほどなる故に、そのまゝそこへ參り玉ふ也、

しん殿をゆづり聞え云々八十三のひら　寢殿をば、皆のこさず女二宮へゆづらんと、母宮はのたまへども、さてはかたじけなしとて、寢殿の内を分て、母宮をば、その寢殿の内の、西おもての方へうつらせ奉りて、今住給へる方を、女二宮のおはすべき所と定め玉ふ也、されば西おもてにうつり給ふは、母宮の御事也、注に、女二宮の、西おもてにうつろひ玉ふべき也、とあるはたがへり、

御ねんず堂のあはひに云々同　これは寢殿の西おもてと、御念誦堂との間々に、廊をつゞけて造りてあるをいふ也、さればつくらせ給ふ西おもてと、つらねていへる語也、つくらせ玉ふにて、句を切たるは、ひがヿ也、さては此度あらたに、廊をつゞけて造り給ふになる也、さにはあらず、さて母宮を、西おもてへうつろはせ奉り給ふは、御念誦堂へ、便宜の方なるを以てなり、さる故に、御念誦堂の事は、いへるにぞ有ける、

さるべきもおはせねば八十八のひら　此下に、とてといふヿ有べき也、これより上は、夕霧君の詞、此下は地の詞なる、さかひなれば也、

おはします殿八十九のひら　殿の字、とのと訓むべし、おとゞとはよむべからず、一本には、假字にて、とのとも有、

例の御こと九十四のひら　さきにも、こゝにやどり給ひたれば、今はじめたる所にもあらず、例の御事なれば、何かははぢ給はんといふ也、上文に、はじめもこゝになん云々といひ、下に、此二月になん、はつせまうでのたよりに云々と見えたり、

又ゆかしくなりつゝ云々九十五のひら　二たびのみならず、いく度も／＼、のぞき見玉ふ也、つゝといひ、立より／＼といへるに、其意見えたり、

此殿の御かたにも云々九十六のひら　此せうそこは、弁の尼が、薫君に對面し奉らん、そなたへ參らんとのせうそこ也、下に、君も

やをら出て、御ぞなごき給ひてぞ云々とある、ぞもじにて、そのよし見えたり、

四かほ鳥の云々九十九のひら　鳥も多きに、かほ鳥をよみ給へるは、顔の姉君に似たる意にとりてなるべし、さてこゑもとよめる也、

東屋巻

思ふ人ぐしたるは六のひら　思ふ人は、父をいふ、常陸が子共は、母のみならず、父も具したるよし也、

さるたよりしり給へりと七のひら　しり給へりは、しり侍りといはんがごとし、

とり申しゝ也同　うかゞひ申せしといはんがごとし、傍注ひがごと也、

へつらひて同　すべて此詞は、ほとりへつくやうの意也、此下に、ほとりばみたるとある詞と、同意也、

あてびても十一のひら　あてめく也、拾遺にいへるが如し、たゞあてなりといふとはことなり、

あへずして十二のひら　いのち堪ずしての意也、

かの御ためにも云々十三のひら　しらずは、俗言に、それにはかまはず、とんぢやくせずといふ意にて、云々にやとも、その事はかまはず、たゞ少將の御うしろみは、隨分にせんといふ也、

寺の子とも思ひわかず十四のひら　ともは、與もにて、寺の子と、同じやうに思ひて、思ひわかず也、とを、てにをはと見るは誤也、

えうぜさせ給ふ十五のひら　えうずとは、ねがひもとむる意也、

いやしくも同　漢文に、苟ノ字をよむと、同じ詞也、つかひざまはことなれども、意は大かた似たり、かりそめにてもなどいふ意也、

さればよに母なき子は十八のひら　さればゝ、さばれを誤れる也、

ひがくしきやうなれば十九のひら　ばは、ごを誤れる也、

けいしどもなど申し廿二のひら　けいしは家司也、四位五位あまたさふらふ中に、家司どもなどが、此事かの事など申す也、

注に、けいしを、啓といへれど、啓すとは、后東宮に申すをこそいへ、親王に申すをいへる例なし、又ともなど申しを、供など仕る也、いへるもひがこと也、供するを、供申すといふは、俗言にこそあれ、雅言にさることなきうへに、こゝは匂宮の外へわたり給ふこともなきに、何の供をか仕ん、

きようにあひたり廿三のひら　或抄に、匂宮に、中君の相應したる也、

かむのきみのかたより廿四のひら　一本に、かのきみのとあるよし、それよろしかるべし、常陸守を、かんのきみとはいふまじく、おぼゆ、

ゐなかびたること廿五のひら　るは、りの誤也、此類つねにおほし、

見奉りしらずなりにければあるを同　拾遺に、あるをとは、さてもあるを也、といへるにても聞ゆ、又さてもあらるゝを、と見てもよろし、然れども此あるは、輕き詞にて、しらねばこそあれなどいふ類のあれと、一つ詞のはたらき也、其意を以て見るべき也、

うきしまの云々廿七のひら　みちのくのなるべし、うきて思ひの、といへるにもよし有、常陸の事は、次につくは山の云々といへれば、それにならべても、まづ陸奥をいへるにてよろし、

あらはにはいひなさで廿九のひら　薰君の、今世中を、ものうしとのたまはんは、女二宮の御かたざまにつきて、おほやけにははばかりある故に、あらはにはのたまはぬ、用意也、

いとうれたきやうなる云々卅一のひら　やうなるにて詞切れて、薰君のみづからの事也、うれたきやうなる此身は、水の沫にも云々の意也、

佛はまとし給ひけり卅二のひら　まとし給とは、まとの事をのたまへりといふと也、そらどいふを、そらどすといふに同じ、

なき名はたてど廿五のひら　われをわすれむとおぼさば、さやうになき名をばたてずして、たゞに忘れ給へといへるにて、引哥の下句の意也、

おぞき人にて廿八のひら　拾遺にいへり、

右近がいひつるけしきも云々同　上の右近が詞に、まだおほとなぶらもまゐらで、又御かうしをくるしきにまゐりてなどいへる、浮舟君の居給ふによりて、敬ひていふ詞也、女房どちのみ居る所にていふ詞にはあらず、

大夫はたゞいまなん云々四十のひら　たゞ今なんにて、句を切て心得べし、参りつる道にとは、此御使の、こなたへ参る道にてといふ也、おのが参りつる道にて、大夫は、たゞ今御車を引出るを見侍りつといふ也、弄花に、中宮ノ大夫も参りつる、とかたる也とあるは、たがへり、

よしともあしともおぼえさせ給はめ四十一のひら　おぼえられとある本は、後にさかしらに、改めつる也、すべておぼえといふ詞は、思はれといふことなれば、思はれさせ給はめ、といふに同じきを、られにては、思はれられとなる也、

きゝいとほしがり同　聞ていとほしがる也、きゝにて句を切たるは、ひがこと也、

此御事侍らざらましかば同　拾遺よろし、

いかにおぼすらんと同　これは常陸が方の事をいへるつゞきなれば、母のいかにおぼすらんとなるべし、

かくのみみだりがはしく云々四十三のひら　匂宮の、かくのみみだりがはしくおはするやうなる人は、といふ意にて、匂宮のさまにつきて、すべての人のうへの事をいへる也、さてさる人は、云々なれば、心やすきかたもあるを、此薫君は、さやうにはあらず、云々なればこそ、薫君の性をいはんとて、くらべものにまづいへる語也、

おもふともそひぬる人同　中君は、もとより浮舟君の、事をば、心ぐるしくおぼすに、此匂宮の事を、薫ノ君のおほさんことを、いとほしくおぼすは、中君の思ひ玉ふ事の、又そひたる人といふことにて、人は浮舟君也、

おもほしわびにためるも四十四のひら　こゝにて句を切て、ことわりにいとほしく、といふへかけて見るべし、湖月本に此下に、

さすがにこそといふ詞有り、それも、ことわりにといふへかゝれり、

いたちの侍らむやうなる四十七のひら　拾遺說、然るべし、

しな〲しからず四十九のひら　品々しからずにて、品々しきは、品ある人めくにて、そのうら也、

何事いひゐたるぞと云々五十二のひら　今少將の哥よみたるを、その哥は、何事をかよみつらん、はか〲しきとはあらじと、思ひおとさるれど、さすがにいかゞいふと、こゝろみに、哥をよみてやる也、

哥しめゆひし云々同　まよはぬは、萩にては、みだれぬ意、たとへたる意は、浮舟君に、何の子細もなきにといふ也、

今すこしなのめならず五十三のひら　母君の心に、浮舟君をば、隨分にすぐれたりと思ひ、殊に八宮の御子也と、思ひをる心なれども、薰君の見奉り給ふ、女二宮は、又一段なのめならぬをいへり、今すこしといへるは、此意なり、又下の文にてもしるべし、

母君たつやと五十四のひら　こはきはめて、寫し誤れる物也、さてつら〱考ふるに、いかにやと有けんを、いを落し、かにを、たつと誤れるなるべし、いかにやは、いかにおはしますぞと、とぶらふ詞也、本のまゝにては、むげに聞えぬ事なるを、注どもは、いみしき强說（シヒゴト）也、

なほ〱しき事どもを同　例の實は、紫式部が卑下なるを、まことに此哥のなほ〱しきやうに心得られたる注どもは、いかにぞや、

みづからやはかしこに出玉はぬ五十六のひら　古今集の、「さくら花春くはゝれるとしだにも人の心にあかれやはせぬといふ哥と、同格のてにをはにて、みづからかしこに出給へかしといふ意也、

ちかきほどにこそ五十七のひら　ここにて切たる語也、ちかきほどにこそ侍れといふ意なり、

いがたうめ同　たうめは、姥（トメ）を、音便にたを引ていへるにて、老たる女の事なるを、此物語のころ、好みて人の媒をしありく者を、伊賀たうめといひならへる事有しなるべし、

ゐなかびたるめし出て五十八のひら　ゐなかびたるこいふと、何の用なきに、いふべきにあらず、さればこれは、ざるを、たるこ寫し誤れるなるべし、御庄の者の中にも、ゐなかびざるをえりて也、

かの殿にこそ六十のひら　常陸が家の事也、此家につかふる者の詞なれば、うやまひて殿こはいへり、此時浮舟の母君、ひたちが家にあり、

きゝもしらぬなのりをして六十一のひら　おの〳〵その賣る物の名をよびつゝゆくをいふ、

よもぎのまろね同　きこえぬ事也、もじの誤なごにや、

かしこもしるべなくては云々六十二のひら　こゝにては、いまだ宇治へこもいづこへこも、弁にものたまはぬこころ也、されば上の弁が詞に、こたみは、え參らじこいへるも、宇治へなることは、しらざれば也、又下にちかきほごにやこ思へば云々、こいへるをも思ふべし、かしここは、今ゆく所こいふ意にて、いづここはのたまはざる也、

朝日影に云々同　此語によりて見れば、上の引へだてたればのばは、ごの誤にや、又此ほこ長、うす物なれば、日影のすくよしにて、たればこいふか

おりてはすこし云々六十四のひら　細流のごこし、抄こいふ説わろし、

うちまじりてぞ六十五のひら　まじりたるにぞ、こ有べきこころ也、

浮舟卷

のごけき過たゞ御心四のひら　浮舟君に、匂宮の事の出來る、下がまへにいふ也、

すこしいこまなきやうにも同　或抄に、女二宮又浮舟にて也こいへる、然るべし、すこしこいへる、薫君のうへにかなへり、官位高くなり給へる故こいふは、すこしこいへるにあたらず、

もてわづらひ侍つるを五のひら　うけこりたる者の、大輔を、いづこにゐるにかこ、尋ねかねたるをいふにや、

御わたくしにも六のひら　宮づかへする人の許への文なる故に、主君の事に分て、其人のうへを、わたくしこいふ也、

哥まだふりぬ云々八のひら　拾遺のごとし、さて上の詞に、つらぬきそへたる枝にとある、枝は、上に、小松につけたると有て、松也、さる故に松の事をよめる也、初二句は、いまだ年へぬ松にはあれども、といふ意なるを、杈椏(マタブリ)をこめんために、まだふりぬといひ、松は、下句の待ッにこめたる故に、物とかへていへる也、さて待ッといふと、ふとは何をまつとも、聞えにくきが如くなれども、上にまだふりぬといへるにかけ合せて、その年舊(フ)りんとを待ッと聞ゆる也、すべて哥を見ると、かやうのこころ大事也、さて松の年舊(フリ)ん時をまつは、即千代經ん榮えをまつ意にて、祝へるにはなる也、ふるき注どもの説にては、本末意とほらず、又まつといふとも聞えがたし、

いづら人よりは云々十のひら　いづらとは、人よりはまめなるさまをする人なるが、いづらいづこがまめなるぞ、まめなる事はなしといふ意也、

御心のどかに云々十五のひら　匂宮の、夕霧ノ大臣の六の君に、逢そめ給ひしころ、もし中君の、心みじかく、そむきなどし給はゞ、今のさいはひはおはすまじきに、其時、さかしらする乳母などのなかりし故に、心のどかにねんじ過し給ひし故に、今は幸ヒなりと申す也、上に、昔も今も、物ねんじして、のどかなる人こそ、さいはひは見はて玉ふなれといへる意也、さてかくいふは、浮舟君にも、心長く、薫君の御心を見はて玉への意也、

なにばかりのしぞくにかは同　上の浮舟君のいへる詞を聞て、中君の親族とはしり給ひて、いかばかりの縁ある人ぞ、いとよく似たるかなとおぼす也、

おやは有べし十六のひら　上に、おだしくて、親にも見え奉り玉へ、といへるを聞て、親あるならんと知ッ玉へる也、

物ものたまはず十七のひら　こゝは既に浮舟君に近付給へる所なる故に、ものいひなば、もしやしられんとおぼして、のたまはぬ也、

いさゝかいふかひも有べきを十八のひら　すこしは、すべきやうも有べきに、といふ意也、少しは心づよかるべきをと也といへるは、詞にたがへり、

又たけきことなければ同　外にすべきやうなければ、たゞ泣より外の事なき意也、たけき事とは、ねをのみなく、といふと同じこと也、

夜はたゞあけにあく。御供の人來てこわづくる。右近聞て參れり。同　かやうに語を切て、ふつ〳〵と書るは、別れのかなしきに、あわたゞしきさまを、つよくせる也、

心もなかりける夜のあやまちを十九のひら　昨夜の事は、わが心なきあやまちにて有けりと思ふ也、注たがへり、心なきは、こころすべきことを、こゝろもせざりし也、思ひよらざる意にはあらず、

人のしたるわざかは同　人のしたるわざならば、恨みもすべきを、人のしたるにはあらず、我が匂宮を入れ奉りて、みづからのあやまちなれば、たれをうらむべきやうもなしと、せんかたなさに、さめて心をなぐさむる也、傍注は、いみしきひがこと也、

およすけてもいふかな同　右近がさだめて我を、いみしくいかりうらみむとおぼせるに、思ひの外に、おとなしき申しやうかなとおぼす也、

后の宮よりも御使參りて云々廿四のひら　むつかり聞えさせ給てのでもじは、衍にて、聞えさせ給ふと有べき語也、其故はまづ、これより時方が詞にて、中宮よりも、匂宮へ御使有て、中宮の仰せられし趣を、その御使の、匂宮へ申せるよしにて、左の大殿もといふより、いとからきといふまで、その中宮の御詞也、然るにむつからせ給てといふときは、人にしられさせ給はぬ云々は、左大臣のたまひし詞を聞せ玉ひて、のたまふ御詞のごとく聞え、すべて內などにといふよりは、左大臣の詞とは聞えざれば、もしはなめげなるともあるをといふまで、左大臣の詞歟とも思へど、もし然らば、其下に、などのたまふとか、などいふ語なくては、中宮の直にのたまふ御詞と堺なくて、文とゝのはざれば也、

けそうの人廿五のひら　聞えにくきこと也、一本には、けんそうの人と有、

そらごとをさへ云々同　我に、そらごとをさへいはせ玉ふと、時方みづから、ひじり御覽じに、といへることをいふ也、

わたくしのつみ同　わたくしのとは、時方が身のうへの事なればいふ、主君と差別したる詞也、

げにいかでならはせ給ひけむ同　げにとは、上の中宮ののたまへるよしの語に、人にしられさせ給はぬ御ありきは云々、とあるをうけていへり、

まちどほなるわがおこたりをもしらず、匂宮の通ひ玉ふとを、もし薫君の聞たらむ時、浮舟君の待遠に思ふばかり、とだえおく、みづからのおこたりをば思はずして、浮舟君を恨みん、さて恨みられ給はん事をさへ、いとほしく思ふと、のたまふ也、

涙をも云々廿六のひら　涙をだに、狹き袖には、せきとゞめかねたれば、此數ならぬ身は、別をばましていかにしてかとゞむべきと也、

すゞろなる事も廿七のひら　今匂宮の、薫君の事をのたまふを、ことさらにすゞろどにしてのたまふ、中宮の詞也。注いたくたがへり、

まことにつらしと云々同　我もし君を、眞實につらしと思ふ事あらば、君はいかゞおぼすべきぞと也、上に中君の、かの薫君の事を、すゞろどゝのたまへる故に、もしすゞろどにはあらで、眞實に云々といふ意にて、まことにとはのたまふ也、

まめやかなるを廿八のひら　今匂宮ののたまふけしきの、淺はかならず、まめやかなるを、いとほしくおぼす也、

すゞろなる人をしるべにて同　薫君は、かやうのしるべなどし玉ふべきものとは、思ひもかけ給はざりしをもて、すゞろなる人とはいふ也、

ありやなしやを云々同　これを中君のはづかしくおぼせるさまに、注せられたるはいかゞ、中君の心は、云々などおぼすと、上にいへれば、こゝは中君の心にも詞にもあらず、ありやなしやといふ詞も、中君の心としてはいかゞ也、さればこれは、匂宮の詞とこそ聞ゆれ、中君の、薫君に逢玉へるかと、疑はるゝを、さる事は、有しかなかりしか、たしかに聞明らめ

ぬうちは、見え奉らんもはづかしこ也、さて匂宮の詞にても、又たこひ中君の心詞にても、はづかしの下に、必ス語の落たるなるべし、こゝろみに補はゞ、云々はづかしなごのたまふほごに、内より云々なご有べきこと也、本のまゝにては、地の詞へうつる堺なくて、文こゝのはず、

きのふのおぼつかなさを同　こゝはなやましくこいふより、御文の詞にて、云々なごやうに、昨日のおぼつかなさを、聞え玉へれば、こつゞく意也、

ひじりだつこいひながら廿九のひら　ひじりだちたる人こはいひながらも、あまりなる事よこいふ意也、

こよなかりける同　なべての人こは、殊の外にかはりたるこいふ也、山ぶし心こは、ひじりだつこいふからいへり、

夕つかたこゝには云々卅のひら　久しく程へておはせし時なれば、まづ浮舟君の方へおはすべき事なるに、さはあらで、まづ佛なごをがみ、何くれこして、夕方になりて、浮舟君の方へおはせるは、薫君のさまの、匂宮こはこよなくて、いこもしづかに、のごやかなるほごを見せたる、書ざま也、

我はこしごろ見る人をも云々卅一のひら　思ひかはるこは、浮舟君にのみ、深く心のこまるから、餘の人々をば、思ひすてゝ、契のかはるべくおぼすこいふ也、湖月師說、浮舟に思ひかへむこのたまひし、こいへるも、さも有べし、其時は、年ごろ見給ひし人々を、思ひ玉ひし御心の、浮舟君の方へかはる也、

もりきかせたらんこき同　たらんは、たまはんの誤か、

いこ深うしみぬべければ同　此下に、語落たるなるべし、

月ごろにこよなう云々同　さき〴〵は、こだえおきて見る時も、此度のやうに、物思へるけしきもなかりしに、此度は有しにはいたくかはりて、物思はしげなるは、月ごろ見ざりし間に、物の心をわきまへしる心もまさりて、ねびまさりたるにこそこ、匂宮の事につきて物思ふこはしらで、薫君のおぼせるなり、

おのづからあるまじきを卅二のひら　これまでは、薫君の詞、此下は、地よりいふ詞なるに、堺なきはいかゞ、

夜のほどにて立かへり云々廿六のひら　夜のほどにて、とある本よろし、夜の間ばかりにて、晝はとゞまり給ふともなくて、かへり給はむを、あかぬ事におほせるなり、

されたるときは木の廿七のひら　いにしへ此嶋に、よにめづらしき橘の古木の有て、それによりて、橘の小嶋とはいへるか、もし然らば、此ときは木といへるは、其橘の木なるべし、然れどもなべては、橘には、大きなる岩のさましてといふばかりの大木は、をさ／＼なきものなれば、これは橘にはあらで、何にまれときはなる木をいへるにも有べし、

いとはかなけれど云々同　ときは木をしも、はかなけれどゝいへる意は、次の哥と對へて心得べし、心深き人の契にくらべて、草木の情なき物なるを、はかなしとはいへる也、はかなく情もなき此木だに、千年も經ぬべきさまに見ゆる物を、まして今心ふかくかたらふ契は、いくとせふとも、かはらんものかはと、哥へかけて見べし、

我すむかたを廿九のひら　女の家に通ふを、すむといへば、川向なる、宇治の宮の方を、かくいへるなり、注に、京の方をといへるはいみしきひがこと也、京のかたならば、たゞに京の方とこそいふべけれ、いかでか我すむかたとはいはん、そのうへ木末ばかり見ゆといふとも、京の方にてはいかゞ也、

卌ふりみだれ云々四十のひら　中空にてぞとは、薫君へも、匂宮へも、一かたにはよらで、中空なる身なるをいふ、さる故に、匂宮の、此詞をとがめ給也、

君にきせ給ひて御てうづ云々同　御手水を參らする女は、かならず裳をきる禮儀なる故に、有合せたる侍從が裳を、浮舟君にきせて也、

そのほどかの人に四十一のひら　そのほどゝは、ゐてかくし給はんまでの間也、注あやまりなり、

おやのかふ子は四十二のひら　匂宮、みづからの御身をのたまへるにて、御母中宮の、きびしくいさめ玉ふ事を、かくのたまへる也、引哥の上句の意を、用ひかへたる、おもしろし、さてその下句は、そのまゝその意を用ひて、妹にあはずてのこゝろをこめて、のたまへる也、拾遺誤れり、

わが心にもきず有て云々四十三のひら　我心にもと讀切ッて、疵有ては、身のうへの事也、心にも疵ありといふにはあらず、我心にもは、下の、思ひみだるゝといふへかけて見るべし、さて疵あるは、匂宮の事にて、これは身のうへの疵にこそあれ、心の疵とはいふべきにあらず、

おろかなるにやは四十四のひら　或抄に、此ほどのこたえを、おろかなるにや思ひ給はん、心の中は、さもあらずと也、といへるよろし、又上よりのつゞきをもて見るに、そなたより、おどろかしもし玉はぬは、我を思ひ玉ふとの、おろかなるにや、といへるやうにも聞ゆ、いづれにても、やはは、たゞや。の意也、

ながらへてあるまじき事ぞと云々同　匂宮との契は、末長くは、有まじき事ぞと、思ひなして、みづからいましめたる詞也、注たがへり、

哥かきくらし云々四十五のひら　うきて世をふる身をも、雨雲になさばやとつゞく意也、さて雲になさばやといふは、雲は、行クへもなく、きえうする物なる、そのごとく、身も、ゆくへなく、消うせなばやといふ也、

まじりなばと同　古今集物名に、「郭公峯の雲にやまじりにし有とはきけど、見るよしもなき、此哥也、さてかくいへる意は、我身は、雲となして、消うせなばやと思へども、さもえあらで、薫君にむかへられなば、といふ意を、哥にいへる峯の雲によせて、右の古今集の哥の詞にていへる也、さてかの哥の下句の意をとりて、もし薫君にむかへられなば、有ッとはきこしめすとも、逢見奉るよしもなからんといふ意也、引哥には、まじりにしとあるを、まじりなばととりなしたる意、いとおもしろし、

哥つれ／＼と云々同　身をしるは、此哥にては、我身をうき身としる意なるを、かの本哥によりて、身をしる雨といひ、さて下句は、身をうき物としるにつけていよ／＼涙も、袖におちまさるよし也、

大藏ノたいふなるものに云々四十六のひら　障子をはらする事を、此人に仰せつけらるゝ也、此人にはらするにはあらず、注たがへり、

いとわりなくあるうちに同　此うちには、わりなしといふ中にも、別(ベツ)して殊にといふ意也、宇治よりも、云々といひおこす、これ別して殊にわりなき也、わりなくあるあひだにといふ意にはあらず、

こゝにも云々同　匂宮の御方も、おはしまさん事は、いとわりなしとあるをうけて、こゝにも云々なれば、おはしまさんとは、別して殊にかたかるべしと申ッやる也、

さそふ水あらばとは思はず同　浮船君の心に、匂宮をも、思ひはなれがたくはあれども、さりとて匂宮のさそひ玉ふ方へ、ゆかむとは思はぬ也、此人の心、すべて此でう也、さればこそ、思ひわびて、身をなげむとはしつれ、

物のけなどにやあらんと四十七のひら　と°もじ衍なるべし、

いかなる御こゝちぞと思へど同　思へどは、とへどを誤れるにて、母の、浮舟君にとふなるべし、さてかくいひてとふは、もし懐妊にてもあるかといふ意なるに、乳母などが、石山詣も、月のさはりにてやみぬるよしいへるなれば、母の、心得ぬ事に思ふべしと、浮舟君の、かたはらいたくおぼす也、思へどにては、かたはらいたければといふを、おだやかならず、よく味ふべし、

宮のうへなどのやうに云々四十八のひら　に°もじの下に、て°もじの有しが、落たるなるべし、姉君も、世におはしまさば、中君の、匂宮の北方にておはしますやうに、薫君の北方にて、中君と御兄弟、聞えかよひ玉ひてといふ也、然るを本のまゝにては、中君と浮舟君と、聞え通ひ玉ふやうに、姉君も、浮舟君と聞え通ひ玉ひて、といへるごとく聞ゆるを、さては次の文に、わがむすめは、こと人かは、といへるにかなはず、其故は、弁が、たゞ姉君と中君との事をのみいひて、其中へ、浮舟君をば、まぜていはぬを、母ははらだちて、わがむすめは、こと人かはとはいへるなれば也、

思ふやうなるすくせのおはしはてば同　おはしはつとは、薫君の御心かはらで、願ふ如く、浮舟君の、末長く、めでたきさまにてあらばといふ也、

あはれとおぼしぬべきわざになん五十のひら　薫君の、浮船君を也、

じやうぐわん五十三のひら　河海に、政官也、太政官の被官なる故也、とあり、

人にわらはせ給ふな五十七のひら　匂宮の、浮舟君に通ひ玉ふを、しらぬよそ、薫君を、人のわらふべし、さやうに我を、人にわらはすやうなる事をし玉ふな、といふ意なるべし、

ひがことにてあらんも云々同　ひがこと、はこれは、あなたよりのたまへることにかゝはらで、そのすぢにあらぬことをいふか、薫君の許より、波こゆる云々とあるを、其事にはかゝはらず、他事をいひて、返事聞えむも、あやしくいかゞなればといふにや、

あないとほし五十八のひら　これより右近が詞也、

一かた〳〵におぼしさだめてよ五十九のひら　薫君にまれ、匂宮にまれ、いづれへなりとも、一方に思ひさだめ玉へ也、

ぶだうのものども六十のひら　不道無道などいふ説いかゞ、もしは武道にもあらんか、河海には、ふてう不調と有、これよろしかるべきか、

かはり〳〵同　りは、るの詞なるべし、

いさや右近はとにもかくても云々同　右近がいふ意は、浮舟君、薫君により給ふとも、匂宮により給ふとも、いづ方にもあれ、事なく通させ給はんことを願ふといふ也、傍注に、匂宮へとの事、同心ならずと也、といへるはたがへり、同心ならざるにはあらず、事の出来むことをおそるゝ也、

またえ思ひたつまじき六十五のひら　または又なり、

たへずかなしくて同　不レ堪也、不絶にはあらず、

いぎとけなり六十七のひら　拾遺のごとし、下に、めのとのいざときとあるも同じ、

哥いづくにか云々六十九のひら　此哥、意はよく聞えたれども、ことにあるとの、よしなく聞ゆるにつきて、とやかくやと論じけん時に、をしへ子なる三井ノ高蔭が、考へていはく、此哥は、上の侍従が申せる語ニ下へつゞきて、即チ侍従が申せ

る詞に、答へ玉へる趣也、されば初句は、侍從が詞に、かねてさるべき御方にたばからせ給へ、といへるをうけて、我ゝいかさまにはからはゞといふ意なるを、白雲のかゝらぬ山もといふから、それにあはせて、いづくにかとはいへる也、二の句は、侍從が、身をすてゝも、思ひたまへたばかり侍らん、といへるをうけていへるにて、侍從が身をすてむ也、かからぬ山もなくとは、我ゝいろ〳〵と心をくだきて、思ひめぐらさぬ方もなしといふ意也、ゆくは、今かへり給ふと也、さて一首の意は、我ゝいかにはからば、侍從が、身をすてゝ、浮舟を、わが手にいるべくはたばからむぞと、我はいろいろと、思ひめぐらさぬかたもなく、そのてだてを考へつゝ、かへるぞよと也、といへる此考へにて、よく聞えたり、右のごく見ざれば、こゝにはよしなく、又身をばすてんとなごいへる、穏ならざる也、

枕のやう〳〵うきぬるを七十のひら　哥には、涙のおほく出ることを、いみしくいふとては、枕うくとも、海士のつりするばかりなるともいふは、つねのことにて、さも有べきを、此物語は、さやうに實ならぬ事は、いさゝかもいはざるに、こゝにかく、實に枕のうきたるやうにいへるは、いかにといふに、これは涙のおほく出ることをやがて、枕のうくと、つねに世にいひならへる詞をもていへる也、さる例今の俗言にも多かり、水を多く地へこぼして、流れたるを、淵になつたこといひ、つよく驚きたるを、膽がつぶれたといふ類也、

かけろふの巻

御心ざしに侍るべき七のひら　此下に、とて、もしはとなご有べし、

たいしやくもかへし給ふなり五のひら　これは乳母がいふなれば、古物語にあることなるべし、中々に經說なごを尋ねむは、乳母が語にはいかゞ、

かたへおはする人は十のひら　兄弟あるをいふ、下【十八のひら】に、はらからあるはなご云々、といへるところ、考へ合すべし、さる人のおはしおはせず云々十一のひら　こゝの文、注のごとくにも聞ゆれども、宮はたといひ、又さだめて宮をしもといへる、又といふ詞なごを思へば、さる人のおはしおはせずは、薫君の方に、おはしおはせずにて、しのぶともおぼさめは、薫

君の方に、忍ぶ故に、しりがたしと、匂宮のおぼさんにて、これは匂宮の疑ひ給はんとをいへるにもあらんか、上に薫君の疑ひ玉はんとをいひて、匂宮も疑ひ玉はんの意にて、宮はたといへる也、さて次に、又さだめて云々といへる、又とは、改めていふ詞にて、又薫君も、たしかに匂宮とさだめて、疑ひ玉ふとはあらじといふ也、

げになきかげに云々同　げにとは、上の哥に、なきかげにうき名ながさん、とあるをうけていへり、

涙におぼゝれたるばかりを云々十二のひら　かどにては、こゝは、いひわけにしてといふ注は、ばかりをといふにかなはず、

しみて思へる人しもつれなきこと十五のひら　つれなきの下に、詞落たるなるべし、ことの二字落たるにて、つれなきことゝ歟、又つれなき上に、などなどいふ言落たる歟、

とのゐなどに十六のひら　薫は臣なればといへる注は、いとこちなし、たゞ人をうやまひ、身を卑下して、かくいふは、つねのとなるをや、

やむとなく物々しきすぢに云々同　我一人を頼む心はなきにやと、疑はしき事も有つれども、それも物々しきすぢに思はばこそ、あしからめ、もとよりさやうに、物々しき物とも、思ひおきてさりし事なれば、思ひゆるして有しといふ意也、注に、浮舟の心、頼もしげなきとあるは、たがへり、

さるかたにても十七のひら　上になにがしひとりを、あひ頼む心も、ここになくてやといへる、其かたにても也、

いきといきて十八のひら　ゆきだにしたらんには、しばし籠るべき事なるに、といふ意の詞也、古今集に、秋風のふきとふきぬるといへると、同じ格也、かれもふきだにすればといふ意也、

こゝにわたり給ふ日十九のひら　六條院より、二條院へわたり給へる也、日ごろは、六條院におはせし事、下の文にてしられたり、

哥たちばなの十九のひら　初二句は、橘のにほひに、浮舟の事を、こひしのび玉ふらん、薫君のあたりはといふ意也、たちばな

のにほふといふに、昔の人を戀る意を、もたせたり、さて時鳥のなかば、いよ〳〵浮舟の事を、かなしくおぼさんには、我をも恨み給はんが、わづらはしきほどに、薫のあたりは、心して鳴べきとぞと也、

思ひ出るもいとほし廿のひら　御使の心といふ方よろし、

わたくしの御心ざしも廿一のひら　御の字いかゞ、

いかでかいませ給はぬかと同　下なるかもじいかゞ、上をいかでかと切てよめば、下のか゚も、さることなれども、猶上よりつゞきて、下のか゚もじたゞきと穩なる、

舟君のかへりことなどを聞ゆ廿三のひら　を゚は、も゚を誤れるなるべし、

思ひたまへよるにたへ侍らず廿六のひら　たへは堪にて、え思ひよらぬといふ意也、

しひてとはむもいとほしくて廿八のひら　いとほしとおぼしてとあらでは、文と、のひがたし、

うつせ卅のひら　和名抄に、尨蹄子和名勢云々、貝類に見えたり、さればうつせは、此貝のからにて、空尨蹄子なるべし、

すゞろなるわざかな卅二のひら　思ひよらぬとよといふ也、傍注たがへり、

いかなりけむとにかくおぼせば卅四のひら　ば゚は、ど゚の誤也、

大將殿のからうして云々卅六のひら　これは上文よりのつゞきによりて見れば、注の如くにも聞ゆるを、又薫君の、すべての心ざまによりて見れば、すべてかやうの宮づかへ人などに、心をかけ給ふとは、をさ〳〵なきうちに、殊に此ほどは、浮舟君の事をのみ、おぼすころにて、いとゞさる事はおはせぬに、からうして此小宰相には、すこし心とめて、かたらひ玉ふといふにも有べし、上に、殿は、かくとりもちて云々、猶いふかひなき事を、わすれがたくおぼすといひ、下に、まめ人は、すこし人よりはことなりとおぼすになん有ける、などいへるを思ふべし、

卅あはれしる云々同　表と裏の意あり、表は、薫君の、浮舟君の事を深く歎き給ふあはれを、我もしらぬにはあらず、人なみにしりて、あはれとは、思ひまゐらすれども、數ならぬ身なる故に、そのあはれを思ひけちて、今までとぶらひまゐら

するともせで、過侍ぬるといひて、裏の意は、我も、薫君の心ざしの、あはれなるとを、見しれるとは、浮舟君におこりはせぬものを、薫君は、浮舟君をのみ思ひ玉ひて、我をばさしも思ひ玉はぬは、恨めしけれども、我は数ならぬ身なればと、身のかずならぬに、思ひけちて、今までさやうとも申さで、過ぬると也、上にしのびあまりてとあるも、必ス

此裏の意有て聞ゆる也、拾遺説も、くだくし、

かへたらば同 後撰集の哥、かなへり、心をくだく物ならましやの意をこれるにて、我を浮舟君にかへたらば、さしも御心はくだき給はじと也、

哥 つねなしと云々同 かれこれと人におくれて、世の常なき事を、多く見て、うき我身すら、人の見しるほどの歎きはせぬものを、ましてさもあらぬそこの、あはれをしるといはるゝは、うけがたしと、とがめたる也、さて裏に答へたる意は、我は浮舟を、さまで深くは思はぬ故に、人に見しらるゝほどの、いみしき歎きはせぬものを、浮舟をのみ、ふかく思ふやうにいひて、かこたるゝは、わりなき事よと也、注ども、歎きやはするとある、詞のいきほひにたがへり、

此よろこび同 すべて今の世の俗言に、かたじけなしといふとを、雅語には、うれしといひ、俗言に、禮をいふ、禮にゆくなどいふ禮を、雅語には、よろこびといへり、こゝも其意にて、哥をおくりて、とぶらひたる禮に、小宰相が局へ、立より給ふ也、さてこゝによろこびとあるによりて、注ども、哥の意を誤まられたり、よろこびは、あはれなるをりしも、とぶらひたるよろこびにて、哥の意には、かゝはらぬとなりかし、

人がらもやむとなきに廿七のう 上より、ならはし給はぬ人がらとつどきて、かろぐしからぬ、薫君の人がらをいふ也、ならはし給はずといはずして、ぬといへるにても知べし、小宰相か人がらにはあらず、

朝座にはてゝ同 には、にての意にて、第五日の朝座にて、八講の終る也、

此おもとはいみしきわざかな四十のう いみしきといふより、此おもとが、思へる心也、

あへなん同 堪なんにて、くるしからじといふ意也、

おぼろかし聞えぬこそは四十二のひら　云々と見れば、おぼろかし申す也と、中宮へ申さんと也、ぬは、いはゆる畢ぬ也、傍
注たがへり、

例のめなれたるすぢには云々四十五のひら　例のわかきんだちの、女房の局へ通ふやうなるすぢにはあらざるにやといふ也、

くはしくはきかせ奉らぬにや四十六のひら　或抄に、浮舟の事、ふかくかくして、薫にも、くはしくはきかせ申さぬならんと也、
といへるよろし、上に中宮の御詞に、大將もさやうにはいはで云々、とあるをうけていへる也、注わろし、

萩の葉に云々四十七のひら　かの物語の繪に、萩など書たるところ有しなるべし、

よづかぬおこたり四十八のひら　宇治におき給ひし事也、

御心はさるものにて云々四十九のひら　御心は中君の御心、人々は、女房どもなり、さるすぢの事は、細流の說のごとし、

やむごとなきもの〻姫君のみ云々同　これは侍從が心に、浮舟君と、思ひくらべたる事をいはんとて、いひ出て、さて下の、
宮の君の事の下がまへ也、

かぎりあれば宮の君など云々五十のひら　此かぎりあればは、注のごとくにも聞ゆれども、又親王の姫君なれば、餘の宮づかへ人
のごとくにはあらで、といふやうにも聞ゆる也、すべて限あるといふには、上へ限あると、下へ限あると、二つあるを、
こ〻は、注の意は、上へ限ある也、今いふ意は、下へ限ある也、

そもむつましく云々五十三のひら　それは、そも〳〵といふに同じ、すべてむつましく思ふべき故もなき人は、恥ッべきとなれど
も、世の人のやうを見侍るに、むつましかるべき故なき人は、かへりてはぢ侍らぬは、何事もさやうなる物にやと、まづ
いひて、今弁がみづから、薫君にむつましかるべき故はなけれども、はぢずして、いらへを申すよしをのべたる也、

かばかりおもなく云々同　かばかりおもなく生れつきたる身に相應せずして、物を恥んも、かたはらいたく思ひ侍る故に、
生れつきたるま〻に、おもなく御いらへをば申す也といふ也、みづから、かばかりおもなくといふは、ことさらにおも
なき者になしていふ也、

けさやかなるおきなど五十四のひら　一説に、薫の哥の事也といへる、よろし、上のをみなへし云々の哥の事也、此哥の趣、あまり翁めきたりといふ也、けさやかなるは、こゝは、俗言に、口ぎようなるといふが如し、

おほかたの野べの御かしらをこそ同　殊に我一人やとをかし申さんと申すにはあらず、たゞなべて大方のうへを申せるにこそあれといふ也、さかしらとは、さかしだちて、物をいひあつかふをいふ、野べのとは、女郎花につきていへり、

わきてもかの御物はぢの云々同　上にかの弁が詞に、むつましく思ふべきゆゑなき人は、中々はぢ侍らぬなど、物はぢの事をいへるをうけて、さては物をはづるは、恥ッべき故のあるゆゑなれば、今女房たちの、物はぢして、かくれ給ふは、必わきてはぢ給ふ故ある時節ならんと也、かのといひ、をりといへるに、心をつくべし、かのとは、弁がいひしをうけていひ、をりとは、今此時をさしていふ也、かならず恥玉ふ故ある時節なるべきに、我ヵかくてゐるは、心なき事也、道明て、通し参らせんと也、かくのたまふは、恥玉ふべき故とは、かたらふ男などの來たるに逢んとて、あなたへとほるを、薫君にせかれて、え通らぬ事にとりなして、道あけ侍らんとのたまふ也、

おしなべてかくのこり云々五十五のひら　弁が、物はぢもせず、心にのこすことなく、詞おほく、いらへをしたるを、薫君の心に、おしなべて此女房共は、みなかくのごとく、おもなきならんと、思ひ玉ふこそ心うれしけれ也、

なほあやしのわざや云々同　まづ男に女の名をいひきかすることは、うちまかせては、恥てせぬこと也、万葉集の哥のころなまでは、夫と頼む男ならでは、女の名のりはせず、さる故に、女のわが名を、男にいひきかすは、即チ契りをゆるすになりし也、此物語のころなどは、さまではあらざりしかども、猶その心ばへのゝこりて、男に女の名をきかするは、まづは恥べき事にて有しを、今傍輩の、中将が名を申せしは、匂宮をめなれて、心やすく思へる故なれば、薫君の、匂宮のために、くちをしくおぼせる也、

此御ゆかりには同　或抄に、匂宮と、好色の事につきては、ねたき事のみ有と也、といへるよろし、傍注、女一宮の方ざまとあるはたがへり、

びんなきむつびになりゆく大かたのおぼえ五十六のひら　大かたのおぼえは、即チびんなきむつびになりゆく事の大かたのおぼし也、びんなきむつびとは、好色のかたのむつび也、

ねたましがほに同　女一宮の事を心にもちてとあるは、わろし、其意はなし、

にるべきこのかみや侍るべき同　これを、女一宮又匂宮などの事にかけていへる説は、みな誤也、もし然らば、似玉ふべきこのかみやおはすべきとこそいふべけれ、侍るべきとはいかでかいはん、さればたゞ、薫君の、遊仙窟の詞をのたまへるをうけて、又同じ書の詞にて、答へたるのみにて、我がうへにていへる詞也、我をねたましがほ也とのたまへども、かの崔季珪がやうなる兄は侍るべきかはといふ也、次なる薫君の詞は、此答へによりて、又その對ツキの語をもてのたまへる也、

同ありと見し云々六十のひら「ありと見て手にはとられぬ月のうちのかつらのごとき君にも有かな、「有と見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ、

今見ん初花のさまし給へるに上五十一のひら　これは次に薫君のさまを、女房などの思へるに、ならべていへるなれば、匂宮の御さまを、女房共のかく思へる也、拾遺の説、中々にひがこと也、

大將の君はいとさしも云々同　匂宮の御事を、朝夕にめなれても、といへるにくらべて、これはさやうに入たち給はぬといふ也、是も拾遺は誤也、

手習巻

ひたひおしあげて五のひら　烏帽子を、上ざまへおしあげたる、額のさまをいへるにて、あやしき躰也、昔はかやうの賤き者も、烏帽子きたるなり、

まゐり物の所に云々同　食物に心をいれて、此事にはとりあはぬ也、といへるがごとし、注たがへり、

さればこそ云々なりとはいへと八のひら　いへは、上のこその結びにて、いひつれの意、とは、とての意也、いへどもといふにはあらず、

くるしこ思ひ玉へし十一のひら　玉へしは、玉ひしを誤れるなるべし、

つきしみりやうじたる十二のひら　拾遺云、着染領(ツキシミリヤウ)じたる也、

つきたる人物はかなき十五のひら　孟津よろし、

すのこのはしにあしをさしおろしながら云々同　浮舟君、身をなげんとて、いでつるこころのさまを、浮舟巻のこころにはいはずして、こゝに至りて、此人の思ひつゞくる心に、くはしくいへる、いとおもしろき書ざま也、

あやふきこゝちすれど十七のひら　どは、ばの誤也、

身をなげし云々廿のひら　二三の句は、かなしさのせちなりし意也、

おなじ心なる人も云々同　上文、おやいかにといふより、いかでかしらむといふまでは、浮舟の心を、たゞにいへる文、おなじ心なるといふより、地よりいふ文なるに、その間に、堺なくていかゞ、

おなじくはなど云々廿三のひら　同道の人共の、同じくは我らも、此小野の里へ立よらんと、したふ故に、それに妨げられて、え立より侍らぬを、今日は、そのしたふ人々を、はぶきすてゝ、立より侍ること也、注たがへり、はぶきすてゝ出立たるにはあらず、

うちたれがみの廿五のひら　たゞよのつねの女の髪の事也、此所は、尼のみ多くて、よのつねの髪なるは、めづらしき故に、わきてかくいへる也、

何にほふらんと廿六のひら　これは引哥の上句の意はかりにて、下句の意はとらず、

人の物いひをさすがに云々同　人の物いひとは、少將ノ尼が詞に、云々おぼえぬ人を得奉り給ひてといへると也、おぼしこがむるとは、聞過さずして、くはしくとふをいふ、これも中將ノ口ずさひたる哥の詞によりていへるのみにて、その意をとりていふにはあらず、さてかくいへる意は、此中將、尼君のむすめにおくれて後、北ノ方をもさだめず、昔をわすれがたくし玉ひながら、さすがに、浮舟君を見て、心をかけて、わが申せる事を、聞え過さず、こまかにとひ玉ふこ

そおかしけれと、めづる也、注いかなる意にか、聞とりがたし、
うつくしくうちゑみてぞ云々廿七のひら　げにといふより、うつくしといふまでは、浮舟のさまを、尼君の思へる心にてうちゑみてぞといふは、地の詞なれば、うつくしくの下のくは、とを誤れるなるべし、然らざれば、文と、のはず、
うちつけ心有て云々廿八のひら　今まで何の縁もなくて、たゞ此度はじめて、浮舟君に、うちつけに心をかけて、参らんにてもといふ也、
ここ／＼に同　異事也、
哥あだし野の云々廿九のひら　すべてあだしとは、他の字を書て、他國（アダシクニ）、他人（アダシヒト）などいふたぐひにて、あだし野は、他所（アダシトコロ）の野といふ事也、さて此哥にたとへたる意は我ならぬ他人（アダシヒト）になびくなと也、
哥まつ虫の云々卅のひら　尼公の、まつちの山のといへるを、待つといへるにとりなしてまつ虫の云々とはよめる也、荻原といへるも古哥によりどころありげに聞ゆ、猶よく尋ぬへし、
中々心づくしに卅二のひら　古哥に、世のうきめ見えぬ山路とはあれども、此山里に参れば、昔の思ひ出られて、中々心づくし也、それも今又はじめてあはれとおぼす人あらば、なぐさむべきを、さる人も有がたげなれば、此山里を、世のうきめ見えぬ山路とは、え思ひなし侍らずといひて、浮舟君のつれなきをかこつ也、
哥山のはに云々卅三のひら　三の句は、ながめてこゝろ見ん也、閨の板間とは、月影のさし入ル縁の詞にて、浮舟君にちかづく事をゆるすにたとへたる也、
いかなるこころに云々同　此所の語、心得がたし、これは、いかなるこころにて、かゝる人いまゝでこもりゐたらん、と有けむを、誤れるなるべし、いかなるこころにては、此小野の里は、いかなる里なればといふ意也、さてゐたらんの下に、ともじも落たるなるべし、
たけふちちり／＼たりたな卅五のひら　是はたりふり、ちりちり、たり／＼、と有しを、寫し誤れるなるべし、其故は、笛の唱哥

に、たけふちたなどいふ詞は、有べくもおぼえず、

哥わすられぬ云々同　二の句、過にし北ノ方の事をも思ひ、といふ意と聞えたれども、さては詞たらず、さればここもは、こにもの意にて、大尼君の琴にもといふをかねたるか、それも、にもを、もとのみいへるは、いかゞに聞えたり、

哥山里の云々四十のひら　すべて中將のみづからの事也、我は、物思ふ身なれば、今此山里に來て、秋の夜深きあはれを、思ひしりぬと也、さて浮舟君も、物思ひ玉ふ身ときけば、おのづから我と御心もかよふべきものぞと、次の詞にいへり、注に此哥を、浮舟君の事とせるは、たがへり、さては次のおのづから云々の詞にもかなはず、次なる返哥は、中將の、我と御心も通ふべし、といへるによりて、物思ふ人と、人はしりけりとよめる也、おもひまどふべからず、

ひとつばしあやふがりて云々四十一のひら　此事、古物語などに有ルなるべし、ひとつばしのあやふき事をいへる例は、拾遺に引たり、

おやにいま一たび云々四十四のひら　これより浮舟君の心を、たゞにいへる語なるに、いたうわづらひしけにや、といふより下は、地よりいふ語と聞えて、その堺なきはいかゞ、

猶みづからいといとあはれと見給ふ五十のひら　上になつかしくことわるべき人さへなければ、といへるにあたりて見るべし、すべて此物語は、かやうのこころに、心をつけでは、ほいなし、

つらき御心なれど五十二のひら　此下に、云々とて、といふ語の有しが、落たるなるべし、本のまゝにては、文とゝのはず、

くはしくもそのほどの事をばいひさしつ五十四のひら　くはしくもの下、もしは事をばの下に、詞おちたるなるべし、

かくなりにたれば恨み侍るなり同　此詞心得ず、紫式部、とりはづしの誤なるべし、もし傳へ聞たるならば、恨み侍るとか聞侍し、などこそ有べけれ、

いとはづかしくなんおぼしける五十六のひら　はかなき物におぼしとりたるも、ことわりなる御身をやと、僧都のいへるを、はづかしくおぼす也、ことわりなる身とは、宇治にて、見つけたる時のさまを思ひて、世をはかなき物におぼしとりた

るも、ことわりと思へる也、さて浮舟君は、其時の我身のさまを、はづかしくおぼす也、注ひがこと也、

山伏はかゝる日にぞ云々同　山伏は、山にすむ故に、今日のやうに、ふく風の音の、いと心ぼそき時ぞ、ねはなかるゝといへる也、山にすまぬ人は、山中の風の、心ぼそき事をばしらざるを、山ぶしはといふてにをは也、注たがへり、山ぶしはのはもじ、日にぞのぞもじにかなはず、もし注の意ならば、山ぶしもけふぞとこそ有べけれ、

こゝちよげなる人を云々五十七のひら　湖月師説よろし、浮舟君の、うちしめりたるに對へて、こゝちよげなる人とはいへる也、

よのつねのさまには云々五十九のひら　浮舟君の、いまだ尼にならで、よのつねのさまにて有し程には、中將に對面し玉ふとはおぼしはゞかる事もありつらめども、今は尼になり給へる身なれば、憚り給ふとも有まじければ、心やすくかたらひ申さんと也、

哥おほかたの云々六十のひら　我をいとひてにはあらず、たゞ大かたの世をいとひて、尼にはなり給へるなれども、何とかや、我をいとひてのやうに、思ひよせられて、我はつらくこそおぼゆれと也、

哥雪ふかき云々六十一のひら　雪深きといふに、春ともなく、うき身といふ意をこめたるべし、さて我はうき身なれども、今よりは、尼君のためにこそ、年をつみて、ながらふべけれと也、

いもうとなるべし六十二のひら　大尼君のむすめ、尼君の妹ならんか、えまちつけ給ふまじきなどいへるも、大尼のむすめのやうに聞ゆる也、

なほ口おもきこゝちして六十八のひら　猶の意は、あなたより語るをきゝながらも、こなたよりは、猶いひ出がたきよし也、

うつし人になりて云々六十九のひら　浮船君の事也、此人は、既にうせぬるものに思はれて有しを、猶世に在て、今より後、又人にもしられて、よのつねの人になりてといふ也、　末の世とは、浮舟君の現人（ウツシヒト）になりて、後の事をいふ也、黄なる泉のほとりとは、すでにうせぬるものに思ひたる人なれば、　又對面するは、黄泉のごくなる故に、　かくいひなし給ふ也、末の世といひ、黄なる泉といへる、上文に、やがてうせにし人と思ひなしてをやみなん、とあるにあたりて見るべ

し、注ども皆、いみじきひがこと也、但し花鳥に、伊弉册ノ尊の、よみつ國に入玉へるを、陽神のとふらひ給へる事見えたり、それを薫浮舟君の事によせ侍る也とあるは、黄なる泉とあるに、よし有ておぼゆ、

おのづからかたらひよる云々同 おのづから風のまぎれに、とぶらふ事などは、ありもすべけれど、又我ヵ物にはせじと也、

いとはづかしげに七十のひら 薫君のさま也匂宮の事を申シ出るを、はづかしげにて申シ給ふ也、

聞えんかたなかりける御心のほどかなと同 匂宮の、浮舟君に通ひ玉ひし事也、匂宮は、中宮のみづからの御子のとなれば、此事は、薫君に對ひては、申すべきやうもなき、けしからぬ御心とのたまふ也、たゞ匂宮のすきずきしき事也、このみある注は、いとおろそか也、

うき事聞つけたらむこそ七十一のひら もし浮舟君に、通ふ人有ルことなどを、聞つけたらばと也、

夢浮橋巻

巻ノ名夢浮橋の事、河海に引れたる、「世ノ中は夢のわたりのうき橋かうちわたしつゝ物をこそ思へ、これは名所也、夢のとにはあらず、万葉三の巻に、「わがゆきはひさにはあらじ夢のわだ瀬とはならずて淵にあれやも、又七の巻に、芳野ノ作とて、「夢のわだ言コトにし有けりうつゝにも見てこし物を思ひし思へば、此夢のわだ、吉野川の内の名所也、懐風藻に、吉田連宜従カ駕ニ吉野宮ノ詩に、今日夢淵々、遺響千年流とある、下の淵ノ字は、寫誤にて、これもかの夢のわだを、詩なる故に、夢淵とは作れる也、これらの哥詩をもて見れば、けしきよき所にて、人の遊覧せしところにて、かの夢のわたりのうき橋とよめるは、此夢のわだを、夢の渡りともいひて、そこにわたせりし橋なるべし、さてかの哥の二三の句は、たゞうちわたしといはん料の、譬へのみと聞えたり、そはいかにもあれ、夢のわたりは、右の名所にて、夢の意はさらになきを、世の中はとあるにつきて、紫式部は、夢の事と、心得誤れる歟、はたことさらに夢の事にとりなせるか、いづれにまれ、此巻の名につけたるは、たゞ夢のと也、薄雲ノ巻にも、夢の渡りのうきはしかとのみうちなげかれてといひ、狹衣ノ物語にも、「はかなしや夢のわたりのうきはしを頼む心のたえもはてぬよとよめるなども、夢の事也、さて此巻の名

は、ふるき抄どもにもいはれたるごとく、此物語のすべてにもわたるべき名也、但しうちまかせて、すべての名といはむは、たがふべし、たゞ作りぬしの下の心にぞ、其意ばへはふくめたるべき、そも〱此物語は、まさしく世に有し事のごと書たれども、みなつくりものがたりにて、光源氏ノ君といひし人をはじめ、何も〱こと〲く、夢に見たりし事のごとくなるを、殊にはてなる此卷の、とぢめのやうに、まことにのこりおほくて見はてずさめぬる夢のごとくにぞ有ける、さてしか此物語、すべて夢のごとしといふには、心得の有べきことぞかし、そはふるき抄どもには、例のこと〲しく、佛ぶみども、又もろこしの莊周が言などを引出て、此世のはかなく常なきこと、夢のごとくなることわりを示せり、といひなされたれども、さる意にはあらず、これはたゞ、此物語に書たる事どもを、みな夢ぞといふ意にこそあれ、世の中を、夢ぞとをしへたるにはあらざるをや、此けぢめ、よくせずは思ひまがへぬべし、

らうけ五のひら　勞氣の方よろし、後の世に所勞といふは、是より出たり、

たまどのにおきたりけん云々六のひら　玉殿は、日本紀畧に、萬壽二年三月廿五日、皇后宮娍子崩ス、四月十四日、皇后宮葬ヲ斂二シ玉殿ニ一了ヌ、九月廿四日、前皇后ノ娍子改ヲ葬シ、とあるによるに、葬リのさきに、しばらく斂むる所にて、殯宮の事也、さてここにいへる事は、昔物語にとあれば、後の世に傳はらぬ、古物語に見えたること也、注に出されたる事どもは、みなあたらぬこと也、

なにがしはをしむべき云々同　をしむべきよはひならねどは次の母へかゝれる詞也、なにがしはゝ、たすけてといふへかゝれり、

なまわかんどほりなど云々八のひら　ことさらにおぼめかしてのたまふ詞也、

ひきぼし十一のひら　拾遺かむかふべし、

これは何事ぞ十三のひら　僧都は、昨夜やがて小君を小野へつかはしつらんと思ひて、文に、小君やまうで給へりしと書たるに、小野には、いまだ小君は來ぬ故に、文のこゝろえがたくて、これは何事ぞとあやしむなり、さていかなる事かはしら

ねども、大將殿の御使にてとあるに、おどろきたるなり、

これこそはさはたしかなる云々同 さきに僧都より文ありつれども、何事ともさだかならず、心得がたかりしを、此度の文にこそ、たしかなる事は、いひおこせ給ひつらんと思ふ也、されどさきにも使の來しに、又しも來たるは、いかゞとの意にて、あやしけれどゝはいへり、傍注にこれを、薫の文ならんと也、とあるはたがへり、山より僧都の御せうそこにてとあれば、僧都より、たしかなる事のせうそこならんと思へる也、

こと〴〵には十四のひら 河海に、悉とあるよろし、みづから參りて、こと〴〵くつぶさには申さんの意也、毎事はあたらず、

こゝろづよくおはしますとぞと十七のひら ぞもじいかゞ、衍なるべし、一本には、おはしますぞなど、とあれども、それもわろし、

僧都に思ひゆるして十八のひら 俗に僧都にめんじてといふ意也、

我ながらもどかしきになん同 さま〴〵我にそむきし人を、かくまで思ふとは、我ながらも、我心のもどかしく思はるゝを、まして人めにはと也、

雲のはるかに云々廿のひら のもじ穩ならず、雲ゐを誤れるなるべし、花鳥に、古今集の、あふとは雲ゐはるかに、といふ哥を引玉へり、

おとしおき給へりし云々同 おとしは、捨といふに同じ、浮舟君を、宇治におき給ひし、みづからのならひに、今ももし人の、此山里におきたるにやとおぼす也、宇治におきて、しば〴〵も通ひ見給はず、物をすておきたるごとくに有しを、おとしおきとはいへる也、

なつかしみ又も來て見むつみのこす
春野のすみれけふ暮ぬとも

明治三十五年十一月十日印刷
明治三十五年十一月十五日發行
昭和二年一月五日增訂再版印刷
昭和二年一月十日增訂再版發行

（本居宣長全集第七卷奥付）

再校訂者　本居清造

發行兼印刷者　東京市京橋區鈴木町十二番地　吉川弘文館　代表者　吉川半七

印刷所　三重縣四日市市濱田　四日市印刷株式會社

發賣所

東京市日本橋區數寄屋町　六合館
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社　柳原書店
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社　川瀬書店
東京市京橋區鈴木町十二番地　日用書房
東京市牛込區早稻田鶴卷町二五一　國際美術社

